

# 集いし者たちと白き龍

流星彗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

中央で発生した狂化竜事件、伝説の黒龍ミラボレアスの降臨、討伐。新たな英雄が誕生した一件から六年。

舞台は東方、ロツクラックより始まる。

シヴアルツの血統に対する負の感情が近年高まる中、奇妙な事件が東方の各地で発生する。

六年前の事件ではただの新米ハンターだった双子の姉妹。ユクモ村を目指してロツクラックを後にし、旅を始めたことが物語の始まり。

行く先で出会う人々、東方の東に存在するヤマト国の動き。そして中央から訪れる来

訪者。

シュヴァルツの血統を守ろうとするもの、彼らを消そうとするもの。

人と竜の戦いは、再び始まろうとしている。

勝利するのは「人」の想いか、願いか。あるいは「人」や「龍」の意思か。

※にじファンにて掲載されていたものをかなり間をあけて移転しました。封印状態にあつたこれは当時気ままに書いていた作品です。

モンスターハンターにない魔法などのオリジナル設定、オリジナルモンスターが関わっています。やはりこれも厨二的な要素が目につきます。

なお、これは「呪われし血統と黒き竜」の続編になります。

それでも構わないよ、という方。ようこそ更なるモンハンワールドへ。

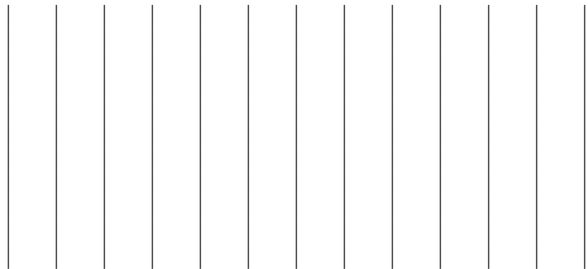
# 目次

火竜の双子  
くおてんば姉とほけほけ妹  
の狩獵記録く

10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話
217	186	166	145	109	86	64	42	22	1

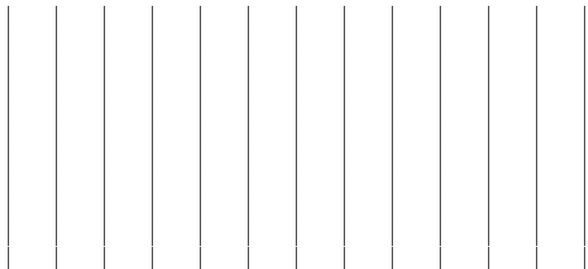
23話	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話
533	513	497	472	446	417	395	371	341	314	291	270	250

3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2  
6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



880 855 828 789 763 731 702 677 653 627 600 576 554

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 3 3 3  
9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



128712581231118911471116109110501016 986 960 927 902

5  
9  
話

5  
8  
話

5  
7  
話

5  
6  
話

5  
5  
話

5  
4  
話

5  
3  
話

5  
2  
話

5  
1  
話

の  
み

厄  
介  
な  
存  
在  
は  
大  
い  
な  
る  
砂  
の  
海  
へ  
消  
え  
去  
る

キ  
ャ  
ラ  
ク  
タ  
ー  
設  
定

5  
0  
話

165616321603157215441510148414561431

13741314

7  
2  
話

7  
1  
話

7  
0  
話

6  
9  
話

6  
8  
話

6  
7  
話

6  
6  
話

6  
5  
話

6  
4  
話

6  
3  
話

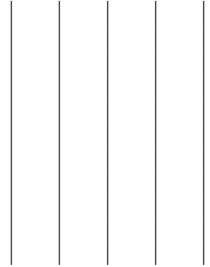
6  
2  
話

6  
1  
話

6  
0  
話

2052202019931965191818921863183117941769173817121689

7 7 7 7 7  
7 6 5 4 3  
話 話 話 話 話



22002173213921112086





# 火竜の双子　くおてんば姉とぼけぼけ妹の狩猟記録く

## 1話

——時はきた。

シヴアルツの血統を滅ぼすための流れは静かに生まれている。

それぞれの役者の力もついてきた頃合い。ならば、いよいよ奴らを動かす時だろう。中央の物語は終わった。

これから始まるのは、東方の物語である。

すでに小さな動きは生まれている。

あとは運命の流れに従って、役者たちはそれぞれの位置へと動くであろう。

さあ、始めよう。

ヒトと竜の物語はこれより第二幕へ。

見届けよう。

奴らが生き延びるのか、竜が奴らを喰らうのか。

——あるいは、ヒトはヒトによって討たれるのか。

乾いた大地に強い日差しが差し込む砂漠。広々とした砂の大地、点々と存在する隆起した岩やその日差しを遮る岩山。食料となるものはほとんどなく、容易に立ち入ったものはその太陽の光に焼かれて水分と共に体力を奪っていく過酷な環境。

そんな砂漠に二つの人影があつた。

一人は高く聳える岩の陰に身をひそめ、一人は離れた所にある岩の背後に回っている。その岩は中心部分が存在せず、まるで自然の門のような形になっている。一体どういう事があつてこのようなオブジェとなつたのか不明だが、岩の下に入り込めば日差しを避ける事が出来る。

そして二人の服装はこの砂漠を超えるという旅人の格好ではない。それはまさに戦う者の格好だ。

一人は紫色の長髪を赤いリボンで結んでツインテールにしており、気の強そうな碧眼をした少女。黒を基準とした動きやすさを考慮され、それでいて腹が綱によつて露出した装備をしている。

背中には同じく黒を基準とした長刀を背負っており、右手は柄を握りしめていつでも抜ける状態にある。

もう一人は岩から少しだけ顔を出している少女だ。先ほどの少女とよく似た顔つき

をし、紫色のロングヘアーをそのまま流している。同じく長く伸びているもみあげが頭を守る防具から顔を出しており、左側にはお揃いらしい赤いリボンが巻かれていた。

彼女の装備は金属部分以外は褐色に染まったものであり、その出で立ちはまるで騎士を思わせるものだ。左手には白い盾を構え、右手には金属の銃槍に白い毛をあしらった武器を構えている。

その少しやる気のなさを感じさせるような半目の碧眼はじつとある一点を見据えている。

向こうにいる彼女も同じように一点を見据えている事だろう。

それが今回の獲物。

二人が見据える先には少し小高い丘のようになっていた。砂の大地。そこには二匹のモンスターが頭をぶつけ合っていた。ねずみ色の体をし、扇状の襟飾りを持つ四足の竜。お互いに相手に向かって突進し、強固な頭をぶつけ合っていてどちらが強いかを示しているのだ。

ぶつかり、離れ、そしてまたぶつかり合う。

リノプロスと呼ばれる草食竜だ。砂漠や砂原という乾燥地帯に主に生息し、硬い甲殻を持つ事で知られている。

お互い頭突きし合っている彼らを見つめているが、二人の狙いはあの二匹ではない。

額に浮かぶ汗をハンカチで軽く拭い、ポーチから水筒を取り出して水分補給をする事数分。ついに状況が動いた。

「……………来た」

ぼつりと眩きながらすうつと目を細める。

それは小さな変化だった。ぶつかり合っているリノプロス達の奥、砂の丘の下からゆらりと砂煙が小さくのぼっているのだ。それがゆつくりとあの二匹へと近づいていく。

だが二匹はお互いしか見えておらず、しかも音を極力立てていないためにその砂煙の接近にまったく気づいていない。

やがて砂煙は二匹の数メートル付近まで接近し、再び頭をぶつけ合ったその瞬間にそれが現れる。

茶色い甲殻を持つ二頭の蛇が同時に砂の中から現れ、リノプロス達の背後から口を開いて喰らいつき、最後にもう一頭の蛇が真ん中から牙を剥いて現れ、二匹の頭に喰らいついてしまった。

背後、頭部から蛇に喰らいつかれたリノプロス達は、悲鳴を上げる間もなくその蛇に捕食されてしまった。硬い甲殻などものともせず、その下にある肉まで喰らいつくその蛇はリノプロスの体を引き千切り、それぞれの糧として食事が開始された。

甲殻を砕く音、肉が咀嚼される音、血が噴き出す音と響かせながら、一気にリノプロ

スの姿が蛇の口内へと消えていく。よく見れば蛇の首は一つへと集まり、少しだけ砂の上へと覗かせている体に繋がっていた。

つまりあれは別々の蛇ではなく三つの頭を持つ一つの個体という事になる。

ヒュドラ。

蛇竜種、ヒュドラ族に分類される多頭蛇竜種の代表格の竜種である。

三つの頭はそれぞれ意志を持ち、それぞれ独立して動く事が可能だ。それを生かして三方向を見る事が出来、およそ死角というものを持たない存在。また二つの頭が眠っていても、一つの頭が起きて辺りを警戒する事も可能であり、それが奇襲を封じるため容易に不意を突く事が出来ない。

主に砂漠や峡谷という乾燥地帯に生息し、深い山に身を潜める事もある竜。砂の中や洞窟などから得物を狙い、三つの首による奇襲や毒霧で獲物をしとめる事で捕食している。

そして今、三つの頭は食事に夢中になっている。一つの体を共有してはいるが、それぞれの意志は食事に対する渴望があるようだ。珍しくリノプロスを食べる事に意識を向けている。

これは好機か。

そう感じた一人が岩からゆっくりと移動を開始する。

音を立てずに静かにヒュドラの背後へと回り込むように低姿勢で歩き、右手は相変わらず背中にある長刀の柄にある。その様子を見守りつつもう一人はポーチから黄色い液体が満たされた瓶を取り出し、蓋を開けて中身を一気に飲み干していく。

「……………」

空き瓶をポーチに戻してもう一度ヒュドラへと視線を向ける。その時には既に彼女は奴の背後を取り、着実に距離を縮めて斬りかかるタイミングを窺っていた。

やがて彼女は足に力を籠め、背中から褐色の翼を生やして一気に広げ、砂を蹴りながら低姿勢のまま飛び上がる。数度翼を羽ばたかせて高度を得ると、すぐに翼を畳んでヒュドラへと急接近しつつ長刀を抜いて背後から背中を一文字に斬り伏せる。

「ジャーッ!?!」

食事中に乱入してきた敵に驚き、一つの頭が悲鳴を上げ、一つの頭はすぐに背後を振り返って敵を確認する。残りの一つは敵を確認しつつ辺りを警戒し始めた。

だが少女はヒュドラの側面に降り立ちながら手にする長刀、ヒドウンサーベルを構えつつ畳んだ翼をほぐすように何度か羽ばたかせてにやりと不敵に笑う。

そんな彼女の背後の砂が舞い上がり、茶色の鱗に覆われた尻尾が現れ、彼女を叩き潰そうと振るわれる。だがそれを察知して横に跳び、下段に構えなおしたヒドウンサーベルでヒュドラの胸を斬り上げる。

そんな彼女へと一つの首が嘯みつきにかかるも、その動きを見切っている彼女に掠りもしない。翼を羽ばたかせて空中を移動し、向かってきた首を斬りながら彼女はもう一人の少女がいる方へと首が向かないようにしていた。

それを察知したもう一人の少女は岩から飛び出し、ヒドウンサーベルを振るう少女と同じ褐色の翼を広げてヒュドラの背後から一気に接近してくる。

彼女の気配に気づいたのだろうか、右の頭がぴくりと反応して振り返る。そんな奴へと彼女は手にした白いガンランスを突き出し、その額を槍が貫く。続けて柄にある引き金を引けば、銃口から爆発が起きて頭を焼かんとする。

「ジュルアッ!？」

「さてさて、行きますか」

少し気の抜けるような声で呟きながらそのガンランス、ヘルステイニング改を振るって焼いた部分を斬る。抵抗するように首を振るも、彼女は落ち着いて一度距離を取り、前に進みつつまたヘルステイニング改を突き出す。だが中心の頭が彼女へと喰らいつこうとしたため、轉身しながら盾を構えて防御する。

「シヤアッ!」

ガチツ、と音を立てて盾と頭がぶつかり合うが、どういうわけかその盾は弾かれず、嘯みつきから頭突きへと切り替わった頭の攻撃を受け止めている。

利き腕ではない手で縦を構えているにもかかわらずにその力に抗う。少女の華奢な左腕とは思えないその力、背中に生える褐色の翼……人間ではないことは明らかだ。

「はっ！」

少し引いて顎を穿つように盾を振るい、あらかじめ引き絞っていた引き金を離しながらヘルスティング改の切っ先を顔に向けてやる。溜めこまれたエネルギーが解放されて、通常以上の爆発がヒュドラへと襲い掛かる。

しかしヒュドラは三つの頭を持つ竜だ。

一つの頭が怯んだとしても、別の頭が反撃を仕掛けてくる。

最初に仕掛けた右の頭が彼女へと噛みつきに来るが、それに気づいて背後へと跳んで回避し、回り込むように旋回する。

その間にもう一人が左の頭へと何度も斬りかかってダメージを与えていた。何とか喰らいつこうとしているようだが、彼女の空中移動が速いために捉える事が出来ない。

後退、旋回、クイックターン……翼を巧みに使い、見事な移動を繰り返してヒュドラを翻弄するように飛び、隙あらばヒドウンサーベルで斬りつける……見事なヒット&アウェイの戦法だ。

「シユルルル……シャッ！」

このままでは埒があかないと判断したのだろうか、その左の頭は一度退くように砂へ



と向かつて頭を沈めていく。それに続くように他の頭、それに繋がった体と続き、砂煙を巻き上げながらその姿が完全に地中に消える。

逃げたわけではない。

気配はまだ地中にあり、この場から離れる様子はない。宙に停滞し、ヒュドラの出口を窺う様子だ。

「感じる?」

「おー、もちろんですよ。あれほどの気配、そう易々と逃がしませんよ」

「ま、そうね。……む?」

二人の背後からヒュドラの一つの頭が現れ、二人へと噛みつきにかかるも動きに気づいていた二人は難なく回避。だがもう一頭が逃げた一人の前へと現れ、今度は噛みつくのではなく毒霧を吐き出してきた。

「ちっ」

人間ではないにしろ、毒霧を吸い込めば倒れ、死に至る事もある。急旋回して毒霧を回避し、回り込みながら横に立てたヒドウンサーベルで顔から首にかけて斬っていく。しかし続けて出てきた尻尾が彼女を叩き落そうと振るわれる。

「遅いっ!」

ぐるんと体を回転させながら横に飛び、反撃するように一太刀振るって尻尾を切断し

ようにするが、たった一太刀で切断できる程ヒュドラの尻尾は軟ではない。

向こうではヘルステイング改を振るう彼女の妹がいる。最初に奇襲を仕掛けてきた中心の頭へとヘルステイング改を突き出し、引き金を引いて焼き払う。

反撃に毒霧に加えて口から何らかの液体を吐き出してくるようになったが、彼女はいたって冷静だ。盾を構えずこの液体は回避する事を選択する。

これもまた毒性の強い溶解液であり、浴びれば溶かされるか毒に侵されるかの二択となる。つまり盾で防いでもその盾が溶かされて使い物にならなくなってしまうかねない。

回避は正しい選択だ。

「ふっ、はっー！」

それは堅実な攻め。相手の動きを見切って防御し、隙を見て攻撃する。

確実にダメージを与え、確実に身を守る。基本を高め、それを用いて戦う彼女。重量級であるガンランスをまるで自分の手足のように軽々と振るい、空中移動を繰り返しながら攻める彼女は実に安定感がある。

「シャツ、シャシャ……ッ!？」

その鋭い牙で捉えきれず、毒霧も溶解液も当たらない。逆に少女二人の攻撃は着実に自身の体を傷つけていく。その事にヒュドラ達は戸惑いを覚え始めた。

ならばとヒュドラ達は三つの頭が同時に息を吸いこみ、一斉に毒霧を放出する。一つの頭によるものではなく、三つの頭が同時に吐き出す事でその範囲を広げたのだ。

だが二人は一気に背後に下がる事でその毒霧をやり過ぐす。

それだけではない。二人もまた息を吸いこみ始めたのだ。

『ふっ！』

そうして勢いよく吐き出されたものは、火炎だった。二人の口からまるで火炎放射機の炎の如く、灼熱の炎がヒュドラへと向かって放たれる。それは毒霧に紛れて移動しようとしたヒュドラを焼くよりも早く、その毒霧に反応して爆発を起こす。

爆発の中悲鳴を上げるヒュドラを見ながら、ヒドウンサーベルを構える少女はまた不敵に笑う。

「なんか、案外あつけないくない？」

「おー、あまり調子に乗らない事です。普通はあの三つの頭だけでなく砂に足を取られそうになるのを気をつける、という要素も含まれるからやり辛いんですからね。私達は翼があるから空中戦が出来る。だからそのリスクがなくなっているわけなんですから」

「わかつてるわよ。ちよつと言つてみただけじゃない」

「それならいいのですよ。油断はするな、姉さんや母さんがよく言つてる事です。竜

じゃなく猪になつて忘れない事ですよ」

「誰が猪じゃこるあ!？」

「え? 誰つて……」

意外そうな表情でじつと姉の顔を見つめる妹。そんな彼女にふるふると体を震わせつつ「……一度きつちり話しつけようか? 妹よ」と呟くも、そんな姉に動じることなく「ははは、これが私だつていうのは、生まれた時から一緒だからわかりきつてることでしょうに、姉よ」と返してしまふ。

敵が今もすぐそこにいるというのに二人の様子はいつも通りだ。リラックスして居るだけでなく、勝機がもうそこまで掴めるといふ状態だからこそ出来る芸当か。

「さあさ、もう終わるんですから、そうかつかせずに戦いましょう」

「いや、誰のせいだと思つてんのよ……」

「え?」

「あんただ、あんた! ……ああ、もう! 召炎!」

左手から炎が吹き出し、握りしめたヒドウンサーベルの柄を伝つて刀身に纏われていく。たちまち黒い刀身は炎に包まれた。そして炎はゆつくりとヒドウンサーベルに吸い込まれ、赤い紋様となる。

それを見た妹はヘルステイニング改を構え、ぐつと引き金を絞りながら突撃体勢を取

る。

「シヤアアアアアアアアツ!!」

それを迎え撃とうと三つの頭が一斉に牙を剥き、再び毒霧という防壁を築き上げる。だがそんなものは意味のない事だった。

口から火炎を吐き出して毒霧を爆発させてヒュドラを怯ませる。その隙をつくように彼女は数度羽ばたいて高度を高め、一気に急降下するようにヒュドラへと向かつていく。

いつの間にか彼女は赤いオーラを体に包み込ませいた。それは彼女の周りの温度を高めおり、ヘルステイング改から放たれる冷気をも蒸発させて薄い水蒸気を作り上げている。

それを纏いながら中心の頭へと向かった彼女は、その額を貫くようにヘルステイング改を突き出し、溜めこまれているエネルギーを解放させる。

「シヤアアアアツ!」

それはガンランスにとって最大の一撃、竜撃砲。文字通りヒュドラの頭を吹き飛ばしてしまったその一撃を与えた事で残りの頭が動揺を隠せない。

ガシャン、と音を立ててヘルステイング改の一部の蓋が開いて、竜撃砲を撃つた後の排熱を始める。そんな中、彼女は軽くヘルステイング改を振るってリロードし、怯んで

もなお喰らいつきに来る左の頭に合わせて盾を構える。

続けざまに接近してきた右の頭へと向けてヘルステイング改を向け、引き金を引いて迎え撃つ。

「——はっ！」

怯んだ二つの頭を視認した姉は左の頭めがけて一気に急降下していく。その速さは先ほどの妹以上のものであり、十数メートルの距離を一気に縮めていく。しかも炎の力を宿らせたヒドウンサーベルは彼女の気も纏われ、その殺傷力を更に高められていた。

その一撃は今まで以上。

ヒドウンサーベルの切れ味と彼女の気、そして紅蓮の炎の力を宿すその刃は一瞬の内に左の頭を焼き切ってしまった。今まで付けていた傷、気を纏わせた一撃とその内部の肉を焼く炎の力が合わさった結果だ。

宙に舞うその首を横目に、ヒドウンサーベルを構えなおしながら右の頭を確認すると、妹が盾を叩きつけつつヘルステイング改で攻めているところだった。

盾はなにも敵の攻撃を防ぐだけではない、それは一種の鈍器と成り得る。噛みつきに来るそれを受け止め、振り下ろし、振り上げをして頭を揺さぶる。

とどめとばかりにヘルステイング改を突き、突き、振り下ろして切り裂きつつ引き金を引き絞る。そうしてエネルギーを溜め、顎下に潜りこんでヘルステイング改を頭上に

突き上げ、引き金を離せば銃口から盛大に爆発を引き起こした。

しかしそれではヒュドラも瀕死にはなるが命を奪うまでには至らなかった。奴とて竜種の一種だ。顔に多くの傷を負おうが、爆発によって焼かれようが、それだけで死ぬほど弱い生命力を持つてはいない。

それを終わらせるのがもう一人、ヒドウンサーベルを下段に構えて再び一気に接近し、首を刎ね上げるように振り上げる。

ヘルステイング改によって甲殻を貫かれ、焼かれたことによつて柔らかくなつてしまったその部位を狙つた一撃。それは再びその頭を刎ね飛ばしてしまうかと思われたが、残念ながらそれは叶わず、首を斬るだけに留められた。

だがその傷から勢いよく血が噴き出し、茶色い甲殻を赤く染めていく。

「ク……シ、シシ……シヤ……ッ！」

「さて……楽にさせてあげましょうかね」

致命傷の一撃だろうがまだ生き長らえている。呻き声を漏らしながらも攻撃しようとしているヒュドラをじつと見つめた彼女は、ヒュドラの頭上を取つて勢いよく額めがけてヘルステイング改を叩き落とし、その衝撃によつてギミックが動く。

リロードされている弾薬が一気に動き、引き金を引けば全ての弾薬が放出されてヒュドラの頭を焼きにかかる。傷口を広げるような一撃にヒュドラはまた怯んでしまい、そ

の際にヘルステイニング改を横に振って再びギミックを利用して弾薬を装填。

引き金を引き絞りながら爆発で吹き飛ばした部分を狙って槍をねじ込み、中心の頭と同じく頭を吹き飛ばすような溜め砲撃を叩き込む。

「シヤ、アア……アア………」

頭を吹き飛ばされ、首からはとめどなく血が流れ、ついに残った頭もまた生命力が尽きてしまう。ゆつくりとその首が砂に向かって倒れていき、鈍い音を立てて体と共に砂へと横たえてしまった。

その死体は体の半身が今もなお砂に沈めたままという形になってしまった。普通の戦いと違い、空中戦を主としたために首が二人を追う事が多かったためだ。半身は後で引き上げる事になるだろう。

何はともあれヒュドラを討伐する事に成功した。

二人は息を吐くとゆつくりと地面に着地する。

だがどういいうわけか姉の表情が少しだけ硬くなっている。対して妹の表情はいつも通り少し気の抜けるようなものだった。

ガシャン、と音を立ててヘルステイニング改を背中に担いだ彼女は軽く首と肩をほぐすように動かし、

「とごめは私でしたね。ということ、奢り決定です」



「くっ……あれが決まっていたら……!」

またしても体をぶるぶる震わせ、手にしているヒドウンサーベルを軽く振って背中にある鞆に収める。

一体何のことかといえれば二人は狩りに行く前に賭け事をしているのだ。多くはとどめを刺した方の願いを敗者が叶えるというもので、今回は両者とも勝てば帰った後の食事を全額奢りという形になっている。

姉の言う通りあの最後の一撃によってヒュドラが倒れていれば彼女の勝ちだったろうが、残念ながら持ち前の生命力によつて命を繋いでしまった。そこを妹が決める事になったために彼女が勝つ事になってしまった。おいしいものである。

「さてさて、久しぶりにガンガンいききたい気分ですね」

「……少しは抑えなさいよ?」

「ははは、今ロックラックでは肉フェアをやってみましたよね。いい機会ですからじっくりがつつり味わいたいと思つてたのですよ」

「だからこそ抑えろつて言つてんのよ!」

「え? 何を言っているのです? フェアだからこそガンガンいかなくてどうするんです」

「うがー!」

被っている頭の防具を砂に叩きつけてがしがしと髪を掻き回し、敗者は吼えるしか出来ない。そんな彼女をにやにやと笑う妹は本当にいい性格をしている。

「それに瑠璃こそ同じことを考えていたんじゃないんですか？ もしあの一撃が決まっていれば、私にかなりのものを払わせる腹積もりだったでしょう？」

「ぬ、ぐ……」

「それじゃあ何も文句は言えないでしょう、はっはっは。賭けは賭けですからね、私は瑠璃の金でガンガンいかせてもらいますよ」

「……ちくしょうめ。覚えてなさいよ、茉莉……」

砂に叩きつけた防具を拾い上げ、ぱんぱんと砂を払って被り直し、ポーチから発煙筒を取り出して着火する。クエスト完了を知らせる色の煙が空へと舞い上がり、音を立てて破裂する。

これでギルドのアイルー達に連絡が行くだろう。後はあの死体から出来る限りの素材を剥ぎ取っていくだけだ。

腰元から剥ぎ取りナイフを取り出した二人は、正反対のテンションでヒュドラの死体へと向かっていくのだった。

数分後にやってきたアイルー達が用意したロープをヒュドラの体に巻きつけ、アイルー達の魔法、アイルー達と二人の力技でその死体を何とか引き上げ、残った素材を剥

ぎ取った後にベースキャンプへと帰還。

用意されている砂上船で二人は一つの街へと戻っていた。

砂塵の交易街ロックラック。

ロックラック地方と呼ばれる大砂漠のオアシスに存在する街であり、多くの人々が集まる場所だ。モンスターを狩る者、ハンターと呼ばれる職種につく者達にとつての拠点として利用される程の大規模な街であり、ここから名を挙げていく者達も少なくない。

一般人も砂漠を渡るために砂上船や飛行船を利用し、東西南北へと移動するための拠点や休憩するための場所として利用している。

昼夜を問わず街は賑わい、活気に満ちている。

そんな街に日も暮れて夕食時になった頃、砂上船に乗った少女二人がロックラックへとやってくる。

多頭蛇竜ヒュドラ討伐クエストを完了させた二人の凱旋だ。

砂上船の港はこんな時間になってもそれなりに賑わいをみせている。二人と同じようにクエストから帰還してきたハンターもいれば、これからクエストを行うためにこの港から旅立っていくハンターもいる。

ここに一般人がいないのは、この港はクエストのために利用される港だからだ。旅の目的に利用される砂上船の港は別の場所に存在している。

ハンターと一般人、これらが混在しないように港は分けられているのだ。

「さ、覚悟は決まりましたか？」

「……はいはい、もうたらふく食えや、妹よ」

「そうさせていただきましょう、姉よ」

クエストを成功させて帰還してきているというのに、二人のテンションは平常とローというものだ。それに気づいたハンターの何人かは二人の様子に気づき、「失敗してきただのか？」と感じるものと、「ああいつも何か」と思うものに分かれていた。

特に後者の人達は二人の様子に慣れたようで、姉の様子を見て苦笑するものも混じっている。

あの頃の未熟なハンターだった少女達はもういない。

ここにいるのは成長して腕を上げ、その名を人々の記憶に刻ませる程になっている。

中央にあるハンター達の拠点ドンドルマを中心とした大事件の際は、未熟者であるが故に母親と姉、その他のハンター達と共に戦う事が出来なかった二人。

父は鍛冶屋を営む竜人族。

母は火竜の因子を持つ有翼種の魔族。

そんな二人の間に生まれし双子の娘。

瑠璃・暁・フレアウイング。

茉莉・暁・フレアウイング。

身も心も成長した竜魔族にして有翼種という、稀有な種族である二人の少女ハンターの物語はこれより始まる。

## 2 話

ロックラックへと戻ってきた瑠璃と茉莉は酒場へと向かい、クエスト成功の旨を伝える。依頼書に受付嬢が完了の判を押し、報酬金と報酬の品を受け取る事でクエストが完了する。

受け取った二つの袋をそれぞれ確認する事にする。瑠璃は袋に収められた金を、茉莉はヒュドラの素材などが入っている袋を。問題ない事を確認した二人は一礼し、酒場を後にした。

この後は食事になる……のではなくその前に向かう場所があった。

商店街の一角にあるその露店へと訪れた二人は店の前に掛けられている看板を確認。

ここは交換所と呼ばれる店であり、アイテムやモンスターの素材と店にある別の素材と交換する事が出来る。

その看板には様々な素材が書かれており、多くは竜種の素材を渡す事で素材を得る事が出来るようだった。どうやらここはそれが主なレートになっているらしい。

交換所はここだけではなく、他の商店街にも点々と存在しており、店ごとにレートが

違っている。

「いらつしやいませ。トレードいたしますか?」

「ええ。これでトレードを」

茉莉が袋から多頭蛇竜の甲殻をいくつか取り出していく。瑠璃もポーチから剥ぎ取ってきた甲殻を取り出し、店のカウンターへと置いていった。

その数全部で八個。

それを確認した店主は小さく頷き、

「ふむふむ、多頭蛇竜の甲殻八個とマンドラゴラ十六個とトレードですね?」

「はい、お願いします」

店主は「かしこまりました」と一礼した後、後ろに置いてある小箱からマンドラゴラを取り出して二人へと差し出した。その数を確かめ、置かれた甲殻は店主へと引き取られる。

今回ヒュドラのクエストに行ったのはこれがあつたからだ。なかなかマンドラゴラが見つからないため、しょうがないのでこの交換所のリストにあるもので入手しようと試みたのだ。

二人で八個ずつ分けてポーチに入れ、交換所を後にする。これで用事は済んだので後は食事の時間だ。

数分かけて飲食店が並ぶ通りへと向かっていき、件のフェアがやっているという店へと入る。ウエイトレスに席へと案内され、御品書きを開けばフェアの影響で安くなっていたりいつもはないメニューがあったりする。

「さてさて、どれにしますかねー」

「……………」

「これもよさそうですし、これもいいですね……うーん、迷いますねー」

「……………さつさと選びなさいよね」

「え？ こういうのは選ぶのが醍醐味のように。いつも以上にルルン気分で選ぶのがまたいいですよ」

「……あたしの金で食べるからだろうに、ちくしょう」

「はっはっは。現実は無情なり、ですよ」

気の抜けるような笑い声をあげて御品書きを見つめていた茉莉は、「うん、これにしましようかね」と呟く。どうやら注しよけいのぶき文が決まったようだ。瑠璃も自分が食べる物を選び、店員を呼ぶために手を軽く挙げる。

それに気づいた店員が来ると、「アプトノスのハンバーグセット。スープはポタージュで」と告げ、茉莉へとさあ、注文しろと言う風を目配せする。

店員も茉莉へと視線を移し、彼女はこほんと咳払いを一つ。そして――



「アプトノスの霜降りステーキセット、アペケロスのサイコロステーキ、ポポノタン焼きとモスの味噌汁、ガーグアのから揚げ。セットのスープはコンソメで、ライスの特盛でお願いいたします」

「ちったあ遠慮しろくしよおおおおおッ!?」

「だから言ったでしょう、現実は無情なり。賭けの敗者から搾り取れるだけ搾り取りますよ、ははは」

「……………悪魔や……………悪魔がここにおる」

燃え尽きたように机に突つ伏する瑠璃の頭をぼんぼんと叩きながら「その悔し涙は明日の勝負の活動力となるでしょう」と囁きかけながら慰めるも、「慰めにもならないわよ……………」とさめざめと泣き崩れ、「どうしてこういう時の賭けって毎回負けるかなあ……………金が、金があああ……………」とぶつぶつと呟きだした。

瑠璃と茉莉の賭けは二人の実力が安定しだしたころから行われており、それはもう色々なものを賭けてきたものだ。今回のような夕食の奢りだったり、あるいは日常品の奢りだったり、パシリだったり……………実に多岐にわたるが大抵はパシリで済ませている。

瑠璃が勝つ場合は多くはパシリ権を得る時で、奢りが賭けられたときはあまり勝てたためしがない。そして茉莉はと言うと、今回のように奢りを要求する時によく勝つてしまふ。

その度に瑠璃の金がどんどん消えていき、このようにさめざめと泣き出してしまふ。それを茉莉が微笑ましく、暖かな視線で見守るといふ構図が出来上がつてしまふ。

(いやー、我が姉ながら本当に愛で甲斐がありますね。眼福眼福)

南無南無、と心の中で手を合わせるも、こうしてしまつたのは茉莉である。今日もまた姉を弄れて満足だ、と感じながら軽く視線を店内に巡らせながら料理が運ばれてくるのを待つ事にする。

フエアが開催されているだけあつて客の入りはなかなかのものだ。夕食時というのも関係しているだろう。二人と同じハンターだけでなく一般人の家族連れも多く見かけられる。

(おやおや、カップルもいらつしやいますか)

家族連れだけでなくぼつぼつと若い男女が料理を食べている姿も確認できた。向この席では東方人らしい黒髪をした男女が静々とステーキとハンバーグを食べ進めている。しかしよく見るとその耳は人間のものではなく、獣のような形状をした耳をしている。

少々斜め上に伸び、先端が尖り……比較するならば猫に近い物だ。それだけである二人が人間ではなく魔族である事がわかる。

こんな所で魔族を見かけるとは、珍しい事もあるものだと思うが、だからといって何

かするわけでもない。基本的に魔族はあまり表に出てこないものだが、彼らの中にもハントーとして活動するものもある。例えば二人の母親のように。

過去の大戦以降めつきり姿を見せなくなった一族もいるが、長い時を経て少しずつ世に出てきた一族もある。それに自分達には他の魔族の知り合いがいるのだ。

今もなお実家があるポツケ村に住んでいる魔族の兄弟夫婦。

黒龍が舞い降り、西シユレイド王国の首都ヴェルドにテオ・テスカトルが襲撃してくるという大事件が起こったあの日。少しずつ広まり始めた噂により、変装しなければ軽々と大きな街へと訪れる事が出来なくなった彼ら。

同時に彼らと親しくしていたあの三人もまた、東方に向かった後ばったりと姿を消してしまっていた。

いや、一度だけ会った事があったか。あの二人の子供が生まれ、それを絵に残す際に隠れ家へと訪れたあの機会のみ出会った。それ以降また隠れ家を移したらしく、時たま連絡の手紙が来るだけで、どこにいいのかわからなくなってしまうている。

六年前のあの日以来、英雄と呼ばれた彼らは人々の前から文字通り身を隠してしまっ

た。  
それも仕方ない事だろう。あの噂はもうこの東方にまで届き、しかも昨今の不穏な噂と事件によって一部では重い空気が包み込んでいるのだ。

こんな状況であの血統に連なる者が人前に出てくれば、何が起こるか分かったものじゃない。確実に良くない事が起こってしまおうだろう。

(……やめましょう。今はそんな暗い事を考える時ではないです)

小さく首を振ると、カートを押してこちらに近づいてくるウエイトレスが見えた。そこにはいくつもの料理が並び、美味しそうな匂いを漂わせている。

「お待たせしました」

瑠璃の前にはハンバーグセット。鉄板の上に肉の焼けた音を立てながら、芳しい匂いを漂わせて食欲を刺激してくる。突っ伏していた瑠璃も料理が運ばれてくると、ゆつくりと顔を上げてその料理を見つめていた。

だがすぐに視線を横へとずらす。

続けてテーブルの上に乗せられていくのは茉莉が遠慮なく注文していった料理達。

たちまちテーブルの上には多くの料理が並び、その空いた部分を埋めていく。これを一人で食べるのか、と普通の人々は思うだろうが、狩りに出かけたのだからその使ったエネルギーを補給するという意味合いでがつつり食べられるものだ。

それに茉莉はこう見えて結構な量を平らげるだけの胃袋を持つ。恐らく涼しい顔で黙々と胃袋へと送っていく事だろう。

「それでは、いただきます」

「……いただきます」

ウエイトレスが一礼して去っていくのを見送り、茉莉が手を合わせて言うと、続くように瑠璃も手を合わせる。そうして夕食をとり始める事になった。

瑠璃がハンバーグへとナイフを入れれば切れ目からは肉汁が溢れだし、鉄板の上でまた焼ける音を響かせてくれる。少し焦げた部分も合わせてナイフで切り取り、セットの隅にあるソースのカップに少し浸して口へと運ぶ。

咀嚼すればソースと絡んだ肉が柔らかく解け、舌に肉の旨味と肉汁を伝えてくれた。肉の味を引き立ててくれるソースとマツチし、実にいい仕事をした一品である。

その美味しさに少しだけ顔をほころばせるが、対面に座っている妹を見てその表情が硬くなってしまう。

まず茉莉はアプトノスのステーキから食すことにしたらしい。それはただの肉ではない、「霜降り」肉。つまり高級品だ。それにナイフを通し、同じようにソースを絡めて口へと運ぶ茉莉。

ステーキの肉が焼ける匂いが対面にいる瑠璃にまで届いてくる。それだけではない、隣にあるアプケロスのサイコロステーキもまたいい匂いをしているし、モス肉と山菜をたっぷりと使用した味噌汁も美味しそうだ。

小皿にはポポノタンの焼肉が乗せられ、備え付けのレモンがある。それを手にしてポ

ポノタンへと絞って酸味を与え、ぱくりと一枚取って口へと運ぶ。続けて山盛りで盛られたライスを食し、お茶を一口。

「……ふう、美味しいですねえ。いい肉です」

「……あ、そう」

「まったく、辛気臭い表情ですね」

「誰のせいだと思ってるのよ、まったく……」

そりや自分の金ではなく瑠璃の金で遠慮なく注文し、料理を堪能されているのを見せられてはこんな表情にもなるわ、と心の中でぼやきながら瑠璃はハンバーグを食べ進める事にする。

付け合わせのポテトや人参も頂き、ライスやポタージュも味わっていく。

一方茉莉はサイコロステーキやから揚げにも手を伸ばし、それぞれの味を堪能していた。少し硬めの肉であるアペケロスのサイコロステーキは、噛めば噛むほど肉の味が染み出てくるし、ガーグアのもも肉を使用したから揚げは柔らかく、すつきりとした味わいがある。

あまり表情が変わらない茉莉の表情を少しほころばせるだけの美味しさがあるらしい。それを見、続いて料理へと視線を移せばまだ美味しそうな匂いが漂ってくるではないか。

「ぐくり……」

それを見せられては唾も呑み込みたくなるものだ。いくら自分も肉を食っているとはいえ、別の肉があれば興味も出てくる。まさに今の瑠璃は餌を前にした飼犬のよう。それに気づかない茉莉ではない。

にやりと笑みを浮かべると、霜降りステーキをフォークで突き刺し、瑠璃へとちらつかせてみる。ほれほれ、とフォークを揺らしている茉莉の表情は、ちよつとしたいじめっ子のそれに近いだろう。

「食べたいのですか？ 瑠璃」

「ぬ、ぐ……嫌らしいわね、あんた……」

「はっはっは、こういうのもアリでしょう」

「ねーよ。あつてたまるか」

ジト目で睨むも一向にフォークをひっこめない。まったく嫌らしい妹だと思つていると、鉄板の上にその肉を置いていく。それだけではない、サイコロステーキも二つ乗せていき、ポポノタンとから揚げの皿も瑠璃が取れるように近くに寄せてくれた。

「私だけ食べるといふのもあれですし、瑠璃にも少しばかり恵んであげましょう」

「茉莉……」

「現実は無情ですが、私は少しの慈悲があります。ふふふ、私も甘いですね」

どこか感慨深く呟く茉莉ではあるが、驚きからまたジト目に戻った瑠璃は冷静だった。

「いや、この支払いあたしだから。あんたの金じゃねーよ」

「細かい事は気にしないでいきましよう」

「細かくないからっ!」

吼えながらもちやつかりから揚げを手に取り、豪快にかぶりつく。からつと揚げられた衣の下にある柔らかかなもも肉の旨味、とろーりとした肉汁がじゅわつと溢れ出し、またしても舌が歓喜に震える。

「ちくしよう……美味いじゃないのよ……っ!」

「それは何よりです。さ、一緒に肉を堪能していきましよう。……ということ、ハンバーグ一切れ、頂いても?」

「それが狙いか」

「はて、何の事やら?」

しれつと答える茉莉だがあながち間違つてはいないだろう。双子であるためか何となくお互いの考えはわかるものだ。しかしこうして霜降りステーキやから揚げ、ポポノタンまで貰つては何もしないわけにもいかないか。

やれやれ、とため息をついてナイフを入れて一切れを茉莉のステーキ鉄板へと移して



やる。

「ほら」

「ども」

なんだかんだ言っても二人は仲の良い双子の姉妹だ。姉と妹と言う立場が逆に見えるが、それでも二人は基本的に仲がいい。そうでなければポツケ村を出て二人だけでのロツクラックまでやってきてはいない。

そして長くコンピを組んで狩猟に出はしないだろう。コンピを組むという事はお互いの命を相棒に預けるといふ意味合いもある。深い信頼がなければやっていけない世界だ。

四年前にポツケ村を出た二人はこのロツクラック地方までやってくると、ここを中心として各地を巡って着実に力を付けてきた。手を焼いていた自分の中の才能、火竜の力を完全に制御していき、様々な飛竜をはじめとするモンスターを討伐していき、経験を積んでいく。

レベルとしては上位ハンターのものになっているが、今は下位装備で通している。それは各地を巡っている為に上位ハンターの装備を整えていないという事もあるが、意図して二人は上位ハンターの名に連ならせないようにしているのだ。

それは自分達が竜魔族という特殊なケースで生まれ、しかも有翼種という稀有な存在

でもある。また世間はあの血統に対してよくないイメージを抱いており、自分達はその知り合いがいる。

そのため二人は暁という名前を伏せ、フレアウイングの名字で活動している。表向きには有翼種の魔族として活動しているのだ。その上で各地を巡って力をつけ、サブの目的として姿を隠しているあの一家を探している。

相手が相手のため情報屋を利用する訳にもいかず、小さな噂やその足取りを探るという雲を掴むような探し方であるため、必要以上に目立たないようにしている。

とはいえ二人のやり取りのせいで、一部のハンター達で名が知られるようになってしまっているのだが、そこはご愛嬌か。

何にせよ上位ハンターになれば儲けが増えるが、その分危険も増す。同時にそこで活躍すれば名が売れる。それすなわち自分達の事がよりハンター達の間で知れ渡る事になるため、それを回避したいというのが二人の考えだった。

だが上位ハンターのくせに下位装備で下位クエストを受け続けるというのもそれそれで名が知れるだろうが、ぼちぼち上位クエストの一部をこなすことでそれを回避している。

つまり上位ハンターになりたてのほやほやであり、上位と言う壁に当たっているハンターである事を演出しているのだ。今はそれで何とかなっているが、時間が経てばその

回避方法も通用しなくなってくるだろう。

自分達は普通の人間ではなく竜魔族。人間以上の力量を保有する事が出来る存在だ。いつまで経っても成長しない弱者ではない。これも持つてあと半年か一年少しで通用しなくなるか、と考え始めている。

何せもう自分達も二十歳になる。緊急事態で実力をつけていき、たった一年程度で新米ハンターから上位ハンターへと上り詰めたあの夫婦は十六歳でそれを成し遂げている。

あれから六年経った今でもその実力は衰えず、まだ成長しているのだ。その気になればG級になれるかもしれないのに、境遇のせいそれが出来ないでいる。

旦那は魔族ではあるが、妻は人間だ。しかも突出した才能を持たない人間。そんな彼女でも成し遂げられた功績。彼女と違い高い才能を保有している瑠璃と茉莉に出来ないはずがない。

当時よりも四歳も年上なのだから、今ではもう上位ハンターの間から後半にさしかかってもいい頃合いなのだ。

全てはこの変化した世の中によるもの。

中央からこの東方にかけて変質していく人の想いが作り上げる雰囲気。これが彼女達の行動を縛り上げる。

本当に、やり辛い世の中になったものだ。

だが今ここにいる二人はそんなしがらみも関係なく、いつも通りのやり取りをしながら夕食を食べ進めている。これが彼女達の日常であり、こうする事でそのしがらみを忘れて時間を過ごせるのだ。

昔から変わらない関係を保ち、茉莉がボケて瑠璃がツツコむ。そうやって馬鹿やつているのが心地いい。いろいろ大変なことが起きてはいるが、せめてこうしている時間だけは平穩であつてほしい。

霜降りステーキ、サイコロステーキと消費していき、ポポノタンとから揚げを二人で分けて食べ、最後にライスと一緒に味噌汁をすすり、茉莉は「ご馳走様でした」と手を合わせた。

瑠璃と少し分けあつたとはいえ、あれだけあつた料理の大半が彼女の胃袋へと消えていったのだ。周りの客達が唖然としているが、茉莉は気にした様子もなくナプキンで口元を拭つてお茶をすすする。

「満足そうね」

「ええ、満足ですよ。素晴らしい夕食でした」

「そ。じゃあ行きましようか」

そう言つて会計するために立ち上がり、置かれているそれを手に取つた瑠璃は値段を

確認してみる。すると「……くっ」と苦い表情を浮かべながら息を詰まらせた。やはりというべきか、そこに記されている値段は二人で食べる夕食のものじゃない。

普通の一般人も訪れるレストランで食べられるものだというのに、どうして値段が五ケタ近くになっているのだろう。霜降り肉か？ やっぱ霜降り肉の影響が強いのか!?

そんな彼女へと向き直った茉莉は一度姿勢を正し、両手を胸の前で交差させ、振り下ろしつつ一礼した。

「ゴチになります！」

「……………ちくしょう」

もう何度目になるかわからない言葉を呟きながら哀愁を漂わせる背中が遠ざかっていく。

そんな彼女を温かい眼差しで見送りつつ、茉莉も席を後にした。

そんな一件があった次の日、私服姿にローブを纏った二人はロツクラツクの港へとやってきていた。赤いシャツに炎の柄が描かれ、黒に近いズボンという動きやすそうなものが二人の私服だ。しかもお揃いというのが双子らしい。

そしてローブはやはり火竜という事もあり、背中はリオレウスを模した絵が描かれて

いる。

瑠璃はいつものツインテールだが、茉莉は狩猟の際に揉み上げに巻いていたリボンを頭の後ろに結んでいた。

二人はこれからロツクラックを後にし、また各地を巡る旅を始めようとしている。一定周期で各地を巡ってロツクラックへと戻ってくる、という方法でこの四年を過ごすのが二人のやり方だ。

マンドラゴラを入手するためにヒュドラ討伐に向かったのが、今回のロツクラックでの最後のクエストとなる。これは調査で秘薬を作り出すための材料となり、昨日の内に作っておいた。これで秘薬の補充は完了する事になる。

さて、砂上船に乗り込んだ二人は部屋へと向かって場所を確認し、ロープを壁掛けに掛けてベッドに腰掛ける。

それから地図を広げてこれから向かう場所を確認する。

ロツクラック地方は主に砂漠が広がる地理であり、西に進めばテロス密林、北西に進めばポツケ村があるフラヒヤ山脈がある。

北から北東方面に向かえば元々の実家がある国、華国に入る事になるがあつちには行かない事になっている。あそこは魔族に対してよくない印象を持つ者がそれなりに存在し、自分達が華国を出る事になった原因となった魔族狩りを行った過去がある。

わざわざそんな国に戻る理由もない。なので華国に行く路線は自然に消える。

南に進めれば海岸線があり、その先には小さな島々が集まる諸島が存在している。主に漁業を営む村が点在しており、それで生計を立てているのが多い。その中で大きな拠点と成り得るのは、タンジアの港だろうか。

最後に東へと向かえば砂漠が終わり、緑豊かな草原や山々が存在する領域へと入る事になる。そこから更に東へと向かえばヤマト国が存在する。その先は海となり、島国であるシキ国が存在している。

それ以外は無国籍であり、大小の街や村、そしていくつかの領主が治める小さな領土が存在する場所になる。

あの一家の故郷はその無国籍の山の一つに存在していた。その後別の山の一角に隠れ家を作り、暮らしていたのだ。

そして今乗っている砂上船の進路は東。砂漠が終わる所にある港町まで進み、そこから更に東の山へと向かう予定だ。

山によって様々な特色があり、ある山は山の幸を生かした特産品で生計を立てる村があったり、山間に作った畑から摂れる作物で生計を立てる村があったり、湧き上がる温泉で旅人を呼ぶ村があったりする。

「情報を求めるならやっぱりユクモがいいかしらね」

「でしようね。この一年でまた活気づいたらしいですから、もしかするとこつそり温泉に入りに来た事があるかもしれません。確か東方人は温泉が好きらしいですから」

「温泉というか風呂が好きだって聞いた事があるわね」

そんな会話をしながら地図を見る二人の視線はある一点に向けられている。山岳地帯の一角にあるその村はユクモ村。先ほどの例に挙げた湧き上がる温泉で山を越えていく旅人の安らぎの場を与えてくれる村だ。

数年前までは落ち着いた村でお抱えのハンターもいない場所だったのだが、村に危険な竜種が現れた事でギルド支部を設立してハンターを呼び、これを討伐した過去がある村だ。それからはギルド支部を置き、旅人だけでなくハンターもそれなりに訪れる場所になっているという。

二人も三年ほど前に訪れたのだが、一般人とハンターの割合は八：二ほどぐらいだったか。温泉街も旅人が多く、彼らによって賑わっているという印象だった。

そのためギルドとしての規模は中級以下だろうか。クエストもそれなりでしか回されておらず、ハンターの活動の場としてはあまり向いていない。ここに訪れるハンターの大半は温泉に浸かって疲れを癒すという目的が有力だ。

そんなユクモ村が今回の目的地とする。

予定の確認が終わったところで小さく船が振動し、ゆっくりと進み始める。それを感



じた二人は一度部屋を出て甲板に上がった。

畳まれていた帆が挙げられ、今まで停泊していた港、そしてロツクラツクの外壁が遠ざかっていく。見れば他にも客達が甲板に上がっており、遠ざかっていくロツクラツクを見つめていた。

中型の砂上船のためそれなりに乗客がいるようだ。やっぱり大半は人間が多いが、その中に竜人族と魔族が一組ずついる。気のせいかな魔族の方はあのレストランにいたあのカツプルのようなが……まあいいだろう。

ロツクラツクの外観が小さくなつていき、あとはどこまでも広がる大砂漠。変わりのない景色を眺め、吹き抜ける乾いた風を感じながら二人は新たなる旅を始める。

## 3 話

港に到着した砂上船はゆっくりと停泊し、帆を畳んでいく。昼にロツクラツクを発つてから数時間の移動、太陽は既に地平線に消えようとしており、藍色の空が少しずつ表れ始めていた。

砂上船を下りていく瑠璃と茉莉は港を後にすると、真つ直ぐに夕食を取るために宿屋へと向かう事にした。この港町はそれなりに宿屋が点在しており、この町にやって来た旅人や、これからロツクラツクへと向かう旅人を迎え入れるための施設がそれなりにある。

大抵の場合昼の便でやってきた旅人はここで一泊し、それから旅立つことが多い。

二人も例に漏れず、ここで一泊してから移動しようと考えていた。夜の旅は危険が多い。視界が悪くなり、モンスターからの奇襲もよくある話だし、山道で足を滑らせて落下なんて目も当てられない。夜目が効いていたとしても、神経を張り巡らせながらの旅はあまりよくない。

無理せず宿を利用した方が身のためだ。

一緒に降りてきた他の客達に紛れて港を出ると、それぞれ宿屋を利用するらしく同じような道を歩いていく。といってもぎつと十数人程度の客であり、街道は時間が時間のため人は落ち着いたものだった。

数分歩いて宿に到着し、先に到着していた客に続いて中に入っていくと、茉莉は何かに気づいたように背後を振り返る。

「……？」

誰かの視線を感じた気がするが、数秒程度のものだった上にそれほど強い意志を感じなかった。入口からそつと横にずれて他の客達の邪魔にならないようにし、軽く外を見回してみる。

だが視線の主らしきものは見当たらない。見えるのはこの町に住まう人達、この宿や他の宿へと向かう砂上船の客達ぐらいなもの。

「気のせい、ですか」

「茉莉？ どうかした？」

「……いえ、なんでもありませんよ」

立ち止まってしまった茉莉を訝しんで瑠璃が声を掛けてきたが、小さく首を振って彼女の後に続く。

だが茉莉の気のせいではなかった。

確かに視線の主は存在していた。しかしそれは一人ではなく二人。視線の主は他の乗客たちに紛れて街道を歩きつつ彼女を見つめていたのだ。彼女らが宿の奥へと向かっていくのを見送ると、黒い私服と闇色の外套を軽くなびかせながら街道の奥——すなわち街の出入り口へと向かっていく。

そのまま暗くなつていく夜に溶けるように二つの人影は見えなくなつていった。

一泊し終えた二人は朝食を取り終えるとすぐに港町を発つて移動を開始する。それまでは砂漠だったが、町を出ると荒れ地が続く。その先に少しずつ緑が表れ始め、そこから草原や山々が広がる地形となる。

アプトルを利用できる竜小屋を訪ねてアプトルを二匹レンタルし、荒れ地を一気に突破していく事にする。予定は昼前ぐらいに荒れ地を抜け、山岳地帯に突入する事だ。一、二週間内にユクモ村に到着するとなれば、それぐらいの早さを目指したいところだった。

荒れ地に街道というものはほとんど存在せず、うっすらと多くの旅人が利用したことでも固められた道が見える程度。しかも生息しているモンスターが物陰から飛び出してくる事もあるため、用心するに越したことはない。

だがアプトルの疾走速度は馬鹿にならず、その脚力を以つてして振り切る事は可能

だ。追いついてくるとするならば、この乾燥地帯に生息している獣竜種の一角、土砂竜ボルボロスあたりだろうか。

奴の高い疾走力はアプトルの疾走速度に追いついてきかねない程であり、発見されて戦意を剥きだしにされれば少々まずい事になるかもしれない。

とはいえ地図によれば二人が利用しようとしているルートにはボルボロスの縄張りが入っており、最近雨が降った記録もないようなのでボルボロスが利用する泥が溜まるポイントや沼地はないと考えられる。

あと挙げられる危険性といえば空を舞う飛竜種、雌火竜リオレイアあたりだろうか。奴はリオレイウスと違いこの荒れ地、砂原、砂漠にも出没するようで、時折空から獲物へと襲い掛かっていく光景が見かけられる。

こちらに関しては本当に運だ。食料を求めているのかそうでないかが関わってくるので、遭遇しない事を願うでしょう。

そんな風に荒れ地を移動する事数時間。時折懐から水筒を取り出して水分補給をしながら移動した二人は、もう少しでこの荒れ地から抜け出せるというところまで来ていた。

しかしここでまさかの壁が現れる事となる。

進路上に赤い球体がゴロゴロと転がって来たかと思うと、飛び回っているブナハブラ

に向かって長い舌を伸ばしたではないか。蛇行しながら長く伸ばされた舌は的確にブナハブラを捉え、一気に口内へと納められる。

アルマジロのようなその外観、赤い甲殻に長い舌を持つそのモンスター。

赤甲獣ラングロトラ。

「どうしてここでラングロトラが出てくるかな?」

「ま、出てきたものはしょうがないでしょう。静かにやり過ぎていきましようか」

幸いラングロトラは獲物であるブナハブラ達に夢中になっている。どうやらあの辺りにブナハブラの巣があるようで、突如現れたラングロトラに興奮しているようだ。それから数十メートル離れた所にいる二人と二匹には気づいていないらしい。

手綱を操って静かに横に逸れ、岩陰を利用して視界に入らないようにする。

さらにラングロトラの背後から回り込むようにして移動する事にした。

クエストを受注していない状態で討伐しては色々と問題が発生する。野良での狩猟が横行すると生態系が崩壊し、予期せぬ事態を将来的に招きかねないためだ。よほどの事がない限り、野良の狩猟は認められていない。

だが自衛のために戦う事は可能であり、それで撃退すればまだ許される。何もしないままに負傷するのはハンターとしては不本意だろう。だが極力戦闘に持っていかないようにするための努力は必要だ。

それがモンスターを刺激せずにその場を去るといふ行動だ。

アプトルも無用な戦いを好まない性格のため、二人の意志を汲んで足音を立てずに静かに移動してくれる。

そうして背後を取り、そのまま静かにその場を離れていく事に成功。一定距離を取ると一気に加速し、ラングロトラが追ってこれないスピードで離脱していく。

背後を振り返ると、その足音に気づいたらしいラングロトラがブナハブラを咀嚼しながらこちらを見つめていたが、その距離と速さから追うのも無駄だと悟ったらしい。そのまま食事を続けるようで、ブナハブラの巣へと視線を戻していた。

「どうやら無用な戦いは避けられたようだ。」

それに安堵して手綱を握りしめてアプトルを走らせる事数分。ようやくこの乾燥地帯を抜け出す事となった。

ラングロトラとの遭遇以外に目立ったトラブルもなく、二人は荒地と草原地帯の休憩地点とされる町に入る事になる。レンタルしたアプトルをこの町の竜小屋に届け、昼食をとるために酒場へと向かっていく。

「いらっしやいませー」

中に入るとすぐにウエイトレスが出迎え、席へと案内してくれる。お冷とお品書きを出されると、すぐに内容に目を通し、早速注文する事にする。

「あたしはラーメンセットで」

「では私はアプトノスのカツ定食でいきましようか」

「かしこまりました」

一礼して去っていくウエイトレスを見送り、二人は揃ってお冷を口にして軽く辺りを見回してみる。ハンターらしき顔ぶれは少なく、普通の旅人がよく見かけられるようだ。各々同席している者達と世間話に花を咲かせながら昼食をとっている。

その世間話に少し耳を傾けてみると、こんな話が聞こえてきた。

水没林を通るルートにロアルドロスが率いる群れが現れ、街道が一時的に封鎖されているという話。

華国の政治家の一人が突然の事故死をした話。

どこかの領主が死亡した話。

また一人、天刃流の使い手が何者かに殺されたという話。

どれもよくない話ばかりだった。その中で気になったこの四つの話。

瑠璃と茉莉は顔を合わせて声を少し潜めて話し始めた。

「また殺されたらしいわね……」

「最近は落ち着いたと思っただのですが、またですね。これで天刃流は三人目ですよ」

「他は桜花流に獣牙流だったかしらね。ほんと、一体誰がこんな通り魔みたいなことを



しているのやら」

数年前から一つの事件が発生していた。

あまりにも突然の事であり、それは時間を置いて連続して発生する事となる。

東方の武術の流派はいくつかあり、格闘術、剣術、槍術などの専門的なものや総合的なものも含めて様々な形が存在している。

そんな流派に所属している使い手が何者かに殺され続けるといふ事件だ。

しかも殺されたのは有力な武人であり、最近では達人の領域にまで達した者まで殺されている。

だがそんな彼らの殺され方は暗殺という形ではなく、誰かと戦って敗れた形で殺されていた。つまり、真つ向勝負に負けたのだ。それがまた他の武人たちを驚かせる。

達人と称された者まで真つ向勝負に負けたのか、と。

一体殺した相手はどここの流派に所属しているのだろうか。

あるいは流派に所属していない野良の存在なのか。

様々な議論が持ち上がっているが、今もなおその正体は掴めず、ゆつくりと犠牲者を増やし続ける事になっている。

中にはあの血統の者がこの事件を起こしているのだ、という声も上がっており、それに同意する者も少なくない。何せ実際に多くの人を殺してきた罪人が今もなお刑に服

しているのだ。

そんな前例がある今、この武人を狙った通り魔事件もそんな人物が起こしているんじゃないか、と思つてしまふのも無理はない。

そう、あの血統に連なる者はすなわち殺しに特化した力を持ち、それによつて戦闘力は修練すればそう易々と敗れる事がない戦士と化す。だから考えられない話ではないのだ。

この事件があるからこそ、今もなお大抵の一般人はかの血統に対してまだ不信感を抱き続けている。

「瑠璃はどう見ます、この事件」

「あたしの考えは変わらないわよ。これはあの人達の事を貶めるための通り魔だつてね。だつてそうでしょ？ 理由もなく人を殺すような人ばかりじゃないはず。しかも今の時勢じゃそういう事件を起こせば自分達が疑われるのよ。わざわざ自分の首を絞めるようなことはしないはずよ」

「……そうですね」

「何？ 茉莉はそうじゃないつて言うの？」

ジト目で睨んでくる瑠璃に、茉莉は「いえ」と小さく首を振りながら前置きし、お冷を口にして軽く唇を塗らして話し出す。

「私も瑠璃の考えには同意しています。……ただ、それだけではない何かがある気がするのですよ」

「と言うと？」

「犯人はどうして有力な武人や戦士ばかりを狙うんでしょうね？」

「そりゃ、その方が事件として広く知れ渡るからでしょうよ」

「そうですね。しかしそれだけでなく、その有力な人を倒す事で戦力を削ぐことも可能でしょう」

「……戦力低下って、また戦争でも始めようっての？ まさか、んなわけないでしょ。だってそれ、戦闘面での要人を暗殺ってことじゃない」

モンスターや竜種と戦うハンターと違い、彼らは人と人との戦闘を行う者だ。国に所属する軍人ではないが、軍人を目指す者や自衛のために戦う技術を習得する者が集まる道場の者ら。

習得した技術を用いて軍人になる者、その技術をまた別の誰かに伝える者、あるいは更なる強さを求めて世界を回る者と様々な目的を持っている。

あるいは緊急時には国の招集に応え、その力を以ってして功績を上げるために戦場へと赴く者もいる。今はそんな事態にはなっていないのでそれはないが、過去にはそんな武人達が名を上げるために国の招集に応えて戦争に参加した事もある。

そうして名を上げれば、自分が習得している流派の名も上がる。するとそんな流派の技術を求めて更なる門下生が集まる。それが目的だ。

そんな武人を殺していく。それはすなわち茉莉の言う通り有事の際の戦力を削ぐことになる。それも実力ある武人ならばより大きな戦力の低下を招く。

「でも考えられない事もないでしょう？ ……ま、全ては私の憶測なんですけどね。戦力を削いだから一体何が起きるのか、そこまではわからないのですから。戦争が起きるかもしれないし、起きないかもしれない。 ……起きない事を願いますけどね。もしかするとともっと単純に、ただ強い相手と戦い、殺していくという目的も考えられないのですからね」

「そっちの方が有力じゃないの？」

「かもしれないですね。 ……つと、どうやら食事が運ばれてきたようですよ」

視線を横にずらせば、お盆を手にウエイトレスが戻ってきていた。そこで一旦話を中断させる。

「お待たせしました」

注文した昼食が目の前に置かれ、一礼してウエイトレスが去っていく。

瑠璃が注文したラーメンセットはラーメン、焼飯、から揚げとサラダのセットというシンプルなものだ。

一方茉莉が注文したアプトノスのカツ定食はアプトノスの肉に衣をつけて揚げられたカツ、白米と味噌汁にサラダというメニューとなっている。

『いただきます』

手を合わせて一礼し、食事を始める事にする。

そうしている間も二人は次の話題に移っていく。先ほどの話はいったん終わらせ、別の気になる事に関して話す事にしたようだ。

「水没林にロアルが出たって話があつたわね」

「ありましたねー。とはいえそんなに珍しい事ではないでしょう。そういうのはちよちよくある話ですよ」

「そうだけど、確かあたし達が取ろうとしているルートって、水没林も含まれてなかった？ ほら、確か……：ポルシオ水没林。そこを越えていく予定だったじゃない」

「ああ、そのルートでしたね。……：そこが今封鎖されているという話でしたか」  
「そうよ。だからどうするって事になるわけで」

こういう場合は居座っているモンスターが離れていくのを待つことになるか、あるいはハンターに依頼を出して討伐するという形になるかの二択になる。

これからその水没林に向かう事になるが、それまでの間にどうなるかが解決してくればいいのか、解決していない場合は足止めを受けてしまう事になりそう。別の

ルートを取るといふ選択肢もあるが、そうなるとぐるりと山を大きく迂回する事になる。

もしくは依頼が出ていればそれを受理し、その水没林に赴いて討伐に向かうという手もある。

そうすると戦いの経験を積めるし素材も手に入る。更に水没林で採取するという事も可能だ。

何もしないまま迂回するか、クエストを受理していくか。

その二択を選ぶとなれば、瑠璃からすれば答えは一つしかなかった。

「あたしは依頼があったらやっていきたいと考えているけど、茉莉はどう？」

「私は別にかまいませんよ。異論はありません」

「そ。じゃあこのままルート変更なしで行くって事でいいわね」

レンゲで焼飯を掬ってパクパクと食べていき、ラーメンをすすっていく瑠璃は少しだけ楽しい表情を覗かせる。基本的に彼女は好戦的な方だ。というより母親や姉を目標としている瑠璃は早く強くなりたいという願望がある。

優秀なハンターである母親、一時期は優秀なハンターだったが、過去の出来事によりハンター業を引退した姉。かの事件の際は一時的な復活をしたが、結局は父親の鍛冶業を継いで活動している。

ならば姉が足を乗せなかつた領域まで上つていきたいという思いが強いようで、少しでも経験を積みたいというのが彼女の想いだ。

茉莉はそんな瑠璃の想いを知っているため、そんな彼女を支えるためについて行く。彼女の想いはわからなくもないが、どこかで彼女はストップをかけなければどこまでも突つ走りそうで怖い。だからこそ茉莉は瑠璃の事を時折「猪」と呼ぶ。

そして茉莉が付いていなければいけないのは昔から変わらない。ストップパーとなる彼女が手綱を引いていなければどこで無茶をするかわかつたものじゃない。

とはいえ瑠璃自身もどこかで茉莉がいてくれるから安心して、という節があるのでギリギリまでは突つ走っているようだが、それは彼女に対する信頼があるからだろう。

茉莉もそれを何となく感じ取っているようで、しようがないなあと思いつながら今まで彼女を支えている所がある。同時に彼女を弄つたりして憂さ晴らしや退屈凌ぎをしているのだが、そこはご愛嬌か。

「で、領主事件は……たまーにありますね」

「事故死だったり病死だったり？ こっちは通り魔と違ってそういう死に方だし、気にするこたないんじゃない？」

「……ま、そうですね。そして最後は華国の一件ですが……」

「こつちも事故死つて話でしょ？ どうでもいいでしょ、そんなの。あの国の要人がどうなるうが、知った事じゃないわよ」

「……ま、そういう感想になりますか」

味噌汁をすすりながら茉莉はやれやれと首を振るしかない。といつても彼女もまた同じような心境だ。

自分達があの国から出る結果となつた魔族狩り。まだまだ幼い頃に起こつた出来事だが、実家を捨ててポツケ村へと身を寄せる事になつた出来事だ。そのせいであの後の数ヶ月はあまり自由に過ごす事が出来ず退屈だつたことを覚えている。

少しして魔族狩りはなくなつたらしいが、再び起こつたその一件によつて華国からはほとんど魔族はいなくなり、魔族の心境は更に悪くなつたという話だ。

二人もその例に漏れず、あまり華国とは関わり合いになりたくないと思つている。だからかの国の要人が死んだと聞かされても、「あ、そう」としか言えない。もう自分達は華国人じゃないのだから。

というより昔から華国人と言う自覚すらない。物心ついたころから無国籍状態だつたため、どこかの国の人族だという感覚がほとんどないのだ。

それからしばらく無言で食べ進め、そう時間もかからず昼食を食べ終える。先に食べた終えた瑠璃が軽く視線を巡らせれば、まだ談笑している客達は暗い話題だけでなく明る



い話題についても話しているようだが、それらは小さなものばかりかプライベートの事だけだった。

情報としては、今回はこれくらいしかないか。

となればここに用はない。早いところ移動するでしょう。

会計を済ませて店を出ると、またアプトルをレンタルできる竜小屋へと足を向かわせる。再びアプトルを二匹レンタルすると、すぐに騎乗して移動を開始する。

竜小屋は各地の町に存在し、数匹のアプトルがここで世話されている。その疾走力が売りであるアプトル、あるいは周囲の地形に合わせて進化した亜種らをレンタルし、騎乗して移動する事が可能だ。

レンタルした彼らは他の竜小屋に預け、次の機会に他の客が利用する事でやり取りされている。そのため利用後のアプトルの事に関しては心配はいらない。

昼食後ではあるが、そんな事は関係なしに二人は一気に移動していく。

少しずつ茶色や黄土色が主体となつて世界に緑が混ざりだし、やがてどこまでも広がる緑という原っぱに入り込む。そうすると地平線の奥にうつすらと山の影が見え始める。

それだけでなく、草食竜のアプトノスの群れがちらほらと見かけられるようになった。

とはいえその群れの近くを一瞬の内に駆け抜けてしまうアプトルの疾走力。あつという間に数十頭の群れを背後へと置き去りにしていく。

それから数十分もすれば遠くに見えていた山がかなり近くなってくる。それだけでなく山の近くにある森も近くなり、二人は手綱を操って進路をその森へと変更させる。

森へと突入すればそれはまともな道などほとんどない状態になるが、アプトルはそれを苦も無く疾走し続ける。木を避け、道なき道を走り続けて森の奥へ。そうして数分もすれば少しはまともな道に出てきた。

それからはその道を利用し、一気になだらかな坂道を駆け抜けていく。するとこの森に生息している生き物の気配をうっすらと感じ始める。

だがほとんどは危険性のない草食系のモンスターばかりで、先ほどの群れとはまた別のアプトノスや、キノコを主食とするモスが多い事がわかった。

ランポスやジャギイの気配は今のところはない。ならば安全に移動できそうだ。

なだらかな坂道はやがて山道へと形を変え、多少はましな道なりになる。だがそこで油断してはいけない。少しスピードを落として周りに気を配りつつ進むことで、足を踏み外して落下しないようにする事も忘れない。

そんな山道を駆け抜け、坂が終われば今度はまた森を突っ切る道となる。今度は木々を避けるのではなく、旅人が利用するまともな道を駆け抜ける事になるためスピードは

そう落とさなくても済みそうだ。

モンスターの気配も相変わらず落ち着いたもので、肉食系のものの反応は感じられない。  
い。

今回はトラブルもなく目的地の村に到着できそうだと感じ始めた。

そんな事を考えて数十分。

何事もなく目的地である村に到着する事になった。竜小屋へとアプトルを連れていき、この村にある酒場へと足を運ぶ。山間の一角に作られたこの村の先に、件のロアルドロス率いる群れが確認されたボルシオ水没林が広がっている。

水源が豊富な上に雨雲が溜まりやすい環境になっているらしく、かなりの頻度で大雨が降り注ぐ場所になっているようだ。その影響でほとんどの森が水に沈んでいる状態になっているというその水没林は、一種の植物や水生のモンスターにとっては天国のような場所になっているという。

ただの森と違い水が多いため、その違いに慣れていないハンターにとっては厄介な場所であり、またある技術を持っていなければこの水没林で暮らすモンスターを相手にするのは難しい。

そのため件のロアルドロス討伐クエストが出ていたとしても、引き受けるハンターはそうそういないんじゃないかというのが二人の推測だ。

ギルド支部を兼任している酒場に入り、様子を窺ってみるとハンターの数は数人程度しかないようだ。他は一般人であり、ここに足止めされている旅人がほとんどだと思われる。

そしてクエストボードを見てみると、やはりそれはあった。

だが内容を見てみると、それは少しばかり予想とは違っていたのだ。

「……はっ。」

思わず瑠璃が呆けたような声を漏らしてしまう。

そこにはこうあった。

ロアルドロスとチャナガブルの狩猟。

場所、ボルシオ水没林。

確かに推測通りロアルドロスの討伐依頼だった。しかし、それに加えてチャナガブルまでその名が挙がっている。これは予想外だった。

瑠璃はすぐにカウンターへと向かい、受付嬢にあの事について訊いてみる事にした。

「ちよつといいかしらっ？」

「はい、何でしょう？」

「あそこの依頼、チャナガブルの名前まであるけどどういう事？」

「実はロアルドロスの群れが確認された後、とあるハンターチームがクエストを受注し、

現場に向かったのですが……その後チャナガブル乱入というトラブルが発生したそうです。彼ら曰く、ロアルドロスとの戦闘にチャナガブルまで乱入してきたせいで現場は混乱状態、そのまま戦闘続行不能まで追い込まれたとの事です」

なるほど、そりや話に聞いていないモンスターが乱入されては混乱もするだろう。群れのリーダークラスのロアルドロス相手にするだけでなく、魚竜種のチャナガブルまで現れれば、何の心構えもしていない状態ならば戦線はガタガタに崩れる。

そこを突かれれば戦いを続ける事なんて出来やしない。

それに恐らくチャナガブルが現れたという事は、その事態が起きたのはまず間違いない。陸上ではなかったのだろう。それが戦線崩壊に拍車をかけたに違いない。

当事者のハンター達には運が悪かったと合掌するしかない。

さて、これは困ったことになった。

チャナガブルまで確認されたとなれば、二頭討伐クエストになったという事になる。もちろん油断しなければ何とかなるかもしれないが、場所が場所だ。しかもチャナガブルの主な戦場は普通じゃない。

心構えは出来ても、だからといって確実に成功できるかと訊かれれば少し難しいと答えてしまうだろう。

ちらりと茉莉が瑠璃の様子を窺い見れば、腕を組みながら少し唸っている様子が確認

できた。ロアルドロスの群れだけと思っていた所にチャナガブル。彼女とて慢心しているわけではないので、がむしやらにやればいいというものではないという事はわかっているようだ。

それさえわかってくれるなら問題ないが、さあ行こうかとなれば少し考え込んでしまふのが現実。

せめて二人だけでなくあと二人……いや、一人でもいいから同行者が欲しいところか。

だがずっと二人でやって来た上に、自分達の種族があれなのでそう易々と同行者を募るのも難しい。これは少し困ったものだと思っていると、誰かが近づいてくる気配がした。

「その様子、あんた達もあのクエストに行く気があるようだね」

「……ん？ 誰？」

そこに立っていたいたのは東方人らしい黒い髪を肩まで伸ばし、気の強そうな碧眼をした女性だった。浅葱色あさぎの着物に身を包み、左右の腰元には小太刀を佩いている。

一見すると普通の剣士のようなのだが、あのクエストについて話しかけてきたという事はハンターでもあるのだろうか。

多少警戒するような視線で彼女を見つめていると、にやりと楽しげな笑みを浮かべて

「ああ、別に怪しいものじゃないさ。こんなものをぶら下げちやいるけどあたかもハンターでね」と前置きしながら、懐からギルドカードを取り出してぶらぶらと揺らしてみせる。

確かにそれはギルドカードであり、彼女が正式なハンターである事を示すものだった。

「あたいは桐音。草薙桐音くさなぎとうね。よろしく」

## 4 話

草薙桐音くさなぎきりね、そう名乗った彼女は視線をクエストボードへと向け、ギルドカードを懐に戻すと親指を立ててクエストボードを示して見せる。

恐らくあの依頼を示しているのだというのはわかる。そして彼女がハンターだと名乗った事。それらを合わせて考えてみると、彼女が二人に声を掛けた理由は何となく推察する事が出来る。

「それで、さっきの話聞こえていたけど、あれについて話していたって事でいい？」  
「……そうね。チャナガブルがいるって聞いてないって事を訊いていたわけだけど」  
「で、二頭討伐になった事で考え込んでいるってわけだろ？ 二人で行けるかどうか、とかそんなところか」

「そうですね。……まあ、ずばりいきましよう。あなたもあのクエストを受注しようと考えているということですよ。よろしいですかね？」

「ああ、そうさ。……だがあたかもたった一人で行こう、なんて馬鹿な事は考えちゃいねえ。他にも参加する奴がいねえもんかと待っていたら、どういうわけかだあれも参加し



ない。まったく、ここにいる野郎どもはタマナシか、おい？　どいつもこいつもチキンばかりじゃねえか」

やれやれと首を振りながらもその眼差しと言葉はここにいるハンター達を非難していた。ハンター達は全て男性であり、女性はこの三人のみ。つまりあのクエストに参加しようとしているのは女性のみであり、他のメンツ……すなわち男性全てあれを避けているという事になる。

桐音がチキンと言うのも無理はないだろう。

だがチーム戦とはいえ、二頭討伐クエストは通常のクエストよりも難易度が上がるのも事実。同じ種類であろうがなからうが、二頭のモンスターが同時に狩猟場に確認されているクエストは難しいというのがハンター達の間で知られている。

それはやはり同じエリアに二頭の大規模モンスターが現れた場合、どちらにも意識を向けていないといけないという点があるからだろう。そうしなければ一頭に集中している時に横から、あるいは背後から攻撃を受けて致命傷を受けたとなれば死の危険性がある。

故に二頭討伐クエストを避けるというハンターは決して臆病者、と蔑まれるいわれない。命を大事に、それは何も間違っていないのだから。

だが一般人も街道を利用できないという状況、このクエストに参加表明を出している

のが女性のみというこの状況。参加表明を出していない男達が非難されるというのは、ちよつと彼らがかわいそうかもしれない。

「ここにいるのはチキンばかりでこれじゃクエストどころじゃねえつてところに、ようやくあんたらがやって来たつてわけさ。見たところ、結構腕が立つだろう？ どうだい？ あたいと組まないか？」

につと笑みを浮かべながらそつと手を差し伸べる。

その手、続いて桐音の表情と視線を上げて観察してみる。怪しいところはないように見える。彼女は本当にあのクエストを行うための仲間を募っているようだ。

そして二人を見て出来るハンターだと感じられるだけの目と感性もある。

二人もまた同じように桐音を観察する事でその実力を読み取つてみる事にした。帯刀している小太刀から感じられる力からして、それはハンターが使う武器らしい事がわかる。……それにしても素材はモンスターらしきものは見当たらないし、カタログでも見かけないものなのだがどういふことだろうか。

その佇まいに隙らしいものは見当たらず、なるほど戦闘面ではまったく問題はないだろう。耳などを見てみると彼女は人間である事がわかるが、その発せられる気はただものではない事もわかる。

たぶん……タイマンで戦えばほぼ互角かもしれない。

そう思わせる程の強さを感じる。

「……………いいでしょう。よろしく願います」

「茉莉、いいの？」

「私は構いませんよ。それに人手が欲しいというのは事実ですからね。瑠璃もそれはわかっていてるでしょう？」

「そりやそうだけど……………」

渋りながら横目で桐音の顔を窺い見る。彼女とて頭ではもう一人は仲間が必要だという事はわかってる。しかし、この桐音という女性をそう易々と受け入れる程彼女は大人しくはない。

まだ警戒心を剥きだしにしているのは、桐音のその笑みや雰囲気と思うところがあるからだろう。瑠璃の心情は桐音も何となく感じ取ったらしく、苦笑しながら軽く頭を掻いてみせる。

「ああ、あたいがこんななのは昔からの性分だね。そこは勘弁してくれ」

「……………そう」

「で、どうだい？ あたいとしては仲良くやっていこうかと考えてるんだけどね」

「……………」

相変わらず差し出されている手。それをじつと見つめ、

(……ま、今回だけの付き合いよね)

緊急事態であるが故に一時的に組む相手、と考える事で今回だけの付き合いとする。どこか気に入らない相手ではあるが、我慢してやろうと自分に言い聞かせ、瑠璃はその手を取った。

「よろしく頼むわ」

「ああ。よろしく頼むぜ。……そういえば、まだ名前を聞いていなかったな。なんていうんだ?」

「あたしは瑠璃・フレアウイング。で、こっちが妹の」

「茉莉・フレアウイングです。以後、よろしくです」

こうして三人は一時的なチームとなった。

受付嬢に依頼書を持っていき、それぞれサインをして判が押されると依頼の受注が完了される。それからはそれぞれ一旦宿に向かう事になった。桐音はハンター装備に着替えなければならぬし、瑠璃と茉莉も宿を取って一時的な拠点を得なければならぬ。

二人で利用するための部屋を取り、ローブからそれぞれ装備を取り出して着替え始める。

さて、ここで改めて二人の装備を見てみる事にしよう。

瑠璃が装備するのはナルガシリーズ。迅竜ナルガクルガの素材を使用した動きやすさを重視した装備である。その機動力を用いて戦う事を主体とする瑠璃にとって、ナルガシリーズは実に彼女にあっているといえよう。

そして主要武器は昔と変わらず太刀であり、同じくナルガクルガの素材を使って作られたヒドウンサーベルを使用している。

一方茉莉が装備するのはレウスシリーズだ。雄火竜リオレウスの素材を使用し、火に對して高い守りを保有するだけでなく、スキルとして火属性の力が高まる効果も発現している。

そして主要武器はランスとガンランスという重量級のものではあるが、彼女自身の高い筋力のおかげで難なく振るう事を可能としている。

瑠璃が攻め、茉莉が守りつつ援護する。それが二人の戦い方だ。

また二人が身につけている装備は、中央のドンドルマをはじめとする地域で作られるものではなく、この東方で作られる形のものだ。そのためその外観、発現するスキルに少々変化が見られる。

数分して着替え終えた二人はローブを纏って部屋を出、先ほどの酒場へと向かっている。そこには既に準備を終えたらしい桐音が待機していた。

「おー、待たせてしまいましたかね？」

「いや、そんな事はないさ。ほんの数分だけだよ」

そう言う桐音の装備は何とも言えない装備だった。胸元や肩、へそが露出した軽装ながら、その色合いは少し紫がかった暗い黒に染まり、胸の上で血色に染まる爪のようなものが交差した装飾がしてある。

頭を守るものはなく、紅色のサークレットがそこにあるだけだ。だがそのサークレットが力を持ち、頭部を守るための障壁を張ってくれている。一見装飾具のように見えるが、それも立派な防具なのだ。

ネブラシリーズ。

毒怪竜ギギネブラの素材を使用して作られた防具である。色合いからして怪しさ満点の代物だが、高い衝撃吸収能力を持ち、それがスキルに表れている。火にかなり弱いのが、それと引き換えに雷と氷属性に強いのも特徴の一つだ。

それに原種は怪しさ満点だが、瑠璃と茉莉の姉の主要防具はそのギギネブラの亜種、電怪竜の素材を使用したネブラUシリーズだ。あれなんて血色を主体とした色合いをしているため、あれこれ言う事は出来ないか。

「竜車の手配はしてあるぜ。必要な物は用意させてあるからそれぞれチェックしな」

「おー、どもども。すみませんね、こんな事まで」

「なに、いいって事よ。時間があつたからちやちやとやっただけの話さ」

そう言いながらどうぞ、と言う風に童車の中を示した。

地域によつてこれを引くモンスターは異なり、飼ひ慣らされたモンスター達によつて荷車が引かれるという仕組みになっている。それを引くのはアプトノスカ、ガーグアか、あるいはアプトルかポポかという違いがある。

ここではアプトルが使われているようで、二頭のアプトルが手綱に繋がれている。

瑠璃、茉莉と続いてそれに飛び乗り、中にある荷物を確認する。支給品ボックスに納品ボックス、そして水没林で狩猟するならば必要不可欠な装備もちゃんと揃っている。

特に問題はなさそうだ。

「オーケーですね」

「そうかい。じゃあ出発してもいいかい？」

「いいわよ」

「よし、そんじや行くか。はっ！」

手綱を操つてアプトルを走らせ、勢いよく童車が道を走っていく。がたがたと音を立てながら車輪が回り、三人のハンターを乗せた童車はアプトルの力によつて一気に村を飛び出し、森の中へと消えていった。

一時間近くアプトルが走り続け、一行はボルシオ水没林のベースキャンプへとやって

来た。アプトルを休ませ、テントを設営するとモンスターが寄つてこないための薬を撒く。

続いて竜車から支給品ボックスをおろし、中から携帯食料、応急薬、地図を取り出してそれぞれのポーチへと納める。

続いて必要な物はこれだ。

水没林は文字通り多くの木々が水に沈んでいる。それはすなわち陸地となる場所はほとんどないのだ。増水された川がエリアの大半を占め、それ故にここは水生のモンスターにとって暮らしやすい環境となっている。

そんな彼らと戦おうと思えば、水中から陸上へと引き上げるぐらいしかハンターには戦う手段はなかった。他にあるとすればガンナーが遠距離から攻撃する方法があるが、それではちまちまとしかダメージを与えられず、時間がかかってしまう事が多い。

また、水中でも行動できるように進化した魔族が挙げられるが、これは限定的な話であり、そんな彼らが表に出てくる事が稀なため期待できない。

普通のハンター達でも水生のモンスターに対抗するためには、やはり奴らの領土に危険を冒してでも飛びこむしかなかった。

そのための装備が近年遂に開発されたのだ。

「酸素瓶に水中メガネ、そして水竜の守り……つと」



支給品ボックスからひよいひよいとそれらを取り出し、装着していき、装着していく三人。その中で水中メガネは瑠璃と茉莉は頭の防具に装着し、桐音はサークレットのためにそのまま頭に装着する。

水中メガネはそのままの意味だ。水中でも問題なく視界を確保するための物で、ハンターの装備に合わせてパーツを変える事が出来るようになっていた。

基本的にはバイザーのような形状をしており、頭の防具に装着する事で上げ下げする事を可能としている。

酸素瓶は中にサン草と呼ばれる植物を収めた瓶であり、そこからチューブが伸びて口と鼻を抑えるマスクに繋がっている。サン草は少しの光でも光合成を可能とし、更に生み出される酸素が普通の植物よりも多いため、このように利用されることになった。

また深い海に潜水する際はこの酸素瓶とマスク、水中メガネを同一化させた用具が存在しており、こちらを利用しなければ危険という説明がなされている。

最後に水竜の守り。これは一見宝石のように見えるが、水竜ガノトトスの素材をはじめとする水生のモンスター達の素材を使用し、その秘められた力を引き出して結晶化させたアクセサリーだ。

これを身につける事で装備者の周囲に力が包み込み、水中でも陸上に近い動きを可能とさせた。装備している防具の重さを軽減し、ある程度の水流にも耐えられる。つま

り泳ぐ事が出来るならば防具をつけ、武器を手にしても問題なく移動できるだけの力を与えてくれる。

これらの装備品があつてこそ、ハンター達は水中でも戦う事を可能とする事出来るようになった。逆に言えば、これらがなければ水中で戦う事は自殺行為となる。防具の重さによつて水中で移動する事も叶わず、酸素を取り込むことが不可能になつて溺死するのがオチ。これが開発されたからこそ、人族の戦闘出来る領域が拡大することとなつたのだ。

それらを身につけ終えると、それぞれローブを脱いで中から今回使用する武器を取り出していく。

瑠璃が取り出したのは一振りの剣だった。一見するとシンプルなロングソードに見えるが、これはダブルセイバーに属する武器の一種。良質の骨と火竜の素材を使い、高い火属性を内包させたその剣は、火竜剣【火<sup>かりん</sup>燐】。

リオレウスとリオレイアの素材を使用し、両刃剣を二つ組み合わせたダブルセイバーとして瑠璃の姉、撫子が作り上げたのだ。上位に上がったお祝い<sup>の</sup>選別として彼女が打ち、見事に仕上げた一品であり、その強度や切れ味は上位のものに引けを取らない。

ちなみに銘に火燐を用いたのは、母親の名前を入れてみたかつたからだとか。製作者が姉で、銘に母親の名前を入れることで寂しくないように、というちよつとした心遣い

らしい。

柄の中心にあるギミックを使う事で畳めば両刃剣、広げれば柄を中心として左右に両刃剣が存在するダブルセイバーとなる。

今回は太刀ではなくこれを使うようだ。

一方茉莉は桐音が纏っているネブラシリーズに近い禍々しきを感じさせる槍を取り出す。中心はククリに近い刃で、その根元から小さく二つに分かれた刃が存在し、それらを纏める棍は細長い作りになっているランスだ。色合いは暗い黒と血色を使用し、大型のランスではなく対人戦で使うような槍に近いそれはシャドウジャベリン改。

ギギネブラの素材を使用し、奴の毒を内包したランスである。

左手に盾を嵌め込み、取り出したそのシャドウジャベリン改を軽く手に馴染ませるように両手で回転させ、チャキツと音を立てて右手で構える。うん、と満足そうに頷くとそれを背負って固定した。

最後に桐音が藍色のローブから取り出したのは重量を感じさせる武器だった。それを広げると斧になる。先端は球体になっており、そこから大小の刃が付き出している形になっている。

球体は変形させると内蔵されている棘が射出され、それが剣の先端となる。それはま

さに剣と言うよりはモーニングスターと呼ぶべきだろうが、それはツツコンではいけないお約束というものだ。

斧と剣という二つのスタイルを切り替えて戦うという、ギミック武器の始祖であるスラッシュアックス。その一種であるこの武器の銘はヘビィディバイド。

尾槌竜ドボルベルクと呼ばれる獣竜種のモンスター素材を使用しており、高い威力を持つ武器の一つだ。

しかし普段着には小太刀を帯びていたというのに、ハンターとしての武器がスラッシュアックスとは驚きだ。てつきり双剣使いかと思っていた二人は、少し意外そうな視線を桐音に向けてしまう。

それに気づいた桐音は「ん？」と二人に振り返り、その視線がヘビィディバイドに向けられている事に気づくと「ああ、これ？」と軽く持ち上げてみせる。

「あたいは気ままに武器を作っては使ってきたらいいからスタイルだからね。メインは察しの通りの双剣だけど、色々手を出してきてるんだよ。片手剣、双剣、太刀、大剣、スラッシュアックスにダブルセイバー……って具合にね。要は剣だったら何でもいいのさ」

「おー……器用なんですな」

「まあ、昔から色々やってきたからっていうのもあるけどな。あたいと刃物は切っても

切れないものだったって事よ」

どこか愁いを帯びたような瞳をしながらそう呟き、ローブをテントの壁掛けに掛けて戻ってくる。そんな彼女にかける言葉が思いつかず、二人は彼女に続くように壁掛けにローブを掛けた。

ローブの中から必要な物は既にポーチに移してある。また今回のクエストで使用する武器はもう選択した。それからがクエスト開始だ。

その後にはローブを着用する事は許されない。それはルール違反なのだから。

許されるのは緊急事態のみ。例を挙げるならば古龍を確認した時か。

そういう時ならばハンターはローブから他の武器を取り出して戦う事が出来る。古龍相手ならまだしも、普通の飛竜らを相手にする際にそれをやられてはハンターとして成長する事など出来ない。

故にギルドはそのように制限をかけたのだ。

各自、全ての準備を整えた。

これから向かうのは一つの戦場。かのモンスター達にとっては楽園のような場所でも、足を踏み入れる者らにとっては厳しい戦場だ。

しかし彼女達は臆することなくその戦場へと向かっていく。

今、戦場へと乙女たちが舞い降りた。

エリアーに入ると木々の向こうから何かの鳴き声が聞こえてきた。それは三人を威嚇するような声であり、敵意が真つ直ぐにぶつけられてきている。

水生獣ルドロス。

水生モンスターの一角であり、ロアルドロスを取りダーとして群れで生活する存在だ。少しくすんだ緑色の体色をしており、その骨格や外見から見るとトカゲに近いのか。

数は三頭。となれば一人一殺で十分だろう。

「ここで軽くお互いの実力を把握するためにあれ、一人ずつで殺らない?」

「奇遇だね、あたかも同じことを考えていたところさ。そんなじゃ、軽く流していこうじゃないか!」

そうして二人は同時に飛び出し、ぬかるんだ地面を駆け抜けていく。ぼしやぼしやと音を立てるはずの足音は極力抑えられており、微かな音しかたてていないがそれでも二人の疾走速度はなかなかのものだ。

その後に続くようにやれやれと嘆息しながら茉莉も続き、背負っているシャドウジャベリン改に手を伸ばして構える。

その頃にはもう既にあの二人はルドロスとの距離を縮め、己の武器の間合いに入り込んでいた。

腰に帯刀している火竜剣【火燐】を抜き、向こうから噛みついてきたルドロスに向かつて一振り。

たったの一振りでも十分だ。

噛みつくために前のめりになったルドロスの首を、火竜剣【火燐】で焼き切る事で撥ね飛ばす。

一方桐音はと言うと、背中に担ぐヘイデイバイドの柄に手をやり、飛びかかってきたルドロスに合わせて抜き放ち、ギミックを始動させて剣モードに切り替えていく。体を捻ってルドロスをやり過ぎ、その頭へとスパイク球体で叩き落とす。

ピンポイントに頭へと振り下ろされたそれはルドロスの頭蓋骨を打ち砕き、その一撃のもとに絶命させる。

その鮮やかな攻撃に残った一匹は恐怖を感じ、少しづつ後ずさりしはじめる。だがそれを逃さず、瑠璃と桐音の背後から跳躍していた茉莉がシャドウジャベリン改を構えつつ振りかぶり、勢いをつけて投擲する。

それは狙い狂わずルドロスの額を貫き、更に先端から染み出る毒もルドロスの頭から侵していく、その一撃だけでルドロスは絶命してしまう。

結果、全員一撃必殺で終わらせてしまった。

軽く武器を振って血を払い、鞘や背中に戻した三人は倒れ伏すルドロスの死体に剥ぎ

取りナイフを入れて素材を剥ぎ取った。残った死体はそのままに隣のエリア2へと移動していく。

森の中に南北に広がる広場となっており、ここもまた雨によってほとんどぬかるんでいる状態だ。ルドロス達の気配はなく、いるのは大型昆虫の一種であるオルタロスやブナハブラぐらいなものだった。

彼らを刺激させないように、静かにその隣のエリア4へと移動していく事にする。強い気配はそのエリア4から感じられるのだ。

まず間違いなく標的はエリア4にいとみていいだろう。現実性を高める要素として、あの気配の周りには小さな気配が多く存在している。恐らくルドロスを囲んでいると思われる。

「前衛はあんたもやってるんだろう、瑠璃？」

「そうね。あたしが前に出て斬りこみ、茉莉が援護していく形を取ってるわよ」

「だろいな。あたしも前に出ていく主体だから被ってるってことになるか。……となる」と、どっちかが前衛、どっちかが遊撃という事になるわけだが、どうするよ？」

「……武器的にあんたのスラアクが前衛向きでしょうね。あたしが遊撃で斬りこむことにするわ」

あの一瞬の出来事でお互いの実力は何となく把握した。ルドロスの飛びかかりを回



避けつつの一撃。やはり出来る人物だという事がわかった数秒間。

実力や戦い方が似通っているならば、武器の特徴を生かした位置取りを取るしかない。

広げればリーチが伸び、また気刃を放つ事で一気に周囲を薙ぎ払う事を可能とするダブルセイバー。これで周囲のルドロス達を一気に始末していく事にする。

そして桐音のヘビィディバイドを主体としてロアルドロスへとダメージを与えていく。時に瑠璃も、時に茉莉も加わって攻め立てていく、それが大まかな作戦となる。

またここに来る途中にお互いが持っている道具についての確認もしてあり、それもあからこそ桐音は二人の役割を何となく察知する事が出来たのだ。

といっても二人の性格から考えても何となく推察できたという点もあるのだが。

ゆつくりと足音を極力立てずにエリア4へと入り込み、木々の陰に身を隠してそつと奥の方に広がる大河の方を覗き見る。

そこには一種の王国が存在していた。

群れを成す姫君たちの数は十頭近く。各々リラックスした様子であり、眠っているもの、水に口をつけているもの、そして王に寄り添っているものと様々だ。

その王国の中心には王がいる。

スポンジ状の黄色いたてがみを纏い、堂々とその場に佇むそれはまるで愛でるように

その姫君たちを見守っている。

あれこそが今回のターゲットの一つ。

水獣ロアルドロスだ。

彼らはまだ瑠璃達に気づいておらず、平穏な日常を過ごしている。だが彼らがこのポルシオ水没林の街道近くに存在している限り、ここを通り抜ける旅人に危険が及ぶ。

ここから立ち去ってくれるならばいいのだが、この群れは数日ここに居座っている。だからこそこれ以上ここを封鎖させないためにもこのロアルドロスには退場してもらわねばならない。

「目標発見。さて、斬りこむタイミングを窺うとしようかね」

「そうね。瑠璃、大丈夫かね？」

「大丈夫です、問題ありません」

ポーチから赤い笛を取り出し、腰に下げると続けてポーチから一つの玉を取り出して懐に入れる。その間に瑠璃は鞆に収めている火竜剣「火燐」に指を掛け、桐音も手を柄に掛けながらいつでも飛び出せる体勢に入っている。

ロアルドロスの視線は少し瑠璃達の方へと向けられているが、まだ奴は彼女達に気づいていない。奴はただロアルドロスの様子を見守っているだけに過ぎない。

飛び出す機会はただ一つ。

奴の視線が向こう、大河側へと向けられた時だ。

「……………」

静かな時間が過ぎていき、聞こえるのは風に揺れる木々のざわめきと大河の水の音。

ロアルドロスには静かに見守り、ルドロス達はこの穏やかな時間を楽しむような声を漏らす。

彼らにとつての平穩——それを壊すのは忍びないが、残念ながらその王国の平和を打ち砕いてくれよう。

ロアルドロスの視線が動き、大河の方へと向けられた瞬間、弾丸が射出されたかのようには音が勢いよく飛び出していく。それに続くように瑠璃もまた疾走を開始し、それぞれロアルドロスとそれを取り巻くルドロスへと距離を詰めていった。

「——っ!？」

当然、突如現れた敵にロアルドロスが気づかないはずもなかった。すぐさま身構え、唸り声を上げるがそうする間に既に二人は己の武器の間合いまで詰めてしまっていた。

「はあっ!」

振り抜かれたヘビィディバイドの刃がロアルドロスのたてがみを薙ぐように振り抜かれ、黄色いスポンジに赤が混じる。だがそれとどまらず、滑りやすいぬかるみの地ではなく周りと比べてまだ固い部分に足を乗せて体を固定させ、振り抜いたヘビィディ

バイドを引き戻し、薙いだ部分と交差させるように振り下ろす。

「ギユオオオオオオオオオオオオッ!!」

噴き出す血を感じながら敵の侵入にロアルドロスが吼える。そのまま桐音へと爪を振り上げて叩き落とすが、バックステップを刻んでそれをやり過ぎ、横から飛びかかってくるルドロスへと柄を突き上げて弾き返し、体を捻って首を刎ねる。

向こうでは既に瑠璃が二頭は仕留めており、広げられた火竜剣【火燐】を勢いよく回転させて刃から炎を軽く噴き出させていた。

背後からは茉莉が赤い笛、鬼人笛を吹き鳴らして特殊な粒子を発生させ、それは茉莉達へと浸透して活力を与えてくれる。

十分に力がみなぎった事を感じると鬼人笛をポーチに戻し、茉莉もまた己の武器であるシャドウジャベリン改を構えた。

各々位置についた瞬間、ヘビィディバイドの先端をロアルドロスに向けた桐音が不敵に笑みを浮かべてみせる。それはまさに獲物を前にした狩人であり、戦いに愉悦を見出す戦士の顔でもあった。

「さあ、狩りの時間だ。楽しませてもらおうかね!」

「ギユオオオオオオオオオオオオッ!!」

正面からメンチを切る桐音に、再びロアルドロスが吼える。

今、水没林に戦いの火ぶたが切つて落とされた。

## 5 話

現れた敵を取り囲むように最初の攻撃に巻き込まれなかったルドロス達がゆっくりと取り囲むように移動していく。だが数が減り、最初の襲撃で三人の戦意にあてられたものが多い。

だがそれを振り払うようにロアルドロスが吼える事で正気を取り戻させた。更に一頭に軽く視線を向け、何かを伝えるように小さく鳴くとすぐに正面で構えている桐音へと戻した。

小さく息を吸いこむと、口から水の塊を撃ち出す。弾丸のように撃ち出されたそれは桐音を捉えられず、しかし標的を外したその弾丸はぬかるんだ地面を弾けさせるだけの力を見せつけた。

横に軽く跳び、滑るようにまたロアルドロスへと距離を詰めてヘビイデイバイドを突き出してやる。球体がロアルドロスの頬を捉え、返す刃で打ち付けられた部分を斬る。

鈍器の衝撃から続く痛みにロアルドロスの表情が一瞬曇ったが、それで怯むほど軟ではない。

体を捻りながら桐音へと嘯みつきにかかるも、数歩下がってやり過ぎされてしまう。「つと、突き抜けますよ」

その隙にいつの間にか接近していた茉莉が桐音の近くを駆け抜け、両手で構えるシャドウジャベリン改を操ってルドロス達を薙ぎ払っていく。ロアルドロスを守ろうと桐音へと攻撃を仕掛けようとしていたところの言葉通りの横槍。

薙ぎ、突き刺し、吹き飛ばして道を強引に作り上げてロアルドロスの背後を取った茉莉。勢いよくシャドウジャベリン改を回転させて遠心力をつけ、鋭い切っ先でロアルドロスの腰から尻尾を薙ぎ払った。

刃によるダメージだけでなく滲み出る毒もロアルドロスを侵すその一撃は、ロアルドロスの意識を一瞬茉莉へと向けさせてしまう。それを見越した桐音が再びヘイデイバイドを突き出し、そこからギミックを始動させて剣モードに切り替えてロアルドロスの頭を叩き斬るように振り下ろす。

それから横に切り払いつつ顔から離れるように移動し、反撃として薙ぎ払われる爪を剣で受け流しながら逸らしてみせる。

「クック、見えるぜ。そら、くらいなっ！」

逸らされた爪を狙って少し腕を引いて力を溜めた後、一気に突き出すようにしてヘイデイバイドを叩き込む。だがそれだけではただの突きだ。しかし剣モードの突き

には特殊な力が存在している。

柄にある引き金を引き絞った瞬間、柄から強いエネルギーが発生して切っ先へと収束され始めたのだ。

スラッシュアックスにはビンが内蔵されており、それには自然の粒子を取り込んで一つの力を発現させる効果を秘めている。それは斧モードの時には発現しないが、剣モードになる事でその力を発揮してくれる。

斬るたびに力が刀身へと纏われ、敵にダメージを与えると同時にビンの力が付与されているのだ。これは弓に使われるビンとは違い、スラッシュアックスごとにあらかじめ内蔵されているため、切り替える事は出来ない。

このヘビィディバイドに内蔵されているのは滅気ビン。相手のスタミナを奪っていかく効果があり、更に頭に命中すれば相手の意識を揺さぶる効果も存在している。いうなればハンマーなどの鈍器と同じ効果だ。

そして突き状態から引き金を引いた時、その力が先端へと収束する事で更なる力を発揮する。収束しているそれにもダメージが存在し、その力が最高に高まると爆発を起こしてしまう。

だがその爆発こそが最高の攻撃となる。それがスラッシュアックスだ。

しかし桐音はその最大攻撃を出さないうまに引き金から指を離し、エネルギーの反動



で軽くヘビイデイバイドが暴れるものの、それを強引に抑えこんだまま引き戻す。

「ふんっ！」

解放は確かに威力が高い攻撃ではあるが、その分武器に対しても少なくないダメージを与えてしまう。それ故に何度もぶっ放せるような代物ではない。無理をすれば武器にガタが来てしまい、鍛冶屋に修理を出さなければならなくなる。

強力故について回る障害というわけだ。

「はっ、ふっ！」

戦場にはもう一人いる事を忘れてはならない。桐音へとルドロスが近寄らないように引き付け、まとめて狩っている瑠璃がいるのだ。

柄を中心に両側に存在している刃には赤く燃える炎が発現し、振り回すたびに宙に踊る。

そしてダブルセイバーを中心にある柄を両手で操り、主に回転させる事で連続して手に攻撃する武器だ。

寄ってきたルドロス達を巻き込むような位置へと入り込み、まるで踊るように体を動かしながら両手で火竜剣【火燐】を操る。その度に刃はルドロス達を薙ぎ払い、同時に発生した炎が傷口を焼く。

離れた所にいるものは横回転していた火竜剣【火燐】を縦に回転させ、流し込んでい

た気を圧縮させて振り抜かれた刃に乗せて放つ。

これが気刃だ。

己の気を刃と化して放つ遠距離攻撃の手段。近距離をメインとする剣士タイプの遠距離攻撃の手段である。これを習得するには気の扱い方を覚えなければならないが、覚えるだけの価値はある。

そして気刃は武器の属性を含んで放たれるため、今放った気刃は離れた所にいるルドロスを焼き切った。

「はっー」

周りにいるルドロスを始末し終えた事を確認し、瑠璃はロアルドロスへと振り返りながら火竜剣〔火燐〕を回転させて連続して気刃を放ち、瑠璃もまたロアルドロスへと攻撃を仕掛けていく。

正面、側面、背後からと攻撃を仕掛けられ、更にはルドロス達まで殺されたことにロアルドロスは遂に怒りを爆発させた。

「ギョオオオオオオオオオンッ!!」

飛竜のような周りを怯ませる怒号ではないが、それでもロアルドロスの怒りを乗せた叫びは凄まじい。

しかし所詮は飛竜種よりも劣る咆哮。この三人にとってロアルドロスの怒号は涼し

いものだった。正面にいて直にその怒号を受けた桐音でさえ薄く笑みを浮かべている。その隙だらけな胸元へとヘビィディバィドを叩き込もうとしたが、ロアルドロスがその胸……いや体を持ち上げていく。それから桐音を叩き潰すかのように、ボディプレス  
を仕掛けていく。

それを察知して後ろへと下がり、ボディプレスを回避したところを狙ってその顔面へと攻撃を仕掛けてやった。

「まったく、もうキレルたあ気が早いなあおい？　早いのは困りもんだぜ？　早漏野郎はとつとと消えなッ！」

斬り落とし、薙ぎ、突き出しと連続して攻撃を仕掛け、ロアルドロスが体勢を立て直したところで一時的に距離を取る。余裕の状況ではあるがだからといって、守りをおろそかにしてはならない事は桐音にもわかっていようだ。

それに背後からはボディプレスによってあがった尻尾が叩き下ろされるのを見送った茉莉が攻め立てる。基本の突きを連続して放つていくその様は、ハンター達が行う基本の重量感のある突きとはまったく違う。

細身のランスという事と、嵌めている盾がランスよりも少し小ぶりな事。そして茉莉の両手によって操られるシャドウジャベリン改は、ロアルドロスの腰に次々と突き刺さっていく。その硬い皮を突き破り、中にある肉へと刃が傷つける。

無表情に近い茉莉だったが、少し昂り始めている桐音の様子に僅かに苦笑を見せ始めた。音を立てながら回転するシャドウジャベリン改の刃に己の気を纏わせていきつつロアルドロスと桐音の様子を窺っていく。

「昂っているようですがまだ冷静ですね。っと、危ない」

背後を責めてくる敵には尻尾を振り回して追い払う。空を切つて迫ってくる尻尾を何度かやり過ぎ、腰から背中にかけて貫く気槍を撃ち出してやる。斬撃が気刃ならば、貫くのは気槍。貫通力に優れるように調節された気は、突きだされたシャドウジャベリン改によって放たれ、敵を貫く槍と化す。

毒を含んだその気に貫かれ、側面からは刃に切り裂かれるだけでなく焼かれ、このまま陸上で戦い続けるのは不利だと悟ったロアルドロスは、体を捻って周囲を尻尾で薙ぎ払いつつ大河に向き直る。

そのまま三人を置き去りに勢いをつけて飛び込み、大河の奥へと消えていくではないか。

普通ならばこのまま手出しできないが、今の彼女達ならば後を追う事が出来る。

一旦それぞれ手にしている武器をしまうと、持ってきた水中用装備を装着していく。

「じゃ、気をつけなさいよ」

マスク越しの少し曇った声で瑠璃が念を押すように言う。これから行われるのは勝

手の違う戦場だ。瑠璃と茉莉はその種族上空中戦もこなすが、それは昔から翼を使って高速移動の練習をした事があるから出来る事。

更に言えばそれを得意とし、売りにしている現役ハンターと元ハンターが存在し、彼女達からも技術を仕込まれた甲斐があつてこそその空中戦。

しかし陸、空を駆ける二人も海……すなわち水中戦はそんなに経験を重ねていない。でも戦えないというわけでもない。これもまた一つの経験積みの機会。

バイザーを下して水中メガネをかけ、マスクから問題なく酸素を補給できることを確認し、水竜の守りの力を発動させて三人は各々大河へと飛び込んでいく。

ザパンツ、と大きく水を跳ねさせ、ドルフィン泳ぎで一度水中へと潜りながら前進していく。水は少し濁っているようだが水中メガネのおかげで問題なく視界は確保できている。

冷たい水が肌を刺激するが水竜の守りのおかげで肌寒くは感じない。それに防具と武器の重量がかかっているというのに、それを感じさせないだけの速さで水中を泳いでいける。

これが水竜の守りの加護のおかげだ。やはりこれは革新的な発明だと改めて思わざるを得ない。

また水竜の守りはもう一つの効果もある。

水中でしかもマスクをしている彼女らは声を出してもそれが相手に届かないだろう。声はマスクによって遮られ、ただ独り言を呟くだけに終わってしまう。

そこで水竜の守りの力が働くのだ。

これが近くにある水竜の守りと共鳴する事で結びつけ、装着者の声を粒子を伝わらせて届けてくれるのだ。粒子が力の道を作っているおかげだと推察されており、これが有力な説とされている。

そんな技術の結晶の加護の下、広がった戦場の範囲。

大河を潜りながらこの中に飛び込んでいったロアルドロスを探す。しかし姿は見えず、気配もこのエリアから消えてしまった。

「エリア5へと移動したと思われませうね」

「この先、か。……なるほど、確かに待ち構えているかのように動いているじゃないの」

「そうね。しかも小さな気配が近づいてくる。恐らくルドロスじゃないかしら」

「先ほど一頭だけここに飛びこませていましたね。たぶんそれが他のエリアにいる仲間と連絡したのでしよう」

泳ぎながらも三人は気配を探る事をやめる事はしない。何せ水中に来たという事は、水中での行動を主とする魚竜種、チャナガブルがいる可能性が高いのだ。

川底の、しかも土や砂の下に潜りこんで川底に同化して姿を消し、髭だけを出してあ

たかも川底に生える草のように見せかけ、水の流れに乗せてみせる事で獲物を誘う習性がある。

それにつられて寄ってきた魚、あるいはチャナガブルに気づかない獲物をその大きな口で一気に取り込み、丸呑みにしてしまう。それが奴の捕食行動だ。

それはハンターに対しても同じであり、チャナガブルがどこにいるのか気づかないハンターを丸呑みにしたという報告もよくある話だ。

故に川底にも気を配らなくてはならない。ロアルドロス達にばかり目や気を向けて、気づかないところからチャナガブルに奇襲されてしまえば、自分達より前にこのクエストをやったハンター達の二の舞だ。

いや、チャナガブルがいると知っていると知っているという点で自分達が有利な分、奇襲を受けてしまえば自分達の方が笑いだ。

少し濁った底を見回しながら茉莉は気配を探ってみるが、チャナガブルらしき気配は感じられない。ただ隠れるだけでなく気配まで消してしまっているからこそ、警戒心が強い小魚なども油断してしまう。

だからこそ、いつも以上にセンサーを張ってみるが、やはり奴の気配はないように思える。

どうやらチャナガブルもまたここにはいないようだ。

そのままエリア4からエリア5へと移動すると、視界の左側に少しづつ崖が現れていく。道は右寄りになっていき、そして右側は水没してしまった森となっていく。

地図を見てみるとここは逆し字型になっており、左側にある崖がエリアを狭め、更に右手にある森が挟み込むようになっており、道がこのようになっていているのだ。

その地形のまま水が溜まり、ここは少し特殊なエリアになってしまっている。

同時にハンターにとつてはやり辛い地形になっていると言つてもいいだろう。何せ崖のせいでエリアの奥が見えないのだ。これに隠れるようにして忍び寄りられては道を曲がるときに襲い掛かれた場合、反応出来なければ大きな負傷になるのは目に見えている。

気づいていれば問題ないが、気づかなければまさしくそれは奇襲となる。しかも陸上と違い、ここは水中。水竜の守りがあるとはいえ、体が上手く動かなければ守るだけでも難しいのだ。

なので気配を探りながらゆっくりと移動する事にする。

「いるわね」

「ああ、待ち構えてやがるな。そして援軍も近づいてきているときたもんだ。まったく、寄せ集めのルドロスを連れてきてもしゃーないっていうのに」

「いえいえ、混戦に持ち込むという手が考えられますよ。油断は禁物です、草薙さん」



「水中の混戦、か。チャナまで混ざったら確かに面倒なことになりそうだ。こういうのはあたいは好かんのだけどね」

「もしかしてサシでの勝負が好きな系？」

「いいや、好きじゃない」

ちつちつち、と指と首を軽く振り、

「大好きさ」

とバイザーとマスクで隠れたその表情を笑みに変える。それは実に楽しそうなものだったが、二人からすればちよつとした程度の違いでどうしてそんな大それた行動を見せるのかとツツコミたい。

「一対多数なんてまどろっこしいことは嫌いさ。戦いつてのはやはりお互いの全力をぶつけ合つてこそだろう。……戦いこそ、至高。身を削り、お互いの命を懸けてこそ戦い！ ……昔から色々やってきたもんだからねえ、ちよいとあたいは戦いつてもものに目がないのさ」

「さつきはその逆の事をロアル相手にやってるけどね」

「ま、それはそれさね。チャナさえいなければあたい一人でやるつもりだったけど、……現実はどううまくはいかないもんだね」

背中にあるヘビイデイバイドに手を伸ばし、崖に隠れて見えなくなっているロアルド

ロスを感じながらゆっくりと前に進んでいく。そうしてロアルドロスまで十数メートルまで接近し、そこで力を溜めて飛び出す体勢に入る。

しかしそこで乱入者。

森の奥から次々とルドロス達が現れ、大河の中へと飛び込んでくる。水音が響き、体をくねらせながら真つ直ぐに桐音達へと迫っていく。

「思った以上に早いですね。しかも水生獣ですからここはあちらに有利です」

「まったく……群れるんじゃないよ!」

吼えながらへビイデイバイドを振り回すも、素早く回避した一匹には当たらない。が、桐音へと噛みつきにかかった三匹が纏めて切り払われる。

「ギユオツ!」

回り込んできたルドロスが桐音へと噛みつきにかかり、尻尾を振るってくる。振り抜いたせいで硬直していたところへの反撃だ。

「ちっ、鬱陶しい!」

「本当に多数相手は嫌いなものね、ふっ!」

群がってくるルドロス達を火竜剣「火燐」で切り払っていき、茉莉がシャドウジャベリン改を回転させて強い水流を生み出しながら薙ぎ払う。

ルドロス達は二人の攻撃によって傷つき、離れていくが、そこを狙った存在がいた。

「ギョオオオオオオオオオン!!」

崖の向こうから勢いよく呐喊してくるロアルドロス。ルドロスが散り、三人が揃っているのを見計らったの行動だった。茉莉が盾を持っているとはいえ水中で、しかも盾よりも大きな体での突進が防ぎきれぬわけでもない。

スピードを売りに行っている瑠璃でも、水中ではそれを発揮する事は不可能。あのスピードは翼を使つての高速移動であり、翼を広げて羽ばたけない水中では無意味なことから。

「くっ……」

「……っ」

「ちい……」

高速で泳ぐことで水流を生み出し、スピードに乗ったロアルドロスの突進により三人はバラバラに吹き飛ばされてしまう。避ける事が出来ず、防御するしかない判断した三人は防御体勢を取り、気で身を守ったがそれでも殺しきれない衝撃が襲い掛かる。

それだけでなく、水中で吹き飛ばされれば体勢が強制的に崩される。それを狙つてルドロス達が追撃を仕掛けてくるのだ。

完全に流れがロアルドロス達に傾いてきている。

「っ、の……」 調子に乗らないでよねー!

寄ってくるルドロス達を火竜剣〔火燐〕を回転させて反撃するが、それを切り抜けて瑠璃の足へと噛みつきに来たルドルスがいる。回避性能に優れるナルガシリーズではあるが、防御面は中盤クラスといったところか。

ルドルス程度の噛みつきには耐えられる。が、纏わりつかれては動きづらくなる。

それにもう一つ、瑠璃と茉莉がここで戦いづらい理由が存在する。

彼女達は火竜の力を行使する事が出来るが、それは水中では無意味という事だ。水は炎を消してしまう。彼女らのもう一つの武器である火炎操作が使えないのだ。

ロアルドロスは火属性が弱点だが、この水中でその攻撃は出来ないというのは大きな違いが生まれる。

だが火竜剣〔火燐〕の炎は斬った瞬間に発生し、内包されている炎の火力は撫子の技術によって高められている。加えてアイルーが持っている技術の一部を習得し、独自に改良を加えた事で濡れていても炎が発生するようになっていた。

これは雨の日でも爆弾が使えるという彼らの技術が元になっている。つくづく彼女の才能が恐ろしい。

「ギユオオオンッ！」

動けなくなっている瑠璃を見逃さずにロアルドロスが襲い掛かっていくが、その前方に茉莉が入り込み、盾で何とかロアルドロスの進撃を止める。しかしやはりとすべき

か水中という事もあって完全に衝撃を殺しきれていない。

「くっ、やはりやりづらいですね……。だからといって、ここであきらめるようなものはありませんが！」

足元から気を放出させてこれ以上下がる事を阻止し、逆に押し返すように盾と腕力でロアルドロスに反撃の意志を見せつける。じりじりとロアルドロスを押し返し、右手に持つシヤドウジャバリン改でロアルドロスの顔、喉へと突き刺していく。

その刃と内包されている毒により、ロアルドロスの進軍が止まる。それを見計らって盾でロアルドロスの顔を殴りつけ、その一撃に怯んだ隙をついて桐音が一気に距離を詰めて斬りかかる。

たてがみを切り裂き、返す刃で胴体を薙ぐ。

当然ロアルドロスを守るためにルドロス達が寄ってくるが、ヘビィディバイドのリーチは広く、回転させる事で寄ってきたルドロス達も薙ぎ払われる。その事にロアルドロスが怒りの声を上げるが、黙らせるように茉莉がまた盾で殴りつけ、シヤドウジャバリン改で突いていく。

「いい加減離れなさい！」

足にまわりつくルドロスに火竜剣「火燐」を突き刺し、もう一つの刃で体当たりしてくるルドロス達を薙ぐ。いつもならば問題なく処理できるのに、水中というだけでや

はりやり辛い。

まだ完全に慣れていない状態で、数で押されるだけでここまで違う。

侮ったというわけではないが、ルドロスの数がここまでいるというのが驚きだ。ここにいるだけでも十頭を超えている。何頭かは処理したが、それでも数匹は存在して瑠璃達とロアルドロスの動きを見守っている。

「……………」

寄ってくる気配がないならば、一度ロアルドロスへと接近するのみ。瑠璃は水を蹴ってロアルドロスへと距離を詰めていく。当然それを阻止するようにルドロス達が接近してくるが、「まどろっこしい！」と火竜剣【火燐】を回転させて左右から寄ってくるルドロス達を牽制、近づきすぎたものは斬られてしまう。

「ギョオオオオン!!」

またしても目の前でルドロスが斬られたことに怒り、ロアルドロスが突っ込んでくる。しかしそれを防ぐように、桐音がヘビィデバイスを振るいながら剣モードへと切り替える。

「鬱陶しい戦いはこれまでにさせてもらおうじゃねえか。茉莉、あたいが頭をやる!

あんたは周り、そして補佐を頼むよ」

「お願いします」

軽く後ろに下がったところをすかさず桐音が入り込み、剣モードになっているヘビィ  
デイバイドで頭に斬りかかる。しかしやはりというべきかそれは斬るといふよりも殴  
ると言った方が正しいだろう。

加えて剣モードになっているおかげで滅気ビンの効果が発揮し、先端の球体に力が  
宿って更なる鈍器としての力を見せつけてくれる。

リーダーの危機を見過ごせずルドロス達が桐音へと向かっていくが、それを防ぐよう  
に茉莉がシャドウジャベリン改を振るって止めていく。リーダーを救出に向かえない  
ルドロス達は苦々しい声を漏らす、こちらとしても死活問題だ。

手を抜いている暇などない。

「ギョオンッー！」

目の前にいる桐音へと噛みつき、頭突きをしていくが桐音はそれをヘビィデイバイド  
で受け流し、反撃として一撃一撃を当てていく。当然頭を狙って一撃当てていつている  
ため、少しずつロアルドロスの動きがぎこちなくなっていく。

どうやら眩暈状態に近づいてきているようだ。

それを見逃さない桐音、そして瑠璃ではない。

「せやあああああつー！」

火竜剣【火燐】を回転させたままロアルドロスへと叩きつけるようにし、両の刃が連

続いてロアルドロスの体を傷つけていく。頭を揺さぶられるだけでなく、何度も何度も斬りつけられたことでロアルドロスが苦悶の声を上げ、体をくねらせ始めた。

一度距離を取るようにならぬと下がり、そのまま立ち泳ぎをしながら瑠璃と桐音の出口を窺っている。周りの生き残っている数等のルドロスもまた同様だ。斬られていたルドロス達の死体がそこらに浮かんでいるか、沈んでいる。

流れは再び瑠璃達へと傾いている。

茉莉はシャドウジャベリン改を少し弄りながらルドロス達の位置を確認し、もう一度ロアルドロスへと視線を向ける。

上下左右に気を配らねばならない水中は相手の位置を確認しなければ不意を突かれる可能性がある。瑠璃の補佐役を務めている茉莉は癖として相手の位置関係を確認する事が多い。

というよりプライベートの時からよく観察している事が多いため、もはやこれは日常的だった。

(……?) 妙ですね。一匹足りない)

浮いている死体、生き残っている個体を数えてみたが、どういいうわけか一匹足りなかった。死体の数が減っているのだ。

死体が姿を消す何てことはあり得ないが、実際に姿が消えている。



(これは一体——っ!?)

ふと、川底の方へと視線を落としたとき、何かが僅かに動いたような気がした。

見間違いなんかじゃない。砂がゆらりと動いたのだ。

それに従って生えているはずの水草が動いたようにも見えた。

そんな馬鹿な話があるはずがない、普通ならば。しかし現在入っている情報を知っているならば、あれが見間違いで片付けられるようなものではないという事はすぐに思い至る。

「みなさん、下に注意を！ 奴がいます！」

茉莉が叫び、その言葉の意味に気づいた二人は下にも気を配り——そして突然強い水流が発生する。

いや、これは自然な水流ではない。川底に向かって強い流れが発生したそれが、自然なものであるはずがない。それに抗うように足から気を放出させてその水流から逃れるが、水流はゆつくりと横にずれていき、ルドロスの死体や小さな流木、魚達を巻き込んで吸い込んでいく。

ロアルドロスも突然の水流に反応し、唸り声を上げながら吸い込まれないように後ろへと立ち泳ぎで逃げていく。

あれに逃げられず、巻き込まれてしまったものかというと、水流の先にいるものへと

向かっていく。

そこにいたのは大きな口を持つ魚のようなもの。開かれた口には鋭い牙が生え揃い、濃い茶色い肌をした体、額の先には提灯のようなものがぶら下がっている。

あれが奴の異名の元となったもの。

灯魚竜チャナガブル。奴こそがこの水没林で行われたクエストに乱入してきた存在だ。

水流は奴が大きく息を吸いこんでいった事で発生したものだ。ただの息吸い込みであれほどの水流を発生させてしまう。そしてそれに巻き込まれた者の末路は——

「グオンツ！」

砂の下から勢いよくチャナガブルが飛び出し、吸い込んだできた物を纏めて口の中へと呑み込んでいく。

そう、文字通り一口で呑み込んだ。丸呑みである。

ルドロスの死体といっても結構な大きさをしている。それすらも丸呑みだ。軽く咀嚼をしてごくと呑み込むと、その小さな瞳がゆっくりと瑠璃達を見回していく。

「ギュルルル……」

「グルルルル……」

チャナガブルが何かを考えるかのような声を漏らすと、ロアルドロスがそんなチャナ

ガブルを睨みながら唸る。奴からすれば死んでしまった仲間を喰われてしまったという事になる。思うところはあろうだ。

そして瑠璃達からすればここで来たか、としか思えない。ついでにいうとタイミング……というより地形的に悪い。

ここは狭い。

崖と森に挟まれた地形をしているため、横幅が狭い。

いや、これでも人が泳ぐだけならば広さはある。だがそこにロアルドロスとチャナガブルまで存在していると狭く感じるのだ。

「どうする?」

「決まっているでしょう。ここは一時撤退するしかありませんよ」

「ちい、仕方ないね。が、やむなし……選択肢はそれしかないか……!」

こんな狭い水中で二頭同時相手など危険すぎる。ならば体勢を立て直すという意味でも撤退しか道はない。幸いチャナガブルの吸い込みから逃れるため、エリア4側へと逃げていた事もあり、すぐに撤退する事は可能だ。

後はそれをあの二頭が見逃してくれるかどうかだ。

「グバアアアッ!」

チャナガブルが威嚇するように大きく口を開けながら体を震わせる。

「ギユオオオオツ！」

舐められないようにとロアルドロスもまた威嚇するように吼えた。お互いの意識がそれぞれの敵へと向けられた今が好機。三人は静かに後ろへと立ち泳ぎをしていき、機を見て一気にドルフィンでエリア4へと移動していく。

残された二頭は威嚇を繰り返した後、ロアルドロスがチャナガブルへと一気に突進していき、チャナガブルがまた大きく口を開けて迎え撃った。

強い水流と衝撃が発生したが、すでにエリアにいない三人は強い気と気がぶつかり合っているとしか判別できないのだった。

## 6話

エリア4へと撤退していった三人はすぐに陸上へと上がり、バイザーとマスクを取って軽く頭を振って水気を取る。加えて炎を発生させて下がった体温を一時的にでも戻していく事にする。

さて、どうするか。

エリア5からは時折あの二頭の気配がぶつかり合っているような気がするが、詳しい事まではわからない。だがあの二頭がお互い潰し合ってくれるならばそれはそれでいい。

それによつて負傷してくれるならば僥倖だ。

「やれやれ、どうすんのよ?」

火竜剣【火燐】に砥石を使いながら瑠璃が言う。同じように茉莉と桐音も己の武器に砥石を使って切れ味を戻していきながら、先ほどの戦いについて思い返していった。

水中での戦いはやはり陸上と違って勝手が違う。ルドロスといえども水中で数で攻められてはやり辛いことこの上ない。

陸上では楽に倒せる相手でも、水中ではそうではなくなる。

「どちらも水中で戦う事を主としているけど、それは一頭を相手にする場合。二頭揃えばめんどろです。エリアの地形云々の話だけではないです、文字通りめんどろです。……やはりどっちかを待って打って出るしかないでしょう」

「さつさと殺るならロアルから相手にした方がいいと思うけど、チャナもチャナでめんどうな相手だ。……そこで提案したいんだけどさ」

「聞きましょう」

「ロアルとチャナ、どっちかと戦うんじゃないやなく、戦力を分散させるってのはどうだい？」

「……二人と一人でそれぞれに当たるって事？」

「そうさ」

要は瑠璃と茉莉、そして桐音にわかれてあの二頭と戦っていくという事になる。陸上ならまだしも水中で一人で戦うというのは危険ではないだろうか。水中装備があるとはいえ、勝手が違う世界での一人の戦いは厳しいのではないかと言うのが二人の見解だ。

味方がいた方がまだ戦えるはずだ。効率で言えばもしかすると分散させた方がいいのかもしれないが、安全に行くならば一緒にいた方がいいだろう。

「あたしは反対。纏まって動いた方がもしもの時に備えられるわ」

「普通ならばそれでもいいでしょうが、今回は水中です。分散しない方がよろしいかと思えます」

「……やっぱりそうなるか。残念だねえ」

軽く頭を掻きながらさつきまで泳いでいた大河を見やる。さつきまでと違って大河は静かなものであり、隣のエリアで戦っていたのが嘘みたいだ。

そこにあるのは穏やかな自然。しかし戦士が入り込めば、ひとたび戦場へと姿を変える。

人族にとつては苦行な場となる戦場は、今はただ静寂な空間となっている。

切れ味が戻ったヘビイデイバイドを確認し、それを背負うとエリア5の方へと気を向ける。相変わらずあちらの方は盛り上がっているようだ。あの戦場に入れないのが少し残念でならない。

「……戦闘狂って、本当にめんどうね」

「どうして戦いが好きな人って多いんでしょうね」

「この世が狩猟世界だからじゃないの？ 狩るか狩られるか、弱肉強食の戦いの世界。……そりやその道にのめり込んだら戦いが好きになるだろうし、ひどくなれば戦闘狂になつてしまうわよ」

「……本当に困ったものですね」

とはいえ二人の母親もまた若干戦いを好んでいる節があるように思える。それが今も彼女を現役たらしめる原動力になっているのかもしれない。それにあの兄も戦いは好きな方だし、あの特別れた金髪の青年もまた己の性の通り戦いを好んでいる。

戦いそのものを好むのか、強敵と戦えることを喜びとするのか、と少しの差異はあるが、それでも彼らが戦闘狂という事には変わりはないだろう。

だからといって責めるつもりもない。何が好きなかは人それぞれなのだから。

武器の切れ味も戻したところでこれからどうするかという相談を始めるとしよう。

「さて、今はあの二頭が分散してくれるまで体を休めましょう。こんがり肉でも食べますか?」

「そうね。一つ腹ごしらえが必要だわ。じゃ、あたしは山菜でも用意してくるから、そっちはよろしく」

「ん。草薙さんはどうします?」

「じゃ、あたいは魚でも捕ってくるか」

またバイザーとマスクをつけて軽く体をほぐすように動かすと、躊躇いなく大河の中へと飛び込んでいく。その手に武器はないが、薄く気を練り上げていたところを見るとそれで武器を顕現させるつもりだろう。

それを見送ると瑠璃も山菜を求めて森の中へと入っていく。茉莉も肉焼きセットを



用意し、生肉を取り出してセット。塩コショウに香辛料を用意すると軽く指先から火を出して準備完了。

いい感じに焼けてきたのを感じながらも、茉莉は気をエリア5へと向け続けている。現在は休息中ではあるが、それでも隣のエリアに存在している二頭が動いたのか動いていないのかを感じ取らなければならない。

そうしなければ奇襲を受ける。それを受ければまた戦線が崩壊。再び体勢を立て直す為に撤退しなければならない。それは避けなければ。

「……まずは一つ、と」

タイミングよく肉を上げるとそこにはジューシーに焼けたこんがり肉が存在している。肉汁が滴り落ち、アクセントとして振りかけた塩コショウに香辛料が程よく存在している。

それを用意していた皿に乗せ、もう一つ生肉をセットして焼いていく。

そうして食事の準備を進めていった。

○

目の前にいるチャナガブルへと突撃していくロアルドロス。チャナガブルの上を取

り、その背中へと押し掛かるかのように頭突きをしていく。ロアルドロスの重量がそのまま力となって襲い掛かり、チャナガブルが小さくうめき声を漏らす、するりと滑るように川底を泳ぎ、尻尾を振るってロアルドロスに反撃。

尻尾には麻痺毒が含まれており、背後から襲ってきた敵にも対応している。ロアルドロスはそれを避け、振り返ろうとしているチャナガブルへと何かを吐き出した。

それは白い粘液みたいな塊。振り向いてきたチャナガブルの顔面を捉え、粘液はその顔へと張り付いてしまう。

「グバアアッ!」

付着したそのねばねばしたものにチャナガブルがかぶりを振って振り払おうとするも、それはしつかりと顔に張り付いて離れる事がない。それに戸惑うチャナガブルへと叩き落とすように尻尾を振るうが、それを察知したチャナガブルが飛び退くように背後へと下がり、ロアルドロスから距離を取る。

その際に額から伸びる提灯が微かに明滅すると、強い光が辺りを多い尽くしてしまう。

「……ッ!」

発生した光に息を呑む間もなく、目を焼くそれに瞳を閉じてしまう。ハンターが投げる閃光玉と同じ力を持つその光こそ灯魚竜と呼ばれる所以。水草のようなひげを砂の

下から出して揺らし、獲物を誘うだけでなく、この提灯を出して獲物を待つ場合もある。獲物が近づいてきた時、この提灯から強い光を発生させて獲物を混乱させ、一気に丸呑みしてしまう。また捕食だけでなく身を守るためにも使われ、敵の視界を潰してその隙に逃げるか反撃に転じるのだ。

そう、今のように。

「ギュルオ……!?!」

何とか薄目を開けてチャナガブルの姿を探したロアルドロスの視界には、既に奴の姿はない。逃げたのか、とロアルドロスが唸りながら辺りを見回してみるのが、チャナガブルは逃げを選択したのではない。

僅かにロアルドロスの近くの砂が動き、辺りを警戒しているロアルドロスの側面から喰らいつく。何とか反応したらしいロアルドロスだが、左肩を噛まれてしまい、少しバランスを崩してしまう。

しかしそれでも喰らいついてくるチャナガブルへとあの粘液を吐きだし、その顔へとまた附着させていった。目に張り付くその粘液に視界を潰され、チャナガブルはまたかぶりを振ってしまい、それによって肩に喰らいついていた口を離してしまった。

それを見計らって体を捻り、しなりを利かせた尻尾でチャナガブルの側面から叩きつけ、更に返すようにして顎をかちあげるように叩きつける。その連続攻撃にたまらず

チャナガブルが悲鳴を漏らし、そこを逃さないようにロアルドロスが追撃を仕掛けていく。

だがチャナガブルとてただやられてばかりではなかった。

「グッー」

身を守るかのように体を丸め始めたのだ。いや、ただ体を丸めるのではない、そのまま前転するかのような勢いだ。そしてロアルドロスの方へと背中が向いた瞬間、その背中から鋭い針が飛び出してきたのだ。

それは追撃を仕掛けようとしたロアルドロスの体へと突き刺さっていき、その針の多さと鋭さによって逆にロアルドロスが悲鳴を上げてチャナガブルから離れてしまった。

加えて前転した事で背中にくよくよ尻尾がロアルドロスの頭を捉え、叩き落とされる。

その衝撃はロアルドロスよりも劣っているが、針によるダメージがあつたロアルドロスは防御もなく攻撃を受けてしまった。

しかしチャナガブルも顔に粘液が付着したままのため前がよく見えていない。そのため追撃をしかけることなく、すぐに砂の中へと潜り込んでしまう。

ロアルドロスが顔を上げた時には既にチャナガブルの姿はなく、それだけでなく奴の気配もなくなっていた。

「グルルルル……」

小さく唸りながら辺りを一度見まわしてみるも、どうあってもチャナガブルの気配は捉えられなかった。離れた所で様子を窺っていたルドロス達が合流し、周りに浮き、沈んでいる死体達を見回すと、ロアルド罗斯は生き残ったルドロス達を率いて川の奥へと消えていく。

後には静けさが戻りつつある大河が残るが、そこには死体と血が浮かぶ光景へと変貌していた。

○

茉莉が焼いた肉、瑠璃が採ってきたキノコや果物、野草をはじめとする山菜、桐音が捕まえてきた川魚と簡単な食事の用意が出来ると、手を合わせて早速いただいたいく。

小腹がすいた今、これらだけでも十分なエネルギー源となってくれる。

捕ってきた川魚は塩焼きにされ、ほくほくとした身に塩が効いているのがいい。山菜に関しても瑠璃がきつちり食べられる物を見分けて採ってきたため安全だ。

それを食べ終え、ドリンクを飲み終えて一息ついた時、桐音のセンサーが一つの気配を捉える。しかしそれはかなり小さな物。気を配っていたとしても捉えきれないもの

は捉えきれない、という程にまで抑えられた気配。

それは川底を静かに移動しており、三人がいるという事は気づいているのかいないのかはわからない。だがそれはゆつたりと川底を進んでいき、やがて停止した。

「……どうやら来たようだぜ？　これほどまで抑えられた気配、来たのはチャナのようなだな」

「チャナガブル、か。ちよつとめんどうだけど、来たからにはやらないといけないか」

食事を片付けるとナルガヘルムに付けているバイザーをおろし、懐からマスクを取り出して装着する。鞆に収めている火竜剣〔火燐〕を確認し、桐音と共に水中へと静かに身を沈ませる。

それに続くように茉莉が大河に入り、三人はゆつくりと川底へと向かっていく。

先ほどと変わらず、大河は穏やかな雰囲気を保っている。だがここにはチャナガブルが潜んでいる。

一見すればこのどこかにチャナガブルが潜んでいるなんてわからないだろう。

実際視覚的にはどこに潜んでいるのか全く分からない。恐らくひげを砂の中から出しているのだろうが、どれがそのひげなのかわからない。

ならば気配を探るしかない。

視線を巡らせ、気配を探ってみたところ数十メートル離れた所にいる事が判明した。

こちらは位置を確認したが、あちらからはまだ気づいていないらしい。

「どうする?」

「……気づいていないなら、一つ提案があります」

「何? なんか思いついた?」

「ええ。一度陸に上がりましょう」

「ん? なんだい、上がるのかい?」

背中にあるヘビイデイバイドに手をかけていた桐音が少し残念そうな声を漏らす。出鼻をくじかれたことに不満があるようだが、一応茉莉の提案を聞く気はあるようで、大人しく上へと上がっていった。

陸に上がった瑠璃と桐音は先にも上がろうと声を掛けた茉莉に振り返る。先にも上がっていったはずの彼女は何故か浅い場所を泳ぎ、何かを探しているかのようだった。やがて彼女は何かを見つけたようで、手を伸ばしてそれを捕まえる。

そのまま陸へと上がると、バイザーとマスクを取ってポーチから長い棒を取り出していく。その先には糸と針があり、先ほど捕まえたものをその針に繋ぐ。

そう、その棒は釣竿だ。餌にするものを針に取り付けるだけで魚や魚竜種を釣り上げる事を可能としている。

その様子を見守っていた瑠璃はなるほど小さく頷いた。

「釣りカエル、か。確か図鑑によればチャナはカエルが好物だったわね」

「ああ、なるほど。それで釣り上げてやろうってことかい。そしてそのまま陸上で仕留めていこうって魂胆ってわけだ」

「正解です。ただ水中で戦うよりはマシかと思ひましてね。あちらもまだ私達に気づいていなかったようなので、この機を生かそうかと」

薄く微笑しながらカエルを大河に放り込み、その場へと座り込んだ。そんな茉莉を見ていた瑠璃は同じくカエルを探し始める。それに桐音も続き、それぞれ一匹ずつカエルを捕まえると、同じように釣竿を用意して針にカエルを取り付けると大河の中へと放り込む。

後はこのカエルにチャナガブルが喰らいつくのを待つのみだ。

その時までではこうして文字通り座して待つのみ。

「……………」

誰も口を開く事はない。吹き抜ける風に身を任せているその様子は、まるで自然と一体になったかのようだ。

それが釣り。

獲物がかかるまでただ自然と一体になって待ち続ける。心を揺らさず、明鏡止水の心で静かにその時を待ち続ける。



「……………んー」

不意に桐音があぐらを少し解き、とんとんと膝を右手の指で叩き始めてしまう。どうやら集中力が途切れ始めたようだ。何となく察してはいたが、やはりというべきかじつと待つという事は性に合わないらしい。

ポーチの中からドリリンクを用意すると、軽く口を含んで一息つく。

少しだけ大河から離れ、ぬかるんでいない場所まで下がるとごろんと横になってしまった。その様子をちらりと肩越しに確認した二人はすぐに視線を大河へと戻し、小さく揺れる水面を眺めるだけだ。

桐音と同じく傍らにドリリンクを用意し、それから十数分の間はこうして過ごす事になった。

「……………む？」

そうして待ち続けた甲斐があり、不意に瑠璃の釣竿が揺れ始めた。それに気づいた茉莉が声を上げ、瑠璃もまた揺れる釣竿を見て反応して立ち上がる。

「ふっ、んんっ！」

リールを巻き、時折引つ張りながら少しづつ獲物を引き寄せていくと、水面に大きな影が浮かび始めた。それが見え始めたからと言って焦る事はない。焦って功を逃してしまえば奴は水中に留まったままになってしまう。

だから瑠璃は焦ることなく着実に奴を釣り上げていった。

やがて勝負を決するタイミングを見つけた瑠璃はぐいっと釣竿を引き上げ、その力に従ってついに奴の姿が水上へと上げられる

「グボアアアアアアアアアアッ!」

悲鳴を上げながら釣り針にひっかけられた口を広げたまま、チャナガブルは陸へと強制的にダイブしてしまう事になる。離れた所で寝転がっていた桐音もいつの間にか起き上って戦闘態勢に入っており、じたばたともがき続けているチャナガブルへと接近していた。

「はっ!」

抜き放ったヘビイデイバイドを振り下ろし、横薙ぎに払いつつ剣モードへと切り替えて頭を殴り飛ばしてやる。そうして攻撃していく桐音に合流するように、瑠璃と茉莉も各々武器を抜いてチャナガブルへと向かっていく。

「ふんっ!」

側面を通り抜けながら抜いた火竜剣【火燐】で腹を薙ぎ払っていき、切り裂かれた部分に追い打ちをかけるようにシャドウジャベリン改を突き出していく。傷ついた部分に毒を含んだ刃が突き入れられた痛みは相当の物だろう。

チャナガブルの声に悲痛な響きを感じられる。

だが攻撃の手はやめない。見ればその体は今傷ついた部分だけでなく、打撲と思われる傷があるし、顔にも何かが付着していた跡が見られる。

恐らくそれはロアルドロスとの戦闘痕だろう。これによつて体力が減っているならば僥倖。その好機を逃さない訳にもいかない。

「グバアアアアアッ！」

しかしチャナガブルとてただ大人しくやられ続けるわけでもない。ようやく体勢を立て直したチャナガブルはまず背中にある針を一斉に逆立てると、側面にいる茉莉達を押し潰すかのように横に転がり始めた。

動きを察知した茉莉は盾を構えながら後ろへと下がるも、若干針が盾を掠めていくのを感じた。察知するのが遅れていれば針に貫かれながら押し潰されていただろう。その未来はひやりとするが、予備動作さえ見えていればなんてことはない。

「しっ、はあっ！」

転がり終えたところすかさず両手で構えて高速の突きをお見舞いしていき、次々と毒を注入。背後から向こう側へと回り込んだ瑠璃も火竜剣【火燐】を振るつてダメージを与え、チャナガブルの正面を位置取った桐音は、やはり剣モードにしたヘビィデバイスドでその頭に刺激を与えていく。

完全に嵌った。

ガノトトスと違い、チャナガブルはほぼ魚に近い状態のために陸上ではこうして攻撃しやすい相手になる。一応四足のような小さなひれを持っているが、あくまでこれはおまけのようなもの。

陸上で歩く事は出来るが、奴の本領はやはり水中。陸上はほとんどの場合つられた魚のようにいいようにされ続けるだけだ。

「グボツ、グボツ！」

顔を振りながら抵抗し、目の前にいる桐音へとその大きな口を開けて噛みついていくが、冷静に見切つて躲し、カウンターを当てるように振り回したヘビイデイバイドを叩き込む。

それは一方的な攻撃。

奴の領域から引きはがし、自分達の領域へと強制的に落とすだけで後は彼女達の実力の分だけの戦いとなる。いや、それはもはや戦いと呼べるものではないだろう。一方通行の戦いはもはや戦いと呼ばない。

だから桐音はほとんど無表情に近いものでヘビイデイバイドを機械的に振るっていた。

それでも小さな変化を見逃さないだけの意識はあつた。目の前で揺れている提灯が微かに点滅し始めたのに気付くと、一旦距離を取りながら目を閉じる。

「閃光するぞー！」

同時に一言叫び、二人に注意を促してやる。

二人もまた目を閉じた瞬間、辺りを包み込む強い閃光が発生する。ハンターが使用する閃光玉と同じ効果を持つ強い光は当然ハンターにも飛竜達にも通用する。これを使うチャナガブルにとっては意味のないものであるため、閃光玉は通用しない。

奴の足を止める方法はスタンか罠のみだ。

「グル、グッグ……」

三人が目を閉じたので攻撃の手がとまったのを感じてチャナガブルは転進し、大河に向かつて走り出す。このまま陸上に留まれば身の危険が及び続ける事は奴にもわかっている。

そのため自分の領土である大河へと戻ろうという選択は間違っていない。

しかし相手が悪かった。

「……………つ、そこですなー！」

目を閉じながらも気配を辿ればどこにいるかぐらいはわかる程に成長した二人だ。茉莉が左手を伸ばして気を込めると、逃げるチャナガブルの前方を塞ぐように炎の壁が発生した。

「グボツ……!?!」

突如発生した炎に思わずチャナガブルは足を止めてしまう。それを狙って瑠璃は火竜剣【火燐】を薙ぐように振るい、刃から赤い気刃がチャナガブルへと向かっていく。

目を閉じているはずなのに狙いは正確だ。気刃は足を止めてしまっているチャナガブルの提灯へと向かっていき、額と提灯を繋ぐものを切断してしまう。

灯魚竜という代名詞である提灯を失いながらも、チャナガブルは何とか炎の壁を抜けて大河へと飛び込んでいく。

高い水音を立てて大河の中へと消えていくのを感じながら、閃光の影響で目を閉じていても少し闇の中でちかちかするのが収まっていき、ゆつくりと瞳を開けて大河を見つめる。

もう一度バイザーを下ろし、マスクをつけて準備完了すると逃げていったチャナガブルを追うように大河の中へと飛び込む。

ここで逃がすわけにはいかない。

陸上でのダメージは通用しているし、ヘビイデイバイドで十分に頭を揺らしてきたのだ。もう少しダメージを与えればスタン状態へと落とす事が出来るだろう。

このまま見逃し、泳がせ続けるのは愚策。奴の領域である水中だろうとも恐れず飛び込んでいく。

「グボボ……」

自分の後を追って飛び込んできた瑠璃達の水音に気づき、チャナガブルが振り返る。三人を順次に確認した奴は小さく唸り、体を震わせながらぱくぱくと口を開閉させる。「グビィィィィッ！」

最後に大きく口を開けて威嚇すると同時に体を大きく膨らませ始めた。それに従って背中が逆立ち、それが引つ込まなくなってしまう。

これがチャナガブルが怒り状態へと移行した姿だ。少し平べったい体は背中が膨らんだことで楕円形に近くなり、針が常時出ている為に背中から攻めづらくなってくる。それだけではなく、背中が膨らむことで強度が増している事も忘れてはならない。こういう場合、陸上ならば出来ない事が水中では可能になる。

それは下から攻める事だ。

水中は川底へと行かなければ上下左右と動き回る事が出来る。相手が川底へと行かなければ相手の下を取る事が可能なのだ。陸上ならば相手を斬る際に背中当たって弾かれそうになる可能性があるが、水中は上から、背後から攻めなければそれがなくなる。

さあ、いつ斬りこもうかと三人が様子を窺っていた時、チャナガブルは一気に川底へと沈んでいった。そのまま停滞する事なく、体を震わせて砂を掻き分けながらその中へと入っていく、砂と一体化してしまった。

そのまま逃げてしまうのかと思つたが気配は消えない。ゆつくりと川底を移動し始めたではないか。このまま固まっているといい標的になつてしまふだろう。自然と三人は分散し、川底を見やりながら警戒する。

「グバアアアアアアアアッ!!」

標的は桐音だつた。突如川底から勢いよく飛び出し、その大きな口で桐音を丸呑みにしようと試みてきた。それは普段なら十分奇襲になつていただろう。そうやって魚の群れを一気に丸呑みする攻撃なのだろうが、残念ながら位置や動きが気配で読める桐音達には通用しなかつた。

「ふっー」

ぼんつ、と空気が弾ける音を響かせながら後方へとバツク転してその飛び出しから回避しつつ、更に回転した足から更に気の刃を放ちながらチャナガブルへと攻撃する事も忘れない。

気刃は上へと上がっていくチャナガブルの体と尻尾に命中し、それによつて傷つきながらもチャナガブルは水上へと一旦上がり、激しい水音を立てながら水中へと帰つてくる。

背中から帰つてきたチャナガブルはすぐに体を回転させて体勢を建て直し、我先にと向かつてきた瑠璃を見やつて噛みつきにかかつた。



「ちっ……」

陸上ではこの状況でも慌てずに翼と身体能力を使ってクイツクターンが出来るのだが、水中ではそれも出来なかった。広げている火竜剣【火燐】を一度ロングソードの形態へと閉じ、刃を口内へと突き入れるようにしながら一気に突き出す。

その際に気を送り込み、内包されている炎の力を膨らませる事で完全に口を閉じて火竜剣【火燐】を噛み千切る事がないようにした。実際突き出された火竜剣【火燐】を噛み千切ろうとしたチャナガブルはその熱さに思わず口を閉じずに開いてしまう。

「はっー!」

その隙を逃さずに火竜剣【火燐】を振り上げて顔を斬り、更に踏み込みながらも側面を位置取りつつ薙ぐ。そうやって気を引いている間に茉莉がチャナガブルの下へと潜り込み、がら空きになっている腹へと力強く抉り込むようにシャドウジャベリン改を突き出す。

何度かそれを繰り返すと、チャナガブルの腹の一部が変色し始める。既に送り込んでいた毒の影響もあり、ついにチャナガブルを毒状態へと貶める事が出来た。

「グボアッ!?!」

体を巡る毒の痛みにチャナガブルがたまらず呻き声を漏らしてしまった。そうして生まれた隙について桐音が一気に距離を詰めながら剣モードにしているヘビィデイバ

イドを構え、溜めこんだ力を解放するように一気に球体を叩き込む。

ずんつ、と強くチャナガブルの顔が沈み、口元はだらしなく開かれたままでその体がびくびくと痙攣し始めた。どうやらついにスタン状態へと落としてしまったようだ。

「一気に決めさせてもらおう！」

強く振り下ろした事で勢いを殺さずに前転してしまった桐音は、そのままチャナガブルの顎下まで沈んでいき、強く水を蹴って距離を詰めながらヘビイデイバイドを突き出す。指は引き金へと当てられており、それを引き絞ればピンから粒子が一気に放出されて先端へと収束していく。

その度にヘビイデイバイドは揺れ、しかし桐音の力によってしつかりと抑えられることで暴走する事はない。接触している顎に粒子の力がぶつけられる事で連続してダメージが与えられ、同時に凄まじい力が高められていく。

「破ッ!!」

臨界点を突破した瞬間、凄まじい爆発音を響かせてそれは弾け跳ぶ。黄緑色の粒子が爆発し、それはチャナガブルの顎に衝撃を与えて肉を抉り飛ばしてしまった。少し濁った水に細かな肉と赤い血が混ざりあい、スタン状態に陥っていたチャナガブルもたまらず激しい悲鳴を漏らしながらもがき始めた。

一方桐音は強い反動のせいで少しノックバックしながらも、ヘビイデイバイドが持つ

ていられないように両手で支えながら体勢を立て直す。スラツシユアツクスの最大攻撃であるあのギミックを使用すると、強い反動と共に強制的に剣モードから斧モードへと切り替わる。

その反動はかなり強く、水中では抑えこまなければそのまま手から離れて吹き飛んでしまいかねない程だ。そしてその反動があるからこそ武器が痛み、連発する事は出来ない。

もちろん出来る事は出来るが、それは武器に無理させている事に同義だ。スラツシユアツクスをメインとしているならば、長く使っていくためにも休ませてやらなければならない。

しかし桐音にとってヘビィディバイドはサブウエポンでしかない。好機ならばそれを逃さずに畳みかけていく。

「ふんっ、はあっ！」

抑えこんだヘビィディバイドをぎゅつと握りしめ、また水を蹴つてもがいているチャナガブルへと距離を詰めながら今も出血を続けている顎を薙ぎ払い、更に突き出して追い打ちをかけていく。

そうして攻撃を仕掛けながらガシャン、と剣モードへと切り替え、そう時間も経たない内からまた引き金を引いて粒子を先端へと集めていった。

「……ちっ、足りないな」

が、途中で何かに気づき、引き金から指を離して粒子の収束を止める。視線の先にはピンが内蔵されている部分の近くがある。そこにはちよつとしたギミックがあり、柄から若干突き出ている部分が存在している。それは時間の経過と共に動く仕組みになっており、それは剣モードの限界時間を示している。

剣モードはスラッシュアックスを巡っている粒子の残量によって決まり、一定の量を下回れば変形不可能になっているのだ。

そして今、ヘビイデイバイドの剣モードの限界時間はもうギリギリの状態だ。このまま解放まで持っていきたいところだが、今までの経験を思い返して時間を逆算すると、解放する前に強制的に切り替わりそうだという事がわかった。

途中で引き金を離し、斧モードへと切り替えながら顎を穿つように斬り上げつつ背後に下がる。すると離れていく桐音を追うかのように数度噛みつきにかかり、続けて前転して押し潰しながら針で貫こうとする。

しかしやはりそれを見切り、強く水を蹴りながら気の後押しもあつてその範囲外へと逃げていく。そうやって桐音へと意識を向けていた事もあり、背後から追いかけていく瑠璃と茉莉には気づいていなかった。

十分に力を溜め、それぞれの武器へと己の気を纏わせた二人は足から気を放出させて

一氣に水中を弾丸のように突き抜けていく。硬くなっている背中をもともしないかのように二人は一氣に得物の力を解放させた。

「はああっ！」

背中を一氣に薙ぐ強い剣の衝撃。剣による鋭い一撃、その中から噴き出す強い灼熱の炎。硬くなっている背中を針もろとも切り裂いていき、その肉を内外問わずに焼き尽くす。

「ふっ！」

そうして刻まれた傷を更に貫く茉莉の一撃。

シヤドウジャベリン改の刃だけでなく、刃の先に顕現させた気の刃をも含めて一氣にチャナガブルの体内へと抉り込んでやる。水中であろうとも、気の放出によって推進力を得た事で、茉莉の進撃は陸上で、いや、翼を使つての滑空速度に近い程までの速さとなった。

その上での貫く事のみ集中されたその一撃は、一氣に背中から腹近くまで抉り込まれ、内臓をも貫通してしまう程の威力を發揮した。

「グガ、ガガガ……ッ!？」

惜しむべきはそれが心臓ではなかった事だろうか。心臓を貫く一撃ならばこれで終わらせていただろうが、それが非常に残念だ。しかしそれでもこの二撃がチャナガブル

にとつて厳しい攻撃だったことは間違いない。

「グボツ、グゴゴ……ゴオオツ！」

体だけでなく尻尾も震わせながら追撃を仕掛けてくる茉莉と瑠璃を振り払い、何とか陸上へと逃げていった。まさかの逃げた先が陸上という事に驚きはしたが、ここで逃がすわけにもいかない。

すぐに陸へと上がったが、チャナガブルはよたよたとした動きながらも素早く走り去り、エリア3へと逃げていったのだ。あの短いひれのような足でよくあそこまで速く動けるものだ、と思わないでもないが、まんまと逃がしてしまった事に瑠璃と桐音がマスキの下で軽く舌打ちする。

「エリア3に逃げたという事は……恐らくそこから北へと進んでエリア8に向かっているのではないでしょうかね」

「エリア8……なるほど、ここは奴らにとつての休息地。体力回復を狙っているわけね」  
「じゃあ先回りした方がいいんじゃないか？ 確かエリア1からそのエリア8へと行けるんだらう？ ここからエリア7に上がり、すぐに1へ、それから8って進むって具合にや」

「ですね。森を走り抜ける事になりますが、問題ないでしょう？」

「当然」

バイザーを上げ、マスクを一旦取りながら三人は一気に走り出す。その際に茉莉が瑠璃が斬り落としたチャナガブルの提灯を手に取り、ポーチの中へと入れるという抜け目なさが光る。

エリア7へと繋がる坂を駆けあげれば、その先にはちよつとした林の広場が存在している。ブルファンゴが数匹鼻を鳴らして歩き回っていたようだが、彼らが三人に気づいて地面を擦り始める頃には既に左折してエリア1へと駆け下りている所だった。

それほどまでに疾く駆け抜けるのは、チャナガブルが眠り始める前にエリア8に到達しようという意志の表れである。

大型のモンスターは休息、それも眠ることによつて傷を癒す力を高める存在だ。当然体力も少しづつ回復させていき、数分もすればまた十分に暴れられるだけの体力を取り戻す事もさらではない。

それが人族とモンスターとの大きな差だ。

とはいえそんな彼らの高い生命力を引き継いでいるのが一部の魔族なのだが、これは今は置いておくとしよう。

坂を下りてエリア1へと戻ってくると、右手にあるちよつとした段差の方へと進んでいく。こちらにもまた一つの森となっているが、その中に小道になっている部分があるのだ。その先に洞窟の入り口があり、それがエリア8となっている。

小道を見つけると段差に手を付けて一気に跳躍して飛び乗り、体勢を崩すことなくまた駆け抜けていく。するとすぐに小さな洞窟の入り口が見えてきた。

その中へと飛び込むと、右手が大きな崖になっている洞窟内部へとやってくるようになる。

天井や壁からは鍾乳洞が生え、眼下には青く透き通った地底湖が広がっている。崖の下がすぐに地底湖になっているわけではなく、小さな凹凸がある硬い地面の陸部分が洞窟のおよそ三分の一の比率になっているようだ。

残りが全て地底湖であり、ここから対角線状の向こうにはエリア6へと繋がっている。そしてチャナガブルがやってくるであろう道はここから右手の深部の水の道だろう。ここはチャナガブルらが利用する道であり、人の身では例え水中装備をつけていたとしてもなかなか抜けられない道となっている。

何はともあれチャナガブルはまだ来ていないようだ。

しかし、ここには先客がいたのだ。

「……ロアル、か」

地底湖前の陸地の片隅にロアルドロスが丸くなって眠っている。周りには数匹のルドロスが寄り添っており、同じように眠っているのだ。あの後一体どこにいつてしまったのかと思ったら、こんな所で眠っていたとは。



「もう少ししたらチャナが合流するだろうな。その前に仕留める……若干厳しいか」  
「頭か心臓を狙ってやれば可能でしょうが……はてさて」

「可能性があるならやるしかないんじゃない？ 今なら奇襲を仕掛けられるんだし」

そう呟きながら瑠璃が畳まれている背中の翼を静かに広げていく。自分達ならば他のハンター達と違い完全に頭上を取つての奇襲が可能だ。くいつと道の先を示し、そこから飛び降りつつの頭上からの一撃をお見舞いする事が出来れば一撃必殺が成立するだろう。

瑠璃の視線はそう語っている。

ならば早いところ済ませた方がいいと、瑠璃と茉莉は揃つて道を小走りに進んでいく。この道は洞窟の上に存在し、抜けた先にはエリア9の深い森の小道に出てくる事になる。

その出口付近まで来ると、茉莉がシャドウジャベリン改を抜きつつ刃の先に気を収束させていき、そつと崖の下を覗き見る。そこには相変わらず眠っているロアルドロス達がいる。まだ自分達に気づいた様子はない。

桐音の方を見れば、彼女は崖の上で静かに二人の様子を見守るだけだ。彼女が飛び降りれば小さなものを立てる事になるため、あそこで待機する事になっている。

「っー」

茉莉が翼を広げて飛び出し、一気に引いたシャドウジャベリン改をロアルドロスの脳天めがけて投擲。空を切って狙い狂わずロアルドロスの頭へと向かっていく矛先が、奴の頭を貫くと誰もが疑わなかったその一撃。

だがロアルドロスは何かに気づいたように顔を動かし、刃はそのたてがみと右目を貫くだけに留まった。

「ツツツ——!?!」

九死に一生を得たロアルドロスではあるが、その痛みにたまらず声にならない悲鳴を上げ、それは洞窟の中に響き渡っていく。

「なっ………気づいた!?!」

「………いえ、私の攻撃に気づいたというより、あれが来る気配に気づいたというべきでしょう。戻れ<sup>カムバック</sup>」

投擲したシャドウジャベリン改を戻すコードを呟きつつ、視線は地底湖の先を見据えている。その先にいるものに桐音も気づいたらしく、立ち上がって壁と聳え立つ岩を交互に飛び移りながら下りていき、バイザーを下ろしていた。

ロアルドロスはこのエリアにやって来たチャナガブルに気づいて目を覚ましたのだ。気配は隠されていても、奴が負傷したことで漏らしている血の匂いにも気づいたのでろうか。それが奴の命を繋ぐ要素になってしまった。

しかしそれも持つて数分の命。

瑠璃も火竜剣【火燐】を鞘から抜きながら飛び出し、翼を畳んで一気に滑空しながら火竜剣【火燐】を構える。母親の花梨、姉の撫子直伝の高速滑空からの奇襲。

「ギョルルツ!？」

気づいた時にはもう遅い。間合いまで入ってきた瑠璃が振りかぶった火竜剣【火燐】の一撃は、ロアルドロスのためがみもろとも首を切り裂き、頬、顎と袈裟斬りにしていった。

頸動脈を斬られたことで一気に血が噴き出し、黄色いたてがみを赤く染め上げていく。それだけでなく地面も赤い液体をぶちまけ、悲鳴を上げながらたたらを踏んでしまったところで茉莉からの追い打ちが仕掛けられる。潰された右目からも血を流し、残った左目で見上げた先には、無表情に自分を見下ろしながらも一気に距離を詰めてくる少女の姿。

その刃が視界いっぱいを覆い尽くしたのが、ロアルドロスが最後に見た光景だった。「ギョル、ギョルルツ!？」

額からシャドウジャベリン改を生やし、力なく倒れ伏すロアルドロスを見て残ったルドロス達が慌てふためくように叫び声を上げる。そんなルドロス達を離れた所で着地した瑠璃が火竜剣【火燐】を軽く振って「散りなさい」と一言告げながら、威嚇するよ

うに殺気を放つ。

それにあてられ、茉莉もシャドウジャベリン改をロアルドロスから抜き、回転させて血を払いながら軽く視線を巡らせる。それだけでルドロス達は数歩下がり、次々に地底湖へと飛び込んで逃げていった。

最初の奇襲は失敗したが、こうして一匹は討伐できた。

残されたのはチャナガブルだがあちらはどうだろうか。そう思いながら地底湖の方へと視線を向けると、凄まじい衝撃と共に爆発音と水音を炸裂させた瞬間だった。

どうやらヘビィデイドの粒子爆発を使ったところだったらしい。少しして青い地底湖に赤が浮かび上がっていく。

この地底湖は外の大河と違って水が透き通っている為に、ある程度は水中でもバイザーを使わなくても見える状態だ。陸上からでもある程度水中の様子が見える程であり、あそこで一体何が行われているかがわかる。

そして水中から凄まじい殺気と気の高まりを感じた瞬間、瑠璃と茉莉は信じられない光景を見る事になる。

ヘビィデイドに強い反動がかかって強制的に斧モードへと変形される中、桐音はちらりと陸の方へと視線を向けた。一つの気配が消えていくのを感じたのだ。

(ロアルは死んだか。だったらあたかも終わらせてやるか)

粒子爆発によって額が抉れ、大量に血を噴き出している中でもチャナガブルはまだ死んでいない。だがもう瀕死状態だ。何とかここまで逃げてきたようだが、最早チャナガブルの命運は尽きていると言ってもいい。

変形が終わり、桐音は水を蹴ってチャナガブルの右側へと回り込みながら陸上を視界に収める。まずは一撃、ヘビィディバイドを突き出し、続けて薙ぎ払うように振りかぶりながら剣モードへと変形。

それから一気に腕を引きながら力を溜めていく。

そうする中、マスクの下で小さくその言葉を紡いでいった。

「――剛体。轟気、収束。一点突破」

ヘビィディバイドの先端に彼女の気が収束し、球体から突き出されていた針が引つ込んでただの球体と化す。彼女の気の色なのだろうか、オレンジ色の光がヘビィディバイドを包み込んでいき、凄まじい力と輝きを放っていくではないか。

バイザーの下の碧眼は鋭く細められ、彼女の闘気が高まるにつれてその眼差しに冷たい殺気を宿らせていった。それに気づいたチャナガブルはびくりと体を震わせ、しかし負傷によって動けないでいる。

それはまさに、死刑執行を待つ罪人の如く。

執行人の刃は今、ここに放たれる。

「――劍術が一、王牙！」

そして、それはまさに普通ではありえない光景だった。

水中で放たれたその一撃はチャナガブルの腹を穿つ。それだけでなく先端に収束されていた彼女の気の解放の後押しもあり、チャナガブルの腹に風穴を開けながらその体を陸上へと吹き飛ばしてしまった。

「――ガ、バ……ッツッ!？」

攻撃を受けたチャナガブルも何が起こったのか把握できていない。そうしたままチャナガブルは地面に叩きつけられながらその命の灯火を消してしまう。

その様子を見ていた瑠璃と茉莉は固まるしか出来ない。

魚竜種の一角であるチャナガブルを吹き飛ばすだけの攻撃を、ただの人間が出来るというのだろうか？

いや、それを可能にしてしまった人物を知らない訳ではない。あの人は血統の僅かな後押しと積み重ねた鍛錬によってそれを可能にしてしまい、一時期の師匠である規格外な人をも驚かせるだけの力を見せつけてくれた。だが彼女はただの人間より少しだけ違っていたという背景があった。

それに今桐音がやったのは突き詰めればただの突き。

突きというシンプルな攻撃に己の気を纏わせ、更に自身を強化させて放った一撃だ。

でも、それだけであれを可能にする事が出来るのだろうか。

もしかするとあの草薙桐音という人物もまた、あの人のようにただの人間ではないのかもしれない。

「……仕留めたか」

転がっている死体を確認しながら水中から姿を現した桐音は軽く頭を振ってバイザー上げて二人の下へと歩み寄ってくる。そんな彼女をじつと見つめ、上から下まで値踏みするような視線を向けてしまうのも無理はないだろう。

それに気づいた彼女はやれやれと苦笑を浮かべてしまった。彼女自身もわかっていゝる事らしい。

「なあに、ちよつとばかし本気を出したただけだぜ？ 言つたろう？ あたいは色々剣を扱っている。……だから剣術を使つたつておかしくないじゃないか。あれはその剣術の一つさ」

「剣術、ねえ。一体どこの流派よ？」

「それは秘密さ。結構マイナーなものでね、言つても知らないだろうからね」

そう言いながら剥ぎ取りナイフを取り出してチャナガブルの死体へと向かつていく。少し気にはなつたが、どうせ今回限りの付き合いだろうからとそれからは深く気にしない事にする。

彼女に続いて二人も剥ぎ取りナイフを取り出し、討伐した二頭の素材を剥ぎ取っていく事にした。

こうしてボルシオ水没林による二頭討伐クエストは成功に終わる。

使える素材を十分に剥ぎ取り終えると、真っ直ぐにベースキャンプへと向かってギルドアイルーへと成功の照明弾を放ち、死体回収を頼むと一時間の休憩を経て村へと戻っていったのだった。



## 7 話

闇の中に一人の人影があつた。その出で立ちには和服を着た剣士という風であり、得物である刀を構えながら闇の中を睨むように視線を一点に向けていた。

その表情は緊張しながらも戦意を失っていない。だが冷や汗を流しており、刀を握りしめている手が若干震えている。

彼は恐れているのだ。

目の前にいる人物が何者であるかは知らない。しかしその人物がどういった存在なのかは予測がつく。

「貴様だな？ 巷を騒がせている辻斬りというのは」

その問いかけに答える事はなかった。ただ闇の中でじつと彼を睨み続けているだけらしい。一向に動く気配のないその存在を睨み続けているだけでは何も変わらない。

このままこう着状態になっても状況は変わる事はないだろう。

「ここで死ぬわけにはいかぬ！ 貴様を討ち、この連鎖を終わらせてくれよう！」

「……………」

一瞬で距離を詰め、手にした刀で相手を一太刀で斬り伏せようとしたようだが、刀は空を切る。黒装束を身に包んだ何者かは紙一重でそれを回避し、その手に持つ刀で斬り返してきた。

その素早い斬り返しは彼の胸を薄く斬り、その速さに少し顔をしかめてしまう。だが決定打にはならない。まだ戦いは始まったばかりだと突き、薙ぎ、袈裟斬りと連続して攻め立てていくが、どういうわけか相手はそれを読み切つて回避を続けていた。

この暗い闇をもものもしない視力。明らかに只者ではない。いや、只者ではないからこそ辻斬りを繰り返してきているのだろう。

ぎりつ、と歯噛みし、しかしすぐに冷静さを取り戻して静かな呼吸を繰り返しながら刀を構えた。地面と水平になるように刀を立てながら体もそれに倣うようにして右向きへと変えていく。

その構えを見た相手は少しばかり様子を変化させた。どうやらこの構えが何であるかは知っているらしい。

「秘劍——燕返し——」

それは三つの剣閃を同時に放つ殺人剣術。しかし始祖と違い、完全に同時に放つのではなくほぼ同時に放つ事で確実に相手を仕留める技だ。完全に構え、狙いを定めて放たれたこの技で敵を仕留めただろうと信じて疑わなかった彼ではあるが、その表情が驚き

に彩られるのはそう時間がかからなかった。

「な、んだ……と!？」

間合いの中にいるためにそれらが命中したろうに、しかし全ての剣閃は彼女が振るった刃によって弾かれていた。神速に振るわれた刀から放たれた剣閃が三つの剣閃と相殺し、消し去ってしまったのだ。

長い時間をかけて磨き上げ、習得した秘剣すら通用しない。

その事実には彼は放心してしまう。

その隙をつき、敵は素早く攻撃の構えを取った。

まるで鏡合わせのように自分と同じ構えを取っていく敵に驚く間もなく、

「——秘剣・燕返し」

淡々と放たれた言葉と共に三つの剣閃が彼を捉え、その一瞬の間に彼の命は消え去ってしまった。物言わぬ肉塊と成り果てた一人の剣士を見下ろし、軽く刀を振って鞘へと納めたその人物は小さく溜息をもらす。

そこに在るのは無感情。

高揚感もなければ戦いに勝った喜びもない。

「……つまらなこ」

本心でそう呟いているのだ。こうして辻斬りを繰り返してはいるが、どの戦いでもこ

の人物は満たされることはなかった。最初の頃はまだ楽しかった覚えがあるのに、一体いつからだろう。どんな敵でも機械的に得物を振るうようになってしまった。

「……でも、ま。いずれ終わる、か。さて、次はどこに行こうかな」

ぼそぼそと呟きながら現れた時と同じように静かに闇の中へと消えていった。

それは、瑠璃達がボルシオ水没林から帰ってきたその日の夜に起こった出来事である。

○

ボルシオ水没林から帰ってきた翌日、瑠璃と茉莉は宿屋を出て酒場へと向かっていく。扉を開けて中に入ると、すぐに受付嬢が「こんにちは」と声を掛けてきた。

そんな彼女に近づき、「水没林の街道はどうなってる？」と瑠璃が問うと、

「はい、今朝方問題なしと判断され、街道は解放されていますよ。早くも旅人の皆さんが利用されていますよ」

酒場の客の大半はハンターのみであり、昨日までいた一般客は旅立ちの準備をしているのかここにはいなくなっていた。そしてハンター達の視線は瑠璃と茉莉に向けられている。

といつても不躰に見つめる眼差しではなく、ちらちらと様子を窺うかのような視線だ。

まさか本当にクエストを成功させてしまうとは思わなかったらしい。大層な自信を持つてクエストに望んだ方がいいが、失敗して戻ってくるんじゃないかと思つていたのがほとんどだったのだろう。

彼女達に出来るなら自分達でも出来たかもしれない、と思うものの中にはいるんじゃないだろうか。

しかしそれを表だつて口にする者はいなかった。だからこうしてこそこそと視線を向けるしか出来ない。そんなところだろう。

何はともあれ無事に街道が使えるようになったならば何よりだ。二人は一つの席に着いてお品書きを手に取り、昼食を注文する事にする。これを食べたらまた次の場所へと移動する予定だ。

目的地であるユクモ村はまだまだ先にある。もしあの人達が温泉を利用しているならば、あるいは情報がそこにあるならば、と考えるだけでも早いところ向かいたい心境だった。

しばらくして料理が運ばれてき、手を合わせて「いただきます」と口にして食べ始めると、酒場の扉を開けて一人の客が中に入ってくる。ちらりと視線を向けると、そこに

は一人の女性がいた。

燃えるような炎のような紅いセミロングヘアに、同じく燃えるような真紅の瞳をしている。整った顔付きにすらりとした長身、そのプロポーションの良さは見る者を惹きつける美しさがあつた。

美人、そう呼んでも差し支えない程の女性がこんな酒場へとやつてくるとはどういう事だろう。

周りのハンター達も驚き、そして彼女の美しさに呆けたような表情で眺めていた。

そんな彼女の服装はやはり東方人らしく和服を着こなしていた。紺色の下地に夜空を描いた和服であり、その上に闇色の外套をなびかせていた。どうやら旅人らしい。恐らくこの先の水没林を抜ける前にここに立ち寄つた、といったところだろうか。

彼女は一つの席に座るとお品書きを手にして何気なく視線を巡らせる。

「いらつしやいませ」

ウエイトレスが彼女の下へと向かうと、お品書きを気だるげに指差して一言。

「( )から、( )までを全部お願い」

「……………はい？」

一体彼女は何を言ったのだろうか？

ウエイトレスの少女だけでなく周りのハンター達も呆然とするしかない。

だが彼女はとんとん、とお品書きを叩き、

「だから、ここからここまでを全部。……ああ、つまみもぎつとこれくらいかな」

今、彼女が開いているページは飲み物が書かれている部分だ。そしてここは酒場。飲み物の大半は酒。彼女は指を滑らせてその酒を一気に示しながら注文したらしい。

しかも追加としてつまみのページを開いてこれまた一気に注文。

あれほどの美人がこんな昼から大酒食らいをするというのか？

そんな驚きがあつたのだが、ウエイトレスは注文に応えなければならぬ。「か、かしこまりました」と一礼し、カウンターの向こうへと駆けこんでいく。

しばらくし、次々と注文したものが運ばれてくると、彼女は一本の瓶を開けてグラスへと注ぎ、一気に呑み干す。更につまみを口にし、どこか満足そうに頷いた。

多くのハンターが見守る中、ハイペースで呑み進め、つまみを口にしながら瓶を空にしていく様はほとんどの見物人の度肝を抜いただろう。

「……うわばみ、ですね」

「ありえないわ……」

一体あの体のどこにあれだけの量の酒が消えていったのだろう。しかもあれだけ呑みながら酔っている気配がないというのはどういうわけだ？ アルコール度数が低いものから高いものを問わず呑み続けているのに、彼女の表情は入ってきたときからあま

り変わっていないように思える。

いや、うつすらと赤くなっているようだがそれまでだ。言動におかしな様子もないし、意識もはつきりしている。

「どれだけ酒に強いのだ、と問い詰めたいほどに呑み進める彼女は周りの視線など気にした様子もない。

「とりあえずあの女性についてはもう気にしないでおくことにしよう。今は昼食を食べないと。女性から視線を逸らし、黙々と昼食を進めていくと、また扉が開いて客が中に入ってくる。

「………ん？ おや、あんたたちかい」

「おー？ 草薙さんですか。こんにちは」

入ってきた客、桐音は二人に気づくと軽く手を挙げながら近づき、纏っていたローブを椅子に掛けると空いている席に座ってきた。ウェイトレスに注文をすると、彼女もまた離れた席で一気に酒を消耗していく女性に気づく。

「………なんだい、ありゃ」

「知らないわよ。あたし達に訊くな」

少し様子を窺うように見つめていた桐音だが、やがて深く気にしないようにしたらしく視線を二人へと向けた。



「ところで街道が開通したわけだけど、あんたたちはどこに向かうつもりだったんだ？」  
「ユクモ村ですねー」

「ユクモだって？　これはまた奇遇だな。あたかもユクモに向かっていたところなの  
さ」

「……ふーん。一人であんな遠くまで向かうなんて、なかなかのものね」

ユクモ村まではまだまだ距離がある。普通はそれまでの距離を一人で行こうなんてことは思わない。誰か知り合と一緒に、あるいは商隊に混ざって旅するのが通例だ。

それはやはり普通の人にとっては脅威となる飛竜らの存在があるからだろう。もちろん盗賊、野盗などという存在もいるのだが、やはりモンスターという強大な敵がいるからこそ戦える者と一緒に旅をしないと危険なのだ。

そして例え力を持つ者といえども、一人で旅するのは危険だ。長距離を旅するとなると体力の問題もあるだろう。だから二人は桐音が一人で長距離を旅するという事は驚きだった。

「そんな所まで一人で行くなんて、なんか訳ありなわけ？」

「そうだな、ちよいと人探しをしていてね」

「……………理由まで一緒ですか」

「ん？　なんだい、あんたたちも人探しか？　これはほんとに奇遇だな」

そこで注文したものが運ばれてきたため、一旦話を切つてそれを受け取り、「いただきます」と口にして少し食べ進める。その後お茶を飲み、

「あたいはクソつたれな愚弟を探していてね、なんでもユクモ方面にそれらしき奴がいたつて噂を聞いたもんだから向かつているのさ」

「愚弟? ……とりあえず、あんたの弟を探している、つて事でいいの?」

「ああ、そうさ。で、あんたたちは誰を探してるんだ?」

「私達は知り合いですね。温泉で有名なユクモ村なら訪れた事があるんじゃないかという事と、情報源として有効ではないかという事で向かっています。とはいえ第一の目的はただ東方を巡る、というのですが」

「なるほどね。温泉関係で狙っているという事は……知り合いは東方人つてことか?」

温泉好きという点は東方人に多く見られる事だ。桐音も東方人というだけあつて容易に推察する事が出来たらしい。

「しかし……人探してユクモ、か。どれだけ数奇な巡り会わせなんだろうね? ……ん、どうだい? ……ここはひとつ、一緒にユクモにでも行くかい?」

「……どうしてそうなるのよ」

「なに、東方にはこんな言葉があるのさ。旅は道連れ世は情けつてね。今まで一人でやって来たけど、ここで出会つたのも何かの縁。一回クエストを共にしたし、どうせな

ら一緒にどうかと思ってね」

一人より二人、二人より三人……仲間は多い方がいいというのも一理ある。それに東方人は縁を大事にする人が多いとも聞く。桐音の性格からして少し意外だったのだが、彼女もそういう事は大事にするようだ。

……本当に意外だ。瑠璃がそういう表情を見せてしまうのも無理はない。茉莉はその表情の変化の乏しきで誤魔化したようだが。

「……んー、でもさ、いきなり一緒に旅をするつても……」

「なんだい？ 小さな旅はもうしただろ？」

「あれはクエストじゃないの」

「似たようなもんじゃないか。竜車で移動し、飯を食い、命を懸けて戦った。十分縁は出ている。……それに、あたいはあんたたちに少し興味があるしね」

そこでにやり、と不敵な笑みを浮かべてみせる。鋭さを感じさせる碧眼がゆつくりと瑠璃、茉莉と交互に見やり、どこか観察するかのような眼差しをしていた。

そういえば桐音は戦闘狂の節があった。もしかすると彼女の興味とやらは二人の実力なのだろうか。味噌汁を飲み干してふう、と息をついて茉莉はお茶を手にながら小さく首を振った。

「興味を示してくれるのはよろしいですが、私達はそういう傾向はないもので、すみませ

ん」

「ん？ ああ、別にあんたたちと戦おうとかそういう事はないさ。ただ……そう、色んな奴の戦いを見ていきたいってだけの話さ。瑠璃は長剣使い、茉莉は槍使い……しかも特殊な種族ときたもんだ。これはいい経験になるつてもものさ。興味が出るのも仕方のない事だろう？」

確かに有翼種は珍しい存在だ。そんな彼らの戦士ともなればその珍しさは跳ね上がる。

瞳の中に小さな炎が揺らめいている気がした。口では見えているだけといいながらも、本心では一回刃を交えたい、と思っているのではないだろうか。

やれやれ、困った人に気に入られたか、と茉莉が考えた時、「なに、それは本当か!?」という大きな声が聞こえてきた。何事かと周りの客達がその方へと視線を向けると、それはハンターと一般人が混じった男達が座る席だった。

「今度は獣牙流か……これで一体どれだけ殺られたんだ？」

「さあな……しかも殺されたのはある商隊の護衛に頼んだ人だつてよ。見回りに行った奴がその死体を見つけて判明したんだと」

「はあ、どうなつてんだろうな……」

獣牙流……名前前に獣の名を冠する技が特徴で、力強さと鋭さ売りとした技が多く、相

手を一気に討ち倒すものを第一としている。

またかの秘剣も取り入れ、それを習得できたものはごくわずか。その使い手の一人が死んだのだ。驚きに包まれるのも無理はない。

「んく、んく……」

驚きだけでなくまたかという雰囲気をした客もいれば、あの女性のように特に気にした様子もない客もいる。……彼女の場合はただ飲み食いしている事に夢中になっているだけなのかもしれない。少しばかり気にはしたようだが、やはり今の彼女の興味は酒に向けられていた。

そして瑠璃達。

特に桐音はあの話聞いてまた瞳の中に炎を揺らめかせる。どうやら件の辻斬りにも興味が湧いたらしい。

「……本当に戦いが好きなのね、あんた」

「ああ。気づけばこうなってたね。……ま、しゃーないさね。昔っから色々とやってきたもんだから、こうなるのは自然の摂理ってやつさ」

最後の白米を食べ終わると「ごちそうさま」と口にし、またしてもにやりと笑いながら軽く右手の指を鳴らしてみせる。その際腰の帯に差している小太刀がちらりと姿を見せた。

初めて出会った時と同じ、私服という事もあってその二振りの小太刀が彼女の主要の武器という事らしい。

「強い奴らとの戦い、それはあたいにとって血沸き肉踊り、心が満たされる事さ。緊迫した戦いこそ至高。そうでなくちゃつまらないってな」

「うわあ……どつかで聞いたような話じゃない」

頭の中にならからと笑う深緑の髪をした青年や、金髪の青年の姿が思い出された。あとは……白髪の少女だろうか。いや、彼女の場合は……別のベクトルに向いているんだ。今ではそういう気配はなくなっているだろうが。

とりあえず桐音は戦いそのものに昂る派のようだ。特に実力者との戦いならばなおさらといった感じか。

「ま、そんなあた人も一人でやっていくのもどこか退屈になってきたのさ。そんな中であんなたちとの出会い、縁が生まれた。なんていうかね、あんなたちと一緒になら退屈しなくて済みそうかとも考えているのさ。……どうだい？」

そうしてまた話が戻る。

じつと落ち着いた瞳が二人を見つめ、ただ静かに答えを待っていた。

「……………」

瑠璃がどうする？ と目で語っていた。彼女は先ほども言ったように反対なのだろ

う。なにせ自分達は特殊な種族であり、行方不明になっているあの人達を探しているのだが、その彼らは世間からすればお尋ね者に近い存在だ。

その事を知られてはめんどうなことになるのもまた事実。だからこそ二人は誰とも深く関わらずに過ごしてきたのだ。だから桐音の願いには応えられない。

結局どう考えても茉莉も同じように反対だった。

「残念ながら私もお断り……ですね」

「……そうかい、残念だねえ。ま、そこまで無理だつて言うならこれ以上は言わないさ」

残ったお茶を飲み干すと立ち上がり、ローブを羽織ると自分の分の伝票を手にした。

「じゃ、またどこかで会える日を楽しみにしてるよ。……ま、同じ目的地だ。ユクモで会えるかもしれないけど」

「そうね。またどこかで会えたら、その時はよろしくしてもいいわよ?」

「はは、どこのアレだよ。じゃあな、お二人さん。また会ったらクエストするか、刃を交えようぜ?」

「前者はいいですが、後者は遠慮したいですねー」

「つれねーな」とぼやきながらもまたにやりとした笑みを浮かべつつ、カウンターへと向かっていった。素早く会計を済ませ、軽く手を振って酒場を後にしていく。

それを見送ると自分達も既に食事を終えていたため、そう時間もかけずに二人もまた

会計を済ませると酒場を後にするのだった。

宿屋に戻ってチェックアウトを済ませると竜小屋へと向かってまたアプトルをレンタルしていく。少し店主に訊いてみると、桐音はやはり一足早く旅立っていったようだ。

では自分達も彼女に追いつかない程度に進んでいくとしようか。

そう思いながらアプトルを引いて外に出、またがろうとしたところで一人の女性がやってくる。見ると彼女は先ほど酒場でうわばみの如く酒を消費していた人だった。

彼女は二人に軽く視線を向け、薄く微笑を浮かべながら会釈してきた。そのまますれ違い、店主へと向かってアプトルレンタルについて話し始めた。そんな彼女を肩越しに振り返ってみると、闇色の外套の陰に隠れて見えづらかったが、腰元の帯に武器らしきものを差していた。

外套によつてその全てが見えないが、それが武器ではないかという事だけはわかる。どうやら彼女もまた戦う者だったらしい。気のせいかわかぬ妙な力を感じるが、小さすぎてよくわからなかった。

それはあの身のこなしで何となくわかるし、歩き方もどこか隙がない。

でも……どうでもいい。あの大酒食らひは驚いたが、所詮は他人だ。桐音と同じように深く気にするような相手じゃない。アプトルに騎乗すると手綱を握りしめ、ボルシオ



水没林に向けて走らせ始めた。

さあ、次の町へと向かおう。

まだまだ旅はこれからだ。

○

(つまらない)

今日もまた一人の使い手を斬り捨てる。

(確か今回は……天刃流だったか。それなりの実力だったけれど、それまでだった。この渴きを満たしてはくれない)

「……つまらない、つまらない……」

ぶつぶつと呟きながら両手に顕現させていた武器を消し去り、月明かりもない森の中を歩いていく。光源のない深夜の森は視界が悪く、夜目が効いていたとしても遠くだけでなく近くも見えるかどうかも怪しい。

しかしその人物は木々にぶつからず、草に足を取られず、すいすいと歩き進めていく。

「ああ、残念。実に残念……いつになったら現れるんだろう」

どれだけ斬り捨てたか覚えていないくらい斬ってきた。というより数えるのも億劫

だった。

それほどまで何者かは飢えていた。

己の心を昂らせる程の戦いに出会えていない。これは久しぶりに彼、あるいは彼女の  
下に行つて死合ひでもしようか？

そんな事を考えていると、森の奥から何かの気配が近づいてくるのを感じた。

「ヴルルルル……！」

闇の中に浮かぶ赤い光が二つ。

それはじつと木の上から何者かを見下ろしていた。その気配と視線に当然何者かも  
気づいており、その視線を受け止めた上で何も感じさせない瞳で見つめ返す。

「……ナルガ、か。残念、お前はもう終わっている」

「ヴルルルルッ！」

威嚇するように唸り声を上げたその存在、迅童ナルガクルガは何者かに向かつて一息  
に飛び降りながら右翼を振り上げ、鋭いその刃で切り裂こうとしてきた。

しかに何者かは冷静にそれを見切り、身を包むその布をなびかせ、風切音を感じなが  
ら両手を軽く広げる。すると何者かの気が両手に集まっていき、一つの武器を形成し  
た。

それは一見すると籠ガントレット手のようだった。だがその指の上部に獣のような爪が三つ伸

びている。金属で出来た籠手に刃が一体化したそれは、名づけるならば鉄甲爪だろうか。

躲されたところで今度は左翼で斬りかかってくるが、それを躲しつつ左手で受け流し、右手で突き出すようにナルガクルガへとカウンターを決める。

三つの爪がナルガクルガの頬へと突き刺さり、引き戻しながら薙ぎ、左手で追い打ちをかけたついで距離を取る。

「……しっ」

追いかけて来ようとしたナルガクルガへと右手を振りかぶれば、爪から気刃らしきものが放たれてナルガクルガに襲い掛かっていった。爪と同じく鋭さに特化したその気刃はナルガクルガの左翼を切り裂き、血を迸らせる。

「……旋風」

続けざまに左手を振りかぶれば、今度はつむじ風のようなものがナルガクルガへと襲い掛かった。自然現象のつむじ風と違い、それは相手を斬り裂くことに念を置いたもの。小さくともそれは敵を倒す技。ナルガクルガを通過する度にその鱗、皮を傷つけていった。

「グルアウ、グルオアアッ!」

普通のハンターにはない攻撃にナルガクルガが戸惑った様子を見せたが、しかしそれ

で戦意がなくなつたわけではないようだ。本来の戦い方をするように、闇の中へと一度姿を消す。

この暗闇の中に溶け込み、木々の間を素早く飛び移つて得物をかく乱させ、死角から襲い掛かる。それがナルガクルガの狩獵だ。

何者かは一度構えを解き、自然体のままでその場に佇む。

ナルガクルガもまた気配を消し、自分の位置を悟らせずにいた。僅かに木の葉が揺れるような音を響かせているが、それも集中しないと聴こえない程に小さい。

それから数分間、何も起こらずに時が過ぎていく。

「——ッ！」

刹那、背後の木から飛び出したナルガクルガが何者かの首から背中へと斬りかかつていった。完全に気配と音を消しての奇襲。見事なまでの狩りだ。

あの翼が振りかぶられた瞬間、何者かの首は体と別れを告げる事になるだろう。

だが、標的はその場からゆらりと消え去つた。

「——陽炎」

ナルガクルガは何が起こつたのかわからなかつた。自分の翼は何も捉えていながつたのだ。わかつたのはただ翼が何者かを切り裂いた感触がなく、ゆらりと煙のようなものが静かに消えていく光景のみ。

そして気づけば、自分の首から勢いよく血が噴き出していたという事だけ。

「ガ、ガガ……」

声にならない呻き声を漏らし、ナルガクルガは静かに地に伏せる。

いつの間にか首元から翼の方へとゆっくりと歩いていく姿がある。その両手にある鉄甲爪の刃は赤く滴る血液があり、軽く手を振って血を払って粒子へと還元させていく。

その一瞬の決着に何者かの実力が表れていた。だがフードに隠れている何者かの表情はやはり曇り模様。どうやら今の戦いでも満たされることはなかったようだ。

「……さて、あの人に付き合ってもらおうかな。一時の渇きが消えるなら、それで満足するか」

うん、そうしようという風に何度か頷くと、腰に挿している武器を抜いた。そうして死体となったナルガクルガに傷を入れ、その刀身に血を流していく。数秒ほど流れる血の滴を眺めると、軽く振って滴を飛ばして鞘に納める。

そのまま布を翻して闇の中へと消えていく。後にはじわじわと血を零し続けているナルガクルガの死体が残された。

## 8話

森の中を二人の男女が歩いていく。辺りを警戒するように歩く様、身を包む防具に背中や腰に差している武器。一見して二人がハンターである事は明らかだった。

標的となる相手はこの先にいる気配がする。地図によれば確かあそこには川があったはずだ。僅かに水音がするので間違いない。どうやら川の小魚を狙っているのだろう。奴にとっては食事の時間か。

だが二人にとってはそれは好機。足音を立てず、気配を隠し、木々の間をすり抜けながら着実に敵へと距離を詰めていく。

油断さえしなければ恐れるに足らない存在だ。亜種とはいえ、かの存在はこの東方のハンターにとつての登竜門的な存在。

大丈夫だ、問題ない。

「……………」

しかし不穏な噂があるのもまた事実。

夕暮れも過ぎ去り、夜の帳が下りた時刻。月もまだ出ず、夜の森はひどく静かなもの

だ。視界は良好とはいえず、周りに気を配らなければいつ奇襲を受けてもおかしくない状況。

そんな中で敵となるのはモンスターだけではなかった。

巷を騒がせている辻斬りの存在が二人の心の片隅にあったのだ。しかし辻斬りの標的はハンターではなく武人。ハンターが狙われる事はないだろう、と考えている者もいるが、この暗い森の中で行動するとなるとどこか不安になってしまう。

それにハンターであろうとも剣術の流派を会得している者も少なくない。この二人もまた同様。剣術を習得しているため標的になる可能性がある。それ故に辺りを警戒する際はモンスターだけでなく人の気配も探り続けている。

しかしそれでも——この闇の中に紛れて動く存在を感知できていなかった。

それは草むらを這うように動き、続けて木の幹を音も立てずに上り、枝の上に乗ると一息で他の木へと飛び移り、着実に距離を詰めていた。口から舌を出して軽く振るわせながら漆黒の瞳でじつと獲物を見据えているのだ。

奴もまた、この暗い森の中の狩人ハンター。この森に溶け込む色合いをした体を持ち、気配と音を消す事に長け、この視界の悪さをもつともしない感知能力を持つ。

それを駆使し、得物に気づかれずに忍び寄り、一気にその命を狩る。

今回もまたそれを行使するのみ。

やがて川のせせらぎが耳を澄まさずとも聞こえるようになった頃、ハンター二人は川のほとりにいる標的を視認した。さあ、いよいよ攻撃を仕掛けようか、と飛び出すタイミングを見計らっていた二人に一気に距離を詰め、

「——ッ、グ……ッ!?!」

「——えっ……!?!」

その体を貫くように両手を突き出して爪を抉り込ませた。鋭く伸びた爪は胸を貫通させ、しかも心臓を容赦なく抉っているため、最早二人に助かる未来はない。一体何が起こったのだ、と戸惑いを含んだ目をしながら、一体誰が自分達を殺したのかと男が肩越しに振り返る。

口から血を吐きだしつつ彼が見たものは、

「……シュルルル」

喜色を含んだ眼差しでじつと自分達を見下ろしながら舌を震わせる存在だった。

「な、なな……なぜ、ここに……」

この存在がいるなんて聞いていない、と言葉を続けようとしたが、それは体に爪を食い込ませたまま一気に口を開き、男の頭から喰らいついた。頭を守る防具もろとも噛み砕き、苦痛と悲痛に歪ませた男の命を完全に喰らいつくし、それが顔を離れた瞬間そこには何もなくなった。



あるのはただ、鮮血の噴水と言うオブジェ。それを間近で見ってしまったもう一人のハンターの女性は口から血を漏らしながらその整った顔を歪ませていく。

「い、いやあああああああ!?!」

森に悲痛な悲鳴が響き渡る。その声に気づいた二人の獲物だった存在は背後を振り返り、そこで起こっている出来事を認識する。自分達を狩るはずだった存在が狩られている光景、そしてその狩った存在を見ると、一鳴きして翼を羽ばたかせてその場から退散していく。

それを追うようなことはせず、それは視線を女性へと向けた。

「ひっ………」

女性も自分がもう助からないという事はわかっているだろう。しかしそれでも体は緊張し、がちがちと歯を打ち鳴らして震えてしまう。

そんな彼女にも容赦の欠片もなく頭から喰らいつき、先ほどの男と同じように首を食い千切ってしまった。首があった場所からやはり勢いよく鮮血が噴き上がり、それすらも美味しそうに飲み干していく。

「シユルル」

その血は甘露のように美味であり、噴き出しつづけるその体に喰らいつき、一気に血をすすりあげると今度はその柔らかい肉を頂くために口を大きく開けて丸呑みし始め

た。身を包む装備すらやはりものともせず、そのまま足まで全て食べてしまう。

最後は男の体を食べ終え、血が滴る口元を軽く拭いつつ舐めとり、川へと向かってその水を飲み始める。奴にとつての夕食が終わり、どこか満足そうにその場を立ち去ると、現場には血だまりが少し残るだけ。……そう、二人の体は全てあの胃袋の中へと消えていったため、彼らの死体が残る事などなかった。

○

あれから一週間が過ぎた。ユクモ村まではあと半分ほどの距離を進むことになる。山を越え、丘を越え、谷を越え……アプトルを乗り換えて豊かな自然の中を駆け抜けてきた。

現在は一つの町で休息を取っており、昼食を頂きながら周りの客の話に耳を傾けて情報を得ようとしているところだ。

すると気になる話が耳に入ってくる。

「またやられたらしいな」

「いったいどうなっているんだろうな、あの森……」

「ハンターがやられ続けること三件、『帰ってこないから調べてくる』と言った奴も帰っ

てこそ、辻斬りでも現れたのかと噂になり、『そんな奴がどうしてハンターを狙ってくるんだ？ いるはずがない』と言った奴も帰ってこない……。どうかしてやがるぜ」話を聞いていくとこんな事が最近起こっているらしい。

この先にある森には以前から奇妙な事が起こっているそうだ。あの森には元々様々なモンスターが生息し、最近はリオレイアやクルペッコ、クルペッコ亜種、ロアルドロスなどといったモンスターのクエストが張られ、消費されていった。

だがどういいうわけかこれらのクエストに向かつていったハンターが帰ってこないという事件が起こり始めたという。当然帰ってこないならばなにかが起こったのだろうと調査隊が派遣されるが、ハンターは見つからず、またどういいうわけか調査隊の一部も行方不明になってしまった。

同じように独自に調べに行った者もいなくなり、これはいよいよ何かがあそこにいるのではないかと結論になったのだが、次々と手練れの者がいなくなるというだけあってあの森に向かおうという気は起こらなくなっている。

しかしあそこにいる飛竜らの存在の事もあり、クエストは今もなおはられ続け、運がいいものは何も起こらずに普通にクエストを完遂させて戻ってくる。そんな運のいい者らの話によれば、あそこになにかがあるかどうかはわからなかったそうだ。

つまり、一体何が起こっているのかは不明。

そのため解決の兆しは見えてこない。

誰か実力ある者に頼むしかないのだが、こんな田舎にそのような人物が来るのかどうか怪しい。

道筋はただ一つ。

ギルド支部からギルドナイトに調査依頼を出す事のみだった。だが来るとしても時間がかかるのもまたネック。ロックラックにあるギルド支部、または東方のシキ国、ヤマト国にあるギルド支部に所属するギルドナイトを呼ぶ事になるだろうが、かかる時間は早くて一週間以上。

アプトルを使ってこれなのだから、ここがどれだけ田舎かわかるといふもの。

また最近は辻斬りが発生し、地方でも新たに確認されたモンスター的一件もあつてギルドナイトがそちらに駆り出されている。つまり人がそちらに回され、田舎の事件に回す人材が限られている。

なのでギルドナイトに依頼しても、来てくれるかはわからない。来てくれたとしても時間がかかる。更に言えば来てくれたギルドナイトが本当にこの事件を解決してくれるかの保証もない。確率は高いだろうが、確実とは言えないのだ。

「謎の死、か。普通に考えれば観測されていない何かがその森にいるって事でいいのよね」

「でしようね。死体が見つからないのもその何かが食べてしまった、と考えればいいでしよう。……ですが、その何かがわからないというのが問題ですね。飛竜なのか、牙獣なのか、あるいはまた別の何かか……」

森の中なので挙げられるのはこの二種だろう。鳥竜種は攻撃的な存在が少ないし、いたとしても東方にそれが生息している地域は少ない。黒狼鳥イャンガルガが有力だが、奴の場合殺しはしてもその死体を全部食べ尽くすというのは考えづらい。

よって考えられるのは飛竜種か牙獣種となる。

他にも獣竜種が考えられるのだが……その中で一番考えられるアレが出現したとなれば大騒ぎだ。その報告がないのでアレは現れていないだろう。

「それで？ クエストがあれば参戦するつもりで？」

「あれば、の話だけだね。ユクモ村に行く途中だけれど、こんな気になる話があったら、食いついちやうでしょ？」

「それは瑠璃だけですわね。私はどちらでもいいので」

「あ、そう……。でも、この事件を解決していく事であたし達は強くなれる、ここの人達も喜ぶ。一石二鳥よ」

「ま、そうですね。じゃあ少し見てみましょうかね」

立ち上がって壁際にあるクエストボードに向かってみる。そこに張られているのは

三つの依頼書。

青熊獣アオアシラ討伐。

紅彩鳥クルペッコ亜種討伐。

謎の存在の討伐。

なるほど、確認されている中で討伐対象になっっているのはアオアシラとクルペッコ亜種という事らしい。アオアシラは今の二人ならば問題なく討伐できるだろうが、クルペッコ亜種は少々厄介だろうか。

彩鳥クルペッコは東方のハンターにとつての飛竜の登竜門として知られている。西方のイヤンクツクと同じく鳥竜種であり、飛竜の動きの基礎をこのモンスターで覚えるハンターが多いのだ。

独特の鳴き声を駆使して自分の力を上昇させたり、鳴き真似で他のモンスターを呼び寄せたりとイヤンクツクとは違ってその辺りがやり辛いのの特徴ではあるが。

そしてそのクルペッコの亜種が紅彩鳥。翼にある火打石が電気石に変化し、その体色もまた紅を基準としたものになっている。

また呼び寄せるモンスターも原種と違って、強力なものが多いという報告をよく耳にしているとのこと。

つまりただの亜種だと思って油断しているとやられかねない相手なのだ。

しかし問題ない。

茉莉が張られている物を瑠璃へと報告すると、なるほど小さく頷いて「じゃ、ペッコ亜種にでも行こうか」と提案した。

すると、近くにいた客の青年が二人の話を聞いていたのか声を掛けてくる。

「君達、まさか件の森に行こうっていうのかい？」

「ん？ そうだけど？」

「何を言っているんだい、やめなよ。死ぬつもりかい？」

「そうだな。クエストを受けるってことはハンターのようだが、この件はやめておけ。命は投げ捨てるものじゃない」

「あたし達だつてこんな所で目的も果たさずに死ぬつもりはないわよ。でも、ここで困っている人がいるってんなら、見過ごせないだけ」

「……………」

そう言う瑠璃の瞳に怯えの色はない。姉のその姿と言葉に茉莉は彼らの姿を思い出した。

いつだつて困っている人のためならば手を差し伸べていくあの兄弟の姿。一、二年だったが一緒の村に暮らし、そういう彼らの背中と武勇伝を聞いてきたのだ。

母親を目標としているが、その心境にあの兄弟のまっすぐな姿の影響を受けない、な

んてことがあるわけもない。あの村にひっそりと暮らしていても、兄弟は今もなお歪まらずに彼らの両親の背中を追い続けている。

かの兄弟以上に中央で人助けのために活動し、とある村を救った後に亡くなつてしまつたあの両親の背中を。

そんな姿が眩しくて、だからこそ憧れ、尊敬できる先輩だと思える。

(経験を積むため、とは言っているようですが……本当はそういう事でしようね。ふふ、先日の事も恐らくはその志があつたからこそ引き受けたのかもしれないませぬ)

クエストをやつてみたいと言ひ出したのは瑠璃だ。茉莉はそれに頷いただけ。昔から何かと口は悪いし、はねつかえりだつた少女だつたが、その根本では誰かを想う気持ちがある。あの兄弟の影響と心身の成長で、誰に対しても口が悪いというのは改善されてきているのは喜ばしい事だ。

「しかしもう何人も帰つてこない人達がいるんだ。考えたくもないが彼らは……君達もその後に続くというのかい？」

「話によればギルドナイトに連絡がいつたそうさ。君達が行く必要なんてない」

「年頃の女の子が無茶をするものじゃないよ。ここは他のハンター達、特にギルドナイトに任せた方がいい」

「……生憎だけど、それは断るわ。それにアタシたちだつてハンター、それも上位よ。経



験も積んでいるし、あたし達二人なら大抵の事は乗り越えてきた。そうでしょ、茉莉?」「そうですね。私達のコンビならば何とかかなりですよ。瑠璃の斬りこみはなかなかのものですからねーそれはもう、猪のように猪突猛進にバカみたいにまっすぐで……」

「だれが猪だツ!? つていうか、それじゃあたしが脳筋みたいじゃないのよ!」  
「え?」

「おい、なんだその顔は」

うがーつと吼える瑠璃に何をわかりきった事を……といった風な表情を見せる茉莉だが、こういうのはいつもの事。吼えた後に急にテンションを下げてツツコミを入れるいつもの漫才に男達は呆ける。

この二人に恐怖というものはないのか?

漫才をするだけの余裕を見せる二人は本当に自然体だ。謎の存在に恐れている様子なんて見られない。それが男達には信じられなかった。

「君達……怖くないのか?」

「怖い? ……そうですね、多少は怖いわよ? 当然じゃない、生き物なんだから。わけのわからない奴を相手にするし、命を懸ける戦いに赴くんだから怖くないわけじゃないじゃない」

「じゃあ……どうして」

「ハンターはいつだって命を懸けている。今更の事よ。それにさっきも言ったでしょ？」

そこで瑠璃はふつと不敵な笑みを浮かべながら目を閉じ、そして不敵な笑みは綺麗な笑顔へと変化していった。

「困っている人がいて、あたし達が戦う事で救われるって言うんなら、やってやろうじゃない」

それはとても眩しい。

止めなければならぬ、とわかっていても男達は何も言えなくなってしまった。

そんな瑠璃に茉莉はやれやれと小さく首を振りながらもその口元は小さく緩んでいる。なんだかんだ言って弄つても瑠璃の事は好きなのだ。そんな彼女を自分は支え続けるのみ。

「じゃ、クエスト受注に行ってくるわ」

軽く手を振ってカウンターへと向かっていく瑠璃を見送り、茉莉は同じように瑠璃を見送っていった男達に振り返る。

観察すれば彼らもまたハンターか普通の戦士かわからないが、戦う者だという事がわかる。忠告したのはやはり同じ戦う者としてのものだろう。二人の実力を完全に読み取っているわけではないようだが、それでも戦場へと向かおうとする二人を止めるのは

無意味に命を散らす事はないとわかっているからだ。

勝てる戦いならば何も言わないだろうが、勝てるかどうか怪しいものに挑むのは愚かだ。ましてやそれが年頃の女ならばなおさら。止めたくなるのもわかる。

だが二人の……瑠璃の意志は固い。あれはやると決めたらとことんやる。まさに猪突猛進……いや、一回弄ったからやめておこう。

「なに、気にする事はないですよー」

「……しかしだね」

硬い表情を見せる男達に気楽に声を掛ける茉莉であったが、それでも男達の表情は晴れない。何度も大丈夫だ、といっても無駄だろう。二人が若い女という事もあるし、もう何人も行方不明になっているという事実もある。

彼らが安心できるとすれば、それはその謎の存在を討伐できたという結果のみ。

要は勝てればいいのだ。

しかしそれが難しい。情報も何もあつたものではないのだから対策のしようがない。二人に出来るのは己の実力と武器を信じる事だけだ。

「あなた達はここで吉報を待つといいですよ。では、これにて」

ぺこりと一礼し、受付嬢と話をしてる瑠璃の下へと向かっていった。既にクエスト受注云々について話しており、今出ているもの全てを汲み込んだ話に発展してしまつて

いる。

「クルペッコ亜種、アオアシラ、そして謎の存在……纏めてくれないかしら？」

「纏める、ですか」

「そう。謎の存在の討伐はもちろんだけど、その他にも討伐するべき存在がいるようじゃない。あたし達はそいつが本命だけど、見つかるとは限らない。だから他の奴らもやろうって考えてるの。メインに謎の存在、サブとして他の二頭。これはクルペッコ亜種がアオアシラを呼び寄せる可能性があるから、って事でどう？」

見つからないまま帰ってくる、なんて事がないように現在出ているクエストの対象になっっている物をサブに据え、三つのクエストを同時処理しようという話らしい。

瑠璃の言う通りクルペッコ亜種の鳴き真似で、アオアシラが出てくる可能性も捨てきれないため、クルペッコ亜種を優先的に探すという方向でも問題ない。

クルペッコ亜種らとの遭遇、謎の存在との遭遇、どちらの状況になっただとしても問題がないようにこの提案をしているというわけだ。

しかし受付嬢もやってきた二人を交互に見つめて不安そうな表情をしている。彼女もまた二人にこのクエストをこなす事が出来るのかと疑問に感じているのだ。

「ほら」

そんな彼女に瑠璃は懐から取り出したギルドカードを見せてやる。それに続くよう

に茉莉もギルドカードを取り出した。それを受付嬢に手渡し、彼女はそれらを確認する。

そこにあるのは上位の証であるマークと二人の名前。上位と下位のクエストを歩き来しているが、二人は間違いなく上位ハンターなのだ。

下位と上位にはただ上下で分けられる程の差ではない。モンスターの個体、その内包する力と実力に応じてランクづけられ、同時に危険度も跳ね上がる。

それは下位ハンターが上位になって初めて上位クエストに挑み、失敗するのがほぼ半分という統計結果が示している。

それだけ上位と下位とではハンター達が思う以上の差がある。

それを上位の前半ものとはいえ、多くクリアしている二人の記録を見た受付嬢は無言になり、少し上目づかいにもう一度二人を交互に見た。

「……本当に、行くのですか？」

「ええ」

「……………わかりました」

ギルドカードを返し、引き出しから書類を取り出してペンを走らせていった。その様子を静かに見守り、数分後にはそこには依頼書が完成する。

謎の存在の討伐依頼。

メインターゲット：謎の存在。

サブターゲット：クルペッコ亜種、アオアシラ。

ローブの使用許可。

制限時間：五十時間。

ローブの使用許可が出た。謎の存在がどのようなモンスターなのかわからないため、装備を限定するのなんだらう。緊急時に切り替える事が出来るといふなら喜ばしい事だ。

制限時間があるが内容に問題はない。

この五十時間というのもクエストの基本時間だ。今回もそれを採用したらしい。もちろんこれを超えればクエスト失敗、そのまま一度帰還する事になる。

しかし問題ない。

二日もあればなんとかなるだろう、たぶん。

内容を確認した二人はそれにサインし、契約料を支払い、受付嬢がそれを確認して判を押す。これでクエスト受注が完了した。

後は準備を整えて戦場へと向かうのみ。

竜車に乗って件の森の中に入り、ベースキャンプのエリアまでやって来たときにはも

う二時間が経過していた。テントを張り、支給品ボックスを用意するとロープからそれぞれ武器を取り出し、コンパクトに纏めて肩にかける。

今回二人がメインで使用するのはこの二つ。

瑠璃はヒドウンサーベル。彼女がメインで使用する無属性の武器であり、ナルガクルガの素材を使用して高い切れ味を誇っている。

茉莉はインペリアルガーダー。ヒドウンサーベルと同じく無属性の武器であり、良質の鉱石を主に使用して切れ味を高めていったガンランスだ。

ロープを持っていく事を許可されてはいるが、どんな相手でも相手に出来る凡庸性を持つ無属性の武器ならば、クルペッコ亜種を相手にしている際にメインの標的が現れたとしても対応可能だ。

「さて、確認しましょうか。今出ている情報ですと、クルペッコ亜種は森の奥にある川、または上の方にある丘付近で確認され、アオアシラは森の中心に確認されているとの事です。どちらもランクとしては上位個体。なかなかのものですねー」

「上位個体、か。ふーん、相手にとって不足はないわね」

「そしてこの森で犠牲になったのはもう十人以上。男も女も関係なしです。ハンター、いなくなった人を探しに行った人、果てはこの森を通過しようとしたと思われる旅人も犠牲者です」

「旅人はどうしてわかったのよ？」

「あの町からこの森を通過し、この先にある町へと向かおうとした人達がいたそうですね。調査の結果、その町にその人達がやって来たという事実はなし。ここでいなくなってしまったのではないかという結論になったようです」

その手に持つている書類はあの町で集めた情報だ。それを竜車の中で纏め、改めて確認する。こういう作業は茉莉の役割の一つ。後ろで支えていく事を主としている茉莉ならではの事だった。

しかしサブの二種がどちらにも上位とは驚きだ。

アオアシラは新米ハンターが相手にする事が多い牙獣種の一種であり、見た目は大きな熊と相違ない。種族名にも青熊獣とあり、見たままの通りだ。

森の中で暮らすモンスターであり、ハチミツを好物としているためハチミツを求めて森を歩き、ハチミツを持つ人を襲っていくという報告がある。

強靱な甲殻が覆われている前足に生える爪で獲物や敵を斬り裂き、その重い体で押し潰したりすることで攻撃を仕掛けていく。

だがその動きは読みやすく、新米ハンターが狩りの仕方を覚える相手としてよく知られている。アオアシラで動きと狩りというものを知り、クルペッコで飛竜との相手の仕方を覚える、といった具合で東方のハンターは成長していくのだ。



下位だったならばすぐに討伐する事が出来たろうが、上位ならばそうでもなくなりそうだ。

「それで、どちらから処理していくのです？」

「どっちでもいいんだけど……まずはやっかいなペッコ亜種から行きましようか」「わかりました。では——」

取り出した武器を背負い、二人は森の中へと入っていく。

これまで立ち入った者達の大半を行方不明——恐らく命を奪っていった魔の森。森には時折魔物が潜むと言われているが、この森もそうなのだろう。

二人はこれからその魔物へと挑む。立ち入った者ら全てを喰らってきた魔物へと。果たしてその魔物の正体は何なのか。そしてその魔物とどこまで戦えるのか。今、ここに戦場が成立する。

## 9 話

森の中を歩いていく二人は辺りを警戒しながら奥の方へと進んでいく。木々が静かにざわめき、自分達の抑えた足音だけが響く森。生き物の気配はほとんどなく、鳥たちの鳴き声も聞こえてこない。

ここまで静かだとまるで古龍種がこの森にいるんじゃないかと思わせてしまう。

しかし古龍種はいない。

奴らが持つ圧倒的な気配と威圧感はこの森にはない。あるのはただいつもと変わらないであろう森の雰囲気のみだ。

でもここには確かにいる。

この森に立ち入った者達を喰らった存在が。

だがそれらしき気配は感じられない。恐らく隠れる事には自身がある存在なのだろう。だからこそ誰にも気づかれずに獲物に接近し、奇襲を仕掛けて狩ってきたといったところか。

ならばこそ静かで周りに気配がなくともある程度警戒しなければならぬ。気づか

ない内に接近されて襲われでもすれば、その時点でもう死合終了だ。戦う前から負けてしまっているようでは話にならない。何のためにここまできたのかわかったものではない。

地図を確認しながら森を進み、クルペッコ亜種がいると思われる川へと向かっていく事にした。

クルペッコは原種も亜種も魚を好物とし、浅瀬を泳ぐ魚を捕食する姿がよく目撃されている。まずは捕食場として利用しているであろう川へと向かい、そこから上流か下流のどちらかへと進んでいきながらクルペッコ亜種の気配を探ればいいと判断した。

「ここまで静かな森つてのも珍しいわね」

「そうですねー。虫の羽音、鳥の声、モスやブルフアングもないとなれば何かありますね、これは本当に」

自主的に森から離れたのか、あるいは何かに捕食されたのか。

いなくなっている原因はこの二つが考えられるだろう。前者ならば先ほども考えたように古龍種がいるんじゃないかという事。

古龍種は飛竜や獣らと違って種としての存在が並はずれており、他社を圧倒する程の威圧感を放つ。それは本能に危機を訴えかけるには十分なものであり、また保有する力は軽く自然に影響を及ぼすものが多い。

そのため古龍種の接近を感じ取ったモンスター達は自ずと住処から逃げ出してしま  
う。

後者、すなわち捕食されたならばそれらしき跡が残つてもいいものだ。食べ残しの血  
肉、争つた形跡がどこかにあると思われたのだが、それも見当たらない。

また足跡も見当たらない。草むらの陰などに時折視線を向けているのだが小型モン  
スターの足跡がないのだ。これは本当にいなくなつてしまつてみるとみていいのだら  
うか。

そんな事を考えながら木々の間を抜けていき、ちよつとした広場に出る。

木々の囲まれたその広場にも木が点々と生えており、倒木も一、二本存在している。  
ここにきてようやく虫の羽音が微かに聞こえてきた。

「ブナハブラね。あそこらへんに巣があるのかしらね」

離れた所の木を中心として三匹のブナハブラが飛び回っている。視線を上へと向け  
れば枝の間に大きな巣が存在していた。恐らくあれがブナハブラの巣の一つだろうか。

ブナハブラはテリトリーを侵さなければ襲つてくるような事はないという習性を持  
つが、二人は火竜の力を持つているおかげで時折テリトリー外でもブナハブラに絡まれ  
る事がある。

恐らく二人の火の力に引き寄せられているのだろう。ブナハブラは熱や火に引かれ

る傾向があるのだ。

数メートルは離れているというのに気付かれたらしく羽音を立てて接近してきた。

「ほんとにこいつらは飛んで火にいる夏の虫ってやつね」

やれやれとため息をつきながら瑠璃は右手を掲げて火を灯す。それは一瞬で激しく燃え上がり、やってきたブナハブラ達を一瞬の内に焼き払ってしまう。

二人としては寄つてこられればこうして火炎を以つてして焼き尽くすのみだ。

数で攻められようとも火を操れる二人としては大した脅威ではない。とはいえそれは周りに何もなければの話だ。大型のモンスターを相手にしている際に絡まれば、多少はめんどうなことになる。

ブナハブラが集まっていた木には近づかず、周りの木々を調べるように見回つてみる事にした。するとそう時間をかけず茉莉があるものを見つけ出す。

「瑠璃、こちらへ」

「ん？　なんか見つけた？」

瑠璃が茉莉の下へと向かうと、茉莉はある一点を指さしてみせる。そこには足跡があつたのだ。傍には倒木があり、蜂が数匹飛び回っている。そして何か抉り取られたかのような痕が残っている。

推測するにここには蜂の巣があつたのではないだろうか。それをこの足跡の主がこ

の木から取っていった。こんなところだろう。

このような行為をする存在と足跡から考えれば、これの主はすぐにわかる。

「アオアシラがここにいたって事ね」

「でしようね。……ん、そんなに時間が経っていないかと思えます。だいたい……一、二時間程度でしょうか。食事をした事を考えれば周囲のエリアにいるかと思えますね」

足跡に軽く触れ、木の周りに落ちていたハチミツの粘度を確かめた茉莉がそう推測した。二人に寄って来ようとした蜂に軽い炎で牽制しながら茉莉を守っていた瑠璃も、倒木の近くにあった地面を確認する。

そこには何かが腰かけたかのような凹んだ部分があり、ハチミツはその周囲にぼたぼたと落ちている。ここでアオアシラがそのハチミツを堪能したのだろう。

そして食事を終えたアオアシラはここから去っていった。その足跡をたどれば恐らくアオアシラの下へと向かえる。

クルペッコ亜種を探しに来たが、先にアオアシラの手がかりを見つけてしまった。これは標的を変えるべきか。

「とりあえずこれの後を辿ってみようじゃない」

「そうですね。見つけてしまったからにはやらねばなりませんし」

時間が経てばたつほどのこの痕跡は遅れた情報になる。これを辿った先にまた何かが

見つければ、それだけアオアシラの居場所へと近づける。情報は鮮度が命、本来の予定とは違うがアオアシラもまた討伐対象なのだ。

二人は足跡が向かった先をめざし、草むらを掻き分けながら進んでいく。どうやら獣道になっているらしく、足元を纏わりついてくるような草や肌を刺すような鋭い草木があるため、気をつけても音を立ててしまっている。

身を守る防具が肌を傷つける事はないが、瑠璃の場合はへそ周りが網になっているために僅かに肌を切ってしまうようだ。

そんな獣道を抜けるとT字に分かれる道に出た。すぐに茉莉が足元を見回して足跡がないかを確認してみる。瑠璃は辺りを警戒し、何か小型モンスターがいないかを確認した。

「……………ここにもいないわね」

モスやブルファンゴもいなければ、こういう森に群れているであろうジャギイすらない。いや、群れじゃなくとも独り立ちして生きている個体もいるんじゃないかと思っただけがそれすらもない。

これは一体どういう事なのだろう、と考える瑠璃の傍で足跡を探っていた茉莉はアオアシラらしきそれを見つけた。地図を広げるとどうやら足跡が向かった先には川があるらしい。ハチミツを堪能した後は水を求めていったといったところか。

「……………」

そんな風に考えていた茉莉だったが、不意に離れた所にある地面に奇妙なものを見つけた。それに近づき屈みこんでじっとそれを見つめる。

それは足跡と言うより何かが這つていったかのような跡だった。自分達が歩いてきた側の草むらから向こうの草むらへとまつすぐに進んでいったらしい跡である。

「これは……蛇?」

軽くその後に触れてみながらその模様を確認してみる。獣でも竜でも人でもなく、ましてや足跡ではないそれは間違いなく生物がここを通過した跡だ。足を持たず地面を這うように移動する生物といえば蛇が頭に浮かぶ。

だがこの跡から考えられる蛇はただの蛇ではない。二、三メートルほどの大きさからして大蛇あたりがここを通過していったと思われる。

(大蛇……ふむ、謎の存在は大蛇? いや、それはないでしょう。ただの大蛇ならばハンターが遅れをとるとは考えづらいですね)

蛇、大蛇程度ならば普通に処理は可能だ。それよりも牙獣種や飛竜種の方が、危険度が上なのだから。とはいえ毒蛇ならば油断してしまえばいつの間にか接近され、噛まれてもすれば大変なことになるのだが、それは置いておこう。

大蛇ならば森の中に生息してもおかしくないし、こんなところでうろついていても驚



きはしない。

だがもしこれがただの大蛇の通過した跡でないとしたらどうする？

(森の中に生息する蛇竜種……いましたっけ?)

飛竜種のガブラスは足と翼があるため省かれるし、こんな所では見かけられない。多頭蛇竜種の代表格のヒュドラは砂漠などの乾燥地帯にいるし、響蛇竜ラテルヒュドラも同様だ。

しばらく跡を見つめながら頭の中の図鑑を思い返していくと、一つ森に生息する蛇竜種がいた事を思い出した。

毒矛蛇グレイハブ。

両頬と頭部に一つずつ剣のように鋭く尖った出っ張った鱗があり、尻尾の先も同じように刃状に伸びているのが特徴な大蛇だ。焦げ茶色が主体の斑模様を持ち、大きさは中型の鳥竜種ほどのものだ。とはいえその体長は大蛇だけあって十メートルを余裕で越える。

剣のような鱗を持つ点でグレイブ、そしてもう一つの特徴である強い毒性を持つ蛇ということで、ハブを掛け合わせたのがこの蛇の名称の由来だ。

性格はハブと同じく凶暴で、奴のセンサーに感知した物にはすぐさま襲い掛かっているのが特徴だ。

凶鑑で見た奴の横幅の大きさは二〜三メートルほど。この跡に一致する。

奴の性格を考えれば背後から襲い掛かって人を丸呑みする事など容易いだろう。そうでなくとも強い毒を吹きかけるだけでも人は死ぬ。だがこれはあり得ない。

その強い毒性だけに大地や草木も壊死させてしまうだけの力を持つ。ここまで来る途中でそれらしき痕跡は見られなかったので毒は使わなかったのか、あるいはこのグレイハブ自体いないのか。

何にせよこのグレイハブが有力候補に挙げられるという点で一つの収穫があった。それを瑠璃に伝えると、彼女もなるほど頷きながら唇に指を当てる。

「グレイハブ……か、有り得るわね。実際この跡もそれっぽいし……でもアオアシラが向かった先には進んでいないわね」

「しかしこの感じからしますとアオアシラがここを通った以前に通過したと思われるですね。推測するに深夜ここを通過したかと」

あまり食事をしなくとも数日はもつだけの生命力を持ち、活動範囲はテリトリーを見るか新たなテリトリーを求めて森を動き回るかぐらいなもの。

恐らく先日ここを新たなテリトリーとし、動き回っているのではないかと二人は推測した。そのテリトリーを犯したハンター達は全て丸呑み、モンスター達もどうように丸呑みしていき、その脅威にここから離れていった……といったところか。

だがそれでもこの森に滞在し続けるのがアオアシラとクルペッコ亜種。

クルペッコ亜種は飛んで逃げる事が出来るだろうが、アオアシラはなぜここに居続けるのだろうか。もし本当にグレイハブがここに居るのなら、アオアシラとて危険なはずだ。

となると……ここにいるのはグレイハブではないという事か？

(考えてもわかりませんね。この跡に関しては頭の中に置いておき、今は調査を続けましょう)

立ち上がって膝を軽くはたくと、瑠璃と共にアオアシラが向かったと思われる川へと向かって歩き出す。そう時間もかからずに川のせせらぎが聞こえてくる。

大きな気配は感じられない。どうやら川には誰もいないようだ。

足跡も砂利道に入ればなくなってしまう、足跡をたどる事はもう出来なくなってしまう。この川を渡っていったのか、あるいは上流下流のどちらに向かったのかはわからない。

手掛かりはここに途絶えてしまう。

だがここで諦めるわけにはいかない。

茉莉はまた手掛かりを求めて辺りを歩き始める。

すると一つ奇妙なものを見つけたのだ。

「これは……」

草むらの陰になって見えづらかったがそれは鉱石……いや、研磨された鉱物だった。

「なんか見つけたの？」

「ええ、これを」

それを拾い上げてまじまじと観察してみる。近くにはポロポロになっている何かが転がっており、それも手にして見比べてみると一つの物が頭に浮かび上がる。

「これは武器ですね。恐らく……片手剣の一種でしょう」

「武器？　ということとはハンターがここにいたって事？」

「恐らくは。……これは、そう……噛み砕かれ、しかし胃の中へと納める事が出来ず吐き戻したものの一部ではないですかね？　それが残骸となってここにあると思われれます」  
「つてことはこの近くに………ん、あつた」

武器だったものを観察しながら茉莉が言うと、瑠璃は辺りを見回し、そしてそれを見つめる。

乾ききっているがそれは間違いなく血痕だった。草むらにべつとりとついているそれは間違いなく血。その液体によって変色してしまっており、地面にもしつかりと残っているそれがここがハンターがやられた場所だという事を示している。

最近雨が降っていないために洗い流されることはなく、こうして痕跡を残してくれた

のは幸いか。

「これほどの血痕……間違いなく致死量ね。つていうか、周りに結構飛び散ったんじゃない？」

中心となる部分は被害者が立っていた場所だろうが、その周囲にも結構な量を噴き出したような痕が見られる。一体どうしたらこれほどの量を噴き出せるのだろうかと疑問に思ってしまう程だ。

「中心点が二つ……恐らく犠牲者は二人。こうして草むらの陰にあるという事はここに潜んでいたところを襲われたといったところでしょうか」

「足跡とかそういうものはないわね。消えてしまったのかしら」

襲った主の痕跡は見当たらない。だがどちらから襲ってきたかはおおよその推測は出来る。

「川にいる何かを待っていたか、攻撃を仕掛けるタイミングを窺っていたところをぱつくり、だとすると、こちら側からやって来たんでしょね」

川を正面に森を背面に。

そういう位置取りをしながら茉莉が推測を述べる。位置としては先ほど自分達が通ってきた方角だが、ここはさつき見つけた蛇が通った跡があった先。

すなわち蛇が進んだ先からこちら側へと向かってくる事が出来る。道なき道を音を

立てずに進んでハンター達の背後を取り、襲い掛かったと推測できる。

「となるとやはり謎の存在は蛇か蛇竜か。これは増々グレイハブが濃厚かしら」

「でしようか」

（しかし……奇妙ですね。ぱつくりと丸呑みした割にはなぜこんなに血痕が散らばってるんでしようね？）

丸呑みしたならば血はそんなに出るはずがない。口内で噛み砕いたというならばその口から血が出るだろうが、血の飛び散りようからこれは立っているところにぎつくりとやられた、と考えられるものだった。

となると丸呑みする前にその尻尾で攻撃を仕掛けた？ いや、戦いになっていないのにそれはないだろう。奇襲を仕掛けるならばそのまま捕食すればいいだけのはず。

（もしかして思い違いをしている？ やはりグレイハブではない何かがいるんでしようか）

そんな風に考え込んでいると、

「……………むっ？　あの気配は……………」

ふと何かが近づいてくるような気配を感じ、茉莉が空を見上げる。すると川の向こう側の空からこちら側へと向かって飛来してくる紅の影が見えてきたではないか。それは悠々と空を舞い、川を越えて二人がいる森の方へと飛び、森の中へとゆつたりと降下

していく。

「どうやらお出ましみたいね」

森の中にいたおかげだろうか。奴は二人の姿に気づかなかつたらしい。

二人はお互い領き合うと音を立てず、しかし迅速に森の中を駆け抜けて奴が降り立った場所へと向かっていく。気配は消されていない。奴は悠々と森の広場で羽休めをしている事だろう。

そこはさつきの広場と違い点々と木が生えているような感じではなく、森の中にぽつかりと空いたかのような広場だった。その中心に一際大きな巨木が生え、その空いた空間の空を覆うように枝葉を伸ばしているような感じだ。

つまり戦う場所はその巨木の周囲の空間という事になる。だがそれでも十分な広さを持つため、戦う分には問題なさそうだ。

原種もなかなか鮮やかな色合いをしていたが、亜種になれば紅を中心とした森の中では目立つ色合いをしている。クア……と欠伸をかましながら体を震わせ、時折草むらに嘴を突っ込んで何かをついばんでいる。

紅彩鳥クルペッコ亜種。

それが今、二人に背を向けてリラックスしていた。

仕掛けるならば今が好機。草むらから飛び出す体勢に移りつつそれぞれ武器を抜く

ように手を添える。クルペッコ亜種の顔が向こう側を向いた瞬間、先に飛び出したのはやはり瑠璃だ。

音も立てずに疾走し、ヒドウンサーベルの間合いに入った瞬間に跳躍してその背中を両断する勢いでそれを振り抜く。それは狙い通りクルペッコ亜種の背中を斬り、着地しながら両足を薙ぐように振り抜き、腹を裂くように斬り上げて離れる。

「クエエエエツ!?!」

突然の攻撃にたまらず悲鳴を上げ、羽をばたつかせながら瑠璃へと向くクルペッコ亜種の背後から静かに接近していた茉莉がその尻尾から背中へと貫くようにインペリアルガーダーを突き出し、更に引き金を引かれていたために銃口から溜められたエネルギーが充填されていき、指を離れた瞬間それが解放された。

斬られた部分が溜め砲撃によって焼かれ、追撃するように再度溜め砲撃が放たれる。

着地しつつインペリアルガーダーを素早く横に振り、ギミックを発動させて弾薬を装填。振り向きざまに薙ぎ払われるクルペッコ亜種の翼を感じ取り、盾を構えつつそれを受け流していく。

「クエツ、クエツ!」

茉莉に向かって嘴を何度も打ち下ろして攻撃を仕掛けていくが、全て見切つて盾を構えて防ぎきり、反撃としてその胸めがけてインペリアルガーダーを突き上げていく。



「ふっー」

胸、翼と何度も突き上げ、頃合いを見て後ろに下がって距離を取る。そのタイミングはぴったりだった。クルペッコ亜種が翼を打ち合わせたのだ。

クルペッコ亜種の翼の先には電気石があり、これを打ち合わせる事で電気を発生させる事が出来る。更に何度も打ち合わせる事で強い閃光を放ち、相手の目をくらませることも可能だ。

茉莉に気を取られた隙を狙って瑠璃が接近し、翼にある電気石を狙って斬り上げるもそれはクルペッコ亜種が僅かに身を逸らす事で回避した。それだけでなく後ろに飛び退き低空飛行をし始める。

ばたばたと羽ばたいて風圧を巻き上げながら離れた所で滞空するクルペッコ亜種は一度息を吸いこんだかと思うと、粘度のある液体を三つ連続して吐き出してきた。

それは酸に近い効果を含み、属性に対する耐性が弱体化する代物だ。あれを受ければ電気石が発する力のダメージも増加してしまい、こちらにとって不利な状態になってしまう。

「っー」

その軌道を見切り、瑠璃は避けるのではなく前に出ていく。身を屈めて頭上を通り越していく液体をやり過ぎし、再び跳躍しながらヒドウンサーベルを振り上げて斬りかか

り、クルペッコ亜種の頭上を取った。

だが、

「ケエエエエエエエッ!!」

その喉袋を膨らませる程の大きな息を吸ったクルペッコ亜種が咆哮する。クルペッコと違い喉袋が強化され、発声器官が発達しているおかげでバインドボイスを習得しているのだ。

「っ、く……!!?」

続けて攻撃しようとした瑠璃だったが、その咆哮の響きと本能に訴えかけてくる気に圧されて手を止めてしまう。クルペッコの亜種とはいえ、モンスターの発するバインドボイスは人族にとっては脅威だ。

理屈ではない。それは本能からくる恐怖で動きを止めてしまう。

それに抗うには耳栓スキルでバインドボイスを防ぐか、強靱な意志で抗うしかない。「ん、ぐぐ………オオオオオオオオオオツツ!!」

翼を広げて何とか羽ばたかせる事で体勢を立て直しながら、瑠璃はその恐れを吹き飛ばすかのように吼える。そうでもしなければ硬直したまま落下するしか出来なかった。そうなればクルペッコ亜種に追撃を受けていた事だろう。

実際クルペッコ亜種は硬直している瑠璃へと攻撃を仕掛けようとしていた。

「舐めるなあッ！」

彼女を蹴落とすかのように頭上を取りながらその足を振るう。硬直していたらそれによつて蹴落とされていただろうが、何とかそれをやり過ぎす事が出来た。

だが完全に頭上を取られ、体勢を立て直していく瑠璃をそのまま押し潰すように飛びかかつてくる。

それを後ろに飛び退いてやり過ぎし、地面に着地していくクルペッコ亜種へと茉莉が攻撃を仕掛けていく。下がった頭をピンポイントに突き上げるようにインペリアルガーダーを振るい、連続して引き金を引いて砲撃を加える。

「クエエツ!? クエツ、クエツ！」

一瞬悲鳴を上げたクルペッコ亜種だがすぐに攻撃態勢へと切り替え、翼を打ち合わせで電気石に刺激を与えます。そのまま茉莉を挟み込むように翼を打ち合わせながら前へとステツプした。

盾を構えつつ後ろに下がってやり過ぎすが、弾ける電気が盾にぶつかってくる。しかもクルペッコ亜種の攻撃は終わらず、またステツプしながら茉莉へと追撃を仕掛けてくる。

重量のあるガンランスを構えながらの移動は鈍くなるのが常だが、茉莉の怪力のおかげである程度は鈍さを感じさせずに動ける。

だがそれでも躲せるだけ凄い。二度目の攻撃もやり過ぎ、しかし三度目は追いつかれてしまい盾を構えてそれを受け止めた。そんな茉莉から自分へと意識を向けさせるために瑠璃が攻撃を仕掛けるも、クルペッコ亜種は尻尾を振ってそれを牽制しつつあらぬ方へと向き直り、羽をばたつかせながら走り出す。

逃げるつもりかと二人が後を追おうとしたが十分に距離を取ったクルペッコ亜種は振り返りながら電気石を打ち合わせ始める。そうして高められたエネルギーが弾け、周囲を多い尽くす程の強い閃光が発生した。

『ッ!?!』

咄嗟に目を閉じながら腕で庇う二人だが、暗くなった視界をも白く染める程の閃光は動きを止めるには十分なもの。耳に聞こえてくるのは軽快なりズムで歌うクルペッコ亜種の声。

何とか目を開けて奴を見れば、喉袋を膨らませて声を上げるクルペッコ亜種の姿があった。周囲には茶色い粒子が躍り、歌に合わせて増幅していきクルペッコ亜種の中へと浸透していく。

「防壁上昇の歌、ですね。少し厄介なことになりましたよ」

「でも関係ないわ。硬くなったって言うんなら、それをも斬る一撃をお見舞いするだけよ」

「…………ふ、流石ですね瑠璃。その脳筋さが今はありがたいですよ」

「…………褒められてる気がしないわね」

「褒めてますよー間違いないくそりやはつきりしつかりばつちり褒めてますよー」

「おい、はら」

ツッコミ入れようとしてくる瑠璃から逃げるように、今度は茉莉が飛び出してクルペッコ亜種へと向かっていく。指は引き金に当てられ、銃口からは少しずつ高められていくエネルギーが発生している。

当然正面から迫ってくる茉莉に気づかないクルペッコ亜種ではない。カツカツ、とまた電気石を打ち合わせ、あの閃光を再び発生させようとしたが、茉莉が軽く息を吸いこんで、

「ふっー」

勢いよく火炎を口から放出する。いや、別にリオレウスらと同じように体内の火炎袋から生成した火炎を放出したわけではない。口元に集めた火の粒子を着火させて放つただけだ。

だがその軌道、火炎の生成を効率よく行うためのイメージの助長として息を吸いこんで思いつきり放出しているだけにすぎない。何もない所から作り上げるのは難しい。それを助けるための鍵が必要なのだ。

それが飛竜らのブレスの前触れと同じ「息を吸いこんで吐き出す」というモーション。これを行う事ではつきりとした軌道を描いて火炎放射を行使する事が出来る。

クルペッコ亜種もまさかハンターが火炎放射を行使するとは思いもしなかったように、思わず動きを止めてその火炎をまともに浴びてしまった。

その隙を文字通り突き、溜められたエネルギーを解放させる。頭を狙って撃ち抜かれた溜め砲撃はクルペッコ亜種をノックバックさせるには十分なものだった。

また砲撃などの爆撃は相手が硬質化しようともどれだけ硬かろうとも、その爆風でダメージを与える事を可能とする。つまりクルペッコ亜種が先ほど自身を硬質化させたとしても、この砲撃を駆使すればダメージは与え続けられる。

すかさずクイックリロードをして一発装填し、今度は胸へと連続して通常砲撃をしかけ、またクイックリロード。最後に連続砲撃でよたついたところを溜め砲撃で締める。

そこでリロードをして弾薬を装填している間に瑠璃が合流し、ヒドウンサーベルに纏わせた気を解放するように翼から胸へと薙ぐような気刃を放つ。

「はあっー」

その気刃を牽制として懐に飛び込むと腹を斬り、両足を薙ぎ、ばたつかせる右翼の付け根と連続して斬りこんで錬気を溜めると、続けてそれを解放させるような連続斬りをお見舞いして錬気を解放させた。

黒い刀身に薄く纏われる白いオーラ。これが一段階目の解放を示すものだ。

連続して斬ったはいいが、やはり鱗や翼の硬度が上がっているのが刃を通して感じられた。ナルガクルガの素材を使用したこのヒドウンサーベルの切れ味の高さはいいが、かといって全てを斬れる程鋭いわけでもない。

それに太刀はその性質上硬い敵を斬るには向いていない。錬気を高めるために斬ってみたが、やはり気刃で斬った程の傷を負わせる事は出来なかった。

「閃剣——」

しっかりと大地を踏みしめながらヒドウンサーベルを握りしめつつ、一気に己の気を高めていく。褐色の彼女の気はヒドウンサーベルの刀身に纏われていき、高められた錬気と呼応して更に鋭い刃となる。

それを下段で構えながら身を低くし、振り向きざまにそれを一息に振り抜く！

「——かくげつしやう角月翔！」

ヒドウンサーベルの刃は腰を斬り、その刃から放たれた気刃が弧を描いてクルペッコ亜種の背中を切り裂く。その一撃は硬くなったクルペッコ亜種の毛を散らし、その下にある肉を裂いて血を噴き出させる。

「クエエエエッ!?!」

その痛みにたまらず悲鳴を上げるクルペッコ亜種に二人は容赦をするはずもない。

茉莉は側面に回り込み翼、それも電気石を狙って溜め砲撃を打ち込んでいく。とにかくこれを翼から離すか破壊しないと閃光を発生させられてしまう。

これを潰すだけでもこれからの立ち回りが良くなるのだ。チャンスがあるならば優先的に破壊しておきたい。

茉莉が左翼を、瑠璃が右翼を狙って攻撃を仕掛けていくが、クルペッコ亜種が体を震わせた後に息を吸いこみ、またバインドボイスの咆哮を上げる。それによってまたしても二人の体が硬直してしまい、咆哮に続けてまた喉袋を膨らませる程に息を吸いこむと、

「ヴオオオオオオオオオン!!」

獣のような声を辺りに響かせ始めた。それは森中に響き渡り、叫びに呼応して何かの聲が遠くから聞こえてきた。この森にいる獣といえばアオアシラぐらいなもの。

つまりクルペッコ亜種はアオアシラを呼び寄せたのか。

ターゲットが一堂に会するというのは喜ばしいものではあるが、しかし少々めんどろなことになる。な。

アオアシラがここにやってくると、二対二という構図になってしまい、それぞれ一人ずつ相手にする事になる。幸いなのが片方が飛竜ではないという事か。アオアシラならば一人でもなんとかなるかもしれないが、クルペッコ亜種を一人で相手にするという



のはめんどうだ。

ここはアオアシラが来るまでの間に一気に体力を奪っておきたい。

「——オオオオオオオオオツツ!!」

何とか体の硬直を強引に解いた瑠璃が、また吼えながらヒドウンサーベルを振りかぶるが、クルペッコ亜種はそれを回避するように後ろへと下がりながら再び翼を羽ばたかせる。それに加えて二人が接近してこないようにまたあの液体を吐き出してきた。

しかし近づかずとも攻撃する手段を瑠璃は持っている。

すうつと息を吸って呼吸を整えつつ気を落ち着かせ、上段に構えたヒドウンサーベルを素早く振り下ろして気刃を放つ。続けざまに斬り上げ、薙ぎ、また振り下ろしと繋げていき、連続して気刃を放つ事で攻撃の手をやめない。

低空飛行をしている敵には、閃光玉を投げて視界を奪いながら墜落させるのが一つの手段として挙げられるが、クルペッコ亜種の場合は奴自身が閃光を放つために耐性ががついている。

そのため墜落させようと思えば、飛ぶ気力を奪うだけのダメージを与えるしか出来ない。

飛来してくる気刃を避けようとするが体や翼を切り裂いてくるその刃に苦悶の声を漏らしていく。硬質化してもその気刃によって傷が増え、紅の毛に上乘せするように赤

が塗られていく。

「クエエツ、クエツ!!」

このままでは墜落してしまうと察したクルペッコ亜種は地面に着地するが、それを狙っていた茉莉がいつの間にかクルペッコ亜種の背後に回り込んでいた。ギミックを始動させて砲撃を切り替え、高められたエネルギーを一気に開放させる。

溜め砲撃よりも高い威力、ガンランスの最大攻撃である竜撃砲。

それが一番負傷している背中から腹へと突き抜けるようにクルペッコ亜種へと襲い掛かり、その体を一気に焼き、破壊していく。毛は焼かれ、肉は弾けとび、次々と血が噴き出すさまは痛々しい。

「グエエエエエエツツ!?!」

驚きと苦痛に悲鳴を上げるクルペッコ亜種だが、それでも奴は瀕死にはなっていない。竜撃砲は通用しているのだが、クルペッコ亜種の体力はまだ健在なのだ。嘴から吐息を漏らし、怒りの咆哮を上げるクルペッコ亜種の動きは少しずつ早くなり、背後にいる茉莉に向かって尻尾や翼を振りかぶって振り払おうとしていた。

インペリアルガーダーが竜撃砲を放った後の排熱モードに入り、砲撃の強い反動とクルペッコ亜種の咆哮で硬直していた茉莉であったが、自分に向かってくるその攻撃を察知して盾を構えて防ぎにかかる。

「——オオオオ」

「…………この声は」

盾を構えながら耳に入ってきた微かな声に気づいて茉莉が視線を動かし、声の出所を探る。気のせいではなければ間違いなくここにはいない何かの声がしたはずだ。

その声は少しずつここに近づいてきており、同時に気配も大きく感じられ始めた。

一度クルペッコ亜種から距離を取り、インペリアルガーダーを構えなおしながらある一点を見ると、木々の間を抜けながら一つの影が接近してくるのが見えた。

四肢を使つてなかなかの速さでこの広場までやってきたそれは瑠璃と茉莉、そして自分を呼び寄せたクルペッコ亜種を見回すと、のっそりと起き上つて二足で立ち、低く唸り声を上げる。

その外見は熊ではあるが、青と白い毛皮と甲殻に覆われ、特に前足は突起が付いた一際硬い甲殻が鎧のように覆っているのが特徴だ。

ハチミツを好物とし、東方の森の中でよく見かけられる牙獣種が一。

青熊獣アオアシラがついに姿を現したのだ。

「ヴオオオオオオオン!!」

両前足を振り上げて威嚇するように吼えるアオアシラ。それを見て瑠璃が軽く舌打ちする。竜撃砲でクルペッコ亜種に大きなダメージを与える事は出来たが、まだ完全に

追い込めるだけのダメージにはなっていないだろう。

どうする？ と視線を茉莉へと向けると、茉莉は小さく頷いて視線をクルペッコ亜種へと向ける。続けて瑠璃に視線を戻し、軽く小首をアオアシラへと振ってみせた。

それで瑠璃は茉莉が言わんとしている事を理解し、了解したと頷き返す。

ヒドウンサーベルを構えなおしてやってきたアオアシラへと接近しようとした瑠璃だったが、突如クルペッコ亜種が一鳴きすると強く羽ばたいて上昇し始める。

「なっ、逃げる気!?!」

「っ……」

瑠璃が驚き、茉莉が冷静にインペリアルガーダーを離してポーチの中へと右手を突っ込み、ペイントボールを取り出してゆっくりと空へと上がっていくクルペッコ亜種へと投擲した。

それは腰元に着弾して桃色の液体を付着させ、強い匂いを発し始める。どうやら無事にその効果を發揮してくれたようだ。

それにしてもアオアシラが乱入した途端に逃げるとは、どうやらクルペッコ亜種は最初からその予定だったのか、と茉莉は無表情ながらもクルペッコ亜種の行動に感心する。怒り状態になってもなお自分の身を守るために、アオアシラをけしかけて早々に退場とはいいい度胸している。

だがそれも自分が生き延びるための手段だ。十分に作戦としてはアリだろう。

それに茉莉達からすればアオアシラも討伐対象なのだ。ここで無視してクルペッコ亜種を追うなんてことは出来ない。

奴にはペイントボールをつけることに成功した。数時間はあの匂いと液体はクルペッコ亜種に付着したままだ。ここでアオアシラと交戦したとしても後を追う事は可能である。

「……仕方ないわね。さっさとこいつを殺つてしまおうじゃない」

「そうですね。少し切れ味を戻しておくんで、引きつけよろです」

「わかったわ」

インペリアルガーダーを拾い上げて広場の中心にある巨木へと後ずさりながら茉莉が言い、瑠璃はそれを承諾してアオアシラへと一気に接近していく。それを迎え撃つようにもう一度威嚇するように吼え、振り上げた前足を横から殴りつけるように瑠璃へと振り下ろしていく。

それを見切り、頭上を通り過ぎていく前足を感じながらその胸を斬り上げ、脇から横つ腹へと斬り下ろしつつ側面に回り込んでいく。

新米ハンターが相手にするようなモンスターとはいえアオアシラは熊であり、しかも上位個体だ。その前足の一撃はまともに受ければ人にとって致命傷になりかねない。

その鋭い爪もそうだが、重い一撃は十分に人の頭蓋を砕きかねないパワーを秘めているのだ。

油断する事なく着実に攻めていかねばこちらがやられる。瑠璃はその持ち前の速さでアオアシラを翻弄しつつ斬りかかる事にした。

そんな瑠璃の戦いを見守りつつ、茉莉は巨木の下でインペリアルガーダーに砥石を当てて切れ味を戻していく。先ほどの戦いでかなり砲撃をしたせいで切れ味が落ちてしまっている。

ガンランスはただ突くだけでなく砲撃をするだけでも切れ味を落としてしまう。ましてや竜撃砲をぶっ放せば一気にそれは下がる。そのため砥石は心もち大目に持ち込まねばならない武器なのだ。

水筒から水をかけて素早く刃を通して刀身を磨き、しかし視線は時折あの戦いへと向けてこちらに危害が来ないかを確認する。

そうしていた茉莉だったが、彼女のセンサーに奇妙な感覚が捉えられた。何かが自分達をじつと見つめていたようなそんな感覚だ。

それはかなり抑えられた視線で、しかも気配もほとんど感じられない程に薄いものだった。だがそれはすぐに消え去り、何事もなく霧のように存在感がなくなってしまう。

(……気のせい、でしたか?)

アオアシラがこちらに視線を向けたのか、あるいはクルペッコ亜種が離れた所からこちらを再確認したのか。それまではわからなかったが、たったの数秒の事だったために判別がつかなかった。

(今はこちらを優先させましょうかね)

気になるところではあるが今はあのアオアシラを処理しなければならない。これが終わればクルペッコ亜種の追撃だ。やる事は決まっている。

切れ味を戻したインペリアルガーダーを構えて立ち上がり、瑠璃を援護するために茉莉は走り出す。

○

「……………シュルル」

それは木の陰に身を潜んでその戦いを見つめていた。その姿は木の葉によつて覆い隠され、その体の鱗や甲殻も緑を主体とした森の緑に溶け込む色合いをしている為、気づかれない。

口から舌をちらつかせ、顔を上げて空を見上げる。遠ざかっていく一つの気配と、鼻

をくすぐるあの匂い。それを体の氣と舌で感じ取りながらどの方角へと消えていくのかを分析したそれは、木の幹に巻きつけていた尻尾の力を緩め、その手を幹に掛けて体の向きを素早く反転させた。

続けて太い枝に両手をかけて一気に反動をつけると、そのまま振り子の運動を利用してその体を宙へと舞い上がらせ、数メートルの空中移動を経てその尻尾を別の木の枝に巻きつけて続けて弧を描いてまた宙へと舞う。

そうして移動を繰り返しながらクルペッコ亜種の後を追うその狙いはただ一つ。

「シユルルル」

体を回転させ、両手と尻尾で体を支えつつ地面に着地し、今度は草を掻き分けるように素早くその尻尾を動かして獣道を突き進むそれは、獲物を見つけた狩人そのものだった。

そんな存在が今まで近くにいた事をあの二人はまだ知らない。



## 10話

「ヴオオオオオオオン！」

鼓舞するように吼えながらただひたすらに前足で瑠璃に殴りかかっっていくアオアシラではあるが、そんな単調な動きでは速さを売りにする彼女を捉えられなかった。

確かにパワーはある。あれを受ければただでは済まないだろう。

しかし瑠璃の目はしつかりとその動きを読み取り、どう躲せば当たらないかを見切っている。そして躲しつつヒドウンサーベルを振るえば、自然と瑠璃へと振るわれたその前足を自分で斬られにくいかの如く刃が毛皮を切り裂いていく。

「グルルルル……！」

側面に回り込んだ彼女を押し潰すかのようにダイブするアオアシラだが、それもまた素早く背後に飛び退いて回避し、顔を両断するかのようにヒドウンサーベルを振り下ろしてやる。

「ゴアアッ!? グオツ、ヴオオオオオオ!?」

額から鼻先にかけてぱつくりと開いた傷から血が噴き出し、鼻をつく鉄の匂いと視界

に薄く入り込む赤い液体に、アオアシラが興奮したように吼えながら顔を掻き始めた。そんな隙だらけなところを見逃さず、奴が苦手としている属性、火を作り上げてヒドウンサーベルへと纏わせていく。刃にあらかじめ己の気を纏わせる事で膜を作り上げ、その上に乗せるようにして火炎を操作していく。

「——すう」

ヒドウンサーベルを構えながら静かにそれを高めていく瑠璃を援護するべく、自分へと意識を向けさせるために、茉莉が側面からその横っ腹へと勢いよくインペリアルガーダーを突き出す。

刃は抵抗なくその毛皮を突き破り、その中の肉へと入り込んでいき、引き金を引けばその中で弾薬が弾けて追撃を与える。その痛みに苦悶の声を漏らすアオアシラだが、先ほどから昂っている感情をそのままぶつけるかのように、がむしやらに前足を振るって茉莉へと攻撃を仕掛けていく。

瑠璃と比べると遅いが、茉莉もまた冷静にその動きを見切っていた。先ほどよりも早く振るわれる前足を紙一重で回避し、受け流せるものは盾で流しつつ、カウンターを決めるようにその胸へとインペリアルガーダーを突き上げる。

「つと、危ない危ない」

振り下ろしからのバックナックルを放たれ、側面から吹き飛ばされそうになるのを盾

を構えながら地面を滑ってしまおうが、それを堪えて体勢を立て直す。盾を持つ腕が痺れそうになる程の強い力。流石は獣……熊というべきか。

遙か昔から山の主と言われ、人に恐れられてきた獣。今でこそ実力あるハンターならば容易に狩れる相手ではあるが、一般人からすれば未だに恐れられる獣だ。そのパワーと見かけに反した速さで仕留めてくる上に、一般人はそれに対抗する手段を何一つ持たない。逃げたとしてもほぼ間違いなく追いつかれ、捕食されてしまうのだから。

「ヴルルルル！」

舌を口から出し、涎を垂らしながら吼え続けるアオアシラの意識は完全に茉莉に向けられている。そのまま前足を地面につけ、四足の状態になると一気に地を蹴って茉莉へと突進を仕掛けてきた。

その巨体とは裏腹にかなりの速度で迫ってくるアオアシラをじつと見据え、奴の右側へとステップしてやり過ぎしながらまたその横つ腹へとインペリアルガーダーを突き刺す。

が、アオアシラもそれで終わらなかつた。ブレーキをかけて止まったかと思うとそのまますろへと飛び退ってきたのだ。重量感のあるその体が迫り、特にアオアシラの尻が茉莉の体を吹き飛ばそうと襲い掛かってくる。

「っ！…ふっ……！」

一瞬の判断で茉莉は己の体を強化させるべく気を巡らせ、特に盾を強化させて身構えた。その瞬間、盾に凄まじい力がかかつてその体がじりじりと背後へと押しやられていく。通常ならばその左腕が痺れるどころではなく、盾を構える事も出来ない程の重さがかかっているのだ。

例え怪力だとしても、アオアシラのその体重がかかった一撃を支えられる程ではない。気で強化していなければ嫌な音を立てて骨が軋んでいたかもしれない。

だがこの危機は逆にチャンスでもある。

アオアシラは今尻もちをついている状態だ。茉莉が引き付け、この状況を作り上げてくれた。それを逃すわけにはいかなかった。

「炎剣——」

体を低くして強く地を蹴れば、その姿は一瞬にして消え去り、彼女が通った後には燃え盛る炎の跡が尾を引いていく。それは一筋の軌跡を描き、気づけば瑠璃はアオアシラの側面で跳躍していた。

振り上げたヒドウンサーベルをアオアシラの肩に狙いを定め、ただ斬る事だけを念頭に振り下ろす。

「——爪刃斬！」

左肩から腹へとかけて袈裟斬りにされたアオアシラはその口から勢いよく血を噴き

出し、ぐらりと体を傾かせる。左前足はだらんと垂れ下がり、動かす事もままならない。斬られた傷は炎によって焼かれ、強引な止血はされているものの致命傷だった。

「ヴ、ヴォ、ヴォオオオオオオ……！」

それでもアオアシラは残った右前足で自分を斬った瑠璃に一矢報いようとした。残った力をその一撃に籠めるかのように右前足を振り上げ、瑠璃に向かって叩き落とす。

普通ならば躲せただろうが、アオアシラを致命傷へと至らしめた一撃の硬直があったために、それを躲す事は出来なかった。反応し、それに対して何とかヒドウンサーベルを立てて気を巡らせる事で防御する事のみ。

しかしそれでもアオアシラのその一撃は瑠璃を吹き飛ばすには十分なものだった。まるでボールのように吹き飛ばされた瑠璃を見た茉莉はその無表情に僅かに羨みを浮かばせ、インペリアルガーダーを握りしめて立ち上がった。

「終わらせませすー！」

致命傷になっっているアオアシラの左胸を狙うために回り込み、引き金を引き絞りながら刃を突き出した。それは傷口を更に広げるかのように肉へと沈み込み、その先にある生命にとって大事な内臓付近まで届く。

それを吹き飛ばすべく指を離せば、溜められたエネルギーが解放され、それが決め手

となった。

心臓を吹き飛ばされたアオアシラは呻き声を漏らしながら横倒しに倒れ、それでも何とかもがこうとしたがやがて力尽きる。ずぶり、と音を立ててインペリアルガーダーを引き抜いた茉莉は一息つくつと、吹き飛ばされた瑠璃の方へと振り返った。

(流石は上位個体、といったところですか)

まだ僅かに痺れるような気がする左腕を気にしながら、インペリアルガーダーを背負って走り出す。

瑠璃の姿はすぐに見つかった。何とか受け身を取る事は出来たらしく、立ち上がった軽く体をはたいている。そしてヒドウンサーベルを地面に置くと、軽く体をほぐすように伸ばしたり屈伸したりし始めた。

それでどこかが特に痛むのかを把握し、ポーチから回復薬を取り出して手当の準備を始める。

「左腕、大丈夫なの？」

「ええ、何とか。とはいえ念は入れておきますが」

茉莉も同じように手当の準備を進め、レウスアームを取って回復薬を使っていく。濡らした布で一度痛むところを当てていき、続けてテーピングをして戦いに支障がないようにしておく。

茉莉も同じように痛む場所に回復薬を当て、残りは飲み干して体の中から治癒力を高めていく。

そう時間もかけずに手当てを済ませると、ある程度は痛みも和らいで気にならなくなってきた。元から他の人達と比べて自己治癒力が高く、痛みに慣れているために最低の応急処置で済むのが二人だ。

だがそれで手当てを放置しては戦いに支障が出る。だからこそ応急手当はハンター達と同じく行う。それぞれ体を動かしてみても問題なしと判断すると、倒れ伏しているアオアシラに向かっていき、剥ぎ取りナイフを取り出して素材を剥ぎ取っていく事にした。

それも数分かけて行い、使えるものはあらかじめ剥ぎ取ると一度黙禱を捧げてその場を離れる。

「さて、匂いを辿る前に……ヒドウンサーベルを研がなくていいんですか？」

「……そうね。結構斬ったしやっておくか」

「それがいいですよ」

クルペッコ亜種にアオアシラ、炎剣とかなり使いまわしてきたために切れ味が結構落ちているのは間違いない。座り込んで砥石と水筒を取り出した瑠璃の傍で茉莉はポーチから携帯食料を取り出し、別の水筒を取り出してドリンクを用意すると簡単な食事に

する。

一定のリズムで刃を研いでいく瑠璃もいつの間にか携帯食料を口に含み、それを食べながら切れ味を戻していった。

そう時間もかけずに切れ味を戻し、刃を森に差し込む太陽の光を当てながら確認して鞘に収める。これで戦う準備は整った。後は逃げていったクルペッコ亜種を探し出し、完全に討伐するのみ。

それが終われば中断していた謎の存在についての調査とその討伐だ。

ペイントボールの効果はまだまだ余裕がある。集中して匂いを探れば、すぐにあの独特の匂いが感じられる。それを辿っていくだけの簡単な追跡だ。

何も問題はない。

その時は、そう思っていた二人だった。

離れた所で着陸し、負傷した体を癒す為に気分を落ち着かせて休息体勢に入るクルペッコ亜種を観察するそれは、静かに草むらに身を潜めていた。あの二人が付けたペイントボールの効果は、それに対しても位置を知らしめることになってしまっていた。

それが持つ感知センサーの高さはその種族の特徴であり、狙った獲物は逃がさないという執着心もまたその種族の特徴に現れている。弱っている獲物ではあるが、それでも



獲物は獲物だ。

その命を狩り、糧とする事が出来るならば何も問題はない。

静かに前進し、クルペッコ亜種の背後に回り込みながら手ごろな木を捜し、その幹に手を添えて素早くその身を枝の上へと躍らせる。

漆黒の瞳はじつと獲物の動作を観察するだけでなく隙を見逃さない。だがその目は遠距離の様子を完全に捉えきれ程発達しているわけでもなく、絶え間なく舌を動かしてそれが捉える情報で状況を分析していた。

好機となればすぐにでも襲い掛かれるだけの前準備は怠らない。既にその尻尾は収縮しており、バネの要領でその身を弾丸のように飛びださせるだけの力を溜めこまれていた。

「クア……」

「——ッ！」

今、クルペッコ亜種が欠伸をした瞬間を見逃さず、縮んだ尻尾が一気に伸び、その緑の体が音もなく空を奔る。ぐっと引かれた右腕の先には鋭い爪が伸ばされ、あの命を貫かんと狙いを定められている。

十メートル近くはあつたろう距離が一気にゼロへと縮められ、その凶刃はクルペッコ亜種の翼を貫くだけでなく胸にまで届いた。

「クエエエエエエエエエエツ!」

「シユルル……!」

本来ならばその細い首を刎ねるつもりだった。狙いが狂った事にそれは小さく呻くが何も問題はない。着地しながら体を捻って尻尾をその首に巻きつけ、ぎりぎり強く締め上げてやる。

首を絞められたことでクルペッコ亜種の嘴から苦しげな声が漏れるが、それでもクルペッコ亜種はもがく。何とか翼を動かすと何度も電気石を打ち合わせて強い閃光を引き起こした。

「……ッ!」

それを見てしまった事で声にならぬ悲鳴を上げてしまい、尻尾の力が弱まってしまった。これを好機とばかりに尻尾めがけて翼を打ち合わせ、強い電気を発生させる事で尻尾にダメージを与えて振りほどこうとするクルペッコ亜種。

「シヤアアツ!」

だがそれは尻尾を離す事はなく、逆に強く締め上げていく。それだけでなくその尻尾の力と腹筋を利用してその体を起こし、その勢いを利用して手を突き出してクルペッコ亜種の顔へと殴りかかった。

視界は一時的に潰されているが、それは舌を動かしながらクルペッコ亜種の顔の位置

を割り出して殴ったのだ。それで位置を完璧に把握したそれは、続けてその顔へと噛みつきにかかると。

「クエエエツ!? クエツ、クエエエエエエ!?」

今もなおギリギリと締め上げてくる尻尾に加え、顔の側面から一気にその顔を丸ごと呑み込まんとするその口の動きに更に命の危機を感じ取る。だがもがいても離れない尻尾に、顔に張り付かれては自分の攻撃手段など完全になくなったも同然。

呼吸が上手くできないために咆哮も出来ない。

手詰まりだった。

しかも食い込んでくる牙には毒があるらしく、顔半分の感覚がなくなってきた。しかも呼吸が止まっていき、もがく力もなくなってしまう。

やがてそう時間もかからず、クルペッコ亜種の目に光はなくなり、がくと首を垂れるしかなかった。体を支える足の力もなくなってしまう、ゆっくりと地面に倒れ伏すクルペッコ亜種から離れたそれは、軽く顔を振って閃光によって潰された視界をゆっくりと取り戻していく。

完全に死んだ事を確認し、呼吸を止めるだけでなく首の骨をへし折ってしまった尻尾をゆっくりと首から離すと、爪を振り上げてその首を切断してしまう。

体から離れてしまったその頭をゆっくりと口内へと納めていき、軽く咀嚼しながらク

ルペッコ亜種の血肉を堪能する。

「……………」

ふとここに近づいてくる気配を感じ取った。それが二つだったため恐らくあのハンター達だと感じ取ったそれは残った体の部分を一瞥し、しかしすぐに判断を下してその身を再び草むらへと隠していく。

モンスターは血肉も糧とはなるが、それよりも人族の……それも若い女の血肉は他のものよりも一層美味である事をそれは知っていた。ならば、ここは一度退き、襲撃のタイミングを窺った方が得策だと判断したのだ。

現場にやって来た二人は啞然とするしか出来なかった。それも当然だろう。何せさつきまで生きていたはずのクルペッコ亜種がどういうわけか死んでいるのだから。

頭を失い、何か鋭いものによって切断されたと思われる首からはまだ血を垂れ流している。また右翼から胸にかけて何か鋭いものによって貫かれたと思われる傷がある事にも気づき、これは件の謎の存在に襲われたとみて間違いないだろう。

だがこの貫かれた傷、というのが茉莉をまた思考の渦へと貶める。

あそこにあつた蛇の通った跡が謎の存在のものだとするならば、この貫いた傷は何によつてつけられたのだろうか。傷口から見てこれは明らかに爪痕だ。鋭く伸びた爪で翼、果ては胸まで刺し貫いたのだろうか。

また近くには明らかに蛇の尾によってつけられた跡が地面に残されている。しかも突然ここに舞い降りたかのような跡であり、これは恐らく離れた所にある木から一気に飛び出してきたものと考えられた。

（蛇の尾を持ちながら爪痕を刻む事が出来る存在？ そんなものが——いた……！）

近年になって確認された蛇竜種の中でも特異とされる存在。蛇という特徴を残しながら、突然変異としか思えない進化を遂げた種族。

主に森の中や荒野に確認されるものの、その闘争本能から数多くの調査隊を葬り、その存在をギルドに情報として届ける事が長年出来なかつたと思われたその蛇。

そしてそれが恐らく今近くにいる事だろう。クルペッコ亜種を完全に食べることなくこの場を離れたとするならば、自分達がやって来た気配を感じ取つたに違いない。

「瑠璃、気をつけて！ 恐らくこの近くに——」

そう叫んだ茉莉の視界の奥に、ぎらりと鈍く光る一対の瞳が草むらの奥にある事に気づいた。奴はじつと自分達、特に周りをクルペッコ亜種の死体の周囲を調べていた瑠璃を睨んでいる。

「え——っ!？」

茉莉の叫びに顔を上げてその視線が茉莉へと向けられた瞬間を狙つたのか、あれは勢

いよく草むらから飛び出して瑠璃へと向かっていった。その際に奴の気が漏れたのか、あるいは命の危機を第六感が感じ取ったのか。

瑠璃は反射的にその場を飛びのいた。体術も何もあつたものではなく、ただ後ろに向かつて勢いよくダイブするだけだったが、そのおかげで奇襲を仕掛けてきたそれから逃げる事が出来た。

素早く転がりながら起き上り、背後を振り返つて自分を襲つてきた存在を見た瑠璃はただ驚きに言葉を詰まらせる。その目にあるのは、「どうしてあれがここにいるのか」という事だ。

それは確かに蛇の特徴がある。だがそれは下半身のみ。腰から下は緑と土色の鱗がびっしりと覆われ、長さは目算で二〜三メートル程はあろうか。

では上半身はどうなっているのか。

その顔は蛇の特徴を残しており、側頭部には数センチの竜の角のような鋭い突起が生えている。そのまま視線を下に下げれば、後頭部からずらりと生える背びれを有した少し長い首があり、肩と胸がそこにあつた。それはまさしく蛇にはないものであり、逆に大抵の陸上生物ならば持ちうる身体の一部。

生物としての上半身がそこにある。

「シュルルル……」

口から舌を出し入れしながら奴は軽く体をほぐすように首を左右に振り、両手に伸びる爪を軽く音を立てながら打ち合わせていた。上下に打ち合わせたり、あるいは爪同士を合わせたまま横にスライドさせて磨いたりとしながら視線を瑠璃、茉莉と交互に見やっている。

もう隠れる必要がないと判断したのか、まるで観察するかのよう<sup>に</sup>余裕を見せて二人の出方を窺っている。

闘蛇とつだナーガ。

それが奴に付けられた名だ。

それはただ捕食するというだけでなく、奴のその闘争心にこそつけられた名。その特異な進化によって得た両手、その尻尾を駆使して敵を追い込んでいく程のパワーと闘争心により、調査隊やギルドナイト達をことごとく葬ってきた過去がある。

戦いを好み、敵を観察して状況を把握する思考力、敵が強力ならば昂る性格とまさに戦う者としての在り方を見せたその姿。

それこそがナーガの一番の特徴だった。

「闘蛇ナーガ……よもやこんなところにいるとは思いませんでしたよ」

「やばいの？」

「個体差によりますが……やばいんじゃないですかね？ いったいいつからこの世界に

存在しているのか知りませんが、近年ようやく情報が集まってきた種族で多くのハンターやギルドナイトを返り討ちにしてきた存在ですよ」

「へえ……それはやばいわね」

冷や汗を流しながらも瑠璃は小さく唇の端を歪めている。その手はしつかりとヒドウンサーベルの柄へと当てられており、いつでも抜ける状態にあった。どうやら退くという選択肢はないらしい。

まあ、それしかないだろう。

ついにメインターゲットが現れたのだ。戦わずして退くという選択肢は二人にはない。

謎の存在がナーガであると判明した以上、その特性からしてこのまま放置するということ事は二人の心が許さない。こいつをのさばらせておけばこの先も多くの犠牲者を生み出してしまふ。それは避けなければならない。

それにギルドナイトが向かってきていると聞いているが、ナーガという種族はそのギルドナイトを返り討ちに出来るだけのポテンシャルを秘めている。

このナーガの実力がどれほどのものかは完全に把握できないが、刃を交えればある程度は把握できるだろう。ここは一度やり合ってみなければならぬ。

例え討伐に失敗して撤退したとしても、ナーガである事とその実力を伝える事が出来



ればいい。

とりあえずやるだけやってみるしかないか、と茉莉はインペリアルガードに手を伸ばし、身構える。そんな様子を観察していたナーガは、僅かに目を細めて伸ばしていた爪を一旦短くし、軽く音を鳴らすようにして手を開閉させる。

その様子がまるで嘲笑しながら挑発しているかのように見えた瑠璃はぎりつ、と歯噛みしてヒドウンサーベルを抜き放ち、一瞬にして気を纏わせてナーガに向けて気刃を放った。

これまでたったの数秒。

挑発に乗った事とはいえ、まだ飛び出して斬りかかっていった、ということをしなかつただけでも瑠璃は抑えた方だろう。だがその攻撃は見事な速さだ。突然の攻撃にナーガも一撃は貰っただろうと思われたのだが、

「……………」

ナーガを袈裟斬りにするはずの気刃は、尻尾を動かして上半身の体勢を崩さずに斜め後ろに蛇行するだけで躲された。その行動に驚きを隠せないまま、ナーガはまたにやりと笑ったかのように口を歪ませながら着実に二人へと距離を詰めてくる。

「シャアッ！」

尻尾を巧みに使い、軌道を読ませないようにしながら接近してきたナーガの素早い右

突き。それを瑠璃は一度距離を取るように後ろへと飛んだが、ナーガはそれを把握したように次の攻撃を放っていた。

何とその場で尻尾をぐるんと回転させて、着地しようとする瑠璃の足元を刈るように薙ぎ払ったのだ。

「くっ……っ!?!」

何とか翼を広げて羽ばたき、着地する事なく滞空する。それによって足払いを受ける事はなかったが、更にナーガは攻撃を繋げていく。前のめりに倒れながら両手を地面に付けて体を支えると、そのまま下半身を上上げて回転する。

そうすれば長い尻尾は遠心力をつけて滞空している瑠璃へと、まるでしなる鞭のように襲い掛かっていった。

「が……っ!?!」

避けきれずにその一撃を受けてしまい、瑠璃の体が吹き飛ばされてしまう。「瑠璃!?!」と叫ぶ茉莉だったが、ナーガの視線がその叫びに反応して距離を詰めてきていた茉莉に向けられた。

一度牽制するように茉莉にも尻尾を振るうと、両手で一気に地面を押しやる事で一度宙に舞い、砂煙を小さく巻き上げながら着地する。

「牽制ならばいっちらも……っ!?!」

自分の周りに火球をいくつか展開させて一気に放出する。小さなボールほどの大きさの火球がナーガを取り囲むようにして向かっていき、突然の炎に小さな驚きを見せるナーガはそれによって動きを止めてしまった。

大きさが大きさのため大したダメージにはなっていないだろうが、ナーガが動きを止めてくれればそれでいい。これを機に茉莉は一気にナーガへと距離を詰め、インペリアルガーダーを突き上げてその胸を貫かんとした。

しかし刃は薄くしか胸を貫かない。その鍛えられた胸筋が磨かれた刃を防ぐほどに硬いのだ。ならばと引き金を引いて砲撃するが、ナーガはそれに怯むことなく右腕を振って茉莉を弾き飛ばそうとした。

それは構えられた盾によって衝撃を殺されるが、それでも彼女の体は数メートル地面を滑ってしまふ。しっかりと大地を踏みしめて防御体勢を取ったというのに、ここまで滑ってしまうとはどれだけのパワーを秘めているというのか。

アオアシラ以上の力にまたしても左腕が痺れてしまい茉莉は無意識に唇を噛みしめる。だが奴の攻撃は終わっていない。盾の陰からナーガを見ると、インペリアルガーダーを握りしめている右腕を狙って左手を引き、突き出そうとしているところだった。

咄嗟に盾でそれを防いだ茉莉だったが、素早く左腕を引いて右腕を素早く突き出して茉莉の側面から腹を狙った一撃を放ってきたのだ。

(フエイント!?)

躲す事など出来るタイミングじゃなかった。このままでは爪によって貫かれる、と感じた茉莉がこの短い時間の中で出来た事は、縦に持っているそれを横向きにして何とか防ぐことだった。

だがナーガの爪は盾を僅かに貫通し、茉莉の左腕のレウスアームを削り取っていく。

「シユルル……!」

仕留めそこなったか、と唸るナーガだが素早く右手を引いて目障りな盾を茉莉の手から離すべく、引いた左腕を勢いよく振り上げた。横向きにされた盾を空へと舞い上げるべく放たれたアツパーは、ナーガの狙い通り茉莉の手から離れてしまった。

がら空きとなつてしまった茉莉に引導を渡すべく、とどめの一撃を放たんとするナーガ。しかし茉莉はまだ諦めていない。ここで死ぬわけにはいかないと右手に持つインペリアルガーダーの銃口をナーガへと向けた。

そこにはエネルギーが溜めこまれており、引き金に当てていた指を引けば溜め砲撃がナーガの顔面で爆発する。

「シヤアアツ!」

突然の反撃にたまらず悲鳴を上げ、その隙に茉莉は横に飛んでナーガから距離を取った。盾は彼女から左側数メートル先に転がっており、すぐにそれを回収して構えなお

す。

「シャルアア——っ!？」

茉莉を追おうとしたナーガではあるが、接近してくる瑠璃を感じ取って振り返る。そこにはヒドウンサーベルを振り上げる瑠璃の姿があった。防御体勢を取るのかと思いきや、また尻尾を巧みに使ってひらりと躲し、だがそれでも瑠璃は攻撃の手を止めない。振り下ろしたヒドウンサーベルをそのまま突き出してナーガの腹を貫こうとするも、インペリアルガーダーと同じく浅くしか貫けない。

しかしそれでもいい。

牽制するようにヒドウンサーベルを振るいながら距離を取るようになり、しかしそれを逃さないようにナーガが縮めた尻尾を伸ばす。それに従って上半身が瑠璃へと迫り、大きく開かれた口が瑠璃を噛み付こうとしている。

「ちいつ……いっ！」

咄嗟に足を爆発させ、その爆風を利用して体を浮上させた上に翼を羽ばたかせてナーガの頭上へと逃げる。ガチン、と歯が打ち合わされたような音を響かせたナーガが、じろりと頭上を見上げながら体を戻していき、滞空している瑠璃を観察しながら舌を震わせる。

（なんて奴……これがモンスターだったの？ まるで武術を高めた人みたいじゃない

!?)

隙を窺い、足払いや得物を狙って相手の守りを崩し、がら空きになったところを狙う攻撃。かと思えばその力に物を言わせて強引に突破したり、あるいはその尻尾を使った奇襲を行ったりと技も多彩。

攻撃だけでなく守りも見事なもの。刃を通さない筋肉にこれまた尻尾を使った回避術。

まるで武術の達人を相手にしているかのようだ。

二人の顔に苦い表情が浮かび、改めてナーガという存在に恐怖して冷や汗を流す。そんな感情の揺らぎを感じ取ったのか、ナーガはまた嘲笑するように口元を歪めながら両手の爪を伸ばしてまた打ち合わせる。

「シユルルル……シヤルア！」

首を揺らしながらまるで舌なめずりするように、打ち合わせた右手の爪を口元に近づけながら滑らせていった。それもまた嘲笑であり、加えて挑発だった。

お前たちなどに自分が殺せるものか。

じつくり嬲るようにして仕留めてやろうか？

そんな風にあの見下したような目が語っているかのようだった。

当然瑠璃の顔に朱が入り、ぎりぎりど歯噛みしながらヒドウンサーベルを握りしめて

いる両手が震えている。今にも飛び出しそうな彼女に茉莉が気づかないはずがない。

「瑠璃！ 堪えてください！ そんなことしてもあれには通用しませんよ!」

「——ッ、わかつてるわよッ!」

声を荒げながら返す瑠璃ではあったが、あのまま声を懸けなかったら本当に滑空して斬りかかっていきそうな雰囲気だった。瑠璃が来なかったことにナーガは「ケツ」と舌打ちするかのように鳴き、軽く息を吸いこみ始めた。

「カアアアア!」

紫色の異臭のするガスが放出された。その色合いと匂いから明らかに毒ガスである事が容易に察知できる。鼻と口を押えながら二人はナーガから距離を取るのだが、当然ナーガはそのガスを突き抜けて二人へと迫ってくる。

狙いを定めたのは茉莉だった。素早く蛇行しながらどちらから攻撃を仕掛けていくのかを悟らせず、タイミングを見計らって尻尾の筋肉だけで低く跳び上がり、また軽く息を吸って茉莉へと毒ガスを放出していく。

どうやら茉莉が武器のせいで瑠璃よりもスピードがないという事を理解したらしい。その読みは当たっているが、それでも茉莉もまた家族のハンターと同じく、スピードがあるという事はナーガは読めなかったようだ。

狙いを定められたと察知した茉莉は防戦に回るために、素早くインペリアルガードー

を背中に戻していたのだ。インペリアルガーダーを構えない事で体にかかる負荷はある程度軽くなる。

その上で回避に専念すれば、

「……………」

毒ガスを吸わないように守りながら茉莉はナーガに背を向けて疾走する。助走をつけて飛翔し、距離を取ってからナーガに振り返れば、着地と同時に両手を地面に付けて逆立ちし、そのまま勢いを殺さずに両腕の力で飛び上がった。

「なっ!?!」

そのまま体を縮めて前転したまま茉莉へと迫ってくるのではないか。狙いも正確でその体全体での体当たりで茉莉は反応が遅れてしまい、左手に持つ盾を構えて気を込めるしか出来なかった。

そんな彼女へとナーガは体全体でぶつかり、茉莉の防御に亀裂を入れる。勢いの乗ったナーガの回転アタックは、防御力を高めた茉莉の体勢を崩すには十分な威力を持っていた。それに茉莉の左腕はナーガのパワーによって少しずつダメージを蓄積させているのだ。ここで全身の体重とパワーを乗せた一撃を完全に防ぎきれるものではなかった。

盾に当たって弾かれたナーガはもう一度勢いをつけて前転し、強くしなった尻尾が茉



莉を地面に叩き落としてしまう。

「かつ、は……!!?」

受け身も取れずに地面に落下してしまった茉莉は空気の抜けたような声を漏らしてしまった。ただ落下しただけでなく背負っているインペリアルガーダーの事もあり、体にかかったダメージは前後から来てしまっている。

レウスシリーズの守りがあるとはいえ、これは厳しいダメージになってしまった。

「茉莉ッ?! くつ、このおおおおおおお!!」

「シユルルル」

茉莉を叩き落されたことでついに堪忍袋の緒が切れてしまったのか、ヒドウンサーベルを振り上げる茉莉の顔は烈火の如く染まり、怒りに塗られている。そんな彼女の怒りに呼応しているのか、ヒドウンサーベルには轟々と燃える炎が纏われていた。

今まで以上の速さでナーガに迫る瑠璃を見てもなお、ただナーガは冷静さを保ちながら構える。

すれ違いざまに辻斬りするかのようには振り抜かれたヒドウンサーベルは、またしても蛇行するだけで回避されてしまった。いや、今度は完全に回避しきれていなかったらしい。その腹が薄く斬られ、その周囲が焼かれている。

続けて振り返りながら薙ぎ払ってみせると、両腕を交差させてヒドウンサーベルを受

け止めてみせた。すかさずその刃を掴み、ぐんつと引き寄せながら地面に落として瑠璃の体勢を崩させる。

当然掴んでいる手は紅蓮の炎に焼かれているだろうが、その熱さなど気にした風もなくナーガはただ瑠璃を攻め立てるのみ。

「く、のおおおッ!」

体勢を崩した瑠璃だがすぐに踏ん張って地面に倒れるようなことはせず、ヒドウンサーベルを引き戻そうとするのだが、当然ながらナーガのその力に敵うはずもない。ならばとヒドウンサーベルを纏わせている炎を強くさせ、それだけでなくそれを操作させて腕、胸、顔へと炎を伸ばしていった。

「シユルアッ!?!」

まるで意志を持っているかのようにナーガへと迫っていく炎にナーガは驚きの声を漏らしたが、それでもヒドウンサーベルを離すようなことはしなかった。

「シヤルアアアアア!」

ヒドウンサーベルを抑えつけたまま空いた左手で瑠璃を串刺しにせんと攻撃を仕掛ける。炎に焼かれようとも攻撃する意思を消さないナーガのその執着心は、敵ながらあつぱれもの。

目の前に獲物があるならばその命を狩り尽くす。

ナーガはまさしく狩人ハンターそのものだ。

だからといって大人しく狩られてやるほど瑠璃は落ちぶれてはいなかった。どうあつてもヒドウンサーベルを離さないというならばそれでもかまわない！

「ッ！」

瑠璃は握りしめていたヒドウンサーベルを離し、両手に気を込めながら自分に伸びてくる左手を体を捻って回避。そのままナーガの側面に回り込みつつ距離を詰めた。

「——っ!？」

「あの人直伝の技をその身に受けてみなさい！」

圧縮した気を右手に収束させ、それをナーガの体に殴りつけながら解放させる！

「闘吼破！」

轟ッ！ と音を立てながらナーガにぶつけられた気——それも闘気はナーガの鱗を突き抜けて内部にまでダメージを伝えていく。思わぬ攻撃とその闘気の勢いにナーガの体は数メートル吹き飛ばされてしまった。

すぐに体勢を立て直したようだが、それでも突き抜けた衝撃はナーガにとつては思わぬダメージだったようで、左手でその部分に触れてダメージを確かめている。

その隙に落としたヒドウンサーベルを回収した瑠璃だったが、その刀身を見て軽く舌打ちしてしまう。

どうやら思った以上に火炎の威力を上げてしまったようで、若干刀身が焼けてしまっていた。怒りに任せて炎を操った影響は免れず、ヒドウンサーベルを自分で余計に傷つけてしまったらしい。

ちらりと肩越しに茉莉に振り返ってみると、彼女は何か起き上っていたようだ。しかし体にかかったダメージは確実に彼女からスピードを奪っていた。ここは一時撤退して体勢を立て直したいところではあるが、果たしてあのナーガが大人しく見逃してくれるのか？

答えは否。

二人に休みなど与える事などありえない。

確実に追いかけてきて追撃を加えてくる事だろう。完全にナーガは二人を次なる獲物として認識しているはずだ。

(なにか突破口があれば……！ それさえあれば撤退できるはず！ ……でも、どうやってそれを作り上げたらいいの?)

ヒドウンサーベルを構えながらナーガの様子を窺いつつ、茉莉を庇うようにすり足で位置を取っていく。ナーガもダメージの確認を終えたらしく、舌を動かしながらじりじりと距離を詰めてきていた。

(きっかけ……そう、小さなことでもいい。きっかけさえあればきつと道が拓けるはず)

！ 小さくて細い糸のような道だっという、それが出来ればあたし達は生き残れるはずだ……！ その道を見逃さずに駆け抜けてみせる！

まさにそれは神に祈るかのよう。

その体が小さく震えているのは命の危機が迫る恐怖によるものか、あるいは不甲斐ない自分に腹を立てているのか。はたまたナーガに対する怒りがまだ残っているのか。

それは瑠璃自身にもわからなかった。

それだけ彼女の心はかき乱されていた。

しかし、それでも確固たる意志があった。

生き延びる事。

こんな所で死ねないという揺らがない意志が彼女には確かにあったのだ。それは茉莉も同じであり、ふらつきながらも何とか立ち上がり、荒い息をつきながら機を探っている。

状況はどう見ても二人の劣勢。

いつナーガによってその命が刈り取られてもおかしくないものだった。

それでも二人は諦めない。何としても生き延びてやる、と強い眼差しでナーガを睨み付けていた。

その確固たる意志に運命の女神が微笑んでくれたのだろうか。

ナーガの視線が何かに気づいたように森の中へと向けられた。

二人もまたその何かに気づいて、釣られたように視線だけ動かして森へと向けてみる。

「あー……僕は今どこにいるんだろう?」

この緊迫した状況に似合わない腑抜けた声でぼやきながら、一人の青年が森の中から出てきたではないか。ぼりぼりと頭を掻きながらいかにも旅人と言った風な出で立ちをしたその青年は、暗い青の瞳をこの戦場へと向けた。

ぼさぼさな茶髪に手を添えていた右手だけでなくその体も硬直し、当然ながらナーガや二人もまたまさかの展開に硬直してしまった。

「——あれ? 修羅場?」

呆けたような声を漏らした瞬間、

「シヤアアアアアアアアアアアツツ!!」

いち早く硬直から解けたナーガがその乱入者に向かって吼えたのを見た瑠璃が、その身を反転させて一気に茉莉に向かって疾走する。茉莉も瑠璃の行動を見てすぐにポーチに手を伸ばし、一つの玉を取り出した。

「シャルアツ!」

瑠璃が離れていくのに気づいたナーガが二人に視線を戻し、逃がさないとばかりに一

気に距離を詰めていく。だがそんなナーガへと茉莉が玉についているピンを抜いて投擲し、両手を伸ばして茉莉の体を抱き寄せた瑠璃に体を預ける。

その彼女の背後で玉は弾けて強い閃光を発した。

強い閃光が辺りを包み込み、それを見つめていたナーガの視界はまたしても白く塗り潰されてしまう。

「おい、そのの！ とつとと逃げるわよ！」

悲鳴を上げて目を覆つてもがくナーガをよそに、肩に担いだ茉莉を支えながら疾走する瑠璃は同じように目を抑えて「目がつ、目があああああ!?!」ともがいている青年に向かって怒鳴る。

「つておい!!? なんであんたまで閃光にやられちゃつてんのよ!?!」

「ああ、すみません……閃光玉だつてこと言わなかったせいですねー」

「あ、あ、あああ、もう！ おらつ、暴れんじやないわよ!」

このまま放置しておくわけにもいかず、瑠璃は舌打ちしながら疾走しながら左手で青年の体を抱え上げ、同じように肩に担いで疾走し続ける。

「おお、姉さんかつこいいですよー」

「な、なんだなんだあ!?! いったいどうなつてええ!?!」

「うっさい、黙れ! つーか年頃の乙女に二人の人を抱えさせる状況つてどうなのよ!?!」

生き延びる事が出来るチャンスを願ったけど、こんな望んでないっての、ちくしよ  
おとおおッ！」

運命の女神は微笑んでくれたようだが、少しばかりいたずら心が過ぎるんじゃないだろうか、と瑠璃は愚痴らずにはいられなかった。森の中を疾走しながらぼやき続ける瑠璃に、彼女に抱えられながら背後をじつと観察し続ける茉莉はぼそりと呟いてみせる。

「年頃の乙女はそれをやつてのけるだけの怪力は持つてませんよー」

「同じくらいの怪力を持つてる奴がどの面提げて言つてんだ、ごるあ!？」

「え?」

「あんだだあ・ん・た! 置いていくわよ!？」

「はっはっはー、それは困りますねー。どうぞ、頑張つて走り続けてください」

「まったく……こんな時までいつも通りよね、あんたは」

「それが私ですよ」

「おとおお、揺れる揺れる!? 一体何が起きているんだい!? つていうか、ここは本当にどこだーい!？」

「あんたはもう黙つてろ。あとで事情聴取してやるから!」

そんな愉快的な荷物を抱えながら、何とか瑠璃は戦場から撤退する事が出来たのだつた。



本当に戦場というものは何が起こるのかわからない。それでも生き延びることが出来ただけでもこの運命に感謝せずにはいられなかった。

## 11話

数分かけて森を駆け抜けた瑠璃はやがて開けた森にある湖までやってきていた。なかなかの大きさをした湖であり、端に視線を向ければ先ほど調査した川に繋がると思われる水の流れを確認できる。

恐らくここはあの川の上流と思われる。

抱えていた青年を軽く放り、茉莉を地面に下ろしてやると、

「はあああ……」

と大きく息を吐いて少しふらついた足取りで湖に近づいていった。その水質を確認して軽く手を沈めて水を掬うと、それに口をつけて飲んでいく。

茉莉もポーチから回復薬グレートを取り出して中身を一気に飲み干していった。背負っているインペリアルガーダーを横に置き、一度楽な姿勢を取ってふう、と息を吐いて体を休めている。

そんな二人をよそに、放り出された青年は目を擦って視界が戻ってきていることを確認すると、辺りを見回してまたそのぼさぼさな茶髪を掻き始める。

「えーっと、本当にここはどこかい？」

「……はあ、え？ 知らないわよ。適当に走り続けたんだから。っていうか、あんたホント誰？」

一通り水を飲んで喉を潤した瑠璃が口元を拭いながら振り返り、青年の問いに答えつつ逆に問いを投げかけた。

「いやー、誰とも知らぬ人をここまで拉致してくるとは……」

「しようがないでしょ!!? あのまま放っておいて殺られた、なんて事にでもなったら祟られそうじゃないじゃないの!」

「はっはっは、言ってみただけですよ。……んで、どちら様ですよ?」

「いやあ、なかなか愉快な娘たちだね。……こほん、僕は異たつみ。ちよつとした情報屋、みたいなものさ」

そう言いながら懐を漁り、しかし何かを探すように探す手は何も見つけられなかったようで、「あれ? どこいったかな?」と両側の懐を探し続ける。しばらく探る手を動かした続けたようだが、「うーん、見つからないなあ。ごめんね」とぺこぺこ頭を下げてくる。

「情報屋、ねえ……じゃあなんであんな所に現れたわけ?」

「なんで、といわれても……ははは、困ったなあ。ただ道に迷っただけだよ。なんでもこ

の辺りに謎の存在が猛威を振るっているって話じゃないか。これは調べる価値があるな——とやって来たはいいけど……ははは、困ったものだねえ」

道に迷ってあんな所に現れた、と。これはこれは運の悪い人だ。しかもそれでナーガとぼったり出会ってしまうなんて不運以外の何物でもないだろう。恐らく自分達がいなければこの巽という青年もまた犠牲者の一人に加えられていたに違いない、と瑠璃は思う。

見たところ巽は大して強くないように思える。体つきはいいようだが戦う者としての気迫がない。一般人よりも少し上くらいだろうか、と瑠璃は分析した。

「ふむ……情報屋という事は今までいろんなことを調べてきたんですね？ 例えば……辻斬りに関する事とか」

「もちろんさあ」

にっと笑って彼は背負っていた鞆から手帳をいくつか取り出して中身を確認していった。恐らくそこには今まで集めてきた情報が記されているのだろうと二人は思ったのだが、「あつ」と巽の手元が狂ったのかいくつかの手帳が地面に落ちてしまう。

ばらばらとページがめくれながら落ちていくその手帳を慌てて拾い上げていく巽。茉莉もそれを見過ごせず、巽と一緒に手帳を拾い上げていくのだが、その手帳が開いている為の中身が見えてしまうのはしょうがない。

(…………?) 戦<sup>いくさ</sup>アイルーの集落、歴史の裏で暗躍した忍の一族。各地で確認され始める蛇竜種に、大砂漠で人やモンスターが食い荒らされる謎の事件。…………ふむ?)

「つと、あー!? ちよ、ちよつと、困るよー」

茉莉が内容に目を通していているのに気付いた異が慌てて手帳を回収していく。しかし色々気になる点書かれていたように思える。特に確認され始める蛇竜種という点が。

「もしか、蛇竜種…………ナーガに目をつけていたの?」

「…………うーん、そうだね。本当にナーガがいるのかどうかはわからなかったけれど、まさか本当にナーガがいるとは思わなかったねえ」

「一歩間違えれば死にかけていたのに、なかなかの肝つ玉ですね」

「いやあーあつはつはつは、今までもこういうことはあつたけれど何とかこうして生き延びてきたからねえ」

「悪運が強いつてことなのかしら」

ジト目になりながらいつの間にか瑠璃もまた一つの手帳を手にしていた。どうやら彼女の方にも転がっていったらしい。彼女の視線はちらつと手帳に向けられており、ざつと内容を確認している様子だ。

(最後の星の伝説、地方で悪政を行っていた領主たちが次々と死んでいく事件、盲目の剣士に剣豪アイルーに破壊の焰?)

「あーっと、それも僕のだよ。っと、ん？ よく見たら確かそれだよそれ」

瑠璃から手帳を返してもらい、ページをめくっていつて目的の情報を見つけ出したらしい。他の手帳を鞆にしまうと手帳の情報を確認しつつ話し出した。

「辻斬りにやられた被害者たちの傷の様子だとね、傷は刀傷によるものだということが。しかも先日殺された獣牙流の人は致命傷の傷を三つ負わされていたんだね。わかる人ならばそれが秘剣・燕返しによるものだって事がわかるねえ」

「燕返し、ですって？ んなバカな。それってそう簡単に習得出来るもんじゃないでしょ？ っていうか、聞いた話じゃそれって殺された人が習得しているって話じゃなかった？」

「そうだねえ。でも、傷を見る限りじゃそれは間違いなく燕返しによるものさ。それがあつ以上、辻斬りはかなりの剣の腕を持っているという事になるねえ」

どこまで調査しているのかはわからないが、負傷した傷についてまで調べられたのだ。情報を集めるといふ点においてはもしかすると異は優秀なのかもしれない。

しかしそれでも気になる点はある。

「他の犠牲者の傷は？」

「二太刀。それで致命傷が多いらしいよ。首切断、上半身分断、心臓を一突き。これらが目立つかな。でも中には流派の技によるものと思われる傷が確認できたところねえ。

……でも、これ以上詳しい事は言えないなあ、ごめんね」

あつはつは、と苦笑しながら頭を掻くその姿は人のいい青年にしか見えない。一体どれだけの情報を集めて記録しているのかはわからないが、彼の言葉に嘘は感じられなかった。

しばらくそんな異をじつと見つめていた茉莉は口元に指を当てて考え込み、一つ質問をしてみる事にした。辻斬りの情報はこれ以上出せないというならば、別の情報について訊いてみよう。

「では、戦アイルーとはいったいなんですか？」

「戦アイルー？ こっちは剣豪アイルーって見えたけど」

「あちやー、それも見えちゃったのかい？ いやあ、参ったなあ……」

本当に困ったように頭を掻く異ではあるが二人の視線がそれを語れ、と言わんばかりの強い眼差しだったために、やれやれと首を振って別の手帳を開いて話し始めた。

「戦アイルーっていうのは戦いの技術を高めたアイルー達の事だよ。オトモアイルーのようにハンターと一緒に戦うアイルーもいるけど、大抵はギルドや国に軍隊の一員として飛竜らと戦っている存在だね。例を挙げればヤマト国とかかな」

「つまり……あたしたちハンターみたいなアイルーって事？」

「簡単に言えばそういう事だね。彼らは他のアイルー達と違って戦う事に特化している

から鍛え方も結構違う。だからなのかな、オトモアイルーと違って手にする武器も君達ハンターのもので問題なく振るってしまおうアイルーもいるんだよ。中には人に変化して戦うアイルーもいるくらいだしね」

その説明を聞いた二人の頭に一匹のアイルーが浮かび上がる。六年前にあの兄弟らと共に戦ったというアイルーの事が。

彼女はアイルーなのにハンターの武器を振るい、また人に変化する事も可能としていた。彼女の戦力はまさに一人のハンターとして申し分ないものだった。あれほどのアイルーがいるのかと話に聞いていた二人は驚いたものだが、実際にあのアイルーの実力は本物だったとか。

「そして剣豪アイルーというのは、その戦アイルーの中で剣術の力を高めたアイルーの事だね。その中で名が売れているのは確か……神風だったかな？」

「神風？ 速いんです？」

「それもあるけど特攻を好むその戦闘スタイルかなあ。捨て身の斬りこみで一気に道を切り開いていくその勇姿が、人々のイメージに強く焼き付いているんだろうね」

うんうん、と頷きながら思い返すように軽く空を見上げる。もしかすると彼はその神風と呼ばれているアイルーに会った事があるのかもしれない。

いったいどんなアイルーなのだろうか。兄弟達と共に戦ったアイルー共々気になる



ところではあるが、今はそれは横に置いておくとしよう。

「……ま、そのアイルー達についてとか他の情報とか気になる点はあるけどさ、今はあのナーガよ。奴は絶対後を追ってくるはずよ。切り抜けるための方法を考えないといけないわ」

「異さん、あなたはナーガがここにいるとふんでいたんですよね？」

「あくまでも可能性、の話だけどねえ」

「ではあなたが優秀な情報屋と見て訊きますが、ナーガについての情報は持っているのですか？」

「持っている事は持っているけれど、今判明している特徴とかギルドが得た情報とか、そういうのだけだよ？ あくまで僕は一個人の情報屋みたいなものだからねえ」

「構いません。今は少しでもナーガというものについて知りたいのです。戦うにしろ逃げるにしろ、ね」

近年ようやく存在を把握し、情報を少しずつ集め始めたがそれでもナーガについては少ししか図鑑に載っていない。蛇竜種を纏めている図鑑はある事はあるが内容はまだ充実しているとはいいい難いものだった。

外見的な特徴、どういった攻撃をするのか、どこに生息しているのかぐらいしか把握しておらず何が弱点なのか、どういったものが苦手なのかまでは茉莉は把握していな

かった。

あれはまず間違いなく上位個体、それも中から上のランクに位置するであろう実力だ。

今の自分達の実力で勝てるかどうかはあやふや。あの数分間の攻防で自分達が劣勢だったのは明白。これから反撃に転じたとして本当にあれを討伐できるかなんてわからない。

絶対に出来るのか、と訊かれてもはつきりと答える事なんて出来はしないだろう。では撤退するべきか？

今ならばそれも可能かもしれない。一時撤退して体勢を立て直し、もう一度ナーガに挑むという選択肢もあるだろう。だがはたしてナーガが今後もここに留まるかという疑問もあるし、リベンジを仕掛けたとして勝てる保証もない。

それに撤退そのものが成功するかどうかも分からない。何せ今、ここには部外者……一般人の異がいるのだ。彼を抱えて逃げ切れるかどうかも分からない。本人曰く悪運が強いとの事だが、そんな不確かなものに頼れるかという話だ。

「えっと、鬩蛇ナーガ。蛇竜種の中で突然変異を起こし、人族のような上半身を手にした蛇。発達した筋力によつて繰り出される腕の攻撃、鋭い牙による噛みつきや牙から漏れる毒による近接攻撃。体内でつくりだされた毒を含んだガスや、毒液といったものを吐

き出す遠距離攻撃を持つ。また、蛇としての尻尾の使い方も巧みであり、相手締め上げるだけで窒息や骨折を促すだけの力を誇り、素早い蛇行による回避術、尻尾と腕の力で行われる場所を選ばない移動力といった点も見逃せない」

「……基本情報ですね。ではそんなナーガを攻略するに使える情報は？」

「そうだねー……あ、こんな情報があるよ」

ナーガについて書かれているページを流し読みし、次のページをめくって内容を見た異はそれに指を添えてじつとその綴られた情報を確認していく。

「自分で毒を作り出しているおかげで毒に対する耐性はあるみたいだね。でも麻痺毒、眠り毒に関しては並みくらい耐性しかないようだよ。罨肉に対しては意識を向けた事はあるけれど食べる事はなかったようだね」

「属性に対する耐性は？」

「それについては完全には判明していないようだね。ただ蛇という点があるから……他蛇竜種のように氷に対しては弱いんじゃないかな」

「氷ですか。……コード・ノーマル」

肩に纏めているローブを広げ、中から白い毛皮を使用したガンランス、ヘルステイング改を取り出した。ドドブランゴの素材を使用したこのガンランスは氷属性を内包しているため、もしかするとナーガに高いダメージを与える事が出来るかもしれない。

インペリアルガーダーをロープへと戻し、ヘルステイング改に弾薬をリロードさせるとそれを背負ってポーチから地図を取り出した。とはいえこれは狩猟エリアのみが記されたものであり、ここにはこの湖らしきものは書かれていない。

どうやら狩猟エリア外にやってきてしまったようだ。こうなってしまうと自分達がどこにいるのか把握しづらい。なにせ旅人である自分達はこの辺りの正確な地図なんて持っているはずもない。

あるのはこの狩猟エリアを記した地図と、そこに至るまでの道がある地図のみ。

あとはこの東方の広いエリアを記した大まかな世界地図ぐらいなもの。広いエリアを纏めて書いているため大まかな道のりがわかるが、しかし細かい所までは把握できないのが特徴のため、当然ここがどのあたりかなんてわかるはずもない。

だが茉莉はじつとこの狩猟エリアの地図を見つめ、自分達がどういったルートを走ってきたのかを頭の中に思い描いていた。

「たぶん私達はこの辺りにいると思いますね。ナーガに会わずに一旦ベースキャンプに戻るには、あちらを進んでいけばいいと思います」

「ナーガとは戦わないって方針？」

「戦いたいのです？ 正直なところ、勝機はほとんどないですよ？」

「それでもあれを放置しておくわけにはいかないでしょ。……もちろん撤退した方がい

いつてのはあたしだつてわかつてる。……でも、まだ背を向けて尻尾を巻いて逃げるつてのがどうしてもあたしには無理。まだあれに対して出来る事があるわ。あたし達はそれを持つている」

「……………これですかね？」

そう言つて茉莉はポーチから取り出したのは指の間に挟んだ三つの投げナイフ。その先端には透明なキャップが付付けられており、刃には何かの液体が塗られ、日の光を受けて鈍く光を反射していた。それに瑠璃は頷き、ぽんぽんと肩に纏めているローブを叩いてみせた。

「まだここに使えるものは残っているわ。ただ攻めても崩せない敵だったら、搦め手を使つても打ち倒すしかない。出来る事があるならそれをやつておきたいのよ」

「……………ふう、やれやれ。本当に負けず嫌いですね、瑠璃は」

投げナイフを懐に入れながら茉莉は嘆息しつつ小さく苦笑した。彼女としては撤退した方がいいんじゃないかと冷静に考えていたのだが、どうも瑠璃は小さな可能性を逃したくはないらしい。

確かに自分達はまだ切っていない手札がある。あくまで先ほどの戦いは武器と自分達の実力のみで戦つただけであり、ハンターが使う道具をあまり使っていないかつた。そうするだけの余裕がなかったとも言ふべきか。

あの時はただナーガがここにいたという事と、その想像以上の実力に驚いていたという事もあってそれを失念していたのだ。

しかし今ならば、冷静にナーガと相對する事が出来るはずだ。そうすれば小さな勝機を掴めるチャンスが生まれてくる。自分達はまだ完全に負けていない、こうして戦う意志があり、戦えるならば完全な敗北を喫したわけじゃないのだ。

瑠璃の目はまだ死んでいない。

「……………でも」

だが瑠璃は目を閉じ、じつと茉莉を見つめて少しだけ氣遣うような声で続けた。

「茉莉が戦えないって言うなら、ここは素直に撤退するわ」

「……………」

茉莉は先ほど大きな負傷をしたのだ。それを瑠璃は忘れたわけではない。

むしろあそこで退いたのは茉莉が地面に叩きつけられたせいだ。あれほどの攻撃を受けたために一時撤退を選択し、そのチャンスを窺っていたら異が現れたためにそれを見逃さずに利用した。

こうして休息を取ったとはいえ、完全に体調が戻っているとは限らない。自己治癒力が高く、回復薬グレートを飲んで回復してはいる。だが茉莉のそのポーカーフェイスの下で苦しみが残っているならば、瑠璃は素直に退く事を選ぶ。

彼女は負けず嫌いではあるが、同時に妹思いでもあるのだ。

そんな姉を見てまた茉莉はやれやれと息をついた。しかしそれは呆れたようなものではなく、優しさが含んだものであり彼女の口元もうつつすらと笑みを形作っている。

「大丈夫ですよ。まだ私も戦えますから。そう心配するようなことはありません」

「本当に?」

「ええ、本当ですよ。それに私だつてもしもの時に備えて戦うためにこれを出したので  
すから、戦う気力はありますよ。ただ自分から打つて出る、というのが少々問題だつた  
わけですからね。……ですが、瑠璃がそうやる気になっているというならば、それを支  
えるのが私の役目ですよ」

ふつ、とポーカーフエイスを崩しながら微笑を浮かべて瑠璃に頷いた茉莉は、すぐに  
その笑みを消して巽へと振り返る。二人が再びナーガと戦う意志を固めたならば、問題  
となるのはこの巽となる。

一般人である彼をこの先どうするかというのが問題だ。

再びナーガと鉢合わせた場合、足を引つ張つてしまうのは間違いない。というより  
ナーガに狙われた場合、まず間違いないさつきと丸呑みにされてしまうのが目に見えて  
いる。

「巽さん、あなたはどうするんです?」

「僕かい？ いやあ……僕は早いところこの森を抜けて、近くにあるという町で事件について話を聞いていきたいところだねえ……。でも、本当にナーガがいるとわかった以上、ナーガについての情報を集めたい気持ちもあるんだよ。それに、一人で抜かれる自信もないなあ……」

あつはつは……と乾いた笑いを浮かべながら困ったように頭を掻く巽。確かに彼が一人でこの森を抜けられるかどうか怪しいだろう。たった一人で行かせた場合、ナーガがその気配を辿って二人ではなく彼の方に向かう可能性だつてある。

そうなれば間違いなく彼の命はなくなつたも同然か。

成り行きとはいえ本当に厄介な荷物を抱えてしまつたと瑠璃は苦い表情を浮かべる。

「しょうがないわね……じゃああたし達についてきなさい。一人で行動するよりはマシでしょ」

「い、いいのかい？」

「そうですね。もちろん、戦いが始まれば離れていて巻き込まれないように、あるいは自分を標的にされないように気をつけてくれればそれでいいですよ」

「わかつたよ。ありがとう、助かるよ」

まだ乾いたような笑顔を浮かべながら頭を掻く巽ではあるが、安心したような息を漏らすところを見ると彼とて一人で行動するのが心細かつたとみえる。彼とて好んで死



にたいわけではない。小さな生きる道があるならばそれにすがりつきたいのだろう。それが例え年下の少女二人だったとしても。

これからの方針が決まったならば、早速行動に移したいところだ。

茉莉が広げていた地図にもう一度視線を落とし、周囲の気配を探ってナーガが動いているのか否かを判別してみる。しかしやはりというべきか奴の気配はほとんど感じられない。

あの時遭遇した時も、草むらの陰に瞳らしきものを見つけるまでナーガがあそこにいた事に気づかなかつたのだ。まず間違いなく気配を消す事に長けていることは明らか。となれば自分達を追ってきている今この時もまた気配を消しているのは間違いない。

「私が前を歩きます。その後ろに異さん、殿に瑠璃で移動しましょう。今はベースキャンプに戻るルートを歩きましょう。その途中でナーガに出くわせばそのまま戦闘、出会うなければベースキャンプで休み、異さんはそのまま森を出る。その後私達は再び森に入ってナーガを探してみる、という事でどうです?」

「……ん、異論はないわ。あんたもそれでいいでしょ? あたしたちのベースキャンプに戻りさえすれば、あんたはそのまま安全に森を抜け出せるはずよ」

「そうだね。僕もそれに異存はないよ。本当にすまないね……」

「いえ、お気になさらず。では行きましょう」

地図を広げたまま茉莉は歩きだし、湖から伸びる川へと進んでいく。この川を下っていけば先ほど調査した辺りまで戻れるはずだと茉莉は推測していた。狩猟エリアの端にあるこの川の上流がこの湖であり、先ほど調査した場所がだいたい真ん中程のエリアであるとアタリをつけている。

ならばここまで戻る事が出来たならばあとは順調にベースキャンプへと戻れるはず。何事もなければ、の話ではあるが。

それから数十分かけて川を下り、茉莉は地図と周囲を交互に見て現在地を確認した。辺りを見る限り見覚えのある風景がそろそろ見えてくるはずだった。時折森の方へと視線を向けてナーガが奇襲を仕掛けてこないかも警戒しながら進み、目印となってくれらるであろうものを探してみる。

そしてようやくそれを見つけた。

「……あつた」

茉莉がそれに向かって近づいていくと、同じように瑠璃と異もそれに近づく。

それは地面に残された犠牲者の存在を示すもの。乾ききった血痕だった。

「これは……血痕かい？」

「ええ、そうです。数日前にナーガによつてやられたものと思われるハンターの血痕です。先ほど私達はここにきてこれを見つけたのですよ」

「ということとは、ここまで戻って来たって事ね」

「あとはこの道を進んでいき、アオアシラの足跡があつた方角の道を進んでいけば広場に出るでしょう。そこまで戻ればベースキャンプまでもう少しですよ。さ、行きましよう」

血痕をじつと見つめている異を促して川から離れて道を歩く。この先にはT字の分かれ道となり、地図によればそこを左折する事によつて獣道を歩かずともあの広場に出る事がわかつた。

ならば獣道を進まずに安全な道を選んだ方がいい。気持ち足早に歩きながら件のT字の分かれ道に差し掛かり、一度周囲を警戒して左折すると順調に道を進んであの広場まで戻ってくる事が出来た。

ここはアオアシラが食事したと思われる広場であり、ブナハブラの巣らしきものが確認できた広場。ようやくここまで戻つてこれたと小さく安堵の息を漏らす。

だが、それを許さないのが奴だった。

はつと息を呑んだ瑠璃がロープを翻しつつその中へと手を入れ、素早くそれを抜きながら刀身に気を纏わせて目の前に立ててやる。すると木々の間から飛び出してきたそれが抜かれた得物に尻尾を叩きつけてきた。

「う、うわあつ!?!」

「くっ、うう……追いついてきたみたいね……!」

抜き放った新たな武器、火竜剣【火燐】で奴——ナーガの尻尾を受け止めた瑠璃が苦々しい声で呟いた。現在の形状は二つの刃を纏めた長剣スタイル。二つの刃が合わさった事で強度を増し、加えて気を纏わせる事で更に増したそれは、折られることなくナーガの尻尾を受け止められた。

「巽さん、下がって!」

「う、うん……!」

茉莉が巽を庇うように前に出ながら懐に手を伸ばす。取り出したのは当然先ほどそこに収めた投げナイフだ。刃先にあるキャップを取り、一度そこに塗られているものを確認して指の間に三本挟んで構える。

巽は慌てて逃げ出し、草むらの中に飛び込んで邪魔にならないようにしつつも、隠れながらもその戦場を振り返って様子を窺う。完全に逃げ出してもいいものだが、たった一人でどこまで逃げ切れるのかも怪しい。

なので一旦離れるだけに留まったらしい。

「茉莉! そっち頼むわよ!」

「任せてください!」

火竜剣【火燐】を構えてナーガと相對する瑠璃。

投げナイフを構えながら攻撃する隙を少し離れた所で窺う茉莉。  
今、ナーガとの戦いが再び始まる。

## 12話

「シャルアー！」

叩きつけた尻尾を引き戻し、しかしすぐにしなる鞭のように操って瑠璃を側面から弾き飛ばすように振るってきた。当然それを回避するように跳躍した瑠璃ではあるが、ナーガはそれを読み切って軽く息を吸い、口から毒液を弾丸のように吐き出した。

「くっ、これがこいつのプレスってわけね！」

それは毒液なのだろうが、その描く軌道と速さからしてリオレウスの火球……すなわち飛竜の行使するブレスのように思える。だが何とかそれを回避し、牽制するように火竜剣【火燐】を振るって火炎を引き起こした。それをそのまま刃と化してナーガへと振るってやる。

燃え盛る火の刃はまるで意志を持つようにナーガへと襲い掛かる。振り下ろされた後はそのままナーガへと喰らいつく蛇のように動き、側面、下からと何度もナーガへと向かっていく。

その動きにナーガは唸りながら腕を振るって炎を振り払っていくが、瑠璃が火竜剣

【火燐】を振るうたびに刀身から炎が噴き出して新たに作り上げるためいたちごつことなる。

その隙をつくようにタイミングを窺っていた茉莉が構えた投げナイフに気を流し込み、一気に振り抜いて三つの気刃を放った。刃に塗られている成分を含んだ気刃はナーガへと届くが、ナーガはそれを気にした様子もなく火炎を操る瑠璃に意識を向けたままだ。

「ふっ、はっ!」

右手を振るえば三つの気刃が放たれ、何度も振るってそれをナーガへと傷つけていくのだが、それは瑠璃が放つ気刃と比べると薄いもので、ナーガに対してダメージになっているとはいえない。

だがそれでいい。

元よりこれはダメージを期待した攻撃ではなく、投げナイフに塗られた成分を、気刃を通じてナーガに与える事なのだから。

瑠璃が気を引きつけている間に茉莉がそれを仕込んでいく。その効果はようやく表れ、突如ナーガが痙攣を起こしながら動きを止めてしまう。

「グ、ガ、グゴゴゴ……!?!」

気刃によって打ち込まれた麻痺毒の効果だ。何とか動こうともがいているようだが、

体を巡る麻痺毒によってそれは微々たるものでしかない。この好機を逃すことなく二人は一気に攻勢に出る。

「炎剣——」

瑠璃は放出していた火炎を一度退かせて刀身に纏わせ、己の氣と混ぜ合わせて一気に高めながら火竜剣【火燐】を一度構える。そしてナーガへと一気に急降下して奴の首を狙って渾身の一撃を放つ！

「——翼薙撃——」  
よくていげき

薙ぐようにして振り抜かれた一撃はナーガの首を刎ねかねない程の勢いで、それに加えて刃の軌跡に従って火炎が尾を引きながらナーガの体を焼き尽くしていく。

だが瑠璃の狙い通りにナーガの首は刎ね飛ばされなかった。何とか首を守るように短く動かされた腕によって守られ、しかし腕に鋭い傷を刻むというダメージを与えるだけに留まった。

麻痺毒に侵されながらもなお己の命を守るといふ一点で動いたその腕。これによって命は繋いだようだが、続いて懐に入ってきた茉莉の攻撃が行われる。

麻痺投げナイフはポーチに戻され、構えられたヘルスティング改の刃がその胸を狙って突き出される。だがやはりというべきか刃は強靱な胸を深く貫くには至らない。しかし銃口からは既に溜められたエネルギーが存在しており、引き絞られた引き金に当て



られた指を離せばその胸を焼く溜め砲撃が放たれる。

続けて動けないナーガに更なる一撃を加えるべく、ヘルステイング改のギミックを動かして引き金を引き絞れば、銃口に先ほど以上のエネルギーが収束していく。その高められていくエネルギーを感じ取ったナーガは何とかして防御体勢を取ろうとするが、体を侵す麻痺毒がそれを許さない。

「竜・撃・砲ッ!!」

轟音を響かせながら放たれたガンランス最大攻撃により、ナーガの胸から頭にかけて一気に強い爆撃がはしりぬける。これをまともに受けてしまったのだ。それでも無傷というならばそれはどんな化物だ、という話になってしまふ。

古龍でもなければ無傷というわけにもいかないだろうその攻撃を受け、ナーガの体は反り返り、その勢いのまま後ろへと吹き飛ばされてしまった。

茉莉もまた竜撃砲の反動で軽く後ろに飛ばされるが、何とか衝撃を堪えて体勢を立て直す。瑠璃も一度着地して軽く火竜剣「火燐」を振った後、仰向けに倒れ伏すナーガを観察するように睨み付けた。

「……………っ」

ぴくり、と体を小さく振るわせたナーガは、竜撃砲を受けた頭を押さえながらゆつくりと起き上っていく。麻痺毒からも解放されたらしく、その動きは竜撃砲を受けたダ

メージによつて怠慢になつていた。

それでも奴は生きてゐる。ならば戦いは続行だ。

重いダメージを受けてゐるナーガに容赦するはずもなく、すかさず瑠璃がナーガに向かつて火竜剣【火燐】を構えて斬りかかつていく。

「グ、……シヤアアアルアッ!!」

だがナーガは怒りの籠つた咆哮を上げながら尻尾を振るつて瑠璃へと牽制する。その隙をついて起き上り、竜撃砲によつて負傷した顔を押さえながら小さく体を震わせ始める。

「シヤルアー！」

漆黒の瞳が血走り始め、目の周囲の血管も赤く浮かび上がり始める。恐らく怒り状態へと移行したと思われる。だがその上半身は確実に竜撃砲による影響がゼロではなかつた。

顔の鱗は所々吹き飛ばされ、焼け焦げ、若干血を滲ませている。また火竜剣【火燐】の一撃を受け止めた右腕は一筋の傷を作りだし、傷口を同時に焼かれたことで血は流れていないがぱつくりと開いた傷が一撃の鋭さを物語つてゐる。

ぐぐつと力を籠めれば鱗の下の肉が膨張し、強引に傷を塞ぎにかかつた。手の先の爪が鋭く伸び、血走る瞳は瑠璃と茉莉を交互に眺めて狙いを定めてゐる。忙しなく舌が出

し入れされ、震えている。瑠璃を牽制していた尻尾を引き戻したナーガは、ついに瑠璃へと本格的に攻撃するために前に出る。

「シャルアアツ！」

「くつ、スピードが増してるわね……！」

一気に距離を詰めてきたナーガはその勢いを乗せた突きを放ってくる。それは瑠璃の頬を掠め、しかしそれだけで彼女の白い肌に薄く血を滲ませた。初撃は突きが来る、とわかっていたはずだが、その速さが想像以上だった。

躲せたのはたぶん突きに備えていたからに他ならない。そうでなければ首を裂かれて致命傷になっていたはずだろう。

だがナーガの攻撃は終わらない。左右交互に爪を突き出して瑠璃のその白い肌を貫き、赤く染め上げようとしている。俊敏に動くことを念頭に置かれているナルガシリールズは若干守りが薄いため、もしあの爪が当たりでもすればまず間違いなく貫かれるだろう。

(速い、そして鋭い……！ でも今はこれを凌ぐ……凌がなくなっちゃならない！)

左右の突きから、今度は頭から叩き潰す攻撃や瑠璃の腹を穿つ攻撃も交えてきた。それを回避し、火竜剣【火燐】で受け止めていくのだが、金属の立てるその音が次第に大きくなっていく。

(く、おも……っ！)

重い一撃だ。両腕が攻撃のその重さに耐えきれず震え始めてきた。

ちらりと横に視線を向けてみると、茉莉が地面に何かを設置しているところだった。ポーチから取り出した一つの物体、それは落とし穴だ。地面に設置させて起動させればギミックが作動してそれを中心として円形に地面を柔らかくさせる成分を浸透させ、内蔵されているネットが広がるという仕組みになっている。

あとはその上に一定の重量があるものが乗れば一気に地面に落とし、ネットがそれを絡め取って一定時間その場に留めてしまう。

強力なモンスターを相手にするならば、必需品と言われているほどハンターにとって大事な道具の一つだ。それを設置し終わると、指を立てて火を起こし、軽く宙へと舞い上がらせて小さく弾けさせる。

その合図を受けた瑠璃はナーガの攻撃を捌き、回避しながら茉莉の下へと下がっている。すると当然瑠璃に意識が向けられていたナーガは彼女の後を追いつながらも攻撃を続けていく。

奴は完全に頭に血が上っている。このまま落とし穴がある場所まで引き付けられ、再び一気に仕掛けるチャンスが生まれるだろう。

「シャルア！」

だがここでナーガは突き、振り下ろしという両腕の攻撃に尻尾を使った攻撃も混ぜてきた。今まで火竜剣【火燐】でナーガの攻撃を防御してきた瑠璃ではあったが、やはりナーガのそのパワーの影響からは逃げられなかった。

(……っ、腕が……!?)

火竜剣【火燐】を振るい、ナーガの攻撃を受け止めるために使われた両腕の力が少しずつ低下しつつあったのだ。守る力が弱まったのを見逃さず、振るわれた尻尾が瑠璃の体を吹き飛ばし、落とし穴が設置された場所を飛び越えてしまった。

ナーガはそれを追い、更に前に出てくるが落とし穴を飛び越えるようなことはせず、地面を蛇行して進行してきた。

「シャアア——シャアアツ!」

瑠璃に追撃を仕掛けようとしていたというのに、突如自分の体が地面に沈んだことにナーガは驚きの声を漏らした。続けて自分に絡みつき、地面に留めてしまふネットの存在に気づき、それを何とか引きはがそうとするも力だけで抜け出せるほど落とし穴のネットは甘くはなかった。

更に穴から出ている上半身を狙って茉莉がポーチから取り出した新たな投げナイフを構えて投擲していく。二本はナーガの体に突き刺さり、もう三本は指の間に挟んで気刃として攻撃しかけていく。

それ自体のダメージとしてはナーガにとって蚊に刺された程度のもものために、ナーガはそれでもがき続けるが、やがてぷつぷつと切れた糸のように力を抜き、脱力して地に突つ伏する。

「成功です。仕掛けていきましよう」

「オーケー、……いつつ……」

「大丈夫です？」

「平気よ、これくらい」

体を押さえながらも瑠璃は立ち、回復薬を口にして広げたロープの中に手を入れる。その奥から大タル爆弾を取り出したまでは良かったが、筋力が低下しているこの腕で持つていく事が出来るのだろうか、と舌打ちする。

同じようにロープから大タル爆弾を取り出し、落とし穴で眠っているナーガの傍へと持つていった茉莉がそんな瑠璃の様子に気づき、また「本当に大丈夫ですか？」と問いかける。

「……大丈夫よ、ふんっ！」

少し不安があつたがそれを吹き飛ばすかのように、意を決して瑠璃は大タル爆弾を持ち上げてナーガの傍に置く。元より普通の人以上の力を持つ二人だ。大タル爆弾ぐら  
いどうという事はない。

もう一つの大タル爆弾を出し、少し離して置く瑠璃の近くで今度は大タル爆弾Gを取り出して茉莉はそれをナーガの左腕の傍に置いた。こうしている間も目が覚める様子のないナーガ。

やはり睡眠毒の効果はてきめんらしい。

これで準備は整った。

急いでその場を離れ、その途中で茉莉が肩越しに振り返って大タル爆弾Gに狙いを定めて指を鳴らす。その刺激が空気中の粒子を伝っていき、大タル爆弾Gに伝わると轟音を響かせて大爆発を起こす。

大タル爆弾Gの爆風は設置されている大タル爆弾にも衝撃を伝え、連鎖して爆発を起こしていく。森の中に響く爆音と吹き抜ける衝撃波。それから身を守るために地面に伏せて爆心地を見つめる。

竜撃砲を受けてあれだけのダメージならば、大タル爆弾三つと大タル爆弾Gに囲まれればただでは済まないだろう。いや、願わくばあれで落ちてくれたらいい。

そう願って見つめていた二人だったのだが――

『——ッ!?!』

突如空気が底冷えする程の殺気が膨れ上がり、爆風を切り抜けて飛来してくるものが二人へと迫ってくる。それは体を丸めて回転しながら飛んでくるナーガだった。

素早く起き上って横に飛び退く二人だが、ナーガは一度着地して地面に手を付け、力を籠めて自分の体を回転させるとターゲットを茉莉へと定め、今度は尻尾に力を入れて高く跳躍した。

そのまま前転して力を溜めると、茉莉へと強く尻尾を叩き落とす。

「くっ……い！」

もう一度横に跳びながらナーガの様子を窺うと、奴の体はポロポロだった。上半身だけ穴の上にあつたため、その体のほとんどが爆弾の影響で鱗が吹き飛び、肉も裂けて血を流している。

顔に至っては左目……いや、左半分が焼け爛れている状態だった。何とか残っている右目で二人を視認し、舌を動かして周りの状況を把握しているのだろう。両腕も大きな負傷しており、激痛がはしっているだろうにそれでもナーガは両腕を振るい続けている。

叩きつけた尻尾を中心として地面が割れ、飛び退いた茉莉の近くまで亀裂が走つていくが、何とか茉莉はその場から離れつつヘルステイング改を構える。

「シユルルル……い！ シャルアアアアアアア！」

茉莉へと飛びかかりながら右手を振り下ろすナーガの攻撃を避け、カウンターを仕掛けるようにヘルステイング改を突き出す。今まで刃を浅くしか受け止めなかったナー



ガの胸は、その刃を通してしまふほどにまで傷ついていた。

続けて溜め砲撃を放つ茉莉ではあったが、ナーガはその苦痛をぎりつと歯噛みしながら耐え、茉莉の足を刈るように尻尾を振るう。溜め砲撃を放った反動で動けない茉莉は息を呑みながら体勢を崩し、続けてバックナツクルを放つナーガの拳が頬を捉え、地面に沈められてしまった。

「シヤアアアアッ！」

とどめとばかりに爪を立てて振り下ろすナーガ。だがこの場にはもう一人いる事を忘れてはならない。

「ナーガあああああッ!!」

高速で飛行しながら火竜剣【火燐】を振りかぶり、茉莉へと振り下ろすその右腕を斬り飛ばしてやった。宙を舞うナーガの右腕を感じながら振り返り、それに従って火竜剣【火燐】もナーガの体を薙ぐようにして振り抜かれる。

だがナーガもその速度に反応していた。

怒りの籠った目で瑠璃を見据えながら残った左手を伸ばして彼女の体を掴み、ぎりぎりとその体を締め上げてやる。火竜剣【火燐】の刃の先端がナーガの胸に当てられたところでのナーガの反撃。

火竜剣【火燐】を振り抜こうとしても、両腕がナーガの手によって締められているた

めに動かす事は不可能。ナーガの怒りがそのまま乗せられた左手の力は確実に瑠璃の体にダメージを与え、ギリギリと骨が軋み出す。

「くっ、この……っ！」

何とか立ち上がりながらヘルステイング改を突き出すのだが、それだけでナーガが止まるはずもない。右手がなくなるとも左手が使えなくとも、尻尾が残っている。再びそれを振るって茉莉を吹き飛ばすかと思われたが、そうではなく茉莉に巻きつく動きを見せ始めた。

「ちい……、めんどろな……！　瑠璃、火炎操れますか!？」

「……っ、なんとか……やっつて……！」

尻尾を避けるために翼を広げて飛び立ち、ヘルステイング改で左腕を切り裂こうとしたのだが、それを察知したナーガが左腕を引きつつ下半身の力だけで下がった。だが尻尾の先端付近はまだ茉莉を狙うようにうねうねと動き、隙あらば彼女を捕えようとしている。

だがその左腕の温度が上がっていくのをナーガは感じ取った。見れば瑠璃を中心として炎が巻き起こり、ナーガの手を焼き始めていた。歯を食いしばってナーガの圧力に耐えながらも、彼女は今出来る事をやっていた。

このまま死ぬわけにはいかないという思いが籠ったその炎は、ナーガに苦悶の表情を

浮かばせ、炎の熱さに耐えきれなくなったせいであつたにその手を離してしまつた。

しかしそれほどまでの高温まで引き上げてしまえば、火竜の血を引き継いでいる瑠璃にとつても苦痛となる。それにナルガシリーズは火属性に耐性がない。自分を締め上げたナーガの手と炎に炙られた瑠璃の体は軽いやけどを負つていた。

「はあ……はあ……」

脂汗を流しながら起き上ろうとする瑠璃だったが、ナーガの強い握力による締め上げは瑠璃の体に強い負荷を与えてしまつたのだ。

動けるようになるまで少々時間がかかつてしまう。そんな風に冷静に分析する頭と、こんなところで終わつてたまるかという戦意を燃やす頭が存在していた。

しかし実際に立ち上がろうとしても体は震え、両腕も締め上げた影響も付加されて思うように動いてくれない。ぎりぎりど悔しさに歯噛みする瑠璃をよそに、

「シャアアアッ！」

ナーガは怒りに吼えながら瑠璃を睨み付けていた。

炎によつて瑠璃を解放したとはいえ、まだナーガは戦える。右手を失い、瀕死に近い状態だつたとしても奴の意志は闘志に彩られている。

「シャルルルル……！」

唸りを上げながら大きく息を吸いこんだナーガは、地べたに這いつくばる瑠璃へと毒

液を撃ち出していく。毒ガスではなく毒液を選んだのは毒液の鋭さで一気に瑠璃の命を奪おうという魂胆か。

「っー」

その前に茉莉が入り込み、盾を構えて受け止めた。だが毒液の重さは盾を通じて茉莉の腕に負荷を与え、それだけでなく毒の成分が盾を少しづつ溶かしていく。

茉莉の防御を崩せないならばとまた尻尾を振るうナーガだったが、茉莉はその場に留まるのではなく前に出ていった。振るわれる尻尾を歯を食いしばって弾き返しつつ、ヘルステイング改を突き出しながら引き金を離し、いつの間にかチャージしていたエネルギーを解放させた。

「いい加減落ちてほしいのですが……ッ！」

ナーガの眼前で弾ける溜め砲撃。更にクイックリロードを起こして一発装填してすぐに引き金を引き絞ってエネルギーを溜めこむ。そうしながらナーガの体を裂くようにヘルステイング改を振るう。

当然ナーガもそれに対抗して左腕を振るうが、その度に盾を振るって弾き返し、ヘルステイング改の刃をナーガに届かせる。一撃与えるたびに溜め砲撃をお見舞いさせてナーガが怯むようにさせつつ最大の一撃を与える隙を窺っていた。

ヘルステイング改の排熱はもう完了している。再び竜撃砲は撃ち込める状態にあつ



「……幕を閉じましょう！」

充填させていたエネルギーを解放させ、溜め砲撃をナーガの体内で弾けさせることでナーガの動きが完全に硬直する。すぐ傍にあるナーガの口から血が噴き出すのを感じながら、ヘルステイング改のギミックを始動させて竜撃砲のエネルギーを充填させ始めた。

「グ、ググ……ッ、ガガガ……！」

震える左腕で茉莉も掴もうとするのだが、体内で膨れ上がっていくエネルギーの大きさに体の震えが止まらない。体の内側から焼き尽くされる感覚にナーガが苦痛の叫びをあげていく。

それを耳元で聞き、一步下がってヘルステイング改の銃口をナーガの顔へと向けた茉莉は、その無表情の顔に汗を流しながら引き金を引く。解放されたエネルギーはナーガの体を焼き尽くし、無抵抗に受け止めたせいで数メートル吹き飛ばされてしまった。

ごろごろと地面を転がり、ようやく止まったナーガだったが、その体は動く気配がない。二度も竜撃砲を顔に受け、ついにその命は無残にも吹き飛ばされてしまった。

奴の死体は見るに耐えないものになってしまっている。

確かに鍛えられた体をしていたし、硬い鱗に覆われていただろうがそのほとんどは爆弾と砲撃によって吹き飛びボロボロ。硬い鱗と筋肉をしていようがその爆風には耐え

られるものではなかった。

その鎧を崩されてしまい、あとはただ焼かれるのみ。あれでは使える素材はほとんど残されていない。よくて尻尾ぐらいなものだろう。

「……………」

そして勝利した二人ではあったが、彼女らもまたボロボロだった。

茉莉の左腕から盾が滑り落ち、重い息をついた茉莉は力が抜けたように膝をついてヘルステイング改を離してしまう。

辛勝。

その言葉が頭に浮かぶ。

重く鋭い攻撃を受け止め続けた左腕はばんばんになってしまい、さつきから冷や汗が止まらない。無表情をしているが彼女の心臓は先ほどから激しく鼓動を刻んでいた。

無理もない。

攻撃を受け止め続けている左腕はよく耐えたものだと思つてやっていたのだ。褒めてやりたいくらいだし、あの最後っ屁の噛みつきもよく躲せたものだと思つていたのだ。カウンターを決めると同時に自分は頭から噛みつかれて死んでもおかしくない状態だった。

そうなつてしまえば相打ちでこの戦いは幕を閉じていただろう。

(…………ギリギリ、か。私達もまだまだですね…………)

麻痺投げナイフ、落とし穴、眠り投げナイフに爆弾……。

ハンターが使う捌め手がなければ完全勝利出来ない。もちろんこれを使う事を恥と感じてはいないが、己の実力のみで討伐していくのがハンターにとつての最大の目標だろう。

今回はそれがなければ勝てない強大な敵だった。

体力もギリギリな上にかなり負傷してしまっている。背後で膝をついている瑠璃もまだ荒い息を吐きながら何とか立ち上がろうとしているようだが、彼女もまた締め上げられたダメージが抜けきっていないようだ。

「大丈夫かい!？」

そんな二人に異が慌てて駆け寄っていく。ナーガが討伐されたことでもう危機は去った。隠れていた彼は背負っている鞆を下ろしながら二人に近づき、手当てをするための道具を探し出す。

「私は後で構いません。まずは瑠璃の方からお願いします……」

「わかったよ！ さ、瑠璃ちゃん、これを」

鞆から取り出した飲み薬をそつと寝かせた瑠璃の口元へと持っていく、続けて身を包むナルガシリーズをどうしようかと考えていると、ふらつき、膝をついたまま近寄ってきた茉莉が口の端に回復薬グレートの瓶を咥えつつ「体は私が……。そこにあるポーチ



から包帯などを……」と呟きつつナルガシリーズに手を伸ばした。

頷きながら地面に置かれているポーチから祭りの指示通りに手当てするための道具を取り出しつつ、異は二人の様子を窺い見る。茉莉の左腕はダメージの影響で震えており、もたつきながらも確実に瑠璃の装備を外していつている。

露わになったのは白い肌には浮かぶ脂汗と内出血している痕と火傷の痕。生き残るための反撃だったがそれでも完全な無傷とはいかなかった。しかしそれでも生きています。だけ幸いか。

そんな姉を異から受け取った道具を使いつつ手当てしていく茉莉。飲み干していく回復薬グレートの効果で少しずつ回復しているだろうが、それでも彼女も大きな負傷をしているはずだ。

それをおくびにも出さない彼女の姿。それが常に姉を後ろから支え続けた彼女という在り方なのか。

（辛勝ではあるけれど、この若さでナーガに勝つという点は大きい。……凄いな、この二人）

手当てのサポートをしながら異はじつと二人を見つめながら心の中でそう思う。ハントーだけでなくギルドナイトも手を焼いた鬨蛇ナーガ。自分があの場に現れるまでは奴に圧されていたこの二人が、更に傷つきながらも掴み取った勝利。

一歩間違えれば死んでいたであろう瞬間もありながら、お互いに支え合い、それぞれの役割を果たして達成した討伐という事実。

(これは思わぬ出会いだったよ。なかなか興味深い。将来性のあるハンターというのはいい情報になりそうだね)

ふつと柔らかなく微笑を浮かべる巽はそれからも二人を手当てする手伝いをし、それを終えた三人は何とかベースキャンプに戻る事が出来た。待機しているギルドアイルーに成功報告を伝えると一時間の休憩をはさんで町へと戻るのだった。

こうして魔の森のクエストは成功に終わる。

だが今回のクエストは今までのクエスト以上の負傷を受ける程の難易度。覚悟していたとはいえ、ここまで傷つくとは想定していなかった。自分達が未熟であり、まだまだだ上がある事をその身に改めて知る。

しかし今は一時の休息を。

竜車の中で揺られながら二人はゆっくりと眠りに落ちていくのだった。

## 13話

日も暮れてくる頃、町へと戻つてくると竜車の中で眠っていた二人はゆつくりと目をさまし、竜車の中から出てきて大地に立つ。移動している間ずっと眠っていたために動けるくらいには回復していた。

アプトルを竜小屋へと届けると、酒場へと向かつて歩き出した。当然あの森で出会った異も同行し、共に酒場へと入ると驚いた顔で振り返るハンター達がいた。

どうやら夕食をとりにきていたらしい。

あの驚きようから考えて、どうやらこんなにも早く戻つてくるとは思っていなかったようだ。だが逆にこんなにも早く帰ってきたということは恐らく失敗したんだろう、と判断したらしい。

確かに二人の出で立ちにはポロポロだ。生きて帰ってきただけでも幸運だったろう、でも思っているのだろうが、残念ながらそうではない。

二人は受付まで向かうと、そこにいた受付嬢に報告する事にした。

「おかえりなさいませ」

「これ、報告ね」

あの森にいたギルドアイルーが確認した情報を纏めた報告書を受付嬢に提出する。それを確認した受付嬢はやはりというべきか、大層驚いた表情でそれを見つめ、交互に二人を見る。

「事実よ。何とかって感じだけね」

「死体はギルドアイルーが回収しているので、後程確認をお願いします」

「は、はい。ではお疲れさまでした……」

報告書を確認して判を押した事でクエスト成功となる。報酬金を受け取り、後で報酬祖座を受け取ればこのクエストは完全に終了だ。

その様子を窺っていたハンター達もまた驚きに包まれた。まさか本当に謎の存在、ナーガを倒してしまうとは思わなかったのだ。まだここにはナーガだったという事は伝わっていないが、多くのハンターが行方不明になってしまった原因を潰すというのは信じられないものだった。

辛勝ではあるが勝ちも勝ち。彼女らの見た目がボロボロという事もあり、それは厳しい戦いだったのだろうという事は窺える。ハンターの中にはそんな彼女達に尊敬の眼差しを向けているが、それは彼女達の実力を認めたのだろう。

「じゃ、あたし達は宿に戻って休むから、あんたは好きに動いていいわよ」

「うん。改めて、助けてくれてありがとう。明日、また取材してもいいかな？」  
「ええ、少しだけなら構いませんよ」

「よかった。じゃあ明日よろしくお願いするよ。じゃ、僕はこれで！ あ、すみません、少し話を聞いてもいいかな？」

ぺこぺこと頭を下げて二人から離れていくと、酒場の客としてやってきたハンターの下へと向かっていき話しかけていく。早速情報屋として取材を始めるらしい。

そんな彼を尻目に二人は酒場を後にすると真つ直ぐに宿に向かつていった。部屋に入るとシャワーを浴び、後はまた泥のように眠り続けた。

次の日の朝、目覚めた二人は私服に着替えると朝食をとるために酒場へと向かった。かなりの就寝時間をとったため昨日の疲れはほぼなくなり、負傷の痕もある程度回復していた。

このところは流石の竜魔族といったところか。だが完全に治っているわけでもないようで、しばらくは無理をしない方がいいだろうと自己分析する。

さて、今日は何を食べようかと考えながら酒場の扉を開け、中に入って席に着くとすぐにウエイトレスがやってきてお冷とお品書きを置いてくれる。

内容を眺めて今日は和食系統にするか、と決めて注文し、数分後にそれが運ばれてくると手を合わせて食事を始めた。

朝食を頂きつつ周りの客達の話聞く限りではナーガの死体は回収され、またギルド・アイルーがざつと様子を確認した限りではほぼ安全である事が通達されたようだ。

謎の存在がナーガであるという事が知らされたハンター達の反応は大部分が「驚き」であり、そして同時に「納得」の色が見えた。ナーガならば大抵のハンターが太刀打ちできない存在だ。死体が見つからないのもナーガならば説明がつく。

しかしどうしてこんな辺境にまで現れたのだろうかという疑問も浮かんでくる。それについてはもうすぐ現れるであろう巽に訊いてみる事にしよう。

そう考えていると、当の本人が酒場の扉を開けて中に入ってきた。きよろきよろと誰かを探すように辺りを見回し、二人を見つけると「やあ、おはよう」と手を挙げながら近づいてきた。

「ゆっくり休めたのかな？」

「そうですね。また旅をする分には問題ないくらいには」

「それは良かった。……あ、すみません。注文を」

お冷を持つてきたウェイトレスに巽の注文を通すと柔らかな笑顔を浮かべて二人を見つめる。二人の朝食は食べ終えかけているところであり、もう少し待てば話をしてもいい具合だった。

やがて二人が食べ終え、お冷を飲み干すと巽がいいかな？ と視線で問いかける。そ

れに茉莉が頷く事で応えると早速異は二人に取材を始めていく。

「さて、改めて名乗ろうか。僕は異、個人の情報屋みたいなものだよ。今回こっちに来たのはここで謎のモンスターによる事件が発生していると耳にしたからだね。情報屋としては調査せざるを得なかったんだね」

「正体はナーガであると判明しましたね。討伐してしまいましたが、情報は集まったのです?」

「うーん、どれだけ犠牲者が出たのか、いつからその事件が起こったのか……ぐらいしか聞き取り調査ではわからなかったなあ。でも見た感じのナーガの実力とかのあれの情報もなんとなくもわかったし、今回はこれで満足する事にするよ」

「え? あんたそんなのわかるの?」

「まあ、事件の調査だけでなく飛竜や牙獣などのモンスターの調査もしているからね。ある程度は観察眼も鍛えられてきたものだよ」

かけてもいない眼鏡をくいっと上げるようなしぐさを見せながら得意げに笑う異ではあるが、ジト目になった瑠璃が「あんた、そんなあいつらと戦えるの?」と訊いてみると、「いやあ……あつはっは……」と今度は乾いた笑いを浮かべる。

そんな彼に相変わらず表情を変えず、茉莉は気になっていた事を問いかける事にする。

「蛇竜種がどうのこうのというのがあったかと思いますが、それについて教えていただいてもっ。」

「ああ、それについてだね。これについてはここ数年かけてゆつくりと確認され始めた事実だよ。この東方で場所を問わずに蛇竜種の動きが以前よりも活発になってきているんだね。乾燥地帯ではヒュドラをはじめとする多頭蛇竜、森ではグレイハブをはじめとする蛇竜。そしてナーガという新たな分類、蛇人種。噂では火山でも見た事のない蛇竜種らしき影を見たという話もあるくらいだね。それくらい蛇竜種が多く確認されているんだよ。」

「原因はわかっているのですかね？」

「わからない。ギルドでも原因を究明している途中だね」

首を振りながらそう言えば、「そうですね……」と頷きつつ茉莉は考え込むように顎に指を添える。彼女なりに原因を考えてみようとしているようだが、当然ながら東方の事情をあまりよく知らず、蛇竜種についてはまだまだギルドで研究中なため情報もあまりない。

それで蛇竜種が活発になってきている状況を説明できるわけがなかった。

「多くの意見は数年前に発生したアクラ・ヴァシムのように、大量発生しているんじゃないかっていうものなんだけど、確かにこれは一理ある。数を増やしているのは紛れもな



い事実なのだからね。でも、これは異常だ」

「確かに。一種類だけならばそれも説明が付きますが、蛇竜種という分類だけが一気に増えたのは謎です」

茉莉の言葉に異はまたふつと笑うと手帳を開き、そつと身を乗り出して二人に静かに話しかけ始めた。

「僕なりに考えてみた事なんだけどね、これは蛇竜種の上に立つ存在が動き出そうとしているんじゃないかって思っているんだ」

『っ……!?!』

そのトンデモ発言に二人は息を呑むしか出来ない。一体この人は何を言っているのか？

だが異の瞳は本気だった。彼なりの推測ではあるようだが、彼は本気でこの話をしていくらしい。

「蛇竜種の上に立つ存在って……何なのよ？」

瑠璃も抑えた声で異に問いかける。

「蛇竜種の中で最も力を付け、古龍種まで上り詰め、華国にとって縁深い存在——」

開いたページをそつと二人に見せる。そこには三つの頭を持つ巨大なヒュドラが描かれた紙が貼られていた。

「——冥蛇龍めいだりゆう、デイス・ハドラー。かの存在がまた現れようとしているんじゃないかって僕は推測しているんだ」

「冥蛇龍……」

「デイス・ハドラー……」

蛇竜種の中で最古参にして最高峰とされる伝説種に数えられた古龍種。華国を中心に東方で数百年の時を経て現れ、何度も国を滅ぼしてきた存在だ。現れるたびにハンターや国の総力を挙げて撃退してきたが、討伐には至る事ほんの一、二度と言われている。

多くの場合は人が敗れ、国を滅ぼされるに至ってしまったのが歴史書に記されている。

「……はっ、そりやないでしょ。蛇竜種が活発になったから冥蛇龍が現れる？ どうしてそうなのよ？ 過去にそういうケースがあつたつて言うの？」

「いや、ないよ」

「じゃあ根拠がないじゃない」

「そうだね。……でも、六年前にこんなケースがあつたじゃないか」

六年前、と聞いて瑠璃の表情が硬直する。茉莉も真顔だったのがそこで固まってしまった。六年前といえばあの大事件しか頭に浮かばない。あれに関わった人達と交流

があつたのだから無理もない。

そして異は二人に見せていた手帳を戻し、ページをめくって話し出す。

「六年前、かの伝説の黒龍ミラボレアスが降臨した。あの頃は確か黒く染まった飛竜……狂化竜と呼ばれた存在がドンドルマを中心として確認されていたんだよね。あれらが各地を跋扈し、猛威を振るっていた事は記憶に新しい。……そしてハンターやギルドナイト達の活躍もあつて着実にその数を減らしていったけど、それが闇を高める要因となり、ミラボレアス呼び寄せた。調査した結果そこまで考えたんだけど」

「……………」

ほとんど当たっている。当事者ではないため詳しくは知らないが、狂化竜がミラボレアス呼び寄せる要因の一つとなっていたという事は耳にしていた。

「今回もまたミラボレアスのようなケースで、デイス・ハドラーも現れるんじゃないかって推測しているんだ」

「……………狂化竜を蛇竜種に置き換えた、という事ですか」

だが狂化竜は人為的に作られた存在だ。今巷を騒がせているという蛇竜種とは違うだろう。彼らもまた人為的に活発にされているというならば話は別だが、そんな事をして何になるというのか。

……まさか、また誰かが何らかの目的のためにあのような大事件を引き起こそうとい

うのか？

もしデイス・ハドラーを本当に呼び寄せようというならば、今度は国滅ぼしのための召喚？ いやな予感が頭によぎってしまふ。本当にそうだとするならば……色々とめんどろな事になってしまふ。

ただでさえ今の世情はかの血統に対して否定的になっていくというのに、その上で再び伝説種の襲来だなんてどうしろというのだ。あの人達に助力を求めたとして、果たして周りの人々はその助力を受けるのだろうか？

振り払い、石を投げつける光景しか頭に浮かばない。

例え彼らがミラボレアスを討伐する事が出来たハンター達の一員だったとしても。

そんな想像をしていた茉莉は一度目を閉じて緊張を少しづつ解き、ポーカーフェイスをその顔に貼りつけなおして話を続けていく。

「だとしても、蛇竜種が活発だからといって冥蛇龍へと結びつけるのはいささか情報が少ないかと」

「……そうだね。僕も早計かな、とは思っているけど……それでも最悪を想定してしまふんだよね。起こってからでは遅い、それは六年前もそうだったと僕は思っているから。それに、あの一件で少なからず多くの命が消えた。人も、竜もね。……その中で、蛇竜種の被害が少なかったとするならば、もしかすると減った竜や獣らに代わって繁殖力

を高めたのかもしれない。……ま、根拠はないけどね」

あの大事件での被害者は数千人は下らないと言われている。それだけの狂化竜による被害者を生み出し、辺境の村や町の数は減少していった。ミラボレアスによる直接的な被害はないのが唯一の救いといわれているのが幸いだ。

旧シュレイド城で決着がつかなければ、あるいは止められなければ、恐らくシュレイド地方で大きな被害が確認されていた事だろう。

そう言われている程大きな事件だったのだ。

だからこそ情報を求める。そしてそれが役立つものであるならば有効利用する。

「……さて、蛇竜種についてはこれくらいでいいかな。次は君達の事について訊いても？ あ、最初に言っておくけど取材した事は記事にしたり、積極的に広めたりするような事には使わないから安心していいよ」

「私達ですか。何をお訊きに？」

「改めて、になるかもしれないけれど、まずは名前を」

そういえばすっかり名乗った事はなかったか、と茉莉は思い出した。随分遅い自己紹介になってしまったが、改めて名乗っておくことにしよう。

「あたしは瑠璃・フレアウイング」

「その妹、茉莉・フレアウイングです」

「へえ、フレアウイング、か……褐色の翼をしていたし、有翼種の魔族という事でいいの  
かい？」

「ええ、その認識で間違いないですよ」

実際には竜人族の血も混ざった竜魔族なのだが、これは口にするものではない。有翼種で竜魔族なんて情報屋に知られたらめんどろなことになるそうだ。巽の事を信用していない、というわけではないが、もしもの事もある。

用心するに越したことはないのだ。

「見た目がよく似ているけど双子という事でいいのかな？」

「はい、そうですね」

「双子のハンターか……いいね。昨日のクエストは上位ランクだったし、ナーガを討伐するだけの實力もあるから上位ハンターだね。ハンターになってどれくらいなのかな？」

「ハンターになる訓練や鍛錬が長かったので……二人で活動し始めたのは四年ほど前で  
しょうか。ロックラックを中心として各地を回っておりました」

「ふむふむ、あの戦いで察するに瑠璃ちゃんが出て茉莉ちゃんを支える、というスタイルだね。性格的にも何となくそれはわかるよ」

あの戦い方から前衛と遊撃支援は見てとれる。ずっと隠れて観察していたため二人

の実力も大まかに把握した事だろう。それにナーガを倒した実績もある。異は二人は上位ハンターの中でも結構上のランクのハンターだろうと推測する。

「HRはどれほどのものなのかな？ やっぱりもうすぐG級に達するくらいのものかい？」

「……いえ、まだまだですよ。40にも達していませんからね」

「うん？ 君たちくらいの実力ならもうそれを超えてもいいのに、何か理由でも？」

「残念ですが、それにお答えする事は出来ません。申し訳ないですが……」

「ああ、うん、いいよ。話したくない事があるのなら無理に訊き出そうとは思わないからね。じゃあ別の事を……出身地は……ああ、魔族だからこれも無理かな」

「そうね。これも黙秘させてもらうわ」

こうして取材は続いていき、基本は茉莉が応答していくが時折瑠璃も混ざって答えていく。だが魔族としての特徴を生かし、出身地などの魔族にとってあまり口に出来ない事を隠す事になる。

ある程度取材が進むともう話す事はなくなってきた。隠すべき事、本名などは最後まで話さずに取材が終わる事になる。

「ご協力ありがとう」

「本当に記事にしたりしないのよね？」

「もちろんさあ。僕はただ優秀なハンター、将来的に花開きそうなハンターの事を知り、それを陰で記録するだけだよ。誰かが知らなくても、確かにそんなハンターがいたんだって事を記録する、その一環として取材しただけさ」

それじゃあ情報屋というより記録屋、とでもいうのだろうか。巽の考える事はよくわからないが、この人のいい笑顔を見ているとどうも疑う心を薄れさせていくかのような感覚を覚える。

ぱたん、と手帳を閉じて懐に入れると、「君達はこれからどこに行くんだい？」と訊いてきた。それくらいは答えてもいいだろうと瑠璃は「ユクモ村よ」と答える。

「ユクモ村かあ。この間もそっちに行くって言っていたハンターさんがいたなあ」  
「へえ、やっぱりあの村って活性化しているのね」

「みたいだね。温泉のある村として着実に名を広めているよ。そうなると人が多くなるから物流とか情報とか、色んなものが交わる場所でもあるね。僕もつい最近までそこにいたんだよ」

「……む？ となると少し訊いてもよろしいです？」  
「うん？ 何か知りたいことでもあるのかな？」

首を傾げる巽に、「え？ ここで訊くの？」と視線で問いかける瑠璃。そんな二人の視線を受けて茉莉は少し考えたが、静かに口を開いてあの事について訊いてみる事にし



た。

「星野翔、という人を探しているのですが、心当たりはありますか？」

「ほしの……かける……、うーん、聞いた事ない名前だね。知り合いかい？」

「ええ」

「もしかしてその星野翔って人を探しにユクモ村に向かっているという事なのかな？」

「そうですね。あそこならば彼もいるのではないかと思つてまして」

「なるほど。ごめんね、力になれなくて……もしよかったらその星野翔って人の情報も集めておこうかい？」

「いえ、お気遣いなく。もう少し私達で探してみようかと思つています」

ペこり、と頭を下げてそれを丁重にお断りすると、「そう、僕が得るばかりで心苦し  
かったんだけどね……」と苦笑する。どうやら異なりに二人の力になろうと思つたよう  
だ。本当に残念そうな表情を浮かべる。

それにこの星野翔という名前をした人物なんて存在しない。いや、もしかするとい  
かもしれないが、普通はいない。

正しくはこれは偽名だ。これは二人が探している人物が名乗っている可能性がある。  
もし彼らが普通の町に出てきているならば、本名ではなく偽名で活動するはずなのだ  
ら。

そして彼が使う偽名は前に一度来た際にこれを使っていると聞いたため、この名前を情報の一つとして使い、彼らを探しているのだ。

また積極的に情報屋を使って探さないのも無用ないごぎを産まないためだ。事情があつて彼らは身を隠している。情報屋を使って探し出し、それによつて余計な人達まで集まつてきては困る。

「それにしても途中で会つたハンターさんといひ君達といひ、最近は人探しのためにユクモ村に行く人がいるんだねえ」

「……? どういうこと?」

「いやね、この間のハンターさんも弟を探すためといつてユクモ村に向かつてたんだよ」  
「弟を探すハンター? もしかして、その人つて黒髪で、浅葱色の和服着てて、小太刀を二本帯に差してて、気の強そうな女だった?」

「よく知つてるねえ、知り合いかい?」

知り合ひも何もこの間一緒にクエストをした間柄だ。どうやら先にユクモ村についていそうな感じだ。もしかすると本当にもまた会つてしまう事になるかもしれない。

ふと、茉莉が何かに気づいて首を傾げ、「それにしてもよく彼女がハンターだとわかりましたね?」と問いかけた。あの私服の出で立ちにはハンターというより剣術を嗜む女性と思つてしまふだろうからだ。

だが異はああ、と頷いて答える。

「ちよつとジャギイの群れに絡まれちゃってね……その際に会ったんだよ。なんでも暇つぶしとしてその群れの討伐クエストを、近くの村で緊急で引き受けてきたらしいんだよね。それもハンター装備を身に包まずに私服のまま。いやあ……おもしろいハンターさんもいたもんだねえ、あつはつは」

「……………なるほど」

あの戦いを好む性格だ、何となく想像できる。嬉々とした表情で小太刀を振り回し、群れるジャギイをかたつぱしつから斬り捨てていったのではないだろうか。

それにしても異も異だ。以前もモンスターに絡まれていたとは、そしてまた誰かに助けてもらう事で生き延びているとは……本当に悪運というものが強いのだろう。その意味では彼もなかなか興味深い。

そんな事を考えていると、異はあ、と何かに気づいたような表情を浮かべて鞆を探り、一つの手帳を開いた。ばらばらとページをめくり、じつとそこを見つめる。

「……………うん、一つ君達に言っておくことがあるよ」

「なに？ またなにかいい情報とか胡散臭い情報とか？」

「胡散臭いって……………ひどいなあ。……………実はね、最近南西の方角からゆつくりと悪い空が移動しているらしいんだ」

「悪い、空……?」

どういふ事だろうか、と二人の表情が引き締まり、じつと巽を見つめる。

「ちよつとした知り合いがその空の事情に詳しくてね、教えてもらつただけどあれは嵐の前触れじゃないかつて話なんだつて」

「嵐……?」

「うん。それがユクモ村方面に移動しているから、道中気をつけてね」

嵐が近づいてくる、となると急いでユクモ村に向かつた方がいいかもしれない。野宿しているときに嵐にでも遭遇すれば目も当てられない。

となれば善は急げだ。

巽の取材が終わつたのならばもうここにいる事もないだろう。巽もそんな二人の様子に気づいたらしく、小さく頷いてみせた。

「では私達はこれで失礼しますね」

「うん、今日は朝からありがとうね」

手を振る巽に一礼すると会計を済ませて二人は酒場を後にする。そのすぐ後に「お待ちたせしました」と巽が注文した朝食が運ばれてきたため、巽はようやく朝食を食べ始める。

頭に思い浮かぶのは先ほどの二人の事。取材して得たものはあつたが、得られなかつ

たものも多い。それは魔族という種族という事もあるため仕方のない事だろうが、それでも異は今回の取材はいいものだったと判断していた。

(フレアウイング……か。そういうえば、六年前の資料にもその名前があったような気がするなあ。……うん、これは一度戻って調べてみたほうがいいかな。先日の事といい、今回の旅は実りあるものだったといえるね)

これからの予定を軽く決めるとさくさくと朝食を食べ終えて異もまた酒場を後にする。懐から手帳を開き、軽く視線を巡らせて頷くと不意に南西の方角を見上げた。

その先には黒雲へと成長している雲があるのだろう。それがユクモ村の方へと進んでいる。あの二人は大丈夫だろうか、と少し心配になるが、あの二人ならば何があっても乗り越えていけるだろう。

(風が、吹いてきた……)

冷たく少し強い風が頬を撫でる。それに身を任せながら異は神秘的な表情を浮かべてじつと空を見つめるだけ。

優しい霧囲気はなりを潜め、ただただ空を見つめ続ける。

やがて彼は小さく首を振って歩き出した。二人が向かうユクモ村とは反対の方角へと。

(彼女達の道中に幸多からんことを)

風に吹かれながら巽は静かに町を出て森の中へと入っていく。その口元は二人によく見せていた優しい微笑を浮かべていた。

それから数日後、二人はアプトルが引く竜車に揺られ、中から静かに外の様子を見上げていた。空は厚い雲に覆われ、強い風が何度も吹き抜けている。

巽の言っていた嵐がやってきたのだ。屋根に強い雨が何度も叩きつけられ、風によってがたがたと音を立てている。

「……まったく、本当に嵐が来るなんてね……」

「まあ、自然に文句を言ってもしょうがないでしょう。今はただ無事にユクモ村につけることを願うのみですよ、ふっ」

竜車から御者席へと伸びる屋根の下で茉莉が手綱を操り、竜車を引く二頭のアプトルを操って雨でぬかるんでいる地面を何とか転ばぬように走らせ続ける。雨が降る前に確認した地図によればもうすぐユクモ村につけることが分かった。

このまま行けば何とか今日中にユクモ村につけるはず。こんな嵐の中で野宿するのはごめんだ。だからこそ急いで、しかし安全にユクモ村へと向かいたい。

そして瑠璃は竜車の中からじつと黒雲に包まれる空を見上げる。夜のように暗く、遠くに広がる森もざわめきが収まらない。時折雷が鳴って空が光っているようだが、それでも空の向こうは見える事はない。

「……………」

ふと、一瞬光った空の向こうで動く影が見えたような気がした。それは泳ぐようにあの黒雲の中を飛行していたように見えたのだが……気のせいだったのだろうか？

そんな事を瑠璃が感じていると、

「ッ!？」

急激に周りの空気が一変したように張り詰め始めた。バチバチと音を立てて空気が弾け、見ればあちこちの雷光虫から電気が弾け飛んでいた。だがそれらは一点に向かって集結していき、それはまるで流れ星が流れていくかのような光景を作り上げる。

だがこんな嵐の中で雷光虫がこれほどまでの光景を作り上げるとは思えない。

それにこの空気を作り上げている主が雷光虫の向かっている先にいるのだ。茉莉は緊迫した表情でその先を見つめる。

「ギヤアツ、ギヤアツ!？」

アプトルもまた何かに警戒するような声を上げて失速し始める。

そんな中、奴はゆっくりと闇の中から姿を現した。ずしん、ずしんと鈍い音を立てて木々をすり抜け、周りから集まってくる雷光虫を纏いながら竜車の進行上へと我が物顔で立ちはだかつてくる。

「くうっ……!？」

慌ててアプトル達の手綱を操って進路を変更し、その背後からすり抜けるように調節する。だが雷光虫達が放つ電気が弾けだし、アプトル達の足を絡め取るかのように動いていく。

「な、なに!?!」

「切り……抜けて……!」

これまで以上に竜車が揺れ出したため、瑠璃も慌てて竜車の壁に手をつきながら状況を把握しようとする。その視界に大きな何かが立ちはだかっているのを見て息を呑むが、それはすぐに横へと流れていく。転びそうになりながらもアプトルは何とかあれの背後を通り過ぎたのだ。

どうやらあれは茉莉達に興味を示していなかったようで、竜車に手を出す事はなかった。奴の視線はただあの空一点のみに向けられていたように思える。

奴もまた突然の嵐に文句でも言いたかったのだろうか。それはわからないが、奴が自分達に手を出さなかっただけでも幸運だと思おうしかない。

何せ見間違いでなければ、あれは以前ユクモ村を騒がせたという存在なのだから。

メインの防具が修理できていないし、激しく動く事が出来ない体調でもある。今の自分達で果たして討伐できるのかどうか怪しい。

そんな中であれと事を構える事になればマズイ事になっていただろう。



だから幸運……いや、もしかすると異の悪運が二人に影響を与えたのかもしれない。何にせよ切り抜けたならばよかった。

アプトル達も少しずつ落ち着きを取り戻し、嵐の中を走り続ける。

それから一時間後、嵐はまた遠くの空へと去っていく。そうして空が落ち着いてくる中、二人の視界に山間の谷の中に存在する小さな村が見えてきた。門の前に竜車を止め、少しボロボロになってしまったそれを預けると二人はじつと門の向こう、階段の上を広がつていくその村を見上げた。

「ようやく、つて感じね」

「ええ、何とか着く事が出来ました。……やれやれ、ですね」

ちよつとしたアクシデントがあつたがこうして自分達は目的地へと辿り着いた。

温泉村、ユクモ。

ここに二人が探している人達がいるのだろうか。

あるいは二人の情報を得る事が出来るのだろうか。

それはわからないが、何か得られるものがあればいい。

そう願つて二人はユクモ村の門を潜り抜けていった。

## 14話

ユクモ村から北東に数日かけた所に存在する険しい山が並ぶその場所の一角に、霊峰と呼ばれし場所がある。ここは周りの山の中でも特に険しい山道があり、更に深い霧に包まれた場所もあつたり、道なき道の先に深い崖が存在していたりと人を拒む自然が存在する場所だ。

その霊峰の山頂に一頭の白い存在が舞い降りる。

現在その山頂の周囲には厚い雲が広がり、激しい風と雨を吹き荒らしていた。まるでそれはこの白い存在の訪れを知らしめているかのよう。

実際それは正しくもあり逆でもあつた。この激しい大嵐はこの存在が作り出しているため、厚い雲はここを中心として渦を巻いている。

「……………」

ゆつくりと山頂に着地したその姿は他の竜、龍達とは違っていた。顔は東方の竜に近く、骨格もまた胴長の龍を思わせるものだ。羽衣のように白く生えるヒレが印象的であり、それが風になびく様は美しく感じる。

そう、そこには羽衣を纏った天女が舞い降りたかのようだ。

ぎらり、と目が光ると天上を覆っていた厚い雲が霧散し穏やかな天気がそこに蘇る。霊峰の山頂から見下ろす光景はまさに絶景といえるものだった。

それを眺める白き龍。

『……………誰ぞおるのか?』

しばらくそうしていた龍は不意にそんな事を呟いた。ここには龍以外誰もいないはず。しかも龍が言葉を放つという異様な出来事ではあつたが、その言葉に誰かは応えた。

『……………おやおや、気づかれたか。ま、いいけどね。わたしだ』

ぶつぶつとした声だったがそれはかの龍に届いたらしい。肩越しに振り返る龍に近づくのは一人の女性の姿。どこからともなく突然そこに現れたかのように姿を見せた彼女は――

『ほう、香澄かえ。久方ぶりであるな』

『……………そうだね。何年ぶりになるのやらね、天空』

闇色に染まり、月の出る夜空を描いた和服を着込み、深い紫色の髪を肩にかけた女性。

伝説の情報屋にして“世界”に届いたオオナズチ、香澄。

六年前の重大事件の際でも陰で行動し、情報収集や情報提供を行っていた彼女がこの地

にやって来たのだ。その理由の一つとしては目の前にいるこの龍にある。

「……どうやら君がめでたいことになったと聞いたんでね、こうして祝いに来たんだよ。……という事で、ウエゼントネルを退け、空の七禍龍入りおめでとう天空」

『ふむ、ここはありがとうと言っておくべきかの』

そこで目を閉じた龍は淡い光の渦に包まれる。更に風がうねり全身を包み込むと龍は光の粒子となつて霧散した。だが粒子は一度宙に散らばると今度は一点に向かつて収束し、人の姿を取る。

そうして現れたのは白い小袖に黒い袴を履き、水色の羽衣をなびかせる女性だった。瑠璃色の瞳を香澄へと向け、優雅に微笑を浮かべながら穏やかになった風に身を任せていた。

「それにしても耳が早いほう。その辺りは流石といったところかえ？ 香澄よ」

「……ウエゼントネルが落ち、アマツマガツチが昇格。その影響によるあの女の改変を  
確認したからね。……ははっ、このわたしが見逃さないはず、ないでしょう？」

「ふむ、そうなの」

アマツマガツチ。

それが彼女の龍としての名だ。嵐龍と呼ばれた古龍種であり、同時に伝説種でもある。嵐の中に住まうとされ、嵐と共に姿を現す存在であり、その規模は同じような能力

を持つクシャルダオラを超える。

まさに空の天災であり、このアマツマガツチによって引き起こされた大嵐によって壊滅した村の残骸が存在する程この爪痕の深さは大きい。

もちろん古龍種の記録としてアマツマガツチの名は存在するが、あくまでもそれは古龍種、伝説種としての欄であり、七禍龍を纏めた書物にはなかった。

「ほんと、あの女の改変は恐ろしいねえ……。こうして形に残り、人々の記憶にも齟齬がないように改変とは……末恐ろしいよ」

懐から取り出した書物、題名は「七つの禍の龍」。現在出ている書物で七禍龍について纏めた書物であり、判明している情報を書き記されている。ミラボレアスについて六年前の事や闇についての情報が書き記された代物だ。しかしそれ以外については六年前のもののみまだつたはずだが、先日これに変化が訪れたのだ。

何と空の七禍龍の部分がウエゼントネルからアマツマガツチに変更されたのだ。

もちろんギルドの者がこれを書き換えて新たに発行したのではない。彼女が手にしているこれは六年前に出たもののまま。

これが——『世界』の改変だ。

「妾たちにはなく、世界の全てにまで影響を与える改変の力。あれが白皇様が神であることの証であり、妾たちの上に立つ龍神である事を妾たちに思い知らせるというもの

よ」

こうして形に残る程の改変は実際に九尾が過去に行った事がある。それは自分が過去に飛んで自分から歴史を改変しに行ったという点だ。これによってルナ・フォックスが実際に行ったこと以上の功績を残し、更に事件の黒幕だった神倉羅刹にも影響を与えた。

だがこれは彼女が自分から改変を促したものだ。世界の中に入り込んで行ったのだ。

今回ウエゼントネルからアマツマガツチへと変えたのは世界の外から改変させた。それだけでなく世界に住まう人々の記憶にも影響を与え、改変した事を気づかせていない。九尾でもここまでの事は出来ない事なのだ。もちろん九尾以外の者らでも不可能。

だからこそ白皇はこの世界の神。他の「世界」の者達でさえ認めざるを得ない神としての力だ。

「さて、香澄よ。妾の事を祝いに来たならば、その饞別として妾に情報提供してもらおうかの？」

不意に天空が袖を口元に当てながらその瑠璃色の瞳を細めて香澄を見据える。

「……………なにを求めるのかな？」

「決まっておろう。現在雲隠れしておるあの者らの居場所を告げよ。よもや、知らぬとは言わせぬぞ？」

「…………だれの事かな?」

とぼけるように視線を逸らすと、天空の瞳が爛々と輝く赤へと変色していった。更に殺気に近い覇気が天空から渦を巻くように放たれ、香澄の全身を刺し貫いていく。普通の人ならば気を失っているか、最悪精神が死んでいてもおかしくない状態なのだが、香澄は相変わらず気の抜けるような表情で天空を見つめている。

そんな彼女をじつと睨むように更に殺気を深めながら、天空は怒気の籠る低い声で話を続けた。

「戯れ言をぬかすなよ? 妾が誰の事を問うたのかわからぬはずがないし、そなたともあろう者が、あやつらがどこにいるかも知らぬはずがない。故に疾く、話すがよい。危険視されているシユヴァルツを娶りし白銀一家がどこにいるのかを」

「……………さて、どこにいるんだらうね?」

「まだとぼける気かえ?」

「残念だけどね、今日は天空の七禍龍入りを祝いに来ただけだからね。情報屋としては開業していないのだよ」

やれやれと肩を竦めながら首を振る香澄に悪びれる様子など微塵もない。

彼女は気分屋であり、その気があれば誰にでも求められた情報をそれなりに話しているが、気が乗らなければ誰であろうとも情報を話す事はない。今日は後者らしくどこか

いつも以上に気が抜けているように思える。

「……というわけだから、リクエラストを聞いておいて悪いけど、情報は話せないね」

「……ふん、相変わらずよな香澄よ。そなた、それでも白皇様によつて生み出されし龍種かえ？ 何故白皇様の意志に従わぬ？ 妾には理解できぬな」

「……ははっ、何でもかんでもあの女に従つてばかりいるつてのも面白くないだろう？ というかき、何度も言うようだけどわたしとしてはシュヴァルツの事、どうでもいいんだよ。あれもまたヒトの進化の一つ、殺しに特化した一族があつたっていいだろう？」

「限度というものがあろう。人殺しの要素を強く持つ殺人鬼と、竜殺しの要素を強く持つ竜狩人を合わせた因子を保有するなどあつてはならぬのだ。ここに……神殺しの要素まで含めば……いや、想像したくもないわ」

「……ははっ、神殺し、か。クツククク……、それまで発現したら非常に面白くなりそうだよな。わたしとしてはそれは歓迎だなあ……」

ふあ……と欠伸をしながらも冷たく笑う彼女の目にどこか楽しげな雰囲気が宿りだす。それに対して天空はどんどん不機嫌そうな雰囲気を放ち出した。まあ、当然と言えば当然だろう。

彼女は香澄と違い白皇に忠実な龍なのだから。むしろ香澄みたいな龍の方が珍しい。



そしてこれも当然ながら白皇に従わない龍や竜は排他的であり、他の竜やモンスターに狙われる事があるのだが、香澄はこれを全て退けている。

この七禍龍が一に昇格した天空を前にしても余裕なのは、やはり自分の実力に相当自信があるのだろう。

「まったく、そうカリカリするなよ。本当に天空はあの女に忠実だよね」

「龍種ならば白皇様に忠実でなくてどうする？ そなたが異常なのだ。この世界に住まう龍をはじめとする人ならざる者ならば、白皇様の側用人を目指すものであろう？」

「リーゼロッテやヘルの事かい？ ……ああ、そういえば天空は側用人を目指していたか」

「そう。七禍龍はただの通過点でしかないのよ。ヒトが恐れる七禍龍が最終地点ではない。それをも超えた存在、龍神である白皇様の御側を許された側用人こそが最終地点。かつて四つあったその座、今は二つの空席となったその一つに妾が座すのだ。妾は白皇様に忠実なる龍としてそれを目指す！ ……故に香澄よ。話すがよい！ そなたの気分など関係ないわ！ 白皇様のために白銀一家の居場所を吐くのだ！」

再び山頂を中心として強い風が吹き荒れ、空は厚い雲に覆われ始めた。空気の渦が発生し、山頂から逃れられぬように封鎖していく。そうして強風という名の檻が完成すると、強く体を叩きつける雨や暗くなっていく空を照らす雷が轟き始めた。

天空の赤い瞳は更に輝きを増し、その美しい白髪がゆつくりと毒々しい黒に近い色に変化し始める。それに伴って嵐のエネルギーが天空の周囲に集まり始め、六つの球体となつて渦を巻く。

それは香澄の周囲でも発生し、彼女を逃さないようにしていた。彼女が何かすれば撃ち出されてダメージを与える、という雰囲気だ。

それでも香澄は調子を崩さない。だが気だるげな鈍色の瞳がうつすらと変化しはじめ、じつと天空を見つめていた。

「……………なあ、天空？」

ゆつくりとどこか優しく天空の名を呼ぶ。しかし天空はそれに応えず香澄を睨み続け、右手をゆつくりと動かして嵐の球体を操り始める。そんな彼女を見つめて香澄は言葉が続けていった。

「そうやってさ、あの女のためにわたしから情報を引き出そうとしてさ、逃がさないようにするのはいいけど——」

呟くような声で語り続けた彼女の姿が一瞬の内に消えてしまう。その一瞬後に嵐の力が更に高まり、周囲の球体が無差別に動き出す。

激しい風、轟く稲妻、滝のような雨。

自然の猛威が山頂の姿を変化させるほどの力が振るわれる中、

「——お前、わたしを止められると思ってるの?」

そんな言葉と共に天空の近くで水が跳ねる音がした。「そこかつ!」とそちらへと球体を撃ち出したのだが、それが命中したような感覚はなかった。逆に毒々しい色をした霧が発生し、天空へと伸びてくる。

オオナズチが放つ毒霧であると察知した天空はその場から離脱した。だがその周囲にあつた嵐のエネルギーが凝縮された球体は、天空の意志に反した動きをし、一か所へと終結し始めた。

「……これは駄賃として頂いていこうか。……嵐の……いや、エネルギーを抽出して、水の大宝玉。風の大宝玉は……ま、これも一応頂いていくよ」

姿を見せず声だけが山頂に静かに広がっていく。激しい大嵐が発生しているにも関わらず、どこか不気味に香澄の声が天空の耳に届いてくる。気配や香澄の力、声の出所を探してみても、どういうわけか感知できないのだ。

駄賃として持つていくと言ったあの大宝玉もいつの間にか消え去り、手掛かりが全くなくなってしまう。

「ま、その礼として、というのもしかと思うけど、一つだけ教えておいてあげようか」  
山頂を囲む嵐の一部が縦に引き裂かれ、空気の流れが一瞬変化する。そこから逃げるのか、と天空が視線を向けたが香澄の声は出所が不明なままどこからともなく聞こえて

くる。

「白銀一家はこの東方にいるのは間違いないよ。どうかお前に縁のあつたユクモ村にも来たことがある。……ま、当然変装して、だけどね……ははっ」

「なに？　ではやはり白銀一家はあの周囲に……！」

「……さて、どうだろうね？　わたしは真実は言うけれど、それを全て言うかは気分次第。……知っているだろう？　ということ、情報公開はこれで終わり。どうするかは好きにすればいいさ」

その言葉を最後に天空が意識を向けている方とは反対の方角を封鎖していた嵐の壁が縦に引き裂かれた。どうやらあちらは困だつたらしく、本命は今引き裂かれた方だつたらしい。

いとも簡単にこの厚い自然の壁を突破していく香澄もまた、「世界」に属する龍種なのだ。そしてこうも簡単にこの天空から逃げられたという事は、

「……本当にただの傍観者ではないな、香澄は。どうして白皇様はあのような者を野放しにしているのか……。理解に苦しむのう」

七禍龍に昇格したばかりとはいえ、天空もまた他の古龍種を超える実力を持つ。実際この大嵐の力はともではないが普通に立っていられない程の力を秘めている上に、冷たい雨が全身を叩きつけてくるのだ。

そんな敵に容赦なく天空の攻撃が放たれる。敵は何も出来ずその嵐に呑み込まれて死んでいくのだ。

だが……香澄は動じなかった。

それはやはりオオナズチだからだろうか。どれほどの強風であろうとも奴にとつては無意味なものであり、極寒の地であろうともある程度の暖を取るだけで行動できる力を持っている。

それはG級のオオナズチ装備一式を整えれば発動するスキル、霞皮の守りにも表れていた。これは対クシャルダオラにおいて有効な守りである事は、一部の高ランクハンターに知られているが、このアマツマガツチが引き起こす嵐にも適応されるか。

だとしてもそう易々と逃がすつもりはなかったのだが、現実はこのさまだ。香澄がまともに戦った様子を見た事もないため彼女の確かな実力の把握も不可能だが、まず間違はなく七禍龍に遅れを取らないだろう。

そんな彼女がどうして情報屋となったり傍観者となったりしているのか。

本当に理解に苦しむ。

しかし今は……香澄の事は置いておこう。彼女が最後に遺して行った情報の一端。

白銀一家はユクモ村に来たことがある。

世間の目だけでなく自分達のような存在の目からも隠れられたのは、彼らが繋がって

いる神倉一族の生き残りである神倉月の影響があるからだろうと推測できる。でなければ彼らがこの六年もの間逃げ隠れ続けられたはずがない。

「……妾の駒を送るか。久方ぶりの祭りを始めようぞ、ユクモの者らよ。この祭りに乗じて現れるがよい、白銀の者ども……！」

ユクモ村がある方角を睨みながら天空の姿は再び光の粒子となる。それはやがて龍の姿を形作るが、その色合いは白いものではなくどす黒い色合いのままだった。一度ヒレに覆われている翼のようなものを羽ばたかせると、まるで空を泳ぐようにしながら天上へと昇っていく。

その動きに沿って空気が渦を巻き、厚い雲に大きな穴が穿たれる。その穴へと龍の姿は消えていき、渦を巻くようにして山頂を包み込んでいた嵐は、龍の姿が消えると同時に鎮静化していった。

最後に厚い雲は突如霧散し、あの龍の姿もまた最初からいかなかったかのように大空のどこにも見当たらなくなってしまう。残されたのは大嵐の爪痕とゆつくりと空にかかっていく虹だけだった。

ユクモ村にやってきた瑠璃と茉莉は階段を上つていきながら辺りを見回した。一つの階段を登ればまず正面に商店街が広がり、左手には農場に続く道がある。商店街には村人だけでなく温泉を利用しに来た客やハンターの姿も見かけられた。

それだけでなくアイルーの姿も店員や客として見かけられた。よく見ればオトモアイルーが使う武具の専門店もあるようで、そこを利用してアイルーが数匹いるという感じだった。

それを横目に見ながら商店街を抜けて更に階段を上がつていく。その先には広場があり、周囲を見渡せば足湯温泉が点々とあつたり、宿屋が多く見かけられたりする。どうやらここは温泉街になっているらしい。

宿を確保するならばここが一番か。

また案内図を見る限りでは更に階段を上つていくと集会浴場があるようで、そこがギルド支部になっているようだ。だがまずは拠点となる宿を確保しておこう。

ユクモ村のガイドブックや実際の宿の様子をチェックしてまわり、一つの宿を決める。

ハンターが利用する和式の二人部屋を確認した二人は畳の香りを感じつつ、窓の外に広がるユクモ村の景色を眺める。村を歩く人々の顔は穏やかなもので、それぞれ温泉や出店を楽しんでいる様子だ。

その顔ぶれの中に見覚えのある人が見えた。

浅葱色の着物に黒髪をした女性が通りを歩いているのだ。よく見れば帯に小太刀を挿しているし、彼女に間違いないだろう。

「……？」

不意に彼女が二人の視線に気づいたようで、二人のいる部屋まで視線を向けてきた。そして窓から見下ろしている二人の顔を確認すると、ほう、と少し驚いたような表情を見せて右手を軽く挙げてきた。

彼女、草薙桐音と合流すると三人は集会浴場にある食堂へと向かった。それぞれ軽めの食事を注文して久しぶりの再会を喜ぶ事にする。昼のいい時間から酒を呑み始める桐音ではあるが、対面に座っている二人は気にした様子もなくジュースを飲んでいく。

「久しぶりだねえ、お二人さん。元気にしてたかい？」

「それなりね。あんたはどうよ？」

「あたいは……退屈だったねえ。途中でドスジャギイの群れに絡んできたけど、全然楽しめなかったね。どっかにあたいをわくわくさせるものがないものかね」

はあ、と溜息つく桐音は本当に刺激に飢えているようだ。ぐいつと酒を呑み干し、どんどん注いでは呑んでいく。ある意味ヤケ酒に見えるのだが、彼女はある程度酒に強いようでもまだ酔ってはいないようだ。



「戦いを求めてるんですかね？」

「それもあるねえ。対竜でもいいし、対人でもいいのさ。どこかに強い奴がいるってんなら喧嘩したいくらいだよ。……あんたらは対人の心得、あんのかい？」

「残念だけどあたし達はあくまでハンターとして強くなってきただけだから。村には対人でも問題なくこなしちゃう人はいたけど、あの人の教えを全て受けたわけじゃないから、期待しないで」

「へえ？ 対人の心得持つてる奴がいたのかい。でも、そんな奴の教えを受けたってんなら……期待できそうだと思うけど？ どうだい、後で……やらないか？」

じつと二人を見据えながら少しだけ頬を赤らめつつ誘ってくる。目もゆつくりと爛々と輝き始めているし、これは酔いが回りつつその気になり始めたのか？

これは少しめんどうなことになってきただろうか。

そう思い始めたが、何かを考えているかのような目で静かに天井を見上げた茉莉がうん、と頷いた。

「いいでしょう。お相手いたしましたよ」

「お？ まさかあんたが相手してくれるとは思わなかったよ」

「茉莉、本気なの？」

「対人の動きも取り入れる事で行けるでしょうからね。……あなたの実力を改めて

実感するいい機会でもありませんし、やってみましょう」

茉莉の頭によぎったのは先日戦ったナーガの事だ。今まで戦ったモンスターの中でも一番の強敵だと実感したあのナーガの戦い、優れた武人を相手にしているような感覚に陥った事を思いだす。

あれはまさに対人戦をしているかのようでもあった。それはやはり上半身が人型であり、人に近い攻撃を繰り出してきたからだろう。そうでなくともあの回避の連続など今までにない事だったため、勝手が違っていた。

対竜に慣れているがそれはハンターとしては当然の事だ。ハンターが相手にするのはモンスターであり、対竜の戦い方で慣れるのは仕方のない事だ。

ここで対人の動きを取り入れる事で上を目指す事が出来るのか否か。

前例はある。

ポツケ村にしばらく滞在した事がある彼女の事だ。その血統の影響でハンターとして優秀なだけでなく、対人戦でも凄まじい実力を出せる黒と白の少女。

またルシフェルの正当な覚醒をしている彼もまた、対人戦でも素晴らしい実力を持っている。白い少女と互角に渡り合えるだけの格闘戦をこなせ、瑠璃と茉莉に体術を叩き込んだ過去もある。

彼ならば桐音を満足させるだけの戦いをしてくれるだろうが、残念ながら彼はここに

はいない。ならば自分達が相手をし、桐音の対人の實力を見、その身に味わつてみる事にしよう。

「いいねえ、積もる話も気になるけど、今はそっちの方が気になり始めたよ。早速行こうじゃねえか」

「ノリノリですね。まあ、いいでしょう」

「はあ……しようがないわね」

会計を済ませると三人揃つて村の裏口から山の中へと入っていく。この先にちよつとした広場があるらしく、先頭を桐音が歩いて案内していった。

そうして数分。木々に囲まれた広場へとやつてくると茉莉と桐音は数メートル離れて相對する。

じつと茉莉を見つめる桐音の頬はまだ紅潮したままで、ほろ酔い気分だというのが窺えるのだが大丈夫なのだろうか。酔っているから満足する戦いが出来ませんでした、ではこつちとしては少々不満なのだが。

「ちよつと、大丈夫なの？」

赤くなっている頬を示すように自分の左頬をつついてみせると、それに気づいた桐音がああ、と頷いてふところから何かを取り出した。黒い巾着袋らしく、口を緩めて中から丸薬らしきものを取り出して口に放り込む。

ガリツ、と嘯みしめて続けて取り出した水筒から水を飲んで胃に流し込むと、ゆつくと桐音の雰囲気が変わっていく。軽く首や両腕を交互に回してぱん、と両頬を叩くと酔いが醒めたかのようにいつも通りの桐音の顔がそこにあった。

「さ、喧嘩しようか？」

「喧嘩……模擬戦と言いましようよ」

桐音は袖の中から丸められたローブを取り出すとそれを広げ、中から木刀を二本取り出した。続けて帯に差した二本の小太刀をローブにしまい、木刀を構えてみせる。

それに倣って茉莉もローブを広げて中からハンターが使う馬上槍<sup>ランス</sup>ではなく薙刀に近い形状をした木製の槍を取り出す。石突きのような部分も再現したその槍を構えて双剣を握りしめながら隙を窺っている桐音をじつと見据える。

「そんじゃ——始めようぜ！」

その言葉と共に桐音が地を蹴って茉莉へと一気に距離を詰める。薙刀を構えながらその接近に対して迎え撃つように薙刀を高速で突き出し、だがそれを双剣で受け流しつつ更に前へ。

「……っ！」

しかしその前進を止めるように中段、下段と織り交ぜた高速連続突きで是が非でも桐音の前進を食い止める。木と木が打ち合わされる音が森の中で響き、二人の息遣いまで

聞こえてきそうな程に熱くなる模擬戦が繰り広げられた。

結果は桐音の僅差の勝利。

勝利したといっても本当に僅差であり、懐まで潜り込んだ桐音の剣が茉莉に決定打を与えられるところまで当てられたというだけであり、茉莉も茉莉で薙刀の刃の部分を桐音に当てようとしたが、武器のリーチの長さの問題で桐音が刃部分を通り過ぎて懐へと潜りこみ、決めてしまったのだ。

それに至るまでの攻防は激しいものであり、双剣が有利になる近距離へと詰めようとする桐音に、中距離を保とうとする茉莉の技量がそこに表れていたと言ってもいい。

しかしこのやりとりで桐音が熱くなったようで、「……暖まってきたねえ……！」と呟いたかと思うと、それまで以上の加速をつけて茉莉へと迫っていったのだ。

薙刀の刃と柄で防ぎ続けるのも長くはもたず、結果はこうなった。

やはり対人においては少し後れをとりそうだという事になってしまった。桐音の足運び、振るわれる高速の双剣の動き。その速さに目が完全に追いつく事はなく、気を抜けば見失ってしまうような程だった。

自分を鍛えてくれた彼曰く、こうして人と模擬戦をする事で攻撃の速さに目を慣らし、防御をしつかりと固め、回避する技術を磨くというのは悪くはない。時々二人で武器を打ち合わせるつてもやっておいて損はない、との事だ。

それを思い出してやってみたが、確かにこれはいい鍛錬になると改めて実感する。この桐音はやはり強い。

茉莉は一息ついてどこか満足そうな表情を見せる桐音を見つめる。前のクエストの際に彼女は言っていた。

彼女はマイナーではあるが何らかの流派の剣術を会得していると。

そして自分達はナーガとの戦いで力不足を感じている。二人だけで旅しているため、何らかのきっかけがなければ今以上に伸びることはない。時間をかけて経験を積んでいくしかない。

だがきっかけさえあれば、短時間で何かが変わるはずだ。

もし桐音との出会いがそのきっかけというならば、それを生かさない訳にはいかな。茉莉は意を決して桐音に話しかける。

「草薙さん、少しお話が」

「ん、なんだい？」

「草薙さんは剣術を習得しているんですよね？」

「んーまあそうだねえ。それがどうかしたかい？」

「もしよろしければですが、このユクモ村に滞在している間も組みませんか？」

「え、ちよ、茉莉!？」 何言ってるの!？」

茉莉の言葉に当然ながら瑠璃は驚きを隠せず、桐音は桐音でひゅー、と口笛を鳴らしながらも少しだけ驚いた表情を見せている。その間に瑠璃が茉莉の手を引いて桐音から離れていき、「ちよつと、どういうつもり?」と小声で話しかける。

茉莉もまた小声でその問いに答えていく。

「私達に足りないもの、それは母さんや撫子姉さん、クロムさんのような私達と対等、あるいは上の実力を持つ存在です。私達はあの人達の教えで基礎を固め、クロムさんによる鍛錬でハンターとしての動きを学びましたよね?」

「ええ、そうね。それがなんだっていうの?」

「あれから四年です。私達だけで旅をしてそれだけの時間が経ちました。確かに私達はあの頃に比べて成長したでしょう。ですが、私達はあのナーガに遅れを取りました。急な遭遇という点もあつたでしょうが、一歩間違えればあそこで死んでいたでしょう。……それは私達がまだ弱いからです」

「……………」

茉莉の冷静な言葉に瑠璃は息を呑む。負けず嫌いな瑠璃はその言葉に否定したかったのだが、それを言葉として発する前に喉につまってしまった。

瑠璃もわかっているのだ。

第二戦で有利に運びはしたが、初戦のあれは間違いなく自分達は翼が現れなければ負

けていたのだと。

「草薙さんはクロムさんのような人でしょう。ならば彼女と組み、時折彼女と模擬戦をする事で経験を積めるでしょう。あるいは彼女と共に戦う事でも得られるものはあるはずです。ユクモ村に滞在している間だけでもまた縁を結んでみませんか？」

「……………あんたは、あれがあたし達にとつて益をもたらす人だつて睨んだの？」

「変わつてはいると思いますが、でもああいう人はクロムさんで慣れてますからね。それにあの人が習得している流派というのにも気になりますしね」

頭によぎるのはチャナガブルにとどめを刺したあの一撃だ。ただの人間には不可能だろうというチャナガブルを水中から陸上へと吹き飛ばした一撃。奴の体を穿つだけの威力を見せつけた様は赤いあの人を思い出させる。

だからこそ、茉莉は桐音は二人にとつていい刺激になるのではないかと睨んだ。

「瑠璃、どうです？ あなたも一度あの人とやり合つてみるといいですよ。なかなかあれは刺激的でしたからね」

「……………あんた、まさかそつちに目覚め始めてるわけ？」

「いえいえ、そんな事はありませんよ？」

ただ桐音という存在が自分達を成長させるきっかけになると見ているだけで、桐音やクロムのような戦闘バトルファンキー狂に目覚めようとしているわけではない、と真顔で否定する。



だが瑠璃は「本当かしら？ あんたつて時々わけわかんない方に傾くから……」とぶつぶつ呟きながら、そつと肩越しに振り返つてみる。そこにはきよとんとした顔で腕を組みながら二人をじつと見つめている桐音がいる。

そんな桐音を見つめ返した瑠璃は、はあ、と息をついて「わかつたわよ……」と頷いた。

それに頷いた茉莉はもう一度桐音に近づくと、桐音は「話は纏まったのかい？」と小さく首を傾げながら問う。

「ええ。改めて申し出ましょう。草薙さん、ユクモ村にいる間、また組みませんか？」  
「んー、あたいとしてはそれは喜ばしい事だけどね、どういう意図があるんだい？」

「それはですね……」

茉莉は桐音へと説明を始める。

今以上の実力へと伸ばすためのきつかけとして桐音とパーティを組むことで変化があるのではないかと。また桐音の対人戦の実力の高さも窺える上、桐音との鍛錬を繰り返せば自然と自分達も強くなるかもしれないと推測した。

うんうん、と相槌を打ちながら話を聞いていた桐音は「なるほどねえ……」と呟くと、「ま、時折さつきみたいいな事をするってんならあたいの退屈も紛れるし悪くはなさそうだね。……もしかして、あたいの剣術も見て覚えようっていうんじゃないだろうね？」

「ん？ 教えてくれるんです？」

「いや、それは無理だね。……ああ、あたいが教えられないとかそういうんじゃない。見てくれは真似できてても、その根本まで覚えられなきや意味がないのさ」

「どういふ事よ？」

その言葉の意味を理解できず瑠璃が会話に入ってくる。

ほりほりと頭を掻きながら視線を逸らす桐音は何と言つていいのか、とどこか困つたような表情を見せたが、やがて一息ついて話しだした。

「あたいが使つてる剣術つてのはね、あたいら草薙の者しか使えない限定的な流派なのさ。以前マイナーつて言つたらう？ あれはそういう事さ。草薙の血を引くものだけが受け継がれ、それ以外のものには決して使えない技を集め、高めていった剣術。それがあたいが使う剣術さ。だからあたいの技を盗もうと考えていても無意味だぜ？」

「ということは草薙流とかそういう流派なわけ？」

「……ま、そうだね。正式名称は少し違うけど、まあこれは別に気にする事じゃないさ」  
多少影がかかった表情で呟いたが、それを振り切るようににっと笑つてぐつと親指を立ててみせる。

「あんたらの誘い、乗るぜ。一緒に狩りをして、時々喧嘩する。いいじゃねえか、そういうチーム。あたいの退屈を紛らわすようない日々を過ごそうぜ？」

「だから喧嘩ではなく模擬戦だと言ってるでしょように」

「くっはっは、ま、こまけえことは気にすんな。……ああ、でもあたいはあたいで別の目的が一つあるんだ。これ、前にも言ったよな？」

「弟を探しているんだっけ？」

「ああ、あのクソ野郎を探し出す、それがあたいが旅し、ユクモに来た理由さ。あんたらも誰かを探してるんだらう？ どうだい？ 組むついでにお互いの探し人の情報も探ってみるつてのは」

桐音の提案は至極もつともなものだろう。人手は多い方がいい、お互いの探し人も合わせて探してみる事で手間を省こう。ギブアンドテイクという意味合いも含めて提案してきたのだろう。

だが桐音が弟を探しているという事に反し、瑠璃と茉莉が探しているのは世間から身を隠すようにして暮らしている人達だ。果たしてこれを話していいものかどうか、少し躊躇ってしまふ。

しかしここに来て躊躇っては信用問題にも関わる。それに彼女は異のような情報屋ではなく一般人……いや、ただの……少し変わったハンターだ。

この人ならば話を限定して打ち明けても問題はなさそうか？

茉莉は桐音を見つめながら数秒の間ここまで考え、また意を決して頷いた。

「……ええ、そうですね。私達が探しているのは星野翔さんをはじめとする人達です」  
そして茉莉は情報の一部を話しだした。

東方人であり、数年前から東方のどこかに行ってしまった男性であるという事を。また同じように女性二人も伴っているのではないかという可能性の話、その女性の一人も星野という名前か、また別の名前という可能性があると、いう事も話していく。

そうして事情を説明すると桐音は二人が探している人達も合わせて探してみようと了承してくれた。

こうして三人は再び一時的なチームとして結束する。

これより、ユクモ村での彼女達の物語が始まろうとしていた。

## 15話

標高の高い山が並ぶとある山脈の一角でそれらが集結していた。飛竜の代表格と言われるリオレウス、リオレイア達だ。原種、亜種、希少種問わず一か所に集結する光景は珍しいものだろう。

その中心にはあの白い龍、アマツマガツチが鎮座している。この場所の周囲にはアマツマガツチを中心として不可視の結界が張られており、万が一この場所が見える空で気球が飛行していようともし発見される事はない。

といつてももし発見されでもすれば、問答無用で撃ち落とすまでなのだが。

『……以上だ。そなたらの役割は理解したな?』

アマツマガツチ、天空の言葉にリオレウスらはそれぞれ頷いて承諾する。どうやらここに集った者らは彼女の抱える部下らしく、白銀一家を探すように命令を下したようだ。

空から、地上から、それぞれの得意分野をツーマンセルで派遣する。これによってユクモ村周辺数十キロにわたって一気に調査する事になったのだ。

『ではそれぞれ散るがよい。当然目標を見つけ次第、殺せ。容赦は必要ない』

その言葉に一礼し、次々と山頂を飛び立ってリオレウス達は自分達の縄張りへと帰って行く。そんな彼らを見送り、天空もまたゆつくりと空へと舞い上がっていった。

この日が、各地でいつも以上にリオレウス、リオレイア系統が見かけられる事が多くなる一件の始まりである。

○

ユクモ村に来てから一週間が経過した。瑠璃達はチームとして活動し、いくつかのクエストをこなしながら時折自分達の探し人の情報を求めていく。そうして過ごした日々はあつという間に過ぎていった。

もちろん時間が取れば桐音と体術の鍛錬を行い、着実に体術関連を伸ばしていく。瑠璃も何度か桐音と木刀で打ち合ったが、それにより茉莉の言っていた事が何となくわかっていた。

クロムと何度も打ちあっていたが彼の場合怪力だったために大抵の場合は彼が手加減してくれていた。二人も二人で種族の関係で他のハンターに比べれば怪力ではあつたがクロム程ではない。

そんな彼に鍛えられてきたため体術を鍛える鍛錬としては問題なかった。

桐音との鍛錬はクロムと違い桐音も手加減なしにぶつかってきたということもあり、これまでにない刺激を得られたのだ。桐音が実力者という事もあるし、彼女自身が戦いを樂しむ傾向があるため二人の実力に合わせて戦いを進めてくれるためいい経験を積む事が出来た。

また双剣だけでなく様々な武器を使ってくるため飽きさせないという点もあった。やはり彼女を鍛錬の相手に頼んだのは正解だったかもしれない。

そして桐音は瑠璃と茉莉の鍛錬に付き合うだけでは飽き足らなかったようだ。

「おおおおおおおッ!!」

「ぬおおおおおおおッ!!」

ユクモ村の広場の一つを利用して行われているそれは、まさに男の喧嘩といっても差し支えなかった。だが一方は鍛えられた筋肉が眩しい男性ハンターであるに對し、一方はあの桐音である。

二人は武器を持たず、私服で殴り合っているのだ。

それだけ聞けばまさに男同士でやり合っていると思われるだろうが、それをこなしているのは若い女性だというのは驚きだろう。しかしこの戦いを見物している人々はもう慣れたようにあの戦いを見守っていた。

それにしても……筋肉ムキムキな男に引けを取らない女性というのも最近では珍しくもないとはいえ、実際に目の前にすれば言葉にならない。殴られようとも蹴られようとも嬉々として反撃し、立ち向かっていく桐音という人物が普通じゃないという事もあって、最初の内は観客もどん引きしている者もいたくらいだ。

「オラオラオラアア!!」

「せいせいせいいいい!!」

超近距離での拳の連打に近距離での蹴りの連打と続けざまに放ちあい、ただひたすらにお互い攻撃を繰り出し合うというインファイト。防御など知らないとばかりの攻めの姿勢を崩さず、しかしお互いが繰り出す攻撃がぶつかり合う事で防御となっている。

まさしく攻撃は最大の防御という事だ。

技術よりも力、力と力のぶつかり合いは数分にわたり、

『……っ!?!』

同時に繰り出された拳が交差するクロスカウンターによって両者ともにダウンしてしまった。戦いの決着に何人かの観客が湧き、手当てに向かう者が二人を起こして軽い応急処置を施していく。

手当てを受けながら男はにと桐音に笑いかけ始めた。

「ホントに桐音嬢ちゃんはつええよな。ワシ相手に引かずに真っ向から挑んでくるんだ



からよ」

「そうしてこそその喧嘩だろう？ 存分にやり合えばスカツとするもんさ」

「かっかっか！ いい根性してらあ！ どうしてこれほどのべっぴんさんがこの根性を得てしまったのか、世の中わからんもんだなあ！ 惜しい、実に惜しい」

「はっはっは！ 言ってくれるねえ、もう一発しばいていいかい？」

お互い手当てでされ、笑いあいながら先ほどの健闘をたたえ合う。彼女らが戦った後はいつもこんな感じだった。だからこそ遺憾なく何度も拳を交えられる。

そんな様子を眺めながら茉莉は隣にいる瑠璃にそつと話しかける。

「拳の速さ、見えてました？」

「……最後のあれ、十二発打ちあつたの？」

「私には十三発に見えました」

「残念だね、お二人さん。正解は十五さ」

どうやら聞こえていたらしく桐音が手を振りながら訂正した。結構傷ついていたらしいが手当てを終えたらすぐに立ち上がって肩や首を回しつつ近づいてくる。やはりこういう傷には慣れてるらしい。

そして瑠璃と茉莉の二人はただ桐音の戦いを見ているだけではない。桐音や彼女の対戦相手の動きをじつと見つめ、目で追いきれるのかを訓練している。特にインファイ

トに入った後のラッシュの速さが鍵だ。

それが見えるか否か。

見えたとしてどれくらいの精度があるのか。

これを改めて鍛えているのだ。

全てが見えなければ完全に防御する事は出来ない。感覚で防御、回避する事もあるだろうが、やはりしつかり見えていなければ確実ではない。

「後であたいらで打ち合おうか。じっくりとあたいの拳の速さを改めて堪能させてやるよ」

「まあいいけど、あんた、まだやる気なの？」

「ん？　なんか問題あるかい？」

「……………いや、もういいわ」

きよとんとした表情をしている。本気も本気、やらないという選択肢はないようだ。これ以上突っ込む気にもならなくなったため、やれやれとため息をつきながら首を振る瑠璃。

だが今すぐに再開するとうわけではない。これから温泉に一度浸かって休むことにする。広場から集会浴場へと移動して料金を支払うと、ユクモ村名物の温泉の一つを堪能した。

集会浴場はその名の通り浴場という場所ではあるが、その一方でギルド支部が存在している場所でもある。建物の一角にはハンターが集まる酒場があり、壁には依頼書が張られるボードが掛けられている。

風呂を終えた三人はこの酒場へとやってくる。一つの机の席に腰掛け、風呂上がりの一杯を頼むことにした。

少しして頼んだ酒を呑んでいきながら、茉莉は周りの様子を確認していた。最近の噂を振り返ってみると、リオ系統の飛竜が各地で活発に動き出しているとの事だった。繁殖期というわけでもないのにつがいで行動し、縄張りを広げるかのように動きつつその縄張りを徘徊しているらしい。

今のところユクモ村周辺で特に気概は報告されていないようだが、ここから離れた場所の縄張りの端に含まれている村に近づいたつがい討伐対象になったとの話があった。まだ討伐されてはいないようだが、村人たちは留まるのは危険という事で避難しているらしい。

そのつがい以外のリオ系統についてのクエストはまだ出ていないようだが、もしかするといずれ貼られることになるだろう。季節外の繁殖期なのか、あるいはまた何か別の要因があるのか。

それはわからないが、リオ系統の依頼書が貼られたならば自分達もそれをこなす事に

なるかもしれない。

「レウス、レイアのつがいか。一頭ずつだったら楽だろうけどつがいとなると結構難易度が上がるんだよな。ま、問題ないんだけど」

「でもこつちにまでは依頼書が回ってきていないみたいね。向こうで処理されているのかしらね」

つがいの正確な数字はまだ完全に把握できていないが、結構な数になるのではないかと噂されている。その全てを処理していくとなると結構なハンターを動員する事になるだろう。

もちろん危険なのかそうでないかの判断によってクエストが出るか出ないかの違いはあろうが。

リオ系統以外の事についてはこの情報があった。

ユクモ村付近でジンオウガが目撃されたという話である。

「ジンオウガって東方周辺で確認されている新たな竜種だったわよね？ 確か……牙竜種って分類になってて、雷狼竜って呼ばれてるんだったか」

「そうですね。そして、私達がここに来る途中で遭遇したのも恐らくそのジンオウガでしょう」

数年前に確認された新種の竜種にして今までのものとはまた別の特徴を保有するた

め、新たに牙竜種という枠に登録された存在。

それが雷狼竜ジンオウガ。

発達した四肢を駆使しその巨体とは裏腹に俊敏に動き、敵を粉碎していく無双の狩人と呼ばれている竜種である。雷光虫とは共存関係にあり、彼らを背中に集めて発電機能を高め、その雷の力が最大限に高まればただでさえ高い実力を持つジンオウガは更なる飛躍を果たし、もはや手が付けられない状態になってしまふとか。

その実力からハンターにとっても討伐するのは容易ではない相手であり、またモンスターらにとっても勝てる相手ではないという存在になっている。故に、無双の狩人という異名が与えられたのだ。

最近では凍土で亜種らしきものが確認され始めているらしいが、詳しい事はまだまだ調査中だ。その外見、能力や生態が少しずつ明らかになっていき、通称が獄狼竜と付けられた段階との事らしい。

昔はユクモ村周辺に現れて村を緊迫状態へと貶めたようだが、滞在していたハンターの手によって討伐された事でそれが解決する事になったようだ。それからはまたジンオウガのような強力なモンスターが現れた時に備え、実力のあるハンターが訪れるように温泉村として発展していったようだ。

故に昔に比べればこの酒場の活気は高まっている。そして上位ハンター以上の実力

を持つ者も集まり始めている。ならばこそ、今回もまたジンオウガが脅威と判断された場合、奴を狩れる者がいるかもしれない。

何にせよ近いうちにいつも以上のハンターが動員されるだろう。

リオ系統のつがい、ジンオウガという将来的な脅威もあるが、それでも地方では他の飛竜らによるクエストは貼られている。経験を積むために何人かのハンターがクエストを受理して酒場を後にするのを眺めながら、風呂上がりの一杯を堪能しつつ三人は情報収集を進めていった。

「そんじゃあ、始めようか」

「本当に気が早いわね……もう少し休むという事を知らないのかしら？」

「もつたいねえ。それじゃあ時間がもつたいねえよ。あたいはそれよりも体を動かしたいのさー！」

身構えながら前に出した右手をコキコキと鳴らしながら不敵に笑う桐音にまた嘆息しながらも瑠璃もまた構えた。こういうところもクロムに似ているものだから困ったものだ。慣れてしまった自分も自分だが、桐音の拳の速さに慣れる事で今以上に目を鍛えるのだ。

ぶつぶつと愚痴りたいのを我慢して「先攻は貰うわよー」と飛び出していく。

「そんじゃ、見切つてみせな！ おらおらおらあああ!!」

迎え撃つような拳の連打。それを捌く瑠璃の手もまた高速で動くが、それ以上の速さで繰り出される連打は少しずつ瑠璃を押し返していく。

苦い表情を浮かべながら瑠璃は目を閉じそうになるのを堪えてしつかりとその拳を見つめるのだが、怒涛の勢いで放たれる拳を全て見る事は出来ないでいた。

(速い……！ 手加減しているクロムさんに迫る勢い……いや、もしかしたらそれを超えるかもしれない。こいつ、本当に人間……!?)

「ふんっ！」

一瞬の間を見逃さずに両腕を払った桐音は、一度距離を取らせるために掌打で瑠璃の体を吹き飛ばす。突然の掌打ではあったが瑠璃は受け身を取って着地する。そんな彼女を見つめながら軽く両手を振って「さて、どれだけ見えた？」と問う。

「……九発ぐらい？」

「ふーん……実際にや十一発だったけどな。二発の誤差か……ま、繰り返していけば慣れるさ。そら、次行こうか」

くいくいっと手を動かして続きを促すと、一息ついて呼吸と気を落ち着かせた瑠璃は再び桐音へと向かっていく。そんな二人を眺めながら茉莉もまた桐音の手の動きをじっと見据えていた。

こうして第三者の視点で見ると、実際に打ち合う時の視点では体感的な速度に若干の差がある。その違いもまた感じとり、見切つていかなければならない。

目と反応速度と防御の鍛錬としてはかなり強引なものだろうが、これを磨き上げれば生き残れる確率が上がっていくため必要なものだ。

そうして鍛錬と休憩を繰り返していくわけなのだが、不意にこちらに近づいてくる気配を感じ取つて桐音は手を止めて振り返つた。瑠璃と茉莉もうつすらと気配を感じとり、同じ方を見つめる。

視線の先には森があり、はた目には誰もいないように思えるのだが、確かに誰かがいるのだ。

「誰かいるの?」

瑠璃が呼びかけてみるが反応がない。

まさか、噂に語られる辻斬りが潜んでいるのだろうか? 三人は静かに臨戦態勢に入りながら油断なく木々の向こうを見据える。

無言の時間がどれほど過ぎただろう? 緊迫した空気のせいで数秒だったのか数分だったのかわからない。

がさり、と草が揺れたと思うと黒い影が木の陰からゆらりと姿を見せた。

それは――



「——ッ!？」

骸の顔をした誰かだった。

「——ぎゃあああああああああッッッ!？」

悲鳴を上げながら瑠璃が手をかざしてその骸に向かって火炎を放つ。彼女としては咄嗟の反応だったろうが、骸に向かって火炎とは完全に火葬する形になってしまっただろう。しかし残念ながらそうはならない。

骸は自分に向かって襲い掛かってくる火炎に驚いた様子で、

「う、うわあああああああッ!？ な、なんスかつ!？ ちよ、やめえええええええ!？」  
 少し高い声をしているようだが少年らしい声だった。火炎から逃れるようにまた木の陰へと逃げ込んだ骸ではあったが、火炎はその木すら焼こうと伸びていく。すかさず桐音と茉莉が飛び出してこれ以上の被害を出さないように努めなければならぬ。

「瑠璃、落ち着いて。どうやらあれは生きている人らしいですよ」

瑠璃を羽交い絞めにして火炎を出すのを止めながら彼女を落ち着かせていく。それでも手の先から火炎が噴き出しつづけたが、「……え？ 生きてる？」と茉莉の言葉に反応してじつと骸がいた方へと視線を向ける。

そちらは絶賛山火事の初期段階だったが、桐音が「水気、解放。拡散」と呟きながら握りしめた右手に青い気が集まっていく。以前のオレンジ色の気とは違っていろいろ

だが、水中の出来事だったために二人はその違いに気づけなかった。

そうしている間にも、彼女の右手に集まった気によつて空気に湿気が高まり始め、燃え広がるうとしていたその炎に向かって薙ぎ払った。すると水の刃がその手の軌跡に従つて放たれ、その火災の消火にかかった。

何度か腕を振るつて水の刃を放ち、刃が消える際に降りかかる大量の水によつて消火が完了。少しだけ焼けてしまった森の中から、ずぶぬれになつてしまった先ほどの骸が姿を現す。

「はあ……死ぬかと思つたツス。最近こんなおぼつかりでやつてらんねえツス……」

よくよく見れば足もちゃんとあるので幽霊という類ではないらしい。それに死んでいる割には生気もちやんとあるので蘇りを果たした骸というわけでもない。

またその服装……知っている者は知っているだろう、ハンター装備なのだ。

もこもこの紫色のスポンジや毛皮を使用したルドロスUメールとフォールドに身を包み、腕はシルバースルアーム、足はナルガUグリーヴを着用していた。

となればその被っている骸もまたハンター装備となる。見てくれは周りの人々をどん引き、あるいは恐怖に陥れるだろうがこれはちゃんとギルドに認められた装備なのだ。

スカルSフェイス。

「なぞの頭骨などの素材を使って作り上げられた骸の顔を模した頭装備。装着した者の顔を隠し、完全に骸の顔を外部にさらすという趣味の悪い装備だが、胴装備のスキルを複製するという特殊なスキルを持つているため、それなりに愛用者がいるという話だ。……信じたくはないのだが。」

となるとこの人物はハンターという事になる。

ずぶぬれになってしまった自分の格好を気にしながらため息をついている彼に悪い事をした、と感じてしまうが、かといって突然木の陰からあんな顔を出されたら誰だつて驚くだろうと愚痴りたくもなる。

その割には茉莉も桐音も驚いていなかったようだが。

不意に腕を組みながらじつと彼を見つめていた桐音が小首を傾げ、

「……………お前、まさか十兵衛じゅうべえか？」

「……………お？ おおお、もしかして桐音の姉御ツスカ？」

尋ねれば彼もまたじつと桐音を見つめてそんな事を言った。骸の下ではたぶん驚いた顔をしているのだろうが、なにぶんそのせいでまったく判別がつかない。

だが桐音とは知り合いだったらしく、再会を喜ぶように桐音に握手を求めていった。彼女もにっこり笑いながらそれに応え、がっしりと握手しながらばんばんと彼の肩を叩いて再会を喜んでいる。

「相変わらずチビっこいなあ、お前は。全然成長してねえじゃねえか」

「うっさいツスね。余計なお世話ツス。そう言う姉御も変わりないようで何よりツス」

桐音の身長は168くらいあるようだが、対する彼は155程だろうか。瑠璃、茉莉と同じくらいの身長をしていた。名前からして男だと判断できるが、それにしても桐音の言うように小さいように思える。

「それで? ここにいるってことは火山の用事は終わったんか?」

「一時的な休憩って感じで下りてきたツス」

「火山の用事?」

「ああ、こいつ火山に籠ってピッケル振るいまくってるんだよ。そういうの、炭鉱夫っていうんだったか? 主にいいスキルが籠められているお守り狙って火山に籠ってたんだってよ」

茉莉の問いかけに親指で十兵衛を示しながら桐音が説明した。

死地の一つとされる火山は鉱石の宝庫であり、同時に古き時代の名残である塊やお守りが眠る場所でもある。ハンターの中には鉱石やお守りを求めて火山に赴き、ただひたすらにピッケルを振るう毎日を通す者がいる。

そんな彼らを人はいつからか炭鉱夫と呼び始めた。

どうやら十兵衛もそれに含まれるらしい。

「しかし……本当に火山を下りるタイミングを間違えたツスね……。本当にツイてないツス」

「なんかあつたんかい?」

「聞いてくださいツスよ姉御! 火山を下りて早々りオ夫婦に絡まれるわ、辻斬りに絡まれるわさんざんだつたんスよ! なんすか、これは!?! おいらがなにしたつて言うんすか!?!」

「……ちよつと待ちなさい? 辻斬りに絡まれたつて?」

「そうツスよ! なんだつていうんすか!?! 訳わかんないツスよあの野郎……」

ぐつと拳を握りしめて体を震わせながら遭遇したという辻斬りに愚痴っているようだが、本当に辻斬りに遭遇したのだろうか。もし噂の辻斬りに遭遇して生き延びたというならばこの十兵衛は相当運がいいのか、案外実力者なのか。

桐音も十兵衛の話に興味を示したようで肩に手を回してぐつと顔を寄せ、「おい、辻斬りつてどんな奴だつたんだよ?」と真剣な表情で問いかける。

「それがツスね、本当に訳わかんねえ奴だつたんツスよ。……あれはある晴れた昼下がリツス。火山を下りて少ししたところでオ夫婦が飛んできたんすよ。おいらもハンターツスがこれは炭鋤夫用に調整した装備つすからね、これは不利だと逃げる事にしたんすよ」

「あ、やっぱりそれ、炭鋤夫用の装備なんですか」

「そうツス。ランナー、採集＋2、高速収集、神の気まぐれと戦闘向きじゃないツスよ。それに武器もメインじゃないんで戦って勝てる相手じゃないツス」

そういう彼の腰元には一振りの剣が提げられている。シンプルな片刃の剣ではあるが、中心には炎のような色合いをした線が浮かび上がっている。

そんな剣からは凄まじい龍殺しの力が秘められている。

封龍剣【怨滅一門】。

さびた塊から掘り出された古代の龍殺しの武器を研磨し、高めていった一品だ。恐らく炭鋤夫として過ごす中で掘り出し、強化していったのだろう。

属性の相性としてはリオ夫婦に対して効果的だろうが、一人で夫婦相手に戦うにしては武器の相性だけでは足りない。ハンターとしての実力がなければリオ夫婦を相手にして戦いきれるものではない。

「それですからね、おいらは何とか逃げ切ろうと必死だったんすよ。……そんな時、あの野郎が現れたんす」

火山から離れた岩山地帯に差し掛かり、それでも空から追ってくるリオウスとリオレイア。必死になって逃げ続ける十兵衛は時折背後を振り返りながらも、ただただ走る

しか出来ない。

凹凸の激しい地面に高低差のある岩山や坂という悪路ではあったが、それは空から追うあの二頭にとつても十兵衛を攻撃する事は難しかった。

十兵衛はただ逃げるだけではなく、あちこちにある岩の陰に回つたりすることで身を隠していたのだ。二頭が火球を放つても十兵衛は岩を盾にする事で身を守るのだ。それは空からの急襲においても同様で、陰に回つたり崖を飛び下りたりして何とか回避する事で難を逃れていた。

そんな時だ。

突如空を裂くようにして一つの剣閃が通過していった。

それはリオレイアの翼を裂き、緑の影が転落していく。それを見たりオレウスが咆哮し、剣閃が飛来してきた方へと意識を向けた。十兵衛もまた逃げながら背後を振り返り、一体何が起こつたのだろうかとう疑問に思いながらも状況を把握しようと確認してみた。

そこには確かに誰かがいた。

細長い棒……恐らく槍なのだろう。それを回転させて後ろ手に持ちつつ、じつと空にいるリオレウスを見上げているその何者かの出で立ちは一見するとただの一般人のようだった。

竜の紋らしきものを描いたローブとオールバックにしている黒髪をなびかせ、紅色のシャツに黒いズボンというよくある服装をしている。この東方であるの格好という事は西の方の誰かなのだろうか。

といつてもこの東方でもああいう服装をする人は増えてきているので定かではないが。

まあ、それはどうでもいい。今は恐らくあの人物が飛行していたリオレイアを落とすたのだろうかという事だ。

そしてハンター装備をしておらず、あの槍でリオ夫婦と戦おうというのか？

いくらなんでも無茶だろう、とごくりと息を呑み、ハンターである自分が助けられて見ているだけというのも気が引ける十兵衛は反転して駆けつけようとした。

「……悲しいねえ……。こんな所で出会っちゃつてさあ。本当に悲しいわあ……。おめえらがここでオレの手で死ぬのが悲しいよ」

「……？ 何をぶつぶつと言つてんスか？」

独り言のような小さな声で何かを語りだした何者かめがけて、リオレウスはひととき大きな火球を撃ち出す。人一人をすっぽりと呑み込むかのようなその火球が迫ってきているというのに、何者かは避けようともしない。

「ちよ、なにやつてんスか!? 危ないツス！」



思わず叫ぶ十兵衛。自分を助けに来た割にいきなり目の前で死ぬというのか？ と驚く。

あのまま呑み込まれるのかと思ったのだが……

「——迅気、纏まとい」

ぽつり、と呟いたかと思うと一瞬の内に襲い掛かってきた火球が霧散した。いや、正しくは切り裂かれたというべきか。あまりにも速く槍を振るつたために見えなかったのだ。

それだけではない。

いつの間にか何者かの姿があそこにいなくなっている。

リオレウスもまた己の敵を見失い、戸惑っている。その隙をまさに言葉通り突くようにして、いつの間にかリオレウスの隣に飛び上がっている何者かが、

「——槍術が一、山衝やまづき」

槍の矛先に黒い気が収束し、空中で構えたそれを一気に突き出せば、リオレウスの頭をその槍が貫いてしまった。いくら強固な甲殻で頭を守ろうとも、それを貫いてしまう程の威力。それが貫通してしまつたならば高い生命力を持つ存在であろうとも存命できなない。

しかもつがいでの危険性など、最初にリオレイアを落としていているせいで発揮しない。

力を失って墜落していくリオレイアの背に着地し、体勢を立て直したりリオレイアが悲痛的な叫びをあげるのを見下ろす誰かにはやりと笑みを浮かべていた。

「悲しいなあ……旦那を失う悲しみは人と同じかい？　でも、安心するといいき。すぐにあとを追わせてあげよう」

相変わらずぶつぶつと独り言に近い小声ではあったが、その碧眼に明確な殺気を宿らせてリオレイアの背中を蹴ってリオレイアへと急降下していく。だがそれを迎え撃つように火球を放つのだが、そんな単調な攻撃では奴には通用しなかった。

高速で槍を振るう事でその全てを斬り払い、どういう手法を使ったのか空中で何かを蹴ってリオレイアの頭上を取った。

「さあ、お別れの時間だよ。槍術が一、黒雨くろさめ」

その位置を利用しての素早い槍捌き。行使しているのは連続的な高速突きなのだが、逆さまの体勢で落下しつつの技。それも纏わせた気を気槍として撃ち出しながらやっているのだ。あまりにも常識外れな攻撃に十兵衛は啞然としながら見守る事しか出来なかった。

頭を何度も貫かれる痛みにリオレイアが呻き声を漏らし続け、しかし奴は容赦の欠片もなく何度も頭を突き続けた。

間もなくリオレイアへと接触しようというところでまた空中を蹴り、回転しながら地

面に着地し、ぐるんと槍を回転させて後ろ手に持つ。その背後で力なくリオレイアが倒れ伏し、あまりにも速いつがいの討伐をこなしてしまった。

その事実には呆然とする。

黒髪をなびかせ、口元だけで笑うあれは恐らく少年なのだろう。顔付きが少し中性的であり、声も少し高いせいで遠目には少し判別がつかなかったが、恐らく少年だ。

彼は驚いて固まっている十兵衛をよそに死体となったそのつがいに近づき、その尻尾を体から切り離した。更にナイフを取り出すと尻尾を解体し始める。

その行動にはつとした十兵衛は思わず彼に向かつて声を掛けた。

「ちよ、ちよちよちよつと、そこの人……！」

「……………」

呼びかけに反応せず、黙々とリオレイアの尻尾を解体していった彼はやれやれと小さく首を振った。尻尾に手を伸ばし何かを掴み取ってじつと見つめている。

それは紅い玉のようだった。だがその玉には高い力が秘められており、尻尾から切り離されてもなおうつすらと光っているように思える。

「ん……精度が低いなあ……。これでは届かないねえ……悲しいなあ」

「ちよ、おい……聞いているツスか?! 一般人が勝手な狩猟のみならず、勝手な死体解体なんてギルドが許さないツス！」

「レウスの方はどうか………ああ、こつちもクズか。やれやれ、足りない、足りないなあ……」

完全にガン無視だった。リオレウスの尻尾も解体し、同じように紅い玉を取り出して観察し、落胆している様子だ。

彼が求めていたのは火竜と雌火竜の紅玉らしい。だが秘められた力が求めていたものに届かなくなったようだ。それにしても紅玉のためだけにこのつがいを殺したというのか？

そんな事が……許され——

「——ま、いいや。紅玉がだめなら、こつちもいいかねえ？」

不意に彼の視線が十兵衛に向けられる。その目に宿る感情は読み取れなかったが、明らかに戦闘態勢に入っている。それに気づき、十兵衛はすぐさま彼に背を向けて走り出した。

あのまま話しかけ続けていたら間違はなく殺される！

そんな感情を抱かせるくらい不穏な空気を放っていたのだ。

そして彼は、口元だけで笑って見せながら十兵衛を追い始める。

「おや？ どうしたんだあい？ そんなに必死な顔で走り出して……待ってくれよお、ちよつと君の血を頂くだけだよ？」

「そんなこと言つて、おいらを殺して血を抜くつもりッスね!? そんなのごめんッス!」  
ポーチに手を入れて閃光玉を取り出すとそれを後ろに放り投げた。更に続けてけむり玉も取り出し、地面に叩きつけて煙幕も発生させる。だが彼は気にした様子もなく、

「——迅氣、纏」

一言そう呟いて辺りを包み込んだ閃光をもともせず突き抜け、続けて辺りを包み込んでいる煙幕を手に行っている槍を回転させる事で吹き飛ばしていく。

「ははは、追いかけっこはそれなりに好きだけど、もう少し待つてくれないかなあ……? 逃げられ続けるつても悲しいからさあ」

煙幕すらものの数秒で無力化され、まだまだ十兵衛を追い続ける。だが殺されるわけにもいかない十兵衛は続けて道具を使い続ける。

今度はたまたま取り出したこやし玉を投げつけていく。こればかりは勘弁願いたいのか奴は気刃を放つてこやし玉を切り裂き、しかしそれによって独特のあのくさい臭いが辺りに広がり始めた。

「……あのさあ、こればかりはさあ……やめろよな? 角氣、収束。一点突破」

構えた槍の矛先に黄土色の気が収束し始めた。それに伴って尋常ではない殺気が放たれる。それは数十メートルも離れている十兵衛にまで届き、一瞬硬直しそうになったのだが、恐怖心を振り払って彼は走り続けた。

その際懐から畳んであるローブを取り出し、それを軽く広げて中に手を入れた。そうしている間も追っては槍に気を籠めつづけ、それは最大にまで高まると彼は槍を構えたまま地を蹴って空中に飛び出した。

「――槍術奥義が一、地砕！」

振り抜いた槍を勢いよく投擲される。空を切つて真つ直ぐに十兵衛へと流星の如く襲い掛かつていくその槍は、黄土色のオーラに包まれていた。オーラの粒子が尾を引きながら、一瞬の内に煌めく流星と化したそれに貫かれれば即死、当たらなくともあれだけのオーラなのだ。

地面に突き刺さった瞬間に大地が割れるだろう。その衝撃波、舞い上がる瓦礫に当たっただけでもマズイ事になるだろう。

「いやいやいやいや!? ええい、ままよ……!! こうなつたらもうどうにでもなれツス!!」

ローブから取り出したのは打ち上げタル爆弾Gだ。それも底に札を貼りつけているものであり、「ターゲットロック!」と叫んで導火線に火をつけ、次々と背後に放り投げていく。

すると札の周囲が淡く光り、目標に設定された槍に向かって通常以上の速さで飛行していく。先ほども強走薬グレートを飲んで走り続けている事もあり、これで助かるとい

うならば存分に打ち上げていく。

流星にぶつかった打ち上げタル爆弾Gは当然ながら槍に貫かれて次々と爆発していく。これによって少しずつ槍の軌道が変わっていき、それだけでなく槍自体も僅かに傷つきはじめた。

オーラに守られていたようだが、打ち上げタル爆弾Gの爆発の影響からは逃れられなかつたらしい。だが流星が止まる事はなく、結局十兵衛の背後に着弾してしまった。

瞬間、轟音と共に槍を中心として大地に亀裂が走り、衝撃波によって大地が盛り上がり始めた。

「う、うわあああああああッ!?」

最初に襲い掛かってきたのは衝撃波。これに吹き飛ばされて数メートル空中に留まり続けた。続けて衝撃波によって、十兵衛と同じように吹き飛ばされてきた石や岩が十兵衛に襲い掛かってくる。

最後に地面を何度も転がり続け、それだけでなく崖に放り出されて一気に転落していく事になった。彼の悲鳴が尾を引いて小さくなっていき、完全に見えなくなったところでこんな目に合わせた張本人が槍を手にしてやってくる。

「……………あーあ、残念」

とんとん、と少しぼろぼろになってしまった槍で肩を叩きながらそう呟き、溜息をつ

きながらその場を去っていく。

そして崖に転落していった十兵衛は、何とかその日の夜に意識を取り戻し、ふらふらになりながらも火山近くにあつた町へと辿り着く事が出来たのだった。

涙ぐみながら語り終えた十兵衛は、一息つきながら水筒からお茶を飲み始めた。スカルSフェイクをつけながら。

話し続けている間も、こうして飲んでいても彼はこれを取ることなく進めていく。どういう作りになっているのか、彼が口を開くのに合わせてスカルSフェイクも動いているように、飲食する分にも問題はないようだ。

それにしても……

「よく生きていたわね、あんた……」

「そうツスよ！ 自分でも驚きツス！ でも、おいらはあんなどころで死ぬのはごめんだつたツスからね、おいらとしては神様に感謝したいくらいツス！ それにしてもまったく……あいつはなんだつたんスカねえ？ あれがここまで来る途中で噂で聞いた辻斬りだとおいらは思ってるツスけど……だとするとホントについてないツス」

やれやれと息をつく彼がどこか疲れた様子だ。当然だろう、炭鉱夫を終えて一旦休もうとしたところでリオレウス、リオレイアに発見されてからの逃亡だけでなく、まさか



訳も分からない人に殺されかけるとは思いもしなかったろう。

彼はついていないと言っているが、逆についていたからこそ生き延びられたのかもしれない。

それにしても結局彼は何だったのだろうか。

ハンター装備をしていないだけで、本当は違法ハンターだったのかもしれない。

ああいうハンターはギルドナイトによって取り締まられるはずだが、やはり彼はそのギルドナイトらを返り討ちにしていったのだろうか。

そんな風に考え始めたところで、桐音が神妙な顔で十兵衛の肩に手を置いた。

「? どうしたツスか、姉御?」

「……そいつ、本当に黒髪で、緑の目をしていたのか?」

「そうツスね。そんな感じだったツス」

「迅気を使っている、しかも槍術、山衝があったと?」

「ん、そんな事を呟いてたツス」

その瞬間、桐音の表情は憤怒の鬼のようなものへと切り替わっていき、どことなく殺気に近いものを静かに放ち始めたではないか。明らかにその何者かに対して思うところがあるようだ。

しかもただの知り合いではなく、殺気を放ちたくもなる程の負の感情があるらしい。

そういえば彼女の探している人物は……、と茉莉は気づき、静かに彼女に問いかけてみた。

「まさか桐音さん、あなたの探している……」

「……ああ。十兵衛、お前の遭遇した奴こそあたいの探しているクソ野郎——もとい、あたいの愚弟だよ」

ざわり、と冷たい風が彼女らの間を吹き抜けた。

## 16話

ユクモ村にまで戻ってきた瑠璃達は一度集会浴場の酒場へと向かい、その中で十兵衛は「そいういやおいらは温泉に入りに来たんだったツス。先に温泉浸かってくるツス」と言つて浴場の方へと向かつていった。

それを見送つて三人は酒場へと戻つてくると、また注文をして先ほどの話について話し始める事にした。

十兵衛が遭遇した辻斬りと思われる少年。

それがまさかここにいる桐音の弟だったとは誰が想像しただろう。

「草薙武くさなぎたけ、それがあいつの名前さ。あたいの愚弟であり、草薙の里から消えた里にとつて

忌むべき存在、さ」

「忌むべき存在、ね。前から弟の事を貶している感じがしたけれど、なんかやったの？」

「ああ、とんでもない事をやってくれたよ、あいつは」

注文した酒をぐいっと煽るといつも切れ長で気の強そうな瞳は、更に深みを増して先ほどと同じく怒気を含んでいるようだった。実の弟とはいえども彼女にとってその草

薙武という人物は特に忌むべき存在なのかもしれない。

いや、実の弟だからこそ、”とんでもない事”というのは許しがたいのだろう。

「草薙の武術は特殊だと前に言ったね。十兵衛に行使したようにあれも草薙の武術を習得している。だけどあれは昔から何かがズレていた」

「ズレてる、といますと？」

「……血を好むのさ」

空になったグラスに瓶ごと注文した酒を傾けて新しいものを注いでいく。そうしながらぼつりと呟いたその言葉は嫌に二人の耳に届いてしまった。

「うちの一族は武術だけじゃなくて血統からして特殊でね、……ああ、これは少し言い辛いで割愛させてもらうよ。あれはそれ故に人として普通じゃないズレかたをしてしまったのさ。それが血を好むという特性であり、飛竜らに対して妙な執着をしてしまい、殺しを好むようになった」

「……弟さんもハンターの一人、だったんです？」

「二応ね。草薙一族の一つの顔としてはハンター業だからな。あれはああいう特性を持つていたが故に人道だけでなくハンター道からもズレていき、最終的には草薙の里から出ていった。……宝剣を持ち出してね」

「宝剣？」

「遙かな昔に制作され、昔から里に眠っていた一振りの特殊な剣さ。あいつは里を飛び出していく際にそれをも持ち出していった。だから……あたいが探し出し、それを取り戻すのさ。……ついであいつを……さなければならぬだろうけど、な」

最後の方は独り言にしても小さすぎる声で呟いたために二人には聞こえていなかったが、二人の意識はその宝剣という単語に惹かれてしまった。特殊な一族というだけでも興味を惹かれるのに代々伝わる宝剣？

しかもハンター一族なのに独特の武術を確立しているだつて？

いったいどれだけ特殊な一族だというのか、草薙というものは。

そしてそういう特殊な一族という単語の響きだけで、二人の頭には二つの一族が浮かんでいた。

力を求め、それ故に人の道を踏み外した神倉一族。

狩る事に特化し、それ故に人と竜を問わずに殺しつくす素質に目覚めてしまったシユヴァルツ一族。

特殊な力を持ち、特殊な思想をしていたが故に滅んで……いや、崩壊し散り散りになつてしまった一族。

奇しくも前者はとて有名な人物と何度か出会い、彼女のみの生き残りとなり、後者もまた血族と一緒にの村に暮らし続けてきた。

だからこそ特殊な一族、というものには反応せざるを得なかった。

そして知る。目の前にいる草薙桐音もまた特殊な一族の出身だという事を。

「……それがまさか、十兵衛と遭遇しようとはね。しかもレウスレイアの紅玉漁りだった？ ……はっ、まだあれに執着していると見える。なんにも変っちゃいないってか」

ぶつぶつと呟きながら次々と酒を注いで呑んでいく。酔っているのだろうか？

二人に話して聞かせるより独り言をぶつぶつと呟く事が多くなってしまった。

ずつと探し続けていた弟の情報がよくやく得られ、それでいて自分の知っている凶行を続けているというならば、また沸々と怒りが湧いてきたのだろうか。それが彼女の酒を進める要因になってしまっている。

「……ま、いいさ。あいつが今も生きてるって事がわかっただけでも良しとするさ。あれをまだ持つてるかどうかは十兵衛は見えなかったようだが、どうせ今も持っているんだろうね」

「——あの野郎ローブ纏ってたツスから、あの中にあつたんじやないツスカね」

そんな事を言いながら十兵衛が浴場の方から戻ってきた。当然三人の視線は戻ってきた彼の方へと向けられるのだが、一人だけその表情が固まる。

当然か。

浴場から戻ってきたという事は入る前に付けていたハンター装備から私服へと切り

替わったのではないかと思われた。そして彼は今、私服らしき淡いグレーの下地に雪らしきものを描かれた和服に身を包んでいる。

そこまではいい、いいとしよう。

だというのに――

「――な、なな……なんでまだそれを付けてんのよ、あんたっ!」

どうして、まだスカルSフェイスを付けているのだろうか、この少年は……とつつこまずにはいられなかった。

温泉に入ったというのは間違いないだろう。湯上りの火照った体をしているのがその証拠だ。ということは一度その骸を取ったのだろうが、どうして私服に着替えてまたそれを付けてきたのだろうか。

瑠璃のツツコミに「う……」と言葉に詰まったかのように体をびくりと震わせ、しかしすぐに呼吸を整えてスカルSフェイスに手を添える。

「……これツスか? おいらはいついかなる時でもこれは外さないツス」

「いついかなる時……って、もしや温泉に入っている時でもです?」

「そうツス。つけっぱなしで入ってたツス」

「なんで?」

理由を問いかけてみる瑠璃ではあったが、何となくその理由が思い至ってしまう。ス

カルSフェイスを付け続ける、それすなわち、

「——顔を隠さなきゃいけないツス」

そういう事になってしまふ。少し視線を逸らすように二人から顔をそむけながらも、彼はそう答えてきた。

何かしら世間の目から逃れるために顔を隠すのか、顔に刻まれた傷を隠すためか。大部分は後者の理由で顔を隠すだろう。一部分を隠す仮面ではなく顔全体を隠す仮面……それをどんな時でも外さないってどれだけひどい傷が刻まれているのか。

「……昔、ちよつとやばい事に巻き込まれてしまつて、その際にひどい火傷を負つてしまったツス。それはとてもとても見せられるようなもんじゃないツスからね、どちらかといえばマシなこれで隠しているツス」

「マシつて……それも大概ひどい刺激だと思ふんだけど?」

「でもスキルは素晴らしいものツス。それにもうこれはおいらにとつて手放せないものツスからね。申し訳ないツスけど、目をつぶつてほしいツス」

そう言いつつ桐音の隣に座り、彼もまた酒を一杯注文した。

それを眺めながら一つ気づいた事がある。

さて、彼はそれを付けたまま風呂に入ったようだが、どうやって飲み食いするのだろう、と。どういう仕組みなのかその骸の口は彼が喋るに合せて動いているようだが、



飲み食いする際はどうなってしまうのだろう、と。

そう考えていると注文した酒が運ばれてきた。十兵衛はそれを――

「んく……ふう……」

――普通に呑む。

どういうわけか骸の口が開いて酒を流し込んでも問題なく十兵衛の口内を通って胃へと流し込まれているようだった。ほんとうにどういう仕組みになっているのだろうか。と気になるところではあるが、これ以上突っ込むのも野暮か。

理由が理由だけに取れとも言いき辛い。ここは慣れるとしよう。

「戻ってきて早々悪いが、十兵衛、お前があいつと遭遇したのはどの辺りだ？」

「えつとですな……この辺りツス。おいらが居た火山からこう下ったところツスね」

「なるほど。ここからそれなりの距離、か。となればもうこの辺りから離れてどこかに行っているな」

どこからか取り出した地図を広げ、十兵衛がリオ夫婦と武に遭遇した場所を示して見せた。このユクモ村から一週間以上もかけて移動した場所にある火山が現場であり、あれからその時間以上の時が流れているため武はもういないものと考えるのがいいだろう。

もしかすると各地に出現し始めているリオ夫婦を求めて彷徨っているのかもしれない

い。彼の目的が桐音が推測する紅玉集めならば、この機会にがついとしてギルドに確認されだした彼らを見逃さなはずがない。

ならばり才夫婦の足取りを追う事は武の足取りを追う事に繋がるかもしれない。

だがこのユクモ村にそのクエストはまだ届いていないようだ。クエストがなければハンターは飛竜らを狩りに行く事は出来ない。正式な手続きをしなければそれは非公式な狩猟とみなされてしまう事が多いためだ。

そんな酒場に、唐突に一つの風が流れ込んでくる。

「……………」

入口の扉を開けて中に入ってきたのはハンター装備を付けていない青年だった。

水色に近い青い髪を肩まで伸ばし、同じような色合いをした下地に金色の紋様をあしらひ、首回りは白い毛皮によつて覆われたコートを着込み、黒いズボンを履いている。ぎらつくような青い瞳は強い意志だけでなく他者を圧倒するような強い覇気を秘めているかのようで、そのコートの下には相当鍛えられた肉体が秘められているだろうと思われる。

私服姿のハンターだろうか、と思ったが彼は真つ直ぐにカウンターへと向かつていき、「いらつしやいませ」と出迎えてくれた受付嬢へと話しかけていく。

「訊きたいことがある」

「何でしょう?」

「ここに白銀なる者はいるか? それと同じく白銀、もしくは黒崎優羅、竜宮紅葉なる者もいるかも合わせて聞きたい」

そんな言葉が聞こえてきた瞬間、瑠璃と茉莉の表情が強張ってしまった。対面に座っている桐音はそんな二人の変化に気づいたかどうかはわからない。だが僅かに視線を二人に向けたようだが、あの青年の言葉を聞いてみようとする二人に合わせて向けてみる。そうしている間も青年はじつと受付嬢を見つめて質問に対する答えを待っていた。

「……いえ、そのような名前をしたハンターさんはいらつしやらないようですね」

このギルド支部を利用しているハンター名簿のファイルを開き、目を通した受付嬢はそう答えた。その解答を予想していたのか青年は「ふむ……」と小さく頷きながら、軽く酒場の客らを見回していく。

受付嬢に問いかけた内容を聞いていたのか、あるいはその出で立ちをした彼が見かけない人物だったために気になっているのか、ある程度の客が彼へと視線を向けている。

その中には当然あの事を受付嬢へと訊いた内容に反応した瑠璃と茉莉の怪訝そうに、なおかつ警戒するような視線も含まれている。

それに気づいたのかさうでないのか、青年はもう一度受付嬢へと視線を戻し、

「ではどこにいるのか、その情報はないか?」

「いえ、何も。何故その人達を探しているのでしょうか？」

「その者らにこなしてもらいたいクエストがある」

「といますと？」

「リオレウス亜種、レイアの亜種つがい討伐クエスト。これを白銀らに頼もうかと思つたが、ふむ、おらぬのならばやむをえんな」

リオレウス亜種とリオレイア亜種だつて？

このつがいの討伐クエストがこの村に回つて来たつて？

それを……彼が依頼すると？

その相手に白銀昴達を指名すると？

そこまで聞いてしまえば、瑠璃は止まらずにはいられなかつた。席を立ち、真つ直ぐにカウンターへと向かつてその青年へと声を掛けようとしたのだが、それよりも先に声を掛けた者がいた。

「リオ亜種のつがいといったな、そこのあんちゃん。本当にそのクエストを持つてきたつてえのか？」

「……誰だ、お前は？」

「このハンターの一人、榊さかきつてもんだ。こつちはワシの相棒の佐助と椿」

声を掛けたのは桐音と打ち合っていたあの屈強な男性だった。スキンヘッドに軽く

髭を伸ばした強面であり、その体つきも相まってまさにハンターらしいハンターといえるだろうが、これが意外と気さくなところもある人物でもある。

そんな彼の後ろからは二匹のアイルーがついてきている。漆黒の毛並みをしたアイルーが佐助で、白の毛並みをしているのが椿らしい。オトモアイルーかと思われたが、それにしても纏っている雰囲気は妙に研ぎ澄まされているように思える。

彼らを巡っていく視線の動きが止まり、また青年は小さく鼻を鳴らす。

「それで？ 何か用か？」

「そのクエスト、ワシらがこなそうかと提案しているのよ。あんちゃんが求めているハンターが見つからないってんなら、他のハンターがやるしかねえだろうよ」

「……貴様らならば出来ると？」

「おう、やってみせようじゃないか」

「ふん、そう思っているのは貴様だけではないようだがな」

腕を組みながら視線は自分を睨むようにしている瑠璃へと向けられた。榊が声を掛けた事で、話しかけるタイミングがなくなってしまった瑠璃はまだ青年を睨み続けている。

「お前もこれを受けるつもりか？ それとも、また別の何かがあるのか、娘っ子」

「……白銀って名前を口にしたわね？ どうして？」

「ほう？ 娘っ子、貴様、あの者らがどこにいるのか知っているのか？」

「知らないわよ。でも、どうして行方知らずになつてゐるあの人達をあんたが探しているのか、それを聞かせてもらおうじゃない。あんた、どこの誰よ？」

「……ふむ。まあよい、一応名乗つておこうか」

腕を組んだままその威圧するような眼差しで瑠璃、榊と巡らせた彼は

「己おれの名は迅雷。しがな流浪人よ。そしてその際に出くわしたあれらが目障りだったものでな、かの白銀らに処理してもらおうと思つたが、どこ行つてもおらぬと言う。

……やれやれ、どこに消えてしまったのやら」

「どうしてあんたは白銀さん達を知つてるわけ？」

「貴様こそどうして知つている？ しかもその口ぶり……昔からの知り合いという風だな？」

質問に質問で返したが、「さあ、聞かせてもらおうか」と言わんばかりの視線で瑠璃を貫いている。それに臆してしまい言葉を詰まらせてしまった瑠璃に変わり、彼女の後ろから茉莉が出てくると、いつものような半目のやる気なさげな表情で迅雷と名乗つた彼に向き合つた。

「ええ、昔ちよつとした縁で知り合つていましたね。短い付き合いでしたが、彼らにはお世話になつていたんですよ。……そんな彼らをまさか探している人がいたとは思ひも

しませんで。迅雷さん、と言いましたか？　なんであなたは白銀さんを探してるんですかね？」

「この亜種つがいを処理してもらおうと思ったからだか？」

「それは他のハンターでも問題ないかと思いますがね？　どうしてわざわざ白銀さん達を指名したのか、それが気になりますね」

「表舞台から消えてしまった優秀なハンターらを釣り上げるためだが？」

なんの臆面もなく、迅雷はそう口にする。

どうして彼らがその表舞台から消えてしまったのかを知ってか知らずか、迅雷はそう口にした。その答えに瑠璃は息を呑み、茉莉は変わらぬ視線でじつと見つめ続ける。

「釣り上げる、ですか。よくそんな事が言えますね」

「黒龍を討伐する事が出来た伝説を作り上げたメンバーの数人。あの者らならば、難なくこれを処理できよう。何せこのつがいは上位以上というレベルだ。そこらのハンターに処理できるものではあるまい？　故に白銀らを指名するのだ。確かに貴様らも出来るハンターではあるようだが、釣り上げようとするあの者らには届くまい」

「釣り上げられなかったらどうするんです？　その口ぶりなら他の村や町を巡って来たんですよね？」

「釣り上げられなかったらそれまでよ。時が来れば他のギルドが緊急クエストとして募

集をかけるだけだろうよ。こうして己が撒き餌を垂らしているのに、それに食いつかないならば、この辺りにいないのか、あるいはそれにも釣られないように隠れ続けているのか。何にせよ、己のこの行動が無意味ならばそれでもいいのだ。己はただ撒き餌を垂らし続けていくのみ」

とんとん、とコートの胸元を叩いてみせた。もしかすると既にどこかのギルドで正式な依頼書は作ってあるのだろうが、それを提出していないだけか。つまりはそれを持ち歩いて各地を巡っているのか。

そこまでして……白銀昴達を釣り上げようというのか。

彼は一体何を目的としているというのか。ただ亜種つがいの処理を頼むだけで白銀昴達を釣り上げようという魂胆なはずはない。もつとなにか別の理由があるはずだ。

そう、シユヴァルツ一族の末裔である彼女を釣り上げ、抹殺する可能性だつてある。

それが想定しうる最悪のケース。だからこそこんなに警戒してしまう。

しかしそれを表情に出すことなく、ポーカーフェイスを通して茉莉は迅雷に問い続ける。

「白銀さん達を探すのはつがい討伐を依頼するだけ、それだけなんですか？ それ以外の意志は、ないんですね？」

「なぜそこまで気にする？ 娘っ子、貴様はただの知り合いではないのか？」



「そうですね、知り合いです。だからこそ釣り上げる、という言葉の奥に含まれる意志が気になるのですよ」

「……ふん、どうかな。たとえ含んでいたからといって、お前に関係あるのか？ 答える義理などどこにもない」

「……そう、ですか。その釣りをする理由をなくしてしまいましたでしょうか」  
「何？」

変わらない表情で淡々と語ってくる茉莉に首を傾げながら睨みつける迅雷。じつと見上げてくる茉莉に変化はないというのに、その雰囲気意志の強さが増したように思えたのは気のせいではないだろう。

「私達も立候補しましょう。そのつがい討伐クエスト、参戦の意を示しましょうかね。そしてそれを成功させれば、依頼をちらつかせた釣りはしないでいただきましょうか」  
「ほう？ 娘っ子らがやると？ はっ、笑わせる。確かに？ 貴様らはなかなか面白い素材のようだが、それだけであのつがいが討伐できると？ そんなに生易しいものではないわ。足りないな、貴様らでは足りない」  
「足りないってんならあたいらが加わるだけさ」

そこで桐音が立ち上がり瑠璃と茉莉に並び立つ。更に桐音の後ろからは十兵衛が加わり、ここに四人のハンターが揃う。十兵衛も炭鋏夫をしていたが元々はハンターの一

人だ。それも若いながらも、なかなかの実力を秘めているハンターというのが桐音の談らしいが、まだはつきりとは知らない。

だがやるとするならば恐らくこの四人になるだろう。

それを確かめるように桐音と十兵衛を見つめた迅雷は、僅かな驚きを見せた、ような気がした。

「……………ほう？　これはなかなか。このような素材がいるとは、な」

「なんのこことやら」

「なるほど、なかなか面白い集まりだな。……そんなにこれをやりたいのか？」

懐に手を入れ、取り出したのは白銀昴達を釣り上げる撒き餌。カウンターの上に叩きつけたそれは、まさしく彼の依頼書だった。

リオレウス亜種、リオレイア亜種討伐依頼。

ランク、推定上位以上。

フィールド、溪流。

不安定。

こう書かれている依頼書には誰の名前も書かれていない。指名しているハンターが見つからず、これを受けようとしていたハンターをはねのけ続けた結果だ。そして今、また二組のハンターチームがこれに名乗りを上げている。

「嬢ちゃんたちもやりたいようだが、ワシらとてこういうクエストが回ってくるのを待ってたんだよ」

「あたいらも待ってたんだよね。どうやらあたいが探している奴の手掛かりがこいつらだつてわかつたんでね」

「むむ？ 桐音嬢ちゃんは確か、弟を探しているつて話だつたなあ？」

「ああ、そうだね。どうやらあいつ、リオ夫婦を追い続けているつて噂があつたんでね、もしかすると出くわすかもしれないのさ。だから榊さんよ、これ、譲つてくれないかい？」

「むむ……」

榊も桐音の目的の事は耳にしている。それだけでなく瑠璃、茉莉もまた探し人がいるという事も知っている。ずっと情報を求め、クエストをこなしながらも探し続けていた彼女が、ようやく情報の一端を手にする事が出来た。

それでもこのクエストをこなせば会えるとは限らないだろうが、行かないよりは行つて会えなかつた方がマシだ。

少し考え続けていた榊は後ろに従っている二匹のアイルーに肩越しに振り返り、二匹は相棒の視線を受け止め、小さく頷いてみせる。相棒が許したならば、榊もそれに反対する理由もない。

「……よし、わかった。今回は桐音嬢ちゃんらに譲ろう」

「悪いね、榊さん」

「なに、別の機会に返してくれりゃあそれでいいぜ」

「じゃあ帰ってきたら酒をたらふく奢るつてのでどうだい？」

「おう、そいつあいいな。嬢ちゃんらの勝利の美酒に混ぜてもらおうかね。……じゃ、頑張れよ！」

からからと笑ってアイルーを連れてその場を離れていく榊達。その際アイルーの佐助が肩越しに振り返って迅雷の顔を確認し、迅雷も視線に気づいてじろりと睨むような眼差しで交差させた。

先ほどから無言で榊の背後からじつと迅雷を見上げていたのだが、奇妙な感覚が佐助を包み込んでいたのは間違いなかった。これを確かめるために迅雷を観察し続けてみたが、やはり佐助が想像した通りの結果となる。

不躰に見つめられ続けてもなお堂々とした佇まいをする彼に背を向け、榊と共に酒場を後にしていった榊らに代わり、迅雷と並び立った瑠璃達はカウンターに置かれている依頼書に視線を落とす。

譲られたそれをもう一度確認し、彼女らは名前を書き記していき、受付嬢がそれを確認して受理される。ここに瑠璃達が新たなるクエストに参加する権利を獲得する事に

なった。

「それじゃいったん解散してそれぞれ準備に入る事にしましょう。待ち合わせは村の入り口、竜小屋の前でよろしいですかね？」

「異論はないよ」

「おいらもないツス」

「じゃまた後で」

目礼して四人はそれぞれ酒場を後にして宿泊している宿へと向かっていく。十兵衛は来るときに着ていたハンター装備ではなく、戦闘する際に使用するものを用意するため少し時間がかかりそうではあるが、特に問題はない。

つがいを相手にするのだからそれ相応の準備をしなければならぬ。この東方に生息するリオレウス、リオレイアは中央のものとは外見的特徴だけの差異に留まらない。

根本的な能力や習性は同一だが夫婦としての絆が強く、それによって生み出されるコンピネーションが脅威とされている。片方が呼べば片方はすかさず飛んできて同じエリアに集結し、敵を狩っていくのだ。

もちろん違いは外見的特徴に留まらず、その行動までも違っている。大地の女王とされるリオレイアはその異名通り地上での戦闘を得意としているが、東方のリオレイアは

低空飛行をこなして攻撃を加えてくる行動もよく見かけられる。

リオレイアの得意技であるサマーソルトを低空で行使する事もよくあり、まったく気を抜けない相手となっている。

そしてリオレウスもまた同じように低空飛行をよく行い、そこから繰り出される奇襲や火球のブレスの連発、低空飛行を繰り返してつかず離れずの距離の取り合いも行ってくるのだ。

この違いがあるため中央で活動していたハンターが東方にやってきて、このリオ系統と相対した時、その違いに戸惑うのはよくある話だ。

そんな彼らがどのような狩りをするのか。

迅雷は去っていった四人の背中を眺め、一息ついて彼もまた酒場を後にし、それだけでなく広場を抜けて裏手に回り、森の中へと入っていく。村はずれの森は涼んだり鍛錬をしたりするのに使われる事があるため人はまばらにいる事があるが、迅雷が入っていった森は人がいる気配がない。

それでも構わず彼は奥へと入っていき、そしてとある大木にやってきた。太い枝葉によつて空は覆われて地上はちよつとした暗がりになり、更にそれよりも暗い陰になっている所にそれはいた。

「もうこんな所まで来たか」

「……くつちゃ、くつちゃ……ま、ね。ユクモならおもしろい奴がいるんじゃないかと思っただけど、まさか迅雷、あんたがいるとは思わなかったよ」

「口こそお前がここに来るとは思わなんだ。モガ方面に向かっているものと思っただけだな」

「くつちゃ……なんとなく、だよ。それにしても、人探しをしていると聞いていたけど、なに釣り上げちゃってるのかな？ くつちゃ……んく、んく……」

黒装束に身を包み、裂きイカらしきものをつまみつつ一升瓶を時折口に運んでいる。フードによってその顔は隠れているが、その下から覗く濁ったような黒い瞳はじつと迅雷を見上げていた。

「どうやらあれらも白銀らを探しているようだからな。あれらに縁あるものならば潰すか泳がすかの判断をする材料として、奴の駒に当てる事も厭わん。死ぬならそれでよし、死なぬなら観察するまでだ」

「んく……はあ、ふーん、そう……。ここで遊んでもらおうかと思っただけど……」

「それは困るな。遊ぶのならモガに行つてこい。あの辺りは情報によれば王の駒がいるんだらう？」

「あれらは一応共同戦線はつてるから殺せないんだよなあ」

からん、と空になった一升瓶が手から離れて転がり、傍らに立て掛けられている刀に

当たり、黒装束はふらりとよろめきながら立ち上がる。酔っているわけではない、ただ力があまり入っていないためだった。

とんとん、と腰や首を叩き、転がった一升瓶を足で蹴り上げ、装束の裾を広げて中に入れる。続けて立て掛けてある刀に手をかけたかと思えば――

「――ふっ！」

突然抜き放ち、迅雷へと斬りかかる。

だが迅雷は冷静にそれを指で刀身を挟み、受け止めてしまう。怯む事もなく動じる事もなく、ただ振るわれたそれを受け止め、淡々と「戯れはそれまでにしておけ。残念ながら己は今付きあえん」と返しつつ、指で挟んだ刀を黒装束へと返す。

「とつとと失せろ。ここにいれば誰かに遭遇するやもしれんぞ?」

「くちや……だつたら殺すだけさ。辻斬り、だからね」

「やれやれ、どうしようもないな、貴様は。何度も言うが戯れはほどほどにしておけよ?

それを目覚めさせるため、というのとはわかつているが、やり過ぎればその身に厄が返ってくるぞ?」

「戯れも兎戯も、そして本気も、全ては死合に繋がってんのさ。……ここに居る戦猫がどれだけ強いのか試したかったけど……ああ、残念残念……くちやくつちや」

返された刀を鞘に収め、またとんとん、と今度は刀の柄で肩を叩きながら嘆息する。



本当に戦えないというのが残念でならないようだ。こういう反応を見せるのもいつもの事なので迅雷は気にした様子もない。

というよりこんな異常者とこうして話をしているが、別に仲間と言うわけではなくただの知り合いだ。黒装束の言う共同戦線に迅雷は含まれておらず、こうして相對しているのも気配を感じ取ったためやって来ただけに過ぎない。

「戦猫とは戦えないだろうが、猫に近い血を引く一族とは戦えるだろうか？」

「あれは……猫つていえる性質じゃないでしょ。それに、あれは殺すなって言われてるし」

「……………だろうな。まあ何にせよ、とつとと失せろ。どうしても戯れたいなら、さつきも言ったように王の駒を呼べばいい。噂に聞いているぞ？」あの剣士がかなりの手練れだとな」

「……ああ、あいつか。でもあいつは……なあ。ま、いいや。じゃ失せろ失せろうるさいんで、消えますよ」

気だるげに手を振りながら森の奥へと消えていく。それを見送った迅雷はやれやれとため息をつきつつユクモ村へと振り返る。どうやらついてきた者はいないし、隠れている人物もいない。

迅雷を気にしていたらしいあのアイルーの佐助も隠れてついてきている様子はない。

あの眼差しからして迅雷が何者であるかに気づいているだろうとは思っているが、別にそれを咎める気はない。

知られたところではどうにかなるようなものでもないからだ。

果たしてあのアイルー以外で自分の事を感じいたのはあの場にどれだけいたのだろう、と考へつつ、同時にあの四人がどれだけ戦えるのかも期待してみる。

「さて、お手並み拝見といこうか」

うつすらと笑みを浮かべながらその体が青い光と稲妻に包まれ、次の瞬間には森の奥へと流星のように光が移動し、地面に薄く焦げたような跡と、奇妙な足跡らしきものを残して迅雷の姿は消え去った。

## 17話

酒場を後にした榊とアイルー二匹は利用している宿へと戻ってきた。榊はそのまま窓へと向かい、外の様子を眺める。彼らの部屋は三階にあり、下に視線を向ければ村を歩く人々の様子が見える。

佐助と榊の二匹はそれぞれ机と冷蔵庫へと向かっていき、佐助は纏っているローブからファイルらしきものを取り出した。ソファアに腰掛け、ファイルを開いてページをめくる佐助に対し、榊は冷蔵庫から取り出した牛乳を二つのグラスに注ぎ、佐助の対面に座る。

しばらくファイルを眺め続けていた佐助だったが、不意に独り言を呟くように話しました。

「……リーダー。あんたも気づいてんだろ？」

「かっかっか、今までツツコミなしだったからスルーかと思ったが、それでもなかったか  
佐助」

「……いや、あれをスルーしろと？ それは無理な話ってやつだわ」

「椿としてはあいつが出てきたところで問い詰めたかったんだけどにや」

「……そうしたら絶対にマズイことになってたぞ、椿」

前に置かれているグラスを手にして少し牛乳を飲むと、ファイルから一つの書類を取り出し、机にファイルを置く。手にした書類をめくって内容を確認していく佐助は、その作業をしつつ再び榊へと話しかけ続ける。

「……それで？ あのまま放置でいいのかよ、リーダー」

「それはどっちの意味だ？ 佐助」

「……とぼけんよ。つがいの件も、あの迅雷とかいう奴のこともだよ。……ああ、あいつが言っていた白銀のこともあるな。色々とやらなきやならねえやつ、あるじゃん」

「椿としては本当はつがいのやつに行きたかったんだけどにや。手ごたえのある仕事、最近やってないからにや」

「それはすまんかったな、椿。なあに、すぐにでも次のつがいくエストは舞い込んでくるだろうて。それまではあの嬢ちゃんらの成功を願っておこうじゃないか」

じつと窓の外を見つめながら優しい表情を見せる榊。そんな様子を肩越しに見た佐助は、はあ、とため息をついて書類を榊に向けて軽く振つてみせる。

「……リーダー、これの事、忘れたわけじゃないんだろ？ そうのんびりしてたらあの人、また小うるさい説教たれるぜ？」

「おお、それは困るのう。渚嬢ちゃんはちいつとばかり大人しくしていてくれんな」  
「だつたらさつきと狩りにいくにや。おやつさん、最近草薙さんと遊びすぎだにや」

「わつはつは！ そいつあしようなもの。ああいう元気な若者を見れば滾るといふものよ！ ……ああ、そう呆れたような顔をするな。心配いらん、さつきも言ったが機会は巡る。ワシらは座して待てばよい。……そら、言っている傍から来おつたぞ」

にやにやと笑いながら窓を開けると、外から一羽の鳥が飛んでくる。それは鷹であり、足には手紙らしきものが結ばれていた。それを腕で受け止め、手紙を広げて「ほう……」と頷きながら内容に目を通していく。

佐助と椿も気になつていようで、「誰からだにや？」と椿が訊ねてみる。

「ふっふっふ、神風からの連絡よ。どうやらあつちの方で希少種のつがいに動きあり、との事らしい。応援に来れるなら来てくれ、と書いてあるな」

「……へえ。だつたら行かないという選択肢はないな」

「だにや。もちろんこれは見逃さないんでしょ、おやつさん」

「おうよ。準備せい、二人とも。嬢ちゃんらに続いてワシらもつがい討伐じゃ！」

懐から小さな紙と羽根ペンを取り出し、さらさらと返事を書きとめて鷹の足にそれを結びつけ、軽めの食事を与えてやると窓の外へと飛ばしてやる。それを見送つて櫛は部

屋へと向かい、ハンター装備へと着替える事にする。

佐助も広げていた書類をファイルに戻し、ガラスの牛乳を一気に飲み干す。続くように樁もガラスの牛乳を一気飲みし、部屋に向かって走り出した。それに続いて佐助も部屋に入り、準備を進めていく。

数分後、彼らは宿を後にし、竜小屋へと向かう。手紙の主、神風と呼ばれた者がいる場所までアプトルに騎乗してユクモ村を後にした。

その数分前、同じように竜小屋に集まったのは瑠璃達だ。

二人の装備は以前と変わらず、瑠璃はナルガシリーズ、茉莉はレウスシリーズを身に包んでいる。名称としては下位の物ではあるが、強化を施す事である程度上位でも通用する防御力を実現している。

とはいえそれでも上位以上のリオ夫婦相手には厳しいかもしれない。特にナルガシリーズは火耐性が低い。火球のプレスを受ければマズイ事になるだろうが、瑠璃自身が火に対して耐性があるので問題はない……という訳でもない。彼女が大丈夫でも装備にガタがくれば後々の戦いに響く。

とにかく当たらないように気をつけて立ち回らなければならない。

以前のナーガ戦で損傷した装備も、鍛冶屋にメンテナンスを頼んで修理したので、こ

の防具も武器も問題ない状態で使えるようになっていた。

あとどこまで戦えるか、だ。

そして階段を下りてくる二つの人影を見つけると、向こうから軽く手を振ってきた。やってきた桐音と十兵衛もきちんとハンター装備を纏っているが、桐音の出で立ち前は前組んだ際とは違う装備を纏っている。

鈍く光る金色にごつごつとして強固さを感じさせるその装備。

ガンキンSシリーズ。

火山に生息する獣竜種、ウラガンキンの素材を使用して作り上げられた防具だ。上位の中でも難しいとされるウラガンキンを何度も相手にしていなければ作れない装備だが、前回はネブラシリーズだったというのにどういっわけだろうか。

疑問を感じる二人の視線に気づき、「ああ、これ？」とガンキンSメールを軽く叩きながら苦笑する。

「こいつの炭鉱夫に付きあっていると、時々ウラガンキンがやってくるんだよ。それを相手にして、討伐したら素材が集まると、何となく作っただけでこれがなかなかいいのさ。抜刀会心、抜刀滅気が両方出るから結構いいんだよね」

「ネブラシリーズは？」

「ああ、あれは下位とか遊びでやる際に使ってるね。こっちは上位をやる際に使うって

感じさ」

何というか、その理由が桐音らしいと感じてしまうのは何故だろう。恐らくはぎりぎりの戦いを楽しもうとそういう意図があるんだろう。戦闘狂ならばそういう考えを持ってしまいかもしれない。

そして彼女が上位装備をしているというのは何となくわかるが、

「……十兵衛も上位装備、なのね」

「そうッスね。こっちも姉御がいたからこそ出来たようなものッス」

ユクモ村に来る時に来ていたあれも上位装備だったが、現在彼が装備しているそれとまた上位装備だった。鈍い黒を基準とし、ガンキンSシリーズとはまた違ったごつごつとした印象を持ち、両肩には反った重厚な角が鎮座している。

ディアアプロUシリーズ。

繁殖期に入り、気性が荒くなったディアアプロスの雌の素材を使用した防具だ。硬く重量のある素材を使用しているだけあって防御力が高いのが特徴であり、並大抵のものは傷一つ付かないといわれている。

だが彼は頭だけはあの骸、スカルSヘッドを装備している。

そう、スカルSヘッドだ。

これは今まで付けていたスカルSフェイスとは違い、ガンナー用として装備できるも



のである。もちろんディアブロUシリーズもまたガンナー用として作られたものであり、つまり十兵衛が狩りをする時はガンナーとして行動するという事の表れだ。

それにしてもわざわざ同じようなものを二つ用意するとは……やっぱりその火傷の痕が酷いのだろう。

「頭だけ変えているようですが、スキルのには問題ないんです？」

「ああ、問題ないツスよ。おいらは炭鉱夫ツスからね、それで手に入れたお守りと装飾品でスキル調整してるツス。発動してるのは装填速度＋1、反動軽減＋1、高級耳栓ツス」

「へえ……それはなかなかいいものですね」

ガンナーにとってはいいスキルが出ているだろう。飛竜らの咆哮の影響を受けず、ロード速度を上げるだけでなく、威力の高い弾を撃つてもある程度反動がなくなる。

これはいいスキル調整だ。

それに装填速度に反動軽減を出しているという事は彼は弓を使うのではなくボウガンを使うガンナーである事がわかるが、はたして一体どっちのボウガンを使うのだろうか。

これが明らかになるのは実際に現地についてからか。

……それにしても、

「……あたしたちだけ下位装備ってことか」

「まあ、仕方ないと言えば仕方ないですね」

東方での上位クエスト後半をこなしている二人に対し、瑠璃と茉莉は上位前半と下位クエストをいったり来たりしているだけ。ジャギイSシリーズも作れないことはないが、それ以上に今使っている装備に愛着があるためなかなか変える事が出来ないでいた。

それだけ長く使っている防具ではあるが、上位クエストの中でも中から上の今回でどうなるか。考えて、気になってしまふのは無理ない事だ。

しかし今回もまた二人だけでやるのではない。桐音も実力はわからないが十兵衛もいる。何とかなるだろう。

「準備は完了したかい？」

「ええ。お願いします」

竜小屋から二匹のアプトルとそれに引かれる竜車がやってくる。それを誘導していた竜小屋の主が声を掛けてき、茉莉がそれに応える。それぞれ自前のロープを纏い、腰元にはポーチが提げられている。

必要な物は全て用意されているのを確認し、次々と竜車へと乗り込んでいく。御者としてまた桐音がつくと、手綱を握りしめてアプトルを走らせた。

向かう先は溪流と呼ばれるフィールド。ユクモ村周辺の森のエリアであり、その中の

一つの狩猟区域へ数時間かけて移動する事になる。

ベースキャンプは崖に面し、坂になっていている場所にある天然の岩の屋根の下に篝火やベッドを配置するという簡単なものになっていた。崖の向こうには高い山や森が広がり、広大な山の自然を一望できるようになっている。

支給品ボックスには一応地図をはじめとする最低限の支給品が入っていたが、一応貰っていくくらいはしておくことにする。

続いて今回使用する武器だが、瑠璃は愛用しているヒドウンサーベルを選択。これもナーガとの戦いで破損したが、防具と共に修理に出したので完全に修復されている。

茉莉はインペリアルガーダーを選択。その重厚な守りからのカウンターで攻めていく事を選んだようだ。

桐音はどうするだろうか。彼女曰く剣ならば色々手を出しては作ってきているそうだが。ユクモ村を出る前の言葉を考えるに前回は遊びだったからスラッシュアックスを選択したようだが、今回は上位装備を身に包んでいる。ならば武器もメインになるだろう。

それにスキル的には大剣が相性いいんじゃないだろうか。

そう思っているとロープから今回使用する武器を取り出した。

それは漆黒の小太刀。夜を思わせるような暗い色合いをした小太刀が二つ。しかし

それが一つの武器として確立されている。

双剣だ。

防御を捨ててその圧倒的な速さと手数で攻めるスタイルであり、達人ともなれば被弾せずに一方的な狩りをする事だって可能とされる武器である。

そして彼女が取り出したその武器は私服の時でも腰に差しているあの小太刀とはまた別の小太刀だろう。あちらは鉱石で作られた一般的な小太刀のような気がする。

「夜鳥【翼】。ヤタガラスの素材で作った双剣さ」

東方で確認される鳥竜種の一つ、ヤタガラス。夜行性であり、その外見は竜というより鳥に近い存在だ。猛禽類を思わせる外見をしているが実際は狡猾であり、獲物が弱まるのを待ったり、死角から急襲を仕掛けたりという狩りをする事で知られている。

その鋭い羽に覆われた翼は一種の剣のようであり、その素材を使って作られる武器は鋭い切れ味を持つ武器となる事で知られている。桐音が持つその双剣もまたそのようなだろう。

確かあの人が持っていた片手剣にもヤタガラスの素材を使っていたか、と茉莉は思い出した。

最後に十兵衛が用意したのは褐色の甲殻に覆われたボウガン。あの人が使っているような軽量さを感じさせず、むしろ重量を感じさせるため恐らくそれはヘビィボウガン

だろう。

ライトボウガンが軽快に動いて銃撃し、補助の弾を駆使して仲間をサポートしつつ攻めるタイプに対し、ヘビィボウガンはその逆。威力を高め、補助の弾を排除し、ただ獲物を狙撃し続けて攻めていくタイプだ。

放たれる弾丸の威力を高める事を目的としているために重量も同時に増し、ライトボウガンと違って軽快に動く事は出来ないが、その分一撃一撃の重みがあるため位置取りと回避が出来ればライトボウガンよりも素早く討伐する事も可能だ。

近年は技術の向上の甲斐もあり、ヘビィボウガンに新たな機能も搭載する事も可能としているようで、増々火力は上昇しているらしい。噂によれば高まった熱をそのまま攻撃エネルギーに変換して撃ち出す方法があったり、ボウガンに掛けられたリミッターを解除したりするらしい。まだまだ改良のし甲斐はがあると撫子が言っていたっけ、と茉莉はそのボウガンを見ながら思った。

さて、今回彼が使うそのボウガンの名は、炎戈銃ブレイズヘル。

炎戈竜アグナコトルと呼ばれる、火山に生息する海竜種の素材で作り上げられた上位のヘビィボウガンだ。これも彼が言うまでもなく、炭鉱夫として火山に潜っている時に遭遇、討伐、制作という流れで作ったのだろう。

炎戈銃ブレイズヘルを背中に掛けると、続けてローブからベルトを取り出し、左肩か

ら右腰と、左腕の裏に二つ留める。ベルトにはチップが嵌められており、恐らくそこに粒子化して詰め込んだ弾丸が込められている。

チップの位置とそこに浮かぶ数字で弾数確認、更にポーチに弾の素材を詰め込んだ十兵衛は頷いて、

「……よし、準備完了ッス」

「じゃあ作戦会議を始めようか」

ガンナーとしての下準備を終えたところで四人は纏っているロープを竜車に入れ、地図を広げて円を組んで向かい合う。

「情報によればここは今回相手するリオ亜種夫婦の縄張りに含まれているようで、最近一度離れていったらしいですが、また戻って来たそうです。近隣の村の上空を次々と旋回しており、村人たちは怯える毎日だとか」

「襲っている、っていう事はないのね」

「のようですね。でもいつそれを実行するかわからないから、今回あの迅雷さんが依頼書を作って持ってきた、ということですよ」

「基本的には両方とも飛び回っているらしいが、レイア亜種はレウス亜種と違い地上が主な活動区域。これを見つけた事が出来れば、レイア亜種をさっさと処理できるだろうね」

「確認されてるエリアはわからないんすか？」

「その情報はなし、ですな。なにせここ一帯は狩猟エリア。ついでに言えば、空はリオレウス亜種の制空権が発揮されているため気球も飛びにくいんですよ。つまり、位置情報は現地に入って調べろって事ですよ」

やれやれと両手を軽く広げて首を振る茉莉に「うへ……」と嫌そうな声を漏らす十兵衛。だがこういうケースは上位以上、果てはG級ならばよくある話だ。こちらはメインターゲットだけでなく、どこからともなく乱入してくる別の大型モンスターが現れる事だつて珍しくないといわれるくらいである。

これは現地の調査が難しく、メインターゲットの姿を確認できたが、別の大型モンスターが確認できなかったときに起こる出来事だそう。そういう場合、不安定というマークが依頼書に記され、ハンターに対して警戒を促す事になっている。

つまり不安定ならば乱入も頭に入れて現地に向かえ、という事であり、それを上手く処理しつつクエストを達成しなければならぬという意味でもある。まさしく何が起こるか分からない、厳しい世界なのだ。

「さて、どうする？ 四人一纏めで行くのかい？」

「地図を見る限りでは北に向かうルートと西に向かうルートがあるようですね。最終的には全て繋がっているようですが、調査するならば二手に分かれた方がいいと思われま

す」

「そうね。じゃああたしと茉莉、桐音と十兵衛でいいんじゃない？」

「ん、おいらはそれに異議なしッス」

気心の知れた二人同士で組み、行動するというのは悪くはない。むしろそうした方がいいだろう。だが桐音は少し考え、それに待ったをかけるように手を胸まで挙げた。

「いや、ここはあたいと茉莉、瑠璃と十兵衛で組んでみようじゃないか」

「は？ どういうこと？」

「今回初めてあたいら四人で組むわけだが、二人は下位装備だろう？ 防御面とか色々不安じゃないか。そこで上位装備をしているあたいらのどっちかが横につく事で困になり、もう一つのコンビに連絡する事が可能だろ？ ……それにさ、たまには違う相手と組んでみるのも面白いだろ？ あたいらしばらくこの四人で回るんだし、いい機会だと思っただけだ」

なるほど、と思っただが後者が本音じゃないのか、と思っただが茉莉はそれを呑み込むことにする。

だが前者は何となく納得できるか。下位装備を強化してはいるが、それは桐音と十兵衛においても同様だ。二人がつけている防具も強化を施し、耐久性を上げている。だが十兵衛はガンナー装備のため剣士装備よりも防御力は低い。



しかしそれでもディアブロウシリーズは初期状態から下位の剣士装備よりも防御力は高く、それを強化すれば当然差は開く。その二人が緊急時には囷となる。もしも被弾しても二人ならば耐えきれぬ可能性が瑠璃と茉莉よりも高いだろう。

だからこそその提案。

「もちろん考えなしに組ませているわけじゃない。前衛の瑠璃に後衛の十兵衛、同様に前に出るあたいに中距離から近距離を詰める茉莉、と相性は悪くないだろう？　ここはお互い親睦を深めるって意味でも採用する価値はあるかと思うんだけど」

「……………」

考え込む瑠璃は自分と組む事になるだろう十兵衛へと視線を向けてみると、彼はその視線に気づき、どこか慌てたようにきよろきよろと桐音とあらぬ方を見やっている。なんだその反応は、と訊きたいところだったが、骸の奥から「マジツスカ……、二人つきりツスカ……ってか、睨まれてる？　え、睨まれてんの？　おいら……何かしたツスカ？　ってか視線やつばこええツスカ……」とぶつぶつ呟いているのが聞こえてきた。

(視線怖いって……そんなきつく睨んだ覚えはないんだけど)

とんとん、と軽く頬を叩いてみながら瑠璃は自分の目つきを確かめてみる。十兵衛を怖がらせるほどきついものじゃないんじゃないか、と思ったがどうなんだろう。茉莉に訊いてみたらまたおもしろい事になったと突っ込まれるかもしれないのでやめておく。

というより、視線で怖がられてはコンビを組んだらどうなってしまうだろうか。それを解消し、打ち解けるためのコンビだろうが、より一層壁を作られては本末転倒ではないだろうか。

「……いや、そうやってきつかけを逃したら実際に戦う際に上手くいく、という流れを潰すかもしれない。こいつの腕をじっくり知る機会でもあるし、乗るしかない、か」

もう一度じつと十兵衛を見ると、「な、なんスか？ おいら、やつぱりなんかしたツスカ？」と慌てますが、それを止めるように瑠璃が手を挙げ、

「いいわ。組もうじゃない、十兵衛」

「……………え？ マジツスカ？」

「なに？ 嫌なの？」

「いや、嫌というわけじゃないツスが……いいんスか？ おいらと組んで」

「いいわよ。よろしく頼むわね」

「……………よろしくツス」

しゅしゅぶ、と言った風ではあったが、差し出した瑠璃の手を十兵衛は握りしめ、握手した。ここに一時のコンビが成立し、続けて桐音も茉莉へと手を差し出し、茉莉もその手を取って握手する。

また地図に視線を落とした茉莉は指を地図に滑らせて「私と桐音さんは西……………エリア

2に進み、瑠璃と十兵衛さんは北……エリア4へと進むという方針でどうです？」と確認する。

それに異を唱えるものはおらず、最後に指をエリア7、9の交互を示し、

「落ち合うのはこの二つが望ましいかもしれないね。あるいは途中でここ、エリア6で会う事になるかもしれませんが」

「4、5、6と進めばそうなるかもしれないわね。そつちが2、6と進めば、だけど」

「エリア3はただの通り道だし、自然とそうなるだろうね。もし途中でターゲットと遭遇するようなことがあればこの信号弾を使おうか」

そう言つて桐音が支給品ボックスから取り出していた信号弾の一つを見せる。彼女が手にしているのは離れた所にいる仲間に飛竜遭遇の意を知らせるものだ。もちろんこれは見え、聞こえなければ意味はないが、この溪流ならばよほどの事がない限りは見逃す事はないだろう。

各自一つずつポーチにしまい、それぞれ立ち上がつて支給品の携帯食料を口に含み、水筒のお茶で流し込む。

今回も竜車に爆弾などを積んでいる事はないため、あれを引いて移動する事はない。それぞれ身軽な状態で坂を下りていき、エリア1へとやってくる。この時点で道は二つに分かれ、一つは続く坂に沿つて岩山地帯となつているエリア2へと進む。

もう一つは山から小さく流れてくる水と少しぬかるんだ段差を降り、そのまま北へと進むルートを辿り、エリア4へと進む道。

「じゃ、健闘を祈るよ。……十兵衛もそうびくびくしないので瑠璃とうまくやってこいよ？」

「……善処するツス」

「だからどうしてそう怯えるかな……」

「その雰囲気と目つきじゃないですかね？　瑠璃は昔っから結構人に噛みついてきましたからねえ……あの人にもまだ噛みついてしまい、逆に睨まれ返されたのはよく覚えていますよー」

うんうんと頷きながら昔を思い返す茉莉だが、「ちよ、そんなにあたし噛みついちゃいないでしょ!？」と茉莉の両肩をぶんぶん揺さぶってしまう。それでも茉莉は動じず、腕を組んだまま口だけで笑って見せながら、

「ははは、いい思い出じゃないですか。あの出来事があつたからこそ、瑠璃も多少は大人しくなつたんですから。……その目つきは相変わらずきついままですけどねー。あの人ほどじゃないですが」

「うっさいわ！　というか、やっぱりあたしの目つき悪いつて言つてんじゃないの!？」

「いやー瑠璃も私のように柔らかくすれば、ある程度はそういう事もなくなるんじゃないな

「いんですかー？」

「いや、あんたは柔らかいというか間抜け面といふかなんというか……そこまでやったああたしの何かがなくなる気がする」

「ははは、言いますねー。間抜け面とぬかしおりますか」

そんなやりとりをする二人を桐音は楽しそうに眺め、隣にいる十兵衛に「ほんとに仲がいい姉妹だよなあ」と振ってみる。十兵衛も頷きながら「そうッスね」と同意する。そこで桐音はちらつと視線を落としながら十兵衛の様子を見してみる。

骸をつけているため表情を読む事は出来ないが、雰囲気で彼の感情を読む事はある程度可能だ。今十兵衛は怖がっている、という風ではない。落ち着いている、いや、落ち着こうとしている、という感じだろうか。

「……ほんと、難儀だよな、お前つて。今のお前を見ていると昔を思い出すよ」

「……すみませんね、姉御」

「いや、気にする事はないさ。そのための一時的なコンビさ。頑張つて瑠璃と打ち解けてきな。でなけりやこれから先、チームとしてやっていけないぜ？」

「……うつす」

とん、と優しく背中をおしてやれば十兵衛は静かに瑠璃の下へと向かっていく。そんな彼に気づき、茉莉を解放した瑠璃は軽く首をしゃくつて「行くわよ」と一言告げて歩

き出した。

その後には十兵衛もついて行き、時折振り返りながらエリア4へと消えていく。

それを見送った茉莉はやれやれと嘆息しつつ軽く体をほぐしつつ桐音に並んだ。

「……それで？ 十兵衛さんはどうしてあんなにびくびくしてるんで？ 初めて会った時から瑠璃を相手に普通に会話していたように思えますけど」

「ああ、あれかい？ ……まあ、何というかね、あいつは……ちよつと難儀な性格しているのさ」

「といたしますと？」

「普段は何とかおさえているみたいだけど、狩場とかで誰か親しくない奴と組んだりするとああなってしまうのさ。特に気の強い奴と組んだらああいう反応してしまう、状況的な人見知り、とでもいうべきかね」

「ああ……なるほど」

ハンターの中には各地を巡るタイプがいる。そういうハンターは一人でクエストをこなす者がいれば、各地の酒場で仲間を募ったり募っている誰かの下へと入ったりして、クエストをこなす者がいる。

そういう人らは自然と他のハンター、ひいては知らない人と打ち解けやすくなるんだろうが、十兵衛はそういうタイプではないようだ。

「素顔を晒せずあの仮面をつけているからねえ……初対面じゃ引かれるか奇妙な奴だと思われるだろ？ あいつはそう思われるのは慣れてるらしいが、やつぱりそういう目で見られたりするの嫌らしいね。昔はあたかも怖がられてたけど今じゃあの通りさ。時々一緒に狩りに行ったりしてたけど、あいつが炭鋤夫になつてからはたまに会うだけになつてたのさ。少しは変わっているか、と思つたけど……変わつてなかつたようだね」

「それで瑠璃と組ませた、と？」

「まあ、そういうことだね。あとは自分の実力が劣つてるんじゃないかとか、見た目に反してへビー使いだから大丈夫か、とか思つたり思われたり……と色々あつたらしいね。狩場がちがちになつてたら死ぬからね、さつさと瑠璃に慣れてもらわなきゃ困るつてもんだろ」

「……難儀ですな。プライベートじゃそうでもないんですよ」

「そう……いや、二人つきりとか知らない奴に囲まれた場合だとあなるわ、うん。あたしが隣にいたからこそあいつは普通に喋つていただけで」

なるほど、と領きながら二人が消えていった方を見つめる茉莉。今まさにその二人つきりという状況だが、はたして瑠璃は十兵衛と打ち解けられるのだろうか。

思い返してみれば十兵衛が自分達と話している時はずっと桐音が隣にいた気がする。

それは十兵衛がそういう事にならないようにするための配慮だったのだろう。

不意に桐音がふむ、と口元に指を当てて考えるようなしぐさを見せる。

(……そう考えると愚弟との遭遇で話しかけたつてのは、あいつにしてはよくやった方だよな。まあ、目の前で違反行為を堂々と見せられたり、リオ夫婦に追いかけられたりしてたつてので気が動転していたのかもしれないけど)

そういう風に自己解決し、最後にもう一度エリア4の方を見ると「あたいたちも行くか」と茉莉を促した。それに茉莉も同意し、二人は坂道に沿って歩きだし、エリア2へと進んでいった。

風は穏やかに吹き抜け、フィールドの空気も重苦しくない。

溪流は一見穏やかさを保ち続けている。

そんなフィールドに今、四人のハンターが足を踏み入れる。

それすなわち——空の王と陸の女王の領土なわぼりに土足で上がり込んだという事。

以前組んだ三人に新たな仲間を一人加えた今回の狩りはどうなってしまうのだろうか。

今はまだ、誰にもわからない。



## 18話

エリア4は広い平原が広がっている場所だった。左手には大きな岩山が聳え、右手を進めば崖に繋がっている。平原に何もなにかときかれればそうではなく、点々と遠い昔に滅んだと思われる村にあった家の残骸が転がっている。

それだけでなく倒木もあり、それらが障害物という役割を果たしていた。何もなければある程度スペースを確保して立ち回れただろうが、これらがあるためここで戦う際には気をつけないといけないだろう。

いや、逆にガンナーからすればこれらを盾にして狙撃が出来るのだろうか。

そんな事を考えつつ見回していた瑠璃の視線が、少し離れた所からついてくる十兵衛に肩越しに振り返ってみる。そこには瑠璃と同じように辺りを警戒するように小さく首を振りながら見回している彼がいる。

だが瑠璃が自分を見ている事に気づいた十兵衛が軽く肩を震わせ、縮こまってしまふ。そんな十兵衛にまたため息をつき、瑠璃は立ち止まって十兵衛に振り返った。

「ねえ、どうしてそんなに怖がってるの？」

「……え、あ、いや……」

「村じや普通に喋ってたわよね？ あたし、なんかしたっけ？」

「……いや、なんもしてないツス。……うん、なんもしてないツスね」

思い返すようにきよるきよるとしながら十兵衛はそう答えた。だとするとやつぱりこの視線が怖いのだろうか、と瑠璃はまた自分の頬を撫でる。茉莉となんやかんやとした彼女ではあったが、やつぱりそういう事は気にしているみたいだ。

過去に自分よりも十分きつい目をしている人を二人は知っているので、それに比べればマシだろうと思っていたが、自分も十分怖いのかと気になりだしたらしい。

そんな彼女に十兵衛は申し訳なさそうに俯く。

「瑠璃さんは……本当に悪くないツス。悪いのは、おいらツスから、そう気にしなくてもいいツス」

「……なんか理由があるんでしようね？」

「………のが苦手なんス」

「え？ なんだつて？」

蚊の鳴くような声だったため、思わず身を乗り出してきつい声で訊いてしまった。あ、やってしまった、と思った時には「う……」とどこか怯えた声で一步下がってしまった。う十兵衛がいる。

「あ、待つて待つて。今のなし。うん、もう一度お願い」と慌てて呼び止め、お願いする事にする。それで何とか十兵衛もこくりと頷き、

「だから……、あまり慣れていない人と二人つきりになるのが、苦手なんス」

「……………ああ、ああ、そういう事、ね」

最初は気の抜けたように、二度目は納得するように頷き、何度も小さく頷きながら腕を組んだ。そういえばこういう反応を見せ始めたのは自分と組もうと桐音が提案しだしたときだったつけ、と思い返してみる。

「人見知りする性質？」

「……………そうツス」

「なるほどね。じゃあ仕方ない、か。うん、なんていうか……………あたしもごめん」

「いや、だから瑠璃さんは悪くないツス。おいらが……………しっかりしてないから、こういう風になってしまうツス。雰囲気まで悪くしてしまつて……………申し訳ないツス」

なんとというか、本当にユクモ村での彼とは別人のように弱々しい雰囲気だ。この差に瑠璃は驚き、しかし全部桐音が隣にいたからだろうと思ひ至つた。彼女がいたからこそ初対面の自分達を相手に普通に話が出来たんだろう。

いや、あの時は愚痴に興奮していたからもしれない。その興奮が彼の口を滑らかに動かしていたのだろう。落ち着いてから本来の自分が出てきた、といったところか。

そんな彼を桐音がどうして自分ではなく瑠璃とコンビを組ませたのか。  
(慣らすため、でしようね)

二人で行動させる事で瑠璃と普通に会話し、行動できるようにするためか。腕組みをしながらじつと十兵衛を見つめてみると、脳内で桐音が軽い微笑を浮かべながら「こいつを頼むよ」と言っているような気がした。

人付き合いをするなら茉莉の方がいいのに瑠璃を選んだのは、戦いになった際のバランスがいいという事もあるだろうが、瑠璃のような人と二人で行動する事で一気に慣らせるかもしれないと思ったかもしれない。

そう思われるのも癪だが、思い至ってしまったからには何とかやってみるしかないだろう。

やれやれと嘆息しつつ頭を軽く搔いて瑠璃は十兵衛に近づき、ぼんと肩を叩いた。

「そう固くならなくていいわよ。別に取って食おうってんじゃないんだから」

「……………」

「さ、行きましよう。こうして立ち止まっている暇はないわよ。でも辺りを警戒しなからだけど話をしようか。あたしの事、あんたの事、お互いの事を知れば少しはその固さもほぐれるでしょ?」

出来る限り優しく話しかけながら、柔らかく笑ってみせる。自分はうまく笑えている

だろうか、と気になったが、それを感じとらせないように気をつけながら優しく十兵衛を見つめた。

「……うつす。すみません」

「だからそう謝るなつて。すぐに謝るの、禁止」

「す、すいま……あ、いや……」

「……ま、いいけどね。すぐにとは言わない、少しづつ慣れていこうか」

そして瑠璃はエリア5に向かつて歩き出す。それに十兵衛も付いてくるが、瑠璃はその十兵衛の隣に並ぶように歩いていた。ちらりと十兵衛へと視線を向けると、「じゃあまずはあたしの事から話そうか」と振ってみる。

十兵衛が頷けば「じゃあ何から話そうか……」と呟きながら考え始める。本名の事は言えないし、竜魔族だという事も言えない。ポツケ村出身ということは少し言うのは躊躇われるし、そこに住まうあの人達の事も言えない。

これは困った。

話そうにも隠さなければならぬ事が多いじゃないか。

話しても大丈夫な事を纏めて一体どう話せばいいのだろうか。

そんな事を考えていると、「……おいらから話すツス」と意を決したように十兵衛が言った。少し驚いたように振り返ってみると、そこにはやつぱり骸の顔がある。まだこ

れに慣れないが、何となくその骸に隠された十兵衛の顔は真剣な表情をしようとしているのかもしれないと思った。

「元々おいらは小さな町の出身で、ハンターの両親の教えで小さい頃からハンターとなるべく育てられたツス。結構射撃の腕がいいって褒められたんでガンナーを、力がついてきてからはヘビィボウガンをメインに扱うようになったんす」

「ハンター一家か。いつからハンターやってるの？」

「えっと……十を超える頃にはクエストやってたツス。とはいえあの頃は小型ものばかり相手にしてたし、両親もいたからそんなに活動はしてなかったツスけどね。……主に鍛錬ばかりやってたツス」

「ふーん……やっぱりそんなもんよね。あたし達もそうだったし」

子供の頃からやっていたとしても見習いのため小型モンスターや採集クエストを主にやるのは普通だ。それでもクエストをやるのは早いうちから狩場という空気を肌で感じ、体に覚え込ませるのが目的である。

それ以外の時間は主に武器の扱い方やハンターとしての知識を学ぶ事にあてられる。瑠璃達だってそうしていた……が、それ以上に火竜の力を制御する時間の方が多かったか。

「……瑠璃さん達もハンター一家だったんす？」

「まあね。母さんがハンターやってんのよ。気づいたら茉莉と一緒に母さんの背中を追ってて、ハンター見習いとして色々教わってきたわ」

「そうなんスカ。……つと、続きツスね。下位ハンターとして独り立ちして町を拠点としてソロで、時には同期のハンター達と狩りをしてたンスが、上位ハンターに昇格したら世界を回ってこいって言われたんで町を出てきたンス」

「へえ、一人旅？」

「そうツス。一人で世界を回り、見聞を広めろつていう教えツス。一つの拠点に腰を据えるつてのもいいツスが、若いうちは色々経験してこいつてのが父さんの言葉ツス。あれは……十五のことだったツス」

相槌を打ちながら聞いていた瑠璃だったが最後の言葉に少し固まった。まさかこの十兵衛は……十五で上位ハンターになったつて事か？

それは結構すごい事なんじゃないだろうか。そんな早くに上位ハンターになったつて事は十兵衛はかなり出来るハンターだという事になる。大抵のハンターは早くて十七、普通に経験を積んでいけば十九か二十前後あたりで上位ハンターになる。

とはいえそれは若いうちからハンターになった者達の話で、大抵は十四、五から十八の間にハンターになるのが多い。それだけハンターというのは危険な職業であり、早いうちからハンターをやるのは両親がハンターであることが通例だ。

そのため上位ハンターになるのは前述あたりになるのだが、十五でそうなるっていうのは、その人物がかなり実力のあるハンターという意味でもある。

「各地を転々としておいらは実力を磨き、見聞を広めていったツス。華国に行ったりロックラックに行ったり、時にはドンドルマにも行った事もあるツス。まあ、中央の方は短い期間しか滞在しなかったツスけどね。おいらには中央より東の方が性に合ってたツス」

「あ、そうなの……。ま、あたし達もドンドルマ方面にはあんまり行ってないけどね」

ポツケ村を出てからまっすぐにロックラックへと向かい、それから東を中心として行動していたため二人はドンドルマに行ったことがないのだ。隠された目的が目的だったために仕方ないだろうが、一度ドンドルマに行ってみたいと思った事はある。それは今もお果たされてはいないが。

そうしている内にエリア5へと入っていく。ここは森の一部となっており、周りを木々に囲まれた場所だ。それだけでなくこの広場にも点々と木が生え、倒木があつたり切り株があつたりと障害物も多い。

ここも気をつけないと大型ならばそうでもないが、小型……ブルファンゴがいつの間にかそこまで迫ってきていたという事になったらしやれにならない。

瑠璃は辺りを警戒しながらも、話し続ける十兵衛の言葉に耳を傾ける。



「上位ハンターとして順調に経験を積んでいけたまではよかつたんすが、とある村に滞在している時のことツス。おいらはその村の宿に泊まっていたんすが、突如その宿が火事になったんすよ」

「火事!? いったい何だつてそんな事に」

「よくわからないんすよ。時間帯が深夜だったこともあつて火の元もないし、火竜が来たわけでもないんす。……となれば放火になるんすが、あそこは辺境の村だったツスから放火されるような理由が思いつかないツスよ」

あまりにも想定外の出来事であり、対処が遅れてしまった事もあつて宿は全焼してしまふという結果を生み出してしまふ。宿の人も含めて死傷者も出してしまい、その中の一人である十兵衛も顔に……いや、顔だけでなく体にも火傷を負つてしまふ事になってしまったというわけだ。

「あの後治療を受けたツスがこっちは治すのは難しいつて医者も言つてたツス。自分でも鏡で見てみたツスがああ、こりやひどいつて思えるくらいツスね。運が良かったのは目に影響がなかったことツスね。ガンナーは目も大事ツスから」

「……そう。それからそのスカルを？」

「そうツスね。こういうのはおおつぴらに見せるようなもんじゃないツスから。最初はまあ、普通の仮面とかマスクとか使つてたツスが、スキル面とか色々あつてこれに落ち

着いたツス」

そつとスカルSヘッドを撫でながらあの頃を思い返すようにしみじみと呟く。

静かに聞いていた瑠璃ではあったが、火傷の原因が謎の火事によるものとは思ひもしなかつた。てつきり瑠璃は狩りをしている際の負傷だと思つていたのだ。だが事故によるものだなんてそれは不幸な出来事。

でもそれを口には出来ない。するのは不躰というもの。

ではなんて言えばいいのだろう。思いの外反応しづらくなつてしまう。そんな瑠璃に気づき、慌てて十兵衛が両手を胸まで挙げて振りだした。

「いやいや、そう困らなくてもいいツス。そう言葉に詰まられちゃおいらが困るツス。確かにこうなつて色々変わつてしまつたツスし、おいら自身も……まあ、人の視線とかに敏感になつたり、こういうなりツスからそれが負い目になつて気弱になつたりと変わつてしまつたツスけど……それでも、何とかやつていけるツス。……今のところは」

まくしたてるように喋り出すが、だんだん弱々しくなつてまたぶつぶつと呟くように言いながら落ち込み始める。なるほど、ぶつぶつと喋り出すのは癖になつているのか、と分析しつつ、また瑠璃は頭を掻きだす。

こういう性格は火傷を負つてからなのだろうか。あるいは子供の時からで、火傷を

負ったからこそひどくなってしまったのか。

何にせよこういう性格だからこそ瑠璃と二人で行動するのを慌てていたのだろう。

「治そうとは思ってるんすが……これがなかなか。どうしても慣れていない人を前にしてしまおうとびくついてしまふんすよ」

「……それでよくあの桐音とうまくやっていけるわね」

「姉御はあれツスよ。強引にぐいぐいとペースに巻き込んできたツスから……。気づけば慣らされていたっていうかなんというか……」

「じゃああたしもそうした方がいい？」

そう口にしてみると十兵衛はまた慌てだし、今度はぶんぶんと首を振り始めてしまふ。

「いや、勘弁してほしいツス。普通にお友達からお願いたしたいツス。……あ、いや、深い意味はないツス！ 普通に……普通に？ うん、普通にお友達になりましょうって意味ツス！」

「あ、うん、わかってるわよ。お友達、ね。いいわよ、お友達。というか仲間だし、もうお友達として始まつてるかもしれないけど」

「あ……」

少し呆けたように声を漏らすと、今度は瑠璃が少し慌てだし、「なによ、あんたとして

はまだあたしとは友達として始まってないっての？」と怒ったような声で問いかければ、また十兵衛は首を振りだし、「始まってるツス！ こんなおいらでいいのなら、よろしくお願いしたいツス！」とペこペこ頭を下げだした。

そんな十兵衛に苦笑し、気づけば結構彼と話せているじゃないか、と感じだした。こうして隣に並んで話していても怯えられていない。もう少し会話し続けたら慣れてくれるだろうか、と思つた矢先、

「……っ!?!」

木々の向こうから数匹のブルフアングが、二人に向かつて疾走してきているのを感じ取つた。素早く背中にあるヒドウンサーベルの柄に手をかけ、抜き放ちながら氣刃を放とうとしたが、それよりも早く隣にいた十兵衛が動いていた。

担いでいる炎戈銃ブレイズヘルを左手で高速で抜きつつ、右手でチップを叩いて弾丸を取り出し、左手でそれを構えながら装填。ろくに狙いも定めていないような速さで銃口をブルフアング達に向けると、引き金を連続で引いていった。

銃口から放たれた弾は途中で細かな弾を散開させ、ブルフアング達を纏めて撃ち抜いていく。一発目でその痛みに足を止めてしまい、二発目で毛皮を突き抜け、三発目で致命傷となつて倒れてしまう。

その素早い処理にヒドウンサーベルを手には掛けたまま瑠璃は固まつてしまう。そん

な彼女を知ってか知らずか、十兵衛は「ふう……」と息をついて炎戈銃ブレイズヘルを肩に掛けながら辺りを見回している。

「……随分早くない？」

それは処理する早さなのか、その炎戈銃ブレイズヘルを抜いてから装填、狙撃の流れが早いのか、恐らく両方だろう。弾が装填される速さを上げる装填速度＋1があるとはいえ、あまりにも鮮やかすぎる。

「いやあ……長く扱っていると自然と体が覚えるもんツスよ？ あとスキルのこともあるツスが、元々このブレイズヘルの装填速度がヘビィにしては速いツスからね。それも含まれるツス」

「……でもあんた、さっきの見ただけでもわかるくらい十分強いじゃない。自信持ちなさいよ」

「はは……、これでも全然ツスよ。『碧空』のダグラスさんとか、おいら以上に凄いヘビィ使いはわんさかいるツスからね。それに長い事炭鋏夫やってたツスから、ちよつとブランクあるかもしれないツス」

瑠璃に褒められても十兵衛は苦笑しながら否定してしまう。確かに彼は炭鋏夫の間が長かったようだが、それでも今のブルファンゴの処理は目を見張るものだった。正直言つて瑠璃は十兵衛の実力を計り損ねていたと認めてしまうくらいに。

よもや自分が攻撃するまでの間に全部処理できるくらい速く動けるヘビィガンナーがいるとは思わなかった。いや、彼が言っていた『碧空』のダグラスならば可能だろうが、あれはG級以上の実力を持つ規格外のハンターだ。

彼らを除けばそんなにいないだろう。しかも彼は上位ハンター。まだ伸びる可能性がある若いハンターだ。この時点でこれだけの実力者ならまず間違いなく強いハンターだと言える。

控えめ過ぎるだろう、と瑠璃は思う。

その控えめさで自分の光る実力の鉱石の輝きを鈍らせているんじゃないか、と思いつつ十兵衛を見つめる。そうしていると、また十兵衛が「え、な、なんスか？ おいら、変なこと言ったツスカ？」と慌てだす。

やれやれ、ちよつと考え事をしながら十兵衛を見つめるだけでこれだ。少しは慣れたと思っただが、どうやらまだまだらしい。

「なんでもないわよ。さ、行きましよう」と促して歩きだし、「あ、待つてくださいいッスよ」と慌てて追いかけてくる。

そんな彼を感じながら瑠璃は少し十兵衛の事を好ましく思えてくるのを感じていた。最初こそ妙な奴だとか随分と臆病な奴だとか感じていたが、少しほつとけない弟のような少年のようだった。思った以上の実力をしているくせにそれを大ぴらにせず、むしろ

それを隠すように控えめ。

人付き合いも苦手そうだし、それが逆にめんどろを見てやりたく感じてくる。もしかすると桐音もこんな風に感じているのかもしれない。

(ま、仲よくしてやろうって気にはなってるかな)

肩越しに振り返りながら瑠璃はそう思いつつ、二人はエリア5を抜けていった。

エリア1から西に進み、エリア2へとやってきた茉莉と桐音。ここは岩山地帯になっており、右手は崖となっていて高低差のある岩山が繋がっている。その先には森があるがその内の一つがエリア5となっているようだ。

遠くの景色を眺める桐音の視線はじつと空に向けられており、リオレウス亜種が飛行していないかを探っているようだった。茉莉も辺りを見回しながら何かいないかを探ってみるも、どうやらこの周囲に生き物の気配はないようだ。

「それにしても茉莉って瑠璃とは正反対だね。似ているのは外見だけなのかい?」

「ははは、よく言われますね、それは。でもま、だからこそ私達はうまくやっていると思っていますね」

道を歩きながら桐音がそんな事を口にする。それを会話のきつかけとし、茉莉もそれに乗ってそう答えた。

「ボケとツツコミってか?」

「おー、正解ですよ」

「さっきのあれがそうだよな。よくあんなことをしてるのかい？」

「ま、いつもの事つてやつですよ。それはもう昔からですな。瑠璃はなかなか弄り甲斐がある人ですから」

「言うねえ。まあ、それが仲がいいってことなんだろうね。いいと思うよ、あたいは」

くつく、と小さく肩を揺らしながら笑う桐音。そんな彼女をいつものような目でそつと見てみる。彼女もまた弟がいる姉弟ではあるようだが、その仲は決していいものではないだろう。

何せ彼女自身が弟の事になればあれほどの怒気を見せるくらいだ。わかる人にはわかるだろうが、あの怒気を放ちあんな目をしている彼女は、まず間違いなく弟に対して殺意を抱いている。

自分達がこうだから、他の兄弟や姉妹の仲がいいというのは羨ましいのかもしれない。あるいは羨ましいというより仲がいい様子を見て楽しんでいうのだろうか。自分にはないものを求めるより、それを愛でる性質なのかもしれない。

「桐音さん、一つ訊いても？」

「なんだい？」

「十兵衛さんは人見知りをする性質なんですよね？ そんな彼がよく桐音さんと話せる



ようになつたな、と思うのですが」

「ああ、それかい。出会つた当初からびくびくしてたからさ、色々やってみたら話せるようになつたつてだけさ」

「色々つて……何したんです？」

「ん？ クエスト一緒にやるのは基本として、部屋に連れ込んで晩酌やつたり、鍛錬やつたりと、とりあえず行動を共にしつつ会話してきただけさ」

「あ……」

それは至つて普通なものだろうが、どういうわけか茉莉の頭に浮かぶのは、桐音が強引に十兵衛の首に手を回して引き寄せつつ、引つ張つていく光景だった。気弱な十兵衛だからこそ仲良くなるためにはどうすればいいかを桐音なりに考えた結果かなんだろ  
うが、こういう風に頭に思い描けるのは何故だろう。

というか推測ではあるが、ほぼ間違いないくこうやつて十兵衛に近づき、彼の心の壁を壊していったに違いない。豪快だろうが、その甲斐もあつて今の関係を築けているのはいいこと、なのかもしれない。

（ふむ、瑠璃も同じような事をすれば……いや、意外と普通にやつてしまうかもしれないですかね。そこは瑠璃を信じてみますか）

昔は結構やんちゃで年上相手でも臆せずため口で話しかけてきた姉だ。今でこそそ

れはなくなつてはいるものの、その斬りこみを今回もやつてくれればあるいは……とここまで考えたところで停止する。

確かに彼女はそんな性格ではあるが、あれで結構面倒見がいいところもある。そこが出てくることになれば、十兵衛とも仲良くなれるかもしれない。なにせこんな自分を相手に姉妹を続けているし、ボケにもよく付きあつてくれるのだから。

そんな事を考えながらエリア6へと移動する。

ここは南のエリア8となつている洞窟の入り口の前に滝が流れ落ち、そこから生まれる小川が南北に延びるエリアになつていた。川の水は足を濡らすだけになつているが、砂利や石というちよつとした動きの疎外となるものがあるため戦う際には気をつけなければならない。

坂を下りてエリア6へとやつてくると、そこにはジャギイやジャギイノスがたむろしており、きよろきよろと辺りを見回しているようだ。

「ここにもいないか。じゃあさつきと洞窟に入つていこうか」  
「あー」

距離が離れているし、すぐに移動できるためあの小型モンスター達に構っている暇はない。あくまで自分達はリオ亜種夫婦を相手にするのだから。気づかれない内に素早く動いて滝を潜り、その中にある洞窟の入り口を抜けるとそこは薄暗い洞窟が存在して

いた。

ここは天井の一部に穴が開いており、そこを通り抜ける事によって空からこの中へと降り立つ事が出来るようになっていた。また左側もまた吹き抜けになっているようで、ここも飛竜にとつては出入り口になっている。

そう、ここは飛竜の巣なのだ。

奥に進むとそれらしきものが確認できるのだが、やはり目的のものはいないようだった。茉莉が巣に近づいてみるも卵は見当たらない。腐肉はあるようだが数時間の間にここで便をした形跡もない。

「ふむ……いないな。こりやどういうことだあ？」

「巣を離れてどこかを飛行中かもしれないね。隣のエリア9にもいなさそうだし」

気配を探ってみれば洞窟の外に繋がる先、エリア9にも大きな気配はなかった。実際に確かめるために移動してみるが、やはりそこにはどちらもいない。いるのはこっちもまた数匹のジャギイだけだった。

「やれやれ、めんどくさいね」

首を振りながらも夜鳥【翼】を抜き、一瞬でジャギイとの距離を詰めて一太刀の下に斬り伏せる。突然現れた桐音に驚き、ジャギイらが声を上げるがそんな事をしては桐音に狙われるだけ。

首と体が分かれたジャギイから素早く次のジャギイへと移り、残るジャギイをこれまた一太刀で処理し、一息つきながら血を払って腰に戻す。相変わらず見事な剣術というべきか。

それを横目で見つつ、茉莉は何か手がかりはないかと探っていた。この地方にジャギイらが数匹で群れるというのは時々見かけられる事だ。それは気にしなくてもいいだろう。

問題はこうしてエリアを移動してきてもリオ亜種夫婦の手掛かりらしきものがない事だ。

こういうのはどこかに僅かなものが見つかるものなのだがまるつきりない。もしかすると瑠璃側ならば何かあるかもしれない、という事も有り得ない事ではないのだが……巢に近いこつちに何も無いというのは気になる。

そんな事を考えながら歩いていると、奇妙なものを見つけた。

「これは……」

地面に焼けたような跡と僅かな血の跡がそこにあった。血の跡はいいとして焼けた跡というのがポイントだ。ここで焼ける理由といえば、火竜と呼ばれるあの二頭のどちらかが火球を放ったと思われる。

一体いつそれをしたのかはわからないが、軽くそこに触れてみると煤が指についてく

る。それで時間を計れるわけではないが、これが煤で間違いないという事を判別する。

ようやく見つけた手がかりだ。標的はまず間違いないこの狩獵エリアにいる。

しかし同時に奇妙な点もある。その跡の先の森、いや木々が薙ぎ倒されているのだ。まるで何かが通過したかのように強引に作られた道がある。大きさからして飛竜クラスの間ががこの先へと向かったのか、あるいは向こうからこつちに来たのか。

それはわからないが、こうして目に見える形で手がかりが見つかった。それにしても何かおかしい気がするのだが、まず一度あちらの二人に合流してみよう。

そう思った時だ。

空を桜色の影が通り過ぎて行った。

「っ!？」

二人して空を見上げ、あれが向かっていった方向を見つめる。方角は東、森が広がる方だ。つまりエリア5、瑠璃達が回っているであろうエリアが含まれている。

「ようやくお出ましつてか! 行くよ、茉莉!」

「はいはい、了解ですよー」

どうなる事かと思つたが、出てきたのならば良し。追いかけてさつさと討伐していいわけではないか。

エリア6へとやってきた瑠璃と十兵衛は軽く辺りを見回して目標がないかを確認

するが、いるのはジャギイとジャギイノスのみということに軽く落胆する。またここを通過すると思われる茉莉達がないのも確認し、すぐに合流地点であるエリア7へと向かおうとした。

だがそこで何か接近してくるのを察知し、立ち止まる。

離れた所で威嚇しているジャギイ達も何かに気づき、辺りを見回し始めた。

空気がざわついている。

それに合わせて風が吹き、森もざわめき始める。

そんな中で「ギャア、ギャア！」と騒ぎ出すジャギイ達。

瑠璃はヒドウンサーベルへと手を伸ばし、十兵衛は炎戈銃ブレイズヘルを抜いて構えている。

そして——空を桜色の影が通過し、エリア5に向かって降下していった。それを視認した途端、二人は身を翻してエリア5に戻っていく。

だが完全に中に入るようなことはない。

木や草むらの陰に潜んでそれが着地していく様子を見守る事にする。

それはまさに通称通りの桜色。森の中にそれは映え、彩りを添えているかのようだ。背中と尻尾の先に棘が生え、低く唸り声を上げながら先ほど二人が処理したブルファンゴの死体に近づくと、その肉に喰らいつき始める。

桜火竜、リオレイア亜種、リオハート。

三つの名を与えられている存在が今、目の前にいる。

しかも食事に夢中になっているという好機。これを逃さず奇襲を仕掛けてペースを掴めば、最初の流れはこっちのものになるだろう。

そう考えていると、十兵衛がしゃがみながら炎戈銃ブレイズヘルにベルトに留めていたチップの一つを近づけ、ととんと強弱をつけて叩いた。するとチップからベルトリンクが伸び、その中に弾丸が通って炎戈銃ブレイズヘルへと自動装填がされていく。

これが近年技術開発が進み、ヘビィボウガンに追加された機能の一つだ。対応している弾に反応するとベルトリンクが伸びて自動装填、通常よりも速い速度で銃撃が可能とされている。

自動装填に問題がない事を確認すると、十兵衛はしゃがんだまま狙いを定めつつチップを狙撃の邪魔しない位置に固定し、

「おいらがここから狙撃して気を引いてるツス。瑠璃さんは……」

「今の内にあれに回り込み、あんたが狙撃したら信号弾を使えって事ね」

「……そ、そうツス。よろしくお願いしたいツス」

「了解」

足音を立てないように気をつけつつリオレイア亜種の横側へと回り込んでいきつつ、

ポーチに手を伸ばして信号弾を手にする。その様子を横目で確認した十兵衛はスコップで照準を合わせ、引き金を連続で引いていく。

放たれたのは徹甲榴弾Lv2。それは狙い通りにリオレイア亜種の頭へと着弾していく。弾丸の中でも威力の高い弾丸であるが故に反動も強いが、それを反動軽減スキルで和らげ、どつしりと構えながら次々と徹甲榴弾Lv2をおみまいしていった。

そして徹甲榴弾は着弾してから少しして爆発する特性を備えている。これは頭に着弾し爆発すると、相手の頭を揺さぶる効果を発揮し、眩暈状態へと近づける事が可能なのだ。

突然の攻撃にリオレイア亜種が驚き、苦悶の声を上げながら仰け反ってしまった。その隙について瑠璃が信号弾を空に打ち上げ、茉莉達へと遭遇したことを知らせる。

問題なくそれが空で爆発したのを確認すると、ヒドウンサーベルを抜いて急接近。振りかぶったそれを一気に翼へと振り下ろす。ナルガクルガの切れ味の高い刃であるその一撃は翼の一部を裂き、リオレイア亜種の意識を瑠璃へと向けさせた。

「グルアアアアアアアッ!!」

咆哮ではなく威嚇するような声。続けて口元に火が集まり、仰け反った事で持ちあがった事で頭上から火球が落とされる。それを横に飛び退いて回避し、転進しながら尻尾の下を潜り抜けつつ一太刀斬って離脱。



当然リオレイア亜種は瑠璃を追うように振り返るが、その背後に隠れている十兵衛が飛び出して引き金を引いていた。

放たれる貫通弾が背後からリオレイア亜種を貫いていき、ダメージを与えていく。元々高い威力を持つ炎銃銃ブレイズヘルにパワーバレルも装着されているため、威力を底上げされた弾が連続して襲い掛かっていく。だがリオレイア亜種は瑠璃を狙って襲っていく。

「……なかなか根性あるツスね。まず間違いなく上位個体。Lv1程度じゃ威力不足……いや、ここならいけるツス！」

重量のあるヘイイボウガンを手に行っているためその走るスピードは遅くなってしまうが、それでも十兵衛は位置を変えてリオレイア亜種の側面に移動する。続けて貫通弾Lv1の追加を装填し、腹から突き抜けるように狙いを定めて撃つ。

「グッ、グルオオオ……!?!」

瑠璃へと噛みつきこうとしていたりオレイア亜種だったがその痛みに怯んでしまった。その隙を逃さずに瑠璃が首、顔へと斬りかかり、また離脱。装備の不安があるためにいつものような斬り込みが出来ないため、素早い接近離脱をしなければ命に係わる。

慎重に、しかし確実に攻撃と回避をする。

それが今回の瑠璃の戦い方だ。

だがそこでリオレイア亜種は一步足を引いて体に力を溜め始める。それはリオレイア亜種にとつて必殺の攻撃を放つ前ぶりだと気づき、瑠璃は横へと逃げ出す。

しかし十兵衛ははつと息を呑んでスコープから視線を外し、慌てて瑠璃へと叫ぶ。

「瑠璃さんっ！ それはダメッス!!」

「——え？」

確かにそれはリオレイア亜種の必殺の一撃の一つ。

強靱な足の力で自身を持ちあげて宙返りし、それに従つて動く毒の棘を生やす尻尾で敵を討つ。

サマーソルト。

これがリオレイアの危険性を世間に広める要因の一つになっており、ハンター達はこれには気をつけろと教えられている。一撃の重さだけでなく毒の棘に貫かれるため体内に毒を仕込まれるためだ。

尻尾の一撃で瀕死になり、毒によって命を落とす。この流れが確立する。

だからこそサマーソルトの予備動作が見えれば、とにかく横に逃げる。縦に回転するんだから前に立っていればサマーソルトに当たってしまう。

故に瑠璃の回避は間違つてはいない。

——だがそれは、原種での話。

「グルル……ッ！　ゴグルアアアアアアアッ！！」

「……ッ!？」

気づけば尻尾は瑠璃の眼前から迫ってきていた。咄嗟にヒドンサーベルを立てて気を籠めて防御体勢に入ったが、それでもヒドンサーベルが軋む。ヒドンサーベルを通じて強い衝撃が両腕、体へと伝わっていき、瑠璃の体は勢いよく後ろへと飛ばされていた。

「がっ……は……っ!？」

「瑠璃さんッ！　くっ……こなくそ……っ!？」

苦い表情をしながらも、十兵衛は炎戈銃ブレイズヘルを手にしたまま走り出す。リオレイア亜種はサマーソルトを放ったことで低空飛行状態に入っており、青い瞳をぎろりと動かし吹き飛ばされた瑠璃を睨みつけていた。

追撃を仕掛けるつもりのようなのだ。そのまま翼を強く羽ばたかせて移動していき、瑠璃の前に向かっていく。しかしそのまま移動させるわけにはいかなかった。十兵衛が炎戈銃ブレイズヘルに弾を込め、その頭めがけて引き金を引く。

それは狙い通りに着弾し、少し間を置いて爆発した。

「ヴォオオオオッ!？」

徹甲榴弾のダメージにたまたまらず落下し、それだけでなく力が抜けたように倒れ伏し、

もがきだす。眩暈状態へと陥ったのだ。

「大丈夫ツスか、瑠璃さん!？」

「……………いつつ、ん……………なんとか、ね」

ヒドウンサーベルを杖のようにして起き上り、軽く手を振りながらも苦笑を浮かべてみせる。サマーソルトの直撃を受けたが、気のコーティングによって軋むだけに留められたようだ。

メンテナンスに出して修復したというのに、今度は折れて使い物にならなくなってしまった、なんてことになったら泣けてくる。

瑠璃の事を気にしながらも、その手は素早く動いて装填と射出を繰り返していた。眩暈状態になって今もまた好機であり、攻撃の手を緩めていない。

だが彼の顔は肩越しに振り返っており、スカルスヘッドの下から瑠璃の様子を窺っているのがわかる。

ポーチから回復薬グレートを取り出して一気に飲み干し、口元を拭ってヒドウンサーベルを改めて構える。そうしながら先ほど何が起こったのかを思い出していく。

自分間違いなくサマーソルトを回避したはずだ。

だが現実はどうしてサマーソルトを直撃している。

横に逃げたのに当たってしまった。その謎を解く答えはただ一つ。

さつき行われたサマーソルトは縦ではなく斜めに放たれたという事だろう。縦に回転するから横に逃げればいい、という考えを潰す斜線で動くサマーソルト。だから横に逃げたはずの瑠璃の前から尻尾が迫り、吹き飛ばされた。

あの時十兵衛はダメだ！ と叫んでいたがこういう事だったのか。もしかするとこの攻撃は亜種に見かけられるパターンなのかもしれない。

「やってくれるわね……」

まさに初見殺しの必殺というわけだ。

防御が間に合わなかったら致命傷だったことだろう。十兵衛の叫びに感謝しよう。そうでなければ反応が遅れていたかもしれないのだから。

荒れた呼吸と心臓を落ち着かせ、瑠璃はリオレイア亜種へと走り出す。

戦いはまだ始まったばかりだ。

## 19 話

眩暈状態が解け、起き上ったりオレイア亜種は低く唸りながら起き上り、翼を広げて声を上げる。そのまま首を振って何とか正気を取り戻したのだが、それもまた隙となり、ヒドウンサーベルを突き出し、引いて斬る。

その間に二人が並ぶのではなく、別々の位置に分かれて狙いを分散させる方針で十兵衛が移動しながら銃撃を加えていく。その痛みにリオレイア亜種は十兵衛の狙い通り振り返った。

「グルアア！」

数歩走つてその勢いのまま前のめりになりつつ十兵衛へと噛みついていくが、それを回避するように前転し、受け身を取りながら起き上っていく。背後でがちん、と牙が打ち合わされる音を聞きながら振り返り、腹から突き抜けるように貫通弾を射出。

確実にダメージを積み重ねていく。

その間に瑠璃は防御した際に下がった切れ味を戻すように砥石をかけ、十兵衛が稼いでくれた時間を利用して作業を終える。

最初に決めたように十兵衛が囹になつてくれている。機動力の低いヘビィボウガン使いだというのに、よくやってくれている。

そんな彼の頑張りを無駄にせず、切れ味を戻したヒドウンサーベルを構えて気を纏わせていき、リオレイア亜種の尻尾めがけて振りかぶる。漆黒の刃から放たれた気刃が狙い通りに尻尾を斬るが、少ししか刃が通らない。

硬い。

流石上位個体というべきか。強固な鱗と甲殻に守られていて今の気刃では足りないらしい。

ならば出力を上げるしかない。

先ほどのサマーソルトによる痛みがまだ尾を引いているが、それを堪えてヒドウンサーベルに纏わせていると、リオレイア亜種の視線が瑠璃を捉える。

振り返りざまに火球を一発放ってきたが、狙われたことを悟った瑠璃は気を纏わせながら走り出す。そんな彼女を追うように更にリオレイアが振り返るが、その際に口元に火の粉を集めていた。

「火炎が来るツス！」

「っ!？」

十兵衛の言葉に反応し、肩越しに振り返って見ればリオレイア亜種の喉奥から噴き出

す火の粉が着火され、連続して火炎が爆発しながら嘯みついてきたのだ。

それから逃げるために翼を広げて宙に舞い上がり、更に回転しながら回避したため少し無理な体勢になったが、その甲斐あって火炎がナルガシリーズを焼く事はなかった。リオレイア亜種の視線が上げられ、そのまま数歩下がつて力を溜めだす。またサマーソルトが来るのか、と警戒するが、今の自分は地上にいない。

そのまま後ろに下がって距離を取ればいいと下がつていくが、今度はリオレイア亜種の行動も早かった。溜めた力を解放するように通常のサマーソルトを行い、宙にいる瑠璃を更に打ち上げんとする。

だが距離を取る事でその尻尾の動きが見えていた瑠璃はそれを回避する事が出来た。しかしサマーソルトを行使したことでリオレイア亜種の巨体は宙へと上がり、翼を羽ばたかせる事で低空飛行に切り替わる。

殺気に満ちた青い瞳が瑠璃を睨み付け、ぐんと距離を詰めながら再度嘯みついてきた。

それは瑠璃持ち味である素早い動きで躲し、側面に回り込んで羽ばたく左翼をヒドウンサーベルで斬る。続けて突き、引き、薙ぎとりオレイア亜種が振り向く間に攻撃を重ね、更に回り込んで向き合わないようにした。

地上では十兵衛が通常弾Lv2を装填し、瑠璃にばかり意識を向けているために狙わ



れない事を利用して狙撃を続けている。だがそう長い事瑠璃が狙われていてはもしも  
の時が怖い。

左翼を斬り続ける瑠璃に対し、十兵衛は右翼を撃ち続けてダメージを積み重ねてい  
た。そうして積み重ねたダメージはリオレイア亜種の翼に負担をかけ、やがて――  
「グルオアアッ!?!」

――墜落する。

この好機を逃さず瑠璃が急降下し、気刃斬りでダメージを積み重ねながらヒドウン  
サーベルに錬気を溜めていく。そして運氣の巡り合わせか、この好機にエリア6方面か  
ら茉莉と桐音が合流してきた。

二人は状況を把握すると、まず桐音が夜鳥【翼】を抜きながら一気に加速をつけてリ  
オレイア亜種へと接近していく。

「はあっ!」

体を捻りながら両手に持つその漆黒の小太刀でリオレイア亜種の顔を斬り付け、続け  
てその刃同士を打ち合わせていきなり鬼神化を発動させて赤いオーラを身に包む。

それは夜鳥【翼】に纏われていき、高速で振るわれる刃が躍り、リオレイア亜種の顔  
を切り裂いて鮮血を巻き上げるたぎにより一層力を増していく。これは双剣に新たな  
技術の道が拓かれたことで生まれた鬼人化による特徴の一つであり、鬼人化中に攻撃を

与えるたびに双剣に力が収束するのだ。

これが一定以上高まった時、鬼人化をしてない際でも鬼人化によって得られる力の一部を持続させる事を可能とした。これを鬼人強化状態と呼ぶ。

鬼人化を解いた桐音の持つ夜鳥〔翼〕はそれでも赤いオーラを纏っており、何とか起き上ったりオレイア亜種の懐に潜り込んで素早い連撃を叩き込んでいる。鋭い切れ味を持つ夜鳥〔翼〕は硬いオレイア亜種の甲殻をもともせず、それと同時に下にある肉まで切り裂いているのだ。

続けて茉莉も合流し、インペリアルガーダーを抜き放つと引き金を引き絞りつつ翼めがけて斬り上げ、溜められたエネルギーを解放させる。溜め砲撃が翼を焼き、刃が貫いた場所の周囲を若干吹き飛ばす。

四人が揃えば流れはこちら側に傾き出している。特に桐音が先陣切つて斬りこんでいるのが大きい。手数が多い双剣という事もあり、彼女が一番ダメージを与えだしている。となればオレイア亜種の意識は自分を一番傷つけている彼女へと向けられる。

そうなれば囿が成立する。

下位装備で防御力が不安な瑠璃と茉莉に意識が向かないという事は、彼女達でも若干踏み込んで攻撃するチャンスが生まれだす事になる。

「せいっ、やっっ！」

墜落した後に気刃斬りをした事で錬気が一段階上昇しているヒドウンサーベル。これにより若干ではあるがヒドウンサーベル自身の威力も増す事になる。そして狙うのは先ほどあまりダメージを与えられなかった尻尾。

これを切り落とすだけでも有利になる。

鞭のようにしなり、しかし硬い甲殻に覆われるそれが軽快に振り回され、必殺の一撃のサマーソルトの主役でもあるこれが落とすだけでも、リオレイア亜種を相手にするのが楽になるのだ。

だが桐音の双剣ではリーチが短すぎて届かない。彼女も気刃を放てばいいだろうが、匣を買って出するために懐に潜り込んだり離脱したりする事で、リオレイア亜種の気を引かなければならない。

だから瑠璃が落とすしかない。

斬りおろし、振り上げと繋げて尻尾を斬ろうとしてみるも、桐音を追って走ったり立ち止まったり、あるいは寄り付く瑠璃や茉莉らを振り払うために回転したりと、尻尾の動きが止まらない。

ならばと一旦距離を取り、気を込めて振り抜く。薙ぐように放たれた気刃は狙い通りに尻尾を斬るが、やはり深くまでは届かなかった。

「グルアアアアアッ!!」

「よく暴れる奴だね、少しは落ち着いてもらおう、かつー!」

ステツプ、すり足と繰り返して頭突きや尻尾を躲し続ける桐音が振り返りざまに迫ってきた顔へと斬り払い、続けて夜鳥【翼】を突き出しながら接近。喉の下を通り過ぎながら広げ、軽く跳躍してからの着地までの流れで体を捻りながらそれを振るって両足を切り払う。

すると足のダメージが溜まっていたのか、リオレイア亜種が転倒してしまった。

それからの彼らの行動は速い。

茉莉は顔へと回り込んでインペリアルガーダーのギミックを始動させて引き金を引き絞り、エネルギーを溜めだす。そのまま身構えて狙いを定め、ガンランスの最大攻撃である竜撃砲を放射。

凄まじい爆発が顔から首へと続くように炸裂していった。

瑠璃はこれを逃さずまた気刃斬りを行使する。今度は狙い通り尻尾を連続で斬つていき、錬気を溜めながらダメージを重ねるが、それでも尻尾は切れない。だが甲殻が剥がされ、肉が見え始めるところまでダメージを与えることに成功した。

十兵衛はまた膝をついてチツプからベルトリンクを伸ばし、炎戈銃ブレイズヘルへと徹甲榴弾LⅴIを自動装填していく。

頭は茉莉が攻撃を仕掛けているため狙うのは翼だ。これにダメージを与えようと狙

いを定め、次々と引き金を引いていく。狙い通りに弾はもがき続ける翼へと命中し、爆発を繰り返していった。

最後に桐音がまた鬼人化を発動させ、がら空きになっっている腹へと乱舞を行使する。双剣の中でも一番の連撃ではあるが、隙だらけになるため使いどころを選ばなければならぬ攻撃だ。だが今のようには敵が動けないならば話は別。

今まで以上の素早い速度で夜鳥「翼」が振るわれ、見る見るうちにリオレイア亜種の腹が傷ついていき、肉を露出させていく。

まさに一方的な展開。このままいけば討伐は近いか、と思われたが、リオレイア亜種は何とか起き上り、大きく息を吸いこんで、

「グルオオオオオオオオアアアアアアアア!!」

凄まじい怒号を上げた。森に響き渡る怒号にたまらず瑠璃達が耳を塞ぐが、高級耳栓を発動させている十兵衛だけは影響を受けず、ポーチに手を伸ばして閃光玉を取り出し、「閃光玉使うツス!」と叫ぶとリオレイア亜種の視界に収めるように投擲する。

普段の見た目や高い声に似合わない強肩から投擲された閃光玉は高速で空を切り、リオレイア亜種の視界に飛び込むと強い光を発生させた。

だがリオレイア亜種はそれから視線を外し、それだけでなく桐音を吹き飛ばすように翼を飛ばたかせながら背後に飛ぶ。その振り向きと移動により閃光玉の影響を受けず、

三人から距離を取り、逆に十兵衛には後退しながら接近する形になる。

「ちよ、ま………っ!？」

思わぬ行動に十兵衛は息を呑み、何とか距離を取ろうと移動しようとしたが、それを知ってか知らずかりオレイア亜種は更に強く翼を羽ばたかせながら転進し、十兵衛の側面に回り込む。

「グルアアアウツ！」

それに続けるように空中で回転し、サマーソルトを放ってきた。

「なっ………く………!？」

咄嗟に炎戈銃ブレイズヘルを放り投げて両腕で体を庇ったが、それでサマーソルトの威力を殺せるわけじゃない。十兵衛の体は宙を舞い、吹き飛ばされてしまった。

「十兵衛ッ！」

桐音が叫び、彼を救出するために飛び出していく。それに続いて瑠璃も走り出し、これ以上の追撃を許さないように、リオレイア亜種の気を引かなければならないと斬りこんでいく。

重装備である茉莉も彼女なりの速さで追いかけてきたが、はつとした顔で空を見上げる。

何かが迫ってきているような気配を感じ取ったのだ。

この森はリオレイア亜種の殺気と気迫によつて重いものになっているが、それに追加するように重たい空気が入り込み始めている。

(……まさか、来る……!?)

東方のリオ夫婦の特徴。

つがいで討伐するならば覚えておかなければならない事。

夫婦の絆は強く、片方が吼えれば片方はそれを感じとり、駆けつける。

「————アアアアアアアアア!!」

西の空から天に伸びる枝葉をへし折り、森の悲鳴を生み出しながら蒼い影がエリア5へと乱入してきた。それはリオレイア亜種へと迫る桐音と瑠璃を狙つて降下していき、反応した桐音が離れた所で転がっている炎戈銃ブレイズヘルを回収しながら勢いよく飛び退く。

瑠璃もまた何とか急ブレーキをかけながら翼を広げ、背後へと跳ぶ事で蒼い影に轢かれる事はなかった。

「チツ……こんな時に合流か。間が悪いってもんだぜ」

勢いをつけて滑空してきたため数メートル走つてブレーキをかけ、振り返つたそれは辺りを見回す。

この地によつて来たのは四人。それが妻を傷つけた。それもかなりの頻度で傷つけ

たようだ。彼女の体は瀕死とまではいかないがボロボロになっている。

「グルルルル……！」

沸々と湧き上がる怒りにそれは青い瞳をぎらぎらと輝かせながら殺意を振りまき始める。

蒼火竜、リオレウス亜種、リオソウル。

これが奴の名だ。

原種が褐色の甲殻をしているに対し、それは夜空のような蒼い甲殻に覆われている。原種以上に飛行能力が高く、主に空中からの攻撃を得意とするのが特徴だ。そのバリエーションは原種以上であり、様々な形で獲物へと奇襲を仕掛けて弱らせていく事を得意としている。

それを見せるようにリオレウス亜種は軽く跳んで羽ばたきだし、低空飛行を開始する。それに合わせてリオレイア亜種が息を吸いこみだし、数歩下がりはした。

これはまずいとばかりに桐音が何とか起き上ろうとしている十兵衛へと駆け寄っていく。

「轟氣、纏まとい！」

その際独り言を呟くような声でそう口にし、オレンジ色の気が彼女を包み込んでいった。そのまま十兵衛を抱え上げ、「一時離脱するよ！」と瑠璃と茉莉へと叫ぶ。ディアブ



ロウシリーズは重量があるはずだし、それに加えて十兵衛の体重も合わさっているはずだが、それでも彼女は片手で抱え上げている。

凄まじい怪力だ。まるでどこかの「紅い悪魔」のようだ、と思わないでもないがそれを口にせず、それに領いてそれぞれエリア6とエリア4に向かって走り出す。

だがそれを逃す二頭ではない。

溜めこんだエネルギーを解放するようにリオレイア種が今まで以上のブレスを吐き出す。それは桐音へと向かっていき、走り出した彼女の背後に着弾し、その周囲に激しい爆発を起こした。

振り返らず桐音は真つ直ぐにエリア4へと向かうが、それに回り込むようにリオレイア亜種が低空飛行しながら接近。体勢を立て直しながら足の爪を逆立てて桐音へと連続的にキックを仕掛ける。

「邪魔すんじゃないー!」

横に飛び退き、回避するがリオレイアス亜種はそれでも逃さないように軽く上昇すると、勢いをつけて滑空する。妻を傷つけた者らを許しはせず、逃しもしない。その意志が表れる執拗な追跡だったが、桐音はまたそれを躲して横を通り抜けていく。

そうして何とかエリア4へと逃げ切る事が出来た。

一方瑠璃と茉莉は一緒になって走り、エリア6へと向かっていく。ブレスを吐き終え

たりオレイア亜種は桐音をリオレウス亜種へと任せ、自分はこの二人を追う事にしたらしい。

二人に向き直ると強く地を蹴って疾走します。

逃げる二人を狙って方向も修正し、カーブしながら追跡するが、茉莉の手から軽く放られた閃光玉が強い光を発生させてリオレイア亜種の目を潰す。その光にたまらずリオレイア亜種の足が止まり、苦悶の声を上げてもがきます。

その声に反応してリオレウス亜種が振り返り、怒りの声を上げて数メートル走って宙へと上がって滑空しますが、その頃には既に二人の姿はエリア6へと消えていた。

背後からまたリオレウス亜種の声があるが、振り返るようなことはしなかった。

エリア6からエリア7を経由し、エリア4へとやってきた二人は崩れた家の陰で十兵衛の手当てをしている桐音を発見し、彼女らの下へと向かっていく。ディアブロUガードを外し、その下にある両腕には回復薬を浸した布と包帯が巻かれていた。

毒の棘はディアブロUガードが防いだようで十兵衛自身に毒は注入されていないらしく、それが救いだっただろう。それがなければ少しまずいことになっていたらしい。

また炎戈銃ブレイズヘルを手にしたままならば破壊され、それだけでなく炎戈銃ブレイズヘルを突き抜けて十兵衛に致命傷を与えられていた事だろう。咄嗟にそれを放つて防御した十兵衛の判断は正しかったようだ。

そして今、十兵衛は手当てを終えて休んでいる。回復薬を飲んで体を休ませる事で腕の回復を促しているのだ。

「……すいません」

「気にすることはないさ。生きていられるだけでも良し。今は休みな」

今才重種夫婦は一つのエリアに集まっている。

一頭だけならば問題ないが、二頭揃っているとなれば話は別だ。四人いるとはいえ二頭を相手にするのは難しい。なにせこちらは瑠璃と茉莉という少し困ったものがある。全員が上位装備ならばあるいはその選択肢もとつただろうが、今回はその選択肢は除外される。

二頭が別々の行動をとり、時に思わぬ方向から攻撃が飛んで来れば大ダメージを負う事になる。一人が倒ればドミノ倒しのように戦線が瓦解する。そうなれば待つているのは全滅という言葉。

故に各個撃破が望ましい。

今は二頭が再び分かれるのを待つしかなかった。

つまり今は空いた時間。これを利用して十兵衛は体力回復に努め、桐音達も体勢を立て直す時間に当てることにする。

桐音は夜鳥【翼】に砥石を当てて落ちた切れ味を戻していく。双剣は手数が多い事が

売りではあるが、その分切れ味低下の速さも上がってしまう。そのため砥石を使う頻度が多いのが難点だ。

同じように瑠璃と茉莉も砥石を使って切れ味を戻し、茉莉はインペリアルガーダーに新しい弾薬を装填して背中に戻した。

それを終えると瑠璃は先ほどのリオレイア亜種について訊いてみる事にした。原種に見た事のない行動を改めて確認するためだ。

「ああ、斜線に通るサマーソルトか。確かにそれは亜種に見られる行動だね。縦に回る通常のサマーソルトを警戒した相手にこそ引つかかるサマーソルト。それだけじゃないね。低空飛行をして素早く回り込んでからのサマーソルトも使ってくる。……さつき十兵衛にやったあれだね」

とにかくチャンスがあればサマーソルトを行使するという事か。それだけでなく嘯みつきでも口元に火の粉を集めて着火させながらやる事で、嘯みつきが外れようとも爆発の連鎖で吹き飛ばしてくる。

もちろん陸の女王という異名通り、地上ではその脚力を以ってして疾走を繰り返して獲物を追いかけて、離れば火球のブレスを放ってくる。先ほどは一方的に攻めていたが、そうでなければこれだけ危険な相手なのだ。

それに対しリオレイア亜種は空中戦を得意とする。

原種にない行動としてとにかく低空飛行を主軸に行動するとの事だ。

滑空から転進、そこからのブレスや毒爪のキック、急襲などと仕掛けてくるし、嘯みつきもリオレイア亜種と同じく火の粉を散らして連続爆発もする。ガンナーならばただの的になるだろうといえはそうでもなく、勢いをつけての滑空、キックもしかけてくるため気を抜けない。

また原種に比べて尻尾が異様に硬くなっているらしく、切断しようと思っても少々厳しいかもしれないらしい。

「それで瑠璃？ 十兵衛とは打ち解けられたのかい？」

「んー……まあ、普通に話せるようにはなっただと思うわよ」

「おー、それはよかったですよ。少し心配していたのですが、何よりです」

休んでいる十兵衛の傍でそんな事を話す三人。

確かに気になる事ではあるようだが、ここで訊くか、と思わないでもない瑠璃だった。ちらつと十兵衛を見るも骸に隠されているため何を考えているのかわからない。仮眠をしているのか、ただ沈黙を守っているのかも。

そう思っていると桐音がとんとん、と軽くスカルSヘッドを叩き、

「話せたんだって？」

「……うつつ。気づけば何とか……」

「よう頑張ったじゃねえか。その調子で話していこうぜ」

それはまるで頑張った弟を褒める姉のような光景だった。実の弟には殺意を向けるのに、弟のような十兵衛にはそういう風に振る舞う桐音。少し奇妙なものだがそれも仕方のない事なのかもしれない。

いや、弟には向けられなかつた愛情を十兵衛に向けているだけなのかもしれない。その桐音の心情はわからないが、もしかすると当たっているかもしれない。

そうしていると、茉莉が空を見上げてぽつりと呟く。

「……動きましたね」

エリア5にいた一つの気配がゆっくりと空へと上がっていくのを感じ取ったのだ。それは真つ直ぐにこのエリアへと向かってきている。それに続いてもう一つの気配も上がってくると、同じようにこちらに向かってくる。

どうやら離れる気はないらしい。

まずい事になったか、と思わないでもないが、こういう時のための道具は存在する。

十兵衛が傍らに置いてあつた炎戈銃ブレイズヘルを手にして腰に掛けつつ立ち上がり、ポーチから一つの玉を取り出した。

「……おいらがこやし玉をぶつけるッス。分散したところを姉御達が叩いていくッス」

「ま、それしかないな。同時に来るってんなら無理やり分散させるしかない。あたいが

また斬りこんで気を引く。その隙にレウスの方にこやし玉を頼むぜ」

「了解ッス」

残すのはリオレイア亜種。体力を減らしているため先に討伐できそうな方を残し、一気に片をつける。そうすればつがい討伐において懸念すべき事はなくなる。

打ち合わせしている間に、空から蒼い影が降りてくるのが見えた。

リオレウス亜種だ。

それは地上を見回しながら降下しており、桐音達を見つけると唸り声を上げ始める。そのまま着地していくのかと思いきや、いきなり力を込めながら数度羽ばたき、一気に急降下してきたではないか。

当然このまま黙って突っ立っているわけにはいかない。それぞれ散開して急襲を避けると、すぐに桐音が夜鳥【翼】を抜いて着地していくリオレウス亜種へと向かっていく。

続けて空からリオレイア亜種が降下体勢に入っていく、それを見越して瑠璃と茉莉が降下地点付近で待機し、射程内に入ったところで茉莉がインペリアルガーダーを斬り上げて砲撃を入れる。

また翼にダメージが蓄積していたようでその攻撃によって墜落してしまった。

それを見たりオレウス亜種は大きく息を吸いこみ、





恐らく危機に瀕している夫を助けるために疾走したのだろう。それにより自然とリオルス亜種の近くにいる十兵衛に向かうように見えてしまった。慌てて瑠璃が翼を広げて飛行し、後を追うがリオレイア亜種は十兵衛をついでに轢くかのように疾走を止めない。

「くっ……そらっ！」

咄嗟にリオレイア亜種へとこやし玉をぶつけながら逃げるように後ろに跳ぶ。顔へとぶつけられたきつい臭いのするそれにたまらず悲鳴を上げながら仰け反り、首を振って臭いから解放されようとするもそんな事では臭いは消えない。

そのまま翼を広げて空へと舞い上がり、エリアから離れていった。彼女は逃げていたが、怒り状態になっていりオレウス亜種はそのまま十兵衛へと襲い掛かっていく。だが瑠璃が追い付き、その翼へと気刃を放つて奴もまた落とそうとするがダメージが足りずそうならない。

しかし一時的に気を引く事は出来た。瞳が十兵衛から瑠璃へと向けられ、ぐるんと向きを変えて瑠璃へと向き直る。それだけでなくゆっくりと上昇していき、上空から火球を落としてきた。

「狙われているならそれでいい。これくらいの攻撃など当たる事なんてない。」

その間に十兵衛が十分距離を取り、背中にかけている炎戈銃ブレイズヘルを抜いて弾

丸を装填した。狙いを定めていると火球を撃ち終え、降下体勢に入っているリオレウス亜種が見える。

その背中に向かって引き金を引き、空を切つて放たれる弾丸がそこに着弾する。するとそこを中心として周囲が連続して爆発を引き起こした。

拡散弾だ。徹甲榴弾と同じく着弾後に爆発を起こす効果を秘めた弾丸であり、こちらは着弾点から周囲に爆発を起こす効果を持つ。もちろん弾丸の中でも威力が高いが反動も強く、一度に装填する数が少ないという特徴を持っているため多用は出来ない。

素早く装填を繰り返して撃ち続けていると、ついにダメージが蓄積したのかりオレウス亜種が勢いよく落下してきた。

好機とばかりに一齐に桐音と瑠璃が接近していき、桐音は尻尾に向かって高速で連撃を叩き込んでいく。それに対し瑠璃は腹に回つて気刃斬りをお見舞いしていく。時間が経つてしまっているために溜めこんだ錬気が消えてしまっている。ここでまたそれを取り戻し、威力を上げていかなければならない。

それは桐音も同じであり、失われた鬼人エネルギーを補充するように鬼人化を行使し、乱舞で尻尾切断のためのダメージを蓄積させていく。

茉莉はまた顔へと回り込み、同じように時間が経っているため先ほど撃った竜撃砲の排熱が終了しているのを好機とし、またしても初撃から全力で叩き込む。



ンランスでは少ししか詰められない。

「グルルルル……！」

唸り声を上げながらリオレイス亜種は低空飛行のまま上昇していき、完全にエリアを離脱していく体勢に入ってしまった。舌打ちしながら見守る桐音達を振り切るように背を向けると、南西の方角へと消えていく。

「逃げられたか」

奴にとつては一時撤退、体勢を立て直すための逃亡か。それと同時にリオレイス亜種と合流するといったところだろうか。

それにしてもやつぱり四人揃えば楽だ。チャンスさえ生まれれば一気に攻撃し、体力をこつそり削る事が出来る。

この調子でいけば討伐する事は容易だろう。二頭揃えばこやし玉で片方に退場願ひ、一頭に集中して攻撃すればいいのだから。

移動しようとしたところで十兵衛が少し待ったをかける。

ポーチから何かを取り出して地べたに座り、調査を始めたのだ。

「徹甲榴弾が消費されたツスからね。今の内に補充しておかないといけないツス」

ベルトリンクで自動装填されていくため、気づけば全弾撃ち終えていたということもざらだ。徹甲榴弾Lv1、2共に規定で決められた数まで調査するとそれらをチップへ

と吸い込ませて準備完了。

「お待たせしたツス」

それに領き、気配を探つてエリア7へと向かい、そこから更にエリア9へと移動する。そこに二つの気配があつたので恐らくそこで休んでいると思われる。

だがそれにしては妙だつた。

ぬかるんだ地面を歩きながら気配を探り続ける桐音と茉莉は、揃つて微妙な表情を浮かべている。

「何やらぶつかり合っているかのような気配に思えるのですが」

「そうだね。明らかに敵意をむき出しにしているよ。夫婦喧嘩……にしては片方の気配がおかしい。これは……めんどろな事になつたかもしれないぜ？」

先ほどの戦いでリオレウス亜種、リオレイア亜種の気配は覚えている。それを照らし合わせればこの先にどっちがいるのかまでは判別可能だ。だが片方はリオレイア亜種というのは間違いないが、もう片方がリオレウス亜種とは違う気配をしているのだ。

それがぶつかり合っている。

これは一体どういう事なのか。

そこで茉莉は先ほど見た手がかりを思い出した。

あのエリアには森の木々を薙ぎ倒して何かが通つた跡があつた。もしかするとその

主が戻ってきたのではないだろうか。ご丁寧にあそこはリオ亜種夫婦の巢の隣。二頭がない隙を狙って何かを狙ってやってきたのならば。

あそこに何で卵がなかったのか。もしかするとその通った主が卵を食べてしまったのならば。

逃げ出したその何かを追ってリオレイア亜種が攻撃を仕掛け、しかし逃亡し、それを追って二頭ともこの狩猟エリアを離れていったのだとすれば。

どうして最初に見回った時にどちらもないなかった理由になるのではないだろうか。

「乱入って事？」

「そうなりますね。元々依頼書にも不安定、って書いてありましたし、何もおかしい事はないですよ。想定しうる出来事の一つです。……救いがあるとするならば、気配からしてあのやばい奴ではないという事ですかね」

あれが乱入してきたならば対処など不可能。不本意ではあるが撤退を選択するしかない。だがどうやらあの禍々しく荒々しい気を感じないのであれではないということだけはわかる。

四人は静かにエリア9へと入っていき、草むらの影に隠れて様子を窺ってみる。

そこには確かに二頭の大型モンスターが存在していた。

一つはリオレイア亜種。茉莉と桐音が感じた通りの存在が激しい声を上げながら攻

撃を仕掛けている。

もう一つは大型の蛇だった。

焦げ茶色の鱗は所々斑模様が存在し、顔の鱗の一部が鋭く尖って伸びている。尻尾の先の周囲の鱗もまた掛け合わさる事で強固になり、長く鋭く伸びる事であたかも刃のようになっている。

毒矛蛇グレイハブ。

猛毒を持つ獰猛な大蛇として知られる存在であり、森に住まう蛇竜種がそこにいた。

## 20話

「グレイハブ……か。なんだってこんな所にいるのよ……」

「まあ一応森があるのでいいこともないですが、ここで現れる事になるとは思いませんでしたね」

草むらに身を隠しながら二頭の戦いを見守りつつそんな事を言う。四人には気づいておらず、二頭ともお互い牙を剥きあっている。

リオレイア亜種が火球を撃ち出せばグレイハブに着弾し、しかしそれで止まらずグレイハブがリオレイア亜種へと噛みつきにかかる。顔を逸らして躲すが翼に噛みつき、「シャルルルアアアア！」と声を張り上げて再度体を伸ばしてリオレイア亜種の体に巻きつこうとした。

が、強く火球を撃ち出してグレイハブを仰け反らせつつ、リオレイア亜種は背後に飛ぶ。そのまま羽ばたいて低空飛行体勢に入り、そんなリオレイア亜種に向かって鎌首をもたげながらまたグレイハブは威嚇する。

そんな奴の全身を見てみればなかなか大きい。普通に想定する大蛇よりも大きいだ



ろう。比較するならば海竜種、ラギアクルスやアグナコトルくらいの大きさだ。

「……アグナより少し長いくらいツスね。なかなか育っているタイプツスよ」

「あのまま潰し合っていれば漁夫の利で持つて行けそうだけど、放っておくのか？」

「そうした方がいいかもしれないですね。幸い気づかれていないようですし。どちらかが、あるいはどちらも瀕死になるまで見守っていきましょうか」

「……漁夫の利か……ま、戦術の一つとしてはいいかもしれないけど、つまらないなあ……」

「我慢してくださいね。こうでもしないと、もしかすると三頭纏めて相手にするかもしれないんですから。今の私達にそんな余裕はないでしょう？」

ぼつりと漏らした桐音の一言に茉莉が苦笑してたしなめる。戦いを好む彼女としては弱っていくのを待つてから叩くのは性分じゃないようだが、今回ばかりはそれを受け入れてもらわねばならない。

「わかっているよ。じつと待つさ」

威嚇していたグレイハブは軽く首を引くと、勢いよく体を伸ばしてリオレイア亜種へと噛みつく。それを体を捻って躲し、しかしその際に頬から伸びる刃が薄くリオレイア亜種を切り裂いた。反撃として足で切り裂いていくが、すぐに首を戻して鎌首をもたげる体勢に戻す。

今度は長い尻尾を振り回し、その先にある刃でリオレイア亜種を斬ろうとするも、またリオレイア亜種はグレイハブの側面へと回り込んでいく。が、振り回すだけでなくぐつと引いて力を溜め、勢いよく伸ばす事でその翼を貫いた。

「グオオオオツ!？」

「いった……っ!」

十兵衛が息を呑みながら小さな声を漏らす。自分達が傷つけていた事で翼の耐久は落ちていく。そんな所に鋭い刃を突き入れれば容易に貫通するだろう。苦悶の声を漏らしながらリオレイア亜種が何とかそれを抜こうともがくが突き入れられた尻尾は抜けない。

グレイハブが舌を出し入れしながら啣うように小さく鳴き、続けて隙だらけなその首へと喰らいつこうとした。

しかし自分に迫るその顔を弾くように火球を一発お見舞いし、怯んだところで連続して火球を撃ち出していく。だがぎらりと瞳が輝いたかと思うと火球を受けながらも体を伸ばしてリオレイア亜種の首に喰らいついた。

ぎりぎりと言が食い込み、リオレイア亜種が悲鳴を上げる。だがそれでも足でグレイハブを蹴り上げたりして抵抗し、それだけでなく口から火花を散らして連続で爆発を起こしながらグレイハブへと喰らいつく。

リオレイア亜種の牙だけでなく体を焼かれる痛みも加わり、グレイハブがたまらず離れてしまった。その隙をついて何とか尻尾からも抜け出し、距離を取るように下がりがらまた口元に火を集め、先ほど以上の大ききをした火炎弾が撃ち出される。

それはグレイハブに着弾すると、その周囲に激しい爆発を起こす炎を巻き上げるものだった。その熱さに悲鳴を上げ、体を持ち上げ、震わせて熱さから逃れようとする。

更に追撃を仕掛けようとしたリオレイア亜種だったが、突如その体がよろめいてしまった。苦悶の声を漏らして何とか体を支えようとしているようだが、その表情は辛さを感じさせる。

「毒を打ち込まれたか」

グレイハブの牙には毒が染み出ている。口の近くにある毒腺から漏れた毒液を注入し、獲物を弱らせるのだ。リオレイア亜種は尻尾の棘から毒を打ち込むが、彼女自身に別の毒が打ち込まれれば毒状態に陥る事もある。

そしてグレイハブの毒はただの毒ではなく猛毒だ。そうなれば著しく体力を奪われていく。だがグレイハブ自身もリオレイア亜種の火炎によってかなり体力を消耗しただろう。それだけでなくあの焦げ茶色の鱗に転々と火傷を負っている。

しかし有利なのはグレイハブの方か。こうしている間もリオレイア亜種は体力が減っていくのだから。

「シャルルルル……!」

威嚇しながらまた攻撃を仕掛けるタイミングを窺うグレイハブに、翼を軽く羽ばたかせながら何かをしようとするリオレイア亜種。だがその体の動きは遅く、こうしている間も弱っていくようだ。

しかしリオレイア亜種には彼がいた。

南の方角からリオレウス亜種が飛来してきたのだ。

妻の危機に颯爽と現れ、突然やつて来た新たな敵に驚くグレイハブへと急襲を仕掛けていく。その顔へと連続してキックを仕掛けて強固な鱗を切り裂いていく。

「シャアアアアアアアアッ!」

頭上を通り過ぎながらまた羽ばたいて旋回し、帰ってくる今度は火球を降らせていく。そうして気を引いている間にリオレイア亜種が飛び上がり、巣に向かって飛んでいく。それを見送った桐音達は視線を合わせ、静かに移動を開始していく。

恐らくリオレイア亜種は巣で眠り、体力を回復する算段だろう。リオレウス亜種はそれまでの時間稼ぎを務めるつもりだ。

奴らの背後の森を通るのもいいが、グレイハブの長い体が森へと一部侵入している。もしかすると戦いに巻き込まれ、気づかれる可能性がある。しかし速さを求めるならばそこを通り、一気に巣へと侵入するしかない。

「グルアアアアアア!!」

「シャルアアアアアア!!」

両者ともに吼え、グレイハブは尻尾を振るってリオレウス亜種へと斬りかかる。だがリオレイア亜種と違って空中で行動する事得意とするリオレウス亜種は、巧みに翼を羽ばたかせて回避し、火急を撃ち出していく。

それが着弾し、怯んだ隙を狙ってまた飛びかかり、その体を抑えつけるようにその足をねじ込んで食い込ませていく。

その激しい動きにグレイハブとリオレウス亜種の体が森へとなだれ込み、木々を薙ぎ倒していった。

危険だ。

あそこを通るのはやめた方がいい。

それが全員の思いであり、回り道をするしかないと静かに回れ右をしてエリア7へと戻っていく。そこからエリア6へと南下し、北口からエリア8へと移動。

薄暗い洞窟内を進めば、桜色の姿が丸くなっているのが見えた。

近づけば静かな寝息が聞こえてくる。

予想通りリオレイア亜種がそこで眠って体力を回復していた。

これ以上の好機はない。ここで一気に仕留めてしまおう。

「初撃は任せな。それからはさつきと同じようにやっていけばいい」

「了解」

「はい」

「うつつ」

夜鳥【翼】を抜きながら顔へと回り込みつつ桐音がそう言えば、三人は頷きながら各々武器を抜く。すうつと息を吸いこんで眠っているリオレイア亜種の顔面へと斬ろうとした時、頭上から凄まじい怒号が聞こえてくる。

はっとして見上げればリオレイア亜種が四人を睨みつけながら降下していた。その体は先ほど見た時よりも傷ついているようだが弱っているという訳ではないらしい。いや、それよりもどうしてこっちに来た？

奴はグレイハブと戦っていたはずだ。

軽く気配を探ってみると向こうに大型モンスターの気配はない。逃げたのか？

更に付けくわえれば、

「——ッ!?!」

リオレイア亜種の怒号に反応したのかりオレイア亜種が目覚まし、青い瞳が桐音の視線とぶつかり合う。その瞬間桐音は背後に飛び退き、リオレイア亜種は桐音がいた場所へと噛みつきながら体を起こしていった。

そうしている間にリオレウス亜種がリオレイア亜種の傍まで降り、低空飛行をしながら息を吸いこんで再び咆哮を上げた。洞窟内に奴の声が反響して響きあい、たまらず瑠璃達が耳を塞いでしまう。

「グルアアアアアッ！」

そのままリオレウス亜種は、近くにいた瑠璃に向かって少し上昇すると滑空を仕掛けていく。咆哮を受けた事で体が硬直していた瑠璃は反応し、走り出そうとしたが足が動かなかった。

またヒドウンサーベルを盾にしながら気を使って防御しようとした時、横から飛び出してきた十兵衛に抱えられながら宙を舞う。

「うっ、く……！」

「なっ……十兵衛?！」

驚きながら視界の中で十兵衛の背後すれすれを通り過ぎていくリオレウス亜種を見、宙で回転する事で自分が地面を滑っていく十兵衛を見下ろす。確かに位置的には十兵衛は近くにいたが、あそこから疾走してきたというのか。高級耳栓のおかげで咆哮の影響を受けない十兵衛ならば可能だろうが……。

そんな事を考えながら十兵衛から離れると、彼もリオレウス亜種の動きを見つめながら「大丈夫ツスか？」と訊いてくる。

「え、ええ……何とか。ありがと、十兵衛」

「いいツスよ。大丈夫ならなによりツス。今回、おいらは瑠璃さんのコンビツスからね。可能なら瑠璃さんを守ってみせるツスよ」

そう言つて十兵衛は小さく笑つて見せた。

よく見ればわかるが、そのスカルSヘッドは十兵衛の表情……顔の動きに合わせて僅かに動いているのだ。口を開けば骸の口も開くし、渋い表情を浮かべれば骸も目や口が動いて微妙な表情を浮かべる。

そして今、骸の表情は弱々しくも確かに口が微笑を浮かべているように見えた。

そんな十兵衛を見つめ、瑠璃は少しばかり顔をひきつらせながらも十兵衛の事を頼もしく思えてきた。ひきつらせるのは仕方がない、何せ見た目は本当に骸そのものなのだから。

でもそれを抜きにして、クエスト開始してからしばらく自分の事を怖がついていた彼が、自分の事を守つてくれたという点が驚きだった。

それだけでなく……あれ、なんだろうか、この感情は。小さいものだけど何かが生まれたような……。心臓が少し早く鼓動を刻んでいるが、たぶんこれはリオレウス亜種がすぐそこまで迫つていたことに対する驚きと恐怖によるものだろう。

そんな様子を離れた所でリオレイア亜種と相対している桐音と茉莉はちらちらと見



つめている。低く唸りを上げるリオレイア亜種をよそに二人は、

『……フラグ立った?』

そんな事を漏らしてしまう。思わず言葉がかぶってしまった、お互い横目で視線を合わせるが、リオレイア亜種が声を上げて突進を仕掛けてきたため回避行動に移る。

すれ違いざまに茉莉が尻尾めがけてインペリアルガーダーを突き上げて砲撃を一発撃ち込み、振り返ってくるリオレイア亜種に向き直りながら盾を構えてすり足で前進していく。

反撃として火球が飛んでくるが盾で防ぎ、さらに前進。その隙に横を桐音が高速で通り過ぎ、顔から首、足へと連続して斬りこみつつ、飛び上がりながら回転する事で尻尾切断へと近づいていった。

一方リオレイウス亜種はというと、十兵衛の銃撃の嵐にあっていた。高速で撃ち出されていく通常弾Lv2によって動きを阻害されており、それでも火球を撃ち出して反撃していくが回避される。

その隙について瑠璃がポーチからこやし玉を取り出し、リオレイウス亜種へとぶつけた。またあの臭いが漂い、その臭いにたまらずリオレイウス亜種が首を振りだし、もがいていく。

ここで銃撃を止めて様子を見守るが、リオレイウス亜種はまた咆哮を上げて十兵衛へと

滑空していった。このエリアから離れる様子がない。そう察知しながら滑空をやり過ごし、ポーチから今度は閃光玉を取り出した。

「閃光使うッス！」

と叫んで滑空を途中で止めて振り返り、足を振り上げたところで閃光玉を放り投げ、強い光を発生させた。その光にたまらずリオレウス亜種が悲鳴をあげて墜落し、もがきだした。

それを見たりオレイア亜種が今度は怒りの咆哮を上げ、十兵衛の方へと走り出す。今度は十兵衛もそれに気づき、しかしその背後でまた瑠璃が閃光玉を投擲し、強い光を発生させた。

それによってリオレイア亜種が途中で止まり、もがき始めた。

これをチャンスとし、十兵衛がリオレウス亜種の頭に照準を合わせてしやがみこみ、チップからベルトリンクを伸ばして弾を装填していきながら引き金を引いていく。放たれるのは徹甲榴弾Lv2。連続して九発の弾丸が放たれ、リオレウス亜種の頭へと着弾、爆発する。

「ゴアアアアアアッツ?!」

悲鳴を上げてまたリオレウス亜種が仰け反り、しかし力が抜けたように倒れ伏してもがきだした。眩暈状態へと陥ったのだ。それを好機として瑠璃がヒドウンサーベルを

振るって斬りこんでいき、十兵衛も貫通弾Lv2を装填して頭から突き抜けるように狙って引き金を引いていく。

向こうでも閃光玉の影響で立ち止まり、その場で回転しながら寄ってくる桐音達を振り払おうとするも、容易に躲しながら斬りこんでいく二人の姿が見える。

桐音は足元を、茉莉はインペリアルガーダーを振り上げて何度か突き、砲撃してまた突きを繰り返して尻尾切断を試みている。ダメージが蓄積しているし、肉が露出しているためもう切れそうだろうと思いつながらインペリアルガーダーを突いていたが、ついにその骨を突き破り、溜め砲撃を一発入れて更に突き出せば尻尾はリオレイア亜種の体から切り離されてしまった。

「グアアアアアアアアアアアアッ!」

悲鳴を上げて飛び退き、もがきだすリオレイア亜種。長い尻尾は半分ほどまでなくなり、切断面から血が滴り落ちる。そんな彼女の悲鳴に反応したのか、かつとりオレウス亜種の目に力が戻り始め、唸り声を上げながら今まで以上に強く体を震わせて起き上る。

翼を広げながら大きく息を吸いこみ、またしても凄まじい怒号を上げた。それにリオウス亜種の傍で斬り続けていた瑠璃が影響を受け、硬直してしまう。

また高級耳栓のおかげでその影響を受けなかった十兵衛が、すかさず炎戈銃ブレイズ

ヘルを背中に戻すと、瑠璃に向かつて走り出す。また彼女を抱えて飛べば、リオレウス亜種が瑠璃に振り返りながら火球を撃ち出し、後ろに飛んで低空飛行を開始していた。

更に背後に下がりながらも一発火球を撃ち出し、地面に転がっている二人へと追撃を仕掛けるも、今度は瑠璃が十兵衛を引きながら回転し、難を逃れる。

そのまま起き上るも、いつの間にかリオレイア亜種が二人を睨んでおり、息を吸い込んで連続して火球を撃ち出してきた。

「くっ……い」

これは避けられない。避けたとしても横に撃ち出されている火球の直撃を貰う。

ならばと瑠璃が右手を振って火炎を呼び、薙ぐことで三発の火球を一斉に爆発させた。それにより熱風が二人に襲い掛かってくるが、それくらいという事はない。瑠璃は火竜の血があるし、十兵衛も炭鉱夫としての経験から熱い風など気にしない。

ここから離れる事で更なる追撃から逃れ、体勢を立て直す。

見れば茉莉が後ろに下がってきたりオレウス亜種の背後に回り込み、垂れさがっている尻尾へとインペリアルガーダーを突き入れていた。だがやはりというべきか、その尻尾は硬くなかなか刃を通さない。

ガンランスでは硬い敵を突くのは向いていない。それをするくらいならば砲撃して攻撃する方がいい。突き上げから叩き落としへと繋げてギミックを作動させ、引き金を

引いて装填している弾薬を一気に放出。

ガンランスのフルバースト機能だ。叩き落とす事で装填されている弾薬を全弾砲撃可能状態にし、一気に砲撃し攻撃する。その攻撃にたまらずリオレウス亜種が苦悶の声を漏らしたが、すぐに反転して火球を放って反撃した。

しかし盾を構えて防御し、その足へと刃を突き出して更に反撃。そんなリオレウス亜種の背後から桐音が気刃を放って攻撃をしかければ、それから逃れるように強く羽ばたきながら上昇していった。

そのままようやくエリアから離れるのかと思いきや、ぐんつと一気に急降下を仕掛けて桐音へと襲い掛かった。

「っ、そらっ!」

舌打ちしながら横に飛び、聳える岩の尖塔を蹴ってリオレウス亜種の横から襲い掛かっていく。まさかの奇襲にリオレウス亜種は反応出来ず、翼から斬られて背中に飛び乗られる。

「グアアアアッ、グルアアアアアアアッ!!」

「落ちなっ!」

一度両手を広げながら回転して気刃を放ち、そのまま暴れるリオレウス亜種から飛び退きながら後転しつつ、両翼に向かって二つの気刃を放つ。続けて着地しながら「迅気、

収束」と呟き、それに従つて夜鳥【翼】に夜色の気が纏われていった。

そしてリオレウス亜種はというと、桐音の一撃でバランスを崩したらしく墜落してしまふ。だがすぐに体勢を立て直し、桐音へと振り返つて飛びかかつていった。

翼を広げて全体重をかけて飛びかかるため逃げ道は狭まれている。しかし桐音は避けるのではなくむしろリオレウス亜種に向かつて突つ込んでいった。

補助するために側面に回り込んでいる茉莉が息を呑む中、夜鳥【翼】を交差させながら身構え、

「剣術が一、黒翼」

疾走していた彼女の姿が一瞬で消え去り、飛びかかっていたリオレウス亜種の足元から胸にかけて二つの黒い剣閃が走り抜ける。それに遅れて斬られた部分から勢いよく血が噴き出し、悲鳴を上げながらリオレウス亜種がまた墜落していった。

すかさず茉莉が駆け寄り、溜め砲撃を放つてから竜撃砲発射準備にかかる。エネルギーが収束し、腹から突き抜けるように照準を合わせ、引き絞つた引き金を離して一気に解放。

本日三発目の竜撃砲がリオレウス亜種へと襲い掛かった。

響き渡るリオレウス亜種の悲鳴。それに反応するリオレイア亜種だったが、向こうへと行かさないように瑠璃と十兵衛が立ちまわっている。こちらも瀕死状態という事に

は変わらない。

ここで仕留めなければならないとばかりに、瑠璃は少し強気に攻めていった。

「グルル……っ！」

そんな瑠璃を吹き飛ばすため、リオレイア亜種がまた数歩下がりがりながら力を溜め始める。サマーソルトの予備動作だ。以前ならばすぐに横へと逃げただろうが、斜線に動くサマーソルトを見ているため瑠璃はすり足で少しだけ横に移動する。

ギリギリまで見極めて避ける算段だ。縦に回転するのか、斜めに回転するのか、それを放つ手前まで引き付け、動いた瞬間に飛ぶ。今はこれしかない。

力を溜め終えたりリオレイア亜種の体が斜めに動いた瞬間、瑠璃は弾かれたように斜め前へと跳ぶ。そんな彼女の左側をリオレイア亜種の尻尾が通り過ぎ、斜めに回転したりオレイア亜種が強く羽ばたいて体勢を立て直していた。

受け身を取って立ち上がる瑠璃はすぐに振り返ってリオレイア亜種を睨む。その視線を受けてリオレイア亜種は瑠璃の後ろへと回り込むように飛行し、またサマーソルトを放つ。

だが尻尾が切り取られているためにリーチが短い。軽くバックステップするだけで回避できた。

また瑠璃に意識を向けているために十兵衛にとっては隙だらけも当然。貫通弾Lv

2を装填して引き金を引く事を繰り返し、攻撃を仕掛けている。

だが瑠璃にばかり意識を向けられても困る。少しだけ前進してリオレイア亜種の視界に入れば、先ほどから自分に攻撃を仕掛けている主を認識し、リオレイア亜種が自分に向かつて襲い掛かってくる。

それを横に跳んで回避し、散弾Lv2を装填して近距離からの銃撃を仕掛ける。複数の弾に分かれて襲い掛かる鉛玉に翼が連続して撃ち抜かれ、ついにリオレイア亜種も墜落してしまった。

「これで決めるッー！」

がら空きになっている腹から胸、首にかけて気刃斬り、大回転へと繋いで錬気を上げつつ鱗を剥がして肉を露出させ、血を嘔き出させる。そうして気を纏わせながら、その肉を狙ってヒドウンサーベルを刺突の構えで大地を踏みしめる。

「閃剣・角穿衝！」  
かくせんしゅう

闘気を込めた一突き。それはリオレイア亜種の胸を貫き、背中から衝撃と共に気の一部が貫通する程のものであった。まさに瑠璃の全力を込めた最後の一撃。

「グガ、ガガ……グ……」

苦しげな声を漏らすリオレイア亜種ではあったが、硬い甲殻をなくして肉を露出させ、瀕死の彼女にこの一撃は耐えきれぬものではなかった。ヒドウンサーベルを抜けば



そこから血が勢いよく噴きだし、それをとどめとしてその命が消えてしまう。

それに続くかのように茉莉の方もリオレウス亜種へと引導を渡す事になる。竜撃砲の反動で仰け反ってしまった茉莉ではあったが、すぐにふんばってインペリアルガーダーを構えなおし、よろめきながらも起き上るリオレウス亜種へとインペリアルガーダーを突き出していく。

桐音の一撃に竜撃砲の一撃が加わる事でリオレウス亜種の体はボロボロだった。胸から腹にかけては出血がひどく、肉が露出している部分が多い。そこを狙ってインペリアルガーダーを突き入れ、砲撃を入れていく。

桐音もいつの間にか合流し、鬼人化をして一気に斬りかかっている。漆黒のオーラから赤いオーラへと切り替わり、力を収束して鬼人化を解除。鬼人強化へと移行すると「茉莉、離れてな。衝撃が伝わるよ」と体を挟んで向こうにいる茉莉に声を掛けた。

返事をして尻尾の方へと離れていく茉莉を確認する。そうして、脱力したまま夜鳥【翼】を握りしめ、

「——剣術が一、天業！」

構えたまま軽く跳躍し、同時に振り下ろしてからの斬り払い。振り下ろした際の一撃でひび割れている甲殻を完全に破壊し、露出されている肉が一文字に斬られて血を噴き出す。

それから繋げるように切り払えばその肉の奥まで剣閃が放たれ、衝撃が背中から内部へと伝わっていった。背骨を守る強固な鎧と肉の鎧に意味はなく、その二撃を受けた事で碎けてしまう。

「ゴア、アアアアア……ガッ、ハ……」

動く事もままならずリオレウス亜種の苦悶の声は長く続かなかつた。付着した血を払うように軽く振るつたときその命の火は消え果てた。

それを確認した桐音と茉莉が大きく息を吐き、それぞれ武器をしまった。

特に桐音は疲労が大きい。走り回って斬りこみ、囷としての役目を引き受けただけでなく、両方の相手をする事でギリギリの回避や剣術の行使で精神面でも消耗している。

顔には薄らと汗が浮かび、今も深呼吸を繰り返して気分を落ち着かせていた。

茉莉も防衛を固めて反撃する戦術をするとはいえ、ともに喰らえばただでは済まない中でよく危険な直撃を受けずに済んだものだろう。表には出さないが彼女もまた桐音ほどではないにしろ精神をすり減らしている。

それは瑠璃も同じであり、特にリオレイア亜種のサマーソルトを受けた事でより一層立ち回りに気をつけなければならなくなった。今までよく戦えたものだと思う。

そんな彼女をサポートし、ガンナーでありながら囷を買って出た十兵衛も疲労していた。スカルSヘッドの奥から微かに荒い息が聞こえてきている。何も知らなければか

なり怖いだろうが、元氣ドリンクを空けて飲んでいる彼を責める事なんて出来ない。逆によく頑張ってくれたと感謝しなければならぬくらいだ。

さて、続いてこの二頭の素材の剥ぎ取りに取りかかろうとするが、もう一つやらねばならない事がある。

それはあのグレイハブの確認だ。

結局洞窟内へと侵入して行くことはなかったが、奴は一体どうなったのだろうか。

「少し様子を見てきます」と茉莉が歩きだし、それに桐音もついて行こうとしたが「あなたは休んでいて。あたしがついていくから」と瑠璃に止められた。十兵衛も「そうツス。姉御は休んでくださいツス」と止め、仕方ないな、とため息をつけて桐音はここに留まる事にした。

エリア9の入口、すなわち洞窟の出口からそつと様子を窺ってみると、奥の方で何かが倒れているのが見えた。静かにそれに近づいてみると、それはグレイハブだという事がわかった。

「……死んでますね。恐らくリオレウス亜種によってやられたのでしょうか」

生気をなくしているグレイハブの体の所々が火球によって焼け焦げ、爪によって引き裂かれていた。特に爪による傷が多いのがわかる。リオレウス亜種の足の爪から染み出る毒がかなりグレイハブの体を侵したのではないだろうか。

ということとはリオレウス亜種は、グレイハブを始末した後で巢に戻ってきたという事か、と茉莉は納得した。

何にせよ三連戦がなかっただけでもよかった。これを桐音と十兵衛に伝えるべく二人は巢に戻っていき、報告する。それに二人もまた納得し、四人揃って剥ぎ取りを開始した。

リオレウス亜種、リオレイア亜種の素材は強固な防具になるし、高い力を秘めた武器にもなる。続いて尻尾を解体してみると逆鱗に紅玉を発見した。特に桐音は紅玉を手にしてその力や玉としての純度を重点的に確認している。

しばらくそれを観察していた桐音はふう、と息をついて

「……なかなかいい代物だな。あいつだったら放っておかないくらい、か」

と呟いて瑠璃に手渡してやる。驚く彼女に「武器にも防具にも使えるから有効活用しな」と笑いかけてやった。どうやら自分は使う予定がないので使うといい、という心意気か。

確かに瑠璃か茉莉ならば一式作る事も予定として立てられる。これを機会として上位装備を作れるのだ。特にリオソウルシリーズは耳栓がつく。太刀使いの自分としては欲しいところである。

確か一式揃えると発動するスキルは——耳栓、見切り+2、業物、体力低下〔小〕だっ

たか、と思い返す。体力の方は装飾品をつければ問題ない。耳栓は美味しいし、業物もいい感じだ。これは作りたくなる一品だろう。

対してリオハートシリーズは火属性強化＋1、風圧【大】無効、火事場力＋1だったはず。火属性強化は火竜の力を使える自分達にはいいものだろう。風圧無効もそれなりにいいし、火事場力は追い詰められれば力を更に高められるスキルとしていいものだ。

どちらもそれなりに魅力的。作るならばどっちだろうと考えれば、瑠璃としてはリオソウルシリーズを選ぶ。

何せリオハートコイルはロングスカートのようなもので少し動きづらいのだ。軽快に動く事を良しとする瑠璃にとつてそれは邪魔でしかない。対してリオソウルコイルはミニスカートに近く、ある程度動きやすくはある。

機動面からしてもリオソウルシリーズの方が瑠璃には合っていた。

そう考えていると茉莉が近づいてきてそつと声を掛けてくる。

「リオソウル一式、作りたいんです？」

「……………え、あ、うん……………。上位装備作るいい機会だと思おうし、これだけ集めて報酬品でも揃ったら作ってみるのも手かなって」

「なるほど……………ではこれは瑠璃に差し上げましょう」

そう言つて茉莉は自分が取つたりオレイウス亜種の素材を瑠璃に手渡した。

「いいの?」

「ええ。その代わりといつてはなんですが——」

「レイア亜種の方はよこせて? いいわよ。一式、作るんでしょ?」

「おー、どうもですよ、瑠璃」

茉莉が言う前に自分が取つたりオレイア亜種の素材を纏めて茉莉へと手渡してやった。茉莉は特に驚く様子もなく感謝の言葉を述べる。表情があまり変わっていないが、確かに彼女は喜んでいようだった。

「ついでに爆炎袋も入れてあるから。これでインペリアルガーダーも強化できるでしょ?」

「おー、さすがですね。確かにこれで強化出来ます。ありがとうございますよ」

素材が揃つた事で武器も強化出来るし防具も新調できる。今度はよく見ればわかる程度に喜んでるのがわかった。そんな茉莉に微笑を浮かべる瑠璃はお礼を言われてまんざらでもない様子だ。

続けて四人は外に出るとグレイハブの素材も剥ぎ取つていく事にした。鱗や皮だけでなく牙、剣のように鋭い鱗、尾の先にある刃と使えるものは結構ある。また内部にある内臓を調べてみると、一つの物が見つかった。

「これはこれは……卵を呑み込んでいたようだね。こりやあの二頭に追い回されるわけだ」

竜の卵の残骸が内部から見つかり、これでどうしてあの二頭が巢にいなかったのか判明した。このグレイハブは食事のためにあの巢に入り込み、卵を全部呑み込んでいき、その現場をリオレイア亜種に見つかったのだろう。

怒りのあまりグレイハブへと攻撃を仕掛け、このエリア9で戦闘し、しかしそこにリオレイア亜種まで合流しては分が悪いとこの森を抜けて逃亡し、それを二頭揃って追いかけていった、といったところだろう。

だがグレイハブは逃げ切れ、見失ったりリオレイア亜種が一旦戻ってきたところで瑠璃達に見つかり、自分達との戦闘が開始されたというわけだ。

色々とご愁傷様、と言わざるを得ない。

グレイハブの素材も剥ぎ取り終えると、ギルドにクエスト達成の旨を伝えるため一行はベースキャンプへと戻っていくのだった。

その様子を眺めている影が一つ。

腕を組みながら崖の傍に生える大木にもたれかかり、眼下を見つめ続けるそれは迅雷。あの狩猟エリアの様子を見つめ、行われていた狩りの様子を見守っていたらしい。

鋭い眼光に宿る感情はわからない。いや、その引き締まった顔に感情が浮かんでいても怪しい。それほどまでに何を考えているのかわからないのだ。

しばらくそのままだった彼は小さく息をつき、

「……こんなものか」

と一言呟いた。

期待外れ、とでもいう風な声色であり、どうやら望むような結果は得られなかったらしい。

組んでいた腕を解くと軽く体を伸ばして崖に向かってゆっくりと歩き出す。

「いや、今回はあの二人の装備が弱かったせいか。つまりあれが全力ではない。見切りをつけるのはまだ早計、か」

呟きながらその身を投げ出し、遙かな先にある地上へと落下していく。だがその体が眩い光に包まれ、それに従って周囲に弾けるような音を鳴らして電光が迸りだした。

「いいだろう。次があるならばその時は全力を見せてもらおうか。今度は——遊ぶ暇もない敵が現れるといいな？ 娘っ子ども……！」

一際強い光が発せられると同時に弾け飛ぶような音を立てて光が霧散する。そこには既に迅雷の姿はなく、何かが森の中に落下する音と何かが高速で森を走り抜ける音が小さくなっていった。



## 21話

数日後、所変わってこちらは別の狩猟エリアとしてギルドに認定された溪流の近くの村。そこにある酒場に奇妙な人達が集まっていた。いや、人達と称していいのだろうか。そこに確かに人は二人いるようだが、それと一緒にアイルーが三匹いる。

人の一人、スキンヘッドに鍛え上げられた体をしている男、榊がからからと笑って手にしているグラスを掲げる。

「かっかっか！ 祝、討伐！ なかなか手ごわい相手だったがこうして勝利を収める事が出来て何よりだな！」

「うむ、協力感謝するよ、榊殿。一時はどうなることかと思っただがね」

そう言つてグラスを打ち合わせるの笠をかぶった白と黒の毛を持つアイルーだった。口の端に煙管を咥え、顔の大部分が黒毛に覆われ、口周りが白毛、笠を被っている事もあつてその顔は暗く見える。

器用に煙管を離すとふう、と独特の匂いのする煙を横に吐き、グラスに注がれた酒を呑んでいく。

「相変わらずの実力で安心したぞ、疾風。『神風』の異名は伊達ではないな」

「よしてくれよ、榊殿。親しき友である君に神風と呼ばれるのはあまり好きじゃない」

「それはすまんな疾風。だが、久しぶりに会い、ああしてお前の実力を目の当たりにしたのだ。ワシは喜ばしいのよ。噂を耳にするよりもこうしてワシの目でしかと実力の程を確かめられたのがな」

「……ふ、そうかね。だが拙者として喜ばしいよ。あなたもまた衰えていなかったようだ」  
親しげに話す榊と疾風をよそに、残った者は静かに祝杯を挙げている。榊の両隣りには佐助と椿がちびちびとミルクを飲み、つまみとして魚料理を食べている。そして疾風の隣には一人の青年がいた。

肩を超えるくらいまで伸ばした黒髪をゴムで縛り、落ち着いた印象を持つ碧眼をし、整った顔付きをしている東方人だ。纏う装備はドンドルマ方面で確認される飛竜種、エスピナス亜種の素材を使ったエスピナUシリーズであり、武器は鬼哭斬破刀を担いでいる。

彼もまたグラスに注がれた酒を呑み進め、注文した肉料理を静々と食べていたが、榊が笑顔を浮かべたまま彼へと視線を向けてきた。

「あんちゃんも即席のチームではあったがなかなかの實力者だったな。あの希少種相手に一步も引かぬ立ち回り、なかなか出来るもんじゃあないわい」

「そうだね。星野殿と言ったか、これほどの実力者と巡り合えた事、拙者は喜ばしく思うよ」

「ははは、そうですか。ありがとうございます。俺も噂に聞く戦アイルーと一緒に戦えたこと、嬉しく思いますよ」

そう、ここにいるアイルーは全て戦アイルーと呼ばれる、特殊な訓練を受けたアイルー達だ。特に疾風は各地では『神風』という異名で知られる程の有名な戦アイルーであり、アイルーでありながらそこらにいるハンター達よりも高い実力を持つ。

そんな彼がどうして辺境の村にいるかといえば、この付近でリオレウス希少種、リオレア希少種のつがいが確認され、討伐依頼が出されたためだ。原種や亜種ならばまだハンター達でもなんとかなるが、希少種ともなれば熟練ハンターでなければ難しい。

原種、亜種以上の力を秘め、強固な鱗や甲殻に覆われたそれらは出会う事も稀ながら討伐できる程のハンターも限られてくる。辺境の村やその周囲の町のハンターではどうにもならないところ、噂を聞きつけてやってきた疾風がそれを引き受けたようだ。

しかし彼だけでどうにかなるものでもないのです、助っ人として榊を呼び寄せたのだ。だがここで少し誤算が生じる。

疾風としては、榊に加えて彼につき従う佐助と椿を入れて四人のチームで向かうものと思っただが、噂を聞きつけて星野までやってきて自分も討伐隊に志願すると言った

のだ。

まだ榊が到着する前だった上に、実力のあるハンターならば断わるに断れない。何せ彼が持っているのは希少種相手に効果的である雷属性の武器を担いでいたためだ。しかもそれはG級の武器。威力は確かなもの。

榊が到着してからその事を伝えようと、やる気に満ちていた椿が同行し、佐助は待機という事で話が纏まり、四人……二人と二匹は希少種討伐へと向かっていった。

そして先ほどクエスト成功を伝え、こうして祝杯を挙げている。

「星野殿はどこにお住まいで？ それほどの実力だ、大きな街を拠点としているとみるが」

「いえいえ、辺境も辺境……田舎暮らしですよ。家族と静かに暮らしています。今回はこの噂を聞いて力になれるかと思いきや……生活費を稼ぐという目的もありますけどね」

「ほう、辺境とな。それだけの力を持ちながらあまり積極的に活動しないのか？」

「はい。別に有名になろうとか、名声を得ようとか……そういう事には興味ないので。ただ守れる人を守るために戦うだけですよ」

微笑を浮かべながらそう言う彼はまた酒を呑み、残った料理をたいらげってしまった。そんな彼に榊はまたおおらかに笑い、ぱん、と膝を叩いて大きく頷く。

「いい心がけよ！ 実に見どころのある若者だ！ 最近はそういう輩が少なくなっているかん。……いや、それがハンターらしいといえればそれまでだかのう。だがそういう顕著な輩がいるというのは喜ばしい事よ！」

「……リーダー、興奮しすぎ。少しは落ち着け」

「何を言うか佐助。ワシは嬉しいのだよ！ 桐音嬢ちゃんらしいここに居る星野といい、なかなか見どころのある若者らと知り合っているのだ。興奮せずにいられるか！」  
「おやつさん、それでも落ち着くにや。ほら、これでも食べるにや」

そう言つて椿が魚料理に添えられているハーブを榊の口元まで持つていく。ついそれを口を開けて受け止めてしまい、椿はそこに放り込んでやった。それを咀嚼し、ごくと飲み込むと少しだけ榊が落ち着いた……ように思える。

そしてグラスに残っている酒を呑み干すと「すまない、これをおかわり貰えるかのう」とそれを掲げながら追加注文をした。

「そういえば……桐音嬢ちゃんらといえ、あの子達は探し人がいるんだったか。……というか、星野？ もしや、あんちゃんだったたりしないか？」

「む？」

「探し人？ ふむ、力になれるかわからぬが、聞こうか」

笠の下からじつと榊を見つめて疾風は聞き手に回る。

「なんでも瑠璃嬢ちゃんと茉莉嬢ちゃんという嬢ちゃんらの探し人がだな、星野翔とかいうハンターだとか」

「ああ、確かに。それは俺の事でしょう」

「なんと！　ここで探し人に会えるとは！」

「……ですが、連絡するのは少し待ってください」

「む？　なぜだ？」

せつかく見つけた探し人本人だというのに、どういふことだろうと榊は怪訝な表情を浮かべる。そんな彼に、困ったような表情を浮かべた星野は一度酒を口にし、唇を濡らした。

「俺も色々ありましてね……会いに行くのは少し待ってもらいたいのです」

「ふむ？」

「その二人のことはもちろん知っています。昔の縁がある子供たちです。俺を探しているのも何か理由があるのでしようが……緊急の用件でなければ二人には申し訳ないが、こちらにも都合がありました」

「……そうか。辺境に住んでいるのにも理由がありそうだね？」

その言葉に星野は困ったように頷いた。

「ならばこれ以上深くは訊くまい。だがこちらについては教えてもらいたい。もう一人

の探し人というのが草薙武という少年よ。桐音嬢ちゃん……草薙桐音の弟という話だ。聞き覚えは？」

それに疾風は少しばかり俯いて考え込むようなしぐさを見せる。恐らく記憶を探つてそんな人物がいたかを思い出そうとしているようだが、結局首を振った。

対して星野は目を閉じている。

彼もまたそんな名前をした人物がいたのかを思い出そうとしているのだろう。しかし彼もまた首を振つてしまう。

「そうか……残念だのう」

「役に立てず申し訳ないです」

「いや、構わんよ。少し訊いてみただけだし。……ああ、そういえば桐音嬢ちゃんらが取った依頼の主も探し人をしていたか」

「またかい？ 結構多いじゃないか」

「かつかつか、そうなのう。だがそいつはなかなか興味深い奴らを探しているようだったぞ。なにせ白銀昴、黒崎優羅、竜宮紅葉を探していると言っていたのだからな」

その言葉に僅かではあったが星野の目が細まった。それまで浮かべていた感情もなくなり、無表情に近いものまで落差を見せるも、すぐにそれを消してじつと櫛を見つめる。

そんな変化に彼らは気づかず、疾風が少し驚いたような表情を浮かべ、

「なんだい、そのメンツは。確か……かの大事件の後に姿を消したハンター達じゃないか」

「そうだ。そんな彼らを今になって探し出し、あの依頼をこなしてもらおうと指名してきたのよ。なかなか面白そうだろう？　ま、結局は桐音嬢ちゃんらが引き受けたんだが」

「ふむ……シユヴァルツ一族の末裔である黒崎優羅と共に消えた、黒龍討伐の栄誉を賜ったハンター達。普通ならば消える理由はないが、世間は時が進むにつれてシユヴァルツ一族の末裔に対して恐れ、忌避し、関わりとうしなくなってしまった。昨今騒がせている辻斬りなどの件もシユヴァルツ一族の誰かが犯人ではないかと言われているくらいだし、そんな風に風当たりが悪ければ姿も消すだろうね」

「……疾風さんはそうだと思っっているんですか？」

そこで星野が静かに隣にいる疾風に問いかける。彼の視線は机の上で組む両手から僅かに疾風に向けられ、その声色もひどく落ち着いているように聞こえた。まるで感情を抑えているかのように。

そんな彼の問いかけに、疾風は小さく首を振って答える。

「拙者はそうは思わない。こういう事件はシユヴァルツ一族でなくとも、武力を持つ者



ならば誰でも可能。むしろそういう風に断定してしまえば、真の曲者の存在を覆い隠すことになるというもの。故に拙者はシユヴァルツ一族の末裔らに対して思う事は何もない」

「ワシも同意見よ。実際に会ったことはないが、だからこそ噂や風評によつて決めつける事は愚かであると思うておるわい。人となりは実際に会い、語り合い、共に戦い、飯を食べれば自ずとわかるというもの。それまではこうであると決める事はせんよ」

「……なるほど。俺も同意見ですよ」

そこで星野はまた微笑を浮かべてグラスに残った酒を呑み干し、立ち上がる。

懐から財布を取り出し、食事代を机に置くと一礼した。

「ご馳走様でした。俺はこれで失礼しますね」

「もう行くのか？」

「ええ、家族が待っているのです、申し訳ないですが……」

「なに、構わぬよ。早いところ帰つて家族に朗報を伝えてやれい」

「また機会があれば共に戦おう、星野殿」

「はい。では、また機会があれば」

また一礼すると軽く手を振つて酒場を後にしていく。そんな彼を見送ると、酒場の娘が先ほど榊が注文した酒のお代わりを持ってきてくれた。それに礼を述べると榊はま

たそれをぐいっと呑んでいく。

それを見た佐助と椿がため息をつき、

「……リーダー、昼間っから呑みすぎだぜ?」

「そうだにや、ペースを抑えるにや。星野さんが行っちゃったけど、まだ相手をする人がいるにや」

「ぶはあ……、なあに、まだまだこれくらいではどうということはないわい。……それで疾風よ。あの子達がこっちに向かってきているというが、まだ着かぬのかの?」

「ああ、推測だがもうすぐ到着すると思われるよ。先ほど来た鷹がそう教えてくれたからね。……つと、そう言っている間にどうやら来たようだよ」

笠の下から横目で酒場の入口へと視線を向けると、丁度扉を開けて二人の人物が中に入ってきた。夜色の外套に身を包み、フードを被って顔が見えづらくなっている二人は酒場の中を見回し、疾風を見つけると彼らに近づいていった。

そしてフードを取り払うと、中から現れたのは黒髪をした若い男女だった。しかしただの男女ではなく、その耳はまるで猫のようなものであり、それが二人が魔族であることを示している。

そんな二人に榊は「おう、久しぶりだなお二人さん」と笑いかけた。それに対し、「どうも、ご無沙汰しております」

「……………」

歳の程は二十歳を超えた程だろうか。そんな青年が榊に向かって丁寧に一礼する。隣……いや、彼から一歩下がったところで付き従う彼と同じくらいの歳を思わせる少女もまた同様に一礼した。

そんな二人に榊は苦笑し、手を振りだした。

「かつかつか、よせよせ。そう堅苦しくせんでいいわい。今のワシは榊<sup>ひとし</sup>仁。流浪のハンターよ」

「とはいえ仕事はあるんだけどにや」

「はは、そうだのう……ぼちぼち進めるところだわい」

「……次の連絡であの人にどやさされてもオレは知らんぞ?」

やれやれと首を振り、嘆息しながら佐助と椿がたしなめる。立場的には榊の方が上だろうが、こうしてみると出来の悪い主人を補佐する秘書や部下という風に見える。

だがこういう光景はいつもの事なので特に気にせず、見守るだけだ。そんな二人を「そら、いつまでも突っ立ってないで座れ座れ。……それと、ほら、注文するといひ。今日はワシの奢りよ」と手で示し、ウエイトレスを呼ぶ。

それに「失礼します」と頭を下げてから二人は疾風の隣に順番に腰掛けていった。

「だから堅苦しくせんでええと言つとるに……。渚嬢ちゃんにしているように接してく

れても構わんのだぞ?」

「……はっ。では……これでいいですか、榊さん」

「まだちと硬いのう。もう少し砕けてもええんだぞ?」

「すみません。しかしあなたは私達一族にとつては目上のお方。乾さんと同じく礼を持って接しなければなりません」

頭を下げたまま彼はそう述べた。隣に座っている少女も目を閉じて同じように頭を下げている。そんな二人の立場も知っているが、榊としては苦笑せざるを得ない。

しかしこれ以上強いのも酷か、とこれ以上の事は口にせず、別の話題を吹っ掛ける事にした。

「それで、調査の方はどうなっておる?」

「辻斬りに関しては今もなお調査中。出没地点も不規則であり、標的も流派を選ばず。時に一般人も被害にあっていますが、その全てが刀傷によるものであると確認。犯人がシユヴァルツ一族の末裔であるかは不明のまま、となっています」

答えたのは少女の方だった。淡々とした喋りであり、表情も変えずに抑揚なく話す彼女はその外見も相まって人形のように思える。そんな彼女に視線を向け、榊は腕を組みながら静かに聞く。

「続いて各地の領主死亡事件について。死亡した者らの情報を纏めたものは既に乾さん

に提出。共通点は依然として変わらず、悪政を行ってゐる者ばかりが殺害ないし事故死。そして空席となった領主を取り込み、勢力を拡大してゐると思われ一派がいると推測されますが、影はあつても正体は見せず。現在も捜査中」

「なるほどのう。これはやはり死んだ領主の領土を獲得して新たな領主を据えようという魂胆かの」

「そう思われますが、それを企てる領主を確認できません。領主ではなく全く別の誰かという可能性もありますが、尻尾を見せません」

今度は少年がそう答えた。

そしてまた少女が次の報告を進めていく。

「最後に各地で活性化しつつあるモンスターらについて。やはり依然として蛇竜種が活発であり、鬨蛇ナーガの姿も少しではありますが確認。その内の何頭かは討伐されたという情報入手」

「おう、その内の一頭は知つとるぞ。ユクモにいるハンターの知り合いがそれよ」

「左様ですか。また、こちらに関してはご存知かと思いますが最近ではリオレウス、レイアのつがいが活性化。ただその行動が奇妙でして」

「ほう？ どういうことだ？」

「何かを探しているかのように空を飛行し続けるという行動を確認。村や町を襲つたと

いう行動は少数であり、多くはその上空を数分間飛行し、離れていつています」  
少女のその報告に疾風は何か思うところがあつたようで小さく唸つた。

思い返してみればそういう話を耳にしていた記憶がある。つがいのは大半は空を飛行し続けるばかりで襲撃を加えていったという話は耳にしていない。討伐依頼が出たのも村や町の住人が不安になつたため、何とかしてほしいというものばかり。

だが一体何を探していたのだろうか。

それに気づいた者は次にこの疑問に行き着くだろう。しかしその問いに対する解答は誰も答える事は出来やしない。

誰が気づくだろう。

つがいらが捜しているのは表舞台から消えた人族の三人であり、それを命じたのがかのアマツマガツチである事を。

「ハンターが動員されて数は減らしているようですが、まだつがいは各地を飛行しているでしょう。その原因の究明にこの先も努めたいと思います」

「うむ、よろしく頼むぞ」

『はっ』

頭を下げる二人に頷くと、榊はちらつと辺りを見回してみる。すると離れた所で様子を窺っていたウエイトレスに気づき、ちよいちよいと手招きしてやった。するとおぼ

ずといった風な反応をしながら彼女は近づいてくる。

恐らくただならぬ雰囲気を感じ、いつ注文を取りに行つたらいいのかわからなかったらしい。そんな彼女にこやかな笑顔をを見せてやって安心させると、「さ、注文するとい。さつきも言つたように今日はワシの奢りだ」と促した。

それにまた頭を下げると二人はウエイトレスに料理と飲み物を注文する。それに合わせて榊達も飲み物のお代わりを注文し、ウエイトレスは去つていった。

しばらくして注文した物が運ばれてくると五人は一斉に乾杯し、食事を再開する。

「それにしても本当に久しぶりだのう。元気にしとつたか、海、空」  
「ええ、なんとか。榊さん達も変わりないようですよ」

「どうだ、ここは一つ、お主らの旅の話でも聞かせてもらおうか」

「私達の……ですか？」

「おう。何せ現頭領の息子である海とその付き人である空の二人旅。任務とはいえ、なかなか面白そうではないか。どれ、一つこのワシに語つてみせい」

にっと笑いながらグラスを傾けた。そんな彼に少し困つたような表情を見せる少年だったが、ちらりと隣にいる少女に視線を向けてみる。そこには相変わらず表情を変えずに座っている彼女がいたが、視線に気づいて横目で視線を合わせてくる。

何も言わない彼女ではあるが、何となく「別によろしいんじゃないですか？」と淡々

に語つてきているような気がした。

ふう、と息をつくど、

「……わかりました。私達のつまらない旅の話でよろしければ、お話ししましょう」

「なあに、つまらないかそうでないのかはワシらが決める事よ。今日はまだ時間はたっぷりある。小嘶程度なら、酒のつまみにもなろうて」

実際のつまみであるポポノタンの塩焼きやミックスビーイズなどが机に並んでいるが、榊はそれ以上に少年が話す旅の話を楽しみにしているらしい。こうなったら少しは話をしてやらないと榊は退かないだろう。

観念して少年は話す事にする。

「……ではお話ししましょう。里を出る前の事から、でよろしいですね？」

それに榊が頷くと、ぼつぼつと少年は話し始めた。

ここに来るまでの、二人の旅の話を――。



## 2 2 話

深い森の奥にそれはある。周囲には深い霧が立ちこみ、それを中心として一、二キロにわたって囲んでいるのだ。だが霧はその中にまでは存在せず、景色は良好だった。

それは村だった。

いや、里とでも言おうか。

木造の家が点々と並び、畑が広がるそこはまさに東方の山奥の村、人里というに相応しい。その村に住まう人々は総じて和服に身を包み、人ものではない耳をしている。

その黒髪に合った黒い毛をし、猫のような形をした耳だ。それが彼らが魔族である事を示し、同時にここはその魔族の者らが暮らす里である事の表れだ。

そして里の周囲に広がる霧はこの里を隠すために仕掛けられた現象であり、里に近づくと者らを迷わせ、引き返させる効果を秘めた結界でもある。

そんなこの里に住まう者らは一体何者なのか。

霧夜一族。

彼らはそう呼ばれている。とはいってもその存在を知る者は僅かであり、基本的に

人々に知られていない存在だ。

それは里の周囲にたちこむ霧が彼らを覆い隠してしまうという事もあるが、それ以上に彼らは表立って行動する事がほとんどない。彼らは所謂、忍しのびと呼ばれる者達であり、他の忍達以上に自分達の存在を他者に隠す一族だ。

これは彼らが魔族である事も関係しているが、彼らを従える者達が特殊である事も関係していた。

しかし里の様子は至って普通。のどかな田舎の風景、といつてもいいくらいの平穏な空気が包んでいる。

畑仕事にいそしむ者、収穫した野菜を籠に乗せて運ぶ者、子供たちが集まって遊んでいる様子……と、普通の人々と変わらない。だが場所を変えれば普通の里にはない光景が見られる。

森に近い場所の一角に存在する広場。ここでは数人の若者が集まり、鍛錬を行っていた。木々を柱に見立てた壁蹴りの移動、丸太を投擲しての回避術、二人で組んでの組手……、まさに戦うための力を磨き上げている。

武器として小太刀が目立つが、他にも苦無と呼ばれる特殊な投擲武器を手にしている者もいる。そんな彼らを指導するのが数人の年配の男性。

それは一種の教師と生徒、師匠と弟子達という風。時に指導するように男性が少年や

少女に近づき、何かを話しかける。

そんなこの霧夜の里、実を言えばここは仮初めの里であり、本拠地は別の所にある。二つの里はかなり離れた距離となっており、こちらの里が仮に発見されたとしても重要なものはないので損害はほとんどない。

もちろん彼らを束ねる頭領もここにはおらず、本拠地の里で暮らしている。

だが彼の一人息子はここに暮らし、頭領である父の指示を受け、また状況に合わせて己の意思で指示を出し、次代の頭領として将来のための経験を積んでいる。

「はっ！」

鍛錬をしている少年達の中に、一際速く動く少年がいた。刃を潰した小太刀を片手に構え、相對している少女へと斬りかかっている。しかし少女は表情を変えずにそれを受け流しつつ懐に入り込み、少年へと回し蹴りを放つ。

それを後ろに飛びながら衝撃を殺すも、繋げるように体を捻りながら跳んでの回し蹴りが飛んでくる。腕で受け止めるも衝撃は軽く、とんととそれを足場にして跳躍。小太刀を持っていない左手で少年の頭を掴むと曲芸師のように器用に逆立ちし、そのまま天へと伸びる足を曲げ、重力に従って落ちながら膝蹴りを叩き込んだ。

「……ッ!?!」

火花が散るような痛みが襲い掛かり、思わず額に手をやってしまうが、そんな隙を逃

さずに着地した少女はまた一息で距離を詰めていく。だが少年も負けてはいない。何とか体勢を立て直し、向かってくる少女へと足払いを掛けてやった。

「……………」

だがそれを読んでいたかのように横に飛び、それをやり過ぎす。構えた小太刀で右肩へと突きを繰り出す。回転して躲しつつその動きで少女へと蹴りを当てる。それに呻きながらも体勢を立て直すも、少年もまた回転しながら起き上り、少女に向き直る。

そうして向かい合った二人は一度呼吸を整え、同時に飛び出して距離を詰める。そうして二人が交差ししようとした瞬間、手にしていた小太刀でそれぞれ首と心臓へと当てあつた。

「…………ふう、お疲れ。空<sup>くう</sup>」

「お疲れ様です、海<sup>かい</sup>様」

どちらも決定打を与えたため、揃って小太刀を引くとお互いの健闘をたたえ合う。微笑を浮かべる少年に対し、少女は姿勢を正すと綺麗な一礼をした。

「じゃあ俺達は先に戻っているから、何かあつたら呼んでくれ」

「はっ、お疲れ様でした、若」

『お疲れ様でした!』

少年が指導をしている男性へと声を掛けると、男性は少年へと向き直り少女がしたよ

うに一礼。それに続くように他の少年少女達も一度鍛錬の手を止めて一礼した。そんな彼らに笑いかけて手を振ると、少女を伴って少年は広場を後にする。

霧夜海。

それが彼の名前だ。

霧夜一族を束ねる頭領である霧夜潮きりやうしほの一人息子であり、次代の霧夜一族の頭領となる少年である。

年齢は二十一歳、もうすぐ二十二歳になろうという頃だ。肩にかかるくらいの黒髪に青い瞳を持ち、忍として鍛えられているおかげで優しげな印象をする外見に反して高い実力を持っている。

若干中性的な整った顔付きはまさに美少年といえるものだろうが、声色は完全に男性のものであり、身長も174cmという成人男性として一般的なものになっている。

そんな彼に付き従うように歩く一人の少女。

霧夜空。

幼い頃……それも生まれた時からずっと海と共に育ち、彼の付き人として過ごしてきた少女だ。

年齢は海と同じく二十一歳。背かなに届く程の艶やかな黒髪に落ち着きを感じさせる碧眼。東方人独特の顔付きに華奢な体つきも相まってまるで東方人形を思わせる外

見をしている。

黒を基準とし、深い山の光景を描いた和服に身を包み、背筋を伸ばして海の一步後ろを付き従つて歩く光景も様になっていて、まさに従者、大和撫子と呼ぶにふさわしい。そんな二人が道を歩けばすれ違う人達が挨拶をしてくれる。

「こんにちは、若様」

「お疲れ様です、若。こちら先ほど収穫したものです。よろしければどうぞ」

「ありがとうございます」

妙齢の女性が背負っている籠から新鮮な野菜をいくつか取り出し、手渡してくれる。その内の一つ、キュウリの一種を空に一本手渡し、二人して少しかじってみた。とたん、しゃきしゃきとした歯ごたえに瑞々しさが加わり、素材の味が口の中へと広がっていく。

なにも添えずそのまま食べているためそれがよく感じられ、それでもこれだけ美味しく感じられるのは素晴らしい。

こくり、と頷いて微笑を浮かべ「美味しいよ」と告げれば、女性は「そうですか。ありがとうございます。また新鮮なお野菜をお届けしますね」と嬉しそうに言ってくれる。

そして別れを告げてまた道を歩き、里の中心部にある小高い場所に向かっていく。少

しなだらかな坂を登っていけばそこには大きな屋敷が存在している。そこが海が暮らす家であり、同時にこの里で頭領が暮らす場所でもある。

高い塀に囲まれたその屋敷の広さはかなりのもので、様々な仕掛けを施す事で侵入者を防いでいる。といつてもこの里自体が侵入者を防ぐ霧の結界に囲まれているので、そういう事は稀なのだが用心として施している。

門を潜れば広い庭園が出迎え、その奥に屋敷の入り口がある。「ただいま」と声を掛けて中に入ると、すぐに「おかえりなさいませ」と一人の女中が出迎えてくれた。

「またお野菜を貰ったのですか、若」

「そうだね。ありがたい事だよ。これ、よろしく頼むよ」

「はい」

手にしていた野菜を女中に手渡し、二人は屋敷の奥へと進んでいく。その際やはりとすべきかすれ違うたびに「おかえりなさいませ」と声を掛けられながら頭を下げられる。それに笑顔で応えていき、自室へと戻ってくると一息ついて座敷に腰掛ける。

空はというとすぐそこを通りかかった女中に何かを聞き、一言礼を告げて部屋に入り、襖の傍に控えながら、

「海様、入浴の準備は整っているとの事。如何しますか？」

「そう？　じゃあ先に入ってくるか。空は……」

「わたしはこれからの予定を確認。本家からの連絡があつたかと思ひますので」  
「そうか……よろしく頼むよ」

「はい、いつてらつしやいませ」

ぺこりと表情を変えずに一礼、廊下にてる海を見送り、去つていくのを確認した空は自分も廊下を歩き始める。向かうのは海の近くにある彼女の自室。

海の部屋が様々な物が置かれているのに対し、彼女の部屋は質素なものだった。机に本棚、服を入れる箆笥……。必要最低限の物しかなく、色遣いも落ち着いたものでそれが逆に彼女らしいと思わせる。

そして机の傍には少し積み上げられた書類が二つに分けられてある。

片方はそれなりに積み上がっているが、もう片方は少なかつた。

「……さて、消化しますか」

彼女は机の前に正座すると少なくなっている書類を手にして目を通し始めた。

一方浴場へと向かつていく海は途中で同年代の少年と会う。彼は海に気づくと気さくな笑顔を見せながら手を挙げてきた。

「よう、若、久しぶり！ 若も風呂かい？」

「ああ、久しぶり。もしかして隼しゅんも風呂かな？」

「そうだったんだが、若が入るってんなら少し待とうか？」



「いや、構わないよ。一緒に入ろうか」

微笑を浮かべながらぼん、と背中を叩いて歩き出すと、「悪いね、若」と苦笑しながら頭を掻きつつ彼がついてくる。

彼の名は霧夜隼。霧夜一族の少年であり、海の一つ年上にあたる兄のような人だ。空ほど長く付き従ってはいないが、修行やプライベートでもそれなりに共に過ごした仲であり、他の少年達よりも少し親密度が高い。

そのため海とは少しだけ砕けたような口調で話す事が出来る相手であり、海にとっても気楽に接する事が出来る数少ない相手でもある。

浴場は屋敷のほずれにあり、露天風呂のような作りになっている。囲む塀のおかげで広大な山を見回す事は出来ないが、天気が良いければ夜に空を見上げれば綺麗な星空が見られるようになっていた。そんな浴場に向かいながら二人は会話をしていた。

「最近は何を調べていたんだろう？ どうだい、調子は？」

「んーぼちぼちつてところかねえ……。なにせ死体はあつても犯人は尻尾を出さねえんですわ。そこで狙われそうなのにアタリをつけて張ってみただけど、今度は逆に外れる……。まったく犯人がどういふ意図で犠牲者を狙ってんのかわかったもんじやない」

やれやれとため息をつきながら肩を落とす隼に元気がなくなってくる。彼はさつきまで里の外に出て辻斬りについて調査を進めていたのだ。各地を飛び回って少しでも

辻斬りの事について情報を得ようとしたようだが、どうやら上手くいっていないらしい。

確かに辻斬りは被害報告こそ耳にするが、それを実行している犯人の情報は全くといっていいほどない。わかるのは達人クラスの実力を持つ刀使いという事だけ。

どこに出没するのか、誰を狙っているのか、それは判明せず、ただ各地で高い実力を持つ者ばかりが殺されていく。

各地の領主はこの危険人物に対して捕縛ないし殺害依頼を出しているようだが、当然ながらそれ程の実力者が容易に尻尾を出すはずもない。操作は空回りし、ただただ犠牲者が増えていく。

これに対して霧夜一族もまた隼をはじめとする者達が調査に乗り出しているのだが、同じように情報は得られない。まるで包囲網をすり抜けていく飄々とした風の如く。雲を掴むかのような現実に捜査は難航していた。

「そう気を落とすなよ隼。気持ち、切り替えていこう」

「……ああ、そうだな若。こう気落ちしてちゃ出来る事も出来ないってもんだ。よし！

こういう時こそ風呂！ さっぱりすりやこの気持ちも湯船に消えてなくなるつもんだぜー！」

「そうそう。その前向きさが隼のいいところだよ」

そう笑いあいながらやってきた浴場の男用の更衣室の扉をガラツと開ける。その笑顔のまま中に入り、和服を脱いでさあ露天風呂へ、と思い描いていたのだが、二人の体はそこで固まってしまった。

笑顔が凍りつくとはこういう事だろうか。

あるいは時が止まったとでも言おうか。

二人が見ているもの、視線の先には一人の人物がいた。

鍛え上げられた硬く逞しいがたいをした二メートルを超える長身の男性。切りそえられた黒髪は少しはね、彼もまた同じような耳をしている。

彼は鏡に向かって日に焼けて健康的で、同時に屈強な戦士の証であるその体でポージングを決めている。

もちろん、素っ裸で。

ここは浴場で、更衣室なのだから裸になるのはまあいいでしょう。しかしどうしてそのまま露天風呂に向かわず鏡に向かってあんな真似をしているのだろうか。

いや、彼ならばやりかねないのだが、ああも清々しく楽しげにやっているのを目の当たりにすると、どういう反応をしているのかわからない。それに加えて彼はとんでもない人物だ。このまま固まっているのはマズイ。

そう頭でわかっていても、二人はその場を動けないでいた。

「——あらん？　そこにいるのは若に準ちゃんかしらん？」

そうして固まつていれば、いずれ気づかれるのは道理。紫色の瞳が二人を捉え、いい笑顔を見せながらそんな事を口にする。

声は見た目に反しない野太い声だが、その口調は——

「いやん、ちよつと恥ずかしい所を見られちゃったわん♪　ああ、どうしましょ。私、困っちゃうわん」

——見事なオネエのものだ。

おわかりだろう。

これほどの鍛え上げられた肉体を持ち、顔付きもなかなかのイケメンのものなのだが、その中身は見事に女性に近しい。相反する二つの内外を持つ男性、それが彼だ。

ひくひくと口元を動かしながらも何とか現実へと帰ってきた海は、困ったような表情を浮かべながらも何とか言葉を発する事にした。

「……なにを、してるんです？　狭間」

「見てわからないかしらん、若。ちよつとした体のチエックよん。どうやら久しぶりに渚ちゃんが来るらしいからね、体の調子を確かめてたのよん」

霧夜狭間きりやはさま。

この霧夜一族でも古くから在籍している男性であり、現在の頭領である潮とも親交が

深い忍である。現在は海のいるこの里へと滞在し、彼のサポートを務めている。

彼が幼い頃から見守っており、それはすなわち海は幼い時からこの濃い男性を見続けていたという事でもあり、自然と耐性がついてしまったということでもある。

それでもこの暑苦しく濃い人物には少し慣れないのだが、彼自身は古参の忍という事もあつて能力は高い。海にとつて信用に足る人物ではあるのだが……時々こういう場面に出くわしては空気が凍るといふ現象を味わい続けている。

いや、それよりも今彼が言つた言葉だ。

隼もそれに反応し、驚いた顔を浮かべる。

「乾様が来るのか、狭間さん」

「そうよん。少し前に本家から連絡が来てね、若達に伝えるべき事があるということらしいわ。だから失礼のないように体を清め、こうして……ふんっ！ 日課ではあるけれど、こういう時こそボディチェック、体のメンテナンスは大事よねん」

言葉の途中でまたポーズを決めて締めくくる彼は本気らしい。体を清める、ということころまではよかつたのに、いや、体の調子を確かめるところもまあいいとして、どうして裸になってポージングするといふ結論に至るのだろう。

別に彼女の前で裸になるという訳でもない……いや、なるんだつた。

うん、前提からして間違えていた。

彼は……普段からこうだったな、と思い出して海は少し頭を抱える。

「……まあ、程々にするんだよ、狭間。でないと乾様にまたどやされたりするからね」  
「うふふ。でもまああいう怒った顔も可愛いと思わない？ 若」

「……………黙秘しようか」

「あらん、つれないわね。じゃあ隼ちゃんはどうかしらん？」

「お、俺っすか!? あ、やめ、そんな近づかんでください狭間さん。色々きついつす」

問いかける相手を変える狭間ではあるが、その際ムキムキな体でぐいっと隼に迫るものだから、自然と表情が強張って青くなってしまうのも無理はない。しかも狭間がオネエであるため、という事は彼はアレという事になる。

「ん？ んん？」と言いたげな顔は笑顔であるのはいいが、その顔の距離が近い。及び腰になりながら後ずさり、両手を挙げてこれ以上近づけないでください、とその迫る顔を遠ざけるも、気にした風もなく彼は近づいてくる。

「ちよ、だから近いっす！ 俺にそんな趣味はないから勘弁してください！」

「そんな趣味ってなにかしらん？」

「ですから、男と男がもによもによ、ですよ！」

「あら、心外だわ。別に私はそう限定しているわけじゃないわよ？」

背後でそんなやり取りが交わされている中、冷静さを取り戻した海は着ている和服を

脱いでいき、そつと露天風呂の扉を開けて奥へと進んでいく。気配を消していそいそと入っていく海をよそに、残された隼と狭間はまだ盛り上がっている。

「私はね、花が好きなのよ。薔薇も百合も……一纏めで花が好きなのよ」

「あ、さいですか。……そうですね、狭間さんはどっちもイける口でしたね」

「その言い方は良くないわよ、隼ちゃん。私はただ花を愛でるだけなのよ。花はみな可愛らしく、個性があつて、本当に愛おしい存在だわ。どのような蕾をつけ、花咲かせるのか、それを眺めるのもいいし、手塩にかけて育てるのもいい。千差万別で実に興味深く、愛で甲斐がある。だから私は花が好きなのよ。おわかり？」

「は、はい……わかりましたから……そう、近づかないでください。ほんとに……きついです」

「ずっと力説するために一気に距離を詰める。お互いの鼻が接触しそうな程まで近づかれ、冷や汗をかきながらも何とか最後の砦を守る隼。だがそんな彼を狭間は優しく微笑みかけながら見つめ、そつと頬に手を当てる。

そのままずっと、彼の言う花を愛でるかのように優しく撫でてやるのだが、それは隼に鳥肌を立たせるかのようなものだった。それも当然、彼は……本当に至つて普通の趣向を持っているのだから。

「そう邪険にしなくてもいいんじゃない？ 私は隼ちゃん、あなたも愛でているのよん

「？」

「あ、あは……あははは……」

もう苦笑いしか出ない。最後にそつと隼の尻を撫でた狭間はくすりと笑うと「さ、今は風呂に入りましょ。もたもたしていたら渚ちゃんが来るからねん」と言い残して先に露天風呂へと向かつていった。

何せ最初から素っ裸。これから服を脱ぐ隼と違ってさつさと入りに行ける。

そして残された隼は大きく息を吐いて膝に両手を置いてしまった。心臓はバクバク、冷や汗はだくだく、息も絶え絶え……結構体力を消耗してしまった。

風呂に入りに来たのになぜ体力を消費してしまうのか。わけがわからないが、そうさせてしまうほど狭間がとんでもない人物だという事だ。

しばらくそうしていた隼ではあったが、気を取り直して服を脱ぎ、露天風呂へと向かつていく。

そこでは先に入っていた海が体を洗っており、すぐ近くで狭間が短い髪を洗っていた。そんな彼らの下へと向かい、隼もそれに続いて体を洗い、三人揃って露天風呂に使って汗を流すのだった。

そうして風呂を終えて自室へと戻り、私服ではなく客人を出迎えるための服へと着替える海。黒を基準とした和服に霧夜一族の紋章が描かれた羽織を着こみ、紺色の袴を履



き終えて準備完了。

紋章は霧に霞む月であり、まさに夜と霧に隠れる存在である事を示している。

髪は調子や顔も髭がない事を確認し、うんと頷く。それから空の部屋に向かつてみたが、どうやら留守らしい。報告書は纏められているようだがどこに行ったのだろうか。女中に訊いてみると彼女も露天風呂に向かつていったようだ。

なるほど、彼女も汗を流しに行つたらしい。なら少し待つてみる事にしようと、自室へと戻りお茶を淹れてお菓子として煎餅を口に放り込んでいく。

そうして過ごしていると襖の奥に女中がやつてくる。襖越しに「若、乾様がいらつしやいました」と声を掛けてきた。それに「わかった」と応え、立ち上がる。

もう一度身なりを確認し、手拭いで手元や口周りを拭いて廊下に出ると、奥から海と同じように身なりを整えた空がやつてきた。風呂上がりということもあつて甘い香りが火照つた体から漂ってくる。

そして服装も満月の浮かぶ夜空、松が生える崖を描いた和服の上に同じように霧夜の紋章が描かれた羽織を着ている。海の前に立つとペこり、と一礼し、頷いて歩き出す海の後ろに静かに控えて追従する。

そうして廊下を歩き、向かつた先は客間。中に入ると敷かれている座布団に正座して待つ。位置はもちろん下座。上座には一つの座布団が敷かれており、そこが間もなく来

るであろう彼女の席となつてゐる。

待つ事数分、廊下の奥から二つの人の気配を感じると、二人は自然と椅子住まいを正した。

「乾様をお連れいたしました」

「通してください」

襖の向こうから声がかかると海はそう告げ、「失礼します」と一声かけてゆつくりと襖が開かれる。その向こうから入室してきたのは一見すると年若い少女だった。

オレンジ色の燃えるような色鮮やかな髪を肩から背中程まで流し、その中で一纏めにした房を黒いリボンで結んで流している髪の上で踊らせている。

着ているのは東方としては珍しい西の方の服装で、ピンク色の下地に白いストライプの長袖の上に黒い無地の半袖のシャツを着こみ、ベージュ色のズボンを履いている。首元には炎の柄が描かれたスカーフを巻き、歩くたびにそれはゆらゆらと揺らいでいる。

気の強そうな赤い瞳は彼女が部屋に入ったとたんに頭を下げた二人へと向けられ、すつと通つた鼻筋、淡いサーモンピンクの唇はにやりと笑みを描いている。

何より特徴的なのがその頭部にあるもの。オレンジ色の髪は側頭部には背後へと反り曲がつた角が一对生え、背中にもうつすらと何かが存在しているかのように盛り上がっているし、実際その服の部分には穴が開いている。

それが彼女が人間ではない事を示していた。

彼女は用意されている座布団に腰掛け、頭を下げている二人を見ると一言。

「久しぶりだなあ、お二人さん。面、上げていいぜ」

「はっ、ご無沙汰しております、乾様」

「ははっ、よせよ。ここにはあたたしたち以外には誰もいないんだ。気を楽にして、そんなもって言葉づかいも楽にしてくれ。あたしにやそれがいい。……昔から言ってるんだろ？ 海」

「……はっ、了解いたしました。……渚さん。改めて、お久しぶりです」

「お久しぶりです」

頭を下げたまま少し上げ、また下げて挨拶する。そうして二人は目の前にいる彼女、乾渚と相對する。

前述の通り人間のものではない外見的特徴を兼ね備えた彼女は、有角種にして有翼種という特異の魔族だ。彼女の血統にはその二本の角の特徴からしてディアブロスの因子を保有する魔族であり、彼女はその中でも先祖返りという希少の現象を引き起こした事でのこのような外見になっている。

そして見た目は十代の少女なのだが、実年齢はもう四十を超えている。魔族としてはこれはまだまだ若い部類であり、このような外見をしているのもなんらかおかしくはな

い。

むしろ年齢と外見がほぼ一致している海や空……ひいては霧夜一族が珍しい。

霧夜一族は魔族ではあるが、その寿命は百数年。人間よりも少し上といったくらいのものであり、魔族としては短命な方だ。そのため若者らの外見と年齢がほぼ一致している事が多い。

「色々積もる話もあるだろうけど、今日は残念ながらそれは抜き。さつきも本家の方……潮と珊瑚にも伝えてきたけど、お前達にも直に伝えておく事しておくから」

「はい、何でしよう?」

じつと渚を見つめて言葉を待ち、そんな二人へと先ほどまでの笑みを消して真剣な表情を浮かべた彼女は淡々と命令を下す。

「——シュヴァルツ一族の搜索、記録、抹殺。それがあんたたちへの指令さ」

## 23話

命令を下された海は頭の中でそれを反芻する。

シュヴァアルツ一族。

太古の昔に狩人として進化し、高い実力を手にしたハンター一族。しかしその進化は同時に彼らの身を滅ぼし、罪をその身に刻みつけた彼らは善行を積むことで罪滅ぼしを果たすため各地に散っていく。

そんな彼らの因子は高い力をもたらすが、同時に闇を孕み、それに身を任せる事で悪鬼に成り果てる。それが六年前の大事件の裏に語られたものであり、しかしその真実を真実と認識するのは限られたものだけ。

大抵の人々はシュヴァアルツ一族は危険な存在である事を曖昧に認識し、ただただあれは危険人物だ、という事を記憶に刻んでいく。一種の刷り込みである。

誰かがあれは危険だと言えばそれに同調し、集団に広まれば何も知らなくとも、ああ、あの人は危険なのか、と思い込んでしまうのだ。

そんな彼らは元より魔族という事もあって姿を消しているが、それ以上に人間と交

わった者も多い。それを繰り返す事で自分はその血統に連なるものだとは知らないものもいるため、自覚症状がないまま一生を終えるものの中にはいる。

だが闇を高め、その力を振るえば秘められた狩りの力、すなわち殺しに特化した技術でも人も竜も関係なく殺しつくす。

そんな彼らの調査、記録、抹殺命令……。

これまでは搜索だけに留められたのだが、ついに下されたのか、と海は心の中で呟く。

「上様もそろそろ動け、との仰せさ。最近増加している辻斬りの犯人がシユヴァルツ一族だつて睨んでいらつしやる。……ま、これ以上優秀な武人の数を減らしたくはないんでしようけどな。あたしもその辺りに関しちや同意見だけど……とはいえ上様がそう決めたのなら仕方ない」

「上様が……」

「実際のところシユヴァルツ一族という点が有力なのは変わらないし、かといってシユヴァルツ一族じゃないつて言う証拠もない。すでにウチからは調査に派遣している奴が二人いるんだけど、こうなつたら霧夜一族、お前らにも今以上に捜査の網を広げてもらう。上様が命令を下した後、あの三人はもう動いている。元からシユヴァルツ一族に對しては否定的だつたからな、仕方ないと言えば仕方ない」

右膝に腕を乗せて頬杖をつき、じつと海を見据えて渚は言う。僅かにため息をついた

のは彼女も抑えが利かなくなっているという事なのだろう。

ここで上様とは誰か、説明しよう。

この東方の大国といえは華国ではあるが、そこから南東へと進んだ先に一つの国がある。東と南が海に面し、自然が豊かなその国の名はヤマト国。

多くの山や平原が存在し、同時に火山大国としても知られるその国は東の海に進んだ先にあるシキ国と過去に二分された国だ。

遙かな昔の地殻変動によつて島国だったシキ国から離れ、西へと進んだことによつてこの東方地方に接触し、生まれた国である。つまり一つの国が二つに分かれてしまったのだ。

それからはシキ国の王の血縁者、分家の者が離れたこのヤマト国の中で混乱状態に陥つた国を纏め、束ね、統治した事でヤマト国が設立されることになる。

そのヤマト国の君主、王の事を上様と呼び、ここにいる乾渚はその直属の部下。

この直属の部下は全部で六人……六つの家が存在し、どうやら先ほどの言葉からしてそのうちの二人は既にこの事件に対して独自に調査に乗り出しているようだ。

しかし残りの三人が渚達とはシュヴァルツに対する意識が異なるため、王の命令に従つて陰で動き出したようだ。そこで渚はこの霧夜一族に更なる指令を下す事にしたらしい。

どうして霧夜一族が選ばれたのかといえ、彼らが仕える主がヤマト国であり、特にここにいる乾渚……ひいては乾家に忠誠を誓っているためだ。そのため彼女らとはよく面識がある。

「まったく……あいつら張り切り過ぎだつてのな。とくに源次がひでえ。なにが紳士だつての。紳士と書いてクズだぜ、あれは」

「……渚さん、そのネタはいつもながらどうかと思いますが」

「ああ？ お前だつて知つてるだろ？ いつも綺麗な身振りで覆い隠しているけど、その心の奥底じゃ魔族に対してどういう心情を抱えているのか。ネタじゃねえよ、ありやマジもんのクズだぜ？ あたしがいつつもどういふ思いであれと一緒の部屋で上様と謁見しているのかわかるかあ、おい？ ああ、ああああッツ!! 思い出しただけでも腹立つぜ！ 明らかにあたしの事をグサグサと気で突き刺してきやがるしよ！ しかも上様に気取られないように計らいながらだぜ!! 何度こつちの気で刺し貫こうかと思つた事か!? ああ、殴りてえ、蹴り飛ばしてえ……!! しまいにやぶつ殺——」

キーンッ！ と天井を仰ぎながらばりばりと頭を搔きむしりながら愚痴りだす。見た目が見た目のため子供がかんしゃくを起こしているかのように見えるが、実際彼女はまだ若いので問題ない。



ひとしきり掻きむしりながらぐちぐちとその源次とやらに對して陰口を言い続けた渚だったが、最後に大きいため息をついて乱れた髪を軽くなでつけて整え、「……お茶あるか？」とぼつりと漏らす。

そういえばまだお茶を用意してなかったか、と思い出したところで静かに襖の向こうから女中が「失礼します、お茶をお持ちしました」と声を掛けてきた。

海が「どうぞ」と声を掛け、空が開かれた襖から差し出されるお茶のセットを受け取り、渚の近くまで寄ってお茶を淹れ始めた。ほのかに香るお茶の匂いがゆつくりと鼻をくすぐり、「どうぞ」と空が差し出した湯呑を受け取り、渚はそれを口に含む。

「……ん、いつもながら空の淹れるお茶はいいな」

「ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げ、一緒に用意されたお茶菓子の羊羹を差し出した。また一礼してその場を離れ、次は海へとお茶と羊羹を差し出す。それを終えるとまた海の後ろに控えるように正座した。

「……ふう。えっと、どこまで話したっけ」

「あの御三方が動いている、というところまでかと」

「ああ、そうだった。うん、あいつらが動いたという事で、あたしの方も少し手数を増やそうかと思つたわけだ。本家の方にも通達し、でもって現場に近いこつちでも動いて

もらおう、という事ね。……その中に、お前達も含みたいと思っている」

「それはつまり、私達も動け、ということですか？」

じつと渚を見つめて海が問えば、「ああ」と一言頷いて肯定する。

「若手、熟練問わない。とりあえず複数の人員を動員し、お前達も直に動いて捜索してくれ。そしてあたしに時折連絡しろ。可能なら辻斬りの正体に辿り着き、シユヴァルツ一族の血縁者か否かを確認。ただの人間だったらそれを上様に伝え、シユヴァルツ一族抹殺は取りやめていただけるように計らってみる」

「……渚さん自身はシユヴァルツ一族に対する抹殺は否定的、ということでもよろしいんですかね？」

「まあ、な。あの命令は上様の言葉を伝えたものだが、一応時間稼ぎは出来そうだからな。もちろん、危険なシユヴァルツの奴を見つけたら手を下す事は許可するけど、そうでないなら手を出すな。とにかく今は情報が欲しい。辻斬りの事、東方にいるシユヴァルツの血統はどれだけいるのか……その辺りを探ってくれ」

『承知しました』

一礼して受理するが話はまだ終わっていないらしい。懐から手帳を取り出し、ページをめくって別の一件について話しだした。

「それともう一つ。各地の領主の一件……こつちについても少し調査の幅を広げてほし

「いんだけど」

「領主の一件……悪政を布いている者達が死んでいるというものですね？」

「うん、それ。犠牲になつてゐる奴の中にはヤマト国に属する奴もいるからな。調べてみればどれくらいのおくどきかも知れない。領主として問題がある奴がうちの国、国に属さない関係なしに死んでゐるって事がわかつた。これも人為的な奴だろうけど、これも不可解。空いた領主の穴には以前よりもましな奴がついてゐる事もあるけど、それ以外は吸収されてゐるか放置されてゐるか。こつちの犯人ホシについても時間、機会があれば調べといてくれ」

『承知しました』

また頭を下げる二人に頷いた渚。湯呑を手にしてまたお茶を飲んだところ、不意に視線が廊下の方へと向けられる。赤い瞳がすつと細められ、そして小さく息をつく。

手にしている湯呑を口から離し、「聞き耳立てんなよ、その」と声を掛けた。するとそこには誰もいなかったはずなのにうつつすらと揺らめく影が浮かび上がり、「あらん、バレちゃったわねん」と聞き覚えのある声と口調が聞こえてきた。

静かに襖を開けた先には三人が想像した通りの人物がそこにいた。

霧夜狭間。

一族の中でも変わり種と目される存在で、実質的な変た……いや、変人。

想像通りなのだが、実際に目の当たりにした事で渚は小さく呻いて嫌そうな表情を浮かべた。もしお茶を飲み続けていたならば大変なことになっていたかもしれない。

なにせ狭間のその出で立ち常人ならばしないであろう恰好だった。

上半身は裸。その上に深い山奥の景色を描いた柄に霧夜の紋章をつけた羽織を纏うだけ。その裾は長く、膝近くまで伸びていて、その下には黒い袴を履いている。

つまり羽織に隠されているが、帯で結んだりしていないのでちらちらとその鍛え上げられた体が晒されている状態だ。

「話は聞かせてもらったわ、渚ちゃん」

「もらったんじゃないなくて盗み聞きしてたんだろが、てめえはよ。……まあ、らしいっちゃらしいし、どうせこの話は海から伝わるからいいけどさ。それよりも、だ……その恰好は何とかならねえのかよ?」

「あらん? 私の肉体美にメロメロかしらん? いいわよ、好きだけ見て」

ウインク一つするとそのままポーズングを次々と決めていく。羽織に隠されてはいるがそれでもわかる程に鍛え上げられた肉体と丸太のように太い腕。その見た目に反してさわやかな笑顔で見せつけるように決めていくものだから、逆に渚の表情は険しくなっていく。

ぶるぶると拳を震わせると、甲高い音を立てて湯呑を握り潰し、くわつと目をひん剥

いて勢いよく立ちあがると、その勢いを殺さずに狭間へとドロップキックを仕掛けていった。

「きめえわ、こんなにやろおっ!」

「おお、ふっ!」

見た目は若い少女だが、その秘められた力は凄まじい。何せ血統には砂漠の暴君と謳われたディアブロスの因子が含まれているため、その華奢な体に反して凄まじい怪力を保有している。

当然その脚力も高く、いくら狭間が鍛え上げられた肉体を持っていたとしても彼女のドロップキックを受ければただでは済まない。

開けっ放しになっている襖から一気に庭園へと吹き飛ばされ、離れた所にある池に落下していった。そんな彼を吹き飛ばした者は廊下へと着地する。ふう、と息を吐いて軽く体を伸ばしながら一仕事した、と汗を拭う。

だがすぐに狭間が池から出てくると、

「いやーん、もう! お風呂に入ったばかりだっていうのに……こんなに濡れちゃって。

……はっ、これが水も滴るいいお——」

「そのまま溺死しとけ」

淡々と口にしながらかに一気に距離を詰め、こめかみを蹴り落としてまた池に沈めてしま

う。そのまま渚は池のふちに手を付けて受け身を取り、自分は池に落ちないようにした。落とした相手である狭間には振り返らず、ずんずんと部屋へと戻っていく。

「んもう……本当に渚ちゃんは元気ねー。今の一撃、効いたわあ……」

そんな彼女の背後で狭間は何事もなかったかのように立ち上がる。明らかにやばい音を立てて勢いよく沈んだはずだが……ああも平気な顔をするとは流石と言うべきか頑丈というべきか。

池に落ちた事で濡れているが、軽く頬を撫でながら何かを短く呟くと彼の羽織が下から巻き上がってくる。彼の周りには暖かい風が吹いており、濡れてしまった体を乾かし始めている。

更に顔を横に振って痛みを紛らわし、渚に続いて部屋へと戻っていく。

「でも、やっぱりそう怒った顔も可愛いわねえ。愛で甲斐があるわん。抱きしめて、いいかしらん？」

「やめろ！ 寄んな、変態！ オネエ！ 無駄に頑丈な筋肉しやがって！」

「あらん、ひどいわあ。というか、最後の方は褒め言葉よねん？ ありがたいことだけども、今はそれをぐつと堪えておくわ。話が、あるからねん」

罵倒された事でうつすらと目に涙が浮かび、それをそつと拭いながらも片方の手で自分を抱きしめながらいやいやするように体をくねらせる。そんな様子を顔を強張ら

せながらも微笑を崩さない海、それでもあくまで無表情を貫く空が見守り、渚はまた「きめえ動きしてんな変態！」とまた飛び蹴りを仕掛けていく。

「あらーん!？」

と気の抜けるような声と共に吹き飛ばされる狭間かと思いきや、どろん、と吹き飛ばされた狭間が煙に消え、着地した渚の傍に音もなく現れる。そのまま一礼しながら座布団へと両手で示してやれば、舌打ちしながら渚が不機嫌そうに音を立てながら座布団へと向かっていく。

元の座布団に腰掛けた渚を見据え、改めて狭間がこほん咳を一つして「源次ちゃん達、どういうルートを辿っているのか、私が調べてきましようか？」と何事もなかったかのように口にする。続けて頬に手を当てながらくねり、と体をしならせ、

「どうせ源次ちゃん達もここそこ隠れて、各地に部下を潜らせて独自に調べを進めてるんでしようからね。……いや、もしかすると灯ちゃんあかりはヤマト国に留まって上様の様子を見ているのかしらん？」

「……っ、ああ、そうだよ。灯だけはあつちにいる。行動しているのはクズともう一人さ」

その動きにまたイラツとして蹴り飛ばしそうになったがそれを堪え、何とか質問に対する答えを口にする。一方狭間は先ほど見せた動きをやめて真剣な表情を見せている。

その切り替えにまたイラツとするが、これでは狭間の思うがままという事を察して心を落ち着かせる。

どうせまた「そう怒った顔も可愛らしいわん」とでも言うのだろうから。

「そう。ということは灯ちゃんの方は渚ちゃんが見ている、という事でいいのねん？」  
「そうだな。上様のことと、あたし達、お互いのことを睨み合いさ。たぶん灯のことさ、あたしがこつちに来ていることはバレてるんだらうけどさ。でも、それでも使えるものは使わねーとな」

そうしてお茶を飲もうとしたようだが、先ほど自分が握りつぶした事を思いだしてため息をつく。しかしいつの間にかやら空が女中を呼んで替えの湯呑を用意させていた。それを受け取ってお茶を注ぎ、ぐいっと飲み干していく。

「……ま、そういうわけだ。メンバーの選出はお前に任せる。なかなか尻尾を掴めない事例だから難しいかもしれないけど、それでも何とかあいつらよりも早く情報を掴んでくれ。……久々の抹殺相手があつたシュヴァルツ一族ともなれば、お前らも多くの犠牲を生みかねない。優秀な忍の数を減らすのはあたしにはきついからさ」

「抹殺対象、か。確かにシュヴァルツ一族との交戦は避けたいな」

霧夜一族は情報収集などを担当するが、当然ながら暗殺も担当する。陰で危険な相手や上から命じられた人物を殺してきた。もちろん海と空も過去に人を殺した経験があ



り、だがそれを仕事上の任務だと割り切っている。

自分達は日の当たらない場所に存在する忍であり、主に命じられたことを遂行していくのみ。

そんな彼ら戦闘訓練を受けているが、かといってそれでシュヴァルツ一族のものに勝てるかどうかはわからない。積み重ねた鍛錬の成果を十分に発揮できればまだ戦えるだろうが、それでも天性の戦闘才能を前に勝てるかがわからない。

更に言えばあの血に刷り込まれた殺気と覇気を、凄まじい勢いでぶつけられればどうなるかもわからない。

暗殺が成功すればそんな心配もないだろうが、気づかれて戦闘に入ればこの心配が現実になる。そうなれば現場に向かった霧夜の者らの大半の死亡……あるいは全滅だ。任務のためならば死をも厭わないが、かといって多くの仲間を失うのは厳しい。

「それは想定できる最終的な最悪な事態。そうならないためにも、頑張ってくれ」  
『承知しました』

それを伝え終えるとじっと二人を見つめて小さく頷き、渚は廊下に出ていく。その際廊下側にいた狭間とすれ違い、「クズらの事は手掛かりが見つかり次第報告してくれよな。……真面目にやれよ?」と言い残し、「承知したわん。そう心配しなくても大丈夫よん。任せなさい」と返事が返ってくる。

「本当に大丈夫かあ？」と怪訝な表情を浮かべるも、普段はこれでも仕事っぷりは問題ないので一応信じる事にする。そんな彼女を狭間はここにここといい笑顔を見せながら見つめ、僅かに頭を下げて縁側に出る渚を送り出す。

「じゃ、あたしはこれで。メンバー選出のことやわかったこと、報告頼むぜ」

「はい。お疲れ様でした」

ばん、と両手を叩いて広げてみせればその両手に浮かんだ紋様が光って粒子が集まり、つばの広い帽子を取り出した。それは頭と角を隠し、広いつばによって影が生まれて目を隠していく。

三人が見送る中、黄土色の翼を広げて空へと舞い上がっていく。霧の結界は空にも広がっているため空からの侵入も防ぐが、許可を得たものはその限りではない。空に上がり、一気に飛行してその姿が小さくなっていく。

それを見送った海はすぐに動いた。

女中を呼ぶと今いる動ける者達を屋敷に集めてもらう事にした。若手、熟練問わずに動ける者を呼び寄せ、先ほど受けた渚からの任務を伝える。今までとは変わらないが、しかし念入りに動かなければならなくなった。

長く里を離れ、それでいて情報収集を得意とする者を改めて選出し、それぞれどこを中心として動くのか。それを打ち合わせるとすぐに動ける者が準備するために屋敷を

後にする。

連絡手段の構築、誰が何を調べるのかを決め終えた時はもう日が暮れており、海と空が里を出る準備をし終えたときはもう日付が変わろうという頃だった。

それはこの里の長として行動していた海が長くここを離れるため、その間里で指揮する者を決めるためだった。いつもそれを務めている者も各地を巡る事になったため、本家から人員を呼び寄せたのだ。

空間転移で送られてきたその人員は海にとって縁深い人物だった。

「里の事、任せたよじい」

「はっ、お任せください」

髭をたくわえた初老の男性。白髪が混じるオールバックで切りそろえられた黒髪、他の者らと同じような耳もどこか皺しわが見られる。しかし歳のせいとその身長は低く子供よりも少し高めという具合だ。

そんな彼の名は霧夜黒鋼きりやくろがね。現頭領の潮に仕える重鎮であり、海が幼い頃は教育係として彼の傍に控えた爺だ。海が成長してからはまた本家へと戻ったが、何かあった際にはこの里へとやってきて海に助言をしてくれる頼りになる執事のようなものである。

今回も里の事を頼むために呼び寄せたようで、こうして里を出る二人の事を見送りに来てくれている。

「空よ、若の事を頼むぞ。何があつても必ず若をお守りするのだ」  
「はい、黒鋼様。この命に代えましても」

黒鋼の言葉に空が胸に手を当てながら一礼する。空の役割はただ海を支えるだけではない。彼の護衛でもあり、緊急時には彼女が命がけで守り通す主でもある。そのために彼女は常に彼の傍に控え、仕えるのだ。

そう在るべきものだ。幼い頃から教えられ、育てられてきている。

そんな彼女に海は一息つき、身を包む黒い外套を翻して「行くよ、空」と促して走り出す。そんな彼に「はい、海様」と応えて空もまた疾走する。

フードを被った二人の素顔は夜の闇によって完全に見えなくなっており、外套によってその姿もまた夜の闇に溶け込んでいる。

だがうつすらとフードの下に二つの紅い星が浮かび上がる。それは二人が疾走することによって四つの流星となり、あつという間に森の中へと消えていく。

二人の疾走速度は落ちる事がない。例え視界の向こうに里を包み込んでいる深い霧が立ちこみ始めようとも、まるでその影響などないかのように走り続ける。

草むらに足を取られる事もなく、行く手を遮る木々や枝にぶつかる事もなく、数分かけて霧が立ちこむ森を駆け、そして抜けていった。

すると紅い流星は何事もなかったかのように消え、二人は暗い森をただただ走り抜け

ていく。

今日この日、霧夜の里から多くの忍が新たなる任務を受け、東方の各地へと散っていった。

だがこれを知るのは限られた者のみ。

彼らはただ陰に潜み、黙々と任務を遂行するのみ。日のあたる者らはそこにいるのが霧夜のものである事など知る事もなく、いつもの日常を過ごすだけだった。

○

そしてある日、とある場所でその者はいつものように晩酌を楽しんでいた。透き通るような色合いをしたその酒は甘みがあつて呑みやすく、彼女にとって馴染み深いものだった。

そんな彼女はぐいっとグラスを傾けて注がれた酒を呑み干すと、酒臭くなりつつある甘い息を吐いて何気なく視線を闇に向ける。

「なんか用？」

すると闇が応えた。

「お嬢様に報告がございます。どうやら乾渚が霧夜の者らに任務を与えた模様です」

「……あ、そう。それについては予想通り。別段驚くような事なんてなーんもないわ。というか渚なら灯らのことなんて読めるでしょーし、霧夜を動かすつてのは容易に思いつくことでしょーよ」

からからとグラスに残った氷をグラスを回転させる事で音を鳴らして遊びつつ気の抜けるような声で呟く。うつすらと顔が紅潮しているところから見て少し酔っているらしい。

ひとしきり氷をいじったあとグラスを机に置き、縁側の向こうの夜空を見上げる。

そこには雲一つない空が広がり、星と満月が彼女を見下ろしていた。

「如何なさいますか、お嬢様」

「そーね、渚が灯あかりのことを読めるように、灯も渚のことは読めるんだわ」

すうつと藍色の目を細め、自分の少し特徴的な耳を軽く弄りだす。それは人間の耳ではなく少し長く尖った耳をしている。月明かりに照らされた彼女の姿はまるでおとぎ話に出てくる姫のようなもので、結われた黒髪や白い肌が夜の庭園と和式の部屋によく映える。

着崩された着物に横座りして何かを考えているかのようなその姿も絵になっていて、見る者のため息づかせるものになっていた。

「……大方辻斬りについて調べることに加えて、領主の一件も調べるはず。ヤマトの領

主もいくつか殺られてるんやろ？」

「はっ」

「そ。じゃあ風間かぜまもそっち方面にも手を回しとき。……ああ、その際風間ら……ひいては灯らのことを調べている輩がいるんだったら、消しとき。それ、ほぼ間違ひなく霧夜だろーし」

「承知しました、お嬢様」

闇が領き、少女は机の灰皿に置いていた煙管を咥え、軽く息を吸つて外へと吐き出した。紫煙がゆらゆらと空へと舞い上がっていき、ゆつくりと消えていく。そんな煙の動きをぼうつと見つめていた少女だったが、何かを思い出したかのように煙管を持つていない左手を軽く挙げた。

「もう一つあったわ」

「何でしょう」

「モガ方面の天気のこと、調べといて」

「はっ、承知しました。何か気がかりな事でもございましたか？」

「うん……なんていうかさ……」

そこでもう一度紫煙を吸い、吐き出す。

その藍色の瞳に感情はなく、何を考えているのかよくわからない表情をしていたが、

彼女は何かを感じ取ったのだろう。その言葉は淡々としていても僅かな確証があるような気がした。

「きな臭い空が、視えた気がしたんだわ」

「……はっ、左様でございませうか」

闇はただ頷き、彼女の命令を受理する。そんな彼に左手に持ち変えた煙管を向け、一度上下に振ってそちらを見る事もなく、「という訳やから、何人かモガに送つとき。そしてほんまにきな臭い空があつたんなら、それ、報告よこして」と淡々と命じた。

「じゃ、そういう訳で」

「失礼いたします」

そこで闇は消える。最後までそちらに視線を向けなかつた彼女はただじつと夜空を見上げるだけ。

しかしその無表情な顔は相変わらず朱がさしており、ぼうつとしてゐる瞳は動く心配がないものの夜空ではない何かを見つめてゐるかのよう。

不意に右手が動いて机に置いてある一升瓶を手に取り、新しくグラスへと酒を注いでいく。左手はとんと、と灰皿に煙管を叩き、一升瓶を置いた右手に持ち変えて紫煙を吸う。「……ふう。さて、既に龍仁りゅうじと鷲輔しゅうすけを動かしている渚なぎさに対し、灯は源次と六花りっか……しかし風間を動かしたら続くように霧夜を動かす。今のところは、五分つて感じかな」



紫煙を堪能してから少し酒を口に含む。まだまだ若い身なりをしているように見えて、その大人の楽しみをする様はどうしてこう小慣れているのだろうか。それも彼女が人間ではなく魔族……でもなく竜人族だからだろう。

つまり彼女もまた見た目に反した年齢をしているという訳だ。

しかしその言動はどこか子供の名残が見えるような気がする。それも彼女が種族としては若い部類に入るからだと思われる。

「さあ、楽しもうか渚。ドーセ上様の命に対して時間稼ぎをしよってんだろうけど、そーはいかない。灯の方が先に見つけ出し、手を下す。……止められるってんなら止めてみせな。辻斬りもろとも不穏分子は肅清したる。そう、今回の戦いは……灯が勝つか  
ら」

その宣誓は、紫煙と共に宵闇へと消えていった。

影の者らの戦いはこちらでも知らない間に始まっていたのだった。

## 24話

山道の途中にそれはある。旅人達の休憩の場であり、山道を行く者達が出会う場所に茶屋。

道の外れの広場に店を構えたそこは木々に囲まれた風流ある場所であり、数人の旅人が店の中や外の席で旅の疲れを癒し、談笑していた。

その茶屋に一人の若者がやってくると「おばちゃん、茶一杯と羊羹一つ！」と声を掛けて外の席の一つに腰掛ける。少して注文した物が運ばれてくると「いただきまーす！」と手を合わせて羊羹の一つを口に放り込み、茶を少し飲む。

はあ、と堪能するように息を一つ付くと、

「……また犠牲者が増えたよ」

とそれまでの気さくな雰囲気はなりを潜め、独り言を呟くような小さな声でそう口にする。

「今度は桜花流の使い手。またしても刀で一太刀。他の者がその周辺を探っているようなんだけど、今のところ犯人ホシと思われる奴は発見できず。またしても逃げられたよう

すぜ」

「……そう。わかった、そのまま数日そこを調べといて。それから、前回からこれまでの情報」

そういう声が彼の背後に座っていた少年から発せられ、隣に座っていた少女が素早く手を動かすと、彼の隣に封筒が置かれていた。それと入れ替わるように背後に座っている少年の隣にも封筒が置かれる。

それを素早く手にして懐に入れると、「じゃ、俺はまた場所を移して調査しとくぜ」と呟き、羊羹をまた口に放る。「うん、頼むよ。隼」と背後の少年が微笑を浮かべて呟くとすつと立ち上がり、「おばちゃん、勘定を」と店主へと声を掛けていった。

それを見送ったその少年は目礼してゆつくりとお茶と羊羹を楽しんでいた。

そう、ここにいたのは霧夜海と空、そして隼だ。

今彼らの出で立ちが里を出た時の忍のような恰好ではなく、どこにでもいるような旅人のものであった。そうやって一般社会に溶け込み、こうして陰で報告し合うのだ。

茶屋を後にした二人は少し山道を歩き、突如疾走を開始して森の中へと入り込む。身なりは旅人の格好のままだが、持ち前の身体能力で木々の枝を飛び移り、一気に移動していく。

そうして誰もいない森の中で止まった二人は先ほど隼から渡された報告書に目を通

していく事にする。そこにはこうあった。

先日桜花流の使い手が辻斬りと思われる人物に殺害される。現場は山道から少し逸れた森の中であり、心臓を通る袈裟斬りによる傷で死亡していた。

発見は旅人の一人であり、その情報を得てからすぐに各員に連絡して包囲網を作ったが発見には至らず。死亡してから数時間しか経っていないのに逃げられたという事は空間転移を行使している可能性が予想されるが確実ではない。

続けてロックラックにてシユヴァルツの血統に連なる者、と思われる人物を確認。しかし彼は至って普通のハンターであり危険な気配は全く感じられない。また一緒に行動していたのがあの『碧空』のダグラス達だったということもあり、不安になる要素は皆無と判断。

以下はその人物についての情報が纏められている。その人となりや経歴も記されており、こうして見る限りでは確かに問題ないように思える。

それに『碧空』のメンバーは、ハンターの間では名の知れた『刀刃』のメンバーとも親交があるというのも大きい。六年前の一件にもこの二つのチームはシユレイド地方へと赴いて参戦していた。これがもし危険なシユヴァルツの血統者ならば、彼らの技術を盗んで己の物とし、裏で辻斬りをしていてもおかしくはない。

しかしその気配もなく、武を高め礼節をわきまえる『刀刃』のメンバーと友人関係に

あるならば問題ないだろう。だが一応この目で確かめるべきか。

幸いこの森を抜ければ砂漠が広がり、その先にロックラックがある。元より二人はロックラックに向かうつもりだったのでちょうどいい。報告書を空にも読ませた海は辺りを見回してみる。

先ほどから何か森の奥で動いている気配を感じ取っていたのだ。

人のものではないということとはモンスターが近づいているのかもしれない。それは空も感じ取ったようで、報告書を封筒に収めて懐に入れ、警戒するように視線を巡らせていく。

「海様、ここは一つ砂漠に向けて走りましょう」

「そうだね。クーラードリンクの用意はしておこうか」

「はい」

モンスターの正体が何であれ絡まれるわけにもいかない。こちらはハンターではなくただの一般人……でもなく忍だ。戦う力は持っているが大型の飛竜を相手にするのではなく人を相手にする技術である。

小型のモンスターならば何とかなるかもしれないが、大型ともなれば話は別だ。魔族の血統としての力を引き出してもどうにかなるのは低確率。

ここは逃げるに限る。

だがどうやら気配は複数……それも集団だったようで、前方に回り込むような気配の動きがあった。これからして大型ではなく小型という事はわかる。

「ギャアツ、ギャアツ！」

木の間から甲高い声を上げて数匹のジャギイが飛び出してきた。それに続けてジャギイノスも現れ、二人が疾走するのに合わせて追いかけてきている。だが忍である二人の疾走速度や血統の影響で、森の中で走り抜けた木々の間を移動したりするには分がある。

このまま交戦せずに逃げ切れれば問題ない。

しかし群れのリーダーはそれを許すつもりはなかったらしい。

「ウオオオオオオン!!」

近くの森の中から獣のような吼えが聞こえてくる。するとジャギイ達の動きがより一層活発になり、続けて吼えた存在が木々の間を抜けて現れる。立派な襟巻を頭部に生やし、ジャギイよりも淡い色合いをする大きな体躯、背中に白いたてがみを生やすそのモンスターは、ドスジャギイ。

ジャギイ、ジャギイノスの群れを率いるリーダーであり、東方のハンターらにとっては初めての大型モンスターの相手として討伐対象にされる存在だ。

しかし一般人からすれば恐怖のモンスターである事には変わりなく、商隊にとっても

厄介な存在である。何せ群れを率いて移動するのだから移動中に襲われでもすればたまらない。ハンターを雇っていないければ被害を受けるのは確実なのだ。

「ドスジャギイか……やれやれ、どうしたものかな……」

「二つ案が」

「聞こうか」

「二つはこのまま逃亡し続ける事。その際は全力を以って逃亡ですが、砂漠入りした後の体力に支障が出るでしょう。一度進路を逸らし、砂上船で向かう方針が選択肢に上がってきます。もう一つは交戦。しかしそれはドスジャギイを止める、という方針で交戦。リーダーさえ抑えれば、後は烏合の衆。逃げる事も容易いでしょう」

話している間も二人は群れから背を向けて逃げ続けている。こうして逃げる者がいれば奴らは追い続けるのみ。ならば奴らを振り切るために本気で疾走するのか、あるいはリーダーを止めて逃げるのか。

「ギャアツ！」

するとジャギイが飛び出して海へと噛みついてくる。だが体を反らす事でやり過ぎし、背後に流れていくジャギイの顔へと肘打ちをして吹き飛ばし、背後から追ってくるジャギイにぶつかってしまった。

しかしそんな程度で群れの追跡は止まらない。ドスジャギイが指令を出すように吼

え、それに従ってジャギイらが動く。

「リーダーを抑えようか」

「承知しました」

一度二人は一気に疾走して群れから距離を取り、そしてそれぞれ武器を取り出して振り返る。海の手には小太刀が、空の手には着物の裾の下、足に巻かれたベルトにある針を取り出して構える。

立ち止まった二人を見て諦めたものと見たドスジャギイではあったが、二人に戦意がある事を悟り、また吼えて指令を下す。それに従い、素早いジャギイ達が一気に二人を取り囲んでいき、続くようにしてジャギイノスがずんずんと加速をつけて二人へと接近していった。

それを迎え撃つように動くのか、と思いきや、二人の姿が一瞬で消える。音を極力抑えて木の幹を蹴って飛び回り、ドスジャギイを守るジャギイノスを小太刀で切り払う。

その間に空がドスジャギイの側面へと回り込み、手にした針を投擲する。その程度では大した痛みを感じないドスジャギイはすぐに空へと振り返り、噛みつきにかかるもバックステップで回避。

しかし囲んでいる数匹のジャギイが体当たりを仕掛けてきた。モンスターとしては



小さい方だが、それでも人ほどの大きさをしているそれが体当たりを仕掛けてくるのだ。ハンター装備をしていない二人、それも私服と変わりない恰好をしていてはかなりの痛みがある。

だが当たらなければどうという事はない。

さつと視線を巡らせ、冷静に空は抜け道を見出してそちらへと跳んでやり過ぎ、前転しながら地面を叩いて受け身を取って起き上り、今度は苦無を手にして近づいてきたジャギイらの頭を貫くように投擲した。

続けてまた裾の下のベルトに手を伸ばして次の針を取り出し、ドスジャギイへと接近していく。

「ウオオオオオオオオンー！」

「ふっ、はあっ！」

海はドスジャギイの隙を作り出すため、とにかく奴の周囲を走りまわって気を引いていた。寄ってくるジャギイノスは小太刀で斬り伏せるも、それでも数があるためなかなか倒れてくれない。

ジャギイと比べて体が大きいだけでなく体力もある。それが群れを成しているためやり辛い。首を斬り、胸を突いて一撃で仕留めようとしているものの、それでも硬い鱗と皮に守られているため仕留められない。

これがモンスターだ。

ハンターでも気を抜けば逆にやられてしまう相手に、忍とはいえ渡り合っているだけでもすごいものだ。

しかし完全に討伐する事は目的ではない。抵抗し続ける海に煮え切らなくなったのか、ドスジャギイも動く。彼に向かって疾走したのを見た空が両手に持つ針を一気に投擲した。

だがそれでも止まらない……かと思われたのだが、突然ドスジャギイが前のめりに転倒し、そのまま痙攣しだす。

「グガ……ヴオ、ヴオオオオオ……!？」

「よし、撤退!」

「はい。粒子化、帰還」

それは空が投擲していた針に秘密がある。先端にはマヒダケを絞ることので出てきた汁を塗っており、対象に突き立てる事で相手に麻痺毒を注入させる事が出来る。本来は人相手に使うものではあるが、緊急時にはこうしてモンスターにも使つて動きを止める事もある。

また針には呪印を刻んでおり、今彼女が口にした言葉を放つ事で投擲した針を回収する事が出来る。黒い針は黒い粒子となって空の下へと帰つてくると、先ほどベルトに収

めていた場所に集まり、針となつて何事もなかつたかのように収まつた。

そしてリーダーが行動不能になつてゐるため、ジャギイ達は戸惑いだしてゐる。中には逃げていく二人を追いかけようとしてゐるものもいるのだが、多くはドスジャギイが心配なようでおろおろとしてゐる。

読み通り、烏合の衆と成り果てたジャギイらの群れから離れる事はもう難しくもない。

二人は振り返る事なく走り続け、ドスジャギイの群れから逃げ切る事が出来た。

それからどれくらい走つただろうか。森を抜け、広大な砂漠地帯へとやつてきた二人はクーラードリンクを飲み、外套を纏つて砂漠を走り抜けていた。途中砂漠のオアシスにある村に立ち寄りたりして休憩をはさみ、日が暮ればホットドリンクを飲んでまた走つて、と繰り返して、ロックラックへとやつて来たのはあれから数日後。

砂漠のオアシスに作られたそこは、東西南北を結ぶ砂上船の中継地点として最大の拠点であり、同時にハンター達にとつての砂漠の拠点。日夜多くの人々が訪れ、去つていく場所であるため街の活気は高く、砂漠の大都市として知られてゐる。

もちろん砂上船だけが航路ではない。空には気球や飛行船が離着陸し、アプトルやアプトノスを利用した竜車も多く出入りしてゐる。もちろんドンドルマと同じくそれ専用の門が存在しており、二人が潜つたのは人が出入りする門だ。

陰に潜む忍である二人ではあるが、その恰好は一般人と何ら変わりない。外套も一般人が着るようなものを似せており、私服として着ている和服も同様だ。その下には暗器が隠されているが、それらも門を潜る前に纏めて隠している。

秘術の一つとして霧夜の者らは呪印を持っており、これは紋様術の一種とされている。紋様に術式を含ませる事で様々な効果を持たせるのだが、大抵の場合は攻撃と補助に使われる。

これを外套に施す事で疑似的な空間魔法を起動させ、暗器や必要な物を収容しているのだ。ハンターらが持つあのローブを持たない霧夜一族らにとつて、これは真似事ではあるが必要な技術として受け継がれている。

これも主である乾家による支援の一つであり、呪印の師ともいえるものだった。渚が何も無い所から帽子を取り出したのもこの魔法の応用とされる。

それにより一般人として通じる事が出来たので、難なくロツクラックへと入る事が出来た。

まず向かうのは拠点として利用する宿。それを確保し、調べるべき事を調べ始める事にする。

最初は報告書にもあつたシユヴァルツの末裔。『碧空』がどこに居るのかを調べ上げ、陰から接近してどのような人物なのかを確認してみた。

結果、報告通り問題ない事を確認。

数時間張り込んでみたがシユヴァルツの闇を感じる事は全くなく、普通のハンターとして行動している事がわかった。それだけでもあの人が件の辻斬りである可能性は感じられず、問題なしと判断。

しかし名簿を作るといふ仕事があるためそれに記録することだけはしておく。

その際、彼らの記録も漁ってみたが、どうやらシユヴァルツの末裔の知り合いはもう一人いるらしい。だが彼は中央、シユレイド方面にいるようで、こつちには来ていないようだ。中年の男性で弓使いとのことだが、どういう人物かまでは記されていない。ただ一つ、イエーガーという名前だけが記されるのみ。そもそもシユレイド地方はここからでは遠すぎるため、調べに行くことも難しい。なので彼については後回しにすることにした。

それからは酒場などに出入りするハンター達を見回して初日を終えた。

そして二人は数日かけてロツクラックにいるハンターを洗い直し、同じようにロツクラックに滞在している他の霧夜の者と連絡を取り合つて情報を集め続ける。だがあの一人以外のシユヴァルツの末裔は確認できなかった。

並行して調べ上げた刀の扱いに長けたハンター、または剣士についても調べてみたが、辻斬りをするような人物は数人程度。しかし彼らが各地で辻斬りをしているとは思

えなかった。

なにせ行動範囲が狭く、候補として挙げられたハンターは全員チームで行動していたためアリバイがある。つまりここにいる者達が辻斬りではないという事だ。

しかしこうも考えられる。

自分達と同じく陰に潜んで一般人と混じっているという可能性も挙げられる。だがその可能性を上げるといふ事は、犯人もまた捜査の目から逃れる術を心得ているという事。

やはり実際に行動に移そうとしている、または移した直後を押さえるしかあるまい。

そこで二人は、過去に名が挙がったシュヴァルツ一族の血統者のリストを再確認してみる事にした。この東方にも伝わっているシュヴァルツの末裔、またはシュヴァルツ一族が名を変えた新たな名字、ルシフェルの性を持つ者らの事だ。

当然この情報は他の霧夜の者らも共有しており、中にはルシフェルの性をする者の足取りを探っている者もいる。

とはいえ大半はあの大事件以降姿を消した、あるいは更に別の名を変えたのが多いため手掛かりはほとんどないに等しい。しかし似ている風貌をしている、最後に確認された地からどう動いたのか、という小さな情報を手に出来れば、あとは持ち前の情報網で探り当てる事も可能だ。

それによって見つけ出した一家も一応少数ではあるが存在する。だがそれは全部シロ。闇を確認できず、ただ新たに記録されるだけに留められているようだ。

「……次はセルシウス・ルシフェル。しかしこちらもシロ。彼女は現在もドンドルマの収容所に繋がれた状態。刑期はまだ終了せず」

「だろうね。彼女の経歴からして以前ならば真つ先に辻斬りに名が挙がるだろうけど、刑に服しているならば不可能か」

あの大事件を起こした者らの下で行動し、各地で多くの人を殺害してきたセルシウス・ルシフェル。その数は百人を下らず、ドンドルマ襲撃事件でも多くのギルドナイトやハンターを殺害している。

しかしそんな彼女は最後まで敵側には属さず、途中で彼らから離れ、従兄弟達と共に行動し、西シユレイド王都ヴェルドに襲撃してきたテオ・テスカトルを相手に共に戦った。それ以外でも各地の狂化竜と戦い、討伐してきている。

その功績を認められ、減刑されたようだがそれでも人間にとつては長く、魔族にとつてはそうでもない刑期を与えられ、収容所に捕えられている。

つまり外に出る事は叶わない。叶うとするならば無償労働をする時か、面会する時ぐらいのものだろうが、後者はないだろう。何せ親しい人物は雲隠れしているのだから。

そう、彼女の従兄弟達、ライム・ルシフェルとクロム・ルシフェルもまた姿を確認で

きていない。

クロム・ルシフェルはそれ以前から姿を消していたが、ココット村に暮らしていたはずのライム・ルシフェルも雲隠れしている。恐らくクロムと共にいなくなっただと思われ  
るが、公式ではその存在は確認できていない。

……そう、あくまで公式では、だ。

霧夜一族は彼らの所在を確認している。

ポツケ村。

ドンドルマから北東にあるフラヒヤ山脈の一角に存在するその村は、何らかの事情を抱えた者達が身を寄せる場所の一つとされている。村の周囲には結界が張られており、探知系統の魔法が通用しないのだ。

その他にも様々な術式で村に暮らす者らを守っており、それに加えて六年前に神倉月が更に強固な結界を張った事でその効果が高まっている。そのおかげでクロムらが身を隠すには十分なものになっている。

以前探りを入れた霧夜の者が確かにクロムらを確認したのだが、偽名を使っている事に加えて姿も少し変えていたので本人らである事を認識できなかった。そうまでして彼らは自分達の正体を隠しているのだ。

ハンター活動も控えめに行っているようで、ほぼ完全に表舞台から退いているらし



い。

それと入れ替わるようにポケ村から外へと出てきた二人のハンター。いや、姉妹ハンターというべきか。

瑠璃・暁・フレアウイング、茉莉・暁・フレアウイング。

調べたところどうやら竜魔族という事を隠しているようで暁という性は名乗らず、フレアウイングとして活動しているらしい。

そんな二人が、このロックラックを拠点として現在活動しているという事を確認したのだ。

「二人は現在クエストに出ている模様。調べたところそう時間もかからず帰還する事がわかりました。問題なければ明日かと」

「そうか。じゃあ二人が帰ってきたら様子を見てみよう。それまでは今出来る限りの情報を集めてみようか」

そうして報告書を見回してみた結果、得られた情報は現在二人は上位ハンターになっているものの、上位と下位を行き来してクエストをこなしているという事。

性を隠すだけでなく竜魔族である事を隠し、魔族として行動しているという事。

そして何より、誰かを探しているという事。

「クエストをこなしつつ、暇があれば人に尋ねて回っている模様。星野翔という男の事

ですね。推測するにあの白銀昴の偽名でしょう。彼らはポツケ村で親交がありましたので」

「……四年前に村を出てロックラックに来てから搜索しているとみていいか。しかしそれでも見つからず。どうやって隠れているのかはまだわからないけど、うちらも搜索の手を伸ばすとするか」

指示予定の一つとして組み込むが、元々そちらの方も搜索の手を伸ばしている。何せ黒崎優羅が目的に挙げられるシュヴァルツの末裔の一人だ。当然ながらその三人にも搜索の手を伸べる。

しかし今のところ手掛かりはなし。

恐らくどこかの山中に拠点を構えて隠れ住んでいるのだろうが、情報が少ないためにまだ見つからず。絶対数が少ないため人海戦術は使えないので地道に搜索していくしかない。

それにしても四年も探し続けているとはなかなか出来る事ではない。まあ、竜魔族なので四年は短いかもしれないが。

「戻ってきた際に張り込みますか？」

「そうだね。情報はあらかた集めたし、後はこの目で確かめるのみ」

「承知しました」

そうして次の日、昼はまたロックラックを巡って情報を集め、日も暮れて砂上船の港の方へと移動する。一般人ではなくハンターがクエストのために出入りする港であり、二人がここを訪れるのは妙な事になる。

だが忍である二人は巧みに動いて人の視界から外れていき、物陰へと身を潜める。その姿は日の当たらない陰に溶け込み、静かにその時を待ち続ける。そして一つの砂上船がやってくると、そこから双子の姉妹が下りてきた。

あれが標的。

陰から見つめる二つの視線は対象を分析し始めている。実力はハンターというだけあってなかなかのもの、何か楽しみに話しているようだという事を感じ取った。そんな二人を周りのハンター達は楽しげだ、と笑っている。

なるほど、親交はあるようだ。そんな彼らと共に港を後にすると、二人から先回りして飲食店へと入っていく。その前に酒場やトレードの店を訪れたようだが気づかれる事はなかった。

身なりを普通の人物となんら変わりなくし、店に入って周りの席を見渡せる席へとついで注文する。海はステーキセット、空はハンバーグセットだ。

運ばれてきた料理を食べていると二人がやってきて席に着き、多くの料理を注文して

いく。そうして陰で二人の様子を見ていたが、不意に妹の方が辺りを見回してきたため視線を外し、静かに料理を食べ進めていく。

それからも聞き耳を立てたり僅かに覗き見したりしていたのだがなにも起こる事はなく、普通に姉妹の談笑を進めて夕食を終えていた。……まあ、周りの客があの子があれだけの肉料理を平らげていく様に、驚きの表情を見せていたという面白い光景が見られただけでもいいでしょう。

二人が利用している宿へと戻っていくのを見送り、こつそりと次の予定を探ってみたところ、どうやら明日にはロツクラックを後にする事がわかった。本来ならそれについていきたいところではあるのだが――

――残念ながらそれもいかない。

二人の宿へと戻ってくると窓に一羽の梟がやってくる。その足に結ばれた手紙を受け取り、内容に目を通して見るとモガ方面で怪しい動きがあったとのことだった。そちらを担当していた一人の忍が行方知らずになっており、怪しい動きを確認したポイント付近で失踪している。

確認しに向かった者の見解では、妙に現場が修正されているのではないかという事だった。まるでそこにあつたものを消し去り、何事もないように整えたような気配を感じ、これは誰かがその忍を殺害し、死体を回収して現場を綺麗にしたと思われる。

「……空はどう思う?」

「風間の手によるものかと」

「それしかない、か。となればあの二人に関しては他の者に任せるとして、俺達はモガに進もう。風間が動いているとなればまず間違はなくあの方の命令だろう。乾様が俺達を動かしているのをどこかで察知し、風間を動かしたのだろうね」

風間を従えているのはあの灯だという事は海達も知っている。主である渚が灯と少々睨み合いをしているように、霧夜も風間とは同じ忍という事もあつて浅はかならぬ縁がある。

時に共同で任務をこなす事があるが、時にはお互い潰し合う事もある。それはもちろんお互いの忍を殺し合うことだつてあつた。むしろ二つの一族は過去は殲滅し合う仲であり、それぞれ二つの家を主に持つ事で休戦となる。

とはいえ任務さえかぶり、それによつてお互いが障害となれば容赦なく抹殺していく事になるのだが。

つまり今回もそれにあたる。

風間の存在に気づき、探つた者が逆に殺られてしまったのではないかという推測だ。

こうなれば自分達が出向き、調査を交代して進めていく事にする。その旨を他の者達に通達。文面をしたためると梟の足へと結び、窓の外へと放つてやる。すると夜の闇に

溶け込むように茶色い翼を羽ばたかせて飛んでいく。それを見送り、宿を出る準備を進めていった。

砂上船に乗ればどうやらあの姉妹も乗っていたようで、何事もないかのように振る舞って客の一人として過ごす。そこで客の顔ぶれを確認してみると、どうやら女性の竜人族のペアがいるようだ。

珍しいな、と思いつつも確認してみるが……奇妙な感覚がする。気のせいかもしれないが、相手の方も自分達が魔族のペアという事もあって、興味深そうにしていたのでじろじろと見る事は出来なかった。

しかし……どこかで見たような気がするのだが……はて。

そんな事もあった数時間の砂漠の航海を経て港に到着すると、空は藍色に染まりつつあった。砂上船を降りた客達はそのままこの港町で一泊していくのだが、海と空はこのまま休まずにモガ方面へと移動する事になる。

その際の双子の姉妹の背を見つけ、何気なく彼女達が宿に入っていく姿を見送っていく。するとまた視線に気づいたのか妹がきよろきよろと辺りを見回してくるのだが、自分達には気づかず中へと入っていった。

無言で着ている外套の位置を直し、二人は南に向かって走り出す。

数日かけて森を越え山を越え、突き進んだ先には海に面する地方。かの伝説を刻んだ

中心地であるタンジアの港やモガの村などの漁村が存在する場所だ。

のどかな地方ではあるが、今ここに不穏分子が侵入していく事になる。

「……向こうに通達。霧夜海、霧夜空がモガへと移動を開始した、と」

「了解」

当然ながらそれを察知しない彼らではなかった。建物の陰に潜んでいた二人の忍が動き出す。町を後にした二人とは別の方へと動き、独自の連絡ルートを使って仲間へと知らせていく。

「逃しはせんよ。こつちも仕事なんでね、情報は我々が入手させてもらう」

最後に二人が去っていく方を見た忍もまた闇の中へと走り出す。肩に乗せている梟に何かを囁きかけるかのように普通の言葉ではないものを口にし、それを受けて梟が一鳴きして空へと舞い上がっていく。

それを見送る事もなく、忍は闇へと消えて別ルートからモガ地方へと向かうのだった。

## 25話

モガの村。

海に面した漁村であり、近くには広大な森、モガの森が広がっている。北西に進めば砂原が、北東に進めば海近くに盛り上がった火山が存在しており、これらに生息する大型モンスターがどういうわけかモガの森にやってくる事もある。

モンスターの気持ちはわからないが、彼らはモガの森の環境を気に入っているのか数日居座つて去つていくという。

一体この広大な森や海のどこに惹かれる要素があるのかと興味が尽きないが、しかしモガの村に滞在しているハンターが優秀なので緊急時にはハンターが出向いて処理しているようだ。

そんな一種の魔境と呼ばれているモガの森の近くまでやって来た海と空。ここは噂通り一種の魔境だった。

「……どうしてあれがいるんだろうね？」

「魔境だからでしょう。今日はこのままここで夜を明かしましょう」



二人は現在木の上に身を潜めている。視線は下に向けられており、そこには複数の小さな影が徘徊していた。その中に一つ大きな影がある。燃えるような暖色の中に黒い斑が点々とあり、首元に白い袋がある。

ドスフロギイ。

フロギイと呼ばれる小型のモンスターを率いる群れのリーダーであり、主に水没林や火山などの暖かな環境をした場所に生息している。喉袋で生成した毒霧を獲物に吹きかける事で弱らせ、捕食する狩りを行う事で知られている。

どうやら近くの水没林か火山から群れが移動してきたらしい。本来ならばこういう森には見かけられないというのに、これがモガの森が魔境と呼ばれる一端となっているのか、と海はその群れを見つめながら実感する。

夜の闇に紛れてきよきよと辺りを見回して獲物がいないかを探り、移動している。中心でありリーダーであるドスフロギイも獲物だけでなく敵がいなかを探るように視線を巡らせていた。

しかし何もいないことを確認し、静かに彼らはその場を離れていく。

群れの規模は小さい方で従えているフロギイも二、三十の間だ。それでも一般人からすれば十分脅威なのだが、ハンター達にとっても油断すれば自分達が狩られる規模。

そして二人にとっても手を出すべき相手ではない。幸い向こうは気配を消して身を

潜めている二人に気づいていないのでこのままやり過ぎす事が出来る。

動かなければ気づかれずに一夜を明かせる。

霧夜は別名、夜の一族とも呼ばれ、夜こそが彼らの本領。夜の闇に紛れて行動し、暗殺する事こそ霧夜一族が裏で名を馳せた一因だ。夜の闇は彼らにとつては障害にはならず、問題なく周りの状況を把握する事が出来る目を持つ。

しかしあくまでもそれは人を相手にする際の話であり、モンスターを相手にする場合は先に相手よりも敵を認識し、隠れる事しか出来ない。交戦するのは得策ではないのだ。

故に二人はこのまま枝の上に待機したまま待つしかない。

一度仮眠をして体を休めるため、そのまま二人は木にもたれかかって目を閉じた。

それからどれくらい時間が経ったのだろうか。不意に奇妙なものを感じ取って空は目を覚ました。

「……………これは」

僅かに感じられたぴりぴりとした空気。それが彼女の意識を呼び覚ました。続いて鼻をくすぐってくるこの香り。鉄分を多く含んだこの匂いは大量の血だ。あのドスフロギイらが獲物を狩ってきたのか、と考えたがそれにしては何かがおかしい。

向かいの木で休んでいる海もそれを感じとったようで、目を覚まして辺りを見回して

いる。

二人は視線を交差させ、小さく頷いて立ち上がり、杖を蹴って飛び移っていく。その目はまた赤い星を浮かばせ、それは軌跡となって二人が通ったあとに僅かな光を残す。だがそれも数秒だけ。流星はすぐに消え、しかし二人にとってはその数秒が彼らの目の感知能力を高める要因となる。

これは霧夜一族に迅流ナルガクルガの因子が含まれているためだ。その特徴として耳がナルガクルガに近しいものになるだけでなく、視覚的にも夜行性であるナルガクルガの特徴を引き継いでいる。

通常の視覚にナルガクルガの力を合わせる際に目が赤く光るのが特徴で、こうする事によっていつも以上に感覚が鋭敏になるのだ。そうして血の匂いと辺りの様子を探りながら進んでいくと、そう時間もかからずに現場へと到着する事が出来た。

「これは……!?!」

そこで見たものはまさに凄惨な現場。しかしハンターにとってはいつもの光景。だがそれにしてもこれはなんだ？

さつきまで活動していたロスフロギイの群れが一瞬にして全滅していたのだ。

従えていたフロギイは鋭利な刃によって斬り捨てられ、リーダーであるロスフロギイもまた首を刎ねられる事で一撃死している。死体から流れ落ちる新鮮な血が赤い海を

生み出し、強い匂いを辺りに広げている。

「ハンターによるもの? ……いや、それにしても人の気配がない。それにハンターならば素材を剥ぎ取っていくもの。これではまるで斬り捨て……辻斬りじゃないか」

「傷の具合からして剣、刀でしょう。こうなつてからおよそ五、十五分程度しか経過せず。つまり犯人はまだこの周囲にいると推測」

「これがもしあの辻斬りによるものならついに尻尾を見つけた……! 周囲を散策する。空は向こうを頼むよ」

「承知しました」

一礼して空が森の中へと消えていき、続けて反対側の方へと海が跳ぶ。時間が時間だ。こんな深夜に自分達以外の誰かがいるとなれば、それは恐らくあの現場を作り上げた誰かという可能性が高い。

しばらく森を巡って散策してみたのだが、やはりというべきかそれらしい姿は見つからない。木の枝に飛び移って辺りを見回した海は小さく舌打ちし、

「くそお……失態だ……! せっかくの好機を無駄にした……!」

悪態をつきながら木の幹を殴りつける。モンスターには関わらない、というスタンスを貫いたが故に逃してしまった好機。ハンターではないため仕方がないといえど仕方がないが、それでも巡ってきた辻斬りの正体に辿り着けるかもしれないチャンスがなく

なつたのは事実。

「その不甲斐なさに苛立ち、自分のミスに悔しさが湧き上がってくる。

そんな彼の下に空は音もなくやってくると、「海様、そうご自分を責めないでください」と頭を下げながら進言する。

「わたしも気づかなかつたのです。あなた様だけの責ではありません」

「……………」

「どうか、それ以上は」

「……………わかつた。すまない、空」

「いえ」

控えめながらも彼女は海の事を案じていた。確かに彼女の言う通り、共に彼女も仮眠を取っていたのだ。海が気づかなかつたように彼女もあの動きを気取る事が出来なかつた。この好機を逃したのは海だけではないのだ。

そんな彼女からこうも言われては領くしかない。幹を殴り続けていた手を離し、一息ついて彼女に向き直る。

その時、闇の中に奇妙な気配を感じ取った。それから素早く二人は木の幹の陰に隠れ、そつとその先を見つめてみる。確かにそこには何かが……いや、誰かがいる。恐らく、二人。

その気配の隠し方、闇への溶け込み方からして思い当るのは一つしかない。

どうやら本当に居たらしい。二人の体は少しずつ緊張状態に移行する。だがひどく緊張しては動きに支障が出る。ゆっくりと呼吸して気分を落ち着かせていく。

懐へと手を入れて暗器を手にし、離れた所にいる空へとアイコンタクトをし、二人は一気に移動を開始した。

それに反応して向こうも動き、四つの影が高速で木々を跳び回る。

「っー」

「しっー」

海が投擲した苦無は敵対している一人が手にしている小太刀によって弾かれる。だが問題ない。その隙をついて枝を蹴り、一気に距離を詰めていく。そうして袖の下に隠していた短剣を落として握りしめ、勢いを殺さずに相手の胸へと突き入れた。

「が、ふ……っ」

反応したようだが防御が間に合わなかったらしい。短剣は相手の胸を貫き、だが着込んでいた鎖帷子によって致命傷は避けられたようだ。それを感じとって海は枝に着地した際に一度横へと跳んだ。

反撃として振るわれた敵の小太刀が先ほどまで海がいた場所を薙ぎ、そして敵は突き立てられた短剣を抜いて海へと投擲する。だがそれは木の幹に隠れた海には当たらない。

い。

「風間二人、か。あいつらがドスフロギイを殺つた……とは考えづらい。あれだけの数を一瞬にして殺せるほど戦闘実力はないはず……ふっ！」

隠れながら敵、風間の忍二人の事を考えていると、側面から回り込んできた先ほどの忍が苦無を複数投擲してきた。幹を盾にしつつ回り込んで避け、枝を蹴って更に回り込んでいく。

すると空と戦っていた忍が前方へと跳んできた。

「っ!？」

息を呑む間もなく構えられた二刀の小太刀を振るい、距離を詰められた海ではあるが冷静さを取り戻して袖の下から鎖を繋いだ短剣を投擲。離れた所にある幹に突き立て、鎖を使って体を一気に木の幹へと引き戻させる。

「なにつ!？」

木の幹へと到達して短剣を抜き、袖の下へと戻して再び跳躍。並んできた空と共に一気に忍二人へと接近していく。当然忍は距離を取って体勢を立て直して反撃しようとするが、いつの間にか辺りに張り巡らされていた糸が二人を絡め取っていた。

「鋼糸……だと」

忍の一人が信じられない、という風に呟く。木々の間に張り巡らされていた極細の糸

は空の両手から伸びていた。それによってまるで蜘蛛の巣に捕まった得物の如く空中に縫い付けられることになる。

何とか脱出しようとしているようだが、そう簡単に切れる程この鋼糸は軟ではない。動けば動く程ギリギリと体を締め上げ、動きを封じていく。そんな二人へと接近した海は小太刀を構えてその額へと突き入れた。

流石にその一撃は防ぐことは不可能で、一撃ずつ突き入れて二人を抹殺。物言わぬ肉塊と成り果てたそれらを地面に下ろし、何か持っていないかと懐などを探っていく事にした。

しかし出てくるのは暗器などの忍道具。血濡れの武器はなく、どう考えてもあのドスフロギイを始末したと思われるものはない。

やはりこの忍らは海と空と同じく辻斬りについて調べている……いや、いたと推測。モガ地方を探っていたがそこで同じように捜査の手を伸ばしていた霧夜の忍と遭遇、殺害。

それが海に伝わり、こうして二人がやって来たのを察知して同じように暗殺しようとしたんだろうが……残念ながら返り討ちに終わってしまった。こんな感じだろうか。

「辻斬りの正体には辿り着いていない模様」

「そうか、残念だ」



この二人に関わった事で時間も食われてしまった。あの犯人は完全ホシに逃げただろう。今日のところはこれまでだ。

しかし得られたものはある。

辻斬りと思われる存在がこの近くに潜伏しているのではないかという事。

風間一族の忍が本場に各地に散っているという事。

この二つだ。

前者は思わぬ収穫だが、後者は予想通りといった風か。こうなれば少し拠点構えて待ち構えてみよう。その拠点候補はただ一つしかない。

モガの村。

あの漁村に一般人として入り込んで拠点としよう。

「モガの村に入り込もう。小さいけど滞在する分には問題ないはず」  
「そうですね。わたしも賛成です。ではこれらの処理をするための応援を」

そう言つて空が懐から札を取り出し、短く何かを呟けば札に書かれている文字が淡く光つて力を発揮する。その札を耳元に当てて話しかければそれを通じて相手の声が返ってくる。

一種の通信機となった札を使って用件を伝える。それもまた彼らの技術の一つだった。離れた所にいる仲間へと連絡し、待つ事数分。闇の向こうから数人の忍が現れ、死

体となつた風間の忍を見つめて頷く。

二人がその死体を担ぎ上げ、残つた三人と海と空で協力して後始末をする。戦闘痕は全て消し去り、地面に付着した血は特殊な薬を撒いて他の土と混ぜ合わせ、札を貼つて術を行使する事で周りの土に合わせて同化させる。

これでほじくり返したり混ぜ合わせたりした後を消し去つた。

それを終え、お互いの情報を軽く交換して別れる。向かう先はモガの村。今夜は軽くモガの村付近まで移動し、その後は日が昇るまで仮眠する事にする。

予定を決めれば行動開始。

夜の森を突き抜けていき、再びモガの村へと向かつていった。

モガの村の朝は早い。

漁に出る漁師が船の準備を進めて海へと向かい、畑仕事をする農夫たちはアイルー達を連れて畑へと向かつていく。その中に混じつて村の外れへと向かう影が二つ。それは若い男女であり、それぞれ私服で武器を手にしていた。

何かよからぬことでもするのか、と思うだろうがそうではない。

彼らは広場にやってくるとそれぞれ手にした武器を振るい始めた。少年は長いリーチをした斧、ハンター武器の種類であるスラッシュアックス、少女は片手剣を素振りし

始める。

スラッシュユアックスを手にしてる少年はそのまま素振りするが、片手剣を手にしてる少女は数度素振りすると仮想敵を作って戦い始めた。

縦、斜め、回避してまた振るう。攻撃と回避、これを繰り返して動く彼女の動きは様になっていった。新米のものではない、明らかに手慣れた動きで片手剣を振るっている。彼女が手にしているのは独特の両刃剣で刀身が翡翠色に染まっているものだ。刃の先端が繋がっておらず、数センチにわたって二つに分かれているのが特徴だ。

セクトウノベルデ。

虫素材で作り上げられた麻痺毒を持つ片手剣。補助用の武器ではあるが虫素材という事もある切れ味もなかなかのものだ。

一方少年が手にしているスラッシュユアックスは新緑色に染まっている。鮮やかで落ち着いた色合いをしているが、それは高い威力と毒、切れ味を持つ。

ハイランドグリーズ。

雌火竜リオレイアの素材を使用した毒属性のスラッシュユアックス。これを両手で構え、音を立てて振るっていくその動きに淀みはない。何百、何千と繰り返してきたことで体に覚えさせたのだ。淡々とこなせるまでに技術は高まっている。

「……朝はようから精が出ますなあ、お二人さん」

そこで若い女性の声が聞こえてくる。声のした方へと視線を向けてみると、桜の柄をした和服を着た女性が佇んでいた。夜色の髪は風になびき、背中近くまで伸びている。雪のように白い肌にそれは非常に合っていた。

その手には番傘が握られており、赤い花が開くようにして広げられていた。

だが何より目を引くのは顔に巻かれている黒い布だろう。目を隠すように巻かれて結われており、残った布はそのまま二つ流されている。これでは視界を確保する事が出来ず、何も見えないだろうが、元より彼女は視力がなかった。

それを示すためののだろうか、こうして目を隠すように布を巻いているのだとか。

「おはようございます、雪菜<sup>ゆきな</sup>さん」

「おはようさん。いつもの散歩ですかい？」

「せやなあ。健康的やから二人もモガの森までどないや？」

「散歩するのはいいけど、その日その日のモガの森の状況的にはただの散歩じゃ収まらないと思うけどね……」

やれやれと首を振る少女。

昔はモガの森も普通に村の人が散歩できるような落ち着いたものだったのだが、今ではどういふわけか大型モンスターが時折現れるようになってしまっている。それでも村の人は見つからないように山の幸を採りに行く事もあるのだが、普通に考えれば危険

である事に変わりはない。

そのため村にいるハンターが時折様子を見に行き、安全かそうでないかを確認しに行かなければならない。

そんな場所ではあるが雪菜は時折散歩の場所として利用している。目が見えていないのに大丈夫か、と思うだろう。だが彼女は目が見えない代わりにそれ以外の感覚が鋭く、本当に見えていないのかと思えるほどに状況把握に長ける。

第三の目、心眼とでもいおうか。これによって周りの様子を把握し、普通に暮らしていく分には問題ない程までの領域に達しているようだ。

しかしこれに至るまではかなり苦労していたらしく、知り合いが常についていなければならなかったと語っている。今ではこうして一人で旅をするまでになり、様々な場所に赴いて風情を楽しんでいるそうだ。

「気をつけてくださいよ、雪菜さん」

「心配あらへんよ檸檬れもん。奥の方には行かへん。軽く近くを回ってくるだけや」

「そう。何かあればすぐにボクらが動くから」

「おおきに。じゃ、行つてくるな」

ぺこり、とたおやかに頭を下げると雪菜はモガの村へと歩いて行つた。柔らかく揺れる長髪と布。優雅ささえ感じさせる足取りで小さくなつていく背中を見送り、二人はま

た朝の鍛錬を再開する。

「ふっ、ふっ、檸檬、今日の予定は……んっ、どうすんじゃない？　なんかクエストあったかいの？」

「さあ、どうかな。後で見に行こうか。どうせ体動かしたいんでしょ、まさき将輝」

武器を振るいながらこれからの事を打ち合わせ。

檸檬の言葉にやり、と笑みを浮かべてハイランドグリーズを振るい続ける。さつきよりも少し元気になっているのは何故だろうか。

「おうよ。モガの森や孤島、砂原ばかりつても仕方ねーとはいえ飽きるつてもんじゃない。たまにや火山に赴きたいところだが……舞い込んでこないよなあ……」

「仕方ないよ。ここは地方の隅に近いからね。近場の狩場ぐらいいしかボクらには届かないよ。それをしようと思えばロックラックに行かないと」

「じゃがここの待機ハンターとしてやってる以上、なかなか離れられないのも事実……。はあ、もどかしいわい」

ため息をつきながらも動かす手を止める事はない。

しかしその顔が少し引き締まり、ゆっくりと空を見上げだした。

「だが……なんじゃろな？　俺の何かが囁きかけんのよ。それに空気が変化しとる。もうすぐ何かが起きるんじゃないかってな」

「ふーん……例えば？」

「そうじゃのう……もうすぐ悪い天気になるってことぐらいかいの」

ひくひく、と鼻を動かしながら将輝は言う。湿っぽい空気だけでなく何か彼の感覚をくすぐっているのだろう。空を睨む彼は高い自信を持ってそれを口に出しているようだった。

それに倣って檸檬も空を見上げてみるが、湿っぽい空気しかわからなかった。

しかし今はまだその予兆らしきものがあるだけで実際に目に見える形に表れてはいない。二人はまた手を動かし始め、朝の鍛錬を続けていくのだった。

一方こちらはモガの森。ここで一夜を明かした海と空の二人は木々の間から差し込み始める太陽の光を感じとり、目を覚ます。高い木の上で眠ることで小型、大型モンスターの目撃つかからないようにし、体を休めた。

懐から固形食糧を取り出して口に放り込み、水筒からお茶を飲む。これが二人の朝食だ。時間を確認し、まだモガの村へと向かわないでおくことにする。

あまり速いうちから向かえばただの旅人と思われる事はない。昼が近い時間帯になれば怪しまれずに村に入れるかもしれない。それまではまだここに留まり、他の者達からの情報をやり取りする事で時間を潰す事にした。

しかしそこで二人は村の方から近づいてくる気配を感じ取った。村人がやってきた

のだろうか、と二人は葉や枝に隠れるように移動する。そうして地面を見下ろし、確認してみると数メートル離れた先に一人の女性が歩いていった。

番傘を手に優雅に道を歩く様はまるでどこかのお姫様のようだ。差し込む朝陽の光が彼女を照らす光景は息を呑む。

だが目を隠す布がミスマツチなように思えるが、それでも白い肌、淡い桜の柄をした着物など彼女の美しさを際立たせる要因がまだ残っている。

「……………」

実際海は息を呑んでいた。

彼女の美しさに言葉を失った……………だけではない。いや、まるで物語の中から出てきたお姫様みたいだ、と思いはした。でもそれ以上に目が見えていないのに、足取りの軽さに驚いていた。

どう見ても一般人……………それも高貴な女性だという事はその身なりと雰囲気、佇まいからわかる。一体どうしてこんな所にいるのだろうか、という疑問もある。

そんな様々な感情が混ざり合い、彼の口から言葉と思考力を奪ってしまった。当然彼を補佐している空が気づかないはずもない。

無言で彼の表情をじっと見つめていた彼女はチラッとあの女性の方を見やり、一瞬で海の傍まで跳ぶと彼の口に手を回し、もう片方の手でその頭をはたく。小さく海が呻い



たが、空が口を押えていたので声が漏れる事はなかった。

「正気に戻りましたか？」

「……あ、うん。ありがとう、空」

「いえ、気にする事はありません。海様がああいうのが好みだという事がわかったので、いい収穫ですよ」

「な、なにをいつているんだい？ 俺は……別に、そういう訳では……」

小声でそんなやり取りをする二人。すぐ隣にいたので極力抑えた声で言葉を交わしているのだが、離れた所にいるあの彼女は不意に見えないはずの目で、二人がいる方へと視線を向けてきた。

「……っ!？」

十メートル以上は離れている上に高低差もある。だというのに彼女は確かに二人へと視線を向けている。だがこちら側を見ているだけであり、きよろきよろと上下左右を見回しており、その度に夜色の髪と余った布が揺れている。

息を呑み、声を出さずにじっとその場で動かない二人は、じっとその女性を見つめ続ける。

「……………誰かおるん？」

その声は問いかけるものではあるが、常人ならばここまで離れているが故に聞こえない

い程に小さな声。だが耳に意識を向け、それだけでなく読唇術も使つて解した言葉。

まず間違ひなく彼女は何かがいるという気配を察知していた。忍である二人の気配の消し方はかなりのもの。一般人が感づくはずがない。

しかし彼女は視覚を失い、それ以外の感覚が鋭くなっているのだと二人は推測した。だからこそ気づけた？

だとしてもこれはとんでもない事だ。

一体彼女は何者なのだろうか。二人の心にそんな疑問が生まれ始める。

「…………ふうん、気のせい、か」

くるくる、と番傘の柄を持つ手で回転させると赤い花がそれに従つて廻り始める。そうして番傘を弄りながら彼女、雪菜はまた歩き出して村の方へと歩き去つていった。

その背中を見送り、二人は彼女がいなくなつたとたん緊張をほぐすように息をついた。

「一般人…………だよね」

「そう見えましたか」

佇まいは優雅で戦う者、という気は感じない。足取りも一般人のものにしか見えず、これも同様だ。身なり、雰囲気…………何もかもが普通。普通じゃないのはその目。視力を失い、布で隠したその顔。

「……目的が出てきたな」

恐である自分達に気づいた、かもしれない程に高められている周囲察知の心眼。

一般人でありながらあそこまでの領域に達した心眼。

それだけのものを手にしたあの女性。

興味が出てくるのは無理もないだろう。

村に行ったらあの女性について調べてみるとしよう。

予定が増えたが特に問題はない。纏めて同時並行して調べていこう。

だが今は時間つぶしだ。昼前に村に訪れる、という予定は崩さない。

数時間森に滞在し、大型モンスターもない事を気配察知で確認。安全を確認して私

服へと着替えて村へと向かっていく。

村の入り口である門を潜り、中へと入っていくとすぐに竜人族の青年がやってくる。

鍛え上げられた肉体をしているが気さくな笑顔を見せ、「よう、お客さんかい？ いらっ

しい、モガの村へ」と手を差し伸べてきた。

海はその手を取り、二人は握手を交わす。空も同じように握手し、

「俺はこの村の村長のセガレつてもんだ。旅人は歓迎するぜ」

「ありがとうございます。俺は桐島海と申します。こちらは従妹の空です」

「こんにちは」

自己紹介をしあった。一般人として行動する際は霧夜ではなく桐島と名乗っている。他の霧夜の者らも当然霧夜の姓を名乗らず、偽名の中で一番使う桐島を使っている。

頭を下げて挨拶する二人にセガレはまた笑顔を見せて頷き、「じゃあうちの宿へと案内しよう」と手で示しながら歩き出した。

宿に向かう途中、海に面したカウンターに二人の男女の姿を確認する。その出で立ち  
はハンターであり、どうやらクエストを確認しているらしい。

片方は全身赤を基準とした装備を身に包み、頭をすっぽりと覆い隠すような防具を被っている。竜ではなく獣……爬虫類のような鱗や甲殻を使用し、肩当てにはオレンジ色の隆起があるものを使用していた。

恐らくあれは赤甲獣ラングロトラの素材を使用した一式だろう。

ロックラックなどで見て回った事である程度ハンター装備というものを見てきているので、あれは男性用装備だという事を察する。

もう片方は少し毒々しい色合いをした皮を使った露出度が少し高めの装備を身に包んでいる。肩、胸の谷間、へそを出し、額当てと軽い印象を見せるが、それでもあれはしっかりとしたハンター装備であり、上位装備とみる。

あれはギギネブラの素材を使用した一式か。

カウンターにいる年若い受付嬢とやりとりしているようで、しかしハンターではない

二人には特に関係はないがどういふ人物なのかは把握しておきたい。

遠目でもどういふ出で立ちをしているのかを横目で見ながらセガレの後をついていった。

そうして案内された宿は純和風、それでいて少しだけ小さい宿だった。まあただの漁村なのでこんなものだろう。そしてここを利用しているのは自分達二人だけでなくもう一人いるらしい。

受付で女将と手続きをしていると、奥の方から一人の女性がやって来た。思わず反応してしまうがそれも僅かなもの。表情を変えずにいられただろうか、と考えたが、よく考えたら彼女は目が見えていないじゃないか。

「……あら？ そちらのお二人さん、知らん人？」

「はい、雪菜さん。新しいお客様です」

「そうなんか。じゃあウチと同じか。……初めまして、になるんかなあ？」

きりゆうゆきな  
桐生雪菜、い

います。よろしゅう」

そう言つて丁寧な頭を下げる彼女。本当にその仕草、流れも様になつている。本当にいいところのお嬢様、お姫様かと疑うくらいだ。そんな人がどうして一人でこんな小さな村に滞在しているんだろう、と疑問を感じずにはいられないが、名乗られたからにはこちらも名乗らないといけない。

「初めまして。桐島海と申します。こちらは従妹の空です」

「こんにちは」

先ほどとあまり変わらない口上で名乗ると、「へえ」と着物の袖で口元を隠しながら小さく笑って見せる。

「もしかして木の桐に島って書くん？」

「はい、そうです」

「これはおもしろい縁やなあ。ウチも木の桐に生きるって書いて桐生なんや。くす、仲よく出来そうやな」

くすくす、と清楚に笑う彼女はそつと手を差し出してきた。白魚のように白い肌に女性らしく小さな手。その手を少し見詰め、海は優しく握って握手する。柔らかいその手を握手しながら感触を確かめるが……特に問題はないように思える。

「よろしゅうな」

「はい、よろしくお願ひします」

挨拶を交わすとペこりと頭を下げて危なげない足取りで宿を後にする。本当に見えるのだろうか、と疑問を感じずにはいられないが、それが彼女の心眼なんだろうか。

そんな風去っていく背中を見つめると、女将さんが、

「驚きました？」

「はい。本当に、見えていないんですか？」

「ええ、見えていないそうですよ。ただ雪菜さんが言うには、人だけでなく自然の音が聞こえてくるそうですよ。それで周りの状況がわかってしまうんだとか」

「そう……ですか」

増々興味深い。

この滞在期間で色々情報を集めていくとしよう。

あのドスフロギイの群れを始末した辻斬りらしき存在の事も気になる。

女将に部屋へと案内されながら海は改めて意を決するのだった。

## 26話

部屋にやってくるやとすぐに二人は動く事にする。空は宿の外へと出ていった雪菜を探しに出ていった。同じ女という事もあつて何かあつた際でも話し相手にはなるだろうと、空が自分から提案してきた。

特に止める理由もないので空に任せる事にし、海は一度札を使って他の霧夜の者へと連絡を交わし、情報交換する。その際桐生雪菜という女性の事について調べてくれないか、と伝えておく。

この村でも彼女について調べるが、外にいる仲間には桐生雪菜はどこ出身なのか、どういう人生を歩んできたのかなどの情報を調べてもらう。それを連絡すると、海も部屋を後にして外に出ていく事にする。

向かう先はあの海の前のカウンター。まだあのハンターの二人がいるのだろうか、と行ってみる事にする。この村に滞在しているハンターはどんな人物なのかを知っているのもいいだろう。

そう考えて海の方へと向かつてみると、まだあの男女が受付嬢と話をしているよう



だった。さりげなく彼らに近づいてみて話を聞いてみる事にする。そうしながらカウンターの隣にあるアイルーが店をやっている料理屋を覗いてみる事にした。

すると店主を務めているアイルーが「いらっしやいニヤ!」と挨拶しながらメニューを手渡してくれる。

それを確認しながらあの二人の会話に聞き耳を立てていく。

「そんじやあやつぱり火山とかのクエはないってことなんかいのう?」

「はい、そうです。ああ、そう気を落とさないでください! あつち方面のものとはなくとも! はい、こうしてクエストは存在していますよ! いかがですか?」

そう言つて笑顔で依頼書をカウンターに置く。こうして望み通りクエストがあるのはいいが、やはり近場のものしかない事に落胆しているらしい。

ヘルムによつて表情が見えないが、何となく雰囲気でそう感じ取れる。

「そんじやどうするよ、檸檬? このラギアのやつで行くか?」

「うん、ボクは構わないよ。じゃあこの孤島のラギアクルスで」

「はい、ラギアクルス一丁! 頑張つてきてくださーい!」

そう言つて元気にぶんぶんと手を振つてくる受付嬢。なかなか元氣澆刺げんきはつらつな少女だ。クエスト受理を終えた二人は埠頭にある船に乗り込み、狩場へと向かつていった。

その様子を見送ると料理を持ってきたアイルーが「どうかしたかニヤ?」と尋ねてき

た。

「いえ……あの受付嬢さん、元気が……」

「元気いっぱいだったってニヤ？ そうだニヤ、あれがアイシヤの持ち味だニヤ」

「そのようですね……」

一般人として振る舞う際はこうして丁寧な喋り方になる。それに加えて渚などの主や目上の人を相手にする際は一人称も私に変化するのが特徴だ。

運ばれてきた海の幸のカレーを口にし、その美味しさにうん、と頷き「美味しいですね、これ」と褒めてみる。するとアイルーは「ありがとうございますニヤ」とお礼を述べながら頭を下げる。

「今ハンターが出ていきましたが、この村にはあの二人のハンターだけですか？」

「今のところはそうですニヤ。以前はまだもう少しハンターさんがいらつしやつたんですが、他の村に支援に行っているんですニヤ」

「そうですか。やっぱりハンターの数は少ないんですね」

「でも、一応これで回っているから何とかなってるんですニヤ」

「モガの森の様子次第では危なくないですか？」

「いや、そうでもないですニヤ。緊急時には飛んできてくれるハンターさんがいるし、セガレさんも武器を手にとんでいくくらいの実力を持っているニヤ」

昨日案内してくれたセガレの事を思いだして海は納得したように頷く。竜人族ではあるがまだ若い部類だったので彼はがっしりとした体をしていた。ハンターとして戦う分には問題なさそうなくらい鍛えられている。

彼なら森に下級、中級ぐらいの大型モンスターが現れたとしても討伐しに行けるんじゃないだろうか、というくらいに雰囲気だ。ハンターが居なくても一頭ぐらいならば村を守ってくれそうではある。

「ではさつき出ていったハンター二人について訊いてもよろしいでしょうか？」

「にや？ 興味あるニヤ？」

「ええ、どんなハンターがこの村を守っているのか、興味があります。モガの森、という奇妙な場所もありますし」

「にやー……確かにあそこは奇妙な場所だニヤ。でも、そうだニヤ。あの森の事を知っているなら興味も湧くニヤね。それじゃあ食事のオトモとして僕のお話を添えるニヤ」  
湯呑に注がれたお茶を飲み干して待機していると、そこに新しいお茶を注いでごはん、と咳を一つしてコックアイルーが話し始める。

「まずラングロスシリーズをつけていた人。彼は赤城将輝さんあかぎまさきというニヤ。武器はスラッシュアックスを使い、前線に出て戦うって人ですニヤ。口調はなかなか荒々しい人ですし、見た目からしてまさに不良不良してるんですが、ああ見えていい人ですニヤ」

「不良……ですか」

「にや。元々は東方人らしい黒髪だったんだけどニヤ、整髪料や染髪料を使って髪を整えているあの外見は奇抜ニヤ。人の感覚ってよくわからないニヤ」

「……どんなものなんです？」

ラングロスヘルムのおかげで顔が見えなかったのでどういう髪型をしているのかわからない。わからなかったが故に興味が湧いてくるというものだ。

すると思いつくように腕を組みながら上を見上げ、そのまま両手で頭を示しながら説明し始める。

「うーんとニヤ、こう……髪の毛が前髪もろとも逆立てるようになってあって、黒髪だった名残がここらへんに広がっててニヤ、こつから先が金髪になってるニヤ。でもって目つきはなかなか怖いニヤ。それが相まって、ああ、この人は柄悪いなって思われるニヤ」

「なるほど……」

荒々しいというのはハンターをしている男性ならよくみる人柄だ。筋肉質な男性、コワモテな人、逆に華奢な体躯をしているのに実際はかなり鍛えられているイケメンも少なからずいる。

だがそれは全体で見れば少数で、やはり外見からして結構きつい印象をみせる男性の方が多し。しかしそれで外見からして不良しているっていうのはなかなかあるようだ

ないかもしれない。

一体どんな人なのだろうか。少しばかり気になってきた。

「次はネブラSシリーズをしていた人ですニヤね。彼女は桜咲檸檬さくらざきれもんさんニヤ。彼女は人の剣術の一つである桜花流の分家筋の生まれと聞いたニヤ」

「桜花流……!?! 確かに剣術の流派の一つと聞いています」

「にや、桜花家からの分家の桜咲家に生まれ、剣術を高めるにつれて剣士ではなくハンターになって各地を巡っているって聞いたニヤ」

「……結構いい所の生まれと思いますが、そんな人がよく不良に見える人とコンビ組んでいますね」

「にやー確かにそうだニヤ。僕もちよつとそれが気になっているんですがニヤ、なかなか機会がないニヤ」

腕を組みながらうんうん唸ってみるコックアイルー。

片や外見からして不良しているらしい少年、片や剣術の名家の分家生まれのお嬢様？

そんな二人がハンターとしてコンビを組んでここで活動している。その馴れ初めは何だったのか、気にならないはずもない。

少しその辺りも調べてみようか、と考えながら海はカレーを食べ進めていった。

一方こちら空はどうしているのか、というと。

宿を出て散歩する雪菜の後を追っていた。もちろん忍らしく陰に隠れてというわけではなく、まるでモガの村を散策するように振る舞いつつ、こつそりと雪菜の後をついて行っている。

番傘の手元をくるくると回しながら足取り軽く村を回り、そのまま海岸線へと出て海を眺め始めた。そんな彼女を見つめ、空は意を決して彼女に話しかけてみる事にする。

だがその前に海を眺めながら雪菜は、

「なんか用でつしやるか？」

「……お気づきに？」

「せやなあ。ウチ、見えへん分、周りの状況がよくわかるんやわ。それで、なんか用なん？」

「そう、ですね。一緒の宿を利用してゐる客同士、お話をしてみたいと思ひまして」

すると雪菜が肩越しに振り返り、「ええな、それ。ウチもあんさんらの事少ーし気になつとつたし、ええよ。話、しよか」と微笑を浮かべてきた。

「では、失礼します」

と一礼しながら雪菜の隣に並ぶ空。それに雪菜も「どうぞ」と頷き、顔を海へと向ける。

海からゆつくりと吹いてくる潮風が肌と髪を撫でつけ、穏やかな波を見つめながら二

人揃って浜辺で佇む。

そうして海を眺めるのは数秒。

番傘を弄って回していた雪菜が不意に僅かに首を傾げてくる。

「それで、なにから話すん？」

「そう、ですね……桐生さんは見た感じどこかのお嬢様、と見受けしますが」

「せやねえ……確かにウチは人が言うお嬢様、つてゆう部類やろうな。ヤマト国の桐生家つてゆうたらその道じゃ結構名の知れた家や」

「ヤマト国………もしや、魔法使い？」

「なんや、知つとるんやなあ。せや、代々魔法使いとして技術を高めとる家や。……あ

あ、そんな家に生まれたウチがどうしてこんな所にいるん？ つて感じ？」

くすり、と微笑を見せる事まで様になっている。彼女の言う通り、確かに雪菜はいいところのお嬢様らしい。それは間違いないし、空の記憶している情報にも、ヤマト国に魔法を扱う事に長けた桐生家というものが存在している。

つまり嘘は言っていないという事だ。

そしてそんな彼女がどうしてこんな辺境にいるのかも気になるので無言で頷いた。

「魔法使いは自然の力を操る。自然の力を感じるなら、実際に自然に触れへんとあかん。やから時期が来れば世界を周る旅に出るんや。今はここ、モガの村で森と海を感じ取っ

てるんや。ここはなかなかええとこやからなあ、ええ感じで力を貰えるんや」

そう言つて左手をおもむろに前に出すと掌の上に青い光が渦を巻いて球体を作り上げていった。それは恐らく海……水の力を圧縮していったもの。涼しい顔で軽く作り上げてしまう程彼女の魔法使いとしての実力は高いようだ。

それにしても、なるほど……魔法使いとして更なる力を得るために世界を巡る。霧夜一族も一応術というか札を使つた秘術を行使するが、自然の力をそのまま使つて術を使う事はしない。

とはいえ属性の粒子を感じられない、という訳ではない。霧夜一族も一応魔族。ナルガクルガという因子を含んでいるし、忍ではあるが完全な武術派という訳でもない。

今だつて目の前で行われている事が海から溢れる水の粒子が集まっているな、という事が感覚的に把握できる程度だ。

「なるほど、修行の一環」

「というわけや。……さて、ウチの事はこれくらいにして、あんさんの事、聞かせてもらおか？」

微笑しながら手のひらに作り上げた水の球も消し去り、そつと空を見えない目で見るとように振り返ってくる。それに空も頷き、当たり前障りのない事を話し始める事にした。

「はい。わたしは海さんと各地を巡つて見聞を広めようと」



「へえ、見聞」

「はい。旅をして様々な人、自然、町などを見て回っています」

「なるほどなあ、ええな、それ。ウチもこうして各地を回って感じたんやけど、旅つてものはええもんや。それも二人旅、あんさんはええ経験をしてる」

「ありがとうございます」

ペこりと頭を下げるとまた二人して海を眺める。しばらくそうしていたが、ちらつと何気なく空は穏やかな雰囲気で見ている雪菜を横目で見てみる。こんなお嬢様が一人旅。家のしきたりなのかもしれないが、盲目の女性が一人で旅するのはどうなのだろうか。

その事が気になった。

「一人で旅をして大丈夫なのですか？ 盗賊の事もあります、モンスターも危険でしょう」

「問題あらへんよ。魔法だけやない、ウチは武術も軽く嗜んどるからな」

「そうですか」

「ん。せやからあんさんが心配することはあらへん。悪漢なんか出てきてもかるーく捻り潰すさかいな。くすくす……」

「……………」

なかなか過激な事を笑顔で言う人だ。しかも袖を口元に当てながらの笑み。同性の自分から見ても実に絵になっていると言わざるを得ない。

潮風に揺れる夜色の長髪に布。見えない目でじつと海を見つめながら番傘を手にして佇む彼女。そんな彼女と忍でありながら一般人として共にいる空。

元々あまり喋る事は控えめな空だったため、気づけばいつしか無言になり一緒に海を眺めるだけになってしまった。

しかし基本的な事は聞いたため、もうお互いの事を話し合うのは今日のところはいいかもしれない。このまま一緒に海を眺め続けるほど仲がいいわけでもないし、空としても性に合わない。

「桐生さん、わたしはこれで失礼します」

「そう？ ほな、またな」

「はい、では」

ぺこりと頭を下げて海から離れ、今入手した情報を海に伝えるために宿へと一度戻る事にする。浜辺を離れ、宿に向かう途中に何気なく船着き場の近くにあるあのカウンターの方へと視線を向けると、そこには主である海が食事をしていた。

ふむ、と小さく頷き、静かに海の方へと近づいていく。

カレーを食べ終えてお茶を飲んでいた海は近づいてくる空の気配に気づき、肩越しに

振り返る。

「こちらで何を？」

「うん、ちよつとここの料理を食べてみようと思つてね」

（あそこにいたハンターについてこのアイルーに訊いてみたのさ）

「そうですか。ではわたしも少し頂きましょう」

（なるほど、お疲れ様です）

表向きの会話と、小声での会話を織り交ぜつつ、空が海の隣に座る。早速コックアイルーが「いらつしやいませニヤ！」とメニューを持ってきて笑顔で声を掛けてくる。

それから空も海に続いて昼食をいただく事になり、雑談を交えながら穏やかな時間を過ごしていった。

○

ヤマト国の首都、京の都。シキ国にも京の都と呼ばれる場所があるため、こちらは西京さいけいと呼ばれている。ここはヤマト国の王が暮らす街であり、中心にはその王宮が聳え立っている。

その王宮の一角、乾渚は与えられている執務室に向かうため長い廊下を歩いていた。

あまり音を立てずにずんずんと廊下を突き進んでいき、しかしその途中で柱の陰に控えていた男性が渚を呼び止める。

「どうかしたか？」

「はっ、海様からの報告です」

小声で応答すると、男性が懐に手を入れて静かに、それでいて素早く渚へと巻物を手渡した。それを受け取り、懐にしまいながら「おう、ありがとな」と礼を述べる。

そうしつづつ歩き出すと、後ろから気配だけでなく姿も建物の陰に溶け込ませながら数歩後ろをついてくる。

「風間、動いてるのかい？」

「はっ、既に我が一族の者が数名、消されていると思われます。逆に我らが風間を返り討ちにした者も数名いますが」

「ちっ、そうかい。灯もそう易々と調査を進めさせてはくれねえってわけだ。でもま、それは予想通りなんだが、大丈夫なんだろうな？」

「はっ。我らはそう軟ではございません。彼らとは何度も事を構えています。後れを取る事は致しません」

十字路になっている角を曲がり、庭園を望む廊下を歩いていけば渚らが集まる三人の執務室がある建物に辿り着く。だがその庭園には兵士が鍛錬に使っているようで、彼ら

の声が聞こえてきた。

自分達の部下が自主練をしているのだろう、と思いつつそちらに視線を向けると、渚の表情が明らかに嫌そうなものになりながら「げっ!」と声を漏らしてしまった。

その驚きのように「どうかされましたか?」と忍が問いつつ彼もそちらに視線を向けてみたらしい。すると納得したように息をついたのが僅かに聞こえてきた。

「おいそこッ! 遅れているぞ、もつと気合い入れんかア! クズがア!!」

『はいっ!』

そこで庭園から一際大きい声でどなり散らす妙齡の男性の声が響いてくる。渚の視線はその声の主に向けられていた。

肩まで伸びた白髪交じりの黒髪に蓄えられたひげ、鋭い眼光をする翡翠色の瞳。その顔つきは歳を積み重ねていると思われるのだが、それを感じさせない程の雰囲気。音量。なかなか元気なお年寄りだ。

しかもがたいもいい。白の服に黒い羽織、袴というシンプルな和服を身に包んでいるが、それでもうつすらとわかる程に鍛えられている。また見た目だけでなく、纏っている気迫も研ぎ澄まされており、あれをそのままぶつけられたら気が弱い人なら気絶しそうだ。

「衛宮様……ですわね」

「はあ……まさかこんな所で衛宮のじーさんを見るとは……厄日だわ」

えみやかねさだ  
衛宮兼定。

このヤマト国、王宮にてその名を知らぬ者はなし。宮を衛まもつという名の通り、代々ヤマト国王を守護する衛宮家に生まれ、生涯現役を謳う老人である。

幼少の頃より武術を仕込まれ、王に仕え、今もなおその任から外れず、軍に属して兵をしごき続ける様子が見かけられており、人は彼を軍神、護神、鬼神などと崇め、称え、恐れている。

彼が生きていれば恐らくヤマト国は滅びないだろうと言われるだけあり、二代にわたって王を敵から守り、支えている。

また彼は人を相手にするだけでなくモンスターをも相手にしており、群れを統括するドス系、アオアシラを相手に無手で単騎討伐したという噂があり、また武器を手にすれば竜種すら相手に戦えるという話もある。

それを信じなかった若手を連れ、ドスファンゴを相手に戦い易々と仕留めて彼らを震え上からせたという実話があるそうだ。

それだけの実力を手にしている彼ではあるが、れっきとした人間である。

彼の強さは幼少から積み重ねた鍛錬と実戦経験であり、今もなおその強さを劣らせずに鍛錬を積み重ねているのだ。生涯現役を謳うだけある。

その強さの全ては王のためであり、ひいてはヤマト国を守るためであり、それが彼の忠信だという。まさにヤマト国の人間国宝といえよう。

だがそんな経歴があり、ああして兵をしごいている様を見る渚の表情は、一刻も早くここから離れたいという気持ちがありありと浮かんでいる。鍛えられているのは自分の隊の兵ではあるが、元々彼らは今は自主練だ。あの人物がいなかったら少し様子を見てみようか、とも考えていたが、彼がいるならば話は別だ。

音も立てずに静かに廊下を歩き去ろうとしたのだが、

「なにをこそこそしている？ 小娘」

「んげっ……」

そんな声が背を向けている兼定から発せられると、また渚は嫌そうな声を漏らしながらびくり、と体を震わせる。その一瞬の内に庭園から渚の目の前まで移動してくる。距離が結構離れていたというのに、わざわざ渚の前に出るだけで瞬間移動とは……ご苦労なこった、と内面で悪態ついてみせる。

「挨拶もなしに行こうとしたな。礼儀がなっていないぞ」

「あーあー、わるうございしましたね。こんにちは、衛宮のじーさん」

「……ふん、相変わらず愛想がないな」

渚も王の直属の部下だが、兼定もまた同じように直属の部下だ。だが彼の場合は近衛

兵であり、しかも王に仕えている時間も渚よりも長い。立場としても信頼としても彼の方が上なのだが、渚は彼の事を「衛宮のじーさん」と呼んでいる。本人が目の前にも、だ。

そんな渚の態度はいつもの事なので怒るような事もせず、鼻を鳴らしながらひげを撫でつける。

「この数日王宮から離れていたようだが、上様の命は遂行しているのか？」

「遂行しようにもその辻斬りが見つからないんじゃないじゃ話になんねえよ。龍仁たちと驚輔が搜索中だ」

「それだけでなく霧夜も動かしただろうか？ そこにもいるようだしな、ん？」

貫くような視線が渚の背後の壁に向けられる。確かにそこには姿を消している忍がいる。あの目に睨まれてもすれば緊張してしまうのは仕方がなく、陰から息を呑むような声が聞こえてきた。

（あーあ、さすがじーさん。あれだけ気配を抑えてるつてのに普通に気づいてやがる）

「まあ、少し動かしたよ、うん」

「そうか。あの小娘も風間を動かしたようだが……ここで余計な揉め事を起こしてくれんなよっ！」

「しねえよ、そんなこと。そこは分別つけてるさ」



「ふん、ならいいのだがな。お前達小娘が陰で潰し合うのはいいが、それ故に任務に支障をきたして上様にご迷惑をかけてくれるな？」

「潰し合うのはいいのかよ」

少し呆れたように肩を竦めてみると、「はっ」と小さく笑って見せた。

「お前達の因縁なぞ儂からすれば子供の喧嘩にしかならぬわ。上様に影響を及ぼさず、上様に対する忠義を失っていないければ、儂としてはいくらでもやれ、と言つてやろう。戦つてこそ強さは磨き上げられるのだからな」

「……過激なこつて。流石生涯現役じーさん、戦いの中で育つてきただけある」

また呆れながらため息をつきつつ首を振つてみせる渚。しかし兼定が「だが——」と鋭い視線を渚に向け、その眼光から強い覇気を滲ませ始めた。

「——逆に上様にご迷惑……いや、上様の意志に背くような真似をすれば、どうなるかわかつていよう？ お互い潰し合う事に夢中になるあまり任務を疎かにしても話にならない。その事、ゆめゆめ忘れるな」

「わあつてるよ。そう心配しなさんな。あたしは上様を裏切る気なんてさらさらねえよ。というかさ、こうしてあたしといつまでも駄弁つていいのかよ？」

くいつと親指で庭園で鍛錬している兵達を示して見せるとそれに合わせて兼定も視線でそれを見る。兼定が離れてからも彼らは鍛錬を行っているが、しかし兼定の目が細

まり、やれやれと息をつく。

「ふん、小僧ども、少しばかりペースを落としているな」

「とうわけであたしはこれで失礼するよ、衛宮のじーさん。あたしの兵をしごくのはいいけど、潰すようなことは……」

「はっ、儂の鍛錬で潰れるという事は、元よりそれまでの実力というものよ。そんな弱者はお前が一から性根を叩き直せ。そこまでは儂の暇潰しでやろうとは思わんわ」

「左様でございますかい。じゃ、今度こそ失礼します」

一礼してまた廊下を歩きだし、その庭園から離れていく。それを見送った兼定は庭園へと振り返り、その姿が一瞬にして兵達の眼前へと出ていく。

戻ってきた兼定を見て兵達は一瞬緊張状態になるものの、続けて発せられた言葉は、

「儂が離れている間になアにを気を抜かしている!? もう十セット追加だアツ!!」

『は、はいっ!!』

怒号となつて庭園に響き渡り、兵らがそれに従つて鍛錬を続行していく。兼定の目からは逃れる事は出来ず、少し力を落としていた兵には更なる怒号が飛び、性根を叩き直していく。

そんな声を背後に聴きながら建物の中へと入っていく渚。

ここには渚だけでなく今ここにはいない龍仁、鷲輔が統括する部署がある。リーダー

である彼らが在席せずとも、彼らを支えるサブリーダーが纏めている。とはいえ龍仁の場合は武のサブリーダーが同行しており、事務仕事などをこなせるサブリーダーが残っている。

それが今、渚の目の前にやってきていた。

だが人間ではない。人の姿に化けたアイルーだった。その証として栗色の髪の中に猫の耳が生えている。

「おや、渚さんか。おかえりなさい」

「おお、蛭か。仕事かい？ ご苦労さん」

「いえ、リーダーがいらないからこそ僕がこの仕事を進めていけないとね」

そう言って笑う彼は蛭という。戦アイルーではあるが、事務仕事もこなせる文武両道なアイルーだ。こうして人の姿をとってリーダーである龍仁を補佐する役目を担っている。

龍仁が率いる部隊は人よりもアイルー、戦アイルーが多く所属している。風変りではあるがそれでも確固たる強さを持つ部隊として知られている。現在も戦闘部隊は別の場所で鍛錬を積み重ねている頃だろう。

また彼らはその特徴上ハンターとしても活動しており、人だけでなくモンスターを相手に戦う力を手にしている。人も戦アイルーも所属しているため自然とこうなり、モン

スターに関する緊急時には出動する部隊なのだ。

つまり国がモンスターと戦える戦力を保有する、という他の国にはない特異なケースが確立されている。もちろんヤマト国にもハンターズギルドが存在し、ハンターたちも多く集まっている。

だがヤマト国はこの龍仁が抱える戦アイルーらがそのギルドと繋がりを持たせたのだ。彼が戦アイルーの里と繋がり、彼が育て、そしてギルドとも繋がり戦アイルーとしての実績を積み重ねさせることで、その例外を認めさせてしまった。そんな過去がある。

もう一つ、驚輔が束ねる部隊は一見して普通の軍の部隊のように見えるが、実際は一般人に紛れ込んで内部から奇襲を仕掛けていく役割を担っている。それに加えて情報収集をするなど忍に通じる部分があるのが特徴だ。

この王宮では軍として、外に出れば一般人として活動しているのである。

最後に渚は忍を抱え、彼女自身が率いる部隊は普通の軍隊。今現在は兼定によってしごかれているようだが、渚自身、いや乾家が血筋故か武人として前に出ていく事が多い。そのため自然とそういう部隊が出来上がっていったのだ。

そんな彼女ら三家と相對するもう一つの三家。

これは先ほどの廊下を挟んで向かいにある建物に集まっている。今頃あそこに灯が

いるのだろう。渚と同じように風間の忍が彼女に報告をしているのではないだろうか。

そう考えながら自分の執務室の扉を開け、中に入って席に着いて息をつく。するとあの忍がさつとお茶を用意し、彼女へと静かに手渡した。「さんきゅ」と礼を口にしてお茶を一口飲み、また息をついた。

（はあ、まったく……衛宮のじーさんを前にするとやっぱ緊張しちまうぜ。あたしの兵をしごいてたけど、じーさんが言うようにいつもの暇潰しなんだろうな。久々だけど、錬度が上がるから口も出せねえし……はあ）

実際に兼定が鍛えればその分兵士の強さは高まってくる。流石はこの国一番の武人、彼による鬼のような教導は厳しく、それでいて確実に成果を残す。彼自身は近衛隊のリーダーではあるがそれは過去の話。リーダー以上の立場であり、王を守る側近。

そんな彼にしごかれるのだ。厳しくとも実りが確実にあるのだから渚は止めるようなことはしない。

それに彼はこういう事は気まぐれだ。気が向いたら指導するため、渚の部下だけでなく灯の部下にもああいう事をする事があるし、実際の部下である近衛兵にもやる。対象は選ばないのだ。

「さて、報告書を——」

湯呑を机に置いて懐に入れた巻物を取り出そうとした時、窓の外にあるテラスの柵に

隼が止まっているのに気付いた。しかしあの隼は渚や霧夜の者が使うものではなかつた。だがあれの主<sup>はやぶさ</sup>に心当たりはある。

やれやれと息をついて渚は懐に伸ばした手を引き、頬杖をついてその隼を睨みながら声を掛けた。

「なんか用かよ？ 灯」

『つれへんなー、渚。こうしてあんたが帰ってきたって聞いたんやから、話しかけてみたってゆーのに』

「ああそうですかい。そいつはどうも。つーかさ、別にあたしらおかえりただけいまい合う仲じゃねえだろ」

『せやなあ。それはただのついでや。……今取り出そうとしたその報告書に書いてあるかもしれないけど、こうして使い魔通じで礼を言っておこう思うてな』

くすり、と隼の向こうから微笑を浮かべたような息遣いが聞こえてきた。それを聞きながら、

（礼？ なんだ礼つて。あたしが灯になんかした覚えはないし……ああ、霧夜のことか？）

と、心の中で考えながらお茶を口に含む。

その予想は当たっていた。隼からも何やら小さくグラスの中で氷が動いたかのよう

な音を漏らし、続けて灯の音が聞こえてくる。

『霧夜のメンバー、うちの風間と各地でぶつかり合っているよーや。いや、潰し合っているっていうべきか？　うちの風間も世話になつとるよーやしなあ、その事について礼がしたいと思うてな』

「なるほどなあ、だつたらあたしも礼がしたくなつてきたよ。一発やらせてもらえるか？」

『はあ、やらせてつて……渚、そんな趣味あつたん？』

「なに言つてんだてめえは!?　どんな思考回路してやがる!?　殴らせろつて意味だよ！」

嫌やわあ、と嫌そうな声がした途端、どんっ！　と強く机を叩いて隼へと振り返る。しかしその怒鳴り声に全く反応せず、テラスの柵に止まつたまま無感情の瞳でじつと渚を見つめ続けていた。

『相変わらず渚はうるさいなー、そんなんやから彼氏の一人も出来へんねんで?』

「てめえもだろが、ああん!?　まるで自分がいるような言い方しやがって、調子乗つてんのかコラ!?!」

『おーおー、今日も熱はいつとるなー。やるんやつたら表出るか?　ん?』

「上等じゃねえか。その減らず口、閉ざしてやろうじゃねえか」

『ふふ、ええな、今日もおもしろーなってきたわ。じゃ、いつもの場所でええな?』

「おう」と返事をする。隼が柵から離れて飛び立っていく。それを見送り、湯呑に残っているお茶を飲み干して立ち上がる。懐にしまっていた巻物を机の引き出しにしまおうと、ずんずんと苛立たしげに扉へと向かつていった。

その様子を少し困ったような表情で見送る忍。そんな彼にドアノブに手をかけ、「報告、ご苦労だったな。また何かあればよろしく頼むぜ」

「……はっ。では失礼いたします」

頭を下げて忍は外に出ていった渚に続いて姿を消した。それを見送らず渚も廊下を歩いていき、灯と落ち合う場所へと向かつていった。

一方灯の方も使い魔を呼び戻すと座椅子に腰掛けて楽にしていた姿勢を崩し、立ち上がる。啜えていた煙管を灰皿へと置き、壁に掛けていた羽織を手にとって纏った。

その様子を見つめている忍は少し困ったように息をつくど、

「……お嬢様、戯れもほどほどになさってください」

「あんたもつれないこと言いなさんな。そんなんやったら、長い人生つまらんやん?」

「……はっ、申し訳も」

深く頭を下げる忍に目もくれず、灯は扉に手をかけたが、そこで立ち止まり、思い出したように肩越しに振り返る。その藍色の瞳に感情は浮かばず、淡々と確認するように



問いかけた。

「さつきもろうた報告書、あれに間違いがないんやったら、あの霧夜海がモガの村におるって事やけど」

「はい、間違いありません。情報に間違いがなければ今日の朝、モガの村に入っていったとの事です。モガの森を搜索していた二人と連絡がとれないので、恐らく霧夜海、霧夜空によって始末されたものと推測します」

「へえー、そう。となったら、灯が感じ取ったのを合わせたら……んん、遭遇する可能性あるやろな。情報入手の速さ、負けてまうかもしれへんな」

数日前に感じ取った何か。それは日に日に増しており、遠く離れたこのヤマト国の西京でも感じられるようになっていく。とはいえこれは灯の感覚が特殊なだけであり、普通ならばここからモガの村の事情を知るなんてことは不可能だ。

彼女は生まれつきの異能持ちだ。それは所謂、千里眼と呼ばれるものであり、意識すればどれほど離れたところであったとしても、何らかの力を感じ取れる。それが強い物であればある程、距離が離れてもおぼろげに感じ取れるが、正確性が少々失われていく。

また彼女のその感覚は限定的なものも特徴であり、主に危険な竜種の力を感じ取るだけに留まる。

「あちらに新たに向かわせた者に始末させますか？」

「いや、やめとき。一般人として混ざつとるんやろ？ 仕掛けるタイミング間違えるだけで不利や。しばらくはあの二人は様子見に留めとき」

「はっ、承知しました」

一礼した忍を背に、灯もまた廊下に出て歩き出す。その道すがら彼女は報告書にかかっている事を思い返し、そういえば、と僅かに天井を見上げた。

（桐生の娘もおるんやつたな。それも盲目の娘……雪菜ゆーたか。ふむ、深く気にする事ないか。なんかあるんやつたらそれはそれでおもしろいけど、まあ、それはないか。あるとすればそれは空かもしれへんか）

庭園に出て更に空へと視線を移す。一体どうなるのだろうか、と思いを馳せるが、しかし期待するのはただ一つの事象。

本当にあれが現れるのかという事のみ。

今のところはあの二人が生きていてもいい。ただ本当に自分の懸念が現実のものになるかが気になっている。それに胸を躍らせるのもいいが、今はすぐそこにある胸躍らせる事に専念する事にしよう。

どこか楽しげに廊下を歩き去る灯の様子を知るのは、廊下ですれ違った数人の人だけだった。

## 27話

それはモガの森の一角に現れる。本来この森周辺にはいないはずのそれが何故森にやって来たのか。一体どういう心境の変化だったのか、それは誰にもわからない。わかるのは当の本人のみ。

軽やかな足取りで森の中を走っていき、木々の一角にあるそれに近づくと身構え、硬い頭をぶつけるようにして突進を仕掛けていった。その一撃は容易にそれを突き崩し、彼らの住処は粉々に砕け散る。

家を壊された彼らは慌てて飛び出し、その足元を散開していく。しかしそれは彼らを見下ろし、かぶりついていく。バリバリと硬い甲殻を噛み砕き、咀嚼し、飲み込んでいく。

奴に捕まってしまったものらは奴の糧となり、生き延びたものらはその場を急いで逃げ出していった。

十分に食べ尽くした奴は一度辺りを見回し、また走り出す。腹が膨れたとはいえまだ足りていないらしい。新たな獲物を求めて奴はモガの森の奥へと進んでいく。

そうして奴は、モガの村に居座った。

○

朝食をとり終え、宿を出てきた海と空はまた軽く村を周ってみる事にした。聞いた話ではあの二人のハンターは昨日の夜に戻ってきたという。ある程度話に聞いていたが、実際に会えばわかることもある。

さあ、どこにいるんだろうかと気にしつつ、軽く辺りを周ってみようという話になったのだ。

そうして村を周ってみると奇妙なものを見つけ。

それは海の近くにある露店にいた。その店は水揚げされた魚介が売られており、少しくよかな女性が店員をしている。数人の村人が新鮮な魚介を見、女性と会話をしながら買っているその中で、じつと売り物を眺めている小さな子供のようなもの。

しかしその頭にはどんぐりをくりぬいたようなお面が被られている。手には杖が握られ、先端付近には鋭い魚のような物が貫かれていた。

「……奇面族？」

「そう見えますね。あの様子からして……子供と推測」

「そのようだね。しかしなんだってこんな所に？」

奇面族というのは見た通り、お面を被った小さな種族だ。ハンター達の間ではチャブーというモンスターがよく知られており、各地のフィールドに見かけられる。

小さな人形の存在だが、同時に危険な存在としても知られており、武器を手にしてハンターに襲い掛かってくる事がよくある話だ。しかも小さいながらもかなりタフであり、武器によってはハンター装備を容易に傷つけてくるため気をつけなければならぬ。

そんな彼らの子供がこんな小さな村にいる。しかも様子を見る限りでは結構打ち解けているのではないだろうか？

「おや？　そこにいるのはお客かい？　いらっしやい！　ぜひ見ていつてくれよー」  
離れた所にいる二人に気づいた女性店員が笑顔で呼び寄せてくる。ここで黙って去るわけにもいかないので静かにその露店へと近づいていった。

近くでその売り物を見下ろしてみると、確かに新鮮な魚介が揃っている。漁村という事もありなかなか種類もある。だが今気になっているのはそちらではない。

ちらりと横に視線を落してみると、どこか楽しいげに首を振りながら屈みこみ、同じように魚介を眺めている奇面族がいる。

「ん？　もしかしてこの子が気になっているのかい？」

「え？ あ、はい」

「……ブ？ なんだっチャ？ オレチャマになにか用かつチャ？」

そこでその奇面族が見上げてくる。恐らく見上げているのだろう、確かにドングリの  
お面が見上げるように動いている。

それにしてもなかなか可愛らしい声だ。まさに子供のような声、というべきか。見た  
目も相まってお面を被っている子供のように見える。しかし人の子供ではない。その  
出で立ちは上半身裸だが、色合いが人のものではないのだ。

少し警戒してしまうが、気を感じる限りでは敵意はないらしい。

「この子は数年前からこの村に滞在していてね、時々うちのハンターさんについて行っ  
て狩りをする事があるんだよ」

「狩りを……？ えっと、オトモみたいなものなんですか？」

「うーん、そういうんだったかな。ほら、自己紹介したらどうだい？」

「ブブ、いいっチャ。耳をかつぽじってよくオレチャマの名前を聞くんチャ！ オレ  
チャマはチャチャというっチャ！ この村にいるハンターを子分にしてるっチャ」

「子分？」

「ブブブブ、オレチャマは強いからチャ。あのハンター達のメンドウを見に、狩りに一  
緒に行つてやつてるのチャ。あいつらもまだまだだからチャ、ブブ、世話のしがいが

あるつてもものチャ！」

すごいだろ？　とでもいうかのように立ち上がって胸を逸らして自慢するように語りだす。確かに奇面族ということもあつてなかなか身体能力などが高いように見えるが、それでも遠くから見たあの二人と比べると……と思わなくもない。

もしかしてこのチャチャという子は、なかなか生意気な子供みたいなものだろうか。ちらりと店主の女性や周りの村人らを見回してみると、くすくすと笑いを零している。それは小さな子供を見守るような眼差しで、想像に違わないものだとかわかった。

だがそれを聞き逃さない人がいたらしい。

「おうおう、言つてくれるなあ、チャチャ？　誰が誰のめんどろを見てるつて？　ああん？」

少し凄むような声色でそう言いながら近づいてくる少年が一人。

髪はかきあげられてオールバックにされ、根本から数センチは黒、それから毛先までは金髪に染められている。鋭く細められている青い瞳、両耳にはピアスが空けられ、首からはシルバーのチェーンがかけられている。

服装は西方のものであり、ズボンにも同じようにチェーンが巻かれているし、手首にはリングが嵌められている。

見かけから雰囲気まで周りを威嚇しているかのような雰囲気。どこからどう見ても

あれだ。

(不良不良している、か。なるほど、わからなくもないな)

恐らくこの人物がこの村のハンターの一人、赤城将輝という人物なのだろう。

彼はチャチャの近くまでやってくると、そのまま屈みこんでじろつ、と睨みつけるかのように顔を近づけた。

「確かにてめえは前に比べたら強くなってるけどよお、まだまだこれからつてもんじやろがい。昨日のラギアの一件もついてこなかったしよお」

「ブブ、昨日はオレチャマ、森の様子を見に行っただけつチャ！ 別にラギアが怖くて行かなかつたわけじゃないつチャ！」

「ほおく？ そうかい。まあ、森の様子が気になってるんじやつたらしゃーないのお。そういうことにおいてやるわい」

ぼんぼんと子供にするようにドングリのお面越しに頭を優しく撫でてやり、立ち上がって海と空を見つめる。小さく首を傾げて「お前さんらがお客人か？」と問いかけてきた。

それに頷いて海が自分と空について自己紹介をすると、なるほどと頷いて、

「そうかい。じゃあ俺も名乗ろうか。俺は赤城将輝つてもんじやい。ここでハンターとして活動しとる。よろしゅう頼むわい」



「はい、よろしくお願ひします」

「よろしくです」

ペこりと頭を下げ合い、挨拶を交わす。

こうして目の前にしてわかる。確かに見た目は不良しているし、口調も荒々しい。しかし何となくそれは性格だけに留まっているだけで、完全な不良という風には思えない。

とはいえただそういう風を感じただけで、見極めるならもう少し時間をかけないといけないか。

それにハンターはもう一人いる。

彼女はいないのだろうかと思つてみるも、近くにはいないようだ。

「……ブ、それより将輝、少し話があるのを思い出したつチャ」

「あん、なんじゃい？ 話つて」

「昨日の夜から森の方を探つてみたつチャが、あそこに新しいモンスターがやって来たつチャ」

「それをはよお言わんかワレエツ!」

ついで見たいな言い方をしてとんでもない内容を暴露するチャチャに、将輝から怒号が飛び出す。鬼気迫るような形相をし、辺りが震えるほどの音量に周りの人々がたまら

ず耳を塞いでしまったくらいであり、その辺りは見た目に反しないものだった。

それを真正面、間近からぶつけられたチャチャはびくうつと体を震わせ、「ブ……ブ  
ブ、いや、なんていうかつチャ、その……」と歯切れ悪くあちこち視線を巡らせて……  
いや、お面のせいでそれはわかりにくいのだが、そうしているのかもしれない。

その様子に「なんじやい、はよお言つてみい」と腕を組みながらじつと見下ろす。

「……海や魚を見てぼうつとしてる内に、忘れてしまったつチャ」

「……………ええ度胸しとるのう、ワレ。一発のしても文句ねえわな？」

「チャバーツ!? 暴力反対つチャ! オレチャマを殴るより、森に入ったモンスターを  
殴つた方がマシつチャ! ほれ、お前達もそう思うつチャ!?!」

同意を求めるように辺りを見回すが、返ってくるのは苦笑ばかり。その様子からして  
結構よくある光景なのかもしれない。それだけでもこの奇面族の子供、チャチャがこの  
村に溶け込んでいるという事がわかった。

しかしそれよりもこのチャチャが言っていた事だ。

モガの森にモンスターが現れたという事。

この村に来る途中にドスフロギイの群れが現れたが、どこの誰ともわからない辻斬り  
によつて殲滅されている。何気なく森の事について訊いてみたが、そのドスフロギイに  
ついて話している様子はなかった。

つまり村人たちは把握していなかったのだ。ということはやはり村のハンターが討伐していったわけでもない。

村の外には何人かの忍が待機し、辻斬りがまた現れないかと調べているが今のところその影はまだない。

「まあいい。それじゃ、何が現れたのか聞かせてもらおうか」

「やってきたのはボルボロスつチャ。オルタロスの巣を破壊して食べているのを見かけたつチャ」

「ボルボロスう？ なんじやい、また気まぐれな奴がわざわざ砂原からやってきたつちゆうんかい。ほんとにあの森はよわからんかう」

頭を掻きながらぼやく将輝ではあるが、確かにそれには同意できる。

ボルボロスとは砂原に生息する獣竜種であり、甲虫種の一つのオルタロスなどの昆虫を餌として捕食するモンスターだ。砂原の強い日差しによる熱や暑さから体を守るために泥沼のある場所を好み、縄張りとしている。

泥を身に纏って暑さを遮断しており、時に体を震わせる事で泥を飛ばして外敵を攻撃する武器にもしている。だがそれ以上に奴の最大武器は強固な頭であり、身を屈めてからの突進によって敵を撥ね飛ばしてしまうのだ。

その威力、疾走速度は初見では対応しきれない事が多く、新米ハンター達の壁の一つ

……獸竜種としての壁と言われている。

そんなボルボロスがモガの森にやって来た。本来ならば砂原の縄張りから離れる事はないはずなのだが、本当にあの森はどうなっているのだろうか。

しかし理由はわからずとも大型モンスターが確認されたのだ。危険度はそれほどでもないだろうが、もしもという事もある。一度あそこに向かって様子を見てみるしかない。

「よし、檸檬にも伝えてこよう。準備が出来次第森に入るぞ」

「頑張ってくるっチャ」

いってらっしやーい、と手を振りだすチャチャだが、ぴくりと眉を動かして歩き出そうとしたところで肩越しに振り返る。

「なにを言つとるかワレ。お前も来るんじやい！」

「チャバツ!! マジかつチャ!!」

「ほう? 来ないんだつたら今日の飯は抜きにするぞ?」

「ブー!! 飯を盾にするとは卑怯っチャ!」

抗議するように両手を振り上げ、手にしている杖が上下にぶんぶんと振り回される。だがそんな子供みたいな抗議してもだめだ。チャチャもまた戦力になり得る存在であり、何度も将輝らと一緒に狩りをしている。

また将輝に屈みこんでとんとん、とドングリのお面を人差し指で叩き、

「別に盾にしちやいなえさ。戦った後の飯はうめえだろ？ 体、動かそうじやないか。それにお前の支援が俺らには必要なんじゃない。な？ 一緒に戦おうじやないか」

「……わかつたつチャ。やるつチャ。そこまで言われちやしようがないつチャ。仕方ないから、オレチャマが手を貸してやるつチャ」

「そう来なくつちやな。よし、行くぞチャチャ」

うん、と頷いて歩きだし、チャチャもそれに続いていく。去っていく二人を見送る海と空だが、当然ながらこのまま待機するはずもない。店主に挨拶して歩きだし、向かう先は宿泊している宿。

海が部屋に入り、空が軽く辺りを見回して襖を締めながら中に入る。続けて空が札を取り出してモガの森にいる仲間へと連絡を取る事にした。その間に海が窓から外の様子を見てみる。

すると先ほど別れた将輝とチャチャがハンター装備を身に包み、もう一人のハンターである檸檬と思われる少女と話をしているのが見えた。

その様子を確認しながら懐から札を取り出し、ぶつぶつと小さく言葉を呟いていく。それに従って札に書かれている文字が淡く光りだし、それに従って海にも淡い光が包み込んでいく。

そうして光が全身を覆い、続けて海の目の前に集結し、何かを形作っていった。光が消えれば、そこにはもう一人の海がいた。

### 分身の術。

忍が使う術の中でもフィクションなどでよく知られている術の一つだろう。これはその内の一つだ。札と己の魔力によって作り上げられた分身であり、術者をそのままコピーしたかのような出来栄となる。

この分身をここに残し、二人はあのハンター達について行ってモガの森に潜り込むつもりだ。

空も森にいる仲間との会話を終え、同じようにして札を使って分身を作り上げて待機させる。忍としての準備を整えると、「じゃ、こっちは任せたよ」と分身二人に告げると、分身もこくりと頷いた。

空が襖の向こうの気配を探り、問題ない事を確認して二人して外に出、宿を後にした。それから村の裏手を回り込んでモガの村へと入り込み、後からやってきた将輝達に気づかれないように後を追っていった。

一方宿に残った分身二人。このまま待機するのも一つの手ではあるが、近日感じ始めた妙な違和感を調べるために海岸線へと出てきた。湿った空気が鼻をくすぐり、空を見上げると遠くの空が妙に曇っているように思える。

あれはもしかすると雨雲なのかもしれない。こちらの方へとゆつくりと流れてくるのかもれない。

だがなんだろうか、この奇妙な感覚は。

あれはただものではないような気がする。

そんな風に考えていると、宿の方から雪菜がゆつくりと歩いてきた。

「あんさんらも気になつとるん？」

穏やかに問いかけながら二人の近くに並んでくる。布に隠された目はじつと海を見据え、冷たい風を受けて髪がなびき、そうしながら雪菜は神妙な表情で口を開く。

「昨日と比べて嫌な風や。これはただの雨やない、嵐が来るで」

「わかるんですか？」

「空はんには言つたやろ？ ウチは見えへん分、周りの状況がわかるんや。この感覚だけであれがただの雨雲になりかけじゃないってゆうんはわかるで」

ただの雨雲ではない。そして嵐が来るという言葉。

それが本当ならばただ事じゃないだろう。嵐に対して備えなければならぬ。しかし確証があるわけではない。目に見える形としてはかなり遠く離れたところに怪しい空が見えるだけだ。

不意にそんな雪菜がちらりと隣に並んでいる海を見やる。

「……何か？」

「……いや、なんも。気にせんでええよ」

くすり、と穏やかな笑顔を見せて小さく首を振る。ふむ、一体どうしたのだろうか、と気になったのだが、もしかすると気づかれたのだろうか？ 分身の空の視線がじつと雪菜を見つめる。

だが雪菜は相変わらず微笑むだけであり、また番傘をくるくると回し始める。

もしかするとそれは彼女の癖なのかもしれない。そうして番傘を弄りながら何かを眺める、そうする事を無意識でやっているのかもしれない。

しかしそれでも僅かに二人に向けられた布越しの視線。

見えないからこそ鋭くなった感覚。それによつて普通はわからない本物と分身の微細な差に気づいたとすれば。

そう考えると末恐ろしい。一般人ではなく魔法使いである事も明らかになったし、もしかするとそういう事には気づくだけの實力があるかもしれない。

だがそこで疑問も生まれる。

本当に分身である事に気づいたならば何も言わないのはどういうつもりなのか。あるいは逆に気づいていない？

「くすくす、気がかりな事でもあるん？」



「いえ、嵐が本来に来るのならばどうしようか、と」

「せやなあ、出来る事はなんもありはせんよ。宿でおとなしくして過ぎ去るのを待つだけや」

その前に村人達が嵐に備えるために船を港へと繋ぎ、建物も屋根の補修などをしなければならぬが、客人である三人もそれを手伝う事になるかもしれない。だがそれを終えればただ通り過ぎるのを待つしかない。

しかし願わくば嵐は来ないでくれ、と思わずにはいられなかつた。

そうして海を見つめる中、最後にちらりと雪菜の表情を窺い見る。だが彼女は相変わらず何を考えているのかわからない微笑と、無感情が混じりあうような不思議な雰囲気醸し出しながら佇んでいた。

○

モガの森を進む将輝と檸檬、チャチャの三人は辺りを警戒しながら歩いてきた。森は穏やかな空気を醸し出し、ボルボロスがいるようには思えない。小型モンスターもあまり見当たらず、実に平和そのものだった。

だがここはまだ村に近い場所。チャチャの話によればボルボロスを見かけた

のは先の方。更に言えば見たのは早朝の事だったらしい。どうもチャチャは昨日からずっと森の中にいたようで、村へと帰ってくる途中で見かけたそうだ。

森の中で眠り、帰ってくる途中だったため見た事は見たが、それを伝える前に海でボーっとしていたのだとか。やれやれである。

そんな彼らから数メートル離れた木の枝に、忍の装束を纏う海と空が気配を消して追跡中だ。こうして二人が彼らを追跡する理由は彼らの実力を把握するだけではない。今回もあの現場を作り上げた犯人が現れるかどうかを見るためにある。

もし現れたならばその姿を確認し、実力を把握し、報告する。叶うならば捕縛したいところではあるが、果たしてそれが出来るかどうか。

何にせよ海と空は狩りに介入せず全てを見届けるのみだ。

そうして数十分歩き続け、やってきたのは少し開けた場所にある沼だった。ほとりは水と土が混ざり合って濁り、泥になっている。砂原ならば湖全体が濁る泥沼と化しているのだが、流石にモガの村はそうはなっていない。

ボルボロスが泥を纏おうと思えばここにやってくると思われるがどうだろうか。

「なんかおるのお。気配がするわい」

視線を動かして辺りを見回し手はそれぞれ武器へとかけられている。見回す限りでは何かがあるようには見えない。森の中に隠れているのか、沼の中にいるのか。

目的であるボルボロスならば隠れているとするならば目の前にあるそれだろう。視線は巡ろうとも、意識の大部分は沼に向けられている。

「……いたよ。あそこ」

不意に檸檬が沼の一角を指さす。よく目を凝らすと確かにそこには何かが浮いている。茶色い円をしたものに穴がいくつか空き、そこから蒸気らしきものが立ち上っている。

あれがボルボロスの頭だ。奴は時に沼に体を沈ませ、頭だけ水面に出してそこにある鼻孔で呼吸する。

「それじゃ、仕掛けていくかいのお」

握りしめていたハイランドグリーズを抜きながら変形させ、剣モードにして構える。足音を立てずに静かに近づき、緩やかに沼に身を浸すボルボロスの頭へと一気に斬りこんだ。

ボルボロスの頭は奴の部位の中で一番の強度を持つ。だがスラッシュアックスの剣モードは強固なものだろうとも強引に斬り捨てる事が可能だ。がりがりと音を立てても刃はボルボロスの頭を斬り、突然の攻撃に反応して一度頭が沼の中へと沈み、勢いよく飛び出してくる。

その際に頭を勢いよく振り上げたが、将輝はバックステップをして回避しつつ、剣

モードから斧モードへと切り替えていた。

「ブロロロ……！」

突然攻撃してきた無礼な者らを見回しながらボルボロスが唸りだす。それに怯むことなく、檸檬がボルボロスの足元へと潜り込んでセクトウノベルデを抜刀し、その巨体を支え、ボルボロスの持ち味である疾走を行う足へと斬りかかる。

更にボルボロスの意識を引くために、正面からボルボロスの腕へとハイランドグリーズを突き出し、振り上げつつ横へとずれつつ気を放って挑発していった。

するとそれを追うようにボルボロスの目が動き、続けざまに頭突きをしながら将輝へと接近していった。

「チャバー！ 子分たち頑張るっチャ！ オレチャマが踊ってやるっチャー！」

離れた所ではチャチャが踊り始めている。からんからん、とドングリのお面から音が奏でられ、それに合わせて足がステップを刻み、手にしている杖をリズムよく振り、腰を振る。

するとそれに合わせて淡い光を放つ粒子が舞い踊り、それがゆつくりと周囲に広がっていった。やがてチャチャの踊りが終わり、「チャツバー！」と決めポーズを決めた瞬間、粒子は波となって将輝と檸檬へと影響を与えた。

「よし、いい仕事したよ、チャチャ。はあっ！」

チャチャを褒めつつ離れた距離を詰めるように飛びかかりながら振り下ろし、斬りつけた瞬間に電流が走ったかのような黄色い光が発する。これが麻痺毒が仕込まれている影響だ。

そしてチャチャの踊りによって二人の筋力が増強され、攻撃の威力も底上げされている。これによって威力が低いとされている片手剣でも、それなりの威力を出せるようになっていよう。だが檸檬の役目はダメージを稼ぐというよりも、セクトウノベルデの麻痺毒を相手に打ち込んでいく事だ。

ダメージ稼ぎの役割はスラッシュユアックスを手に行っている将輝だ。

「おらああっ！」

側面に回り込み弱点である腕を狙って斬りかかるも、ボルボロスは数歩下がりがりながら振り返り、ぐっと力をためて頭を下げ、将輝に向かって一気に突進してきた。

だが将輝はそれを読みきり、突進をぎりぎりで躲せるタイミングで横に跳ぶ。茶色いその巨体が勢いよく横を通過していくのは怖いだろうが、将輝は一筋の汗を流すだけであり、小さく唾を飲みながら振り返りつつ尻尾へと振り上げる。

ハイランドグリーンズは威力があるだけでなく毒を内包している。斬りつけた瞬間に紫色の煙が噴き出せば、それは相手に毒を仕込んでいる証となる。

尻尾を緑の刃が切り裂くも、その程度でボルボロスが怯むことはない。続けて接近し

てきた檸檬もろとも攻撃するために奴は体を震わせ始めた。すると体に付着している泥が跳ね、塊となつて降り注ぎだす。

それに舌打ちして二人は距離をとる。あれは粘着質が高く、重量もある塊だ。受ければダメージになるだけでなく体の自由を封じ、行動を制限されてしまう。消散剤という薬品があればその泥を吹き飛ばす事が出来るし、外部からはたいてくれれば離れるが、それまでは武器も振るえず道具も使えない。

なので自然と泥を受けないように防戦に回らないといけなくなる。慣れている人ならば泥を受けないように立ち回りながら武器を振るうだろうが、ここは安全策を選んだ。

かといって攻撃手段がないわけでもない。剣術の家に生まれている檸檬は気刃もこなせるため、己の気をセクトウノベルデに纏わせて剣閃を放つ。それに続くようにして、チャチャも腰に下げている鞆からブーメランを取り出すとボルボロスに向かって投擲しだす。

泥を飛ばす攻撃は脅威ではあるが、そうしている間は棒立ちだ。泥が届かない所からの遠距離攻撃の的になる。

「ブロロロ……っ、ブオオオオオオッ！」

またも振り返りながらの後退をし、そのまま突進を仕掛けてくるのかと思いきや足早

に歩きながら檸檬へと近づいていく。当然檸檬は一定距離を保つように回り込もうとするが、ボルボロスもそれに続いてスピードを落とさずに彼女の出方を窺うように回り込み続ける。

「ちっ、様子見だね」

「気をつけえよ、いきなり仕掛け……言ってるそばかいっ!？」

獣竜種の特徴として、獲物の出方を窺いながら背後に回り込むように歩く事がある。それから逃げようとすれば延々と歩き続け、それが逆にプレツシャールをかけてくるかのように感じる事があるのだ。

そうして追い詰めながら距離を保ち、疲れたところをすかさず攻撃を仕掛けてくる、という行動だ。

ボルボロスも檸檬の背後をとろうとしたが、彼女が警戒しながら歩き続けるのを見込んだ瞬間、一歩下がって力をためてからのシオルダータツクルを仕掛けてきた。すかさず盾を構えて防御するが、片手剣の盾では威力を殺しきれない。

低く下げられた肩が彼女の構えた盾にぶつかり、檸檬の体は大きく後ろへと吹き飛ばされる。しかし受け身を取り、地面を滑っていき、息を吐いて盾を持つ右手を振ってダメージの具合を確認していた。

それを横目で見ながら将輝が距離を詰めながらハイランドグリーズを突き出し、続け

て剣モードへと切り替えながら振り下ろす。振る度に紫色の煙が吹き出し、ダメージだけでなく毒を積み重ねていく。

ハイランドグリーズの剣モード時に発揮されるビンの効果は強属性ビン。属性攻撃の威力を高める効果が含まれているのだ。つまり与える毒のダメージも高まり、より一層毒を打ち込んでいく。

「グロロロ……っ」

ボルボロスの呼吸の様子がおかしくなった。どうやら毒状態になったらしい。ボルボロスの動きが少し鈍くなったがそれでも気をつけなければならない。将輝に向かって勢いよく頭を振り下ろして叩き潰しにかかった。

それをバックステップで回避するが、その際頭に溜まっていた泥の一部が跳ねて将輝に降りかかってくる。舌打ちしてハイランドグリーズで切り払って自分に付着しないようにしたが、頭を上げたボルボロスが素早く一歩踏み込んで頭をかち上げる。

「ん、くっ……!?!」

ハイランドグリーズを振り上げていたために防御が間に合わず、将輝の体は宙に舞い上がって離れた所に落下した。腹に当たった硬い頭と、背中から落ちた事で強打を受ける。ラングロスシリーズのおかげで重傷にはなっていないが、それでも結構衝撃がかかってしまった。



だがそれに呻いている暇はない。

どうやらボルボロスは怒り状態になっていられるらしく、頭の鼻孔からかなりの蒸気が噴き出されていた。将輝に狙いを定めているようでまた頭を低くし、力をためようとしていた。

「させない!」

「これでも喰らうつチャ!」

そこをすかさず檸檬とチャチャが飛び出し、チャチャは足へと斬りかかっていく。檸檬はポーチへと手を伸ばし、閃光玉を取り出してピンを抜き投擲する。空を切るように高速で飛んだそれはボルボロスの前で破裂し、強い光を周囲に放つ。

それを受けてボルボロスは小さく呻き、たたらを踏みながら頭を振る。だが目に焼き付いた光によって視界を潰され、何度も頭を振りながら足踏みするしか出来ない。

「大丈夫かい、将輝!」

「……おう、何とかな。ありがとうよ檸檬」

ぱんぱん、と軽く尻をはたきつつ体の調子確かめる。痛みはあつたが戦えない程じゃない。これでも上位装備だし体は鍛えている。このくらいで根を上げる程軟ではなかった。

それよりも今が好機だ。

攻め込むチャンス逃すわけにはいかない、と剣モードから斧モードへと切り替えつつ走り出し、ボルボロスへと斬りかかっていく。

ボルボロスの足元ではチャチャが手にしている杖を縦横無尽に振り回し、時折魚が斬るたびにセクトウノベルデが斬った時と同じような光が放たれていた。これはチャチャがドングリのお面に書き記した麻痺攻撃の印によるもの。

この印は呪印や紋様術の一種とされており、これが発揮する効果によってチャチャが持つ武器に力が宿るのだ。チャチャの役割は主に支援。後ろで踊る事で踊りによって生まれる効果を二人に与え、時に遊撃として攻め込んで檸檬と同じく麻痺毒を打ち込んで敵の動きを止めるのだ。

檸檬も合流して二人して武器を振るい、次々と麻痺毒を打ち込んでいく。それが実を結び、今度は麻痺毒によって体の自由を奪われるボルボロス。

苦しげに呻き何とかして体を動かさそうとしても動くことが叶わない現実。その隙を狙って弱点である腕へとハイランドグリーズを振るってダメージを重ねていく。流れは完全に将輝達に傾いていた。

「……周囲の様子はどう？」

『異常なしです、若。辻斬りらしき影、気配共になし』

「わかった。引き続き警戒を続行してくれ」

『はっ』

その様子を相変わらず木々の枝葉の中に身を隠して傍観しながら、海は離れた所にいる仲間と札を通じて話していた。今のところ怪しい人物は確認されず、将輝らの戦いを邪魔するものもなし。

他に大型モンスターが接近する様子もないようなので、この調子だと問題なく戦いが終わりそうだった。

何事もなければそれでいい。懸念すべき事が現実にならないというのはいいことだ。そう何度も悪い事が立て続けに起こってほしくはないが、情報を入力するためには起こらなければならぬというちよつとした矛盾。

「……こちらも異常は確認されません。しかし分身から通じて送られた情報では、海に向こうから嵐に変化すると思われる天気を確認」

「嵐、か。となればまだ数日モガの村に待機になりそうだね」

「はい。……また数分後には伝書が届けられるとの事。分身が受け取りますが、よろしいですか？」

「ああ、いいよ」

頷きながらも視線はボルボロスとそれと戦うハンター達から外さない。彼らの実力

を計り、どれだけの力を保有しているのかを知る。あのアイルーの話が事実ならば、あそこにいる二人も辻斬りの可能性が微小ながらあるという事なのだから。

将輝はスラツシユアックス使いだがそれ以外の武器を保有していれば候補に挙がる。

檸檬もどうやら桜花流の使い手らしいし、可能性はある。セクトウノベルデでは若干リーチは短いかもしれないが、それでもあれもまた剣の一つ。それを使えば人を斬る事は容易い。

故にあの二人を観察する。

その戦いが終わるまで。

## 28話

村に待機している分身二人は宿の部屋に戻ってきていた。宿の前で雪菜と別れ、部屋で情報を整理しながら窓からやってくる鳥を待っているのだ。そうして待つ事数分、開かれた窓から一羽の鳩が入ってくる。

その足には手紙が結ばれており、鳩を腕に止まらせて手紙を回収した。そして腕から肩へと移動させ、回収した手紙を広げて内容を確認してみる。

そこには空が調査を依頼していた桐生雪菜についての調査結果が書かれていた。

桐生雪菜。

年齢二十一歳、種族人間。

ヤマト国にある桐生家に生まれ、しかし幼い頃の病によって視力を失ってしまう。

視力を失った事で、彼女が桐生家の娘としての役割を果たすことは難しくなったかと思われたが、彼女は数年かけて視力がなくとも周りの状況を把握するだけの高い周囲察知能力を会得した。

それはまさに達人が得る心眼と呼べるものであり、幼いながらもその才能に桐生家の

者らは驚いたものだった。

彼女は魔法使いとしてもめきめきと力を高めていき、普通に生活するだけでなく魔法使いとして戦う分にも問題ないだけの実力を得る。現在は桐生家のしきたりに従って世界を巡る旅に出ている。

また桐生家のはかの衛宮家とも繋がりががあるため、彼女は体術や剣術もある程度仕込まれているようだ。とはいえ彼女は見えていないために積極的に戦いに出るといふ事はせず、遠距離から魔法使いとして戦うだけに留められているらしい。

そこまで読んだところでふむ、と海の分身は頷いた。

机の上に広げている報告書を纏めていた空へと視線を移し、手にしている手紙を手渡してやって彼女にも読ませてやる。少しして読み終えた空の分身は思い返す。

本体が雪菜と会話していた言葉の頭の中に語らせ、この報告書の内容に差がない事を確認した。雪菜は確かに武術を嗜む程度にやっていると言っていたし、本当だったらいい。

それにしても衛宮家とも繋がりがあるとは驚きだ。

衛宮家といえはヤマト国でも名が知られている武術の家であり、代々ヤマト国王に仕え、王宮で軍人として動く者達だ。現国王と先代国王、二代にわたって仕え、彼らを守る近衛兵として名を馳せる衛宮兼定の名は知らぬものはないと言われるほどに有名で

あり、王宮へ行つた際に何度か見かけた事がある。

年老いてもなお磨き上げられる実力に周囲を威圧する程の気迫。

正直言つて彼を敵に回そうなどと考えたくもない。衛宮家始まつて以来の武神と言われているくらいで、人間の中では彼に勝てるのはいないんじゃないかというくらいだ。

神倉月が人族での最強ならば、衛宮兼定は人間での最強といわれている。

そんな彼も強さを磨き続けているとはいへ、やはり老いというものはくるものであり、いずれは死ぬだろう。そんな彼の後継者、すなわち彼の息子もまた王宮で軍人として活躍しているのだが兼定程の領域には達していないようだ。それでも十分強いのだが、それだけ兼定という存在がとんでもないということらしい。

(そんな衛宮家だが一人勘当されているんだっただか)

そう考えながら空が広がっている報告書、情報を漁り、衛宮家のデータを取り出す。

兼定の息子兄弟の弟に生まれた一人娘。

えみやあもつ。  
衛宮天羽。

武の才能が高く、幼少の頃より兼定らによつて仕込まれたことで高い実力を保有した衛宮家の武人だった。しかし思春期に入つてからはそのレールに乗つて走る自分に嫌気がさし、無気力となる事で家に反発し始めたそうだ。

それでも衛宮家の武人としての在り方を教えられ、ヤマト国とヤマト国王に忠義を示せと言われるもののこれを拒否。己の武術は国のためではなく、己の在り方を示すために高めるとして同門の衛宮の人間を殺害。

父親にも刃を向けて衛宮家を飛び出した。これに怒りを示した兼定が追跡するが、彼女の逃亡を手助けした何者かの邪魔が入り、衛宮家の家宝である刀と共に天羽はヤマト国から姿を消したそうだ。

あの衛宮兼定から逃げ切れ、それだけでなく刀が消えたという事で当時は大事件となり、衛宮家からの国に対する反逆者といわれてもおかしくないこの不始末。責を償うために彼女の父は自刃。天羽は衛宮家から勘当され、衛宮家の歴史から名を抹消された。

しかし彼女の行方は搜索されており、もしも発見されれば彼女は殺せ、と告げられている。もし刀がまだ彼女の手にあれば回収しろと命じられているのだ。

さて、ここまでの情報があるのは何故か。

それは彼女もまた辻斬りの候補に挙がっているためだ。

衛宮家から消えた彼女の行方は分からないが、衛宮家とヤマト国に反発したのは決められたレールの上を走らされ続けるのを嫌ったためだ。衛宮家に生まれ、才能があつたが故に将来を決められ、ただただ強さを磨く日々。

国と王に仕えろ、と教育され、そのための力を高める事に思春期になって疑問を感じ、



そして道を外した。自分の強さは国のためにある、という結論を否定し、国と家を捨てて飛び出した彼女は何をするのか。

磨かれた力を更に高めるための戦いに身を投じたのではないかと思われる。

彼女がいなくなったのは四年前、それからの行方は今もなお不明だが、辻斬りが現れたのは去年からだ。それまでの三年間どうしたのだろうか、と疑問はあるが、彼女が強さを試すために武の達人と戦っているんじゃないか、と推測できる。

たぶん、シユヴァルツの事を除外するならば、彼女が候補に挙がってくるんじゃないかと思われる。

(しかし確証はない。衛宮天羽様だという確証を得なければ話にならないだろう)

天羽はただ候補に挙がっているだけであり、確率は高くても推測でしかない。その推測を確証に変えるには実際に辻斬りと遭遇し、彼女だと認識するしかないのだ。

「本体の方はまだ異常なしの模様」

「そのようだね。このまま何事もなければいいのだけどね」

手紙の内容を書類に書き留めていく空に応え、鳩を肩に止めながら外を見つめる。

本体から送られてくる情報から、まだ異常はないという事だけはわかる。辻斬りは現れるのだろうか、それだけが心配だった。



麻痺毒から解放されたボルボロスの怒りはまだ続行されていた。自分をいいように攻撃し続けた者達を許す気はないらしい。解放された瞬間、天を仰いで怒号を発する。

びりびりと空気が震え、将輝達の耳を塞がせて動きを封じ込めてしまう。動きを止めたところを見逃すボルボロスではなかった。

「プロロツ！」

足元付近にいる檸檬とチャチャを纏めて吹き飛ばすように、一歩下がるとシヨルダータツクルを仕掛けていく。咆哮によって耳を塞いでいる二人は防御する事も出来ず、それによってボールのように吹き飛ばされてしまった。

「く……檸檬！」

硬直から解けないまま吹き飛ばされていく檸檬を見ている事しか出来ない。ボルボロスが近くにいる将輝に振り返ったところでようやく硬直から解放され、振り下ろされる頭から逃れるように後ろへと跳んだ。

一方吹き飛ばされた檸檬とチャチャはごろごろと地面を数メートル転がり、呻き声を上げながら起き上った。露出の高いネブラSシリーズは上位装備であり、ある程度の防御力はあるが打ち所が悪ければ結構ダメージを受けてしまう。

「ごほごほ、やってくれるね……」

「ブッブー！ まだまだやれるっチャー！ オレチャマの踊りを見せてやるっチャー！」

頭を振って痛みを振り切り、手にしている杖を回転させて気合を入れるとまた踊りだす。ステップを刻みながら移動するチャチャを横目で見ると、将輝を追って走り出すボルボロスに向かって走り出す。

しかしそれも数メートルだけ。

距離を詰めたあとポーチに手を伸ばし、取り出したのはシビレ罨だ。それを地面にセットし、起動させればビリビリと麻痺毒が表面に現れる。それを確認するとセクトウノベルデを抜いてボルボロスへと向かっていった。

ハイランドグリーズを背中に収めている将輝は防戦一方。頭突き、突進、尻尾と連続して攻撃してくるボルボロスから躲し続けている。

彼はこっちに向かってくる檸檬に気づき、彼女と視線を合わせる。

「シビレ罨を仕掛けたよー！」

「よおし、了解や。っと、回復の踊りが力を発揮したようじゃのお」

遠くで踊っていたチャチャが決めポーズを決めた瞬間、緑色の粒子が周囲に広がっていった。それは将輝と檸檬に届き、二人の体を癒していく。これにより先ほどのダメージはある程度和らいだ。

側面へと回り込むように移動しつつシビレ罫がある方へとさりげなく移動していくと、それに従ってボルボロスの視線も動き、向き直っていく。

シビレ罫を背後に取った時、ボルボロスが距離を詰めるために力を込めつつ頭を下げた。その瞬間、将輝は一気に背後へと駆け出す。当然逃げる将輝を追うようにボルボロスが疾走を開始し、更に逃げるために後ろへと跳んでシビレ罫を飛び越した。

ボルボロスが追い付きかけるがシビレ罫を踏み、その体を痙攣させてしまった。苦しげに声を漏らすボルボロスへと接近し、抜刀して一気に攻撃を開始した。

ハイランドグリーズを剣モードにして腕を連続で斬り付け、毒を蓄積させていく将輝に、足を斬りつけてダメージを蓄積させ、シビレ罫が斬れた後の転倒を狙っていく檸檬。チャチャもまた踊りだし、最初に出した効果である筋力増強を発動させて支援する。再び流れが傾く。ここから一気に討伐へと行きそうな雰囲気だ。

これは決まったか、と傍観している海と空は思う。一時はどうなるかと思ったが、ハイランドグリーズの威力と毒ダメージも積み重なっているし、動けないボルボロスを一気に叩く今、瀕死は近しくなっているだろう。

このまま何事もなく終われるか。

周囲を警戒しながらまだまだ二人は観戦し続ける。

同時刻、森の中に身を隠している霧夜の忍二人はまた辺りを見回し、札を通じて異常

なし、と伝える。二人がいるのはやはり木の枝の上。生える葉っぱや幹に隠れるようにして待機していた。

位置的にはボルボロスと戦っている将輝達を挟んで海らと対面にいる。何かあった場合、彼らの後ろの森を横切って向かわなければならぬが、あの狩場の左右についているという位置づけにもなっている。

彼らもあの戦いがもうそろそろ終わりそうだと判断していた。辺りを警戒しているが、このまま何事もなく終われば、とも考えている。

「辻斬り、現れませんか」

「そうだな。これはあのドスフロギイらを始末した後、この森から離れたとみていいんじゃないかね。……ん？ 何か接近してきたぞ」

この周囲から離れたならば向かうとするなら西に進んでロツクラツク方面へと進んだのか、東に進んで海岸線に沿って移動していったか、という方向で推測できる。

ふと、視線を落としてみると二匹のジャギイがやってくる。視線は将輝らへと向けられており、戦況を窺っているようだった。

どうやら戦いが終わった後に負けた方を喰らってやろうというつもりなのだろう。

野生の中ではそれはアリだ。弱った相手、死体となったその残りを頂く、そういうやり方も生きる道の一つ。

どうやら完全にジャギイらも傍観者になつていようで、じーつと狩場を見つめたまま。枝の上にいる二人に気づいている様子はない。

「ジャギイ二匹がやつてきました。仕掛けていく様子はなし、他に気配もなしです」  
『了解、気をつけて』

すかさず海へと報告し、ジャギイの動向を確認しつつ周囲に気を配つてみる。あの二匹以外に接近してくる気配はなく、ひとまずは安全だろう。

不意に妙な風が吹いた。

海の方から吹いてきたそれは妙に冷たく感じ、二人の視線は風が吹いてきた方へと一瞬向けられる。

すると続けて風に乗って木の葉が舞い上がり、二人の体を流すようにしてぶつけられてくる。思わず腕で顔を庇い、それによって周りに向けていた意識も止まってしまう。

「……………っ」

忍の一人が何かに気づいて息を呑み、勢いよく背後を振り返る。

そこには――

「……………」

――微笑を浮かべて二人と同じように枝の上に佇む人物がいた。一体いつからそこにいたのか、いや、たったの数秒の間にそこにどうやって現れたのか。

そんな疑問を挟む間もなく、高速でその腕が振るわれて一筋の風が作り上げられる。それは抵抗出来なかつたその忍の首を刎ね、絶命させた。枝から落下していく仲間を視界の中に捉えながら、その先にいる意外な人物に驚いた忍は息を呑むしか出来ない。

「な……っ、お、お前は……!？」

「つまらんなあ……全く気付かんなんて」

実に残念そうにその声を漏らし、続けて枝を蹴って残った忍へと距離を詰める。当然その場から逃げつつ札を手にして海へと連絡しようとした忍だったが、その札もろとも肩が斬られて宙を舞う。

「まさか……お前が、辻斬りだったのか……!？」

それに応えるようにその人物は笑みを浮かべ、手にした武器を振るって彼もまた首を刎ね飛ばした。落下していく忍の死体。それに気づいたジャギイが驚きの声を上げ、しかし上から着地した辻斬りが振り向きざまにジャギイも斬り捨ててしまう。

一瞬の内に四つの死体とその現場に出来上がり、武器をしまった辻斬りは肩越しに振り返って死体を見下ろした。死体に近づいて屈みこむと手を伸ばして体から離れた顔に触れ、懐などをまさぐるとなるほど、と小さく頷いた。

「忍、か……。なるほどなあ、実に残念」

くすり、とまた笑みを浮かべて立ち上がり、一度ボルボロスらの方とその先にいる海

と空が隠れている方を見つめて笑みを深くした。どうやらまだ仲間が死んだ事に気づいておらず、自分がここにいる事も気づいていないようだ。

辻斬りの言う通り実に残念。

こうして現れてやったというのにまたしてもチャンスを逃したのだ。

「……応答しろ」

札を手にした海がその向こうにいるはずの仲間呼びかける。だがどういう訳か反応がない。ジャギイがやってきた、という報告をしてから数分。何か妙な胸騒ぎがしたのでこうして呼びかけてみたのだが、返事が返ってこなかった。

「何かあったのかい？ 応答を」

もう一度呼びかけるがやはり反応なし。

空がじつと二人が隠れている方へと目を凝らして見つめているのだが、彼らが隠れている場所から反応が見られなかった。

「海様、これはもしかすると……」

「……緊急事態だ。行くよ」

「承知しました」

これは見過ごせない状況になった。将輝達に気づかれないように枝を飛び移ってい



き、向かいの森へと移動していく。素早く動いている上に、将輝達はボルボロスに意識を向けている為に気づかれることなく移動する事が出来た。

そうして移動してきた二人が見たのは二人の表情を曇らせるに十分なものだった。

「くっ……うう……！」

思わず声を漏らしてしまう海。死体となった仲間に驚いている声ではない。悲しんでいる声……というよりも、それ以上に二人の死因に対して彼は声を漏らしていた。

握りしめられた拳が震えている。

ギリツ、と歯噛みしている。

怒り。

悔しさ。

二つの感情が海の心を渦巻いているのだ。

またしてもやられた。これはどう考えても辻斬りによるものだとわかってしまう。何せ傷の具合が今まで辻斬りにあつた被害者の傷に近しいものだったのだ。だから犯人が辻斬りなのだろうと容易に推測できた。

つまり、自分達はまた取り逃がしたのだ。チャンスをふいにしたのだ。

手を伸ばせば届くかもしれないところに現れたのに、自分はそれを掴み損ねた。

「くそッ！ またやられたっ……、逃がした……っ！ こんなに近くにやってきたとい

うのに、たったの数分で……あの数分でこんな……っ！」

悔しげに言葉を発しながら彼は木の幹を殴りつける。死体の具合を調べていた空が顔を上げ、何度も何度も殴り続ける海に気づき、「おやめください、海様」と止めにかか

る。

だがそれでも肩を震わせ、悲痛な表情を浮かべる彼は殴るのをやめない。

すると空が背後に回って強引に止めにかかり、

「気持ちばかりですが、おやめください。音を立てれば彼らに気づかれます。堪えてください、お願いします」

冷静に海へと語りかけ、それでも殴ろうとする海を抑えにかかる。木を殴る音であそこにいる者達に気づかれられないという保証はない。それにあそこの戦いはもうすぐ終わりそうだ。

それによつて血の匂いを感じ、こっちに來てしまう可能性だつてある。

死体を回収し、処理するならば今の内なのだ。

「……………はあ。ごめん、取り乱した」

「いえ、お気になさらず。落ち着いてくれれば何よりです」

大きく息を吐いて気分を落ち着かせたところで背後にいる空へと謝つた。しかし空は相変わらず抑揚のない声で返しつつ小さく首を振り、回していた腕を話して頭を下げ

た。

しかし僅かに拳は握られたまま震わせており、まだ悔しさを隠しきれていないようだ。

それでも彼は死体へと近づき、離れた首と腕を回収する。ジャギイの死体は一応そのままにし、二人の忍が今も撒き散らす血を消すための術をかける。首は袋に入れて二人して持ち、残った体も袋に入れて血を撒き散らさないようにして背負った。

一度背後に振り返り、今もなお戦っている将輝らの様子を確認すると、この場を離れるために疾走した。

シビレ罨から解放されたボルボロスではあったが、続いて襲い掛かった苦痛はハイランドグリーンズによって打ち込まれた毒だった。動けない苦しみが終わったかと思えば、今度は体の内側から蝕んでくる苦痛だ。

息苦しそうな声を漏らしながらも、何とか戦い続けようとするボルボロスは、体を震わせて泥を飛ばしだした。近くにいる二人は降り注ぎだす泥を回避するために後ろに下がり、また檸檬が気刃を放って攻撃を仕掛けていく。

やはり泥を振りまいても意味はないのだ、という事を悟ったボルボロスは尻尾を振りながら向き直り、突進を仕掛けてくるのかと思いきやまた二人の周囲を歩き始める。ここに来て出方を窺うのか、と思われたが、二人も警戒するように後ろを取られないよう

に歩き出す。

「ブロロツ！」

そんな二人の隙をつくように一気に距離を詰めるように踏み込みながら軽くかち上げ、しかし檸檬は盾を構えて防御する。だが軽めとはいえ、ボルボロスの頭の硬さによつて生まれる威力は小さな盾で完全に防御できるものでもない。

腕が痺れるような感覚と共にノックバックされ、だが檸檬はそれを堪える。

そこでボルボロスはまた後ろへと数歩下がりがりつつ頭を下げ、今度は加速をつけて突進を仕掛けようとした。

「させんわあっ！」

側面に回り込んでいた将輝がボルボロスの足を薙ぐようにして剣モードのハイランドグリーズを振るい、走り出そうとしたところでついに足にかかる負荷が溜まり、前のめりに転倒してしまう。

「これで……決めたるあー！」

ボルボロスの腕に狙いを定めてぐつと腕を引き、柄にある引き金を引いてやれば内蔵されているピンから一気に粒子が先端へと送られていく。その度に先端の刃が震え、収束していく粒子が何度も何度もボルボロスの腕を傷つけていく。

強い毒素と震える刃による抉りこみが連続してボルボロスの体を傷つけ、収束する粒

子が臨界点を突破した瞬間、

「破ッ!!」

凄まじい爆発を起こしてボルボロスの腕や手の甲殻だけでなく周囲の体の甲殻まで吹き飛ばし、それだけでなく元々傷ついて肉を露出していた部分は壊死へと向かい、血を噴き出させた。

激しい力によつて強く反動を受けるハイランドグリーズと、それを握りしめる将輝は後ろへと滑つていくがそれを堪える。斧モードへと自動変形されたそれを構え、弱々しく呻くボルボロスへと突き出した。

先ほどの一撃によつて胸の部分がかなり傷ついているだけでなく、激しく血を流しながら肉を露出させていた。そこを狙つて抉り込むようにしてハイランドグリーズを突き入れた瞬間、断末魔の悲鳴を上げてボルボロスの頭が振り上げられ、体を痙攣させる。しかしそれも数秒。

力尽きたように地に伏せ、その命の灯火を消してしまった。

死体となったボルボロスの素材を剥ぎ取り、他にモンスターがないかと周囲を探つてみる。だが他に気配は感じられず、二人はその場を離れようとしたところで檸檬が何かに気づいたように鼻を動かした。

「……血の匂いがするね」

「血い？ どつから匂うんじゃない？」

「あつちの方から」

指差した先は先ほど辻斬りが現れ二人の忍とジャギイが斬り殺された場所だ。そちらに行つてみた二人が見たのは二つのジャギイの死体が転がっているものだった。忍の死体は海と空に回収され、血も消されている。

しかしジャギイだけは残して行つた。それにこの死体はいずれ分解されて地面に溶けていく。そのため残して行つたのだが、どうやら溶けきる前に戦いが終わつてしまつたようだ。

「これは剣によるものだね。一撃で首が飛んでいるよ。この切断面からしてかなりの腕前だ」

「お前の腕くらいかのか？」

「どうだろ……ボクも修行中だからね。でもこのジャギイ、振り返ろうとしたところで斬られている。跡を見る限りではこつちを斬り上げた後にこつちを斬り捨てた、とみていいね。これを一瞬でやった事を考えればボク以上……かもしれない」

しかしここで二人は疑問を感じる。

剣による傷が出来たという事は、ここに剣を持った誰かがやつて来たという事になる。一体誰がここに来たのだろうか、と気になり、辺りを探ってみるが手掛かりになる

ようなものは見当たらない。

将輝も一緒に探ってみるが何も見つからず、何気なく上を見上げて枝を探ってみた。すると何かによつて踏まれたことで折れてしまっている枝がある事に気づく。

首を傾げ、その枝の木を登っていき、その枝の様子を見てみる事にした。するとそこには僅かではあつたが血が付着している。

ジャギイがここを上つてくるはずがないので、これはあの死体を作り上げた人物によるものか、と考えたがそれにしておかしい。負傷してここに身を隠していたならばわざわざ降りてきてジャギイを殺す必要はない。

それに近くには自分達がいたのだ。怪我しているならばしばらくここに待機し、事が終われば助けを求めればいい。

ではこの血は誰のものなのか。

別の誰かがここにいて、それを犯人が襲い掛かつて殺したのか？

となれば死体はどこに消えた？

そんな事を考えながら辺りを見回し、そして血が枝だけではなく葉っぱにも飛び散っている事に気づいた。これは負傷して零れ落ちたにしてはおかしい血の残りようだった。

つまり、ここで何かが起こつたのだ。それを誰かが隠した。

(じゃが、いったい誰がそんな事を……？　俺らが戦っている間になにがあつたつちゆうんじやい……)

自分の知らないところでこの森に何かがあつたのかもしれない、という事実には輝は僅かに震えるのだった。

仲間の死体を里へと送り届ける忍へと引き渡し、何があつたのかを簡潔にまとめて伝えた海と空が村に帰ってきたのは、そろそろ日付が変わろうとする頃合いだった。空は厚い雲に覆われ始め、海から吹き抜ける風は時間を経るにつれて強くなり始めている。

こんな時間に、それもこのような天気の外に出るような村人はいないようだが、それでも周囲に気を配り、宿の窓から部屋に入った二人は分身を回収して記憶を引き継ぎ、自分達がいけない間に起こった事を把握する。

魔力で作り上げられた分身であるため、記憶の共有が出来るという点でも成り代わりに見える術だった。

「桐生さんに気づかれたのでしょうか？」

「どうなんだろうね……彼女は魔法使いだから可能性はなきにもあらずだけど、何も言つてこないからわからない。今のところは様子見でいこう。嵐が過ぎれば村を出て別の場所に移ろう」



「はい、承知しました」

魔法使いだからこそ魔力や粒子には反応できるし、彼女の高められた感覚ならば普通じゃないというのわかるかもしれない。本当に気づかれたならばそれ相応の処置はしておくべきだが、確証も得ないままに仕掛けていった場合のリスクもある。

何せ彼女は一般人ではなく魔法使いだ。自分が何らかの術を掛けられる事に対する備えがあるかもしれない。もしそれによって防がれたならば、自分達の正体に気づかれることになってしまう。

そうなれば……殺すかあるいはまた別の処置を施すしかなくなる。

相手はヤマト国でも名の知れた家の生まれだ。下手な事は出来ない。

ならば自分達から姿を消して忘れてもらおう、という方針でいく事になる。だが今は嵐が通過中だ。これが終わるまでは身動き取れない。自分達は一般人で通している。こんな時に宿を後にする事は違和感丸出しなのだ。

その日は窓の外を吹く強い風による音をBGMとし、二人は今日亡くなった二人の忍に対して黙祷を捧げ、いない間に届けられた情報を今までの情報に組み込む作業を進めていった。

そして同時刻、モガの村の前に広がる海の上空では厚い黒雲が通過していた。下ではその残骸とも呼べる雨雲が広がり、激しい雨を降らせながら移動している。

その雲に覆われながら一頭の龍が強風をもともせず、緩やかに黒い雲海を泳ぐようにして飛行していた。

アマツマガツチだ。

先日平行世界でウエゼントネルと戦闘を繰り広げ、勝利を手にした彼女は白皇へと報告し、現在紡がれている物語の舞台となつているこの世界にやつてきたのだ。その波動によつて数日前から海の上空で雲が作られていき、アマツマガツチの力の波長が微小ではあるが広がり始めていた。

それを感じとつたとんでもない人物がいる事を彼女は知らないようだが、ウエゼントネルと戦闘した海上の空にやつてきた彼女は北東へと進路をとつて移動していた。その先にあるのは彼女の本拠地である霊峰がある。

アマツマガツチは嵐と共に現れ、去つていく。

その伝承通り、彼女の周囲は嵐を作り出す厚い黒雲が広がり、その白い姿を覆い隠し、下界ではその力が自然現象となつて猛威を振るつている。

その様子を、彼女は見えない目で見上げていた。

「伝承通り、ということか。これほどの強い嵐……強い水と風の力は見たことないわあ」  
雪菜がいるのはモガの森にある高い丘の上。吹き荒れる嵐をその身に受けながらも彼女は笑みを消す事はなかつた。これほどの強い力、この肌で感じてみたいという思い

つきだけで彼女はここに立っている。

いつも手にしている番傘は左手に閉じられたまま握りしめられ、不安定な場所にもかかわらず彼女は体勢を崩さずに佇んでいた。

「流石は古龍ということやな、素晴らしい力や。荒れ狂う水と風……それに混じる雷くすくす……ほんまに旅はええもんや。思いがけない出会いがあるつてもものやなあ」

ペロリ、と妖艶に微笑みながら顔に当たる雫を舐めとり、彼女はただただ笑い続ける。艶やかな夜色の長髪も、着こなしている着物もずぶ濡れになり、体温が下がっていても彼女はここから離れる事はない。

それよりもこれほどの嵐を作り出しているアマツマガツチの力に触れていたい、感じていたいという好奇心が勝っているようだった。

だが空高くに存在しているかの存在は、古龍だけあって内包する力は高い。曇天に隠されているとはいえ、それでも微小の力は漏れて出る。それをこの地上から感じ取ってしまう彼女の感性の高さ。

心眼と高い感性を持つ雪菜、七禍龍に数えられたアマツマガツチの天空。

二つが合わさることで、普通は成し得ないこの現実を作り上げたのだ。

「アマツマガツチ……一体どれほどの力を持つとるんやろうな？ ああ……興味深いわあ、欲しいわあ………たいわあ。くすくすくす……」

不意に彼女の笑みに陰りが生まれる。

それは夜の闇と嵐の影響なのか、はたまた彼女の心境に変化が生まれたのか。誰にも知られる事なく、彼女は気が済むまでそこに佇み続けた。

## 29話

嵐は深夜の内にモガの村を通過していったが、それだけでも十分に爪痕を残して行った。海は大荒れ、村の中も水浸しになり、木々の中では耐えきれなかったものが倒れるという被害を生み出してしまった。

村の男達は倒木の処理、建物の補修、船のチェックを行い、女達は飛び散った木の葉や跳ねた泥などの掃除などを行っていく。

その中には将輝や檸檬、チャチャの姿もあり、村人達が協力して事に当たっていた。また客人である海や空も一部を手伝い、雪菜も術を使って掃除などを支援していく事になる。

そうして昼ごろまで作業を進めていき、全てを終えた海と空は宿のチェックアウトを済ませて宿を後にした。

モガの森も当然ながら嵐の影響があるようで、地面がぬかるんでいたり所々で倒木が起きたりしているようだが二人にとつては特に問題にはならない。次の場所へと移動して辻斬りだけでなく領主事件についても調べていかないといけない。

今回は負けだ。

待ち構えて現れるのを待ったはいいが、結局は尻尾を掴む事が出来なかったのだから。

悔しいが気持ちを切り替えて次に生かさないといけない。

そうしてモガの村を後にしようとする村長、そのセガレや村人、将輝達が挨拶をし  
てきてくれた。

「もう行くのかい？」

「はい。短い間ですがお世話になりました」

「そうか。対したもてなしも出来ず、すまないな」

「いえ、お気になさらず」

元より長く居座る気はなかったので本当に気にしていない。微笑しながら手を振り、  
「また機会があれば是非来てくれよ」と握手を求められ、「はい」と頷きつつ海はそのがっ  
しりとした手を握りしめる。

「氣いつけて旅せえよ。最近物騒らしいからのお」

「そうだね。護衛もなしに旅をしているようだけれど、本当に気をつけるんだよ？」

「お気遣いありがとうございます。でも、大丈夫ですよ。何かあれば全力で逃げますの  
で」

将輝と檸檬が心配するように声を掛けてくれる。腕を組みながらじつと見つめてくる将輝だが、その目つきと雰囲気からして柄が悪そうだと感じてしまうのは相変わらずではある。でもそれは外見的なもので実際はなかなかいい人だとわかる。

檸檬も剣士としての名家の生まれだというのに結構親しみやすい人だし。そういえば雪菜も名家のお嬢様だが彼女もとつきにくいとは感じなかった。そんな雪菜は一体どこに行つたのだろう。

見回してみるが姿がどこにもない。掃除をしていた時は姿があつたはずだが、先ほど宿へと荷物を取りに戻つた際にさりげなく探してみたがいなかった。

一体どうしたのだろうか。

まさかとは思うが本当に気付かれたのだろうか。

表情に出さずその事を懸念し、村を出てから彼女を探してみるかと考える。

「では名残惜しいですが、俺達はこれで失礼します」

「お世話になりました」

「おう、またな！」

手を振るセガレらに頭を下げつつ二人は村の入り口である門を潜り抜けていく。坂を登り、森の中へと入ろうとしたところで二人は村へと振り返る。雪菜が一体どこに消えたのかを探すためだ。

宿の人は雪菜がチェックアウトした、という風な事は話していないし、他の村人達、セガレもまたそういう事を話していない。

(桐生雪菜……一体どこに)

そう考えた刹那、空がはつとした顔で森の方を見やる。

彼女の視線の先にはいつからそこにいたのだろうか、雪菜はいつもそうしていたように番傘を手に佇んでいた。木の幹にもたれかかり、じつと空を見上げていた雪菜は二人に気づくと、あの優しい微笑を浮かべて「ああ、もう行くん？」と声を掛けてきた。

驚きを悟られないように表情を変えず、気を揺らがせないようにしたが、はたして成功しただろうか。

「ええ。雪菜さんも短い間でしたが、空がお世話になりました」

「ええんよ。ウチも結構楽しかったしなあ。この出会いに感謝を」

番傘をくるくると回転させるようにして弄りながらたおやかに頭を下げる雪菜。それに対して空も頭を下げつつも、警戒するような視線を向け続けていた。しかし妙な雰囲気はどこにもない。

「あんさんらの旅、この先も実り多い事を祈ってますわ」

「ありがとうございます。桐生さんも、これからの旅、お気をつけて」

空の言葉に「おおきに」と微笑を浮かべ、二人へと番傘を手にしていない左手を軽く



振ってくる。それに手を振り返し、二人は森の中へと入っていった。

そんな二人を見えない目で見送り、見えなくなつたところでまた雪菜は小さく微笑を浮かべ、「……本当に、ええ旅になるとええな。お互い、な」と独り言のように呟いた。

○

「なに？ モガの忍が殺られた？ 誰に殺られたつていうんです？」

『不明です。霧夜の忍かと思われましたが、どうやら向こうの忍も殺られているようで』  
「ふむ……となれば辻斬りとやらに抹殺された、と考えるべきでしょうね。わかりました、引き続き監視を続行しなさい」

『承知しました』

砂原の一角にて一人の青年が手にしている水晶を懐にしまった。彼の出で立ちは茶色い長袖に紺のズボン、茶色い外套を羽織るといふもので、頭にはフードを被つて砂原の強い日差しから体を守る格好になっている。

彼は先ほどまで水晶を通じて遠く離れている風間の忍と言葉を交わしていた。風間の忍は灯の部下ではあるが、灯と同じ立場にある仲間である彼にも数人忍がつき、どのように動いているのかなどの情報を提供している。

今回はモガ方面に送り込んだ忍からの情報を耳にする事が出来た。

霧夜一族の次代頭領である海らとその補佐をする忍らの動向は把握しておかねばならないという事で、彼らの近くには数人の忍を派遣している。だがその内の数人が霧夜海にも気づかれずに殺されている。

まさか武人だけでなく自分を調べに来た忍に気づいて抹殺するとは、恐るべき存在だ。

しかしこれによつて疑問が生まれた。

(妙ですねえ……先日はこつちで天刃流、獣牙流を殺している。ここからモガまではどんなに急いでも三日以上はかかる。だというのに昨日モガにいた忍が死んだ。……空間転移を習得しているのか、あるいはやはり——)

口元に指を当てながら、彼はフードの下で目を細める。

「——辻斬りは、複数存在しているのでしょうかねえ？」

空間転移なんてそんな高等術を誰も彼もが習得しているはずもない。もし習得しているならば辻斬りは武の面でも魔法の面でも達人以上の実力を保有しているという事になる。

シュヴァルツの末裔ならばその可能性が考えられるのだが、それを除外するならば複数説が有力だ。しかし彼にとつてそれは可能性が挙げられようとも、シュヴァルツの末

裔が犯人<sup>ホシ</sup>である事を願っている。

「魔族じゃないんじゃあ私にとつてはおもしろくはないんですがねえ……」

ゆつくりと顎を撫でつけながら小さく笑ってみせる。彼もまだ辻斬りの正体に辿り着いていないが、彼はシュヴァルツの末裔であつてほしいと願っているのだ。それは彼がシュヴァルツを、魔族を毛嫌いしているためであり、敵視している。

むやみやたらに殺して回るような狂人ではないが、敵に回つた、あるいは敵と判断したならば容赦なく殺しにかかるくらいに心構えをしている青年だ。その中でシュヴァルツの末裔が相手ならば、例え不利だろうとも戦いを挑むくらいである。

「まあ、いいでしょう。次のポイントに向かうとしましうかね」

懐から地図を広げ、自分の現在地と周りの状況を確認し、身を屈めて走り出した。向かう先はロックラック方面にある村や町。ここから辻斬りの気配を探り、可能ならば先回りを狙っていく予定を頭の中で立てていった。

その様子を陰から観察するのが同じように外套を纏つた一人の男。外套の下にはどういうわけか服を纏わず上半身は裸のままである変人。

霧夜狭間が気配を殺してそこにいた。

「風間の忍も動かされ、源次ちゃんに伝わった、か。それにしても困つたものねん。相変わらず源次ちゃんは反魔族派か。悲しいわねん……」

腕を組み、右手で顔をおさえてさめぎめと涙する狭間ではあるが、こんな所で一人でやっけても誰かが見てくれてるわけでもない。そんな演技をしても観客がいなければ意味はないだろうが、狭間はそうしたまま頭の中で地図を思い描いていた。

先ほど走り去っていった男、源次が向かった先とその周囲で起こっている出来事を照らし合わせ、ふむ、と小さく頷く。

「そういえば驚輔ちゃんがああの辺りにやつてきていたかしらん？　ここで遭遇させるのもなんだし、あの子には南に進んでもらおうかしらん。あとは……午卯ごぼうちゃんの動きかしらん？」

そう呟きながらおもむろに右手を軽く挙げて指を立てる。するとそこに粒子が集まって鳥を形作っていった。それを優しく肩へと持つていき、懐……外套の内側をまさぐって紙と筆を取り出した。

そこにさらさらと文字を書き込みつつ、

「どうやらここに嵐が舞い降りたようだし、そろそろ本格的に動きだしそうね。このまま私が陰に動いていいのかしらん？」

独り言を呟く。だが彼は手紙を書きながら小さく相槌を打つようにし、「そう」と口にしつつ手紙を巻き、肩に止まらせた鳥を呼んで足に括りつけた。「驚輔ちゃんよろしく」と声を掛けてやり、空へと放つと一息ついてまた虚空を見やる。

「私が向こうに行こうかしらん? ……そう、じゃ、よろしく頼むわね」

そうして力を抜いたように視線を落とし、だがすぐに顔を上げる。もう一度虚空を見つめ、「さて、一応世話になっているし、午卯の動きを把握しておこうか」と誰に言うまでもなく呟き、彼の姿は消え去った。

後には乾燥した風が緩やかに流れていった。

○

数日後、霧夜海と空はタンジアの港へとやってきていた。ここは海に面した大きな港であり、近くに聳える灯台がシンボルとなっている。この近辺には厄海と呼ばれる海があり、そこでは遠い昔に起こった一つの出来事の舞台となっている。

それはこの地方の伝説となって語り継がれ、あの灯台がその事件があつた事を示す証にもなっている。

またここはロツクラックほどではないがハンターが多く集う場所であり、ここを拠点として活動しているハンターも結構いる。港の一角が大きな酒場となり、そこには日夜ハンターが集まって情報をやり取りしたり、クエストを受注して船を使って移動したりする光景が見られる。

先日通過していった嵐のおかげで少し港が荒れたようだが、すぐに補修や掃除をして使えるようにしたという事もあり、ギルドの仕事は早いものだった。しかしそれでも彼らはあの嵐がアマツマガツチが引き起こした、という事までは辿り着いていなかった。無理もない。

アマツマガツチ本体はモガの村方面にあり、ここはただ嵐の余波が通過していっただけに留められていた。数十キロも離れた場所を、それも厚い雲に覆われた天上で飛行していたため把握する事はかなり難しいものだった。

伝承に語られる存在が現れた事も知らず、今日も通常営業する酒場でハンター達はいつものように騒ぎ、飲食し、盛り上がっているその中に海と空がいた。

ここは酒場でもあるがハンター専用という訳でもない。酒場は他にもあるが二人はこの酒場にやってきて一般客として利用していた。

魚介類の料理を摘まみつつ、ハンター達の会話に耳を傾ける。いつもの事だが今日のところあまりいい話は入ってこない。

だがその中になかなか興味深い二人がいる。

ちらりと視線を向けるその先には二人の男性ハンターがいる。とはいえ今は二人とも私腹を着ているようで、どちらも和服姿だった。話を聞く限りではクエストを終えて着替えてからわざわざこっちに戻ってきたらしい。

真紅に染まった赤い髪は荒々しく跳ね、金色の瞳と口元は喜色に歪められ、手にしているコップに満たされた酒をぐいっと煽っていく。首からはシルバーチェーンに繋がれたペンダントが提げられ、着ている和服も少し着崩される、と雰囲気も相まって粗暴な印象を受ける。

「フーツハツハツハ！ なるほど、まだまだ足りぬと申すか」

「……ええ、そうですね……悲しい事に。そこではばらく一人で行動しようかと思うんですが、いいですかね？」

「よいよい。許す。一人で動くのも我は構わん。好きに動けい」

「ありがとうございます、冥さん」

だが言動はどこか偉そうだ。出身地が高位の家のもなのだろう、たまにはあるがこの地域のハンターは、ハンターのくせにかなり周りを見下したような言動をする人がある。そういうのは大抵己の実力故にプライドが誇張したハンターか、あるいは領主の息子だったりする事が多く、彼がハンターをした場合ああいう言動で活動している。

もしかすると彼も後者の部類なのかもしれない。対面に座っている彼は同じ領のハンターなのか、あるいは領主に仕えている親の子供なのだろうか。二人はそう推測しながら聞き耳を立てていた。

「……そういえば天さんがユクモに向かっていてつて連絡を受けたんですがね」

「ほう、天が？ 相変わらずあ奴は気まぐれよな。まあよい、好きにさせておけ。貴様もしばらくは好きにやっつけていけ」

「そうさせてもらいますよ。……ああ、あと知ってます？ これは噂に聞いたんですがね」

「む？ 何だ？」

ぐいつと残った酒を呑み干し、「娘！ おかわりだ！」と高らかに宣言する。すかさずウエイトレスが「はいい！」と返事して新しい酒を用意していく。対面に座っている黒髪をオールバックしにしている少年は少し料理を摘まみ、お茶を飲んで唇を濡らした。

「なんでも各地でリオレウス、レイアのつがいが活性化し始めているって話ですわ」

「ほう？ 興味深い話ではないか。語ってみよ」

「あくまで噂でしかないんですけどねえ、先日北東の深い山奥から多くの飛竜の影が飛び去っていったって話があるんですよ。確証はないですが、影の形とか雰囲気からそのつがいがいじゃないかって話ですわ」

「ほほう？ して、数はどれほどのものか？」

「完全に把握はしていませんが、十は下らないつがいの数だとか。ギルドも陰で動いて状況把握に努めているみたいですねえ」

ちらりとギルドの受付の方へと視線を向けた少年。冥と呼ばれた青年も続くように



して受付へと視線を向け、小さく笑みを浮かべてみせる。

「ふふん、なるほど、やるつもりか」

「……それがオレの目的ですからねえ……」

「よい、好きにせい。それまで我は……そうだな、天か刹のどちらかと行動するとしてどうぞ。幸い刹は近くにおるしな」

くつくつと笑う彼に「お待ちせしましたー！」とウエイトレスが新しい酒を持ってくる。そんな彼女に、「うむ、ご苦労。なかなか良い酒に娘よ。そら、受け取るといい」と懐から取り出したお金……すなわちチップを渡してやった。

こういう行為は一応認められているが、それを利用してのナンパ行為などは認められていない。あくまでもチップは彼女達への礼、お小遣いなどに留めるのみとされている。それ以上のものを求めるならば制裁も辞さないのが暗黙のルールになっている。

「ありがとうございます」と笑顔でお礼を述べたウエイトレスは懐へとチップを入れて仕事へと戻っていく。それを見送った彼は小さく笑みを浮かべて酒を呑む。

「相変わらず気前がいい事で」

「ふん、無垢なる民は慈しむものよ。若い女は宝よ。小さき花も蕾も芽も、色とりどりの差も含めて全て愛でようぞ」

「……はっ、左様でございますかい」

どこか呆れたように息をつく少年ではあるが冥は気にした風もない。

「さて、オレはこれで失礼しますわ」

「うむ。ここは我が持とう。目標に達せるよう頑張ってくるがよい」

「すみませんねえ。では、失礼しますよ」

ペこり、と一礼すると少年は酒場を後にしていく。それを見送り、ぐいつとコップを傾けて酒を煽り、つまみとして肉を数枚纏めて口に放り込む。

そんな様子を見ていた二人はそこで顔を見合わせる。

「リオレウス、リオレイアのつがいが増えた、か……。これは何か裏がありそうだね」

「そうですね。そちら方面を調べていた者に連絡を繋いでみましょう」

タンジアの港に来てからはここを中心として辻斬りの足取り、近くの領主についてとその繋がりとして他の領主の状況を調べていた。それによりまた一人領主が死亡していったことが発覚する。

どうやら突然の死によりそれを領民に隠していたらしく、風景としては何ら変わりのない様子だったが、領主の屋敷に潜入して調べた事で掴んだ情報だった。表向きには何事も無いように振る舞っていたようだが、内部ではかなり荒れている。こういうケースはいくつか確認できたことだった。

もう一度あそこにいる冥へと視線を向けると、彼は席を立ってウエイトレスへと会計

を済ませていた。そしてぐるりと酒場の客らを見回し、一瞬ではあるが海と視線を交差させた。

それだけではあつたが、何故か海は目だけで笑みを浮かべられた気がした。

しかし彼はすぐに背を向け、酒場を後にしていく。その背中を見送り、だがあの交わした視線の奥にあつた金色の瞳に言い知れない何かを感じてしまった。

「……どうかしましたか？」

「いや……うん、気のせい、かもね。それより、そろそろ時間かな？」

「はい。間もなくあの方が到着する見込みです」

「わかった。じゃあ行こうか」

懐から取り出した時計を確認した空。それに頷いて二人揃つて席を立ち、空が会計を済ませ、海は先ほど冥がそうしたように一度酒場を見回してみる。だが気を引くようなものはなく、やはりあの笑みは自分達に向けられたのか、と考えてしまう。

(……あるとするならあそこにいる竜人族の人、かな。でも、別に何かあるような気がしないな)

自分達が座っていた席の更に後ろの方に竜人族のハンターがいる。深い紫色の長髪をした女性と、西方人のような白い肌に金髪をした女性の二人だった。東の海を長く超えた先にいる西方人がいるというのも珍しい気もするが、でもそれだけだ。

気にするような雰囲気は感じられなかった。……いや、そういうばあの二人、どこかで見たような気がするが、どこだったか。

「お待たせしました」

「うん、行こうか」

会計を済ませ、酒場を後にした二人が向かう先はタンジアの港の外。海沿いにある商店街を抜け、坂になっていく階段を上っていつて港の入り口に向かつていく。外に出れば林があり、その中へと入っていくと既にそこには一人の男性がいた。

カウボーイハットのような茶色くつばが広い帽子を目深に被つて少し顔を隠し、黄土色の外套を着ている。下にある私服は洋物だが、似合わないという程でもない。

そんな彼に近づくと二人は膝をついて頭を下げる。

「申し訳ありません。お待たせしてしまいました」

「いや、気にする事はないよ。そんなに待つていないからね。ほら、立つといい。久しぶりの出会いだ。今はそれを喜ぼうよ、海君、空ちゃん」

にこり、と人のよきそうな笑顔を帽子の下から見せてくれるその男性。彼こそが件の渚と同じ立場にある、ヤマト国王直属の部下。

驚輔しゅうすけと呼ばれる人物だ。

彼は懐に手を入れるとファイルを取り出し、それを海へと手渡した。

「僕が集めた領主事件に関するものだよ。ここに来る途中で遭遇したナーガの一件も入っているから見ておくといいよ」

「ナーガ、ですか。もしかして各地で蛇竜種が活性化しているという影響ですか？」

「その推測が出来るね。以前渚ちゃんに提出した情報の中にも二つほどナーガの一件があったけど、今回はなかなか興味深い情報があるよ」

「あなた様がそう言うとは珍しいですね。そんなに強力な個体だったのですか？」

受け取ったファイイルを海が懐にしまい、ナーガの事に反応して空が訊ねた。それに対し驚輔はにこり、と微笑を浮かべて指を立てて数度振る。

「ナーガもなかなか強い個体だったけれど、それ以上に戦ったハンターが興味深かったよ」

「ハンター？」

「うん。それも双子の姉妹だね」

「……まさか、暁姉妹？」

空が問えば驚輔は肯定するように微笑を浮かべつつ頷いた。

「うん、そう。僕も驚きだったね。まさかあそこであの姉妹に会う事になるとは思いもしなかったよ。でも、いい機会だったね。こうしてあの姉妹の情報が取れたんだからね」

とんとん、と外套の内ポケットを軽く叩いてみせる。彼は一般人として各地を巡り、実際にこの目で確かめ、情報を収集する役割がある。時に偽名を、時に本名を、時に変装をして、と様々な手段を駆使して一般社会に溶け込み、町人になったり情報屋と名乗ったりして行動するのだ。

そうして得た情報をヤマト国へと持ち帰り、記録していく。

今回の一件もまた彼は自分の役割を遂行し、こうして一部をこの二人に提供した。これが彼の仕事なのだ。

「暁姉妹は私達もロックラックで見かけましたが、あなたの移動ルートに重なったのですね」

「うん、それだけでもいい巡り会わせだったと思うね。いやあー幸運だったよ、あつはっはっは！」

頭に手を回しながら軽快に笑ってみせる。これが彼のよく見せる癖のようなものだった。

彼の人柄もあつてそれは嫌な印象に感じず、おおらかな感じがする。穏やかで優しく、親しみやすい幹部。それが彼の持ち味だった。

「ああ、それとあの二人はユクモ村に行くようだったけど、確かあそこには龍仁さんがいるんだっただかな？」

「はい、報告によれば一カ月ほど前からユクモ村に待機し、周辺の調査をしているとの事です」

「となるとあの二人と会う事になりそうだね。それから先の事は彼に任せておこうかな」

うん、と頷きながら微笑み、ちらりと二人に視線を落とす。その視線は穏やかなもので部下を見るようなものではなく、まるで二人の兄のような視線だった。

直属ではないが上司である彼は二人が幼い頃からの付き合いであり、しかし会う機会が少ないため数度くらいしかない。最後に会ったのは確か、五年ほど前だったか。ヤマト国の王宮で渚と会っている時に彼も合流してきたのがそうだった。

「それにしても……また成長したね、二人とも。背格好も、雰囲気も……実力も高まったかな?」

「はっ、日々、精進しております」

その言葉に二人はまた頭を下げる。

驚輔はその言葉にうんうん、と頷き、

「うん、いいね。日々精進、若者はそうでなくちゃね。……ふふ、空ちゃんも一段と綺麗になったね」

「……もつたいないお言葉」

「いやいや、そう畏まる事はないよ。前に会った時は可愛かったけれど、今の君は可愛さ」と綺麗さが同居している。こんないい子に支えられて海君は幸せ者だろうね」

優しい笑顔を見せたまま褒められ続け、空はもう何も言えずに頭を下げたまま固まってしまふ。いつもクールで無表情だった彼女の顔に僅かな朱が混ざっているのは気のせいではないのかもしれない。

ちらりと頭を下げたまま海は空の様子を見てみるが、相変わらず彼女は無言を貫いていた。

「君もそう思うだろう、海君？ 幼い頃から一緒に育ってきた君だ。空ちゃんの可愛さ、綺麗さ……女性としての魅力はひしひしと感じているだろう？」

「……はっ、いえ、た……驚輔さん、なにをおっしゃっているんです？」

「いや、君ももう二十一になろうという頃だろう？ 前に会った時は思春期真っ盛りだったけれど、魔族だから今もなお続行中なのかな？ 僕は人間だからね……その辺りが曖昧だからね」

ぽりぽり、と頬を掻く驚輔ではあるが、今度は海も無言になってしまった。恥ずかしくなった……というだけではない。それもあるが何も言えなくなったというのではなく答えられなかったためだ。

空は可愛い。



その外見は精巧な東方人形のように見える。

鷺輔の言う通り可愛いというだけでなく綺麗さも含まれているだろう。可愛い少女から綺麗な女性に変化しつつある、という事だろう。

シミ一つない透き通るような白い肌に鴉の濡れ羽色のような黒髪が映え、絹のような手触りをしている。宝石のような青い瞳は感情を読み取らせにくいのが、それが逆に魅力的だ。

和服によつて隠されているがプロポーズも、控えめながらも女性らしいふくらみと柔らかさを持つており、日々鍛錬しているからこそ余分な肉もないため、全体として見事な調和を果たしている。何気に里では彼女の隠れファンがいるくらい魅力的だと言われているのだが、海の付き人であるため交際を申し込む男がいまいやうだ。

そんな彼女の成長……すなわち女性らしくなっていく様は、これもまた鷺輔の言う通りひしひしと感じていたし、一番近くで見ている。

しかし海は空に女性らしさを感じてはいても彼女にしよう、とか考えた事はない。

霧夜空はあくまでも海に仕える付き人であり、普通の霧夜の少女ではない。後者ならば別に付きあつたり結ばれたりしてもいいが、付き人ならば難しい。

「もし二人が付きあうなら僕は応援するよ。お似合いだと僕は思っているからね」

「……はあ、そう、ですか……」

彼としては悪気はないのだろう。純粹に二人が仲がいい事を知っているし、幼い頃からずっと一緒に育ってきているからこそお互いの事を知りつくし、結ばれてもおかしくないと思っっている。

だが当の本人らはそうでもなさそうだ。海は少し困ったような笑顔を浮かべ、空はただ頭を下げたまま何も言わない。先ほどまで染まっていた赤も今ではもうなくなっている。

「ああ、そういうえば……鷺輔さんはこれからどちらに？」

「ん？ 僕かい？」

そんな彼女の様子を横目で見つめ、これ以上この話題を引き継がせないようにと少し慌てたように話を切りかえてみる海。鷺輔もそれに乗っかってくれるようで、腕を組みながら東の空を見つめた。

「僕は一度ヤマト国に戻ろうかと思っっているよ。どうやら源次君が近くにいたようだからね、気づかれない内に離れてくるのも一苦労だよ」

「あの方が……」

「君達も気をつけてね。見つかったら……殺られる可能性が高いから」

組んでいた右手を首元に当て、そのまま難いで首が刎ねられる様を見せる鷺輔。これは冗談ではなく起こりうる可能性。それだけ源次が魔族に対しての感情が並みではな

いという事なのだから。

それに頷くように頭を下げると、被っているカウボーイハットに手をかけて一度深く被り直し、軽く周囲を見回して二人に背を向ける。

「じゃあ僕は行くね。頑張ってね、……色々、ね」

「はっ、お気をつけて。驚輔さん」

「お疲れ様でした、驚輔様」

「うん、また会おうね」

手を振って彼は林の奥へと消えていく。それを見送った二人は一度視線を交わした。やはり先ほどの彼の話の影響もあって知らず意識をしてしまう。

『……………』

視線を交わす事は何度もあるが、それはアイコンタクトをする事がほとんどだ。いつも彼女は海の数歩後ろに付き従い、プライベートでも仕事の時でもそれはあまり変わらない。横に並ぶのは何かを見つけた際に報告するか、戦闘時に合流するとかぐらいなもの。あるいは誰かに謁見する際に並んで座す時か。

こうして並んで横目で見つめ合うなんて、そんなお互いを意識し合う男女みたいなことなんてそうあるものじゃない。

それにこんな事で意識して赤くなるなんて、空がするはずもない。

「……これからどうします?」

ほら、何事もなかったかのように彼女は次の行動を訊いてきた。いつだって彼女は自分を支える存在だ。幼い頃から主従は変わらず、そしてこれからも変わる事はないだろう。

彼女はそれが役割であり、主である海を立てるように数歩後ろに下がって甲斐甲斐しく世話し続けるのだ。

でもそれは見方を変えれば主従というよりも夫婦のようでもある。

常に夫の後ろ三步に付き従い、夫を立て、清楚で控えめな女性であれ。しかし芯は強く凜とあれ。

だからこそ周りの者らは声には出さずとも二人がお似合いのパートナーであると感じている。それを後押しする事はなく、本人らの意志に委ねているのだが二人はそれを越えず今までやってきた。

そして空からそれを持ち出す事はないだろう。彼女はただ静かに付き従い、海を支え続けるだけ。判断は海に委ねるはずだ。その控えめさ、出で立ち、それらをひつくるめて空は大和撫子と呼ばれる女性だ。

そんな彼女をじつと見つめ、海は小さく笑って、

「戻って受け取った書類に目を通していこう。その内容次第で明日からの予定を立てる

事にしよう」

「はい、承知しました」

綺麗な一礼は本当に様になっていく。それはまさに海を主とする従者だった。

こんな彼女に対して今までの関係を壊すような言葉をかける事なんて出来るはずがない。

自分達はあの日、親の計らいで出会った時から主と従者だ。

そう、初めて出会った時に感じた子供ながらの初めてのときめきなんて、持ち合わせる事なんて今はもう出来ないのだ。

## 30話

ある日の事、山の上に身を隠していた二人の視線の先には二頭の飛竜がいた。大空を悠々と飛行するのは褐色の甲殻に覆われたリオレウスと、新緑色の甲殻に覆われたリオレイア。

現在二人は各地で噂になっているリオレウス、レイアのつがいの活性化について調べていた。タンジアの港から情報を元に移動し、こうしてつがいを発見してからはその動向を把握するために追跡していた。

空を主な行動領域としているリオレウスの視力は高く、あの高さから地上にいる獲物の動きを把握するだけのものになっている。そんな奴の視界に入らないように木々の陰を利用し、巧みに身を隠して追跡を試みている。

「この先には小さな村が存在。このまま襲うのでしょうか」

「そうなくても手を出す事は出来ない。だが……もしかするとその必要はないかもしれないね」

地図を確認した空が懸念するも、海は今までの情報を照らし合わせてそう言う。

そうして辿り着いた村だが、リオレウスとリオレイアは上空を旋回し続けるだけだった。村ではあらかじめ高台から接近してくる事に気づいていたようではあるのだが、人々騒ぎ、何とか避難し始めているのだが二頭はそんな村に襲い掛かっていく様子はない。

その様子を高い丘から見下ろしている海と空。手を出すようなことはせず、ただじつと起こるままを眺め続ける傍観者になっている。

双眼鏡を手にして上空にいる二頭の様子を見てみると、どちらもじつと地上の村を見つめるだけだった。村の上空を何度も旋回し、しかし襲わない。この奇妙な行動に疑問を感じずにはいられない。

「あの視線……獲物を探しているというより何かを探している、というかのようです」「やはり空もそう感じるかい?」

「はい。それが何か、まではわかりませんが……噂は確かなようですね」「リオのつがいは何かを探すために空を飛行する、か……不可解だね」

一週間前に広がった噂の一つ。

各地でリオレウス、リオレイアの原種、亜種のつがいが急に確認され始めた。

これは真実となり、この周囲の地域で十は下らないつがいがギルドで確認された。繁殖期には入っているので特に問題はないのだが、それにしても数が多いと騒ぎとなり、

一時期は討伐クエストが多く出たが、奴らはただ空を飛行し続けるだけだったので一度依頼書は回収された。

しかし直接的な危害はなくとも人は奴らを恐れる。飛竜の中でも代表的な存在であり、単純な実力もかなりのものだ。それがつがいとなれば並大抵のハンターでは太刀打ちできない程の力量となる。

それが近くに現れ、自分達の村や町の空を飛び回られては普通に生活する事も出来ず、恐怖を感じ続けるしかなくなる。そんな所からは依頼が出ており、それを受理したハンターによっていくつかのつがいは討伐されているようだ。

だがそれ以上につがいの数は多く、更に言えば原種よりも強力な亜種が問題だった。中央にも亜種はいるが、東方にいる亜種の力量は中央よりも強いとされる。

それはその行動が、攻撃パターンがかなり多くやり辛くなっているという点だ。

中央でも普通の亜種よりも強力な個体が現れてきているが、東方の亜種も負けてはいない。接近戦を主とする剣士ハンターをことごとく返り討ちにするかのような行動をして狩りにかかってくる。

それがつがいとなつて襲い掛かってくるのだから原種のつがい以上にやり辛く、受理するハンターが少ないのが難点だ。

「あ、去っていくようです」



そんな事を考えていると、同じように双眼鏡を手にしてつがいを見つめていた空がぼつりと言葉を漏らした。海も双眼鏡を覗き込み、空を見上げれば彼女の言う通りどこかへと飛び去っていく二頭の姿が見えた。

やはり攻撃を仕掛ける事はなかった。

腹を満たす必要がないのか、探している何かを見つけることが出来なかったのか。野生に生きる彼らがこうして人の暮らす場所までやってきておいて、何もせずに去るなんてことがあるのかと疑問だが、それを解決する答えが見つからない。

二人は去っていくつがいを見送る事しか出来なかった。

つがいの行動を確認した二人はタンジアの港に戻る、という事はなく、そのまま丘に登っていき、一本だけ生えている巨木へと近づいていった。これが目印となっており、そこへと辿り着くと木の枝に止まっていた鳥が二人の下へと降りてきた。

それは淡く光りだし、人の姿へと変えていった。

そうして現れたのは一人の少女、二人の主である乾渚だった。彼女が現れた瞬間、二人は揃って一礼する。

「よっ、元気にしてたか？」

「はっ、私達は変わりなく」

「そうかい。何よりだよ。実際に会いたかったけど、分身で悪いね」

「いえ、お気になさらず。渚様の御立場ならば致し方なく」

海、空と続けて挨拶し、渚は被っている帽子の上から軽く頭を搔く。彼女自身はヤマト国の王宮にあり、ここにいるのは魔力で作り出した鳥を媒介とした分身だ。時折彼女はこれを通じて部下からの報告を聞きつつ、彼らの調子を分身を通じて確認している。

上司と部下の繋がりを大事にしている彼女ならではの行動であり、直に会って何か異常はないかと確認していくのが信条だが、立場が立場なので多忙な場合、あるいは国から離れられない場合はこうして分身を派遣しているのだ。

「じゃ、報告を聞こうか」

「はっ。まず先ほど各地で噂になっているリオレウス、リオレイアのつがいを確認、追跡して行動を監視。その結果、危険度としては低ランクであると判断」

「へえ。やっぱ噂通り攻撃を仕掛けるようなことはしなかったわけだ」

「はい。村の上空で飛行し続けるのみに留め、数分程で離れていきました」

報告するのは空だった。抑揚のない声で淡々と報告し続ける彼女ではあるが、それが彼女の性格なので渚は気にした様子もなく静かに相槌を打ちながら聞いていく。

つがいに關しては現在も情報収集の最中なので、先ほど得た情報や以前集めたものを含めたものしかない。

続けて報告するのは領主事件に關する事だった。

こちらに関して二人が潜入捜査をした事と、先日会った驚輔から渡された情報を纏めたものを渚に提出する事になった。

「——という事になっております。わたし達が集めた名簿と異様が集めた名簿、被害状況、その後の領の様子を纏めたものです」

「オーケー、ご苦労さん。……ここで訊くがよ、お前達はこれに関する犯人は<sup>ホシ</sup>どう見る？」

「領土拡大を狙う領主の意志に従った何者か、と推測します」

「実行犯は領主の部下、あるいは——辻斬りと推測」

二人の言葉に渚は腕を組んだままにやりと笑みを浮かべた。どうやら彼女もその推測を立てていたらしい。誰にも気づかれず、あるいは護衛をしていたものも纏めて一気に抹殺していくその腕前。

あるいは事故死に見せかけて、あるいは毒殺で。後者は不明だが前者は明らかに武術の達人だ。それ故にこの事件を起こしているのが世間を騒がせる辻斬りではないかと推測もされているのだが、どうして領主も殺しているのか、その理由が思いつかない。

更に言えば辻斬りの被害にあっている武人らと、事件が起こっている領の距離の問題からもそれを否定している者が多い。

一日の内に数十キロも離れている二つの現場を移動し、殺害するなんてことは空間転

移でもしないと不可能だ。そのため候補には上がっても別の犯人だろうと言われていたのだが、最近になって辻斬りの被害に遭ったものらの刀傷の具合から辻斬りそのものも別人ではないかと推測されている。

これは実際に刀傷を確認していった驚輔の調査結果からも明らかになっている。

「これがもし事実ならばおもしろいことになるな。領主殺しに武人殺し、二つの事件を引き起こした奴らの思惑は何なのか。是非とも犯人をしょつぴいてきて問い詰めたいところだぜ」

「はっ、真実を突き止められるよう全力を尽くします」

頭を下げるとうん、と頷き「頑張ってくれ」と労つてやる。

そうしつつも辺りを見回して人がいないかを確認しつつ、帽子を被りなおしてつばの下から優しい眼差しで二人を見つめた。

「……ああ、そういう驚輔からちらつと聞いてるぜ。なかなか興味深い話を話しているじゃねえか」

「……渚さんも、ですか」

その話題に海はまた困ったように苦笑する。そんな海と空を交互に見やりながら「あたしもお前らがこんな小さい頃から見てきてるからなあ。いよいよそういう話を持ち上がったか、と喜んだぜ」と手で二人の子供の頃の身長を示しながら笑ってみせた。

「あたしから見ても二人はお似合いだと思っぜ？」

「そう……ですか？」

「ああ、縁が少ないあたしに比べたら二人は幼い頃からの付き合いだ。あたしからすれば早いとこくつついて頭領の血筋を安定させた方がいいんじゃないかね？ とか思ったりしてるんだけどな」

「はあ……。しかし渚さんも縁がない、という事はないでしょう？ 美人なんですからお相手がいらつしやるのでは？」

「あたしが美人だつて？ はは、お世辞はよせよ。別にあたしは美人つてもんじゃないよ」

苦笑を浮かべる渚ではあるが、実際彼女は美人だろう。魔族なので年齢に反して外見的には十代から二十代前半なので美人というより可愛らしい少女、美少女というべきか。

特殊な魔族ではあるがそれを抜きにして十分魅力的な美少女だ。縁がない、なんてことではないはず。それに彼女は親しみやすい人だ。そういう面からしても男女関係なく付きあいやすい。

だが彼女はそれを否定するように手を振りだした。

「それにこんな性格だし、こんな口調だし、あたしに告ろうなんて考えようつてももの好き

はいやしねえさ」

「そんな事はないでしょう。渚さんは十分魅力的です。優しいくて面倒見がいいという事を私達は知っています。付き合いたいと思う人はきつといるはずですよ」

にこり、と笑顔で伝えるのだが、それを聞いた渚は帽子の下で苦笑を浮かべてしまう。影に隠れている彼女の顔に朱が混ざっているのは気のせいではないだろうが、彼女の苦笑はどこか困ったようなものが含まれていた。

「……おいおい、あたしをおだててどうすんだよ。あたしなんかにそういう事言っても何にも返せねえぜ？」

「え？ いえ、別にそういうつもりで言ったわけでは……」

「だらうな、本気なんだろうな。だからこそ困るんだよ……はは。まあ、悪い気はしねえけどさ……そういうのは空に言ってやれよ」

「……………」

視線が空に向けられ、しかし彼女は沈黙を守って二人の会話を見守るだけだった。自分に話題が振られようとも、内容が内容だけに反応しなかった。表情を変えることなくただじつと佇んでいたようだ。

傍から見れば年上の女性である渚を褒めて口説いているように見えなくもない。

いや、誰を口説こうが持ち上げようが主である海の自由だし、従者である空に止める

権利なんてないのだが……。そんな彼女を見て渚はやれやれと息をつき、

「空からはなんかこいつにそういうの振るつてのはねえのか？」

「……いえ、ごさいません。わたしはただ、海様の従者です。それ以上を望む事はございせん。わたしには過ぎたる望みです」

「……だよなあ」

そつと彼女の傍に寄つて耳打ちするように問いかけてみたが、返つてくるのは渚が想像した通りの言葉だった。空らしいといえばらしいのだが、二人を結ぶ絆という紐は完全に主従の色に染まり、強固に結ばれているようだ。

これを解き、夫婦という名の絆の色に染まつた紐へと結び直すのは難しいだろう。こりや今はどうにもならないか、と渚は頭を掻きながら嘆息した。

「……ま、いいか。わりい、変な事を言った」

「いえ、お氣になさらず」

「うん。じゃ、引き続き調査を進めてくれ。何か緊急の用件があればいつでも声を掛けてくれるいいからな」

そう言つてぽん、と海の肩を叩いて二人から離れていく。それが今回の報告会の終わりを示した。二人は揃つて一礼し、

「はい。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

挨拶する。渚は一度帽子のつばを上げてにっと微笑むと光の粒子となり、鳥の姿となつて空へと舞い上がっていく。手渡した書類も一緒になつて粒子となつており、問題なく一緒にヤマト国へと飛んでいった。

遠くの空へと去つていった渚を見送るとまた二人して視線を交わす。先日が続いてまたしてもこういう事に關して意識させるような言葉を口にされ、二人揃つて無言になつてしまった。

久しぶりに会つたからつてああいう話を持ち出した鷺輔に、彼から話を聞いた渚と幼い頃から世話になつた年上の人達の話題振り。上司というだけでなく世話になつている人だから無碍にも出来ない。だからこそ返す言葉に困つてしまい、それが増々至高の渦へと捕らわれてしまう。

自分達は主従。そういう感情を持ち合わせてはならない。意識しないように逸らしていた思考なのだからこそ言葉に詰まつてしまう。

空もどうしたらいいのか困っているだろう。相変わらずクールな彼女だが内面では困っているはずだ。この空気を早く壊し、流してしまおうと考えるも、話す内容がすぐに思いつかず、何から話せばいいのかわからなくなつてしまう。

困つてしまった海に代わり、一度目を閉じた空が静かに、



「……海様、一度戻りましょうか？ それとも、もう少しつがいについて調べましょうか？」

次の予定を問いかける。

先ほどの事を流し、なかった事にしてしまう。主である海が困っているならば、自分は気にせずに変わらず従者として振る舞うだけ。

この空気をどうにかしようと考えていた海に代わり空がそうしてくれた。

頭を下げて主に伺いを立てる彼女はまさしく「従者」。決して「一人の女性」ではなかった。「一人の女性」でないならば、彼女を意識する必要もない。海は冷静さをゆつくりと取り戻していき、一息ついて頷くとさつきまで困っていた雰囲気はもうなかった。

そこにいるのは「従者」の「主」だった。

「このまま各地のつがいについて調べてみよう。どれだけ数が減らされたのか、確認されているのはどれだけのものか。改めて把握しよう」

「はい、ではそのように」

深く一礼し、札を数枚懐から取り出して短く「召喚」と告げれば書かれている文字が淡く光ってそこから数羽の鷹が現れる。空に放ればそれぞれ別々の方角へと飛び去っていき、続くようにして二人も丘から飛び降りた。

急な坂になっていゝるそこを駆け下りていき、下の森へと飛び込んで一気に疾走する。悪路ではあるがそんな事など問題にならないとばかりの身体能力を發揮して森を高速で移動する。

向かう先は現在の拠点であるタンジアの港ではなく、内陸にある中継地点とされている街だった。

数時間かけて辿り着いたそこはタンジアの港から陸路を使って人と物が出入りし、東西と北へと運ばれるための街だった。港へと海路を使って運ばれた品々はここから各地へと移動されるようになっており、そのせいかここには多くの竜車、アプトルが存在している。

当然ながら港へと向かう竜車の便も多く、港から海路を使って旅をする人々もここに集まっている。

そして人が集まれば、その中にハンターも混ざってくるのも道理。ここもまたハンターズギルドの支部が存在している。その酒場へと足を運ぼうとし、扉を開けて中へ入るとやはりというべきか人が多く集まっていた。

夜こそが酒場の稼ぎ時であり、当然と言えば当然の結果だろうが、これだけ人が集まると壮観だ。空いている席はあるだろうか、と見回してみると、

「はあー腹減ったなあ。今日は何にするかね、ほむほむ?」

「おいコラ、喧嘩売ってんのか？ いいよ？ 買うよ？ 焰の事をそう呼ぶって事は調子に乗ってるって事でいいんだよな？」

「そう怒るなってほむほむ。可愛いじゃねえか、この呼び方。親しみが持てるじゃねえの、なあ？」

「なあ？ じゃねえよ。焰に同意を求めんな、猿」

二人の男女が会話をしながら近づいてきた。それはなかなか風変わりな二人だった。

片方は金色の荒々しく跳ね回った長髪を首元でゴムを結び、反り曲がった角を一对持った青年だ。少し長く尖った耳を持ち、快活そうな赤い瞳をしている彼は恐らく有角種の魔族だろうと推測できる。

かなりの長身で首回りに沿って黒い毛を使った黄色と黒の縞模様のコートを着込んでおり、下に着ている黒いシャツの上からでもわかるほどがっしりとした体躯をしている。たぶんハンターなのかもしれない。

そんな彼に同行しているのは十代後半の少女だった。茶色い髪をポニーテールにし、黒いリボンで結んでいる。気の強そうな真紅の瞳に整った顔立ちからして美少女と呼ばれるだろうが、その纏う雰囲気にはほどの言動からしてなかなか男勝りな性格をしているようだ。

しかも彼女の耳は猫のもの。どうやら彼女も魔族らしい。

オレンジの下地に炎を描いたシャツに黒いズボン、その上に炎の柄をした赤いローブを纏っている。

「そろそろ長い付き合いになるってえのにこの反応。お前さんは相変わらずだよなあ……俺、時々悲しくなってくるんだよ。色々と手を尽くしてほむほむと今以上に仲良くなるうとしているのに、名前に反して冷たい反応……嗚呼、いつになったらほむほむは俺に優しくしてくれるんだろうってさ……」

「黙れ猿。ほむほむゆーな。あと、名前を使って弄るな。殴るぞオラ？」

「そう言いながら殴るなよ、ってーな……いや、痛くないんだけどね？」

「そーかそーか。じゃあもつと痛くしようか？ ああん？」

なんだろうか、この二人。仲がいいのか悪いのか……少し判断に困るやり取りをしつつ酒場へと近づいてくる。このままここにいると邪魔になるか、と道を開けると二人はそのままだに入ろうとしてくる。だが海と空と同じように人の込みようを見て驚いたようだ。

「おーおー、満員かこれは？ んん……参ったねえ。どうするよ、ほむほむ？」

「だから……チツ、もういい」

また苦言を口にしようとしたが、もう何を言っても無駄かと悟って一発彼の尻を蹴り飛ばして辺りを見回した。不機嫌そうな紅い瞳が酒場を見回し、空いている席はないか

と探してみたが、不意にその動きが止まってしまふ。

空いている席を見つけたのか、と思つたがそうではないらしい。

彼女の瞳が驚いたように見開かれ、そして「……チツ」と小さく舌打ちした。そのまま身を翻し、酒場を後にしようとする。そんな彼女に青年は驚いたように、「お、おい……どした、ほむほむ？」と声を掛ける。

「……んであいつがここにゐるんだよ。未寅みとらの野郎もゐるのか……？」

だが彼女は青年の言葉に反応せず、ぶつぶつと独り言を呟きながら酒場を後にしていった。そんな彼女を呼び止めようと手を伸ばしかけた青年だったが、何も掴めなかつた手をゆつくりと戻し、頭を掻きながら酒場を見回してみる。

すると彼女が見てしまったものを見たようで、「ああ……なるほどねえ」と納得し、彼女を追つて走り出した。

その一部始終を見た二人は揃つて首を傾げる。

一体なんだったのだらうか、と二人は酒場の中を見回してみたが、気になる点はどこにもなさそうだ。あの二人の知り合いでもいたのだらうか、と推測するが、知人でもないのかわかる術はない。

だが奥の方になる影が見えた。そこに目を凝らしてみる。

そこにゐるのは一匹のアイルーだった。笠を被り、煙管を口の端に啞えた白と黒の毛

並みをしたアイルー。

そのアイルーを二人は知っていた。

「あれは……疾風<sup>はやて</sup>?」

「そのようです。まさかここに来ていたとは驚きですね」

戦アイルーの疾風。通称「神風」として名を馳せる戦アイルーであり、その道の者ならば知らないものはいないと言われるほど有名だ。いつも被っている笠と啜えている煙管がトレードマークなアイルーだ。

カウンターの席に一人で腰かけ、静かに食事を進めている彼の事に気づいているのは数人のようだが、話しかけようとする人はいないようだ。その中に、二人が入っていく。

「……む? おや、君達は……」

「久しぶりだね、疾風」

「うむ、久しいね。今は……桐島、かな?」

「ああ、どつちも桐島で通じているよ」

「了解した。……座るか?」

隣の席を示し、二人は一礼して席に着いた。カウンターの向こうにいる店員へと食事の注文をし、先に運ばれてきた酒を手に乾杯して呑み始める。

「それにしてもこんな所で何をしているんです? 一人……いや、一匹か。一匹でこの

東方を巡っていると噂で聞いていたけれど」

「うむ……最近噂に上がっているリオのつがいの一件でね、情報が集まっていそうなここに足を運んでみたのだよ。そうしたらね……ついに確認されたようだ」

「確認？ それは一体？」

空が控えめに問えば、疾風が煙管を灰皿へととんと叩き、ふう……と息と煙を吐き出して二人を横目で見つめた。その口元は小さく笑みを形作っているが、瞳は真剣なものだった。

「——希少種のつがいだよ」

『……っ』

その言葉に二人は揃って息を呑む。

希少種、その名の通り亜種以上にめつたに確認できない種類であり、同時に原種、亜種以上の力量を兼ね備えた存在だ。

リオレウス希少種は銀火竜、リオレイア希少種は金火竜として知られており、能力だけでなく弱点なども差異が生まれ、ハンターにとっては厳しい相手として知られている。

普段は塔に住まうとされているのだが、近年は溪流にも姿を見せた事があるそうだが、それでも希少種だけあって発見は稀有なものだ。

その希少種、それもつがいとなって確認されるとは珍しい。しかし同時に厄介なことになっただろう。何せ相手が相手のため討伐クエストが出されたとしてもこなせる人材がいるかどうかからない。

そこまで考えたところで海ははつとして疾風を見る。

「受けるつもりかい？」

「ああ、そうしようと考えている……んだが、少々厳しい。拙者だけでは勝ち目は薄いだろう。だから助力を求めるのさ。聞いた話だと彼がユクモにいるようだからね……今は神殿だったかな。彼の力を借りればこの一件を問題なく片をつけられるはずさ」

「なるほど」

現在ハンターとして活動して調査を進めている龍仁。聞いた話では現在は紳仁として行動し、オトモとして佐助と椿を連れていると報告に聞いている。ヤマト国の重役ではあるがハンターでもある彼はかなりの実力を保有しているし問題はない。

それに加えて戦アイルーが三匹もいるのだ。戦力としてはかなりのものだろう。このチームならば希少種のつがい相手で何とかなりそうだ。

「だがまだつがいの行動範囲が完全に定まっていないようですね、現在は調査待ちという事になっている。だがそれが明らかになり、依頼書が制作され次第拙者は名乗りを上げるつもりだ。それまでは待機という事になっているのだよ」



そう言つてまた煙管を啜える疾風。

希少種のつがいを確認されはしたが被害報告はまだない。話を聞く限りでは確認されているのはやはりというべきか山奥であり、人里が周囲にない所を飛行していた気球が発見したのだとか。

しかし着実に行動範囲を広げてきているようで、未来の危険性から依頼書が作成されるのも時間の問題という話だ。

「それで、桐島殿……いや、今は海殿、と呼ぼうか。君達の旅はどうか？ うまくいつているのかい？」

「どうでしょう……失つたものもありますからひとえにうまくいつている、とは言い難いね。だけど少しずつ前に進んでいる、のは確かだと思う。情報は集まっているし、先ほども……乾さんに会つてきましたから」

「ほう、渚殿に。健勝でらつしやつたか？」

「ああ。元気でらつしやつたよ。相変わらずなご様子だった」

そう、相変わらず、親しみやすい上司だ。驚輔もそうだし、龍仁もそうだ。あの三人は人のいい上司であり、部下にも慕われる良い人達だろう。本来ならば忍は上司のために忠実に働く道具のような存在なのだが、彼らはそういう風に扱わなかった。

霧夜一族もまた彼らの部下と同じ仲間であるとして接し、気遣つてくれる人達。それ

がああ三人だった。

それは潮曰く昔から変わらないようで、あの三人が、というよりあの三家というべきか。

「そうか。この一件が終われば久方ぶりに挨拶に伺おうかな」

「そうするといいいよ。きつとお喜びになるはずさ。ヤマト国にも長く帰っていないんだらう？」

「うむ、かれこれ三年ほどは離れているか。あつという間の時間だったよ。しかし良い経験にもなった。様々な人々の暮らしに触れられたのだからね」

彼も昔は龍仁の部下として活動する戦アイルーであり、その実力から戦アイルーの部隊では隊長を務めていたが、現在はその任から離れている。それは六年前の一件が関係しており、あの一件で一時的に活性化した飛竜らの被害を食い止め、また同時に近年活性化し始めた蛇竜種の調査を進めている。

その中でも脅威とされている鬨蛇ナーガに関しては、彼の調査結果もあつて情報は以前に比べて集まっているようだ。彼の活躍はギルドにも貢献されているらしい。

「お待ちせしました」

そこで注文した料理が運ばれてくる。

いい匂いを漂わせるその料理を前に、「さて、料理が来たからこの野暮ったい話はこれ

くらいにしようか」ともう一度グラスを軽く掲げる。それに異を唱える気もなかったの  
で、同意するように海がグラスを掲げ、それに続くように空も無言で掲げる。

「では、もう一度この再会に」

『乾杯』

海を中心として再びグラスが打ち合わされ、二人と一匹は任務などの話はせず、昔の  
事を思い返ししながら談笑し、料理を食べ進めていった。

その会話は主に海と疾風が進めたが、時折空も混ざり、大いに華を咲かせる事になっ  
たのだった。

次の日の朝、疾風は希少種のつがいのクエストを受けるためにこの街から離れ、  
フィールドに指定された溪流の近くの村へと移動していった。それが終われば龍仁に  
も報告するために後から来るといい、と言い残し、彼はアプトルに騎乗して街を去って  
いった。

それを見送った二人は一度物資を仕入れるために市場へと繰り出していった。携帯  
食料を作るための食糧や武器の手入れをするための砥石などを買うだけでなく、こうし  
て人々の日常に溶け込んで何気ない会話を聞いていくのが狙いだ。

私服姿で市場を歩き、必要な物を購入していくこの姿は傍から見ればデートだろう  
が、もちろんながら二人にそんな感情は持ち合わせていなかった。これは必要な事であ

り、同時に任務の一端でもあった。そんな気を緩めるような事を考える事なんてなかった。

「こちらの方が安いですね。いい品ですし、こちらを頂きましょう。あとは……こちらとこちらをお願いします」

「ありがとよ！ お嬢さん、なかなかいい目利きをしてるねえ。いい嫁さんになれるよ！」

「ありがとうございます」

食材の買い物を進めていく空の様子を後ろから見守る海だが、彼女が褒められたとき微笑を浮かべたがそれは外面だけだった。そうすることで違和感を持たれないようにするための芝居である。

空の方も一応お礼を口にしてはいるがにこりともしていない。勘定を済ませて品物を受け取ると、一礼して海に並び、二人揃って歩き出す。もちろん、海から数歩後ろに下がって、だ。

それまで買った物は全て海が持つており、視線は周囲をさりげなく彷徨わせている。

昼に近い時間帯という事もあって人の数はそれなりのものだ。はぐれそうな程ではないが、人の波が結構激しい。軽やかな足取りで流れに逆らわずに進んでいき、人の様子を見まわす二人はぼつりとこう思う。

親子連れやカップルが多いな、と。

親子揃って品物を見たり、男女で腕を組んで歩いていたりと平和な日常がそこにある。後者に関してはハンターも僅かに混ざっており、装備を身につけたまま市場を歩いている様子も見られた。

世間では結構大変なことになっているだろうが、ここにはハンターが多く常駐しているためある程度平和は保たれている。また街の特徴上多くの人が出入りするため自警団などの警察機関が街をパトロールしているため治安もいい。

そのためこのような空気が街を包み込んでいるそうだ。

「お母さん、こっちの野菜、安いし美味しそうだよ」

「……そうね。……でもこれは向こうの店が安かったから、そっちで買おうか」

「へえ、覚えてるんだ」

「……こういう事は把握しておかないとやりくり出来ないから」

見れば若い母娘が仲良さそうに手を繋いで歩いているのが視界の端に入ってくる。藍色の長髪に黒い瞳をした母娘であり、顔立ちからしてよく似ている。お揃いなのだろう、藍と黒の暗い色合いをした和服を着ている。

人の波にはぐれないようにしっかりと手を繋いで歩く様を見ていると微笑ましくなってきた。

そんな日常を守るため、とまではいかないが、守る一端として活動できるように準備は怠らない。宿へと戻った二人は購入した食材を調理して携帯食料を作り上げ、武器の手入れを済ませて街を後にしたのだった。

向かう先はタンジアの港。一度あそこに戻って宿をチェックアウトしてあそこにある物を回収しつつ、新たな情報がないかをチェックする。

それが終われば疾風の後を追ひ、合流地点に向かうだけだった。

そうして、時間は現在へと戻される。

また周囲の調査を終えた後に、山の中にある村へとやって来た二人は合流地点である酒場へと入り、龍仁らと合流した。

そこまでの過程を話し終えた海は渴いたのどを潤すように運ばれてきた酒を呑んでいく。そんな彼を見つめて榊……もとい龍仁はうん、と頷いてにっと笑った。

「ほうほう、色々巡ったようだのう。お疲れさんじゃわい」  
「はっ」

コップを置いて席に着いたまま頭を下げる海とそれに続く空。結構長く話した事で料理も少し冷めてきているが、これくらいどうという事はない。空も海が話し終わるまで手を付けておらず、時々海に続くように唇を濡らす程度に酒を呑むだけだった。

ようやく海が食べ始めたところで彼に続いて食べ始めるのだった。

「それにしても渚嬢ちゃんからはワシについてなんも言っておらんかったのかの?」

「はい、特には」

「ふむう、だつたらよいのじゃがのう」

「……もしかして、もう何も言っても無駄だと呆れられたんじゃないんかにや?」

「ぬおつ、マジか!?!」

慌てて椿に振り返るが、彼女は頬杖をついてポポノタンの塩焼きを摘まんで口に放り込んでいた。その視線は呆れたものを含んでおり、まるでやさぐれたようにぐいと酒を飲むようにミルクを喉に流し込んでいく。

「ぶはあ……、だつてにや、おやつさん遊びすぎだにや。一応今回の希少種のデータを取った事は取ったけどにや、それまでの情報があまり集まってるにや。集まったのはハンターに関する情報だけにや」

「それもそうだが、無駄ではなかったぞ? 桐音嬢ちゃんやあの双子の姉妹の情報は大きい。あとは今回の星野、奴もなかなか興味深い素材ではないか」

「星野?」

「おお、空嬢ちゃんと海にはまだ話してなかったか。実はな……」

龍仁は希少種のつがいの一件で組んだ星野というハンターについて話し始める。どうして彼と出会い組んだのか、どんなハンターだったのかと話していき、静かに話を聞

いていた海と空はなるほどと相槌を打っていた。

星野、とだけ名乗った彼は今回限りのチームだったが、あの實力はかなりのものだった。大きな街に出る事はなく、静かに暮らすという彼にまた会えるとしたら今日以上に親しくなりたいところだ。

「星野……少し調べてみますか？」

「そうだね。頼むよ」

「はい」

ペこり、と頭を下げた空。頭の中で静かに一つの予定を加えておき、食事を静かに進めていく。そんな様子を見ていた佐助が小さく息をつき、

「……はあ、リーダーももう少しこういうマメさがあればな」

「わっはっは！ 何事もおおらかにやっていかんとな！ コツコツやるのは性に合わないわい」

「……それを補佐する俺らの身にもなれってんだよまつたく……」

今度は佐助が呆れたように溜息をつく。なるほど、この二匹の戦イルーもいろいろ苦労しているらしい。それでも彼の補佐をやめないのはただ部下であるだけではないだろう。

なんだかんだで彼の事を放っておけないのかもしれない。そう感じさせるといふ点



も彼の人柄によるものなのだろう。

「……ふはあ。 んんーやはり戦いに勝利し、大勢で呑む酒は美味しいのう。 ……ああ、そういえばワシらは明日ユクモに一度戻るが、お前さんらはどうする?」

「拙者はまた一人で世界を巡るつもりだ。 ……だが、そろそろ一度ヤマト国に戻つてみようとも考えている。 海殿に渚殿の話聞いたからね」

「ほう、戻るのか。 そうかそうか、うむ、是非そうしてやるといい。 渚嬢ちゃんはお前さんを可愛がつとつたからの。 二人はどうする? ワシとユクモに来るか?」

「いえ、暁姉妹に気づかれるのもなんなので遠慮しておきます。 この周辺を巡つてつがいの一件や領主と辻斬りの件を探る事にします」

「そうか。 無理せずにな。 引き際を計り間違えれば返り討ちにされかねんのだからな」  
『はっ』

それからまた談笑しつつ食事を共にしていった。 直属ではないが上司である龍仁がいるので大いに騒ぐようなことはしないが、気さくない中年という雰囲気をする彼のおかげで必要以上に固くなることもなく食事を楽しむ事が出来たのだった。

だが一番盛り上がったのはやはり龍仁であり、料理や酒を多く頼んだのも彼だったの  
は言うまでもない。 そして会計を全て彼の自腹で払われ、本当に良かったのかと海が心配するも「なあに、お前が気にするようなことは何もないわい。 最初に言つたらう?」

ここは全てワシが持つとな。若者は大人しく満足する間で食って楽しめばええわい」と  
おおらかに笑って海の背中を叩いたのだった。

## 31話

ユクモ村へと戻っていく龍仁らと、アプトルに騎乗してどこかへと走り去っていく疾風を見送った海と空は、次はどこを周るかを相談する事にした。ユクモ周辺は龍仁がやってくれるし、疾風も疾風で一匹ではあるがその行動力と影響力で蛇竜種をはじめとするモンスターの調査を進めている。

そして走り去っていった方角は東だった。となれば自分達は西の方へと進む事しよう。

そこで一羽の鳥が空を飛行しているのに気付いた海が「空、何か見つけたようだよ」と声を掛ける。空も見上げるとそれに気づき、小さく頷いて二人揃って森の中へと入っていった。

少し奥へと進んだ後、空が指を軽く掲げると先ほどの鳥が指先へと降りてくる。それは空が札を使って放った鳥であり、それは粒子となつて空の中へと溶けていく。そうすることで鳥が見てきた事を把握する事が可能なのだ。

そうして見たものは二組の原種つがいの動向と、この近くで人が襲われているという

事だった。

「海様、近くで母娘がジャギイの群れに追われています」

「なんだって？　すぐにハンターを……」

「いえ、その暇はなさそうです。数メートル先の崖に追い詰められています。ハンターを呼びに戻っている暇はなさそうです」

「……………ならば陰から救援するしかない、か。空、案内を」  
「承知しました」

小さく頷けば空は先導するように走り出す。そのすぐ後ろをびったりと海がつき、二人は森の中を軽快に疾走していく。足を覆う草むらも、道を遮る木々も枝葉もものともせず、奥へ奥へと進んでいけば、確かに小さなモンスターの気配が多く感じられてきた。

そして、追いつく。

いや、追いついたと言っても実際に現場に到着した、というわけではない。二人が見える距離まで追いついた、という意味だ。

追われているのは二人の女。

藍色の長髪をした二十代後半近くの女性と、その女性に小脇に抱えられている幼い少女だった。よく見てみると、以前疾風と再会したあの街の市場で見かけた二人だったよ

うな気がする。

仲睦まじく市場を歩いていたあの母娘がこんな所でどうしたのだろうか。もしかするとあの村に帰ってくる途中でジャギイらと出くわしてしまったのだろうか。

何にせよこのまま黙って見過ごすわけにもいくまい。

女性是和服を着ているようだが、それでも素早い疾走でジャギイらの群れから逃げ続けている。こうして見ていてわかるが、彼女は常人には出せないようなスピードで走っている。明らかに一般人ではない。

幼い子供を抱えながら和服でジャギイらの疾走から逃げ続けられている。あれだけのスピードを出しているだけでも普通じゃない。

しかしあの先は空が言うには崖があるそうだ。そこに追い込まれれば逃げる事はもう出来ない。そこに至るまでに少しでもあのジャギイ達を何とかしないといけないだろう。

二人は示し合わせたように視線を交わし、同時に懐へと手を伸ばした。

海が取り出したのは苦無。鋭く尖った漆黒の刃を構え、一匹のジャギイの頭へと投擲する。それに続いて空も取り出した札を手にし、ジャギイの額を苦無が貫いたと同時に札に魔力を注ぎつつ「隠術、霧隠れ」と告げる。

すると彼女を中心として白い霧が周囲へと広がっていった。それはジャギイらを包

み込み、彼らの視界を奪ってしまう。

「ギョル、ギョルル!？」

突然発生した霧にジャギイらが戸惑うように周囲を見回し始める。薄い霧はすぐに周囲の状況が把握できない程にまでに濃くなり、しかし母娘へと届かないように調節されていた。

「え、なに? 霧……? お母さん、これなに?」

「……自然現象じゃない。誰かが意図的に作り出した?」

突然の出来事に驚いていたのはあの母娘も同じであり、母親は疑うような眼差しで霧を見つめている。立ち止まって背後を振り返り、何とか霧を抜け出してきた一匹のジャギイを睨み付け、娘を自分の後ろに下ろしてやると、噛みつきにかかってきたジャギイの顎を拳で素早く打ち払う。

その反撃に怯んだところで首を穿つように回し蹴りを放った。しかも足の先には気で作り上げた刃が顕現している。それで首を突き上げ、切断してしまったのだ。

「……誰かがいるな。菘すずな、お母さんから離れないように」

「うん、わかった!」

娘を庇うように腕を出しつつ、母親は周囲を警戒し続ける。

その様子をナルガクルガの因子を使って視力を強化させた二人は見つめていた。二

人の目は真紅に染まり、霧の中で薄い流星となつて数秒だけ浮かび上がっている。二人の手には苦無と小太刀が握られ、霧に戸惑つて棒立ちになつているジャギイらを処理し続けていた。

普通の戦闘が出来ないためこういう手段でしか二人は群れを相手にする事が出来ない。急所である頭、首、心臓と狙つて小太刀と苦無を突き入れ、何とか一撃、よくて二撃で殺していく。

しかし仲間が次々とやられていく声は聞こえているようで、ジャギイらは慌てて霧から脱出しようと動く。その先は普通の森がある場合もあるが、あの母娘へと走つてしまふ場合もあつた。

そうなる前に処理する事が出来るがそれは少数。一匹、二匹と母娘へと向かつていくジャギイらが現れる。だが深く心配する程あの母親は弱くはなかつた。

「……………ふう、しっ！」

戸惑つているジャギイには素早く突き出した拳から放たれる気弾で吹き飛ばす。向かつてきたジャギイには噛みつきを避けるように屈みながら足を払い、バランスを崩したところでバック転をしつつ顔を蹴り上げ、倒れたところで顔を潰すように強く踏みしめる。

死体となつたジャギイを蹴り上げて吹き飛ばされたジャギイの方へと突き返し、娘か

ら遠ざけつつジャギイの死体で押し潰してやった。

「……凄いな」

武器を持たずジャギイと戦えているなんて驚きだ。小型モンスターの鱗は強固なものならば出来ない事でもないかもしれないが、それでもモンスターの鱗は強固なものだ。拳や蹴りで打ち碎けるほど軟ではない。

切れ味が悪い武器ならば弾き返してしまう程には硬いのだ。それを気を纏って放たれる拳と足で打ち砕いている。その格闘術だけでなく、気を扱う心得があるというだけでも彼女は普通ではない。

逃げ続けたのは娘の安全を守るためだろう。個人で戦うには問題ないだろうが、取り囲まれば娘の安全は保障されない。

「母は強し、ですわね」

ジャギイの首を刎ねながら空が眩き返す。いつの間にかジャギイはほぼ全て討伐されておき、残るは何かここから逃げ出そうと霧の中を当てもなく走りまわるジャギイ二匹。

一匹が何とか霧を抜けだし、ようやく逃げられると思ったようだが残念ながらその先には娘を守る母がいる。ジャギイは一步後ずさったが、娘を守るために盾になりながら身構え、鬼気迫るような形相で睨み続ける母親を見つめ、小さく唸りながらも一矢報い



るべく走り出した。

だがそんな疾走が彼女に通じるはずもなかった。

ジャギイの数が減っているのは彼女もわかつているらしく、今度は彼女もジャギイを迎え撃つべく飛び出した。力を溜めていたのかその瞬発力は凄まじく、ジャギイはまるで母親の姿が消えたかのように見えた。

「……はっ！」

ジャギイの懐に潜り込みながら身を屈め、一気に立ち上がりながら回し蹴りを放つ。また足の先に気で作り出した刃を顕現させており、その刃で首へとまるで斬り上げるように振り上げる。

刃はジャギイの首を切断する。血が噴き出して母親の頬へと掛かるが、それを気にした風もなく体勢を立て直し、ふう、と息をついた。

とてとてと走り寄ってきた娘を左手で迎え、庇うように抱えながらじつと霧の中を見つめる彼女の眼差しはまだ気迫が残っている。

海がすでに残った一匹を処理しており、二人は霧の中だけでなく木々の奥へと身を隠していたのだ。空がまた札を手にし、「解除」と告げればゆつくりと霧が晴れていく。

その様子を見つめていた母親は軽く視線を巡らせ、「……………出てこないつもりか」と呟くように言葉を発した。それは独り言なのか、あるいは隠れている二人に告げたの

か。

二人としては忍であるために安易に姿を見せるわけにはいかない。彼女は一般人であり、同時に武人でもあるようだ。自分達の事を知られるわけにはいかなかった。

「お母さん？」

「……………そのつもりなら礼は言わない。そのまま隠れ続けるといい」

不安そうに母親にしがみつくと娘をあやすように頭を撫でてやりながらも、視線は隠れ続ける二人を探すように巡っていた。そうして止まった漆黒の瞳は正確に二人が隠れている木の方へと向けられた。

その警戒、懐疑、敵意が混ざった鋭い視線をひしひしと感じながらも、二人は決して声を出さず、姿を見せなかった。

「…………でも、こっちの事を調べるっていうのなら、こちらは刃を振るう事も厭わない」  
そう言つて彼女は虚空を蹴り上げる。振るわれた足の先からはまた気の刃が放たれ、一本の枝を切断した。それだけではなく、そこに止まっていた空の作り上げた一羽の鳥をも切断していた。

あらかじめ呼び戻していた鳥の位置を感じ取っただけでなく、離れようとしていたのを逃さず狩る素早い攻撃。二人はその鋭い敵意と動きに戦慄した。

そんな二人の心情を感じ取ったのかいなのか、彼女は無言で背を向け、娘の手を

取つてその場を離れていく。娘の方はちらちらと背後を振り返り、二人が隠れている木を見上げていたようだが、やがて母娘の姿は森の奥へと消えていった。

気配が遠ざかっていくのを感じ、二人はそつと消えていった方を見つめて冷や汗を流した。あの言葉、あの腕……彼女はまず間違ひなく敵対してくるだろう。自分達の事を見つめていた監視の鳥を切り払つてしまつたのだ。

もしかすると訳ありなのかもしれない。

それ故に自分達の事を調べる者には容赦なく敵意を向ける。それは娘を守るためなのか、あるいはそれ以外の何かの理由があるのか。

気になるところではあるが、今また追跡すると殺されかねない。なにせ隠れている自分達の事に気づいていたのだ。気配を隠していても気づかれるならば今はそつとしておくしかない。

機を見て調べてみるしかない。

海は汗に濡れる拳を握りしめ、先ほどの女性について頭に記憶した。

流れるような藍色の背中まで届く長髪に冷静さと気の強さを兼ね備えた漆黒の瞳。美人と称していいすらつとした長身の体軀を包み込む黒と藍の混ざる夜を描く和服。その下から繰り出される鋭い蹴りと顕現された漆黒の気の刃。

一体彼女は何者なのだろうか。



一方タンジアの港から北上したところにある陸の中継地点の役割を果たす街ではちよつとした騒ぎになっていた。近辺を二組のリオレウス、リオレイアのつがいが飛行しているとの情報が入ってきたのだ。

それも片方は原種、片方は亜種という組み合わせだ。飛行している範囲が街道に重なり、旅人が不安になっているため、ギルドは依頼書を制作しクエストとして張り出す。

当然腕に自信があるハンター達が次々と名乗りを上げる。その中にはタンジアの港にいたあの男の姿もあつた。

「フーツハツハツハ！ この我が亜種のつがいを引き受けようぞ！」

「よろしいんですか？ 天王寺さん。確か今あなたは一人では？」

「む？ 確かに先ほどまでは我は一人ではあつたが、問題ない。もう一人ついてくるものがおるわ。そら、天」

心配する受付嬢ににやりと笑みを浮かべて手で示してやれば、そこには気だるげに天井を眺める一人の女性がいた。炎を思わせる紅いセミロングヘアに真紅の瞳をした女性だ。

「お待たせしました……」

彼女へと近づいたウエイトレスがお盆一杯の料理を運んでくる。更に続くようにしてもう一人のウエイトレスのお盆には酒瓶がずらつと並んでいる。それに反応した彼女は小さく頷き、机をとんと叩いた。

それに従つてお盆ごと料理を置き、続いてウエイトレスがお盆に乗っている酒瓶を次々と机に置いていき、最後にグラスを置いて一礼した。

そう、彼女は一人であれだけのものを注文してきたのだ。そのインパクトのせいで覚えていた。

「あ奴、東風天和とうふうてんながおるからな。おい、天。カードを見せよ」

「……ああ？ カード？ ……ギルド？」

「それ以外の何があるというのだ。しつかりせい。貴様はそのまま食っていていいが、ギルドカードを我に渡せ」

「はいはい……つと、どこいったかな？ ……ああ、あつたあつた」

左手で器用に酒瓶のふたを開けてグラスへと注ぎつつ、右手で懐をまさぐっていく。その度に形のいいそれが揺れ、周りに座っているハンター達からため息が漏れる。しか

し彼女はそれを気にした風もなく、取り出したそれを男へと手渡した。

「……おい、天」

「んー？」

「これは何だ？」

「ギルドカード。んくんく……」

「なるほどなるほど。貴様はこの『買い物リスト、フラヒヤ酒、泡盛、モガビール、七味ソーセージ、ポポノタン、ホワイトレバー、特産キノコキムチ、砥石、ホットドリンク、クーラードリンク。以下、お好み』と書かれた紙がギルドカードというのだな？」

「あれ？ 間違えたん？」

「貴様は呑む以前から酔っているのか？ それともボケたか？ といふかなんなのだこれは。どれだけ呑むつもりだ？ ほとんど酒とつまみではないか」

呆れたように言いつつ手にしたその紙を放り投げて彼女の顔へと突き返した。「ぶー、別にいいじゃん」と呟きながらまた懐をまさぐり、そして今度は間違えずにギルドカードを手渡した。

間違いない事を確認し、「戦うまでに気力だけは戻しておくのだぞ、天？」と言い残して受付へと戻っていく。「はいはい……」と手を挙げてひらひらと振り、左手でぐいとグラスを傾け、並んでいる料理をがつつき始めた。

「待たせたな。あ奴のギルドカードだ。あの通り腹を満たしている故、サインは我が代わりに行くが、構わぬな？」

「え、ええ……まあ、はい。しかし大丈夫なのですか？ いえ、ランク的には問題ないのですが……」

「ふつ、貴様の不安もわからんでもない。だが不安がる事は何も無いわ。あ奴は腹さえ満たし、スイッチが入れば問題なく戦える。それ故にそこまでのランクへと上り詰めたのよ。この我が認めた剣士、それが東風天和よ」

にやりと笑みを浮かべて何ら問題などないとばかりに豪語する。その表情に陰りなどどこにもなく、自身がありありと浮かぶのを見れば本当に問題なんてないと思わせてしまうだけの力があつた。

とんとん、と催促するようにカウンターを叩くと、受付嬢は慌てて依頼書を取り出し、カウンターの上に広げる。

内容はリオレウス亜種、リオレイア亜種の討伐。

場所は密林。

内容に問題がない事を確認し、彼はそこにてんのうじめい天王寺冥夜と東風天和の名を書き記した。

「では天が食事を終え次第向かう事にしよう。……案ずるがいい、皆の者！ 我らがしかとあのつがいを討伐してみせようぞ。我の道に敗北の言葉はない！ つがいなど恐

れるに足らぬわ！ フーーツハツハツハツハ！！」

腕を組み高笑いをする彼にハンター達の反応は二つだった。彼の事を知る者らは感嘆して盛り上がり、知つていても彼のそのテンションについて行けず引く者。知らぬ者らも何言つてんだ？ と引いている者が多数だ。

だがそれでも彼らは冥夜が纏う装備に恐れを抱いていた。

なにせ彼が纏うのはバンギスシリーズ。

頭装備であるバンギスヘルムは外されているが、それでも彼が纏う装備が放つ威圧感。はただ事ではなかった。肩当てには鋭い棘が生え揃い、腕や足にも小さい突起が生え、腰にはまるでチャンピオンベルトのようなものが巻かれている。そして色は全体的に濁った緑色のような色合いで統一されている。

これだけならばまだいい。男性装備としてはあまり珍しくもないような外見だ。

しかし使用されている素材が特別だ。

恐暴竜イビルジョー。

獣竜種に分類されるこの竜の危険度は古龍に匹敵するとされるほど恐れられている。通称が恐れられ、暴れる竜という名を冠するだけあり、保有する特性は飢餓。

常に飢え、獲物を求めて各地を彷徨うこのモンスターは完全に判明しておらず、遭遇すれば逃亡せよ、とハンター達に通告されるほど危険な存在だ。



モンスター、人を問わず目に映るもの全てを捕食し、喰らい尽くしていくとされ、小型モンスターだろうと大型モンスターだろうと襲い掛かっていくため、生態系のバランスが崩れて絶滅へと追い込んだ事例が少なくなく、更に住処を定着しないためどこにも現れる。

例え極寒の地である凍土であろうが、灼熱の地である火山であろうが現れるため、不安定とされているフィールドに赴く上位、G級ハンターはイビルジョーの影に注意しなければならぬとされている。

中にはイビルジョーに遭遇し、命からがら逃げだしたハンターがそのトラウマのためにハンターをやめてしまうものもいるくらいだ。それだけイビルジョーとは人々に恐れられる危険な存在なのだ。

そんなイビルジョーの素材で作り上げたバンギスシリーズ。

これを纏うという事は、冥夜はイビルジョーを討伐しているという事だ。だからこそ彼の自信は真実味を帯びる。そして彼に同行するであろうあの天和も相当な実力者に違いない。そう感じられるハンターは彼がクエストを受注する際に遠慮し、彼へとクエストを譲ったのだ。

「……冥、うるさい。飯がゆっくり食えない」

「いや、ゆっくり食うでないわ。少し急ぎで食せよ。貴様ならばそれほどの量、数分で食

せるであろう?」

「出来るけど、こういうのは味わって食べないとね。んぐ、んぐ……」

「やれやれ……困った奴よな。ならば我も少し頂こうか」

嘆息して天和の対面に腰掛け、「給仕! 小皿と箸、グラスを持てい!」と呼びかける。それに応えてウエイトレスが走りだし、準備を進める傍ら、天和は席に着いた冥夜をじっと見つめて小声で呟いた。

「食うの?」

「食わねば話にならぬであろう? でなければいつまでたつても狩りに行けぬわ。待つのは良いが、しかし我をあまり長く待たせるものではないぞ?」

「……はいはい、わかりましたよ。んぐ、ふう……」

仕方ないな、と首を振り、天和は少しでも料理を多く食べれるようにペースを上げてくる。それを見てにやり、と冥夜は笑みを浮かべ、運ばれてきた小皿などを受け取って自分なりのペースで料理を摘まんでいた。

それでもまだまだ料理は多くある。なにせぎつと見て五人分くらいは運ばれてきている。明らかに一人では食べきれない程まで頼んでいる天和ではあるが、彼女は余裕でこれを全部食べきれらるだろう。

それだけでなく酒瓶も五本はあるか。既に一本消費しているのは流石だろうが、それ

でも彼女は酔っている気配がない。最初に見せていた気だるげな瞳は、まるで活気が入ったかのように意志を少しづつ宿していた。

空腹で気だるげにしていたのか、あるいは酒が入った事で逆に目覚めてきたのか。

それは彼女にしかわからない。

そして二人は数分かけて料理を食べきり、酒も消費して酒場を後にしていった。その足取りは大量の酒を消費したにもかかわらずあまりふらついていなかった。とはいえず冥夜の方は流石に酒が少し回っていたのか、懐から酔い覚ましのドリンクを取り出して飲んでいたようだが。

○

日も暮れた森の中。木々は空を覆うように枝葉を伸ばし、月の光も遮って深緑の天井を作り上げる。視界は悪くこんな所を人が歩けば足をとられて転倒してしまうのは必然の出来事だろうという世界で、一人の人物が佇んでいた。

決しているとは言えないその世界で、その人物はただ一点を見つめ続けている。視線の先には一つの小屋があり、淡い灯が灯っていた。どうやら誰かがあそこにいるらしい。

「……………」

手には一つの武器が握りしめられ、いつでもそれを振るえる状態にある。夜風が穏やかに森の中を吹き抜け、髪が柔らかく揺れる。顔に少し髪がかかるがそれを気にする事もなく、一步、また一步と足音を立てずに小屋へと近づいていく。

だが突如その歩みが止まり、視線が横へと逸れた。

「……………」

続けてその場を跳び退くように勢いよく背後へと跳び、地面を滑るように着地した。

見れば先ほどまで立っていた場所にはもう一つの人影がある。紫色の長髪をした竜人族の女性だ。紺色の和服に身を包み、じつとその蒼い瞳を小屋へと向かおうとした人物を見据えていた。

「これはこれは……驚いたよ。襲撃者が、こんな可愛い子だったとは」

「……………何者や？」

「さて、何者かな？ それは私も訊きたい事柄ではあるね。君はどこ誰かな？ あそこにいる人を襲おうとしていたようだけど」

くいつと親指で小屋を示し、微笑を浮かべるもそれに対して襲撃者は無表情だった。じつと様子を窺うように竜人族の女性を見つめるだけだ。どうやら気配を消して近づいていたのに、同じように気配を消していつの間にか接近していたことに驚いているよ

うだ。

そうして、はあ、と息を吐き、困ったように首を傾げる。

「……失態やなあ。まさかこんな所で見つかるなんて。いったいいつからウチをつけてたん？」

「うーん、質問のキャッチボールとはこれいかに？　せめて会話のキャッチボールをしようよ」

「残念やけど、する気はないな。こつちとしてはさつさと離れたいところや」

「これまた残念だけど、こつちとしては逃がす気はないなあ。大人しく捕まってくれないかな？」

一歩踏み出せば、襲撃者は一歩下がる。

「またまた残念やけど、捕まる気はさらさらないわ。尻尾を巻いて逃げさせてもらうんで」  
「更に残念だなあ。ようやくキャッチボールが成り立ったかもしれないところで逃げられるのは困るよ。……仕方がない、力づくでやらせてもらうよ？」

お互い出方を窺いながら言葉を投げ合ったが、終わらせたのは奇襲を仕掛けた竜人族の女性だった。一瞬身を屈めて力を溜め、一気に距離を詰めて攻撃を仕掛ける。

それを左手に持つ武器で防御しつつ、放たれた回し蹴りを横に跳ぶ事で威力を軽減させた。追撃してくる彼女から逃れるため一度背後へともう一度跳び、そして手にしてい

る武器を抜く。

その際刃に一瞬で纏われた気が刃となって放たれ、追撃を仕掛けてくる彼女へと牽制する。だがそれは牽制にはならなかった。その気刃の動きを見切り、軽く横に跳んでその軌跡から逃れて接近する事をやめない。

「その動き……ただの武人やないな？　ほんまに何者や……」

「知りたければ、勝つ事だね！」

抜いた剣を鞘に収め、居合い剣術で女性を近づけさせない。放たれる気刃と振るわれる刃が壁となり、襲撃者の身を守る。その範囲内に踏み込めば斬られる事になるのだが、彼女はそれでも前に出て踏み込んでいく。

「はっ！」

「……く、やるやないの……」

気刃を躲し、振るわれる刃の軌道を読み切って接近する事をやめない女性に戦慄する襲撃者。これほどの実力者がまだいたとは思わなかったようだ。纏う気に揺らぎが発生している。

「その外見、偽つとるな？　しかも内包する気……魔力……なるほど、何もかも偽りやない？　これは増々まずい状況か……こんな所で化物ばけもんに会う事になろうとは……ウチも焼きが回ったなあ」

「諦めるのかい？　じゃあ大人しくしてくれるかい？」

「やからつて諦める程、ウチは弱くはないんや。……破ッ！」

強く大地を踏みしめた瞬間、放出された気がうねり、土埃を巻き上げる。それは襲撃者を中心から女性へと襲い掛かり、彼女の視界を奪ってしまう。続けて発生する強風によつて土埃は周囲へと広がっていく。

それはまるで突発的に発生した砂嵐。

森の中で発生したそれは女性だけでなく周りの木々を傷つけていく。たまらず腕を使つて庇うが、襲撃者はその中で逃げ出した。襲撃者にも細かな粒が襲い掛かっているはずだが、どうやら手にしているそれで身を守っているらしい。

「まったく……面白い事をしてくれる。しかし、それだけで私から逃げられると思わないことだよ！」

顔を庇っている腕を力強く振るい、その瞬間砂嵐は嘘みたいに吹き飛ばされてしまった。周囲を覆い隠し、傷つける砂嵐を吹き飛ばす程の一瞬の強風。砂嵐だけでなく枝や葉っぱを吹き飛ばし、闇の中に舞い踊る。

悪い視界の中で彼女はしっかりと逃げていく襲撃者の背中を見つめていた。

それからは一瞬だった。

彼女は木々の幹を跳び回り、一気に離れた距離を縮めていく。

近づいてくる女性の気配と僅かな音を感じとり、襲撃者は背後を振り返った。そして舌打ちする。まさか目くらましになるのは数秒程度になるとはどれだけ強いのか。

いや、逆に自分が弱いだけなのかもしれない。

まさかこれほどの強敵に出くわすとは、と一瞬でも喜びはしたがその代償が大きかったようだ。

「まだ、終わるわけには……!」

憎々しげに漏らしたその一言。

その願いを打ち砕くかのように、女性が襲撃者の背後から跳躍してその体を捕えようと手を引いたその瞬間、

「——はっ、運がないね。こんな所で見つかるなんて、さ」

『っ!』

どこからかそんな声が聞こえ、二人が息を呑んだ瞬間、襲撃者の姿が消える。

いや、消えたのではない。あまりにも素早く動いたのだ。

襲撃者が、ではない。襲撃者の体を抱えた何者かが通り過ぎ、女性が地面に着地したそこから数メートル離れた木の傍へと移動していた。その鮮やかな動きに女性は思わず息をつく。

そこにいたのは奇妙な女性だった。



この闇の中に溶け込むかのような漆黒の長髪に同じく漆黒の外套を纏う女性だ。外套はボタンが止められているため下にある服装は見え、女性の体つきも隠しているが、その顔付きと声から女性という可能性が高い。

疑問を感じるのは彼女の顔の左半分には白い骸の仮面が嵌められているのだ。それが闇の中に不気味に浮かび上がっている。

「……何者だい？」

その突然の出現に女性はそう問わずにはいられなかつた。

「さあ、何者だろうね？ かといつて名乗ろうなんて、ことは思っちゃいけませんね。……でも、今ここであたしが姿を現すのは、予定外なんですよね。まさかあなたがここに来るなんて想定外の事、なんでしてねえ……悪いけれど、そのまま回れ右をして、消えてくれませんか？」

奇妙なタイミングで言葉を区切りつつ喋る彼女。最後に可愛く小首を傾げながらそう持ちかけるが、当然これも女性が認めるはずもない。今まで以上に鋭く目を細め、新たに乱入してきた女性……その出で立ちからして暗殺者を思わせる彼女を睨み付ける。

だが殺気が混ざるその視線を受けながらも、暗殺者は涼しい顔で微笑を浮かべるだけだった。そうして佇みながらとんと、と肘で襲撃者の体を小突き、

「ほら、今の内に行くと、いいさ。ここはあたしが引き受けるんでね」

「……すんまへんなあ」

「なあに、気にする事はないさ。予定外だからね、構いやしないさ。……おっと、動かないでくださいよ？ 動いたら——手違いで殺してしまいそうになるじゃないですか」

背後にいる襲撃者を庇いつつ、暗殺者が取り出したのは少し反り曲がった漆黒の短剣だった。器用に指先で柄を弄り、くるくると回転させると、その刀身に沿ってペロリと赤い舌をなぞらせていく。

それを見た瞬間、女性は悟る。

あの暗殺者は危険な存在であると。

強いとかそういう問題ではない。いや、実力者である事は襲撃者を回収したその動きで悟ったが、あの目であるような台詞を吐いた瞬間、普通じゃない何かを感じ取ったのだ。

そうして驚いている間に襲撃者はまた森の奥へと消えていく。決して逃すわけにはいかなかったが、しかしそうするためには目の前にいる暗殺者を何とかしないといけない。

にやにやとどこか楽しげな笑みを浮かべたまま彼女は短剣をくるくると回転させている。そうしたかと思ったら舐めた事で少し濡れた刀身を指先でなぞって遊んでいる。

完全に女性を舐めきった余裕を見せている。

だというのに隙がない。

隙があるように見せて隙がない。

何者かという事も問題だが、これほどの実力を持つ暗殺者なんて聞いた事がない。

だが、仕掛けるしかないだろう。そう結論付けて身構えた瞬間、彼女の姿が消えた。

「——っ!?!」

高速で動いたのではない。

文字通り、消えた。

目を離れたわけでもないのに、視界から消え去った。その事に驚いている間に、暗殺者は女性の側面へと歩きながら現れる。それに反応して肘打ちをするが、彼女は顔を逸らしてそれを躲す。

続けて放たれる蹴りも数歩下がるだけで躲し、にやりと笑みを浮かべる。

「おや? 弱くなりました? まさかあたしの動きが見えなかったとでも?」

「……消える、魔法かい?」

「魔法? ……はっ、魔法ですか。確かにそう感じ取ってしまうのも仕方ないでしょうね。でも違うんですよね。これは魔法じゃない」

そう言いながらまた彼女の姿が消える。闇に溶けるようなその美しい黒髪も外套も、

闇に浮かぶような白い仮面も、まるで最初からそこになかったかのように消えてしまったのだ。

その流れをしつかりと見ていたのに、やはり女性は彼女を黙視する事が出来ない。これはまるで霞龍オオナズチを前にした時のよう。あの古龍もまた周囲に溶けるように自分の姿を消す事が出来る。

先ほどまでそこにいたはずなのに、どういうわけか目視できないという能力を保有しているのだ。だが完全に消えたわけではない。触れれば確かに感触がそこにあり、つまりは見えていないだけの話だ。

この暗殺者もまたそれと同じ原理で消えているのではないのか？

ために拳を打ち出してみたが、側面から弾かれるような感触がした。やはり見えていないだけで触れる事は出来るようだ。まさに暗殺者としては好都合な力だろう。

「そういう能力か……!?!」

「正解。なかなか面白いでしょう？ 稀有な能力なんでね、重宝しているんですよこれがね。ああ、それに頼りつきりというわけでも、ないんだよね。それじゃあ楽しくないじゃないか」

そんな声が聞こえたかと思うと、女性の背後に回り込んでいた暗殺者が姿を現した。瞬間、反射的に気で守った腕で顔を庇えば、そこに短剣が振るわれる。しかしそれでも

薄く着物と腕を切り裂き、僅かに血が流れ出る。

舌打ちしながら女性が一度距離をとるように後ろに下がるも、暗殺者は唇を舐めながら妖艶に微笑む。それは美しくも冷たい狩る者の笑みだった。溢れ出る色気と残忍さが同居する暗殺者。一体何の冗談だ。これほどまで恐ろしい暗殺者がいたのか、と女性は冷や汗を流しながら苦笑するしか出来ない。

そして彼女を睨みながら一つの話を思い出す

「宵闇に溶ける黒と白。振るわれる黒き刃が武神を退ける。……まさか衛宮天羽が逃亡に成功した際に現れた戦士かい？」

「……はて、何の事やら？ そんな事より、続けるのかな？ あたしとしては別にそれでも構わない、んですけどね？ ああ、その際はそこに隠れている人も混ぜてくれると、なお嬉しいんだがね？」

また短剣をくるくると回しながら視線が横へと逸れていく。その先には金髪の女性が弓を構えていた。番われている矢はしっかりと暗殺者へと向けられており、いつでもそれを放てる状態にあった。

気配を消して近づいていたというのに容易に気付かれている。

弓を構えている女性へと流し目を送った瞬間、その金色の瞳から放たれる鋭い殺気に女性は息を呑んで冷や汗を一筋流してしまう。

「……この程度で折れるんで？　これじゃあ楽しめそうにないね。ま、いいですよ。どうやら時間稼ぎは出来たみたいだからね」

くつく、と低く笑いながら二人から離れるように背後へと跳び、木の傍へと寄つて回転させていた短剣を腰にある鞘へと納めてしまふ。やはりというべきか自分が戦う事であの襲撃者の後を追わせないようにしたようだ。

完全に逃げ切つたのを頃合いとして切り上げるつもりらしい。

とはいえ戦いを楽しもうという言葉もまた少し本気だったのかもかもしれない。なにせ余裕を見せつけながらもどこか楽しげな雰囲気があったのだ。根っからの戦闘狂なだろう。

見てくれは暗殺者の雰囲気だというのに戦闘狂とはこれいかに？　と思わないでもないが、そんな事を訊いてもこの人物はなにも答えちゃくれなさそうだ。

「君はあの子とどういう繋がりがあるのかな？　あの子を指揮する立場かい？」

「さあ？　あたしから話せることなんてなんにも、ありはしないね。……ああ、でも一つだけ記念としていい事を教えて、あげようじゃないか」

組んでいた右手を頬に当て、またべろり、と妖艶に唇を舐めながら冷たい笑みを浮かべるその様は同性ながら美しく感じずにはいられない。不気味に見えるその白い骸の仮面に隠されていても、半分だけ覗かせるその素顔は彼女の美しさを完全に殺してはい

なかった。

だからこそ逆に恐ろしい。

まるで人ならざる者の美しさのようで、それ故に人ならざる者の恐怖がありありと見せつけられているかのよう。

素顔と骸の奥からぎらつく金色の瞳が二人を貫き、そして彼女は言う。

「——お前は、いずれ死ぬ。お前の前に現れる一人の戦士の手によって、ね」

それは、死の宣告だった。

告げられたのは紫色の髪をした竜人族の女性。宣告された女性は息を呑み、しかし強い意志を消すことなくじつと一方的に宣告してきた暗殺者を見つめ続ける。

「どういう……事かな？」

そして暗殺者はさっきまで混ざっていた丁寧な口調が完全に消え、見下すような眼差しと共に宣告を続けていく。

「言った通りの意味さ。お前は死ぬ。長い時を生き続け、その力を保ち続けたようだけど、ついに死ぬ。よかったね、ようやく、死ぬるよ？」

「私を殺す存在がやってくる、という事かい？ 君ではなく？」

「……あたしがやりたいところだけど、残念ながらお前を殺したい奴がいるんでね。譲ってやることにしたのさ。その時を楽しみにしているといいよ。実におもしろい奴が

やってくるんでね。まあ死なないように気をつけな？　奴は、本気でお前を潰しに来るからね」

とんとん、と自分の首を手刀で叩き、笑みを浮かべながら彼女は嗤う。それが実に楽しみでならない、という風に。だがそんな彼女の姿がまたしても闇に一瞬で消える。続けて彼女の放っていた殺気が消え去り、後には静けさだけが残された。

先ほどまで暗殺者が立っていた場所をじつと見つめながら、彼女はただ無言で拳を握りしめる。

頭の中には様々な事が渦巻いていた。

辻斬りと思わしき者。

それを助けに現れ、意味深な事を言い残して消えた暗殺者。

そして彼女が口にした自分を殺しに来るであろう何者か。

「……大丈夫です？」

「……ああ、大丈夫だよ。すまないねルーシー、困なんてさせてしまった」

「いえ、それは構わないです。しかしあの言葉……本当なのですかね？　あなたを殺しにくる、なんて。そんなバカみたいなこと……」

「……どうだろうね。命を狙われるなんてことは経験があるから何とも言えないけど、今度は何とかなる……とは言い難いね。宣告してきた相手が相手だし」



困ったように微笑を浮かべながらも、彼女は自分を狙いそうな人物を記憶の奥から引き出そうとする。しかし候補となる存在はどこにもいなかった。恨まれるようなことは……あるだろう。六年前の大事件のおかげで少々旅をするのが不便になってしまったが、こうして宣戦布告し、確実に自分を殺すだけの力量を持つ戦士、となれば候補に心当たりがなかった。

自分の知らないところで凄まじい実力を手にした存在がいるのだろうか。あの暗殺者のように。

となれば少し気をつけるに越したことはないだろう。

「やれやれ……また、とんでもない事が起きそうだね」

「いえ、もう予兆となる事はいくつか起こっているです」

「……そうだね。辻斬りに領主の死、蛇竜種の活性化にリオ夫婦の活性化……。これらの先に起こるべき事……。今はまだ何も見えない。これはいずれ彼らに協力を求める事になりそうかな」

「もしや、再び表舞台に出すのです？ よろしいのです？ 彼らは……ずっと隠れ住んでいるというのに」

驚いた表情を浮かべるルーシーと呼ばれた金髪の竜人族の女性。そんな彼女の反応は当然のものだろうが、それでも紫色の髪をした竜人族の女性は厳しい表情を浮かべた

まま首を振る。

「私が信頼する腕利きのハンターとなれば恥ずかしながら君と彼らしかない。……もしかすると、噂を聞いて既に陰で動いているかもしれないけれど、それでも時期が来ればまた共に戦う事になるかもしれない。……もし、私が本当に殺されることになれば――」

そこで一度目を伏せ、意を決したように彼女は天を見上げる。木々の葉によつて覆い隠されているが、それでも彼女はその先にある星空を見上げた。

同じ空の下にいる彼らに思いを馳せて。

「――その時は、彼らに後を託すことにするよ」

かつて自分が鍛え、共に戦った仲間達。

彼らを再び表に出すのは忍びないが、それも選択肢の一つだろう。出来るならばそれをしたくはないが、そのためには死なないようにしなければならぬ。大人しく殺されてやるわけにはいかないが、最悪を想定しておく備えをしておこう。

そんな彼女を心配そうな眼差しで見つめながらルーシーはぎゅつと手を握りしめるのだった。

## 3 2 話

「この気配……現れます」

木々に隠れていた空が北の空を見上げると、その視界の先にある山の向こうから一つの影が飛行してくる。それはリオレウスだった。空の王者が悠々と飛び、二人が隠れている森へと接近してくる。

彼の妻であるリオレイアは既に森の中におり、体を休めながらジャギイを捕食し、糧としていた。

その後二人は気を取り直して鳥が捕捉したつがいの一組の様子を見に行くことにした。しかしいざ現場にやってくるとリオレウスはそこから離れており、リオレイアが安心して休憩していたところだった。

そこで二人は待つ事にした。

そうしてから十数分、リオレウスが帰還してきた。

見れば足にはアプトノスが握られており、リオレイアの下へと滑空をして着陸態勢に入っていく。アプトノスは既に事切れており、リオレウスに気づいたリオレイアが出迎

えるように一鳴きする。

アプトノスの死体を離し、二頭で分け合うようにその体へとかぶりついていくそのつがいが。仲睦まじい夫婦である事が見て取れる。

「危険性はなさそうだね」

「そうですね。となればもう一組の方へと移動しますか？」

「うん、何もなさそうだし移動しよう」

敵意がないし、近くに人里があるわけでもない。あの村からはかなり離れた上に腹が満たされれば人を襲う事もないだろう。ならばもう一組のつがいの様子を見て今日の探索は終了としよう。

そう思つて移動しようとしたその時、空が表情を変える。いや、いつもクールな彼女の表情の変化はわかりにくいものだが、その目つきが鋭くなったように海は見えた。

「海様、何者かが高速で接近中です」

「なんだつて？ どこだい？」

「南の方角、約一キロ。真つ直ぐにこちら………というよりあのつがいへと接近しています」

彼女が放っている鳥から得られた情報だろう。ここを中心として彼女は周囲に使い魔の鳥を数匹放ち、飛行させて状況を探っていた。その索敵の網に引っ掛かった一人の

人物。

それに気づいた瞬間、鳥を動かして追わせているようだが、その何者かの疾走はあまりにも高速だった。

「性別、年齢……外見共に纏うローブとフードで判別は難しいですが、その疾走から手練れと判断」

「つがいに向かっているという事はハンター?」

「不明です。武器はまだ見えま……いえ、ローブの中に手を入れました。取り出したのは……槍?」

「槍?」

槍というと細長い棒の先に刃がついているあの槍?

それともハンターが使うあの大型の槍ランスだろうか。

そう考えていると、空ははつと息を呑み、「海様、ここから離れてください!」と背後に跳んだ。そのただ事ではない様子に海も従い、空に続くように背後へと跳ぶ。

刹那、空を切って飛来してきたものが地上へと落下した。しかもそれはリオレウスの体を貫通し、地面に突き刺さったのだ。

続いて地面が強く振動するだけでなく大きく割れ、亀裂に沿って割れた土が吹き飛ばされ、舞い上がっていく。

突然の攻撃にリオレイアが驚きの声を上げ、リオレウスは苦痛の声を漏らす。背後に振り返れば落下してきたのは槍だった。

まさか離れた所から投擲してきたというのか？ そんな、馬鹿な。

「悲しいなあ、平和に食事をしているところにこの奇襲。実に悲しいねえ……このオレに狙われたんだから、さ」

そんな声と共に森を越えて一つの人影が降り立った。彼が手をかざせば投擲した槍がその手へと戻っていく。それを握りしめ、数度回転させて構えると、現れたその敵にリオレイアが振り返る。

「グルルルツ……！」

「はーい、というわけで、さ——死んでくれ」

冷たくも暗い笑みを浮かべて顔を上げ、ぎらりとリオレイアを見据えたその人物のフードがリオレイアの咆哮によって生まれた風によってめくれ上がる。

現れたのは黒い髪をオールバックにし、碧眼をした中性的な東方人だった。恐らく……少年だろう。というか、以前タンジアの港の酒場に見かけた少年だったような気がする。

二人が見守る中、彼は手にしている槍を構えたまま一步前に進んだ。それに反応したリオレイアが彼に向かって火球を放つ。だが、

「迅気、纏」

眩くように言葉を漏らすと彼に黒いオーラが包み込んでいった。続けざまに腕がぶれたかと思うと、彼を飲み込むはずだった火球が霧散した。彼が振るった槍の風圧によつて切り裂かれたのだ。

更に彼は歩みを止めず、にやりと笑いながら槍を回転させながら歌うように言葉を紡いでいく。

「角気、収束。一点突破——槍術が一、破岩！」

そうして回転する槍に黄土色のオーラが纏われ、それは切つ先へと収束していった。その槍を両手で構え、強く大地を踏みしめながら彼は槍の基本を行使する。

すなわち、高速で突く。

ただそれだけだったのだが、その槍はリオレイアの額を貫いた。刃が額を守る甲殻に穴を開け、纏われたオーラがあたかも刃のように額から内部へと貫通していった。

「グ、ガガ……ッ……!?!」

「おや？ 死なない？ ふむ、やるねえ……一撃必殺にはならなかったか、オレもまだまだ……ん？」

「グルアアアアアアアアッ!!」

そこで最初の攻撃に苦しんでいたリオレウスが怒りの咆哮を上げる。その殺気と怒

号にあてられて顔をしかめる少年ではあったが、しかし耳を塞ぐようなことはせず手にしている槍を再び構える。

飛びかかってくるリオレウスを躲し、一撃突き上げるがそれでリオレウスが止まるはずもない。彼へと火球を撃ち出しながら後ろに下がり、低空飛行へと移る。火球を躲すために横へと跳び、左手を地に付けて身を屈め、リオレウスの下へと潜り込むように飛び出した。

当然リオレウスはそれを捕まえるために潜り込んでくる少年へと足でひつかき、鋭い爪をねじ込もうとしたが、それよりも早く彼は背後へと回り込んでいた。

そのまま振り返りつつ槍を両手で握りしめ、ぐつと体を捻りながら槍を引く。

「槍術が一、天衝！」

勢いよく突き出された槍はまさに天を衝く一撃だった。纏われている黄土色のオーラが渦を巻きながら切っ先、更にその先へと刃となつて放出され、リオレウスの尻尾から背中に向かって衝撃が伝わっていく。

悲鳴を上げて墜落するリオレウス。そんな奴の頭上へと位置取るように跳び、高速の連続突きを弱点である頭へとお見舞いしてやった。がりがりとは削られていく褐色の甲殻から次々に血が噴き出し、最後のとどめの一撃とばかりに強く突き出した瞬間、リオレウスは力尽きてしまった。



それで止まらず、彼は空中で何かを蹴って移動し、今度はリオレイアの頭上を取って今度は一撃でリオレイアの頭を刺し貫き、とどめを刺してしまった。

あまりにも鮮やかな動きと鋭い攻撃。敵の急所を狙ったの攻撃を繰り返し、一瞬で討伐してしまった。

「……何者？ 明らかに普通じゃないけど」

「データがありません。あのような戦士は初めてです」

息を呑み、状況を見守っていた二人はあの少年の事をよく観察することにする。あの顔、まず間違いなくあの時見た少年だ。一人で行動する事を対面に座っていた男に願った後、酒場を出ていった少年だろう。

槍を振るう前に纏っていないなかったオーラに秘密があるのではないだろうか。だがあのような技術は見た事がない。しかもあのオーラ、見間違いでなければあれは……。

「ふん、ふん、さてさて、今回はどんなものかな？」

すると少年はるんと鼻歌を歌いながら二つの死体を解体し始める。まずは尻尾を解体し、中にある肉から一つの紅玉を取り出していく。その精度を確認し、ほう……と息をついてうん、と頷いた。

「これはいい紅玉だ。素材として組み込んでおこう。じゃあレウスの方は………うん、こつちもいい代物。よーしよーし、今回はアタリだったな。いいねえ、嬉しいねえ

……」

火竜の紅玉と雌火竜の紅玉を手にしてごきげんになっていく。確かにあれらは火竜の素材としてはかなり価値がある代物だ。一種の宝石のように紅く光るその玉には強い火竜の力が凝縮され、武器に高い力を与えてくれる。

しかし高い力を持つが故になかなか見つからず、素材として出てくるのは上位以上の個体のみだ。それをローブの中に入れると土を払いながら立ち上がり、ぎろりと碧眼を動かして海と空が隠れている木へと視線を向けてきた。

「さて……いつまで見物しているのかな？ 覗き見なんて趣味悪いぜ？」

確実に二人がいる事に気づいていた。気配を消している二人に気づくとは、やはりただ者ではない。というか最近気配を消しても気づかれる事が多くなっていないだろうか？

これでは忍失格じゃないか。忍べていなければ話にならないというのに。

しかし二人は確実に気配を消し、息を殺している。それなのに気づかれる。それは彼らの気配察知能力が尋常ではないという事だ。

「悲しいなあ、出てこないなんて……覗き見し続けるなんて悲しいじゃないか。そうやってかくれんぼされたらさ……引きずり出したくなるよ？」

残っている黄土色のオーラを再び切っ先に集め、勢いよく横へと薙ぎ払う。放たれる

氣刃が周囲の木々を薙ぎ倒し、その豪快なあぶり出しに二人は枝を蹴って逃げ出した。

しかし逃げたとしても彼は視線を動かして逃げる二人を見逃さなかった。ぐるりと槍を回転させ、更に氣刃を放って追撃していく。

「くっ……」

何とか横に体を捻って避けるが、横を通過していった氣刃が背後の木々を切断していく。続けて少年は引いた槍を両手で構え、勢いよく回転させながら前に突き出した。すると渦巻く風が二人へと襲い掛かっていく。

何とか生き残っている木の幹や枝に飛び移って回避しているが、冷たい瞳で二人の動きを追う少年は一度槍を薙ぎ払うと、空へと向かって跳躍して距離を詰めた。

「おやおや、なかなか可愛い娘だね。一体何者なんだろうね？ 気になるところだけど……死んでくれない？」

「お断りします」

振るわれる槍を取り出した小太刀で防御するが、あまりに強い一撃に腕が痺れ、顔をしかめてしまう。背後に吹き飛ばされるが、何とか後転して枝に着地するも、少年も幹に着地し、足を曲げて弾丸のように空へと追撃を仕掛けていく。

そこに海が複数の苦無を投擲しつつ自分も接近した。当然反応した少年が槍を回転させて苦無を弾き飛ばしていくのだが、追撃を仕掛ける海の回し蹴りが命中する。

「苦無……ああ、おめえら忍？　驚きだよ、こんな所で忍に会うなんて。いったいどの忍？」

「答えるとも？」

「ですよー。じゃあ言葉はいらねえや。語るなら武器を通じて語ろうか？　とはいえ？　オレの槍に耐えきれ程の腕はあるのかな？　迅気、収束。剣気顕現」

ぐるん、と回転した槍全体に黒いオーラが纏われ、刃の前後にあたかも剣のように形を整えて固定された。そう、彼が言った剣と顕現という言葉に従ってそうなったかのようだ。

そして迅気というのはやはり海と空が推測した通りなのかもしれない。

となれば彼はかなり特殊な技術を習得している。しかもかなり稀有なものだろう。そんな技術を扱うなんて聞いた事もない。

「剣術が一、一断！」

まるで槍を剣のように握りしめながら勢いよく周囲を薙ぎ払ってくる。すると纏われている漆黒のオーラの粒子が尾を引き、周りの木々を容易にバターのようにするりと切断していった。

苦い表情を浮かべながら海がそれを回避するように跳ぶが、倒れていく木々が段々と襲い掛かってくる。それだけでなくへし折れた枝や木の葉が舞い上がり、障害物となつ

てしまう。

だがあんな大振りをすれば隙だらけだ。背後から空が小太刀を握りしめて突き入れようとしたが、反応した少年が背後に腕を回して槍で受け止めてしまう。続けて小太刀を弾くように回転させ、振り返りながら空の側面から柄で叩き落としてくる。

何とか気を集めて鎧のように定着し、威力を軽減させたがそれでも振るわれた一撃はやはり重い。よく見ればその槍は良質の鉈石を使用した槍だった。恐らくカブレライト鉈石やドラグライト鉈石を使用し、モンスターの濃汁などの液体を使って加工した一品ではないだろうか。

シンプルではあるがそれ故に安定した強度と切れ味を持つ。それを狙って作り上げられた槍だろう。

「止まっていると蜂の巣にするぜ？」

痛みに顔をしかめてつい足を止めてしまったところを逃さず、引いた槍を高速で突き出してくる。それはまるで迫りくる刃の弾丸。まさしく空の体を散弾で蜂の巣にするかのように、目にも止まらない腕の動きで繰り出される無数の突きが空の体を容赦なく貫かんとしてくる。

「くっ、う……っ！」

何とか小太刀で捌こうとした空ではあったが、小太刀が槍を弾くよりも早く槍が引き

戻され、次の突きを放っているのだ。完全な戦士ではない空にとってその速さは完全に力量に差があった。

鋭い刃が何度も何度も空の体を貫き、彼女の白い肌に穴を作り上げ、赤い血を噴き出させていく。

「やめろおおおおっ！」

海が少年へと斬りかかるも、そんな怒りに任せた攻撃が通用する相手ではなかった。ちらりと横目で向かってくる海を捕捉すると、ぐつと引いた槍で振るわれる小太刀を弾き返し、石突で海の胸を突く。

それだけで海の呼吸が一瞬止まり、肺から空気が吐き出されて膝をついてしまった。続けざまに振り下ろされる柄で肩を強打され、小太刀を落としながら地面に強制的に倒される。

「海様っ!？」

「が、ぐ………か、は………っ」

「ああ………弱いねえ。うん、残念残念。もう少し手ごたえがあつてくれてもいいんじゃない? こうして、遊んでやっているんだからさ? ちょっと、悲しいなあ」

遊び。

確かに先ほどの戦いに比べたら今の戦いは彼にとって遊びなのだろう。

何せあのつがいを相手にしている際は容赦なく急所、弱点を狙って攻撃を仕掛けていたのだから。先ほど空にした連続突きだって、心臓や額を貫けばそれで死んでいた。だというのに彼はあえてそれを外し、まるで空を痛めつけるように連続突きをしていたのだ。

今だって隙だらけの海を見下ろしながら呑気に槍を右手に持ち、とんとんと肩を叩いているだけだ。

空も体中を走りまわる激痛に顔をしかめて膝をついている。

つまり、その気になれば二人を殺す事が出来る状態だ。

「まあいいや。残念だけど、お別れの時間だ」

「……………くう、そうは……………させません……………っ！」

「んんー?」

小休憩として弄っていた槍を再び構えたその瞬間、少年の眼前へと数枚の札が投擲された。既に文字は光っており、その効力を発揮しようとしている。

それに気づいた時、少年の目つきが変わった。

背後へと跳んだ瞬間、札から高温の火炎が放出される。翻る札の動きに合わせて炎もうねり、意志を持つかのように下がった少年を追っていく。だがリオレイアの火球を切り払ってしまう程の腕を持つのだ。そんなものは時間稼ぎにもならなかった。

回転させた槍で生み出される風によって少年へと火炎が届く前に次々と霧散され、続けて縦横無尽に振るう事で完全に消し去ってしまう。

だがそれだけの時間があれば空がふらつきながらも海の前に立つ事が出来た。じくじくと痛む体を庇っているが、それでも彼女は彼を守るために立っていた。

「空……やめろ」

「……従えません。わたしは……あなたを守らねばなりません」

「命に代えても、とか言うなよ？ そんな事……俺は望んじやないッ！」

「……………それでも、わたしはそれが役目です」

海がふらつきながらも立ち上がるが、空は新たな札を取り出して前に出ていた。視界の奥にはそんな空を首を傾げながら見つめてくる少年がいる。とんとん、とまた槍で肩を叩いているようだが、その目には興味の色合いが浮かんでいた。

「それだけ傷つきながらも守ろうってんだ。へえ……恥ずかしくないの？ 女に守られてや」

「海様を侮辱する事は……許しません」

「事実だろうよ。それだけ傷つきながらも前に出てさ。……でも悲しいなあ、それは残念ながら無意味なのさ。オレは、お前ら二人とも抹殺する」

「させません。このわたしが……そうさせない！」



「あ、そう。じゃあ仲良く死ね」

淡々と告げて地面を蹴り、槍を引いて空へと真つ直ぐに向かつていく少年。だが突如彼はブレーキをかけて地面を滑った。それに空は舌打ちし、しかし札を手にしていない左手を引く。

すると少年が手にしている槍が何かに引つ張られるように傾いた。

それに抗うように少年が槍に纏わせている黒いオーラを操作し、その原因となつているものを斬る。

それは鋼糸だった。いつの間に少年の周囲へと張り巡らせていたのか、左手からは数本の鋼糸が伸びており、少年がもう数歩前に進めていれば全身を絡め取る状態へと陥れる事が出来たのだが、どうやら気づいてしまったらしい。

そうして足が止まっているのを見越し、空は告げる。

「土遁、土石檻！」

投擲した札が翻りながら光り、少年の周囲の地面が一気に盛り上がって彼の四方の逃げ道を塞ぎ、天井で繋がって閉じ込めてしまった。それから繋げるようにもう一枚の札を出汁、「陰術、霧隠れ」と告げればあの霧が周囲に展開していく。

この傷で三回も術を行使したことで彼女の体力がかなり消費されてしまったらしく、荒い息をつきながら倒れそうになってしまう。そんな彼女を抱え、海は走り出す。

このまま戦闘を続行する事は不可能だった。今は撤退を選択するしかない。深い霧が絶え間なく広がっていく中、彼は森の中へと入っていく。

一刻も早くあの少年から逃げるために。

「……申し訳ありません……海様。手を煩わせることになってしまつて……」

「そんなこと気にするな。……つつ、こんなになつているのに俺を庇おうなんて、無茶するな」

「しかし、わたしは……」

「役目だつて？ そんなことはわかっている。じいがそう頼んだ事だつてわかっている。……でもな、俺としては許さない」

石突で突かれた部分が鈍く痛み、顔をしかめるが堪える。自分よりも空の傷の方が痛々しいからだ。こんなになつても彼女は少年の前に立ちはだかつた。自分の役割を遂行するために。

背後で凄まじい音が響き渡つた。どうやらあの檻が突破されたらしい。しかし次は常人には周囲の状況が把握できない程まで濃く、広がった霧がある。

この中を突破してくるなんてことは出来ないだろう。

そう、思つていた。

「——風牙気、収束」

そんな声が強化した聴力によって聞こえた。その言葉の意味を理解した途端、海は勢いよく背後を振り返る。深い霧の奥、オレンジと群青色のオーラが彼が手にする槍全体に纏われていき、それを勢いよく回転させれば渦巻く空気が彼の周囲に集まっていく。

「槍術奥義が一、暴風！」

刹那、彼を中心として凄まじい力で吹き荒れる風が発生する。

それはまさに暴風。

そして、竜巻。

渦巻く風が振るわれる槍に従って咆哮し、森は悲鳴を上げる。

折れた枝と舞い散る木の葉が風に乗れり、人為的に引き起こされた暴風によって周囲が引き裂かれていく。それは当然展開されていた霧も同様で、竜巻によって巻き上げられて上空で霧散した。

そうしてクリアになった視界の中、少年は槍を回転させながら周囲を見回し、そして見つけた。

その瞬間の彼の笑みは今まで以上に歪み、狂気を帯びていたように見え、そして彼は無慈悲に槍を勢いよく前へと突き出す。槍に纏われたそのオーラの動きに従い、彼を中心として発生していた竜巻の一部があたかも槍のように放出される。

空を切つて進行するその風の槍は大地を穿ち、無残に草と土を巻き上げ、それらを取

り込んでもなお直進する。

「くうう……っ!？」

回避している暇などどこにもなかった。海に出来たのは空を庇って自分の体に何とかそれを受けるだけだった。だがそれでも肩を貫き、肉を抉られる感覚が海に襲い掛かり、彼は声にならない悲鳴を上げる。

「海様あつ!？」

「あああああああッ!？ あ、が……はあ……っ」

その痛みにたまらず転倒し、左肩を抑えてうずくまる。左腕の感覚が怪しくなっていた。これは非常にまずいことになっているかもしれない。空が何とかしようとするが、彼女もまた絶え間なく出血し、頭がぼうつとし始めていた。どうやら血を流しすぎているらしい。

そして、現実は無情。

少年が数メートル先までやってきていた。

「悲しいけど、諦めなよ。知っているかい？ 殺人鬼からは、逃げられない」

「……いや、それはどうかと思うんだけど」

「……くつく、ツッコむ気力はあるか。いいね、嫌いじゃない。……でも残念。悲しいなあ、オレはいつまでも遊んでいるほど暇じゃない。次の獲物を探しに行かなくちゃな

らないんだよねえ……」

冷たく妖しく笑みを浮かべる少年が槍を構える。相変わらずそこにはオレンジと群青色のオーラが纏われ、まるで血を欲しているかのようにうねりを上げていた。

これまでなのか？

ここで、終わるといふのか？

それはすなわち、霧夜一族が終わるといふ事。そんな事、許されるはずがない。だが二人は抵抗する気力がほとんど失われていた。もし残っていたとしてもその抵抗がいつまで続くかもわからない。

詰んでいる。

そんな中でも空は何とか立ち上がり力を入れていた。彼女を突き動かすのは何としてでも主である海を守るといふ事。歯を食いしばりながらも彼女は体を震わせ、体中を赤く染めながらも立とうとしている。

「じゃあな」

そんな彼女を嘲笑うかのように少年が槍を突き出そうとした――

――瞬間、彼の側面から炎が襲い掛かっていった。

「――っ!？」

突然襲い掛かってくる火炎に何とか反応し、槍を振るって火炎を打ち払うが、それで

も火炎は止まらず、舌打ちして彼は後ろへと跳んだ。そして火炎が発生した原因が森の中から飛び出してくる。

それは褐色の鱗を纏ったモンスターだった。強靱な肉体と足を持ち、顔の周囲は鋭く尖った鱗が角のように伸び、尻尾の先端も鋭く尖っている。足の爪は鋭利に伸び、オレンジ色の瞳がぎろりと少年を睨み付け、唸りを上げている。

サラマンドラ。

火山に生息するアプトルの亜種だった。火山という過酷な環境に適応して進化し、暑さに強く寒さに弱くなった種族だ。また闘争本能が強くなり、雑食から肉食へと傾き始め、肉を喰らう事でエネルギーを多く摂るようになっていく。

内臓に火炎袋に近い物を持ち、リオレウスに近い炎のブレスを吐く事も可能になっている事も特徴の一つだ。

古代では軍隊のために運用され、多くのサラマンドラが戦争のために育成されていたという記録もある。今でも一部の国ではサラマンドラを軍のために育成されているという話だ。

そんな個体がどうしてここにいるのだろうか？

視線を上げてみると、サラマンドラには一人の少女が騎乗していた。茶色い髪を黒いリボンで結んでポニーテールにし、猫耳を生やしたその少女……あの時酒場で見かけた

人物ではないか。

それに続いて森の中から飛び出し、少年へと殴りかかったのは金髪の青年。彼女に同行していた青年だった。

「おらああっ！」

突然現れた新手に舌打ちし、槍で拳、蹴りを受け止めた少年が反撃するために槍を突き出す。青年はそれを手で払ってカウンターを叩き込んでいく。明らかに手練れだ。その事に気づき、少年はにやりと笑みを浮かべる。

そうして青年が少年の気を引いている間にサラマンドラに騎乗していた少女が飛び降り、海と空の容体を軽くチェックして舌打ちする。

「……………これ、飲め」

ローブの中に手を入れて取り出したのは黄色い袋。その中から丸薬を取り出し、一つずつ手渡してくれる。続けて水筒を取り出し、一緒に飲めとばかりに渡してきた。

「ありがとうございます……」と礼を述べて海がそれを飲み、水で流し込んだ。続けて空も何とか飲み、水で流し込む。すると体の内側から活力が湧いてくるような感覚がする。

自己治癒力が高まり、数か所の傷が塞がり始め、それが止血の役割を果たしていく。「お前はこっちも飲め。増血剤。見たところ血を流しすぎているだろう？ ああ、その

前にこっちも飲んどけ。活力剤」

「……ありがとう、ございます」

「お前の左肩は……後で治療する。今は我慢しとけ」

「はい……。あの、あなた方は？」

ぶつきらぼうに言っているが彼女はどうかやら医術の心得があるらしかった。そんな彼女は一体何者なのか、気になるのも無理はない。だが彼女はまあ待て、と言うように手を挙げる。

「今は休め。あいつは猿が何とかする」

「猿……？」

恐らくあの青年の事なのだろうが猿ってひどいあだ名だな、と思いつながら青年の方へと視線を向けてみる。そこには先ほどまで自分達を一方的にいたぶっていた少年と渡り合っている青年の光景があった。

無手だというのに高速で繰り出される連続突きを躲し、手で弾き、受け流し、彼からも高速で撃ち出される拳打で攻めている。

「このオレと戦える存在、か。くくっ……、いいねえ、嬉しいねえ……！ この東方にまだこんな奴がいたなんてねえ！」

「その喜び、なるほど、強者を求めるってか？ やれやれ、お前もそういう性質かよ。だ



からって誰彼構わず斬りかかるってのはいただけないな。……それとも、まさかお前が件の辻斬りか、あん？」

「辻斬り？ はっ、オレが？ 悲しいねえ、別にオレは辻斬りなんてしちやいないさあ。その二人は何となくやってみただけの話さ。はあっ！」

気合を入れるように声を張り上げ、槍の速さをさらに上げて青年へと突き出している。突然上がったスピードに一瞬驚くも、突かれたのは数か所だけ。すぐに対応して槍を捌いていく。

両腕から微かに血が漏れるが青年は気にした様子もない。その赤い瞳はしつかりと槍の動きを捉えており、見逃すような愚は犯していなかった。そうして槍を見切り、強く弾いてカウンターを入れるように少年の胸を強く打つ。

「がっ、ふ……っ!？」  
「捉えたっ！」

バランスを崩したところを逃さずにくの字に折れる少年の首を手刀で打とうとしたが、抵抗するように槍が振り上げられ、地面に手を付いた少年が気力だけで後ろへと跳ぶ。

荒い息を吐き、脂汗を流しながらも少年のその緑の瞳は戦意を失っていないかった。

「やってくれるねえ……これからおもしろくなりそうだけど、おめえ相手に二対一は敵

しそうだし手を引こう」

「逃げんのか、辻斬り?」

「だからオレは辻斬りじゃねえと言っている。オレが求めるのは人の血じゃねえ、竜の血さ。それも高い力を持つ血、宝玉。言うなれば竜に対する辻斬りかねえ?」

「やっぱ辻斬りじゃねえか。なに言ってるやがる」

「いやいや、人か竜かの違いがあるぜ? ま、それはいいか。また機会があればどこか出会いたいもんだよ。一応、名前を聞いておこうか?」

ゆらり、と腹を押さえながら起き上り、じつと青年を睨み付ける少年。だが青年は動じず両手を広げてやれやれと首を振る。「おいおい、人に名を尋ねるならまず自分から名乗れよな?」と吐き捨てた。

それを受けて少年ははあ、と嘆息し、

「武藤<sup>むとうなぎ</sup>風。……偽名だけどな?」

「偽名かよ。いい根性してやがる。そんな野郎に名乗る名前なんて持ち合わせちやいなえよ」

「そうかい。じゃ、もう話す事はないな。ここで退散させてもらおうよ。迅気、纏」

くつくつと笑いながら青年に背を向け、黒いオーラを纏って彼はめちやくちやになつた森の奥へと消えていく。それを見送った青年は一度周囲を警戒するように視線を巡

らせ、海達の下へと走り寄ってくる。

屈みこんで傷の具合を確かめながら「こいつら、大丈夫なのか？ ほむほむ」と隣にいる少女へと話しかけるが、「ほむほむ言うな」と少し怒りが籠った声で吐き捨てつつその顔へと裏拳を放った。

とはいえそういう反応をする事はわかっていたようでも手で受け止めながら「つれないねえ……」とどこか悲しげな声を漏らしている。

「二応秘薬は飲ませた。でもこいつの左肩は手術が必要だろうな。一旦どこかの宿に行つて処置しないとイケない。こつちも絶対安静。血が流れすぎている」

「そうか。じゃあとつとと運んじまおう。ほら、肩貸してやるよ」

「は、はい……あの、助けてくれてありがとうございますですが、あなた方は一体？」

青年に肩を貸されて起き上りつつ海は問いかける。空の方も少女が抱き上げ、サラマンドラが屈んだところで鞍の上に乗せてやった。それに続いて少女も飛び乗り、手綱を握つて「少し我慢しろよ？」と声を掛けている。

「なあに、通りすがりの旅のもんさ。……よつと、これでいいか」

にとつと笑つて海を背負うと落ちないように支えてやり、近くの村に向かつて走り出す。その後ろから少女がサラマンドラを走らせて追いかけてきた。

一時はどうなる事かと思つたが、まさに九死に一生を得たといえよう。どこの誰かは

知らないが感謝してもしきれない。命の恩人だった。

手当てを受けたら改めて礼を述べなければならぬ。

そう思いながら海は青年の背中で過ぎ去っていく景色を眺めていた。

## 33話

日も暮れた頃、海ははつと目を覚ました。

最初に見えたのは木で出来た天井だった。視線を巡らせてみようと思ったが、左肩の痛みに顔をしかめてしまう。見ればそこには包帯が巻かれている。少し左手を動かしてみようかと思ったが、鈍い痛みがはしって少ししか動かなかった。

しかし痛みがあるという事は死んではないらしい。

横を見れば空がベッドに横になっていた。すう、すう、と一定のリズムで呼吸しているところから見てどうやら落ち着いて眠っているらしい。その事に安堵すると、ここはどこだろうと気になりだす。

すると、丁度良く扉を開けてあの青年が中に入ってきた。

「ん？ おお、目覚めたか」

起きている海を見つけて気さくに笑いかけながら近づき、近くにあつた椅子を引っ張ってベッドの隣に腰掛けてくる。着ていたコートは脱いであり、シャツとズボンだけというラフな格好をしている彼は、見るからに鍛えられているとわかるほどがっしりと

した体軀をしている。

そして目を引くのが金髪の隣に生える一対の角。やはり彼は有角種の魔族なのだろう。渚とはまた違った形をした角だった。

「手術は成功した。しばらくは左腕に違和感あるかもしれないけれど、完治したら問題なく動かせるようになるぜ」

「ありがとうございます……。本当に、何から何まで……」

「いやいや、気にすんな。偶然とはいえこんなどころで出会っちゃったんだ。俺らからしてもいい出会いさ」

「………といますと?」

「うん、単刀直入に訊こう。お前、霧夜か?」

瞬間、時が止まった。

青年は笑みを浮かべているが、その目は笑っていない。彼の赤い瞳はじつと海の顔を見下ろしている。彼の表情の細部まで見逃さないというかのようなのだ。

対する海もまた表情を固まらせていた。彼が放った言葉の意味を感じとり、しかし言葉を失ってじつと彼の言葉の真意を測ろうと見上げている。

硬直する二人、空間。

日も暮れたせいで窓の外は暗く、静けさを保っている。

そんな中で動いたのは海でも青年でもなく、寝ていたはずの空だった。痛む体を動かして起き上ろうとしたが、青年が一瞬で彼女の下へと動き、その体をベッドに押し付ける。

「はいはい、動くんじゃないよ」

「くっ……！」

「まったく、その兄ちゃんを助けようっていうのは立派だが、お前さんは絶対安静なんだよ。いいから、そのまま寝てな。俺は別にお前さんらをどうしようなんて思っちゃいない。そんな気があったら、わざわざ助け出したりしねえだろうよ」

「……………」

彼の言葉も尤もだ。空はじつと睨みつけるように青年を見上げていたが、両肩にかかる力が空を傷つけるものではなく、ただ彼女を寝かせようとしているだけだということを知り、抵抗するのをやめてそのまま体を横たえた。

それに満足したように頷き、青年はまた椅子へと戻っていく。

「ああ、順序を間違えたな。俺は獅子童。獅子童しどうらい雷河らいがつてもんだ。でもって——」

そこでまた扉が開き、中に入ってきたのはあの猫耳少女だった。部屋に入るとじろりと海らを睨み付けたような視線を向け、ふん、と息を鳴らして扉を閉めて壁にもたれかかって手にしているグラスを傾ける。

「——あの無愛想な奴が焰ほむろ。お前を手術してくれた奴さ」

「焰……………まさか、『破壊の焰』？」

その眩きを聞いた瞬間、焰が手にしているグラスが握り潰された。彼女から殺気に近い気が放たれ、真紅の瞳がきらきらと炎が揺らめくかのように輝きを増し、猫耳や茶髪が逆立っていく。

「てめえ、知ってんのかよ……………っ！ やっぱりてめえらは霧夜か……………っ!？」

「はいはい、どうどう、落ち着け焰。そう敵意をむき出しにされたら話が進まないって」  
今度は一瞬で壁際にいる焰まで接近し、齒を剥いて今にも飛びかかりそうな焰を押さえつけてなだめにかかっていた。ぼんぼん、と背中を優しく叩いてあやしながら焰の興奮を抑えている。

その様子を見て海は自分の失言を悟った。慌てて頭を下げて「すみません。失言でした」と謝る。それを見て「ほら、謝ってんだから落ち着けて」と雷河が優しく声を掛ける。

「……………ふん」

そうしてようやく殺気が収まり、そっぽ向いて近くにあった椅子に腰かけ、グラスを握りつぶした事で傷ついた手を治療し始めた。その様子にやれやれ、と溜息をついた雷河がぼんぼん、と彼女の頭を優しく撫でて椅子に戻ってくる。



「ああ、何だ、すまんね。……でもあいつの昔の異名を知ってるって事は、やつばお前ら霧夜の忍でいいんだな？」

「……はい。しかし、どうしてそれを？」

「んー……、まあまずはお前らが霧夜の誰かってのを聞こうか」

そして海は名乗った。隣にいる空も紹介し、それを聞いた雷河は興味深そうな視線を向けてきた。ほうほう、と驚いたように頷き、どこか嬉しそうに笑って腕を組む。

どうしてそんな反応を見せたのだろうかと疑問に思っていると、彼は「お前ら、神倉獅鬼を覚えているか？」と訊いてくる。

その名前は知っている。

神倉一族出身の男性で、六年前の重大事件で命を落としたりしたハンターだ。そして十六年前に一度会った事がある人物だ。海の母親の珊瑚が病に倒れた際、空と共に里を飛びだしてマンドラゴラを探しに出て、そして出会った。

だがその前に一人の少女ハンターのおかげで魔族狩りの手から助け出された一件でもあったか、と思いつく。彼女の鮮やかな動きで子供だというのに大人相手に立ち回り、自分を救い出してくれた。

あの時は優羅とだけ名乗った彼女が、まさかシユヴァルツの末裔の一人である黒崎優羅だったと知るのはいくらも十年も後になってしまった。とはいえあの時から既に普

通じやない何かを持っていた、という事だけはわかっていた。

「神倉獅鬼は俺を拾って育ててくれた人だな、お前らの事は話に聞いていたのさ。そしてあいつ、焰の故郷がこつち側つてのもあつて、ぽつぽつと噂は聞いてたのよ」

くいつと親指で焰を示しながら話していく。焰……彼女は「破壊の焰」という異名を持つていた戦アイルーの一匹だという過去がある。今ああして人の姿をとつているが、あれは札によつて変化しているのだろう。

彼女の名前、異名を悟つた海はそこまで思い出した。そして彼女がどうしてそんな異名を持ち、こんな所にいるのかを思い出そうとして、また焰がぎろりと睨みつけてくる。慌てて視線を逸らし、雷河が困つたように苦笑して話を進めてくれる。

「親父はお前らが将来的に有力な人材になつてくれると見越していてな、お前らに助けの手を差し伸べた代わりに口約束をしていたろ？」

「はい、確か……いつか成長した後、対価を支払つてくれればいい、と」

「うん、そう。それはいつか親父が手助けを求めた際に力を貸してくれ、という意味でもある。……ま、それを果たす前に親父は死んじまつたけどな」

六年前に神倉獅鬼が死んだという話が広がった際、二人はひどく驚いた事を覚えていゝる。彼の實力は東方でも知られており、同時に素晴らしい腕を持つ医者でもあつた。彼の死は多くの人を驚かせ、悲しませた。

そして二人にとってはいつか返す筈だった対価を永遠に返せずじまいになつてしまふ事でもあつた。

「でも親父の意志を継いで俺は、俺達は親父の代わりに世界を巡り、人々を助けている。今回手を出したのもその一環さ。親父がそうしたようにハンターとして、医者として活動している。……そして今、この東方に起こつている事件にも介入するつもりだ。同時に、この東方のどこかにいる霧夜一族も探していた」

「俺達を探していた？ どうしてですか？」

「協力を求めるためさ。親父が作つた縁を生かしたいと考えた。……ま、焰が気乗りしなかつたけど、そこは我慢してもらおう」

「チツ……」

これ見よがしに舌打ちする焰だが、それ以上の事は言つてこなかつた。彼女としては気乗りしないが、それは個人の感情であり、この一件は個人の感情で止める事が出来ない用件なのだろう。

不機嫌そうに腕を組み、とんとんと指で腕を叩いている。そんな自分の過去を知る者がいるのが気に食わないようだ。それもそうだろう、噂には聞いているがあれは彼女にとって消したくても消せない過去なのだから。

「この一件には神倉月さんも介入する」

「神倉月……あの方が!」

「ああ。とはいえ有名すぎるから変装……変化しているけどな。んで、俺達がお前らに頼むのは情報をくれないかという事だ。俺達だけでは事件の全貌を把握するには人手が足りないし、周りきれない。噂を耳にする事だけでは足りないからな。どうもこれは六年前の時みたいに誰かが何らかの望みを持って起こしていると思っっている。……そのためには情報が必要だ。だから、無理を承知で願う、情報をくれないか?」

「……出来ません。俺達は忍です。仕える主がいらつしやいます」  
「乾渚さんかい?」

どうやらその事も知っているらしかった。いや、もしかしたら焔が話したのかもしれない。彼女ならば知っていてもおかしくないからだ。

「はい。乾様の許可もなく、俺達が持つ情報を他人に話す事は出来ません。話せるのは乾様をはじめとする御三方、そしてそれに繋がる一部の方々だけです」

「ふむ、となるとその乾様に許可を貰えばいいのかね?」  
「……と言いますと?」

「俺が、俺達が乾渚様に協力を申し出れば、お前達から情報を貰ってもいいのか、と訊いているのさ」

じつと海を見据えて雷河は真面目な表情で問いかける。彼は本気だ。冗談でこんな

事を言っているわけではない。しかしそれでも難しいだろう。乾渚はただの海の主という訳ではない。彼女はヤマト国にとって重要な存在なのだ。

そう易々と協力を申し入れられる相手ではないし、簡単に呼び出すわけにもいかない。

それは雷河もわかっているはずだが、彼は右手の人差し指を立ててこう言った。

「こつちには神倉月がバックについている。彼女も協力する、たとえば、融通は利かせてくれるかもしれないぜ?」

「……………」

ヤマト国自体は神倉月に対して良くも悪くも関わりがある。六年前の一件から彼女からは離れているようだが、それ以前は何かと縁があった。なにせ彼女は東方出身であり、あまりにも有名で影響力もあったためヤマト国と繋がりがあった。

渚もその縁で何度か会った事があるし、彼女自身は六年前の一件があった後も一度は会った事があった気がする。となれば渚にそのことを報告すれば、分身が送られてくる可能性が高い。

そうなれば交渉の場は出来上がる。

どうする、報告するべきだろうか?

しかしここにはあの焔がいる。焔からすれば渚も会いたくない人物ではないだろう

か？

そう考えてまた横目で焰を見やる。その視線の意味に気づき、なるほど頷いて雷河は焰に振り返った。

「おい、焰。乾渚さんをここに呼べるかもしれないが、お前さん、それでいいんだな？」  
「……………」

「いつまでも引きずってばかりいるのもあれだぜ？ いい機会じゃねえか、一度話したらどうだ？」

「……………未寅の野郎は来ないんだよな？」

「未寅様、ですか？ あの方は……………別の所にいらっしやいます。連絡すれば来られるかと思いますが」

「呼ぶな。あの野郎には……………会わず顔がない」

不機嫌そうな表情を浮かべていた焰は、そこで視線を逸らす。その際に見せた表情は不機嫌、苛立ちというよりどこかバツが悪そうな、悲しそうな感情がごちゃ混ぜになったかのようなものだった。

そうして思い出す。

あの時酒場に入ってきた際に引き返していったのは、恐らく疾風がいたからだろう。昔の自分を知っている戦アイルーがいたからこそ彼女は引き返した、逃げ出してしまっ

たのだ。

「……未寅さんは仕方ないとして、乾さんは大丈夫だよな？ あの人神倉さんとも知り合いだからたぶんお前が俺と一緒にいる事、知ってるぜ？」

「……チツ、そうか。………わかったよ、ここにいる」

「よし。じゃあ神倉さんに連絡するから、そっちも一応乾さんに聞いてみてくれねえか？ 交渉の場を設けられるかどうか」

「………わかりました」

頷いて海は懐に手を入れる。一度脱がした和服ではあったが、それでも中身までは手を付けていなかったらしい。問題なく連絡用の札を取り出す事が出来た。そうしたところで空が控えめに海へと声を掛ける。

「よろしいのですか、海様？」

「ああ……乾様も何かあった場合は連絡しろとおっしゃっていた。この一件はどの道報告しなければならぬだろうからね。纏めてお伝えしないと」

「………わかりました」

見れば雷河が少し離れた所で同じように札を使って連絡している。どうやら神倉月と早速連絡を取っているらしかった。ならばこちらも渚に報告しなければならぬ。海は札に魔力を注いで渚と連絡を取る事にした。

少しして耳に当てた札から彼女の声が聞こえてくる。

『おう、こちら渚。どした？』

「こちら霧夜海です。ご報告があり、連絡いたしました」

そして海は先ほど起こった事を報告していく。それに時折相槌を打ち、渚は海が話し終えるまで静かに聞いていた。やがて全てを報告し終えたとき、渚は『そうか……』と頷いたようだった。次に出てくる言葉はお叱りの言葉だろうか、とどこかで考えていたのだが、

『無事で何よりだったよ。よく、生きていてくれた』

掛けられた言葉は二人を気遣う言葉だった。

ああ、やつぱりと目を閉じて思う。この人はまず人を心配してくれる。こういう人だからこそ人は慕っていくのだ。

海は「すみません……ご心配をおかけしました」と頭を下げる。すると向こうから、『いや、謝らなくていいよ。でも、そうか。焔がそっちにいるのか。それに神倉さんが来るとなれば、行かない訳にはいかないな。それにお前らを助けてくれた札をしなければならぬ』

「わかりました。分身が来られるという事でよろしいんですね？」

『ああ。早速分身を向かわせている。間もなく到着すると思うからよろしく』



「はい、了解しました」と返事をし、窓の外を見てみる。ベッドの傍へと降り、窓に向かかってそれを開ければ少し冷たい夜風が流れ込んできた。彼女が入ってくるとなればここからだろう。

そして向こうでも連絡を取った雷河が「じゃ、よろしくお願いします」と頭を下げてから少ししたとき、突如部屋の中に裂け目が生まれる。

まるで景色が紙のようで、その紙の中心部分が破けて広げられたかのよう。

その奥から二人の竜人族の女性が潜り抜けて部屋の中へと入ってきた。

一人は紫色の長髪をした女性。紺色の和服に身を包んだ長身の女性で、優しげな蒼い瞳が軽く部屋を見回し、雷河に気づくと「久しぶりだね」と声を掛けていく。それに続いて入ってきたのは金髪の女性だ。肩にかかるショートポプの髪型をしており、少し垂れ目な青い瞳でぐるりと部屋を見回し、驚いた顔で自分達を見つめている海らに気づくと目礼してきた。顔立ちからして西方人であり、白い肌に白と水色のワンピースが似合っている。その上に淡い青のローブを羽織っている。

連絡を取り合ってからすぐに空間転移を行使してきたようだ。それを指で操作し、空間の裂け目を閉じると、海らに振り返って「突然の来訪、失礼するよ。驚かせてごめん」と頭を下げてきた。

「あ、い、いえ……」

「おっと、その前に名乗るべきだったね。申し訳ない。……初めまして、私は神倉月。仮初めの姿で申し訳ないね。よろしく頼むよ」

「私はルーシー・ヴァーミリオンです。数十年前に西方で月さんと知り合いました」

ペこりと頭を下げる彼女の情報は無い。六年前にもいなかったので彼女の言う通り西方で知り合った人物なのだろう。それがここまで一緒に行動しているという事はそれなりに信頼のおける人物なのだろうか。しかも竜人族なので見た目に反してかなりの年齢なのだろう。

大人しそうな雰囲気をしているが、それに反して結構な実力者なのかもしれない。なにせその佇まいに隙が見当たらないのだ。ハンターなのかもしれない。

二人に名乗られたので、海も自分と空の自己紹介をし、よろしくと差し出された月の手を取って握手をする。そうしたところで窓から一羽の鳥が入ってくる。それは海の傍で停滞し、光る粒子を発して人の姿をとった。

そうして現れたのは海の上司、乾渚だった。

分身である彼女が顕現すると、目の前にいる神倉月に気づき、にっと笑って「久しぶり、神倉さん」と握手を求める。それに月も快く受け、微笑を浮かべて握手する。

「そして……久しぶりだな、焰。元気にしてたか？」

「……どうも。お久しぶり」

そつぽ向いていたが、一度渚に向かつて頭を下げ、またそつぽ向く。どうも居心地が悪そうだ。それは渚もわかっているようで苦笑を浮かべている。それ故に一度焰から視線を外し、話を進めていく事にする。

「さて、話を聞こうか」

「どうも、よろしくお願ひします。……まずは名乗りましょうかね。獅子童雷河です」  
「ん、よろしく。乾渚だ」

頭を下げて挨拶する雷河に対し、渚も少し一礼し、挨拶しあう。そのまま部屋の中央にある机と席へとついでお互い向かい合った。渚は一人で席に着くに対し、対面には月と雷河が着く。

二人の後ろにはルーシーが付き、壁際には相変わらず焰が佇んでいる。

渚の後ろには海が付き、空は安静という事でベッドに横になつていた。

この面子で交渉を進める事になる。

まず雷河が説明を始めていく。

「まずあなたをお呼びする事になつた用件ですが、俺達は霧夜の者らが集めた情報を求めました。俺達もこの東方で起こっている事件を調査しているんですが、情報収集には手が足りないのです、手を組みたいと」

「なるほど。でも霧夜はうちの忍だ、情報は提供できないな。例えば神倉さんが相手でも、

ね」

「やっぱりそうなるね。でも、個人同士ならどうか？」

「へえ、個人？」

そこで月が提案していく。その言葉に渚が視線を向け、月が微笑を浮かべて話している。

「私も少しおもしろい情報を持っていてね、たぶんこれは霧夜の忍でも知らない情報だと思うよ。これをヤマト国の重役と私らという間ではなく、乾渚と私らという間でやりとりしないかい？」

「ふーん、大きく出たね？ そんなにおもしろい情報かい、神倉さん？」

「ああ。保障するよ」

ふっと笑みを浮かべて自分の持っているカードの一つを提示する。しかしそれだけで渚が首を縦に振るわけではない。彼女個人として、つまりは友好関係にある者らでやりとりするというだけで頷くわけにはいかなかった。

その理由としては、

「だけど無理だね。その情報は興味深いけど、それでも無理さ」

「何故です？」

「それはね、獅子童雷河、あたしらが持っている情報はなにも霧夜の忍だけが集めたわけ

じゃねえんだよ。他の奴ら、異と未寅の奴らも集めた情報も含まれている。確かにこの三人の中では一応あたしが一番上の立場にあるけど、それでもあたしの独断で頷くわけにはいかねえんだ。……海と空を助けてくれたことには感謝する。でもその礼としてこっちの情報を共有するってのは話は別。協力体制を布くなら、あいつらも呼ばねえと話になんねえな」

そう言いながらちらりと焰の方へと視線を向ける。未寅の名が出た瞬間彼女の体がびくりと反応を示したようだが、ここは気づいていないふりをする事にした。

例え個人が持っている情報とはいえ集めたのは集団だ。忍だけではなく彼らも関わっているが故に普通に頷けない。しかし、

「……だけど、もう少しそっちが提供するものが増えるってんなら考えなくもない。あたしにとって神倉さんが関わってくるっていうのはありがたいんでね。あたしらが情報を提供するに對し、あんたらはなにを提供してくれる?」

渚にとって神倉月と本格的に繋がるのは彼女にとって大きなプラスになるのも事実だった。渚が情報を提供するならば、月達も何らかのものを提供しなければ話にならない。面白い情報一つだけでは釣り合わない。

何せ渚達が集めて保有している情報は結構多い。それに釣り合うだけのものを月達は提供できるのか?

月が協力するという点でも大きな要素だろうが、それでも足りない。なにせ神倉月はあの一件以降本来の姿を隠すように変化を使って行動している。それだけでなく偽名も使っているため表だつて行動するのは控えめになっているのだ。

そのため月だけでは少し心もとない。とはいえ戦力としては十分信頼のおける人物である事は間違いない。でももう少し何か欲しかった。

その期待を込めて月を見つめてみると、雷河が口を開く。

「俺と焰も当然介入する」

「焰？ ふむ……焰の心境の件があるからあまり期待できないな」

「では私の信頼のおけるハンター達も戦力として加えよう」

「誰だ？」

「まずはここにいるルーシー。そして六年前の事件以降姿を消している白銀昴達さ」

その名前に渚だけでなく後ろにいた海らも驚き、息を呑む。当然だろう、彼らは姿を消し誰もどこにいるのかわからないのだ。完全に表舞台から消えた者らを戦力に加えると言われて、驚かない方がおかしいだろう。

しかも彼女の口ぶり、雰囲気からしてどこにいるのか知っていると云っているかのようではないか。

「……本気かい？」

「ああ、彼らの了解が得られれば協力してくれるだろう」

「どこにいるのか知っているとでも?」

「知っているよ。彼らが誰にも気づかれずに暮らしているのは私の支援があつてこそだからね。家の周囲に結界を張らせ、偽名を名乗り、変化で見た目を変えているからね。それはもう髪の色や瞳の色、声色も含めて。それを叶えるための道具を手渡したから有効に使っているだろう。彼らの娘さん達も含めて、ね」

一家揃つて何もかも偽つているというのか。人間である彼らが変化を使えるはずがないのでどうやっているのかと思つたが、まさか神倉月の支援があつたとは驚きだ。でも少し考えればわからなくもない。

彼らは共に戦つた仲間だ。彼女が彼らに手を貸すのは彼女の性格から考えても有り得る話だつた。そして彼女の助けがあつたからこそ今まで彼らは誰にも気づかれずに暮らし続ける事が出来た。

そんな彼らを再び表に出す。これは大きな決断だろう。

「でも戦力になるのかい? 表舞台から消えて六年だろ? 実力、落ちているんじゃないのか?」

「心配ないよ。生活費を稼ぐためにぼつぼつとクエストをこなしていると聞いている。今ではG級ハンターになつていてという話さ。三人とも腕は磨いているから戦力に

なってくれるはずだよ」

「G級、か。なら戦力としては期待出来そうか……でも本人らの了承はまだ得ていないんだらう？　じゃあまだ領けない」

腕を組んだ渚は「それに」と繋げながら指を立ててじつと月を見据える。

「あの三人を表舞台に出す理由がわからない。ただ戦力として頭数を合わせたつて理由じゃ軽蔑するぜ、神倉さん？　なにせ彼らは平穩な暮らしをするために表舞台から消えたとあたしは思っている。そんな彼らを呼ぶんだ。ただの知り合いだからじゃ済まされねえ、それ相応の理由があるんだらうな？」

確かにそうだ。余計ないざこざを避けるためにシユヴァルツの末裔である黒崎優羅と共に姿を消して六年。子供も生まれて静かに暮らしている彼らを呼び出すのだ。

この交渉を成功させるための出汁に使うためだけに呼ぶとなれば渚は逆に月を軽蔑する。

それに対し月はふう、と息をついて小さく頷いた。

「わかった、理由を説明しよう。それは先ほどおもしろい情報だ、という内容を話す事になる」

「へえ、聞こうか」

「先日、私は一人の人物と遭遇した。その人物は辻斬りと思わしき人物を庇うために現



れた女性でね、全体的に黒に統一された衣装と髪、そして顔の半分には骸の仮面をつけていたよ。そしてどういう技術を使ったのか、その姿を目視できない力を持っていたよ」

「……………んん？」

そこまで話を聞いた渚が唸りながら首を傾げる。何やらどこかで聞いた事があるような特徴だった気がしてきたのだ。そんな彼女を見つめながら彼女は言葉を続けていく。

「手にしているのは黒い短剣。これを振るって私の足止めをし、辻斬りを逃がしていったのさ」

「おい、おいおいおい、ちょっと待て。そいつはまさか……………」

「気づいたかい？ 彼女ははぐらかしていたようだけど、恐らく衛宮天羽逃亡事件に加担した人物じゃないかと私は推測しているんだ」

「…………ちつ、マジかよ。となればなんだあ？ そいつは天羽の味方であり、しかも辻斬りの事件に関わっているって事になるのか？ しかも神倉さんよ、あなたはまさか……………」

冷や汗を流しながら思わず身を乗り出してしまう。渚が危惧しているのはある一点だった。そして月は「ああ、いいようにあしらわれ、逃げられてしまったよ……………」と困ったように言えば、渚は椅子の背もたれに体を預けながら天井を見上げ、右手で目を隠した。

「……衛宮のじーさんだけでなく神倉さんでも手を焼いた相手、か。なんの冗談だあれは……？」　あなたらを相手にして逃げられる奴が敵にいと……」

あの衛宮兼定を相手にして逃げ切れた人物がいた、という話を聞いた時も耳を疑ったが、今回もまた耳を疑うしかない話だった。そして想像したくもないことでもあった。悪夢だ、といわんばかりにげんりした渚は、一息ついて姿勢を正し、月を見据える。

「つまり神倉さん、あなたは戦力となるべき人物を補給したい、ということかい？」

「そうだね。今回もその二人がやられたんだ。この先霧夜の忍が調査を進めた際に返り討ちになってしまう事はあり得る事だろう？」

その言葉に渚だけでなく海も思い出す。つい先日も霧夜の忍は辻斬りによって殺されたばかりだ。今回も一歩間違えれば海と空もその中の一人になっていた。表情が固まってしまうのも無理はない。

「そこで戦える人材を増やし、協力関係を結ぶ事でどちらも得をしないと思わないかい？ 私達は情報収集が進み、事態を把握する事が出来る。そちらは戦力増強によつて犠牲が減る。ギブアンドテイクさ」

「……………なるほど。でも増えたとしても三人だろう？　それにあちらさんは子供がいるつて話じゃないか。子供はどうすんだよ？」

「それも当てがある。それにその当てにも戦力となり得る人材がいるよ」

「それは？」

「ルシフェル兄弟とその奥さんさ」

「……ポツケ村か」

「おや、ご存じだったか」

少し驚いたような表情を見せる月ではあったが、ちらりと海の方へと視線を向ける。彼女の予想として霧夜の忍がポツケ村にも調査の手を伸ばしたのだろうと当たりをつける。噂としては確かにポツケ村にはそういう要素があるという事は陰で知られているし、それを把握しているならばポツケ村にも調査の手が入る事は推測できる。

そうして情報を入力し、それを秘匿しているのだろう。でなければポツケ村に隠れ住んでいる彼らがあそこから離れない理由がない。

そして目の前にいる人物はルシフェル……ひいてはシュヴァルツの末裔に対して悪しき印象を抱いていない。抱いているのは彼女らの三家と対を成す三家だ。その知識は月にはあった。

「なるほど……ルシフェル兄弟なら戦力になるね。これで更に四人追加、か」

「あともう一人いるけど、こちらは少し訳ありだから難しいかもしれないね」

「まだいるのかい？ 流石はあの戦いを仲間と共に戦っただけあるね」

「はは……その後はそれぞれ分かれてしまったけれどね。それにもう一人は交渉しない

と表舞台に再び出られないところにいるから望みは薄いけどね。でも加える事が出来れば必ず力になってくれるはずさ。ルシフェル兄弟が加わってくれれば、の話だけどね……」

「ふーん、ということとは……八人か。神倉さんらを合わせて十二人……十分な戦力だな」  
月、ルーシー、雷河、焰、白銀一家三人とルシフェル一家四人、そしてもう一人。

合計十二人のハンターという戦力。

敵は人族ではあるが、それでも彼らは対人戦の鍛錬もこなした人材らだ。

これらを戦力としてあてがう事が出来たならば、辻斬りらともし遭遇したとしても戦える可能性が高い。彼らが引き付けている間に忍が情報を持ち変える事が出来れば、辻斬りに対する調査が進むというものだ。

お互いメリツトがある取引。

月が持つカードは渚を唸らせ、考え込ませた。

「……でも今は確実じゃないよな？ 本当に彼らが来てくれるかの保証がない」  
「それは認めよう。ここにいる四人……いや、三人かな？」

ちらつと焰を一度振り返り、言い直す月。

「私達は共に戦うけれど、彼らにはこれから話をつける事になる」

「じゃあやつぱり今ここで答えを出せないな。……後日、改めてこの場を設けよう。そ

の際はその二人もその場に呼ぶよ」

「ではそれまでの間に彼らに話をし、了承を得てくるよ。……焔もそれまでの間に決心するんだよ？」

「……わかったよ」と焔がそっぽ向きながら答え、それに月だけでなく渚も苦笑を浮かべる。そして二人は立ち上がり握手を交わした。今回は話は纏まらなかつたが、それでも今回の交渉でいい結果が得られそうだと月は感じていた。

この結末が成立すれば現在起こっている事件に対して大きく踏み込む事が出来るだろう。

少なくとも人為的な要素がからんでいる辻斬り事件と領主事件に関しては彼らの戦力が入れば、上手くいけば犯人を捕らえる事が出来るかもしれない。

そうでなくとももう一つ、蛇竜種やりオ夫婦の一件も調べる事が出来るだろう。なにせ本職はハンター。モンスターを狩ることを生業としているのだから大きな戦力となる。

戦力と情報収集、二つに秀でた集まりが手を組めば、きつとうまくいくはずだ。

この縁を大事にし、今回の異変も解決へと導ければいい。月はそう思っていた。しかし気がかりな事もある。

渚には話さなかつたが、自分は再び命を狙われているらしい。

あの暗殺者が口にした言葉。

いずれ自分を殺しに来る戦士が現れる。そして自分はその者の手によって死ぬ。

それが本当なのかハツタリなのかはわからないが、それに対する備えとしても彼らに話をしないといけない。これはいい機会だった。だからこそこの交渉の場に立ったのだ。

そのためにも話を進めていくとしよう。備えあれば憂いなし、だ。

そして交渉の様子を見つめていた海は振り返った渚と相對する。腕を組んだ渚は上から下まで海を見つめ、目を細めた。

「お前らはしばらく休んどけ。いい機会だ、体を休めて落ち着くといい」

「よろしいのですか？」

「いいよ。どの道、空はしばらく安静き。数日休み、英気を養っておくといいさ」

「はっ、承知しました」

一礼する海に優しい微笑を浮かべて頷き、続けてベッドに横になっっている空へと近づく。彼女は起き上ろうとしたようだが、「ああ、そのままでもいいから。無理すんな」と優しく嗜めた。「……申し訳ありません」と彼女にしては珍しく困ったような表情を浮かべており、気にするなというかのように渚は手を振る。

そして空の黒髪をまるで子供を撫でる母親のように手櫛を通し、

「本当に、生きていてよかった」

「……ご心配をおかけしました」

「ん、ゆつくり休め」

ぼんぼんと撫でて空から離れると、今度は壁際にいる焔に視線を向ける。相変わらずの様子だったが、渚はそれを気にする事もなく頭を下げた。突然頭を下げられて焔は驚いた表情を浮かべるが、渚はそのまま口を開く。

「空と海を助けてくれてありがとう。遅れてしまったけど、改めてお礼申し上げます」

「……あ、いや、……別にいい。これが焔たちの仕事だから」

真つ直ぐにお礼を言われたことで焔が戸惑いだす。まさか渚にこうされる時が来るとは思わなかったようで、慌てた表情で両手をばたばたとさせている。そんな様子を雷河がくつくつと笑みを殺しつつ口元に手を当てており、それに気づいた焔が少し紅潮した顔で雷河に睨みを利かせた。

「……そうか。でも、それでも礼は言わせてくれ。本当に感謝してる。……最初に話聞いた時は驚いたけどな。まさか助けてくれたのがお前だとは思わなかったから」

「……焔だつて驚いたさ。まさか助けたのが霧夜の忍だとは思わなかった」

「でも、こうして二人を助けてくれたからこそこうして会えた。元気でやっているようで安心したのも本当だし、これがいい機会だとも思ってる。あいつらとまた話してやつ

てくれ」

「……………考えとく」

「ん。そうしてくれるとありがたい。……じゃ、あたしはこれで失礼するよ」

月に対して軽く一礼すると月も向き直って一礼する。そして渚の姿は光の粒子となり、鳥の姿となつて窓の外へと飛び去っていく。それに続いて月も雷河に「じゃあ私達もこれで失礼するよ」と声を掛けた。

雷河も「わかりました。急な呼びかけに承えてくれてありがとうございます」と頭を下げる。

「いや、構わないよ。私にとつてもいい機会だったからね。この出会いに感謝を」

「次に会ったときはゆっくりお話ししましょう」

「うす」

月とルーシーが微笑を浮かべて挨拶し合い、月が指を立てて呪文を唱えつつすと下に下ろせば、また空間の裂け目が部屋に生まれる。その先はどこかの山の中だったようだがよく見えない。

ルーシーが潜り、月も「では、また会おう」と肩越しに振り返つて微笑み、ルーシーに続いて裂け目を潜つていった。

突然の出会いと交渉の場。それもかの有名な神倉月が先ほどまでここにいたのだ。



六年前の重大事件を引き起こし、その昔は伝説に語られる程名を馳せた神倉一族の唯一の生き残りとなった彼女。

噂通り人のいい女性だった。人族の中で最も高い実力を持つ、と囁かれる人物だといふのに、あれだけの優しい目をした女性だとは。その事を嘯みしめっていると雷河が時間を確認し、「腹減ったか？ 飯でも持ってこようか？」と話しかけてくる。

そういえばいい時間だしずっと眠っていたため少し小腹がすいてきていた。それを実感すると腹の音が鳴りそうなほどだったと自覚する。

それに気づき、にやりと雷河が笑えば、腕を組んでうんうんと頷きだす。

「よし、それじゃ飯の準備をするか。下に行つて飯作つてくれるように頼んでくるわ。

……あ、そこで寝ている嬢ちゃんは軽めのものでいいな？」

「いいんですか？」

「なあに、遠慮することはねえよ。これも一つの縁。この先も上手くいきや結構長い付き合いになるかもしれねえんだからよ、仲良くやっていこうぜ？」

荒々しい髪型にがっしりとした体つきに反して彼はなかなか気さくな人だ。魔族だといふのに友好的だというのも珍しい。海はそう思ったが、彼の行為を無碍にするのもなんだと思ひ、ここは頼むことにした。

「よし、ちっと待つてな」と言い残して扉を開けて出ていき、それに続くように焰も静

かに出ていく。それを見送り、海は一息ついて窓の外を見た。

激動の一日だった。

龍仁達とのやりとり、森の中で助けた母娘、リオ夫婦の観察をしていたかと思えば突然現れた謎の少年。彼によって殺されかけたところで颯爽と現れた雷河と焰。

二人に助け出され、目が覚めれば霧夜の事を知っていて、焰は焰で過去に疾風らと繋がりがあつた戦アイルーだと判明。そうして繋がる縁を生かし、この場に神倉月と乾渚が同席し、話し合いが始まる。

本当に、人生何が起きるかわからないものだ。

そして縁とは不思議なものだ。巡り巡ってこうして様々な人達を結びつけた。

しばらく自分達は動く事は出来ないが、それでも世界は回っていく。どこか別の忍が新たな情報を手にしてくれる事を願おう。

海は雷河が料理を運んできてくれるまでしばらくそうして夜空を見上げ続けた。

○

「面白い事になったもんやなあ」

数本の蝋燭の火が部屋に灯るその場所でそんな声が響く。彼女、灯は縁側に腰掛け、

開かれた襖に背を預けながら煙管を吹かせていた。視線は部屋の中ではなく外、曇っている夜空を見上げていた。

そしてその部屋には彼女だけでなく他の影があった。一つは蠟燭の灯りが届かない部屋の隅に佇んでいる人物。灯を補佐している風間の忍だった。彼は静かにそこに控え、部屋にいる者達を見守っているだけだった。

『霧夜海と霧夜空を殺しかけた少年、か。ふふ、興味深いですねえ……その情報を持ちかえった忍はいい仕事をしましたよ。もう、報酬を与える事が出来ないと思うと実に残念ですねえ……ええ、せめていい供養をさせてあげてください』

「……はっ、感謝いたします。申子様しんし」

申子と呼ばれたのは人ではなく部屋の中心に佇む一羽の鷹だった。風間の忍はその鷹に対して頭を下げている。もちろんその鷹は申子と呼ばれた人物本人ではなく、彼がここへと送ってきた使い魔だった。

本人はヤマト国にいないため、こうして使い魔を派遣して会議に参加している。そしてここにはもう一匹いる。

鷹の対面には一羽の鳥が止まっていた。漆黒の毛並みが部屋の闇に溶け、しかし蠟燭の灯りによって怪しく浮かび上がっている。

『ケツ、情報だけ送ってくるなんてご苦労さんなこつた。死体だけ現場に残すとは根性

のねエ奴だな。せめてどんな奴だったのかまで調べて死ねってんだクスが』

「……………申し訳ありません、午卯様」

『ああ、別に謝るこたあねエぜ？ 実際これはおもしれエ事になつてんだ。アタシとしちやまあまいい仕事したと思つてんだア。ケツケツケ』

まるで子供のように、それでいてどこか黒さを滲ませる少女の笑い声が響くたびに鳥の首が揺れる。そんな鳥を前に、忍はただ頭を下げたまま無言でいるしかない。

そしてその笑い声を止めたのは鷹だった。

『そこまですておきなさい、六花<sup>りっか</sup>。はしたないですよ？ 女性はもつとたおやかに笑うものです』

『ケツ、てめえに言われたかねエんだよ。いつまでそんなきめえ仮面付け続ける気だア？ 気色わりいんだよゲス』

『まったく、あまりおいたが過ぎると私としても心が痛みますが、それ相応のお礼をする事になりますかねえ？』

『おう、上等じゃねえか。アタシも申子の代表がてめえだつてのは気に食わねエんだよ。いい機会だ、引きずりおろしてもう少しまともな奴をその席に座らせてやろうじゃねエか、あ、あ、あ、!?!』

向かい合っているのは鷹と鳥ではあるが、使い魔を通じて放たれている気迫は凄まじ

いものになってきている。使い魔同士が睨み合っているだけなのに今にも殺し合いを始めそうな程の空気になってきており、風間の忍は息を呑んで見守っていた。

そして静かに、この空気を壊す為に彼女が口を開く。

「やめい。そのままぶつかり合ったら、灯が殺すで？」

『……………』

煙管を吹かしながら夜空を見上げていた灯がただ流し目で二羽の鳥を見つめ、さつきを放ちながら静かに言い放っただけで、二人は沈黙してしまふ。有無を言わさないだけの迫力が眼力と気迫に籠められており、風間の忍も沈黙を守りながら冷や汗を流していた。

バツが悪そうにそわそわしている鳥に対し、鷹は静かにその場に佇んでいる。

そんな二羽を横目で見やりつつ、

「ほんま、あんたら反りが合わへんなー。今はそうゆうことしとる場合ちやうやろ？」

『そうですねえ、失礼しました酉丑ゆうちゆうさん。話を戻していきましようかねえ』

「ん。リオ夫婦を殺し、霧夜海らを殺しかけたあの男。風間の数人を動かして調べとき。今のところはそれを最優先や」

「はっ」

灯の指示に風間の忍が一礼する。続けて紫煙を吸うと空へと吐きだし、煙管をとん、

と灰皿へと叩いて先端を鳥へと向けた。

「六花、あんたはなんかやつたみたいやけど、上手くいつとるん？」

『今のところは様子見だなア……ま、上手くいくかどうかは流れを見守るしかねエのは事実だぜ。うまいこと誘導してくれるかはどれだけ親しくなれるかってのが問題だからよ、ケツ』

『ふふ、まさか六花があれを使うとは私は驚きものなんですけどねえ。確か、嫌いなんじゃないかったんでしたっけ？』

『ああ、きれえだよ。あんな奴……大ツ嫌いだ。……てめえもそうだろ？ 魔族の血が流れてんだからな』

鳥の瞳がじろりと鷹を睨み付け、それに頷くように鷹が嘴を開けながらカツカ、と小さく鳴きつつ首を上下に振る。『ええ、本来ならばすぐにでも殺しに行きたいくらいなんですけどねエ、あれも一応……”一応”午卯の血に連なる者ですからねエ……。個人的なもので殺しては問題になりますからねエ……』と今度は横に首を振りながら残念そうな声が発せられる。

そんな事をのたまう彼に、また鳥の主、六花が『ケツ』と小さく悪態つく。

『なあにが個人的云々だ。そんなこと言つてて、本当は灯さんがこええんだろ？ そうだよなア？ てめえは灯さんには頭が上がらねえもんなア？ ケケツ、てめえは魔族に

対する妄執が他の申子の野郎らよりもつええ理由でそこにいるんだもんなア？ 灯さ

んが認めているからこそそこに座つてられんだ。なア？ 源次？』

『……………その可愛らしい口を永遠に開かせないようにしようか？ 六花？』

『やつてみるやゴルア？ アタシはいつでも相手すんぞ？ おお？』

再び殺気がぶつかり合い、部屋の温度が少し下がったような空気になる。犬猿の仲とはこのことか。渚らと同じく三家の集まりではあるが、この二人はとにかく仲が悪い事が窺える。

もしここに使い魔ではなく本人らが同席していれば、まず間違ひなく武器を抜いてぶつかりあつてもおかしくない状況だった。

そして、灯がまた灰皿へと煙管を叩く。それも先ほどよりも強い力で。

その甲高い音にぶつかり合う殺気が一度途切れ、今度は灯の方から凄まじく冷たい殺気が放出された。

「やめい、と言つたやろ？ 灯の手を煩わす気かえ？」

『……………申し訳ありません、酉丑さん……………』

『……………悪かつたよ』

藍色の瞳がすうっと細まり、殺気と同時に不機嫌そうな雰囲気を放ち出した。こうなつてしまえばしばらくこれは消えそうにない。居心地の悪そうにしはじめる鳥に、頭

を下げたままの鷹。

そんな二羽を見つめながらとんとんと、と灰皿に煙管を叩くと、傍らに置いてある酒が満たされたグラスを手にするとぐいっと煽った。

「……もうええ。今回はこれまでや。……あれと繋がりのある奴とか調べる事と、六花、あんたが送り込んだ奴のこと、今のところはそれだけでええな？」

『はい、私も情報収集を進めてまいります』

『アタシもあいつの監視を時折しておきますよ』

「ん、それでええ」

それで話は終わりだとばかりにまた夜空を見上げ、煙管を啜えた。本来ならばまだもう少し話をしていただろうに、灯は完全に話をぶった切っていた。やれやれと言いたげな鷹ではあったが、灯が終わりだと言えばもう終わりだ。

鳥を一瞥するとそのまま粒子となって消える。それに続くように鳥も一度灯に向かつて一礼すると粒子となって消えてしまった。その姿も見送らず、灯はただ縁側に佇むだけ。

風間の忍も「失礼いたします、お嬢様」と頭を下げ、消えようとしたのだが、

「……少し待ちい」

と、彼を呼び止める。



「はっ、なんでございましょう?」

「……渚の動向、調べとき」

「は……なにか気がかりな事でもございましたか?」

どうしてここで乾渚の事を気にしたのでらうか、と忍は考える。先日渚と城の庭園で表向きは鍛錬を、その真意はお互いの鬱憤晴らしと言う名の殴り合いをしていたが、あれから特に変わった様子はなかったような気がする。

だが、

「ん……なんていうか、ね。灯の勘が囁くんや……渚の周囲がおもしろくなりそうな予感がするってな」

「はっ……左様でございますか」

こういう時の灯の勘は結構当たるものだった。ならば忍は一礼し、承諾するのみだった。

「ん。渚……あとは霧夜海のことも見張つとき。渚と繋がつとるんやから、あれもおもしろいことになりそうやないの。やからそっちにも数人もう一度回しとき」

「はっ」

それで指示は終わりだ、という風にとん、と煙管で灰皿を叩くと、忍もまた部屋から退出していく。そうして一人になった灯はただ無言で曇り空を見上げ、酒と紫煙を堪能

していく。

乾渚……幼い頃からの付き合いで、ある意味ライバル関係にある相手。

昔から何かと競い合い、どちらも家の代表としてヤマト国王の直属の部下となり、それからもまたぶつかり合った相手。

今回の一件もまたどちらがより任務に成功し、王に、国に貢献できるのかを陰で競う事になりそうだ。

そして今、灯の勘が囁いた。

すなわち、渚に新たな繋がり生まれそうだと。

霧夜海を失いかけたが、それ故に新たな繋がり生まれるのだと。

その情報を届けた風間の忍は後にどうやらあの少年によって殺されたようだが、それでも情報だけは生きて他の忍に届けられ、灯の耳にはいる事が出来た。それによれば海と空は魔族の手によって救われたらしい。

その魔族が誰かはまだ突き止めていないようだが、灯はその魔族が鍵となると睨んだのだ。

「楽しくなりそうやなあ、渚。……呼び込むんやで？ 火種を。……灯がそれに火を灯し、燃え盛らせた。一番の望みは……シユヴァルツの末裔が関わってくることやけどな？ くつくつく……！」

冷たく笑いながら灯はグラスに新しく酒を注いでいく。

一人で酒を呑み進めるのはいつもの事で、そうして何かに思いを馳せるのもいつもの事だった。その内容は大抵渚の事ばかりであり、というより普段から彼女の頭の中は渚の事ばかりだった。

「いったい誰と繋がるんやろうな？ 誰と繋がったとしても、灯を楽しませてや、渚？」

灯は……今も昔も、そしてこれからも……あんたとはええ仲でおりたいんやからな」

グラスを夜空へと掲げればカラン、と氷がグラスの中で揺れる。そのグラスの乾杯の相手はただ一人、乾渚。彼女は今回もまた自分を楽しませてくれると期待して、次は一体どのような情報をもたらしてくれるのか。

想像するとまた楽しくなってくる。

その日は日を跨いでもなお彼女は酒を呑み進めていった。

## 34話

ククモ村と言えば温泉。その日も鍛錬を行った瑠璃達は汗を流すために集会浴場に行った。坂の上にあるこの浴場はハンター達が利用する事が多いが一般客もそれなりにいる。

ハンターが多い理由は隣にギルド支部があるからであり、温泉に浸かった後にクエストに出たり、クエスト完了を告げた後にさっと温泉に入ったりする事が出来るからだ。

またこの温泉は特殊な粒子が含まれており、さっぱりするだけでなく活力を与えてくれる効果もあると言われている。

十兵衛と別れた三人は更衣室で一糸纏わぬ姿となり、浴場の中へと入っていく。ここは露天風呂でもあり、外を見れば柵の向こうに広がる広大な山々が見渡せるようになってる。

「ふう、いい湯だねえ……」

「……その言い方、なんていうか……アレよね？」

「なんだい？ 別にいいじゃないか。あたいは根っからの東方人なんだぜ？ 風呂、そ

れも温泉は結構好きなんだよ」

気持ちよさそうに温泉に浸かっている様子は完全にリラックスしている様子だった。しかも一緒に体を洗っている時から気になっていたが、彼女は本当にいいプロポーションをしている。

結構高い身長をしていると同時に女性らしい膨らみをしているし、鍛え上げた体をしているために余分な肉が付いていない。

さばさばした性格をしているが体つきは見事な大人の女性というものだ。

「……………むむ」

瑠璃もこの六年で成長したつもりだが、やはり竜魔族という長寿の影響か外見的なもののはゆっくりと成長していた。撫子の場合はこの歳で十分に女性として魅力的な外見をしていたようだが、瑠璃と茉莉はまだまだ成長途中の少女のようだった。

それでもある程度は膨らみがあるし、ウエストも引き締まっている。しかし昔から少し胸の大きさは隣にいる茉莉に負けていた。その代わりお尻の方は瑠璃の方が大きいのだが……それもなんとというかコメントしづらいものがあつた。

母親の花梨や姉の撫子のようになりたくないと願っている瑠璃は、ハンターとしての実力だけでなく体つきも目標としていた。長い時間を掛ければ近づけるだろうが、それでもこの歳であの域に達していた撫子が少し羨ましかった。

そんな瑠璃の様子に気づいた茉莉がやれやれとため息をつきながら半目で瑠璃を見る。

「おー、瑠璃はもう少し余裕を持ったらどうです?」

「……別に余裕がないわけじゃないわよ」

「ほー? そんなもの欲しそうな目で桐音さんのおっぱいを見つめて、しかも自分のおっぱいに手を当てているのに余裕がないと?」

「ちよ、直球で言うなバカあつ!」

「むむ? では桐音さんのばいおつを見つめながら自分のばいおつ……」

「言い換えればいいってもんじゃないわよツ!? つーかなによばいおつとか!」

その白い肌が赤く染まって茉莉へいつものように噛みつくのだが、それに対する茉莉の反応もいつも通りだった。表情を変えず口元に僅かな微笑を浮かべながら全く動じず、「え? じゃあメロンの方が良かった……ああ、いや、瑠璃はメロンではなく……ふむ、どのくらいでしょうかね?」と手を当てて考え込み始めた。

そんな彼女にうがーつと吼えながら両手を振り上げるも、そこで桐音が彼女の肩に手を置いて引き留める。

「仲がいいのはいいことだけどき、ここは温泉だぜ? 落ち着きなつて瑠璃。ほら、他に

客もいるんだからさ」

「む、むむ……」

確かにここは宿の風呂ではなく集団で使う露天風呂。離れた所には数人の女性客がいてちらちらと瑠璃の方を見ている。その視線に気づき、洩々と瑠璃は大人しくなつて風呂に浸かった。

それに苦笑し、桐音は風呂の縁にある岩へと背を預ける。すると浮力で浮いてきたのかその白い山が二つ頭を覗かせる。すると隣にいる瑠璃はやはり視線をちらつと動かしてそれを見てしまった。

「そんなに気になるのかい？ 別にそう気にするもんじやないとあたいは思うけどね」  
「ですよ。私達はまだまだ成長途中なんですから望みはあるのに、この姉はなんとも即物的で……」

「うっさいわ！ もういい！ この話題は終わり、終わりつたら終わりー！」  
「……だつたらそんな目で桐音さんのたゆんたゆんを見ないでいた方が……」  
「たゆんたゆん言うなっ！ 悲しくなるわっ！」

もう嫌だ、と言わんばかりに、顔を温泉に浸してぶくぶくと泡がそこから立ち上つて弾ける。そんな彼女をどこか楽しげな視線で見つめる茉莉はいつも通りだが、桐音もまた同じような視線をしていた。

「どうです？ 可愛いでしょう？ うちの姉は」

「そうだねえ……なるほど、茉莉の気持ちが変わってきたよ。これは……実に楽しいねえ」

「ふっふっふ、また一人、志を同じくする仲間が増えました」

ぶくぶくと弾ける泡の上で二人の手ががっしりと握りしめられる。ここに一つの同志が生まれたのだが、それを断ち切るように瑠璃が勢いよく顔を上げて息を吸いこみ、同時に結ばれた手を強制的に断ち切った。

「妙な結束を作んなあッ!」

あの日リオ亜種夫婦の討伐クエストを達成し、ユクモ村へと戻ってきた四人は溪流で一泊し、ユクモ村へと戻っていった。酒場へと向かって報告すると、そこにあの迅雷と名乗った青年が現れる。

依頼主である彼がクエスト達成の報を聞くと、ふむ、と小さく頷きながら四人を見回した。まるで値踏みするかのような視線であり、その視線で見つめられたことで瑠璃が少し不快感を見せるような視線で迅雷を睨み付ける。

「ご苦労だった。そら、報酬金だ」

だがその視線を気にした様子もなく懐から金が入った袋を取り出してカウンターに置いた。まるでどうでもよさそうな言い方に瑠璃の感情が少し弾けた。



一歩前に出ると高身長な彼を睨み上げて口を開く。

「ちよつと、何よその言い方は？ そんなにあたし達がこれを達成したのが気に食わない訳？ 本来頼む相手じゃないから!」

「……………ふん、それは一応あるな、娘っ子」

瑠璃の言葉を否定せず、しかし動じずに彼は腕を組んで続ける。

「気に食わないというより、お前達の実力がやはり低いと感じたのだ」

「な……………つ、どういうことよ!」

「あの亜種のつがいを相手によく戦って勝利した、と思っっているようだが？ ぬるいな、

お前達はどういうつもりかは知らぬが、上位の世界に完全に飛び込んでいるわけではな

いらしい。その装備もそれを示しているようだしな？ その体や装備の傷の具合…………

まあまあ立ち回れた、という風か？」

「くう……………っ!」

見下したような視線が瑠璃と茉莉を貫いていた。なにせ彼女らの装備は強化してい

るとはいえまだ下位の物。言い返せるものではなかった。

しかしそれでも自分達は戦った。戦って、協力して、勝利を掴んだのだ。その事実は

変わらない。それをも否定されるわけにはいかなかった。

「ハンターでもないあんたに言われたくはないわ!」

「……はっ、確かに己はハンターではないが、武人にして狩人だ。向かってきた竜を返り討ちにした過去はあるぞ？」

その言葉に瑠璃だけではなく茉莉、桐音も反応する。

迅雷からはただ者ではない気迫を感じていたが、今の言葉は聞き捨てならなかった。武人のくせに竜を討伐した事がある、なんて信じられない。そんな事が出来るのは一握りの武人だけだ。

「信じる信じないは自由だがな。……だが己からすればお前達はまだまだという事よ。白銀昂らには到底届かん」

「……どうしてそこまでその人達に固執するんですかね？」

そこで茉莉が前に出てきてじつと迅雷を見上げた。気の抜けたような半目に近いその瞳で迅雷のいかつい顔を見据える。その僅かな表情変化も見逃さない、といわんばかりの視線で睨まれているのだが、迅雷はやはり動揺する事がない。

「前に言ったはずだ。優秀なハンターは表に出す。貴様らとて知っておろう？ 今東方で起きている出来事を。蛇竜どもの活性、リオのつがいの増加。これらと問題なく戦えるハンターは誰もが望む事」

「……そうですね。でも、だからって隠れ住む人たちを呼び出そうって言うんですかね？」

「随分と肩を持つな。だが貴様達とて望んでいるのではないか？　白銀昴らの存命を、再び活躍する日々を」

「……………」

無言になってしまふ茉莉を見下ろし、はつと鼻で笑つて迅雷は数歩離れていく。向かつた先は依頼書が貼られているクエストボードだ。ここには現在募集されているクエストが貼られており、彼はそのボードをとんとんと叩いてやる。

「見ろ、現在これだけクエストが回り、その中にはあのつがいのクエストも少なからずある。だがここにいるハンターの数はその数に足りない。受注できる輩は少なく、その分だけクエストが回る時間も減る。しかし、優秀なハンターがいればそれはなくなる。

……達成する時間が短縮され、その分だけ救われる者らがいる。そうだろうか？」

「……………そうですね」

「そのハンターの中に白銀昴らを加える事のどこに非があるのか？　否、あるはずもなし。今こそ再びあの者らが活躍する機会が訪れたのだ。己はそのきっかけを生み出そうとしているだけに過ぎん。責められるいわれはないな」

「それに他意はないんですね？」

「また同じことを訊くな、娘っ子。貴様は何をそんなに警戒する？」

クエストボードを背に、じつと迅雷は茉莉を見据えた。彼もまた彼女の表情の変化を

見逃さず、その表情の奥にある感情を計ろうとしていた。大方の予想は付いているようだが、それを口には出さず、ただ彼女の言葉を待っている。

そして茉莉はしばらく無言でいたが、ぐつと拳を握りしめて口を開く。

「抹殺ですよ。彼らを、特に黒崎優羅さんを抹殺するのではないかと疑っているんですよ」

「……クック、直球だな、娘っ子。だがそれは嫌いではない」

首を少し傾げながらも彼はくつくつと肩を小さく揺らしながら笑って見せる。どこか面白そうに、それでいて茉莉の事が興味深そうだと感じながらじつと彼女を見下ろし、そして一度頷いて酒場の出入り口へと向かって歩き出した。

待て、と言いたげな彼女の口を閉ざすように振り返らず右手を挙げ、続けて指を一本立てる。

「よかろう。またここに来よう。……その時は恐らく己はもう一つ依頼書を持っている事だろう」

「……? どういう事です?」

「それを達成させてみる。それも、貴様ら姉妹のみで、だ。そこにいる女と男、それだけではない、他のハンターの力を借りず、姉妹の実力のみで達成させるのだ。そうすれば、認めてやろう。貴様らが優秀なハンターである事を。さすれば、己は白銀昴らを探し出

す、なんてことはしないでおいでやる」

「ちよつと、なに勝手なことばかり言ってるのよ!? あんた、何様のつもり!」

先ほどから自分のペースで語り続ける迅雷に、いよいよ我慢が出来なくなってしまうようだ。瑠璃がはずかすかと迅雷に近づきながら怒鳴るが、しかし彼は振り返りながら瑠璃の眼前へと立てた指を突き出す。

瞬間、指先からバチツ、と電気が弾け、瑠璃の額にかかっている前髪が震えた。続けてその刺激にたまらず瑠璃の口が閉ざされ、反射的に目を閉じてしまう。

「騒ぐな、娘っ子。これは貴様らにとつても悪くない話だぞ?」

「……どういう事ですかね?」

「ふん、貴様らの実力を改めて証明出来る機会だ。この世の中だ、ここで実力を知らしめることが出来れば、その名を聞いて現れるやもしれないぞ? 貴様らが求める人物が、な」

その言葉に二人は息を呑んだ。

東方は現在奇妙な動きが目立っている。だからこそ二人はより昴達の居所を掴み、彼らの安全を知りたかった。苦労はしていないだろうか、無事であるだろうか、また稽古をつけてくれるだろうか……様々な感情があり、それが探し出す原動力となっていた。

いつまで経っても情報が入手できず、東方を巡って四年。それでもなお探し続けるの

はそういう根本があつたからだ。

だからこそ自分達以外の何者かが、迅雷と言う得体の知れない人物が彼らを探すと聞いて警戒せずにはいられない。彼がシュヴァルツの末裔を殺そうとしていないという根拠が見えないからだ。

だというのに、彼から返つてきた言葉。

自分達が功績を挙げれば白銀昴らから姿を見せる？

そんな馬鹿な、と言いつ返したい。ずっと隠れ続けていたのにどうして二人の名が挙がつただけで出てくるというのか。馬鹿げている。

「それに強さを示すために今以上に腕を上げるきつかけにもなろう。この先起こりうることは並大抵の実力ではやっていけない。志半ばであつて死にたくはなからう？

……貴様らにも目標はあるだろう？ 大方あれらの事件にも関わっていくんだらう、

娘っ子？」

「……く、どうして……」

知っているのか、と問いたい。しかし迅雷の眼力が言葉を封じてくる。

まるで自分達の事は結構知っていますよ、とでも言いたげな青い瞳。それに睨まれて瑠璃は言葉に詰まり、そんな彼女の肩を掴んで下からせる茉莉。

「あなた、何者なんですかね？ いったい、何を知っているんですかね？」と真つ直ぐ

に睨み返しながら茉莉は問う。視線だけでなく問いかけもストレート。それに迅雷はにやりと笑みを浮かべ、「クック、これまた真つ直ぐに斬りこんできたな、やはり嫌いだはない」といたくご機嫌な様子だった。

「何者か、と問われれば、己は東方を巡るしがない流浪人、迅雷と名乗るのみ。武人にして狩人、しかしハンターではない。その違いははっきりと告げておこう。そして何を知っているのか。それはある程度の事象のみ、と答えておこうか」

「といたしますと？」

「そうだな、例えば——」

そこで一間を置き、ぐつと身を屈めて茉莉の眼前まで顔を近づけ、その青い瞳で彼女の碧眼を真つ直ぐに見据えたうえでこう囁きかけるのだ。

「——貴様らが魔族ではなく竜魔族だ、という事とか、な？」と宣言しつつ、にやりと笑みを浮かべながら顔を離れた。何故わかったのか、と疑問に思えば、彼はそつと目と鼻を示しながら背を向けて去っていく。

「次に会う時まで腕を磨いておけよ、娘っ子ども。敵は——貴様らを情け容赦なく叩き潰してくれらるだろうよ」

と楽しげに笑いながら扉を開けて外へと出ていった。その際茉莉の目は一つの影を捉えていた。

彼が纏う氣迫の向こうに、荒々しく昂る雷撃を帯びた何かの影を。

そんな事があつたな、と思い返しながら茉莉はぼうつと柵の向こうに広がる山々を見つめていた。あの日から数日、瑠璃達は原種のつがいや他の飛竜のクエストをこなし、時に今日のように鍛錬をして過ごしていた。

金を稼ぎ、経験を積み、素材を集める日々。おかげであの時入手した素材を使って二人はようやくやくといった具合で上位装備を身に包む事が出来た。

予定通り瑠璃はリオソウルシリーズ、茉莉はリオハートシリーズを作り上げることに成功。以前纏っていた装備以上の防御力を手にし、上位クエストでも今まで以上の動きをする事が出来るようになった。

すなわち攻められるようになった。

今までならば一撃受けないように慎重になり、それが精神的な負担にもなつてきこなくなつた部分もあつたろうが、それがなくなつたのは大きい。

この攻撃でも大丈夫、と余裕を持ちつつ回避、防御体勢を取りつつ見極められる。引くか、攻めるかの選択肢が生まれる事で二人の動きが少し変化する事が出来たのだ。

また少し上に行く事が出来る。

だがそれは同時に自分達の名も少しづつ上がつていく事にもなる。魔族の双子とし



ての名はある程度知られているが、まだ竜魔族だという稀有な存在だという事は知られていない。

余計なトラブルは今のところはなかった。

(あの人はまだ現れない……今はまだその時ではないという事ですかね)

迅雷の姿はあれから一向に現れなかった。次に会う時はクエストを持ってくると言っていたが、あれから一週間。まだ音沙汰はない。

(それにしてもあの時感じたもの……私の感覚が教えてくれたことが正しければそういうことになってしまいますが……考えられなくもないですかね。実際撫子姉さんたちのお知り合いがそうだったという例がありますし)

去り際に見えた覇気の奥に見えた影。あれが茉莉の脳裏にちらついているのは消えていく。どうしてあれが見えてしまったのかを考えれば、やはり間近で彼の青い瞳を見てしまい、それによって一瞬ではあるが繋がってしまったのかもしれない。

お互いの気が同調し、繋がった事で見えたのだろう。となれば彼はそうなる事を見越した上で近づいてきたという事になる。そんなに気に入られてしまったのだろうか、と考えたところで、新たな客が入ってきた。

ちらつと肩越しに振り返ってみると、そこには一人の女性がタオルを体に当てながら静かに入ってくる場所だった。

肩を越えたところでぎつくらばんに切りそろえられた黒髪。タオルに隠されているが控えめでスレンダーな体つきをしている白い肌。その歩き方を見ているとその道の心得があるかのようなだが、かなり足音を抑えている。まるで自分の存在を隠してしまおうという意志があるかのようなようだ。

何よりその顔付き。東方人のようだが、少し周りの東方人とは差異があつた。

(華国の人ですかね？ 珍しい)

北に広がる国、華国に住まう人々の特徴が顔つきに現れていた。彼女は静かに浴場へと入ると体を洗うために一つの鏡の前へと向かつていく。そんな風に見ていると、桐音が「ん？ どした？」と茉莉に視線を向け、続けて茉莉が見ている人物へと視線を向ける。

すると桐音は少し驚いた顔で腕を岩に付けて振り返つた。

「おう、そこにいるのはもしかして蓮華か？」

「……………」

桐音の呼びかけに彼女は誰だ？ というかのような反応を見せながら振り返つてきた。そして手を振つてきている桐音に気づくと、その黒い瞳に僅かな驚きの色を浮かべながらぺこりと頭を下げてきた。

そうして三人に加えて新たな人物が風呂に体を浸からせる。桐音の隣にいる女性は

なかなか物静かで落ち着きのある人物だった。茉莉と同じような人か、と瑠璃が軽快したが、茉莉とはまた違った物静かさだ。

茉莉と同じく表情の変化は乏しいが、茉莉はそれだけであり結構おしやべりなどところがある。しかしこの女性は表情の変化がないだけでなくあまり口を開かないようだ。

「紹介しよう。あたいの知り合いのハンターの楊蓮華だ」

「初めまして」

「あ、ども……あたしは瑠璃・フレアウイング。こっちは妹の茉莉」

「どうも、よろしくですよ」

ペーリと頭を下げ合い、自己紹介をすると瑠璃は首を傾げて「華人よね？」と問いかける。それに対し彼女は、

「いえ、血筋が華人というだけです。出身はヤマト国の辺境。私と行動を共にしている彼が生粋の華人ですよ」

「となると飛燕は向こうの湯にいるってことか」

「ええ」

どうやら連れがいるらしい。その人物は劉飛燕リウフェイエンというらしく、ハンターの同業者との事だった。

だがそれにしても珍しいのは変わりない。華人は華国の中で活動するのがほとんど

であり、あまり国の外に出る事がない。華国の領土がかなり広く、東方の中でも東西に広がる領土となっており、自然豊かな土地だからだ。

北と西に行けば雪国が、南に行けば砂漠が、東に行けば海が……と様々であり、ハンター達は大抵この大国の中で活動している。

そのため華国以外で華人を見る事はあまりなく、あつたとしても昔華国から出てきた人達の血筋という話だ。目の前にいる楊蓮華がその一例だろう。

「なんだってこんなところにいるんだ？ 確かモガが活動場所じゃなかったかい？」

「少しモガから離れて活動を。その帰る途中で一度ユクモの風呂を堪能しようという事で」

「なるほどねえ。ま、元氣そうで何よりだよ」

「あなたも」

話を聞く限りでは彼女ともう一人のハンターはモガの村を活動拠点にしているらしい。しばらく村を離れて遠征に出ていたらしいが、もう少しして帰るといふ。その途中でこのユクモの村に立ち寄り、名物である温泉を堪能しに来たと言ふようだ。

二人がいない間モガの村はどうなっているのかといえば、どうやらあそこにはあと二人のハンターが滞在しているらしい。また一匹の奇面族が滞在しており、それもまた戦力となつてくれているようだ。

「奇面族？ それってチャチャブーって事？」

「ええ。きめえ奴、という訳ではないですよ。それに子供ですし危険はないです」  
「……………きめえって……………」

真顔で見た目に反した言葉を目の前で使われて瑠璃は少したじたじになっている。しかし当の本人は「おや？ なにかおかしかったですか？」とまた真顔で首を傾げている。

いや、なんでもないと首を振ると「そう」と頷き、おもむろにある一点を指さした。一体どうしたのか、とその方へと振り返れば――

「ンバンバつ、これが温泉というものかンバ！ なかなかホットな空間バー！」

――と、一匹の奇面族が入ってくるところだった。周囲は驚いた表情を浮かべているが、それは武器を手にしておらず、タオルを手にして好奇心を隠せず辺りを見回しながら中へとやってくる。

そして蓮華に気づくと、「おお、そこにいたンバ！ ワガハイを置いてさっさと入るなんてひどいッンバ！」と、とてとてと可愛らしく駆け寄ってくる。

「……………ええ？」

「おー、これはなかなか」

「こつちも久しぶりだな、カヤンバ」

瑠璃は驚き言葉を失い、茉莉は興味深そうにそれを見つめ、桐音は久しぶりに会ったらしく懐かしんでいる。

それはヤシの実とカニの爪を取り付け、全体的に青く塗った仮面を被った奇面族の子供だった。可愛らしい声をしており、温泉へと飛び込めばその熱さに一度驚いたようだが、それでも何とかその気持ちよさに慣れようと浸かっている。

「カヤンバ、ご挨拶を」

「ダ。グッドモーニングンバ。いや、そろそろグッドアフタヌーンンバ？ ま、いいか。気にする事はないンバ。ワガハイはカヤンバというンバ。蓮華たちと一緒にハントーとして戦っているンバ！」

「ふむふむ、オトモアイルーみたいなものですかね？」

「ええ、そういうものです。見た目に反してなかなかの実力ですので、頼りになりますよ」

ぽんぽん、とカニ爪の仮面を叩きながら表情を全く変えずに話す彼女。叩かれるたびに「ンバツ、ンバツ!？」とカヤンバが悲鳴を上げているような気がするのだが、もしかして叩く力を間違えていないだろうか？

しかし彼女はそのまま話し続けている。

「この子達は仮面によって発揮する力が異なり、また踊りによって支援もしてくれるの

ですよ。オトモアイルーとはまた違った助力ですね。猫の手ではなく小人の手を借りる狩りをしています」

「……………え？」

「……………いえ、なんでもありませんよ」

わざわざそこを強調しながら喋っていたようだが、瑠璃からすればきよんとするしかない。茉莉は無言を守り、桐音はああ、またか……………といった風な表情を浮かべながら苦笑している。

もしかしてこの人、見た目に反して少し愉快な人物なのだろうか？

様子を窺うように瑠璃がじつと蓮華の顔を窺い、茉莉も首を傾げながらどういう人物なのかを把握しようとしていた。

「まあ、この人は見た目はクールだとか、落ち着きがあるとか、そういう感じしているけど、内面はなかなか愉快でおもしろいぜ？ ……謎な雰囲気だけだな」

「そのようですね。……………この温泉、どうです？ なかなかいいと思えますが」

「いい風呂ですね。まさに風呂ンティアといったところでしょうか」

「なるほど、本当に愉快な人ですね」

「……………おや、間違えてしまいましたか？ 東方人は風呂好きで温泉というものは楽園の

ようだと聞きました」

「いや、樂園はパラダイス、フロンティアは新天地ですが……」

真顔で説明する蓮華に少し苦笑しながら茉莉が訂正していく。どうやら少しズレたところがあるらしい。今までこういう人は出会わなかったから少し新鮮だ。

そんな事を考えていると、「ダバダっ！ 蓮華、少し押し付けすぎンバ！ ワガハイ、ヒートしすぎて頭がボーっとしてきたンバ！」と今までぼんぼん叩かれていたカヤンバが両手を挙げて抗議してくる。

「おっと、すみませんね。茹で蟹になってしまいましたか？」と手を離し、「ンバツ!? カニは仮面だけンバ！ ワガハイは違うツンバ！」とぼかぼかと叩いていく。結構仲がよさそうな様子である。

それからはぼつぼつと話を交わし、共に温泉を堪能する事になった。

気づけば長風呂になってしまい、温泉から出てきたのはそれから数十分も後になってしまった。とはいえ女性は結構風呂が長いというのでそう気にする事もないだろう。

カウンターでドリンクを頼み、並んでドリンクを飲み干していった。

そうしていると、向こうでうちわを片手に酒を呑み進めている十兵衛を発見。骸の仮面を付けている人物がああして浴衣姿で佇んでいるのもなかなか奇妙だ。

「……あ、どうも。お疲れ様ツス」

「おう、十兵衛。待たせたか？」



「いや、そんなに待つてないツス。大丈夫ツス。……それで、そちらの人は？」

「ああ、あたいのちよつとした知り合いだよ。偶然風呂で再会したのさ」

「初めまして。楊蓮華です」

ペこりと頭を下げる蓮華に続き、彼女の足元にいたカヤンバも自己紹介する。それに十兵衛も慌てて立ち上がり、ペこぺこと頭を下げながら「あ、ども……萩原十兵衛ツス」と名乗る。

初対面という事でまた人見知りの一面が現れたようだ。

そんな彼に対し蓮華は表情を変えずにもう一度ペこりと頭を下げるのみ。どうやら十兵衛のこの仮面に対して特に反応する事はないらしい。

すると向こうから一人の男性が首にタオルを掛けながらやってきた。糸目に近い目つきをしており、顔立ちからして華人と思われる。もしかすると彼が……、

「む、来たかね。蓮華……むむ？　そこにいるのはもしや桐音かね？」

「よう、飛燕。久しぶり」

「やつぱり桐音かね。久しぶりだね、元気にしてたかね？」

髭を少し生やした三十代近くの男性だった。ハンターをやっているだけあって歩きに隙が見当たらず、体つきも悪くない。雰囲気からして人間であり、しかし歳から推察して長く戦いに身を置いているだけあって洗練された気迫を感じた。

先ほど聞いた限りでは蓮華は二十三歳とのことだが、少し歳の差があるコンビだな、と感じる茉莉だった。とはいえ飛燕の歳は外見からの推察ではあるが。

「こんな所で会うとは奇遇だね。今はここを拠点としているのかネ？」

「ああ。こいつらとチームを組んでんだ」

「どうも、初めまして」

茉莉が頭を下げ、自己紹介をしていく。それに頷き少しだけその糸目を開いてじつと瑠璃や茉莉の事を見つめると、「なるほど、なかなか秘められた力を持っているようだね」と呟いた。

口髭を軽く撫でつけながらうんうん、と頷き、続けて十兵衛の方へと視線を向け、首を傾げる。そのままじつと彼を見つめて「……ふむ？」と首をもう一度傾げたが特に何も言わずに蓮華へと向き直る。

「さて、わたし達はそろそろモガへと帰ろうかね」

「はい。では失礼します」

頭を下げた蓮華が懐に手を入れると、そこから黒縁で細長いレンズをした眼鏡を取り出し、静かに顔に掛けた。きらり、とレンズが光り、しかも眼鏡を掛けた事で蓮華の魅力が増したように思える。

「……ああ、私は普段これを掛けていますよ。結構これ、私のお気に入りなのです

「よ」

「なるほど。もしかして眼鏡には？」

「目がねえですね」

やはりそういうキャラらしい。もう誰もが突っ込みを入れないのはあまりにも寒いからだろうか。仮面に隠れてわからないが、十兵衛も呆然としている様子だ。見た目が美人だというのに口から飛び出すのは寒いダジャレ。あまりのギャップに戸惑っているらしい。

「また機会が会おうぜ、お二人さん」

「はい」

「次に会えたらまた共に狩りをしようネ」

「ンバ、ワガハイのネームをしつかりと覚えておくンバ！」

そんな三人とはここで分かれる事になる。元々彼らは温泉に浸かりに来ただけで長居する気はなかったようだ。静かに去っていく彼らを見送ると、四人は一度酒場へと向かい、クエストボードへと足を運んだ。

その中で上位クエストが集まっているボードの内容を見回してみると、一つ異彩を放つクエストがあった。

神速の猟技。

対象：ナルガクルガ、ナルガクルガ亜種の討伐。

場所：溪流。

不安定。

これを見つけたのは桐音だった。内容からして結構な難易度だろうと判断するが、しかしこういうものがこのユクモ村に流れてくるとは思いもしなかった。

しかしこれはいい機会でもあるんじゃないだろうか。瑠璃が持っているヒドウンサーベルの強化に使えそうだし、相手として不足はないだろう。経験を積むには十分な敵だ。

二人も上位装備に新調してからそれなりに戦っているので慣れてきている頃合いだ。

これに手を出しても問題ないだろう。

そう思い桐音はそれを手にして三人の下へと向かっていった。

「これでもどうだい？」

「どれどれ？ ……ナルガとナルガ亜種？ 二頭討伐に不安定、か。なかなかのクエストね」

「相手にとって不足はないですね。それに素材さえ揃えば、ヒドウンサーベルが一気に夜刀【月影】まで行けるんじゃないんですか？ 確かこっちの加工なら上位素材でも夜刀【月影】になれた気がします」

「……ああ、確かドンドルマ方面とは違ったんだっけ。ユクモ独特の加工技術で夜刀【月影】になるんだったかしら。じゃあちようどいいじゃない」

武器の加工は大方同じではあるが、場所によつては武器派生が異なっている場合がある。中央ならばG級武器である夜刀【月影】ではあるが、ここでは上位素材で作る事が可能だ。その分威力が若干落ちてはいるが、高い切れ味は誇れる。

無属性の太刀の中でもよく親しまれている武器と言えよう。

作る事が出来たならば、瑠璃は防具だけでなく武器も大きく成長する。茉莉は既にインペリアルガーダーを強化させ、古代式回転銃槍へと進化を果たしている。

それに続きたいところだった。

「で、どうだい？ やるかい？」

「あたしに異議はないわ」

「私も同じくです」

「おいらも特になしッス」

三人とも異を唱えず、ここにクエストが受理される。

敵はナルガクルガ、ナルガクルガ亜種。

森を高速で移動する狩人であり、多くのハンターにとって敵しい相手であると同時に、武具の性能上ハンターによく相手にされる飛竜種でもある。一部では熱狂的なナルガ

ファンがいるとかいないとか言われているほど、今では色んな意味でハンター達に愛されているらしいが、瑠璃にとつてもわからない話でもなかった。

何にせよ久しぶりのナルガクルガ戦と言う事で瑠璃と茉莉も気合が入るといふもの。

四人はカウンターに依頼書を提出すると準備をするために宿へと向かっていった。

## 35話

宿屋に向かうために集会浴場を出て階段を下りていくと、広場に見覚えのある人物がいる事に気づいた。スキンヘッドの筋肉質のある男性であり、傍らには二匹のアイルがいる。

階段を下りて広場に出ると、どうやら向こうも瑠璃達に気づいたようで「よう！」と気さくに手を挙げて声を掛けてきた。

「元気にしてたか、嬢ちゃんたち？」

「おう、何とかな。榊さんもなんかのクエストやってたのか？　なんか数日離れていたようだけど」

「おうよ、希少種のつがいのクエストをやってきたのよ。嬢ちゃんらがあのあんちゃんが持つてきたクエストに出た後にな、ワシの知り合いが協力を求めてきたんでな。ちよつくら行ってきたのよ」

「希少種!?　希少種まで出てきたわけ……?」

榊の言葉に瑠璃は驚きを隠せない。リオ夫婦は原種と亜種が確認されているとは聞

いていたが、まさか希少種まで出てくるとは思わなかった。しかもこの様子だと討伐に成功してきたとみえる。

希少種となればかなり厳しい相手になるだろうに、苦戦してきました、という雰囲気あまり感じられない。普通に戦って狩ってきたのだろう。なかなかの実力者という事は聞いていたが、助力を求めた知り合いもまた同様に強いのだろうか。気になるところである。

「おうよ、結構いい戦いを繰り広げられたわい。新たなハンターとも知り合えたしのうち」  
「へえ、そうなのかい？ それは何よりじゃないか」

「かつかつか！ いい出会いというものは心躍るわい！」  
「おやつさん、うるさいにや。こんなところでテンション上げるんじゃないにや」

アイルールの椿がペしペしと榎の腰を叩きながら注意をしている。確かにテンションが上がった彼の声は広場によく通る。ちらちらと彼の方へと視線を向けている人も多く、椿だけでなく瑠璃も困ったような表情を浮かべている。

このまま話しつづければ注目は浴びっぱなしだ。それに自分達は用事がある。ここは話を切り上げるべきだと桐音が済まなそうにしながら宿屋を親指で示した。

「ああ、積もる話もあるだろうけど、あたいらこれからクエストに行くんで、これで失礼するぜ」



「む？　そうか。　頑張つてこいよー」

榊の笑顔に見送られ、瑠璃達は宿屋へと向かつていく。瑠璃は目礼し、茉莉はぺこりと頭を下げ、十兵衛はちらちらと榊やアイルーらを見やりつつ、ぺこぺこ頭を下げて離れていった。

それを見送り、榊らも「よし、ワシらも温泉を堪能するとしようかの」とごきげんな様子で階段を上がつていく。彼らは今さつきユクモ村に帰つてきたところであり、帰つてきてから早々に名物の風呂で疲れを癒そうとしていたのだ。

その途中で後ろから見覚えのある二人が階段を上つてくるのを見つける。

「む？　そこにいるのは桜嬢ちゃんに小梅嬢ちゃんか？」

「ん？　ああ、榊さんか。　久々」

「あ、榊のおっちゃん」

そこにいたのは東方人の母娘だった。背中近くまで伸びる黒髪をツーサイドアップにした母親と、その手に引かれて階段をえつちらおつちら上つてくる母親似の幼い娘だ。彼女は黒い髪をショートにしている。

どちらも少し気の強そうな碧眼をしており、お揃いの青い和服を身に包んでいる。

芙蓉桜とその娘小梅という母娘であり、時折ユクモ村にやってきては買い物をして風呂に浸かつてくるので顔見知りの関係にあった。

「嬢ちゃんらも風呂かい？」

「ま、ね。ユクモに来たなら温泉に入らないと。それにウメも風呂好きだしね」

「おう、オレはここのおんせん、好きだぜっ！ さつきもおかんとかいもんして、たたかっつてたからさっぱりするんだ！」

八重歯を見せながらにかつと笑い、手をつないでいない手をぐつと振り上げる。見た目通り快活そうな少女だった。子供ながらの元気さと性格がよく表れている。

とはいえこんな所でバランスを崩せば危ないので桜がしつかりと手を握り、ぐつと引き上げて腰に手を回し、肩車をしてやった。

「はいはい、危ないからおとなしくしてなさい」

「はーい」

とんとん、と腰を叩きながら軽くたしなめるも、小梅はまだ元気が有り余っている様子だった。それにしても慣れているとはいえこの歳の子供は結構重いはず。女性である桜が片手で抱え上げて肩車とは、と神はじつと桜を見つめる。

確か以前自己紹介をしあつた際、桜は武術の心得があると言っていた。そして娘も強くなりたいたと望んでいるため彼女は時折鍛えてやっていると聞いている。

見た目でも隙がないように見えるし、かなりの場数を踏んでいると見ているが、それだけではない何かも感じられる。気のせいではないと思うのだが、それを口に出すのは

野暮というものか。

「じゃあ一緒に上がっていいこうか、桜嬢ちゃん」

「ん、はやいとこさつぱり——ん？ ちよつとごめん」

懐に手を入れたかと思うと、そのまま階段を少し小走りに降りていき、道の外れへと向かつていった。そのまま札を取り出し、耳に当てて「はい、桜」と応対した。どうやら連絡が入ったらしい。

これは邪魔をしないでおこう、と「ワシらは先に入つとくわい。じゃあの」と手を振つて階段を上がつていく。「またなーおつちゃん！」と桜に肩車をされたまま小梅が手を振り、桜も肩越しに振り返つて軽く手を振つて返す。

「なんかあつた？ ……ん？ 客？ へえ、誰？」

そうして彼女は札の向こうから返つてきた人物名に少し驚いたように目を見開き、そうして今度は青い瞳を細めて薄く微笑を浮かべ始めた。そんな母親の様子に小梅が身を屈めて「おかん、どしたの？ なんかいいことあつたん？」と上から顔を覗き込んでいく。

「……まあね。久しぶりのお客が来るつてさ」

「へえ、だれだれ？」

それに少し待て、というように手を挙げ、そうして札の向こうから返ってくる言葉に

耳を傾ける。「……へえ、あの人が来るんだ。これは早いところ帰った方がいい？

……あ、でも風呂でさっぱりした方がいいか」と結論付けて集会浴場を見上げる。

「じゃあ早いところ汗を流して戻るわ。……うん、うん、また後で」

「なあなあおかん、だれが来るんだよ〜？」

「まあ、待ちなさいウメ。今は風呂に入って汗を流すのが先よ。でないとおの人に失礼

だからさ」

「ほーい」

札を懐にしまって階段を上っていくと小梅がりようかーいという風に右手を振り上げた。

そんな母娘二人が仲良さそうに集会浴場へと入っていく中で、宿屋から準備が整った瑠璃達が出てくる。

そのまま村の出入り口へと向かい、竜小屋でアプトルと竜車を借りて狩場となっている溪流へと向かっていった。

数時間かけて狩場となっている溪流へと辿り着いた一行。早速ベースキャンプを整え、支給品ボックスを竜車から出して中身を確認していく事にする。

とはいえ今回は上位クエストのため基本となっている地図とたいまつぐらいしか入っていない。近場の村にあるギルド支部に連絡がいつているので後から運ばれてく

る可能性があるだろう。しかしそれも狩場が不安定のため現実ではないのが難点だが、それが上位以上のクエストの特徴だ。

続けて四人の装備の確認だ。

瑠璃はリオソウルシリーズに火竜剣「火燐」を手にする。ナルガクルガは原種も亜種も火属性がある程度有効になっている。そのためこちらを選択する事になった。

茉莉はリオハートシリーズに古代式回転銃槍を手にする。これにより先日インペリアルガーダーから強化してからの古代式回転銃槍のデビュークエストとなる。

桐音はガンキンSシリーズにブルーウイングという大剣を取り出した。これは蒼火竜リオソウルの素材を使って作り上げられた火属性の大剣であり、どうやら以前から持っている一振りらしい。

最後に十兵衛が頭はスカルスヘッド、残りをディアブロUシリーズで統一し、武器は雷砲ラギアブリッツだ。これは海竜ラギアクルスの素材を使用して作られた上位のヘビィボウガンだ。

ベルトリンク対応弾は通常弾Lv2と電撃弾となっており、後者は雷属性の弾を射出する。ナルガクルガには火属性よりも雷属性の方がよく効くため、炎戈銃ブレイズヘルではなくこちらを選択したらしい。

十兵衛がローブからベルトを取り出し、それぞれ体に装着すると準備完了。

四人は一つの地図に顔を寄せ合って方針を決めることにした。

「さて、今回は溪流ですが……狩場は不安定。前回のようには思わぬ乱入があるかもしれないですね」

「グレイハブは戦う事はなかったけど、今回もそうあってほしいものね」

「同感ツス。ガンナーのおいらは余分な弾を消費したくないツスから」

ガンナー、それもボウガン使いは弾を消費して攻撃する。通常弾Lv1はそれ自体が複製の魔法を保有しているためほぼ無限に撃てるのだが、一番威力が低いのが難点だ。また持ちこめる弾もギルドが制限している上に、現地調査して増やせる弾もまた限りがある。

十兵衛が言うように弾は有効に使いたい。余分に消費して戦力から外れるのは望ましくなかった。

そして敵はナルガクルガ。

原種も亜種も森の中を素早く移動するのが特徴であり、その速さについていけなければ奴らに狩られるのみである。

「今回も二手にわかれるんです？」

「そうだね……今回は瑠璃と茉莉、あたいと十兵衛でわかれてみようか」

「了解です。向かう方向は私達が北でよろしいですかね？」

「ああ、それでいこう。じゃどっちかが見つければ信号弾で報せるという事で」

大まかな方針は以前のリオ亜種夫婦の時と変わらない。二手に分かれて原種化亜種を捜索し、見つけ出せれば片方を一気に叩いて体力を減らしていく。良ければ討伐へと持っていく。

二頭討伐ならば片方を落とすだけでも十分楽になれるからだ。

信号弾を各々一つずつポーチに入れ、一行はエリアーでわかれて溪流へと足を踏み入れていった。

溪流へと近づく影はもう一つあった。軽快な足取りで森を駆け抜け、高い場所へとやってくる。その中にある木へと登って眼下に広がる森を見回していく。

「ナルガクルガ、か。いいねえ……嬉しいねえ……玉はないけど天鱗が出れば儲けものか」

鋭く細められた碧眼はあたかも獲物を狙う獣のよう。研ぎ澄まされた気で森に巣食うハンターの気配を察知し、どこにいるかを探そうとしたのだが、そこで首を傾げる。

「人がいるか……まためんどろなことになるそうだねえ。ま、また殺せばいいか。邪魔者は全員殺す、それでいいさ」

そう結論付けようとしたところで、その人物はある気配を察知し、一瞬驚いたような

表情を浮かべた。そのままその気を探り、そうしてその口元に喜悦か、あるいは狂気か、はたまたそれ以外の何かの感情を映し出す笑みを浮かべた。

「おやおやおやあー……? これはこれは懐かしいような、会いたくないような気配? なんだってこんなところで巡り合わねばならんのか、驚きだねえ? ふむう……どうするか」

吹き抜ける風に身を任せながら顎を撫でつけ、しばらく思案を進めていく。この気配がもし想像している通りならば少し考えなければならなくなつた。彼女としては自分に会いたくて会いたくて——そして殺したくてたまらないだろう。

それは自分もちよつとは思っている。

あの人とはいずれ殺し合いをするだろう。でもそれは今なのか、まだその時ではないのか。

そう迷つてしまうのだが、好奇心が生まれているのも事実。

すなわち——自分は強くなつたのか、あるいはあの人は強くなつたのだろうか、という好奇心。

試したい自分がある。

戦つてみたい自分がある。

身体がうすぐ。



興奮して心が躍る。

頬が紅潮して息が荒くなる。

「……嗚呼、やべえなあ……熱くなるなあ……ダメだわ。逢いたいねえ、これはまさに恋い焦がれる女々しい野郎じゃないか。その相手が——姉貴というのもどうかと自分でも思うけどさ、仕方がない。一目、見てみようじゃないか。どれだけのものになったのか、さ」

うん、と頷きながら笑みを深くし、彼は前のめりに倒れ込む。そのまま地上へと向かって一直線に落下していくが、幹を蹴って空中で回転しながら前へと進み、他の木の枝へと飛び移りながら移動していく。

向かう先はかの狩場。

どうやら飛竜らが乱入するのではなく、彼が狩場へと乱入していくようだった。

岩山地帯を歩きながら桐音は後ろから付いてくる十兵衛へと振り返る。彼はガンナーという事もあって視力が高く、森の中に溶け込む色合いをした毛皮を持つナルガルガを見つけ出そうと仮面の向こうから目を光らせていた。

だが桐音が自分を見ている事に気づき、「どうかしたツスか、姉御？」と首を傾げた。「ん？ いや、こうして二人で行動するのも久々な気がしてな」

「ああ……そうツスね。最近はあの人達と組んで行動してたツスから、姉御とは久々ツスね」

「で、どうだい？ あの二人には慣れたか？」

瑠璃に続いて茉莉とも二人で行動させ、あの二人に慣れてもらおうと行動した結果、十兵衛はある程度あの二人を前にしても普通に話せるようになっていた。桐音の策は実ったと言えよう。

「ええ……まあ、何とか」

「そうか、ならよかった。それで？ どっちが好みだ？ ん？」

「え？ いや、姉御、なに言ってるんすか？」

「おいおい、とぼけんなよ。いい歳してんだろ？ そういふの、興味ないのか？」

にやにやと笑いながらじつと十兵衛を見るも、仮面のせいで彼の表情はわからない。

だが何となくではあるが気の揺らぎで十兵衛が戸惑っているのだけはわかる。

「まあ、確かにいらはいい歳しているかもしれないツスが、あれツスよ？ つていうかそういう方向で話を進めないでほしいツス。おっさんすか、姉御？」

「はっ、歳の差ってか？ んなの種族的に問題ねえだろ？ あと、おっさん言うな。年齢的にこういうのは周りでやっていくれると何となく興味が出るつてもんだろ？」

「……………はあ、何にせよ黙秘するツス」

ため息をついて十兵衛は桐音の傍を通り過ぎて先へと進んでいく。もう付きあつてられない、と言わんばかりの背中に桐音もまたやれやれと嘆息して首を振った。

以前の戦いで見せたあの光景、何となく脈ありじやないかとは思ったが、まだまだこれからといったところだろうか。

これからの交流次第でどうにでもなる。ただの仲間で終わるのか、あるいはそれ以上の関係になるのか。それは十兵衛ら次第だろう。

これを楽しみに眺めるのもいいかもしれない、と考えつつ二人はエリア6へと降りていったのだが、突如そこに渦巻く一つの気配に感づいて足を止める。

物陰に身を潜め、滝から流れる小川を見てみれば、黒い影がゆつたりと歩み進んでいる。猫科の獣のような顔つきに鋭い刃と化したかのような翼には前足が付き、後ろ足と合わせて四足で歩いている。

長い鞭のような尻尾は歩くたびにゆらゆらと揺れ、金色の瞳が軽快するように辺りを見回していた。

あれが迅竜ナルガクルガ。

夜の森を駆け抜け、跳び回る漆黒の狩人だ。

「なんつー早い巡り合わせだ。気が早すぎるぜ」

「でも、さっさと落とせる、と考えれば問題ないッス」

「ま、それもそうか。じゃああたいが斬りこむから、信号弾よろしく」  
「ういッス」

背中に担いでいるブルーウイングに手を伸ばし、静かに坂を下りていく。ナルガクルガの視線は滝の方へと向けられている。今飛び出せば真つ向から気づかれてしまう状態だった。

故に待つ。

奇襲を仕掛けて先手を取り、なおかつ自分に意識を引きつける。そのためにはチャンスを待つ。

「グルル……」

不意にナルガクルガが前足を上げ、二足で立ちながら辺りを見回し始める。息を殺している二人に気づいたのだろうか。右、左、と首を回し、そのまま後ろを振り返る。そうしてもう一度右、左と見回すと、警戒心を殺さないまま滝を背に向こうの森へと歩き始めた。

「——っ！」

今が好機。

桐音は「迅気、纏」と一言呟いて黒いオーラを身に纏って飛び出した。

小川に点々とある石に足を乗せて水の音を極力消しているが、それも長くは続かな

い。先に進めばそんな石が転がっている事もなく、桐音の足が小川へと着水する。

だがそれでも彼女の速さによって一気にナルガクルガへと接触していき、跳ねる水音に気づいてナルガクルガが身構えながら振り返ってきた。

「おらあつー！」

その頭へとブルーウイングを振り下ろす。するとどんぴしやりとブルーウイングがナルガクルガの額を捉え、蒼い刀身から炎が噴き出してナルガクルガを焼く。突然の攻撃にナルガクルガが驚いた声を漏らし、怯んだところでもう一発薙ぎ払うようにブルーウイングを振るう。

そうしている間に十兵衛が信号弾を撃ちあげ、向こうにいる双子へと報せてやり、背中に担いでいる雷砲ラギアブリッツを取り出して弾を装填する。

それは鬼人弾。照準を桐音へと合わせて引き金を引き、それが着弾すれば桐音の中から力が溢れた。「サンキューー！」と遠くからお礼が聞こえ、それに頷いて十兵衛は次の弾を装填するためにチップを手にした。

そのまま森の中へと入り、草むらに身を隠した。そうして手にしているチップのギミックを始動させてベルトリンクを伸ばし、雷砲ラギアブリッツへと繋いで屈みこんだ。

「……狙い、オーケー。やるツスー！」

繋がれた弾丸は電撃弾。最初から飛ばしていくつもりだ。

頭は桐音が狙っているため、十兵衛は後ろ足を狙って引き金を引いた。空を切つて飛んでいく弾丸は狙い通りにナルガクルガの後ろ足へと連続して着弾していくが、ナルガクルガは目の前にいる桐音に意識が向けられている。

五発を越えたところで突如ナルガクルガは跳躍し、桐音の側面へと回り込んだ。後ろ足でブレーキをかけると、そのまま飛びかかるようにして桐音へと左翼を振りかぶつた。

「ふっー」

それをブルーウイングで防御し、強い衝撃が桐音にかかる。しかしそれを堪え、ぐつと力を籠めて弾き、左翼へと斬り上げて側面へと転がった。すぐに起き上つて背中へと納刀し、右翼で追撃を仕掛けてくるナルガクルガから躲すように更に跳ぶ。

森の中から十兵衛が援護するように電撃弾が射出され、後ろ足、翼へと着弾して弾け、雷属性の力がナルガクルガへとダメージを与えていく。

だがそれは微々たるもの。

弱点属性ではあるが、ナルガクルガにとつてはあまり気にするようなものではなかった。しかしダメージは蓄積する。飛びかかってくるナルガクルガとすれ違うように前転し、小川によつて体が濡れるがそれに気も止めずに振り返りながらブルーウイングを

抜刀し、ナルガクルガの後ろ足へと薙ぎ払うように斬りかかった。

それは十兵衛が積み重ねたダメージに追撃を入れたようなものであり、ついにナルガクルガは転倒してしまう。それを見た桐音は尻尾へと回り込み、一度納刀してから力を込めつつ抜刀する。そのまま身構えて気を込めつつ力を溜めていく。

このような手間をかけるのはガンキンSシリーズには抜刀術が二つ付いているためだ。

抜刀術【力】は抜刀滅気の力があり、敵の頭部に抜刀しながら攻撃すれば、鈍器で殴られたような衝撃を与える事が出来る。

抜刀術【技】は抜刀会心の力があり、これは抜刀した際の攻撃は必ず会心の一撃となつて威力を高める効果がある。

どちらも納刀状態から抜刀する事で効果を発揮するスキルであり、納刀してからのヒットアンドアウェイを基本動作とする大剣とは相性がいいスキルとされている。

「どっせえいー!」

最大まで溜まった力を解放するように、ブルーウイングが唸りを上げてナルガクルガの尻尾の鱗を引き裂いていく。容赦の欠片もない一撃は割れた鱗を焼き、その下にある肉すらも斬ってしまった。

「ギャアアアアッ!」

その一撃にたまらずナルガクルガが悲痛な悲鳴を上げる。だが今の一撃でスイツチが入ったようだ。距離を取るように背後へと跳ぶと、目の周囲が充血し、その金色の瞳に赤い光が灯って爛々と輝きだす。

ブルーウイングを納刀しながらにやりと笑いつつ距離を取り、そうしたところでナルガクルガが大きく息を吸って怒号を放つ。

「グルアアアアアアアアアア!!」

森に響き渡るその怒号に森が悲鳴を上げる。木々がざわめき、木の葉が舞い上がり、草むらも揺れる。それは離れた所にいる十兵衛にも影響を与え、仮面の前で揺れる草むらを振り払ってナルガクルガへと照準を合わせようとしたが、その視線が隠れている十兵衛を捉えた。

「……気づかれたツスね」

気づかれたならばここに留まっているわけにはいかない。立ち上がってベルトリンクを抜き、雷砲ラギアブリッツを構えて走りだし、ナルガクルガの様子を窺いながら背中に戻す。

ナルガクルガは四肢に力を籠めたかと思うと、太い木の幹に飛び移り、そのままそれを蹴って跳躍して十兵衛の背後へと回り込んだ。

「ちよ、いきなりおいらツスか!」



突然背後へと回り込まれる十兵衛は、慌てて肩越しに振り返りながら側面へと方向転換する。だがそれを逃さないかのように、ナルガクルガは尻尾を振るって十兵衛の前方から薙ぎ払った。

その攻撃に十兵衛は歯噛みしながら両腕の前に交差させ、足に気を込めて跳躍し、縄跳びをするかのように飛び越す事を試みる。

それは何とかギリギリ成功し、尻尾は十兵衛の数センチ下を通過した。

受け身を取りながら十兵衛は小川を転がって起き上り、荒い息をつきながら「ガンナーに接近戦は無理ツスよ、勘弁してほしいツス！」と愚痴をつきながらナルガクルガから離れていく。

向こうからはまた桐音が黒いオーラを纏ったまま接近してきており、ナルガクルガの側面から斬りかかった。だがナルガクルガはそれに動じず一歩退いて身構えると、勢いよくその場で回転する。

すると長い尻尾がそれに従って勢いよく周囲を薙ぎ払う。それは一瞬の内に薙ぎ払われる鞭。遠心力が乗ったその一撃は、しかし桐音がその下を掻い潜るように滑る事で躲した。

一旦ブルーウイングを手放して両手で地面を叩いて起き上り、背後にあるそれを回収しつつ振り上げつつ薙ぐ。

「あんたの相手はあたいが務めてやる。来な、ナルガ！」  
「グルルルツ！」

間近で殺気を放つ事でナルガクルガの意識を自分へと引きつけ、十兵衛は十分に距離を取ったところでまた雷砲ラギアブリッツを取り出して弾を装填した。

まだ戦いは始まったばかりである。

一方同時刻、信号弾が放たれたというのにまだ瑠璃と茉莉が現場へと到着しないのは何故かと言えば――

「なんだってここで……!?!」

「見逃してくれそうにないですね。やるしかないですよ、瑠璃」

――エリア4にはナルガクルガ亜種が鎮座していたのだ。まさかこんなところにいる限り現れるとは思いもなかった二人は虚を突かれ、またエリア自体の地形が平らであり、障害物は廃墟となっている建物が点々とあるだけ。

しかもナルガクルガ亜種は障害物となる建物がない所におり、エリア4へと入ってきた二人に気づくとすぐに視線を向けて臨戦態勢に入ってしまった。

響く咆哮の中二人は武器を抜き、ナルガクルガ亜種と対面する。

だが問題がある。

それは二人はナルガクルガ亜種とはまだ戦闘経験がないという事だ。原種とはそれ

なりにあるのだが、亜種のクエストには出会った事がなかった。

しかし知識はある。といってもそれは茉莉が把握している事であり、それを瑠璃がまた聞きして把握しているだけに過ぎない。だが知識があるなしではあつた方がマシだろう。

抜いた火竜剣【火燐】をダブルセイバー形態にして瑠璃はじりじりとすり足でナルガクルガ亜種へと近づき、古代式回転銃槍を手にした茉莉はその場に留まつて状況を見守っている。

「グルアアウウ……!」

一度唸つたナルガクルガ亜種は瑠璃の側面へと回り込むように跳ぶが、その動きは原種にもある行動だ。瑠璃は慌てず視線で追いながら向き直る。が、ナルガクルガ亜種は更に跳んで背後に回り込んだ。

「……ッ!?!」

更に跳ぶ、という行動。

ナルガクルガ亜種は原種よりもフットワークが軽く、一度跳ぶ事もあれば二度跳び、敵に回り込んでいく事があると茉莉が語っていた事を思いだす。背中から翼を伸ばして回避体勢に入り、ナルガクルガ亜種が右翼で切り裂いてきたところでそれから逃れるように横に跳ぶ。

「はっ！」

その際左翼へと刃を通して斬るも、それは浅い傷にしかならなかった。弱点属性といえどもそれではあまり通用しない。そのまま後ろ足付近へと着地し、振り返りざまに足を薙ぐ。

ナルガクルガ亜種の背後からも茉莉が前に進みながら古代式回転銃槍を突き出し、茉莉とは反対側の後ろ足へと溜め砲撃を放つ。

古代式回転銃槍は見た目からしてもなかなか興味深い作りをしている。四つの金属が繋がり、それぞれ右、左、右、左と起動すれば回転しているのだ。切っ先には槍といえるような尖った部分はなく、回転する金属が突き入れるという事でダメージを与えらる。しかも砲撃を使う事で切っ先が熱されるためその熱ダメージも加味される。

そして古代式回転銃槍の砲撃タイプは拡散。これは溜め砲撃をする際に威力が増すのだ。高い威力を発揮した溜め砲撃がナルガクルガ亜種の右後ろ足へと当てられるが、それでもナルガクルガ亜種は小さく唸るだけ。

そのまま後ろ足に張り付く不屈き者を振り払うように、一步下がって体を勢いよく回転する。すると勢いよくしなった尻尾が二人に襲い掛かった。ガンランスを手にしている茉莉は盾を構えてそれを防御するが、瑠璃は火竜剣【火燐】を長剣形態にして受け流すようにして防御した。

だが、ナルガクルガ亜種の攻撃は終わらない。

「な……………っ!？」

両前足を踏みしめて体を支えると、今回転した方向から返るように反時計回りで回転した。周囲を薙いだ尻尾がもう一度振り払われ、瑠璃は火竜剣【火燐】で防御するもそのまま背後へと吹き飛ばされてしまった。

「瑠璃っ!？」

苦い表情を浮かべながら、瑠璃は両腕が痺れる感覚がしながらも何とか空中で受け身をとって地面を滑っていく。気づけば高い岩山まで吹き飛ばされていたようだ。舌打ちして瑠璃が起き上り、火竜剣【火燐】を持ち直して走り出す。

「ナルガ亜種は尻尾の使い方も優れている、か。なるほど、やつてくれるわね……」

原種と亜種との差異といえどフットワークの軽さだけでなく尻尾の扱い方もある。先ほどのように回転する際には一度だけでなく二度振り回す事もある。ナルガクルガの最大攻撃と言われている尻尾叩きつけも二度行う事もある。

故に気をつける、と言われていたが、知っていても実際に見ない事には完全に防御なんて出来るはずもない。

そこで信号弾が上がリ、それを茉莉が発見する。縦を構えながらも視界の奥にそれが上がったのを目視し、しかしナルガクルガ亜種が一度距離を取るようにならんと跳び、

そのまま茉莉へと殴りかかってくる。

それを防御し、反撃するように肩へと古代式回転銃槍を突き出した。そうしつつ、「瑠璃、信号弾です！ どうやらあちらも原種と遭遇したようですよ！」

信号弾が上がった事を瑠璃に伝えた。

瑠璃と茉莉はナルガクルガ亜種と。

桐音と十兵衛はナルガクルガと。

それぞれ二人ずつで標的と相対する事になってしまった。舌打ちし、こちらも遭遇してしまった事を伝えるために瑠璃は信号弾を取り出して打ち上げようとしたのだが、ナルガクルガ亜種が視線を動かして瑠璃を睨み、その背後へと回り込むように跳んだ。

打ち上げようとしたところで標的にされてしまい、瑠璃は舌打ちしてそれをポーチに戻した。飛びかかれれば後ろへと下がって回避するが、ナルガクルガ亜種はそのまま突進しかけてその体で瑠璃を撥ね飛ばそうとした。

それを火竜剣【火燐】で防御するも、それでは完全に威力を殺しきれていない。後ろにノックバックされそうになったがそれを堪えて一度離れようとする。

だがナルガクルガ亜種は逃がしてくれそうにない。

続けて防御している瑠璃へと嘯みつきにかけ、彼女の行動を制限させる。そんな彼女を救出するべく、茉莉がナルガクルガ亜種の前へと閃光玉を投擲し、その視界を奪つ

てしまう。

「グワアアアアアウツ?!」

突然視界を奪われてナルガクルガ亜種は悲鳴を上げ、目の前にいる瑠璃ではなくあらぬ方を見上げて唸り、そちらへと飛びかかっていった。ナルガクルガは視界を奪われるとがむしやらに暴れ回る。その場に留まるのではなく、目視出来ない敵を求めてただただ暴れるのだ。

その際正面にいる瑠璃にも襲い掛からない保証はないが、それでも賭けは成功した。ナルガクルガ亜種は暴れながらどんどん瑠璃から離れていく。その隙について茉莉が瑠璃へと近づき、暴れるナルガクルガ亜種を尻目にエリア4から離れる事にする。

向かうのはエリア5。

その先にあるエリア6で合流するために二人は森を駆け抜けていった。

## 36話

跳躍して距離をとったナルガクルガが身構えながら力を溜めだす。あの構えをとったナルガクルガは連続攻撃を仕掛けてくる前触れだ。それを見越した桐音がブルーウイングを納刀して様子を窺う。

雷砲ラギアブリッツを手に行っている十兵衛も同様で、弾は装填しているようではあるが距離が離れているため射出する事はなかった。

そうして様子を窺えば、力を溜め終えたナルガクルガが桐音へと一気に飛びかかっていく。その際右翼で斬りかかり、また飛びかかりながら左翼で斬りかかっていく。

しかししつかりと見切つてタイミングよく躲してダメージをゼロとし、背後へと離れていくナルガクルガを後ろからブルーウイングで斬る。だがそのダメージを気にせず離れた所にいる十兵衛へと勢いよく跳躍して両前足を叩きつける。

「くう……っ！」

何とか後ろに下がる事で直撃を受ける事はなかったが、その巨体が眼前へと急激に接近してきた事で強いプレッシャーと共に風圧が体を叩きつけてきた。



だがそれを耐え、ナルガクルガの側面に回り込みながら装填した散弾Lv2を射出する。放たれた弾丸は少し進んで破裂し、複数の小さな弾となってナルガクルガに襲い掛かる。

「グルルツ！」

「おらっ！ こっち向きなッ！」

散弾で攻撃するもナルガクルガが効いている様子はあまりない。だが桐音がブルーウイングで尻尾から足まで一気に斬りかかれば、その威力にナルガクルガが反応してバックステップしながら向き直った。

それによつて距離が開き、十兵衛が更に離すために下がりながらチップを叩いて弾を取り出して装填する。入れ替わるように桐音がブルーウイングを納刀しつつ柄から手を離さずに前に出ていく。

「グルアアウウヴ……！」

するとナルガクルガが威嚇をするように姿勢を低くしながら尻尾を地面に叩きつけていた。あれが奴の威嚇だ。それに伴って鋭い刃のような殺気が改めて二人に突き刺さってきた。

だがそれに臆する桐音ではない。じりじりと前に進んでいき、威嚇に臆しない桐音を見据えてナルガクルガが地面を叩いていた尻尾を横、回転と振り回し始める。

その動きを目視した瞬間、「針が来るぞ！」と後ろにいる十兵衛に注意を促した。その後、勢いよく尻尾が振られてそこから細長い毛が放たれた。それはまさに勢いよく飛来する針の弾丸。扇状に数本ずつ放たれた黒い毛の針は桐音や十兵衛へと向かって直進する。

だが扇状といっても網羅するように放たれているわけではない。数センチほどの間隔を置いて放たれている。その隙間を狙って潜り抜け、一太刀入れるようにナルガクルガの顔へとブルーウイングを叩きつけた。

大剣としての持ち味である高い威力と内包される火属性が炸裂し、弱点部位である頭に直撃した事でナルガクルガが大きく怯んでしまった。その隙を逃さず、十兵衛が装填した貫通弾を射出し、肩から背中へと突き抜けるように狙って引き金を引いていた。

だが装填数が二発しかないため、素早く手を動かして二発撃てばすぐに装填して射出という高速作業を繰り返している。

「ふっ、はあっ！」

もちろん怯んでいる所を逃さないのは桐音とて同じだ。顔から左翼へと抜けるように薙ぎ、更に左翼へとブルーウイングを叩き落とし、斬り上げながら納刀する。その頃にはナルガクルガも怯みから回復しており、反撃として体を捻って尻尾を叩きつけてきた。

素早くブルーウイングを抜いて盾にし、それを防ぐが、続けて頭突きでもするかのように少し引いた頭でぶつかってくるが、それをバックステップで躲した。だがナルガクルガは更に攻撃を続けてくる。

小さく唸って身構えると勢いよく跳びはねながら後ろを向き、長くしなる尻尾を更に伸ばしながら勢いよく叩きつけてきた。直撃は避けたが、その強い衝撃がブルーウイングを通じて桐音に伝わってくる。

「重いねえ……さすがだ。だからこそ、やりがいがあるつてもんさー!」

尻尾の先端付近の毛が荒々しく逆立っており、それが地面に食い込んでしまっている事から見てもその衝撃の強さが窺える。しかしそんなの関係ない、むしろそれを歓迎しているかのようだ。

「やっぱりこーういう戦いこそが面白い! 昂るつてもんさね! とつととくたばるような早漏野郎にや興味ねえからなあ!」

何とか尻尾を抜こうとしているナルガクルガは数秒間隙だらけだ。後ろ足へと狙いを定めて力を溜めだした。それが少し溜まったところでようやく尻尾が抜けたようだが、最大まで溜まっていなくともこれが好機。

ナルガクルガが反撃する前に後ろ足へとブルーウイングを叩き落とし、ダメージを与える。その苦痛にナルガクルガが唸るが、前足で体を支えると勢いよく体を回転させて

尻尾を横から叩き込む。

しかし桐音はその尻尾の下を潜り抜けるように横へと転がって回避し、攻撃をやり過ぎた。

「いたつ、桐音！」

「ん？ おお、ようやく来たか。随分時間がかかったな、お二人さん」

濡れた体を気にした風もなく立ち上がり、ブルーウイングを納刀しながら肩越しに振り返り、エリアに入ってくる瑠璃と茉莉に気づいた。

ナルガクルガと戦闘しているのを確認した瑠璃が、すかさず火竜剣〔火燐〕を手にして桐音へと並び、茉莉は離れた所にいる十兵衛へと向かっていく。手にしている盾を構え、古代式回転銃槍をスタンバイさせて十兵衛の盾となるべく身構えた。

ナルガクルガは新たに現れた敵に威嚇するように体を低くして唸るが、二人は厳しい表情でナルガクルガを睨むだけだ。まだナルガクルガの目には赤い星が浮かび、動くたびに赤い軌跡を描く。

そして突如ナルガクルガが瑠璃と桐音へと勢いよく跳びかかりながら、翼で切り裂いてくる。しかしナルガクルガの動きを見逃すまいと睨んでいた二人は、すぐに横へと跳んで回避する。

だがナルガクルガは逃さない。逃げる瑠璃へと回り込むように跳び、横からまた斬り

かかる。それを前へと跳びながら転がり、躲した瑠璃はすぐに後ろに振り返る。攻撃が連続して外れることはナルガクルガもいよいよ珍しくもないと感じ出したようで、唸りながら体を捻って尻尾を叩きつけてきた。

それを火竜剣【火燐】で防ぎ、反撃するように一太刀肩へと斬りこむ。

一瞬悲鳴を上げたナルガクルガだが、どうということはないとばかりに唸りながら瑠璃へと噛みついてくる。バックステップでやり過ぎし、今度は突きの構えを取って頬を掠めながらも一度肩へと攻撃を仕掛けた。

その後ろでは桐音が転進してブルーウイングを抜き、尻尾へと斬りかかっている。茉莉も古代式回転銃槍を手に左翼へと突き出し、彼女の背後からは援護するように通常弾Lv2を装填した十兵衛が後ろ足を狙って射撃している。

二人から四人へと増えた攻撃の手は着実にナルガクルガの体力を削っていく。群がってくる敵に鬱陶しさを感じたようで、ナルガクルガは身構えると勢いよく体を捻って尻尾で薙ぎ払った。

茉莉は盾で防御し、残る二人は何とか躲してやり過ぎした。

それを見たナルガクルガは小さく唸ると身を低くして勢いよく跳躍する。そのまま上空で翼を羽ばたかせて高度を得ると東の方へと飛び去っていった。どうやら一度離脱していったらしい。体勢を立て直すつもりだろうか。

何にせよ、そうしてくれるならこちらも一度仕切り直しが出来る。

桐音がポーチから取り出した砥石でブルーウイングの切れ味を戻しながら、「なんかあったのかい？ まあ、あるとするならそつちで亜ナルが現れたつてところだろうけど」と横目で瑠璃を見上げながら問いかける。

その言葉に頷きかけたが、瑠璃が顔を赤くして「ちよ、な、なに言つてんのあんたはッ!？」と桐音を指さしながら吼えた。

「ん？ なにかおかしいことでもあったかい？」

「なんでもない風に流すな！ ナルガ亜種のこと、妙な呼び方したでしょ!？」

「おいおい、妙な呼び方とは心外な。いい短縮のしかただと思うぜ？ 瑠璃、一体何を想像したのかな？」

「ぐっ……こ、こいつは……っ!？」

にやにやと笑みを浮かべながら小川の水で砥石を濡らし、手際よく刃を通して切れ味を戻す桐音。そして「で、どうなんだ？」視線で少し語れば、茉莉が小さく頷いた。

「ええ、エリア4に入った瞬間出くわしてしまいましたね。信号弾が見えたのは確かですが、なかなか抜けるタイミングが見つからず。遅れてしまいました」

「なるほど、なら仕方ない。ナルガは東に飛んでったから、ふむ……もしかすると合流するかもしれないな」

ブルーウイングの切れ味を確かめ終えた桐音が立ち上がりながら背中中に納刀し、肩や腰を少し動かして歩き出す。その際気配を探ってみると隣のエリア5にナルガクルガが着地した、とだけ判別できた。

ナルガクルガ亜種らしき気配はまだなく、合流してはいないらしい。

望むとするならばここで一気に片を付けたいところだった。四人は静かにエリア5へと移動していき、森の中で佇むナルガクルガを確認した。休息状態にあるようで体を休めて体力回復に努めているらしい。

「亜ナルはいないな。よし、十兵衛、一発頼むぜ？」

「……うす」

またしてもツツコミを入れそうになったが瑠璃はぐつと堪える。十兵衛は特に気にした風もなく雷砲ラギアブリッツに弾を一発装填していた。こういう事には慣れていられない。さすがは瑠璃達より長く桐音と行動しているだけはある。

十兵衛はそのままナルガクルガの側面に回り込むように草むらを移動していき、それに瑠璃がついて行って護衛する。

見つからぬよう姿勢を低くし、音を立てないように静かに移動したが、ナルガクルガは不意に顔を上げて辺りを見回した。僅かな音が漏れていたのか、あるいは気配を探り出したのか。

目は通常の金色の瞳になっており、怒り状態にはなっていない。それでも気を抜かず、位置を取った十兵衛は伏せたまま照準を合わせる。辺りを見回し終えたナルガクルガが二足で佇むのを見計らった瞬間引き金を引いた。

飛来する弾は狙い通りナルガクルガの頭に着弾し、一閃置いて爆発した。突然の攻撃にナルガクルガが悲鳴を上げてたたらを踏み、その瞬間桐音が勢いよく疾走してナルガクルガの背後から斬りかかった。

奇襲、それに感づいたナルガクルガが唸りながら体を回転させて尻尾を振るう。そのカウンターのような反撃に、桐音は舌打ちして振り下ろすブルーウイングを急ぎよ左手を添えて盾にして難を逃れる。

衝撃に体が押しやられるが足に力を入れて数センチ滑るだけに留まった。

十兵衛が隠れている草むらからは既に瑠璃が飛び出しており、火竜剣【火燐】を抜いて側面から炎を噴き出してナルガクルガへと蹴るように炎の剣で斬る。右翼で防御するが高温の炎に顔をしかめ、続けて放たれる雑ぐ攻撃に怯んでしまう。

その隙を逃さず、熱せられた部分を抉るようにして剣を突き出せば黒い鱗がはがれ、その奥にある肉へと刃が突き刺さる。肉が焼ける音と共に血が蒸発し、斬り上げれば小さな肉の断片と共に煙と血が少量噴き出してきた。

背後からはチップからベルトリンクを伸ばして電撃弾を装填した十兵衛が、連続して



銃撃している。高速で放たれる弾丸はナルガクルガの後ろ足に着弾する度に弾け、電撃の力をナルガクルガに与える。

すると足の力が衰えてしまったのか、ナルガクルガがバランスを崩して転倒してしまった。これは好機とばかりに桐音が顔へと接近し、納刀したブルーウイングを抜いて力を溜めだした。

瑠璃も右翼へと連続して火竜剣【火燐】を回転させ、薙ぎ、斬り、突きと高速の連撃を叩き込む。反対側では茉莉が左翼へと突いてはエネルギーを溜め、砲撃を放つてはクイツクリロードをして溜め砲撃とこれを繰り返している。

「おらあああああッ!!」

最大まで溜めた力でブルーウイングをまさに叩き落とす。斬るといふよりこの重量で叩き込む。それが大剣の一撃だ。それはナルガクルガの額から左目にかけて裂傷を与え、傷口に沿って勢いよく噴きだした炎の力が追撃し、ナルガクルガの左目は潰れてしまった。

「グアアアアアアアアアッ!?」

悲鳴が森に響き渡った。だが断末魔ではない。桐音の一撃は確かにナルガクルガに高いダメージを与えたが致命傷ではなかった。

そしてその悲鳴に引き寄せられたのか、すぐそこに突然空から降ってきた存在がい

た。

『っ!?!』

視界に突然入ってきた森の色。原種と違ってまさに森に溶け込みやすくなった緑を基本とした迷彩色の毛皮と鱗を持つそれは、突如横へと並んできたナルガクルガに気づき、振り返る。

そうすれば先ほど自分からいなくなってしまった敵二匹と、それと共にいる一匹に気づき身構える。その前に原種のナルガクルガが怒号を上げた。残った右の金色の目に赤い星が浮かび、その周囲が充血している。怒り状態だ。

その怒号に当てられ、瑠璃以外の二人がたまらず耳を塞ぐ。瑠璃はリオソウルシリーズとお守りのおかげで高級耳栓が発動している。咆哮など無意味だった。

だがここで普通は起こり得ない現象が起きる。

ナルガクルガの傍には威嚇するように吼えようとしたナルガクルガ亜種がいた。奴はナルガクルガの怒号を受けて一瞬うるさそうに眼を閉じながら体を震わせ、その後弾かれたように二度横へと回り込みながら跳び、瑠璃の背後へと回り込んだ。

その目にはナルガクルガと同じく赤い星が浮かび、目の周囲が充血している。

「グルアアアアアウウヴヅッ!!」

ナルガクルガ亜種も怒り状態になったのだ。

ナルガクルガは原種も亜種も音には敏感であり、飛竜らの咆哮を受けた場合も一瞬怯んだ後に怒り状態へと強制的に移行する。桐音の一撃で怒り状態になったナルガクルガの咆哮に反応したせいで、連鎖的に亜種もリミッターを外してしまったようだ。

その連鎖反応に桐音が耳を塞ぎながら舌打ちした。

何とか亜種の動きを見ようと顔を動かせば、高級耳栓のおかげで動ける十兵衛が草むらから飛び出してきた。その手には雷砲ラギアブリッツではなくこやし玉を手にして  
いる。  
いい判断だ。

怒り状態になっている飛竜二頭を同時に相手にするなど、ましてや高速で動き回るこのナルガクルガらを相手にするなど厳しい。

一頭には強制的に退場してもらわないと困る。

手にしたそれをナルガクルガ亜種へと投擲しようとしたが、ナルガクルガ亜種はそこからまた横へと跳び、桐音の背後を取って斬りかかってきた。怒号に硬直してしまっていた桐音はそれを躲しきれず、わき腹付近を強い衝撃が襲い掛かって吹き飛ばされてしまった。

しかもナルガクルガ亜種は転がる桐音を追うようにまた跳び、追撃を入れようとした。しかし茉莉が何とか盾と古代式回転銃槍を構え、飛びかかってくるナルガクルガ亜

種へとカウンターを入れるように額へと古代式回転銃槍を突き出し、溜め砲撃を命中させた。

振りかぶられた右翼を盾で防ぎながらの攻撃に、たまらずナルガクルガ亜種が怯んでしまう。茉莉の背後で何とか桐音が起き上り、「……サンキュー」と小さく礼を述べれば、肩越しに頷いてもう一撃古代式回転銃槍を突き出す。

しかし安心してはいられない。

ここには怒り状態になっているナルガクルガがいるのだ。しかもそれは後ろにいる。すぐさま桐音がブルーウイングで防御体勢に入るが、どういうわけかナルガクルガは桐音ではなく接近してきた瑠璃へと意識を向ける。

火竜剣【火燐】で斬りかかってきた瑠璃から逃れるように後ろへと跳び、空ぶった瑠璃へと飛びかかるようにして跳躍した。が、それを見越して瑠璃は火竜剣【火燐】を盾にして防御し、返す刃で一撃入れる。

「はっ！」

さらに火竜剣【火燐】を回転させてもう一太刀。そうしたところで十兵衛が追い付き、こやし玉を投げたのだが、素早くナルガクルガが避けるように跳び、同じように跳んできたナルガクルガ亜種と並んでしまった。

そうして並んだ二頭は同時に尻尾を横へと揺らしつつ、回転させ始めた。逆立った毛

がゆつくりと準備を整えだし、勢いよく尻尾を振る事で鋭い毛が扇状に放たれた。漆黒の毛とそれよりも密度が濃い新緑色の毛が空を切って放たれ、瑠璃達へと襲い掛かっていく。

それを回避していく瑠璃達ではあるが、次々と放たれる毛の弾丸は着実に瑠璃達を追い詰めていく。その中の一本の毛、新緑色の弾丸が茉莉が手にしている盾を強く突き、続けざまに放たれた毛が茉莉の腹に直撃する。

「……………ッ、ぐ……………!?!」

リオハートメイルの上からでも伝わってくる強い衝撃。胃の中の物が逆流しそのような程の衝撃にたまらず茉莉が膝をつき、そのまま力なく倒れ伏してしまった。

「茉莉ッ!?!」

瑠璃が彼女へと叫ぶように呼びかけるが、茉莉はそれに反応しない。いや、反応しようとしているが声が出ない。

ナルガクルガ亜種の毛は原種の物より密度が濃く、空を切って放たれるそれは想像以上に強い衝撃を生み出す。気が弱ければ着弾しただけで意識がとび、無防備な状態になってしまう程だ。

瑠璃が茉莉の方へと駆け寄り、入れ替わるように十兵衛が何とか毛針を掻い潜ってこやし玉を投擲する。それはナルガクルガ亜種へと向かっていったが、桐音へと襲おうと

飛びかかったナルガクルガへと附着し、鼻を突くような臭いを漂わせる。

その臭いに反応してたまらずもがいたナルガクルガは、桐音へと攻撃を命中させる事は出来なかつた。その生まれた隙を逃さず体を捻りながら抜刀したブルーウイングを薙ぎ、翼へと突き出し、ぐつと引きながら斬り上げる。そのまま納刀して勢いよく背後へと跳べば、桐音が先ほどまで立っていた場所へとナルガクルガ亜種が回り込みながら翼を叩きつけてきた。

「グルルルツ……！」

逃さない、とでもいうかのように唸りながら勢いよく振り返りつつ尻尾を叩きつけてくる。横へと跳んで躲すが、ナルガクルガ亜種はそれを追うようにもう一度尻尾を叩きつけた。

それを衝撃が届かないところまで抜け、影響を受けずにナルガクルガ亜種へと接近すると勢いよくブルーウイングを抜いて後ろ足へと叩き込む。その頃にはナルガクルガはこやし玉の臭いの影響で跳躍し、エリアから離脱していった。

二頭を分離させる事には成功させた。

あとは茉莉はどうなったか、と視線を動かせば瑠璃が茉莉を抱えて離れていくところだった。彼女が手にしていた古代式回転銃槍は一旦十兵衛が回収しているらしい。

(引きつけておくか)

逆立った毛が棘となり、地面に食い込んでいるのを何とかして抜こうとしているナルガクルガ亜種の側面を通り抜け、前方へと回り込みながら振り向きざまに顔を薙ぐ。

その一撃でナルガクルガ亜種の意識は桐音へと向けられた。

叩きつけられる殺気になりと笑みを浮かべた桐音は、「いいぜ、来いよ。火気、収束。剣気顕現」と謳うように呟き、ブルーウイングに激しく燃える炎が纏われて新たな刀身を生み出した。

赤褐色とオレンジ色が混ざり合うその炎は、本来の火属性剣であるブルーウイングから噴き出す炎と混じりあい、凄まじい熱気を放って剣となる。それは手にしている桐音にも容赦なく熱気を与えるが、彼女が纏っているのは火耐性があるガンキンSシリーズ。

抜刀術というスキルを捨て、ブルーウイングを構えながら不敵に笑う桐音。彼女に否応なく意識が向けられるナルガクルガ亜種は低い体勢を保ちながら唸り、威嚇する。桐音の狙いは成功していた。

「ふんっ！」

もう一度薙ぐように振り抜けば、蒼い刀身だけでなく纏う火の刃も火の粉の尾を引いて襲い掛かる。躲すようにバックステップし、更に横に跳んで側面へと回り込みながら翼を叩きつけるが、桐音はブルーウイングで受け流しながら切り抜ける。そうすればナ

ルガクルガ亜種の翼に刀身が押し付けられ、それ自体がダメージを与える要因になる。「はあっ！」

防御しながら攻め、それに怯めばもう一撃。

桐音の優勢で戦いは続行される。

その間に十分な距離を稼いだ瑠璃は茉莉をおろし、回復薬グレートを取り出して飲ませてやった。何とかそれを飲み、痛みもある程度和らいでくる。十兵衛が古代式回転銃槍を持つてくると、「おいらもあつちを引き付けてくるッス」と言いつつぺこりと頭を下げてナルガクルガ亜種の下へと走っていく。

「……油断しましたね。足を引っ張ってしまいました」

「気にする事はないわよ。これから取り返せばいいわ」

初見のため仕方がない、というのはい言い訳だろう。

気を緩めなければ切り抜けていたかもしれない。しかしそれ以上にナルガクルガ亜種が放った毛の弾丸は茉莉が想像した以上に重い一撃だった。防御していた盾を弾き、その衝撃で左腕が痺れて防御を疎かにてしまいそうなものだった。

その隙をついた更なる追撃。気を抜かなければもう一度防御していたか、躲せたかもしれないが、実際はこのざまだった。自分のミスで戦線は瓦解、そのフォローとして桐音が奔走している。



だがそれでも仕方がない、と誰もが言うだろう。

なにせそれ以前に二頭とも怒り状態に陥っていたのだ。茉莉でなくとも誰かが防御の隙をつかれて落とされていたかもしれない。今回はそれが茉莉だったというだけだ。

深呼吸を繰り返して気分を落ち着かせていき、茉莉はゆつくりと立ち上がった。

「……行きましようか」

「もう大丈夫なの？」

「ええ。これくらいということはありませんよ。このまま戦線離脱をするつもりもないですからね」

十兵衛が持つてきてくれた古代式回転銃槍を手にして調子を確かめ、背中に戻す。左腕の痺れも回復薬グレートのおかげで和らいでいるし問題ない。とはいえ完全ではないのであまりに重い一撃を防げばまた厳しくなるかもしれないが。

二人揃ってナルガクルガ亜種の下へと向かっていき、炎の剣を纏ったブルーウイングを振るって大立ち回りをする桐音と、雷砲ラギアブリッツを手に少し離れた所から通常弾Lv2を撃ち込んでいく十兵衛と合流する。それを確認したナルガクルガ亜種は怒り状態のまま勢いよく跳躍して飛びかかってきた。

二人で二手に分かれるように横に跳び、回避したが、ナルガクルガ亜種はそのまま振り返りつつ小さく唸った。

狙ったのは瑠璃、そして彼女の近くにゐる十兵衛だった。

自分の後ろに十兵衛がいる事に気づいた瑠璃が急ぎよ進路を変更して十兵衛から離れるように横へと走るが、既にナルガクルガ亜種は彼女に向かって飛びかかりながら翼を振るう。

しかしそれは原種でもよく見られる攻撃手段。瑠璃は冷静にそれを火竜剣【火燐】で捌く。だがナルガクルガ亜種はそこから更に高速で回り込んでもう一撃叩き込んだ。き

た。

「くっ……い」  
それは捌き切れず火竜剣【火燐】で防御するが、それから更なる追撃が来るのかと思いきやまた跳びはねて回り込み、翼を振るってくる。

その高速の動きに翻弄されつつある。防御する度に火竜剣【火燐】を握りしめる両腕が痺れだす。このまま防戦に回り込むわけにはいかない。反撃しなければならぬ。そうしなければ自分は強くなったとは言えない。

瑠璃はまた回り込もうとするナルガクルガ亜種を睨み付け、強く地面を蹴って前に出た。その行動にナルガクルガ亜種が驚いた表情を浮かべた。

翼を広げて飛行し、すれ違いざまに火竜剣【火燐】を回転させて肩から背中にかけて連続して斬りかかり、背後に回って最後に後ろ足へと強く突き刺した。

その連続した攻撃にナルガクルガ亜種は苦悶の表情を浮かべてたたらを踏み、だがそれでも意志は折れず反撃の手段を構築した。

後ろにいるならば使うのは尻尾。それは瑠璃も読めた。

だからこそ振るわれる尻尾を警戒し、すぐさま離れようとした。だがナルガクルガ亜種は尻尾を振るうのではなく一度瑠璃から離れるように体の向きを変えながら後ろに跳び、そして距離を詰めながら翼を振るってきた。

想定外ではあったが瑠璃はそれを防御する。しかしナルガクルガ亜種の目がぎらりと赤く光ったかと思うと、そのまま勢いよく反転しながら尻尾を叩きつけてくる。

「……………ッ!？」

「やいせませんー!」

振り返った顔の先にはいつの間に関り込んでいたのだろう。茉莉が古代式回転銃槍を構えながら突き出しているところだった。切っ先にはすでにエネルギーが溜められており、威力を増した砲撃がナルガクルガ亜種へとぶつけられる。

その衝撃にたまらず怯んでしまったナルガクルガ亜種ではあったが、それでも叩きつけられる尻尾は瑠璃に直撃する。みしみしと火竜剣「火燐」が悲鳴を上げるが、しかし瑠璃の体へと直撃する事は避けられた。

だが直撃の衝撃と、地面へと叩きつけられた際の衝撃の風圧に瑠璃の体は勢いよく飛

ばされてしまった。彼女の体は離れた所で銃撃していた十兵衛付近まで飛ばされ、すぐに十兵衛が雷砲ラギアブリッツをしまつて彼女の介抱に向かう。

入れ替わるようにして桐音がブルーウイングを叩きつけ、茉莉もそのまま顔へと古代式回転銃槍をねじ込んで砲撃を与えていく。溜めている暇はない、今はただダメージを重ねてナルガクルガ亜種を留めるだけ。

合流してきた桐音が手にしているブルーウイングは通常に戻っていた。ブルーウイングに纏われていた炎の剣が長く展開してきただけあって、時間切れと言わんばかりに効力を失い、通常のブルーウイングとなつてしまったようだ。それならそれとまた抜刀術を有効活用するだけだった。

「大丈夫ツスカ、瑠璃さん!？」

「……………いつつ、ん……………なんとか、ね……………」

彼女の手から火竜剣【火燐】が離れ、リオソウルアームの上から腕を撫でてしまう。それだけ強い衝撃が火竜剣【火燐】の上から伝わってきたのだ。かなりの苦痛が襲い掛かってきた。

すかさず十兵衛が回復薬グレートを取り出して瑠璃に手渡してやる。それを受け取って中身を飲み干し、一息ついて彼女は自分のポーチからもう一つの回復薬グレートを取り出し、リオソウルアームを取って直に両腕に半分ずつぶっつけた。

少しだけ顔をしかめて濡れた両腕に手早く布を当てて染み込ませつつ拭っていき、軽めの応急手当てを済ませる事にした。

「あそこまでの連続攻撃……やっかいね」

「ナルガ亜種は原種よりもかなり動くツスからね……追いきれなくなったらやばいッス」

動くだけでなく尻尾の一撃も脅威だ。鍛えていなければ防御していても腕が使い物にならない程の衝撃。やはり油断ならない。

リオソウルアームをつけて火竜剣「火燐」を手にし、立ち上がって合流しようとした瑠璃、そんな彼女の調子を気にしながらも同じく立ち上がった十兵衛ではあったが、突如近づいてくる気配に気づいて顔を上げる。

二人の近く、十数メートル付近に突然落下してきた漆黒の巨体。鈍い音を立てて着地したそれはゆらりと首を動かして二人を視認し、低く唸り始めた。

「な……」

「か、帰ってきたツスカ……!?!」

このエリアから追放したはずのナルガクルガ。

まさかのとんぼ返りであった。

## 37話

帰ってきたナルガクルガはすぐそこにいた瑠璃と十兵衛へと突進を仕掛けて接近する。

突然現れたナルガクルガに舌打ちした瑠璃ではあったが、接近しかけてくるならば接近戦を担当する自分が動かなければ話にならない。ヘビィボウガン使いの十兵衛には接近戦は荷が重い。

両腕がまだ少し違和感があるが、それでも自分がやらなければという思いに駆られて彼女は動いた。しかしそれよりも早く十兵衛は動いていた。素早く雷砲ラギアブリッツを抜くと散弾Lv2を一気に装填、連続して引き金を引き、小さな弾の嵐をナルガクルガへとぶつけてやる。

一発一発の威力は弱くとも、顔面にそれが連続してぶつけられることによって、ナルガクルガはたまらず怯んでしまった。

「瑠璃さん、撤退ッス！　ここは一度退くッス！」

「え、あ、うん！」

「姉御ッ！ おいらたちは4に撤退するッス！」

「あいよ！ こつちも亜ナルを引きつけておく、そつちから抜ける！」

鮮やかな手並みにぼかんとしていた瑠璃ではあったが、十兵衛の叫びに思わずうなずきながら走り出す。その際抜いていた火竜剣「火燐」ですれ違いざまに斬りつけるのを忘れない。

その後ろからも十兵衛が続き、散弾Lv2を当てながら走り抜けていた。だがナルガクルガもやられてばかりではなかった。このまま黙って行かせるわけにはいかないとばかりに体を回転させて尻尾を振り回そうとしたのだが、散弾の嵐にまた痛みにもうめて動きを止めてしまった。

どうやら思った以上にダメージは体に蓄積していたようだ。そんなナルガクルガを尻目に二人はエリア4へと走り去っていく。それを確認しつつ茉莉もエリア6に向かって走っていく。

桐音はナルガクルガ亜種をブルーウイングで引き付けつつ後退していき、茉莉が離れたのを確認してブルーウイングを納刀して一気に走り抜けた。ナルガクルガ亜種も逃さないとばかりに跳躍して勢いよく翼を振り抜いたが、桐音が勢いよく前のめりにダイブしてすれすれのところを切り抜けていった。

受け身を取って回転しながらエリアを抜け、ここに撤退が成功する事になった。

エリア4へと逃げ切った瑠璃と十兵衛の二人は呼吸を整えながら振り返る。どうやら追ってくる気配はない。

一息ついた十兵衛は肩から提げているベルトからチップを取り出し、とんとん、と叩いて残量を確認した。それは電撃弾が入っているチップのようで、その残量は微妙なものになっているようだった。

「合流したら調査するかな……」

と呟きながらベルトに戻し、「エリア7で合流するツスカ？」と瑠璃に話しかける。それに瑠璃は頷き、二人は並んでエリア7へと北上していった。

こうして横に並んで歩けるほどには二人は親しくなっている。少し前までは十兵衛が後ろから少しびくびくしながらついてきていたのだが、こうして並べるようになっただけでも上出来だろう。

とはいえ話題がなければ会話もない。二人は無言でエリア7へと向かい、向こうからやって来た桐音と茉莉と合流した。すると十兵衛はポーチから虫かごを取り出してその場に座り込む。

続けてカラの実を取り出し、虫かごに入っている光蟲を取り出して調査を始めた。それから作られるのは電撃弾。光蟲が十匹しか持ち込めないが、一匹の光蟲とカラの実で二〜四発の電撃弾が作れるので結構補填できるのが特徴だ。



十兵衛が調査を進める中、瑠璃達はナルガクルガらについて相談を始める事にした。

「ナルガも亜ナルもある程度ダメージは与えてある。ナルガの方は十兵衛が放った散弾で結構怯んでいたのを見る限り瀕死は近いとみるけどどうだい？」

「ええ、あたしも同意見よ。一気に叩くならナルガの方ね。……ナルガ亜種の方は？  
ブルーウイングで結構斬りこんでいたようだけど」

「まだ半分つてところじゃないかい？ 火気のブルーウイングと茉莉の砲撃でダメージは稼いだけど、それでも瀕死に近くはなっていないね」

「となれば攻めるなら原種、ということですかね」

桐音と十兵衛が最初から一気に攻め、亜種と合流してもなおある程度攻め続けられたナルガクルガ。桐音が叩き込んだ溜めの一撃が大きな差をつけたと言えるだろう。

大剣の一撃は武器の中でもトップクラスに位置している。一撃一撃の重さを重視する武器であり、その重量故に手にしながらの立ち回りはかなり遅い部類だ。それを解消するための抜刀、納刀の立ち回りを基本としている。

また更に一撃の威力を上げる技術、溜め斬りを当てる事が出来れば一気にダメージを稼ぐことも可能としている。

その重量故に扱うハンターが限られるが、上手く扱えたならばチームの主力となり得る武器。それが大剣だ。

桐音の立ち回りによって原種にも亜種にも十分なダメージは見込めただろう。彼女はどちらに対しても攻撃を仕掛けている。原種には溜め斬りを数度、亜種には火炎の剣を。本当に頼りになる人だ。

「……………ん？ 動いたようだね。……………おやおや、ここに来るみたいじゃないか。十兵衛、準備は？」

「……………問題ないツス。通常弾も補填したし、大丈夫ツス」

調合器具を片付けてチップをベルトに嵌めて準備完了。十兵衛が立ち上がると、離れたところに迷彩色の体をした大きな物体が空から落下してくる。それはぐるりと振り返り、瑠璃達を視認して咆哮を上げた。

どうやら移動してきたのは亜種の方だったらしい。

戦ってやってもいいのだが、どうやらナルガクルガの方も移動しているようだ。向かった先は隣のエリア9。そこは西側が森となり、その中には大きな樹が聳えているエリアだ。

熱い枝木や葉が覆われていて飛竜にとつて休息に使えるだけの強度を誇っている。つまりナルガクルガはそこで休眠するのではないかと推測される。

そうなってしまうえば体力を回復されることになる。それを許すわけにはいかなかった。

「先に行きな！　ここは押さえておくよ！」

「わかりました。よろしくお願いします」

ブルーウイングの柄に手をかけてナルガクルガ亜種へと向かっていく桐音。それを見送り瑠璃と茉莉がエリア9へと向かっていく。十兵衛もそれに続くが、ちらりと背後を肩越しに振り返れば桐音へと飛びかかっていくナルガクルガ亜種が見えた。

それを掻い潜ってカウンターを入れるようにブルーウイングを抜き放つての抜刀斬り。右翼を薙ぎ払いながら振り返りつつの納刀をし、距離を取りながら自分を見ている十兵衛へと首をしゃくつて行け、と告げる。

それに領き、十兵衛は瑠璃達を追いかけてエリア9へと移動していった。

「さあて、あたいがまた相手をする事になる、か。いいね、また楽しむそうじゃないか」  
「グルルル……い！」

「ということ草薙桐音、タイマン、張らせてもらうぜ？」

三人がいなくなってしまうが、ある程度ここに留めておいて原種に合流させないという役割も果たせる。原種の体力を推測すればあの三人でも問題なく討伐ないし捕獲は出来そうではある。

ここはあの三人を信頼し、この亜種をいいところまで追い込む、または討伐まで持つて行ってやろうじゃないか。

ブルーウイングに手をかけながら桐音はそう不敵に笑みを浮かべるのだった。

一方エリア9へとやってきた瑠璃達は、森にある樹に向かいつつ辺りを見回しているナルガクルガと遭遇していた。当然エリアに入ってきた瑠璃達に気づくと低く唸り声を上げて威嚇し始めた。

最初に飛び出したのは瑠璃だ。火竜剣〔火燐〕を手にして長剣形態とし、先手を取るように滑空する。それに続くように茉莉も盾を構えながら疾走し、十分に距離を縮めたところで古代式回転銃槍を抜く。

背後では十兵衛が雷砲ラギアブリッツに通常弾Lv2を装填して様子を窺っている。ナルガクルガは威嚇しながら尻尾を勢いよく振り回し、先手を取ろうとする瑠璃よりも速く黒毛を撃ち出した。

だが瑠璃は身を捻って躲し、隙だらけになっている顔を両断するように火竜剣〔火燐〕を振り抜く。毛は彼女の背後にいる茉莉にも襲い掛かったが、盾で弾きながら更に前進する茉莉に影響はない。

頬を薙ぎながら側面に回り込む瑠璃に続くように、茉莉も左翼へと回り込みながら古代式回転銃槍を突き出し、砲撃する。反撃するようにナルガクルガがまた二人を吹き飛ばすように回転するが、茉莉は盾で防御して一突き。安定感のある攻守を見せていた。

「はあっ！」

回転を上に乗る飛ぶ事で回避し、羽ばたきながら上を取りつつ斬り、突きと繰り返して攻めていく。そんな瑠璃を叩き落そうと翼を振るってくるが、それを躲しつつ火竜剣【火燐】に炎を纏わせ始めた。

十分に高めたその火炎を一気に刀身に発現させる。火の粉が尾を引きながら燃え盛り、強く薙ぎ払われた火竜剣【火燐】によって翼から足へと大きく傷を作ってしまう。斬撃の苦痛と火炎の熱さによる二重ダメージによってナルガクルガは怯んでしまい、更に続けて右翼を斬れば体を支える力が抜け、たまらず転倒。

その隙を逃さず茉莉が古代式回転銃槍のギミックを始動させて一気にエネルギーを充填。

左翼から背中へと突き抜けるように銃口を合わせて体を支え、解放。轟音と共に放出された竜撃砲。耳をつんざくような轟音だが、慣れてしまえばどうという事はない。むしろ竜撃砲をぶつ放すのが快感になってくる。

あまり表情が変わらないのでわかりづらいが、少しだけ頬が紅潮している、ように見える。

「ぶつ放すツスよー!」

離れたところでは十兵衛が電撃弾を連射している。調合して数を増やした電撃弾を惜しみなく消費し、ナルガクルガへと攻撃を仕掛けていく。

三人の心は一つ。

ここで一気に決めるのだ。

しかしナルガクルガとてただ狩られてやるわけにはいかなかった。

ナルガクルガも自分の体力の限界が近づいてくるのを感じたのだろう。四肢に力を入れて起き上った奴はそのまま背後へと跳び、その金色の瞳に真紅の光を宿したのだ。

そうして怒りの咆哮をあげる。

最後の怒り状態だろう。だからといってどうという事はない。

怒り状態を相手にしたとしても問題ない、という余裕。殺気をぶつけられれば恐怖を感じるだろうが、それでも退かぬという意志。かといって油断しないという心構え。

それらを抱えて先陣を切るのは瑠璃だ。

桐音がいれば彼女は楽しそうな笑みを浮かべながら斬りこんでいくだろう。だが今彼女は隣のエリアでナルガクルガ亜種を引き付けていることだろう。

だから瑠璃は茉莉と二人で狩りに行く時のように先陣切って攻撃を仕掛けていく。ナルガクルガは素早く横へと回り込むように跳び、滑空する瑠璃を叩き落すように翼を振り下ろしてきた。

「ふっー」

強く翼を羽ばたかせながら体を捻りながらの旋回。すぐそこを空を切りながら鋭い

刃が通り過ぎるのを感じながらぐつと火竜剣「火燐」を握りしめ、肩へと突き出し、薙ぐ。

そんな瑠璃を落とそうと今度は尻尾を振るったが、瑠璃は高速で空中を移動して躲し続ける。それでも目障りな敵を撃ち落とそうとしたのだが、逆に自分が電撃弾を撃たれ続けて怯んでしまった。

「グルルル……！」

ナルガクルガの視線が十兵衛へと向けられる。標的にされたか、と感じながらベルトリンクを抜き、一発の弾を装填する。ナルガクルガが瑠璃から離れるように跳び、そのままぐつと四肢に力を入れて身構える。

そんなナルガクルガの顔を狙って引き金を引き、着弾。十分に力を溜めたナルガクルガが十兵衛へと飛びかかろうとしたのだが、着弾した弾が爆発する。瞬間、ナルガクルガの体勢が崩れて転倒してしまった。

徹甲榴弾の爆発音に反応したのだ。力が抜けたナルガクルガへと、瑠璃はダブルセイバー形態にした火竜剣「火燐」を手に接近。勢いよく回転させながら翼、横っ腹、足と高速で刃が斬りつけていき、その度に赤い炎が躍る。

向こうでは茉莉が排熱状態に入っている古代式回転銃槍を手に、弱くなっている足を突き、砲撃。隙だらけな今は溜め砲撃を放って更にダメージを重ねていく。

最早ナルガクルガに流れはない。

黒い体はボロボロだった。幾多の斬られた傷、焼けた傷、貫かれて吹き飛んだ傷。

そうして黒い毛は赤黒く染まり、今もなお血に濡れ始めている。その体でなおナルガクルガは最後の抵抗を続けていく。尻尾を振るい、叩きつけ、また薙ぎ払う。

「もう、当たらないっ!」

横で勢いよく振り下ろされる伸びた尻尾をやり過ぎし、火竜剣【火燐】を手にしながら回転し、尻尾の側面から後ろ足へと連続して斬っていく瑠璃。尻尾の動きは完全に見切った。

茉莉も強固な盾で攻撃を防ぎ、カウンターの要領でひたすらに突いては砲撃。先端が尖っていないため、まさに傷口にねじ込むように古式回転銃槍を突き出している。負傷率の高さからみてもこの攻撃はかなり効いているようだ。

だがナルガクルガは二人から逃れるように今まで以上の高さで跳び、茉莉の背後を取った。

「……ッ!?!」

背後に着地する気配。続けて着地の際に発生する風圧が襲い掛かるが、リオハートシリーズによって風圧には耐性があるので問題ない。

振りかぶられる翼を感じて茉莉は盾を構えながら振り返る。薙ぎ払われる翼を盾で



防ぐがしつかりとした防御じゃなかったために強く弾かれる。それに踏ん張ったが、体を捻るナルガクルガの尻尾が襲い掛かってくる。

鞭のようにしなりながら迫る尻尾を防ぐ術はない。気を込めてダメージ軽減を計らいながら茉莉はその一撃を受けて吹き飛び、瑠璃の声を聞きながらも何とか受け身をとりとうとした。

しかし勢いは強く樹まで吹き飛ばされて幹に叩きつけられた。向こうから「茉莉さん!？」と驚く十兵衛の声が聞こえるが、叩きつけられた衝撃で声が出ない。

そんな彼女をフオローするように十兵衛が駆け寄ってくるが、ナルガクルガがその動きに気づいて十兵衛へと回り込んでいく。

「だから近くに寄ってこられると困るツスよ!」

と言いながらも手は素早く動いてチップから取り出した複数の弾を一気に装填していく。回り込んできたナルガクルガが翼を振るおうとしているところを見越して側面へと跳びつつ、雷砲ラギアブリッツに装填した散弾を発射。

ばら撒かれる小さな弾が幾多も襲い掛かり、ボロボロの体の傷を抉ってくる痛みにもナルガクルガが呻いてしまった。

その隙を逃さず、瑠璃が頭上を位置取って火竜剣【火燐】を長剣形態にし、刀身へと火炎を纏わせながら一気に急降下した。頭にも十分なダメージを与えている。

弱った部分に決定打を。

迫ってくる熱気にナルガクルガははっとした表情で見上げようとしたが、それを防ぐように十兵衛がポーチから音爆弾を取り出して投擲。破裂した高周波の音がナルガクルガの耳を侵し、たまらず硬直してしまった。

その隙をついた一撃。

燃え盛る刀身は額を貫き、彼女の急速落下の勢いが加わって鱗を焼きながら埋没していった。刹那、轟々と燃える炎がナルガクルガの頭を焼き、断末魔の叫びを上げながらナルガクルガの体が痙攣しだす。

その声は尾を引きながらエリアに響き渡り、やがて力を失ったように体を地に伏せた。

「……………ふう」

それを確認した瑠璃が息をつきながら深々と突き刺さった火竜剣【火燐】を何とか抜き、地を払うように横に振って納刀した。そうしている間に十兵衛が茉莉の下へと駆け寄り、「大丈夫ツスか？」と声を掛けながら彼女の体を起こしてやった。

「ええ、大した傷ではないですよ」と控えめに微笑を浮かべながら差し出された手を取って茉莉は立ち上がる。ぱんぱん、と埃を払っている茉莉の様子を見ると本当に大きな傷に放っていないようだ。これもリオハートシリーズのおかげだろう。

瑠璃がどこか心配そうに駆け寄ってくるが、彼女にも大丈夫だと示すように微笑を浮かべてみせる。

何にせよこれでナルガクルガの討伐は成功した。

あとは隣のエリアにいるナルガクルガ亜種だ。彼女一人で戦っているがどうなっているだろうか。三人は揃って駆け出していった。

それは均衡しているのか、あるいは勢いによって傾いているのか。

見る者はどう思うのだろうか。

「はっはあ！ おら、もういつちよおお！」

嬉々としてブルーウイングを振り回す桐音。両手で握りしめたそれを軽々と振り回す彼女はオレンジ色のオーラに包まれている。この色は轟気だろう。それに包まれている彼女は荒々しさを感じさせるような雰囲気や瞳に宿し、彼女をかく乱しようと跳び回るナルガクルガ亜種を見つめている。

フットワークの軽さを生かして彼女の視覚に回り込んだナルガクルガ亜種は、勢いよく尻尾を叩きつけて彼女を押し潰そうとした。しかしそれを感じ取った桐音は振り返らずに横へと跳び、肩へと担ぎ込んだブルーウイングを振り返りながら勢いよく振り下ろす。

技術などない、そこにあるのは力任せな一撃だった。

しかし大剣ならば十分な破壊力を見込める。それは硬い刃のような翼を叩き折り、破片が宙に舞う。その痛みに耐えられずナルガクルガ亜種が転倒してしまい、それを見た桐音はブルーウイングを納刀し、ぐっと柄を握りしめて力を溜め始める。

「ダメだねえ……全然ダメだ。最初の内は心躍ったけど、忍耐力がないようだね。轟気、収束。剣気顕現！」

その言葉に反応して彼女を包み込んでいたオレンジ色のオーラがブルーウイングへと移動し、凄まじい勢いで気がうねって剣を形作る。刀身はまるで何かの爪のように三つの刃が鋭く尖って形作っていた。

「呑まれたかい？ だったら仕方ないね。でもこれに呑まれるようじゃおしまいだよ。それなりに楽しかったけど、終わらせようか？ 亜ナル」

十分に力を溜めた桐音は勢いよく地を踏みしめながらブルーウイングを振り抜く。蒼い刀身と爪のようなオレンジ色の刃がナルガクルガ亜種の腹を鋭く切り裂き、鮮血が怒涛の勢いで噴き出してきた。

ナルガクルガ亜種の鱗や毛は硬いことは硬いが、しかし他の飛竜らと比べれば少し落ちる程度。彼らにとって防御よりも回避の方が得意だからだ。それは素早さを重視する生態からしてもよくわかる。

一番硬いのが翼にある刃。これは大抵の武器を弾くだけの強度はあるが、これに並ぶ

硬さは他にない。しなやかでそれでいて硬い毛と鱗が体を守るだけだ。

それを突破すれば、あとは重い一撃を叩き込むだけで十分にダメージが見込める。

そして桐音の一撃は一気にナルガクルガ亜種を瀕死へと追い込んでしまった。溜められた一撃と轟気の剣気。それに追撃するようなブルーウイングの火炎。

悲鳴が響き渡る。

それを聞きながら桐音はブルーウイングを薙ぎつつ身を低くして次の構えを取る。ブルーウイングの刀身は彼女の背後に伸びるようにされ、握りしめられた腕は自分の腰付近の背後へとある。

その状態で更なる力を溜める。

必殺の溜め斬りの次の段階、通常の溜め斬りよりも上の威力を叩きだす強溜め斬りの構えだ。

彼女のただならぬ気配にナルガクルガ亜種は何とか逃げ出そうとしたが、跳んだ瞬間に振り下ろされたブルーウイングの一撃がまた翼に叩き込まれたために文字通り叩き落された。

その様子に桐音は溜息をつきながらブルーウイングを構える。

「やれやれ、終わらせようか？ 剣術が——」

そう呟いた瞬間、ナルガクルガ亜種は最後の抵抗とばかりに何とか起き上って尻尾を

振り回してきた。それを冷静に構えを解いて盾にするように構えて防ぐ。その隙をついてナルガクルガ亜種は桐音から距離を取るように後ろへと跳んだ。

そのまま尻尾を振り回し、あの濃密な毛を放出してきた。空を切る音も原種のものとは違う、かなりの威力があるそれを桐音は冷静にやり過ごしていく。背後で着弾していく音を感じながら、往生際の悪い子供をなだめるように「腹、括ろうじゃないか。なあ、亜ナル？」とどこか優しげに声をかけて——消えた。

どこに消えた、とナルガクルガ亜種は焦ったが、どうせ今までのように側面から来るのだろうか判断し、その場で回転して尻尾を薙ぎ払う。が、手ごたえがない。ならばもう一度、と尻尾を振り回したのだがやはり手ごたえがない。

「——どこを見ている？ 剣術奥義が——」

声は、ナルガクルガ亜種から数メートル離れたところから聞こえてきた。水際に生える高い水草の中に身を隠しながら、桐音はブルーウイングを構え、姿勢を低くして力を高めていた。

その視線はしっかりとナルガクルガ亜種を見据え、十分に力を溜めたそれを解放する。

あれはまずい、そう感じたナルガクルガ亜種はそこから離れたのだが、そうしたところで意味はなかった。逃げるナルガクルガ亜種を追うように狙いを変えながら桐音は

ブルーウイングを振り抜いた。

「――断崖！」

それは文字通り崖を断つ一撃。

振り抜かれたブルーウイングからオレンジ色の気刃が炎を纏って放出され、大地だけでなく空気すらも切り裂き、かち割っていく。

それはまさに剣の衝撃波。

纏われた気を巻き込み、振り抜かれた剣から発生する衝撃波だけでこの現象を作り出していた。走り抜ける衝撃波は逃げたナルガクルガ亜種を逃がさない。例え飛んだとしても彼女はそれを空中に撃ち出して落としていただろう。

ナルガクルガ亜種を通り抜けた衝撃波はそのまま背後の森すらも巻き込み、木々をも真つ二つにして数メートル突き進んでいった。

……そう、真つ二つだ。

オレンジ色の気刃を含んだ衝撃波の疾走は大地も、木々も、そしてナルガクルガ亜種をも切り裂き、蹂躪した。通り過ぎた先には割れた傷跡と吹き飛んだ砂や草、そしてそれらを赤く染める血が残される。

「……ふう、久々の一撃は疲れるな」

大きく息を吐いて桐音はブルーウイングを納刀して両肩を揺らし、回した。つつい

はっちやけてしまったが、これもあの三人がいらないからこそできる芸当だ。誰かがいればそれらをも巻き込んで切り裂きかねない一撃なのだから。

(本当に大剣の剣術は人に使えるようなもんじゃないな。まさに、対竜剣術つてな……) 肩や腕を回しながらそんな事を考えているとエリア9の方からあの三人が駆け寄ってくる。そして割れた大地を見て瑠璃がどん引きしているのが見えた。茉莉も興味深そうに口元に指を当てながら「ほうほう……」と呟きつつこの惨状を見回している。

十兵衛もあの骸に隠れているがどん引きしているんじゃないだろうか。そんな様子に苦笑しながら桐音は片手を上げて三人を出迎えた。

ナルガクルガ亜種の素材を剥ぎ取り、エリア9に戻ってナルガクルガの素材もはぎ終えた四人はベースキャンプへと帰還した。クエスト達成の旨を伝え、ユクモ村へと戻る準備を進めていく。

今回も特に問題なくクエスト達成する事が出来た。不安定だったが乱入してきたモンスターもいなかったし上々だろう。最後に桐音がどういいうわけかともない芸当を見せていたようだが、本当に一体何者なんだろうか。

瑠璃は竜車へと荷物を積み込みながら彼女の事を横目で見てみる。

実力者というのは間違いない。実際にこの目で確かめているし、彼女のおかげで体術の鍛錬も幅が広がっている。



だがあのオーラ。

どういう原理を使っているのか様々なオーラを纏って戦う、というのはよくわからな  
い。気を纏う、という技術に近しいのだろうか、あれはただの気ではないのは間違いな  
い。

そして武術。

マイナーなものといっていたが恐らく草薙の剣術なのだというのはわかる。草薙の  
者しか使えないという事はあのオーラが関係しているのだという事が推測できる。

草薙の一族……何者なんだろうか。

訊いてみたいが、弟の一件もあるようだしそう気安く訊いていいものじゃないかもし  
れない、と瑠璃達は踏み込めずにいた。それに自分達はチームだが一時的なものだ。自  
分達には話せない事があるし、それを抱えているからこそ訊けないというものもある。

どうしたものか、と考えていると桐音が荷物を手にしながら何かに反応して顔を上げ  
る。

そのまま北の方角を睨み、目を閉じて集中し始めた。

「どうかしましたか？」

「……………まさか」

茉莉が声を掛けるが桐音は目を閉じたまま気配を探り続けているだけ。そうしてそ

れに気づいた時、桐音は荷物を放り出して走り出した。その際掛けてあったロープを手に取り、羽織りつつ坂を駆け下りていく。

「ちよ、姉御!?! どこ行くツスカ!?!」

「……ただ事ではないですね。追いかけてみましょう」

「そうね、行くわよ、十兵衛!」

「え、マジっすか? ちよ、待つてツス!」

桐音の様子が普通ではないと判断した茉莉が走りだし、それに瑠璃も続いて坂を駆け下りていく。十兵衛も慌てて荷物を置き、彼女らを追うように走り出した。

坂を駆け下りた桐音はその勢いを殺さないままに跳躍し、段差を飛び越えて着地してエリア4へと北上していく。彼女の背中を見失わないよう瑠璃達も何とか段差を飛び越えていき、エリア4を目指した。

だが桐音はエリア4へと来ると立ち止まり、辺りを見回し出す。

ここは広いが左手は高い岩山になり、右手は崖になっている。平地は転々と廃墟が存在するだけで、それがなければ完全な平地だ。その中で桐音は何かを探るように辺りを視線で巡らせ続けている。

追いついた瑠璃が「いつたいどうしたつてのよ?」と声を掛けるが返事はない。

やがて桐音は小さく息をつくど、

「とつとと姿を見せたらどうだい？ あんな風にわかりやすく気を放ったんだ。あたいを呼び出したんだろ——クソ野郎ッ!」

その呼び声は怒号だった。

殺気を放ち、彼女がそうやって呼びかける相手といえは聞いた話だが一人しか思い浮かばない。そしてそれに応えるように、何者かが廃墟の上へと降り立った。

それは少年だった。

黒い髪をオールバックにし、竜の紋が描かれた赤いローブを纏い、右手に持つ槍でとんとん、と肩を叩きながらじつと桐音を見下ろしてくる。その鋭い碧眼はどこか喜色が見えるようで、桐音の殺気に満ちた碧眼と交差している。

そして十兵衛はあの少年を見て、「あ、あいつは……あの時おいらを襲ってきた奴ツス!」と指差しながら叫んでいる。その言葉から、瑠璃と茉莉もあれが誰なのかを察した。「よお、久しぶりって挨拶した方がいいかい？ 姉貴?」

「……てめえに姉貴呼ばわりされたくないんだがねえ、愚弟? どういうつもりだい？ 今ここであたいを呼び出すとは……そんなに、死に急ぎたいのかい?」

「くつく、相変わらず殺気に満ちてるねえ……嬉しいねえ、そうやってオレを殺したがっているのは……でも、悲しいなあ……相変わらずつまらないやり方で殺しているなんて、さ」

左手で顔を覆いながら実に悲しいです、という風に首を振る。「どういうことだい？」と問いかけながら、桐音はローブに手を入れて武器を探っている。それに気づいているようだが、少年——草薙武は「だつてさ」と前置きしながら手を広げてまた首を振った。「草薙の剣術を振るわずにわざわざ戦い続けている。……つまらないよね、それつてさ。オレ達の武術はあいつらを殺るためのもの。惜しみなくそれを振るつて殺してやる、そういうもんだらう？ どうしてわざわざ戦いを長引かせるのか、姉貴、つまらない奴にまだ成り下がっているのかい？ 悲しいねえ、オレは悲しいよ」

「……はっ、さつさと殺してやる？ それこそつまらねえだらうよ。狩りはあたいらハンターとあいつら飛竜らの戦いさ。戦いつてのはその過程が大事だらうよ。とつととくたばつちまう早漏野郎なんぞにあたいは興味ねえな。……愚弟、どうやらてめえは相変わらず早漏らしい。磨き上げた技術は早急に狩るためのもんじゃねえ、その技術を用いてやつらとどれだけ斬り結べるのか、命を懸けて殺りあえるのかを楽しむためのもんさ」

そう言った桐音はローブからいつも腰に下げているあの二振りの小太刀を抜く。瞬間、小太刀が淡い青の光を放ち出す。握りしめた桐音の気に反応しているのだろうか、その光は静かで冷たい雰囲気を漂わせている。

それを見た武はまた小さな笑みを浮かべて「懐かしいねえ……それが抜かれて光るの

も」と呟いた。

「愚弟、てめえはただ殺して素材を得る事だけを考えるくだらなくもつまらない、そしてクソな早漏に成り下がった野郎だ」

「早漏早漏うるさいねえ……男としては悲しいよ？ オレのモノは結構やんちゃな暴れ馬だぜ？」

「はっ、その長くて鋭いモノは淡々とフィニッシュを突き出すだけだろうが。そのどころが早漏じゃないって？ せめて数十分は突き続けな。もちろん、単調にならずに様々な技術を使ってなあ！」

「……なんスカこの会話は……」

「これはひどい」

後ろにいる十兵衛は呆れ、茉莉は無表情に呟くだけ。瑠璃は少し赤くなつて拳や唇を震わせている。しかしそんなツッコミも気にした様子もなく桐音は小太刀を手にしながら中指を立ててやる。

「だがそんな日々も今日で終わらせてやる。あたいが、終わらせる。そして差し出しな、てめえが里から持ち去つたあの剣をな！」

「……………くつく、残念ながらそれは断るぜ、姉貴。あれはまだ眠り続けているんでね、オレが目覚ましてやるのさ。今回もナルガの天鱗を求めてやってきてみたが……残

念、あれにはなかつたらしい。悲しいねえ……」

「はつ、またあれに執着してんのかい？ あれが仮に目を覚ましたところでてめえが扱えるような代物じゃないさ。それに、あれを使う時期でもないだろうに」

「……んん？ “使う時期” じゃない？ 寝ぼけてんのかい、姉貴？ 悲しいねえ…… どうやら気づいていないとみえる。そうまで姉貴は落ちぶれてしまったようだ。悲しいねえ……実に悲しい」

「……どういふことだい？ 愚弟、てめえは何を知っている!？」

ただならぬ言葉に桐音が声を張り上げるが、武はにやにやと笑うだけで答えない。逆にローブを翻すと、右手に持つ槍を両手に構えて回転させて先端を桐音に向けた。

そうして廃墟から飛び降りると、音もなく着地して「……知りたければ、オレを屈服させてみなよ、姉貴？」と挑発的に冷笑を浮かべて告げる。

その言葉に「上等だ」と淡々と告げながら桐音は数歩前に出ていった。

「それじゃあ久々に——殺りあおうか、姉貴?」

「早々に音を上げるんじやないよ？ そんなんじやあつまらねえからさ、愚弟?」

その言葉が狼煙となり、同時に二人は相手に向かって疾走した。

ここに、草薙姉弟による喧嘩が始まる事になる。

## 38話

纏っているローブを短くして肩に纏めた二人の戦い。初手はリーチが長い槍を手にしている武だった。踏み込みながらの高速突きによつて槍は桐音の心臓めがけて伸びていく。まだ距離が離れているというのに鋭い刃が自分の胸へと迫ってくる光景に、桐音はあくまで冷静に小太刀を側面から当てて受け流し、躲しながら武の懐へと入り込んでいく。

しかし受け流された槍は素早く引き戻され、武の足運びによつて一定の距離を保ちながら再び槍が桐音へと迫る。

それを桐音は全て小太刀で捌き、武へと迫ろうとするも彼はそれを防ぎ、守りを突き抜けるように更なる高速突きを放ち続ける。

そうなれば訪れるのは均衡状態。

一定距離で二人は目で追えない程の高速の剣戟を繰り広げる。

どちらも相手を殺す気で振るっているため、空を切る音がとんでもない。刃がぶつかり合う甲高い音が連続して響き渡り、瑠璃達はその戦いに目が離せなくなっていた。

鍛錬では見れない本気の桐音がそこにいる。

「……あれだけの速さ、あの人に及ぶかもしれませんね」

「やっぱり、そう思う？ あの人か……あるいは今はいない彼女かな」

「ああ、あの人も凄かったですね」

「え、お二人さん、あの領域の人、知ってるんスか？」

「ええ、まあ……ちよつとした知り合いが武術の達人だったもので」

頭によぎるのは村にいた時に体術の面で鍛えてくれた兄貴分の青年と、その従妹の少女の事だった。あの二人が鍛錬と称した本気に近いぶつかり合いもあんな風だったと思ひ返す。

しかしその時は武器を持たず素手での戦いだった。時に武器を持ったことがあるがその時は刃は潰しているか木刀かだった。決して真剣ではない。

だが二人は本気でぶつかり合い、でもどこか楽しそうにしていた。

たぶんあの領域に達するにはかなりの才能の高さと、磨き上げられた技術によるものだろう。

目の前で起きている事もその内の一つ。

磨き上げられた技術によって生み出される高速の剣戟。

桐音を貫かんとする槍は心臓、額、胸、両腕と狙いを変えてあたかも弾幕の如く放た



れている。普通に目視するには難しい程の速さのはずだ。普通ならば捌き切れずどれかを受けてしまい、その隙について一気に刺し貫かれていく事だろう。

だが桐音は全てを捌き、受け流している。両腕で操られる小太刀もまた普通に目視出来ない程の速さで操られ、自身に迫るその弾幕のダメージをゼロにする。

その上ですり足で距離を詰めようとしているのだが、武も同じように動いて距離の差を変えていない。

いつまでも変わらないこの硬直状態を崩すため、桐音は静かに呟いた。

「……迅気、纏」

瞬間、桐音に黒いオーラが纏われる。

それに気づいた武が動こうとした刹那、桐音の体が沈んだかと思うと一気に武の懐へと潜り込んでいた。沈んでいた体が伸びると同時に手にしている小太刀も武の胸へと伸びてくる。

が、引かれた槍がぐるんと回転して小太刀を弾き、続けて「迅気、纏」と武も呟けば彼にも黒いオーラが纏われた。小太刀を弾いた槍を更に回転させながら桐音の足元を払いつつ距離を取るように下がる。

それに取りられないように桐音が動き、距離を詰めるが武は一瞬のうちに廃墟の後ろへと回り込んで消えた。

隠れるとはどういうつもりだ、と感じるが、奥から聞こえた「風牙気、収束」という言葉に気づき、背後にいる瑠璃達へと「あんたたち、逃げなつ！　あるいは防衛体勢をとれえ！」と叫んだ。

それに驚く瑠璃だったが、茉莉は何かを感じ取ったようで「瑠璃、下がりますよ！」と叫ぶ。だがそれより早く十兵衛が動き、二人の間に入ると背後に札を数枚投げて「障壁展開」と告げながら二人を抱え上げる。

それにまた驚く瑠璃をよそに、地を蹴って一気に走り出した。

「槍術奥義が一、暴風！」

巻き起こるのは渦を巻く風。廃墟を崩し、瓦礫と砂と雑草を巻き上げて桐音だけでなく、その背後にいた瑠璃達をも牙を剥くそれはまさしく暴風。無慈悲なるその風は、身を切り裂く竜巻だけでなく巻き込んだ瓦礫をも攻撃となって襲い掛かってくる。

それを舌打ちして桐音は横を駆け抜ける。ボロボロになってしまった廃墟は暴風によつて完全に崩壊、あの渦巻く風の中で悲鳴を上げながら空中で無理やり踊らされていた。

あれを作り上げている武は槍を回転させ続けており、桐音が側面を走り抜けているのを見越して一度回転を止め、そうすれば巻き上げられていた物が一度停滞したように空中に留まる。

「おらあつー」

それらを吹き飛ばすかのように、槍を強く薙ぎ払えば先端を渦巻く風もそれに従って断空する。振るわれる風の刃は槍のリーチを越え、離れたところにいる桐音だけでなく瓦礫をも切断しながら強い風によって吹き飛ばす。

が、桐音は見えない刃である風を見切っていた。

振るわれる槍の軌跡とそれを渦巻く風の動きを見据え、跳ぶ。

空気をすらも斬る刃を飛び越え、吹き荒れた細かくなり始める瓦礫の残骸が桐音に襲い掛かるが、ガンキンSシリーズを纏っているためどうという事はなかった。

「……とんでもねえッスね」

二人を抱え上げて距離をとった十兵衛は肩越しにあの二人を振り返る。仮面の奥から光る瞳はじつとあの戦いを見据え、ローブの中に手を入れてまた札の準備をしていた。

「……いや、あんただってとんでもないわよ。あたし達を抱え上げられるなんて、どれだけ力が……」

「意外ですね。……いえ、そうでもないのでしょうか。ヘビィ使いな上にディアブロUシリーズを身に付けているのですから」

「まあ、そうッスね。……なんスか？ おいらが力があるつてのがそんなに意外ッスか

？ おいらだつてハンターツスからね、体くらい鍛えてるツスよ？」

瑠璃と茉莉だけでなく彼女らが身に着けている装備の重量があるというのに、それを片手で抱え上げて疾走。剣士タイプならばそれをこなしても特に違和感はないが、ガンナーである彼がこれだけの力を保有している。

その防具の下には華奢にも見える体がある。とはいえ鍛えられている、とは感じられるのだが、これほどのものとは思わなかった。

「それにしても……とんでもない戦いツスね。めっちゃくちゃじゃないツスカ」

桐音は再び武へと迫り、今度は懐に入り込んで斬りかかっている。彼女は今、先ほど以上に黒いオーラを纏い、それは手にしている小太刀にも纏われている。元々発揮されていた淡い光は漆黒のオーラに隠されているが、微かにその名残を見せている。

懐に入り込めば小太刀に分がある。長い得物である槍は近距離戦では少々扱いづらい。

突きは距離があつてこそその力を発揮する。近距離では小突くか柄や石突きで対処するしかない。

振るわれる小太刀を柄で捌きながら武は静かに「迅気、纏。角気、収束……纏」と続けて呟いた。その上で武は更に距離を取るように動き、槍を回転、振るつて小太刀を弾きながら隙を窺った。

更に槍には黄土色のオーラが纏われ、小太刀が当たる度に先ほど以上の手ごたえが感じられた。弾かれる音も変化していることから、槍に纏ったオーラが槍の強度を上げているのだろう。

「……轟気、纏。氷牙気、収束」

纏われた漆黒のオーラが消え、今度はオレンジ色のオーラが桐音に纏われる。続けて小太刀には白い冷気にも似たオーラが纏われた。それに気づくと、武は小さく舌打ちする。

「氷牙気、か。どうやら姉貴も新たなものを発現させたらしい」

「お前こそ、風牙気をあそこまで扱うとは……でも無差別つてのは変わってないらしいな？」

「くつく、あれで死ぬんだったら別に気にする事でもないだろ？　そこらの奴らに気を回す程、姉貴は器用だったか？　それに死ぬんだったらそれでいいだろうに。オレが、その血を有効に利用するまでよ」

「……クスが」

ギリツ、と歯を噛みしめれば桐音が纏っているオレンジ色のオーラが彼女の感情を表すかのように荒々しく揺れ、炎のように燃え上がる。ピリピリと空気が震えだし、獣か竜の唸り声が聞こえてきそうだった。

そんな彼女を見た武はまた「くつく」と小さく笑い、槍の先端を桐音ではなく桐音から立ち上るオーラを示した。

「ホント、姉貴には轟気がよく似合う。迅気も昔から結構使っているけど、やっぱりここ一番じゃ轟気だよな？　姉貴の感情に合わせて揺らめくそのオーラ、オレは結構好きだったよ」

「……はっ、てめえに好かれても何にも嬉しくないねえ。むしろ殺したいよ」

「だろうな、うん、わかってたよ。そしてオレはオレで迅気だ。早さを求めるオレには迅気がよく合ったよなあ。……で、今回姉貴たちはナルガを相手にしていたわけだが、これ、回収してないよな？」

そう言いながら懐から取り出したのは瞳だった。死してなおそれには眼力が宿っているようで、瞳が桐音に向けられるとまるでナルガクルガに睨まれているかのようだ。

これを武は指で弄り、転がすようにしたかと思うと、ぐつと握りしめる。するとそこから強い気が発せられ、黒いオーラが煙のように立ち上りだした。それに気づいた桐音だが、今もなお吹く風に乗せられた黒いオーラの奔流に飲み込まれた事で踏み込めない。

そうして稼いだ時間で武はこの瞳から得た力を味方にする。

「瞳には力が宿る。この迅竜の瞳もまた同様。十分にオレの迅気を高めてくれるぜ。そ

れが、これだ！」

迅竜の瞳から高められたオーラは武が纏っている漆黒のオーラと同調し、先ほど以上のオーラへと変貌する。その結果、オーラは変質し、何かを形作っていく。

「……………つ!? なに、あれ……………?」

「これはこれは……………やはり草薙の技術というのはああいうものだというわけですね」

「……………興味深いツスね」

武の背後に集まった漆黒のオーラは一頭のナルガクルガを形作った。実体ではなくオーラという揺らめく存在ではあるが、ナルガクルガが幻影のように武の背後に控える。

はつきりとした姿で存在していないが、その輪郭、放つ雰囲気からしてナルガクルガであると思われる。

「迅気……………すなわち迅竜の気、という意味でしょう。オーラの色合いにそれによって得られる特色。ナルガクルガのものではないかと思ってきましたけど、確かなものでしたね。という事は今桐音さんが纏っている轟気の正体は——ティガレックス」

じつと様子を見守っていた茉莉がそう分析する。

それは当たっているだろう。迅気がナルガクルガの特色、速さを上げるためのものならば、轟気の特徴は力を底上げするためのもの。同時に雰囲気荒々しい獣のようなも

のを感じられる。

ならば轟竜ティガレックスのオーラだと推測できる。

気の名前の共通点としては飛竜らの通称だろう。それを抜き取って名称としている。

となれば他のものらも同様に推測可能だ。

「氷牙気はベリオロス、風牙気はベリオロス亜種……つてところツスね。ナルガと戦っている時に使った火気はたぶんリオレウスあたりじゃないツスカね」

「でしようね。しかし、素材から気を抽出して己の力とする……そんな技術があるとは、おもしろいですね」

「でも、あれほどのもの……扱いきれるわけ？　ここまで届く程の覇気になってるけど、あれを一介の人間が扱いきれるとは思えないんだけど……ん、くっ……!?!」

放出される殺気とナルガクルガの気の奔流が、十数メートルまで離れている三人の下まで襲い掛かってくる。叩きつけられる力は三人の気を侵してきそうなほどに鋭く、まるで刃のよう。

気を緩めれば屈服しそうな程で、何とかそれに飲み込まれないように腕で顔を庇ってしまう。

するとさりげなく桐音が懐から何かの爪らしきものを取り出して腰に下げながら三人の前へと回り込み、纏っている轟気の出力を上げていく。そうすれば彼女の背後に立



ち上っているオレンジ色のオーラが更に変化していき、少しずつ竜を形作っていった。

それは三人が想定した通り、ティガレックスの輪郭が確認できた。震える空気は奴の唸り声にも聞こえる。ましてやそうして正面から相対し、ティガレックスの幻影を形作ればお互いが放ちあう殺気がぶつかり合うのは必至。

ピリピリとした空気は周りの地面をひび割れ、瓦礫が音を立てて転がっていく。

睨み合う桐音と武、ティガレックスとナルガクルガ。

それだけではない。お互いの武器にもオーラが纏われているのだ。

二頭のように姿を見せていないが、これらにも飛竜の力が潜んでいる。小太刀に宿る氷牙気はベリオロス、槍に宿る角気は——ディアブロス。オーラ同士の相性でいえば、氷属性を弱点とするディアブロスが分が悪い。

しかしそれは属性的な意味で、だ。ある程度弱点の影響はあるが、体に纏うのではなく武器に纏わせているので特に大きな問題はない。が、それでも弱点属性を相手にするとしても警戒してしまう。

槍を回転させて構えなおし、じつと睨みを利かせながら距離を少しずつ離しつつ先端を桐音の心臓に合わせていく。桐音もまたティガレックスの影を背負いながら小太刀を構えて少しずつ接近する。

狙うのは決定打を打ち込む隙。

こうまでの力を背負い、武器にも強い力を纏わせ、必殺の一撃を放つ隙。  
『……………』

冷たい風が二人の髪を撫でていった。

緊迫した空気の中、二人は不動のまま睨み合い続ける。

○

森を駆けるそれは血の匂いに誘われていた。鼻をくすぐる甘美な匂いはそれをここまで誘ってくれる。森の木々を掻い潜り、しかし枝木をその巨体で薙ぎ倒していき、大地を踏みしめて突き進む。

この空腹を癒してくれる血の持ち主の下へと向かうために。

そうして森を突き抜けたそれは辺りを見回してみる。すると離れたところに黒い影が横たわっているのが見えた。

見つけた。

それは少し足早に黒い物体へと近づいていく。ただの肉塊へと成り果ててからそんなに時間は経っていない。まだ新鮮味があるその肉に、毛と鱗を纏めて喰らいついていく。所々欠けた部分があるようだが、そんな事はどうでもいい。

その考える事はただ一つ。

この腹を満たしてくれる糧を搾取る事だけだ。

口から血を滴らせながらただただ肉を喰らい、そうしてしばらくすれば肉片一つ残らない程までに喰らってしまった。全てはその胃袋へと収まる。

だが、満たされない。

こんなものでは満たされない。鼻をひくつかせれば、近くからも別の血の匂いが感じられた。どうやらまた別の死体があるらしい。

それはそちらに向かってまた走り出す。

次こそは腹を満たしてくれるだろうかと少しの期待をしながら。

○

睨み合ってからどれだけの時間が経っただろうか。五分だったかもしれないし、十分だったのかもしれない。もしかするとそれ以上だったのかもしれない。

時間の感覚が狂う程に緊迫した空気。それは離れたところで見守っている瑠璃達三人も同じだった。息をする事も忘れる程の空気を肌でも感じられる。

瑠璃はごくりと唾を飲み、茉莉も少し顔をこわばらせ始めていた。桐音のおかげで直

接的に殺気をぶつけられる事はないが、それでもなおひしひしと感じられるその殺気に体は緊張して硬直してしまいそうだ。

「……………動くッスよ」

ふと、十兵衛が呟いた。

それが事実であるというかのように、桐音と武が動いた。ナルガクルガの気を背負う武は一瞬の内に槍の間合いへと迫り、心臓を貫くように槍を突き出した。今までと同じ攻撃ではあるが、高められた速さによる突きは最早奥義の域に達している。

しかも槍にはディアブロスの気が纏われているため単純な槍ではなく、対竜に作られた撃竜槍に近い物だろう。それが高速で迫ってくるのだ、恐るべき物だろう。

だがそれを桐音は両手に持つ小太刀で——弾いた。

交差させた小太刀は刃を受け止め、横へと強引にずらしてしまったのだ。高速で繰り出された突きを見切ってしまった目も異常だが、力のみであの槍をずらしてしまうのも異常。

これも全てはティガレックスの気を背負っているが故に。力任せな防御により槍の軌道がずれ、自分は一気に懐へと踏み込む。が、それくらいは武も推測していた。弾かれた勢いで回転する柄を使って桐音の腹を打ち払ったのだ。

「……………ッ!?!」

「油断したな、姉貴？ もらったぜ！」

呻いた桐音に笑みを浮かべ、首を刈るように弾かれた刃を引き戻して切り裂こうとした。

だが、桐音はにやりと笑みを浮かべてみせた。

左腕で槍の柄を受け止めて防ぎ、右手に持つ小太刀を武の胸へと突き出していった。槍は桐音の腕によって止められている。柄を使って防御する暇もない。決まったかと思われたその一撃だったが、武は小太刀を手づかみで受け止めてしまった。

「なっ……」

「……ふっ！」

驚く桐音の腹を蹴り飛ばして距離を取り、引き戻した槍を手にしようとしたが左手が自分の血で赤く染まっているのを見て小さく笑った。

軽く手を振って血を払い、「治癒功」と呟いてみれば左手に淡い光が集まって傷を癒していった。桐音もぺっ、と少量の血を吐きだし、口元を拭って武を睨む。

「……ん、剣術が——」

「……槍術が——」

呟きあつた瞬間、桐音の小太刀に凄まじい冷気が放出された。白い煙が刀身、先端と伝わって噴射され、それに乗るように桐音は地を蹴った。

白い煙となった冷氣は桐音の疾走の後に彗星の尾のように光の粒子が道に残される。だが少しずつ量が少なくなり、煙が晴ればそこには青と白が混じりあう小太刀の刀身が見えた。

「——凍刻とうこく」

振るわれた小太刀を防ぐように数度刃が打ち合わされ、構えなおした槍を握りしめて姿勢を低くし、

「——天衝——」

そこから胸を穿つように放たれる槍。それは狙いこそ狂ったが桐音の胸を貫通したのだ。

槍の一撃はまさしくディアブロスの角に貫かれたかのような衝撃。その上で桐音もまた小太刀を武の胸へと突き刺していた。

しかし、

「がっ、は……」

口から先ほど以上の血が吐き出され、手にしている小太刀へと流れ落ちる。すると血に反応したのか小太刀を纏う光が更に光を放ち出し、付着した血を吸収し始める。そうして吸い込まれた血は刀身に沿うように動き、紋様を描き始めた。

「これは……ちっ、このまま落ち——」

「あたいがそんな……軟だと……っ、思ってたのかい!？」

右手で突き入れている小太刀から手を離して槍を掴み、左手に持つ小太刀で武の首へと突き出した。それを首を逸らして躲したのだが、小太刀から漏れる冷気が武の頬を凍らせていく。

外れたそれを横にずらして顔を切り裂こうとしたが、それよりも早く武が槍を持ち上げてやる。そうすれば当然ながら貫かれている桐音の体も浮き、振るわれた小太刀は武の顔を捉えられない。

しかも柄が桐音の中で動く事で彼女の表情が歪んでしまう。そんな彼女へと喰らいつくように再び武の背後に形を成したナルガクルガ。オーラによる奔流だが空気を震わせ切り裂くそれに飲み込まれれば致命傷だろう。

それから守るように桐音の背後に現れたティガレックスが前に出る。迫りくるナルガクルガを押しとどめ、桐音を守るかのようなティガレックスは桐音を刺し貫く槍をも切断しようとした。

しかし槍を纏うディアブロスのオーラがそれを許さない。その強度な甲殻をも再現するためそう簡単にはへし折れない。そうなる前に武は一度槍を握り直し、桐音を勢よく放り投げるようにして槍をぶん回す。

傷口を抉られながら桐音の体が吹き飛び、受け身をとれずに地面を転がっていく。し

かし武も小太刀で胸を貫かれていますので全く無傷という訳でもない。それも小太刀に纏われていた冷気によって傷口が凍結している。

荒い息をついているところから見て彼もまた厳しい状態にある事がわかる。突き刺さっているそれを強引に抜き、横へと放り投げる。抜かれた瞬間血が噴き出る、ということはなく、凍つてしまっているが故にそれが止血になつていようだ。

「……やるねえ、姉貴。なるほど、腕は落ちていないらしい。これに關してはオレは嬉しく思うねえ……」

「はっ……てめえこそ、鈍っちゃいねえらしい。……が、そろそろ終わるんじゃないのかい？ 十分、抵抗しただろう？」

「くく、抵抗？ それは姉貴だろう？ オレの暴れ馬にかなりよがつてんじゃないか。そろそろ逝つたらどうだ、んん？」

「残念ながら、逝けないねえ。こんなもんじゃあ足りねえよ。あたいを逝かせたいんだつたら、もう少しテクを磨きな！」

お互い口から血を流している。その上で胸を貫かれています。普通ならば死んでもおかしくない状態だが、二人は自己治癒力を促進させて強引に傷を塞いでいた。

桐音は左手に持っている小太刀を右手に持ち変え、少し弄るように回転させて逆手に持ち変える。相変わらず刀身には彼女の血によって紋様が描かれている。眼前へと小



太刀へと持つていき、また血を吐き出して付着させる。

そうすることでまた小太刀に新たな紋様が浮かび、淡く光る。

あれを見た十兵衛は、いつも桐音が携帯しているあの小太刀は彼女の血に反応する事で、秘められた力を目覚めさせていく代物なのだろうと推測した。つまり彼女のためだけに制作された二振りの小太刀なのだろう。

通常はただの小太刀だが、血を得る事で、あるいは気を纏う事で変化する、といったところか。

となると、武が手にしているあの槍も同様なのだろうか。

そう考えていると武が槍に向かって血を吹きつける。少量の血だがそれだけでも柄に血が這っていき、紋様を描いていく。

(……気だけでなく武器も特別製……か)

顎に手を添えて十兵衛は骸の中からじつと二人を見据える。見れば茉莉も同じようにじつと二人の武器を見つめており、その秘められた力を分析しようとしていた。

「どう見るツスカ?」

「明らかに普通の武器ではないですね。しかも纏っている雰囲気……一種の魔剣ですよ」

「やっぱ魔剣に見えるツスカ……。いや、小太刀ツスカから妖刀ツスカね?」

「ちよ、ちよつと……マジで？ 魔剣とか妖刀とか……そういうのって物語の中の一品かと思ってただけだ。あるいは遙か昔のものとか……」

「おやおや、一般人からすれば私達の使うハンター武器だって一種の魔剣ですよ？」

「ああ……うん、確かにそうね」

何せ使われているモンスターの素材によって、炎の剣になったり水の剣になったりとか変化するのだ。一般に流通している武器らに比べれば異質であり、これらは魔剣と呼べる代物かもしれない。

だがあれは違う。

もしかしたらモンスターの素材を使っているかもしれない。でもそれでも何かが違うと言える。

「でもアレはそんなもんじゃないですね。血に反応して内部の力を解放していく。私達を使うハンター武器とは一線を画している代物です」

「あれ自体に術式が隠されているのか、作る段階で姉御の血を染み込ませながら何かをしたのか……それらが考えられる妖刀ツスよ」

「血を吸って力を増す刀って事ね……やばくない？」

「やばい……んでしようが、桐音さんはいつもあれを携帯していますね。だからあれが

桐音さんにとっての愛刀——ッ!？」

そこまで話したところで茉莉が息をのむ。隣にいる十兵衛も骸の奥で微かに声を漏らしてしまった。そうしてすぐに桐音に向かつて叫ぶ。

「姉御おツ！ やばいツス！ やばいもんがやって来たツス！ すぐに逃げるツスよ！！」

切羽詰ったように叫ぶ十兵衛。

一体何事だ、と思つたが、すぐに桐音も悟つた。対面にいる武も気づいたようだが、僅かに口元を笑みに変えながら振り返る。

それはエリア9の方からのつそりとやって来た。ずんずん、と鈍い振動を起こしながら巨体を揺らしつつ駆けてきながら鼻を動かしている。

かなりの巨体だ。一回の飛竜らよりも大きく感じるその体は濁つた緑色に染まり、長い尻尾には短く生える棘が見られる。その頭部は巨大で大きく裂けた口が確認され、顎には棘が多く確認されるが、その手は体躯に比べてかなり小さく見える。

ぐるり、と辺りを見回し、離れたところにいる桐音達を確認した瞬間、どんつ！と強く足踏みすると大きく息を吸いこみ、天を仰ぎながらエリアに響き渡る程の咆哮を上げた。

恐暴竜イビルジョー。

獣竜種の中でも特に危険な存在が一体どうしてここに？ と思うまでもなく、イビル

ジョーはずんずんと音を立てながらこちらへと接近してくる。それを見た武は「ああ、空気読まねえ奴だな……いや、あえて空気読まなかったとも言うんかね……」とぶつぶつ呟きながら大きく背後へと跳び、纏めているローブを広げて中に手を突っ込んだ。

その間に十兵衛が急いで桐音の下へと駆け寄っていく。桐音も離れたところにある小太刀を呼ぶように短く「来い、朝凧」と告げれば小太刀が反応して桐音の手元へと飛来する。

それを広げたローブの中へと納めた時にはイビルジョーはすぐそこまで迫ってきていた。裂けた口が大きく開かれ、血や肉を喰らった異臭を漂わせながら二人へと噛みついてくる。

「くっ……いっ……」

桐音の腕を引っ張って十兵衛が跳び、先ほどまで二人が立っていた場所がイビルジョーの首が通過していく。何とか受け身を取ってすぐに起き上り、二人は走り出すのだが桐音が胸を押さえながら少し呻いてしまう。

やはり武によって貫かれた部分が痛むらしい。普通なら死んでもおかしくない負傷だったので仕方がない。この状態で走らせるのは辛いだろうが、それでも走らなければ死ぬ。

「ヴォルルルル……！」

唸り声を上げながらイビルジョーが桐音達と武を交互に見る。そうして選んだのは多くの獲物がある桐音達の方だった。それを見届けた武は低く笑った。

「ま、いいさ。今回はこれくらいにしておこう。次に会う時を楽しみにしてるぜえ、姉貴！」

最初は眩き、後半は桐音へと聞こえるように声を張り上げて叫び、武はローブを翻して走り去っていく。声に反応した桐音が舌打ちしながら去っていく武を見送り、イビルジョーもその声に反応してちらりとそちらを見てしまった。

そうして視界に映ったのは武が放り投げた一つの玉。それが破裂して強い光を発生させ、イビルジョーはそれによつて視界を潰されてしまう。悲鳴を上げて仰け反つてしまい、潰された視界の中で無差別に暴れ出すイビルジョー。

そんな様子を肩越しに見ながら桐音はまた舌打ちした。

（はっ……ここでもらっちゃ困るってか？ 余計な事をしやがって……）

あの愚弟に助けられるなんて虫唾が走る思いだが、しかしここはそれに甘んじるしかない。

（いいぜ、次に会ったときには必ず屈服させてやるよ。あたいを生かした事を後悔させるくらいにな……！ この貸し、高くつくぜ、愚弟……っ！）

心の中で悪態をつきながら桐音は齒を食いしぼる。肩を貸してくれている十兵衛について走り、合流した瑠璃と茉莉がイビルジョーの様子を確認し、危険はないことを見越して四人はエリア4を後にした。

そうして一行はベースキャンプへと戻り、早急に竜車の準備を進めて溪流を後にしたのだった。

後に分かった事だが、今回の討伐対象になったナルガクルガとナルガクルガ亜種の死体はどこにもなく、あのイビルジョーが骨まで全て喰らってしまったらしい。

そしてそのイビルジョーはしばらく溪流を彷徨った後、何処かへと消えていったそう  
だ。

武も同様で足取りは掴めず、彼が残した言葉の意味も不明のままだった。  
クエストは達成したが、どこか後味が悪いものになってしまった。

○

ユクモ村を後にした楊蓮華ヤンレンファと劉飛燕リウフェイエン、そしてカヤンバはモガの村に向かってアプトルを走らせていた。カヤンバは小さいので蓮華が一緒に乗せている。

数か月にも及ぶ遠征で各地を巡り、新たな経験を積んできた三人はいよいよ拠点であ

るモガの村へと帰還する。

村にいる若手の二人がその期間の間どれだけの狩りをしてきたのか気になるところだし、自分達の土産話も彼らは期待しているだろう。そう考えると自然とアプトルを急かせてしまいそうだ。

「それにしてもまさかあそこで桐音に会うとはネ。どれくらいぶりになるんだったつね」

「……だいたい一年ぶり、といったところですか」

「おお、それくらいになるかネ。うんうん、懐かしいネ」

懐かしさに目を細め……いや、彼の場合は元から糸目なので関係ない。並走している蓮華もどこか懐かしそうにしているが、不意に何かを思いついたかのように少しだけ表情を変えたような気がした。

「桐音さんとは色々ありましたね」

「そうだね。桐音と組んでいた時期も懐かしく感じるネ」

「本当に。色々あつて思い出すのも——」

「キリがねえ、とでも言うのかネ？」

「——ボケを潰さないでください。つまらないじゃないですか」

どこか怒ったように顔をしかめながら非難するように飛燕を見つめる蓮華だが、彼は

顎髭を軽く撫でながら困ったように笑うだけだ。

「いやいや、突然寒いダジャレを言われる方の身にもなつてほしいネ」

「ンバンバ！ 蓮華の寒いギャグにはワガハイも困つてるンバ」

「心外ですね。そんなに寒いのですか？ 私のギャグはギャングも震え上がらせますよ？」

「感動じゃなくて寒くて震え上がると思うんだがネ。……あと、さりげなく混ぜたからつてドヤ顔しないで欲しいネ。別に上手くないからネ？」

「……辛辣ですね」

眼鏡に指を添えて飛燕にはわかるドヤ顔をしていたようだが、厳しい言葉にどこかぶすつとしている様子を見せる。そんな様子に苦笑していた飛燕だったが、ふとその人のよさそうな顔を引き締め、前を見据えた。

蓮華も何かに気づいて真剣な表情になり、同じように前を見つめた。カヤンバはそんな二人の様子に首を傾げたようだが、道を進むにつれて何かに気づいたらしい。騎乗しているアプトルもただならぬ気配を感じ取ったのか落ち着きがなくなっている。

そうしてやってきたのは森の中で少し開けた場所。

そこにあつたのは数人の遺体とそれを見下ろす誰かだった。

「……………つ、何者かネ!？」



息を飲んだ飛燕だったが、声をかけずにはいられなかったのだろう。それだけその現場は異質だった。

噴き出した鮮血によって地面と草むらは赤く染まり、返り血を浴びたのかその何者かの服装も赤く染まっている。ローブと繋がっているフードを被っているため顔は見えないが、そこまで血が飛び散るほど勢いが強かったのだろう。

手にしている刀も赤く染まり、ぽたり、ぽたりと血が滴り落ちている。

「……んん？ ああ……また新しい奴が来たんだ。ふーん、多少は出来る……ね？」

ぶつぶつと呟いていたが、「ね？」の部分で顔を上げ、そのフードの奥にある真紅の瞳が飛燕らを見つめた瞬間、度し難い程の冷たい空気を感じ取った。何故かはわからない。ただ本能から来るほどの恐怖を感じ取ってしまった。

「ンバツ、ンバアアアアア！」

アプトルがそれによって暴れ出し、その揺らめきによってカヤンバが落ちそうになったため蓮華が慌てて抱え上げる。その隙について何者かが血を蹴って接近してくる。

「ちい……！ 蓮華、逃げるのネ！ ここはわたしが引き付けておく！」

飛燕がアプトルから飛び降りてローブを翻して中へと手を入れ、取り出した剣で迎え撃つていく。刀と剣がぶつかり合い、甲高い音を立てて森に響き渡る。

それを見つめていた蓮華だったが、ぎゅつと唇を噛みしめ、「……すみません」と謝罪

してアプトルを走らせる。

「ンバ!? 飛燕を置いていくンバ!？」

「……………彼を、信じましょう。私達は伝えなければなりません。あれは世間を騒がせている、辻斬りだという事を……………」

あの惨状、遺体となつてゐるのは全て武人だった。手にしている武器、出で立ちから推測でき、そしてあれは現場へとやって来た自分達を口封じに殺してくるだろう。

それにあの声、恐らく若い女である事がわかった。フードに隠れて素顔は見えないが、声から推測できる。それを裏付けるように体格もある程度計れたのも大きい。フードで隠しているが翻つた瞬間に見えたあの着物で推測可能だった。

それらを伝える。

それが自分の役割だ。

苦い感情を抑えて蓮華はただアプトルの手綱を引いて森を駆け抜けるしかなかった。

一方現場に残つた飛燕は戦慄していた。

目の前にいる辻斬りとも割れる人物。じつとフードの下から観察するような視線を向けてきているが、全く隙が見えなかった。これほどの実力者が辻斬り? 一体どういう事なのか、と疑問が頭を埋めていく。

しかしやらなければ自分は生き残れない。

ここで食い止めなければ彼女は蓮華達を追うだろう。この現場を目撃した自分達を生かしておかないはずだ。

それまでの時間稼ぎを。飛燕は斬りこむ隙を窺う。

そうしていると彼女は首を傾げて静かに問いかけてきた。

「……生きたい？」

「……なんだって？」

「生きたい、と訊いてみている」

「……願えるなら、生きたいネ。生かして、くれるのかネ？」

一応答えながらすり足で少しずつ移動してみるが、彼女は小さく笑って見せた。そうしてうんうん、と頷くとどういいうわけか刀に付着している血を舐めながら何かを呟いた。すると刀身に付着している血が刀身へと染み込んでいくではないか。

しばらくすると淡く赤い光が浮かび、紋様を作り上げて消えていった。そのまま刀をローブの中へとしまってしまう。

見逃すというのか？

そう考えたのも一瞬。彼女はフードの奥からじつと飛燕を見つめたかと思うと、とびっきりの笑顔を見せながら、

「——ダメ」

と告げた。

両手を広げれば赤い粒子が集まって彼女の両腕に籠ガントレット手が形成される。その先端には三つの刃が爪のように伸び、それを構えたかと思うと一瞬でその姿が消える。

「ッ!？」

嫌な気配を感じて剣を構えた瞬間、死角から伸びてきた爪が彼の首を狙っていた。何とか剣が爪の間に差し込まれて防いだのだが、もう片方の籠ガントレット手——鉄甲爪が飛燕の胸を狙って突き出される。

何とか後ろに下がってやりすぎたのだが、胸を掠めていくだけで服が切れ、皮が薄く斬られていく。その爪の鋭さに驚く間もなく回し蹴りが飛燕の頬を捉えて吹き飛ばされる。

無様に地面を転がったが何とか起き上り、彼女を睨もうとしたのだがもうそこにはいない。横を見れば両手を後ろに下げながら飛燕へと疾走してきているのが見えた。

それを防ぐように剣を構えて気刃を放つ。地を走るそれは一瞬で彼女の下へと到達したのだが、それがどうしたとばかりに軽く躲される。

「……旋風」

その際に体を捻った事を利用して両手にある鉄甲爪からつむじ風らしきものが放たれ、飛燕へと襲い掛かっていく。飛燕に迫る度に地面を削っていくそれは触れれば危険

なものだと容易にわかる。

それから逃れるべく横に跳んだが、それを狙い澄ましたかのように彼女は前に飛びながら前転しつつ迫ってくる。その度に構えた鉄甲爪が空を切りながら迫ってくるのだ。

呻きながら剣を構えつつ気を込めるのだが、防御を強引に切り崩してくるかのよう。何度も何度も鉄甲爪が剣を削っていき、彼女の重さも加わって飛燕は少しずつ膝を折っていく。

それを見越して剣を蹴って少し浮いた彼女は宙に舞う。その際にフードが取れ、その下から現れたのは——赤い髪を揺らしながらいたり、と笑う女性の顔だった。

「……じゃあね？ つまんない戦いを、ありがとう」

それが、飛燕が最期に聞いた言葉だった。

ぼたり、と鉄甲爪から血が流れ落ちる。傍らには頭から鋭い爪で切り裂かれたかのような死体が転がり落ちていた。彼女はその流れ落ちる血を舐めとりながら首を左右に揺らしている。

「……つまらないなあ、もう少し楽しめる奴はいないのかな」

眩きつつ体に付着した血を空中に滑らせた指に従って魔力が動いて取り払っていき、それを空中に集める。両手にあつた鉄甲爪は粒子へと還元し、またあの刀を取り出して留めてあつた血をその刀身へと付着させた。

またしても赤い光が浮かび上がり、そして静かに消えていく。

その刀身を見つめて彼女はやれやれとため息をつく。

「やっぱり人の血では足りない、という事か。いや……強さが足りない？ ……まあ、いや。だったら竜もこれで斬っていくしかないか」

とんとん、と軽く刀身を叩いて見ながらそう呟き、またローブの中へと納めていく。そういえば逃げていったあのアプトルと騎乗していた奴らはどうしようか、と考えたままでは良かったが、元来の彼女のめんどくさがりが発動してしまい、彼女は欠伸を一つついでしまう。

そうして酒瓶を取り出すとそれをラツパ飲みしながら歩き出す。

「んく……ぷはあ、帰るか。刹もそろそろ来ているだろうし。少しつきあつてもらおうか」

頭に浮かんだ一人の女性の事を考えつつ、合流地点で再会したら彼女と遊んでみようかと胸を躍らせてみる。彼女ならば楽しく遊んで時間を潰せるかもしれない。この退屈な日々には潤いが出るだろう。

そんな事を考えていたが、不意にもう一人の事も思い出された。

「そういえば風はどこに行ったんだったつけ？ ……一人で行動して……リオ夫婦を狩って……うーん、ま、いいか。どうせ一人で楽しんでるんだろうし、んくんく……」

にやにやといけ好かない笑みを浮かべてよく独り言をぶつぶつと呟いている少年の事が頭によぎったが、すぐにどこかへと放り投げる事にした。あいつは結構強いがどこか好かない、気に入らない、と彼女は思っていたのだ。

それにあいつだつて彼女が手にしているような槍と剣を持っていた。そして同じような目的を持っている。そんな似た者同士と性格の不一致から彼女はその風という人物があまり好きじゃなかった。

もう一度、刹という女性の事を考え、それを肴に酒を飲みながら、彼女は森の中へと消えていった。

## 39 話

ユクモ村に戻ってきたのはその日の夜だった。竜車を竜小屋へと届け、瑠璃と茉莉がクエスト達成を伝え、十兵衛が桐音を連れて診療所へと向かって桐音の傷の治療を医者へと頼んだ。

彼女の傷は彼女自身の自己治癒力を高めるものである程度は治癒できているようだが、それで完全に治っているという訳ではない。しっかりとした手当てをしなければ傷跡が残る程にひどい傷を負っているのだから。

報酬を受け取り、二人は診療所へと向かい桐音の様子を見てきたのだが、手術中だった様子が見れらなかった。手術は数時間行われ、傷跡はうっすらと残るだけに留められる見込みらしい。命に別状はないとの事だった。

それに安堵し、数日入院して経過を見守る事になり、瑠璃達は診療所を後にして宿へと帰っていった。

そうして数日が過ぎ、桐音が退院すると酒場に移動し食事をする事にする。席に着くと桐音は瑠璃達へところ伝えた。



「一度あたいはここから離れる事にするよ」

「え、マジツスカ？」

「愚弟が現れたからね。どこへ行ったのか、何をしているのか……探ってくる事にするよ」

目的である武が姿を現したのだ。数日入院したことで武はあそこからどれだけ離れたかはわからないが、彼の事だから案外近くに滞在している可能性があるかもしれない。

彼の性格の事を把握している桐音は、自分の事をおちよくる可能性がある事を想定して近場に潜伏しているのではないかと推測したのだ。

「一人で行動を？」

「ああ。これはあたいの戦いだからね。チームから抜けてしまう事になるけど……」

「いえ、元々はそういう話でしたからね。気にする事はありません」

「すまないね。……十兵衛はこのまま二人についてやりな。今なら……あたいがいなくても組めるだろう？」

「……うつす」

隣にいる十兵衛へと視線を向ければ彼は控えめに頷いた。そんな十兵衛にどこか嬉しそうに頷き、「よし、しみりとした別れは好かねえ。パーツとやっちまおうぜ！」と

親指を立ててみせる。

ウエイトレスを呼ぶと料理を注文していく。四人分の料理を頼んだ後、十兵衛が少しもじもじしだした。そうして控えめに手を上げ、

「……すみません、少しお花を摘みに行ってくるツス」

「どうぞで」

お気になさらず、という風に茉莉が頷き、ペコペコと頭を下げながら席を立つて離れていく。それを見送った瑠璃が少し控えめに桐音へと声をかける事にした。

「あのさ……一つ訊いてもいい？」

「ん？ なんだい？」

「どうしてあんなに殺りあえるほど弟と仲悪いの？」

「……まあ、気になるだろうね。……ま、一言で言えば姉弟のくせに反りも馬も合わな  
いって事だね。でもってあいつは里の宝剣を持ち出した。血縁者としてあたいはあ  
いの命でその罪を贖ってもらう、あたいが断罪する。それだけの事さ」

宝剣。

それについても気になるところだ。

何せ桐音が持っているあの小太刀は妖刀の類に近しい物だと推測できる。となれば  
宝剣も魔剣の類ではないかと推測できる。それをあの武が持ち出したとなればとんで

もないことになるのではないだろうか。

何せ言動も危険に満ちていた。ああいう輩は放置しておくわけにもいかない。

だからこそ姉として彼を断罪する。

「また見つけ出したら？」

「殺す。そしてあの剣を回収する。それは変わらないよ」

「なんで物騒な話をしとるのお、桐音嬢ちゃんら」

そんな事を話していると瑠璃と茉莉の後ろから榊が手を上げながらやってくる。その後ろには彼のオトモ……戦アイルーの佐助と椿もいる。彼らは隣の机の席へと座り、桐音を見据えて口を開いた。

「なんかあったんかのう？ 推察するに噂の弟の事か？ 先日の怪我の事も関係しとるとみるが」

「まあね。ようやく出会ったんでね、ちよつくらこつちから打って出ようと考えているのや」

「ということはユクモを離れると？ ほうほう、嬢ちゃんもか。ワシらも近日にはここから離れる予定なのだよ」

「そうなの？ ってことはあたしたちだけがここに残るって事か」

「他にもハンターはいますけどね」

まさかこの数日で一気に知り合ったハンター達が離れていくとは。しかもかなりの強者たちだ。こんなハンター達が離れていくとは……と思わないでもないが、他にも名のあるハンターがいるのであまり問題にはならないだろう。

「そういう嬢ちゃんら、イビルジョーに遭遇したと聞いたが……」

「そうだね。あそこで乱入してこなかったら……いや、仮定の想像はやめとくか」

目を閉じてあの時の事を思い返す桐音だったが、首を振って考えるのをやめる。あれはどつちに転んでもおかしくなかった戦況だった。自分が武を殺していたかもしれないし、逆に武が自分を殺していたかもしれない。

あるいは相打ちだったかもしれない。

イビルジョーの乱入によってこの分かれ目が強制的に潰されたのだ。あの時武が呟いたようにある意味空気を読まれたといってもいい。

そう考えていると佐助が腕を組みながら天井を見上げつつイビルジョーの事を思い返し始めた。

「……ジョーが現れるなんてね。ほんと、あいつは空気を読まずにどこからともなく現れるからやり辛いんだよな」

「わっはっは！ それを逆に返り討ちにする楽しみもあるうてー！」

「おやつさん、そういう意見は少数しかないにや。大抵のハンターは尻尾を巻いて逃げ

るしかないにや」

「そうですね。あの時あそこに留まっていればまず間違いなく私達は死んでるでしょう。……初めて相対しましたが、本当にあれはやばいですね」

イビルジョーに関しては何にも聞かずにいる。東方のハンターならば……上位以上のハンターならば頭に入れておかなければならない危険な存在だ。外見的特徴、生態、そしてその危険性。これらを知識として吸収しておかねば話にならない。

飢えをしのぐために獲物を求めてどこにでも現れ、引つ掻き回すだけ引つ掻き回し、新たな獲物を求めてどこへなりとも消えていく。まさしく台風のような存在。

だがそれは台風にしては牙も爪も鋭く、巻き込まれて逃げられなければ命は無残に散らされてしまう。抗う力がなければ即、逃亡しなければならぬ。

そう話は聞いていたのだが、瑠璃と茉莉はその現物に遭遇したことは一度もなかった。これを運が良かったというべきか、あるいは経験不足というべきか……。なにせ上位のクルペッコが大型モンスターを呼び寄せる際にもイビルジョーの声を覚えていた個体ならば、これを以つてしてイビルジョーを呼び寄せてしまう事だつてあるのだ。

こうなれば狩りどころではなくなり、やむなくリタイアをしてしまうハンターもある。中にはこれを利用してイビルジョーを狩りに行く猛者もいるらしいが……そんなものは一握りだろう。

なので二人はあの時がイビルジョーとは初対面。今でも思い出せるあの撒き散らされる殺気と溢れ出る捕食者としてのオーラ。あの目は敵を睨む目ではなく、目に映るものの全てが自分の糧であるという捕食者としての目だ。

「あれって、本当に狩れるの?」

「おうよ。あれもまた獣竜種に分類されるモンスターよ。ワシらがそれ相応の実力を持ち、武器と防具を纏ってハンターとして戦えば討伐する事は可能じゃわい。かつか、嬢ちゃんらも今より強くなれば……いざれ逃げずに戦う事は出来るじやろうよ!」

本当にそんな時が来るのだろうか。来たとしてもそれは今じゃないだろう。数か月先か、数年先か……それくらいの時間をかけて実力を磨き上げなければ話にならないはず。

そんな事を瑠璃は考えてしまった。

そうしていると料理が運ばれてくるがまだ十兵衛が帰ってこない。

どうしたものかと思えるが、桐音達の机へと料理と酒が運ばれてくる。

そこで櫛が空いている席にも料理があるのに気付いて首を傾げる。

「む? あと一人おるのか?」

「ああ、十兵衛がね。用をたしに行っているよ」

「ふむ」

「榊さん達は料理は？」

「榊たちはもうさつき食べてきたにや。これから宿に戻ろうとしているところだったにや」

「なるほど。じゃあこれでお別れだね」

そう言つて桐音がグラスを掲げる。榊らの手元には何も無いが、彼はグラスを持つているかのように手を上げる。そうして乾杯をするように動かし、「またいずれ会えることを願おう」と笑つて見せた。それに桐音も応えてグラスを傾け、グイツと一杯呑む。

「瑠璃嬢ちゃんと茉莉嬢ちゃんも元気でな」

「ええ。あなた達もね」

「お達者で」

瑠璃達にも別れを告げてそれぞれと握手をし、榊達は手を振つて酒場を後にしていった。それを見送り、少しして十兵衛がトイレから戻ってくる。料理が運ばれていたことを見て「……すみません、待たせたツスか？」と申し訳なさそうにしながら席に着く。

「いや、気にする事はないよ。時間も潰せたしね」

「？　なんかあつたツスか？」

「ええ、榊さん達と少し」

先ほどあつた事を話し、十兵衛が相槌を打ちながら「別れ、言えなかつたツスね……」

と少し残念そうに呟いた。そうして昼食はちよつとした酒宴となり、桐音と過ごした日々や狩りを思い返ししながら食事と酒を進めていく。

酒も何杯かおかわりをし、酔いも少し回つてきたところでお開きとなつた。

宿に戻り、桐音が準備をすると酔い覚ましを口にしてユクモ村の門へとやつてくる。どうやら早いところ村を出て足取りを追おうというつもりらしい。

見送りに来た三人に笑いかけ、「頑張れよ、色々とき。次に会つたらまた一緒に狩ろうぜ」と右手を差し出してくる。

「ええ、そのためにも死ぬんじゃないわよ?」

「ああ。殺されてやるわけにはいかないさ」

まず瑠璃がその手を取つて握手する。彼女の言葉に不敵に笑つてみせた。

次に茉莉へと手を差し出し、茉莉もそれを握りしめて小さく頷いた。

「お元気で」

「おう。茉莉も……つて、お前の場合は瑠璃がいれば色々元気だろうけど」

「はっはっは。まあ、否定はしませんよー」

「おい、どういう意味よ、コラ」

ほん、と茉莉の肩に手を置いてじつと睨みつける瑠璃だったが、茉莉は気にした風もなく口元で笑いながら桐音と握手をしている。桐音も桐音でにやにやと笑いながらこ



の双子の姉妹を見つめていたため、瑠璃は少しふてくされ始めた。

最後に十兵衛にも手を差し出し、

「お前も頑張れよ。……色々と、な？」

「うっす。……つてなんスかそのにやけた顔は」

「え？ いや、ほら、なあ？」

ほらほら、と視線を双子に向けて意味ありげな表情を浮かべる桐音に、十兵衛は骸の奥から溜息をつく。

「まだ言ってるんスか？ 別においらはそういう気は……」

「ないと？ おもしろくねえなあ……」

握手した手をほどき、桐音はぐつと顔を寄せながら無理やり十兵衛の肩を組んでやった。そうして耳打ちするように話しかけていく。

「少なくともあたいはこれはいい機会だと思うわけだよ。お前もいい歳しているし、そういう事考えないのかい？ 種族的にも問題なし、ハンター同士で気が合う。……これほど好条件の物件はないと思うんだがね？」

「……そうかもしれないツスが、本人たちの意志つてもんがあるツスよ？ 別においらはそんな気は……」

「ないと？ え、ないの？ どこが気に入らねえんだよ。いい娘たちだとあたいは思う

「ただけど？」

「いや、おいらもそう思うツスが……なんていうか……」

「はつきりしねえなあ。なんか、訳ありなわけ？」

「……………いや」

そう言いながらそっぽ向く。その様子を見ながら桐音はふむ、と小さく息をつきながらじつと十兵衛の横顔を見つめ、ぼそりと「傷の事か？」と呟いた。それに十兵衛はびくり、と反応した、ように見える。

「まあ、それはお前から切っても切れない事だろうな。……でも、あいつらはそんな事でなんやかんやと言うような奴らじゃないと思うぜ？」

「……………でも、どこかぎこちなくなるツスよ。そうなるのがわかってるからおいらは……………」

「でもそういうのって寂しくないか？　そうやって長い時間、一人で過ごすのか？　こうして出会った縁をふいにするのか？　……そんなの、寂しいだろ？」

優しく語りかけながら桐音は十兵衛の肩から離れ、ぽんぽんと頭を撫でてやる。その様子に近くにいる双子は首を傾げる。これまでの会話は小声で行われているため二人には聞こえていないらしい。

そして十兵衛は桐音の言葉にまた無言になってしまう。

「……ま、あたいはお前のその『傷』を見た事がないから何とも言えないけど、でも例え見たとしてもあたいは気にしない、とだけ言うよ。誓つてもいい」

「まあ、姉御はそうでしょうね。でも姉御みたいなのがそうごろごろいるわけじゃないツスよ。だから今は何とも言えないツス」

「そうかい。ま、今はこれ以上は何も言わない。三人で頑張ることだ。……お二人さん、十兵衛をよろしく頼むぜ」

ほんぽんとまた十兵衛の頭を撫でながら双子に小さく頭を下げる。まるでそれは弟を任せる姉のようにも見えるのだが、ある意味異質だろう。なにせ本当の弟に対しては殺意を向けて殺し合つたのを見たばかりなのだから。

十兵衛は桐音の弟のように見えたのは何度かあるし、武の事を知らなければ普通に見ることが出来ただろうが……色々と複雑だ。しかし十兵衛の事はもう仲間だと思つている。

それに異を唱える気はなく、二人は頷いたのだった。

そして桐音は手を振つて童小屋から引かれてきたアプトルへと騎乗し、手綱を操つてアプトルを走らせ、去つていった。

その姿が見えなくなるまで見送り、一息ついた三人は自然と階段を上つていきユクモ村へと帰つていく。今日のところは休息だ。クエストに行く気は三人にはなかった。

その代わり先日のクエストの報酬として得た素材を改めて確認する。桐音の分はやはりというべきか瑠璃と茉莉へと分配された。どうやら彼女は別にナルガ素材は必要なかったらしい。

十兵衛も特に使う予定はなかったようだが、一応少しは受け取っていた。それでも余った素材は結構あり、瑠璃は予定通りこれを使ってあれを強化する事にした。

鍛冶屋へと向かってヒドウンサーベルの強化を依頼し、数日後それは夜刀【月影】へと生まれ変わる事になった。

夜刀【月影】を受け取り、酒場へと向かった三人はこれからどうするかを話し合う事になる。三人となった事でチームワークも変化する。今までならば桐音が先陣切って前へと出ていき、一番のダメージソースを担っていたのだ。

彼女が抜けたのは結構大きかったりする。

また二頭クエを受ければ二人ずつで分かれていたがそれも出来なくなる。となれば、二頭クエはもう受けられない。いや、出来ない事はないが結構時間をかけて討伐する事になるだろう。

まずは三人で戦えばどれだけの戦いをする事になるのか、それを把握してみる事から始めてみようか、という流れになった。また溪流に行くのか、あるいは水没林か密林に行くのか。

いや、砂原に行ってみるのもありか、いやいや凍土も捨てがたい。

そんな中で十兵衛がぼつり、と「炭鉱夫でもやってみるツスカ？」と漏らした。その言葉に二人の視線が十兵衛に向けられる。

「炭鉱夫って……あれ？ 火山に籠って鉱石を掘り続けるっていう」

「そうッス。もちろんただ掘り続けるだけじゃなく、出てきた大型モンスターも相手にしたりすることもあるツスよ。火山に出てくる奴らつてその特徴上結構歯ごたえのある奴ばかりッスから、相手にとって不足ないかと思うツスが」

火山。

生物にとって死地ともいえる環境となっているフィールドだ。昼夜を問わず溶岩、マグマによる熱気がこもり、クーラードリンクがなければ人が中を歩く事などままならぬ。水分が奪われ、体力が奪われ、ただ死を待つのみだ。

ここに生息しているモンスターもこの過酷な環境に生息しているだけあって高い能力を保有し、他のフィールドに生息しているモンスターに比べて強力なものが多い。また火山に生息しているだけあって火属性には耐性があるのもまた特徴の一つだろう。

そんな場所にもハンターは入り込み、モンスターと戦うのだ。

そうでなくともここに足を踏み入れるハンターはいる。

それはここが良質の鉱石の温床だという側面もある。これを求めてハンターが入り、

ただただ無心にピッケルを振り続けて鉱石を獲得するのだ。鉱石だけでなくお守り、塊を求めるハンターもおり、そんな彼らの事をいつしか炭鉱夫と呼ばれるようになった。

ここにいる十兵衛もその内の一人であり、ユクモ村に来るまではそうやって日々を過ごしていたという。

「火山、か……ふむ、悪くはないですね。私も少し鉱石が欲しかったところですし、いい機会ですね」

「ああ、あたしも少し鉱石欲しかったし異議なしよ」

「じゃあ火山に行くって事でいいツスね」

目標を決定すると今度は何をするかだ。クエストボードへと向かい、依頼書を確認していく事にする。火山のクエストが集まっているのかをチェックしていくとあるのは以下の物だった。

アグナコトル一頭の狩猟。

ウラガンキン一頭の狩猟。

ラングロトラ二頭の狩猟。

ブラキディオス一頭の狩猟。

現在届いている依頼書として上位のものはこんなものだった。その中に気になるものと言えばやはりこれだろう。

粉骨碎竜！ ブラキディオス一頭の狩獵、フィールドは火山。

近年確認された獣竜種のモンスターであり、通称碎竜と呼ばれている。両手に粘菌が繁殖しており、唾液を当てれば活性化されるそれを使って戦うという新たな戦術を保有する。

それは時間が経過すると爆発する特徴を持っており、それはハンターの武器に使えば爆破属性となって発揮される。

そうでなくとも硬いその特徴的な腕はまさしく剛拳と呼ぶにふさわしく、これを振るって狩りをするのだ。また角にも粘菌が繁殖し、これを一気に活性化させて地面に突き立てる事で爆破の連鎖を引き起こす事も可能としている。

それがブラキディオス。

興味が出てくる。先日恐怖と捕食の権化である同じ獣竜種の中で最悪に出会ったばかりではあったが、ブラキディオスがどのようなモンスターなのか、会ってみたい気が湧いてくるのだ。

噂の爆破武器も使ってみたくもなる。それを作るためにはブラキディオスを討伐しなればならない。

気になってくるとやってみたくなる、会ってみたくなる。そして、作ってみたくなる。「ブラキディオス……行ってみるツスカ？」

「あんたは会ったことあるの?」

「一回あるツスよ。なかなか強敵ツス。あの巨体で意外と軽快に動き回るツスからね……ある意味ボルボロスよりもやばいかもしれないツスよ」

「ふむ……ボルボロスよりも動く、と。私には相性は悪いでしょうが……まあ何とかなるかもしれないね」

ガンランスは重量級だ。相手の攻撃を防御し、反撃として突く。その重さによりフツトワークは軽快なものではなくなり、相手がさくさくと動いて距離を詰めたり離したりするとやり辛くなってしまう武器だ。

ランスも同じであり、この両方を使う茉莉からすれば相性が悪い。

だからといってやらないというわけではない。チーム戦ならば茉莉は他の仲間を補佐するように動くだけだ。

「じゃあこれでいい?」

「ええ、行きましようか」

「うっす。じゃあ受注するツス」

依頼書を手にしてカウンターへと向かい、サインをして受理。これでクエスト受注が完了する。後は準備をして火山へと向かっていくだけだ。回復薬を補充し、ピッケルは忘れない。十兵衛ならば弾の補填だ。



宿に戻って三人はそれぞれ入念にクエストの準備を進めていくのだった。

○

フラヒヤ山脈はこの日、雪が降っていた。この山の奥にあるポツケ村もまた雪が降っており、村人が歩くたびに新雪がさく、さくと音を立てていく。

ここは平和そのものであり、山奥の寒い地方に位置するがのどかな雰囲気醸し出していた。

そんなポツケ村のある大きな家では数人の人物がリビングに集まっており、まるで会議でもするかのように顔を合わせて話をしていた。

「——という訳さ。すでに向こうの彼らとは話がついている」  
「なるほどね。で、あいつらはやっぱり？」

「ああ。引き受けてはくれたけど、今はまだ動かないとの事さ。ただ動くとなれば娘二人をこちらに預けてはくれないか、との伝言だよ」

「それはもちろんです。僕らからすれば断る理由はありませんよ」

大まかな話を進めているのは紫色の長髪をした女性。変化の術で姿を変えている神倉月だ。彼女の隣にはルーシーが座っており、紅茶を静かに飲んでいる。

そして彼女の右側の席では深い緑の髪をし、それを背中近くまで伸ばしてゴムで纏めている。鍛え上げられた頼もしそうな筋肉は彼が着ている服の下からでもわかる程だ。

彼の隣には銀髪のロングヘアーをした女性が静かに控えている。黒いリボンで髪の毛側を結び、残りをそのまま流すというツーサイドアップという髪型はあの日別れた時と変わらないままだ。

月の対面の席には新緑色のロングヘアーをした青年が座っている。別れた頃はまだまだ華奢な雰囲気をしていたというのに、今では見てわかる程に凛々しくなっている。相変わらず中性的な顔つきをしているが、それでも頼もしさを感じられる程に成長しているという事だ。

そして彼の隣には水色のセミロングヘアーをウェーブがかった髪型にしている女性があった。あの頃に比べて少し身長が伸びているようだが、その童顔は相変わらずでまだまだ少女と呼べるほどに若く見える。

数年ぶりの再会だがどこか懐かしく感じられる。

ライム・ルシフェルとその妻シアン。

クロム・ルシフェルとその妻桔梗。

六年前の大事件の際に共に戦ったハンター達だ。

ここはクロムの自宅であり、クロム一家が暮らす場所だ。その隣がライム一家の家と

なっており、兄弟夫妻としてこのポツケ村に暮らし続けている。

離れたところには彼らの子供たちが遊んでいるようで、時折楽しげな声が聞こえてくる。

そんな中でのこの会話。

内容はもちろん以前月達があのか村で乾渚らと話した事だ。

「そして僕らからしても断る理由はありませんね。力をお貸しします」

「うん。このまま隠れ住むのも一つの手だけど……わたし達にだって出来る事があるならやってやるですよ」

「ええ、そうですね。クロムさんも、私も助力は惜しみませんわ」  
わたくし

「おうよ。以前は助けられたんだからな。今度は俺達が力を貸して助ける番ってやつだ」

にやりと笑いながらクロムがサムズアップをする。

あの大事件の際には月にはかなりお世話になった。それもライムとシアンにとって十分お世話になっている。あの頃彼女らに鍛えてもらったからこそ乗り越えて行けたと思っっているのだ。

だからこそ今度は自分達が、と考えるのだ。

そんな彼らに月は両ひざに手を付いて感謝の意を示すように頭を下げる。

「ありがとう。よろしくお願いするよ」

これで四人の戦力を確保する事が出来る。シュヴァルツの血統が二人加わるが、これも彼らに手渡す変化の補佐をする道具で隠す事が可能だ。それに偽名も元から用意してあるし立ち回る分には問題ない。

残っている紅茶を飲み干すと月は立ち上がり、「ではこれで失礼するよ」と一礼する。それに続くようにルーシーが立ち上がり、一礼する。

「もう行くのですか?」

桔梗が訊ねると、月はそれに頷いた。

「このままドンドルマに飛ぶ予定だよ。彼女についてギルドに交渉しなければならぬからね」

「彼女ってえと……まさかあいつも呼ぶのですか?」

「え、それってもしかして……」

「ああ。今もなおあそこにいる彼女だよ。仮釈放として外に出られるように交渉するつもりだよ。ブランクの心配もあるけど……それはクロム、君が鍛錬に付きあえば大丈夫だろう?」

微笑を浮かべるとクロムは任せとけ、と言わんばかりにまたにやりと笑ってサムズアップする。彼女の鍛錬はここにいる間クロムが付きあえば全く問題なし。喜んで鍛

鍊を行つてくれるはずだ。

後は外に出られるか否か。

少し不安があるがそこは勝負に出るしかあるまい。ルーシーを伴つて月はクロムの家を後にし、四人に見送られながら空間転移を行う。一瞬にして遠く離れたドンドルマへと飛んだ月は真つ直ぐにギルド本部へと向かつていく。

正門で手続きを済ませて街中を歩いていく。相変わらずというべきか、大通りは人に溢れて活気が満ちていた。まだ昼間という事もあつて賑わいを見せている。

すると途中で見覚えのある女性が二人近づいてきた。ギルドナイトの制服を着たその二人の片方が月に気づくと首を傾げる。どうやら月の変化に気づいたのか違和感を覚えたらしい。流石と言うべきか。

「やあ、久しぶり」

「……あ、やっぱりあの時の人だ」

「……? どちら様でしょう?」

「ああ、この姿では初めましてになるのか。こんにちは、夜明よあけという名で行動している者だよ」

その偽名で気づいたらしく、もう一人の女性は「失礼いたしました」と小さく頭を下げてくる。それに「いや、気にしなくてもいいよ」と手を振る。

「もしかしてギルドにご用でしょうか？」

「ああ。少し話をする事があつてね」

「わかりました。では私達がご案内いたしましょう。……そちらの方は」

その碧眼がちらりとルーシーに向けられるが、彼女は小さく一礼しながら「初めまして、ルーシー・ヴァーミリオンと申します。よろしくです」と挨拶する。この名前を呟き、何かを思い出すように少し目を閉じると、なるほどと納得するように頷いた。

「ではあなたもご案内をいたします。こちらへどうぞ」

「ん、ありがとう。サン。アルテミスも、よろしくね」

「うん」

手で示しながら前を歩き始める彼女、サン・森羅・スカーレット。あの事件の際に共に行動をしたギルドナイトの一人であり、現在ギルドの大部分を動かしているギルドナイトの幹部、ソル・森羅・スカーレットの娘だ。

そして彼女と共に行動しているもう一人の女性……いや、少女はアルテミス。あの事件で死亡した狂化竜を作り上げていた人物、神倉朝陽と共に行動し、最後は月達の味方として戦った少女だ。

事件が解決し、裁判に掛けられた後は鞭打ちを受け、サンが監督役を務めてギルドナイトの補佐を務める事になった。それが無償労働の刑であり、アルテミスはそれを終え

た後の四年、ギルドナイト見習いとしてサンと共に行動している。

サンの兄であるレインは部隊の隊長をサンへと委ねた後、新たな部隊を編成して以前の厳しい任務を遂行する部隊の隊長を務めているとの事だ。

主に新たなフィールドの開拓や新種のモンスターの調査を務めており、彼らがこなした任務によってブラキディオスなどの新種のモンスター達の調査が進んでいるとの事だ。

それにしても、サンはあれからも変わらず薄紅色の肩を超える髪型をしている。成長期も終わっているが、六年の時を経て少しずつ女性らしくなっている。少女らしさから女性らしい魅力が少しずつ溢れているサンの変化。

これは女性としてはいいものだろう。

一方アルテミスの場合はかなり外見が変わっている。六年前は兄のように慕っていたゲイル・カーマインの外見に似せるように自分の姿……特に髪と瞳を変化させていた。あの頃は茶髪だった彼女の髪は金髪と白が混ざる髪になっていた。

大部分は金色になっているが、毛先から数十センチは白く染まっている。まだまだ幼さが残っていた当時に比べれば十分女性らしく成長していた。現在の年齢は二十歳前の十九歳。

小さかったあの頃の面影は少しずつ薄れて女性らしくなり、プロポーションもよく

なっている。身を包むギルドナイトの制服もよく似合っていた。

たぶん変化は解き、本来の姿のまま成長してきたのだと思われる。その金と白が混ざり髪の色も妖狐の特徴が表れたものだと思推測できる。

しかし白毛が出てくるとは……いや、一応妖狐の中にも白毛を持つ個体はいる。その中でも頭に浮かぶのはアレなのだが……まあ、気にしないでおくことにしよう。

そしてアルテミスの兄のような人物、ゲイル・カーマインも懲役を科せられており、それはもう少しで終了する。上手くいけば彼女と一緒に娑婆に出られるという事だ。

そんな事を考えながらサンについて歩いていくと、前方にギルド本部が見えてくる。

ここがハンターズギルドの総本部。大陸一のハンターが集まる場所、ドンドルマの要所の一つだ。

正面の階段を上っていき、中へと入ってギルドナイトとギルド関係者しか通れない場所を抜けていき、月とルーシーは奥へと進んでいく。

今回獲得する戦力の中でも、戦闘力の面では確実に頼りになるであろう彼女を仮釈放するために。六年という空白のブランクがあるが、それを解消するための人材はもう確保できている。

後はこの願いを上へと通すだけだ。

今回の戦いは恐らく一筋縄ではいかないだろう。もし本当に自分を狙う人物がいて、



もし自分が敗れる事があれば、その人物に勝てるだけの人材はそう易々と得られない。

協力者は多い方がいい。それも強さも人物的にも信頼できる人材が必要だ。

彼女は気難しいが、ライム達が協力者となってくれるならばもしかすると動いてくれるかもしれない。そう願って月はギルド本部の廊下を歩いて行った。

## 40話

ギルド本部のある一部屋。

ある部隊の隊長の執務室となっているここでは一人の青年が書類をチェックしていた。綺麗に切り揃え、整えられたオレンジ色の髪。鋭さと落ち着きが合わさった緋色の瞳、整った顔付きは髭の剃り残しもない。

きちつと着こなしたギルドナイトの制服がよく似合い、皺ひとつないそれはびしつとしている。

まさに美青年という言葉が似合う彼の名は、レイン・森羅・スカーレット。

現在彼が目を通しているのは東方で新たに確認されたモンスター達の情報の纏めだった。彼の部隊は現在東方で確認されたモンスターと新たなフィールドの調査を務めており、レインとその数人の部下は一度東方から帰還し、得た情報を纏める作業を進めていた。

部屋には彼だけでなく二人のギルドナイトがおり、時折札を使って連絡を取り合って作業を進めている。

その書類に書かれているモンスターの情報は以下のものだ。

ドボルベルク亜種。通称・尾斧竜。

発見：砂原をはじめとする乾燥地帯。

赤銅色の外殻と尾の周囲の骨格の変化により斧のようになってるのが特徴。砂原という環境に適応した結果だと推測される。

ブラキデイオス。通称・砕竜。

発見：火山。

近年新たに確認されたモンスター。骨格から獣竜種に分類。

その甲殻は黒曜石を含んでおり、見た目通りの硬度を誇り、両手と角には粘菌が繁殖している。これはブラキデイオスから離れると一定時間を置いて爆発し、これがブラキデイオスの攻撃手段の一つとされる。

その闘争心により調査は少々難航していたが、現在は調査が進みその生態も少しずつ明らかになっている。また凍土にも出没を確認した。

イビルジョー。通称・恐暴竜。

東方で猛威を振るうこのイビルジョーであるが、近年危険極まりない個体を確認されている。噂に語られるのみだったが、実際に遭遇し、生き延びたものの証言により発覚した。

極限の飢餓状態に陥った個体は口から漏れ出る龍属性の呼気が顔を覆い、獲物を求めて執拗に追いまわし、攻撃を加えていくとのこと。

この個体を特異個体と認定し、イビルジョー飢餓、怒り喰らうイビルジョーと呼称する事とする。

出会ったら即、逃亡。

間違っても戦闘する事のないようにと通達する事とする。

ジンオウガ亜種。通称・獄狼竜。

発見：凍土。

白や銀、黒を主体とした甲殻と毛を持ち、蝕龍虫と呼ばれる龍殺しの実を好む虫を集める習性を持つ。これらを集めて力を高める事により龍光まとい状態となって周囲に放出する攻撃手段を保有する。

この黒い雷は冥雷竜ドラギュロスと共通点があるのではないかと推測できるが、詳しいことはまだ不明。

だがこの力を保有する事によって凍土という過酷な環境に適応できるものと推測できる。また凍土だけでなく火山にも確認され始めている事も合わせて報告する。

ラギアクルス亜種。通称・白海竜。

発見：孤島、水没林。

白を主体とした甲殻を持つラギアクルスの亜種。異名として双界の覇者があり、海だけでなく陸をも猛威をふるえるだけの力を保有する。

しかしあまり姿を見せなかったのだが、近年その姿が多数確認できたことで調査が進む事となった。

結果、確かにこの実力は高く討伐は容易ではないものと認定。

クエストが発行されるならば上位以上でなければ認めないとする。

また亜種だけでなく新たな個体も確認されたという報もあるが確実なものではない。更なる調査を進める事とする。

パニツシャー。通称・暴蛇<sup>ぼうだ</sup>。

発見：火山。

鬮蛇ナーガと共通点が多く、外見が似通っている事からナーガの亜種と一時期は伝えられたが、その大きさと能力から同じ種族の別物であると決定。

その凶暴性と闘争性から蛇竜種の中でも上位以上の危険度と認定。火山という過酷な環境の中での適応、完全なる肉食性から他の大型モンスターも襲撃し、捕食していると推測できる。

火山に赴いた炭鉱夫の一部が行方不明となっているのも、このパニツシャーに襲撃された物と推測できるものとする。

その残虐性と暴力性はイビルジョーにも近い。出会えば逃亡せよ、と通達する事とする。

ナルガクルガ希少種。通称・月迅竜。

発見：塔、樹海。

東方の樹海の奥地にある古代の塔にてその姿を確認。夜行性であると推測でき、昼間は発見不能だった。

また発見できないもう一つの理由として、霞龍オオナズチと同じく姿が見えなくなるという力がある。いや、あるいはあまりにも高速で見えなくなる程の動きをしているのではないかとも考えられるが不明。

その外見とこの能力からナルガクルガの新たな個体であると断定し、ここに希少種発見の報を記す。

また砂原、大砂漠にて不明のモンスターを確認。

噂に語られる新たなモンスターが生息し、旅人、ハンター、果ては大型モンスターを喰らっているという話が又聞きされる。当初はイビルジョーではないかと思われたが、上空を飛行していた古龍観測隊によればそのような影ではなかったと語る。

彼らが搭乗していた気球が撃ち落とされる程の遠距離プレスを放ったその影は飛竜種に近しい外見をしていたが、夜の闇故にはつきりとは見えなかったとの事。

更なる調査を続行するものとする。

そこまで読み進めたレインは一息つき、眉間を軽く揉みながら天井を見上げる。傍らにあつた湯呑を手に取り、お茶を少し飲んで深い息を吐く。

蛇竜種の活性化とそれと並行しての新たなモンスターと亜種の出現。人が変わっていくように、モンスターもまた少しずつ変わっていく。そうして別の環境に適応して亜種へと変化していくのもわかる。

だが何故だろうか。

レインはこれらが何かが起こる予兆に思えてくるのだ。

まるで見えない手が糸を引いているかのような悪寒。これが近年ずっと感じられてくる。

もちろん気のせいだという事もある。むしろそうであつてほしいのが大部分の感情だ。なにせ東方だけでなくこちらの地方だつて新種が発見されている。新たなモンスターの開拓によつて見た事もないモンスターが発見されたという報告があるのだから。

例を挙げるならば潮島の発見とそれに伴う新種、跳緋獣ゴゴモアの発見だろう。

また特異個体も確認されており、その中でも危険なものといえればラージャンの特異個

体か。あれは最早手が付けられない化物と言つてもいい程であり、これは近年確認されているイビルジョー飢餓といひ勝負をする程の危険性だ。

これだけの危険なモンスターが次々と確認されている。もちろん、人族はこれらから身を守るためにハンターを動員する。だが熟練のハンターは限られており、彼らで手に負えなければどうにもならない。

——それを解消するのがシユヴアルツの末裔だとするならば？

そう考えれば、まるでこれらのモンスターの出現は彼らをあぶりだすための撒き餌に思えてくる。

考えすぎかもしれない。でもそれが当たつているとするならば——まるで世界の意志がこれに絡んでくるかのようだった。

思考の海に囚われていると、扉が控えめにノックされる。

「誰だ？」

「私です、兄上。お客様をお連れしました」

「客？ 誰だ？」

「夜明さんです」

それを聞いたレインは目を細め、立ち上がる。着ている制服を整えながら作業をしている二人に声を掛けた。



「二人とも、一旦席を外してくれ」

『はっ』

レインの言葉に二人は一礼し、扉を開けて退出していく。その際サンらにも一礼する事を忘れず、そのまま執務室から離れていった。それを見送ったサンは「どうぞ」と声をかけて二人を中へと入れ、アルテミスと共に中へと入って扉を閉めて傍に控えた。

そしてレインは目の前にいる女性、神倉月へと一礼して「お久しぶりです」と挨拶する。

「うん、久しぶりだね。元気そうで何よりだよ」

「はっ、ありがとうございます。そちらは……」

「ルーシー・ヴァーミリオンと申します」

「……おお、貴女が噂の……。西方での活躍はお聞きしております」

「……ありがとうございます」

差し出された手をルーシーは控えめに握って握手し、月にも手を差し出してがっしりと握手する。そしてソファアーを示し、二人が着席するとレインもその体面に着席する。

サンがお茶を用意し、二人とレインに差し出し、二人が一杯口にして一息つく。

それを見たレインが静かに口を開いた。

「さて、本日はどのような用件で参られましたか？」

「……うん。一つ頼みたいことがあってね」

「ふむ、わたしに頼みたいこと、ですか。窺いましょう」

そこで一間置き、月は真剣な表情でレインを見据える。その様子にただ事ではないな、と感じながら、月が告げた言葉に彼は小さく息をのむ。

「——セルシウス・ルシフェルの仮釈放について、ね」

○

火山の奥まで来るとマグマの熱気が凄まじく感じられてくる。額から汗が流れ、装備の下にも汗が浮かび上がって少し気持ち悪くなってくるのだが、熱気によつて汗が蒸発していく。

クーラードリンクのおかげで倒れる事はないが、これは慣れるしかない。

そんな中で、三人の人物がひたすらピツケルを振るい続けている。目の前にある鉱床に向けて無心に振るい続け、その度にごろごろと塊が転がり落ちていく。

一旦はそれを置いておき、もう少し掘ってから一纏めにしてチエツクする。クズ物か、鉱石か、あるいはお守りか。これらをチエツクして分配し、回収する。

これを繰り返す事、幾数度。時間の感覚も怪しくなり、本来のクエストの事を忘れそ

うになってしまいう程だ。

だが忘れてはいない。

ただ、当の目標であるブラキディオスが周囲にいないのだ。

複数のエリアを歩いて、その度にピツケルを掘り続けている。袋の中には多くの鉱石で埋め尽くされ、分類されている。

ドラグライト鉱石、カブレライト鉱石、少量ではあるがエルトライト鉱石もある。またあまり採れる事がないユニオン鉱石や、メランジエ鉱石も採れたのも大きい。

火山でしか採れない紅蓮石、獄炎石も採れ、それだけでなく修羅原珠、瑠璃原珠もいくつか混ざっている。

「……………ん？」

そこでピツケルを振るっていた茉莉が妙な手ごたえを感じ、一旦ピツケルを下ろしてそこをしてみる。そこには硬くて長い物が埋まっているように見えた。慎重に周りを崩していく、それを掘り出してみると古さを感じさせる物体がそこに在った。

「これは……………太古の塊ツスね。しかもこの形状……………ランスじゃないっすか？」

「マジで!? やったじゃん、茉莉! ここで新しいランスが手に入るなんて!」

「そうですね。アタリならば龍属性の武器が手に入りますね。喜ばしいことです」

外れれば無属性のランス、ブルークレーターとなってしまう。強化していけばスロットが増え、切れ味もそこそこのランスになるのだが、無属性のランスはすでに角槍ディアブロスがある。

無属性の武器として既に古代式回転銃槍があるため使う機会がそんなにないのだが、威力の高いランスとして時々使っている代物だ。強化先として原種のままで強化させるか、亜種の素材を使つてブラックテンペストにするかがあるが、茉莉としては亜種の素材を使つて強化しようかな、と考えていたりする。

それはさておいて、ここで太古の塊と出会うとは茉莉としても驚きだった。無意識に微笑を浮かべてしまう程、自分でも知らない内に喜びを感じているらしい。

太古の塊を持ち上げて少し観察し、空間魔法が掛けられている袋へと納めていく。袋の大きさと比べて明らかに入らないだろう、という一品だが、空間魔法のおかげで問題なく収める事が出来る。

瑠璃と十兵衛も掘り出した物を袋に収めていき、腰に下げているポーチの中へと入れていく。

「さて……気づけば奥まで来ちゃったけど……ブラキつてどういうルートを移動してるの?」

「おいらも一回しかやったことないんで詳しくはわからないツスが、まあ他の大型モン

スターと一緒に考えればいいツス。広いエリア……つまりはこのエリア5、7、8を基本として巡回するか、時にはこっちのエリア6へと逸れていくかツスね。よく見かけるのがこのエリア7と聞いているツスが、となりのエリア5も有力ツスよ」

「ふむ……では一旦戻りますか。十分に鉱石は掘りましたしね」

武器の強化……それも茉莉にとつて鉱石は重要な物だった。シャドウジャベリン改を強化させるためには獄炎石が必要だったし、古代式回転銃槍の強化にも鉱石が多く必要だった。とはいえ後者の場合は強化の際に業炎袋が必要なのだから、強化するためには更に上の領域に行かなければならないのだが。

そんな彼らの今回のクエストの際に持ってきた武器。

瑠璃は強化させた夜刀「月影」を背負ってきている。純粋な切れ味と多かい会心率を誇る無属性の太刀の中でも愛用されている一品だ。

茉莉は先ほど挙げられた角槍「ディアブロス」を選択。ディアブロスの角をランスへと加工した重槍であり、それ故に機動力は落ちるが高い威力を誇る一品だ。シャドウジャベリン改も考えたが、こちらは切れ味が短いため弾かれる可能性が高いため一旦お蔵入りとなった。

最後に十兵衛だが彼は炎戈銃ブレイズヘルを選択した。威力としては雷砲ラギアブリッツと変わらないが、徹甲榴弾を連続して素早く放てる特徴がある事を採用した。同

様に火炎弾も同じように撃てるが、残念ながらブラキデイオスは火属性に完全に耐性がある。

かといって雷砲ラギアブリッツが電撃弾を放ったとしても耐性があるためダメージは少量でしかない。そのため徹甲榴弾を射出し、頭に命中させてスタンを狙う戦術をとる事にした。

三人は坂道を慎重に降りていき、辺りを見回して奇襲に備える。岩肌の向こうから突然襲撃してくる可能性だつて捨てきれない。また流れる溶岩にも気をつけなければならぬ。

この過酷な環境で奇襲を受ければ戦線は瓦解する。

故に小型モンスターであったとしても見逃すわけにはいかない。三人は慎重な足取りで山を下りていった。

○

太陽がその姿を消し、街灯や建物の灯りが街を照らすドンドルマだが、相変わらず活気はある。それを作り出しているのは主にハンター達であり、飲食店ではどこもかしこも騒がしく、賑やかさを見せていた。

そんな中で月は一人とある場所へと足を運んでいた。

ここは街の様子とは打って変わって静かなものであり、重苦しさすら感じさせる場所だった。窓口で用件を告げ、数分待つてある部屋へと向かう。

用意してある椅子に腰かけてまた待つ事数分。奥の扉が開かれて一人の女性が中へと入ってきた。連れてきた男は入口の傍へと控え、女性は座っている月を見て目を細める。

彼女は背中まで伸びた白髪をしており、毛先や前髪などはきちんと整えられておらず跳ね回っている。着ているのもまた白い和服であり、黒い帯を巻いて着こなされている。

無感情な赤い瞳がじつと観察するように月を睨みつけており、しかし自分に会いに来たという事で仕方ない、という風に月の対面に腰掛けた。

「久しぶりだね。……私の事はわかるかな？」

「……何となく、その気配は覚えているよ。で、なんか用？」

腕を組みながらそっぽ向く彼女の様子は相変わらずだ。

ずっとここにいるためか、あるいは切るのがめんどくさいのか彼女の髪は伸び放題であり、女性だということにそういうことも無頓着なのか整えられていない。ぶつきらばうなその様子も相変わらずだ。

短い付き合いだったが、そういうところが懐かしさを感じさせる。

苦笑を浮かべて月は備え付けの机に両手を組んだまま置いて少し前のめりになる。

「実はね、現在君を仮釈放出来るように上に交渉しているところなんだよ、セルシウス」

「……………はあ？ なに言ってる、お前？」

予想通りというべきか彼女、セルシウス・ルシフェルはその言葉をそのまま表すかのような目で月を見つめる。呆れてものも言えない、というかのようで、頭がおかしい人を見るかのような視線で月を見つめるが、彼女の真剣な表情を見てそれを消す。

そして今度は足を組み、首を傾げて「……………正気か？」と短く問いかける。

「ああ。今日も交渉してきたけど、まあ当然というべきか難しいという答えが返って来たよ」

「だろ。なにせオレは大罪人さ。そう簡単に仮釈放が出来るもんじゃない。それにオレは魔族にしてシユヴァルツの末裔。六年もここに居るが、種族的には全然短い時間だし血統の問題もある。……………出れるわけねえさ」

「そうだね」

「……………そうだね、って、お前……………何考えてやがる？ それをわかった上でそんな馬鹿げた話をするのか？ はっ、正気じゃないな。何をたくらんでいる？」

鼻で笑いながら両手を広げて首を振るセルシウス。



そんな反応に腹を立てる事もなく、月はにこりと微笑んでこう言う。

「君の力を借りたいのさ」

「……は？ 何だつて？」

「だから、君の力を借りたいのさ。君のその実力が必要なんだよ」

「……オレの力が必要だつて？ はっ！ おいおい、何を寝ぼけた事を言つてる？ こ

のオレの力つていうと、戦闘力を頼りにしている、ということではない？」

「そっだよ」

「多くの人を斬殺してきたこのオレの力を借りたいとか、寝言にも程があるじゃないか」  
くだらないとでも言うかのように鼻で笑い飛ばすセルシウスだが、月はまた真剣な表情になって彼女を見据えるだけだ。彼女の後ろにいる男——看守も無表情にそんなセルシウスを見つめている。

もちろん彼女が何かよからぬことをしようものならば取り押さえるのが彼の役割なのだが、セルシウスは当然ながら無手だ。それに面会しているのは月なので、本当にセルシウスが暴れたら彼女がすぐに取り押さえてしまうだろう。

セルシウスがくつく、と笑い続けている中、月はぽつりとこう呟く。

「しかし君は共に戦った。……彼らと共にヴェルドで戦つたらう？ それだけじゃない。あの子の危機に兄と共に駆けつけたじゃないか」

「……………」

その言葉にセルシウスは笑う事をやめ、横目でじつと彼女を見据える。

どうして知っている？ とでもいうかのようだが、たぶんあの二人がセルシウスの事を話したんだろうと推測した。舌打ちしたくなる心情だったが、そうせずに不機嫌そうに腕を組んでそっぽ向くしか出来ない。

「こうして視る限りでは君の心に闇はあまり感じられない。どうやら闇を抑えているようだね。いや、落ち着いたというべきかな？」

「…………さて？ どうだろうか？ もしかすると不意に斬りたくなるかもしれないぜ？」

「そういう事は言うものじゃないよ。君はもうあの闇に堕ちることはないだろう。そう言えるほど、君の心は実に落ち着いているとみる」

「……………ふん」

真剣な表情で迷いの欠片も見当たらない様子で断言する様子に、セルシウスは悪態をつく事も出来ない。なんとというか、こういうタイプは彼女は苦手だった。何もかも見透かしてくるようなあの目と雰囲気、ただただ呑まれるしか出来ない。

ああして笑い飛ばしたりしてみせたが、彼女は真剣そのものだった。あまりにも真つ直ぐすぎて見ていられない。まるであのライムを前にしているかのようだった。

「実はね、今朝あの子達に会ってきたんだよ。そして力を貸してくれるように願い出て

「みたのさ」

「……………はっ、どうせ二つ返事です承したんだろう？」

「ああ、そうだね。よくわかったね」

「あいつらがそういう事を断る性質だと？ そんな事はお前がよく知っているだろうに」

「まあね。そして彼らがいるからこそ、君にも助力を願いたいのさ」

「……………どうしてそんなに力を求める？ 何か訳ありなんだろう？ それを聞かせてもらおうか」

なるほど、それもそうだと月は頷いた。

表情を引き締めてぐっと手を握りしめてじっとセルシウスを見据え、話し始めることにする。

東方で起こっている出来事、蛇竜種の活性化に辻斬りの事件。ヤマト国の者らとの繋がりを持ったために戦力の増強として声をかけて回っている事を話していき、セルシウスはそれに静かに耳を傾けていた。

そして最後に、

「……………私もね、どうやら命を狙われているらしいんだよ」

「……………は？ なぜ？」

「わからない。だがただ者ではない相手に宣告されたからね、周囲を警戒しているところさ。今のところはその気配はないんだけど、万が一という事もある。……私に何かあったとしても、君にはあの子達と共に行動してほしいと思つている」

「……………何を弱気な事を、縁起でもない。オレは別に遺言を聞く気なんてさらさらないんだけど？」

「はは、ごめんね。でも、本気だよ。万が一私が君を出せずに死んだとしても、君を外の世界へと再び出してやるつもりさ。あの子達と再会させるためにね」

「はっ、わからないな。オレはずっとここに縛られている。オレの力を頼つて来たつて言うがな、六年の月日はオレを腐らせているぜ？ 即戦力になつてなりやしないさ」

手を振りながらそっぽ向いて鼻で笑う。だがそう言われる事も想定済みだ。だからこそ彼に頼んであるのだから。セルシウスにいつと笑いかけながら「ああ、問題ないよ。ブランクを埋めるために彼に頼んである。君も彼とならば楽しく戦<sup>や</sup>れるだろう？」と言つてやつた。

それにセルシウスは硬直し、また小さく鼻で笑つて見せた。だがそれはさつきまでと違い、どこか期待するかのような色が含んでいたのは気のせいではないだろう。

「色々と手を回しているみたいだけど、どうしてそんなにオレに固執する？ オレとお前はそんなに長い付き合いじゃない。しかも大罪人。どうしてオレを信用する？」

だがそれも数秒。じろりと睨みながらセルシウスは月に問いかけた。

これは彼女にとつて一番の疑問だった。他のメンバーと比べて月とセルシウスの接点は短いものだった。その時間の中でセルシウスを信頼する要素なんて考えられなかった。

しかし月は何だそんな事か、という風に小さく笑つて見せた。

「簡単だよ。私はね、君が悪人であるなんて思つちやいなからさ」

「——は？」

呆氣にとられたかのようにセルシウスが声を漏らす。今日一番の「何を言っている、お前は？」という風な表情に月はまた微笑を浮かべながら言葉が続けていく。

「私は知っているよ。君があの子達……彼に向ける親愛の情を。君の道がずれたのは悲しい出来事と生きるためのもの。確かに誤つた道だったけれど、でも最後には彼らによつて正された。それだけでなく彼らと共に戦つた。彼らを……守つた。それを私は知っている。そして、君は不器用ながらも優しい心を持つている事を私は知っている。特に、あの子に対してはそれが大きいよね。お姉さん、だからだよね？」

「……………」

「それらを知っているからこそ、私は君を信用できる。君ならば、再び彼らと共に戦えるのだと信じている。だから、こうして話をしに来たんだ。君の手を取つて再び彼らの下

へと送り届けるためにね」

「……………はつ。あの時も思つてたけど——お前、相当の甘ちゃんだよな？」

「はは、よく言われるよ」

苦笑を浮かべる月にセルシウスは大きくため息をついて立ち上がる。看守へと肩越しに振り返つて「時間か？」と短く訊けば、彼は小さく頷いた。扉を開け、セルシウスはそちらへと向かつて歩き出す。

それを見送る月は何も言わない。だが部屋を出る前にセルシウスは立ち止まり、振り返らずに静かに言う。

「……………ま、オレはもう何も言わない。勝手に交渉でもなんでもしてくれ。それで本当に通つたのだとしても、オレは知らない。ただ起こるままを受け入れてやる」

捨て台詞のように言い終えると扉の向こうへと消えていった。

ぶつきらばうな言い回しだが、どうやら受け入れてくれたらしい。ならばあとは交渉を成功させるだけだ。

一歩前進した。

それに満足して月は留置所を後にする。

夕食は火山の外にある森の中で取る事になった。あれから数時間歩き回ったがブラキデイオスの姿はどこにもなかった。日も暮れてきたため一旦休憩するために火山の外にある森で準備をし、夕食を頂くことになる。

といつても内容はこんがり肉と山菜のスープだ。茉莉がスープを作り、瑠璃がこんがり肉を焼いていき、十兵衛がその下準備を手伝うという分担作業で夕食が出来上がり、それを腹に入れて満たしていく。

「おいしいツスね。料理慣れてるって感じツス」

「ありがたいございます。まあ、ずっと二人でやってきましたからね。自然と慣れるというものですよ」

「あんただって一人で行動してたんでしょ？ 料理、しないの？」

「まあ全くしないってわけじゃないツスが……良くも悪くも普通ってやつツス。食べればいいってもんスね」

「なるほど。わからなくもないですね。するのも自分、食べるのも自分だから手の込んだ物は作らないってことでしょう」

「その通りツス」

こうして食事をしながら雑談が出来る程に十兵衛は二人に慣れてきている。最初の

内のあのびくびくしていた彼はどこに行った、という変化だった。恐らく本来の彼がこれなのだろう。

なるほど、至って普通の少年、という感じだ。

いや、声からして少年だ、とずっと思っているが実際彼はいくつなのだろう？ 素顔が見えないし、私服姿の下も普通の男性の体つきをしていたように思える。その割には二人を抱え上げて走れるだけの筋肉を持っている。

少し気になってきた瑠璃は「ねえ」と声をかける。

「ん？ なんスか？」

「十兵衛って何歳なの？ 聞いた覚えがないように思うんだけど」

「ああ……そういえばそうでしたね。聞く間もないまま色々やってきてしまつてましたからね。まあ……お若いのではないかと思ひますが」

「……まあ、若いと言つちやあ若いんじゃないツスカね」

という事は二十代だろうか？

「桐音が確か二十二で、そんな彼女を姉御呼ばわりするって事は……二十一か二十？」  
瑠璃の言葉に十兵衛は首を振る。

となると十代となるのだろうか。そう思つて茉莉が問いかけるがそれにも首を振る。

「え？ じゃあいくつ？」



「……………ツスよ」

「ん？ なんですって？」

「だから……………六十六ツスよ」

『……………』

言葉を失うところはこの事だろうか。瑠璃は少しづつ目を見開いていき、茉莉も茉莉で呆然としたように小さく口を開いたまま固まっている。

今、彼は何といったのだろうか？

聞き返したというのに耳を疑うほどの数字が聞こえてきたのは気のせいなのだろうか。

茉莉が呆然としたまま瑠璃に振り返らずに右手でばしん！ と彼女の頬をひっぱたいてみせる。「いたっ!？」と呻きながら頬を押さえる瑠璃は「ちよ、なにすんのよ!？」と怒るが、茉莉はいたって冷静に……………見えるような表情へと何とか引き締めつつ「……………どうやら夢ではないらしいですね」とうんうんと頷く。

「おいコラ、確かめるんだったら自分の顔で試しなさいよ」

「はっはっは、つついついやってしまいましたよ。すみません」

「……………まあ、いいけどさ。って事は、聞き間違いじゃないって事ね」

「ですねー。いやはや……………」

『んなアホな』

二人して頷き合い、最後はハモってみせるほどの反応をしながら同時に十兵衛を見つめる。こういうところは流石は双子というべきだろうが、十兵衛からすれば溜息をつきたくもなることだ。

「そんなに驚く事ツスか？」

「いや、だって……六十六……六十六うう!」

「大事な事なので二度言ってしまう瑠璃です」

「いや、確認しながらノリツツコミいれるほど驚く事ツスか？」

「だって……その、ええ？ あんた、いや、あなたは竜人族？ それとも魔族？」

「……まあ、人間じゃないってのは確かツスよ。でなけりやこの年齢でこの声はしてないツスから……。というか、なぜ急に『あなた』？」

なにせいつもこの骸の仮面をつけているものだから素顔が見えない。ということはお人間かそうでないのかを確かめる顔の特徴が見ることが出来ない。更に言えば少し高い声色をしているし身長も男にしては低めだ。

これらから考えるに二人は十兵衛は年下なのだとずつと思ってきたのだが、蓋を開けてみればかなり年上だった。しかも……両親よりも年上だ。

そう、二人の両親より年上。この事実には驚くしかない。

つまり自分達は両親より年上の相手とチームを組んでおり、ずっとため口で話していたという事になる。

そう自覚し始めてくると、何だろうか。こう、心が落ち着かなくなり始めてしまった。もじもじと指をすりあわせ、視線を落ち着きなくふらつかせてしまう。そして瑠璃は小さく頭を下げてしまった。

「……………なんていうか、ごめん」

「ちよ、なんで急に謝るツスか!？」

「ええ、まあ……………なんと言いますか……………すみません」

「だからなんで茉莉さんまで謝るツスか!？」 おいら、何か悪いことしたツスか!？」

「いや、したのはあたし達とすべきか……………」

「ええ……………まさか、ええ……………本当に、謎の罪悪感が……………」

「やめてくださいッス！ なにかしらないツスが、そんな感情に苛さいなまれる事はないっす！ おいらは気にしないツスから、いつも通りでお願いしたいッス！」

しまいには頭を下げ始める二人に十兵衛が手をばたつかせながら慌わてだしてしまふ。突然の衝撃的な事実じじつに二人は戸惑い、十兵衛もまた困り果はててしまふ夕食となつてしまふのだつた。

夕食の後片付けを終え、クーラードリンクを飲んで三人は再び火山へと足を踏み入れ

る。あの後、少しぎこちない状態になったが、十兵衛が本当に困り果ててしまったため二人はいつも通りに接するという事で解決した。

彼からすれば自分に敬語を使われる、というのは性に合わないとの事。

しかし確かに彼は嘘は言っていない。六十六は人間で言えば高齢だが、竜人族や魔族からすればまだまだ若い部類だ。種族に関しては苦笑して流されてしまったため気にしない事にする。なにせ二人も竜魔族だが魔族だと嘘をついているのだから。

それにこの年齢なら自分から打ち明ける気にならないのも何となくわかってしまった。なにせ人間であろうともなかりうと、自分達とは四十も歳の差がある。姉御と呼んでいる桐音とも同様だ。

しかし何で彼女をそんな呼称で呼んでいるのかと聞いてみると、

「なんていうか……色々と引つ張りまわされたんで、気づけばそう呼んでいたツス。後で実年齢知られて『あたいより年上のくせにそれか』って笑い飛ばされて、『まあ面白いからいいか。いいぜ、そのままあたいの事は姉御と呼びな』って言われたツス」との事だった。

確かに桐音ならそんなこと言いそうだ。細かいことなんて気にしない、つてというのが桐音なんだと思う。

さて、火山のエリア7に戻ってくると数匹のウロコトルがうろついていた。

ウロコトルは溶岩獣と呼ばれる海竜種の一種であり、炎戈竜アグナコトルの幼生体だ。大型モンスターが喰らった獲物の残骸や腐肉を喰らって生きるモンスターであり、火山ならばよく見かけられる小型モンスターである。

カチカチ、と嘴を打ち鳴らしてはキョロキョロと辺りを見回しており、三人に気づいた一匹が振り返りながらまたカチカチと嘴を打ち鳴らしている。それにより他の二匹も気づいたようでそれぞれ振り返ってきた。

瑠璃が夜刀【月影】を抜こうとしたが、「任せるツス」と十兵衛が素早く炎戈銃ブレイズヘルを抜き、貫通弾L.V.Iを装填して射出していく。それらは狙い狂わず離れたところにいるウロコトルの頭を貫いていき、一撃のもとに討伐してしまった。

やはりガンナーとしての腕前は高い。これも長くハンターをしている効果だろう。積み重ねた年季が瑠璃達よりも長いものだから当然だろう。

「……まあ、炭鉱夫としての経歴も同様に長いツスけど」

「どれだけやってるんですかね？」

「んん………まあ、思い出せないくらいはやってるツスよ。それ以外にも気ままに放浪していた時期もあるツスから……経歴に反して上の領域に行っていないのはそういう事ツスよ」

炎戈銃ブレイズヘルを腰に戻しながら十兵衛が言う。

彼にも色々あったという事なんだろう。となればこの傷を負ったのも一体何年前になるんだらうと気になるどころだが、訊くだけ野暮というものだ。こればかりは訊く気にはなれない。

倒れたウロコトルから素材を剥ぎ取っていると、エリア5の方から鈍い光を反射する群青色の影がやってくるのに瑠璃は気づいた。そちらに視線を向けてみると、はつと息を飲んで夜刀〔月影〕の柄へと手を伸ばす。

同様に茉莉と十兵衛も気配に気づき、それぞれ身構えていく。

離れた所からでもわかる程に硬さを感じさせる群青色の甲殻に覆われ、両手と角には緑色に染まった繁殖している粘菌が付着している。尻尾の先には更に硬質化した甲殻が鈍器のように覆われ、両手はそれ自体が鈍器と化しているかのように指が見当たらない。

赤い瞳が周囲の様子を見回すように動かされ、そしてそれが三人の姿を捉える。

「ギユグ、ギイイイイ……………」

すると威嚇するように姿勢を低くして唸りだし、両手を口元に近づけて唾液を吹きかけ始めた。すると両手にある粘菌が活性化し、今以上の濃度をした緑色に染まる。

「粘菌が活性化したツスね。あれで地面に両手が叩きつけられると、そこに粘菌の地雷が設置されるツス。時間がたてば赤く染まり、爆発するツスよ」

「なるほど、気をつけるとしまししょうか」

十兵衛が粘菌について改めて説明し終えたところで威嚇が終わり、天井を仰ぎみながら息を吸いこみ、開戦を告げる咆哮を上げる。

砕竜ブラキディオス。

桐音が抜けて三人となったチーム、新たなる獣竜種との戦いが今ここに始まった。

## 4 1 話

先手を取ったのはガンナーである十兵衛だ。装填した通常弾Lv2でジャブを放つ。それは狙い通りに頭へと吸い込まれていき、着弾するのだが当然大きなダメージにはならない。

しかし弱点部位である事は間違いなく、それは確かなジャブとなつてブラキディオスにダメージを与えた。ブラキディオスは小さく唸り、そのまま両手を振り下ろしながら三人へと接近してくる。

先ほど唾液を吹きかけた事で両手の粘菌は活性化しており、地面に両手が叩きつけられるたびに地面に円形の粘着質の物体が設置されていく。当然それから逃れるように三人は横に散っていくが、ブラキディオスは逃げる三人を薙ぎ払うように尻尾を振るってきた。

それをやり過ぎし、尻尾が向こうへと振るわれたのを見越して瑠璃が夜刀【月影】を抜き、足元へと潜り込んで斬りかかっていく。茉莉も角槍ディアブ羅斯を抜いて盾を構えつつ前進。



もう一度振るわれた尻尾を盾で受け流しながら腕へと角槍ディアブ羅斯を突き出してやる。それは腹付近に突き刺さるがまだまだ浅い。

向こうを見ていたブラキディオスはそれに反応し、振り返りながら左手を勢いよく振り下ろしてきた。

それを弾こうと考えたが、茉莉は一瞬の判断でそれをやり過ぎたために横へと逃げる。すれすれに地面に打ち付けられる左手から粘液が地面に付着。もし盾で受け流せば盾に粘液が付着し、後々爆発するのではないかと判断したのだ。

だがブラキディオスは右手をフックのように振りかぶって茉莉へと追撃。それをバックステップで躲してやり過ぎた。

続けて横にステップしながら下がってきた肩へと一撃、二撃と入れて離れる。

瑠璃もまた足を狙って夜刀〔月影〕で斬りかかり、数度入れて離れていくというヒット&アウェイの戦法を使っている。

二人にとってブラキディオスは初見の相手だ。まずはその動きを把握するために立ち回っている。

十兵衛はというと離れた所で炎戈銃ブレイズヘルに通常弾Lv2を装填しては、ブラキディオスの頭へと撃ち続けている。背中を向ければ立ち位置を変えて尻尾を狙って撃つという方法で攻撃をしていた。

なぜそこを狙っているのかといえば、ブラキディオスにとってそこが弾でのダメージの弱点部位だという情報があるためだ。それを覚えていた十兵衛は少しの攻撃で大きなダメージが見込めるであろうそこへと狙って撃っているという訳だ。

「ギイイイ！」

唸りながら二人から距離を取りながら両手に唾を吐きつけていく。獣竜種であるため距離を取る動きも飛竜らと違って軽快に見える。

身構えながらどう動くのかを観察していると、背後から十兵衛が叫んだ。

「二人とも、跳んでくる可能性があるから気を付けるツス！」

「跳ぶ？」

瑠璃が疑問に感じながらブラキディオスの動きを見てみると、またブラキディオスが両手に唾を吐きつけながら下がっていき、足に力を入れながら腰を落としていった。

そのまま力を解放するように勢いよく跳躍して両手を叩きつけてきたではないか。注意していた瑠璃は素早く横へと逃げることで難を逃れたのだが、茉莉は逃げ切れずに盾を構えて防御する。

しかし襲い掛かってきた衝撃は凄まじく、叩きつけられた際に盾に少量の粘菌が付着してしまう。それに気づいてブラキディオスから離れようとしたのだが、それを追うようにブラキディオスもまた横に滑るように移動してきて茉莉にびったりくっついてく

る。

「くっ……！」

距離を離すように後ろへと跳んだが、前に一步進みながら強く左腕を引いて叩きつけようとして来た。盾を構えて防御しようとしたが、「それはダメツスよ！」という声が聞こえた。

続くようにブラキディオスの頭に弾が着弾し、一間置いて爆発した。それに怯んだブラキディオスが後ろに後ずさっていくのを見、茉莉は更に距離を取るように後ろに跳びつつ盾を振って粘菌を振り払っていった。

そんな彼女へと十兵衛が近づき、炎戈銃ブレイズヘルに弾を込めながら話しかけていく。

「ブラキの粘菌は離れた粘菌とブラキの腕にある粘菌同士混ざり合った瞬間、爆発するツス。あのまま盾で受け止めていたら盾が爆発していたツス」

「……なんと」

「伝え遅れていて申し訳ないツス。とにかくブラキのあの粘菌は離れていけば活性化も落ち着くツス。その度にまたブラキが活性化させるツスが、落ち着いている状態ならば、盾で防御しても問題ないツス」

「気をつけましょう」

十兵衛の忠告を頭に入れ、茉莉は気を取り直してブラキディオスへと接近していく。向こうでは瑠璃に向き直ったブラキディオスが両手を振るって彼女に襲い掛かってくるのだが、瑠璃もその動きが何となく見えてきたらしく夜刀【月影】を構えて立ち回っては隙を突くように斬りかかり、切っ先で突いている。

接近していく茉莉に気づいて視線を動かしたようだが、ブラキディオスはまた距離を取るように下がっていく。そうして一度身構えるとまた何度も地面を叩きながら走り出す。

瑠璃はその進路から逃げようとしたが、はつと息を飲んで背後の足元を見た。そこには瑠璃と立ちまわった際にブラキディオスがすかしたことで地面に設置された粘菌の地雷。

それは既に赤く染まっており、いつ爆発してもおかしくない状態にあった。

「チツ……！」

翼を広げて宙に上がりながら逃げ、そのすぐ後にそれが爆発する。地面を抉り、石を飛ばしたその爆発はまさしく地雷といってもいいものだった。あれを受けていればただでは済まないと思わせるには十分な威力を持っている。

そして瑠璃がさらに下がればブラキディオスは地面を殴りながら角を振るうようにし、宙にいます瑠璃を弾き飛ばそうとしている。

だが強く翼を羽ばたかせてそれから逃れ、ブラキディオスは背後へと通り過ぎていく。

奴の通り道には粘菌の地雷が設置され、時間を置いて次々と爆発していく。その度に石が舞い上がり、ぱらぱらと周囲に落ちていく。

立ち止まったブラキディオスへと茉莉が接近し、一突き入れるが、すぐに反応して尻尾を振るってきた。尻尾ならば問題なく盾で受け流せ、その隙を突いて更にもう一突き出来る。

今度は足へと突き入れてブラキディオスの転倒を狙ってみる。向こうでも瑠璃が転進して着地しながら横つ腹から足にかけて夜刀「月影」を振り下ろしていく。

離れた所には十兵衛が炎戈銃ブレイズヘルを構え、貫通弾Lv2を装填して頭から突き抜けるように照準を合わせて引き金を引いていた。

三人の位置取りは完全に三角形になっている。これを基本として立ち回るのが三人のやり方となった。

今までならば桐音が斬りこみ、それに続くように瑠璃が斬りこみ、茉莉は二人の邪魔にならぬように移動しつつ突いていく。十兵衛は弱点部位を狙うか、誰かを補佐するようには背後に回って銃撃する、というものだった。

はつきりとした形はなく、状況と敵に応じて立ち位置を変える。そういうやり方だつ

たのだ。

しかし桐音が抜けた今、ダメージソースを担うのは瑠璃となる。そんな彼女はただ斬りこみ、転倒や部位破壊を狙っていくのだ。茉莉はそんな彼女から反対側の位置に立つて安定した攻守で着実にダメージを重ねる役割を務める。

十兵衛はそんな二人から離れ、二人の背後から援護するか、あるいは二人の後ろに問わず間周辺を立ち回って銃撃するという立ち位置だ。

そうして完成したトライアングルは確実にブラキディオスの体力を削っている。

それから逃れるために右手で地面をつきながら体を捻り、茉莉の背後に回ってからまたフックを仕掛けていく。

「なんとという立ち回り……っ!？」

いきなり背後に回り込まれるなんてランサーにとつては厳しい動きだ。だが何とか振り返りながら盾で弾いたのだが、まだブラキディオスの左手には粘菌が付着したままだ。またしても盾に粘菌が移り、じくじくと音を立てながらゆつくりと赤へと変色していく。

「茉莉っ!」

すかさず瑠璃が疾走し、その勢いで翼を広げて飛び、高度を確保して滑空する事でブラキディオスへと急速接近する。十メートル以上もあつた距離が一気に縮まり、茉莉へ

と追撃するように右手を振り上げるブラキディオスへと通り過ぎざまに斬り捨てていく。

そうして背後へと回り込めば急旋回。振り上げている右肩を狙って夜刀【月影】を突き入れてやった。

「ギヤアアアアッ!?!」

その痛みにたまらずブラキディオスは怯み、体を震わせて瑠璃を振り払おうとする。その隙を突いて茉莉が離れつつ盾を振ってまた粘菌を振り払っていく。十兵衛もブラキディオスへと接近し、側面から貫通弾を射出して腹を貫くようにした。

右手を振り上げ、頭突きをするようにして瑠璃へと反撃するブラキディオス。今度は急速落下をして地面に着地し、夜刀【月影】を勢いよく振り抜いて両足を切り裂く。

「これで……っ、落ちろおッ!」

とどめとばかりに振り返りながら握り直した夜刀【月影】を振りおろし、ブラキディオスの左足を袈裟斬りにしてやれば、それによって力を失ったようにブラキディオスの体が地面に倒れ込んでしまった。

「よっしやあ! どんなもんよ!」

思わず声を張り上げる瑠璃は、そのままブラキディオスの腹と両手めがけて夜刀【月影】で気刃斬りを放っていく。そうやって夜刀【月影】に鍊気を溜めこんで解放してや

り、威力を底上げする算段だ。

茉莉も盾に付いた粘菌を振り落とし終えると、倒れているその顔へと連続して角槍ディアブロスを突き出していく。ガンランスならばここで竜撃砲をぶつ放すところではあるが、生憎と今回はそんなものはない。

ランスはただ確実にダメージを積み重ねるために突き続ける、それだけだ。

しかしだからこそ安定する。

変なギミックもなく、その突きと大きな盾で立ち回るのがランスなのだから。

そして十兵衛は顔は茉莉、腹は瑠璃がやるならば、と炎戈銃ブレイズヘルに通常弾LV2を装填して尻尾を狙って撃ち続ける。雷砲ラギアブリッツと違ってベルトリンクが繋げられないため撃ち終えればまた装填しなければならぬが、それでもその手は高速で動き続け、一番威力を發揮する位置まで近づいて弾丸を射出し続けていた。

やがてもがいていたブラキディオスが起き上り、すると両手と角の粘菌が黄色に変色して範囲が広がっていく。それだけでなく体や背中、頬周り付近にも黄色く変色した粘菌が目に見える程に活性化していく。

そうしてブラキディオスが天井を仰ぎ見ながら、

「グギャアアアオオオオオオン!!」

洞窟中に響き渡る程の怒号を上げる。



瑠璃と十兵衛は高級耳栓のおかげで影響は全くないが、茉莉は堪らず耳を押さえて縮こまってしまう。素早く瑠璃が茉莉の下へと駆け寄って彼女の肩を少し強く叩いてやった。それで何とか硬直が解け、二人してすぐにブラキディオスから距離を取つていく。

事前に十兵衛から話は聞いている。

怒り状態になれば粘菌がそれに呼応するように更に活性化し、今までは地雷設置となつていたそれは強く叩きつければ爆発してしまうのだ、と。

それはどれほどのものか、一度見ておきたい。

そう思ったのだが、二人へと振り返つたブラキディオスがすぐさま跳躍してきたではないか。

(ノーモーションっ!?)

冷や汗が流れ落ちる程に冷たい感覚が走り抜け、瑠璃と茉莉が素早くその場から飛び離れる。その背後にブラキディオスが着地し、叩きつけられた両手から発火するような爆発が巻き起こる。

爆発の勢いで火柱のようなものまで立ち上る程のもの。当然ながらその周囲は地雷の時よりも大きなクレーターが出来上がっていた。

それに息を飲んでいる暇はない。ブラキディオスが振り返りざまに瑠璃へと勢いよ

く左手を振りおろし、それから瑠璃が逃げるのだが爆発の際に発せられた熱風が瑠璃の体へと叩きつけられた。

それだけでは終わらず、右手が振りかぶられて横から殴ってくる。それも後ろに下がって逃げるが、すかつた右手からは爆発せず、また地面に地雷を設置するだけ。やはり強く打ちつける事で爆発するようで、これくらいのものならば地雷を設置するだけらしい。

瑠璃は更に後ろに下がって距離をとろうとしたが、背後がマグマの海である事に気づき、舌打ちして翼を広げて宙に舞い、側面に回り込みながらマグマの海からも離れていく。

それを追おうとしたが、ブラキディオスは離れた所にいる十兵衛に気づいた。相変わらず距離を保ちながら銃撃している彼を視界に収めたブラキディオスは、前のめりに進みながら角を地面に突き刺していく。

その際角の粘菌が強く活性化して光を放ち出したのだ。そして突き刺した場所から強い爆発が発生し、それは連鎖しながら直進していく。

十兵衛はその動きを見た時から何をするかは把握していたようで、炎戈銃ブレイズヘルを引いて横へと跳ぶ事でそれから逃れる。

また茉莉も十兵衛に狙いを定めて攻撃を仕掛けるのを読み、側面に回り込んで爆発の

連鎖を見届けながら角槍ディアアブロスでブラキディオスへと攻撃を仕掛けていく。するとブラキディオスはまた距離を離しつつ回り込むように、地面に手を付けながら旋回した。更に後ろに下がり、サイドステップをして方向を定めてくる。

またあの爆発の連鎖をするのかと警戒したが、小さく唸ってまた連続して地面を殴りつけながらの接近だった。だが殴る度に地面が爆発し、耳に来る爆発音が響き渡る。

角槍ディアアブロスをしまつて横に走り抜けて逃げる茉莉だが、ブラキディオスはそれを追うように曲がってくる。完全に横へと逃げられれば、尻尾を振るつて薙ぎ払つてくるのだが、それを前へと跳ぶ事でやり過ぎ、転がりながら起き上る。

すると両手の粘菌の色が薄くなっているのに気付いた。どうやら今の連続爆発によつて繁殖した粘菌が落ち着いたらしい。

これで盾で弾きながらカウンターが出来る。

そう思った茉莉ではあったが、ブラキディオスが振り返りながら一歩下がり、そのまま勢いよく跳びかかってくる。

(またノーモーションですかっ!?)

咄嗟に盾を構えながら気を込めて自身の硬さを底上げして対処するが、それでも体にかかる重圧と振動を完全に相殺する事は出来ない。両手の粘菌が落ち着いているおかげで何とか言ったと言つてもいい。活性化していたら爆発し、体が吹き飛んでいただろ

うから。

追撃しようとしたブラキディオスだったが、突然連続して顔が爆発する。その衝撃に頭を揺さぶられてしまい、呻き声を上げながらたたらを踏んでしまう。

その追撃として瑠璃が接近し、夜刀【月影】で斬りかかっていった。

見れば十兵衛が炎戈銃ブレイズヘルからベルトリンクを抜いているところだった。どうやら徹甲榴弾を連続して射出していたらしい。

一体いつから銃撃していたのだろう。動き回るブラキディオスに連続して顔面へと徹甲榴弾を当てたというのか。あるいは飛びかかった後の硬直を狙ったのか。いずれにせよやはりただ者ではない。

「大丈夫ツスカ、茉莉さん！」

「ええ、何とか。ありがとうございます」

「いえ、気にする事はないツスよ。……やり辛いツスカ？」

「……そうですね。少し想像以上でした」

「無理はしないでくださいツスよ。おいらも全力でサポートするツスカから」

そう言いながらも十兵衛は弾丸を装填して斬りかかっていく瑠璃へと引き金を引いた。放たれたのは硬化弾。瑠璃の防御面を上げてくれる硬化薬の効果を含んだ弾丸だ。それは狙い通り瑠璃へと着弾し、含まれている効果が瑠璃へと力を発揮する。

それをもう一発装填すると隣にいる茉莉にも撃ち込んでやり、彼女にも同様の効果を与える。

「ありがとうございます」という茉莉の声に頷き、十兵衛は更に前へと出てブラキディオスへと接近していく。接近戦はあまりするべきではないへビイ使いの上に、十兵衛自身も接近戦は苦手だ、と言っていたのにどうしたのか。

茉莉も同じようにブラキディオスへと接近し、一人で立ち回っている瑠璃を助けに向かう。

だがそんな彼らに気づいたブラキディオスは突如角の粘菌を活性化させて光らせ、その場に留まったまま地面に突き刺した。それを見た十兵衛が「離れるツス！ 周囲が爆発するツス！」と声を上げる。

それを聞いた瑠璃が周囲を見れば、転々と白く光り始める地点がある事に気づく。

まるでそれは向こうで確認されているテオ・テスカトルの粉塵爆発の設置地点のよう。母親から聞かされた話を思いだし、瑠璃はその光っている部分を避けながら離れていく。

刹那、勢いよく顔を上げた瞬間、ブラキディオスに近しい場所から順次に光った地面が爆発していく。砂埃が舞い上がり、弾け跳んだ残骸が降り注ぐ中、ブラキディオスは両手に唾を吹きつけながら数歩下がっていき、瑠璃へと向かって跳んでくる。

息をのむ瑠璃。

それでも生き残るために体を動かし、横へと跳んで逃げる。直撃だけは避けられたが、爆発した衝撃からは逃れられず、叩きつけられる衝撃に煽られて翼を使わずに宙を舞うという経験をした後に、体の側面から地面に叩きつけられる。

「か、ぐ………っ!?!」

「瑠璃っ!?!」

そのまま数メートル地面を転がっていき、ようやく止まった。だが先ほど十兵衛に撃ち込まれた硬化弾のおかげで思った以上の痛みはなかった。いや、それでも衝撃と地面に叩きつけられるという痛みは鈍くじくじくと体を襲うのだが、致命傷という程には至らない。

荒い息をつきながら起き上る瑠璃を見て、茉莉が意を決してブラキディオスへと迫っていく。今は自分が引き付けておかねばならない。少なくとも瑠璃が動けるくらいには時間を稼がなければ。

十兵衛が瑠璃へと近寄って体を起こしてやるが、体を襲う痛みによつて小さく呻いてしまった。そんな彼女へと回復薬グレートを手渡してやり、「……サンキュ」と礼を言いながら受け取って飲んでいく。

彼女に頷きかけて炎戈銃ブレイズヘルを手にし、茉莉へと振り返ってきたブラキディ

オスにまた通常弾を撃ち放つ。そうしながら十兵衛は少し考え、「一度ここは退くツス。立て直した方がいいツス」と言った。

続けるように、

「瑠璃さん、出口まで走れるツスか？」

「……何とかやってみるわ」

「うっす。おいらは茉莉さんをサポートしつつ後退するツス。一人で行かせる事になるツスが……」

「気にしないで。茉莉を……頼むわ」

それに十兵衛は頷き、瑠璃は体を軽く押さえながら走り出す。その様子を茉莉は角槍ディアブロスを構えながら横目で確認し、十兵衛も炎戈銃ブレイズヘルを手に銃撃しながら首をしゃくつて「一度撤退するツス」と声をかける。

茉莉もそれを了承するように軽く頷き、ブラキディオスを前面にしつつ少しずつ下がっていく。

だがそれを逃さないように勢いよく右手を振り下ろしてきた。逃げるようにバックステップするが、それでも爆発による衝撃波が襲い掛かってきたため盾を構えてしまふ。そこを狙い澄ましたかのようにまた横から殴り飛ばしてくる。

それも防いだが粘菌が付着してしまう。

やはり相性が悪い……と心の中で悪態をつきながらも今はただ耐えるしか出来ない。また殴りかかってくるブラキディオスだったが、側面から着弾した弾が頬で爆発し、続けて角付近が爆発して頭が揺さぶられ、力が抜けたようにその場にへたり込み、転倒してしまった。

「……ふう。茉莉さん、今の内に撤退するッス！」

「あ、はい。ありがとうございます」

どうやら徹甲榴弾の効果で眩暈状態になったようだ。ペーリと頭を下げながら角槍ディアブロスをしまい、盾を振って粘菌を払いつつ茉莉が駆け出していく。

それを見送りながら十兵衛も走るのかと思いきや、眩暈状態になっているブラキディオスへと銃口を合わせて貫通弾Lv2を装填して射出し始めた。

胸を狙って撃ち出されたその弾は垂れ下がっている手をも纏めて貫いていき、胸、腹へと突き抜けていく。

そうして狙いを変えて頭をも貫くようにして連続して引き金を引きつつ、次々と貫通弾Lv2を装填を繰り返す。

「グルル……ギョルルル……！」

呻き声が聞こえ、ふらつきながらブラキディオスが起き上っていくのを見た十兵衛は炎戈銃ブレイズヘルをしまい、二人が先に逃げていった洞窟の出口めがけて走り出す。



そんな十兵衛を見てブラキディオスが怒号を上げる。またしても洞窟中に響き渡るその声ではあるが十兵衛には通用しない。しかし逃げる彼を追う事はせず、ブラキディオスは角の粘菌を活性化させながら勢いよく前のめりに倒れ込みながら地面にそれを突き立てる。

「げっ!?!」

それに気づき、十兵衛は慌てて横に跳びながら前転する。背後からズドドドツ!と連続して爆発する波が襲い掛かり、先ほどまで十兵衛が走っていたところが吹き飛んでいく。

続けてブラキディオスは数歩進んでそのまま勢いよく飛びかかってくる。離れていた距離が一気に縮められ、また十兵衛は前に飛びながら転がって逃げ切る。

「くう……まだまだこんなもんじゃ死なないツスよお!」

傍から見れば情けない光景だが、当の本人は真剣だ。しかも何気に受け身の取り方もうまい。勢いよく前へと飛びながら回転しているが、すぐさま起き上って走りだしている。背後から爆発の衝撃波が襲い掛かってくるが、十兵衛を守るディアブロUシリーズがしっかりと受け止めていた。

そうして出口付近までやってくるが、またブラキディオスが角を地面に突き立てて連続爆発を起こしてくる。それをまた斜め前へと跳んで逃げ切るが、出入り口の壁が爆発

によつて吹き飛び、受け身を取つて回転する十兵衛の頭や体へと岩が打ちつけてくる。「いたつ、ちよ……こんなおねえツスよ！」

それだけでなく吹き飛んできた砂埃や地面の瓦礫まで衝撃波と共に襲い掛かつてきたため、彼の体はディアブロUシリーズの重量も無視して吹き飛ばしてくる。

「ぎ、ぎやあああああああつ?!」

崩れ落ちていく出入口を尻目に、彼は宙と地面を回転しながらエリア7から放り出されてしまった。

エリア4へと逃げてきた瑠璃と茉莉が見たのは、坂道を転げ落ちてくる一人の人物の姿だった。次いで聞こえてくる何かが連続して爆発する音と崩れ落ちていくような音。

転がってきたその人物、十兵衛はそのままエリアにある水場まで移動し、ようやく止まった。軽くぼしやん、と水音が聞こえてきたが、大丈夫だろうか。

瑠璃が彼の下まで駆け寄り、「ちよ、大丈夫？」と声をかけて起こしてやるが、十兵衛は荒い息をつきながら「……ひでえツス。あんまりツス……」と悲しげに呟いている。

続けて瑠璃から視線を外し、骸の口元からぺっぺつ、と水を吐き出している。どうやら少し飲んでしまったらしい。軽く顔を揺らしてみれば骸の穴から水が入ってしまったらしく、小さく溜息をついていた。

「ちよつと落としてくるツス」

「え？ あ、うん……」

ぺこりとすまなそうに頭を下げると瑠璃から離れていき、そのスカルSヘッドを取ったではないか。そうして現れたのは灰色や白が混ざる黒髪だった。肩までかかるそれは多少跳ね回っている。

二人に背を向けたまま十兵衛はそれに入ってしまった水を落とすようにとんとんと体に叩いたり逆さになっている。

『……………』

後頭部は暗くてよく見えず、耳は髪に隠れて見えない。そして背を向けているから噂に聞く傷跡も見えない。今彼の前に回り込めばそれが見られるのだろうが、彼がわざわざ離れていって背を向けたままだというのを考えれば、やはり見られたくはないのだろう。

それを裏切ってわざわざ見に行く気にはなれなかった。

少しして水を落とし終えればすぐに骸を被って顔を隠す。そうして振り返ればいつもの骸の顔とその穴の奥から見える瞳が二人を見つめてきた。

「さて……大丈夫ツスカ、お二人さん？」

「ええ、まあ……何とか。少し休めたから痛みも落ち着いてきたわよ」

「私もです。……とはいえあの衝撃に少し左手が若干痺れていますよ」

角槍ディアブロスに砥石を当てて切れ味を戻しながら茉莉が言う。見ればディアブロスの素材を使って作り上げられた盾が若干傷ついていた。粘菌による爆発がなかったとはいえ、飛びかかりのあの衝撃を二度は受けている。

それを防ぎきれただけの強度を誇っているのだが、それでも盾に対してダメージはなかったわけではない。それに盾を構えている茉莉の左手にも衝撃が伝わっているのだ。何度も何度も受け続けては、力があるとはいえども左手にもダメージが蓄積していく。先ほどそれに対しても手当てをしたらしく、今は少し落ち着いているとの事だった。

「それは良かったツス。……で、どうツスか？ ブラキと戦ってみて」

「なかなか厄介ですね。私にとっては少々やり辛いことこの上ないですよ」

「あたしは素早く立ち回れるから茉莉のようにやり辛いってのは感じないけど……爆発が厄介かしら。設置されまくったら行き場を失うわね」

「そうツスね。怒り状態になればそれは落ち着くツスが、今度は即、爆発となるツスからどちらかといえばそっちが厄介ツス。その上執拗に殴ってくるツスから、茉莉さんにとっては更に厄介になるツス」

「そうですね……それを思い知らされましたよ」

やれやれとため息をつきながら首を振る茉莉。防御しても粘菌が付着すればいずれ爆発する。力強く殴られれば怒り状態なら盾ごと爆破されるかもしれないという懸念。

彼女にとって相性が悪いどころの話ではなかった。

「なので私は怒り状態になれば補佐に回ります。奴に閃光玉は？」

「効くツスよ。とはいえ周囲をふらふらして暴れるツスが」

「なるほど……では閃光と落とし穴でも使つてやりますかね。前衛を瑠璃に任せることになりませんが……」

「大丈夫よ。気にしないで立ち回つて。あたしだけでも斬りこんで意識を引き付けてやるから」

「お願いします」

ペこりと小さく頭を下げ、茉莉は角槍ディアブロスを砥いでいく。

続けて十兵衛がポーチから材料を取り出し、調合器具を用意して調合を始めた。先ほど使い切った徹甲榴弾の補てんをするようだ。ギルドの取り決めにより徹甲榴弾は九発しか持ち歩けない。

そしてその全てを先ほどのベルトリンクで射出してしまったらしい。材料さえあればこうして用意できるので問題ないが、まあこれがガンナーの宿命というものだ。

手際よく調合を進めていく彼の様子を見つめながら、瑠璃もまた砥石を用意して夜刀【月影】の切れ味を戻していく。先に切れ味を戻し終えた茉莉は腰に落とし穴を掲げ、もう一つ予備としてシビレ罠も掲げておくことにした。

数分後、全ての準備を終えた三人は隣のエリア3へと移動していく。洞窟の出入り口は完全に塞がっており、入れなくなってしまったので回り道をする事にした。

新しいクーラードリンクを飲んでいざエリア5へと入っていったのだが、すぐに岩陰に身を隠す。

生える石柱の奥に群青色の影が見えたためだ。

「……移動してきたみたいね」

「そのようで。しかし石柱が邪魔ですね。いえ、逆にそれを利用出来ますか」

「そうツスね。あれを中心としてぐるぐる回りつつ、立ち回るといふ戦術が一応出来なくもないツス。というかガンナーとしては利用して立ち回りたいところツスね」

幸いまだブラキディオスには気づかれていない。岩陰に隠れながら三人はどうブラキディオスを切り崩していくかを相談していく。

「瑠璃さん、先陣切つて意識を引き付けてくださいツス。そして次においらが行つて援護するツス。そこで角笛を吹ければ吹くツスから、茉莉さんがおいらの背後から閃光玉を使うツス。まずはそれで足止めし、瑠璃さんとおいらで叩き込むツス。茉莉さんはその間に罠をお願いしたいツス」

「オーケー。まずはそれから行くこうじゃない」

「了解です」

怒り状態でなくなっている今、罨と閃光玉の効力は結構ある。これを好機としてブラキディオスの体力を一気に削っていく算段だ。それに異を唱える事もなく、これからの作戦を立て終える。

「あ、瑠璃さん」

「ん？」

「閃光玉が効いているからと言って油断しない事ッス。奴はそれでも暴れるッスから。あと、あの連続爆破もやってくるッスから、茉莉さんもそれに気をつけるッス」

「わかった」

「おお、そうですか。気をつけましょう」

最後に忠告を受け、頷いた瑠璃が夜刀【月影】に手をかけながら飛び出していく。その足音に気づいたブラキディオスが振り返り、威嚇するように姿勢を低くしながら唸ります。

それを気にも留めず下がった頭へと斬りかかり、頬を裂きながら一步下がる。

するとブラキディオスが空を仰ぎ見ながら怒号を上げる。岩肌や石柱を反射しながら響き渡る怒号は周囲に響き渡るが、やはり瑠璃には通用しない。足元へと潜り込んで夜刀【月影】を振るい、隙だらけとなっているブラキディオスを斬り続ける。

十兵衛がその背後にある石柱の陰に入り込み、通常弾Lv2を装填してブラキディオ

スの頭へと狙撃を始める。

しかし奴の意識は瑠璃へと向けられている。狙い通りだ。

足元にいる瑠璃へと振り返りざまに拳を落として潰そうとするが、前に進みつつ切り払って逃れる。続けて振りかぶられるフックもまた足元を潜りぬけてやり過ごし、振り返りながら夜刀【月影】を薙ぐ。

更に切り払いながら石柱の方へと進めば、ブラキディオスは一步下がりがら振り返ってくる。すり足で下がりがら石柱へと近づけば、それを追うようにブラキディオスが前進してきた。

十兵衛が銃撃する中、茉莉が彼の背後から閃光玉を投げつける。すると強い光が発生し、その中でブラキディオスの悲鳴が聞こえてきた。

石柱を背にして光からやり過ぎつつ十兵衛は炎戈銃ブレイズヘルへと貫通弾Lv2を装填し、光が晴れた瞬間また姿を見せてブラキディオスの頭へと突き抜けるように引き金を引いていく。

視界を潰されたブラキディオスは闇雲に両手を振り、尻尾を振り回し、見えない敵へと攻撃を仕掛けている。それを掻い潜りながら瑠璃は何とか奴を斬り続け、十兵衛も動き続けるブラキディオスへと銃撃する。

奴の狙いは狂っている。そして両手には活性化している粘菌がある。



振るわれるたび地面や周りの岩肌へと粘菌が付着し、時間を置いては爆発する。特に岩肌へと付着した粘菌が爆発すると、それによつて吹き飛んだ残骸がブラキディオスや奴の近くで立ち回る瑠璃へと無差別に襲い掛かつていく。

「くっ、少しは大人しくしなさいっての！」

悪態をつきながらも瑠璃はブラキディオスだけでなく周りに注意しながら斬り続けていく。

そして茉莉はというと、打ち合わせ通り石柱から少し離れた所にシビレ罠を仕掛けた。問題なく起動するのを確認し、「こちらは大丈夫ですよ」と十兵衛へと声をかけ、十兵衛は振り返らずに彼女へと親指を立てて了解と示す。

「瑠璃さん、こっちはオツケーツス！」

と瑠璃へと声をかけ、瑠璃は「了解！」と返事をしつつブラキディオスから離れつつ切り払う。自分を先ほどから斬り続けている奴が離れていく、と感じたブラキディオスはまだ完全に視界が戻っていない中、角の粘菌を活性化させて勢いよく地面に突き立てていく。

先ほど十兵衛から忠告を受けていた瑠璃はそれに反応してそれから逃れたが、思いの外ブラキディオスのそれは勢いが強かった。

その場で角を突き立てるのではなく、軽く跳ねて前に進みながらの全体重を寄せた一

撃だったのである。そのせいでブラキディオスの肩が瑠璃の背中に直撃し、奴が勢いよく角を振り上げた衝撃に合わせて瑠璃の体が跳ね上げられながら吹き飛ばされる。

「——がつ、は……!?!」

それだけではなく横で連続して爆発していくその衝撃波に当てられ、空中を回転しながら転がっていく。その光景に息をのむ十兵衛と茉莉ではあったが、接近してくる爆発の連鎖から逃れるために横へと跳ぶ。

それは十兵衛が隠れていた石柱へと到達し、そのまま石柱すらも吹き飛ばしてしまふ。高く聳えるその前面の一部を吹き飛ばし、崩し、ようやく止まった。どうやら反対側へは突き抜けなかったらしい。

だが問題が浮上した。

瑠璃がまたしても吹き飛ばされてしまったのだ。忠告した事はしたが、よもやブラキディオスの抵抗が思いのほか強すぎたと想像出来たのだろうか。いや、出来たのだろうか。が、反応が遅れてしまったという事なのだろう。

その事に歯噛みし、十兵衛は打開策を思案する。

「……茉莉さん、瑠璃さんの方へと行つてくださいます。ここはおいらが引き受けるツ  
ス」

「なっ……いえ、私が引き受けます。十兵衛さんが瑠璃を——」

「——大丈夫ツスよ。ここはおいらがやるツス。ブラキを少しでも知る奴が対応した方が安全ツスから。ここで二人も戦闘不能にするわけにはいかないツス」

「……………」

戦闘不能。

その言葉が告げられた瞬間、茉莉は息を飲んだ。見れば瑠璃が全く動いていない事に気づいた。意識が飛んでいるらしい。あるいは——いや、そんな最悪は考えたくない。茉莉が逡巡する中、苦しい十兵衛の声が聞こえてくる。

「…………おいらが立てた作戦のせいでこうなったツス。責任は、おいらが負うツス。だから、行つてくださいツス」

そう言つて十兵衛が炎戈銃ブレイズヘルを片手にブラキディオスの前へと出ていく。右手には角笛が握られており、吹き損ねたそれを口元へと持つて行つていた。どうやら完全に囷を買つて出るらしい。

そんな彼の覚悟を無碍にするわけにもいかず、「…………すみません」と苦しいに謝つて茉莉が走り出す。その後、響き渡る角笛の音色。モンスターを意識を奏者へと引き付けるその音に惹かれ、視力を取り戻したブラキディオスが十兵衛へと近づいていく。

その横、数メートル先を走り抜けて茉莉が瑠璃を背負い、エリア7へと走り去つていくのを見届けながら十兵衛は茉莉が設置したシビレ罠へと移動していく。

せつかく彼女がこれを仕掛けていったのだ。無駄にするわけにはいかない、という配慮だった。

しかし、ブラキディオスは逃げていく十兵衛を追うのではなく、また前のめりに倒れながら角を突き立て、爆発の波を作り上げる。それに気づいた十兵衛が横に逃げてそれをやり過ぎすが、それは無慈悲にも設置されたシビレ罠を破壊してしまった。

(くっ、罠が……！)

シビレ罠は小型で機械的な要素がある罠だ。中心から麻痺毒を放出して獲物の動きを止める罠で、踏み抜かれたとしても壊れるような作りではない。しかしあまりにも強い重量と強い衝撃を受ければ破壊されてしまう。

そう、今のブラキディオスが行った爆発の連鎖のようなものだ。

吹き飛ばされて粉々になってしまうそれを見て舌打ちしてしまう程、十兵衛は少し動揺してしまった。だがそれでも今は時間稼ぎを。

茉莉が瑠璃を手当てでできるだけの時間を稼がなければならぬ。

しかも向こうの出口は防がれている。ベースキャンプに戻るにはこのエリアから南下するしかないのだ。

更には言えば、モドリ玉はない。一度山を下りる際に使ってしまったためだ。あそこに掘り出した鉱石などを置いてきているため、もう三人とも持っていない。調査素材もな

い状態だ。

外へ出ようと思つたら崩れた瓦礫をどうにかするしかない。

「ギュルルル……！」

ブラキディオスが唾を両手に吐きつけながらじつと十兵衛を見下ろしている。対して十兵衛は少し冷や汗を流し始めていた。少々苦しい状態にあるのは明白。

だがそれでもやるしかない。

瑠璃があんなことになつたのは自分の立てた作戦のせい。ブラキディオスが初見である彼女に先陣切らせたせいであらうな。例え彼女しか先陣切る人物がいなかつたとしても、もう少し何とか出来たはずだ。

その責任をとらなければならない。

十兵衛はその思いの下行動する。

ブラキディオスが前進しながら勢いよく右手を振り下ろしてくる。それを避けながら炎戈銃ブレイズヘルに装填した散弾Lv2を射出し、両手と腹へと弾幕をぶち当てていく。

更に射出しながら距離を取るように下がっていき、新たな弾を一気に装填。再び弾幕を放つ。それがどうしたとばかりにブラキディオスが前進し、尻尾を振り回してきた。

それを避け、隙だらけとなつている背中を撃ち抜き、今度は貫通弾を装填し、前を向

いてきたブラキディオスの顔を撃ち抜いていく。

そんな十兵衛に苛立つてきたのか唸りながら地面を殴りつつ回り込み、フックを仕掛けてくる。体勢を低くして頭の上を通り過ぎていく拳をやり過ごして、下から撃ち抜くように一発射出して足元を潜り抜ける。

だがそんな彼を逃さずに振り返りながら足元へと勢いよく拳を落としてきた。

「ちいっ……いっ！」

それを強引に転がって避け、背後に強い振動が響くのを感じながら何とか起き上る。だが続けざまにもう一度左手が振り落とされ、十兵衛は後転して躲した。

荒い息が骸の口から洩れて出る。心臓は早鐘を打ち、プレッシャーに押しつぶされそうな程に緊張している。だがそれでも動かなければならない。でなければ、殺られる。

「……はは、ほんと、おいらってこういうのばつかだよなあ……畜生め」

ぶつぶつと呟きながら一発の弾を装填し、しかし撃ち出せずに逃げる。ブラキディオスが唾を吐きつけながら数歩下がっていったためだ。そのまま体勢を低くして飛びかかってくるのを見越し、十兵衛は横にも後ろにも逃げず、ブラキディオスへと走って勢いよく前転する。

すると飛びかかったブラキディオスが十兵衛を飛び越して背後に着地したのだ。

そんな奴へと振り返り、背中に向けて引き金を引く。すると着弾した弾丸が破裂して

四発の爆発を起こした。続けてもう一発装填して、同じ場所を狙って引き金を引く。

放たれた拡散弾Lv2によって背中の甲殻が一部吹き飛び、その痛みに呻いてブラキディオスがたたらを踏む。

そしてまた粘菌が活性化して黄色に染まり、怒りの咆哮を上げる。

「そろそろ撤退……いや、もう少し引き付けておくとするかね」

ポーチから閃光玉を取り出してタイミングを見計らおうとしたが、振り返ってきたブラキディオスがまた角を地面に突き立ててきた。またもや放たれる爆発の波。それを回避した十兵衛だったが、背後の石柱がそれを受けてしまう。前だけでなく背後からも爆発を受けて柱が折られ、それによって完全に破壊されたそれが十兵衛の方へと傾いて崩れ落ちていく。

「んなっ!? それはねーよ!」

慌ててそこから離れる十兵衛だったが、その先にはブラキディオスがいる。彼を迎え撃つように勢いよく振り下ろされる右手。それから逃れるが、背後で爆発したせいで発生した衝撃波が十兵衛に襲い掛かる。

今度は何とか受け身を取って体勢を立て直した十兵衛ではあるが、サイドステップをして位置を取ったブラキディオスがとどめとばかりに接近してきて拳を振り下ろしてくる。

「くそっ！　こんな所で終わるわけにはいかない……！」

手にしている閃光玉を背後へと放り投げ、強い光が発生した。それをまともに見てしまったブラキディオスがまた視界を潰されて呻きだす。

「へっ、ざまあみろッス」

思わず漏れて出る言葉を吐きながらブラキディオスの横を走り抜ける十兵衛。

しかしブラキディオスの執念は凄まじかった。逃げる足音を聞きつけ、尻尾を振り回してきたのだ。眼前から迫るそれに慌てて十兵衛はしゃがみこんでやり過ぐす。それだけでなくブラキディオスは振り返りながらまた拳を振り下ろしてきたのだ。

「ッ!？」

慌てて横へと転がって逃げるが、続けて襲い掛かってくる横殴りが十兵衛の頭を殴り飛ばしてしまう。

直撃だった。

油断した。

そんな言葉が頭をよぎりながらも、頭を殴られ、地面を転がっていく十兵衛はそのまま数メートルを無理やり移動させられる。だが何とか止まり、咳き込みながら起き上っていく。

頭を振って意識をはっきりさせようとするが、ブラキディオスは暴れ回りながらも十



兵衛へと少しずつ接近してきていた。見えていないのに、またしても十兵衛の近くへと拳を落としてくる。

それからまた逃げるように地面を転がったが、近くを爆発する衝撃からは逃げられない。だがここで十兵衛の想定外がまたしても起こる。

あの爆発に反応したのか、頭の側面がいきなり爆発したのだ。

「——ツツツ?」

それによつて頭が強く揺さぶられ、右耳から音が消える。どろり、とした感触が右の頭から流れ落ちるのを感じながら、十兵衛は何が起こったのかを把握しようとする。

そうして見えたのは、何かの破片が近くを転がっているという事と、顔の右側にさつきまで感じられなかった熱気が少し強く感じられるという事。

そして、少し右側の視界が広くなった、という事実だった。

## 42話

隣のエリアから爆発音が時折聞こえてくる。間を置いた爆発、連続した爆発、何か崩れ落ちていく音……それが激しい戦いをしているのだと教えてくれる。

それを聞きながら茉莉は瑠璃の手当てをしていた。

エリア7は相変わらず静かなものだった。ウロコトルやリノプロスの姿はなく、マグマがボコボコと音を立てて流れていくぐらの音しか聞こえてこない。

出来る事ならば外に出てしっかりと治療したいところではあったが、出口は崩れ落ちてしまった岩や瓦礫によって塞がれ、外に出る事は出来なくなっている。

ならばここで治療するしかない。

ポーチからシートを取り出して地面に敷き、その上に瑠璃を寝かせてやって装備を取っていく。頭を打ったせいで瑠璃の意識は飛んでいたが、死んではいなかった。それが幸いか。

回復薬グレート布に染み込ませて軽く手当をしていき、別の布に染み込ませて患部へと当て、包帯を巻いて固定する。もう一つの回復薬グレート布をゆっくりと飲ませて

いきながら、茉莉は考えてしまう。

(……大丈夫なのでしようか)

視線がエリア5へと向けられる。

ガンナーなのにあのブラキディオスを一人で相手をする。十兵衛はブラキディオスとの戦闘経験がある。それが一人なのか、あるいは誰かと組んでなのかはわからないが、たぶん一人なのかもしれない。

だから大丈夫なのかもしれないが、それでも不安にはなってしまう。  
妙な胸騒ぎがする。

これが瑠璃が意識を失っているせいなのか、または十兵衛に関する事なのかはわからない。でも、茉莉の心の奥で何かが警鐘を鳴らしている気がした。

(………ここを離れるわけにはいきませぬ。十兵衛さん、どうか無事で……)

しかし意識を失っている瑠璃を置いて様子を見に行くなんてことは出来ない。

だから茉莉はここで信じるしかなかった。

彼が無事である事を――

視界の端で赤い液体が流れ落ちていくのが僅かに見える。どうやら頭か額から出血しているらしかった。それがわかる程、右の視界が広くなっているということだ。

今まで少し狭かった視界が広くなった理由。

荒い息をつきながら、十兵衛はプレッシャーとは別の緊張状態に陥っていた。震える手がそつと右の頬へと当てられる。指先から伝わるのは骨の感触ではなく、自分の頬の感触だった。

「……っ、あ、ああ……ああ……っ！」

ディアブロUガードを伝わってくるのは確かに頬の感触。でも少しだけ歪な感触が伝わってくる。それは自身に刻まれた傷跡の感触。

自分は今、それを曝け出しているのだ。

今まで隠していた物が知られてしまった、という怯えと緊張が十兵衛の心の中を埋め尽くしていく。がちがちと歯が打ち鳴らされ、体は十兵衛の意志とは違って硬くなっていく。

動かなければ、と思っても動けなくなっていく。

「ギョルルル……！」

ブラキディオスが視界を取り戻した、とでもいうように声を張り上げる。そうして十兵衛へと向き直り、彼へと接近するように走り出す。ぶつけられる殺気と接近してくるその動きにようやく十兵衛が顔を上げ、背を向けて走り出す。

向かう先はエリア6。

茉莉達が向かったエリア7から見て南にあるエリアであり、逆扇形の道になった岩山地帯だ。爆鎚竜ウラガンキンがよく見かけられる環境をしたエリアであり、回り道となってしまうがこつちからでもエリア7へと向かう事は可能だ。

一度こつちに逃げ込んで対処しなければならぬ、と無心になって走り続ける。それを追うブラキディオスは逃がさないとでもいうかのようにスピードを上げてる。

マグマの川によって細くなつていく道を駆け抜け、背後から追いついてきたブラキディオスが拳を振り下ろしてくるのを感じ、何とか逃げ切れるように勢いよく前へと飛んで転がっていく。

背後で爆発するのを感じながら転がっては起き上り、十兵衛は何とかエリア6へと逃げ込んだ。

「はあ……はあ……」

追ってくる気配はない。

細道を駆け抜けて岩山地帯を突き進み、何とか開けた場所へと逃げ込んだ十兵衛は岩肌を背に荒い息をつき、そうして腰が抜けたようにその場にへたり込んでしまう。

「はあ……ふう……はあ」

思わずため息が漏れる。右頬に当たる熱気は左側と比べてやはり熱く感じられる。

スカルスヘッドが破損した。

ポーチから手鏡を取り出して確認してみると、右目周辺と頬がぼつかりと穴が開いてしまっている。

それにより、右目付近から頬、そして頬から鼻付近まで細く伸びる刻まれた傷跡があらわにされていた。赤、紅などと普通の肌の色とは程遠い色で塗り潰され、変色し、焼けた肉のようなそれが外気に曝されている。

だがそれを隠すように伸びた彼の髪があるが、それでも全てを隠すには至らない。なにせ前髪によって目元まで隠してしまえば戦えないからだ。

「……………」

十兵衛は少し考え、スカルスヘッドを頭から外した。そうして現れる彼の素顔。

顔の左側もまた同じように酷い傷痕があった。左側はほとんど火傷の痕が覆い尽くしている。左目をも侵してきそうな程に伸びた火傷の痕、鼻、口元付近も変色してしまっている。

それでも目が無事だったのはそれを両腕で庇ったからだろう。実際ディアブロウシリーズの下の腕は一部分が焼けている。指先は何とか守ったが、腕の表面は今もなおその傷痕を残している。

これをあの二人に晒せと？

無理だ。

無理に、決まっているだろう。

「……………はあ」

ため息をつき、十兵衛はポーチから包帯を取り出した。続けて布を取り出し、手鏡を見ながら頭の傷を手当てする。血を拭い、布を当てて包帯を巻いていく。その際、顔の傷も隠すように顔全体を包帯で巻いていった。

目元と鼻、口元は包帯からだし、傷痕が見えなくなるように巻き終え、破損しているスカルSヘッドを被りなおす。

これであの二人に傷痕を見られなくて済む。

今回限りの逃げではあるが、それでも見られるよりはマシだ。立ち上がった十兵衛は手鏡をポーチに戻し、エリア7へと向かって走り出す。

少し時間を食ってしまった。早急に二人に合流し、ブラキディオスに対する出方を相談しなければならぬ。

最悪、クエストリタイアを考えなければならない。

ブラキディオスがエリア7へと向かっていない事を願いながら、十兵衛は息を少し切らしながら走り続けた。

そうして、やってきたエリア7。

どうやら意識を取り戻したらしい瑠璃が茉莉と何かを話しているのを見つけた十兵衛は呼吸を落ち着かせながら二人へと近づいていく。

そんな彼の気配に気づいたのか、茉莉が十兵衛へと振り返って、そして少しだけ驚いた顔をした。瑠璃も同じように振り返って、彼女もまた少し目を大きくさせる。

「……………でも、遅れたツス」

『……………』

申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた十兵衛だが、二人は驚いたまま無言になっている。

何とか茉莉が先に硬直から解け、「……………えつと……………大丈夫なのですか？」と何とか言葉を発してきた。だがすぐに口元に手を当てて言葉を詰まらせてしまった。こう訊くべきではなかったかもしれない、と後悔している様子だった。

「大丈夫ツスよ。少し手こずったツスが……………おいらより、瑠璃さんの方は大丈夫なんスか?」

「え? あ、ええ……………まあ、茉莉のおかげで、なんとか……………だいじょうぶ……………よ」

自分の事を訊かれて、瑠璃はうんうん、と頷きながらもちらちらと十兵衛の様子を窺いながら答える。そんな二人に、十兵衛は小さく苦笑するしかない。

仕方ないとはいえない仕方ないだろうが、そう困られては自分だって困ってしまう。だが



心境は複雑だった。

やっぱりそんな反応を示すか、という納得と、どこかきちんと巻いていないところがあるのだろうか、という不安。彼だつて緊張状態からまだ完全に解けていなかったのだ。

「……やられたのですか？」

不意に茉莉が静かに十兵衛に問いかける。それに一瞬十兵衛は口をつぐんだが、小さく頷き、右頬を軽くさすつてみせた。

「この通り、不覚をとられて爆発ツスよ。頭から血を流してしまったツスから、こうして包帯巻いてるツス」

傷痕を隠すため、ではなく血を流したから手当てのために包帯を巻いた、と彼は言った。

嘘は言っていない。

実際に血を流してそれを手当てしたのだから。だがその裏にはその傷痕を隠すという大きな目的がある。それに気づかない二人ではなかったが、指摘するように口をする事はなかった。

わざわざ包帯を巻いてくるという手間をかけてきたのだ。本当に流血の手当てだったとしても、顔全体を巻いてくるなんて事をしてきたくらいだ。よほどその“傷痕”が

酷いものである事を暗に示している。

ならば自分達は気にせず、口にも出さずに流しておこう。

「それで……どうするツスか？」

「どうする……つて？ 何が？」

「このまま続行するのか、リタイアをするのか、という選択ツスよ。瑠璃さん、戦えるツスか？」

「……もちろん、戦うわよ。ここで終わらせるわけにはいかないわ」

そう言つて拳を握りしめる瑠璃ではあるが、リオソウルヘルムやメイ、アームの一部が破損している。それだけの衝撃が彼女に襲い掛かり、意識を飛ばしてしまったのだろう。

それでも彼女は戦う意志を折っていない。

その瞳には確かに戦意が宿っている。あれだけの痛い目に遭つたとしても彼女は戦うというのだ。そんな彼女を見つめ、十兵衛は驚きを隠せなかつた。

「……茉莉さんも同意見ツスか？」

「ええ。普通は撤退するんでしょうが……私もここで尻尾を巻いて逃げるとするのは選べませんね」

「どうしてツスか？ あれだけの痛い目に遭つたというのに、戦えるんすか？」

「……目標があるからよ」

「目標？」

それに首を傾げれば瑠璃は頷いた。

「あたし達は姉さんや母さん、そして……あの人達のようなハンターになるんだっていう目標があるのよ。そのためにはこういう厳しい状況にいつかぶち当たる事はある。でもそれに挫けて背を向けちゃ、あたし達は先に、上に進めない。力がないって嘆くのは六年前を最後に終わらせるつもりでやってきているのよ」

（……六年前？）

その言葉に十兵衛が目を細めながら首を傾げるが、茉莉が瑠璃の言葉に続くように口を開いた。

「これは一つの壁だと私達は思っています。そしてその壁を破り、超えていく事こそハンターとして成長するきっかけになりますよね？」

「そうツスね。ブラキは壁として立ちはだかるには十分なモンスターだと思うツス」

「ならばこそ、私達はここで背を向けるわけにはいきません。いい経験ですよ、これは上等です。これを一つの貸しとし、私達はその貸しを取り返すべく、もう一度あれと戦わねばなりません」

「……………」

茉莉もまた無感情ながらもその瞳に炎を宿しているように見えた。

そんな二人を見て十兵衛は思わず身震いする。無意識に拳を握りしめ、震えるその灰色の瞳で二人を見下ろしてしまう。

(なんて……人達だ。あれだけの痛みを味わっておいて瑠璃さんはまだ立ち上がり、普段冷静に見える茉莉さんでさえ熱くなっているように見える。瑠璃さんはわかるとして、茉莉さんは意外だ……こんな、熱い一面を見せるか……。厄介だ厄介だ、と言っていたのに、まだ戦おうとするなんて、それだけ目標にしている人達が凄いつて事なのか) 止められない。

こんな彼女達を止める事が出来ようか。否、出来るはずがない。

普通ならば折れてもおかしくない、折れたとしても十兵衛は責める気はなかった。

だが、ここまで覚悟を決めて戦う意志を見せつけられては、十兵衛もそれに乗っかるしかない。自分はただそれをサポートし、出来る事ならばこれ以上のひどい犠牲を生み出さないように気をつけて立ち回ってみせるだけだ。

「十兵衛」

「……あ、え？ なんスか？」

「ありがとう」

「……え？ なぜ、お礼を言われなきゃならないツスか？」

「あんたの……あなたの硬化弾のおかげでやばい傷にはならなくて済んだわ。それに、あたしが手当てを受けるだけの時間を稼いでくれたっていうのもある。……そんな傷を負ってまで、戦ってくれた。……だから、ありがとう」

そう言って頭を下げる瑠璃。それに続くように茉莉も「私からもお礼を。ありがとう  
ございます、十兵衛さん」と頭を下げてくる。

美少女の二人に揃って頭を下げられ、十兵衛はただただ困惑するばかりだ。慌てて手をばたつかせながら「ちよ、やめてくださいッス。そんな、お礼を言われる事はないッス。頭を上げてくださいッス」と二人へと屈みこんで頭を上げるように言う。

「おいらはただ……責任をとるために戦っただけッス。もう少しうまいやり方があれば、瑠璃さんをこんな事にせずに済んだかもしれないッス。……申し訳ないッス」

「そんな気にする事じゃないわよ。狩りに危険はつきものよ。この通り、あたしは生きてるわ。茉莉の手当てと、秘薬のおかげよ。そんな傷つくたびに一々心痛まれたらやつてらんないわよ?」

「……という言葉を私達のお知り合いの方がよく言っただけじゃないよ、と」

「おい、それを言うな茉莉」

「はっはっはー」

いつも通りの雰囲気を見せてくれる二人に十兵衛はまた口を閉ざしてしまふ。

なんて、強い人達だ、と思わずにはいられない。そんな二人に対して隠し事がある自分が負い目で、ひどく心が痛んでしまう。だがそれでも自分は、今はハンターの一人として行動しなければならない。

この痛みを奥底へと押しやり、呼吸を整えた十兵衛は小さく頷いて「わかりましたッス」と顔を上げる。

「続ける、という事でいいッスね？」

「ええ。何としても狩ってやるわよ。あたしをこんな痛めつけた事を後悔させるくらいにね」

「それでまたへまをしないように気をつける事ですねー。秘薬を飲んだとはいえ、はっちゃければどこかガタがきますからね」

「わかってるわよ。気をつける」

茉莉の言葉に瑠璃は小さく頷きながら少し拗ねる。熱くなるのはいいが程々に冷静にならないとまた痛い目を見るだろう。茉莉がこうしてブレーキをかけてやらないといけない。

それによって少しだけ落ち着いた瑠璃に頷き、茉莉は立ち上がりながら十兵衛を見つめた。

「それで、次はどうしましょう？　ブラキディオスに対する新たな作戦、ありますか？」

「そうツスね……閃光玉も少しずつ耐性が出てきているだろうし、となると……これを使う事になるツスカね」

そう言うって取り出したのは一つのチップ。それを肩から掛けてあるベルトに留めると、首を傾げている瑠璃へと説明を始めた。

「これでブラキの動きを止めてみるツス。その間に瑠璃さんと茉莉さんで一気にダメーヂを稼ぐ。まずはこれからツスね。それに、奴も結構暴れ回ったツスからそろそろ疲労してもおかしくない状態ツス。それが狙い目、落とし穴を仕掛けるチャンスツス。奴の疲労状態での落とし穴はかなり効果があるツスよ」

「なるほど。つまりこれから勝負というわけですか。何とかやってみましょう」

「あと、飛びかかりの件ツスが、あれはブラキの方へと向かって回避すれば、奴が自分を飛び越えていくツス。横に逃げるのではなく、前に逃げれば回避できることが多いツス」

「マジで？　じゃあそれでやり過ぎとして反撃すればいいわけね」

あの敵しい一撃である飛びかかりに対する回避方法。それは二人にとってありがたい情報だった。ブラキディオスにとって格闘戦の中でも最大威力であろう、あれに対する対処方法が頭にあるだけでも状況は変わってくる。

とはいえそれ以外でもあの両手から繰り出される殴りかかりも脅威といえは脅威だ。

例え足元にいたとしても、振り返りながら狙いを定めて振り下ろしてくるのだ。こんな攻撃、他のモンスターにはなかった。

あれを上手く躲していかなければ、瑠璃は足元で立ち回れない。一々斬つては離れていくをしなければやり過ぎせないだろう。その辺りは実際に戦つて覚えていこう。実戦の中で成長もまたハンターとして必要な事なのだから。

瑠璃も立ち上がり、しかし少しだけふらついてしまった。すかさず十兵衛が支えてやり、「……本当に大丈夫ツスカ？」と声をかける。

「大丈夫よ。ずっと座り込んでいたからふらついてしまっただけ。気にする事じゃないわ」

「……ならいいんすが」

じつと瑠璃の瞳を見つめながら彼女の容体を確かめたが、ここは彼女の言葉を信じることにする。不意に瑠璃がその近くにある十兵衛の瞳と視線が合ってしまった、数秒見つめ合う形になってしまった。

「ふむふむ……」

そんな二人の間で茉莉が口元に指を当てながら二人を交互に見て小さく頷きだし、それによつて弾かれたように二人は離れてしまった。そんな二人に目に見える形でわかるほどににやつきながら、「あ、そうお気になさらず続けていただいても結構でしたんで



すよ?。」と口にしてみれば、

「ちよ、気持ち悪いくらいの敬語を使うな!」

「いえいえ、そんな、気のせいですよ?」

「白々しいわよつ!! 何を考えてんのよ!」

「ははは、いえ、何も? そう、このまま続けられれば面白いことになっていたかな、なんて、そんな下世話な事なんて考えちゃいけないですよ?」

「考えてんじゃないのよッ!! ふざけんなあ!」

またしても二人して騒ぎ出してしまふ。そんないつも通りの姉妹の仲の良さを見ながら、十兵衛は小さく笑つてしまふ。そんな無自覚が出来る程、自分は二人に親しみを感じているのだ、と心のどこかで感じた。

いい変化だ、と思いつつ、ブラキディオスとの戦いを続けるためにもこの姉妹のコントを止めるために間に入っていった。

ブラキディオスはエリア8へと北上していた。ここは逆Y字型の地形をしている。実際は広々とした外の空間なのだが、左右に火山から流れ落ちたマグマの大河が広がっているのだ。

南は崖となつており、下界を見下ろせば小山、岩山が広がっていくのが見渡せる。北は更なる火山の奥地へと進むための坂となり、その先を進んでいけば火口付近まで上る

事が出来るようになっていた。

ブラキディオスはその近くで休んでいるようだった。一度エリア5へと進んできた三人は遠くにいるブラキディオスを発見し、静かに接近していく。

不意にブラキディオスがきよきよと辺りを見回し始めた。そうして姿勢を低くしながら接近していた三人の姿に気づき、振り返って威嚇を始める。

ここは開けた空間であり、視界を遮る物体は何もない。いくら姿勢を低くしたとしても、目が良ければその姿を捉えることは可能だ。

気づかれたならば仕方がない。

瑠璃がまた先陣切るために夜刀「月影」に手をかけて翼を広げるが、十兵衛が「待つッス。こつちに引き付けるッス。あつちは狭いッスから」と止める。それもそうだと瑠璃は頷き、十兵衛が炎戈銃ブレイズヘルに通常弾Lv2を装填し、遠距離からブラキディオスへと攻撃を仕掛けていく。

その間に瑠璃と茉莉はY時の交差点へと移動していき、ブラキディオスが下りてくるように誘い込むことにした。

それにブラキディオスは誘われ、狙い通りに瑠璃達へと接近していく。それを見た十兵衛があちツップから弾を取り出して装填し、ブラキディオスへと射出する。それは着弾すると黄色い光を発して消える。

だがブラキディオスはそれを気にした様子もなく、瑠璃と茉莉へと向かって拳を打ち落とす。二人はそれぞれ左右へと散り、ブラキディオスの足を狙って攻撃していく。

十兵衛からブラキディオスは何度も足を狙って攻撃すればよく転倒する、という話を聞いていたためだ。また転倒を狙うように二人して両足を攻撃していく。

茉莉も攻撃しているのは、現在ブラキディオスの両手の粘菌が落ち着いているためだ。奴が唾を吐きつけて活性化させない限りは茉莉もうまく立ち回れる。

そんな彼女へと横から殴りつけるブラキディオスであるが、茉莉はそれを盾で受け流しつつ回り込み、足を狙って角槍、ディアブロスを突き出していく。

もう一度足元にいる茉莉へと勢いよく拳を振り下ろしたが、茉莉はそれをバックステップをして回避し、その拳へと一撃入れてやった。粘菌が活性化していないなら拳を恐れることはない。

それにこの動きは何度も見てきた事で慣れてきた。確かに一撃は重いし恐ろしく感じるだろうが、注意して見れば回避や防御はそう難しいことではなかった。

粘菌、という存在があるからこそやり辛い。その存在の強さと脅威性が茉莉の行動を束縛してくる。これがないだけで実に楽なものだった。

だがブラキディオスの恐ろしさは拳だけではない。

突如角の粘菌を活性化させるとその場で角を地面に突き立てたのだ。すると周囲に

転々と白く発行する部分が生まれてくる。茉莉の足元にもそれが生まれ、舌打ちして急いでその場から離れるように後ろへと跳ぶ。

瑠璃もまた急いでその場から離れていき、十分に粘菌の力を拡散したブラキディオスが勢いよく角を振り上げた瞬間、ブラキディオスの近くから次々と爆発が発生した。

地面が吹き飛び、耳をつんざく爆音が連続して発生してばらばらと砂埃と小石が降り注いでくる。

その中でも、遠距離から攻撃する十兵衛は、相変わらず一発の弾を装填してはブラキディオスへと射出していた。その度にブラキディオスの体に黄色い光が発生し、消えていく。

その小さな一撃一撃に苛立ったのか、ブラキディオスが両手に唾を吐きつけながら振り返り、数歩下がって姿勢を低くした。それに気づいた十兵衛が炎戈銃ブレイズヘルを引いて前へと走り出す。

奴が跳んだ瞬間を見計らって前のめりに跳び、前転していけばブラキディオスが自分の頭上を通り越して背後に着地した。その様子を見て二人はなるほど、ああして回避するのかと納得した。

そして茉莉はというと小さく舌打ちしなくなつた。ああしたことではブラキディオスの両手はまた粘菌が活性化してしまった。つまり、またやり辛くなつてしまったという

事になる。

しかも奴は茉莉の方へと振り返ってきた。どう出てくるのか、と警戒していると、ぐつと姿勢を低くするのが見えた。その瞬間、体を走り抜ける冷たい感覚が襲いかかり、そして先ほどの十兵衛の動きを一瞬の内に思い出して、生きるという衝動に従って息をのみながら前へと突き進む。

「——ッ！」

ブラキディオスの体が勢いよく跳躍し、そして自分は盾を構えながらも前へと走り、ステップをしてただ前へ。そうする事で背後に強い振動音が聞こえ、冷や汗をかきながら振り返りつつ角槍ディアブロスをブラキディオスの尻尾へと薙ぎ払う。

やり過ぎしたのだ。

回避できたのだ、という現実を感じながらも、茉莉は反撃の手を止めない。

尻尾を突き上げ、更に足を後ろから突いてやり、横へと逃げていく。ブラキディオスの正面からは瑠璃が斬りかかり、奴の意識を自分へと向けていた。

しかし突如、ブラキディオスの体が痙攣し、硬直してしまう。

「今ッス！」

炎戈銃ブレイズヘルへと弾を装填しながら十兵衛が叫ぶ。彼が撃ち続けていた麻痺弾Lⅴ1の効果により、ブラキディオスが麻痺状態に陥ったのだ。これ以上の好機はな

い。茉莉はそのまま背後に付きつつ、尻尾へと向かって角槍ディアブ羅斯を突き上げていく。

瑠璃は顔から夜刀【月影】を斬りつつ下へと潜り込み、両足を切り払うように気刃斬りを放っていく。両足を同時に切り払う事で一気に足にダメージを与えて転倒を狙うという目論見だ。

そんな瑠璃を邪魔しない位置、ブラキディオスの尻尾付近に立つ事で、尻尾を狙って突き上げて尻尾にダメージを与える茉莉。良ければ尻尾切断へと持つていきたいところだが、まだまだそれは遠そうだ。

しかしこれもまたダメージ蓄積の布石となる。手を止めずに茉莉は角槍ディアブ羅斯を突き上げていく。

十兵衛は高速に装填していく通常弾Lv2を顔面へと撃ち続ける。動けない今こそ一気に体力を削るチャンス。先ほど受けたダメージをそのまま返すように瑠璃は気刃斬りを放ち続け、夜刀【月影】の錬気を溜め、解放して切れ味を高めていくのだ。

そうして威力を高めた夜刀【月影】は遂にブラキディオスを転倒させた。

「まだまだ終わらなあああッ!!」

今度は顔へと回り込んだ瑠璃が夜刀【月影】をただひたすらに振り回し、凄まじい連撃を叩き込んでいく。瑠璃の溜まりに溜まった怒りと苦痛をエネルギーに、夜刀【月影】

へと己の気を纏わせて更なる威力の底上げを果たし、止まらぬ斬撃がブラキディオスへと襲い掛かる。

茉莉も転倒した事で背後に倒れた尻尾へと振り返り、再びその尻尾へと角槍ディアブロスを突き入れていく。少しずつ鱗を突き破り、肉へと到達していく角槍ディアブロスの切っ先。

肉を刺し貫き、先端が離れば少しずつ血が漏れて出てくるのを見ながら、茉莉はただひたすらに突き続けるのみ。

十兵衛も瑠璃が顔へと斬りかかっていくのを確認すると、貫通弾Lv2へと切り替えて背中から突き抜けるように射出していく。

麻痺から転倒。二連続の行動束縛による大きなチャンスを生かして体力を一気に削った。それは良しとしよう。だがこれらから解放されればどうなるか。

「グルルル……グギヤアアアオオオオン!!」

いのように自分を傷つけてきた三人へと殺気をむき出しにし、怒り状態へと移行するのは道理。だが十兵衛はそれを見越してポーチから閃光玉を取り出し、ブラキディオスの視界へと放り投げた。

その強い光に当てられてまたしても視界が潰される。しかしブラキディオスは目の前に瑠璃がいた事だけは把握しており、前に向かって勢いよく拳を振り下ろしてきた。

その動きに瑠璃が横へと勢いよく跳ぶ。

振り下ろされたのは右手。それから逃れるために左足の方へと進めば、拳にも爆発の衝撃波も受けずに済んだ。一撃その左足を切り払ってやるが、その痛みに反応して振り返りながら横殴りをしてくる。

「ちっ、見えてないのに……！」

見えていないからこそ、痛みに反応して攻撃をしてくるといふ事か。舌打ちしながらもう一度足を潜り抜けるように避け、しかし体が揺れた事で尻尾も揺れ、瑠璃の頭を薙いでくる。

それを受けて瑠璃の体勢が崩され、またブラキディオスがぐるんと体を捻りながら瑠璃の背後へと右手を振り下ろした。強く打ち落とされた事で爆発し、その爆風が瑠璃の背中へと襲い掛かっていく。

直撃こそしなかったが、その衝撃波だけでも十分な威力がある。地面を転がっていく瑠璃だったが、何とか受け身を取って起き上る。

茉莉もブラキディオスから離れ、様子を窺うように観察するが、十兵衛にとつてはこれもまた攻撃のチャンスだった。また別の弾をチップから取り出し、二発装填して連続して撃ち出していく。

すると今度はブラキディオスの体に紫色の煙が立ち上った。



「毒弾、ですか」

「そうツス。まあ、使えるものは使っていく、ってやつツスよ」

領きながら素早く装填、射出を繰り返すが、ブラキデイオスは前進、後退、サイドステップと落ち着きなく動き、突如前のめりに倒れながら角を突き立ててきた。その射線の上には茉莉がいる。

慌てて茉莉が横へと逃げ、その直後に連続爆発が通り過ぎていく。しかもブラキデイオスはまた方向を変えて連続爆発を放ってきた。今度は十兵衛の近くを通り過ぎるルートだ。

何かが飛来してきているという事だけを感じとり、離れた所にいる敵へと攻撃しているつもりなのだろう。視界を潰されているというのに、油断ならない奴だった。

だがすぐにそれは回復する。閉じられていた瞼が数度開閉し、顔を振って一度声を張り上げる。やはり閃光玉の効果時間が短縮していた。三度も受ければ目が慣れてくる、というものらしい。

こちらのモンスターの耐久性は状態異常だけでなく、こういう罠などの道具のサポート時間も短縮されていくのだ。

「ギュルルッ！」

ぎろりと十兵衛と茉莉を睨み付けるブラキデイオスの背後から瑠璃が斬りかかり、足

を刈っていったのだが、ブラキディオスは少しよろめいただけだった。転倒しかけたのを堪えるように数歩滑りつつも体を支えて向き直っていく。

だがその顎下から夜刀【月影】を振り上げて奇襲を仕掛け、続けて喉を突いて薙ぐ。少量ではあるが肉が切れて出血し、痛みに呻いてブラキディオスの動きが一瞬硬直する。

そこを逃さずに十兵衛が徹甲榴弾Lv2を一発射出し、頭に着弾して爆発した。その爆発によって何度も顔にダメージを受けていた事で、角の一部が吹き飛んでしまう。

「グルアアアアアアッ！」

頭を振って吼えたブラキディオスが狙いを十兵衛へと変え、唾を両手に吐きつけながら飛びかかっていた。しかしもうその動きは見切っている十兵衛が下を通り抜けるように走り、背後にブラキディオスが着地する。が、すぐさまブラキディオスが振り返りながら十兵衛へと拳を振り下ろす。

それも何とか逃れる十兵衛だったが、拳の直撃は避けても爆発の衝撃波だけは逃れられなかった。

「距離を詰めるためだけの跳躍、という事ですね……！」

飛びかかりが躲され始めている、というのはブラキディオスも把握し始めた。だからこそそれを攻撃に使うのではなく距離詰めのためのもとして割り切ったのか。

そんなブラキディオスは今度は茉莉へと標的を定め、一度小さく唸って両手を交互に

打ち下ろしながら接近していく。それから逃れるため走り出す茉莉だが、やはり追うようにカーブし、十分に距離を詰めた所で角を振り上げて彼女の体を打ち上げようとした。

突然の奇襲に茉莉は盾を構えてなんとか防御したが、振り上げられた角の粘菌が活性化し、硬直している茉莉へと勢いよく振り下ろされる。

「ッ!？」

再び強く打ちつけられる衝撃。このまま振り上げられれば一気に爆発するであろうその攻撃はしかし、再度ブラキデイオスの顔の側面に着弾した弾丸の爆発によって強制的に中断させられた。

顔の側面から吹き飛ばされる衝撃に、ブラキデイオスが転倒してしまったのだ。突き立てられた角の先端の光が急速に落ち着きを取り戻していき、左手の痺れを感じながら茉莉は助かった、という思いに包まれる。

見れば、荒い息をつきながら十兵衛が炎戈銃ブレイズヘルを構えていた。一瞬の内の援護射撃。それに感謝するために口を開こうとしたが、荒い息だけが漏れるだけだった。

何とか体勢を立て直し、盾を持ちなおそうとしたが、見ると表面が強く凹み、粘菌が付着していた。それは黄色へと変色し、間もなく赤へと変わろうとしているところだっ

た。

「くっ……！」

何とか粘菌を振り払おうと振り回しながらブラキディオスから離れていくが、なかなか離れない。すると十兵衛が駆け寄ってきて茉莉の足元へと消臭玉を叩きつける。とたんに立ち上る清涼な香りが彼女を包み込み、そしてそれは盾に付着している粘菌を落としていった。

「粘菌が取れにくければ消臭玉。普通は異臭を消すためのものツスが、この通り粘菌にも効果があるツス」

「……ありがとうございます。先ほどの件も……」

「いえ、気にしないでくださいツス。サポートするのが、おいらの役割ツス」

そう言つて微笑し、毒弾を装填してブラキディオスへと射出する十兵衛。奴の下へは既に溜璃がついており、起き上ったブラキディオスの足元を斬りつけていた。

すると怒り状態が落ち着いていき、今度はブラキディオスが息を切らしてその場に留まってしまうていた。

「疲労状態ですね。では打ち合わせ通り……」

「はい、お願いするツス」

茉莉が角槍ディアブ羅斯をしまい、腰に提げている落とし穴を取り出して少し離れた

所に設置する。その間に十兵衛は毒状態へと陥れようと、毒弾を射出していきながら瑠璃へと「落とし穴設置中ツス！」と声をかける。

その言葉に一度瑠璃が茉莉の方へと振り返り、大きく頷いた。

ネットが広がり、問題なく落とし穴が設置されるのを確認すると、十兵衛は角笛を手にして吹き鳴らす。疲労しているブラキディオスではあったが、その音色に反応して十兵衛へと振り返り、のしのしと駆け寄ってくる。

それだけ見ると主人の呼び声に反応する飼犬のようだが、生憎とその飼犬を出迎える主人は狩人<sup>ハンター</sup>だった。そのまま誘い込むように落とし穴へと下がっていき、彼へと拳を振り下ろすために更に一歩踏み出した瞬間、その巨体が一気に地面に沈み込んでいく。

「グギヤアアアアッ!?!」

突然の出来事にブラキディオスが驚きの声を上げる。瞬間、下がっていた茉莉が一気に攻勢に出るために角槍ディアブロス抜き、その顔へと一気に突き入れる。十兵衛もチップからベルトリックを取り出し、炎戈銃ブレイズヘルへと繋いでいく。

「茉莉さん、もう一度スタンさせるツスから、顔から離れてくださいッス」

「了解です。では手を破壊しましょうか、ねっ!」

炎戈銃ブレイズヘルの銃口を頭へと合わせ、一気に七発の徹甲榴弾Lv2を射出して

いく。連続して頭へと着弾していったその弾丸は、一間を置いて次々と爆発していき、ブラキディオスにダメージを与えながら頭を揺さぶっていく。

それでは終わらず、今度は徹甲榴弾Lv1のベルトリンクを取り出して炎戈銃ブレイズヘルに繋ぎ、九発の弾丸を連続して射出すれば、ついにその爆発の海に吞まれてスタンしてしまった。

背中に回っていた瑠璃も夜刀【月影】を振るって錬気を溜め、気刃斬りをして夜刀【月影】に赤いオーラを纏わせる。それが最大解放となり、夜刀【月影】の威力は最大限に高まっている。

顔の爆発が収まれば茉莉の反対、すなわち左手へと接近し、左手と肩、胸を纏めて切り払いながらダメージを与えていく。

十兵衛も貫通弾Lv2に切り替えて顔から背中へと突き抜けるように弾丸を射出し、このまま討伐する勢いで攻撃を重ねていく。

最初の苦戦はどこへやら。完全に流れが三人へと傾いていた。

好機を作りだし、そのチャンスを掴み取って三人のペースを物にする。そうしてダメージを積み重ねた結果、何とか気力を取り戻したブラキディオスが再びもがきだし、落とし穴から抜け出してきたのだが、その足元はおぼつかなかった。

ふらつく体を支えるために両手を地面につけ、一度呼吸を落ち着かせると足を引きず

りながらエリア7へと向かって歩き出す。

瀕死状態だった。

このまま逃すわけにはいかない、とすかさず瑠璃が疾走し、その足を切り払う。だがそれでは倒れなかったためもう一撃、と斬りつける。だがそれでも立ち止まらず、ブラキディオスはエリア7へと逃げていった。

「……逃げられたわね」

「でももうすぐですよ。頑張りましょう」

「そうッスよ。いい感じに攻めれてるッス。この調子で、でも油断せずにいけば勝てるッス」

そうだ。このまま行けば討伐成功となる。

一度はどうなるかと思ったが、ようやくここまで追い込んだのだ。

頷く瑠璃は夜刀【月影】に砥石を当てて切れ味を戻していったのだが、不意に体の節々が鈍く痛んだ。

（……つつ、これは……傷が……）

体を打ちつけた痛みがここでぶり返してきたらしい。秘薬といえども万能ではない。こうして激しく体を動かして戦ってきたのだから、再びこうなったとしてもおかしくはない。

だからこそ茉莉に無理はするな、と忠告を受けていたのだが、だからといってもうすぐ勝てる戦いになってきているのにここで終わるわけにはいかなかった。

それにこれくらいの小さな痛み、どうという事はない。我慢できるものだ、と自分に言い聞かせながら砥石を刀身に滑らせていく。

一方茉莉もまた左手の痛みがじわりじわりと広がっていくのを感じていた。ぐつと握り、拓を繰り返して調子を確かめてみる。少しまずい状態か、と分析する。

ここで失敗するわけにはいかない。どうするべきかを考え、そして茉莉は軽く息をついて左手から盾を外し、右手へと持ち変えた。

その様子に気づいた十兵衛は「左手、大丈夫ツスカ？」と声をかける。

「ええ、少し不安になってきたもので、持ち変える事にしました」

「利き手は右ツスよね？」

「そうですね。とはいえ種族的な事と、鍛えている事で左手でもああして防御と受け流しが出来くるくらいの力を持っていますので、今まではこうしてやってきましたが」

「……凄いいツスね」

普通ランサーなどの盾は利き手に持つとされる。人が相手ではなく強大なモンスターを相手にするのだから、それを防ぐ盾は利き手に持つ事で高い防御力を発揮し、身を守るという教えがあるからだ。



だが両手を鍛えている者らの中には利き手でなくとも防御できるハンターがおり、茉莉もその内の一人だった。火竜の因子を持つ彼女らは若くとも高い怪力を保有し、重量武器だろうとも扱い、軽々と移動してみせるだけのものを持っている。

つまり茉莉は、左手で守れないと判断した際は右手に持ち変えて防御できるだけの訓練を積んでいるのだ。角槍ディアブ羅斯を一度左手に持ち、数度突き、振り回してみるのが問題なく左手でも扱っていた。

「……ん、何とかいけますね」

調子を確かめれば角槍ディアブ羅斯をしまい、しかし念には念を入れるという事で回復薬グレートを一本飲み干した。向こうでも瑠璃が夜刀「月影」の切れ味を戻すと、回復薬グレートを飲み干し、口元を拭っていた。

最後の準備を終え、三人はエリア7へと移動する。

マグマに挟まれた道を歩いていき、中心の広場へとやってくれば、ブラキディオスが背を向けて佇んでいた。荒い息を落ち着かせるように呼吸を繰り返していたブラキディオスは近づいてくる気配に気づいて振り返る。

低く唸り、身構えながら両手に唾を吐きつけて粘菌を活性化させると、再び洞窟中に響き渡る程の咆哮を上げる。

だがそれを中断させるように十兵衛が装填していた貫通弾Lv2を射出し、顔から貫

くように弾丸が数発走り抜ける。それに怯んだ隙を狙って瑠璃が一気に斬りこみ、両足を薙ぐように体を捻りながら斬りかかった。

最後に茉莉が僅かにふらつくブラキディオスの頬を突き上げるように角槍ディアブロスを振るい、右手から足へと薙ぎ払って下がっていく。

そんな彼女を逃さないように拳を振り下ろしたが、彼女は更に一步下がってやり過ごし、足を一突きして逃げていく。彼女を追わずに足元を斬り続ける瑠璃を横から殴り飛ばそうとするも、それに気づいた瑠璃が足元を潜り抜けていく。

が、その動きも把握したブラキディオスは一步下がりとつ振り返り、彼女の脳天から拳を振り下ろす。

「くっ」

前に跳びながら前転し、すれすれの位置を拳が通過していく。それを逃さずもう一発横殴りを放ち、瑠璃がそれから逃げたのだが、その先には設置されている地雷があった。舌打ちして翼を羽ばたかせて急速に舞い上がり、刹那、その地雷が爆発した。

逃げるのが遅ければその爆発に巻き込まれていただろう。だが脅威は去ってはいなかった。舞い上がった瑠璃を視線で追い、ブラキディオスは角の粘菌を活性化させて瑠璃へと頭突きをする。体を捻って旋回して逃れたが、そのままブラキディオスは角を地面に突き立て、十兵衛へと向かって爆発の波を引き起こす。

それに気づいた十兵衛が横へと逃げ、起き上りながら毒弾を射出する。もうブラキディオスの体内には十分に毒が蓄積されている。そろそろ毒状態になってもおかしくないはずだ。

その読みは当たり、着弾した弾丸によってブラキディオスの呼気が変化した。先ほどとはまた違った苦しげな声となり、体の所々が若干変色していた。毒状態になっただろう。

(これで良し。後は……)

弾丸の残りはあまりなかったはず。貫通弾Lv2、通常弾Lv2は結構使ったし、火炎弾は効果なし。徹甲榴弾もどちらも全弾放出、散弾は瑠璃と茉莉にも当たる可能性あり。拡散弾もあと一発だが、これも当たる可能性あり。

となれば……、

(貫通弾Lv1でちまちまやる、か。いや、その前に貫通弾Lv2を全弾放出ツスね)  
決めれば即、行動。チップから数発の弾を取り出して素早く装填し、ブラキディオスへと射出していく。胸から貫くように狙いを定めた銃口から放たれた弾丸は狙い狂わずブラキディオスを貫いていく。

唸りながら足元をうろつき続ける瑠璃へと拳を振り下ろすブラキディオスだったが、一向に彼女を捕える事が出来なかった。周囲は地雷が設置され、次々と時間を置いては

爆発していく。

やがてまた足の力が弱まり、ブラキディオスが転倒してしまった。それを好機として瑠璃が尻尾へと接近して茉莉が付き続けた部分を狙って斬っていく。それを見た茉莉はブラキディオスの顔へと回り込み、徹甲榴弾によってボロボロとなっている顔の肉を抉りこむように角槍ディアブ羅斯を突き入れる。

再び訪れた好機を逃さず、瑠璃が気を夜刀【月影】に籠めて尻尾切断を目指していく。斬りつけるたびに少しずつ肉が切れ始め、斬りおろし、斬り上げ、突きと繰り返していくと、肉の奥に白い物体が見えた。

瞬間、今まで以上の気を込めて夜刀【月影】を勢いよく振り下ろす。刀身がそれを切り裂く感触を伝えてきた後、宙に蒼い物体が舞い上がる。

「ギャアアアアアアアアッ!」

尻尾の断面から血を流しながらブラキディオスが悲鳴を上げて転がっていく。ふらつきながらも何とか起き上り、そうして最後の抵抗とばかりに怒り状態へと移行して怒号を上げる。

自分の尻尾を切断した不屈き者を吹き飛ばすため、角を地面に突き立てて爆発の波を引き起こすが、そんなものはもう見切っている。横へと走り抜け、一気にブラキディオスへと接近しながら横を通り抜けていく熱風を感じ取る。

顔へと斬り付けたが、それに怯まずブラキディオスが勢いよく拳を落とした。それを前転して躲し、両足を薙ぎ払って更に跳ぶ。先ほどまで立っていた場所を拳が横殴りに通り過ぎていったのだ。

そうして瑠璃へと意識を向けている間に茉莉が角槍ディアブ羅斯を突き入れていくが、ブラキディオスはすぐさま反応して今度は茉莉へと殴りかかっていく。

それを躲し、爆発の衝撃を盾で防ぎながらカウンターを突き入れる。右手ならば直撃でなければ耐えられると踏んだが、読み通りだった。横殴りは躲し、肩へと突き上げる。

もう一発怒りのままに振り下ろしてきたが、それを躲して盾で衝撃を受け止めて突き出してやる。そんな茉莉を横から吹き飛ばすため今度は尻尾を振り回してきたのだが、短くなったそれは脅威でもなんでもない。

少し体勢を低くしてやり過ごし、体を伸ばしながら角槍ディアブ羅斯を尻へと突き上げる。

「グルアアアアアアッ!!」

怒りのままにもう一発拳を振り下ろして瑠璃を叩き潰しにかかるのだが、彼女はにやりと笑ってまた足を潜り抜けてやり過ごしつつ切り払い、腹へと斬り上げる。そのまま両足を切り払いつつブラキディオスの下から離れていく。

そんな彼女を逃さないとばかりに前のめりに倒れながら角を突き入れるのだが、彼女

はそれをも注意していた。翼を強く羽ばたかせて勢いよく後ろへと跳ぶ事でやり過ぎたのだ。

連続爆発はあらぬ方へと解放され、隙だらけとなつているブラキディオスへと夜刀【月影】に纏わせた気を解放する。勢いよく夜刀【月影】を振りおろし、地面を割りながら突き進む閃剣はブラキディオスの肩を切り裂き、赤い血を巻き上げる。

もう一発、と斬り上げて放たれれば、今度は腹を切り裂いた。だが同時に瑠璃の体を痛みが走り抜ける。やはり鈍い痛みが息づいているのだ。脂汗が頬を流れ落ち、しかしそれでも瑠璃は夜刀【月影】を構えたまま走り出す。

接近してくる瑠璃を感じとり、相変わらず突かず離れずの茉莉を見たブラキディオスは勢いよく角を地面に突き入れ、粘菌を拡散する。周囲に転々と発生する白い光。茉莉は素早く後ろに下がって逃げ、瑠璃も急ブレーキをかけて立ち止まり、一步離れてからまた閃剣を放つ。

それを解放するように顔を振り上げれば、周囲が連続して爆発していく。だがガンナーにとってそれらの行動は隙だらけも同然だった。

狙いを外さずに連続して顔へと貫通弾を撃ち込んでいった事で、ブラキディオスは突如ふらついてしまう。顔へのダメージが蓄積した結果だった。

がくがくと足を震わせ、荒い息をつくブラキディオス。その体が硬直したのを逃さ

ず、茉莉が一気に距離を詰めながら角槍ディアブロスに気を纏わせていく。

一気に接近してきたその姿を捉えたブラキディオスは、茉莉へとカウンターを放つように拳を彼女へと打ち落とした。

だが茉莉はそれを利用した。

左手が顔を通り過ぎる際に手にしている盾を放り投げたのだ。すると盾と左手が勢いよくぶつかり、そこで爆発する。その衝撃がブラキディオスの頬へとぶち当たり、それによつてブラキディオスが怯んでしまった。

盾が爆発によつて吹き飛び、離れた所に落下して転がっていくが、茉莉はそのままたたらを踏み、下がった頭へと両手で構えた角槍ディアブロスを一気に突き出した。

彼女の気を纏った角槍ディアブロスは露わになっている肉を貫通し、内部へと一気に突き入れられる。

「ガ、ガガ……ギユ、グ……ッ!？」

赤い瞳が大きく見開かれ、自分にとどめを刺した人物を見据える。その視線を受け止め、角槍ディアブロスを引き抜けばそこから勢いよく血が噴き出し、一部が茉莉へと掛かる。

どろりとブラキディオスの顔を濡らす血の感触を感じながら、片膝をついたブラキディオスはそのまま力なく倒れ伏せる。

怒りに燃えていたその瞳から生氣が消え失せ、ここにブラキディオス討伐が成功する事となった。

「……………ふう」

それを実感すると茉莉が大きく息を吐いて二人へと振り返った。瑠璃も夜刀〔月影〕を背中に戻しながら緊張を吐き出すように大きく息を吐いているのが見える。

十兵衛は吹き飛んでしまった盾を回収していた。それは爆発によつて大きく凹み、破損していた。どう見ても修理が必要なのは明白だった。久々に使つたのに無理させてしまったと思う。

だがあの奇襲のおかげでとどめが成功した。しっかりと修理してもらおう事にしよう。「お疲れ様ッス」

十兵衛が盾を手渡しながら労いの言葉をかけてくる。それに礼を述べながら頭を下げ、瑠璃も「お疲れ様」と声をかけながら手を出してきた。その手に右手を叩いてやつて健闘を祝い、三人でブラキディオスの解体を始めることにした。

何はともあれ、こうして討伐は成功した。

この戦いは二人にとつて強敵の出会いをもたらし、そして確かに二人を強くさせるだけのものだったに違いない。

また一つ、自分達は強くなった。



そう感じ、ブラキディオスに新たな経験を積ませてくれたことを感謝しつつ、その素材を剥ぎ取っていった。

○

「……討伐成功、か」

物陰に身を潜めながらその男はそう呟く。

気配を消して戦いを見守っていた彼はその場を離れて歩き出す。青いコートをなびかせながら火山を下り、岩山地帯へとやってくる。軽快にそれを登って行って山を越えていく。

そうしながら先ほどのあの三人の戦いを思い返していく。

なるほど、多少は強くなっただろう。でなければあのブラキディオスを討伐するなんてことは出来ない。大抵のハンターはあの暴れん坊につまずいてしまう。そうさせるだけの力があのブラキディオスにはあるのだ。

あの十兵衛というガンナーの存在があったからこそ出来た、という事も否定はできないが、それでも最後はあの二人はよく戦った方だと彼は分析した。

「ならば、そろそろさぶつけるとしようか」

にやり、と彼の口元が歪められる。

果たして彼女らはあれを倒せるのか？

もう少しだけ時間を与えてやるが、それを終えれば再びユクモに訪れる事にしよう。

あの二人と戦う存在を引き連れて。

「見せてもらおうか。どれだけ立ち回れるかを、な。一つの壁を越えたからといってそれで満足するようでは、失望するというものよ。戦いに上限はない——気を抜くようでは、早々に死んでもらうぞ？」

低く笑い、その声の尾を引きながら彼は眩い雷光に包まれて岩山の向こうの森へと消えていった。

次なる戦いの気配が、また近づいてきていた。

## 43話

溪流の奥にある深い山奥、霊峰と呼ばれる場所に再びその姿があつた。山頂からじつと下界を見下ろしながらそれ、嵐龍アマツマガツチは小さく唸りだす。

その唸り声は怒りに震えており、山頂の空は黒雲が渦巻いて強い風を作り上げていた。

『ハンターどもめ、やはり目障りよな。妾の駒を悉く潰しおつて……次の駒を用意するのも面倒か』

目を細めながら頭の中に浮かぶのは、各地に放つた多くのリオ夫婦がハンター達によつて狩られる光景だ。原種も、亜種も、そして希少種も……全てが狩られてしまった。希少種ぐらいは生き残るかと思つたが……よもや全て狩られるとは。いつの間に東方のハンターも実力が上がつてきているのだ、と驚きを禁じ得ない。

『ここは妾が出ていつそのこと蹂躪するか？ 目障りなハンターどもを一気に掃討し、その中にあの者らが含まれていれば儲けものか』

物騒な事を口走りながら少しずつ力を解放していく。すると周囲の空気が変質して

いき、上空の黒雲がゆっくりとその規模を拡大していき、風がうねって強風を作り上げていく。

ぽつぽつと雨が降りだし、周囲を濡らし始め、続けて雷が鳴り始める。

そんな中、アマツマガツチが浮上しようとしたその瞬間、

「——それは困るねえ。天空、ここは抑えて、もらおうか」

女性の声が聞こえてきた。

それに反応し、アマツマガツチが顔を上げ、周囲を見回し出す。

『何奴?』

「おや、心外な。このあたしの声を聞き忘れたか?」

『……………』

どこからか聞こえてくる声だが姿が見えない。振り返ったアマツマガツチは少し不機嫌そうな様子を見せながら視線を巡らせて声の主を探っていくが、されどもやはり姿が見えない。

また香澄がやって来たのか? と思つたが、しかし声が違う。

別の誰かがこんな所までやってこれる、というのは数が限られる。その限られた中で更に女性となればもっと限られる。

一瞬、白皇様か? と思つたが、白皇様がこんな所まで来るはずがない、とその可能

性を消す。

『何奴？ 姿を見せい』

「……はっは、残念だな。……でもあたしはあまりお前の、前に姿を見せなかつたからね。まあ、よしとしようじゃないか」

変わった喋り方でそんな事を言いながら、山頂の一角にその姿が現れる。

漆黒の外套を身に纏い、同じく漆黒の長髪をした女性だ。顔の半分には白い骸の仮面が嵌められており、その奥から金色の瞳がじつとアマツマガツチを見据えている。

「さて、こうして姿を見せたわけだけど、よもやあたしの顔を見忘れと言うのかい？ そうだつて言うんなら——あたしはお前を殺してしまいかも、しれないけど、さ？ くつくつく……」

可愛らしく小首を傾げながら妖艶に微笑み、腰に差している黒い短剣を手にしてみせる。

そんな様子を見たアマツマガツチは息をのみ、白い光に包まれて粒子となった。そうして一度散つたその粒子が一か所へと集まり、人の姿を形作る。

以前に香澄の前に姿を現したような女性がそこに現れる。白い小袖、黒い袴、水色の羽衣という和装をしたその女性は、白い髪を揺らしながら対面にいる漆黒の女性へと膝をついて頭を下げる。

「……申し訳ありませんでした、ヘル様」

先ほどまでの不機嫌さはどこへ行ったのか。高慢な態度はなりを潜め、目上の相手を敬う雰囲気彼女から感じられる。そんな彼女の変わりっぷりがよほど面白かったのか、漆黒の女性、ヘルと呼ばれた彼女はにやにやと笑みを浮かべながら短剣を弄つてゐる。

そんな彼女に頭を下げているアマツマガツチ、天空は気が気でなかった。

何せ目の前にいるヘル、彼女は七禍龍である天空よりも更に上の地位にいる存在だ。

「何卒、ご容赦を……」

「……ま、いいさ。あたしはそういう事にはあまり、気にしないもんだからね。うん、安心するといよいよ天空。何もしない。……そう、お前が何もしないのならば、あたしも何もしない」

「……どういう事でございましょう？」

首を傾げる天空に、ヘルはくすくすと笑みを浮かべながら短剣を指で回転させながら空を見上げる。相変わらず空からは雨が降り注いでおり、冷たい雫に濡れて風が吹き抜いてくるものだから寒く感じられる。

そんな空を示すように短剣を空に向けて数回振れば、天空はそれに一礼して力を操作した。すると少しずつ天気が晴れていき、雨風も落ち着き始めていく。太陽の光が黒雲

の隙間から差し込み始め、ゆっくりと温かくなり始めた。

それを確認すると、ヘルは短剣の刀身にそっと指をなぞらせていきながら口を開く。「言葉の通りさ。天空、この先妙な真似はしないでもらいたいね。上に帰ってもらおうか？」

「……何故です？ 妾は白皇様のため、白銀鼻らを……」

「それが、妙な真似、というものだよ。天空、お前があたしたちのようにあの女の側用人を目指している、というのは知っている。二つの空席があるからね、その一つを指す、という向上心はあたしも多少は好ましい。うん、悪くはないね」

短剣の奥からじつと天空を見据えながらヘルは少し癖のある喋り方をしている。天空は僅かに顔を上げてそんなヘルを見つめながらそれを静かに聞いている。

側用人。

それは白皇に仕える者らの事で、直属の部下と言い換えてもいい立場だ。『世界』に達し、それ相応の力を保有し、白皇の意志に従って行動する。世界の神である白皇のご尊顔を拝見できる立場故にその地位を目指す者らは多い。

しかしそれは到底到達できるような領域ではない。

何せ世界の中でも伝わる存在、七禍龍を最終地点とする者もいるが、側用人はそれの更に上の領域だ。それは神である白皇の傍に控える、という地位でもあるが故に。

また時空を飛び越えて移動でき、平行世界ものともせず移動できるだけの力も保有する。七禍龍の時点では白皇の手助けを借りて平行世界を移動する存在もいるが、側用人ともなれば平行世界だけでなく別の世界へも移動できるだけの力を持つという噂だ。

目の前にいるヘルは『月蝕』と呼ばれる存在。

その正体は耳にはしていないが、普通じやない存在なのは間違いない。戦闘狂の暗殺者という一風変わった立場であり、白皇の指令を受けて陰で行動するというやり方を取っている。

もう一人が『白姫』のリーゼロッテ。白皇が作り出した分身の中で自我を獲得した存在だ。正体は白皇と同じく祖龍ミラーツであり、同じような力を保有しているが、行動は変わっている。

世界の中に入り込み、人々の暮らしの中に溶け込むように変化を多用して行動するのだ。六年前の事件でも様々な場所に潜入し、情報を獲得し、かく乱させる。彼女の行動があつてシュヴァルツの噂があつた事件の後にも広まったと言つても過言ではない。

遙かな昔はあと二人の側用人がいたが、現在は空席だ。

当然ながらその二人も高い力を保有しており、同じように世界を飛び回れるだけの行動力があつた。しかしそんな二人は白皇の下から離れ、それぞれ己の行動理由を掲げて



活動している。

一人は敵対、一人は中立。

神である白皇に牙を向けたものと、神に干渉せずただ起こるままを眺め続けるもの。その事件があつたが故に現在も二つの空席が存在している。七禍龍から更に上へと到達する者は現れず、今もなおリーゼロッテとヘルが白皇を支え続けるだけだった。

天空はその空席を埋めるために努力した。一介の古龍からのし上がり、空の七禍龍であるウエゼントネルを下して七禍龍が一へと昇格した。

だがここで終わるわけにはいかない。側用人となるには更に白皇のたけに行動し、力を得て更なる高みへ。だからこそ今回の一件も白皇のたけに白銀昴らを探し出し、抹殺するつもりでいた。

それが、ダメだというのか？

天空は戸惑っていた。

「しかし天空、しばらくは大人しくしてもらおう。もうすぐおもしろいことが、起きるわけだよ。お前のその行動により、それを潰してほしくない訳。わかるかい？」

「おもしろいこと……？ それは一体如何なるもので？」

「……ヒトにとつて大事件が起きるのさ。伝説の一角が崩れ落ちる、それを天空、お前の忠誠心から生まれる行動に潰されるとあつちやあ、あたしはたまらなく困るのさ。……」

わかるだろう?」

ぎらり、と金色の瞳が輝き、回転させた短剣の切っ先が天空へと向けられる。冷たく放たれる刃のような殺気が天空を貫き、それによってまた天空は冷や汗を流してしまふ。

この押し潰し、刺し貫いてくるかのようなプレッシャーに天空はただ平伏するしか出来ない。自分は強くなつたと思つているが、やはり上には上がいる。

「だから、ここは何もせずに上へと帰つてもらおうか。それに白銀昂らは、今は放置でいい」

「っ!? よろしいのですか!? あの者らを抹殺する事こそ、シュヴァルツの末裔を……」  
「構わないよ。天空、お前が放つた駒は今の東方のハンターの実力を計れるものだった。だから無駄じゃない、お前の行動は意味のある事だった。でも、それまでさ。お疲れ様、今はゆっくり休むといいよ?」

「……………っ」

につこりと笑顔を見せて短剣を腰の鞘に収めるヘル。今回の一件で多くの駒を失つたが、それを知つていて放置していたというのか。白銀昂らはまだ殺さない、と今日のように声をかけてくれば失わずに済んだというのに……。

だがそれに文句を言えるはずがない。言つてしまえば、彼女は笑顔で今収めた短剣を

抜いて自分を斬り殺しに来るだろう。彼女はそう言う人……いや、竜だという事を知っている。

側用人にまで昇格してきた——飛竜種。

古龍種ではなく飛竜種がそこまでのし上がったという事実が目の前に立ち塞がっている。

普通に考えれば古龍種である自分が食い殺したとしてもおかしくない力関係が、高められた力によって完全に逆転している。勝てるイメージが浮かばないだけの差が自分と彼女の間に存在しているのだ。

ぐっと手を握りしめ、天空はまた頭を下げた「……わかりました」と返事をする。

「では……妾はこれで、失礼いたします……」

「ああ。しばらくここに来なくていいから」

「……はっ」

立ち上がったもう一度一礼すると、天空は白い粒子となってアマツマガツチへと姿を変え、空へと昇っていく。その先に再び厚い雲を作り上げると中へと消えていった。

それを見送ったヘルは薄く微笑を浮かべて山頂から下界を見下ろした。先ほどまで天空が見下ろしていた光景を、今度は彼女が見下ろす。

そうして頭に思い描くのだ。

この先に起こる一つの大事件を。

「……時は近い。せいぜいそれまでの間に、事を進めてもらいたいね？ でなけりや、メンバーが揃わないで終わってしまうからねえ……」

くつくつと低く笑って、ヘルの姿はまた見えなくなってしまう。足音も立てずに立ち去っていく。最後に小さく山頂に聞こえてきた声は――

「最期に遺すものはきちんと残しましょうね？ でなけりや……その死に意味がなくなるからさ」

その眩きにも似た言葉は風にさらわれて消えていった。

○

「父上に話を通してきました。手続きに時間がかかりますが、いずれ彼女を仮釈放出来る可能性が出てきました」

「そうか。ありがとう、レイン」

あれから数日の交渉の末、レインの執務室に通された月は彼の言葉に頭を下げる。

事情を説明し、この先起こるかもしれない懸念を説明し……数日という時間をかけた末の可能性の浮上だ。監視役としてライムらに任せるだけでは通らないため、ギルドナ

イトの誰かを共に付けることになりそうだった。

候補として上がるのは過去にセルシウスと行動したことがあるアルテミスなのだろうが、彼女だけでは不安が出る。ギルドナイトとしては少しづつ成長しているだろうが、しかしアルテミスも昔は敵として行動していた。

とはいえ彼女の純情さは今もお続いております、それは彼女の事を知ったギルドナイトらは彼女に黒い所はまったく見られないと口を揃えて言う程だ。そう考えればアルテミスがセルシウスの監視役と言うのは問題ないかもしれない。

が、もしもの時もある。アルテミスだけではなくもう一人誰かを付けるか、アルテミスではなくまた別の誰かをつけるか、と現在相談中だった。

月はその付き人としてルーシーも同行させようかと考えている。彼女は昔、西方でギルドナイトを勤めた事があるため、その経歴を示せば通る可能性があった。レインが彼女の名前を聞いて反応をしていたのは、そのためである。

「そういうえばゲイルももうすぐ釈放だったよね？ 彼はどうなるんだい？」

「ゲイルに関してはしばらくはどこかの隊の下について一からギルドナイトとしてやり直すか、あるいは一介のハンターとして野に放つか……はたまたカーマイン家ですばらく大人しくしてもらうか。どれかを選ぶことになりますね。わたしとしましては、もう一度ギルドナイトとしてやり直してほしくは思いますが……」

少し悲しげな声でレインが言う。あれから六年が経過した。彼の刑期は今年で終わる。そしてその日時はもう少して訪れるのだ。もしかするとセルシウスの仮釈放と同時期に出てくる可能性があるかもしれない。

そして外に出てきた彼はどうするのか。あの事件の後やり直してほしいというレインの言葉を彼は覚えてはいるはずだ。少し前に面会した際も毒気は抜けているように見えた。というより真実を知った後は、彼は落ち着いていたと思う。

だから何かよからぬ事をしでかす、という危険性はないだろう。彼はもう、闇を抱えてはいない。

「そうか。……彼なら大丈夫だよ。きつと、また君の下まで帰ってきてくれるはずさ」  
「はい、そう願っています」

人生を歪められた彼の道は、きつと正しく戻っていくだろう。彼はまだ若い、これくらいくだけでもやり直しがきくはずだ。彼がどのような道をこれから辿りなおすのだとしても、月は彼の行く道を祝福してやりたいと思っている。

歪めたのが彼女の姉と神倉一族の闇だったが故に、神倉一族の唯一の生き残りとして手助けするつもりだった。

「……レインさん。一つよろしいですか？」

「む？ 何でしょうか、ルーシーさん」

そこで紅茶を口に含んでいたルーシーが控えめにレインに声をかけた。

対面のソファアに座っているレインが彼女に向き直ると、カップを置いてルーシーが話し出す。

「レインさんは新種のモンスター<sup>の</sup>の調査をしていると聞いていますが、レインさんはこの先もまた東方に飛ぶような事は？」

「もちろんあるやも知れませんが。現在わたしはここで資料を纏め、上に報告する事になつていますが、それが終わればまた準備をして東方に飛ぶかもしれません」

「そうですか。では大砂漠の一件についても調査を？」

「大砂漠といいますが……：ジエン・モーランの事でしょうか？ それとも、謎の存在……：UNKNOWN<sup>ア</sup>についてでしょうか？」

「両方です」

先日新たに届いた報告では、砂嵐に紛れて大砂漠を航海している巨大な影を捕捉したというものが上がってきていた。遠目に見ていたため詳細は把握できなかったが、それはジエン・モーランであると推測できるのだが、それにしても何かがおかしかったという。

夜の闇に光る鉱石か水晶のようなものが見えたとか。だが遠目な上に砂嵐に紛れていたので十分に接近できず、そのまま奴の姿は闇の中に消えていったらしい。

これが事実ならばジエン・モーランにも新たな存在……すなわち亜種が現れたという事になる。

そして砂漠に現れた黒い影については謎の存在である事を示すための呼び名、UNK NOWNと呼称された。現在いくつかの隊が東方の大砂漠へと派遣されており、手分けして調査している。

「レイン、大砂漠に入るのかい？」

「ええ。指令が下されていますからね。準備が整えば東方に飛び、大砂漠へと入る事になるかもしれません」

「……気をつけるんだよ。危険な任務だろうが、どうか無事で」

「はい。ありがとうございます」

この未知のモンスターや新たななるフィールドの開拓の任務は危険に満ちている。毎年この任務をこなしたギルドナイトが数人命を落としている程の難易度だ。だが彼らの犠牲があつてこそ得られる情報もあり、この任務をこなす事こそ名誉あるものだ。ギルドナイト達は誇りに思っている。

レインもまたその中の一人であり、このような危険な任務を任せられる事を誇りに思っている。断る理由はどこにもなく、両親の背中を追うならばこれくらいの任務はこなせなくてどうすると張り切っているくらいだ。



「じゃあ準備の邪魔は出来ないから今日はこれで失礼させてもらうよ」

「はい、また何かあればご連絡いたします。……神倉さんはまだドンドルマに滞在を？」  
「いや、ルーシーを残して私は一度東方に飛ぶよ。向こうの人達に一度報告し、また交渉をしないとね。だから連絡はルーシーに頼むよ」

「わかりました」

頷きあつて立ち上がり、二人は執務室を後にした。

月はずぐに空間転移をして東方へと飛び、ルーシーはギルド本部を後にすると滞在している宿へと向かっていく。部屋へとついでローブを壁掛けに掛け、取り出したのは複数の書類だった。

今まで得た情報の確認だ。

(……セルシウス・ルシフェルの件は何か成功しそうな気配。後は上手く連れ出し、ポツケへと飛んで送り出せば良し。同行するギルドナイトがアルテミスならばなお良し。彼女に関しては興味深いですし、そうあつてほしいものです)

西方に暮らしていてもある程度はドンドルマ、東方のギルドの情報は耳に入ってくる。特に優秀なギルドナイトならばその名はギルド同士把握するものだ。

現在もお大長老の側近としてギルドを纏めているソル・森羅・スカーレットの名前も、その子供であるレイン、サンの名前もルーシーは知っている。といつても神倉月の

知り合いだったという事もあつて結構知っていたりする。

そしてカーマイン家の息子、ゲイル・カーマインがどうなっているのかも調べ、把握し、彼が拾つて共に敵方で活動していたアルテミスの事もある程度調べていた。

彼女が半妖の妖狐であり、変化能力に長けているという事。ゲイルがそうして育てたのか驚く程に純粹で白く、黒に染まつていないという事。現在はサンの下についてギルドナイト見習いとして活動しているという事。

しかし出生は不明であり、故郷がシュレイド地方かもしれないという事だけは知人の間で伝わっていると。

（父親の可能性としてはいくつかありますが、しかし確固たる証拠はなし。もし彼ならば……とんでもないことになりますね。だからこそ今もなお秘匿されているのでしよう。実際に会つた事があるはずですからね）

そしてルーシーは次の書類に目を落とす。

それは大砂漠の情報だ。

オアシスに作られた交易街ロックラック。その周囲にある砂漠が大砂漠と呼ばれ、広大な砂の海が広がる環境をしている。その規模は数百キロ以上にも及ぶとされ、東西南北に広がっているため一度迷えば一生抜けられないとさえ言われるほどだ。

そんな大砂漠に数年前から出現した新種のモンスター。

ベリオロス亜種やドボルベルク亜種はまだ軽い方だ。

ジエン・モーランの亜種疑惑は現在もお真偽を調査中。ジエン・モーランが引き起こしている砂嵐を捜し、調査隊が動いているため、はつきりとした結果はまだまだ先に表れる事だろう。

そして最後にUNKNOWN。

調べたギルドナイトも、遭遇してしまったと思われる旅人、商人、ハンターすらも喰い尽くされたという黒い存在。可能性として浮上するのは、六年前に討伐し損ねた狂化竜の生き残りだろうか。

かの大砂漠と言う過酷な環境において生き抜き、誰にも見つからないまま六年、あるいはそれ以上の時を過ごしてきた個体ではないかという推測だ。

それを明らかにするために調査が進められるが、やはり犠牲が大きいのが現実だった。

ルーシーもまたこの大砂漠については気になっているところだ。ギルドナイトとしても気になるし、ハンターとしても気になる。

自分も調査に赴きたいとところではあったが、こちらの用件も済ましていきたいところだ。セルシウスが無事に仮釈放できるのか、アルテミスが同行してくるのかなど、見届けていかねばならない。



火山から帰ってきてから数週間。再び火山に赴いてブラキディオスを狩り、瑠璃はブラキディオスの素材で作りに上げた太刀、ディオスソード改を制作する。噂の爆破属性というものがどういふものを試し斬りするために様々なフィールドを周ってクエストをこなし、この太刀がどういふものを把握する事になった。

また茉莉が掘り出した太古の塊の鑑定だったが、残念ながら外れ。現れたのはブルークレーターだった。その結果に少し残念そうな表情をした茉莉だったが、一応それは売らずに残しておくことにした。

そして火山から掘り出した獄炎石を使用し、シャドウジャベリン改を強化させてトキシックジャベリンにする事にした。これにより切れ味が伸び、毒槍としても結構いい品になってきた。

ブラキディオスの素材に関しては茉莉は使用せず、溜めこむことになった。一部は瑠璃に譲り、彼女のディオスソードの強化へと使われることになった。

あのブラキディオスとの戦いは確実に二人を強くさせた。あの素早く強力な攻撃に対処するための動きを把握する事。これが大きかった。

桐音との鍛錬も生き、早い段階で対処できるだけの目と感覚を養えたのは幸いだつた。クロムとの鍛錬もそうだが、彼女の嬉々とした雰囲気で繰り出される高速の打撃に慣れていたのでこそ、ブラキディオスのあの拳に反応出来たのだ。積み重ねた経験は二人に生きている。

そうして少しずつ成長し、三人でのクエストに慣れてきたある日の事。

ユクモ村に再び彼の姿が見えた。

その日もまた三人は酒場で昼食をとっていた。十兵衛が被っているスカルSフェイスマも違和感なく感じられてきたのは、もう二人も彼と言う人物に慣れてきているからだろう。あの日破損したスカルSヘッドはクエストから帰ってきてすぐに修理に出され、次の日には完全に修復されていた。

いつものように料理を注文し、美味しい東方料理を堪能し、時間があればクエストボードを眺めて何かいい依頼書がないかを眺めてみる。

その日常を過ごすようになっていた。

今日もまた昼食をとり終え、いざクエストボードへと向かおうとした時、酒場の扉が開かれた。客の視線がそちらへと向けられるが、彼は気にしたようすもなくずんずん中へと入ってくる。

瑠璃と茉莉もそちらに視線を向けると、少し驚いた表情をしてしまった。

青いコートをなびかせながら、青い瞳を酒場に巡らせている。その視線が自分に向けられている二人に気づき、ぴくりと眉を動かした彼はそのまま二人の下へと近づいてきた。

「久しぶりだな、娘っ子たち」

「ええ、お久しぶりです。ここにやって来たという事は……」

「ああ。約束のモノを持ってきたぞ」

彼、迅雷の言葉に瑠璃と茉莉は反応する。十兵衛も肩越しに軽く振り返り、長身のその姿を見上げてしまう。冷徹さを感じさせるようなその視線に見下ろされ、二人もまた迅雷をじつと見上げてしまう。

視線が交差し、特に瑠璃の視線と交差すれば彼女の方から火花を散らしているだろうが、迅雷は気にした様子は何もない。そんな彼はコートの中に手を入れ、一枚の依頼書を取り出して三人が使っている机へと叩きつける。

それはまさに、挑戦状を叩きつけるかのようなものだった。

「これが、己おれからの依頼書ちゅうせんじょうだ。これを、娘っ子……お前達二人にこなしてもらおう」  
そこにはこう書いてある。

雷狼竜。

ジンオウガ一頭の狩猟。

場所：溪流。

安定。

それに目を通した二人の目はまたもや驚きに彩られた。二人だけではない、十兵衛もまたその依頼書を見て驚いている様子だった。

ジンオウガ。

雷狼竜と呼ばれる牙竜種であり、ユクモ村をはじめとする東方の山岳地帯に確認される。無双の狩人と呼ばれる程の実力を持つ存在であり、奴を狩れるだけのハンターは上位ハンターの中でも少し限られるといわれる程だった。

先日……いや、もう一カ月以上前にもなるか。

ユクモ村に来る途中でも遭遇していたが、あれからまったく姿を見せなかったはずだ。それがまた姿を見せたというのか。

「あたし達に……ジンオウガを狩れ、と？」

「そうだ。これが出来てこそ、今以上の実力を手にしている、といえるものだろう？ 娘っ子、貴様らの実力を試すいい機会というものよ。己はそれを提供してやるのだ」

そこで迅雷はにやり、と小さく笑みを浮かべたような気がした。

試されている。

前に言い残したように、このクエストを達成させる事が出来たのならば、二人は迅雷

に優秀なハンターであると認めてくれる。それにこのジンオウガが相手ならば、迅雷だけでなく他のハンター達にも実力者だという事を認めてくれるだろう。

まさしく今の自分達の力を示すにはもってこいの舞台だ。それと整えてきた迅雷、本当に彼は何者なのだろうか。

「どうだ？ 己の依頼ちゅうせん、受けるか？ 娘っ子」

「……やってやろうじゃない。これをクリアして、あたし達の実力を思い知らせてやろうじゃないのよ！」

「ええ。引き受けましょうか。これを達成させる事が出来たのならば、本当に彼らを探さずにいてくれるんですね？」

「よかろう。だが達成できれば、の話だがな。……奴は無双の狩人、隙を見せようものならば、貴様らを狩りに来るぞ？ 頑張る事だ、娘っ子たちよ」

また小さく笑みを浮かべた迅雷は依頼書をカウンセラーへと持っていく。それに二人も付いていき、受付嬢が依頼書を確認した。それに問題ない事を確認し、瑠璃と茉莉がサインをして受理される。

約束通り十兵衛はこれに参加はせず、ここで待機する事にする。

これにより二人はジンオウガのクエストに参加する事となった。それを見届けて迅雷は酒場を後にしていく。残った三人は一度席に戻り、ジンオウガについて話をする事



にした。

十兵衛もジンオウガに関しては桐音と一度だけやった事があるらしく、ある程度話を聞けることになった。

その日は酒場でジンオウガについて注意すべき事や生態について十兵衛から話を聞き、酒場に戻って準備を進めていき、次の日になって狩場となる溪流へと向かっていった。

○

「依頼書は通してきた。あとはあの娘っ子達が来るのみよ」

「……………グルル」

日が沈んだ溪流のエリアの一つに迅雷の姿と一頭の竜の姿があった。樹にもたれかかって腕を組む迅雷の前には、強靱な四肢をした獣のような竜がじつと迅雷を見つめていた。

青と黄色の甲殻をし、白い毛が生やし、黄色の短く生える角が月に照らされている。彼らの周囲には多くの雷光虫が飛び交い、お互いの電気が放出し合ってバチバチと空気が弾けている。夜の森に光を放つ雷光虫の光景はまるで幻想的な光景だった。

「娘っ子らはお前を全力を以つてして狩りに来るだろう。お前も全力を以つて狩りに行くといい。その方がいい戦いになるだろうよ」

「グルル。……グルル、グルル？」

「己か？ 己は手出しをせずに観戦するのみよ。どっちに転ぼうとも、手出しはせんよ。これはお前達の戦いだ。どっちが生き残るのか、どっちが狩るのか……見届けさせてもらうのみ」

迅雷の役割はこの舞台を整えるだけだ。そして後は役者達が戦うのを見届ける観客でもある。どういう結末となるのかを見届け、それを受け入れるのみだ。

二人が勝てば一人の駒を失う事になるが、しかし更なる二人の成長を目の当たりにする事になるだろう。

「では、頑張るがいい」

それに頷くようにその竜、ジンオウガが小さく首を振ると、のしのと足音を立てて歩き去っていく。それについていくように周りの雷光虫達もまるで星々が流れるように光の尾を引きながら飛んでいく。

それを見届けながら迅雷は一度目を閉じて頭に思い描く。

果たして彼女達があのジンオウガを討伐できるのか否か。出来たのならばまた一つ彼女らが成長しているという証となる。それは喜ぶべき事だろう。

それに最近は飛竜ら……リオ夫婦の活動もあつたがそれも少なくなつてきている。どうやらハンター達があらかた討伐し終えていったのだろうが、これには彼女も怒り心頭だろう。また新たな駒を派遣してくる、という可能性も否定できない。

(天空が今以上に駒を派遣するようなことがあれば……面倒なことになるだろうな。そういえばその駒の一つ、希少種のつがいを未寅の男が討伐したという話だったが……それも別の誰かと共に討伐したという。気になるところではあるが……少し誰かを派遣してみるとしようか)

彼が抱えているのはジンオウガだけではない、獣竜種の一部も仲間として加えている。その内の何頭かを希少種が討伐された周辺へと回してみる事にしよう。

そんな事を考えながら、迅雷は溪流の中で夜を過ごした。

## 4 4 話

準備を終えた瑠璃と茉莉はユクモ村を後にするため階段を下りていく。昨日の話を聞いていたのか、一部のハンターや村人達がその姿を見送りに来ている。

ユクモ村は数年前に、ジンオウガが現れた事で一時は緊迫状態にあったが、一人のハンターによって討伐された事で危機を逃れたという話がある。当時もまたジンオウガと言う存在は驚異的なものであり、一介のハンターには討伐するのは容易ではないという認識だった。

時を経てもおその認識は変わらず、その上近年は亜種まで確認される始末。今回はどんなハンターが挑みに行くのかと見に来ている、というものだろう。

「あんな娘達が戦いに行くのか……?」

「大丈夫なの?」

「いや、最近あの娘達も結構活躍しているって話だぜ? ほら、あの双子のハンターの噂、聞いたことあるだろ?」

「ああ、あの娘達がそうなのか。いや、でもそれでも相手はジンオウガだぜ?」

「一体依頼してきた奴は何を考えているんだ？」

そんな話が聞こえてくるが、茉莉は気に食わないのかちらちらと視線を巡らせている。瑠璃は見せ物にされているのが気に食わないのかちらちらと視線を巡らせている。

そうして階段を下りていった二人は童小屋から連れ出されたアプトルに近づき、見送り人の中から出てきた十兵衛へと振り返る。骸の奥からじつと見つめてくる彼の雰囲気はどこか不安そうにしている。

昨日は一日中ジンオウガについて話し続けており、実際に戦った事がある経験を生かしてジンオウガについての特徴、対処法を教えてくれた。

あとはそれを生かして戦ってみるだけだ。

どこまで通用するかはわからないが、何としてもこの狩りを成功させてみせる。

「心配しなくてもいいわよ。あたし達がへまをすと思うっているの？」

「……いや、なんというか……まあ、うん」

「なによ、歯切れ悪いわね」

「……いえ。頑張つてくださいッス。持てる力をぶつけていけば、きつとお二人なら成功させると信じているッス」

十兵衛の頭にはブラキディオスとの戦いで吹き飛んでいった瑠璃の姿が思い浮かんでいた。安定した攻防をする茉莉でさえ厳しいダメージを受けた事があるのだ。ブラ

キディオスよりも更に軽快に動けるジンオウガは注意すべき相手だ。

油断すれば本当に一気に薙ぎ倒し、潰してくる。

しかし二人の成長を見てきているのは十兵衛も同じだ。彼女達は才能がある。ハンター家系に生まれ、鍛えられ、そして実戦の中で成長してきている。それは間違いない。ならばこそ、ここは二人を信じて送り出すだけだ。

「では行つてきます」

「吉報を待つていなさい」

アプトルに飛び乗り、笑顔で二人は走り去つていく。その背中を見送つた十兵衛と村人達。彼女らの狩猟が無事である事を祈る者、本当に成功できるのかと疑う者、心配する者……様々な感情が含んだ視線に見送られ、二人は狩場へと向かつていった。

○

ポツケ村には新たな客人がやってきていた。

空間転移を行使して現れたのは変装している神倉月、そして彼女に率いられるように五人の人物が訪れた。

肩を超える黒髪をゴムで縛り、黒い和服を身に包んだ青年が彼女に続くように現れ、

それに続くように藍色の長髪をした女性が同じような髪の色をした小さな子供の手を引いてやってくる。

彼女に並ぶようにツーサイドアップの髪型をした黒髪の女性と、彼女に肩車されている黒髪をショートカットにしている娘が歩いてくる。

藍色の髪をした母娘は藍と黒の和服、黒髪の母娘は青い和服とそれぞれお揃いだ。

そんな彼らを出迎えるのがポツケ村に暮らしているクロム達。

「よう、久々だな」

「ああ。こんな形で再会するとは思わなかったが……元気にしてたか？」

「おうよ、何とかな。……それにしても、そっちの娘さんらも大きくなったな」

クロムの視線に並んでいるライム達の視線も同じように娘達へと向けられる。それを受けて肩車されている娘は「おーこんちゃつす、おっちゃん！」と元氣よく挨拶した。それにクロムは苦笑を浮かべて「いや……おっちゃんと言われる程に年取ってないんだが……」と呟くしかない。

そして肩車している女性はライムの隣にいる童顔の女性、シアンへと笑いかけて「久しぶり。相変わらず可愛いじゃないの」と優しく声をかける。

「はい。紅葉さんも相変わらず美人さんでいいですね！」

「お？ 嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

にっつと笑いかけながらシアンの頭をぐりぐりと撫でてやる。そうしてやるのも随分と久しぶりだったためシアンはそれを大人しく受け入れていた。

今度は鍛冶屋の娘であり、瑠璃と茉莉の姉である撫子がもう一人の女性へと声をかけていった。

「お久しぶり〜」

「……どうも」

「あの銃、役に立っているかな〜?」

「……まあ、いい銃だな。今もなお問題なく動いている」

「それはなにより〜。素材があるならあれを強化する設計図があるんだけどどうかかな〜?」

「……そう?　じゃあ後で頼む」

「はいはい。……菜乃葉ちゃんは私の事、覚えているかな〜?」

「……?　いえ、ごめんなさい……覚えてないです」

にっこりこと女性から娘へと視線を移して話しかけていくが、娘……菜乃葉は申し訳なさそうに頭を下げる。その礼儀正しい様子に「ああ、いいんだよ。まだ小っちゃかっただもんね。しょうがないよ」と手を振りながら笑いかける。

その傍らではクロムがライムと共に青年へと話しかけていた。



「隠れ住んでいる間、瑠璃か茉莉と会わなかったか？」

「いや、会ってないな」

「あの二人があなたたちを探して東方を周ったんですが……」

「ああ、聞いている。でもその時はリオ夫婦の一件があつたからな、完全に表に出ずに対応していたよ。でも双子の魔族のハンターの噂を耳にしてはいたが……」

「あ、それですよ。あの二人、竜魔族である事を隠して魔族として行動しているので」

「そうなのか……。しかしそれでも会えなかつたな。聞くところによればロックラックを中心として活動しているらしいが、俺達はそれから更に東、ヤマト国の近くに潜伏していたからな」

「ああ……それなら仕方ないな。かなり距離があるな、うん」

頭の中に地図を思い浮かべて納得したように頷く。

ヤマト国付近ともなればかなり東の方だ。彼らが暮らしていた村がある山よりも更に東となり、確か……いくつかの交易街を越えていった先だったか。

同じように思い返していたクロムの妻、桔梗が問いかける。

「リオレウスとリオレイアのつがいが活発化しているとの話ですが、そのエリアに含まれているのでしょうか？」

「ああ、そうだな。俺も希少種のつがいを他のハンターと組んで討伐してきた。近くを

飛行していたし、生活金の事もあったからな」

「希少種を討伐したのですか?」

「ああ。なかなか手ごわい相手だった。流石は希少種、というだけあった。そのつがいだからな……かなり厳しい戦いだったが、組んだハンターと戦アイルーが優秀だったからな、討伐できたよ」

「戦アイルー? 気になるところだけど、今は家に移動しないかい? こんな所で立ち話は寒いだらう?」

まだまだ積もる話があるが、月の言う通りここは雪山と言う事もあって寒い。子供は風の子というのか、肩車されている子供は元気なものだったがそれでも家の中という暖かな場所に連れて行った方がいいだろう。

それもそうだとクロムが頷き、「よし、行こうか」と全員に声をかけて歩き出す。

ルシフェル一家と神倉月らの客人、そして鍛冶屋の母娘と大所帯で移動する光景はポツケ村の村人達にも知れ渡り、数年ぶりに訪れたその客人らに気づいて声をかけてくれる人達がいる。

変装しているが、それでも彼らはその客人らの事を覚えていたようだった。なにせ六年前の事件の際に訪れた事があるし、実際にこの村で一時期暮らした事がある。

そう、満を期して神倉月に連れられて——白銀一家が訪れたのだ。

大所帯が入ってもある程度は問題ないが、やはりリピングに全員が入る事は出来ない。隣の部屋も開放してやっと全員が座って話が出来た状態となった。そうして月達には自分達に掛けている変化の魔法を解く。

するとクロム達が発えている彼らの姿がそこに現れる。

白銀鼻。

六年前にライム達が暮らしていたココット村に隣にいる紅葉と共に訪れた東方のハンターであり、一時期はライムとシアンと組んで二人に師事した人物だ。

事件が収束してからは東方へと帰り、滅びた村に墓参りしてからは姿を消してしまつたハンターである。

彼の両隣に並んで座っている二人の美人な女性、優羅ゆらと紅葉を妻に迎えて二人の娘を持つ一家の大黒柱でもあつた。

今までずっと隠れて暮らしてこられたのは月が彼らの家へと訪れて結界魔法を張り、変化の魔法を支援する道具を手渡していたためだ。そして何よりハンター稼業も偽名として登録するという裏技もこなしている。

普通ならば認められないが、月の裏回しとドンドルマにいるレイン達にも陰から通じていたためまかり通つてしまつていた。事情を知っている彼らも一度は渋つたが、目をつぶつてもらつた。これらがあつたからこそ彼らは誰にも気づかれず、今まで問題も起

こさずに暮らしてこられたのだ。

白銀昴、偽名は星野翔。ほしのかける。

旧姓、黒崎優羅、偽名は灰原なずな。その娘の菜乃葉は菘。すずな。

旧姓、竜宮紅葉、偽名は芙蓉桜。ふよう。その娘の楓は小梅。

これらを名乗つて暮らしてきている。

あれから六年……昴と紅葉は二十六歳、優羅は二十五歳になっている。

その愛娘たちはもうすぐ五歳になる頃だ。異母姉妹ではあるが二人とも仲が良く、そして性格は何と言うか反対だった。ある意味それぞれ母親に似ているというべきか。

外見的な事は母親によく似ているが、性格もある程度似通っている。

菜乃葉は優羅に嫉けられているおかげで結構礼儀正しく落ち着いている。優羅の隣で静かに座っているというのに、楓は他人の家とその広さと人の多さに少し興奮しているようで、きよろきよろと落ち着かない。

それだけでなくクロムらの子供に気づくと物おじせず話しかけていつている。あいうところは子供の頃の性格が変わった紅葉を思い返してしまふ。

クロムの息子はグリーン。父親によく似た深緑色の髪をした四歳の子供だった。その後ろに隠れるようにしているのがライムの娘、リーフ。彼女は三歳であり、淡い緑色の髪を三つ編みにしている彼女は人見知りなのか、大勢の人がいるのが怖いらしくグ

リーンの服を掴んでいた。

そんな二人に話しかけていく。

「お？ おお？ とし、近い？ お前らなんて言うんだ？ オレはこうめ！ ……あ、い

まはかえでだっけ？ おかーん、どっち？」

「今は楓でいいわよ」

自己紹介をしようとしたところで名乗る名前がどっちにすればいいのかと首を傾げた楓が紅葉へと声をかけ、今は本名でも構わないのでそっちで許可を出した。そんな様子を見守りながら振り返りながら見守っており、「……行ってもいいよ」と優羅が声をかけてやる。

「行ってもいいの、お母さん？」

「……ん。友達、作ってきなさい」

「うん！」

優しく頷いてやれば菜乃葉が嬉しそうに頷き、椅子から降りてとてとてと三人の下へと駆け寄っていく。そんな様子を見守り、そして桔梗とシアンが持ってきたお茶とお菓子が全員へと配られ、話を再開していくことになった。

最初は昔の事を思い返し、それからどういう風に過ごしていったのかを話していく。

その間子供たちは離れた所で自己紹介をし、少しずつ打ち解けていっていく。

六年という月日が生んだ思い出を辿っていき、変わっていった生活の事を話していくと時間を忘れてしまいそうだった。それだけ積もる話が溜まっているという事であり、話題が絶えない中でのお茶の時間は穏やかなものだった。

そうした中で、ようやく月が東方の事について話し始めた。

「さて、先日話した事だけど」

その月の切りだしに、他の者らの表情が真剣なものになってくる。離れた所から聞かえてくる子供たちの楽しげな声を耳に入ってくるが、彼らの視線は月へと向けられていた。

「セルシウスに関しては何とか交渉が成立しそうな流れになっている。仮釈放が叶えば予定通りここへと連れてくるから、それからの事はクロム達に任せてもいいかな？」

「はいよ。何の問題もないですよ。むしろ歓迎ですわ」

「セルシイ姉さん、元気にしていましたか？」

「うん、相変わらずの様子だったね。でも何か問題を起こす、という様子は全くなかったから普通にあの頃のように話をする事は出来そうだよ。……でも、仮釈放が叶ったとしても彼女の罪状が罪状だからね。ギルドナイトが一人ついてくることになりそうだし」

「……まあ、しゃあないですね。誰になるかは？」

「まだ決まっていないけれど、私としてはアルテミスとルーシーがついてくればいい、と

思っているよ」

見知らぬ誰かをつければセルシウスのあの様子と、シユヴァルツの血統という偏見の目にさらされて彼女の苛立ちを高めてしまいかねない。彼女の性格についてはギルド側もある程度把握しているためそのような事は出来なかつた。

ならば彼女を知るギルドナイトをつければいい、ということになるが、候補として上がるのはレインとサン。しかしどちらも隊長を務めており、レインに関してはその役職上彼女を監視する事は出来ない。

サンならば彼女の隊に組み入れればいいだろうが、しかしそうなれば月の目的を果たす事は出来ない。となれば最後に挙がるのはゲイルかアルテミスなのだが、ゲイルは釈放された後にギルドナイトに復職するかどうかは怪しい。

結局アルテミスが候補に残ってしまう。だがアルテミスもまたギルドナイトとしては若輩者であり、敵方についていた存在。セルシウスとの付き合いは長いがその経歴があるため、もう一人付いた方がいいかもしれないという話となり、ならば月が連れてきたルーシーを付けてくれ、と交渉する事になったのだ。

「アルテミスっていうとあの子だよな? あの子も来るんだあ。元気になりました?」  
「うん。可愛らしさを残した美少女に成長していたよ。……シアンよりも少し身長が高かつたかな?」

「……うわあ、それは少し複雑だなあ……」

シアンが懐かしさに目を細めるが、月の言葉に複雑な心境に目を細めてしまった。あの頃はシアンよりも小さかったのに、いつの間にそんなに成長していたのか、と溜息ついてしまっている。

そんな彼女に苦笑して桔梗が頭を撫でてやってやる中、月の視線が昴達へと向けられる。

「辻斬りに関する噂は？」

「ああ、耳にしていますよ。それが……シユヴァルツの末裔の仕業じゃないか、とも」

「ほんと、何でもそういう方向に持つていきたいって感じよね。……こっちとしては不愉快極まりないっての」

「……そうだね。だからこそ、何とかしなければならぬ。私もそれらしき人物と遭遇したけれど逃げられてしまったからね」

「……………会ったの？」

瞬間、優羅の目が鋭く細められて月を見据える。姿勢正しく椅子に座り、膝に手を置いていた彼女は無表情に会話を聞いていたが、月のその言葉は聞き逃さなかった。

ずっと隠れ住んでいるが彼女もハンターであり、過去は人斬りの経験もある戦士でもある。その雰囲気は視線だけで殺しかねない程のものだが、それは衰えていなかったら



しい。むしろ研ぎ澄まされていた。

さすがに殺気までは放っていないが、月はその視線を受け止めながら彼女も成長しているな、と思わずにはいられない。

「ああ。確実ではないけど、恐らく可能性が高いね」

「どんな人だったの？」

「なかなか可愛らしい娘さんだったね。刀の使い手にして、魔法使いでもあったかな。そして何より——」

その続けられた言葉に全員が驚きを隠せない。信じられないようなものだったが、月がそう言うのだ。確かなのだろう。

そして続けて口にされた何者かの手引き。衛宮天羽の逃亡にも手助けしたかもしれない謎の女性についても気になるところだが、優羅はその話を聞いてこう言った。

「……その衛宮天羽が辻斬りと言う可能性は？」

「なきにもあらず、かな。私は実際に会った事がないから何とも言えないけれど、彼女も衛宮家の出身だからね。剣術に関してはかなりの腕前だったと聞いている。むしろそういう過去があるから候補には上がるけれど、行方不明になってから誰にも足取りがつかめない状態さ。どこに潜伏しているのかは不明だよ」

「だからいるかもわからない人より、可能性が高くて不特定数のシユヴァルツの末裔に

罪をなすりつける大衆心理、と。ほんと、やりきれねえよなあ……」

誰かがあれは悪だと言えば、それに誰かが乗っかっていく。そうして広まった認識はよく知らない人物も「みんながそう言っているのだからそうなのだろう」という認識となり、さらに広まっていく。

その対象の事をよく知らないのにそういう人なのだと思うされていく。

しかもその対象の歴史……過去の先祖たちが引き起こしている実績があるのだから性質が悪い。その子孫であるが故にそういう目にさらされてしまう。心当たりがなくとも、実際にやっていなくとも、その大衆心理に囚われた者らにそう思い込まされる。クロムの言葉に自然と無言となつてしまった。

それを壊すように月がぐつと拳を握りしめて言う。

「だからこそ、今度はこちらからも打つて出る。そのための繋がりを。向こうの人達にもう一度連絡がついたからね。今夜にでも移動しておくことになったよ」

「今夜ですか？ 早いですね」

「すでに一人が交渉の場に向かつているのさ。そしてヤマト国からも二人、再び交渉の場に向かえる時間が取れているとの事だよ」

「えつと……乾渚さんと、未寅龍仁さんと、異鷲輔さん、でしたっけ？」

「……ヤマト国の王に仕える六家の内の三家。乾家を中心とした二家のグループ。そし

て魔族に対して偏見のないグループでもある。交渉の相手としては悪くはない」

シアンという言葉に優羅がどういう家なのかを口にする。

それに続くように紅葉が、

「ちなみに偏見があるのが酉丑家を中心とした申子家と午卯家ね。ついでに言えば、乾は魔族の家系で、酉丑と午卯が竜人族の家系だったりする。更に言うとな家の名前を漢字で書くと——」

「——十二支になる、ですよ？ 家名はそれぞれ二つを使用し、六つとなっている。王を中心として六つの家を守るという意味合いで成り立っている、と本で読みました」

子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥。

これらから二つずつ取って成り立った家。

乾、未寅、巽。

酉丑、申子、午卯。

これらについてはヤマト国の歴史書を読めばたいはい記されている事であり、読書家であるライムが知っていてもおかしくはなかった。

そして今回接触するのは乾家のグループ。きっかけは単なる偶然だったかもしれないが、その偶然があつたからこそこちらからも動けるようになった。その好機を逃すわけにはいかない。

雷河と焰が作ってくれたこの縁を大事にするべきだ。そして過去に月が作った縁もここで生かすべきでもあつた。

「さて、ここで一つの問題だよ。乾さん、未寅さん、そして巽さん。三人と交渉するためには雷河達も付くが、君達も参戦すると表明しなければ向こう乗つてこないだろうね。それぞれ一人、交渉の場に向かわなければならぬが……」

「ならば俺が行こう」

「となれば俺だな」

挙手したのは予想通りとすべきか、昴とクロムだつた。二人の挙手に巽を唱える者はおらず、月と共に二人も移動する事になった。

あとは交渉を成立させ、協力関係を布けるかどうかだ。

「では今夜、移動するとしようか」

少しずつ、こちらにも動き出すのだつた。

○

昼にユクモ村を後にしてアップトルを走らせる事数時間。

日が暮れ始める前には狩場となつている溪流へと到着する事が出来た。山間へと

ゆつくりと沈んでいく太陽を感じながらベッドとランプを運び入れ、モドリ玉のセットを済ませておく。

今回二人が使う武器だが、瑠璃はディオスソード改を選択した。内包する爆破属性を生かしてジンオウガへと多くのダメージを与える算段だった。

対して茉莉は強化させておいたトキシックジャベリンを選択。もちろんこれは毒を注入するという目的を持つての選択だ。

つまり、とにかくダメージを与えることを考えての武器選択となった。もちろん防御を捨てているわけでもない。最初の内はジンオウガの動きを観察してどういう行動をするのかを見る事から始めるつもりだ。

武器の調子を確かめ、装備の具合も確かめて準備完了だ。

それぞれ持つてきた鬼人薬グレートと硬化薬グレートを飲み干し、ベースキャンプを後にする。二人はそれぞれ分かれてエリアを探索する事はせず、二人揃って行動する事になった。

エリア1を北上してエリア4という開けた空間に出る。この渓流には廃墟はないように、完全に崖の上の平らな場所、という空間になっていた。視界を遮るものは何もなく、数等のブルファンゴが鼻を鳴らしながら地面を嗅ぎまわっている。

その視界に入らないように離れた所を歩いていき、エリアを移動しようとするが、一

頭のブルファンゴが顔を上げて二人へと振り返ってきた。前足で地面を擦りだし、走り出そうとしているのに気付いた茉莉が、左手を横に出す。

轟っ、と手のひらから火炎が躍り、ブルファンゴを牽制するように視界の先で燃え上がる。それを見たブルファンゴがその火を見つめて足を止めてしまった。

その間にエリアを駆け抜け、エリア7へと移動する。無駄な戦いは避けていく。小型モンスターを相手にすればそれだけ武器の切れ味が下がるし、体力も少し消費する。その状態でジンオウガを相手にしたくはない。やるならば全力、全快の状態で。

そう思ったが、エリア7に來てもジンオウガの姿はない。

水草に隠れている、という様子でもない。なにせ大型モンスター特有の気配がないのだから。となると森の方にいるのだろうか、とここから南下してみる事にする。エリア6を経由し、エリア5という森の空間へと向かってみると、

「……………、この気配……………」

入った瞬間にこの森に充滿している覇気を感じ取った。

視界の奥にその姿を確認できるのだが、奴はただそこに佇んでいるだけだった。しかも二人に背を向けている状態だ。だというのに奴から放たれる気配が尋常ではなかった。

そして奴もまた二人が言葉を失っている気配を感じ取ったのだろうか、ゆっくりと振

り返って二人を見つめてきた。

青い瞳が遠くから二人を視線で射抜き、小さく唸り声を上げながらぐるりと首や肩を慣らすように回転させて身構えていく。

奴こそが今回の討伐対象となっている雷狼竜ジンオウガ。

今まで出会ってきたモンスターとは全く異なっている骨格をしているのが見て取れる。

四肢で体を支えるというのはドンドルマ方面で確認される古龍種と同じようなものだが、その鍛え上げられた四肢は太く、強固な甲殻に覆われている。背中からは白い毛が生え、額から生える黄色い角と肩から胸へとかけて掛かった黄色い甲殻が王者の風格を漂わせる。

「グルル……」

十分に肩慣らしをしたジンオウガが小さく唸ると、悠然と二人へと歩き出す。距離を縮めるために疾走するのではなく、歩いてきているのだ。その行動から奴の余裕を感じさせる。

そうして値踏みするようにじっと二人を見つめてきている。完全に舐められていた。そう感じ取ったら、戦わずにはいられなかった。ゆつくりと接近してくるジンオウガへと、ディオスソード改に手をかけて少しずつ走り寄っていく。それに続くようにトキ

シツクジャベリンを抜いてゆっくりと接近していく。

二人が近づいてくるのを見てもなおジンオウガは悠然と歩き続け、瑠璃がディオスソード改を抜いた瞬間、ぐつと瑠璃へと踏み込むように前へと迫ってきた。

「っ!？」

急に近づかれた事で斬りこむタイミングがずれてしまった。数メートル離れていたのが前のめりに倒れながらぐつと近づきつつ前足で体を支える、というもので一気に縮まった。

そのまま勢いよく頭を振り上げ、角を突き立ててくる。それを何とか横に跳んで回避したが、逃げる瑠璃を追うように左前足を振り上げて叩きつけてくる。また後ろに跳んで逃げたが、もう一度右前足を振り上げて叩きつけてきた。

「くっ……!？」

地面が陥没する程の力で叩き下ろされるその一撃。まるでブラキディオスの拳の一撃のようだ。だが瑠璃に意識を向けている間に茉莉が接近し、トキシツクジャベリンで後ろ足へと突き入れる。

切っ先が甲殻へと突き刺さるのだが、硬いために刃が浅くしか入らない。しかし毒が滲み出て少しずつジンオウガの体内へと注入されるため、茉莉は連続で突いて離脱していく。



だがジンオウガはそれを逃さず、ぐるんと方向転換しながら茉莉へと勢いよく前足を叩きつけてくる。思わず息を呑んだが、冷静に盾を構えて受け流しつつ逃げる。もう一度叩きつけてくるのを受け流したが、今度は体全体で体当たりをしてくる。

それは受け流さず気を込めて盾を構えて受け止め、カウンターを放つように一撃胸へと突き入れる。

十兵衛が言うにはジンオウガと戦うならば奴の素早さを上回って動き攻めるのか、あるいは奴のパワーをどっしり受け止めて反撃するか、の二択だそうだ。

前者は瑠璃、後者は茉莉。

茉莉はあの前足の叩きつけはブラキディオスのようなものだと感じ取った。勢いよく叩きつける、というその動きはもう既に見切っている。似通った攻撃方法ならば、すぐに対処できるだけの目を養った。

だから躲せる。

だが続けて繰り出された体当たりは逃げ切れない。逃げ切れないならばどっしり構える、その上で反撃の一撃を突き入れる。試してみたが、悪くはない。続けざまに角を振り下ろしてきたが、それも盾で防いでその頬へと一撃入れる。

「……グル」

ぎろり、と視線が茉莉へと落とされ、また何かするののかと思いきや、横から接近して

きた瑠璃の斬りかかりに反応して大きく体を旋回させながら背後へと跳んだ。その際に振り回された尻尾が瑠璃の眼前を通ったが、何とかそれをディオスソード改で受け止めて防御する。

そのまま唸り、何かを呼び寄せるように吼え続けると、それによって本当に呼び寄せられているのか、周囲から雷光虫が一斉に飛び立ってジンオウガの背中へと集まってくる。集まった雷光虫の発せられる電気によってジンオウガの背中中は弾ける電気が高まりだし、それに従ってジンオウガの気迫が高まっていく。

『ジンオウガは集めた雷光虫によって発電機能を高めるツス。それが一定ラインを超えると奴の毛と甲殻が一気に鋭利になり、攻撃能力とスピードが高まるんす。これが、ジンオウガが更に殺る気になっているという状態ツス。その発電している間は隙だらけツスから、攻撃のチャンスでもあるツスが、同時に怯ませる事で発電を中断させるチャンスでもあるツス』

十兵衛の話の思い返し、瑠璃が一気に接近してディオスソード改を振りかぶる。前足から肩へと刀身突き入れ、腹から切り払う。すると切り裂いた部分から緑色の粘菌が侵入していく。

だがジンオウガはそれでも雷光虫を集め続けている。

前足、腹、肩と連続して斬り、反対側も茉莉がトキシックジャベリンを突き入れてい

く。右側は粘菌が、左側は毒がそれぞれジンオウガの体内へと注入されていく。だがジンオウガは一定の雷光虫を集め終えると、またぐるりと首を回し、一步前へと跳ぶと、勢いよく体を後ろへと回転した。

まさにそれはバツク転。強靱な四肢だからこそ出来る芸当。それによつて勢いよく尻尾が瑠璃へと襲い掛かり、舌打ちした瑠璃が何とかそれを回避する。が、それを見越したのか勢いよく体を捻つて向き直ると体勢を低くし、彼女へと飛びかかつていく。

「——ツ!？」

大きく口を開けて彼女へと噛みつきにかかるだけでなく、前足で彼女の体を押さえつけようとしている。逃げるにはもう遅い。瑠璃はディオスソード改を構えて防御体勢を取るしかなかった。

せめてその前足からは逃げられたが、喰らいついてくる牙からは逃げられない。気を纏わせて身構えた彼女にジンオウガは噛みつき、しかし刀身が打ち鳴らされる牙を止めてしまう。

奴はそのまま顔を上げ、ディオスソード改を握りしめている瑠璃ごと持ち上げてしまった。続けて首を振つてまるでぶら下がる子供を振り回すように一度横に振り、一気に彼女を放り投げてしまう。

「く、うう……!」

何とか受け身をとったが強く地面に叩きつけられた衝撃を完全に殺しきれなかった。しかもジンオウガの背中がバチバチと電気を発し、それによつて活性化した数匹の雷光虫が一つの雷弾となつて背中から放出され、瑠璃へと向かつて弧を描きながら迫つていく。

何とか前へと転がると、さつきまで立っていた場所を雷光虫が通過していく。そうやつて瑠璃を意識している間にトキシックジャベリンを突き入れていくと、今度は茉莉へと体側面を使つてぶつかつてきた。

これも気を纏つて防御するが、しかし体を使つての体当たり……それもシオルダータツクルに近い攻撃だ。その衝撃は馬鹿にならないものの、何とかこれを堪えてまた反撃。

だがジンオウガはそのトキシックジャベリンを打ち払うように、前足を振り払つて茉莉のバランスを崩してきた。思わぬ反撃にトキシックジャベリンを持ち直したが、そこを狙つてもう一度ぶつかつてくる。

「くっ……!!？」

肩でかちあげるようにぶつかつてきたため茉莉の体が吹き飛んでしまう。盾で構える暇もなかった。気で身を守るぐらいしか出来なかったが、それでも一瞬体を襲つた痛みは茉莉の体を侵す。

それだけではなかった。吹き飛んだ茉莉に距離を詰めるように一歩前進すると、信じられない行動をとる。体を捻りながら後ろ足で地面を蹴り、片方の前足で体を支えながら宙に浮いたのだ。

それに従って回転した尻尾が受け身を取った茉莉を側面から薙ぎ払い、彼女の体はまるでボールのように勢いよく宙を舞う。

「茉莉いッ!」

彼女の体は生えている樹まで吹き飛び、そして幹に叩きつけられて動かなくなってしまう。地面から数メートル離れたジンオウガの体は四肢に支えられて着地し、またしても雷光虫を集め始めて急速に発電しだす。

それを止める暇なんてない。瑠璃は茉莉へと駆け寄っていった。

「茉莉、茉莉っ! しっかりしなさい!」

「……………ん、く……………」

意識が飛んでいたのは数秒だけだったらしい。瑠璃の声に反応して何とか起き上ったのだが、しかし痛む体は彼女の行動を制限する。

「ヴルルル……………ヴォオオオオオオオン」

こうしている間もジンオウガはどんどん、どんどん雷光虫を集め続ける。今が一時撤退のチャンスか、と思ったが、その雷光虫たちが一気にジンオウガの背中に集結して凄



振り返りざまに背中から数匹の雷光中を放出してくる。それは集合体となって雷の弾を形成し、瑠璃達を追うように四つの弾となって放出される。バチバチと音を立てて迫ってくるそれを何とか躲していくが、続けてジンオウガが迫ってくる。

「こ、の……だつたらこれでっ！」

ポーチに手を伸ばし、こやし玉を取り出してジンオウガへと投擲する。それはジンオウガが顔を避けて躲したが、肩へと着弾してあの臭いが充満する。だがジンオウガはそれに顔をしかめるだけで、疾走速度を落とさないまま瑠璃へと飛びかかっていった。

ディオスソード改を構えて何とか躲していったが、茉莉は体を押さえながら少しずつ離れていきつつ回復薬を取り出して口に含んだ。しかしそれで完全に治るといふ訳じゃない、その場しのぎにしかない。

だがそれでも切り抜けなければならない。

殺る気になっているジンオウガという獣……いや、竜を前に瑠璃と茉莉はなんと小さな存在か。だがジンオウガはその小さな存在を相手に、本気になって叩き潰しにかかっている。

茉莉が回復する時間を稼ぐため、瑠璃は歯噛みしながらディオスソード改を振るう事にした。だがそれを防ぐようにぐっと四肢に力を込めて瑠璃へとタックルを仕掛ける。その際やはり溜めている電気を高めて放出し、瑠璃へと体だけでなく電気まで襲い掛か

る。

一步下がって何とか直撃は避けたが、放出される電気が体を撫でていく。ぞわぞわとした感覚と少し痛い感覚が同時に襲い掛かってくるが、歯噛みして堪えつつディオスソード改を振るう。

先ほどから斬りつけている部分を狙ってやれば、甲殻を切り裂く刃から放出される粘菌が付着し、黄色く染まり始める。もう一振りして離れるが、それを追うようにジンオウガが振り返りつつ前足を叩き落してきた。

一步下がり、もう一撃振り下ろしてくるそれを横に避けつつ叩き落としたそれを切り払う。更にもう一撃くるのかと身構えるが、ジンオウガは二足で体を支えながら胸を逸らし、体全体で叩き潰してきた。

そんなジンオウガから逃げ、もう一つのこやし玉を投げつけてやる。それは狙い通りジンオウガの顔面で炸裂し、奴の鼻にきつい臭いを充満させてやる。

「グルッ!」

その臭いに溜まらずジンオウガが呻いてしまう。顔を振って臭いを振り払おうとしたが、それでも鼻にくる臭いは消えてくれない。ぎろり、と瑠璃を睨んだジンオウガだったが、そのままエリア6に向かって走り出していった。

この臭いから解放されたがっているらしい。その行動を狙ってぶつけたが、何とか成



功したようだ。その事に胸をなでおろし、休んでいる茉莉へと駆け寄っていった。

「大丈夫？ 何とか追い払ったけど……」

「……ええ、ありがとうございます」

「どこかまだ痛むところは？」

「いえ、特には。少し休めば問題ないですよ。装備も強化していますし、硬化薬グレート  
の事もありますからね。この時間を有効に使って休み、次の戦いに備えましょう」

エリア6へと来たジンオウガは真つ直ぐに滝の方へと向かっていくと、流れ落ちる水  
を全身に被って体を震わせていく。付着した臭いを全部洗い流すように滝に打たれ続  
け、少しして体を震わせながら滝から離れる。

少しだけ雷光虫が離れていったが、特に問題はない。もう一度集め直せばいいだけの  
事だ。歩けば小川が少しはねて水音を立ててしまうが、気にする事は何も無い。

さつきまでそこらでたむろしていたジャギイ達がジンオウガの姿を見た瞬間逃げて  
いったのだ。本能から危険を感じてしまい、逃げていったらしい。だがこれはいつもの  
事だ。

無双の狩人という異名は人族だけに通じるものではない。モンスター達の間でも本  
能から勝てない、と感じる程の威圧感がジンオウガから発せられるのだ。

「グルル……」

小さく唸りながら先ほどの二人について思い返す。

小さい存在、そして特に脅威を感じない存在。吹けば吹き飛ばすほどの存在だが、あれを潰せと主は言う。それに逆らう気はないので、言われた通りあの小さな二人を潰していくだけだ。

大方今頃休んでいる頃合いなのだろうが、残念ながらジンオウガは二人を休ませる気など毛頭なかった。しかし相変わらず悠然と歩いてエリア5へと引き返していく。

雷光虫もジンオウガの闘気に反応して相変わらず背中に集まって電気を発し、それがジンオウガの全身へとゆっくりと纏わり、その力を高めていく。

まだまだ戦いは終わらない。

一時的な休息すらも与えられず、二人の戦いは続行されるのだった。

## 45話

二人して応急手当てをしあい、回復薬グレートを飲みながらジンオウガについて思い返す。噂通りの強靱な四肢による動きと攻撃力、発電してからの雷光虫の放出。

しかし話には聞いていたが実際に目にするまでは信じられなかった、茉莉を吹き飛ばしてしまった尻尾の動き。よもや横に回転しながら跳びはねて、という動きをするなど誰が想像するだろうか。

気の守りをしていなければ、硬化薬グレートがなければ、リオハートシリーズを強化していなければ……あの一撃で命を失っていたかもしれない。それだけの強い衝撃が鎧を通じて体へと襲い掛かってきたのだから。

油断ならない。いや、油断していなくてもマズイ。

今までの敵とは格が違う、という事をあの数分間で思い知らされた。

「どうする? 攻め方を変える?」

「……いえ、変えたところで何も変わらないでしょう。まずはあの動きに慣れる事から始めなければどうにもなりませんよ。十兵衛さんが言うところの『ダイナミックお手』

は問題ないとして、あの移動と距離詰めが問題ですな」

ダイナミックお手、要はあの前足から繰り出される叩き潰しの事らしい。十兵衛が言い出したのではなく桐音が言い出したのだとか、あるいは他のハンター達が言い出したのだとか、発祥は不明だがあの攻撃はそう呼ばれているらしい。

あれに関しては以前戦ったブラキディオスの拳で問題ない。何度もあの攻撃を見ているのだから目が慣れているためだ。

問題はいきなり距離を詰めてくる動きと移動速度。

さっきまで少し離れていたのに向こうから急速に詰めてくる事で攻撃と回避のタイミングが狂わされ、そこから攻撃を繰り出されるといふ繋ぎ。これによって負傷してしまっただけだから、あれを体で覚えなければ。

そう思っていたのも束の間。

エリア6の方からバチバチと音を鳴らしてゆつくりとジンオウガが歩いてきている。

「早い……早い……」

まさかこんなに早く帰ってくるとは思わなかった。二人は揃って武器を抜いて身構え、歩きながら接近してくるジンオウガを見据える。

「……動ける??」

「ええ、大丈夫ですよ」

それだけ言い合すと、二人は自分達からは接近せずにジンオウガの出方を窺った。対するジンオウガは数メートル先で立ち止まり、また首を回して二人の様子を窺っている。

そのまま両者は睨み合う形となった。

どちらも相手がどう動くのかを待つという作戦……なのだが、ジンオウガはただ二人を見下ろしているだけなのかもしれない。青い目がゆっくりと細まっていき、背中の電気が一際強く弾けると、また雷光虫が作り上げる弾が四つジンオウガの左右から放たれた。

二つずつ二人へと迫ってくるそれに、左右へと散って逃げれば、ジンオウガは弱っていると睨んだ茉莉へと前進した。盾を構えながらジンオウガの動きを見切ろうとした茉莉は、後ろに下がりがつつジンオウガを睨み付ける。

そんな視線など気にも留めずにゆっくりと前進し、ぐつとまた一気に距離を詰めた。  
(来るっ！)

前進しての身構え、ここからどう来るのか、と警戒した茉莉だったが、ジンオウガは体勢を低くしながら小さく唸るだけだった。

(来な……いや、フェイントッ!?)

一向に攻撃が来ない事に少し力が抜けた瞬間を狙って、ジンオウガが前足を振り上げ

て茉莉へと叩き下ろしてきた。攻撃の瞬間をずらしてきた、という事に気づいただけでも良かった。

叩き落される前足をバックステップで躲し、しかし衝撃の瞬間に纏われている電気の余波が放出されてくるのが感じられる。じわじわと痛めつけてくるそれを堪え、もう一撃をまたバックステップで躲し、それをもう一度。

(……っ！)

三度目の叩きつけの際に生まれる硬直を狙って茉莉はトキシックジャベリンを突き出す。すると切っ先から漏れ出た毒がジンオウガの体内へと侵入し、それが奴の体内に蓄積した結果が表れた。

ジンオウガが小さく呻き、傷口の周辺の色合いが変化し始めたのだ。毒状態へと陥ったサインである。

(よし、一つの仕事を果たしましたね)

今回の茉莉の仕事はこの毒槍でジンオウガを毒状態にする事。これによって多少の楽が出来る。だがジンオウガはそれでも止まらない。

ぐつと体勢を低くするとシオルダータックルをしかけてきた。これに関しては完全に防御するしかない。盾にかかる衝撃をしっかりと受け止め、放出される電撃も耐える。ここで反撃か、と考えたが、ジンオウガがそのまま後ろへと体を捻りながら跳んで

離れる。

そのすぐ後に瑠璃が迫ってきていたが、またしても尻尾に遮られてしまった。

しかしすぐにクイツクターンをし、離れていったジンオウガを追っていく。

「せええええいつ！」

身構える前にジンオウガへとすれ違いざまに一太刀入れてやる。これにより傷口の粘菌が赤色へと染まった。あと一段階で粘菌が爆発する、という段階になったが、ジンオウガはぐつと体勢を低くし、瑠璃へと勢いよく飛びかかっていった。

それをまた体を捻りつつ翼を羽ばたかせて急速に離れることで回避した。だが、ジンオウガはぐるりと体を捻りながらまた体勢を低くし、もう一度飛びかかっていく。

「く、の……い！」

これもまた空中で後転しつつジンオウガの背後に上から回り込む事で回避できた。そのまま背後から斬りかかったが、一撃当たった際にジンオウガが前へとステップをしたのを見越して回避行動に移る。

次に来る行動が何となく読めたからだ。

そしてそれは当たった。

勢いよくその巨体が反転し、それに従って浮いた尻尾が瑠璃へと強い力で叩き落されてきた。これを横に跳んで躲し、ブレーキをかけながら体を捻って後ろ足を狙ってディ

オスソード改を構えなおして斬りかかっていく。

「グルルツ！」

そんな瑠璃を叩き潰しにかかるように後ろ足で直立したジンオウガだが、横から茉莉が反対側の後ろ足へとトキシックジャベリンを突き出した。瑠璃も逃げながら後ろ足を切り払い、茉莉がもう一度トキシックジャベリンを突き出すと、体を支える力が少し落ちたのか、あるいは体を蝕む毒の影響か。

体勢を崩してジンオウガの体が転がっていく。

「チャンス！」

これを見逃す瑠璃ではない。もがいているジンオウガの尻尾へと向かい、デイオスソード改を連続して振るって斬りかかっていく。刃がジンオウガを切り裂くたび甲殻が傷つき、少しずつ粘菌が侵入していく。

残念ながら先ほどから斬り続けていた部分は地面に密着してもがいているため斬れない。でも構わない、今はこの尻尾を傷つけて切断へと近づけていくだけだ。気刃斬りも織り交ぜて斬り続けられ、粘菌が急速に活性化して緑、黄色、赤と変色していく。

そして大回転斬りからの抜刀斬りを放てば、その傷口が爆発した。続けて連鎖するよう先ほどの赤い部分も発火して爆発する。

「グルオオロロ……ッ!？」



それに呻いたジンオウガだが、奴の顔付近では茉莉がトキシックジャベリンを突きつけている。最初は背中から順次に突き続け、今は顔……というより角を狙って突いていた。

二人の攻撃のダメージは蓄積し、それだけでなく毒が体内から侵して体力を削つていくという地道な攻撃。しかしそれは効果のある事だ。

尻尾の甲殻は少しずつ破壊されているし、背中の毛を突き破つて刺さる刃と角に若干の亀裂を与えていく、という事実がそこにある。

だがそれも長くは続かない。

もがいていたジンオウガがようやく起き上つてきたのだ。それを感じ取つて二人はジンオウガから離れたが、ジンオウガはそのまま一步横にずれながら勢いよく体を捻つてきたのだ。

『——ッ!?!』

予想だにしなかった反撃。横回転によって勢いよくしなつた尻尾が遠心力の力を受け、強い力で二人を纏めて横殴りに吹き飛ばす。受け身もとれずに宙を舞い、地面をゴロゴロと転がっていく二人をジンオウガが歓喜の咆哮を上げて天を仰ぐ。

それに呼応してまた雷光虫が数匹集まり、背中で発電してジンオウガへと更なる力を与えていった。

「げほ、ごほ……く、なんて、奴……！」

「油断していたわけでもないのにこのざま、ですか……っ、来ますよー！」

バチバチ、と激しい音を立ててジンオウガの体の周囲に電撃が放出されながら奴はまた体勢を低くしていく。そのまま地を蹴って走りだせば、今まで以上の速さでその体が迫ってきた。

痛む体を無理に動かして二人は何とか二手に分かれて逃げるが、ジンオウガは急ブレーキをかけながら反転し、今度は瑠璃へと飛びかかりながら胸を逸らした。すると着地から一気に滑りつつ纏われた電撃も同時に襲い掛かってくる。

「っ、のお……！」

体を反転させながら宙へと舞い上がり、口から火炎を噴き出してそれを持推進力としてつつ反撃の手段として逃げ切る。突然の火炎放射にジンオウガは若干驚いた様子だったが、逃げの一手であるその火炎を受けても気にした風もない。

瑠璃に背を向けるとまたバツク転をして上から尻尾で叩き落そうとしたが、翼を羽ばたかせて躲す。茉莉も距離を取ってから回復薬グレートを飲み干し、一息ついてジンオウガの様子を窺った。

現在奴は最大まで雷光虫を集めて活性化している状態だろう。

ジンオウガの本気と言われて納得するだけの力とスピードを感じる。しかも雷光虫

と共に発電しているため、常時強い電気を帯びているのだ。近くにいたり攻撃を繰り出したりしてくるたびに一部の電気が放出されて体を撫でてくる。

そう考えている間も、ジンオウガはぐるんと体を捻って茉莉へと向き直ると、今度は彼女へと向かって疾走しだす。迫ってくるジンオウガから横に逃げるが、ジンオウガはまた急ブレーキをかけながら転進し、勢いよく跳躍するとまた茉莉へと胸を逸らしながら滑っていく。

これからは逃げ切れず、茉莉は盾を構えて衝撃を受け止めた。じりじりと背後へと押しやられるだけのパワーが加えられ、それに従って強い衝撃が盾から伝わり、追い打ちをかけるように放出された電気が茉莉へと襲い掛かるが、それを歯を食いしばって堪え、一撃胸へとトキシックジャベリンを突き出す。

胸に浅く食い込んだ刃だったが、それだけだ。大したダメージにはなっていない。それがどうしたとばかりに茉莉へとまた連続して前足を叩き落してくる。これに関しては早くなったとしても彼女には問題なかった。

だが、彼女は今わき腹を強打している状態だ。その痛みで二発目が振り下ろされる際に体が鈍り、躲しきれなかった。盾を使って受け流してみるが、完全に防ぎきれず、三発目を正面から受け止めることになってしまった。

それにより左腕に負荷がかかり、更に彼女の体はその場に縫い付けられる。

「このおとおおッ！」

すかさず瑠璃が救出に入り、ジンオウガの側面からディオスソード改で斬りかかる。頬から方へと一刀両断したその一撃にジンオウガが小さく呻き、続いて斬り上げてやれば、それを払うように角を振り回し、ディオスソード改を両角の間で受け止めた。

刃が食い込んでくるが、ぎりぎりと言を立てて彼女の振り下ろしを跳ね返していき、強く顔を振り上げれば両腕が無理やり振り上げられて体勢が崩される。

そんな彼女へと飛びかかり、勢いよく頭突きをかまして地面に叩き落してやったのだ。

「がっ、は………!?!」

「瑠璃っ!?!」

とどめとばかりに前足を振り上げたが、それを今度は茉莉が止めるべくジンオウガへと疾走する。痛みを堪えて強く大地を踏みしめながら、己の持てる気をトキシックジャベリンに纏わせて勢いよくジンオウガの脇腹へと突き出す。

そこは先ほどからずっと瑠璃が切り続け、ディオスソード改の粘菌によつて爆発した影響を受けた部分。少しだけ肉が露出している部分を狙って繰り出したその槍は、内部へと一気に突き入れられ、衝撃をジンオウガへと伝える。

「——ッ、グ、グ………!?!」

内包している毒も気と共に衝撃となつて伝わり、ジンオウガを大きく呻かせた。叩き落とされた前足は傷の呻きによって瑠璃からずれ、数センチ横に存在している。茉莉の攻撃がなければ今頃あの前足に叩き潰されていた。

九死に一生を得た瞬間だった。

それだけトキシックジャベリンの一撃が鋭いものだったという表れだろう。瑠璃を助けるのだ、という茉莉の強い意志が含まれた気が含まれた槍だ。一矢報いるだけの力を秘めていたのだろう。

その隙をついてなんとか瑠璃がジンオウガから離れていき、痛む体を抑えながらポーチに手を伸ばしていく。何をするつもりだ、とジンオウガが瑠璃へと視線を向けるが、茉莉がまた前へと躍り出てジンオウガの前足へとトキシックジャベリンを突き出す。

それを躲すようにジンオウガは一度二人から距離をとった。そこを狙つて瑠璃がポーチから取り出した閃光玉を投擲した。

強い光に当てられてたまらずジンオウガが苦悶の声を漏らし、顔を振つて視界を取り戻そうとするがそう簡単に治るものではない。

「瑠璃！」

それを見越して茉莉が瑠璃へと駆け寄り、肩を貸そうとするが瑠璃はそれに首を振つた。そして続けてポーチから取り出したそれを茉莉へと見せてやる。一瞬考える茉莉

だったが、それに異を唱える事もなく、同じものをポーチから取り出した。

二人はそれを地面へと叩きつけ、嘔き出してきた緑色の煙に包まれる。それが晴れた頃には、そしてジンオウガがようやく視界を取り戻したときには、もう二人の姿はなかった。

ゆつくりと辺りを見回すジンオウガだが、探しても彼女達の姿は見えず、先ほどまであった気配もない。

「……………ケツ」

それは舌打ちだったのか。

小さく唸ったジンオウガはそのままエリア6へと向かって歩き出す。

その背中はおめおめと尻尾を巻いて逃げだした二人に興味が失われてしまったかのようで、放たれる覇気も心なしか落ち着き始めていた。

モドリ玉によって一気にベースキャンプまで戻ってきた二人はベッドに腰掛けてどつと息を吐く。身を包む装備を取ってインナー姿となるとお互いの傷の手当てをしつかりとする事にした。

こうしている間もじくじくと傷が痛み、一部は青タンまで出来ている。回復薬グレートを染み込ませた布で手当てし、薬草をすりつぶしたものを当てながら布で固定し、包帯を巻く。

後は回復薬グレートを飲み干して自然治癒に任せるのみ。

だが治ったとしてどうする？

ジンオウガという強大な敵を前に自分達はただ押し続けていたではないか。

大丈夫だ、自分達は強くなっている、と思いつけていたが、あれを前にしてそれは脆くも崩れ去ったような感覚。

あれは間違いなく『無双の狩人』と呼ばれるに相応しい存在だった。ブラキディオスよりも高く聳える強者という名の壁。自分達はそれに挑もうとしていたのだ。

「……心が折れましたか、瑠璃？」

「……折れてないわよ。……うん、まだ折れてはいない」

「そうですか」

「あんたはどうなのよ、茉莉？」

「……そうですね。今まで戦ってきた中では純粹に強敵である、と認識はしていますよ。以前戦ったナーガやブラキディオスとはまた違う強者。噂通りだと実感しましたね」

闘蛇ナーガ。

森の中で遭遇した謎の存在の正体。武闘派を感じさせる立ち回りで二人を苦しめてきた蛇竜種のモンスター。今まで見た事のないような立ち回りをし、二本の腕と強靱で鞭のようにしなる尻尾で戦う奴は初見という事もあって二人は苦戦した。

碎竜ブラキディオス。

近年確認された新たな獣竜種のモンスターで、剛拳と例えられる拳による一撃と粘菌の爆発を駆使して戦ったモンスター。獣竜種ならではの軽快なフットワークで相手を翻弄し、一撃一撃の重みと爆発によって攻撃してきた奴もまた強敵だった。

だが十兵衛という仲間がいたからこそ何とか戦えたと言ってもいいかもしれない。ナーガの時は二人だったが、ブラキディオスの時は三人だった。この差は大きい。

そして今回の敵。

雷狼竜ジンオウガ。

無双の狩人と呼ばれ、一般人だけでなくハンターからも恐れられる相手。

その強さを嫌という程実感してしまった。強靱な四肢を使って疾走から前進、後転に瞬間的な距離詰め。パワーもスピードも申し分なく、時にフェイントを織り交ぜての攻撃。

四肢だけでなく角の一撃や盾に横に振られる尻尾の一撃も重い。

完全な肉体派というわけでもなく、集めた雷光虫の力を振るってくるものだから遠距離でも油断ならない。そうでなくとも疾走して一気に距離を詰めてくるのだから、距離をも選ばない。

あんな相手に勝てるのだろうか？



そう思ってしまうのも無理はなかった。

「勝てるビジョンが……浮かばない」

瑠璃の小さな口から洩れて出てきた呟き。それを茉莉は耳にしながら特にリアクションをする事もなく、ベッドの上で沈んでいく太陽が山の奥へと消えていくのを眺めていた。

弱音を吐く瑠璃というのは少しだけ珍しいが、弄るような気は浮かんでこない。自分だつて言葉にはしないが、あれだけの壁を前にしたのだ。弱気になるのは無理もないと思っている。

だが、自分達は勝たなければならぬ。そうしなければいつまでたつても強くなれない、上に行けないのだ。

「姉さん」

「……………なに?」

久しぶりに瑠璃の事を「姉さん」と呼びかける茉莉。それに瑠璃は顔を上げ、横目で茉莉を見つめる。彼女は瑠璃へと視線を向けることなく、何かを思い返すような目で夕日を眺めながら語りだす。

「私達の周りの人達って凄いですよね」

「…………?」

「もうすぐ私達も二十歳になるんですよ。まだまだ種族としては若手ですけど、人間で言えばようやく二十歳になるんです」

「それがどうしたつてのよ？」

「撫子姉さんやクロムさん達は二十歳になる前から、大きな敵と戦っているんですよ？」

「狂化竜に古龍……私達が直面している大きな敵と戦っているんです。……仲間との協力体制ですが、あの人達はその大きな敵を討伐している。凄いことですよ」

「六年前、ドンドルマを中心としたあの大陸では狂化竜という未知なる存在が猛威を振るっていた。シュヴァルツの因子と狂化の因子を植え付けられ、暴走していたモンスター達を相手に、瑠璃と茉莉の周りのハンター達は戦っていた。」

「クロム達だけでなく当時は新米ハンターだったライムとシアン、そして人間でありながら地道な努力を重ねて強くなっていった昴達もまた奴らと戦った。」

そして、勝利した。

一度や二度だけではない、何度も別の種類と戦い、勝利を収めている。

最後には古龍ラオシャンロン、キリン、テオ・テスカトル、そして伝説に語られたミラボレアスとも戦い、死力を尽くして勝利した。

一年にわたる時間の中で彼らは戦い続け、成長し、上り詰めていったのだ。十代という若手でありながら、いや若いからこそその急成長。彼らは才能だけでは片付かないだけ

の実力を磨き上げていったのだ。

それを二人は幼いからこそ参戦できず、その特訓光景を見続け、そして語り草となっているその物語を耳にして過ごしていった。

いつか彼らみたいなのハンターになりたいと夢見て、そして今もなおその夢と背中を追い続けている。

「昴さんなんてあのディアブロスを相手に一人で戦ったと言いますからね。……ぶつかつた壁を超えるためだけに。なかなか出来るようなものじゃないですよね」

「……そうね」

「それに比べれば私達はまだまだ小さい。……小さいですよ。確かに強敵ですが、狂化竜と比べれば小さいか、あるいは同格。……そう、私達はあの頃の昴さん達が相手にしていた敵と戦っているんです」

「つまり、あたし達が超えるべき壁は、あの頃のあの人達が戦っていたような敵だと言いたいわけ？」

「ふふ、そう考えれば、心が折れている場合じゃないと思えてきませんかねー？ あの人達が超えてきた壁を……十代の頃に済ませていた試練を私達も達成しなければ、と燃えてきませんか？」

そこでようやくちらりと茉莉がいたずらっぽく視線を向けてきた。どうやら茉莉な

りに瑠璃を再起させようと考えていたようだ。双子とはいえ、妹にこうまで心配されてしまえば姉としては俯いている暇はない、と思えるようになってくる。

うまいこと茉莉の思惑に乗せられているような気もするが、実際茉莉の言う通りなのだ。

二人の目標は母親のようなハンターになるという事だが、同時にクロム達のように強くなりたいたいと思っている。追うべき背中がいくつもあるのだから目標は多く、広く。それだけ尊敬できる人がいるという事でもあるが、それも仕方のないことだろう。

「考えましよう。そして頑張るしかありませんよ。私達の攻撃が全く手ごたえがなかった、というわけではないのですし。策を、攻撃を積み重ねて戦えば、いずれは勝利を手にする事が出来ますよ」

「……そうね。あたしたちはそうやって今は地道に積み重ねるしかないのよね」

ハンターの才能こそ花梨から引き継がれているが、姉である撫子程の才能はない。しかも撫子はハンターの才能だけでなく、父親の岩徹から引き継がれた鍛冶屋としての才能まで引き継いでいる。

その上で美人でプロポーションがいい……天は彼女に二物も三物も与えてしまったようだ。欠点らしい欠点が見当たらないが……それは昔ハンターをやっていた頃に、自身の才能におぼれた傲慢さから生まれた失敗が存在している。

一方自分達は竜魔族としての怪力を保有しているが、ハンターとしての才能はたぶんそれなりにはあると思う。瑠璃の素早い翼を駆使した高速移動術は花梨と撫子直伝のものだ。

そして茉莉のランスとガンランスの技術は桔梗から教えられた技術。

また二人の気の扱い方はクロムから教わっている。だから二人はそれ相応の技術を習得している。しかしその技術を行使する暇もなく、自分達は圧倒されることになった。

「ひとまず食事にして体を休めましょう。私達に今必要なのは休息です。体を休めて体力を回復させ、体勢を立て直すのです」

「そして夜、あるいは明日に決着をつけに行く、というわけね」

「ええ。では肉を焼いていきますね」

今すぐにリベンジに向かったとしても勝てる見込みはない。ならばここは休息をとり、時間をおいて戦いに向かった方がいいと判断した。ローブから肉焼き器と生肉と香辛料を用意し、瑠璃がスープとサラダを用意していく。

少し早い時間になるがこれが夕食だ。

活力を取り戻すためのメニューを組み、二人は夕食を作っていくのだった。



「ケツ、未寅のおっさんがこつちに来るとは、ここで何があるってんだア？　おい、おめえは知ってんのか？」

森の中に身を隠しながらじつとある村、それも酒場の方を眺めながら一人の女性は何か話しかけるように喋っている。しかし彼女以外に人影は誰もいない。あるのは女性の肩に止まっている一羽の鳥。

彼女はこの鳥という名の使い魔を通じて、その先に繋がっている誰かと話をしているのだ。

「ああ？　知らねえのかよ？　おめえ、最近までこの未寅のおっさんの近くにいたよな？　何も知らねえってのか？　……ケツ、使えねえクスが」

視界の先にはアプトルに騎乗した未寅龍仁……すなわち、ユクモ村にいた榊仁が供の戦アイルーの佐助と椿と一緒に、アプトルから降りて酒場へと入っていく。その様子を見つめる女性の目は細まっていて、まるで彼を睨み付けているかのようだ。

その視線に気づいたのか、扉を閉めようとした未寅が隙間から外を見回していたようだが、やがて中へと消えていった。

「で？　他に報告する事はねエのか？　……ああ？　なんだそれ、ハブかよ？」

……ああ、そう。ま、どうでもいいけど。じゃあまた何か報告する事があれば連絡よこせ。小さなことでもいい、おめえはアタシのために動く飼いだからなア。その辺、心に留めとけよ？」

一方的に罵倒し、命じ、そして烏を指先へと向かわせて再び女性はじつと酒場を見つめる。烏の視線も酒場へと向けられており、女性はどこからこれで監視させようかと考える。

ヤマト国において重要な人物である未寅龍仁が、どうしてこんな山奥の小さな村にやって来たのか。これを調べなければならぬ。もしかするととんでもないことがあそこで行われようとしているのかもしれないのだから。

そうして位置を捜し、烏の使い魔を飛ばそうとしたのだが、そこで――

「――あらん？　こんな所で何をしているのかしらん？　午卯ちゃん？」

「――ッ!？」

弾かれたように女性――午卯六花はその場から飛び退き、森の中を見渡した。しかし声はすれども姿が見えない。しかもあの声には嫌という程頭に残っている。それはいい意味ではなく、悪い意味で。

「その声……まさか、変態オカマ忍かア!？」

「いやん、ナニソレ。私をそんな風に呼ばないでちょうだいな。ピュアハートが傷つい

ちやうわん」

「うつせえ！ 事実だろうが、あゝあゝ！? それより、てめえがここにいて事はやっぱりあそこで何かあるんだろうなア？」

「そうねん。で・も、それを午卯ちやんに見られるわけにはいかないわねん。だから、ここから立ち去つてくれないかしらん？ いえ、もしくは——」

そこであの野太いオネエ口調の喋りが止まり、音もなく六花の背後にその巨体が降つてくる。嫌な空気を感じ取つて六花が距離を取りながら振り返つたが、それよりも速くその体が動いてまた側面へと回り込んでしまった。

「——眠つてもらうわよ？」

「ちいつ………！ こなくそ………てめえに眠らざれば何をされるか………！」

「あらん、心外だわ」

手刀が掠められ、逃げる六花をそのオネエ忍、霧夜狭間が音もなく追いかける。六花もすぐく嫌そうな表情で必死に逃げているようで、その速さは常人には出せないようなスピードだった。

まさに必死。

あの男に捕まればなにされるかわからないという恐怖から来る必死の逃走だった。

だが狭間も忍というだけあつて六花よりも速いスピードで追いかけて、容易く追いつい



てしまった。

「なにもしないわよ。ただ、こうして——眠ってもらうだけだから、ね？」

「……あ」

鳩尾に拳を入れて六花の意識を飛ばし、倒れ伏せる彼女の体を片手で受け止めてやり、そのままお姫様抱っこをした。鍛え上げられた彼の腕は問題なく彼女の体を抱え上げてしまい、一度彼の視線は背後の村へと向けられる。

彼の今の役割はあの交渉の場に近づく異物を排除する事。特に西丑側の者が接近してくるような事があれば何としても排除しなければならない。

決して知られるわけにはいかないのだ。

あそこで乾渚らと神倉月らが交渉しようとしているなんてことを知られば、まず間違ひなく妨害し、潰してくるだろうから。

「こちら狭間よん。午卯ちゃんがいたからこれ、少し遠くへと放ってくるわん。……ええ、じゃあねん」

札を使って同じように周辺を警備している忍へと連絡を取ると、狭間は六花を抱えたまま森を疾走していった。

一方酒場の方はというと中に入っていった未寅の視界には、雷河と焔が夕食をとっている光景だった。ふつと微笑を浮かべた未寅は片手を上げて「よう、久しぶりだのう」と

声をかけていく。

それに焰はぴくりと反応し、硬直してしまう。

そうして固まっている焰へと近づき、隣の机の席に座ってようやく彼女の視線は未寅へと向けられた。

「……………」

「ああ、そう硬くなるな。こうして久々の再会をしたのだ。しかも飯の席、不味くなるような話題は抜きにしようじゃないか。……だから佐助も椿も、それで頼むぞ？」

「……はいよ」

「了解だにゃ」

どうやら戦アイルー同士面識があるらしい。焰は未寅だけでなく戦アイルーの二匹にも視線を向けていなかった。佐助も同じように視線を向けていないようだが、椿はちらちらと焰を気にしているらしい。

そんな様子を見ていた雷河は肉を咀嚼し終え、ごくんと飲み込んで未寅へと話しかける。

「今日はよろしくお願ひしますね、えーと……未寅さんでよろしかったんで？」

「おうよ。話は少し耳にしておるぞ。焰が世話になっっているそうじゃないか、獅子童雷河とやら。どうだ？ 相変わらず無愛想か、こいつは？」

「ええ、まあ……結構長い付き合いになるんですが、まだツンツンしてますわ。いつデレてくれるのか、と待ちぼうけってね」

「かつかつか！ そうかそうか！」

「……っ」

お互い焔とは浅はかならぬ縁があるため、自然と本人を前にして彼女の話題となつてしまつた。雷河の対面に座っている焔がぎろりと彼を睨み付けたようだが、二人は気にする事もなく彼女について盛り上がり始める。

小さく舌打ちすると、ちらちらと自分を見てくる椿へと視線を向けてしまい、そうして視線が合つてしまつた。

「……えっと、元気にしてたかにや？」

「………それなりに」

「そ、そうかにや。……噂は聞いているにや。六年前の一件にも関わっていたつてにや」

「……あ、そう」

「先輩も、活躍したつて……」

「焔は別に活躍してないから。活躍したのは、他の奴ら。焔はただ支援しただけ」

何とか頑張つて話しかけていく椿に対し、焔は一貫してどこか素っ気ない。黙々と魚料理を食べ進めていき、淡々と過ごしているだけ。

そんな様子は相変わらずで、でもあの頃よりも素っ気ないため椿はまた困ったようにそわそわしてしまう。

「おいおい、後輩にも素っ気なくするな焰よ。それに椿はお前になついとつたじゃないか。そう冷たくせんでもええじゃろうに」

「……ふん。焰はもう部隊とは関係のない存在」

「だから慕うなど？ そりゃあ寂しいことじゃないか焰。部隊から離れたからといって縁は消えるようなもんじゃないわい。儂はあれからずっとお前さんを忘れた事など一度もないんじゃないぞ？ ……お前が儂を忘れんかったようにな」

「……っ、焰は………！」

「忘れておらんのだらう？ じゃからヤマト国には近づかず、儂が来ると聞いた時は動揺した。違うか？」

「………」

未寅の言葉に焰は少し顔を紅潮させて言葉に詰まってしまふ。そのままそっぽ向いて無言になってしまった。そんな彼女を見て彼はやれやれと首を振りながら苦笑する。

どうやらまだあの一件を引きずっているらしい。いや、引きずっていなければこのよ  
うな様子を見せる事はない。

どうして彼女が『破壊の焰』という異名で呼ばれているのか。

どうして彼女が未寅、ヤマト国から離れ、神倉獅鬼と獅子童雷河と共に行動する事になったのか。

全てはとある一件が原因となっている。ここに居る者は全員知っている事であり、それに関しては避けているのだが、気づけば少しずつ触れてしまっている。

妙な空気になってきたところで、その空気を讀んだのか偶然か、店員が未寅達が注文した物を運んできたので何とか落ち着く事になった。

それからは焔の事ではなく最近のお互いの事などを話しつつ夕食を進めることになる。その間、焔は無言で魚料理を食べ進め、どこか居心地の悪さを感じさせ続けていた。その様子を椿だけでなく、いつの間にか佐助もまた彼女の方を気にしているようだった。

○

日が完全に沈み、満月がゆっくりと自然を仄かな光で照らしだしていく頃。

体の痛みも戦いに支障がなくないくらいまで落ち着き、夕食も消化されて問題なく動けるようになった二人は改めて武器を用意してベースキャンプを後にする。

エリア4まで北上し、エリア5の森の中へと足を踏み入れてみたがどこにもジンオウ

ガの気配がない。あれから数時間も経過したのだ。奴も移動していったというのばかりきつている事だろう。

夕食を求めて移動した可能性が高いだろうが、果たしてどこに行ったのだろうか。

とりあえずエリア6へと移動してみると、誰もいない。小型モンスターのジャギイやブルファンゴ、ガーグアの気配も姿もなく、まるで森が静まり返っているかのような感覚に包まれた。

「……？」

不意に星が動いたような気がした。

いや、星じゃない、雷光虫だ。

この小川を挟んで乱立している森から雷光虫が少しずつ光を発して移動しているのだ。夜になっているという事もあって、その淡い光がまるで星のように見えただけだ。

「これは……もしかや」

一匹や数匹だけならいい。

数十匹も宙を舞って一方へと移動しているとなればその先に何かがあるとみていい。そしてその何かとは、この状況下では一つしかない。

流れゆく雷光虫という名の流星群の導きに従い、二人は隣のエリア7へと向かっていく。

そこは、一種の幻想的な空間だった。

水辺という事もあったのだろうか。水面みなもを飛び交う無数の雷光虫が作り出す光のイルミネーションと、その中心に佇む王者が発する雷光が混じりあった光は、この闇を照らす照明としては十分なものだった。

長く生える水草もその光に照らされ、風に揺られれば地味なものもそれが美しく感じられるものへと変化してしまう。

王者がそこに佇み、それに付き従う従者たちが織り成す光の絵筆。奴を中心として円を描くように飛び交い、時折吹き抜ける風が水草と水面を揺らし、東の空には山間をゆつくりと登っていく満月がある。

それはまさしく風情ある絵画のよう。

討つべき相手だというのに二人はその光景に目を奪われ、言葉を失っていた。

これを壊してしまう自分達がなぜか恥ずべき者だと思ってしまう程に、それはまさしく完成された芸術品のように思えた。

「……………」

だが、どうやら壊さなければ——いや、既に壊してしまっているらしい。

王者ジンオウガが二人に気づいたように肩越しに振り返ってきたのだ。青い瞳はじつと二人を見据えているようだが、そこには殺意は感じられない。だがジンオウガはゆつくりと二

人へと向き直っていき、今度は首を左右に傾けて肩慣らしをしている。

そうして舐めきつた態度を変えないジンオウガへと、瑠璃は一瞬で抜き放ったディオスソード改を振るって気刃を放った。既に刀身には彼女の気が纏われており、鋭い刃から放たれた刃はジンオウガの右肩を切り裂いた。

「……………グルル」

だが硬い甲殻は完全には斬れず、血を少量しか流さなかつた。

ジンオウガから闘気が放出され、それに反応して周囲を飛び回っていた雷光虫がジンオウガの背中へと集まり、電気を放出し合つて高め合い、ジンオウガの力を底上げしていく。

一瞬にして通常の状態だったジンオウガは臨戦状態となり、鋭利な甲殻が立てられ、毛は逆立ち、青白い光を甲殻へと浮かばせる。

外見的には完全に殺る気になっているが、ジンオウガはゆっくりと二人へと歩き出すだけだ。夕方の戦いで二人は格下の相手だと判断した結果だろう。ジンオウガは二人を恐るるに足らない小さな存在であると結論付けている。

それこそが、付け入る隙となる。

「はあっー」

地を蹴つて一瞬で距離を詰めた瑠璃がもう一度右肩を斬り、そのまま背後へと抜き去



る。それを視線で追ったジンオウガだったが、続いて接近してきた茉莉が前足を狙ってトキシックジャベリンを突き出してきたのに気付いた。

やはり刃は浅くしか入らないようで、気を込めてもう一度突き出してようやく甲殻を突き破って肉へと届く。が、ジンオウガは気にした風もなく、前足を振り上げて茉莉を叩き潰そうとして来た。

これをバックステップで回避したが、今度はジンオウガも攻撃を変化させてくる。

離れた距離を詰めるようにショルダータックルを仕掛けて茉莉を縫いとめ、そのまま顔を上げて頭突きを仕掛けたのだ。

「っ、ふっ！」

が、冷静に茉莉は頭突きを捌いて頬へとトキシックジャベリンを突き出し、そのまま側面へと移動して前足、わき腹と連続して突いていく。気を込めた一撃に次々と甲殻が傷ついていったが、大したダメージにはなっていない。

だが茉莉だけでなく背後では瑠璃が尻尾を狙ってディオスソード改を振るっている。そんな二人を振り払うように、またしてもジンオウガは体勢を低くすると後ろ足で地面を蹴って横回転し、纏めて吹き飛ばそうとしてきた。

「…………ツ!？」

瑠璃は一步下がる事でやり過ぎしたが、茉莉はジンオウガの側面にいる。咄嗟に盾を

構えて防御したが、盾を通じて襲い掛かる衝撃はやはりバカにならない。

そんな彼女の横へと着地し、茉莉が体勢を立て直して距離をとろうとした。だがジンオウガもまた彼女へと向き直りつつ横へと飛び退き、姿勢を低くした状態で彼女へと飛びかかりながら地面を滑り、電気を放出しながら体当たりを仕掛けた。

「ふうっ……いー」

息を吸いこみながら全身に気を巡らせて防御体勢。体へと襲い掛かる衝撃と電気を気力で堪えながら防御するが、体を走り抜ける電気の余波が反撃の手を封じてきた。トキシックジャベリンを落としそうになったが、慌てて掴み直して握りしめる。

反撃として突き上げようとしたところでこれだ。痛みは堪えられるが体の反応だけは完全に思い通りにはなってくれなかった。

茉莉へと意識を向けている隙に瑠璃が腰に提げていた物を地面に設置し、ピンを引き抜く。するとネットが静かに広がっていき落とし穴が設置完了した。

これが二人の策の一つ。

攻撃のチャンスが作れないならば無理やりにも作るだけ。生憎と爆弾という大きな火力はないが、火力を後押ししてくれる属性を二人の武器は持っているのだから除外した。

それに持ち歩いている暇なんてない。ジンオウガが暴れ回って荷車を破壊されたら

爆弾が無駄になるし、荷車を引いている時に襲撃されれば爆風を受けて死ぬかもしれないのだ。

そんな危険を冒したくはなかった。

「茉莉！」

瑠璃が手を上げて茉莉へと呼びかけると、彼女は小さく頷いて少しづつ瑠璃の方へとすり足で移動する。瑠璃もディオスソード改を構えなおし、ジンオウガへと向かつて疾走する。

茉莉が一気に後ろへと下がると、入れ替わるように瑠璃がジンオウガへと斬りかかる。それによつて意識が茉莉から瑠璃へと向けられ、茉莉はトキシックジャベリンをしまつて落とし穴へと向かつていった。

回復薬を口に含みつつ角笛を取り出して吹き鳴らす。

その音を聞いたジンオウガが瑠璃へと前足を使つて攻撃していた手を止め、ぎろりと茉莉を睨みつけた。そうしている間も瑠璃がジンオウガを斬り続けているが、ジンオウガの視線は茉莉へと向けられたまま。

茉莉は角笛を吹きつつ少しづつ後ろへと下がっていき、それに従つてジンオウガも少しづつ前進していく。

やがて角笛を吹き終えて盾を構えながら背中へと右手を伸ばし、トキシックジャベリ

ンの柄を握りしめた。瞬間、ジンオウガは体勢を低くしてぐつと茉莉へとステップをして距離を詰めたが、その体は勢いよく沈んでしまった。

「グルオツ!?!」

自分の体が突然沈んだことに驚いたジンオウガだが、そんな奴へと容赦する二人ではない。落とし穴から抜け出そうともがくジンオウガへと茉莉は正面からトキシックジャベリンを連続して突き出し、瑠璃はその背中へとデイオスソード改を振るって斬り続ける。

もちろんこの好機を利用して気刃斬りを行使してデイオスソード改の錬気を解放していく事も忘れない。

その素早い連撃によつてジンオウガには次々と粘菌が溜まりだし、どんどん爆発の連鎖を繰り返していく。

たったの数秒の拘束時間ではあるが、二人の攻撃とその属性の効果の發揮によつて、瞬間間にジンオウガの体力は削られていく。トキシックジャベリンから漏れ出る毒が、刃が突き入れられるたびに体内へと蓄積していき、またしてもジンオウガを毒状態へと貶める。

ジンオウガの体にも抗体がつけられていくが、それでも次々と突き入れられるトキシックジャベリンが甲殻を少しずつ破壊し、肉を露出させてその内部へと突き入れられ

るのだ。

もちろん爆発を起こす粘菌に対しても少しずつ抗体がつくられ、粘菌が溜まりにくくさせているが、連続攻撃の前にはそれも少ししか効果を発揮しない。

ただただ攻撃を受け続けるだけという現実には、ジンオウガの怒りもまた蓄積されていく。

夕方ではただ痛め続けられ、自分に対して怯えの色すら見せていた小さき存在がよもやこうして牙を剥いてくるとは。その事にジンオウガの活力が一気に取り戻され、少しずつ拘束力が弱まってくるのを体で感じ取った瞬間、力強く前足で地面を叩き、その力で支えて勢いよく地面から抜け出した。

が、着地した際に瑠璃がディオスソード改に溜まっている錬気と、己の気を融合させてその刀身に纏わせた。

「閃劍・角穿衝！」  
かくせんしょう

突きの構えを取った瑠璃が、茉莉が貫いた部分を狙ってそのディオスソード改を勢いよく突き出す。これは彼女にとっての今日一番の一撃。斬るのではなく脆くなっている部分を狙った一突きに賭けたのだ。

刃は狙い通りその脇腹へと吸い込まれ、強い衝撃となつてジンオウガを文字通り衝き穿つ。

「グオオオオオオッ!？」

その衝撃はジンオウガの体を走り抜け、悲鳴となって口から漏れ出た。背中に集まっていた雷光虫もそれに驚いて無残に拡散する。それに従って立っていた甲殻が畳まれ、逆立つ毛も落ち着きを取り戻す。

「よっしやあ! 一矢報いてやったわ!」

「見事な一撃です。では、私も続きましょうかね……!」

両手でトキシックジャベリンを構えた茉莉が力強く大地を踏みしめ、己の気を刃へと纏わせるだけでなくその先端に収束した気が二つ目の刃を形作らせていく。はっと気づいたジンオウガ茉莉を見下ろしても、もう遅い。

その構えから勢いよく胸へと突き出されたトキシックジャベリンは、何度も突かれた事で脆くなっており、その部分を強引に打ち破る一撃となつて突き上げられた。

びしっ、と音を立ててびび割れた甲殻は破壊され、その内部へとずぶずぶとトキシックジャベリンが貫通していき、二度目の衝撃となつて背中へと貫通した。

「ガッ、グウ……ッ!？」

しかし内臓にまでは届かない。強靱な肉が刃の侵入を防ぎきつたのだ。それに舌打ちし、だが更なるダメージと毒を注入してきただけでも良しとする。トキシックジャベリンを抜き、両前足を薙ぎ払いながら片手で構えなおして一歩下がる。

ジンオウガはそんな茉莉から視線を外し、尻尾へと斬りかかろうとした瑠璃へと勢いよく振り返りながら前足を叩き落す。いきなり標的にされた事で驚いた瑠璃だが、何とか横へと跳んで回避する。そんな彼女へと追いかけてながらも一撃叩き落とし、これも回避される。

そんなジンオウガを追いかけつつ背後から尻尾を突いた茉莉だが、そんな彼女へと勢いよく振り返りながら飛びかかっていき、その槍の柄を啜えつけた。

得物を啜えられたことでバランスを崩し、それを狙って彼女を持ち上げ、勢いよく顔を振って彼女をトキシックジャベリンごと放り投げる。

「茉莉?!、の……!」

放り投げられた茉莉は翼を羽ばたかせる事で何とか地面に叩きつけられる事はなかったが、突然の事に少し腕を痛めてしまったかもしれない。微細な痛みではあったが、トキシックジャベリンを振るう分には問題なさそうだ。

瑠璃がディオスソード改を振りかぶって斬りかかろうとしたが、迎え撃つようにシヨルダータツクルを仕掛けて先手を封殺する。ジンオウガもわかっているのだ。茉莉ならば防いでくるが、瑠璃ならば得物の問題でそれが出来ないという事に。

舌打ちして横へと逃げた瑠璃を追わず、ジンオウガは散ってしまった雷光虫を呼ぶように吼え始めた。それに従って雷光虫が再びジンオウガへと集いだし、背中が少しずつ

光りだして電気を帯び始める。

それを阻止するべく瑠璃が後ろ足を狙って斬りかかっていたが、ジンオウガはそれでも雷光虫を呼び続け、そして瑠璃を肩越しに振り返りながら歩き出した。それでも雷光虫は背中へと流星の如く集まりだし、電力を高め続けている。

「なっ……」

ジンオウガは瑠璃を睨みながら背後へと回り込むように歩き続けるだけ。だということにどういうわけか放たれる覇気が、瑠璃を硬直させるかのように向けられているのだ。

それでも何とか体を動かして背後をとられないように振り返り、デイオスソード改を構えるが、ジンオウガは悠然と歩き続ける。瑠璃とその後ろにいる茉莉を睨み付け、そしてぐっと構えると瑠璃へと向かってまたシオルダータックルを仕掛ける。

バックステップでやり過ぎしたがそれによって再び距離が開いてしまう。それを見越してまたジンオウガが空に向かって吼え、更に雷光虫を集めていく。既に力は二段階上がっている状態か。この呼び寄せによって電力が高まれば、またしてもあの本気状態となってしまう。それを何としても阻止したい茉莉は、ポーチから閃光玉を取り出して投擲した。

とたんに巻き起こる強い光。夜の闇を一瞬で白へと染め上げる光だったが、どうい



わけかジンオウガの悲鳴が聞こえてこない。どういふことかと光が消えたところでジンオウガを見てみると、なんと奴は目を閉じていたのだ。

「まさか……学習したと?」

一度受けた閃光玉を覚え、放り投げられた瞬間に目を閉じたというのか?

そんな、馬鹿な……!?!?

驚きに固まる二人をよそにジンオウガは勝利を確信したかのような咆哮を上げる。刹那、周囲へと電撃が放出され、またしても奴はその姿を鋭利に変化させた。

それだけでなく力強く前足を叩きつけながら覇気を放出すると、それに呼応して背中から幾多の電撃が周囲へと放出され、小さな雷となつて無差別に降り注ぎだす。

「く、またしても厄介なこと……」

「何としてでも雷光虫を散らさないと!」

降り注ぐ落雷を避け、瑠璃がディオスソード改を構えて斬りかかってくる。周囲へと放出される落雷だが意外と近くには落ちていない。密着すれば斬る事は可能だ。それを読んだ瑠璃が一撃、二撃と斬りかかったがジンオウガは動じることはない。

むしろ歓迎するかのようには、まだ離れている茉莉へと落とすように電気を調節して落雷を起こし、十分に電撃が高まったのを見越した瞬間、勢いよくそれを放出した。

「——ッ!?!」

密着していたが故にそれから逃れられない。瑠璃は放出される電撃の波に吞まれて吹き飛ばされてしまった。体中を走り抜けるその電撃は彼女の体を蝕み、痙攣させる。

しばらく地面に縫い付けられる瑠璃に代わり、茉莉が自分へと意識を向けるためにジンオウガへと接近する。瑠璃へと振り返ろうとしたジンオウガだったが、向けられる敵意とトキシックジャベリンの切っ先を無視することなく、彼女へと向かつて振り返りながら尻尾を叩き落した。それを盾で受け流しつつ更に接近し、後ろ足へとトキシックジャベリンを突き出す。

続けてあの肉を露出している脇腹へと突き入れたところでジンオウガが振り返り、前足を叩き落してきた。それをやり過ぎて今度は胸を狙って突き上げる。

硬い部分ではなく脆くなっている部分を的確に狙う。これが中盤からの茉莉のやり方だ。

連続して叩き落される前足を掻い潜り、最後は勢いよく胸を突き上げる。その衝撃を受けたジンオウガは小さく唸り、刹那――

――エリアが凄まじい怒気に包まれた。

ぞくり、と本能から来る冷たい震えを感じ取った茉莉は、はっとして顔を上げる。見れば、ジンオウガを青白い光が包み込んでいた。

そのまま奴は距離を取るように背後へと飛び退き、バチバチと背中に溜まっている電撃を瞬時に高め、それを自身に纏わせた。その余波が青白い光となってジンオウガを包み込んでいるのだ。

まるでそれは淡い光の鎧——雷撃の王者の鎧だ。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

空気が恐怖に震えるほどの怒気の咆哮。それに呼応するように電撃が音を立てて空を裂くように放出される。

あれは、何だ？

いや、そもそも先ほどまでのものが本気だったと誰が言った？

十兵衛は言っていたではないか。

『これが、ジンオウガが更に殺る気になっている状態ッス』

殺る気になっている状態であり、本気ではない。

そして十兵衛はこうも言っていた。

『とにかくこの状態になったら、雷光虫を散らせる事だけを考えるッス。でなければ体力が削られていった後がやばいことになるッスから』

『どうなるの?』

『……手が付けられなくなるッス。奴の、本気が来るッスよ』

つまりあれこそが――

「グルルル……！」

――無双の狩人の本気である。

## 4 6 話

冷たい空気が周囲を覆いつくし、放出される覇気が瑠璃と茉莉の心を折っていく。

纏われている青白い光は相変わらず鎧のようにジンオウガを包み込み、周囲へと小さな電撃が余波として放出されている。

明らかに普通じゃない。

飛竜らには怒り状態というものが存在しており、この状態へと移行すると自身の力を解放する事によってパワーとスピードが上昇し、一気に敵を抹殺するべく攻撃的な状態になる。

これはモンスターならば誰もが持つものであり、生き抜くために、あるいは敵を圧倒して薙ぎ倒すために備えているものだ。

その状態へと移行したとわかるのは口から漏れ出るブレスの残骸だったり、移行した際に怒りの咆哮を上げたりとした事で判別可能だ。

だが今までジンオウガはそれがなかった。

雷光虫が集まって力を溜め、それを最大までチャージして解放した姿こそがその状態

に近しいものだと思っていた。そう思わせるだけの外見をしていたし、パワーもスピードも上昇していたのだからそう思い込めた。

それは過ちだった。

今こそジンオウガは怒り状態になったのだ。それも普通じゃない状態に移行するとうとうんでもないリミッター解除。

「これが……本気？」

「なんと、こことでしよう」

呆けるしか出来ない。瑠璃も体の痺れから何とか解放され、ジンオウガのその豹変した姿を見て愕然としていた。ディオスソード改を握り直し、冷や汗を流しながら瑠璃はジンオウガを見据える。

知らず体が震えているがそれを自覚してしまっただけの頭はある。

だが、それまでだ。

動けない。

発せられる覇気が尋常じゃない。自分以外の者を圧倒するだけの野生の強者の気配。恐らく古龍とはまた違った覇気なのだろう。あれこそがモンスターの間でも本能から恐怖を感じて尻尾を巻いて逃げだしてしまっただけの気力なのだ。

一步前進したジンオウガが低く唸るとゆっくりと前のめりに倒れながら一気に距離

を詰めてくる。攻撃が来る、と感じ、生き残るために何とか気力を振り絞って二人は動いた。

何がきても防御ないし回避できるようにしたが、ジンオウガはゆっくりと胸を逸らし、ていくだけで何もしない……かと思った瞬間、今度は素早く距離を詰めて体を捻つてきた。

「——ッ!?!」

あの横回転が来る!　と思った時には既に奴は跳んでいた。

直撃こそは避けたが、眼前を通り過ぎていく尻尾の風圧と、全身を纏っている電撃の余波が襲い掛かって茉莉は盾を構えながら歯を食いしばった。すぐ近くを着地するジンオウガは四肢に力を込めて体を支え、すぐに茉莉に背を向けてバック転をした。

振り下ろされる尻尾から逃れるように横へと跳んだが、それを察知したのか素早く回転して向き直り、ショルダータックルを仕掛ける。

その素早い連撃。まさに殺しにかかっているとでもいいだけの攻撃だ。それを食い止めるべく瑠璃は心の内からくる恐怖を振り払い、それを吐き出すように吼えながらジンオウガへと接近した。

茉莉も一旦距離を取るべく背後へと跳び、それでも追いかけてくるジンオウガへと口から火炎を放出して牽制した。火炎はジンオウガが纏う電撃に触れて小さな爆発を起

こし、粒子が集まって作られた高温の炎に顔を焼かれてジンオウガの足が止まる。

それを好機としてディオスソード改で前足を斬り、続けて横つ腹を薙ぎ払って離脱。

「グルッ！」

辻斬りまがいの事をした瑠璃へと振り返りながら前足を振り上げ、彼女へと飛びかかりながら勢いよく叩き落とす。殺気を感じ取った事で前へと飛びながら前転して逃げ、受け身を取って起き上る頃にはジンオウガは勢いよく彼女へと飛びかかっていた。

それを地面を蹴って横へと跳ぶ事で逃げたが、ジンオウガはそのまま着地すると勢いを殺すように地面を滑りながら方向転換し、ブレーキがかかった瞬間力強く地を蹴って跳躍した。

空中でぐるんと体を回転させながら全身を纏う電撃を一気に活性化させると、その勢いのまま瑠璃へと向かって流星の如く落下する。

「ん、な……ッ!?!」

その攻撃に驚愕の言葉が出るが、それでも体を必死に動かしてまたその場から逃げる。刹那、背後に凄まじい破裂音と衝撃が襲い掛かり、瑠璃の体は強制的に宙を飛ばされる。

逃げるのが遅ければ、あれに押しつぶされながら高威力の電撃を受けることになっていただろう。意識が飛ぶだけでは済まされない一撃だ。



少しだけでもがいていたジンオウガだがすぐに起き上り、軽く首を回して二人へと振り返る。また睨み付けるだけかと思つたが、地を蹴つて急速に距離を一步詰め、数歩前進しながら二人の行動を観察しだす。

逃げるのか？

それとも戦うのか？

それを視線だけで問うているかのようだ。

しかし——どちらにせよ殺す、とでも言うかのようにまた急速に距離を詰めてシヨルダータツクルを仕掛けてきた。標的は瑠璃。彼女はまた後ろへと逃げたが、それを追わせるようにジンオウガの背中から二つの雷弾が放出された。

弧を描いて側面から迫ってくる雷光虫の集団を避け、ディオスソード改を構えなおすものの、体を時折走り抜ける電気が彼女の行動を阻害していた。

先ほどの直撃と、余波を受け続けた事で体に電気が溜まっているらしい。それに気づいた茉莉がちらりと瑠璃へと視線を向け、「瑠璃！ 一時撤退を考慮に！」と叫んでジンオウガへと一步前進した。

それを見てジンオウガもまた一步前進しながら身構える。またフェイントが来るのか、と警戒していると、それは外れる。今度はジンオウガもすぐに攻撃へと移つてきた。勢いよく振り下ろされる角。これを避けつつカウンターの一撃を放つが、ジンオウガ

は気にも留めずに下がった頭を勢いよく振り上げて茉莉の盾を跳ね上げようとする。

下から振り上げられた角に左腕が持つていかれそうになったが、何とか盾に角が直撃せず掠めるだけに留まった。しかもジンオウガは頭を持ち上げるだけでなく上半身も持ち上げ、後ろ足で体を支えながら茉莉へと向き直りつつ一気に押しつぶしにかかってくる。

「くう……電撃が……！」

衝撃こそまだ耐えられるが放出される電撃が盾の向こうから茉莉へと届いてくる。リオハートシリーズは雷耐性が少し弱いため、電気が体に伝わりやすくなっている。だが茉莉はこれを歯をくいしばって耐えるのだ。

耐える事はポケケ村にいる頃から桔梗に教わっている。防御面で他の武器より優れているランスとガンランスは耐える事も覚えなければならぬ。実際桔梗も両手に盾を構え、自己強化を施し、己の内面からくる意志の力をコントロールして古龍のプレスすら耐えきってみせた事があるのだ。

そんな彼女に防御術を教わっている茉莉もまた防御術は習得している。彼女を師として仰ぐならば、これくらいは攻撃どうということはない。

ちらりと背後を振り返れば瑠璃がエリア6へと離脱しようとしているところだった。ならば自分も離脱する事にしよう。

ゆつくりと翼を広げ、ジンオウガが前足を振り上げた瞬間を見計らって地を蹴りながら背後へと跳び、宙に舞い上がる。そのまま背を向けて飛行してエリア6へと逃げるが、ジンオウガは小さく唸りながら彼女を追うように疾走を開始した。

エリア6へと逃げてきた二人はそのまま飛行して森の中へと飛び込み、木々の間をすり抜けて空へと舞い上がり、崖からエリア9へと侵入した。

普通のハンターには出来ない芸当。翼を持つ二人だからこそこのような逃げ方が出来る。森の中でジンオウガが吼えながら追いかけてきていたようだが、崖を上がつてくる事は出来ず逃げ切る事が出来た。

着地して大きく息を吐き、二人はヘルムを取って浮き出てきた汗を拭っていく。まだ電気が残っていたようで髪が逆立ったり手につけてきたりしたが、地面に手を付いて電気を放出していく事にする。

続けて髪を結んでいたリボンも取り、一度髪を流した。鏡で確認してみるとかなり荒れてしまっているが仕方のないことだろう。体に溜まっている電気がなくなっていたところで手櫛で少し髪を整え、ヘルムを被る。

リボンは懐にしまい、ポーチから回復薬グレートを取り出して一気飲み。

そうして先ほどの事を思い返してみるだけの落ち着きが戻ってきた。恐怖に震える心も落ち着き、冷静にジンオウガの事を思いだせるようになってくる。

「……どう切り崩しましたようかね？」

「……閃光玉は覚えられた、爆弾はなし、落とし穴は調査し直すとして……麻痺投げナイフぐらいしかないわよ？」

「それでも十分でしょう。あとはそれを成立させるまでの攻防。正直、あの電撃を前に私は防御し続けられる自信がないですよ？」

衝撃を殺して耐えきる、という事は出来ても、体を侵してくる電撃の余波まで完全には防御できない。リオハートシリーズの耐性の低さと、生き物としての体の特徴が彼女の防御を脆くさせるのだ。

となれば逃げればいいだけだろうが、ランスというのはそう易々と回避する事が出来る武器ではない。回避ランサーというものは存在するが、彼らは重量級の武器を手にしながらも、鍛え上げられた体を駆使して回避するという達人であり、茉莉はそこまでの領域には登っていない。

怪力という特徴を保有しているが、それはしつかりと防御するという事において高められている。なにせ師匠が防御ランサーなのだから、自然と茉莉もそういう風に成長してきたのだ。

そして回避術は瑠璃が磨き上げている部類だ。武器の特徴上回避を重きに置いている。

もちろん対人戦の技術として受け流しなどを多少は覚えているが、得物の特徴上、上手くいくのはそうそうない。

瑠璃がトラップツールとネットを取り出して落とし穴の調査をしつつ、ジンオウガの本気を思い返してみる。

パワー、スピードは更に上昇、放出される電撃の力も尋常ではない。打撃の攻撃に乗せられて周囲へと余波を撒き散らし、防御の上からでも敵へと影響を及ぼしてくるだけの威力がある。

となれば完全に動きを読み切って回避しなければならぬが、逃げ続けていては高速の連撃の波に呑みこまれるだけだろう。つまりどこかで確実に反撃し、自分達のペースを取り戻さなければならぬ。

あれを崩す方法として浮かぶのはやはり雷光虫を散らすというものだろうか。本気になる前の状態も、雷光虫が散った事で通常状態へと戻ってしまった。ならば雷光虫を散らせるだけの攻撃をジンオウガへと与えなければならぬ。

「……………これでも使いましたよかね」

ポーチから取り出したのは強走薬グレートと力の種。これを体にドーピングする事で更に力を底上げする事を考える。既に鬼人薬グレートと硬化薬グレートという薬によるドーピングが効いていてあの状況だ。

これらを飲んだとしてどうにかなるのか、と言いたいかもしれないだろうが、少なくとも強走薬グレートは大きな変化をもたらすだろう。これはスタミナの持続力が高まる薬であり、数十分走り続けても問題なくなるだけの持久力が生まれる。

また防御した際の堪える力もつくため、ランサーにとつては世話になる事が多い薬だ。

それらを懐に入れると、瑠璃も右手を開いてじつと見下ろしている。

(斬りこむだけじゃ通用しない。太刀使いとしての攻撃手段は接近戦だけじゃない)

頭に浮かぶのは太刀使いじゃないのに、太刀を模した木刀を手にして佇んでいるクロムの姿だった。瑠璃の鍛錬に付きあつた彼は、太刀使いとして活動している昴とセルシウスの戦いかたを思い返しながら瑠璃へとレクチャーしていたのだ。

『セルシイは場所を選ばないで戦う奴でな……つていうか飛竜と戦う際は近接よりも遠距離が多かつたな』

『そうなの?』

『ああ。あいつの十八番は閃剣。つまり、気刃を放つて一刀両断して終わらせるって事さ。これがあいつの基本であり、同時に必殺技つてやつさ。……そう、こうだ!』

木刀に気を纏わせたクロムは瞬時に木刀を振りおろし、離れた所にある岩を両断してしまう。木刀では斬れない岩をこうして斬ってしまうクロムは見慣れたものだが、やは

り普通じゃないと思つてしまふ。

『昴は普通の太刀使いのように近接で戦う奴だが、一時期は硬い敵を相手に手こずつていたつて話だ。当然だな、太刀は硬い敵とは相性が悪い。だがあいつは神倉獅鬼さんとかの師により、そんな相手を斬る手段を得る。……まあこれも閃剣なわけだが、あいつは斬るだけでなく突く事も行使した。貫通力で強引に突き破るつてやつさ』

『……突き破る、ね。でもさ、クロムさん』

『ん？ 何だ？』

『今持つている武器でも硬く感じられる敵で、素早く動ける奴がいたらどうするの？ 斬りに行つても逃げられて、閃剣を放つても避けられる。そういう奴、いるんでしょ？』

上の領域には』

『まあな。上位以上ともなればそういう個体も現れるだろうさ。……そうだな、いつしかそういう強敵が現れた際に少しでも手助けになれるように教えといてやろう』

にとつ笑つたクロムが肩に木刀を置きながら、瑠璃の頭をわしわしと撫でてくる。硬い手に髪がくしゃくしゃになるくらい豪快に撫でてくるやり方は彼らしい。あまり力を入れていないというちよつとした優しきを含んだ撫で方だが、「ちよ、髪が乱れますつて、やめ……」と頭を振つて逃げようとしている。

そしてクロムはとんとん、と木刀で肩を叩きながら少し考えるように空を見上げ、

『そういう時はな——』

『……くっ』

『——何も考えるな』

『……はい?』

思いもよらない答えに瑠璃は呆けた声を漏らしてクロムを見上げてしまう。だがクロムはそんな瑠璃に変わらさず気さくな笑みを浮かべて木刀を地面に立て、自分が斬った岩へと首をしゃくった。

『今、俺はこれで斬ったよな? 普通は出来ないとか、そうお前らは考えるだろうが、それ自体がナンセンス。斬れる斬れない、なんてことは一切考えない。あるいは、斬れるという事だけを考える。あとは今まで積み重ねてきた事をそのままやるだけ。体は勝手に気を纏わせ、そして気刃を放っている。無心に、あるいは一本筋の意図に従い、それは放たれ、あれを斬る。……それだけの事さ』

『……無心……』

『そう。強敵と出会った場合、こう考えてしまうだろう? 勝てない、強い、殺される、怖い……。色々な感情が頭と心を覆いつくしてしまうだろう。……そうなった場合、持てる力なんて発揮する事は出来やしない。だから、一度無心になるのさ。余計な考えを一切合財排除して頭を綺麗にしてしまう。……すると、剣に迷いがなくなる。そうなつて



しまえば結構楽になれるぜ。見えていかなかったものが見えたり、斬れなかったものが斬れてしまったりするのさ』

『……本当に?』

『ああ。今はわからなくてもいい。でも、もしそういう状況になったら、暑苦しい兄ちゃんがこんなこと言っていたな、とでも思い返してくれや。焦るこたあねえぜ瑠璃? 俺達の時間はたっぷりある。ゆつくりでいい、一步一步前進していけ。……焦らず騒がず、俺の背中を追ってこい』

そうして笑うクロムがどこか眩しく見えた午後だった。

それを思い返した瑠璃はぐつと拳を握りしめて目を閉じる。色々考えすぎてごちゃごちゃになってしまふのが瑠璃の欠点だ。感情豊かといつてしまえばそれまでかもしれないが、それは彼女の長所であり、こういう短所を孕んでいるといつてもいい。

熱くなりやすい点は瞬発力の面からいえば有利だが、熱くなり過ぎれば視野狭窄に陥って攻撃を貰いやすいという欠点もある。

それを自覚している瑠璃は一度頭の中をリセットするべく、もう一度回復薬グレートを飲み干し、目を閉じたまま無心になっていく。

――  
夜風に当てられながら静かに頭の中を空っぽにしていくことにする。

難しいことは考えない。いや、何も考えない。その域へと達する事は難しいかもしれないが、それでもごちやごちやとした感情は全て封じ込めてやる。

明鏡止水の境地。

そこまではいけなくとも、ほぼ無心になる事は可能だ。しばらくその状態を持続させ、頭の中がほとんど空っぽになったところで目を開ける。

どこまで通用するかわからないが、今の自分達に持てる力を振り絞るしか出来ない。そんな瑠璃の変化に気づいた茉莉が静かに声をかけてくる。

「なにか、道が見えました？」

「……ええ」

「では瑠璃は好きに動いてください。私が、サポートします」

「わかったわ。じゃあ、これも任せていい？」

そう言って先ほど調査した落とし穴を茉莉へと手渡した。それを受け取って腰に提げ、それだけでなくポーチから麻痺投げナイフも取り出して懐にしまう。

回復もしたし、準備もした。

後は、ただぶつかるのみ。

二人は洞窟へと南下してみると、エリア6の入口の方にジンオウガの姿を発見した。あの青白い光を纏ってはいないようだが、それでも雷光虫の影響で奴の外見は鋭利さを

保ち続けていた。

「……………」

もはや喰るようなことはせず、無言でじっと二人を見つめている。

雷光虫は相変わらずジンオウガの背中を中心として飛び回り、発電してジンオウガへと力を与えている。あれを散らさなければ、またジンオウガが怒り状態となつて、自分達にとつては危険な姿となるだろう。雷光虫にとつては心強い味方だろうが。

「では、支援しますので瑠璃は自由にどうぞー」

「……………」

茉莉の言葉に瑠璃は淡々と返事をしてデイオスソード改を抜き、そのまま言葉も発さずにそれを振り抜く。放たれるのは瑠璃の気を刃と化したもの。ジンオウガへと音もなく向かつていき、奴の肩を切り裂いていく。

それでは止まらずもう一撃振り抜き、今度は突き出して貫通させるが、ジンオウガはそれを躲しつつ瑠璃へと向かつて走り出す。それを見つめて瑠璃はただその場に佇み続け、十分にジンオウガが接近したところで地を蹴つて疾走した。

振りかぶられる前足を紙一重で躲し、肩から脇腹へとデイオスソード改で薙ぎ払って背後へと回る。それにより傷口に溜まっている粘菌が力を発揮して赤く染まりだし、振り返りながらも一撃気刃を放つ。

傷口と交差するように刻まれた傷によってジンオウガの青い甲殻が割れ、肉が斬られて血が噴き出していく。

驚く程うまくいつている。

体が軽い。

(……………)

頭の中はそれでも真つ白だ。瑠璃は今、さつきまでとは違う自分を感じていてもなお感情は揺らがせないでいた。思考をカットし、それに従って恐怖心もカットする。

とはいえそれは完全には消え去る事は出来ない。生物が元来持つ本能から来る恐怖心は、心を落ち着かせて何も考えないでいるだけで消せるようなものじゃない。

「……………ふっ」

デイトスソード改を下段に構えなおし、振り返りだすジンオウガへと斬り上げて尻尾を切断しようとした。しかしジンオウガは軽く前へとステップして回避しつつ、茉莉へと接近していった。

彼女へと前足を叩き落していくが、それに慣れているため問題なく背後に下がりつつ、懐から取り出した麻痺投げナイフを指に挟んで気を流し込んで振り抜いた。薄い黄色の気刃がジンオウガへと突き刺さっていくが、それに気も留めずジンオウガは横へと跳び、茉莉の側面へと回り込んでからシヨルダータックルを仕掛けた。

が、それを防ぐように瑠璃が先ほど以上の鋭い気を纏わせてディオスソード改を振り下ろす。すると大地を割りながら放たれた閃剣が右肩から背中へと走り抜け、勢いよく血飛沫を吹きあげた。

その痛みにジンオウガの動きが止まり、呻きながら視線を瑠璃へと向けてくる。

「……はっー！」

意識が逸れた事で茉莉は更にジンオウガから距離を取りながら、右手を振るって連続して気刃を放っていく。それが命中する度に少しずつ麻痺毒が侵入していくだろうが、まだまだ奴を麻痺状態へと陥らせるには足りない。

それに怯みはしたようだが雷光虫が拡散する程ではなかったらしい。

むしろ逆。

痛みによって再びジンオウガが怒気を発し、呼応するように雷光虫もその力を高めてしまった。青白い光がジンオウガの全身を包み込み、咆哮を上げれば洞窟中にそれが反響して響き渡る。

ジンオウガの怒り状態にして、奴の本気が再びそこに蘇る。

「オオオオオオオオオオッ!!」

再度吼えたと瑠璃へと勢いよく跳躍して反転。電撃を瞬間解放して青白い流星となり、彼女へと急速落下。高電圧と自分の重量で押し潰しにかかったが、瑠璃は無言で姿

勢を低くし、地を蹴って一瞬にしてジンオウガの背後へと移動した。

背後で勢いよく弾ける電撃の音を感じながら、地面を滑ってブレーキをかけつつ反転。起き上つてくるジンオウガの背後からもう一撃閃剣を当て、振り返ってくる奴の頬へと向かつてもう一撃放つて逃げる。

顔を逸らしてそれは躲したジンオウガだが、背後の岩肌が削られて小石が降り注いだ。とはいえそれは小石であり奴にとつてはどうかという事はなく、ほとんどは放出される電撃に弾かれて粉々になってしまった。

離れていく瑠璃を追撃するべく雷光虫の雷弾を四つ左右へと放出し、挟み撃ちさせるが彼女は宙へと舞い上がり、聳え立つ石柱を蹴って反転し、頭上から閃剣を放つ。

それを躲すべく前へと跳び、彼女の下から雷撃を放出。周囲だけでなく頭上にも放たれる雷撃は縦横無尽に走り抜け、彼女の逃げ場を防ぎながら直撃した。

「——ッ、あ、ああッ、くう……ッ!？」

逃げ切れないなら防御するしかない、と瑠璃は全身に気を纏わせたが、それでもその雷撃は彼女の体を捉えて離さない。そんな彼女を救出すべく茉莉はこれしかない、と閃光玉を放り投げた。ジンオウガの視界の端で弾けたその閃光は、今度は奴の視界を奪う事に成功した。

どうやら瑠璃を叩き落す事に意識をとられ、閃光玉に気づかなかつたらしい。僥倖

だった。

雷撃がやみ、それから解放された瑠璃は荒い息をつきながら何とかバランスをとって落下寸前で宙に留まる。しかしそれでも数メートルは落下してしまい、ゆっくりと地面に着地して手を付いた。

深呼吸して落ち着こうとする彼女の視界には、光によって目を潰されたジンオウガが、がむしやらに暴れている。あらぬ方へと前足を叩き落とし、尻尾を振るって薙ぎ払おうとしているようだが、その先には瑠璃も茉莉もない。

茉莉はこれを好機として腰に提げている落とし穴を設置し始め、瑠璃も体に残っている電気を地面に流しながら回復薬グレートを飲み干していく。

これで何本の回復薬グレートを消費しただろうか。それがわからなくなるくらい飲んでいる気がする。

……いや、そういう事は考えるな。

瑠璃は再び冷静さを取り戻しつつ、頭の中をクリアにしていく。電気も流し終えたところでディオスソード改を構えなおし、静かに闘気を高めていって体とディオスソード改へと纏わせて臨戦態勢へ。

茉莉も落とし穴を設置し終わるとまた麻痺投げナイフを振って気刃を放って麻痺毒を打ち込んでいく。それに続くようにしてジンオウガが暴れる中、近づかずに遠距離か

ら気刃を連続して放ってダメージを与えていく瑠璃。

あの状態で近づけば何が起こるかわからないのでここは安全策だ。視界が取り戻すまでの間はこうして傷を刻んでいき、少しずつ甲殻を脆くさせていく。

「グルオオオオ!!」

顔を振って視界を取り戻したジンオウガは、静かに茉莉の方へと移動していく瑠璃を視認し、彼女を追うように疾走を開始。口を開けて彼女へと喰らいつこうとしたが彼女は加速して逃げ切り、捕えそこなったところでブレーキをかけつつ転進、背後から飛びかかっていったのだが、それこそ二人の思惑通りだった。

着地から滑っていくジンオウガの体は、またしても地面に吸い込まれてしまった。

「グオオオアアアッ!?!」

落とし穴のネットに絡みつかれ、もがいてもなかなか抜け出せない状態となつてしまったジンオウガへと瑠璃が斬りかかり、暴れる前足から胸へと斬り払い、気刃斬りで練気を溜めながら攻撃していく。

茉莉も一旦麻痺投げナイフをしまつてトキシックジャベリンを手にして攻撃を開始する。麻痺状態に陥れるよりダメージを重ねた方がいいと考えたのだ。

こうしてみる限り麻痺毒は蓄積されているようだが、まだ先は長そうだと見越した。ならばダメージが少なく麻痺毒が蓄積されにくいならば、今ここでダメージを重ねつつ



毒を注入した方が先のためにもなると判断。

瑠璃とは反対側を周ってトキシックジャベリンを突き入れていく。それもただ突くのではなく己の気を纏わせ、両手でトキシックジャベリンを握りしめて回転させて連続して斬りつける、という方法も取っていた。

トキシックジャベリンは角槍ディアブロスのような重槍ではなく、対人戦で使うような槍に近い形状をしている。そのためこうして突くだけでなく薙ぎ、回転といった槍術も行使できるのだ。

次々と刃がジンオウガの体を傷つけ、毒と粘菌を注入する事で外側だけでなく内側からも体力を削る。特に瑠璃の高速の連撃により、粘菌はジンオウガの体内で急速に活性化。

緑色に染まっていた物は一気に赤へと染まり、一度爆発すれば連鎖反応を起こして次々と爆発を起こしていた。それから息をつく間もなくまた粘菌が繁殖して緑色に染まり、黄色、赤と変色していく。

だがそれでも雷光虫は拡散しない。爆発に驚いているものは逃げていくようだが、しかしジンオウガの気迫が持続し、奴にまだまだ力を注ぎ続けているのだ。

そしてようやくネットの力が弱まったところで、勢いよくジンオウガが落とし穴から飛び出してくる。それを見越した二人は一度武器を引いて今以上の気を注いだ。それ

に従つて二人の得物は鋭く伸びる氣の刃を纏わせ、二人の意志に呼応して淡く光を放ち出す。

鈍い音を立てて着地したジンオウガへとほぼ同時に、脆くなっている脇腹と前足を狙つて振るわれる太刀と槍。

「——はあっ！」

「——せえい！」

無心に振り下ろされた単純な一撃。しかしそれ故に研ぎ澄まされた刃とそれから放たれる氣刃が、背中から大きく一文字に刻まれた傷がそこに生まれることになる。

また体を支える前足から胸へと突き抜ける槍の一撃。貫く事を念頭に置いた一撃は甲殻を破壊し、前足を貫通するだけでなく毒をも含んで刺し貫かれている。

前足と体から噴き出す血は地面に流れ落ち、体と共に赤に染め上げていき、そして……ジンオウガの苦痛を感じ取つて雷光虫が先ほど以上に霧散した。

だがそれでも完全に散らす事は出来なかつたようだ。青白い光は消え、殺る氣になつている状態へと後退してしまつただけに過ぎない。

でもそれでも構わない。二人の攻撃は通用しているのだ。

押され氣味だったのが逆転し始めている。それを実感しつつ茉莉が距離をとつたところでジンオウガが小さく唸りながら走り出す。向かう先はエリア9へと繋がる出入

口だ。

逃げるのか？

そう思つて足取りを見たが弱まっている様子はまだない。一時撤退というところか。何にせよ小休憩が取れる。瑠璃へと振り返ると、彼女もディオスソード改を軽く振り、砥石を取り出して刀身を研ぎ始めた。茉莉もトキシックジャベリンに砥石を使い、切れ味を戻していく事にする。

そうしながらジンオウガについて思い返してみろ。

奴の体はかなり傷つきだしている。二度目の落とし穴によつてかなりダメージは与えられたはずだ。雷光虫を完全に拡散させる事は出来なかつたが、それでも体力は削られているはずだし、討伐も近くなつてはいるはず。

攻める手は止めない。しかししっかりと防御もする。

方針はこのまま変えずに続けていこう。

武器の切れ味を戻した二人は無言でジンオウガの後を追つて走り出した。

エリア9に戻つてきた二人だが、そこにジンオウガの姿はなかつた。残された足跡を見ると、どうやらここを素通りしてエリア7へと向かつていたらしい。

それを辿つて追いかければ、そこにはガーグアを捕食しているジンオウガの姿があつた。まだ血が流れているガーグアの死体を貪り、食い千切つた肉を咀嚼している。二人

が武器を構えた時、ジンオウガも追ってきた二人に気づいて振り返ってくる。

咀嚼している肉を飲み込み、口元に残っている血を舐めとって低く唸ると、背中にいる雷光虫の雷弾を四つ放出してきた。それを皮切りに瑠璃が雷弾を搔い潜って接近していき、茉莉も麻痺投げナイフを振りかぶって気刃を放っていく。

茉莉の攻撃には意も解せず、接近してくる瑠璃を標的として顔を下げたカウンターを当てるように角を振り上げたが、横に避けて逃げる。そこを狙って体を捻って尻尾で薙ぎ払ったがそれは飛び越え、背後に回り込んで斬りかかろうとした、が――  
「グルッ！」

それを読み切ったジンオウガがバック転をして尻尾を叩き落してきた。斬りかかっていく瑠璃へと真つ直ぐに狙って落とされた尻尾。

しかし瑠璃の表情は変わらない。頭上から襲い来る尻尾が視界に入るその瞬間に、軽く体を逸らして直撃を避けたのだ。

地面に叩きつけられる衝撃が横から吹き抜けるが、瑠璃はそのがら空きになっている尻から後ろ足に掛けて斬る事のみを集中していた。そうして気を纏って振るわれたデイトソード改は後ろ足を切り裂き、その痛みにジンオウガが溜まらず転倒して転がっていく。

それだけでなく、突然の転倒に驚いた雷光虫たちが揃ってジンオウガから離れてい

く。鋭利に立っていた甲殻が畳まれ、とうとうジンオウガは通常体へと戻ってしまふ。だが一部の雷光虫がまだ残っているので良くて第一段階といったところか。

何にせよここまで戦力を削ぎ落したならば良し。瑠璃はさつきは喜んでいたというのに、またしても無言で転がっていったジンオウガを追い、尻尾切断に向けて尻尾へと斬りかかっていった。

茉莉は右手だけでなく左手にも麻痺投げナイフを構え、両手を振るって次々と気刃を放つて麻痺毒を打ち込む。これは好機ではあるが、落とし穴と違って隙だらけとなる時間間は短い。距離も離れているし踏み込んで攻撃するより、このまま麻痺毒を打ち込む方が得策だろう。

気刃斬りを行使して錬気を更に解放しつつ、むき出しになっている肉を狙って何度も振り下ろされ、突き出される事でどんどんジンオウガの尻尾は傷ついていき、絶え間なく血が流れ出て地面を赤く染める。だが水辺という事もあつて近くの水へと流れ落ちれば混ざり合っていく光景まで見える。

「……………」

しかし瑠璃の口からは呼吸しか漏れてこない。余分な思考をカットし、ただただ無心にデイオスソード改を振り続ける。だがそれもジンオウガが起き上り、尻尾を斬り続けていた瑠璃を吹き飛ばすように尻尾を振り回しながら舞い上がる事で中断させられる。

直撃こそ受けなかったが、振るわれた尻尾の風圧を受けて少しよろめいてしまった。着地したジンオウガはすかさず瑠璃をシオルダータックルで吹き飛ばし、散ってしまった。雷光虫を呼び戻し始めた。

シオルダータックルはディオスソード改で受け止めたもののビリビリと振動が伝わり、ディオスソード改も少し軋んでしまった。折れる、というところまでいかなかっただけでも幸いか。

急速に集まりだす雷光虫らを前に、瑠璃はディオスソード改を構えなおし、今度は氣刃を放って遠距離からの攻撃に移る。茉莉もそれに続いて両手を振るって麻痺毒をどんどん打ち込んでいき、やがてそれは実を結んだ。

「ガッ、ググ……ッ!？」

体が痙攣し、苦しげに声を漏らしながらジンオウガがその場に縫い付けられてしまった。体内の麻痺毒が効力を発揮したのだ。それを確認した瞬間、二人は同時に走り出してジンオウガへと接近していく。

このまま討伐するのだ、という意気込みで瑠璃が下がった頭を薙ぎ払い、首から胸へとディオスソード改を振り下ろすも、しかし甲殻と肉を傷つけるだけで大きな傷を作り上げるには至らない。

茉莉もまた側面に回り込み、トキシックジャベリンを抜いて胸や腹を狙って刃を突き

入れていく。そこもさんざん斬られ、突かれ、強固だった甲殻の守りはほぼなくなり、傷が目立つ場所になっている。

そこを重点的に狙って攻撃を加えていき、毒を注入していくのだがなかなか毒状態にはならないとふんでいる。もう二、三度は毒状態へと陥っているためジンオウガの体内には毒に対する抗体は出来上がっている。

これがそれを防いでいるため、ここまでくるとトキシックジャベリン自身の威力に任せることが多くなる。それはデイトソード改も同じであり、手数が多ければ粘菌がジンオウガに付着して繁殖しやすくなっていくだろうが、これも抗体によって抑えられ始めている頃だ。

「グオオオオオンッー！」

怒りの咆哮を上げて麻痺から解放された瞬間、二人を纏めて吹き飛ばすように電撃がジンオウガから放出される。どうやら麻痺している間もジンオウガを助けるべく雷光虫が集まっていたらしい。

瑠璃は何とか逃げたが、茉莉は盾を構えて防御するしかなかった。盾越しにぶつけられる電撃の奔流に歯噛みして耐え、一突きして距離を取る。

茉莉へと向かおうとしたジンオウガだったが、また後ろ足を斬られる感触に反応して振り返りながら瑠璃へと前足を叩き落す。それを横に避け、前足を突きつつ距離を取っ

ていった。

それを追っていくジンオウガを見送り、茉莉は懐に入れていた強走薬グレートと力の種を口に入れて飲み込んでいく。そう時間をかけずその効果が体の内側から表れていき、まるで体の中の火種に燃料をくべられて燃え上がっていくかのような感覚。

火竜の因子持ちならではの熱い感覚に包まれながら、茉莉はある光景を思い返していた。

『今日は私わたくしがクロムさんの技術から少し学んだ、盾の技術をお教えしましょうか』

『おー、盾ですか。どんなもので？』

『私が教えてきた気を纏つての防御術を更に高めたもの、と考えてもらって結構よ。私は自己強化を主に使って防御しているのは知っていますでしょう？ これをクロムさんが使っている気を纏つての防御と、武器そのものに気を纏わせての攻撃突破術を合わせたものよ。この武器に纏わせる、という部分を盾に置き換えてみたもの、それがこれね』

彼女、桔梗が手にしているガンチャリオットの盾に彼女の気が纏われていく。盾全体に纏われ、淡く光を放つそれを構えた桔梗は茉莉の見える前で説明を続けていく。

『ランスには盾を構えながらステップしつつの前進方法があるわね。機動力が低いランスならではの距離の詰め方であり、ランスーの実力が見合えばブレスを盾で弾きながらの接近も可能としている。強固な盾を手にするランスだからこそ成立するものよね。



それだけの強度を持つ盾ならば、これを防御から攻撃へと転ずる術もあってもいいでしょう。実際片手剣の盾を使つての攻撃方法もあるのだしね』

『確かにそうですねー。それが……今桔梗さんがやろうとしているというものですかね？』

『ええ。大剣を使つて強引にブレスを突破していくクロムさんのやり方を参考に、私が編み出した盾の突破法。茉莉、いづれ貴女が強敵と相對した際に備えて見せておきましょう。さあ、私に火炎を当ててきなさい』

距離を取つて桔梗が茉莉と正面から相對する。移動している間も小声で自己強化の術を行使し、彼女自身のポテンシャルを上げてきた。そうして盾を前に少し出しながら身構える。

そんな彼女へと茉莉は右手を前にだし、手のひらに火炎を集めていく。直撃すればまず間違いなく彼女を焼くものではあるが、ガンチャリオットの素材は銀火竜のものだ。あれが火炎を受け止めている限り、炎は桔梗を焼く事はない。

しかし失敗すれば、という可能性があるのだが……桔梗のことだ。信じることにしよう、と茉莉は彼女へと向けて火炎を放射した。

それを見た桔梗は、強く大地を踏みしめ、そして——飛び出した。

『はあああああッ!!』

穏やかな印象を持つ彼女がいつもは見せないような真剣な表情と、彼女らしくない声を張り上げながら、構えた盾が彼女の前進に合わせて突き出される。見れば、盾を覆っていた気がその範囲を広げて展開されている。

茉莉が息を呑む間もなく、火炎は盾へと直撃し、そしてその傍から霧散していく。

自分としては結構な威力で放ったものだが、見る影もなく消し飛び、桔梗は茉莉の目の前まで接近し、盾を彼女の側面で突き出される。

刹那、盾から凄まじい衝撃波が放出され、背後の岩山まで吹き飛んでいった。茉莉の髪が衝撃波に大きく揺さぶられ、背後から何かが破壊されて崩れ落ちていくような音が聞こえてくる。

驚きに目を見開きながら言葉を失っている茉莉に、桔梗はくすり、と微笑を浮かべて盾を引き、

『……と、こんな具合ですわ。今はブレスに見立ててやってみましたが、鍛えれば相手の物理的な攻撃……そうですね、例えば突進やタックルを受け止めつつ盾でそのまま反撃、なんて事も可能でしょうね』

『……凄いですね。確かにこれはクロムさんらしい豪快なやり方です』

『ええ。人間である私には少し扱いづらいかもしれませんが、貴女ならば成長した後で有効に使えるかもしれないですわね』

盾を使って防御し、ランスで反撃するというのが普通のカウンターだ。だがこの方法ならば防ぎ辛い攻撃を受け止めながら接近し、盾の一撃をぶちかまして相手への意趣返しが出来よう。

そうして生まれた隙を突いてランスで反撃する事も出来そうだ。

しかしこれを成立させるには確かに防御しつつ前進できるだけの力が必要だろうし、己の気を高めて纏わせたりすることも必要か。少なくとも今の茉莉には出来ない技術だ。

『頑張りなさい、茉莉。貴女ならばきつとすぐにでも私を追い抜く事が出来ますわ。……でもそれに焦らず、一歩ずつ追いかけてきなさい』

『……はい。ありがとうございます、桔梗さん』

にこり、といったものようにたおやかに微笑む桔梗に頭を下げる。いつだって彼女はこうして茉莉に道を示し、そして待つてくれている。その上で自分を鍛え上げてくれる。追うべき背中、そこにある。

だからこそ自分は、ここで敗れるわけにはいかないのだ。

かっと目を見開いた茉莉は己の気を全身に包むだけでなく盾にも纏わせていき、強固な盾の防御力を更に底上げしていく。スタミナなど気にするな、今服用した強走薬グレートがエネルギーとなって燃え上がっているのだから。

「グルルルッ……!?!」

急激に高まっていく気に反応してジンオウガが振り返り、そして突き上げられるトキシックジャベリンに気づいて顔を逸らした。頬を掠めていったトキシックジャベリンを感じつつ、見下ろしたジンオウガの視線の先には、先ほど以上の気迫で自分を見上げてくる茉莉がいる。

その視線が気に入らず、電撃を放出しながらシオルダータックルを仕掛けた。これで動きを止めて尻尾で吹き飛ばす算段だ。

だが、茉莉が身構えた盾が彼女の気に纏われながらそれ以上の範囲を広げて、気が大きく展開されていく。そうしてシオルダータックルを受け止め、ぐっと四肢に力を込めて茉莉は衝撃を吸収した盾でジンオウガの前足を弾いた。

「——ッ!?!」

急に襲い掛かってきた打突にひび割れている甲殻がまたいくつか破片となって飛ぶ。よもや小さい存在が自分の攻撃を防御して、そのまま弾き返してくるとは思いもしなかったジンオウガは突き上げられるトキシックジャベリンに胸を貫かれた。

痛みを感じるというより、驚愕によってジンオウガは動きを止めてしまっていた。それを見越され、またもう一撃突き上げられたところでジンオウガは茉莉から距離を取ってしまう。

そう、ジンオウガから距離を取ってしまったのだ。今までならば茉莉、もしくは瑠璃が距離を取っていたというのに、今、奴は自分が距離を取ってしまった。

それは、僅かな恐れを感じ取ったからに他ならない。

ジンオウガは戦慄する。

この戦いの中で急成長する二人の姿に。普通ならば心折れているであろう二人だったが、彼女達には追うべき背中があるのだ。そして帰るべき場所がある。やらねばならない事がある。

こんな所で死ぬわけにはいかないという思いが、二人が今まで積み重ねてきた経験が、師匠らの教えが生きているから、二人はこの瞬間もなお成長し続けているのだ。

恐れを勇氣に、経験を実力に。

強き想いと意志と彼女らを支えている絆が、折れかけた心を繋ぎ止める。

それが瞳に宿っている。

これらを火種として燃え上がらせ、眼力となって目に見える形に表れる。

「グルル、グル……ヴォオオオオオオオンッ!!」

ジンオウガはじつと二人を見つめていたが、不意に目を閉じると、自らを鼓舞するように夜空に向けて咆哮を上げた。それに呼応するように雷光虫らも力を与え、再び奴は青白い光に包まれる。

そうして開かれた青い瞳には二人を侮る気配はなく、まるで一介の戦士を前にする戦士のようなだった。そう、二人を格下、小さき存在と見下す者ではなく、対等な存在として見ているかのよう。

それを感じ取った茉莉は「……決戦、ですな」と呟いた。瑠璃も無言でディオスソード改を構えなおしつつじりじりとすり足でジンオウガへと近づいていく。

対してジンオウガもゆつくりと前進していき、急速に距離を詰めながら身構えた。瑠璃はそれを見てすぐに動いた。これはフェイントであると。それは当たり、ジンオウガは急に動いた瑠璃を目で追うだけで動かなかった。

それを好機として一撃後ろ足へと斬り付け、もう一撃尻尾を狙っていったが、ジンオウガが四肢に力を入れて横回転しだした。それによって尻尾が斬りかかろうとした瑠璃へと直撃し、彼女が吹き飛ばされて水辺を転がっていく。

着地したジンオウガへと茉莉が踏み込んで攻めていき、前足を叩き落してもそれを躲して更にもう一撃。近づきすぎている彼女を吹き飛ばすように地を蹴って体ごとぶつかっていった。

盾で防御する事で乗り切ったが、ジンオウガの姿は彼女の背後へと飛んでいく。着地しながら振り返ると、勢いよく跳躍し、電撃を解放して流星となる。

「……………ふっ！」

普通ならば逃げる場面だが、茉莉はまたしても気を解放し、流星を前にして逃げなかった。盾の前に展開されている気の壁が解放している電撃を防ぎ、落下してくるジンオウガの体から伝わる衝撃を横へと逸らして自分にかかるダメージを減らす。

もちろんそれでも電撃とその余波が茉莉へと襲い掛かるが障壁に防がれ、それでも彼女の体へと一部が襲い掛かってくるのだが、茉莉はそれを堪えた。退かぬ、という強い意志が彼女をこうして強気の守りを見せつけたのだ。

「はあッー」

背を向けて転がっているジンオウガへと力強く盾をぶち当て、背中へとトキシックジャベリンを突き刺し、さらに二度突き刺していく。ジンオウガに集まっている雷光虫を散らすようにトキシックジャベリンを振るつたが、それでも雷光虫はジンオウガから離れない。

力を入れて起き上ったジンオウガがいざ茉莉へと反撃しようとしたが、飛来してきた気刃がジンオウガの尻尾を斬り飛ばしてきた。

「グオオアアアアッ!?!」

武器でもある自慢の尻尾が斬り飛ばされ、ジンオウガが悲鳴を上げてもがきだす。見れば水草に隠れながら瑠璃がディオスソード改を握りしめていた。あそこで意識を集中させ、必殺の気刃を放つたようだ。

切断面から血を流しながらも、ジンオウガは何とか起き上り、低く唸りだす。

今の苦痛でも雷光虫は散らないらしい。それどころかジンオウガの声に従い、電気を放出して茉莉と瑠璃へ向けて落雷を落とし始めた。二人はそれを回避するように動き、それを見てジンオウガも距離を保ちながら歩きだし、しかし落雷だけは止めずに放出し続けている。

落雷は牽制のつもりなのだろう。そうして二人の出方を窺いながら次の攻撃の手を探っているようだ。

その意図を壊すべく瑠璃が地を蹴ってジンオウガへと接近していく。それを見てジンオウガが足を止めて雷光虫を放出してきた。それを躲して一撃気刃を放ったが、ジンオウガは横に跳んでそれを回避し、側面から飛びかかっていく。

「……………ぷっ」

地面を強く蹴りながら前転し、飛びかかりを回避した瑠璃だが、ジンオウガはすぐさま地面を滑りながら向き直り、もう一度瑠璃へと飛びかかろうとする。その前に茉莉が躍り出、盾を構えながらジンオウガへと距離を詰めた。

ぶつかる瞬間にまた盾をぶつけてやり、意識を引き付けた瞬間にトキシックジャベリンを突き出す。もちろん狙ったのは先ほどから何度か強力な一撃を与えた場所だ。手ごたえも良くなってきているしかなり効いているのではないだろうか。



小さく呻いたジンオウガが周囲に電撃を放出して茉莉を引きはがしにかかったが、盾で防御してカウンターを仕掛けようとしたが、ジンオウガがその盾を弾くように前足を振るってきた。

それに気づいて何とか受け流そうとしたが、続けて頭突きを仕掛けてきた事で受け流せず防御するしなくなる。それから勢いよく振り上げられた角により盾を弾き飛ばされそうになり、茉莉は歯を食いしばってそれを耐えた。

彼女の防御を揺さぶるような攻撃の連続だったが、茉莉はまだ耐えられる。強走薬グレートという存在がそれを可能にさせるのだ。

シオルダータツクルを仕掛けて茉莉を吹き飛ばしにかかるが、地面と一体化するようにな不動の構えを取って耐えつつ、反撃するように盾をぶち当てようとする。が、ジンオウガはすぐさま二足で立ちあがりそれを回避。

はっとして盾を構えなおす刹那、彼女を押し潰しにかかるようなボディプレスを仕掛けていった。

「……っ、はああッ！」

跳ね飛ばされそうになるのを堪え、それでも数センチ後退させられるも茉莉は耐えきり、反撃としてトキシックジャベリンを振り上げた。突くのではなく斬り上げるように振るわれたトキシックジャベリンの刃は胸から顎へと傷を作り上げ、更に薙ぎ払って盾

で反撃として振るわれる前足へとカウンターを仕掛ける。

爪が盾へと食い込みそうになったが展開されている気の壁がそれを阻んだ。みしつ、と爪が軋む音がしたようだが、折れるまでは至らない。

そうして茉莉が気を引いている間に瑠璃が再度ディオスソード改へと気を纏わせ、意識を集中させていた。スタミナの持続力を謳う強走薬グレートではあるが、それでも体にかかる疲労は蓄積するばかりだ。

それに気を連続して行使しては心労もたまる。そういう欠点を孕んでいる。

今でこそ茉莉は防御し続けているが、あれではいつ倒れてもおかしくない状態まで自覚しないまま戦い続けるだろう。そうなれば終わりだ。

……と、そんな事を考えている事もなく、瑠璃はただ一気に終わらせるための一撃を放つために気配を消して自然と一体になっていた。

完全とはいいがたいが、それでも瑠璃は明鏡止水の境地に限りなく近くまで迫り、ジンオウガのある一点へと狙いを定めてディオスソード改を構えている。

ふう、と息を吐いてタイミングを見計らい、地を蹴つて一気にジンオウガへと肉薄していく。まるで一筋の風のように水草の間をすり抜け、彼女が通った跡はまるで風が吹き抜けたように水草はざわついた。

水が跳ねる音すら置き去りにし、茉莉へとシヨルダータツクルを仕掛けて防衛を崩そうとするジンオウガのその横っ腹から、袈裟斬りにするようにディオスソード改を振り下ろしていった。

群青色の刀身と、瑠璃が纏わせた炎のようなオレンジ色の気刃という二つの刃が、露わになっている肉を一気に裂き、更なる血を噴き上げる。

「ガアアアッ!？」

突然の攻撃にジンオウガが悲鳴を上げ、瑠璃へと振り返っていったが、下げられたディオスソード改が勢いよく振り上げられ、茉莉が傷つけていた部分を上書きするように傷が刻まれ、更なる赤がその体を染め上げる。

「オオオオオオッ!」

しかしジンオウガは踏ん張る。

決して折れぬとその目が語っている。

振り上げて硬直している瑠璃へと鋭利な角を突き立てるように頭突きを仕掛け、瑠璃はそれをディオスソード改で滑らせるように何とか受け流し、下がった首へとディオスソード改を突き入れ、切り払った。

その痛みがジンオウガに走り抜けるが、顔を振って瑠璃の防衛を崩し、彼女の側面から薙ぎ払うように横回転して短くなっている尻尾で薙ぎ払った。

が、瑠璃はそれをギリギリで直撃を避け、宙に吹き飛ばされながらも受け身を取って滑っていく。

そして着地するジンオウガへと茉莉が両手で構えたトキシックジャベリンに気を纏わせ、脆くなっている顔を刺し貫くように突き出した。額を貫いていく刃から放たれる毒と気の刃がジンオウガに更なる苦痛を与え、悲鳴を上げたその瞬間、とどめとばかりに振り上げたデイスword改を一息に振り抜く瑠璃。

大地を割りながらジンオウガへと迫る気刃はジンオウガの左肩から胸にかけて走り抜け、続けてそれに付着していた粘液の効果で傷口が連続して爆発を起こし、それが奴に断末魔の叫びをあげさせた。

体の外側と内側から爆発を起こした事で内臓に傷がつき、傷口から大量に出血を起こしている。体に回っている毒の後押しもあり、あれほどまでの動きを見せていながらもジンオウガはかなりの体力を奪われていたようだ。

力なく地に伏せ、しかしそれでも立ち上がろうとするジンオウガ。

見れば四肢は震えており、その体を支えるのも辛そうだった。そして奴は目の前にいる茉莉と、奥にいる瑠璃を交互に見詰め、何かを考えるような眼差しを向ける。

「……………」

その視線を受け止め、無言で見つめ返す二人。

声なき言葉は何を伝えてきているのか。思い当る言葉はないが、それでも何かを含んでいるというのだけはわかった。

やがてジンオウガは口から血を吐きだし、それが決定打となつて力尽きてしまった。地面に横たわるジンオウガに生氣はもうない。それを感じ取つた雷光虫たちが夜空へと舞い上がっていく。

雷光虫らにとつてジンオウガは共存の相手であり、隠れ蓑でもある。ジンオウガが倒されたとあれば、もう自分達を守つてはくれない。

夜空へと舞い上がっていく淡い光の群れはジンオウガの上空に上がるその光景は、まるでジンオウガへの送り火のようで、いつの間にか高い空へと上がっている満月と合わさつて美しく感じられた。

死闘は終わった。

武器をしまった二人は空へと上がり、森へと消えていく雷光虫たちの送り火を眺め、最後にジンオウガへと敬意を表して黙祷を捧げた。

最期まで奴は誇り高く戦つた。自分達を追いこんできた。

一度、いや二度心が折れかかったが、自分達は何とか勝利を収める事が出来た。

これだけの成長を感じさせるだけの強敵との出会い。それに感謝を。

苦しい戦いだったがそれに見合つた経験を詰めた二人は実感し、そして使える部分

を全て使おうと無駄なくジンオウガの素材の剥ぎ取りを行った。

## 47話

夕食を終えた雷河達は揃って宿へと向かっていった。利用している部屋の中心に席を用意している間、未寅は直立している霧夜海と空の二人に気づくと「よう、少しぶりだのう」と声をかけた。

それに二人は一礼し、海が「はっ、このような姿で失礼します」と挨拶する。私服姿で包帯を巻いているという少ししみつともない姿を気にしているようだが、そんな事を未寅が何かを言う事もない。

おおらかに笑いながら「かっかっか、気にするな海よ。渚嬢ちゃんから少し聞いとるわい」と言いつつ彼の肩をぽんぽんと叩いてやる。

「二人が無事である事が大事よ。生きていなければ何度でも立ち上がれるからのう」

空の肩も抱き寄せてぽんぽんと軽く叩いてやり、二人が健勝である事を喜ぶように大口を開けて笑っている。こうしてみる限りでは人のいいおじさん、という風だろうが、これでも彼はヤマト国において重要な人物なのだ。

とてもそうは見えないが、しかし武人としての力を内に秘めているという事は見てと

れる。それもかなりの実力者だ。

未寅龍仁。

戦アイルーの部隊を主に束ねし軍の長。それが彼だ。

もう一つの顔がハンターであり、人の部隊は全員がハンターであり、モンスターを相手にする事を専門としている。つまりヤマト国においての対モンスターの軍隊というわけだ。

彼が席に着き、雷河がお茶を用意しようとするのと空がやってきて「お茶はわたしがやりましょう」と声をかけてくる。

「いや、怪我人にそういう事は……」

「いえ、お気になさらずに。あなた方が今回の主役、こちらはわたし共が」

頭を下げながらそう言われてしまつては遠慮しづらい。頬をかいて少し考えた雷河は「ああ……じゃあ、頼むわ」と任せることにした。それに一礼した空がお茶の用意を静かに行い、それから少ししたところで部屋の中に空間の裂け目が生まれる。

その奥から現れたのは以前と同じく変装している神倉月。だが以前と違うのは連れているのがルーシーではなく青年二人という光景だ。

その内の一人に未寅が気づくと、

「おお？　星野ではないか」



「…………？ ああ、あなたは…………」

星野——すなわち変化によって少し外見を弄っている昴が未寅に気づいて頭を下げる。席から立った未寅が昴へと近づき、首を傾げていたので月が声を掛けに行く。

「久しぶりだね、未寅さん」

「おお、神倉の。久しぶりだのう。こういう形で再会するとは思ひもしなかったがな」

「はは、それは私もだよ。…………さて、彼と知り合いのようだけど」

「おうよ。以前リオの希少種のつがいを討伐した際に共にしたハンターよ」

「ああ、なるほど。話には聞いていたけどやっぱりあなただったんだね。彼については人が揃えば改めて紹介するよ。今は少しおいといてくれないかな？」

「そうか。じゃあ待つとしようか」

月が未寅の対面に座り、未寅も着席したところで空がお茶が入った湯呑を二つ持つてくる。それぞれの前へとそつと置き、一礼して壁際へと下がっていくと、二人はそつとそれを軽く飲む。

すると月がふう、と息をついて「これ、美味しいね」と空に振り返って微笑みかける。その言葉に空は「ありがとうございます」と一礼し、未寅もまたからからと笑って「空は茶を淹れるのがうまいからのお！」と彼女を褒めている。

幼い頃から海に仕えているだけあって彼女は家事能力が高く、お茶を淹れる技術もな

かなかのものだ。海に淹れるだけでなく客人に対して失礼のないように、という作法も心得ている。

よく出来た娘なのだ。

そして数分後、薄く開かれている窓から鳥が二羽入り込んでくる。それは梟ふくろうと鷺さぎだった。それらが光を放って粒子となると、それぞれ乾渚と巽鷺輔へと姿を変えていく。

「どうも、少しぶりだね。神倉さん」

「ああ。今日はよろしく頼むよ、乾さん。……そして、こちらも少しぶりだね。巽さん」  
「ははは、そうだね。よろしくお願いするよ」

月がそれぞれ握手を交わしていき、そして二人の視線は月の後ろに控えている青年二人へと向けられる。それに渚は「へえ……」と目を細めて観察するような視線を向けた。巽も人のいい笑顔を見せながらも、その瞳は観察するような色をおわせている。

だが渚はくすりと微笑を浮かべ、海が引いた椅子へと着席した。もちろん、三つ並んでいる内の真ん中だ。彼女の右隣に未寅が、左隣に巽が着席する。続けて渚の背後、窓際に海と空、佐助と椿が控えた。

向かい合って中心に月が、右隣にクロムが、左隣に昴が着席し、月の背後に雷河と焰が立つ。

ここに、交渉の場が成立する事となる。

「まずは紹介といこうか。御三方も気になつてゐるようだしね」

「そうだな。さくさく、紹介してくれ」

「まずはこちら。星野翔……というのが偽名であり、彼の名は白銀昴」

「……どうも、よろしくお願ひします」

月の紹介に席を立つて頭を下げる昴。渚と巽がほう、と頷く中、未寅は「ほう、お前さんがあの白銀か。なるほどのお、確かにかなりの手練れだと思つていたが、そうかそうか！」と驚き、笑顔を浮かべて腕を組んで大仰に頷いている

昴が着席すると今度はクロムを示し、

「こちらが天草翡翠……というのが偽名であり、彼の名はクロム・ルシフェル」

「うす。今日はよろしくお願ひします」

昴に做うように彼も席を立つて頭を下げた。三人の視線がクロムに向けられ、渚は口元に指を当てながら彼の顔から腕や体へと視線を移していき、「……噂に聞く通り、マジで鍛えられてるな……」と呟いている。

そんな彼女に軽く肘でつついて巽が「今は自重するんだよ？ 殴り合いなんて物騒な事やらないようにね？」と小声で注意し、「わあつてるよ。しねえよ」と渚もつつき返す。

そしてこほん、と咳を一つして、

「先日の話の通り、マジで連れてきたつてわけだ」

「ああ。本人に直に来てもらった方が信憑性があると思つてね。彼らだけでなく、彼らの家族にも既に話は通してあるよ」

「行動が早いねえ。……んで？　こうして出向いてきたつて事は、やる気があるわけだ？」

「おうよ。俺も辻斬りの話や東方のモンスターらの話は風の噂で耳にしていたわけですよ。……でも、辻斬りに関しちやあ大衆心理によつて容疑者だからな、動くに動けなかつたところでこの話。俺らの力が役に立つつてんなら、協力せずにはいられないつてな。大いに乗らせてもらいますぜ」

「はは、なるほど、流石はあのルシフェル夫妻の息子さんだね。困っている人がいるなら手を差し伸べ、協力する。いいね、そういう人、僕は好ましいよ」

にこり、と翼が微笑を浮かべ、クロムは「ども」と一礼する。

続けて渚の視線が昴へと向けられると、昴もクロムのように理由を話します。

「俺達の場合は東方に隠れ住んでいたから嫌でも話は耳にしました。辻斬りの話、活性化していくモンスターの話……後者に関しては稼ぎに出ることで時折遭遇しています。……以前の希少種のつがいの件も、近くを飛行されては困るから俺が出向いていたわけですが……」

「その際にワシと出会う事になつたわけだの。かつか、偶然とは恐ろしいのう」

「……モンスターに関して隠れ住んでいても一部に関わる事は可能だが、辻斬りに関しては無理だと思っていましたね。なにせ俺達も容疑者を囲んでいるわけですから。……しかし、腹の中ではその不屈な辻斬りを捕えたいという思いはありました。そうしてあいつの無実を証明したかったです」

「……黒崎優羅の事か。……あ、今は白銀優羅、かな?」

渚が首を傾げると昴はそれに小さく頷いた。優羅も紅葉も彼の妻なのだから今は白銀の姓を名乗っている。

「とはいえ俺達には神倉さんからいただいた変化の補助をするものがありますが、それでも深くまで調査する事は出来ません。幼い子供がいますので……」

「確かにの。子供を連れて調査に出る事も出来んし、家に残して長く離れることも出来んしの」

「はい。なので今までは見送り続けましたが、この機会が巡ってきました。辻斬りの正体を知り、捕える事が出来るならば、俺達は喜んで力を貸しましょう」

娘二人はポツケ村にいる人達がいるため安全だ。あそこには撫子や花梨という手練れがいる。少し寂しい思いをさせてしまう事になるが、それでもあそこならば自分達がいなくても安全に過ごす事が出来る。

歳の近い友達も出来たし、信頼できる人に守られているならば、自分達はこの事件に

介入する事が出来る。そして願わくば、もう隠れ住むような事にならずにしたいものだ。

多くは望まない。

自分達はただ東方という故郷で心安らかに、静かに暮らしていきたいだけなのだから。

二人の意志を聞いた渚は何度か頷き、そして月を見据えた。

「改めて確認しよう。あたし達は忍が集めた情報をあなたらに提供する。そしてあなたらは辻斬りに対抗できるだけの戦力を提供する、だったな？」

「ああ、その通りだよ」

「その戦力の確認。白銀夫妻三人、ルシフェル兄弟夫妻四人、そこにいる獅子童雷河と焰、そしてあなた神倉さんとルーシー・ヴァーミリオン、そしてもう一人。合計十二人でいいんだよな？」

「間違いないね。……現在ルーシーはドンドルマでもう一人が出てくる時を待っているからここにはいないけど。今のところ向こうの交渉は順調だよ。あとは出てくる準備を整えるだけだね」

「ふむ。そちらの準備は問題なし、と」

そこで渚は両隣にいる二人に視線を向ける。ここでどうするのか、と二人の意見を聞

くつもりらしい。それに先に答えたのは未寅だった。

「ワシとしては問題ないかと思うぞ。白銀の実力は確かなものよ。ぱつと見はまあまあの才能だが、磨き上げられた実力が光っておる。その妻も聞くところによれば手練れのようだし、味方として加わるというならば問題なしよ。……一回共にしたただけだが、こういう青年は好ましいしの。かっかっか！」

昴と共にクエストをしているため未寅は彼の事がある程度知っている。希少種という強敵を前に共に戦い、共に飯を食い、時間を過ごしていった中で未寅は昴の人となりを見てきている。

多少の演技が入っているが、それでも彼の根本的な性格は隠しきれていない。未寅は恐らくそれを見たのかもしれない。

異もじつと昴とクロムの事を見回し、にこりと人のいい笑みを浮かべて小さく頷いている。

「僕としても悪くはないと思うね。実際僕らは戦力が欲しいところなのだからね。それも自由に動ける信頼できる人材が、ね。僕も先日まで東方を巡って来たけど、やつぱり数人で各地に散って動いてもなかなか現場に遭遇する事は出来なかつたからね。……たぶん、僕らの事を知っているから避けているんじゃないかと推測できる程にね」

異の役割は情報収集にある。一般人に紛れ込んで情報収集を行ったり、間諜を放つて

相手方の調査を行ったりと、陰に潜んで活動する部隊を主としている。

その情報収集は人を相手にするだけでなく未開の地の搜索やモンスターに関する情報など多岐にわたり、まるでギルドナイトのような側面もあるのがまた特徴だ。

今回の辻斬りに関しても調査しており、異自らが出るといふ行為に出る程、渚達は辻斬りの情報を求めていた。それは西丑灯らが魔族……それもシユヴァルツの末裔であると断定して抹殺活動に出ないように先回りするという目的があるからに他ならない。

何としてでも灯らよりも尻尾を掴まなければならぬ、という思いから異がヤマト国を離れ、部下を数人各地に散らせながら調査に乗り込んだのだ。

それを辻斬りらが気づいているのだとしたら？

変装していてもあれはヤマト国の誰かだと気づかれたのだとしたら？

彼らの前に姿を見せず事を進めている事になれば、異が現場に遭遇する事が出来なかったのも頷ける。しかしそうなれば尻尾は掴めずじまい。ならば、ヤマト国と関係のない戦力になり得る誰かを味方に引き入れるのはアリではないかと異は考えたのだ。

「と、いう事で、僕としても協力体制を取る事に異はないよ。辻斬りだけでなく、モンスターに関する事、という意味合いでもね」

「……それは大砂漠や厄海付近の事か？」

渚の言葉にいち早く反応したのは月だった。続くように昴達も目の色を変える。ハ



ンターとしての顔がそこに表れた事に異は小さく笑い、そして表情を引き締めて月へと問いかける。

「大砂漠に関しては神倉さんも耳にしていると思うけど、どうかな?」

「もちろん、耳に入っているよ。旅人の行方不明という事件を引き起こしている可能性が高いUNKNOWNやジェン・モーランの亜種らしき影の事だろう?」

「うん、そうですね。そして厄海に関しては最近情報が入ってね、あの付近で小さな地震が頻繁に起こり始めているという話だよ。まだタンジアの港や周辺の村にまでは届いていないけど、少しずつ震源地が海を移動しているという話さ。同時に古龍観測所から飛ばされた気球の監視員の話では、海に大きな影があったことを確認しているよ。話によれば島の崖にぶつかっているとか」

「ぶつかった衝撃で地震が起こっている、と? なんだい、その話は。数年前にタンジアの港付近で確認されたアレみたいな話じゃないか」

数年前にタンジアの港付近にそれが現れ、小さな地震を頻繁に引き起こしていたという記録がある。その原因を調査した結果、それは巨大な海のモンスターによるものだという結論が下され、導入された水中戦用の装備を纏って戦えるハンターを募り、その原因となったモンスターの討伐に赴いた。

結果は討伐には至らず、撃退にとどまったのだが、水中戦に不慣れなハンターが多い

戦いなのだから仕方がない。しかし死者や重症者も出るという激しい戦いを繰り広げ、かの存在を撃退して生還したハンター達には多くの報酬と名声を得られた一件でもあった。

「また奴が出てくる、と?」

「その可能性があるね。だから辻斬りに対する戦力、というだけでなくそのモンスターが猛威を振るいだした際の戦力という意味合いでも、僕達としてはあなた方が戦力に加わるのは歓迎したいんだ」

「それは何故です? 辻斬りに対する戦力として俺達を迎えたい、というのでは?」

「……実はですね、その辻斬りらも普段はハンターとして活動しているんじゃないか、と僕は睨んでいるんだよ」

その言葉と同時に異は机の上で手を組み、一息ついて語りだす。

「辻斬りによる被害は刀傷。それもかなりの腕前でもたらされた傷だよ。でもそれだけでなく一部は槍による一撃も確認できたんだ。……そう、頭か心臓、どちらかを一突き。あるいは首を刎ね飛ばすように槍を薙ぎ払った傷も確認できたんだ」

「刀と槍、か……」

「……槍?」

クロムが腕を組んで頭に思い浮かべる。

その後ろで雷河が槍という単語で思い出すべき事を頭に思い浮かべる。そう、つい先日  
日に遭遇したあの少年の得物も槍ではなかっただろうか。

「そしてその槍と同じような傷でリオ夫婦が討伐されているのも確認できている。ギルド側では密猟と判断し、調査に赴いているくらいにね。……そして先日、こちらの霧夜の二人が遭遇し、そちらの二人が救出に赴いた一件。聞けばその時の相手の得物も槍だったそうだね?」

「ああ、そうだけ。なかなかの手練れだった。ありやあそこらにいる武人じゃねえって  
くらいの実力だったなあ」

「……つまりなんだ? その時の相手が辻斬りと密猟を行っている奴だ、と言いたいわけ  
で?」

「そうだよ。その可能性は高い。なにせ、傷口を見る限り振るわれた槍が同一のもので  
と推測できるほど酷似し、貫かれた傷口の鋭さもほぼ一致。まず間違いなくその槍使い  
が容疑者だろうと疑えるね」

その槍使い……すなわち草薙武の事だ。その正体までは辿り着いていないようだが、  
誰がやっているのかまでは付きとめてはいるらしい。その辺りは流石というべきか。

「その槍使いがモンスターを相手に密猟まがいの事をしているから、彼らもモンスター  
に対する戦闘の心得があると推測できる。つまり、ハンターとして接近する事が可能な

わけだね。だからそう言う意味でも白銀さん達が味方に加わるのは賛成だね」

ヤマト国の諜報員ではなく、一介のハンターとして対象に近づき調査できる、という事か。気づかれれば戦闘になるかもしれないが、対人戦闘の心得もある彼らならば何とかなるという信頼もある。

その隙に霧夜の忍らがあるの背後を探り、どういった理由でこのような真似をしているのかを探り、次の標的の調査もするという算段か。

二人の意見を聞いた渚は何度か頷き、

「……ま、あたしとしても協力体制を取るっていうのは異論はないんだ」

「ふむ、しかし何か気がかりな点はあるのかな？」

「ああ。灯……というより申子のやつがどう出るかっているのが、な」

「申子？ ……ああ、申子源次という人物かな？」

「どういう人なんですか？」

「紳士な人、として通じている……と本人は思っているらしいけどね。実際外面だけを見れば、うん……紳士だね。でも内面を見れば、かなりどろどろとしているっていうんだよ」

西丑側の三家の中で一番魔族に対して嫌悪感を示す人物であり、三家の中で一番魔族に対して排他的な感情を示している人物。それが申子源次という人物だそうだ。

彼は例え外見的には魔族でなくとも、魔族の血が入っているならばそれを排除するという、魔族という種族だけでなく血に対しても反応するらしく、つまりはほとんど人間であつたとしても、シユヴァルツの末裔ならば殺せ、といえる人物という事になる。

竜魔族に対してもそれは同じであり、竜人族が魔族と交わるなど許しがたい事だと排他的だ。つまりはあの鍛冶屋の一家も標的になり得るといふ事らしい。

「……その申子という人物、どうしてそこまで魔族を嫌うんですか？」

「さあ、何故だろうね？ 僕には彼の心情がよくわからないよ」

「クズの心なんてわかるもんかい。ああいう奴が同じ地位にいるなんてあたしにや苦痛で仕方ねえ」

「まあ渚嬢ちゃんも苦痛だろうなあ」

「おうよ。いっつもあたしに対して冷え切つた視線を向け続けやがってよ……何度あのいけ好かねえ顔を殴り飛ばしてやろうかと思つた事か」

渚が苛立たしげな表情を浮かべて齒噛みし、組んだ腕を指でとんとんと叩き続けている。それを見ているだけでどれだけ彼女が申子を嫌っているのかよくわかるというもの。しかし自分に対して明確に敵意を向けている人物を、それも殺意すら感じる人物を好ましく思える人なんてどれだけ酔狂な事か、と言いたくもなるか。

「まあ、そんな申子があなたたらがあたし達と組んでいる、つて知られたら、そしてあなた

らがどういう人物かを知ってしまったら、まず間違いなくなんらかの干渉が来るだろう  
さ」

「元を辿れば魔族は竜人族の派生だっていうのに……やりきれねえなあ……。わかった、気をつけましょうかね」

竜人族と魔族の分かれ目は自然に適應して変化した竜人族、という点だ。変化……すなわち進化によって魔法を巧みに操れる、外見的な変化が生まれる、何らかの影響によつて竜族の因子をその身に宿し、それによつて進化をしたもの……様々なものだ。

つまり血や魔族云々言う前に、彼らは大まかには竜人族だ。ただその大まかなものを区別した、というだけに過ぎない。

竜人族から進化したというだけで魔族という存在を許さない、というのは生物の進化を許さない、といっているようなものだろう。人は生物は少しづつ変わっていくものだ。停滞する事を良しとし、変わっていくことを許さないのは、自分と異なる存在となる事を許さないという事。

自分と異なるものを恐れるからこそ、魔族差別が生まれたのかもしれない。長い歴史の中を振り返れば、何度か魔族に対して何らかの迫害があつた事は何度かあるのだから。

湯呑を手にして残つたお茶を飲み干した月が一息ついて渚へと首を傾げる。

「他に気がかりなことは？」

「申子だけでなく灯……西丑灯や午卯六花という存在もある。とはいえ灯は基本あたしと同じくヤマト国から離れることはないけどな。忍の風間一族を使って各地を調査させて、他の奴らに指示をするのが基本さ。午卯は……さっきそこにいたんだって？」

「はい。狭間が捕え、遠くへ放つてくる、と先ほど連絡が」

肩越しに渚が振り返りながら問うと、空が淡々と答えた。

「だとよ。あいつもまたクズと同じく、今は東方を巡っているらしいな。今回はこの場を押さえられずに済んだけど、またどこかで遭遇する可能性があるかもしれない」

「午卯六花……彼女も竜人族だったね。確か午卯家は魔闘士タイプと銃使いが多いんだっただか」

魔闘士。

格闘術を主とする戦士が魔法という要素を身に宿し、格闘術に属性を付与させて戦う格闘家……闘士の事をいう。もちろんこれは対人戦を想定した武術であるが、達人級ともなれば牙獣種相手にこれで立ち回って勝利を収める者もいるという話だ。

かの衛宮兼続もこの技術を習得しているようではあるが、この技術を使わずに純粹なる格闘術でアオアシラを討伐したというのは、ヤマト国では語り継がれている話だ。

またヤマト国は鍛冶技術も高く、特に銃に関しては様々な技術を駆使して改良してい

る。ライトボウガンやヘビィボウガンのリミッター解除技術の基礎は、ヤマト国が提供したという話もあるくらいであり、技術国家という側面もあるという。なぜそんなことが出来たかと言えば、未寅が抱えるハンターの軍隊を保有しているせいだ。一国がハンターを軍人として保有することは、本来ならば違反行為とされている。人は人、ハンターはハンターと明確な住み分けをすることで、古代に起きた大戦争を繰り返さないようにする、というのがギルドが定めたルールである。

ヤマト国はそれに違反しているのだが、ヤマト国が生み出した技術や、会得した情報や戦術をギルドに提供するという取引を以ってして認められている。ボウガンの技術の一部をギルドへと提供した中に、それが含まれたというわけだ。

最近ではボウガンを小型化していくという技術を高めているようで、いくつか試作品を作ったという話だ。

すなわち、片手に持つて発砲するという拳銃の開発である。

まだまだ開発途上にある計画だが、いくつかの試作品、完成品は午卯家へと流れている。それは午卯家がその開発資金を援助しているためであり、彼らが銃使いとしての側面もあるためだ。

近距離は魔闘士、遠距離は銃使い、と二つの戦闘態勢をとり、技術を高めて後世へと伝えていつている。抱えている部隊も同様であり、その二つのトップに午卯六花が立つ



ている、という構成だそうだ。

そんな六花を狭間は気絶させてしまった。クロムは首を傾げながら何となく訊いてしまう。

「……そんな彼女を難なく捕まえて遠くへと放つてくる？ その狭間って人、どれだけ強い忍なんだよ」

「……まあ、強いっていうか……いや、実力者だというのは間違いないんだが、たぶん午卯はあいつに関わり合いになりたくなくて逃げたんだろうな」

「はい？」

「ああ、気にすんな。うん、知らなくていい。世の中にはな、知らなくていい事があるってことよ」

渚の言葉に異は苦笑しつづうんうん、と頷き、未寅もくつくつと笑って同意している。気になるところだったがまあ、訊かなくていいならそうしておこうとクロムは気にしないことにしたらしい。

「で、だ。話を纏めよう」

「僕らとしては辻斬りだけでなく、大砂漠や厄海についても調査したいと考えています。つまり、辻斬りを捜索する者、大砂漠を調査する者、厄海を調査する者、と三つに分かれるって事だね。その中で辻斬りに対してもいくつかに分かれることになるかもしれない

ませんが……」

「もしワシらの協力体制が成り立った場合、最初に落ち合う場所はどこにするかの。まあ『大砂漠』という舞台があるわけだからロックラックが第一候補だろうがな」

「そうだね。それに関しては異論はないよ。問題は分かれるメンバーか。未寅さんはまだヤマト国には？」

「まだ戻らんつもりじゃわい。きな臭いところがいくつかあるからのう。こいつらとそこを周っていくつもりじゃ」

彼の役割は各地のモンスターの動向を探るといふもの。最近はユクモ村を中心として蛇竜種やリオ夫婦について調査しており、その報告を渚へと提出している。それが終わって戻るかと思いきや、まだまだ調査を続行するつもりようだ。

恐らく彼もまた辻斬りや領主の一件についても調査する役割も担っているのだろう。「もちろんそれぞれに霧夜の忍をつけよう。彼らと協力し、事態の調査を行っていく。表から、裏から……それぞれの視点で調査し、わかった事があれば忍に伝えてくれている。あとはその忍が僕らへと情報を届けるから。そして情報は共有する事を約束しよう」

「その代わり戦う、と。更に言えば私達の持っている情報も共有するという事になるわけだね」

「当然さ。この一件はヤマト国だけでなく東方、ロックラック周辺と多岐にわたる。小さなことでもそれが後々大きな何かのきっかけになるかもしれないねえからな」

元より情報を求めたのは月側だ。渚側だけが情報を提供するというのはいただけでない。なので月側からも何かわかった事、気づいた事があれば話すのは当然の事。

協力体制を布くという事は、一時的とはいえ両者は仲間になるという事なのだから。「あとワシから疾風へと連絡も取りつけておくわい。あいつも各地を放浪しておるから、何か見つけければ情報をよこすように伝えておこう」

「疾風？ ……もしやあの戦アイルー……『神風』の事ですか？」

「おう。白銀は共に戦ったから知つとるだろうの。神風の異名を持つ戦アイルー、名を疾風<sup>はやて</sup>。東方ではそれなりに名が通っている戦アイルーじゃが、知つとるかの？」

そう言いながらクロムムへと視線を向けると、彼は少し思い出すようなそぶりを見せ、そして小さく頷いた。

「戦アイルーの中でも特に抜きん出た実力を持つ奴ですよ。先陣切つて斬りこんでいくその姿、名前から『神風』という二つ名を与えられたって聞いてますね」

「うむ。こつちの戦力として疾風も挙げておこう。ワシから話は通しておく故、どこかで会う事があればよろしくしてやってくれい」

渚側の戦力として挙げられるならば、霧夜海と空、未寅と佐助と椿、そして先ほど挙

げられた疾風。だが海と空はこの中では一番戦力としては小さいかもしれない。いや、同じくらいのものとして異が並ぶかもしれない。

彼らの役割はあくまでも情報収集にあるため、戦力として数えるとしても他のメンバーよりも少なくなってしまう。

戦力を増やしたいならばヤマト国にいる自分の部隊を派遣すればいいかもしれないが、そうすれば自分達の動きがどうしても西丑側に伝わってしまう。また部隊を動かすという事はその分だけ国の戦力を失う。

部隊が離れている間に国に何かあれば目も当てられない。あくまでも渚達はヤマト国の人であり、国の外で起こっている出来事に部隊を派遣するというのは難しい。

だからこそ渚側は戦力を欲したわけだ。

そしてまた確認しておくことを確認していき、細かい事もある程度話を詰めていく。そうして数分後、お互いの出すべき事、確認しておく事は全て揃った。

「さて、これまでの事に異論は？」

「ないよ」

「では、お互い合意と言う事で——以後、よろしく頼みます。神倉さん」

「ああ、よろしく。乾さん」

二人が立ち上がって手を出し合い、固く手が結ばれる。両隣にいる二人もそれぞれ立

ち上がって握手を交わし、にっと笑いあう。

ここに、神倉月らと乾渚らの極秘の協力体制が成立する事となった。

話を終えた月達は空間転移によってポツケ村へと帰って行く。渚と巽もそれぞれ鳥の姿となってヤマト国へと帰っていった。といつてもここに来ていたのは使い魔であり、本人らはヤマト国にいるのだが。

最後に未寅が佐助と椿を連れて宿を後にしていく。その際見送りに来た雷河と焰……特に焰に視線を向けてにっと笑いかける。

「また、仲間として行動できるの、焰よ」

「……別に、あんたと一緒に行動するってわけじゃないし」

「まあそうなの。じゃが、こうして再び仲間となったんだ。ワシとしては嬉しく思うぞ」  
「……………ふん」

そう言って笑う未寅から視線を逸らし、焰は鼻を鳴らす。そういう姿も未寅にとつては懐かしく感じる。雷河からすればいつもの事だが、未寅にとっては八、九年もの月日が空いたのだ。

その目はどこか優しさを含んでいる。

「あの日の事は確かに水に流せるようなものじゃないがの」

「……………」

「今もなお自分の中にあるその嗜好は消えてはおらぬようだが、落ち着きはしておるの  
だろう？ その辺り、神倉獅鬼やその雷河に抑えられたか？」

「まあ、暴走はしなくなりましたよ。……相変わらず爆弾は多用してますがね。親父が  
その辺りある程度教育しといたんで」

「ふむ、なら良し。……焰よ、罪は消えはせん。だが償う事は出来よう。六年前の一件に  
関わり、そして今、各地を回って誰かを助けている、という話は聞いておる」

「なっ……いつ？」

「うちには優秀な情報屋がおるからの。少し記録を調べてみたところ、名が挙がってき  
おったわい」

「かっか、と笑う未寅が挙げた情報屋というのは、恐らくあの人のいい笑みを浮かべる  
青年の事か、と焰は舌打ちしたくなつた。確かに彼ならば記録を漁って容易に自分達の  
事を見つけ出しそうだ。」

何せ雷河と焰もまた各地を放浪する医術の心得のあるハンターとして活動している  
のだから。雷河が父と仰いだ獅鬼のような、そんな立派な行為を受け継ぎ、焰もまた医  
術の心得があつたためその技術を高めて雷河と共に行動していた。

彼女もまた過去の罪を引きずり続けていたため、ただ無心にどこか素っ気ない医者として腕を振るっている。

「いい事ではないか。恥じることなど何もない。むしろワシは嬉しく思ったぞ。あの小さく愛想のない焰が、誰かのために行動するなんてのう。かっかっか！ 時は流れるもんじゃない」

まるでそれは孫の自慢をする祖父のよう。……いや、それにしても未寅はまだまだ若いおじさんなので、娘の自慢をする父親、といったところか。そんな未寅を前に居心地悪そうにする焰は、自分を横目で見続けている佐助に気づく。

視線が合えば佐助は視線を外し、未寅の後ろへと下がっていく。そんな彼の動きに未寅は気づき、「やれやれ、まだ心の整理がしていないやつもおるか」と溜息をつく。

「じゃあの。ワシらは向こうで一泊し、明日の朝、出立するわい」

「そうですか。俺達もあいつらの傷の具合を確かめた後に出発するつもりですわ」

「そうか。治療費はワシが持つからよろしく頼むぞ」

「ああ、いや。別に治療費とかそういうのは……」

「遠慮するな。感謝の気持ちも込めておる。受け取ってくれい」

「……はあ、わかりました」

「うむ。じゃ、またの！」

からからとまた大らかに笑いながら未寅は二匹を連れて向かいの宿へと去っていく。そんな背中を見つめながら雷河は焰を見下ろさず、「いい人じゃねえか、未寅さん」と呟

きかける。

「どうして避けるんだ？ あんな人をよ。もう、八年……いや、もうすぐ九年だぜ？」

「……そう。もう、そんなにも経つのか」

「ああ。俺達が出会って八年、とも言えるな。……もう、自分を許してもいいんじゃないか？ あの人、本当に焰の事気遣ってくれているぜ？」

「……でも、他の奴らが許さないだろうさ。あの、佐助のようにな」

ぼつりと眩き、焰は背を向けて宿の中へと入っていく。そんな焰の背中を肩越しに振り返り、雷河は溜息を一つつく。そうして夜空を見上げてみると、満月が淡く光って空を照らしていた。

雲一つない満点の星空に浮かぶ月を見ると、どこか感傷深くなってしまうのは何故だろう。あの星のどれかが、彼の頭に浮かぶ人物の顔となつて雷河達を見守ってくれているかのように感じてしまう。

「……まだ、根が残っていきそうだよな。まったく……あんたがまだ生きていてくれたら、この一件をもう少しうまく片付けてくれていたかもしれないのかな？」

あの日喪つてしまった彼にとつて一番親しかった人物。

気難しかった焰の事も気にかけていた人物。

そして、今もなおその背中を追い続けている相手。



悲しみはまだ少し残っているが、しかしそれを振り切つて雷河はただ前に進んできた。人族ではない彼が、彼のような人物になろうと焰と二人で世界を周つてきた。

「ま、泣き言は言えないよな。これはあいつにとつていい機会だろうさ。上手くやつてみせるよ、親父」

そうして誰かを助け続けた雷河。今、こうして一番近くにいた彼女を助けられるかもしれない機会が巡つてきた。彼女の過去に触れる相手と再び接近する事になったのだ。

ならば、この機会を生かして彼女が抱え続けた重荷を下ろしてやろう。

改めて意を決し、雷河もまた宿の中へと入つていった。

## 48話

ユクモ村に帰ってきたのは昼が近くなる頃だった。竜車へとアップトルを返還し、坂を上がって集会浴場へと向かっていく。その際数人の村人に二人の姿が気づかれると、「おい、あの二人が帰って来たぞ」とか、「おお、無事だったのか」とか、「もしかして討伐に成功したのかしら?」とか声が聞こえてくる。

とりあえずそれに対して返事はせず、真っ直ぐに階段を上がっていった。

そうして集会浴場の酒場の中へと入ると、迅雷が一つの席で朝食をとっている姿が見える。扉を開けて中へと入っていった二人に周りの客達の視線が一斉に集まる。まるで有名人が訪れたかのような反応だが、ある意味それは正解だろう。

何せ二人はユクモ村では有名なあのジンオウガへと挑みに行つたハンターなのだ。それがこうして帰還してきたという事に、客らの関心が向かないはずがない。

迅雷もコップを傾けて酒を呑み干し、ちらりと横目で二人を見つめる。その視線を受け、二人も迅雷へと近づいていき、彼をじつと見下ろした。

「……その様子、なるほど……あの戦いの中で一皮剥けたか?」

「……ええ、おかげさまで。という事で、クエストを成功させてきたわ。これが、その証  
拠」

そう言つてローブの中から雷狼竜の尖角を取り出し、机の上に置く。迅雷はそれを無  
言で見下ろし、そして小さく笑みを浮かべた。

「クック、見事なものだ。秘められた才能はなかなかものと睨んでいたが、よもや本当  
に達成するとはな。よかろう、約束通り認めよう。貴様らは実力者である事をな」

くつくつと笑いながら迅雷が立ち上がり、首をしゃくつて「そら、ギルドの娘に伝え  
るがいい。成功した、とな」と言うと、瑠璃は一度迅雷を睨むような視線を向けて歩き  
だし、茉莉もそれに続いていく。

それを見送り、迅雷はちらりと机の上にある雷狼竜の尖角を見下ろした。それは紛れ  
もなくあのジンオウガのもの。

よくぞ戦い抜いたものだと思う。

それはどちらに対しても、だ。

あのジンオウガも最初こそ二人を侮ったようだが、戦いの中で成長していった二人に  
よく喰らいついた。最後は敗れたが、しかし彼は二人にとつての超えるべき壁としてよ  
く戦つた。あのプレッシャーも二人にとつてかなりの圧力を与えたし、立派に役目を果  
たしてくれた。

そしてあの二人もまた同じようによく戦い抜いた。

心が折れていけば、諦めていけば死んでいたか、無様な撤退を見せることになつていただろうが、そうすることなく一人のハンターとして最後まで戦い抜いた。

それだけでなくどういふわけか死闘の中でめきめきと成長していった。あれに関しでは正直に言えば少し想定外だった。一体何が彼女達を変えたのかは迅雷にはわからない。だが、確かに「何か」があつたのだろう。それがなければ、今もお彼女達は戦つていたか、あるいは敗北を喫していたか。

それは仮定の話という事になるが、その可能性が高かつただろう。

(……なるほど、人というものはやはり興味深い。あの方がどうして人を愛するのか、わかる気もするな。とはいえ己の場合は愛と言うよりも、戦う相手として興味深い、という感情だろうがな)

目を細めながら受付嬢にクエスト達成の旨を伝える二人の背中を見つめる。

迅雷にとつて目上に当たる人物……いや、人ではないが、その相手は人外が存在でありながら人に対して親密な感情を持つている。よく人の姿をとつては人の社会に紛れ込んで過ごすくらいに。

最初こそその感情には理解できなかつた迅雷だったが、今ではこうして人の社会へと紛れ込むという行動をとつている。だがそれは彼の独白通り、強者を求めての事だ。彼

にとつて一番の楽しみは強者と出会い、その強さを観察し、願わくば闘うというものだ。何せ彼は——生粋の戦闘者なのだから。

クエストの話を終え、朝食を注文した二人は迅雷がいる机へと戻り、置いてある雷狼竜の尖角を回収して席に着く。迅雷も酒をおかわりし、それぞれの料理と飲み物が運ばれてくると食事を始めることになる。

だが、会話がない。

お互い口を動かして食べ物や飲み物を咀嚼し、飲み物を飲んでいくだけで言葉を発する事はない。周りの客達がちらちらと様子を窺っているようだが、この沈黙とどこか重苦しい空気に辟易し始める。

それを壊したのは、茉莉だった。

「迅雷さん」

「……………なんだ？」

「何故白銀さん達を探し出そうとしていたのか、今なら訊いても？」

「……………ふむ」

茉莉の問いかけに迅雷は軽く二人を見つめ、そのまま周りの客達を視線だけで見回した。何かを考えているような表情をしていたが、一息ついて唇を軽く舐め、机に頬杖を置いて話し出す。

「そうだな、今の娘っ子達ならば話してもいいだろう。……貴様らは知っているか？  
大砂漠と厄海の話を」

「大砂漠？　確かロックラック周辺の砂漠の事でしたね。そして厄海はタンジアの港から離れた所にある海の呼称でしたか」

「そうだ。最近あれらの周辺では異変が確認されているようだな、件のモンスター活性化と関係があるという噂よ」

「あたし達がロックラックで活動している間も小さな噂は耳にしてたわ。……そんなに目立つようになってきているわけ？」

「ああ、そうだぞ。公には出ていないが、陰では口伝で少しずつ広まっている。強力で危険なモンスターの確認が主だ。ティガレックスやディアブロス、ラテルヒュドラに並ぶかそれ以上の、な」

迅雷が挙げたのは竜の中でも中級から上級に位置する強力なもの。

轟竜ティガレックス。

角竜ディアブロス。

響蛇竜ラテルヒュドラ。

どれも砂漠を中心とした乾燥地帯に確認されるモンスターであり、並みのハンターには討伐出来ないと言われる程、強靱で凶暴性を秘めた竜種だ。茉莉が角槍ディアブロス

を持っているのは、ロツクラックにいる頃にディアブ羅斯のクエストをこなしたということ。それは下位クラスのものだがやはり強力な相手だった。

ユクモ村にいた間も桐音と共に上位クラスと戦ってきたが、やはり厳しい戦いだった事を覚えている。そのおかげで角槍ディアブ羅斯へと強化する事が出来たのだが、二人で戦った時よりも楽に感じられたのはやはり仲間が増えているからだろう。

二人で戦った時はジンオウガの時よりも長く、半日は戦っていたのだから。

「厄海……あちらの海もまた荒れておるしな。ラギアクルス、ラギアクルス亜種、ガノトスと海から確認されるモンスターが増えている。……それも上位では収まらない程の、な?」

「……G級?」

瑠璃の呟きに迅雷はにやりと笑みを浮かべてみせた。

「どうしてこうも強力なモンスターが現れ出したのか。……娘っ子、貴様らにわかるか?」

「わかるわけ、ないじゃない。あたし達はただのハンターなんだから」

それもそうだ。彼女らは一介のハンターに過ぎない。

それを解明するのは古龍観測所などをはじめとするギルドの学者たち頭脳派の役目。肉体派の彼女達に何かわかるはずもない。

「貴様はどうだ？」

だが迅雷は瑠璃から茉莉へと視線を向ける。彼女もハンターだが、読書家でもある。いつもポーカーフェイスをしている彼女はその趣味のおかげで少しは頭が回る。

少し考えた茉莉はぽつりと、

「蛇竜種らの活性化と繋がりがありませんかね？」

「ほう？」

「先日のリオのつがいの事も併せて考えれば、その大砂漠と厄海の一件も繋がりがあるかと」

「なるほど。して、その繋がりの根本には？」

「……馬鹿馬鹿しいかもしれませんが、六年前の一件のような、何らかの意思がある……ですかね」

「……………ク、クツハツハハハハハ!!」

茉莉が答えた事柄を聞いた迅雷は、突然天井を仰ぎながら今までの彼をぶち壊すかのような大笑いをします。その笑い声は酒場中に響き渡り、瑠璃と茉莉だけでなく周りの客達も呆けた顔で迅雷を見つめる。

しばらく笑い続けた彼はばんばん、と机を叩き、目に浮かんだ小さな雫を指で拭くと、また小さく笑いながら何度か頷いた。



「……いや、すまない。久々にこれだけ笑ってしまうとは己も思いもよらなんだ」  
「……そうですか」

「どうしてそんなに笑ったのよ？ やっぱ茉莉の話が馬鹿馬鹿しく思えてしまったわけ？」

「……いいや？ むしろ逆よ」

「逆？」

「ここから先は外で話すのでしょうか。注目を更に集めてしまったようだからな」

首をしゃくつて入口へと示しながら迅雷が立ち上がる。確かに彼の言う通り注目が集まってしまった。主に迅雷のせいだ。

朝食も食べ終わっていたのでそれに異を唱えず、会計を済ませて三人は酒場を後にする。階段を下りていき、広場に出るとそのまま森の中へと進んでいく。

「ちよつと、どこに行くのよ？」

「なに、人目を避けたいのにな。これから己が話す事はあまり人に聞かれるわけにはいかないものだ。……それを聞きたいならばついてくるがいい。人目を避ける、という事を怪しむならば、話はこれまでだ」

肩越しに振り返り、両手をポケットに入れたまま彼はそう言う。年若い女二人を人目を避けて森へと連れ込む一人の男、というシチュエーションは十人が十人怪しい、と口

を揃えて言うだろう。

瑠璃が警戒するのは正しい。茉莉も表情こそ変えていないが、じつと迅雷のその瞳を見つめて彼の意志を計っている。

「どうするの、茉莉？」

「……行きましょう。彼の話は、聞かなければならない気がします」

彼を信用している、という訳ではないが、彼には何かがある気がする。普通の人には持ち得ないようなあの気配。ただの実力者という枠には収まらない何かがある。

それを確かめるためにも、ここはあえて彼の誘いに乗った方がいい気がした。

茉莉のその意志に瑠璃はしばらく考えていたようだったが、彼女も迅雷の言葉に乗る事にした。二人が頷くと、迅雷はにやりと小さく笑い、森の中へと入っていく。

村から数百メートル離れた所で迅雷は立ち止まる。

そこは鬱蒼と木々が生える場所であり、日光もそれなりにしか差し込まない少し薄暗い場所だった。また村からも距離がある上に木々によつて向こうから何かあったとしても見えづらい。

まさに彼から何かしようものならば気づかれないような場所。

そこで迅雷は二人に振り返り……一本の木にもたれかかって腕を組む。

「さて、話を続けようか。……なんだ、その目は？ 本当に己が何かするとも思ったか

「？」

「……そういう疑惑を感じないでも思ったわけ？」

「安心しろ。別に何かする気など毛頭ない。己はお前達にそう言う感情を抱く事などありはせん」

「信じろと？」

「クック、面倒くさい娘つ子だな。なら疑惑を抱き続けたままでいいから、まずは話を続けようではないか」

「首を傾げてまた薄く笑ってみせると、瑠璃も腕を組んで黙り込み、首をしゃくつて話をしろと促した。」

「さて、モンスターらの活性化について貴様は何らかの意思が絡んでいる、と言ったな？」

「ええ」

「それは何故だ？」

「……六年前の一件に関わった人が言うには、人語を解する古龍がいたという話でしたので。しかも古龍の上に立つ何者かの影があるとかないとか」

「……クック、なるほど。つまり、その何者かの意思が絡んでいると貴様は言うわけだ」  
それに茉莉は頷くと、また迅雷はくつくつと肩を揺らしながら笑いをこらえている。

だがそれは彼女を馬鹿にするような雰囲気はなく、何かおもしろいことを考えて笑い出しているかのよう。

そして彼は――

「正解だ」

――と、にやりと笑みを浮かべながら一言告げた。

「これはな、*“世界”*の意思だ。*“世界”*が再び貴様らに牙を剥いている。これから先、東方は荒れ、人はそれに立ち向かわねばならん。……特に、シュヴァルツの末裔は戦わねば生き残れんだろうな」

「な、なんですって……？ どういうことよ!？」

「言葉通りの意味だ、娘っ子。これは東方を舞台とした生き残りをかけた戦争よ。人と、竜との、な。だがこうして*“人”*と挙げているが、実際のところは違う。*“世界”*はシュヴァルツの滅びを望んでいる。こうして東方で人族がシュヴァルツに対して敵意を向けているが、それも*“世界”*の意思に他ならぬ。……もう少し切り込んで言えば、人族からもシュヴァルツを抹殺するように促しているともいえるがな」

「……つまり、人からも竜からも殺させるようにしている、と言うわけですか？ その、

*“世界”*が」

冷静に茉莉が迅雷に問いかけているが、その手は強く握りしめられている。表情には

出していないが彼女も瑠璃と同じく腹の中では少しづつマグマが煮えたぎり始めているようだ。

そして迅雷は頷き、

「それに抗いたければ強くなるしかない。シュヴァルツを守りたければ戦うしかない。……故に己はそれが出来るだけのハンターを探しているというわけだ。白銀昴を探していたのは、奴がシュヴァルツの女を娶っている事を知っているからだな。どれだけ奴が強くなっているのか、確かめるためにあのようなクエストをちらつかせて各地を巡ってみたが……釣れはせんかったよ」

「そういう、理由でしたか」

彼を抹殺する意志ではなく、彼の強さを改めて確かめるための搜索、という理由。それが本当ならば彼に敵意はなかったということだ。

しかし気になる点はまだある。

すなわち――

「ですが、どうしてあなたはそう言う事を知っているんです？

“世界”の意思、だなん

て、普通は知り得ることではないと思うんですがねー？」

「そ、そうよね。普通そんなこと言ってる奴がいたら、頭おかしい奴って思われるわよ」

「……………」

二人の言葉に迅雷は沈黙し、じっと二人を見つめる。

彼女達の言っている事も尤もだ。普通なら信じるはずがない。というよりその相手の頭を疑う内容だ。だが迅雷は最初からずっと真剣な表情、声で語り続けている。嘘を言っているように見えぬ、しかし内容はそれを疑ってしまうようなもの。

どうしてそんな風に語れるのか。疑問に思うのも無理はない。

「……それはな」

刹那、迅雷から凄まじい覇気が放たれる。それに伴って彼から高い雷のエネルギーが放射され、組んでいた腕を解きながら数歩前進する。荒れ狂うような電撃の奔流に他社を圧倒するような威圧感。

二人はこのような気配を知っている。

いや、つい昨日感じたばかりだ。だがこれは昨日のものよりも格段に上の領域。

吹き抜ける強風に目を閉じ、顔を腕で庇い続けた二人は、薄目を開けて迅雷を見つめる。

『……っ!?!』

そうして見たのは、迅雷の姿ではなかった。

先ほどまで彼が立っていた場所には、じっと二人を見下ろしているジンオウガの姿があったのだ。その現象に二人はまたしても言葉を失ってしまう。

『己が、その竜側に属する者だから、という理由よ。……そう驚く事でもなからう？ 貴様らは知っているはずだ。竜が、人の姿をとって共に行動し、戦ったという事実があるのだからな。……なあ？ 暁・フレアウイング姉妹？』

「……っ、知って、いたのね……？」

二人の本来の姓を彼が口にし、瑠璃が冷や汗を流しながら彼の顔を見上げると、また彼は含んだような笑みを浮かべてみせた。

こうしてジンオウガの姿をとった彼からは覇気こそは落ち着いているが、敵意や殺意は全くない。身構えてしまった茉莉だったが、それを解きながらじつと彼を見上げる。

以前彼が去っていく際に感じ取った雷撃の気配とその奥に見えた大きな影。それはこういう意味だったようだ。

よもや人の姿をとったジンオウガとは……こういう人は三人目だろうか。

『だがこれでわかったらう？ 己は竜側に属する存在。故に知り得る。モンスターの活性化の裏に潜む意思、そしてそれを達成させようという意志があるという事をな』

「でも、同時に疑問も生まれますね。なぜあなたはそれを私たちに伝えるんですかねー？ あなたの言葉が本当ならば、竜側もシュヴァルツの末裔には消えてほしいと思っっているでしょうね。……ですが、あなたはまるでその意志に抗ってほしいように感じられます。でなければ昴さん達の実力を確かめるためにわざわざ探しに回らず、そして私

達にこういう事を話をする事はないでしょうからねー」

『クク、そうだな。その疑問も尤もだ。……己は別にシュヴァルツの末裔がどうなろうと知った事ではないのだ。生きようが滅びようが、な』

その言葉に、二人はかつて共に戦った彼女の言葉を思い返す。

クロム達と言っていたが、彼女もまたシュヴァルツが生きようが死のうがどうでもいい、と語っていたらしい。だから獅鬼と協力体制を組み、共に戦ってくれたのだと。今はどこで何をしているのかはわからないが、東方の事も彼女は知っているのだろうか。『だが己の上にいる奴がどうも人側に肩入れする変わり種だからな。仕方なく己もそれに続くようにして戦えるような強者を探しているだけに過ぎん』

「人側に肩入れ？ それって誰よ？」

『正体は言えん。……そうだな、食えぬ狐、とでも言おうか』

「狐？ ……九尾、ではないですよね？」

『クツク、九尾、か。残念ながらそれはハズレだ。それに己はあの九尾の女狐はあまり好かん』

小さく首を振りながら鼻を鳴らす迅雷の様子から、本当に九尾の事はあまり好かないのだろう。というか、あの伝説に語られる九尾と知人だというのか？ その辺りが気になったが、『九尾の事は置いておくとして』と話を切りかえてくる。



『娘っ子、貴様らは更に上の領域を目指すか?』

じつと二人の目を見つめて迅雷はそう問うた。

その真剣な眼差しに、二人はごくりと唾をのみ込み、そして強く頷く。元よりそれに異を唱える気などない。自分達は今以上の実力を求め続ける。そうして彼らの背中を追い続けるのが目標なのだから。

『ならばロックラック、またはタンジアの港を目指すがいい。そこに、貴様らが更なる上へと登るための道が用意されている。……懐かしい顔にも会えるやもしれんしな』

「どういうことですかね?」

『……なあに、深い意味などありません。……ただ、どうやら己や貴様たちが動くまでもなく、どうやら他の奴らが裏で手回しをしているようだな。貴様たちの願いの一つは、どうやら叶えられる傾向にあるらしい』

やれやれとまた首を振りながら息をつく。それに首を傾げる二人だったが、迅雷はまた体から力を発し、光に包まれて人の姿へと戻っていく。軽く乱れた髪を少し手櫛で整えると、ぐるんと首を回しながら肩を揉んでいる。

そうして体の調子を少し整えて息を吐き、纏っているコートに両手を入れて木にもたれかかっていった。

「あとは、貴様らの選択のみ。このままあの村に留まるのか、あるいはどちらかの道を進

むのか。……停滞するのか前進するのか。前進するというならば、それ相応の覚悟を決めることだな。並大抵の覚悟では、あれらの前に敗れ去るのみよ」

「……止まるか進むかって？ そんなの、考えるまでもない事よ」

「そうですね。私達に後退はありません。進んで何かを得られるというならば、私達は進むだけです」

その瞳に迷いはない。二人の意志は固く、飽くなき強さの果てを求める戦士の顔をしていた。その様子にまた迅雷は小さく笑みを浮かべる。彼にとってその顔は少し好ましいものだったから。

「よかろう。ならば進がいい。だが、気をつけることだな。……いや、モンスターに関する事ではない。人に関する事だ」

「人？」

「言っただろう？ シュヴァルツの末裔を狙うのは竜だけではない、人もまた奴らに消えてほしいと願っている。世間を騒がせる辻斬りもまた、その内の一つよ」

「まさかあんた……辻斬りの正体を知っているの!？」

「知らん」

瑠璃が叫ぶが、迅雷はただ一言告げてはつきりと否定する。肩透かしを食らったように瑠璃が少しずっこけるが、そんな事など気にする風もなく迅雷は両手を広げて首を

振ってみせる。

「その正体は知らんが、知人の情報だ。最近タンジアの港付近で辻斬りが活動している気配あり、とな。実際あの辺りでまた犠牲者が出ているし、領主も死んでいる。恐らくはそいつらの仕業だろうよ。辻斬りも捕まえたければ、そっちに向かうといい。……関わりたくないならば、ロックラックに向かうといい」

「そう、ですか。それにしても、どうしてそこまで私達に話を？」

「……なに、貴様らの成長ぶりが興味深かっただけの事よ。それに、貴様らと繋がっているあの者らにも情報を伝えたとしても、己は一向に構わん。むしろそれを知り、あの者らがどのような反応を示すかも興味深いしな」

微笑を浮かべた迅雷だったが、不意にその視線が横へとずれる。指を立てて一点を示すと指先から一筋の雷光が放たれた。森を裂いて空を走り抜けるそれはある木を貫き、遅れて電撃が光の後を追うように音を立てて走り抜けていく。

突然のその行動に二人が驚き、茉莉はその光の先を振り返って見つめた。

「……ふむ、逃げたか」

「まさか、誰かが？」

「気配を巧みに消していたが、逃げ足も速いようだな。よもやこんなところまで追って話を聞くとうするとは、よほど己の話に興味があったらしいな、あの鼠は」

迅雷の話を盗み聞きしていた輩がいたようだが、しかし彼が撃ち抜いた場所はかなり距離が離れていたように見える。およそ十メートル前後はあつたかもしれない。そこから話を聞けるのだろうか。

「だとすると随分と耳がいい鼠という事になりますね」

「あるいは目がいいのかもしれないぞ？　読唇術を持つていれば、聞こえずとも言葉を解する事は出来るからな。……まあ、そうすれば己の本来の姿をとつていた時の会話は解せぬという事になるが」

ジンオウガの姿をしていた時はテレパシーのような、あるいは粒子を使つて言葉を伝えていたため読唇術は意味がなかった。それすらも盗み聞きしていたとなれば、地獄耳とかいうレベルじゃないだろう。

「一体誰が盗み聞きを……」

「さてな。あの気配の消しよう……それ相応の心得がある何者か、という事になるだろうが、ふむ……己ではなく、貴様らを監視している何者かがいるのかもしれないぞ？」

「あたし達を？　何で？」

「それが己にわかるはずもなからう。己の場合、嗅ぎまわる鼠がいるならば捕えて記憶を吹き飛ばすだけの刺激を与えてやるが、貴様らにはそれは出来んだろう？　それに、貴様らが知らないだけで、貴様らを嗅ぎまわるだけの理由があるのかもしれないぞ？」

「……竜魔族という種族だったり、あるいはポケケ村にいるあの人達の事、ですかね」  
「まさか、知られて……いや、可能性の話か。でも、一体どこの誰があたりし達の事を調べて得するつてのよ？」

「それはわかりませんが、以後気をつけていくしかないですね」

肩越しにもう一度振り返って辺りを見回しながら呟き、そして迅雷へと向き直ると、彼は木から離れて二人から離れ始める。どうやら話をするのは以上らしい。

そんな彼を呼び止め、茉莉はじつと迅雷を見据えながら問いかける。

「昨日戦ったジンオウガ……もしかしてあれはあなたの……」

「ああ、弟子の一头だな。……なんだ、その顔は？ 別に気にするようなことは何もない。あれはお互いの生死を賭けた戦いであり、貴様らはそれに勝ったというだけの事」  
「それは言いかえれば、私達が死んだ場合も良しとするつて事ですかね？」

「はつきりと言えばそうだな。貴様らがもし敗れる事があれば、貴様らはそれまでのハントーだったというだけの事。……どうやら、そうはならず成成長したようだかな」

縁のあるジンオウガを放ち、自分がクエストを用意して二人を指名して行かせる。

そのような手間を経て二人の実力を図ったというのか？

何という事実。一瞬怒鳴ってしまいそうになったが、それを瑠璃は堪えた。例え文句を言ったとしても彼は動じないだろうから。

この先起こりうることは今回の戦いよりも厳しいことが待っているだろう。それへと至るまでの登竜門を用意し、試しただけ。これを越えられないというならば、二人はまだしばらくこの領域をたむろし続けることになっただろうから。

「そのまま、成長し続けるがいい。その先に何を望むのかは知らんが、貴様らの目的を達しようというならば、結局は力がなければ話にならないのだからな。生き残るにしても、望みを叶えるにしても……最終的には己の力が物を言う。掴み取りたければ、勝ち続ける。さすれば、いずれ貴様らは『世界』の意志に抗う日が来るだろうよ」

そう言い残し、迅雷は森の奥へと走り去っていった。

その青い背中を見送り、二人は顔を見合わせてしまう。最初こそ警戒したが、想像以上にとんでもない話を聞いてしまった。だが実りある話だったかもしれない。

何せ普通ならば知り得る事はない事を知ってしまったのだから。

ポツケ村に戻つてくると、広場で十兵衛と会う。二人に気づいた十兵衛は「あの、大丈夫だったツスか？」と声を掛けてきた。何やら二人を気遣うような口ぶりだったので、どうかしたのか？ と訊いてみると、

「なんか迅雷さんでしたツスか？ その人に連れていかれていったって聞いたツスが……」

「ああ……連れていかれたっていうよりついていった、ですね。ちよつとした話をしに

行っただんですよ」

「そうなんスか？　なんかただ事じゃない雰囲気だった、とか酒場の人達が行っていたツス」

「……まあ、ただ事じゃなかったかもしれないね」

なにせ突然迅雷が大笑いをし出したし、普通にしているも彼はジンオウガというだけあって周りを威圧するような覇気を持っている。そんな人物に連れていかれたともあれば気になるのも不思議ではない。

……その中にいたのだろうか、あの場面を盗み聞きしていた鼠は。

それから二人は鍛冶屋に向かっていき、ジンオウガの素材で何か作れないだろうかと調べに向かった。その背中を十兵衛は見送り、自分が利用している宿へと戻っていった。

バチツ、と小さく何か弾けるような音が微かに広場に響いたが、それに気づいた人は誰もいなかった。

○

タンジアの港付近、空間転移によってここへとやって来た月は手にしている資料を確

認する。ここから東に進んだところにある領主が、最近各地で起こっている領主殺しの標的にされる可能性があるという調査結果が出ていた。

もしこれが事実ならば、これを阻止し、その上で下手人を捕えておきたいところだった。

まずは拠点の確保をするためすぐそこにある町へと入り、宿をとろうとする。

そう時間もかけずこの町の宿の一つにある部屋を確保し、続けてこの領主について調べていくことにした。

そうして得られた情報は、確かにこの領主も少し粗暴が悪いという事が確認された。各地の村の税を上げ、払えなければ若い娘を対価として奪っていくという行為も何度かしているとの事だ。

先代の領主が死に、その息子が領主へと付いてからそういう行為をしだし、住民の不満を高めているらしい。だが最近はそれも落ち着いているとの事。

それはやはり各地で起こっている領主殺しが原因だろう。標的にされないようになさくしていると考えられるが、住民からすればあの領主も標的となってくれ、と陰では思っているだろうという事が確認された。

(なるほど……住民からすれば悪政が消えるのだから当然といえば当然か)

傍から見れば殺人だろうが、住民にとっては救世主のような存在というわけだ。



そう考えていると、

「——っ」

はつと息を吞んで背後を振り返る。だがその先には誰もいない。

誰かに見られているような気がしたが……いや、気のせいではないのかもしれない。いよいよその時が迫ってきたのだろうか。

(アタリ、か)

領主殺しと、先日遭遇した何者かが口にした存在——自分を殺しに来る戦士。

これが同一のものならば、今の視線の主はそれなのかもしれない。

月は周囲の警戒を怠らず、領主の屋敷がある丘を目指す事にした。

「……お前はあつちに回るがいい。我はあれに用が出来た」

「……いいの？ 自分で手を下さなくて？」

「構わん。豚を始末するより、獅子と戦う方が心躍るといふものよ。よもやこんな所で会おうとは思いませんかった」

「あ、そう……んく、んく、ぷはあ……こつちとしてもさ、豚を殺すのは好かないんだけどな」

「我慢せい。我が束ねる国に豚はいらん。屑どもを早急に排除し、その上で我が国を作

る。そのための掃除よ。わかっておろう？」

「はいはい。じゃ、行つてくるかな」

酒瓶を片手に女性が路地裏の奥へと消えていく。

そして彼は、じつと月の背中を見つめ小さく笑みを浮かべる。

湧き上がる感情は歓喜。

変化しているというのに、彼女の真の姿を見据えた彼はそれを抑えられずにはいられなかつた。今すぐにでも飛びだして彼女に声を掛けたいが、それを堪えて彼もまた路地裏の奥へと消えていった。

仕掛けるならば、今夜。

そう自分に言い聞かせて彼は準備を進めることにした。

そうして日中は何事もなく過ぎていき、満月が浮かぶ星空の下。

月は目的地である領主の屋敷の近くまでやってきていた。かの家は見晴らしのいい丘の上に建ち、周りを手入れされている庭園が囲んでいる。殺しがいつ行われるかわからないため、近くに待機するしか出来ないのが現実だ。

正面から入り、警備しますと言えばいいのだろうが、彼女としても悪政を布いている人物を堂々と警護する気にはなれなかつた。そうすれば何かと面倒なことになるかも

しれないためだ。

ならば陰から守った方がいいかもしれないと、こうして身を隠している。

そうして時間が過ぎていき、今日は何もないのでろうかと思つた時、周囲の雰囲気に変化した。

(……結界!?)

一瞬にして展開されるそれに驚き、彼女は臨戦態勢に入る。

広範囲にわたつて人払いと空間閉鎖の二重結界が展開され、月はその中へと閉じ込められることになつてしまつた。

空間閉鎖結界。

これは空間の要素を含んだ結界魔法であり、内外の影響力を無視するという高等技術を用いられている。結界内で起こつた事は外から認知されず、何かを破壊したとしても結界を解いてしまえば何事もなかつたかのように復元されている、という代物だ。

つまり彼女が本気でこの中で暴れたとしても、その戦闘痕は結界が解けた後は何もなくなつてしまう。

これだけのものを一瞬にして、それも月に知られずに展開できる人物なんてそうそくいやしない。これは、まぎれもなく実力者だ。

そしてこれを作り上げた術者が、この隔離された空間内に存在しているという事でも

ある。

「——いい月夜だな」

不意にそんな声が聞こえてきた。

振り返れば真紅に染まった髪をなびかせながら、一人の青年が聳える一本の樹の向こうから姿を現した。全く気配がしなかった。まるで一瞬にしてそこに現れたかのよう

に。  
歳は二十代だろうか。しかし魔族の気配がするため外見的には二十代、という風だろう。

金色の瞳はじつと夜空を見上げており、月へと向けられていない。

服装は黒い和服を纏い、両手は組まれて袖の中へと入れられている。しかし首からはシルバーのチェーンが提げられているという東西の要素が同居していた。

「……何者だい？」

「このような月夜はいい舞台を演出していると思わぬか？ ……そう、いつだって月是我らを見守っている。何年、何十、何百……いや、何千年と変わらぬ。繰り返し空へと上がり、消えていく。あれはそうやって繰り返し世界を照らし、巡りゆく」

月の問いかけに答えず、彼は彼女へと語るように言葉を発し続けている。

まるでその満月と星空で感傷に浸っているかのような瞳をしている。戦意が微塵も

感じられず、しかし他に人の気配がないので彼こそがこの結界を作り上げた人物だとい  
うのは間違いないのだが……どういうつもりだろうか。

警戒している月へと、彼はようやく視線を向け、そしてにこりと笑顔を見せてきた。

「真<sup>まこと</sup>、今宵はいい夜となりそうだな？ 本来ならば巡り合う事のなかつた者同士が出会  
い——そして殺し合う。そのような日に、貴様の名を関する物が空にあるのだからな、  
神倉月よ」

はつきりとした確証を持つて彼は月の名を呼んだ。それに一瞬驚きはしたが、しかし  
納得する。

彼は、神倉月という人物を殺しに來ているのだと。

変化している自分の正体を知つてしまふだけの實力を持つているのだと。

ならば油断などする事はない。

月は変化を解き、本来の自分の姿をそこに曝け出す。彼女の持つ蒼い長髪が風に揺  
れ、深海のように蒼い瞳がじつと青年を見据え、改めて「何者だい？」と問いかける。

「私の事を知つているんだ。君こそ、名乗らないと失礼というものだろう？」

「フハハ、確かにそうだ。では我が名を心に刻みつけ、そして存分に死合おうぞ」

そう言つて彼は、首から掲げているペンダントを取り払う。

刹那、冷たい殺気が月へと向かい、刺し貫いていった。その殺意と覇氣の奔流に呑み

こまれて形のいい唇から一瞬呻き声が漏れ、しかしそれを堪えて彼女もまた気を発して対抗した。

(馬鹿な……この気配、彼はまさか……っ!?)

生物の本能から恐怖心を煽り、そして敵対する者を全て抹殺せんとする殺意。

これらを持ち合わせる気配なんて一つしかない。まさか彼は、それに連なる存在だといふのか？

だがその疑問は、彼の口から発せられた名前により更なる疑問を生み出す事となる。

「我が名は天王寺冥夜。しかしてこれは仮の名。この時代に生きる仮初めの名だ。我が名は——」

名乗り終えた彼と、神倉月の決死の殺し合いが幕を開ける。

空に浮かぶ満月が見守り続ける夜。

別の場所で二人のハンターの成長を見守ったその満月は、今宵もまたその死合いを見守る事となる。いつだって天気の良い夜空には、月が浮かび続ける。天上で淡く光り続け、下界の者らを見守り続けるのだ。

その理が今日も、そしてこれからも変わらぬこの日、運命が動く。

## 49話

その領主の屋敷の前、門を警備している二人の兵士が入れ替わりとしてやってきた兵士の二人と交代していく。最近東方で起こっている領主死亡事件は各地の領へと伝わっており、悪政を布いているという心当たりがある領主達はこぞって屋敷の警備を強化していた。

仮眠をしていた兵士が門番を交代し、異常なしという言葉伝えて二人の兵士が門の脇にある扉を開けて中へと消えていく。

そして二人の兵士は暗い丘を見つめる。月明かりによって照らされているが、しかし町と違い、灯りは満月と、門の脇にあるかがり火だけだ。

こうして警備を強化して数週間が経つが、襲撃者はない。しかしそれはここが狙われていないだけであり、他の領では間をおいて領主が死んでいる。しかしそれはここが狙われ

殺人というケースが多いが、毒殺や事故死というケースも確認されているため、油断は出来なかった。

「はあ……最近ぴりぴりしているよな、領主様」

「そうだな。その鬱憤を晴らすかのように、毎日励んでいるようだが」

「らしいなあ。使い回しでやっているようだが、それでもいつ死ぬのか、と癩癩起こしているし……はあ、なんかやってられなくなってきたな……」

「まったくくだ。いつまでこんな事が続くのやら。いつそのこと、本当に現れてくれないかな」

毎日毎日屋敷を警備し、休憩時間も屋敷内を回っている領主が手ごろな人を見つけては当たり前散らし、町だけでなく屋敷内の空気も悪くなり始めている。実際のところ屋敷で働いている人達も領主に対して不満はあったのだ。

中には今すぐにもやめてやる！ と心の中で叫んでいる者もいるのだが、実際にやめることは出来ないでいた。

町の人と同じように、ここで働いている人達もまた領主に対して不満を募らせている。

だがそれは一部であり、領主と癒着がある人物は領主の甘い汁を今もなおすすり続けているのもまた事実だった。

だからいつかこの領主から解放されたいと願っていた。

そして——それは叶えられることになる。

「——呼ばれて、飛び出て、こんばんは……」



暗がりの中から一人の女性の声が聞こえてくる。

すぐさま門番は手にしている槍を構えて「何者だ!？」と声を上げる。それはゆつくりと暗がりの奥からゆらゆらと左右に揺れながら屋敷へと近づいてきた。右手には酒瓶を持ち、ぐいっと残っている酒を呑み干して口元を拭い、纏っているローブの中へとしまった。

「少し領主様に、御用がありました……」

「このような時間に用だと? 何だ? ここで聞かせてもらおうか」

槍を構えながら門番の二人は警戒を解く事はない。こんな時間に領主に用があると  
いう女性……どう考えても怪しさ満点。というよりも、もしかするとこの女性が……。

「んん? ここで言っちゃつていいのかな……?」

「ああ……聞かせてもらおう」

冷や汗をかきながらそう問いかけると、彼女はローブの中に手を入れ、

一瞬にしてその腕がぶれた。

刹那、二人の視界はずれる。普通に立っていたはずだが、どういうわけか世界が数センチずれただけだ。

そのままゆつくりと女性を見つめていたはずなのに、暗い地面へと世界が落下していった。

「——領主の命、貰い受けに来た」

痛みを感じる間もなく、門番の二人は体から別れを告げて命を落とす。それを見下ろした女性は続けてロープの中から白い狐のお面を取り出し、顔に嵌める。

すると彼女の背後から音もなくもう一人の女性がやってくる。その顔には般若のお面を嵌めており、素顔が判別できないでいた。

「ほんま、鮮やかな手並みやなあ。その点は尊敬するわ、天」

「……利だつて実力あるだろうに。謙遜は良くない」

「くす、おおきに。それじゃあ、乗り込もうか」

彼女の言葉に、天と呼ばれた女性はお面の下でくすりと冷たい笑みを浮かべる。さっきまでゆらゆらと揺れていたその体はすっかりと大地を踏みしめて立っている。気の抜けたような雰囲気はもうなく、左手に持つ一振りの刀をまた抜き放ち、固く締められている門を両断した。

蹴り破るのでも殴り飛ばすのでもなく、その刀を以つてして斬り、穴を作つて中へと堂々と侵入する。当然ながら突然門が斬り破られたことで近くを警備している兵達が騒ぎ出す。

「な、なんだあ!?!」

「賊……賊だ!」

「侵入者だ、侵入者だぞおつ!？」

「出会え、出会ええええ!!」

あちこちからそんな声が響き渡り、そしてその声の主は片っ端から斬られていく。狐面と般若を被った女性は左右に散り、騒ぎ出す兵士達を斬り殺す。

領主に仕えている者も、領主に反意を持つ者も関係なく。

「た、助けてくれっ……!」

「いやだ、死にたく……が、はっ……」

首を刎ね、肩から袈裟斬りにし、情け容赦なく刀を振るっていき、兵達は次々と物言わぬ肉塊へと変えていく。背を向けて逃げ出した者には、氣刃を放って遠距離から斬り殺す、という手段を用いていた。

そうして時間をかけず、門の付近から屋敷までの兵達は全滅。

手入れされて美しさを保っていた庭園は、撒き散らされた鮮血と肉塊によって赤く染め上げられていき、生臭く、鉄分を含んだ臭いを辺りに充満させ始める。

生き残りがいないことを確認した二人は、屋敷内へと侵入していく。騒ぎは伝わっているようで、すぐさま数人の兵士が斬りかかってきたが、全て一太刀の下に返り討ち。

奥へと進んでいけば脇の部屋に振るえている女中などが確認できたが、そちらは無視。

ずんずんと奥へと進んでいき、抵抗してくる兵は斬って捨て、逃げようとした兵士も背後から閃剣で屋敷ごと斬り捨てる。

その度兵士の悲鳴が響き渡り、女中たちも悲鳴を上げて震えている。彼女らには手を出す事はなく、しかし般若のお面の下でぶつぶつと何かを呟き続け、それに従ってそれが動いていた。

ほたり、ほたりと兵達の血が流れ落ち、それが女性の呟きに従って動いているようだった。それはゆつくりと女中たちが隠れている方へと進んでいき、淡い光を放つて何らかの力を行使していた。

「……………あ」

それを受け、女中らは意識を失ったように倒れ伏し、そのまま動かなくなってしまう。それを確認し、二人は更に奥へ。目標を、始末するために。

「く、くそ……………っ！ こんな、こんなバカなことがっ!？」

慌ただしい雰囲気の中、一人の男が数人の共の兵を連れて屋敷を駆けていく。裏口へと一目散に向かい、この惨劇から逃げ出そうとしているそれは、この屋敷の主である。

でつぷりと肥えた体を包んでいる袴姿はここまで走ってきた事で少し着くずれしており、しかしそれを気にする暇もない程に彼は今、恐れを抱いていた。

殺される。

死にたくない。

その思いが心を埋め尽くし、この死地から一刻も早く退散しようとしている。

自分の今までの行いが、その原因となつていているというのに。彼のせいで、彼を守るために、既に多くの人が死んでいるというのに。

だから、彼は逃げることを許されない。

「——どこへ、行きはるん？」

闇の中からよく通る声で彼女はそう呼び止めた。

それはまるで、死神の呼び止めのようで、「ひいっ……!？」と裏返った声で領主は呻きながらびくりと体を震わせる。瞬時に彼を守っていた兵達が抜刀し、じつと声のした方を睨み付ける。

「……生きたい？」

そうして背後からも女性の声が聞こえてくる。しかも領主に向けて問いかけるように。

闇の中からゆっくりと姿を現したのは狐のお面を被った女性。左手に納刀している刀を携えながら小首を傾げてくる。

「な、なに……？」

「生きたい？ ……そう豚に訊いてみたんだけど……ああ、豚だから答えを聞くまでもないか」

「……い、生きたい……っ、生きたいに、決まっているだろう……っ!」

「ああ、そう……」

何度か小さく頷く狐の女性。

そんな彼女へと指差し、領主は「わ、わしを殺せばどうなるか……わかっておるのか!? わしは、わしはなあ……!」と喚き散らし出すが、般若のお面を被った女性がすとと聞の中から姿を現し、

「——黙りい、豚」

冷え切った声でそう言い放つ。

殺意が籠ったその言葉に、またしても領主は震え上がる。それだけでなく、彼を守る兵もまたごくりと息を吞んでしまった。

「自分の好きなように女を囲み、そんな風にてつぷりと肥えるくらいいたらふく飯を食つて、しかし領民には苦しい生活を強いる。……くす、清々しいくらいのクズつぷりやなあ。久々やわ、そういう豚と出会うのは」

「というわけで——逝こうか?」

「ひい……っ!」

前後からぶつけられる冷たい殺気に領主は今まで以上の怯えを見せる。涙を流し、脂汗を流し、鼻水に涎を撒き散らし、無様に尻もちをついてしまう。

「は、早く……早く斬れ！ こいつらを斬るんだあつ！ で、出会え、出会えええええ！ わしを、わしを守るのだああ！」

「……っ！」

震える指先で二人を示し、兵達へと命じた領主。

そんな様子を見て狐のお面をした女性はやれやれとため息をつかずにはいられない。ここままで醜く無様な姿を見せられては気分が滅入ってしまうというもの。しかしそれでも斬らねばならない。

どうしたものか、と考えてみることにし、そして一つの本が頭に浮かんだ。あれも勸善懲悪な物語を紡いだ本だったっけ、とうんうんと頷く。

一方兵達も領主の言葉に一瞬びくついていたが、意を決して二人へと斬りかかっていく。それを迎え撃つように二人も抜刀し、

「……一つ。非道なる、クズがのさばる、月の夜」

「……口上、か。……くす、ここは乗つたらうか。……二つ。不浄なる、豚に生きる、資格なし」

狐と般若が兵を斬り捨てながら詩を詠む。赤い花が咲き、それを咲かせたものは物言

わぬ存在となつて倒れ伏せる。領主を守る存在は次々と死に、助けを求めた声は届かない。

何故ならば、もう……屋敷の兵は全滅しているのだから。

「……ああ、乗つてくれたか。じゃあ三つ。醜くも、肥えた豚には、贖いを」

「四つ。宵の刻、別れを告げよう、現世から」

「五つ。今ここに、裁きの刃、振るわれる」

「や、やめ……っ!?!」

最後の喚きも聞き入れず、振るわれた二つの刀は領主の首を刎ね、心臓を切り払つてしまった。そうして目的を果たした二人は一息ついた。狐の女性はさつきまで振つていた刀の刀身を見つめ、小さく舌打ちする。

「やっぱリクズの血じゃあ、あまり効果はない、か。これだから、豚処理はあんま好かない」

「……せやなあ、ま、しゃあないやん。それに、天も少し乗り気やつたやん？ 本で読んだ人斬りの口上」

「ああ、一つ……つてやつ？ ま、何となく、ね。ああまで気に入らない奴を斬るつてなるとき、どうも気分を盛り上げる要素がないとね」

「で、口上、と」



それに微笑を浮かべている般若もそれに乗っかってしまふあたり、狐と同じような気分だったってことなのだろう。般若は刀身に付着している血をふき取り、鞘へと納めていく。

口上の事を知っているという事は、彼女もまたその人斬りに関する本の事を知っているという事なのだろう。とはいえ彼女は本を読めないのだが。

「ほな、最後の仕上げに移るか」

般若のお面の下で彼女は薄く笑い、指を立てて何事かを呟き出す。それに従い、屋敷を囲むように薄い赤の結界が張られていく。すっぽりと庭園を含む屋敷全てを覆い尽くしたそれは何度か明滅し、そして消えていく。

しかしあの数秒で結界の効果は屋敷内へと伝わっている。

「これで処理は完了。ウチらの仕事は終わりや」

その効果は記憶抹消。

見逃してきた女中達、囚われている女性達全てに対して自分達の事に関する記憶を消し去ってしまう。今までもこうする事で自分達の正体を知られずに行っている。

こうでもしなければ、襲撃者は女性であるという事がもう既に各地に伝わっているのだから。

「あとは……冥の戦い、やな。獅子と戦つとるんやて？」

「……らしいよ。気になるねえ……」

「でも結界で封鎖されとるし、入られへんやろうな。ウチらはただ待つだけ」

「ま、そうか。じゃ、酒でも呑みながら待つか」

またしても酒瓶を取り出して蓋をあけ、狐のお面を外すとぐいつと煽つて呑んでいく。その様子を般若の女性は小さく溜息をつき、「ほんま、よお呑むなあ、あんたは」と呟いた。

その言葉に狐は小さく笑い、

「……酒は命の水つてね。私にとつちや、酒は原動力つてね」

「絶対体のどこか、いかれとるやろ？」

「あー？ 聞こえないねーんく、んく……」

「……ま、あんたがそれでええんなら、ウチはうるさくは言わんけど」

隣で酒瓶を傾けながら屋敷を後にしていく彼女についていき、般若もそれに続いて静かに出ていった。後に残されたのは血みどろの庭園と屋敷、そしてその中に残された生き残った女性達だった。

「我が名は——プルート・ギルガメツシュ！　今は古都と謳われし、ギルガメツシュの最後の王なり！」

そう名乗り上げた彼から圧倒的な闘気と殺気が放出される。

その名を聞きながら月は再び驚きに包まれていた。

プルート・ギルガメツシュ。

その名は中央の歴史を知っているならば耳にした事があるだろう。

太古の昔に繁栄していた古都ギル・ガメス。大国として栄え、周囲の領土を統治し、平穩な歴史を築いてきたかの国は、プルート・ギルガメツシュが若くして王となった際に更なる繁栄を見せる。

その当時は竜らが猛威を振るいだした時代という事もあり、竜に対する防衛と撃退を重視していた。また被害にあった国をプルートは救済し、その領土も吸収し統治して国の規模を拡大していく。

対人だけでなく対竜に関しても高い武力を用意し、古代の技術を更に高めて武具も揃えたギル・ガメスの勢いは止まらず、中央一の軍事国家となり、同時にこの国に守られていれば竜に対して脅威を感じることもない、と民が集い出す。

まさに、素晴らしき国であると誰もが思い、外は危険でも中は平和なものでこの時間がいつまでも続くものだと思っていた。

それは、一瞬にして粉々に碎かれることになる。

輝龍ミオガルナ。

最後の星、と呼ばれる古龍であり、現在では七禍龍の一角としてその名を残している。かの存在がギル・ガメスに降臨し、この国を蹂躪した。様々な飛竜を討伐し、民を守ってきた屈強な兵達も、その武勇でも名を轟かせたプルートも、ミオガルナを前に敗れ去ったのだ。

長く繁栄し、その規模を拡大させたギル・ガメスは、一夜にしてたった一頭の龍によって崩壊した。

戦いによって輝いた無数の星、その戦いによって救われ、守られてきた小さな無数の星、そして彼らを束ね、守り、導いてきた一際輝く星。

これらの輝きを散らし、最後に残ったのは恒星の如く輝く巨大な星。

「馬鹿な……プルート・ギルガメッシュだって？　かの大国の王が、どうしてここに……!？」

「数奇なる運命の巡り合わせ、というものよ。我が国は滅びたが、我が魂はあそこに残り続けた。何百、何千と時を経て、我はどういうわけかあそこに残り続けた。……それだけ我は口惜しかったのよ。一瞬にして滅びた我が国がな……」

普通ならば消えてしまいそうなその魂。長い時を経て摩耗して消えてしまってもお

かしくない。というか、普通は消える。ギル・ガメスが滅びたのは千年以上もの昔なのだから。

それほどの長い時を経てもなお消えなかったとは、よほど現世に未練があつたのか、あるいは他に何かの要素があつたのか。

しかしそれにしても何という運命の巡り合わせか、長き時を経てここでの王と出会う事になろうとは。

だが、解せない。

今日の前にいるのは本当にプルート・ギルガメツシュだとして、その体は何なのか。「この気配、シュヴァルツのものだね……どういふことかな？」

「フーツハツハツハ！ これもまた数奇なる巡り合わせというものよ。我が都の跡地にどういふわけかこの体の持ち主が迷い込んできおつてな、なかなか良い素材だった故に貰い受けたまでよ。……我が消えた世の中、このような興味深い種族が生まれようとは、世界は真、面白いものよな」

軽く指を鳴らしながらプルートはにやりと笑って見せる。その表情は実に喜色に満ちており、溢れ出る鬨気が彼が戦る気満々という事を示している。

「人殺しにして竜殺しに優れた魔族……くく、この血統の事を調べ、そして磨き上げてみれば、なるほど、これは確かにそれに優れた血統である事を思い知らせてくれよう。こ

れに慣れるのに二年かけ、仲間が集つて道を定めるのに一年、そして気づけばさらに三年。気づけば六年……しかし実りある六年であつたわ」

「六年……？ ……まさか、あの一件の後に君は……っ!？」

「察しがいいな。何やら大きな事件だつたようだが、その影響かこいつが遺跡へと逃げてきたのが始まりよ」

そしてこの体の持ち主へと憑りつき、意識を乗つ取つて体を手に入れたというわけか。

まるで悪霊のようだ。いや、悪霊より性質が悪いかもしれない。月は冷や汗をかきながらそう思わずにはいられない。過去の人物が……それも英雄と呼ばれても不思議ではない一国の王の亡霊が、己の滅びた国を再建するために蘇ってくる？

なんと非現実的な事か。

しかし事実なのだろう。これほどの覇気を一介の人が放てるようなものじゃない。シュヴァルツの血の影響も多少はあるようだが、魂を揺さぶる程の覇気はシュヴァルツの影響とはまた別だ。

これは王が持つような気迫。人を束ね、従えるだけの覇気。これはシュヴァルツにはない才能。

「シュヴァルツの血の力、練磨すれば素晴らしきものよな。持ち得る力を更に高めると

は戦う者としては良き力の増幅器ブースターよ。……その上で、貴様を倒す。こうして貴様に会う事が出来たのならば僥倖。一つの目的が果たすには十分な環境よな」

「私を？ どうして私と戦う事を望む？」

「それは神倉月、貴様が人族の中でトップの実力者故に」

「……っ!？」

びっしつ、と彼が踏みしめた部分が小さく音を立てて陥没する。にやりと笑みを深くした彼はそのまま月を前にして身構える。周囲へと無差別に溢れ出る闘気は彼を包み込むように収束し、プルートを強化させるだけに留めていく。

「この六年、この体での戦闘に慣らし、噂を耳にし続けたぞ。神倉一族の最高傑作にして人族の中でトップに立つハンター。伝説に語られしミラボレアスと生涯で二度遭遇し、二度とも討伐に成功している。……そのような存在、この我が意識せずにはおれんだろう？」

「……………この私を、超えるつもりかな？」

「然り！ 我が生きていた頃は我こそが人族のトップに立つておったが、今の世は貴様がトップに君臨しておる。この世に、天の座に君臨するは二人もいらん。どちらかが！

その座を抱くのか、今宵決するのだ」

本気だ。

そう感じ取れば、自然と月も身構えてしまう。

やらなければやられる。……というより、殺られる。

「……真、良き月夜よな。昔も今も変わらぬように、満月はいつも地上を照らし続ける。

……が、地上において天に輝きし月は、今宵……落ちる！ この我が落とすのだ！」

「よほど上に立ちたい、という心が強いようだね。私には、そういう事は興味ないんだけど」

「だが、貴様は長くその座に立ち続けた。ただの人にも、ハンターにとつても最も遠き天上の星……満月となり続けた。月はいつも空にあり、地上の者らを照らし続ける。決して空から落ちる事のない存在……。月にそういう意志がなくとも、あれはいつもそう在り続けるのだ。貴様と同じようにな」

二人を纏う闘気は凄まじい勢いとなり、周囲の地面を抉り、吹き飛ばしていく。それだけでなく纏ったものから漏れ出たものも、ぴりぴりと音を立ててぶつかり合っている。

殺気と覇気が混ざりあうプレッシャーのぶつけ合い。

これは……互角。

「今宵、その理を破壊しよう！ さあ神倉月よ、死合おうか！ 心ゆくまで堪能し、その上で新たな伝説の一夜を彩ろうぞ！ フーツハツハツハツハ！！」



圧縮された気が彼の右手へと収束し、開幕の狼煙を上げるように月へと撃ち出した。對抗するように月もまた同じように気を圧縮し、プルートのへと撃ち出す。

二つの気弾はぶつかり合い、弾け、それだけで着弾点の周囲にクレーターが出来、土を吹き飛ばしていく。

土煙が発生し、お互いの姿が見えなくなってしまう。

その隙に、二人は動いた。

それぞれお互いの方へと接近し、体を捻って回し蹴りを放ちあう。更にもう一撃蹴り合い、距離を取って拳を撃ち出し合う。

「……………」

「……………」

クロスカウンターという形となつて相手の顔へとめり込んだ拳。その衝撃に二人は呻き、もう一発頬と胸へと同時に撃ち出し合う。女を殴るといふ事など気にしないプルートだが、彼女を呻かせるように胸を狙い、月はプルートの頭を揺さぶるように頬、顎と狙い続ける。

お互い躲すようなことはせず、ただただ拳を打ち込み続けるだけ。完全なインファイトだった。

だが傷ついているような様子はない。二人が纏っている気が鎧となり、ダメージを軽

減しているのだろう。

しかしそれでも気を纏った拳で殴り続けているため、気の鎧を貫通して衝撃が伝わっているだろう。それでも二人がインファイトを続行するのは耐久力が高いからに他ならない。

月は元より、シユヴァルツの末裔という体をしているプルート。六年の時間をかけて彼はこの体に馴染むようにし、鍛え上げてきている。こんな数度の殴り合いで倒れるほどには軟ではないつもりだ。

「くっ、くくく……い！ 良いぞ、神倉月よ……い！ この痛み、この刺激……い！ そこの輩どもとは全く心の踊りようが違うわ！ もっとだ、もっと我を楽しませよ、神倉月いいい！」

「……っ、圧力が増した……い！」

気分が乗って来たのか、プルートの覇気が増し、拳速も心なしか増幅した。これまで以上の速さで繰り出される拳が月へと襲い掛かり、それを捌きながら月もまた拳を打ち出し続ける。

顔、体と連続してお互いに当たる拳の量が増す。そうしてようやく、口が切れてお互い血が滲み出始めた。それを気にせず、月がねじり込むような拳をプルートの腹へと撃ち込むと、

「がはっ……!?!」

「ふうっ!」

肺から空気が吐き出され、それでも容赦なく月はもう一発鳩尾へと撃ち込む。それにくの字に体を折り、そうなったプルートの肘打ちを落として地面に叩き落す。だがプルートは地面に叩き伏せられたとしても、戦意を失っていないかった。

ぐるんと横に転がり、起き上りながら足を振るって月へと足払いを仕掛ける。素早く振るわれた事で月は一瞬バランスを崩し、倒れ伏してきた月の胸を蹴り上げつつ両手で地面を叩いて起き上る。

「はあっ!」

そのまま横つ腹を蹴り飛ばして距離を離し、素早く腕を振るって気刃を放ち、それは月の体を切り裂いた。斜めに切り裂かれたその傷は浅手だったが、しかし流れ出る血は確かに月を傷つけているという証になっている。

そんな彼女へと攻撃の手を止めるようなことはしない。

「爆ぜろ爆炎!」

「なっ……いつの間になっ!?!」

月の周囲には既に赤い粒子が漂っていた。プルートの命令に従い、それらが一齐に爆発して爆風を彼女へと叩きつけていく。障壁を張って防御しつつ煙から抜け、月も周囲

に魔力の刃を顕現させて展開する。

それらを一齐に射出して弾幕を作り上げたが、プルートのそれを疾走して躲していく。続けて両手に気を圧縮させ、そこから刃を顕現させて構える。

「渦巻け烈風！」

続けて命じた言葉に従い、月に向かつて荒れ狂う風が襲い掛かっていく。彼女を取り囲むような動きをしていたが、しかし月が瞬時にその範囲から抜けだして迫ってくるプルートに肉薄する。

彼女もまた気の刃を手には顕現させ、今度はお互い斬り合う状態となる。真剣ではなく、気によって作り上げられた刃だが、これも十分殺傷能力を持つ武器だ。刃同士がぶつかり合い、相手の体に掠れば傷を負わせる事が出来る武器。

両手に顕現しているため双剣のようになり、両手を素早く振るう事で相手へと攻撃。それだけではない。回し蹴りを仕掛けたプルートの足にも刃が顕現し、月の腹を切り裂き、彼女を呻かせる。だが彼女として負けてはいない。

すぐに体勢を立て直して反撃の刃を繰り出し、連続してプルートへと斬りかかって傷を負わせていった。

これもまた、互角。

甲高い音が連続して響き、時折血が舞い上がって地面に落ちていく。

繰り広げられる剣劇は常人には目で追えず、しかし洗練された技術によつて鮮やかなものへと仕上げられている。

そんな中でプルートの相変わらず笑みを浮かべており、実に楽しそうだった。月をトップの座から引きずり下ろそうとしているが、同時にその死合いを楽しんでいるようだ。興奮を抑えきれないように口元を歪めながら斬り結んでいる。

「フハハ、フーツハツハツハ!! 神倉月よ、余興でこれだけの興奮を感じさせてくれるとは、貴様は真、いい女よ! 世が世ならば貴様こそが我が好敵手として覇を競いあえ、我が心を躍らせる友であつたらうに!」

「かのギルガメツシユ王に褒めていただけるとは感慨深いね」

「だが、そろそろ余興はこれくらいにしておこうか? 貴様の本気はこんなものではないのだろう?」

「……………」

「この程度のもので人のトップに君臨するほど人は弱くはない。……貴様の真価はまだ眠っているのだろうか? 我にそれを見せてみよ。そしてその状態での貴様に勝つ事で、真の意味で我は貴様を超えたと証明できるのだ! フーツハツハツハハハ!!」

一度距離を取り、挑発するように月を指さしながらにやにやと笑みを浮かべ、最後は高笑いをする。彼の目的は月を倒して自分こそが人族で最強の座を獲得する事。今の

彼女が本気ではなく、力を抑えているのだという事は容易に察する事は出来る。

神倉一族がどういう一族だったのか、彼女がどのような人で、どれだけの実力がありミラボレアスを討伐した過去があるのか。それらを調べていけば彼女のたまかな実力は推し量れるし、彼自身も過去はかなりの実力者という事もあり、月の中に隠されている力がどれだけあるのかもまた読み取る事が出来るようだ。

それにシユヴァルツの目を以つてすれば、隠された力の渦くらいは見抜ける。なにせ相手の生命力すら練磨すれば見通してしまっただけの力があるのだ。

「どうした？ 我に貴様の真の力を見せてみよ」

「……………」

「……………もしかや、乗り気ではないと？」

「言つただろう？ 私はそういう事に興味はない、とね。君と死合う事もまた興味はない。今日はこれで終わらせ、退散してくれないかな？」

「なんとつれない女よ。……………それともそれだけの力を持ちながら、死合う事に対して遠慮があるか？ フツハツハ、これはまた面白い！ 力があるが故に死合わない、と言うか？」

なるほどなるほど、と大仰に何度か頷き、「よかろう！ 貴様が乗り気でないならば、我がその気にさせてやろうぞ」と宣言し、両手の構えを解き、ゆつくりと体の前で円を

描くように腕を回す。その軌跡に従って粒子が円を描きだし、その円の動きを縮めていき、最後に両手の拳を打ち合わせた。

「古より眠りし我が枷の門、今ここに開かれん。封じられし力、眠りし力、ここに解き放ち冥王へと還りたまえ！」

彼の詠唱に応え、粒子の円周移動が速くなり、強い光を放ち出す。眩いばかりのその光はやがて紫、黒と暗い色へと変化していき、プルートの打ち合わされた両手が離ればその円の中に門が見え始め、それが開かれる。

「……っ、これは……そうか、彼もまた、力を……その魂に刻まれ、引き継がれた力を封じていたということか!？」

「然り！ かつての力を完全には取り戻せんかったが、この身に引き継がれたシユヴァルツの血により、それに近いものには蘇っておる！ それに加え、我にはかつての武術、魔道の記憶が存在する！ 昔の我とはまた違う、新生プルート・ギルガメツシユの力を見せてやろうぞ！ ……この我に飲み込まれたくなければ、さあ神倉月よ！ 貴様もまたその秘められし力を解き放つがよい！ 余興は、前座はこれまでよ！ これより、<sup>まこと</sup>真の死合いを始めようぞッ！」

月をその気にさせるためにも、彼は先に本気の姿を公開した。それまでとは格段に違うプレッシャーと渦巻く覇気と魔力。金色の瞳には真紅の色が混ざりだし、シユヴァル

ツとしての力もそこに表しているらしい。

これほどのものを人間だったプルートの持つていたというのか？　今はシュヴァルツの末裔の体を持つているが、それにしてもこれほどのものとは思わなかった。本能から来る恐怖心、帝王を前にするかのようなプレッシャー。戦場に出れば敵兵を皆、震え上がらせて戦意を砕きかねない程の殺意。

(……獅鬼……いや、羅刹に迫りかねない程のもの。古代の王はこれだけのものを纏つていたというのか。…………やむを得ない)

かつての最大の敵、神倉羅刹と同格ともなれば……選択肢など存在しない。

彼と違うのはプルートの標的は自分だけと言うだけか。しかも目的が自分を倒して最強の座を獲得するだけ、というのだから彼と比べれば全然マシかもしれない。

だが、負ける気などありはしない。

ここで敗れば……これだけの力がぶつかり合えば、敗北が意味する事は一つ。

——死。

死ぬわけにはいかない。

自分にはまだやるべき事があるのだから——！

右手の指を二本立て、顔の前から胸まですつと落とし、左から右へと動かせばその軌跡に従って粒子が青く光って十字を描いた。その中心へと握りしめた拳を置き、鍵を回



すように手首を返す。

「十字の紋章の門よ、今ここに開け。我が身に課せられた幾多の鎖は解かれ、その奥に眠りし力、今目覚めん。我が力よ、呼び声に応え、再び我が手に蘇りたまえ」

彼女の封印が——解かれる。

## 50話

十字の光が更なる輝きを増し、その周囲へと青い光が円となって現れ、その円の中に複雑な紋様を描き、最後には十字の紋章を抱く円形の門となる。

月の右手を中心として門はゆっくりと開かれていき、それに従って奥から眩い蒼の光が解き放たれた。

「おお……！」

その光の奔流にまたプルートの笑みを浮かべながら感嘆の息を漏らす。その表情は少し恍惚としており、喜びに震えるように体を震わせながらその蒼い光とそれに包まれていく月を見つめていた。

それはまるで想っている女性を見つめる男性のようにも見え、好敵手とぶつかり合えることを喜ぶ戦士のようにも見える。

光の奔流に乗ってプルートに迫る程の凄まじいプレッシャーと覇気、氣と魔力が放出されていく。普通ならばその凄まじい力に度肝を抜き、心を折るかねないが、プルートは逆だ。むしろ歓迎するように、その力を抱きしめるように両手を広げて全身で浴びて

いた。

「……ふは、フーッハッハッハッハ!! 素晴らしいッ! これが、これが今代の最強を名乗る女の本気か!? 最、高……ではないかあ……ッ! 人は、これほどまでの力を手にする事が出来る! この力を超える事が出来れば、我は再びその座へと立つ事が出来るのだ……! そして我は、かの国を再建しようぞ! その上で、再び訪れるであろうかの龍へと一矢報いよう!」

「……かの龍? ……ミオガルナ、か」

プルトの歓喜の叫びを聞き、月は一步前進しながら光を霧散させる。ぴりぴりとした冷たい空気が震え、彼女を纏う気と魔力の鎧は先ほど以上の硬度と力を誇り、蒼い光となつて目視できるようになつていた。

「つまり君は、かつて自分の国を滅ぼしたミオガルナを討伐する事、それもまた目的の一つとしているわけだね?」

「当然であろう! かつて敗れはしたが、時代は変わり、我もまた変わった。再度現れるような事があれば、我は奴を討たねばならん。そうして雪辱を果たすのだ。そうしなければ我は未来永劫、古龍に敗れし王として名を刻み続けることになる! それは、我がプライドが許さんツ! 我が敗れた事で我が国へと集い、消えていった多くの民にも浮かばれはせんわツ!」

「……なるほど。それが君の目的というわけだ。……ならばこそ、この戦いは無益だよ。ミオガルナは七禍龍に数えられし古龍。一人で討伐できる程、生易しい相手じゃない。手を組もうじゃないか、プルート・ギルガメッシュ。君と私、手を組めばかの龍に勝てるだろう?」

「否ッ! それは否ッ! 神倉月よ、我は言ったぞ? 我はかつて貴様が座しているところに立ち、国を、兵を率い、中央を駆け巡った。敵国を討ち、竜を討ち、古龍をも討つた! 我に並ぶのは我が従えし者のみ! そしてこうも告げたぞ。天に輝きし星は二つもいらん。淡く地上を照らす満月か、昏い光で地上を見下ろす冥の星か。これはそれを決する戦いである!」

「二つの星は並べるはずだよ。……私は君の配下にはなれないが、同盟を組める。それではダメなのかな?」

「断る。貴様の名は良くも悪くも広く知れ渡っている。貴様の名声がある限り、我が名を再び世に知らしめることなど出来はせん。故に、我は貴様を討ち倒し、超えねばならん。……それに貴様も知っておろう? 満月と朝陽は、同時に空に輝く事はない、と」

「……ッ!」

彼の言葉に月は息を呑んだ。まさか、それすらも彼は知ったというのか?

苦い表情でプルートを見つめれば、彼は小さく手を広げて首を振ってみせている。

「それと同じ事よ。二つの星は、空で輝かん。例え輝いたとしても、どちらかが強く輝き、どちらかは薄くしか輝きません。そして人は強く輝く星へと目を向ける。そういうものよ」

「どうしても、やるんだね……?」

「くどいぞ、神倉月。これでもなお気乗りしないのならば——遠慮なく殺すぞ?」

一瞬にして冷え切った空気が月へと襲い掛かってきた。底冷えし、体の芯から震え上がる程の殺気……かと思つたが、そうではない。いや、それだけではない、と言うべきか。

吐いた息すら白く凍えさせるほどの極寒の冷気がプルートから放出されているのだ。

「永久凍土の冷気! 具現せよ蒼剣、蒼槍!」

「つく……出でよ、灼熱の業火!」

魔法陣が複数顕現し、天上より降り注ぎしは冷気によって形成された剣と槍。先ほど月が繰り出した魔力によって作られた刃の群よりも鋭い得物となり、月の時よりも多くの数を揃えて撃ち出される弾幕となる。

それに対抗すべく高温の炎を作り上げてそれらを消し飛ばしにかかる。

氷には炎を。

それらを溶かしつくして無力化させにかかったが、プルートはその氷だけでなく冷気

すらも操って極寒の冷氣で炎すらも無力化しにかかる。燃やすという現象すらも凍結させにかかり、全ての時を止めるその波はじわじわと月へと迫っていた。

「これほどのものを行使する魔法……っ、そんなものが存在するとは……!?!」

「存在する。……いや、正しくは存在していた、だな」

「していた?」

「そう……遙かな昔、我が生きていた頃は存在していた。所謂、古代魔法というものよ。

……知っておるか? 魔法……すなわち、魔道の理は魔族だけに与えられたものではないという事をな……!」

「なん、だつて……?」

迫り来る寒波を避けるためにそこから離脱し、プルートへと回り込もうとした月だったが、彼の周囲の大地は凍結している事に気づく。その中心に立つプルートは、自身の周りに張った障壁によつてそれから逃れている。

彼が月を示すように指させば、冷氣が月を逃さないとばかりに目標を定めて無差別に全てを飲み込んでいく。

「おかしいとは思わぬか? 魔族だけに与えられた力、と謳う魔法。粒子さえ感じ取れるならば魔法は扱えるとあるが、しかし中には人間にしてはおかしい程の魔力を誇り、優れた術者として名を馳せた者も存在する。……ルナ・フォックスといったか? 稀代

の魔女として人間の中で優れた者として名を残しておるようだな」

「そうだね。才能ある人物だったというけど……しかし長い時を経てそういう人物が現れてもおかしくはないだろう？　今の世の中、過去に魔族と交わった人もいる。自分がその血を引き継いでいるという事を知らずにいる人だっているんだ」

「ふむ。……だが、それでも人間が魔法使いとして力を振るうのは過去では妙な話となった。魔族だけに与えられた才能、と当時の者らは思った事だろう。しかし才能とは、何も無い所から生まれるようなものではない。特に魔法に關しては全く才能がない者すらいるのだ。人間ならばそれが多かるう。……それが、正しい。魔法は、魔道は才能ある者のみが生かせる事が出来た神秘の技術。太古の昔に確立された高度の技術の名残！　そして歴史から『何か』抹消された技術よ！」

ぐつと拳を握りしめてブルートはそこに左手の拳を打ち付ける。瞬間、月の側面から殴り飛ばすかのような圧縮された空気が迫ってきた。風切音を感じ取って咄嗟に障壁を張り、防御するが、その鋭さは強引にそれを打ち破りにかかる程。

ブルートへと迫ろうと思えば、あの冷気を何とかしなければならぬ、と月は高速で術を組み立てつつイメージをし、両手を前に出してそれを顕現させた。

「ブレイク。その術式を破壊せよ！」

「——ッ!？」

極寒の冷気を作り上げる……自然を操る魔法には魔力と粒子が必要だ。それは例外なく適応され、この古代魔法とやらもそれに従っている。ならばこの充満している冷気の粒子に干渉し、これだけのものを作り上げてその粒子の働きを——破壊する。

魔法破壊の一種。

相手の行使しているその術を問答無用に無力化するものであり、これが通用すれば何であれその効果を失う。

月はそれに、勝った。

瞬時にして極寒の冷気は霧散し、通常の空気が戻ってくる。そうして月は一気にプルートへと迫り、ローブの中に手を入れてラストエクデイスを抜いた。

迫る月へと対抗するように、プルートもローブの中に手を入れ、一振りの得物を抜く。それは形状としては大剣だろう。刃の部分は硬く鋭い骨と爪と牙によって構成されている。背はたてがみが覆い、鋭い毛がびっしりと埋め尽くされていて、それ自体が今もなお息づく獣を感じさせる。

「それは……まさかオルガロンの武器?！」

「然り。銘を、天狼極剣【月蝕】。……クク、今この状況で振るうに相応しき武器だと思わぬか? そら、こいつも貴様を喰らいたいと吼えておるわ!」

しかもこれは鋭い切れ味を誇る大剣というだけでなく、強い冷気を纏っている。どう



やら氷属性も内包しているらしい。武器が武器のため、これを作り上げるにはかなり強い個体のオルガロンを討伐していかないといけない。

「どうやらこの男、ハンターとしても優れた戦士らしい。」

天狼極剣【月蝕】を振るえば鋭い刃と共に冷たい空気も同時に襲い掛かり、それを防ぐためにラストエクデイスで受け流していく。だが、形状が普通の剣ではなく爪と牙が生える、というもののため完全に受け流す事は出来ず、肩が僅かに斬られてしまった。

「く……ならばー！」

月はラストエクデイスをしまい、代わりに封龍剣【真滅一門】を抜く。これはあの一件の後入手した素材を使って一部を強化させた一品だ。封龍剣【超滅一門】を更なる強化を施そうとしたが、しかし完全に強化する事は出来ず、完全な封龍剣【真滅一門】には至っていない。

恐らく真なる封龍剣【真滅一門】とするには、紅龍だけでなく祖龍の素材も必要なのだろうが、祖龍は伝説の中の伝説。遭遇する事は不可能だろう。

だが完全体ではなくともこれはG級の武器。プルートの振るう剛種の武器とは渡り合える代物だ。

「なるほど！ 伝説の黒龍らの素材で作り上げた代物か！ 良いぞ！ 続けようぞー！」

お互いが振るう大剣同士がぶつかり合い、そして凄まじい衝撃波が周囲に放出され

る。内包する強い龍属性と氷属性が具現化し、行き場を失ったエネルギーが周りを無慈悲に吹き飛ばし、凍らせていく。

「おおおおおッ！」

「はああああッ！」

だが二人はそれを気に留めず、腹の底から声を張り上げてそれぞれの大剣を振るい続ける。二人が吼えれば、二人の得物もまたそれに呼応するように力を発揮し、龍と氷の力は更に力を増してぶつかり合った。

エネルギーの余波だけで地面が破壊され、衝撃波が発生してお互いを傷つけている。剣がぶつかり合う事で攻撃と防御が成り立ち、斬撃のダメージは与えていないのに、衝撃波だけで二人は傷つき始めていた。

「そらそらそらあああ！」

「ふっ……はあああッ！」

その程度の傷と二人は割り切ったただひたすらに大剣を振るう。肩が、腕が、体が小さな傷をつけ、血が吹き出してもなお高速で重量のあるそれを振るう。

振り下ろし、薙ぎ、振り上げ。目では追えない程の速さで振るわれる竜殺しの凶器はしかし、お互いの技量によって決定打を生み出さずに振るわれ、周囲を破壊し尽くす。

二人が立っている場所だけは無傷であり、周囲数メートルにわたってひび割れ、陥没

し、凍結している。これは全て龍属性の衝撃波と、水属性の衝撃波の産物だった。

不意にプルートの片手で天狼極剣【月蝕】を持ち変え、左手を振るって魔法も同時に行使する。

「裁きの轟雷！ 雷の鉄槌を振り下ろせ！」

「っ!？」

月の足元に黄色い魔法陣が描かれ、そこを狙って高圧のエネルギーが収束する。空間転移を瞬時に構築して離れた刹那、耳を劈く程の雷が降り注いだ。眩いばかりの光の奔流と、大地を焼き焦がすだけの雷のエネルギー。

しかもプルートはその余波をかき集め、月が逃げた方へと圧縮して撃ち出した。

それを躲しながら月が封龍剣【真滅一門】を振り抜き、龍属性を内包する気刃を放つ。数メートルを一瞬にして両断する程の刃は、盾のようにして構えられた天狼極剣【月蝕】によって防がれる。

が、完全に防ぎきる事は出来ず、刀身が僅かにひび割れてしまった。

「如何か？ 歴史から抹消された魔道の力の味は？」

「……歴史から抹消される……、それはどういう意味だい？ 君の国が滅びると同時に、伝える人がいなくなつた、というだけではないのだろう？」

「そう。あの頃は我もただの人間。しかし人間にして我はこれだけの術を行使できてい

た。我だけではないぞ？ 才能ある人間たちで構成された魔法使いの部隊も存在していた。あの頃は、世界には人間もまた魔法を、魔道を極める事は出来ていた」

語りながらプルートの天狼極剣「月蝕」を構え、己の気を高めて纏わせていく。それに続くように月もまた封龍剣「真滅一門」を構えて気を高めていく。

これは決戦の一撃だ。

己が持てる最大の一撃を放ちあい、それを受けるのか躲せるのか。受けたとして耐えきれぬのかを競う一撃。

その中で、プルートは過去を語り続ける。まるでそうする事によって当時の事を思い返し、その時の感情を力に変えていくかのよう。

「剣道、武道と同時に、魔道も才能があれば誰でも高められる世界。しかしこれは我が国が滅びると同時に、“何か”によって歴史から失われた。我がそれを知る事が出来たのは恐らく、魂だけの存在となって現世から離れたからであろうな。……つと、それ故に珍妙な事を言っているのではないぞ？ 我は確かに感じ取ったのだ。世界が歪められるような、そんな奇妙な空気が世界を覆い尽くしたのをな。その後、長らく魔道は世界から失われ、そして竜人族から派生した種族、魔族が魔道ではなく魔法と名を変え、獲得するまで続いたのだ」

「つまり、古代では確かに魔法は……魔道は誰もが持つ技術として存在していた、という

わけだね?」

「然り。『何か』は我が国を滅ぼすだけでなく、人から一つの牙を奪ったのだ。古代技術が失われるのはよかろう。あれは確かに人には過ぎたる技術だ。それ故に竜からの報復が来るのも領けよう」

イコール・ドラゴン・ウエポン、と呼ばれるものがある。

これは通称竜機兵と呼ばれ、古代の生体兵器とされている。これが発見されたのは古代の遺跡であり、それはラオシャンロン程の巨大さを誇り、ワイヤーか何かで吊るされた状態で放置された状態にあつたという。

これらもまた竜の素材を使用され、人の手によって生み出された存在であり、恐らく竜に対抗するための兵器として開発されたと予想される。しかもこれを一つ作るのに使われた素材は竜を三十頭あまりの素材を必要としていたのではないかと予想され、これを作るために多くの竜が狩られたという事を示している。

人と竜との大戦はこれを人が作ったことよつて竜が牙を剥いたと想像するにたやすい。

しかし同時に、古代文明はどれほど高度な技術を持っていたのか、と現代の人々に新たに想像させるような要素だつたという事でもある。

ブルートが生きていた当時はその真つ最中だつたのか、あるいはその少し昔の出来事

だったのか。それはわからない。

「……だがッ！ 人の牙を歴史から抹消しようとは許しがたい！ その“何か”の正体が神であるならば！ 我は神にも挑もうぞ！ 我が道を阻んだ敵として、我は神に挑む事も臆しはせんわあああッ!!」

（——神……っ!?!）

刹那、頭によぎったのはこの世界を支配しているという龍神。

竜と古龍らを生み出し、束ね、この世界の外に存在し、長い歴史をかけて見守り続けているという存在。

人族の間では伝説の中の伝説として伝えられ続けている白き祖龍。

ミラルーツ。

（まさか……祖龍が関わっている、のか……!?! そんな、古代から？ いや、竜を生み出したのが祖龍なのだとするとなにもおかしい事ではない。となれば、ミオガルナを使つてギル・ガメスを滅ぼし、魔道を抹消したとすると、彼を殺したのは祖龍の意思。……しかし、魂だけは残り、今こうして目の前にいる。これを祖龍が知らないはずはないだろう）

高められていく気の中で、月は高速で考え続ける。

キリン、テオニスカトル、ミラボレアスといった古龍らをも従えていたのならば、ミ

オガルナもまた祖龍の配下。ならばミオガルナがかの時代に現れたのも祖龍の意思。

推測するにその国の規模が大きくなりすぎたために肅清したのだろう。それによってプルート・ギルガメツシユは若くして命を落とし、それを未練として世界に留まり続ける。

同時に魔道の歴史を抹消し、古代魔法は失われ、長い歴史の間においてゼロから再び魔法の道が拓かれる。

そして今、プルート・ギルガメツシユは月の前に現れた。シュヴァルツの末裔の体を乗っ取り、己の国を再建し、自分を殺したミオガルナらへと反逆するために。その前段階として神倉月を超える。

（——まさか……か……）

月は……気づいた。

気づいてしまった。

そして、戦慄した。

（彼らの狙いは、シュヴァルツの抹殺と言っていた。そして、私もまたその血を受け継いでいる。しかし私は……人族の中でトップに君臨し、竜らを相手にしても容易には死なない。……そんな私を殺すための……存在……ッ!? 祖龍の……神の意思は、プルートと私を戦わせ、私を——殺す事ッ!?）

瞬間、誰かが笑みを浮かべた気がした。

その冷たい笑みを感じ取ったのか、あるいは目の前のプルートの名剣のような鋭い刃のような覇気を受け、月はそれに飲み込まれてしまった。

いつもの彼女ならば、それに飲み込まれる事はなかっただろう。

しかし彼女は、気づいてしまったのだ。

プルートの強き意志と、それすらも計算に入れた龍神はくわうの意思に。

ぶつかり合った覇気が、均衡を崩す。

それを見逃すプルートではなく、体勢を低くして天狼極剣【月蝕】を上段へと構えられたそれを、強く薙ぎ払った。

「受けてみよ、我が——軍をも飲み込む蹂躪の剣閃をなあああ!!」

振りかぶられた天狼極剣【月蝕】から大波の如く全てを飲み込み切り裂く波状の剣閃が放たれる。それは大地を吹き飛ばし、瞬時の凍らせてもなお勢いを失わず、それらを飲み込みながら大きくなって世界を蹂躪する。

蹂躪しながら群れの規模を拡大させるような斬撃と凍結の波。

それを前に、月もまた構えた封龍剣【真滅一門】を一息に振り抜いた。

迫りくる大波を両断せんとする縦の剣閃。大剣の最大一撃とされる溜め斬りをそのままに、纏われた彼女の気と魔力がうねりを上げて、鋭くも巨大な剣閃となってプル―



トの剣閃に対抗する。彼の氣迫に吞まれましたが、しかし持ち前の氣と魔力によつて作られた剣閃は大波を裂き、威力を落しながらもプルートへと迫つていった。

一方大波も切り裂かれはしたが、凍結の力があるために割れた部分が冷氣によつて繋がりが、そのまま月へと迫つていく。

そしてそれらは、二人を呑みこんだ。

「——っ、は、ああ……ッ、が、は……」

一方は体を切り裂かれ、

「——か、ふ……っつ、うう……」

一方は全身を切り裂かれる。

そのまま二人は膝をつき、震える腕で何とか大剣を杖のようにして体を支えている。

着ている服は傷口から流れる鮮血によつて赤く染まりだし、月の場合はそれだけでなく大部分が凍結して霜が出来ている。

被害状況は一見すれば月の方が酷い。体中が切り裂かれ、出血し、しかし凍結によつて血すらも凍り付き、風になびいていた美しい髪もボロボロの状態だった。

対してプルートは肩から腹へと斬られているが、致命傷には至っていない。だが威力が落ちたとしてもそれは紛れもなく必殺の一撃であり、深手という事は変わらない。このままでは失血によつて倒れるほどの血を流している。

「決まらぬ……か。ならば、もう一撃繰り出すまでよ！」

「させ……ないっ！ 終わらせて、みせよう……！」

震える体に喝を入れて二人はもう一度それぞれの大剣を構えて振りかぶる。放たれた剣閃はお互いぶつかり合い、霧散する。だが月はそれに合わせて魔法を行使していた。

それはプルートの足元から顕現する。

四本の鎖がそれぞれプルートを縛り上げるように絡みつき、その動きを止めてしまった。負傷しているプルートにこれを解く術はない。続けてプルートの意識を飛ばすための術を行使しようとしたが、突如その体が硬直してしまった。

「なっ……」

驚きの声が漏れる。視線を下げれば、体を覆っていた霜の範囲が広まっており、氷へと変化して全身を覆い尽くすようにして月を蝕んでいた。

それだけではない。

月の周囲の空気が凍結し始めており、これらを溶かそうとした炎の展開も出来ない。魔力を振るって吹き飛ばそうとしても、頭が回らない程にまで体力が削られていた。

「……残念だったな、神倉月よ……。一步、我が先を往くようだ」

「くっ……ううう……！」

それでもこのまま終わるわけにはいかない、と月は力を振り絞る。彼女の不屈の心に従い、彼女の血が効力を発揮して体を蝕む氷を少しずつ剥離していく。それに従って彼女の顔に少しずつ赤い紋様が浮かび上がっていく。それは顔の左半分を侵食しだし、左目の蒼が赤へと変色しだした。

「シユヴァルツの力、か……ここに来て、神倉月を生かそうというか。……が、それすらも無力と化す事を、思い知らせてやろうぞ」

プルートもまた息も絶え絶えだ。彼を縛り付ける鎖が彼の力を削ぎ落とし始めているのだ。これはただ対象を縛るだけではなく、無力化する事も念頭に入れた術らしい。こういうところも彼女らしい術だった。

だが、プルートは無力化する、という事など考えない。

勝つならば全力で叩き潰す。勝者と敗者をはつきりと分けるために、完膚なきまでの敗北を。そして確実なる勝利を。それによって敗者が死んだとしても、それもまた一つの結果であり、全力を出して相手が倒れ伏し、生き残ったならばそれもまた一つの結果として受け入れるのだ。

だから——彼は躊躇する事はない。

ゆつくりと縛られている右手を天狼極剣「月蝕」から離し、重力に従ってそれは下へと落下し、倒れてしまう。そのまま右手の指先を月へと合わせ、彼は唄うようにそれを

紡いでいく。

「雷神の神雷……！ 天より来たりしは……全てを無慈悲なる裁きの劍（つるぎ）。地上の贄を喰らい、その名を……知らしめるものなり……っ！ 今こそ、天の門を開き……、その御業を……世に示せ！」

「——っ」

途中で言葉が途絶え、息が掠れてもなお、彼はそれを唱えきつた。言葉が紡がれるたびに周囲の粒子は魔力の導きに従って月の周囲へと渦を巻き、まるで竜巻のように空へと上がっていく。

見上げれば、天上に魔法陣が作られていた。

黄色い粒子が渦巻く空に、プルトの言葉に従って幾何学的な紋様が描かれていき、それは二重、三重と月へと向かって下がりながら作られていく。

このような魔法を、月は知らない。

蒼い瞳と赤い瞳はその動きを捉え、そして……言葉を失った彼女は、ただ身を任せるしか出来なかった。

感じ取ったのだ。

自分の今の状態と、あれが生み出される古代魔法の威力を比べれば、どのような抵抗も無に帰す。

空間転移？

それを行使できるだけの体ではもうなかった。

彼女を閉じ込める檻のように、冷気は今もなお彼女の周囲に存在している。体の感覚はもうほとんどない。痛みすらも凍結してしまっており、彼女の体力は先ほどのインファイト、剣撃、そしてお互い放った最大の気刃とこの冷気によって限界に近かった。

——詰んでいた。

(……これまで、か)

頭上で展開されるそれに照らされながら、月は観念したように頭を下げる。

見れば、プルートも鎖によつて縛られながらもじつと月の様子を見据えていた。まるで彼女の最期を見届けるかのように。

その表情に笑みはない。彼は真剣な表情で月を無言で見つめていた。

しかしその表情を見つめている月の瞳の力は弱まり始め、視界が悪くなり始めていた。

(未練は多いけど……これが、私の道の終焉。……いや、まだ、もう少し道を伸ばす)

月は手にしている封龍剣【真滅一門】を見下ろし、それをローブの中へと入れていく。右手があまり動かないが、それでも彼女は歯を食いしばり、体を震わせながらもローブへと完全に収めた。

続けて血色が悪くなっているその口を何とか動かし、白い息と混ざって「……コード、てん、そう……。ポイン、ト……。ベータ……」と発した。すると彼女の背中からそのロブが消え去り、その場からなくなってしまった。

(これで……よし)

最後の力を振り絞ったせい、視界がおぼつかなくなっている。霞がかかったかのようになり目の前が見えなくなり始めていた。それでも頭上でエネルギーが収束し始めていくのだけはおぼろげに感じ取れる。

そうした中、まるで走馬灯のように頭の中で様々な人物が浮かんで消えていった。

(ごめんね、みんな……。私は、もう君達と共に戦えないようだ……)

先日まで交渉し、共に戦おうと誓い合った人達。

その中へと送り込むことを約束した彼女にも、彼女を出すために待つてくれているルーシーにも会えなくなる。

(獅鬼、姉さん……。もうすぐ、そつちに逝く事になりそうだよ。……まだ、やらなければならぬことがあつたのになあ……)

最後にはあの二人が浮かんできた。

あの戦いで喪つた血族。彼らに会うのはまだまだ先のつもりでいたのに、どうやら随分早まってしまったようだ。それでもあの二人は自分を優しく出迎えてくれるだろう

か？ それとも少し怒るだろうか？

そんな事を考えながら、天上で高まったエネルギーが解放される時を待つ。

「……さらばだ、神倉月。貴様との戦いは……、我が新たな道の誇りとしよう。安らかに眠れ、我が好敵手……！」

そのプルートの言葉を耳にしたような気がした時、月の頭上から今まで以上の力を秘めた雷が降り注いだ。

眩いばかりの光の奔流と、鼓膜を傷つけ、体を吹き飛ばしかねない程の衝撃。数秒程度の時間ではあつたが、それはまさしく神の雷といつてもいい程の轟雷。そのあまりの威力に大地が穿たれ、周囲を展開していた結界すらも破壊してしまう程のもの。

結界が破壊された事で一瞬にして周りの状態は修復されていったが、今そこで起こった事だけは修正できずにその名残を残す。

抉り飛ばされてしまった場所の中心には、無抵抗に雷を受けた月が存在し、ゆっくりと地面に倒れ伏した。それに続くようにプルートを縛り上げていた鎖も消えてしまう。

「……っ、と……」

解放された事で自由を取り戻したが、しかしプルートは体勢を崩して転んでしまいそうになった。慌てて体勢を立て直す、それでも膝をつき、倒れ込んでしまった。思った以上に体力が減り、それだけでなく鎖に力を奪われてしまったらしい。

だが、この事実だけは実感していた。  
神倉月に勝った。

現代の人族最強と謳われた彼女の本気を前にし、自分は勝利を収めたのだ。  
今ここに、新たな伝説が刻まれる狼煙が上がる。

「……フ、ハ……フハハハ……フーツハツハツハ！ 我の、勝利だ……！ 今ここに、新たな伝説が……産声を上げる……っ！」

震える腕で体を支え、ふらつきながらも彼は起き上り、再び大地を踏みしめる。そうして離れた所で倒れ伏している月を見下ろし、よろめきながら彼女へと近づいていった。

うつぶせに倒れている彼女を起こし、仰向けにすれば、ボロボロになりながらもまだどこか美しさを残している彼女を見つめる。

その死に顔は……笑っていた。

最後まで誰かを思っていたのだろうか。雷によって氷が溶け、黒こげになっている部分がありながらも、彼女は微笑を浮かべていたのだ。

その最期の姿に、プルートの数秒もの時間言葉を失ってしまった。そうして彼女の姿を見つめ、感嘆の域を漏らす。

「なんと……気高く美しい女よ……。そんな貴様と戦えたこと、増々誇りに思うぞ、神倉



月よ……」

そして胸の前で手を組ませてやると、背後から近づいてくる二つの気配を感じ取った。

それらはプルートへと近づき、そして寝かされている月を見下ろす。

「……勝ったんだ」

「……ほんまに死んどるわ。そうまで傷つきながらも、かの神倉月はんに勝つとは……やりますなあ、冥」

「フハハ……今までの戦いの中でも、まっこと心躍るひと時だったわ……んっ、ごぶっ……」

そう呟いたプルートだったが、その口から勢いよく血が吐き出された。そのまま口元を押さえながらうずくまってしまい、咳込んでしまう。やはり彼とて重症という点は変わらない。「手当しましょ」とそんな彼へと般若のお面をしていた女性が素早く近づき、手当ての準備を始める。

一方狐のお面をしていた女性は月の死体を指さし、

「これ、どうすんの？」

「……ごほ、ごほ……タンジアの港に届けよ。そうして、神倉月の死亡を知らしめるのだ」

「……冥が殺した、って広めるわけ？」

「うむ。プルート・ギルガメッシュが、神倉月に勝利した、とな」

「あ、そう……その名を一緒に広めるわけね。でも、今はまだ冥として行動し続けるっての？」

「その名を明かすのは、我が国を……再建した時よ。今はまだその時ではない……つつ、おい、刹那。もう少し優しくやらんか。我を労わるのだ」

指示を出しているプルートへと手当てをしている刹那と呼ばれた女性だったが、その手当のしかたが少し悪かったのかプルートが顔をしかめてしまう。だが彼女は気にした風もなく、「ああ……すんまへんなあ。冥の事やからこれくらいは耐えられる思うてな」と小首を傾げて微笑を浮かべた。

「貴様らが思っている以上に、我はこの通り負傷しているのだ。……あの神倉月を前に、無傷でいられるわけもなからう？」

「せやなあ。なにせ、〃先代〃人族最強やからな。その真の戦闘力を前には、ウチらは一瞬にして吹き飛ばされるさかいな。そもそも、台風を前に吹き飛ばされる小石のようにな。……先日の抑えられとる力でさえも、ウチはまったく歯がたたへんかったし」

くすり、と彼女は笑う。森の中で出会ってしまった月を前に、一矢報いようとしても、逃げ切ろうとしても敵わなかったことを彼女は全く気にしていないようだ。

それが事実である事をありのままに受け入れている。

「よつと……」

「ああ、もう行くん？ 天」

「ん。こういうのは今の内にやった方がいいし」

月の死体を抱え上げ、天と呼ばれた彼女——東風天和はとうふうてんな淡々と答える。日付が変わった深夜の内ならば、タンジアの港といえども人氣はなくなる。月の死体を置いて来ようと思えば、今の時間帯ならば見つからずに出て来よう。

「そう。気いっつけえや」

「ん。じゃ」

ぺこりと冥へと一礼し、天和は走り去っていく。

そうして残されたのは手当てを受けているプルートと刹那だけ。

無言で彼を治療していく彼女は、最初は治療術で止血をし、他の傷の具合を確かめて増血の効果がある薬を彼に与えて失われた血の補充をする。黙々と作業していく彼女を見つめ、そして空を見上げれば、プルートの視界の奥には西の空へゆつくりと沈み始めている満月があった。

あの月はこの先も変わらず空にあるだろう。夜が来れば昇り、朝が来れば沈む。

しかし地上の月は、この日、人々の空から落ち、消え去った。

代わりに未来に上るのはここにいる冥の星。今はまだ昇る事はないが、いずれ必ず空へと昇ってみせよう。

プルートのそれを硬く誓うのだった。

その報せは、瞬く間に東方だけでなくドンドルマがある中央にまで届く程のものだった。

六年前の時以上に、それは人々の心に刻まれ、衝撃を伝える。

神倉月、死亡。

原因はプルート・ギルガメッシュと名乗る何者かであるという事。

それはここ、ヤマト国にも伝わった。いち早く伝えた霧夜の忍により、彼女はそれを知る事となる。

「……おい、もういつペン言ってみろ」

「……はっ。神倉月さんが、亡くなられました」

その忍の言葉に、「ふざけるなッ!」と激高して渚は机を両手で叩き潰しながら立ち上がる。その目は怒りと驚きに彩られ、両手を震わせながら渚は荒い息をついてもう一度「ふざけ……るな……ッ!」と叫ばずにはいられなかった。

「どういふことだよ……あれから、たったの一、二日しかたつてないんだぞ……? それ

だけの間に、なにがあつたつてんだよおツ!」

悲しみと怒りと、そして悔しさに渚は今まで以上の力で机を叩き潰し、破壊してしまつた。それが彼女の感情の振れ幅を表していた。

「……は？ 死んだ？」

「はっ……この報せは東方、中央、西方問わずに瞬く間に広まつております」

一方、西丑灯の下にも風間の忍がそれを伝えていた。

それを聞きながら灯は煙管を啜え、煙を外へと吐きだしながら「プルート・ギルガメツ シュ……か」と呟く。

「古都ギル・ガメスの王やつたな？」

「はっ……太古の昔に存在した最後の王として歴史書に記されている人物でございませう」

「……気になるな。死体があつたんはタンジアの港つてゆーたな？」

「はっ」

「……その周辺、調べとき。鍵は、そこにあるやろ」

「承知しました、お嬢様」

一礼して忍が消え、灯は相変わらず煙管を吹かしながら昼空を見上げ続ける。

だが彼女の勤が告げていた。

これは人々が思っている以上にただ事ではないという事を。

確かにこれは大事件だ。かの神倉月が何者かに殺されるなんて、大事件以外の何物でもない。

しかし、その裏には何かがあるんじゃないかと灯は思わずにはいられない。

「プルート・ギルガメッシュ……ふ、くく……なんやろうな？　この胸のざわめきは」

とん、と灰皿へと煙管を叩き、障子に背を預けながら彼女は笑みを深めずにはいられなかった。今頃渚が慟哭を上げているだろう。彼女とは親しかったようだが、灯はまだ彼女らが裏で手を結んでいたとは知らない。

しかしそれでも知人の死は彼女を泣かせるには十分な要素だ。

それを想像し、灯は微笑を浮かべる。

「渚を泣かせた奴、どんななんやろうなあ？　そのツラ、いずれ拜ませてもらおか。なあ、プルート・ギルガメッシュとやら？　増々おもしろくしてくれるよーやけど、灯らの邪魔になるんやったら考えさせてもらうで……？」

一人、灯はくすくすと冷たい笑みを浮かべ続ける。

この大事件の後の波乱がきつと訪れることを予感しながら。

そしてヤマト国の城に届いた報せに驚いていたのは彼女たちだけではない。

彼もまた、驚いていた。

ただその驚きは二人とは違っていたのだが。

「プルート・ギルガメッシュ……だど？」

顎鬚を撫でながら彼、衛宮兼定は手にしている新聞に目を細める。

見出しには神倉月、死亡とあるが、彼の視線は書かれている内容に向けられている。

「……神倉月を殺害した何者かがその名を語ったか——あるいは、本人が名乗りを上げたか？ ふん、どちらにせよ、穏やかではないな。長き時を経てよもやこの現世でその名を聞こうとは……」

目を閉じ、彼は——何故か微笑を浮かべる。

いつもの彼を知っている者からすれば珍しいことだろう、と驚く顔がそこにある。

ヤマト国の武神は、その名に何を思うのか。それは誰もわからない。ただ、彼が誰とも知れず「——この世には切つても切れない縁があるというが、なるほど、本当らしい」と呟くのみ。

ドンドルマの収容所。

多くの受刑者が入れられている牢の中で一人、セルシウスはベッドに横になつていました。外では一大ニュースが伝わって大騒ぎになつていて、こんな所には伝

わってくるはずもない。

いつものように変わり映えのしない日々の中、眠り続けている彼女の下へと一人の看守がやってくる。

牢の扉に鍵を差し込んで開け、「セルシウス・ルシフェル、出ろ」と呼びかける。

その声にゆつくりと彼女は起き上り、半目になってその看守を見つめる。

「……………また、面会か？」

と看守に訊いてみると、彼は小さく首を振り、「彼女との約束だ。貴様の仮釈放の命が下された」と告げる。だがその言葉にセルシウスは怪訝そうな顔をして首を傾げた。

「仮釈放？ その日取りはまだ決まっていないはず」

「……………」

彼女の言葉に看守は応えず、しかしいつも以上にその表情が固いものになっている事にセルシウスは気づいた。その表情と彼女の約束、という言葉に、セルシウスは少し胸騒ぎがした。

ベッドから立ち上がり、看守へと向かって歩き出した。彼女としては看守へと掴みかかりたかったが、彼女の両手には重い手錠が嵌められている。

「……………おい」

「……………」



「彼女との約束って、何？」

「……………」

看守はセルシウスから背を向け、牢から離れてセルシウスに牢から出るように促した。それに彼女は従い、もう一人の看守と間に挟まれながら歩き出す。

そうして長い廊下を歩き、収容所からギルド本部へと移送されたセルシウスを迎えたのは月ではなく、ルーシーとアルテミスだった。彼女を出すために交渉していた人物はここにはいない。

出迎えてくれた二人の表情はすぐれず、それだけでなく周りを歩くギルドナイト達も落ち着きがない。そうして小声で話している事を耳にし、セルシウスはようやく知る事となった。

神倉月が死んだのだと。

そして彼女はルーシーから神倉月が「自分が死ぬようなことがあれば、セルシウスを仮釈放するように」と交渉していたと聞かされる。

きつとセルシウスの戦力が必要になるだろうから、と。

「……………阿呆が……………」

冗談だと思いたかった。

自分が命を狙われている、とあの時間かされた時は本当に冗談かと思っていた。そし

て本当に遺言を聞く気なんてさらさらなかった。

あの神倉月が、そう死ぬような人じゃない事を知っていたからだ。

まさか、本当にぼつくりと死んでしまうなんて、誰が信じられるだろう？　しかもあの時彼女が言っていたように、何者かによつて殺されているのだという。

それにより、交わされた約束が果たされ、セルシウスはこうして仮釈放される。クロム達と共に戦うために。東方で起こっている出来事を解決するために。

(……後味、悪すぎるだろうが……っ、本当に死んでしまうなんて……！)  
唇を噛みしめてしまう。

自分なんかのためにギルドと交渉し、道を作ってくれた。作るだけ作って、死んでしまった。ただ起こるままを受け入れてやる、とあの時月へと言い残してしまつたが、こればかりは受け入れづらいだろうが、と悪態をつかずにはいられない。

しかし、現実是不変ならない。

どれだけ悪態をつこうとも、文句を言いたくても、言う相手はもういない。

自分と、彼女達と、そしてこれから向かうあの村にいるメンバーを残して彼女は逝ってしまった。

(……上等。やってやるよ……。やらない、なんてこと、出来るわけないだろうが……。そうしたら、枕元に立たれるんだろうからさ？　……お望み通り、あいつらと共に戦つ

てやるよ。それが、あんたの遺志、なんだろう？)

こうまでしてもらって何もしいでいられるほど、彼女は無愛想ではなかった。並んでくるルーシーとアルテミスに導かれ、セルシウスはギルド本部を後にする。ルーシーが使っている宿で着替え、用意してあつた荷物を手に、三人は一路ポツケ村へと出立していった。

そして、ここにもその報せは届いた。

誰もが驚きを隠せずにはいられない。これから準備を進め、白銀一家はそろそろ口ツクラツクへと向かつて旅立とうとしていたところだったのに、これによつて足を止めずにはいられない。

「マジ、かよ……?」

「そんな馬鹿な……あの人が、死ぬなんて……」

クロムと昴が声を漏らし、紅葉とシアンは口元に手を当てて言葉を失い、優羅は驚きに目を見開いたまま硬直している。そしてライムとシアンは涙を流し、声を上げて泣き出した。

それをクロムと桔梗が体を抱えてやり、受け止めている。

紅葉と桔梗の目にも涙が浮かび、昴とクロムも言葉を詰まらせながらも月の死を悲し

んでいる。

特にライムとシアンの悲しみよりは他の比ではなかった。二人にとって彼女は今の実力に至るまでに鍛えてくれた師匠にして恩人だ。初めてのパーティクエストにも参加してくれた始まりの人でもあるし、尊敬できるハンターでもあった人。

その人が殺されたと聞いて悲しまずにいられようか。彼らだけではない。

話を聞いたポツケ村の人々もまた悲しみに暮れる。

「……プルート・ギルガメッシュ」

ぼつり、と優羅がその名を呟いた。それに昴は顔を上げ、彼女を見つめる。優羅はじっと地面を見下ろしながら、その名を反芻して噛みしめていた。紅い瞳は地面を見つめているようだが、それだけではない。

焦点が合っておらず、何かを見つめて考え込んでいるあのようだ。

「優羅？」

「……………古代の王の名を名乗った何者か、という事になる、か」

昴が呼びかけても彼女は考え込み続けている。彼女は月に対しては隠れ住んでいる間もどこかよそよそしかった。彼女に対して恩義は感じているようだが、それでも人見知りな部分は最後まで変わらなかった。

でも、心の中では月の事は信頼していた。彼女の手柄、実力は疑いようもない。彼女は紛れもなくいい人だっというのは優羅も知っている。ただ、素直になる事が出来なかっただけだ。

そんな彼女を殺した人物。

気にならないはずはない。

「……東方にそれだけの実力者が隠れ住んでいた？ 衛宮兼定……いや、ヤマト国から離れるとは考えづらい」

ぶつぶつと呟きながら一体誰が殺したのかを考えているらしい。

その際に挙げられた衛宮兼定。なるほど、彼の武勇伝を耳にしていれば、彼が候補に挙がるのはわかる。老いてなお健在、生涯現役を謳う老將軍にして武神。しかし彼はヤマト国の護神でもあるため、国を離れることはめつたにない。

また彼は闇討ちなどするような人物ではないし、神倉月を殺す理由なんてどこにもない。容疑者からは除外される。

では一体誰が殺つたのだろうか？

他に浮かび上がる容疑者は東方を騒がせている辻斬りだろうか。何にせよ、一筋縄ではいかない敵がいるという事だ。

(……そんな敵と遭遇したとして、勝てるか？ 今の……アタシに)

以前も葉乃葉と一緒にいた際に誰かに助けられたことがあるが、あれは何者だったのかも未だにわからずじまい。よもや現在同盟関係にある霧夜の忍だとは優羅は今も知らないのだ。

だからこうして警戒してしまい、疑惑を深めてしまう。

そんな彼女の肩を優しく叩き、昂は声を掛ける。

「……あ」

「神倉さんを殺した奴のこと、気になっているのか？」

「……ええ。どれほどの実力を持っているのか、出会ってしまった時、どうするか。気になってしまいました」

「……気持ちはわからなくもない。俺も気にはなる。だが、今は彼女の哀悼の意を示そう」

「……は、う」

そして彼らは東の空へと向かい、黙祷を捧げる。

ここにいる誰もが彼女に対して恩義があり、彼女にはいつもお世話になっていた。この六年もの間、世界を周っていた彼女だったがいつだって隠れ住む自分達の事は気に掛け、時折訪れては調子確かめ、世間話をして去っていく。

神倉一族の最後の生き残りであり、誰に対しても親しみがある彼女がどうして殺され

なければならぬのか。

乾渚らと同盟を組み、これからといったところで殺されたのだから、もしかすると敵が先手を打ってきたのかもしれない。可能性としてはそれが一番高いだろう。

許しがたい。

もしそれが事実なのだすると許しておけるはずがない。

あんないい人が殺されていいはずがない。その事に怒りを覚えながらも、昴達はただ静かに彼女が安らかに眠り、天国で獅鬼らと会えることを願って黙祷を捧げるのだった。

シユレイド地方、ここにも時間は少しかかったが、神倉月の死についてのニュースは届けられた。人々は騒ぎ、驚いている。その中で一人、新聞に目を通しながら煙草を啜えている中年の男がいた。

「……ふーん、神倉月さんが死亡、プルート・ギルガメツシユの名が出てくる、と。こりゃあ確かに一大ニュースだわなあ。とんでもねえこったあ」

ふう、と紫煙を吐きだしながら彼はうんうんと頷いている。壁に立てかけている弓にちらりと視線を向け、「……行くか」と独り言をつぶやく。そんな彼の言葉に応えるかのように、鋼のような翼が目立つその弓は淡く光ったように見えた。

それを見て彼は「そうかそうか。お前も気になるのね。んじやま、行きますかねえ。東方に。……それにしても、本当に大事件が起こるとはねえ。どういう予言してくれちやつてんのよ、あのお嬢ちゃんは」と立ち上がり、その弓を壁にかけていたロープの中へとしまった。

「おじさんがはるばると東方までの一人旅つたあ、なんか哀愁漂わないかねえ。やれやれ、まったく、とんでもない事件を引き起こしちゃつてまあ、どうしてくれんのよ」

と、煙草を灰皿にこすり付けながら、誰もいない部屋の中で誰を相手に愚痴っているのか。しかしそれに応えてくれるのがロープの中にいる。「はいはい、わかってますよ」と少しぼさぼさの銀髪をかきながら、ロープを身に包んで今まで利用していた宿の部屋を見回した。

「さようなら、シュレイドってね。長らく世話になりましたつと。おじさんは、これから東方に行つてくらあ。どんなところなんだろうね。何気におじさん、今も昔も東方に行つたことないからさあ、はっはっは。……あ、でも今向こうにやダグラスとかがいたんだっけか。どつかで会えれば、どういふとこか教えてくれるかねえ」

誰もいないのにそんなことを言いながら彼は一人、今まで利用していた宿を後にしていった。……誰かが、くすり、と笑つたような気がした。

同日、シュレイドの王城で一人の女性が旅立とうとしていた。



それを見送るのは煌びやかなドレスに身を包む少女と、同じように美しいドレスを身に包んでいる女性だ。

「本当に行くのかえ？ 考え直すことは出来ぬのか？」

「ソーリー、姫様。あたしはこれを見捨てる事、出来ません」

そう言つてペこりと頭を下げるのは、金髪の女性だった。肩で切り揃えられた金髪に、青い目、と西方人らしい特徴がよく出ている。少し小柄に見えるが、その立ち居振る舞いに隙は見当たらず、白い襟シャツに深緑の上着、白いズボンといった服装でも動きやすさを重視した作りになっている。

腰には一振りの剣が佩かれ、その存在が彼女が戦士であることを示していた。

「スピカが世話になったわね。よく、今まで仕えてくれました、エリーゼ」

「はっ、ありがとうございますお言葉」

「いやじゃ！ 妾は許さぬぞ、エリーゼはこれからも妾のためにここにいてもらわねば困るのじゃ！」

「ソーリー、姫様。わかってくださいませ。あたしは、やらなければならぬこと、出来ました。あのようなニュースが出たならば、あたしは東方へゴーせねばなりません」

シュレイド王家、第三王女であるスピカ・シュレイドは、涙目になりながらエリーゼを引き留めようとする。だが彼女の意志は固い。申し訳なさそうに頭を下げつつ、理由

を語り続ける。

「プリンセス、あなたの言葉がホントウならば、あたしは東方にゴーすることこそデステイニー。そうですね？」

「……ええ。そなたは、一つの運命に導かれるようにして、東方である人物と出会うでしょう。そのような未来が視えました」

「センキュー。あたしもあのニユースをルックしてわかりました。確かにあたしは出会うことになるでしょう。ならばこそ、ゴーしなければならぬ。わかってください、姫様。これがあたしのデステイニー」

「スピカ、あなたもいい年になってきたのです。聞き分けなさい。そして送り出すのです。そうしてこそ、姫というもの」

「……むう……」

ぼんぼん、と妹の頭を撫でる第一王女のアテナ・シュレイド。未来を視ることが出来る、という異能を生まれた時より持ち、六年前の一件でもその力を発揮した彼女は、エリーゼの未来を視てしまったのだ。それははつきりとした映像を見ることが出来ずとも、何らかの運命が絡んでいるということまでは視通した。

だからこそ、彼女が東方へと旅立とうという意志を妨げるようなことはしなかった。

「姫様、これを」

「……なんじゃ、これは」

「あたしから姫様へのプレゼント、です。これをあたしと思い、大切にしてくれれば、あたしはとても嬉しいです」

そうしてスピカの手へと渡したのはシルバーのブレスレットだった。それをスピカの左手に通してやり、そつと両手で包み込んでやった。

「こうすればいつでもあたしのこと、リメンバーできます。このあたし、盾の戦士エリーゼは、ここにいます。寂しくはありません。あなたと共に過ごしたメモリー、このプレゼントで忘れることはないでしょう？」

「……忘れない、忘れてやるものか。約束じゃぞ、エリーゼ。必ず、ここに戻ってくるのじゃー！ 妾のこと、そなたこそ忘れるなんてこと、許さぬからな！」

「……イエス、ママ。あたしも、姫様のこと、フォーゲットすることはありません。あなたと過ごした日々は、あたしにとつて楽しい時間でした。もちろん、プリンセスやプリンスとも過ごした日々も充実しておりました。一介のハンターであるあたしに許された時間、感謝の言葉もありません。センキュウ、プリンセス」

そうしてアテナへと最上の敬礼を示す。

そんな彼女へと首を振り、「いいえ。初めてそなたを見た時より、どこかそなたには気品というものが感じられたわ」と微笑を浮かべる。

「二介のハンターがそのような気品を、強く気高き魂を持ち得るものではない。そなたを城へ招き、スピカに任せさせた私の見立ては間違つていなかったと思つているわ。こちらこそ感謝を」

「……センキュウ、プリンセス。あなたは良き君主になれるでしょう。あなたのような王女こそ、上に立つべき器をお持ちです。そんなあなたに招かれた恩、あたしはフォーゲットすることはないでしょう」

「ありがとう。……最後に一つ、教えてほしいことがあるのだけど、よろしいかしら?」「なんででしょう?」

「……そなたは、過去にまた別の誰かに仕えたことがあるのかしら? 以前からそれを問うているのだが、結局今日まで答えてくれなかったわね。これだけでも、教えてもらえるかしら?」

じつとエリーゼの目を見据えながら、アテナはそう問うた。

真つ直ぐな眼差しを受け、エリーゼは少しだけ考えて、形のいい薄い唇を開く。

「——ノー。このあたし、エリーゼ、この世に生を受けて仕えた者は、あなた方以外にはおりません」

「……なるほど、わかったわ。今までご苦労だった。東方でも健勝であれ」

「イエス、ママ」

ユクモ村。

瑠璃と茉莉、そして十兵衛が旅立とうとしていたところでその話が届けられる。

神倉月の死、それは彼女らにとつて大きな衝撃を与えた。彼女がクロム達を鍛える際に神倉月がどういう人かはその時の交流で知っているし、クロム達の話しても多く話題に挙がっているためどのような功績を挙げているのかも知っている。

そして、そう簡単に負ける人ではないという事も知っているつもりだ。

「なんで……なんであんないい人が殺されなきゃならないの……？」

そう呟かすにはいられない。あのような人がどうして殺されなければならないのか、と目に涙を浮かばせながら拳を握りしめる。茉莉こそ言葉を発してはいないが、そのポーカーフェイスは僅かに哀しみに崩れている。

膝の上でぎゅつと手を握りしめて彼女の死を悼んでいた。

十兵衛もそんな二人を見つめ、そして彼もまた英傑の死に驚いている。しかし二人とは違って面識がないため彼女ら程の悲しみはなかった。

「タンジアの港……そこで見つかったって話よね？」

「……そのようッスよ」

俯きながらぼつりと瑠璃が漏らす。ちらりと十兵衛が彼女の顔を見てみると、雫が一

つ頬を伝っていた。俯いているせいか前髪で目元が見えないが、彼女は今、涙を流しながら静かな怒りをたたえているらしい。

まさか、と思うまでもなく、彼女は言葉を続けていった。

「……茉莉、目的地変更でいい？」

「タンジアの港に、行くつもりですかね？」

「……ええ」

「よろしいんです？ 下手をうてば——死にますよ？」

真剣な表情になって茉莉が言う。

瑠璃がどうしてこんな事を言い出したのかはわかりやすい。月を殺した何者かを探すつもりなのだ。彼女もまた悲しみとともに怒りを湧き上がらせている。ぎゅつと握りしめられた拳と強く唇をかみしめる様からそれは見てとれる。

彼女は、仇を取るつもりだ。

それは絶対に叶わない願いだという事は彼女も頭のどこかでわかっているはず。なにせ相手はあの神倉月を殺した誰かだ。未熟者の、神倉月の足元にも及ばない瑠璃に勝てる道理がありはしない。

それでも、瑠璃は行くと言うだろう。

一体このだれが殺したのかを探し出すつもりだ。勝てないとわかっているとしても、探さ

ずにはいられない、確認せずにはいられない。そういう思いが湧き上がり、動かすには  
いられないのだろう。

それが彼女なのだ。

「……それでも、あたしは行きたい。あの人の話じゃ、あそこらへんに辻斬りがいるかも  
しれないってんでしょ？ もしかしたら辻斬りが犯人かもしれない。世間を騒がせた  
辻斬りが、神倉さんを殺したってんなら、あたしはそのツラを拝みたいわ」

「……はあ。仕方ないですね。……十兵衛さん」

「あ、はい」

「どうやらタンジアの港に私達は行くことになりそうですが、あなたはどうしますか？」  
茉莉の視線が十兵衛へと向けられる。彼は月の事は話に聞くだけであり、瑠璃の行動  
に付きあわなくてもいい人だ。これからロックラックへと向かおうとしていた二人に  
ついてくるつもりだったが、タンジアの港へと目的地は変更された。

それもモンスターだけの件だけでなく、辻斬りが潜んでいるかもしれないという危険要素  
まで含んでいる。そんな所までついてくる気があるのか、と茉莉は問いかけているの  
だ。

少し考えるそぶりを見せた十兵衛だったが、小さく頷いて、

「お付き合いするツスよ。おいらだって辻斬りとかには少しばかり気になるところがあ

るツスから。よろしく、お願いするツス」

そう言つて彼はぺこりと頭を下げた。

彼女達の道は定まつた。

更の上を目指すという目的に付け加え、辻斬りの一件に足を踏み入れるという新たな覚悟が備えられる。十兵衛を巻き込むことになつた事には少し心苦しうが、彼は氣にするなどというように小さく首を振つて笑つてくれる。

人のいい人だ。まるで……あの神倉月のように。

自分達よりもずつと年上で、穏やかで、しかし彼女と違つて人見知りで。でも彼は見た目に反して結構な実力を秘めている。こうして思い浮かべれば彼女と似た部分が結構ある。

この人の良き、それが十兵衛の良きなのだろうが、それは彼が慣れ親しんだ相手にか見せない姿。

まだまだ彼とは長い付き合いになりそうだ、と茉莉は思わずにはいられなかつた。

○

「神倉月が死んだか。これで神へと挑んだ愚かな一族は滅びた事になつたという事よ」



「はい、予定通りあれに、始末させましたよ。これで目的の一つが果たされた事に」

時空の狭間に存在する城の中、玉座に存在する白き女性。

肘掛に手を付いて頬杖をしつつ、膝を折って頭を下げている黒い女性を見下ろしていた。

「しかし古代魔法……魔道の一端を見せていましたがよろしいんですかね？」

「構わぬ。必要以上に知れ渡ればまた修正するのみ。それに、最終的にはあれも死ぬ。

プルート・ギルガメッシュは所詮、神倉月を殺すために生かし続けた存在」

「……左様ですか。なかなか酷な事をしますね、白皇」

そう、そこにいるのは白皇と呼ばれし龍神。背中まで届く美しい白髪に、白と赤い紋様が描かれたドレスを身に纏うその姿。宝石やアクセサリといった装飾品をしていないが、そんなものがなくても目を見張る彼女の美貌と、彼女に合ったドレスによって十分に彼女の美しさが引き立っている。

こうして見れば美しい女王のような姿をしているが、彼女の真の姿は伝説に語られる祖龍ミラルーツ。祖なる者としてこの世界の竜達を生み出したと語られており、その真実は一部の者だけが知る龍神として存在している。

彼女に謁見している黒衣の女性はあのヘル。月蝕として名を馳せている彼女がここに来ているのは、あのプルート・ギルガメッシュについて報告するためだ。

「で、白皇？ あれをさっさと始末する、方向で？ それとも、あれにはまだまだ誰かを殺してもらうんです？」

「ふむ、当初はヘル、貴様に早急に始末してもらおうつもりだったが、予定を変更しよう。ぱちん、と白皇が指を鳴らすと二人の間に数人の人が浮かび上がる。

白銀優羅。

クロム・ルシフェル。

ライム・ルシフェル。

セルシウス・ルシフェル。

あの世界にとって六年前の重大事件の際に活躍したシユヴァルツの末裔。それを見たヘルは「なるほど、次の標的はこいつらってわけ、か」と頭の中で思う。

だが白皇は更に指を鳴らして数人の人物を浮かばせた。

草薙桐音。

草薙武。

東風天和。

それを見たヘルは目を細める。

「おやおや、その顔ぶれ……まさか白皇？ こいつらも……いや、こいつらが持つ刀に注目？」

「……察しがいいな、ヘル。そう、この者らが持つあの妖刀の眠りを解き放たれば、ヒトの抵抗はより一層高まるう」

「なるほどなるほど、その言葉は尤もですね。……でも、それでも泳がせるん、ですよね？」

その言葉に、白皇はくすりと微笑を浮かべた。

いつの間にか草薙姉弟の前と東風天和の前には一振りの刀が浮かんでいる。それらを見つめながら彼女は笑っているのだ。

「当然であろう？ ヒトに対しても一定の抵抗ラインがなければ兇戯にもならぬわ。余はただ力のみで叩き潰すのは好かぬ。それでは面白くなかろう？ ヒトには、ヒトなりの抵抗があつてこそ、物語は面白くなる。余らの力を前に敗れ去るのか、あるいは最後まで抵抗し、余らに打ち勝つのか。……ヒトの成長を垣間見える事が出来るならば、余は兇戯にも付きあおうぞ」

「兇戯と言つておきながら、色々とやつちやつてるじゃないですか。何ですか？ ジェン亜種にナバル亜種にパニツシャー、今まで砂漠に隠してきたアレすらも少しずつ活動範囲を広げさせるとか……鬼ですか？ ……あ、鬼じゃなくて神だった」

くつく、と肩を揺らしながら笑うヘルだが、白皇もまたくすりとまた微笑を浮かべている。近年確認されだしている亜種に新種のモンスターは全て白皇が新たな進化を促

し、増えてきている存在だ。

平行世界から連れてきた個体もいくつか存在しており、砂漠で確認されているUNK  
NOWNもまた平行世界の産物。といってもアレはそれだけではなく時間旅行もして  
いるのだが。

全ては人族に対して試練を与えるため。

シュヴァルツの末裔を殲滅するための竜の軍勢。太古の昔に古都ギル・ガメスを殲滅  
するために行使したあの戦争を、再び繰り広げるのだ。

それに人族が打ち勝つようならば、白皇はシュヴァルツの末裔に生きることを許す。

これは、以前ここに訪れた空狐である白陽との約束でもあった。

『ベアトリクス。いよいよゲームが始まるわけだけど、一つここに約束を交わそうじゃ  
ないか』

『ほう？ 聞こうか、白陽』

『もう知ってるだろうけど、私は……私たちは東方で活動し、ヒトを……シュヴァルツを  
助ける方向で動いている。もしこの戦いにヒト側が勝つような事があれば、シュヴァル  
ツがこの先も生き続けることを許してはくれないかい？』

『……では余が勝つような事があれば、シュヴァルツの末裔は殲滅し、世界の安定を促  
す。再び竜とヒトのパワーバランスを保ち、両者の数の減少を止めよう。……それで良

いのだな?』

それに白陽は頷く。

だが白皇は微笑を浮かべて腕と足を組み、じつと彼を見下ろし、『だが』と言葉が続けていった。

『勝てるのか? 敵は余だけではない、ヒトの中にも敵はおる。蘇ったプルート・ギルガメッシュ然り、魔族の死を望むヤマトの三家然り……余としてはヒト同士の戦いによって死んだとしても一向に構わぬのだがな?』

『勝ってみせるさ。ヒトはそう簡単に弱くはない。それは君とて知っているだろう?』  
 『——それにY o uだつて知っているはずさね。ベアトリクス、あんたもまたヒトを愛しているだろう? それ故に、あんたはヒトにいつも試練を課す。その成長がどれほどのものかを確かめるために』

いつの間にか白陽は黒陰へと変化していた。白髪は黒髪へと変色し、男性のものだった体つきは女性へと変化し、纏っていた洋服も巫女服に近しいものへと切り替わる。

その変わりようには慣れているため、白皇は何も言わずに見守り続けるだけ。

『G o dにしてM o t h e r。しかし竜に対してだけでなく、ヒトもまたあんたにとつちや己の世界に住まう我が子。全ての我が子を守るために鬼となつて異物<sup>シユヴァルツ</sup>を殲滅。……涙ぐましい話じゃあないかね。……でも、あれは異物じゃない。あれもまたヒトの

進化の一つであり、あんたの子だ。クロらは守りきってみせるよ、白皇?」

『……くく、熱くなつたな、黒陰? 少しはあの者らに思い入れが出来たか? それとも、思い入れが生まれたのは七禍の方か? それだけではあるまい。七禍とゲームをしておる貴様の孫娘もまた思い入れがあるう?』

『……あの子らの長いゲームも終わりにさせようじゃないか。少なくとも七禍は、終わらせてやるべきさね。あんたがあれを二代目七禍にしてから、あれは長い時を生きすぎただろう? あれもまた、シユヴァルツの宿命が刻まれているのだから』

『解放しろと? ……一時はあれもそれを望んだようだが、今は違うだろう? 七禍は己の辿る道を行かず、ただのヒトとしての生涯を迎える自分を見るところという自己満足に夢中よ。それすなわち、貴様らの勝利で終わらせろと言っているようなものぞ?』

『そう……聞こえなかつたかい?』

うつすらと殺気を放ちながら黒陰は白皇を睨み付ける。だが彼女はそれをまるで涼しい風を受けているかのような余裕の笑みで迎えた。

七禍……“世界”に達している白銀菜乃葉は先代七禍を討伐し、その力を体に取り込んでしまった事でヒトとしての枠を超えてしまった。彼女としては先代七禍と戦い、死ぬことを狙っていたのだろうが、現実には彼女の勝利に終わってしまう。

ならばとその力を受け、自らその力によって崩壊しようとしたがそれも失敗。

生き延びてしまった彼女を見た白皇が、「世界」の領域へと引き上げ、彼女に広い世界を見せてしまった。白銀菜乃葉はその世界の広さを知り、平行世界を知り、だがそれでも彼女は一時は死を望んだ。

しかしその願いを白皇は叶えず、白銀菜乃葉は次元の狭間にかつての実家を取り込み、そこで一人で暮らす事になる。その血統の呪縛によつて自殺する事は叶わず、九尾とも知り合つて今もなお長い時を生き続けている。

そんな彼女を解放するには、恐らく一つ。

彼女の望み通り、あの世界の菜乃葉を自分のような道を歩まない未来を見届けさせてやる。そうして未練がなくなった彼女を——殺してやる。これで彼女の人生に終止符を打たせてやるのだ。

『根回しのつもりか、黒陰よ？　しかし余はそれには乗らぬぞ？　全てはあの者らの戦いの行方に委ねられる』

『Y o uが用意した駒を全て撃破すればいいんだろう？　でも、大方最終的にはまた七禍龍を用意するとみた。……そう、デイス・ハドラーとか、な？』

また白皇は微笑を浮かべる。しかしそれは黒陰とて予想済み。

それに対抗する手段は彼女も用意してある。かつてその冥蛇龍デイス・ハドラーを討伐した事がある血統が彼女らと関わっている。……しかしその際に使用された武器は

敵方の手にあるようだが。

『Y o uの事だ。デイス・ハドラーだけでは飽き足りないんだろうさね?』

『何が言いたい?』

『最終手段——そこにいる娘と戦い、ヒトが勝利すれば、クロラの勝利と認めろ』

『……く、くつくくく……! 大きく出たな、黒陰? 自ら、ハードルを上げおるか

!』

黒陰の提案がよほど彼女の琴線に触れたのか、肩だけでなく体も揺らしながら白皇は笑いをこらえきれない様子だった。そんな彼女を見つめる黒陰と、彼女が示した——白皇と同じ白い少女。

この少女に勝つ事が出来たならば、ヒト側の勝利。

それを嘯みしめ、白皇はひとしきり笑うと肘掛を強く叩いて顔を上げる。そこにあるのは王としての顔であり、神としての姿があった。

『よかろう。貴様が上げたハードル、余は受け入れようぞ。あれにヒトが勝つような事があれば、そこでゲームは終了としよう。しかし、あれを戦わせるタイミングは余が決める。それに異議はないな?』

『Y e s』

黒陰の提案に、彼女は“古い知り合い”ではなく“神”として受け入れたのだ。



ここに、二人の間で契約が結ばれた。

「でも完全な鬼じゃないですね。今まさにあれを派遣してしまえば、その時点で白皇の勝ちじゃないですか。それをしないのもまた——」

「——つまらんであろう？ 何事も順序良く、段取りを踏まえて行わねばならん。最終的な敵というものはな、途中で乱入するようなことがあつてはならぬ。例え最初の場面で目の前に本拠地があつたとしても、な」

「お約束、つてことですね」

くつくつと笑いながらヘルは立ち上がり、腰に差している鞘から短剣を取り出してくるくると手で弄りつつ回転させ始める。刀身に沿って指を這わせながら「となると——」と呟き、溜息をつく。

「あたしの戦いもしばらくは、なさそうですね？」

「うむ。しばらくは陰に控え、プルート・ギルガメツシュの監視をしておくがいい。……それと、七禍と九尾の動きも見ておけ。今回の一件により、あれらの動きが見られるようならば、新たな監視対象とせよ」

「わかりましたよ、つと。それじゃあたしはこれで失礼させてもらいます」

ぺこりと一礼し、ヘルの姿は見えなくなってしまった。

それを見届けると白皇は一息ついて傍らにワイングラスを呼び出してそこにワイン

を注いでいった。そうして目の前に浮かび続ける人々の顔ぶれを眺めていく。

一つの一族が滅びた。それは予定通り。

だがまだ他にも気にするべき存在はいる。

特殊な技術を保有し、竜殺しとして陰で名を継いでいった草薙一族。

遙か昔の戦いによって入手した名刀を一族の秘宝として残し、高めてきた技術と武術を融合させたその戦術は竜にとっては一種の脅威として認識される。

東風天和。

しかしこれは偽名。

彼女に関してはあまり気にするようなことはない。確かにその戦闘技術は人族にとっては目を見張るものがあるが、それ自体は脅威ではない。

問題は彼女が所有する妖刀か。

あれもまた龍殺しの妖刀であり、伝説を作り上げた一品。今でこそその力は眠りに落ちているが、少しずつつかつての力を呼び覚ましつつある。そうなれば、再び伝説が刻まれる可能性がある。

妖刀は二つともブルート・ギルガメッシュ側にある。

もし彼がその気になってしまえば、彼が目標の一つとして掲げているミオガルナ討伐、果ては神に挑むという大言壮語は現実になってしまう可能性だってある。

でもそれはそれでおもしろい、と思ってしまうのは彼女の余裕故か、あるいは彼女の悪い癖か。

それにプルート側にはもう一人いる。

刹那と呼ばれた女性。

もちろん彼女もまた天和と同じく偽名。

彼女もまた剣術を行使するハンターの一人ではあるが、同時に魔法使いとしての側面を持つ。だが彼女に關しては、白皇はそれほど重視はしていない。人側からすれば特異なハンターである事は間違いない。

しかし戦力として考えれば別段脅威でも特異でもない。血統に何か特別なものがあるわけでもなく、高められた実力もかなりのものではあるが、それでも脅威ではない。

とはいえ彼女の特徴上、どうしても高められたあの技術に關しては目を見張るものがあるが、かといってそれだけで古龍らに通用するわけでもない。良くて対人戦で力を發揮する具合だ。

プルートもなかなか面白いメンバーを揃えたものだと思はれる。だが、その四人で反たしてどこまで戦えるのか。小さな興味が湧くというもの。

「ヒトはいつだって夢を見る。神に、挑もうとする。……だが、良いぞ? 神に挑む者はいつも敗れ続ける。今宵もまた一つの歴史が潰えた。果たしてプルート・ギルガメツ

シユ、そして他の者らはそれに続くのか、同じ轍を踏むのか。見せてもらおうぞ」  
「そうやって必死になって抗う姿は、彼女は好ましく思えた。高く聳える壁を打ち破り、前進するというのが人族の姿。そうやって彼らは困難を乗り越え、成長し、進化を果たしてきた。

超克する姿は、ヒトが輝く一際の光。

それを見届けるのもまた、彼女の退屈を潰す要素の一つとなっていた。  
だから彼女は小さな期待をする。

神に挑んだ一族が滅びると同時に、ヒトの希望の一つであつた蒼い星は地に落ちた。  
代わりに昇るは太古の昔に沈んだ冥の星。

果たしてこの変化により、どのような道が生まれるのだろうか、と。

赤い液体が満たされたワイングラスを掲げ、白皇は彼らへと乾杯する。

役者は東方へと揃いつつある。あとは、彼らがどのようにして動き、戦うのか。  
それに従つて竜達がどのように動き、戦うのか。

さあ、次なる幕へと移ろう。

今度——誰が、死ぬのだろうか？

それを考えながら白皇はグラスを傾けていった。

第一部・完。

# キヤラクター設定

瑠璃・暁・フレアウイング〔るり あかつき〕 CV 梶田夕貴

年齢 二十歳。

身長 156cm

武器 夜刀〔月影〕 デイオスソード改 火竜剣〔火燐〕。

防具 リオソウルシリーズ ナルガシリーズ

スキル 高級耳栓 見切り+2 業物 (耳栓スキルお守り込)

種族 竜魔族 有翼種

ポツケ村の鍛冶屋の娘。母親の花梨とクロム達を目標とし、ロツクラツク地方で修業をしながら白銀一家を探していた。竜魔族という事は隠し、有翼種の魔族としてフレアウイング姓のみを名乗っている。

既にHR的には上位ハンターになっていたが、上位前半と下位クエストをこなしながら過ごす事で自分達を一定以上の名を広めないようにしていた。それでも有翼種の双子ハンターとしてはある程度知られている。

快活な性格であり、感情の振れ幅が結構ある。物怖じせず、昔は初対面の相手でも敬語を使わずにため口をきいていたが、今では歳を重ねた事で落ち着いている。そして相変わらず茉莉にはその性格故に時折いじられている。彼女曰く、退屈しない姉。

花梨から受け継ぐ火竜の因子によって火を操る事を可能とし、背中から生える翼による高速移動の技術を花梨、撫子から教わり、太刀を構えて呐喊する技術を習得しているが、まだ二人の域には達していない。

また、クロムからはその感情の振れ幅を抑えるようにと教えられており、現在明鏡止水の境地を目指す鍛錬もしている。

勝気でツンツンしているところが多いが、その実、仲間想いで優しいところがある。背中付近まで伸びる紫色の髪を赤いリボンでツインテールにし、気の強い碧眼をしている。竜魔族だけあり、二十歳でありながらまだ十代の少女の外見をしている。

茉莉・暁・フレアウイング【まつり あかつき】 CV 後藤麻衣

年齢 二十歳。

身長 157cm

武器 角槍ディアブロス トキシックジャベリン ブルークレーター

古代式回転銃槍

ヘルステイニング改（しかし強化素材がこつちにいないので、事実上眠りにつく

ことに)

防具 リオハートシリーズ レウスシリーズ

スキル 火属性強化＋１ 風圧【大】無効 火事場力＋１

種族 竜魔族 有翼種

ポツケ村の鍛冶屋の娘。母親の花梨と桔梗達を目標とし、ロツクラツク地方で修業をしながら白銀一家を探していた。竜魔族という事は隠し、有翼種の魔族としてフレアウイング姓のみを名乗っている。

竜魔族としての特徴として怪力があり、これのおかげで重量があり、機動力が低いとされているランスとガンランスを手にしてもある程度軽快な動きを可能としている。

茉莉が太刀で斬り込んでいく前衛にしてヒット&アウェイの戦法を取るに対し、茉莉は相手の攻撃に合わせてカウンターを放つか、盾で受け流しながら反撃するという戦法をとる事を基本としている。

瑠璃とは性格は正反対であり、幼い頃から落ち着きがある。読書家で大抵本を読んでいる事が多く、それによって得た知識が種類問わず頭の中にある。

ポーカーフェイスでありやる気のなさげな碧眼をいつもしている。時折眠たげ、やる気なさげに語尾が伸びる事がある。「おー」というのが口癖だったが、今では落ち着いている。しかし時折それが出る。



瑠璃を弄るのが趣味の一環としてある。しかし彼女からすればこれが姉を愛でる行為であり、好意の裏返しだとか。

紫色の背中に届く長髪。普段は赤いリボンを後頭部に結んでいるが、狩りの際は左側のみあげに結ぶ。瑠璃と同じく竜魔族のため外見的にはまだ十代の少女に見える。

草薙桐音【くさなぎ きりね】 CV 生天目仁美

年齢 二十二歳

身長 168cm

武器 ブルーウイング 夜鳥【翼】 ヘビィデイド

朝風・夕風

防具 ガンキンSシリーズ ネブラシリーズ

スキル 抜刀術【技】 抜刀術【力】 防御力上昇【中】 火耐性【小】

(防御力上昇お守り込)

種族 人間

草薙一族出身とされる女性。独特の武術を持ち、また竜のオーラを纏って戦うという他では見られない独立した技術を持つ。竜殺しの一族と噂されている。

剣術を得意とし、普段の私服姿の腰元には小太刀が佩かれている。銘は朝風と夕風。彼女が一番付き合いが長い得物。特殊な技巧で作られており、妖刀ではないかと推測さ

れる。

普段は面倒見がいい姉御肌。戦いを好み、その過程で得られる興奮を感じるのを生きがいとしている。人見知りの十兵衛に対して強引に付きあわせて彼を自分の下へと引き込んだ過去がある。

瑠璃と茉莉に対しても有翼種のハンターという点で目をつけ、興味が湧いた事で組んだ。彼女らの実力に対しても興味があり、鍛え上げたのは有翼種のハンターとしてどこまで伸びるかを見るためである。

一方で、弟である武に対しては殺意すら抱く程に仲が悪い。それは彼の歪みと一族の宝剣を持ち去って行方をくりましたせい。この一件の前から姉弟の仲は悪かったが、こくなつてからは完全に彼女としては縁を切っている。

東方を巡っているのは彼を探し出して宝剣を回収し、その罪を彼の命で償わせるため。彼を抹殺する事が彼女の旅の理由。

竜殺しの力を秘め、その気になれば一瞬にして竜を討伐できるだけの力を持つが、本人はそれをあまり振るわず、通常の狩りを好む。それは一瞬で終わる戦いより、生死を賭けた戦いの方が心躍り、気分が盛り上がるから。

また保有するオーラは火気や水気、氷牙気などの属性指数が多めらしい。その中でテイガレックスの轟気を決戦で使用する事が多い。

東方人特有の黒髪を肩まで伸ばし、気の強そうな鋭い碧眼。鍛え上げられているおかげで無駄な肉がなくプロポーシヨンがいい。私服は浅葱色の着物。

口調は姉御らしく男らしさも有り、少し粗暴な風を思わせる。が、キレ始めると下ネタ交じりで罵倒する。

名前は、音桐草↓弟切草<sup>おとしぎりそう</sup>。

萩原十兵衛【はぎわら じゅうべえ】 CV 梶裕貴

年齢 六十六歳

身長 155cm

武器 炎戈銃ブレイズヘル 雷砲ラギアブリッツ 封龍剣【怨絶一門】

防具 スカルSヘッド 以下、ディアブロUシリーズ

スカルSフェイス ルドロスUメール、シルバーソルアーム、ルドロスUメール、ナルガUグリーヴ

スキル 装填速度+1 反動軽減+1 高級耳栓（お守り、装飾品込） 戦闘用

ランナー 採集+2 高速収集 神の気まぐれ 炭鉱夫用

種族 人間ではない

桐音の知り合いのハンターであり、同時に長年火山に籠っていた炭鉱夫。口調は「〜ッス」。

常にスカルスヘッドかフェイスを被って素顔を隠している。その理由は昔、とある一件によって顔に大火傷を負ってしまい、とても見せられるようなものではないため。

若い頃は人付き合いのいい少年だったようだが、これによって人見知りとなつてしまい、人付き合いが苦手になつてしまった。炭鋳夫になつたのはそれが理由なのかもしれない。

しかし十五歳で上位ハンターになるだけの実力があり、ヘビィボウガン使いとしての腕前は優秀。だが小心者になつているせいで遠慮が目立つ。

ヘビィガンナーで重量のあるディアブロUシリーズを纏つているといふ事もあり、体の筋力も高い。

桐音を姉御と呼び、身長が低く、声も若干高めのため若く見られていたが、その実年齢は六十六歳。人間ではない事は間違いないが、種族はいまだ不明。そして普通に考えて十五歳から五十年もの月日を経ているのだからもしかすると……と思わなくもない。

ちなみに封龍剣【怨絶一門】は炭鋳夫の隙に入手したとの事。メインで使う事はほとんどないらしい。

灰色と白が混ざる黒髪は肩にかかる程度で少し跳ね回っている。

実年齢に反して人間ではないため少年のように見える。だが顔の火傷は骸で、腕の一部分は着物で隠されている。そして骸は例え風呂時でも寝る時でも外されることはな

い。

霧夜海【きりや かい】CV 小野大輔

年齢 二十一歳

身長 174 cm

種族 魔族 ナルガクルガの因子持ち

ヤマト国、乾家に仕える霧夜一族の忍。現頭領である霧夜潮の一人息子であり、次期頭領と目される。

幼い頃から頭領として育てられており、忍としての技量を鍛え上げられている。大砂漠から東に数十キロ、森の中にある霧夜の拠点として存在する里のリーダーとして過ごしていたが、乾渚に命じられて現在東方を周っている。

辻斬りと領主殺しの事件について共の空と旅をし、調査の真つ最中。

空に対しては特別な感情を抱いておらず、抱かないようにしている。幼い頃は一目ぼれに近い感情があつたが、今ではもう抑えられている。

他の者らに比べて忍であるせいか実力を比較すると弱く見える。対人戦の鍛錬は受けているが、しかし暗殺や一撃必殺、闇討ちを主としているためそちらの方が得意。武器は小太刀。

次期頭領という事もあって礼儀は教わっている。普段は「俺」だが、目上に対しては「私」に変化する。口調もそれに合わせて変化される。

穏やかで優しい印象を持ち、実際あまり感情は穏やかなまま変化する事はない。しかし心の中では激情家という一面を隠している。怒りや自分を責める、空に何かあった際はそれが爆発する事がある。空はそれを諫める役目もある。

肩にかかる程度の黒髪と青い目。中性的な顔付きをしており、ぱつと見て美少年のように見える。魔族であるため若干実年齢より若く見える。

ナルガクルガの因子の力を行使用すると、目が赤く光り、視界が悪くても熱情情報などで見通し、素早さが増す。

使い魔は鷹と梟。

霧夜空【きりや くう】 CV いのくちゆか

年齢 二十一歳

身長 168cm

種族 魔族 ナルガクルガの因子持ち

ヤマト国、乾家に仕える霧夜一族の忍。海の側近であり、彼に仕える忍でもある。

幼い頃より海に仕え、彼と共に育ってきた女性。幼馴染、という枠には収まらない程の強い結びつきがあり、彼のために動く事を生きがいとする。彼のためならば命をも惜

しまない。

海に付く際は数歩後ろを歩き、常に彼を支え続けるその様と風貌からまさに大和撫子という言葉が似合う女性。里の誰も彼らはお似合いのパートナーであり、夫婦だと思う程によく一緒にいる。

が、海がそうであるように彼女もまたその気はない。渚などからくつつけとそそのかされているが、彼女は全てそれを否定する。

武器は小太刀だが、鋼糸も行使する。また札を使って術も行使し、海をサポートする側に回り込む事も多い。主力は陰術、霧隠れ。白い霧を発生させて視界を悪くさせ、その隙に暗殺する事。

主である海を立てるため陰になる、という事であまり表情は変わらず、淡々と喋る事が多い。口調も丁寧で、よく体言止めをする。海の世話をする事が多かったため家事もうまい。

背中に届くつややかな黒髪に落ち着きを感じさせる碧眼。控えめながらも美人と思わせるだけの外見をしている。

霧夜狭間【きりやはざま】 CV 三宅健太

年齢 不詳

身長 205m

ヤマト国、乾家に仕える霧夜一族の忍にして、一番の変態。

鍛え上げられた屈強な体を持ち、丸太の如く太い腕に引き締められた体、と戦士として十分といつてもいい体を持つ。が、オネエである。

現頭領である霧夜潮〔きりや うしお〕に昔から仕える古参の忍であり、海をサポトするために海にいる里で活動していた。現在は海とは別行動をとって東方を巡り、調査をしている。

能力は申し分なく、体術面や術の面でも優秀であり、信頼のおける忍である事は間違いない。だがオネエであり、普段から濃い人物という事もあって色んな意味で付きあいづらい。

彼は人を愛しているようで男であろうとも女であろうとも平等に接し、愛でているらしいが、男女ともにその愛は重すぎて敬遠される。それは敵であっても同じであり、そのあまりの濃さに彼に敗れた敵は悪夢を見るという。

また普段から私服は薄く、上半身は裸のまままで上着を纏い、袴を履くだけであるため、嫌でもその鍛えられている体を見る羽目になる。

戦闘する際は体術が主で、得意な術は幻術。

切りそろえられ、少しはねた黒髪、紫色の瞳。高身長であるため大抵相手は見上げてくることになる。オネエで変態ではあるが、いい人という事は間違いない。



乾渚【いぬい なぎさ】 CV 吉田真弓

年齢 四十八歳

身長 162cm

種族 魔族 有角&有翼種 ディアブロスの因子持ち

ヤマト国の乾家出身。王を支える六つの家の一角、乾家の代表としてヤマト国王の直属の部下を務めている。家に抱く名は戌と亥。

海をはじめとする霧夜一族の主であり、三家を纏めるリーダーでもある。対抗しているもう一つの三家のリーダー、酉丑灯とは幼い頃からのライバル。そして申子源次とは犬猿の仲……という以上に腹の中では殺意を抱きあう仲。戌いぬと申さるだけに。

乾家の中でも珍しく先祖返りを起こしており、ディアブロスの角と翼がその体に表れている。それだけでなく凄まじい怪力を保有しており、それから繰り出される格闘術を得意としている。

頭で考えるより体を動かした方がいい、というわかりやすい人でもあるが、三家のリーダーという事もあって普段はヤマト国で執務をしている事が多い。何かあった際は使い魔の鼻を飛ばし、それを変化させて話を聞く。

性格は瑠璃に似て勝気で活発な性格。にやりと笑う事が多く、付きあいやすい友達感

覚な上司。実際、海らに対して敬語という堅苦しさを抜きにして話す方を望むほど。

オレンジ色の長髪を背中まで流し、一纏めにした一つの房を黒いリボンで結んだ髪型。

ピンク色の下地に白いストライプの長袖の上に、黒の半袖のシャツを着こみ、ベージュ色のズボンを履くという東方人にしては珍しい西方の服装。これは動きやすさを重視したせい。

名前は某ましろな物語で当初は落とせなかった娘。名前の漢字の通常読みを入れ替えると、渚になる。

未寅龍仁〔みとら りゆうじ〕 CV 大塚明夫

年齢 三十八歳

身長 180cm

種族 人間

ヤマト国の未寅家出身。王を支える六つの家の一角、未寅家の代表としてヤマト国王の直属の部下を務めている。家に抱く名は未と寅。

一見して気さくないおじさん、という風貌であり、よく大らかに笑う人。だが彼もまた名家の出身であり、高位の立場に立つ者。

未寅家の特徴としてハンター一家という面があり、ヤマト国において対竜の軍を率い

ている将軍。ハンターで構成された人の部隊と、戦アイルーで構成された人外の部隊を束ねている。

現在はシユヴァルツの末裔の搜索と、活性化しつつあるモンスターに対する調査をするため、部下の戦アイルー、佐助と椿を連れて東方を巡っている。その際に名乗っている名前は榊仁【さかき ひとし】。他にも彼の部下が数人チームを組んでハンターに混じって調査中。

ハンターとしての実力は高く、どれほどのものかは不明だが、リオ希少種のつがいと相手に戦えるだけのもののようなようだ。

焰とは過去に何かがあったらしいが、その一件後に焰が去った後も彼女の事は気にかけていたようだ。

また戦アイルーの疾風とは縁が深く、彼は戦アイルーの部隊の隊長を務めていたらしい。

スキンヘッドに顎髭を伸ばした強面だが、中身は気さく。力と力のぶつかり合いを好む節があり、ユクモ村にいた頃はよく桐音と殴り合っていた。

異鷲輔【たつみ しゅうすけ】 CV 荻原秀樹

年齢 二十六歳

身長 173cm

## 種族 人間

ヤマト国の異家出身。王を支える六つの家の一角、異家の代表としてヤマト国王の直属の部下を務めている。家に抱く名は辰と已。

一見してぱつとしない青年。いつもへらへらと笑っているようなへたれな人、という風に見える。が、これは意図してそう見えるようにしているようで、実際は高位の立場に立つ者。

異家は一般社会に溶け込んで間諜をする事に長けた家であり、敵方に潜入して工作活動をしたり、街に繰り出して情報収集したりする事が多い。また未開の地を搜索したり、モンスターに関する情報を調査したりという事も行うギルドナイト的な側面もある。

今回もそのの一環として、モンスターの調査と辻斬り、領主殺しの一件も調査するために東方を巡っていた。その途中双子と出会う事になる。現在は調査を一旦終え、ヤマト国に戻って報告に移っている。

穏やかで好青年という性格と見た目であり、言葉も丁寧なもの。よく人のいい笑みを見せるが、逆に言えばその穏やかな笑みに何かを隠す事も出来る。それは潜入捜査を主としているため、自分の感情を知られないようにするため、という意図も含まれている。

ぼさぼさの茶髪に穏やかな青い瞳、服装は旅人のようなもの、ととことん冴えない旅

人を装っている。これが普通のスタイルらしく、時にカウボーイハットに近い帽子を被って素顔に影を入れることもある。

実力は不明。見た目通りか、あるいは何かを隠しているのか。

使い魔は驚。それは名前に驚があるからという単純なもの。

西丑灯【ゆうちゆう あかり】 CV 水橋かおり

年齢 四十八歳

身長 169 cm

種族 竜人族

ヤマト国の西丑家出身。王を支える六つの家の一角、西丑家の代表としてヤマト国王の直属の部下を務めている。家に抱く名は西と丑。

その風貌は和服美人といってもよく、いつも煙管を吹かせて縁側に佇む様は深遠の姫君を思わせる。だが登場する際はいつも縁側で障子に背を持たれかけ、庭園と空を眺めて酒を呑み、煙管を吹かせて指示を出す、というだけであり、実力は未知数。

西丑家は乾家と対立する三家のリーダーであり、魔族に対して否定的。魔族である乾家とは対立関係にあり、同じ年である渚とはぶつかり合うライバル関係にある。

だが灯はそれだけではない何らかの感情を渚に抱いている様子。

生まれた時より勘が鋭く、それだけでなく感知能力も高い。遠く離れているアマツマ

ガツチが放つ力の波動をおぼろげに感知してしまうだけの力の一端を持つ。一種の遠見や千里眼の異能と囁かれている。

あまり動く様子がないが、内包する気は高く、冷たい殺気で源次と六花、仕える忍を黙らせるだけの覇気を持つ。

かんざしで結び上げた黒髪、深い藍色の瞳。月に照らされる白い肌と着こなした和服で月夜の庭園を眺める様は実に絵になる。

そして口調は東方の方言。その中に気だるげに伸ばすのが混ざってくる。

使い魔は隼。

申子源次〔しんし げんじ〕 CV 子安武人

年齢 二十八歳

身長 166cm

種族 人間

ヤマト国の申子家出身。王を支える六つの家の一角、申子家の代表としてヤマト国王の直属の部下を務めている。家に抱く名は申と子。

外見的な姿、性格を見れば敬語を使う好青年。その家名と掛けて紳士的な人物だと思えるが、内面は彼を知る者は誰もがグズと評するだけのどす黒さを持つ。

魔族に排他的な三家の中で最も魔族に対して悪しき印象を持ち、抹殺するべきという

意を示す申子家の中で、最もその意志が強いとされる。笑顔で彼らを殺せるとされ、実際過去に何人もの魔族を殺害している。

当然、渚に対してもその感情は向けているが表面的には紳士的。しかし目は笑っておらず冷たい殺意を彼女に向け続けている。そこまで魔族を憎悪するのは家訓故か、それ以外の何かか。それは誰も知らない、知りたくもない。

今回下されたシユヴァルツの調査に彼も自ら出向き、辻斬りはシユヴァルツの末裔であると示す証拠を手に入れようとしている。そしてクロならば喜んで抹殺するだろう。

使い魔は鷹。

午卯六花【ごぼう りっか】 CV 真田アサミ

年齢 五十三歳

身長 153 cm

種族 竜人族

ヤマト国の午卯家出身。王を支える六つの家の一角、午卯家の代表としてヤマト国王の直属の部下を務めている。家に抱く名は午と卯。

小さい女性だが、れっきとした竜人族の女性。といっても種族的には若い。口調は粗暴で生意気な少女を思わせ、実際子供のように思える程、沸点が低い。

午卯家は魔法と格闘術を合わせた魔闘士と、銃を使った銃使いとして軍を形成してい

る。近く中距離の魔闘士、中々遠距離の銃使いといった風に二つの部隊を作り、彼女はそれらを束ねる將軍を務めている。

現在は王の命に従い、シユヴァルツについて調査すると共に、辻斬りなどの一件に探りを入れるために東方を巡っている。彼女の部下も各地に散らしているようで、スパイとしていくつかの拠点に潜入させているようだ。その中に午卯に連なり、魔族の血が混ざっている誰かをも使っているらしい。

そして彼女自身も渚の交渉現場を突き止めたようだが、狭間に止められることになってしまう。

使い魔は烏。

衛宮兼定〔えみや かねさだ〕 CV 黒田崇矢

年齢 七十五歳

身長 179 cm

種族 人間

ヤマト国の衛宮家出身。王を守りし近衛隊長。

生涯現役を謳うヤマト国の最終兵器。武神、護神と呼ばれ、人間としての最強と呼ばれる老兵。宮を衛まもつという意味合いを持つ家名。

生まれた時より持つ戦闘においての才能を如何なく発揮し、今もなお磨き上げられる



武を持ち、先代国王からヤマト国のためにその武を振るい続ける。

人間なのかと疑われるが、れっきとした人間。

それは対人だけでなくモンスターに対しても発揮され、無手でアオアシラ、ドスフアングを討伐した過去を持ち、武器を振るえば飛竜にも引けを取らない。

また魔闘士としての技術も持つため、午卯家との繋がりもある。

近衛隊を束ねる人物だが、それだけでなく他の部隊に対しての鍛錬も気が向けば行う。渚の部隊をしごく事もあれば、灯や六花の部隊をしごく事もある。彼にとつて両家のいさかいなど兇戯にも等しく、そのような事をしている暇があれば王のために働け、と言いつつ。

白髪交じりの黒髪、蓄えられたひげと老人という特徴が表れているが、翡翠色の瞳は鋭い眼光を放ち、体つきは今も鍛えられているため衰えを感じさせない。元気なお年寄り。

兼定という名前は刀工の名前より。

衛宮天羽〔えみや あもう〕

ヤマト国の衛宮家出身。現在は衛宮家から姿を消し、衛宮家の歴史から抹消された女性。

兼定と同じく武の才能にあふれ、彼らによつて仕込まれた事で才能を開花させ、将来

有望な武人として成長する。

だが家のルールに縛られ、大人の敷いたレールに乗って走る自分に思春期に入ってからは嫌気を覚え始める。所謂、反抗期。これによつて無気力となり、家に反発し始めた。それでも衛宮家の武人としての在り方を教えられ、ヤマト国と王に対して忠義を示せと言われるがこれを拒否。

数年悩み、考え、その果てに見出したのは己の武術は己の在り方を示すために在る。これを高めるためにはヤマト国から離れるのがいいだろう、と衛宮の人間を殺害。父親にも刃を向け、衛宮家に伝わりし刀剣を奪つて逃走。

これに怒つた兼定が追跡するが、宵闇に溶ける黒と白を纏う何者かの邪魔が入り失敗。

現在は行方知らずとなっている。

この大事件に彼女の父親は自刃。彼女の名は衛宮家から消えることとなった。現在もなお彼女は刀剣と共に搜索されている。

外見は東方人らしく黒い長髪をしているようだが……。ちなみにこの事件は本編の四年前に起こっている。

桐生雪菜【きりゆう ゆきな】 CV 進藤尚美

年齢 二十一歳

身長 160cm

種族 人間

ヤマト国の桐生家出身。

魔法使いとして名を馳せている桐生家に生まれた女性だが、幼少の頃に病によって視力を失ってしまう。それを示すために黒い布によって目を隠している。

しかし視力がないとは思えない程に周囲の状況把握能力が高く、発達した聴力と気配と魔力を察知する力、そして第三の目として周囲の状況把握能力を持ち、これらによって視力があつた頃よりも状況把握に長ける。それはまさに死角なし。

またその感知能力は、嵐の中で天空を翔けるアマツマガツチの存在を何となく感知でき、きる程に高い。

現在は家の習わしとして魔法使いとしての力を高めるために世界を巡り、自然に触れて回る旅をしている。

また桐生家と衛宮家は繋がりがあるようで、護身術として衛宮家から武術、剣術を教わっているようだ。

背中近くまで伸びる夜色の長髪、雪のように白い肌に桜の柄をした和服を着こなしている。手にはいつも赤い番傘があり、それをくるくると弄りながら佇む光景がよく見られる。その様は高貴なるお嬢様、姫様を思わせるが、実際彼女はお嬢様といつてもいい

人物。

口調は東方の方言。

赤城将輝【あかぎ まさき】 CV 谷山紀章

年齢 十九歳

身長 172 cm

武器 ハイランドグリーズ

防具 ラングロスシリーズ

スキル 攻撃力上昇【中】 耐震 回避性能+2 (回避性能お守り込)

種族 人間

モガの村に滞在しているハンターの少年。

一見して不良のようにしか見えない外見に少し荒々しい口調に性格をしている。だが実際はそのように見えるだけで結構いい人、らしい。

だがオールバックの髪。根元から数センチは黒、その先は金髪に染め上げられ、鋭い目つきをした青い瞳、両耳にはピアス、首からシルバーのチェーン、手首にはリング、ズボンにもチェーンが巻かれている……とどう見ても不良している外見から誤解されやすい。

現在モガの村は平穏なものだが、この先タンジアの港の荒れ模様に巻き込まれるだろう。

桜咲檸檬【さくらざき れもん】 CV 平田宏美

年齢 十八歳

身長 165cm

武器 セクトウノベルデ

防具 ネブラSシリーズ

スキル 状態異常攻撃+2 砥石使用高速化 高級耳栓（耳栓お守り込）

種族 人間

モガの村に滞在しているハンターの少女。

桜花流を伝える桜花家の分家、桜咲家の娘。剣士としてではなくハンターとして活動する道を選び、現在は将輝と組んで上位ハンターとしてモガの村で活動中。

だが分家筋とはいえないところの生まれである彼女がどういいういきさつがあつて将輝と組んでいるのかは謎。

黒髪に黒い瞳という東方人の特徴にスレンダーな外見。桜花流はまだまだ修行中の身。

彼女もまたタンジアの港周辺の異変に巻き込まれていくだろう。

楊蓮華〔ヤン レンファ〕 CV 今井麻美

年齢 二十三歳

身長 168cm

種族 人間

桐音の知り合いであり、モガの村を拠点としているハンターの女性。桐音と再会した当時はモガの村を離れ、劉飛燕〔リウ フェイエン〕とカヤンバと共に東方を周って活動していた。

華人の名前だが、実際は華人ではなく華人の血を引いているだけ。彼女の出身はヤマト国の辺境だそうだ。

クールでスレンダーな女性であり、丁寧な言葉遣い。だが、少々愉快なところがあり、会話の所々に寒いギャグを混ぜる癖がある。そういうところも桐音に気に入られていたそうだ。

モガの村へと帰還する途中、辻斬りに遭遇。飛燕の足止めによってカヤンバと共に難を逃れたが、飛燕は残念ながら殺される事となった。享年三十一歳。

彼女がモガの村へと帰還したならば、彼女もまた巻き込まれていくだろう。

ブルート・ギルガメッシュ CV 宮野真守

年齢 二十三歳

(体の持ち主の年齢換算。生前の享年は二十五歳〜三十歳と伝えられる)

身長 169 cm

防具 バンギスシリーズ

スキル 攻撃力上昇【中】 業物 早食い+2

種族 シュヴァアルツの末裔 (生前は人間)

太古の昔に繁栄していた古都ギル・ガメスの最後の王。輝龍ミオガルナによって国を滅ぼされ、自身も奴の手によって殺される。国土を拡大させ、更なる繁栄が見えたところ一瞬にして崩壊してしまった事で強い怒りと悔しさ、嘆きによって魂だけがこの世に留まり続ける。

そこにやってきたこの体の持ち主が素晴らしい才能を持つていたため、最後のチャンスとして憑りつき、意識を奪う事に成功する。それがかの大事件が集結しつつあった六年前の出来事。

それからはドンドルマと東方を巡り、ハンターとしての力をつけつつ体の力を馴染ませ、実力を上げていく。シュヴァアルツの血統に関してはシルバーのチェーンに繋がれたペンダントによって封じており、よほどの事がない限りは知られる事はなくなっている。

偽名は天王寺冥夜〔てんのうじ めいや〕。

東方の何処かに拠点を構え、三人の仲間を迎え入れて陰で活動中。

目的はかつて滅びたギル・ガメスの再建。

輝龍ミオガルナが現れたならばこれを討伐し、かつての雪辱を果たす事。

そして国を滅ぼし、魔道を歴史から抹消し、自身すらも消えることを神が望んだならば、それに反逆する事。

またかつて人族の頂点に立っていたこともあり、現在のトップである神倉月を倒してその座へと返り咲く事も目的の一つだった。それは、彼の勝利を以って果たされる事となる。

シュヴァルツの血統としての実力と、古代魔法の知識。二つの力が合わさる事で新生プルート・ギルガメツシュとしての力がほぼ完成している。だが常時開放しているわけではない。

ペンダントの封印の上に自己封印を掛け、更に力を抑えているため普段は一介のハンターとして行動できる。

赤い髪に金色の瞳。その在り方は王であった頃と変わらず、尊大ながらも相手を見下すようなそぶりはない。人付き合いは悪くなく、偉そうだが憎めない、いい人という風に見えるのだが、裏では着々と目的を少しずつ果たしているようだ。



草薙武〔くさなぎ たける〕 CV 石田彰

年齢 二十歳

身長 167cm

武器 槍

種族 人間

草薙一族出身とされる少年。独特の武術を持ち、また竜のオーラを纏って戦うという他では見られない独立した技術を持つ。竜殺しの一族と噂されている。

槍術を得意とし、軽快に動いて素早く突き、薙ぎを振るって戦う技術を持つ。桐音と同じく竜のオーラを行使し、速さを重視する迅気、ナルガクルガのオーラを得意とする。その他は威力を上げるものなど攻撃的なオーラをよく使う。

幼少の頃よりどこかずれた感覚を持ち、それが歪みとなって大きくなる。血を好み、竜殺しの力も相まって竜を狩る事を生きがいとしている。更に言えば一瞬にして竜を狩る事を主体に置いているため、草薙の技術を振るう事を厭わない。

その点で桐音と反りが合わず、姉弟でありながらお互い殺意という意味で意識し合っていた。

そして四年前に草薙の里から宝剣を奪い、里から姿を消す。それからは行方知らずだったが、現在はどうやらプルート共に行動している模様。

偽名は武藤凧（むとう なぎ）。意味合いは名前を姓に、草薙の「なぎ」を名前に。あとは姓に合うように調整。

奪った宝剣……妖刀の眠りを覚ますために色々しているようだ。

オールバックにしている黒髪に気だるげな碧眼。にたにたといけ好かない笑みをいつも浮かべ、自分や状況の感情をよく呟く。よく呟くのが「悲しいなあ……」、気分が乗ってくれば「嬉しいねえ……」。というより普段から喋り声が小さく、呟いているようにしか聞こえない事が多い。

その名前は……姓名共に意味がある。

東風天和【とうふう てんな】 CV 悠木碧

年齢 不詳

身長 171cm

種族 人間

ブルートと共に行動している女性。名前は偽名。

通称、天と呼ばれており、ハンターとして行動している。

酒豪であり、よく酒を呑む。というより料理店に入ればメニューの端から端まで頼むほどの大食漢。それらをべろりと平らげてしまう胃袋を持ち、うわばみと称される。

だが普段から無気力が目立ち、喋りもどこかだらけて気の抜けている事が多い。

そんな彼女ではあるが剣術の実力が高く、刀を振るう際は無気力感はなりを潜め、瞬時に居合い斬りを放つほどの腕前を見せる。

妖刀を所持しているらしく、各地で辻斬りをしているのは妖刀の力を目覚めさせるための吸血をしているらしい。詳しい目的は不明。

武器はその妖刀が主だが、気によって鉄甲爪を顕現させて振るう事もある。

燃えるような炎に近い紅いセミロングヘア、真紅の瞳。長身で美人という外見だが、しかしいつもだらけているような雰囲気によりプラスマイナス。そしてあれだけの食料はどこへ消えているのだろうか？

名前は東風戦トシフウにて天和テンホウ。つまり、麻雀用語。

刹那【せつな】

年齢 不詳

種族 人間

ブルートと共に行動している女性。名前は偽名。

通称、刹と呼ばれており、彼女もまたハンターとして行動している。

東方の方言を使う剣士であるらしく、刀を振るって戦う女性。また魔法使いでもあるらしい。果たして彼女は何者か？

白銀昴【しろがね すばる】 CV 中村悠一

年齢 二十六歳

身長 179 cm

武器 鬼哭斬破刀

防具 エスピナUシリーズ

スキル 防御力上昇【中】 火事場力+2 業物 毒半減（装飾品込）

種族 人間

前作主人公。

本編開始時では妻子共に東方、ヤマト国近辺にて隠れ住んでいた。

月の協力により、変化と結界術で今まで誰にも気づかれずに暮らしてきたが、東方の異変には気付いていた。しかし家族の安全を優先し、関わりたがらずにいた。

だが月の協力要請に応え、一家揃ってポツケ村へと移動。これから介入していくことになる。ハンターランク的には、夫婦揃ってG級クラス。

偽名は星野翔【ほしの かける】。

白銀優羅【しろがね ゆら】 CV 氷青

年齢 二十五歳

身長 172 cm

種族 人間 シュヴァルツの末裔

前作メインヒロイン。

霧夜編にて姿が確認できていた。一児の母となっており、不便な生活の中でよき妻と母となっている。

だが時折戦いに出ることで実力を磨き、暇があれば紅葉とも鍛錬をこなしている。そのおかげで実力は前作よりも高まっている様子。魔闘士としての一面ものぞかせ、格闘術に気刃を顕現して蹴り裂く技術を確認。

偽名は灰原なずな【はいばら】。

白銀菜乃葉【しろがね なのは】 CV 田村ゆかり

年齢 五歳

昴と優羅の娘。優羅の娘という事で、彼女もまたシュヴァルツの血統に連なる。

大人しく礼儀正しい幼女だが、その内面は高い才能を隠し持つ。時折母親の鍛錬に付きあつて基礎を教わっているようだ。

この時点ではすごくいい娘。しかし運命のいたずらにより、将来的にはあんな風に変貌する可能性を持つ。まるで、昔の母親のように。

偽名は灰原菘【はいばら すずな】。

名前は白と黒が混ざれば灰となる。そしてなずなとすずな、一文字違いの植物。

白銀紅葉【しろがね もみじ】 CV 櫻井浩美

年齢 二十六歳

身長 164cm

種族 人間 ディアブロスの因子持ち

前作メインヒロイン。

ユクモ編初頭で姿が確認できていた。一児の母となっており、不便な生活の中でよき妻と母となっている。

優羅と二人揃って昴の妻となっているが、二人の仲は良好。時折一緒に外に出て買い物をする事もあるらしい。

その高い怪力は依然として変わらず、戦うだけでなく家事や子供の世話にも有効活用。娘の楓を片手で持ち上げ、肩車している光景をよく見かける。

偽名は芙蓉桜【ふよう さくら】。

白銀楓【しろがね かえで】

年齢 五歳

昴と紅葉の娘。紅葉の娘という事で、彼女はディアブロスの因子が受け継がれている。この歳で一人称が「オ

紅葉に似て快活で活発。子供らしく元気が有り余っている。この歳で一人称が「オ

レ」となるあたりかなりの男勝りの元氣娘。

紅葉の鍛錬に付きあつて格闘術の鍛錬をする事が多く、外に出る時はよく紅葉に肩車されている。

初対面の相手でも物おじせず話しかけていく程、人見知りしない。

菜乃葉とは異母姉妹だが、仲は悪くない。というより彼女の性格上、そんな小さな事は気にしないようだ。

偽名は芙蓉小梅【ふよう こうめ】。

名前は某人間界のプリンセスのヒロインの母娘。本名は母娘の名前、偽名は母娘の姓、という繋がりがある。

ライム・ルシフェル CV 神村ひな

年齢 二十三歳

身長 163cm

種族 魔族 シュヴァルツの末裔

前作成長側の主人公。

六年前の一件後、ずっとポツケ村で暮らし続けている。兄夫婦共々関係も良好であり、時折一緒に狩りに行く事がある。六年の月日は彼をまた成長させ、ハンターとしても術者としても更なる飛躍を見せた。

その実力が明かされるのは、まだ少し先の話。

シアン・ルシフェル C V あおきさやか

年齢 二十三歳

身長 154 cm

種族 人間

ライムの妻。そして一児の母。……とてもそうは見えないのは禁句。

相変わらず小さいが、胸は立派。歳を重ねた事で童顔がなくなるかと思っただが、それでもなく、人間なのに若く見える人妻ハンター。……という肩書だが相変わらず性格もどこか子供っぽい。

しかしハンターとしての実力は飛躍しており、速さと双剣術はあの頃よりも増している。

リーフ・ルシフェル

年齢 三歳。

種族 魔族と人間のハーフ シュヴァルツの末裔

ライムとシアンの娘。

大人しく人見知り。お兄ちゃんっ子。

しかしその体にはライム譲りの高い魔力が眠っている。



名前は某育成RPGリメイク作の女主人公より。

クロム・ルシフェル CV 檜山修之

年齢 二十六歳

身長 180cm

種族 魔族 シュヴァルツの末裔

ライムの兄にしてポツケ村のハンター。みんなの兄貴。瑠璃の体術面の師匠でもある。

体術面に特化した実力を持ち、現在はG級ハンターとして陰で活動中。その縁で花梨と共に行動する事がある。

弟夫婦ともにポツケ村で隠れ住んでいたが、月の協力要請に応え、東方の一件に関わる事になる。が、現在はセルシウス待ち。

桔梗・ルシフェル CV 大原さやか

年齢 二十四歳

身長 164cm

種族 人間

クロムの妻にして茉莉のランサー、ガンランサーの師匠。

攻守ともに堅実な狩り、防御の高さを茉莉へと仕込んでおり、彼女自身も高い実力を

伸ばしている。茉莉の才能を認めており、いずれ自分を越えていく事を感じている。

昔持っていた狂気はもう気配もなく、みんなを見守る母にして姉のような姿を見せている女性となった。

グリーン・ルシフェル

年齢 四歳

種族 魔族と人間のハーフ シュヴァルツの末裔

クロムと桔梗の息子。

外見的にはクロムによく似ている。いつも後ろをついてくるリーフによくかまってやっている光景を見かける。

クロムと桔梗の才能は受け継がれているようで、時折鍛錬している。

名前は某育成RPGのライバルの名前より。

セルシウス・ルシフェル CV 坂本真綾

年齢 二十四歳

身長 167cm

種族 魔族 シュヴァルツの末裔

ルシフェル兄弟の従妹。

あの一件以降裁判に掛けられ、鞭打ち後にドンドルマの収容所へと入り、無償労働な

どをこなして刑期を過ごしている。

髪はただただ伸び続け、彼女が無頓着という事もあってあまり手入れされず荒れている。

が、精神面ではもう落ち着いており危険性はもうなくなり始めているが、性格的にはあまり変わっていない。

東方の一件の戦力を揃えるため、月の交渉によって仮釈放が認められた。現在はアルテミスとルーシーと共にポツケ村へと移動中。その後は落ちた実力を取り戻すための鍛錬となるだろう。

アルテミス CV ひと美

年齢 十九歳 まもなく二十歳

身長 162cm

種族 半妖 妖狐の血を持つ

人間の父と銀狐の母を持つ半妖の娘。現在は刑期を終え、ギルドナイトの末席としてサンの部隊にいる。

心身ともに成長し、外見的にも年相応のものへと変化している。性格も相変わらず純粋で素直であり、あまり悪しき印象は持たれていない。

セルシウスと過去に行動していたという事もあり、仮釈放された彼女を監視する役目

を負うが、彼女だけでは心もとないとルーシーも同行する事になった。

実力はその頃よりも研ぎ澄まされ、妖狐としての力も習得している模様。幻術の力も高まっているという。

神倉月【かみくら つき】CV 田中涼子

享年 八八一歳

武器 ラストエクデイス 封龍劍【真滅一門】（しかし祖龍の素材がないので不完  
全）

身長 170cm

種族 竜人族（さまざまな血の混血。シュヴァルツの因子持ち）

神倉一族の最後の生き残りにして人族の中で最強と謳われしハンターにして戦士、そして高位なる魔法使い。誰もが認める人物であり、様々な功績を残した有名人。

しかしシュヴァルツに向けられる悪意と、六年前の一件が神倉一族によるものという真実により、姿を変えて世界を周っていた。

東方の一件にも調査の手を入れ、その裏を探っていた。情報を求めるために乾渚らに交渉し、協力体制をとる事を決定。

その矢先にプルートと出会い、頂上決戦。

あと一步及ばず、敗れ去る事となる。彼女の死は東方を駆け巡り、中央、西方へと伝

わっていくことになり、多くの人が涙し、そして一部はようやく死んだかと言葉を漏らす。

様々な人達の感情を揺さぶり、新たな局面を迎える狼煙となる。

彼女の行動は様々な人へと影響を与えた重要な存在だった。

ルーシー・ヴァーミリオン CV 能登麻美子

年齢 百歳以上

身長 165cm

種族 竜人族

西方出身の竜人族。過去は西方でギルドナイトを勤めていたことがある。

数十年前に月が西方を旅している際に知り合い、現在は西方を離れて月と共に行動している。ギルドナイトを勤めていたという経歴がある上に、向こうで様々な功績を挙げただけの実力を持つため、こちらでも信頼を得られる。

月が亡くなった今、彼女がセルシウスとアルテミスを連れて行動する事になる。

アーチャーのようだが、まだ戦っていないのでその実力は未知数。

ヴァーミリオンという名は人工的な朱色的一种。つまり、スカーレットとカーマインという赤繋がりに。

サン・森羅・スカーレット【しんら】 CV 伊藤静

年齢 二十三歳 もうすぐ二十四歳

身長 159 cm

種族 人間

ギルドナイトの一人、レインの妹。

現在は一つの部隊を率いる隊長を務めている。ドンドルマを守り、周辺の異常を監視する立場にあるため、東方の一件には現在にはあまり関わる事はない。

部下であるアルテミスと共に行動する事が多く、今回の彼女の任務を少し心配したが、最終的には送り出した。

レイン・森羅・スカーレット【しんら】 CV 諏訪部順一

年齢 二十六歳

身長 176 cm

種族 人間

ギルドナイトの一人、サンの兄にして、ギルドナイトを纏める高位の立場にあるソルの息子。

新種のモンスターや、未開の地を調査する高難度の任務をこなす部隊の隊長として現在活動中。今回は東方で確認されだした新たなモンスター、亜種の調査に関わっている。

一度ドンドルマへと帰還し、報告書を作成している際に月と対面。彼女の要望に応え、上へと申請してセルシウスの件を進める手助けをした。

その後、再び東方……大砂漠へと戻り、調査を進める。

つまり、彼もまた大砂漠の一件へと関わる事となる。

獅子童雷河【ししどう らいが】 CV 神奈延年

年齢 九十一歳

身長 182cm

種族 ラージャン

人の姿をしているが、正体は人の姿をとるラージャン。

好戦的な性格は相変わらずだが、この数年で落ち着きが見られるようになっていく。焔と共に世界を周り、ハンターとしての戦いと、医者としての人を助ける行動をし続けている。

こうすることで死んでしまった親代わりであった獅鬼の背中を追っている。

東方の一件に関わり、焔の過去の一端に触れる機会に巡る事になり、彼女を支えようと心に決めることとなった。

そんな彼女との関係はよくわからない。六年もの間共に行動し続けているが、関係は相棒止まり。友達以上恋人未満、彼女の相変わらずの素っ気なさには苦笑が漏れる。

焰【ほむら】 CV 青葉りんご

年齢 二十歳

種族 戦アイルー

アイルーの中でも戦闘技術を修練する戦アイルーの里出身という過去が判明。

そして未寅の部隊に過去は所属していたらしいが、何らかの事件が起こり、部隊を離れ、獅鬼と共に行動する事となった。これが九年近く前の出来事らしいが、詳細は不明。

その当時に「破壊の焰」という異名がついた。

爆弾狂という一面は今ほなりを潜めており、六年前の一件以降は雷河と共に世界を周り、医療技術を高めて誰かを助け続けていたようだ。

アイルーの姿をとる事があれば、人の姿をとる事があると二つの姿を使い分けている。

サラマンドラのサラとは相変わらずの相棒関係。しかしもう一人の相棒、雷河に対してはまだ素っ気なさが残るが、嫌いではないらしい。

疾風【はやて】 CV 安元洋貫

年齢 三十歳

種族 戦アイルー

戦アイルーの中で、東方で最も有名とされている戦アイルー。



二つ名は神風。

剣術に長けた剣豪アイルーであり、その素早い動きで先陣切って斬り込んでいく姿からこのような異名がついたとされる。

笠を被り、煙管を咥えている姿はあたかも風来坊。昔は未寅の戦アイルー部隊の隊長を務めていたが、今ではフリーのハンターとして東方を巡っている。

佐助 椿【さすけ つばき】

年齢 十九歳 十六歳

種族 戦アイルー

未寅と共に現在東方を巡っている戦アイルーの二匹。

佐助は戦闘面での補助を、椿は事務関係の補助を主に務める。どちらも戦アイルーとしての実力は高く、共に狩りをする事が多い。

佐助はどこか捻くれた部分がある。

椿は「にゃ」という語尾が抜けきっていない部分があり、よく未寅を注意するようにひっぱたく光景が見られる。

迅雷【じんらい】 CV 森川智之

種族 ジンオウガ

東方を巡る流浪人。しかし正体はジンオウガ。

人側についている上司の命に従い、実力あるハンターを探していた。優羅を妻とした昴を捜索していたのは、彼がどれだけの力を保有しているのかを確かめるため、クエストをちらつかせていたという。

双子の力がどれだけのものを確かめるため、自分の弟子であるジンオウガをけしかける。彼女らが勝利したならば、道を示してさらなる成長を促し、人側の戦力を補強するつもりだった。

もし敗れ、死んだとなればそれはそれで納得。それまでの実力だったと見切りをつける冷たい部分も併せ持つ。しかしそれは野生に生きるジンオウガならではの感覚であり、責められるいわれはない。

人に対しては強者か弱者かという面で興味がある。上司ほど人に対して愛着を持っているわけではない。

強者がどれほどいるのか、と期待する生粋の戦闘者。これもまた無双の狩人と呼ばれるジンオウガならではの感覚。

部下としてジンオウガ、ジンオウガ亜種、ブラキディオスがいる。となればもしかすると火山で双子らが戦ったブラキディオスも……？

天空【てんくう】 C V くじら

種族 アマツマガツチ

“世界”に到達し、先代・空の七禍龍ウエゼントネルを下して新たなる七禍龍へと到達したアマツマガツチ。それに従って世界が修正され、書物などの七禍龍の欄にアマツマガツチが書き換えられている。

白皇を崇拜し、七禍龍へと至った今でも向上心は止まらず、現在は空白となっている側用人の座へとのし上がろうとしている。

そのためにシュヴァルツ抹殺の任を自ら請け負い、行動している。その結果、東方の各地にリオ夫婦が現れだし、昴らが搜索される事となった。

しかし現在はヘルに止められ、昴らが捜索されたと帰っている。

再び彼女が帰ってくる頃には、この世界はどうなっているのだろうか。

ヘル C V 海原エレナ

種族 不明 飛竜種の何か

“世界”に到達した飛竜種。白皇の側近、側用人の一角。二つ名は月蝕<sup>げつしよく</sup>。

側用人とは白皇に仕える四つの座であり、白皇のご尊顔を拝見でき、彼女から直接指示を下されて世界の裏で暗躍する者。世界のために動き続ける白皇の手足といつてもいい。

しかし現在は二つの空席があり、それぞれ白皇と敵対した者と、一步離れて傍観者と

なつた者がいる。

ヘル役割は世界の陰となつて人と竜を動かすように干渉し、時には要人の暗殺を行う者。その一環としてどうやらプルート側の背後にちらつているようだ。彼が蘇る一端を担いでいたこともある。

容姿は黒い長髪に顔の左半分は骸の仮面、金色の鋭い瞳。その体は黒い外套と黒衣を纏っている。腰元に二つの短剣が差されており、その漆黒の刀身を舐めたり指を這わせたり、あるいは短剣をくるくる回転させて弄つたりとする事を癖としている。

白皇と一部の相手にはちよつとした敬語、それ以外は舐めきつたタメ口、所々妙に言葉を区切つて喋る口調をしている。

暗殺者のような任務が多いが、本人としては生粋の戦闘者。昔は戦いに明け暮れていたように、短剣を弄る癖は恐らく血に関する事なのかもしれない。戦いを好むが、その機会に最近恵まれない事を悲しみ、異世界を放浪して自ら死地へと赴いた事があるらしい。

保有する能力は透明になる事。

その神速ゆえか、あるいはそういう能力か。闇に溶けるような漆黒の姿で見えづらいの、そういう能力も持っているため、暗殺者として向いている。が、本人はあまりこれを好まないようだ。

香澄【かすみ】 CV 雪都さお梨

種族 オオナズチ

“世界”に達したオオナズチ。世界一の情報屋。二つ名は真眼<sup>しんがん</sup>。

今回の一件もまた彼女は傍観者として存在している。天空が七禍龍に加わった際に祝福にやって来た。が、彼女が望む情報は口にせず、嵐のエネルギーを抽出し、水と風の力を持ち去っていく。

白陽・黒陰【はくよう・こくいん】 CV 白陽 竹内良太 黒陰 後藤邑子  
種族 空狐

“世界”に達した大妖狐。空狐とはその中で最も高位なる妖狐。二つ名は夢幻<sup>むげん</sup>。

性別は不明。何故かといえれば三つの人格があり、それぞれ独立して自我を持って行動しているためあやふやになってしまった。本人らとしてはどっちでもいいようだ。

男は白陽。

白い髪と赤い瞳、一見して好青年に見える。服装は黒いシャツにジーンズか、黒スーツというこの世界には似合わない現代的な服装をしている。

女は黒陰。

黒い髪に青い瞳、巫女服に近しい和服を着こなす東方美人。だがその上に狐の絵柄をした赤いダウンジャケットを着こむ。一人称は「クロ」、白陽の事は「ハク」と呼ぶ。ま

た最初に英語が時折入る、という変わった口調をする。またよくスナック菓子を食べる。

そしてもう一人。

それを知る者はあまり表に出てきてほしくないと思われる人格が存在するという。色んな意味で危険、色んな意味で話したくない、関わりたくない。しかしその人格は既に色々と活動している。

九尾は彼らの孫娘。

白皇とは昔からの知人であり、彼女を名前で呼べる人物。

名前は白と黒、陰と陽。その相反する二つを組み合わせた境界線。

ベアトリクス CV 柚木涼香

種族 ミラルートツ

世界の神、白き龍神。その正体はミラルートツ。二つ名は白皇<sup>はくおう</sup>。

次元の狭間に城を構え、その世界、平行世界に至るまで全てを眺める存在。

竜と龍を作り上げ、世界へと送り込んだとされるが、詳細は不明。

彼女の下には側用人が控え、指示を出して世界を安定させている。現在はヘルと、白皇が作り上げた分身、リーゼロットが務めている。彼女の下を去っていった二人に関しては放置しているようで、あまり深く気にしていないようだ。

側用人の下には七禍龍が存在し、それぞれの領分を務め、時期が来れば世界に現れる。七禍龍が一、ミラボレアスに関しては彼女の力によって作られる存在。それ故に外見적으로는似ているらしい。(という設定)

全ての竜の母にして、世界の母。つまりは世界に住まう人もまた彼女の子。(黒陰の弁)

シユヴァルツを抹殺するのは竜と人の安定を崩壊させ、両種族を滅びへと向かわせる異物であると断定。だが自分の手ではなく、竜と人によって抹殺させるように仕向けている。

だが白陽と黒陰との契約により、完全に人と竜の戦いへと移行。人側が勝利する事があれば、シユヴァルツに関しては見逃すと約束した。しかし竜側が勝つような事があれば、完全にシユヴァルツは抹殺される。

世界の神であるが故に歴史を修正する事も容易い。かつての古代魔法、魔道の力は彼女の手によって一度抹殺された。最近ではウエゼントネルの名を消し、アマツマガツチを加えるという修正もしている。

竜の神ではあるが一応人に対しても愛着はある。だがそれは人に試練を課し、それを乗り越えていく姿を眺めることを好む。超克する姿こそ人は輝くとみており、それを退屈凌ぎの一環としているようだ。

現在の七禍龍

闇を喰らう者 黒龍ミラボレアス（紅龍ミラバルカン）

空の頂点 嵐龍アマツマガツチ

陸の頂点 黒壊龍ノアカムルカス

海の頂点 海帝龍リヴァイアサン

中央 輝龍ミオガルナ

東方 冥蛇龍デイス・ハドラー

西方 煌黒龍アルバトリオン

七禍龍の来襲を伝える魔獣として、災禍獣ヴァナルガンドが存在する。

その上に、リーゼロットと白皇のミラールツ、ヘルの真の姿が立つ、という構図となっている。

九尾の実力は推測するに、七禍龍と同格。

夢幻の空狐は不明だが七禍龍よりも上、香澄は傍観者であるが故に未知数。

先代七禍を討伐した「世界」の白銀菜乃葉の実力もまた未知数。そして先代七禍は誰なのかは……。

以下 用語



## 霧夜一族

ヤマト国の山奥に本拠地を構え、大砂漠付近にも隠れ里を持つ忍の一族。乾家を代々主として仕え、時にヤマト国のために動き、時に乾家の指令に従って東方を飛び回る。ナルガクルガの因子を持つ魔族であり、その表れとして黒髪と猫のようなナルガクルガの耳を持つ。視界が悪くても、目に力を集めることで、力の動きや気配の動きを察知することを可能とする。要は感知能力が高まる。その際、ナルガクルガのように目が赤く光り、残光を残す。

西丑家に仕える風間一族とは昔から因縁がある相手のようで、時折ぶつかりあうことがある。それはもちろん殺し合いも含み、任務の影響で仕事が被った際は、相手の忍を殺害することもよくある話。

現在の頭領は霧夜潮、海の父親である。

また魔族にしては寿命が他の魔族と比べて短く、多少なりとも外見年齢と実年齢が合っているのもまた特徴。だがそれも若い時までであり、二十代後半で少し外見年齢が少し停滞。百歳を超えると三十代から四十代の外見となり、更に年を取ると老人となつていき、寿命を迎えてくる。

## 草薙一族

竜殺しの力を保有するとされるハンター一族。桐音と武の故郷。ハンターの一族だ

けでなく、もう一つの顔を持つとされている。

その特異なる力は、竜のオーラを纏うというもの。竜の力が凝縮された素材から力を抜き取り、自らの体内にため込むことが出来る。それを己の意思で引きだし、全身に纏わせる『纏まと』、武器に纏わせる『収束』がある。

纏は通常はオーラを纏うだけに留められるが、更に力を高めれば自分の背後にオーラが竜の姿を描くほどにまでなる。こうなればオーラ自身にも現実にも干渉出来る程にまでなる。

また草薙の独自の武術が存在し、桐音は剣術、武は槍術を扱う。その武術の名称はハントアの武器に用いられた銘が主流。なお、この武術は竜のオーラが関わってくるため、草薙一族以外には扱えない。

桐音が保有している朝風・夕風、そして武が持つ槍は草薙一族が作り上げた、彼ら専用の武器と推測されている。これらは彼らの血を吸い込んで変化したため、妖刀の類ではないかと思われる。

### 魔道

遙か昔、古都ギル・ガメスが存在していた時代にあつた剣道、武道に次ぐ人の第三の牙。

才能ある者ならば扱える技術であり、現代よりも進んだ知識と技術を用いてマナと魔

力を行使し、大きな術を扱う者は賢者と呼ばれていた。ギル・ガメスには魔法使いを集めた軍隊も存在するほどであり、その規模は現代とは比べ物にならない。

才能があればよかったので人間、竜人族を問うことはない。

だがギル・ガメスが滅びた後、白皇の手によつて歴史から抹消され、魔道は人の手から消える。それは人の手には大きすぎる牙だったためか、あるいは古の発達しすぎた技術にも応用されていたためか。詳しいことは不明。

長い間、魔道は失われていたが、魔族の誕生、そして魔族の進化によつて再び目の見る。だが古の時代と比べるとその規模は小さく、ゼロからのスタートとなったため古代魔法に比べれば弱いものである。また、その名前も魔道ではなくただの魔法と呼称された。

また歴史から抹消されたとはいえ、その存在だけはお伽噺に匂わせていた。ただ人々は今と比べて規模が大きすぎる魔道の力は想像することは難しく、現代の魔法使いにとつて魔道は復活させることが難しい代物である。

お伽噺だけでなく、創作、魔法書的一端に魔道に僅かに触れたものも存在する。が、再現することは稀。

一端として行使する際は口語での呪文詠唱が長いものも存在し、発現の際に宙に魔法陣が浮かぶ。月が行使した自己封印も、元々は魔道に属していたもの。完全ではない

が、彼女もどこかで漏れた魔道に触れていた可能性がある。

#### ヤマト国

東方の中でも名が上がる国。その昔、地殻変動によってシキ国から離れ、西へと移動した島が大陸と繋がったことで別の国として設立した。シキ国の首都が東京であることに對し、ヤマト国は西京と呼称される。

トップは王が務め、それを守る六つの家と近衛が存在する。

六つの家は十二支をそれぞれ二つずつ与えられた名を冠し、代々の代表が王に最も近くに仕える。また家ごとにそれぞれの役割が存在し、それを遂行することで王と国を支えている。

#### 蛇竜種

この世界に存在するゲームになかった新たな竜種。……と思つたら、どうやら4で登場する様子。

大蛇が巨大化したような蛇竜、ヒュドラのように複数の頭を持つ多頭蛇竜、ナーガのように蛇と人が混ざつたような蛇人種が存在する。

東方を中心として近年は数が増え、活性化しつつある。ギルドナイトなどが調査に赴いてはいるが、どうして活性化しているのかは不明。また調査隊などの一部は、ナーガなどによって返り討ちにあつている。

以下、オリジナルモンスター

ヒュドラ

砂漠に生息する多頭蛇竜の代表的存在。竜種としては中級であり、三つの頭それぞれに意識がある。牙からは毒が染み出、毒ガスを吐くことで獲物を弱らせて捕食する。

三つの頭が別々の動きをすることから見てもハンターにとっては厄介であり、また砂の中へと潜りこんでの奇襲も行う。

一つの頭が死亡しても二つの頭がまだ生きていれば一定時間は生きる。だが二つ死ねば次第に弱まっていき、やがて死亡する。

ナーガ

鬪蛇と呼ばれる蛇竜種。森に溶け込みやすい緑を主体とした鱗を持つ上半身は人に似ているが、顔は蛇に近い。竜のような短い角を持つ。下は土色と緑が混じる鱗に覆われた蛇のような尻尾を持つ。

鬪争本能が高く、強者を前にすれば戦いたくなる性分。そうでなくてもポテンシャルが高く、尻尾と両腕を巧みに使って森を高速で移動し、枝を伝って飛び回る。そうした上で鋭い爪や強靱な尻尾で獲物を捕らえ、丸呑みするように捕食する。

その肉体を生かした攻撃だけでなく、体内で生成された毒ガスや毒弾といった遠距離

攻撃手段も持つ。

生態や詳しい情報がまだ不明だった時期は謎の存在として扱われ、調査団やギルドナイトらを持ち前の実力で返り討ちにし続けていた。

グレイハブ

通称、毒矛蛇。焦げ茶色の斑模様をした鱗。頬の両端と頭部に鋭く生える鱗を持ち、尻尾の切っ先にも鋭く伸びる鱗がある。それがあたかも剣の刃の如く、それを生かして敵を攻撃する手段を確立した蛇竜種。

体長はラギアクルスやアグナコトルに迫るほど。

森に生き、己のセンサーに引っかけた生物へと攻撃していく獰猛さを持つ。例え飛竜相手であつても同じであり、リオレイアの巣に入り込んで卵を丸呑みしていったこともざらである。

剣のような鱗だけでなく、ハブの名の通り強い毒を持つ。

## 厄介な存在は大いなる砂の海へ消え去るのみ

## 5 1 話

そこはまさに死地にして地獄絵図。

地平を埋め尽くすは屍の群れ。その中に生きている者は少数でしかない。赤く染まる大地に倒れ伏せる屍は千を越えるだろうか。立っているのは強度の高い鎧に身を包む戦士達と、それらを見下ろす一頭の龍。

黄色く枝分かれした二本の角を持ち、白と黒の鱗と甲殻、鳥のような翼を持つ巨龍。それだけでなく手首や足、翼の一部分に水晶のようなものが生え揃っており、それが夜の闇に淡い光となつて浮かび上がっている。

白と黒、相反する色と水晶の光。これが星の光に例えられる要素だとも言うのだろうか。だがその星は残虐にして無慈悲な存在だった。

「こんな、こんな……馬鹿な事が……ッ!？」

一人の男が歯噛みしながら震える声で呟く。

夢であつてほしいと願いたくなる。それほどまでに信じられなかった。

たったの数分でこのざまだ。共に戦場を駆け巡り、共に多くの竜と戦い、その全てに勝利してきた彼の軍は、壊滅状態へと陥っていた。

そう、この無数の屍は彼の軍に所属している戦士達だ。

原形をとどめているのは少数でしかなく、多くは体がバラバラになっているか、消失しているかの二択しかない。

全ては、奴が放ったブレスの直撃と、そこから生まれた強風の如き衝撃波によるものだった。よしんば接近できたとしても、振るわれた爪と尻尾によって体は引き裂かれてしまった。

国の技術を以ってして作られた装備など、奴の前では無意味だったのだ。

「王よ、お逃げください！　ここはあたしたちが食い止めます！」

「ならぬ！　我が貴様らを置いて背を向けるなど、出来るはずもないわっ！　そもそも、我らが敗れるという事は、背後の我が国が滅びると同義！　無垢なる民を死なせることなどあつてはならぬわあッ!!」

そう叫ぶ王。

右手を前に出して力を籠めて彼は苦い声で言葉を放つ。これが自分達の反撃の一撃だとはかりに、彼は習得している力の中でもより高い力を発揮できるものを選択した。

「雷神の神雷！　天より来たりしは無慈悲なる裁きの剣つるぎ。地上の贅を喰らい、その名を



知らしめるものなり！ 今こそ天の門を開き、その御業を世に示せ！」

その詠唱に従い、巨龍の天上に幾多もの魔法陣が形成され、凄まじい勢いで雷の粒子が空へと舞い上がっていく。それはまさしく天へと集う星。数多の星が、巨星へと抗うその姿。

それが奴には興味深かつたらしい。視線を動かして星々の光を眺めている。

特に抵抗らしい抵抗もない。まるでそれは帝王が臣下の反逆の動きを知っていながら放置し、その抵抗を楽しんでいるようだ。それが王にとって癪に障り、更に出力を上げていく。

そんな王の姿に、周りの兵士達も動いた。

王のために、国に残した家族のために、かの巨龍へとそれぞれの魔道の術で攻撃を仕掛けていく。

紅蓮の炎が。

真空の刃が。

圧縮された水流が。

大地から穿つ石柱が。

それぞれ攻撃が襲い掛かるも、それでも奴は小さく唸るだけ。傷ついてはいるようだが、大きな傷にはなっていないようだ。これが、龍だというのか？

自分達の攻撃など意に介さない大きな存在。あんな龍が、存在していたというのか？  
その事に戦士達は更なる震えを覚える。

だがそんな彼らの怯えを吹き飛ばすかのように、天上から神雷が降り注ぐ。地上の者を悉く吹き飛ばし、散りも残さない勢いで降り注ぐその数多の雷を受け、ついに巨龍は悲鳴を上げた。

その光景に戦士達は眩い光に顔を庇いながらも声を漏らした。  
通用した。

王が持つ魔道の力の中でもトップクラスに君臨する力が、奴に通用したのだ。

やがて雷が収まり、それを受けた巨龍が倒れる姿を誰もが望んだ。

だが、奴は——倒れなかった。

バチバチと体中に残った電気が弾けているが、奴は一步前進した。黄色い瞳がじつと王達を見据え、低く唸り声を上げている。そのまま力を溜めるように気を集めれば、それに従って奴の体にある水晶が光を放ち出す。

それを見た王は素早く詠唱して攻撃を仕掛けるも、それは防御するように構えられた両腕に遮られる。そうしている間も水晶は光を溜めていき、夜の闇に眩しく光る光源となっていく。

あれは最初に見せたブレスの予備動作、いやそれに至るまでの準備だ。それを止める

術を、自分達は持つていなかった。

「……すまない、皆の衆。我は、お前達を守れなかった……」

「よいのです、王よ。我々はあたしたちは王と共に最後まで戦えた事を誇りに思います」

「俺達は最期の時まであなたと共に在ります。プルート様、そう嘆く事はありません」

「そうだけ、プルート。気落ちする事はねえ。それに、最後までこうして棒立ちつてのも俺達の流儀に反するんじゃないのか？」

王——プルトの肩に優しく手を置いた屈強な戦士の男がやりと笑みを浮かべる。彼の手には鋭い切れ味を感じさせる大剣が握られており、それには彼の気が纏われていった。

笑う彼を見て、プルートは気づく。周りの者らも彼に倣って笑みを浮かべている事に。

彼らは死を恐れてはいない。むしろ、上等だとばかりに不敵に笑って見せている。

それは死を覚悟し、プルート共に死ぬことを誇りとし、最期の最期まで抗つていせよと決意する男の顔だった。

彼らを前にして、気落ちしている暇などない。プルートはぐつと拳を握りしめて己の相棒を手にして顔を上げた。

「礼を言おう、アーサー、アドラー、モーガン。もう少しで我は無様な死を遂げるところ

であった」

「なあに、気にする事はない。俺の親友が目にも当てられない死を迎えようなんてことになつては俺が困る。では……最期の一撃を奴にお見舞いさせてやろうぜ！」

『応ッ！』

そうして彼らは走り出す。先頭を往くのはプルート。それに続くようにして彼の友、アーサーが往く。それに続く戦士達だが、それらを見据えて巨龍は溜めに溜めた力を解放し、圧縮された光の力を撃ち出す。

光は大地を焼き尽くし、倒れ伏す屍達すらも蒸発させる勢いだ。迫りくるその無慈悲なる光にプルートたちは避けるが、逃げ遅れた戦士はそれに飲み込まれて骸を残さない。

背後で悲鳴も漏らせず消えていく戦士達を感じながらも、プルートたちは足を止めず、巨龍の懐へと入り込んでいく。そうして構えた大剣を一気に振り上げれば、凄まじい力を纏う剣閃となって巨龍の足から腹へと襲い掛かった。

先ほどの神雷の影響で体が弱っているのか、勢いよく傷がはしって血が噴き出したようだが、それに奴は倒れることはない。

逆に振るわれた爪によってまた誰かが死んでいく。振るわれた尻尾が襲い掛かるもプルートとアーサー達はやり過ぎし、反撃の一撃を更に当てていく。

「我が一撃を受けるがいい！」

アーサーが更なる一撃として構えた大剣から先ほど以上の気刃が放たれ、足から胸へと届く傷を作り上げるが、奴は呻くだけに留まった。頭上から血が降り注ぐが、それに続いて奴の体が押し潰しにかかってくる。

それから逃げるが、奴は四足の状態となり、背後に下がりながら圧縮された空気を撃ち出してくる。それを躲したが、避けられなかったものは腕を吹き飛ばされて悲鳴を上げている。

続けて水晶が光を帯び、連続して光弾を撃ち出してくる。それを躲して今度はプル―トが仕掛けていく。

「風神の神風！ 吹き荒れるは無情なる刃の檻。大地の贄を呑みこみ、その名を知らしめるものなり！ 今こそ空を走り抜け、その力を世に示せ——っ、ぐ、はっ……!?」

最後まで詠唱しきったその時、プル―トの口から血が噴き出す。緑色の粒子が世界を暴れるように動き、次々と宙に魔法陣が描かれていくが、それに従ってプル―トの顔色が悪くなり、傷つき始める。

高位の魔道行使による反動だ。思わずふらつき、膝をついてしまったところで、奴が光弾を撃ち出し、それはプル―トの左肩を吹き飛ばした。宙を舞う彼の左腕は回転しながら血を撒き散らし、離れた所へと落ちていく。

だが同時に、魔法陣から幾多もの風が発生し、縦横無尽に空を走り抜けて奴を傷つけていく。斬り刻んだその刃はいつしか竜巻となり、一気に体力を削っていくのだが、それでも倒れ伏せることはない。

強靱な肉体と鱗がそれすらも防ぎきっている。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

響き渡る咆哮。

輝く白い鱗と水晶。

再び高まりつつある光の力。それを前に、プルートの力は動けなかった。

臆したわけではない。体が、限界だったのだ。

ここに至るまでに戦い続け、高位の魔道を行使した事でもう体力と精神力が擦り切れてしまったのだ。そんな彼をサポートするため、アーサーが再び大剣に己の気を纏わせ、それだけでなく魔道の詠唱を行い、真空の刃を纏わせていく。

「おおおおおらあああああああッ!!」

勢いよく振り下ろされた大剣から放たれる剣閃と風の二重の刃。プルートの左腕を吹き飛ばしたように、奴の腕か翼を吹き飛ばそうとしたのだが、やはりとすべきか強靱な鱗がそれを阻む。

「はあああああああッ!!」



それだけ神倉月に勝利を収めた興奮が抜けきらなかつたのか、あるいは高位の魔道を行使した影響か。頭を振りながら起き上り、テントを抜けるととき火に当たって寝ずの番をしている刹那がいた。

「……起きはりましたん？」

「ああ、少し、な」

「そう。なんか呻いとつたような気がしりましたが……夢見でも悪かつたん？」

「……………」

その言葉にプルートは無言になり、闇の中に燃えるとき火をじつと見つめる。

夢見が悪かつた……ああ、たぶん悪かつたといえるだろう。なにせ自分が死ぬ時の光景をもう一度見てしまった。かつての親友と部下達の死も見てしまい、同時に因縁の光手を前にしてしまった。

恐らく自分にとってこれ以上の夢見が悪いものはないだろう。

「……深い事は聞かへんでおこか」

「うむ、そうしてくれるならばありがたい」

「ん。……んで、天はずつと寝とる、と」

視線がテントの方へと移り、その奥で眠っている天和を見つめる。布団に潜って眠りこけているようで、プルートが呻いていたことには気づいていなかったらしい。まあ、



久しぶりに多くの人を斬り伏せ、それだけでなく月の死体を届けてそのまま夜通しとんぼ返りをしてきたのだ。

あまり寝ていないという事もあつてずっと眠つてしまつてゐる。たぶん起きたらたらふく飯や酒を消費するだろうが、それはいつもの事なので気にしない。

「少し早いが、ここからは我が変わらうぞ。刹、お前はもう寝ても構わぬ」

「そう？ よろしいんです？」

「ああ、ゆっくり休むがよい。明日はタンジアの港に入るのだからな」

「せやな。じゃあお言葉に甘えさせてもらいますわ」

ぺこり、と頭を下げて刹那はテントへと入っていく。

それを見送り、ブルートはたき火に薪を追加させて火力を調節し、飲み物を用意して深く座り込む。

(……アーサー。あの世でお前は我を待ち続けているのか？ だとすれば、随分と長く待たせ続けているだろうな。いつまでも来ぬ我に苛立っているだろうよ、すまぬな)

無二の親友にして共に戦場を駆け巡つたアーサー。幼い頃より共に育ち、共に剣を振るい、共に魔道を高め、共に戦いを乗り越え——共に死んだ。

生まれた時は違つても、死す時は同じだったが、ブルートは残念ながら黄泉の国へと向かう事はなかつた。ブルートの無念と怒り、様々な感情が彼を現世へと留め、長い時

を経てこうして蘇った。

(それともアーサーよ。お前はまた別の誰かとなって蘇っておるのか？ だとすると、一体誰になつていたのであろうな？)

輪廻転生によつてこの世界の誰かとなつて生きている可能性も捨てられない。とはいえそれが事実だとして一体どこの誰になつていいのかはわからないだろう。それに前世の記憶を持つている可能性は限りなく低い。

出会つたとしても自分の事を知つてゐるはずもない。

「……クク、我らしくもない。やはり昨日の一件が尾を引いてゐるようだな」

こんな事を考えるなんてどうかしてゐる、と自嘲する。

目標の一つである神倉月の撃破に達成できた興奮が収まらない。その影響かあの夢を見てしまう事もあつて気分は十分にかき乱されてゐる。これではもう眠れやしない。寝ずの番をするならば全く問題ないので、辺りを少し警戒しつつ夜を越す事になる。たき火をぼうつと見つめながら、プルートの夜を過ごしていくのだった。

○

あの大事件から二週間。

まだ神倉月の死の影響力は残っており、彼女に対して思うところがある人達は悲しみに暮れていた。

そして昨日、このタンジアの港へと訪れた瑠璃達はその悲しみを振り切り、今日からの活動へと意識を切り替えている。ユクモ村を出て南下し、海に面したこの港町を新たな拠点として活動する事になった。

昨日の夜に到着し、ギルドで登録を済ませた事でこれからここを拠点として活動する事が可能になった。一晩ゆっくり休めた事で疲れもとれたし、狩猟に出る事は問題なくなる。

「今出回っているクエストをざっと見てきたところ、確認できたのは海竜ラギアクルス、水竜ガノトトス、大海蛇シーサーペント、水獣ロアルドロス、尾鎚竜ドボルベルクですね」

「流石港町。海に関係するものが多いようね」

「お二人は水中戦はどんな感じツスか？」

「回数は少ないですが経験はありますよ。十兵衛さんはどうですか？」

「おいらもそれなりに経験はあるツスよ。……ヘビイ使いからすれば水中戦は結構火力があつたりするツスからね」

水中を突き進むため弾丸の飛距離は落ちるが、水中で生活するモンスターは体が大き

いものが多く、跳弾効果がある通常弾Lv3や、対象を貫く貫通弾によって一気にダメージを与える。

水中では陸上と違ってその機動力の低さもそれほど関係がなかったりするため、その高い火力をどんどんぶつ放す事で殲滅攻撃を発揮する。

タンジアの港に出回るクエストの大部分は、海に現れた危険なモンスターの討伐依頼が主だ。それだけでなく海から繋がる川の周辺や森、北西に広がる砂漠地帯、離れた孤島にある火山のクエストも存在している。

さて、そんなタンジアの港に出回るクエストを茉莉が確認しに行ったわけであるが、どのクエストに行ってみるべきか。

ここで聞きなれないモンスターの名前がある事に気づく。

大海蛇シーサーペント。

名前の通り海に存在する蛇竜種であり、その大きさは通常のモンスターの中で現在最大と言われているアグナコトルといい勝負か、それよりも長いとされる。

その巨大さから小舟から少し大きいくらいの船ならば、丸呑みか大部分を破壊しながら喰らい尽くしてしまいかねない程のものであり、そうでなくとも牙には麻痺毒があつて確実に獲物の動きを封じて喰らいついてくる。

普段は大海の向こうや深い海に潜み、魚群やルドロスなどの小型モンスターを捕食し

て生きている。ラギアクルスと並んで漁師や船乗りにとって危険視されている存在として近年名が知られている存在だ。

その危険度から上位以上のハンターしか相手に出来ないモンスターではあるが、上位ハンターでも厳しいとされており、大抵はG級に認定される存在とされている。

なので自分達には少し厳しいので除外しよう。

上位以上のラギアクルスならばいい勝負になりそうではあるが、森に存在する獣竜種ドボルベルクもまた厳しい相手として壁になり得るだろう。

だがこの先、海で戦うならば水中戦に慣れていくのはアリだろう。それならば同じく海では厳しい相手となるガノトトスも候補に挙がってくる。

選ぶならばこれらの内のどれかとなる。

ふと、そこで一人の男がクエストボードから一つの依頼書を手にしてカウンターへと向かっていく。

「……あの人、シーサーペントを持っていきましたよ」

じつとその依頼書を見ていた茉莉がそう呟いた。

赤髪に和服、シルバーのロザリオを下げたその男はカウンターにその依頼書を置くと、「これを頼む」と受付嬢へと告げる。

「お一人ですか？」

「いや、あそこにいる天と利も含めての参戦よ」

そう言つて彼は親指である一席を示した。そこには真紅の長髪をした女性が机に置かれていた料理をどンドン平らげ、酒をがぶがぶ飲み干している。その対面には艶やかな青色の長髪をした女性が座り、瞳を閉じたまま酒を静かに呑み進めている。

彼女らを見た十兵衛が小さく「……出来るツスよ、あの人達。とんでもないツス」と呟いてしまう。骸の仮面の奥から何が見えたのかは言うまでもない。彼女らが纏う雰囲気、気迫などを感じ取つたのだろう。

「問題あるまい？」

「はい、受理いたします」

恐らくここで活動しているハンターなのだろう。メンバーを確認した受付嬢は問題なしとしてクエスト受理を認めた。そんな様子に少し驚きながら、クエストを受理させて仲間の二人へと報告する男の様子を眺める。

そして彼らは準備をするために酒場を後にしていった。机の上にあつた数人分の料理は綺麗さっぱり消費して。

その光景に茉莉は一つの記憶を思い出した。

「どこかで見た事があつたと思えば、あの女性の人つてある村にやってきたうわばみさんじゃないですか」

「……ああ、桐音と初めて会ったあの村の？　こんなところまで来てたのね」

あれから一カ月以上も経過しているのだ。ここにやってきていたとしてもおかしくはない。しかもあの時は一人だったのに仲間がいる。ここで出会ったのか、あるいは合流したのか。

実力者として気になるところではあるが、自分達もクエストを選んで受注しないと。先ほど茉莉が挙げたクエストを選ぶ事にする。

お茶を飲み干し、茉莉がどうしますか、と視線で問いかける。後々の水中戦に体を慣らすためにラギアクルスカガノトトス、どちらかが候補に挙がるだろう。

さて、どちらを選ぶか、だが……。

得られる素材から次なる装備を作るとなればどっちがいいだろうか。

「ラギアクルスがいいんじゃない？　海の代表格だし、いい相手になると思うんだけど」

「十兵衛さんは？」

「おいらも意義はないッス」

「では受注してきましょう」

茉莉がクエストボードへと向かい、ラギアクルスの依頼書を取って席へと戻って三人分のサインを描いてカウンターへと向かっていった。依頼書を置き、メンバーを申請し、ここに受理される。

大海の王・ラギアクルス。

対象：ラギアクルス。

場所：孤島。

不安定。

ランク的にも問題なく受け入れられ、三人は宿へと向かって準備を進める事にした。久々の水中戦であり、しかも海での水中戦となればラギアクルスに大きく分がある。奴にとつて海とは本領を發揮する領域であり、人の身で海で抗うにはおこがましい相手だ。そんな相手……海竜との戦い。

何としても勝利を収めて幸先のいいスタートを切りたいところだ。

準備を整えて港へとやってくると、先ほど酒場で見かけた三人のハンターがそこにいた。彼らも狩場が孤島のようなのだが、別の島らしい。だが近場の島々を船が回るように、同船して移動する事になったようだ。

相手方のリーダーはこの男性らしく、瑠璃達が同船すると聞くと「ほう、珍しい顔ぶれではないか」と首を傾げ、そしてにっこり笑って握手を求めてきた。

「短い間ではあるがよろしく頼むぞ。我は天王寺冥夜という。この者らは私の戦友、東風天和と壬生刹那だ」

「……………ぞーもー、んく、んく……………」



「よろしゅうな」

うわばみの女性はこの船でも相変わらず飲んでいるようだが、こっちは水を溜めた瓶らしい。流石に船の上で大酒を呑むなともう一人の女性、刹那に止められたようだ。

そして先ほどから気になっていたがその刹那はずっと目を閉じたままだ。その佇まいとからいいところのお嬢様を思わせるが、そのずっと閉じられた瞳に首を傾げてしま

う。

「失礼ながら壬生さんは……」

「ああ、これ？ この通り、ウチは目え見えへんのよ」

「見えてないのに……ハンターやってるの？」

「そうやなあ。……でも、見えへんからって戦われへんわけやないで？ 盲目でも剣を振るう剣士なんて過去に何人かおるしな。ウチも、その一人ってわけや」

その口ぶりからして恐らく彼女は剣士と予想される。身を包むのは東方の侍と呼ばれる剣士の服装を模した防具、日向・覇シリーズを身に包んでいた。素材に使われたのは大砂漠を航海する古龍種ジエン・モーランであり、高い防御力を誇る防具だ。

それを着ているだけでも彼女が実力者である事は明らかだろう。

確かスキルは心眼、見切り+2、集中、回復速度—1が発動するはずだ。

一方握手を求めてきた天王寺冥夜——プルトの装備はバングスシリーズ。イビル

ジョーの素材を使用した装備であり、彼の纏う気迫と相まって強い気を放っている。

そしてぼうつと海を眺めながら水を飲み、手にしている肉を食べている東風天和はというと、雷狼竜ジンオウガの素材を使用したジンオウシリーズを身に纏っていた。野性的な外見と中身のギャップが見てとれるのだが、恐らくそんな事は彼女は気にしないだろう。

そのスキルは雷属性強化＋1、業物、力の解放＋1、挑発だったか。

それにしてもジンオウガ、ジエン・モーション、そしてイビルジョー……。

強力な個体を討伐した事で得られる装備を纏う三人。なるほど、これだけの実力者ならば問題なくシーサーペントを相手に出来るといいうわけだ。

「天王寺さん達はずっとタンジアの港で活動を？」

「うむ。我が父の領土が近くにある故な、あそこが主な活動拠点として利用させてもらっている」

「領土？ ……ああ、そういえば西の方に天王寺の領主様がいらつしやいましたね。なるほど、あなたはその領主様のご子息様でしたか」

「そう畏まらなくてよい。確かに我は領主の息子ではあるが、今ここに存在するは一介のハンターに過ぎんのだからな」

にやりと笑ってみせるプルートの高貴なる者の見下すような雰囲気は感じさせない。

友好的でいい人だと感じられる人物だ。刹那も盲目ではあるが、その佇まいに危うさはなく、波に揺れる船の上だろうとどうという事はない風にそこにいる。

道を歩く様も、船に乗る動きも問題はなかったようだし、どうやら防具のスキル以前に彼女自身が心眼を持っているようだった。

そんな彼らへと茉莉は何度か頷き、切り込む。

「そういえば少し前にタンジアの港で大事件があつた事はご存知ですよ?」

「大事件? ふむ、それはもしや神倉月の事か?」

「ええ。あそこを拠点としているなら、当時どんな様子だったのかご存知かと思ひまして、如何でしょうか?」

「確かにあの日は早朝から大騒ぎだったと聞く。当然であろうな、あの神倉月が何者かに殺されたのだ。騒がない方がおかしいだろうよ。……だが、我らはその日、クエストのために港から離れていた故な、戻ってきた時には既にあの者の死体は移送されておつたよ」

少し悲しげに表情を歪めながらプルートのそう語る。その様子に海を眺めていた天和はちらりと彼を見やつてすぐに視線を戻し、刹那もまたプルートに倣うように悲しげな表情を浮かべて佇んでいる。

なんとまあ、大した演技だと知る者は言うだろう。

その「何者か」が自分達だというのに、彼らは見事にそれを隠して語り、佇んでいる。確かに彼らは当日タンジアの港にいなかった。それをハンターであるが故の理由、クエストのためと語って容疑者から外れてしまっている。実際当日プルートはタンジアの港ではなく近くの村へと滞在しており、その理由がクエストをこなしたからであるため問題ない。

また殺された現場が特定されていないので、本人らが語らなければ真相は闇の仲だ。大抵の者らはタンジアの港付近で殺されたと思ってしまう。真実はそこから数十キロも離れた場所だというのに、だ。

それに茉莉は気づく余裕などない。

「そうですか……」と頷いてそれ以上問いかける事はない。

「神倉月の事、気になっておるのか？」

「ええ、彼女は親しくしてもらって良かったですので」

「なんと、知人であったか。……心中、察する」

そう言つて黙礼するプルート。それに瑠璃は無言で視線を外しながら手を握りしめて悲しみを堪えている。一方十兵衛はじつと無言でその会話のやり取りを眺めていた。いや、実際は茉莉と会話しているプルートを眺めていた。

骸に隠されたその素顔がどのような表情を作っているのかはわからない。ただ彼は

プルートを……彼が提げているそのシルバーとペンダントをじっと見つめているようだった。

そんな彼に、音もなく刹那が近づき、

「……どない、しはりましたん？」

と声を掛ける。突然声を掛けられて十兵衛はびくつと体を震わせ、さつと距離を取りながら刹那へと振り返る。その様子に刹那は少し驚き、「ああ……すんまへんなあ。驚かせてしもうた？」と申し訳なさそうに謝ってくる。

「あ、い、いえ……おいらこそ、申し訳ないツス。な、なんか、用……ツスか？」

初対面の女性という事もあつてまた十兵衛はびくつきながらそう言う。もう慣れ親しんだ二人と行動しているので忘れがちだが、彼は人見知りなのだ。特に女性に対してはそれが如実に表れる。

それに刹那は気づかず、くすりと微笑みながら十兵衛へと近づき、そしてプルートへと何も映さぬ視線を向ける。

「なんか、彼の事じいっと見とつたけど、なんか気になる事でもあるんかなつて」

「あ……いえ、そんなわけじゃないツス……。すみませんツス……」

「いや、そう謝らんでもええんよ。……んん、そのたどたどしさに雰囲気……もしかして、他人に慣れとらん？」

「……はい、ちよつとした……人見知りツス」

「ああ、そらしやーないわ。すんませんなあ」

驚きに口元に手を当て、それからまた頭を下げ謝ってくる刹那に十兵衛は両手を挙げて首を振る。「いや、そんな……謝らなくてもいいツス。おいらが、そういう性格なだけで、壬生さんが悪いわけじゃないツス……」と否定していくと刹那はそんな十兵衛にくすり、と微笑を浮かべて、

「そう?」

「はい。……だから、そう気にしなくてもいいツス」

ぺこりと頭を下げる十兵衛にまた刹那は微笑を浮かべ、その件に関して口にする事をやめる。そしてブルートへと視線を向けて「それで、彼の事をじつと見とったけど、どないしたん?」と問いかける。

それに十兵衛は少し沈黙していたが「いえ、何も無いツスよ。ただ領主の息子さんなのにハンターやっている人が増えているな、と思っただけツス」と答える。

「まあ、最近モンスターが色々活発化しとるしな。それに対抗しうる力を磨くのは大事な事なんよ。冥もそれに倣って力をつけとるみたいや」

「……壬生さんは、どうしてツスカ?」

「ウチ? ウチは流れるままに、やな。最初は護身術として戦う力を磨いとったけど、そ

れから小型モンスター、大型とほとんど拍子に相手を強くさせて、それに対抗しうる力を磨きあげとつたらこうなつとつた、つてオチや」

「そう、なんですか……」

そう領きながら十兵衛はちらりと隣にいる刹那を見やる。

(……確かに強さは感じる。それだけじゃない……魔力も結構あるように感じる。しかもそれを——覆い隠す力さえも。あそこにいる彼のように……)

力を覆い隠す力を秘めたあのペンダント。それを持つのは領主の息子としてなのか、あるいは隠すだけの理由がある程の力を保有しているのか。それが気になつてついじつと見つめてしまったのだ。

それは刹那も同じなようで、その魔力を隠すように何らかの力が働いているようだった。

一体何故そんな事をするのだろうか、と十兵衛は首を傾げる。

だが考えたところで今日出会つたばかりの相手だ。それを知る術なんてどこにもない。

それからはそれぞれ雑談をし、食事をとり、数時間の航海を経てそれぞれの狩場となる孤島へと移動していった。

## 52話

狩場となる孤島にやってきた瑠璃達は早速テントを設営し、支給品ボックスから水中戦用の道具を取り出して準備を進める。まずは水中メガネを頭の防具へと装着。酸素瓶はポーチへとしまい、水竜の守りを体に身に着けておく。

これによって水中戦に対する必要なものは揃った。

以前は水没林の大河だったが、今回は海だ。大河よりも深く、広い水の世界で主に戦う事になるだろう。なにせ相手は大海の王と呼ばれし海竜ラギアクルス。奴の主な活動領域は陸上ではなく水中だ。

陸上へとあがつてくる事もあるが大抵は海で行動するため、ハンター達は奴の領土で主に戦わなければならない。陸上へと引き上げるための釣りも通用しないため、多くは水中で戦う事を強いられる相手、それがラギアクルスなのだ。

水中戦が可能とされるまでは、文字通り手も足も出ない事が多い相手として認識されていた相手と戦う事になる。

さてそんな奴と戦う瑠璃達の今回の装備。



瑠璃は火竜剣〔火燐〕を手にする事になった。ラギアクルスに対して火属性はある程度有効であり、連続攻撃を可能とする武器として選択。

茉莉はトキシックジャベリンを選択。今回もまた毒を注入しながら立ち回る事を選んだ。

十兵衛は炎戈銃ブレイズヘルでも雷砲ラギアブリッツでもない新たなヘビィボウガンを取り出した。新緑色の甲殻と金属部分が存在するそのヘビィボウガンは妃竜砲〔姫撃〕。雌火竜リオレイアの素材を使用して作られたヘビィボウガンだ。

毒弾Lv2と火炎弾をベルトリンクによつて連続して撃ち出せる事を可能としており、支援と攻撃を若干両立できるボウガンである。

肩から掛けるようにベルトを通し、使用するチップを付けて準備完了。

地図を確認すれば北に海が広がっているようなので、まずはそちらへと向かう事にしよう。

ベースキャンプから道なりに歩いてエリア2へと向かい、そこから真つ直ぐに北上。途中でジャギィヤルドロスに遭遇したが、それらを無視してエリア10の海岸へと出る。

ざざざん、と静かな波の音と潮の香りが感じられるこの海岸。数時間という長い航海によつて嫌というほどに海を見て、潮風を感じていたので特に感慨深くはならず海へ

と近づいていく。

ポーチから酸素瓶に繋がれたマスクを取って口と鼻に当て、水中メガネを下ろし、竜の守りの力を確認し、三人は次々と海へと飛び込んでいく。

水流の守りの力により装備を付けていても三人は海で問題なく泳ぐことが出来ている。特に重量のあるディアブロUシリーズを付けている十兵衛もまたその例に漏れず、問題なく泳いでいた。

さて、朝から数時間の航海によつて昼も超えて夕暮れが近くなっている時間帯。もう少しすれば海が赤く染まりだしてしまう時間帯ではあるが、狩りに時間は関係ない。朝でも昼でも、例えば夜であったとしても標的と出会えば狩りは始まる。

そしてこの水中メガネは夜の海だったとしても光さえ差し込んでいたならば、ある程度の視界を確保する事は可能だ。だがそれも完全ではないので油断は禁物。出来る事ならば夜の海での戦闘は避けた方が身のためとされている。

つまり今日は夜になるまでの数時間は戦い続ける予定である。

海を泳ぎながら辺りを見回してみたわけではあるが、目につくのはエピオスだけだ。浅瀬付近で見られる草食種の小型モンスターであり、水底に生える水草などを食料としている。

比較的小となしくこちらから手を出さなければ攻撃してこないモンスターであり、そ

の肉やキモは食料とされている。そしてその肉は人だけでなくラギアクルスらにとっても食料とされており、狙われる確率が高いモンスターだ。

「ここにはいないようね」

ざっと見まわす限りではラギアクルス……というより大きな影は見当たらない。それだけでなく大型モンスターが持つあの気配が感じられなかった。という事はこのエリアにはいないという事になる。

では隣のエリアーなのだろうか、とそちらに向かって泳いでいくことにした。

こちらは完全に水のエリアとなっており、それだけでなく海に浮く岩場が隣の崖から繋がり、その下が結構な深海となっているエリアとなっている。

陸の部分がなかったため常に海に身を浸し、動き続けなければならぬ泳ぐだけでも体力を奪われる場所だ。

だが人にとっては苦痛でも、海に生きるモンスターにとってはなんの問題もないエリアと言える。

そう、あの深海を優雅に泳いでいるあの青いモンスターにとっては、このエリアこそが十全に力を発揮できる環境。

「……いたッスよ」

十兵衛が眩きながら妃竜砲【姫撃】を取り出して構える。瑠璃も火竜剣【火燐】へと

手を伸ばし、茉莉も盾を構えながらじつと奴の動きを見据えている。

直線距離でもかなりの距離が離れているというのに、奴——ラギアクルスは何かに気づいたように顔を上げ、長い首を動かして上にいる三人を視界に収める。

そうしてゆらりと立ち泳ぎへと体勢を変えながら向き直り、その黄色い瞳を爛々と輝かせながら自分の領土……いや、この場合は領海だろうか。それを侵しに来た愚かな者らを見上げている。

そのまま大きく息を吸いこみ、

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

辺りに響き渡る程の咆哮を上げた。水の中という事もあってその咆哮は地上で聞くよりも早く耳に届き、高まった殺気が突き刺さってくるのを感じながら三人は一度散開する。

そんな三人へと一気に距離を詰めるように、ラギアクルスは一気に水を蹴って体を震わせながら一気に海を駆け昇ってくる。

そう、まさにそれは昇竜。

海底付近を先ほどまで泳いでいたというのに、気づけば海面付近まで一気に泳ぎながら昇ってきているのだ。

茉莉はその速さに息を呑み、それだけでなく想像以上にラギアクルスの体が大きい事

に息を呑みながら気を込めて盾を構える。

「——っ、くう……!?!」

盾から伝わるラギアクルスの突進の力。その全身の力が一気にラギアクルスの頭へと集中し、頭突きとして茉莉に襲い掛かった。気を込めて守りの力を高めた茉莉ではあったが、水中という事もあつて踏ん張る事は出来ない。

突進を受けて数メートルノックバックされる。

それを歯噛みしながら堪え、ラギアクルスを見れば少し下がって距離を取りつつ口元へと雷エネルギーを集めていた。

そんなラギアクルスへと側面から十兵衛が火炎弾を連続して撃ち出していく。チツプから伸びるベルトリンクによって連続して装填され、妃竜砲【姫撃】から素早く火炎弾が水中を突き抜けていく。

「グルルツ……!?!」

顔へと命中してくる火炎弾の嵐に怯んでしまい、じろりと彼を睨んで向き直っていく。そんな動きを見つめながら十兵衛は下に向かって泳ぎながら、ラギアクルスの全身を見上げてみる。

(……大きい。いや、これは大きすぎる……!?)

放たれる雷弾が上を通過していくのを感じながら、チツプから通常弾Lv3を装填し

てラギアクルスの腹の下へと回り込んで射出。腹の下から見上げるその全身は巨大だ。通常体としてラギアクルスの全長は2650cm近くある。海に生きる海竜なのでその体が大きくなるのは頷ける。それでも十分大きいだろうが、アグナコトルには及ばない。

だが上位、G級ともなればこの全長は更に大きくなる。

金冠サイズともなれば3300を超える個体が現れるとされているのだ。

そして目の前にいるこの個体。ざっと十兵衛が見た限りでは、目算——2900〜3100近く。

おかしい。

おかしすぎる。

上位の個体でこれほどまで大きい個体がいただろうか？

だが現実を見れば、それが目の前にいる。クエストとして発注され、自分達はこのラギアクルスを標的として戦っている最中だ。

「てえええええい！」

瑠璃が急降下して火竜剣【火燐】でラギアクルスの背後から斬りかかっていく。ラギアクルスに対して大きなダメージを与えられるのが背中……その背電殻だ。ラギアクルスにとっての雷エネルギーを生み出し、蓄えられる部位であり、しかし同時に奴に

とつての弱点とされている。

刃はしかし浅くしか入らず、だがそれでも内包されている火属性の力が水中でも発揮されて背電殻を炙っていく。

が、ラギアクルスはそれに意を介さず、少し体に力を入れながら体を曲げていく。それに気づいた瑠璃が慌てて距離を取るように背後へと飛び退ると、その背電殻が発電を始めた。それに伴ってラギアクルスの周囲が放電され、そのエネルギーの残骸が周囲へと霧散していく。

水は電気を通す。数秒程度の発電であったとしても、ラギアクルスが巨大なためにその残骸の放出であったとしても数メートルに及んでいる。

両足が少量の電気によって一瞬痙攣し、バランスを崩してしまいが何とか持ち直す。

そうしてラギアクルスを見てみると、背電殻が淡く光っているのがわかる。あれが電気を溜めている証だ。茉莉がトキシックジャベリンを構えて距離を詰めると、ラギアクルスがそれに反応して振り返る。

そんな奴の頭へと刃を突き入れるも、やはり浅くしか入らない。でも放出される毒がラギアクルスへと少量ではあるものの注入され、ラギアクルスはそれを振り切るように頭を振ってきた。

素早くトキシックジャベリンを引いて弾き飛ばされないようにしつつ、横へと回り込

むようにするが、ラギアクルスはその長い首を利用して茉莉へと喰らいつついてくる。

「ふっー」

それを見越して盾を構えつつ前に出る。盾に頭がぶつかるがそれを堪えつつ距離を詰め、振り返る事によって背中が茉莉の前へとやってくる。その無防備な背中へとトキシックジャベリンを突き出していくのだ。

下の方で尻尾が振るわれているが気にしない。背後から何度もトキシックジャベリンを突き出して背電殻へとダメージを与えるが、全然脆くなる様子がない。刃を押し返してくるような硬さはないようだが、しかしそれにしては丈夫すぎる。

瑠璃がもう一度ラギアクルスへと接近し、側面から足や尻尾を狙って斬りかかるが、刃は浅くしか入らない。火属性のダメージによって確かに傷はつけているのだが、ラギアクルスは堪える様子がない。平気な顔で自身に群がってくる小魚を振るうかのように体を震わせ、前足で叩きつけ、尻尾を振るって弾き飛ばしにかかる。

その隙を突いて十兵衛が装填された通常弾Lv3を射出し、それはラギアクルスの胸に着弾すると連続して両腕や首、腹へと別々に跳弾していき、ダメージを積み重ねていく。

この跳弾効果こそ、体の大きな相手に有効とされる。小さい相手ならば跳弾してすぐにあらぬ方へと跳んでいくが、大きな相手ならば甲殻を飛び回り、上下に飛んだとして



も首や腹、足や尾へと向かってまた跳弾を積み重ねる事がある。

特に海に生きる相手ならば体が大きくなる事が多いため、有効だと言われているのだ。この大きな個体となったラギアクルスならば、その効果が如実に表れる。鈍い音が連続して響き渡り、あちこちへと跳弾してラギアクルスへと連続してダメージを与え、それに呻いたラギアクルスは小さく唸りながら距離を取るように泳ぎだす。

十兵衛を睨みながら離れた所を泳ぎつつ回り込むその動き、十兵衛はぐつと息を呑んで妃竜砲「姫撃」をしまい、同じように回り込みながら泳いでいく。

同じように瑠璃と茉莉も武器をしまつてそれぞれ散開して泳ぎ、ラギアクルスの動きを見逃さない。だが彼らの泳ぎよりも、海に生きるラギアクルスの方が速く泳げてしまふのは仕方のない事。

しかもその体が大きいため、その移動距離も差が開き出す。

気づけば、茉莉はその背後をとられていた。それを見越した瞬間、ラギアクルスはぐつと力を溜め、一気に水を蹴つて直進してくる。再び迫りくるその巨体の突進に茉莉はまたしても盾を構えて防御せざるを得ない。

逃げの道をとれば、間違いなく轢かれるのは目に見えていた。

盾を構えた茉莉へとぶつかったラギアクルスは、そのまま体を丸めながら力を溜め、体の側面から彼女へとぶつかりに行く。連続して攻撃してくるラギアクルスに茉莉は

歯噛みして耐える。

そうして堪えた後に反撃として一撃お見舞いしてやるが、ラギアクルスはやはり意に介さずに振り返りながら噛みつきにかかる。そうして向き直った先には、火竜剣【火燐】を構える瑠璃がいる。

振り返りざまに頭へと一撃、二撃と斬りかかり、しかしラギアクルスの反撃として噛みつきがせまり、下へと逃げて躲してやり過ごし、がら空きとなった腹へと突き上げて反撃する。

離れた所では再び妃竜砲【姫撃】を構えた十兵衛が、また通常弾Lv3を射出しての連続ダメージを狙っている。

「ヴォルルル……いー」

唸り声を上げるラギアクルスがまたしても体に力を入れて発電を開始した。これで二段階の電気の力が背電殻へと収束したことになる。それに舌打ちして瑠璃が今一度背中破壊を狙ってラギアクルスの上をとろうと上がっていくが、ラギアクルスはそんな瑠璃を叩き落すように尻尾を振るってくる。

「あぶなっ!？」

目の前を通り過ぎていく尻尾に飛び退るが、続けて体を捻る事で尻尾が鞭のようにしなりながら迫り、瑠璃を弾き飛ばしてしまった。落下していくその姿を狙ってラギアク

ルスが雷弾を撃ち出して追撃を仕掛けるが、何とか瑠璃は体勢を立て直しながら横に逃げてやり過ごした。

荒い息が漏れてマスクを湿らせ、通過していった雷弾に脂汗が浮いてしまうのは仕方がない。一步遅ければ着弾していた攻撃だ。しかもあの尻尾の一撃でリオソウルメイが若干凹んでいる。

一撃が重い。

それを感じとりながらラギアクルスを見上げる。

奴は……弱者を見下ろすかのように瑠璃を見下ろしていた。背電殻は先ほど以上に光を放ち、少しずつ暗くなつていく海を照らしている。それはまるで後光を背負っているかのように、それに照らされて浮かび上がるその巨体は、まさしく大海の王である事を見せつけているかのようだった。

ぞくり、と悪寒が背中を這い上がる。

通常弾Lv3を撃ち続けている十兵衛はラギアクルスが放つ殺気が変質した事に気づき、はつとして顔を上げた。

ラギアクルスがまた泳ぎだす。それも三人から距離を取るように後ろへと。

そのままゆらりと体をくねらせて迂回し、海に浮かぶ岩山を回り込みながら更に深く。海底へと降りていきながら姿をくらませていく。だが背中がその位置を知ら

しめているが、それでも深みを増した殺気が伝える悪寒は収まらない。

「二人とも、逃げるツス！　これは、やばいツス！」

水竜の守りを通じて十兵衛が焦ったような声が聞こえてくる。だがそれが聞こえたところで、海底から凄まじい勢いで電気が放出され、その奥から奴の咆哮が聞こえてきた。

仄暗い海底の闇を切り裂く矢の如く。電光を纏ったラギアクルスが、体をスクリューのように回転させながら迫りくるその姿。あれだけ離れていた距離を零にしてくるその速さ。

逃げる暇もない。

でも直撃だけは避けるべく瑠璃と茉莉は左右に散った。だが、

「あぐ、ああ……っ!？」

「っ……くう……!？」

螺旋を描く水の動きはラギアクルスの軌跡を示し、通り過ぎた道には背電殻から放出される電気の道が作られる。ただの直進の突進では生み出せない力が、螺旋の力によって上乘せされ、ラギアクルスの周囲の水流さえも味方につけて敵を吹き飛ばすその力。

奴の巨体が当たりはしなかったが、その水流の力が二人を吹き飛ばし、それだけでなく水流に乗るように電気が襲い掛かって二人を絡め取ってしまったのだ。

盾を構えた茉莉はそのダメージを軽減させるも、体中を侵してくる電気が彼女の動きを止めてしまっていた。

一方盾を持たぬ瑠璃は水流と電気の二重のダメージが襲い掛かり、それだけでなく吹き飛ばされた衝撃でマスクが取れてしまっていた。

「がば、ッば……っ、か、くう……!?!」

口と鼻に入り込む海水にたちまち呼吸困難に陥ってしまう。慌てて離れてしまったマスクを震える手で取るも、入り込んでしまった海水が安定した呼吸を生み出さない。一度それを吐き出さないと、と思っても、体を痺れさせる電気がそれを許さない。

「息、が……っほっ……」

「瑠璃さんッ?! く、マズイ……何とか状況を……っ!」

十兵衛が瑠璃のフオローをしようにとするも、それを防ぐようにラギアクルスが立ちほだかる。それを見て舌打ちし、ポーチから二つの道具を取り出して一度茉莉へと近づいていく。

だがラギアクルスはそれを邪魔するように雷弾を撃ち出してきた。それを十兵衛は、「破っ!」

足から気を纏った弾を撃ち出しながら回し蹴りをし、それを相殺させた。そのままもう片方の足で水を蹴って一気に茉莉へと近づき、手にした一つの実を彼女に手渡す。

「それを食べて逃げてくださいッス。おいらは瑠璃さんを助けに向かうッス」  
「あ、はい……ありがとうございます」

そのまますぐに転進して十兵衛はラギアクルスの下から瑠璃へと近づこうとしたが、そうはさせまいとラギアクルスが急降下してくる。だがそれを狙っていたかのように十兵衛はもう一つの道具、閃光玉を投げた。

たちまち発生する強い光にラギアクルスの目がやられ、悲鳴を上げてもがきだす。そして閃光によって暗い海底も照らされ、消えていく光の奥に一瞬見えた青い物体に気づき、十兵衛はこのラギアクルスが何なのかに気づいた。

だが今は瑠璃を救出するのが先だ。素早く彼女へと接近して下から瑠璃を体を抱え上げ、一気に海面へとあがっていく。

水面から顔を出させ、マスクを取って新鮮な空気を与えつつ水を吐き出させようとしたが、瑠璃の呼吸は小さく、ぐったりとしていた。

「瑠璃さん、瑠璃さんッ！ く……応急処置が必要ッスか……！」

呼びかけにも応えない。非常にまずい状態だった。これは一度陸に上がるしかない。十兵衛は先にエリアを離れた茉莉を追うように、瑠璃を抱えたまま泳ぎだす。

こうして初戦は敗退となる。だがそれもある意味当然の結果ではないかと十兵衛は思い始めていた。

陸に上がり、すぐに十兵衛は瑠璃の応急処置行つて飲んでしまつた海水を吐き出させる。そうして呼吸を取り戻させるべく茉莉の協力も得て何とか彼女の意識は戻つた。

「げほ、げほ……つ、はつ、はあ……はあ……」

咳き込みながらも彼女は何とか命を繋げたのだと実感してくる。呼吸が出来ているという事は自分は生きているという事なのだから。

そして先ほどの事を思いだす。

自分はラギアクルスの攻撃を完全に避けきれなかつたのだと。そう感じていると、十兵衛が一つの実を差し出してきた。

「ウチケシの実ツス。残つた痺れを取り除いてくれるツスよ」

「……ありがとう」

礼を言つてそのウチケシの実を口に放り込み、噛みしめながら飲み込んでいく。これは体に残る電気之力や氷之力、体に纏わりつく龍之力などを治す効果が含まれており、所謂属性の力を消し去る効果を持つているのだ。

ラギアクルスの攻撃にあつた電気之力による体の痙攣も、これによつて治す事が可能であり、十兵衛はこれを持ちこんでいた。

茉莉に手渡したのもこれであり、おかげで何とか彼女は一人で逃げる事が出来たようだ。

「……さて、さっきのラギアツスが、あれはやばいのは明らかツスね」

「そうですね。水中戦に不慣れだという事を除いても、あのラギアクルスは少しおかしいように思えます。体の大きさから見てもおかしいですけどね」

「一体どうなっているのよ？ あたしたちが相手にしているあれって、上位に分類していいものなの？ それともただの銀冠サイズなだけ？」

モンスターの大きさは個体によって異なり、その大きさや小ささによって銀冠や金冠サイズが存在する。大抵の場合は大きい相手に付けられる事が多く、上位の中でも特に大きければ銀冠サイズと呼ばれる。

ラギアクルスの場合、3000までくると銀冠とされているようだ。

その上がG級に存在する金冠サイズ。ここまできると見慣れたモンスターであったとしてもその大きさに度肝を抜かざるを得ないとされる。話に聞けば、東方でポピュラーなモンスターであるアオアシラの金冠サイズは、二足で立たれば見上げなければその顔が見えないくらいの大ささだとか。

さて、今回のラギアクルスは間違いなく銀冠サイズ。

だが、それだけではない事を十兵衛は気づいていた。

「……G級クラス、ツスよ」

「——え？」



その言葉に茉莉にしては珍しく、呆けたような声を漏らしてしまった。

「あれは、見立てに間違いなければG級クラスだと思うツス」

「……G級って……そんな、嘘……マジ？」

「信じられないツスが、たぶん……そうだと思うツス」

瑠璃の言葉に彼は頷いた。

だがそれでも信じられないのは仕方がない。自分達は上位ハンターであり、G級に分類されるクエストは受注できない。そしてクエストは問題なく受注されたし、あれを取った場所も上位クエストの欄だったことも間違いはない。

しかし蓋を開けてみれば、そこにいたのはG級に分類されるだけの個体のラギアクルス？

一体何の冗談だというのか。

「気づいていたツスカ？ あのエリアの海底に一つの死体があった事を」

「死体？」

「……ラギアの死体ツス」

その言葉に、二人は気づいた。それが意味する答えに。

「あれがおいらたちが相手にするはずだった上位個体のラギア。あのラギアは死体となっているラギアの縄張りに侵入し、食い殺したと考えられるツス。そうして新たな縄

張りを獲得した——G級ラギアクルス。それが奴の正体だと推測できるツス」

その言葉を言い終えた刹那、エリアの空気が変わった。はつとして海へと振り返れば、夕日が沈みはじめ、赤く染まり始めるその海の向こうから一つの巨影が近づいてくるのがうつすらと見えた。

三人は立ち上がり、身構えたその時、一度その影が海の奥へと沈んでいく。だがすぐに奴は一気に浮上し、その勢いを利用して陸上へとあがってきた。

それだけでなく、口元に雷エネルギーを収束させており、着地して滑りながら雷弾を連続して撃ち出してくる。三人は散開し、先ほどまで立っていた場所が雷弾によつて吹き飛ばされてしまう。

それぞれ地面を滑りながら武器を構え、陸へとあがったそのラギアクルスを見据える。

どうやら逃がすつもりはないらしい。これでは逃げてもすぐに追いつかれるか、背後から雷弾を撃ち込まれて終わりだ。

しかもここは孤島。

ここから逃げるには、船を用意して海を往くしかない。そしてその海は——奴にとつての庭も同然。

逃げられない。

逃げたければ、奴を討伐するしかない。

上位ハンターが、G級のモンスターへと挑む構図がここに完成してしまったのだ。

それを改めて実感すると、瑠璃と茉莉は冷や汗を流さずにはいられなかった。

頭の中にはユクモ村で出会ったあの男、迅雷の言葉が蘇る。彼はこう言っていたではないか。

ラギアクルスをはじめとする海のモンスター達が増え始め、それもG級に分類されかねない個体が確認できる、と。

それが、目の前にいるこのラギアクルスといった実例というわけだ。それはまさに上の領域の体現者。上位とG級という隔たれた壁を示す存在。

「グルルルル……」

低く唸りながらラギアクルスが歩きつつ距離を詰めてくる。それに瑠璃は冷や汗をかきながら震えるしか出来ない。こうして直に相對してみれば、発せられる殺気が明らかに上位のものではない事がわかってしまった。

飲み込まれている。

それに十兵衛は気づき、妃竜砲【姫撃】から拡散弾Lv2を撃ち出してやる。それは狙い通り頭へと着弾し、数度の爆発を引き起こした。その衝撃にラギアクルスは驚き、頭を振って十兵衛を睨み付ける。

「瑠璃さん、茉莉さん！ 呑み込まれればそこで終わりッス！ 生きたいというならば、それに抗うッス！ 大丈夫！ おいらたちはやれるッス！ やるしかないんス！ 気持ちで負けてしまえば、目標にも願いにも届かないッス!!」

『……………!』

十兵衛へと向き直ったラギアクルスが、一步退きながらうつぶせになり、勢いをつけて地面を滑りながら十兵衛へと迫っていく。一気に距離を詰めてくるその巨体に、十兵衛は冷静に横へと逃げながら弾を装填し、背後へとブレーキをかけながら滑るラギアクルスへと貫通弾を射出した。

彼は戦っている。

人見知りで気弱な部分がある彼が戦っているのだ。

その姿を見せられれば、発破をかけられれば、それに応えずして何が仲間か！

二人の目に活力が戻り、改めて気合を入れ直して翼を広げる。

そのまま地を蹴って一気にラギアクルスへと距離を詰めると、奴は勢いよく振り返って首を引き、雷弾を撃ち出してくる。それに関しては他の飛竜らのプレスと何ら変わりが無い。弾道さえ読めれば当たりはしない。

体を捻ってやり過ぎし、瑠璃が顔から背中にかけて切り裂くように火竜剣【火燐】を構え、一気にラギアクルスの側面を飛行して通過する。

それに振り返ろうとしたラギアクルスではあったが、続けて迫ってきた茉莉が構えるトキシックジャベリンが頭へと突き出され、それに頭を振って弾き飛ばしにかかる。茉莉は一度退き、首から胸へと一気に振り下ろすようにトキシックジャベリンを振るつたが、刃は相変わらず浅くしか通らず、想定していた血の噴き出しはそこにはなかった。(さすがはG級といったところですね。鱗の強度が並みじゃない)

トキシックジャベリンには茉莉の気が纏われており、刃の強度を上げているのだがそれでも浅くしか刃が通らない。毒は注入できているかもしれないが、トキシックジャベリンの攻撃力はそのまま通っていないようだ。

だが背後から支援として十兵衛が妃竜砲「姫撃」に毒弾を装填し、ラギアクルスへと撃ち込む事で毒の蓄積度を上げている。これにより、少し早い段階でラギアクルスが毒状態となった。

口から少し苦しげな声が漏れて聴こえてくるのがその証だろう。

背後へと回り込んだ瑠璃は着地し、尻尾へと向かって火竜剣【火燐】をダブルセイバー形態へと切り替えて回転させながら斬りつける。高速で刃が尻尾を切り裂いていき、爽快な火属性の爆発音が響き渡る。だが、それでも鱗は数枚しか吹き飛ばさず、厚い鱗が受け止め続けているため肉はなかなか露出しなかった。

(上位の武器じゃこんなものだったの？ くっ……素材こそ揃っていても撫子姉さんが

いないからこれを強化出来ないのが難点ね……!)

これは撫子のオリジナルの武器のため鍛冶屋に出したとしても強化のカタログが存在しない。存在するとしたらこれを制作した撫子の頭の中であり、強化するには彼女の手を借りなければならない。

だがそれでも上位の武器の中では十分に性能が備わっているのがこれだ。そこらの火属性武器に並び立つか、少し上の性能を持つ火竜剣「火燐」は瑠璃にとつての愛剣の一つではあるが、それはこの目の前にいる敵には若干通用してはいないらしい。

「グルッ…」

目の前にいる茉莉と背後にいる瑠璃を薙ぎ払うように側面から大きく口を開けて噛みつきながら振り返り、それに合わせて尻尾を振るうが茉莉はそれを意に介さないように盾を構えて前に踏み込んだ。

ランサーにとつてその攻撃は逆に反撃、カウンターのチャンス。がら空きとなった腰元へと一気に刃を突き入れるものの、それでも刃は浅い。だがその浅さが今までよりも違う。刃は浅くともしつかりと鱗を突き破って肉へと到達していた。

手ごたえがあった。それを実感しながらトキシックジャベリンを引き、もう一度突き入れる。

瑠璃も薙ぎ払われる尻尾を飛び越え、迫ってきた顔を下から斬り上げるようにして火

竜剣【火燐】を振るう。顎から鼻先へと届いた刃が火によつて爆ぜ、ラギアクルスを奇襲するが、それもまた首を軽く振つて痛みを振り払う。

ぎろり、とその瞳が動き、宙に浮く彼女へと喰らいついてくるが、翼を羽ばたかせて躲して反撃。その立派な角を吹き飛ばすように長剣形態へと切り替えた瑠璃は火竜剣【火燐】を突き出すも、やはり刃が甲殻に防がれてしまう。

「ハ、の……！」

だがそれで諦める瑠璃ではない。一度でダメならば二度、と連続して両手で握りしめた火竜剣【火燐】を振るうが、ラギアクルスに確実なダメージを与えるには至らない。

ラギアクルスもちよこまかと動く瑠璃へと何度か噛み付きにかり、時に雷弾を放つがそれでも捕えられない。そんな彼女に苛立ったラギアクルスは一度身を引き、背電殻に蓄積された電気を一気に活性化させ始める。

それを見た十兵衛ははっと息を呑み、「二人とも離れるツス！ 電気が解放されるツス！」と二人に叫ぶ。ラギアクルスに肉薄している二人は気づかず、離れた所で銃撃している十兵衛だからこそ気づいた事。

それに瑠璃と茉莉は顔を上げれば、背電殻からバチバチと音を鳴らして電気が放出され始めている事に気づいた。急いでラギアクルスから離れていく二人だが、既にそれは解放され出した。

ラギアクルスを中心として数メートル範囲で鳴り響く雷が弾ける音。それに伴って眩いばかりの光が弾ける連鎖と、高電力の弾幕。それはまさに雷の檻。背電殻から放出されたそれは周囲の得物を逃さない檻と化し、その中に閉じ込めた得物を不定期に襲い掛かる電気の弾丸を弾けさせる。

瑠璃は上空に逃げる事で何とか難を逃れたが、茉莉は盾を構えたまま後ずさって逃げるしかない。今飛行したとしてもこの檻から完全に離脱できるとは限らなかった。

不規則に動く電光に体の動きはがちがちとなり、しかし何とか盾で電気を防ぎながら範囲から逃れかけたその時、横から襲い掛かる雷エネルギーに腕が接触し、感電してしまった。

「——ッッ!?!」

声にならない悲鳴が上がリ、続けて襲い掛かってきた第二撃が茉莉に直撃し、それによつて茉莉は意識を飛ばされてしまう。それでも電気が彼女を倒れさせる事を許さず、しばらくその場に縫い付けられながら茉莉はただただ感電させられ続けてしまう。

「茉莉いッ!!」

上空から瑠璃が叫ぶが、それに茉莉は応えられない。リオハートシリーズの雷耐性故に致し方なし。ジンオウガの時だって危険だったが、今回は相手がG級。雷光虫の力を借りるジンオウガと違い、ラギアクルスは背電殻の発電によつてエネルギーを作り、解



放している。

その差異はあれどランクの違いという壁が存在し、茉莉にかかったダメージは容易にジンオウガを超える事を推測させる。

地面に倒れて無防備となつてしまう茉莉を救出すべく、瑠璃が急降下するが、ラギアクルスがそれを阻止するように尻尾を立てて振り回し、茉莉に向かって頭上から噛みつきにかかる。

だがそれを止めるように十兵衛が急速に距離を詰め、茉莉の体を抱え上げて離脱した。

その際彼女の手からトキシックジャバリンが滑り落ちたが、これに気をとられる暇などない。急速にブレーキをかけて振り返れば、獲物が逃げた事でラギアクルスが唸り、十兵衛に向き直つて砂浜を蹴る。すると十兵衛に向かって一気に距離を詰めるように砂浜を滑ってきた。

それにまた横へと逃げるように跳び、腰に当てながら構えた妃竜砲【姫撃】から通常弾Lv2を射出していく。重量がある上にきちんと狙いを定めていない攻撃ではあるが、側面から見ても巨体であるそのラギアクルスにばらばらにちやんと着弾している。

これは牽制なのでダメージがなくても構わないという狙いだ。横目で見ると、瑠璃がトキシックジャバリンを回収しているとところだった。それに頷き、十兵衛はラギアクル

スから逃げるように走り出す。

だがそれを逃がすラギアクルスではなかった。すかさず四足で走りながら追いかけてくる。瑠璃もそれに続くように飛行して後を追うが、トキシックジャベリンを手にしているため火竜剣〔火燐〕を振るう事は出来ない。

しかし彼女の武器はそれだけではない。大きく息を吸いこみながら火の粒子を集め、一気に噴き出してやれば火炎放射がラギアクルスの背後から襲い掛かっていく。

背後から突如襲い掛かってきた火炎にラギアクルスが反応したようだが、その火力では止められないとばかりにまだまだ追いかけてくる。

そのままエリア9へと南下してもなお奴は追いかけて、そのまま一度うつぶせになって地を蹴って滑ってくる。それをやられれば横に逃げるしか出来ない。妃竜砲〔姫撃〕はもう腰に戻されており、片手で抱えていた茉莉はお姫様抱っこになっている。

それを一度胸へと抱え上げ、十兵衛は生えている石柱へと飛び、そのまま柱を蹴って別の石柱へと飛び、片手を伸ばしてグルンと回転してラギアクルスを飛び越えて着地する。

その曲芸のような軽業に飛行している瑠璃は驚きを隠せない。あれほどの体術、一体どこで習得したのか。そしてラギアクルスもまた驚きを隠せないようで、若干目を見開らいている。だがそれでも十兵衛から視線を外さず、雷弾を撃ってきたが、十兵

衛は振り返りざまにまた回し蹴りを放って圧縮された気弾を撃ち出して相殺。

続けてもう一つ、今度は刃を化した気を回し蹴りと共に放って攻撃する。

それはラギアクルスの頬を切り、薄く出血させてしまった。そこを狙うように瑠璃が追撃の火炎放射を放ち、傷口が高温の炎に炙られる。それに首を振ってやり過ごそうとしたところでまた十兵衛は茉莉を抱えたまま走り出し、エリア5へと逃げていく。瑠璃もそれに続き、何とか二人はラギアクルスをまく事が出来たのだった。

もう日も暮れる。

今日の戦いはこれで終わりだ。

G級。

その壁は厚い。

それを実感する完全なる敗走であった。

## 53話

日が完全に沈んだ事でうつつすらと空に星々が煌めきだしたころ、茉莉の意識が戻る。彼女はベッドに寝かされており、瑠璃の手によって手当てが施されていた。ウチケシの実の効果によって体の痺れはなくなり、回復薬グレートによって傷の具合も良くなっている。

十兵衛が夕食を作り、体力の回復を促進させるようなメニューを組んで作られた。それを静かに食べながら三人はこれからの事を考える。

迎えの船は三日後にくる予定だ。海上で船を待たせるわけにもいかず、しかも二つのハンターグループをそれぞれ別の孤島へと送り届けたのだ。そしてハンターを狩場へと送り届ける船は必要であり、あの船は一度タンジアの港へと戻って別のハンターの送迎を待つ。

つまり、三人は帰る術はない。

もちろん、クエストをリタイアするならそれでも構わない。信号を空に打ち上げれば、それによってギルドへとリタイアの旨が知らされる。そうすると、迎えの船は来る

だろう。

だが、それが出来たとして安全に帰れる保証はない。

あのラギアクルスは自分達を獲物だと認識した。自分を狩りに来たわけではないが、戦えるだけの力を持つ獲物だと認識した事は間違いない。

つまり、自分達が海に出ればそれに感じて後を追ってくるだろう。そうなれば帰りの船が襲われる可能性が高い。

やはり奴を討伐するしかないのだろうか。そうしないと安全に帰れない気がしてきた。

翼を持つ瑠璃と茉莉ではあるが、長い距離を飛行し続けられるだけの体力があるわけではない。なにせここまで来るのに船で数時間だ。飛行するという事は数時間は飛び続けなければならぬことを意味している。

そんな体力、あるわけではない。

やはりここに閉じ込められた感じだ。この孤島そのものが三人を封じ込める檻と化している。本来のラギアクルスは恐らくこの孤島を含む海を縄張りとしていたのだろうが、あのG級ラギアクルスがそれを侵し、仕留めた事で奴の縄張りとは化したのだろう。そして三人に目をつけているから、しばらくはここから離れる事はないと推測できる。

(……討伐、出来るの？ 今のあたし達に)

陸上ならば戦えるだろう。自分達の本来の領域は陸だ。ラギアクルスを相手にする際は水中ではなく陸上ならば戦いやすいとされている。なので奴を陸上に留めながら戦えることが出来れば、勝機を見出せるだろう。

だが明日になればまず間違いなく奴は海にいる。

ということは開幕は水中戦である事は間違いない。

G級に出会ってしまったという事で竦み上がってしまったが、明日はいつも通り……いや、いつもより少しの不調だけで戦えるだろうか？

そんな不安が鎌をもたげる。

当然だろう。

G級を相手にするには自分達では無理がある。装備の問題だけじゃない、経験が足りないのは明らかだ。そんな相手に勝てる自信なんて、持てる方がどうかしている。

以前戦った実力を試されるためにあてがわれたジンオウガを相手にするときだっ最初は苦戦していたのだ。今回は実力だけでなく戦場からしても不利。ジンオウガの時以上に勝てるビジョンが見えてこない。

……いや、ジンオウガの時とは違い、今回は十兵衛がいる。

しかも先ほどからとんでもない事をしでかしているではないか。思い出したら訊か

ざるを得なくなってきた。瑠璃は黙々と夕飯を食べている十兵衛を見やり、口を開く。

「ねえ、十兵衛」

「はい、なんスか？」

「あんたって、本当はどれくらい強いのか？」

「……ん？」

瑠璃の問いかけに十兵衛は首を傾げる。質問の意味を計り損ねているのだろうか。

そんな様子に瑠璃は捕捉していく。

「逃げる時に見せたあの動き、普通じゃないわよね？ 茉莉を抱えて、そのディアブロウシリーズもあって、その上でのあの動き。明らかに体術に心得がある動きだったじゃない？」

「……ああ、その事ツスカ。確かにおいらは体術……というより格闘術の心得があるツス」

「格闘術？」

「母親の教えで鍛えられたツス。ガンナー、それもヘビィボウガン使いになるんだつたら体を鍛えておかないとって言われて、幼い頃から仕込まれてきたツス。ヘビィは重いツスからね、両腕だけでなく体のつくりから鍛えられたツス。それだけでなく接近された際の距離の取り方とか、護身術も仕込まれたツスね」

「じゃああの気弾とかは？」

「あれは気の応用ツス。それだけでなく魔力の運用も母親に仕込まれたツスからね。これらを組み合わせると身体能力の底上げをしたおかげでこの通り、ディアブロUシリーズを付けていても軽々と動けるだけの体になったツス。そして気弾、気刃とかもある程度は使えるツスね」

「……あなたの母親って何者なのよ……？」

「ただのハンターツスよ。ちよつと変わってるツスが、うん、ただのハンターツス」

そう言う十兵衛の声色が少し変わっているような気がしたが……気のせいだろうか。

だが十兵衛の体が鍛えられているというのは前からわかっていたが、まさかそんな背景があったとは。それだけでなく格闘術に気を乗せた一撃や遠距離からの攻撃手段、気弾や気刃も放てる腕も持つ。

……まるでクロムのようにだと思わずにはられない。

自分よりも少し小さい十兵衛に秘められた実力。しかしそれも自分達よりかなり年上の人間ではない、という点から考えれば納得してしまいそうだ。

「ねえ、同じ質問をしてしまうけど、十兵衛って本当はどれくらい強いのか？ 上位で活動しているけど、本当はG級ハンターってオチはない？」

「……まあ、少し触れた程度にはやってるツスよ」



「おー……これはこれは。G級ハンターだったんですかー」

「でもドス系とか、牙獣種とか、モンスタールレベルでは低めしか相手にした事はないツス。それに、長く火山を中心とした地域に引きこもっていたツスからね。ブランドンによって実力は落ちてるツスよ」

「炭鉱夫をしてたんでしたね。どれくらいの期間潜っていたんです?」

「……たぶん、四、五年ぐらいツスカね」

「四、五年?!? なんだってそんなに潜ってたのよ?」

「……色々あったんすよ。その辺りの事は触れなくてくださいツス」

恐らく火傷の事だろうか。俗世から離れるために火山に潜っていたんじゃないか、という推測がいよいよ真実味を帯び始めている気がする。

だがその四、五年という期間は確かにブランドンを産むには十分な時間だ。炭鉱夫をしている間も時々狩りをしていたのだとしても、それ以上にただ火山を上り下りしてピッケルを振るうだけの日々を過ごしていたのなら、十分ブランドンを産む。

……本当にブランドンがあるんだろうか、と思わないでもない。

何せ彼はそれを抜きにしても、十分にヘビイガンナーとしての実力があるように見えるためだ。素早い装填に狙い狂わない狙撃、支援のタイミング。ハンターとしての知識も十分だし、フォローに回る速さも確かなものだ。

十分に優秀なハンターだとはつきりと言える実力を持っている。

これでブランクがあるというならば、それは謙遜にしか聞こえない。だが謙遜でないならば、本来の実力はどれほどのものなのか。そしてそれを隠す真意は何なのか？

萩原十兵衛と言う人物がよくわからなくなってきた。

しかしこの話により若干道が見え始めた気がする。

一時期とはいえG級ハンターだった十兵衛。ブランクがあるようだが、それでも十分に実力がある彼がいるならば、あのラギアクルスを突破する可能性が生まれてきたんじゃないだろうか。

それは瑠璃だけでなく茉莉も感じ始めていた。

「十兵衛さん。あのラギアクルスを討伐するための策はなにかありますか？」

「……真正面からぶつかり合うのは、危険に満ちているのはお二人もわかっていると思う。だから捌め手を使っていくしか道はないッス」

「捌め手……」

「落とし穴、シビレ罨、毒、麻痺、閃光、滅気、眩暈……とにかくこれらを使ってラギアの動きを止め、一気に攻撃を仕掛けて離脱。これに尽きるッスね」

「……落とし穴は水中では使えないので陸上戦しかありませんね。麻痺は投げナイフでやるとして、滅気はどうするのです？」

「姫撃は滅気弾が撃てるツス。狙う隙があれば射出するツス」

滅気弾は着弾すると相手を披露させる効果のある成分を撃ち込める弾だ。モンスタ―も生物。動き続けたり攻撃し続けたりすればいずれ疲労が蓄積し、動きが怠慢になってくる。それは例えG級であったとしても逃れられない。

滅気弾を撃ち込めば更に疲労を蓄積させ、それが一定を越えれば敵の動きが緩慢になり、隙が多くなってくる。プレスも撃ち出せなくなったり、突進しても転倒してしまったりと、疲労によってハンターが得られるチャンスは多くなってくる。

更に頭部に着弾すれば相手の頭を揺さぶり、眩暈状態へと近づけさせる事も可能だ。なるほど、滅気弾が撃てるというのは自分達にとつて大きな鍵となる。瑠璃と茉莉もそれに気づき、少しずつ目に力が宿りだした。

「とにかく無理なく攻める事が肝心ツス。大まかな動きはランクが違つても同じラグアツスが、体が大きいため範囲が変わつているツス。そして一撃の重さも違うツスから気をつけるツス」

「確かに一撃の重さが違つてたわね……」

そう言つて瑠璃がりオソウルメイルを撫でる。横殴りに振るわれた尻尾による一撃でそこは少し凹んだままだ。当然ながら彼女らの防具は鎧玉などによって強化が施されている。

クエスト報酬やピッケルによる採掘によつて鎧玉シリーズはある程度溜まっている。これらを使つて強化しているため、G級装備には及ばずとも近いまでの防御力はある。

それで、この状態だ。

強化していなければ凹むどころか破壊されていたかもしれない。その想像にぞくりとする。

「とにかく何としてでも躲す、または防御できるように心がけるツス。そして発電していた場合、それが解放されるサインを見逃さないようにするツス」

「気をつけましょう。あれはもう勘弁です」

雷耐性がないので雷弾や放電が直撃すれば体にかかるダメージは増加してしまう。防御しきれればいいのだが、それが出来れば苦労はしないし、ぶつ倒れる事はなかった。明日は気をつけようと改めて意を決する。

それからはラギアクルスに対する心構えや対策、明日の溜めの調合を進めて早い目に就寝して体力回復に努めるのだった。

○

一方、別の孤島にて。

プルート達は目の前にいる獲物を前に戦っていた。見上げるほどにまで巨大な蛇。月を背にじつとプルート達を見下ろすその大蛇は、大海蛇シーサーペント。

海岸で相対している両者の戦いで、優位に立っているのはどちらなのか。それは負傷率でわかるだろう。

背中側は蒼い鱗、腹側は白い鱗に覆われているシーサーペントだが、そこに多くの赤が染め上げられている。舌を震わせ、少し苦しげな息を漏らしながらも、シーサーペントは戦意を失っていないかった。

「……久方ぶりのG級ではあるようだが、どうだ？ 天よ」

「ま、悪くはないんじゃない？ いい血が取れると思うよ。一応こいつも蛇竜だし」

「でも、やっぱり驚きですなあ。まさか上位ではなくG級の個体やなんて。これはギルドの不備というものなん？」

「さてな。詳しい事などわかるまいよ。最近のモンスターどもの活性化の一件がある故に、ギルドの不備を問い詰めたところでどうにもならぬわ。それにG級ならばG級で我らにも得られるものはあろうよ。……ふんっ！」

プルートが手にしているのは王牙大剣【黒雷】。ジンオウガの素材を使って作られた雷属性の大剣であり、死してなお王者の風格を感じさせる力を秘めた大剣だ。

彼がそれを振るえば、轟く雷鳴を響かせながら雷撃の刃がシーサーペントへと襲い掛かる。素早く体を捻ってそれを躲すが、荒れ狂う雷撃の残骸が体の側面を撫でていく。それに呻いたが、シーサーペントは一度息を吸い、濁った液体を吐き出してくる。

それは奴の麻痺毒を含んだ毒液。頭上から降り注ぐそれを掻い潜り、接近するのは天和と刹那。天和が手にしているのはやはりいつも手にしている一振りの刀。本来の力を引き出せなくとも、それは十分に力を持つ刀だ。

G級相手だろうと、彼女の気に反応して弾かれないだけの切れ味を見せる。そして血を得るたび、少しずつその力の片鱗を覗かせていく得物だった。

刹那が手にしているのは氷刃「雪月花」。ピュアクリスタルとエルトライト鉱石に、強い氷の力を秘めた瞬間凍結袋に凍った粘液塊といった素材を使う事で、高い切れ味と氷の力を内包する氷の太刀だ。

見た目からしても人が手にするような刀に近しい一品であり、氷のような青の刀身は美しさすら感じさせる。しかも特注品なのか、その刃渡りは対人戦で使う刀に近しく作られている。

盲目の彼女が問題なく振るえるようにという配慮なのだろうか。

だがそれを抜きにしても、彼女の立ち回りは盲目である事を感じさせない。頭上から降り注ぐ毒液が見えているかのようにはひらひらりと躲していき、鞘に収めている氷刃

【雪月花】を目にも止まらない速さで抜き放つ。

居合い剣術だ。

夜の海に描かれる青い軌跡はシーサーペントの体を斬り、内包されている氷属性の力によつて傷口が凍結していく。反撃するように刹那へと噛みつきにかかるが、軽やかに跳躍して顔を飛越し、通り過ぎていくその体へと氷刃【雪月花】を振りおろし、離脱していく。

蛇というものは全身の筋肉を駆使して、その体からは想像もできない程の素早さで伸び縮みするが、これだけ巨大ともなれば体はがら空き状態となる。その隙を埋めるかのように巻き付いてくるのだが、それを察知して跳び越せばそれも無意味となる。

が、背後にあつた尻尾が降り上げられ、先端が振るわれて刹那を弾き飛ばしてくるが、小さく「障壁」と眩きながら宙に気の足場を作つてそれを蹴つて急降下して回避する。

入れ替わるように天和が刀を振るつて斬りかかり、またブルートが顔めがけて王牙大剣【黒雷】を振るつて雷の気刃を放ち、大きな傷を与えていく。

尻尾、頭突き、噛みつきに毒液。どれもこれも短い動作で躲され、逆に自分がいいように攻撃され続ける。その事実にはシーサーペントは戦慄し、小さく呻いて海へと退却していった。

今はもう夜。海は深い闇に閉ざされてしまっている。この環境の悪さの戦場へと飛

びこめるはずがない、とシーサーペントは思ったのだろう——相手が悪かった。「視力強化」

そう一言プルートが呟き、自分と天和へとその術をかける。続けて水中メガネをおろし、酸素瓶とマスクを用意して三人は一斉に海へと飛び込んでいく。

たちまち暗い水中が視界に入り込んでくるが、すぐに強化された視力によって逃げていくシーサーペントの姿を捉える。更にプルートが「水中感知」と口にすれば、二人の視界が明るくなってくる。

まるで昼間の海の中へと潜っているかのような視界を確保する事が出来てしまった。これがプルートが習得した夜の海でも戦えるための備え。これが効いている間は暗い海であろうとも敵を見逃す事がない。

刹那は盲目なので視界なんていうものはない。彼女は心眼によって周りの状況を把握してしまうのだから。

追ってくる三人に気づいたシーサーペントはまた唸り、舌を震わせながら振り返ってくる。体をくねらせながら向き直り、ぐっと体を丸めながら力を溜めだす。その予備動作に気づいた三人は一気に散開し、それを追うようにスクリューのような螺旋の動きで弾丸のように飛び出してくる。

「数分でケリをつけるぞ！ 天、刹！」



「そーだねー。もう眠くなつてきそうだし、それを目指しますか……つとー」  
「相変わらず無茶を言いなはる。まあ、頑張りましょ」

敵の領土であつたとしても、三人の調子が変わらない。暴れるシーサーペントに恐れをいだく事もなく、彼らはただ己のペースを保つて狩りを行つていくのだった。

○

次の日、朝食をとり終えた瑠璃達は準備を整えて再び海を目指した。その際に鬼人薬グレートと硬化薬グレートを飲み、体に小さなドーピングを施しておく。

エリア10は平穩そのものであり、ここに来るまでの間もラギアクルスはいなかった。という事はやはりこの海のどこかにいるという事になる。

そう思ったのだが、不意に遠くの海からゆらりと妙な気が接近してくるのを感じた。島の周囲を巡つてくるかのような気配であり、十兵衛が双眼鏡を取り出してそちらへと向けて見てみた。

すると、確かにそちらからこの海岸に向かつてゆつくりと近づいてくる存在が確認できた。同時に纏っているその気迫から、昨日戦つたあのラギアクルスである事が判明すると、三人は武器を抜いて臨戦態勢に入る。

奴がこのままこつちに近づいてくるならば、無理に海に飛び込んでまで戦いに行く必要はない。それはまさに城主の庭に無策で土足で入りこむようなものだ。海こそ奴の領域、奴が得意とする戦場に踏み入っていくなど愚かにもほどがある。

人は、陸上でこそ本来の力を発揮する。

奴がせつかく接近してくるならば、陸上へと歓迎してやればいい。

茉莉が角笛を取り出して吹き鳴らせば、ラギアクルスの意識が完全に三人へと向けられる。一度、角笛の音に反応して止まったようだが、改めて向き直ると少しずつスピードを上げて海を泳いでくる。

よし、釣れた。

実際に釣りをしているわけではないが、まさにこれは垂らした釣り針に手ごたえあり、という感覚だ。

三人は一度海から離れるように距離を取っていき、十兵衛は落とし穴をポーチから取り出して腰へと下げてスタンバイする。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

海中からラギアクルスの咆哮が響き渡り、そのまま勢いをつけて陸上へと飛び出してきた。その巨体が瑠璃に向かっていき、そのまま彼女を押し潰しにかかってくる。素早く地を蹴って横へと跳んで逃げ、背後で鈍い音を立てて着地しながら滑っていくラギア

クルス。

そんな奴を歓迎するべく、茉莉が盾を構えながら距離を詰めてトキシックジャベリンを突き出し、十兵衛は落とし穴を設置して妃竜砲【姫撃】に毒弾Lv2が詰まったベルトリリンクを繋ぎ、連続して撃ち出していく。

昨日の毒は完全に分解されているだろうが、奪った体力は完全に戻っていないはずだ。抗体が出来たとしてもそれは微々たるものになっているだろう。ならば今回撃ち込まれていく毒も十分に奴の体力を削ってくれるはず。

撃ち込まれていく毒弾に反応してラギアクルスが振り返り、十兵衛へと雷弾を撃ち出し、トキシックジャベリンを突き出してくる茉莉を押し潰すべく上半身を持ち上げる。

それをバツクステップしながら盾を構える事で防御し、カウンターを撃ち出すように胸へとトキシックジャベリンを突き入れる。その隙に瑠璃が火竜剣【火燐】を構えて左前足から腹へと切り裂きに行く。

すかさずラギアクルスがその瑠璃を追うべく首をひねって噛みつきにかかり、体を反転させながら尻尾を振るっていく。

当然迫ってくるラギアクルスの顔に気づかないはずもない。翼を広げて横へと逃げ、持ち上げられる顔、首へと火竜剣【火燐】を振りかぶる。しかしやはりというべきか刃は浅くしか入らない。

だがそれでも構わない。小さなダメージでも積み重ねていけば大きなダメージとなる。

着地した瑠璃が素早く腹へともう一度斬りかかりながら背後へと回っていく。それを追うべくラギアクルスがもう一度噛みつきにかかり、もう一度茉莉や十兵衛らの方へと向き直る。

すかさずその頭へと茉莉が盾を使って殴りかかりつつ横へと逃げ、空いた部分を埋めるべく十兵衛の通常弾Lv2が着弾していく。

昨日からいいように遊ばれた感がある十兵衛をラギアクルスは忘れてはいないようだ。ぐつと体を引きながらうつつぶせになると、十兵衛を撥ね飛ばすべく地を蹴って滑っていく。だがそれこそ十兵衛の思い通りだった。

素早く背後へと跳びつつ別の弾を装填すると、誘い込まれたラギアクルスは彼が仕掛けた落とし穴へと落ちてしまった。

「グオオアアアアアッ!？」

落とし穴に落ちた事で無防備となってしまうラギアクルス。その正面から十兵衛は装填した滅気弾Lv1を連続して頭を狙って撃ち込んでいく。背後からも瑠璃と茉莉が合流し、瑠璃は背中を、茉莉は首と胸へと攻撃を仕掛ける。

「はあ……ふう……ふう……ふっ！」



いいように攻撃し続けられてラギアクルスの怒りが溜まったようだ。大きく息を吸いこんで辺りに響き渡る程の怒号が発せられた。茉莉は耳を塞ぐが、高級耳栓がある瑠璃と十兵衛はすかさず茉莉をフォローできるように位置を変えて攻撃を仕掛けていく。瑠璃は切り込むのではなく気刃を放つての遠距離に切り替える。怒り状態となつたならば斬り込むのは危険すぎる。何かあつた際でも逃げられる遠距離から攻撃すれば事故の危険性は少なくなる。

低く唸つたラギアクルスはぐつと力を込めると、背電殻に雷エネルギーが蓄積され始める。発電だ。それに従つて背中から発せられる電気が周囲にまき散らされる。

だが離れている瑠璃達にはその影響はない。隙だらけとなつているラギアクルスへと更に追撃を与えていくものの、効いている様子はない。そのまま海の方へと下がりながら振り返り、口元へエネルギーを収束させて雷弾を撃つてくる。

瑠璃と茉莉はそれぞれ左右へと散り、茉莉はトキシックジャベリンを一度背中へと戻し、ポーチから麻痺投げナイフを取り出した。怒り状態となればランサーである彼女は近づけない。

遠距離攻撃は一応持っているが、気を纏わせて突き出すよりこの麻痺投げナイフの気刃を放つて補助に回つた方が安全だった。だが距離を離れたところでラギアクルスにはその距離を詰める手段が存在している。

ぐっと力を込めてうつぶせになればまたあの滑り込みがやってくる。だが今回は背電殻に溜められた電気が解放され、ラギアクルスの周囲に放出されながら巨体が迫ってくる。

例え横に逃げて突進を回避したとしても、放出されている電気の網が捕えてくるという事か。しかし今回は二人ともそれすらも逃げることに成功。

背後にブレイキをかけながらラギアクルスが止まるところを狙って十兵衛が通常弾を撃ち込んでいき、瑠璃が火竜剣【火燐】を振るって気刃を放っていく。

それに苦痛を感じる様子はなく、また振り返りながら雷弾を撃ってくる。それで牽制しつつ、十兵衛へとまた滑りながら迫っていく、十兵衛はそれから横へと逃げる。だがラギアクルスはブレイキをかけて停止すると、素早く尻尾を振るって十兵衛へと攻撃を仕掛ける。だがそれもバックステップをしてやり過ぎし、装填した貫通弾で腹から突き抜けるように狙って撃つ。

その距離ならば首を伸ばせば届く。ラギアクルスが頭上から十兵衛へと噛みつきにかかると、それも横に跳んで回避。逃げ続ける十兵衛に苛立った様子を見せたラギアクルスだが、横から飛来してくる炎を纏った気刃にも意識が傾く。

痛みはそれほどでもないが体を焼かれる感覚にどうしても意識が向きそうになっていた。唸るラギアクルスの頬を刃が通って焼かれたとき、ついにラギアクルスは瑠璃へ

と向き直り、彼女の方へと滑り込んでいく。

「……………」

翼を広げて横へと飛び上がり、放出される電気からも逃げ、がら空きとなつて背  
中へと気刃を放ち、背後に着地する。すぐそこには麻痺投げナイフを振るつて気刃を放  
ち、麻痺毒を少しずつ注入していく茉莉がいる。そんな二人へと振り返るラギアクルス  
だったが、小さく唸つて何かを考えると、また方向転換する。

その先には広がる海が。まさかと思う間もなく、ラギアクルスは勢いよく海へと飛び  
込んでいった。このまま陸上で戦い続けては不利だと判断したのだろうか。あるいは  
逃げるのか？

そう考えるがラギアクルスは一度深くまで潜つたかと思うと、そこでまた背電殻へと  
電気を収束させていった。先ほど以上に強い光を放つ背電殻がうつすらと海の底から  
見える。

そして奴は海面へと顔を出したかと思うと、高まつたエネルギーを収束させて雷弾を  
撃つてきた。横へと跳んで逃げる二人。そうしながらまだ奴は戦う気がある事を悟る。

それに見た限りではもう口元から吐息が漏れていなくなつたように思える。怒り状態  
は解けているらしい。ならば自分達も攻撃の手を止めるわけにはいかない。海の中へ  
と入られたとしても、まだ策はある。



それぞれ腰元にシビレ罨を提げ、マスクを取り出して装着すると次々と海へと飛び込んでいく。海に入ればラギアクルスが一度距離を取るように背後へと下がりつつ体をくねらせる。

瑠璃と茉莉が左右へと散り、十兵衛が正面からラギアクルスへと接近していく。妃竜砲【姫撃】に装填されているのは通常弾Lv3。それを撃つタイミングを計りながら、慎重にラギアクルスへと近づいていく。

ああして体をくねらせながらタイミングを見計らっているという事は、突進を仕掛けてくるといふ予備動作にも見える。それが来るならばすぐさま下へと逃げて撃つつもりだ。

だがラギアクルスは突進はせず、また様子を見るように迂回しながら泳ぎだす。海底から伸びる遺跡の柱のような残骸の奥へと消え、瑠璃の方へと回り込んでいく。瑠璃もラギアクルスの動きから目を離さず、海底へと降りていきながらいつやってきても大丈夫なように身構える。

「……………」

だがラギアクルスは突進せず、雷弾を一発撃ってくる。それから逃げるべく足で水を蹴り、腕で水を掻いて素早く移動。しかしそれを見計らい、ラギアクルスもまた突如水を蹴って瑠璃へと急接近した。

「……ッ!？」

まさかの行動に瑠璃は息を呑み、気で体を固めながら防御体勢を取る。火竜剣【火燐】を長剣形態にして防御するが、それでラギアクルスの突進が完全に防げるはずがない。みしり、と火竜剣【火燐】が軋み、衝撃を完全に殺しきれずに瑠璃の体は勢いよく吹き飛ばされる。

「瑠璃っ!」

茉莉が思わず叫んでしまう。瑠璃は吹き飛ばされただけでなく、海底から聳える柱へと叩きつけられてしまったのだ。だがラギアクルスはそれだけでは足らず、口元にエネルギーを収束させて雷弾を撃ち出した。

しかしその弾道に十兵衛が割り込み、昨日のように足に気弾を形成して回し蹴りで撃ち出す事で相殺した。

「グルルル……!」

またしても邪魔された、とラギアクルスが唸る。その間に茉莉が瑠璃の下へと向かっていき、彼女の救出を行う。その間の時間稼ぎをするべく十兵衛はラギアクルスへと接近するが、ラギアクルスもまた十兵衛を潰すべく接近してきた。

そんな奴の体へと通常弾Lv3を撃ち出し、連続した跳弾を狙っていく。その連続した痛みにとまらざラギアクルスが呻き、その隙をついて素早く装填。再び通常弾Lv3

を射出して攻撃の手を止めない。

ズガガガンツ、ズガガガンツ、と気持ちのいい音が聞こえてくるが、生憎とそれに爽快感を見出す事など出来ない。背後で瑠璃を抱えて海上へとあがつていき、回復薬グレートを飲む瑠璃を感じ取りつつ、ただ十兵衛はラギアクルスの意識を引き付け続ける。

不意にラギアクルスがぐつと体を丸めながら力を溜めると、背電殻からバチバチと電気が放出されだした。その予備動作が何か気づき、十兵衛がすかさず逃げの体勢にはいると、体の側面からの体当たりを仕掛けてくる。

それから下へと逃げて回避するが、放出される電気の一部分が足元に引つ掛かって感電してしまった。声にならない呻きを漏らすと、ラギアクルスが素早く向き直つて尻尾を叩き落してくる。

その一撃は十兵衛の脇腹を捉え、強制的に海底へと落とされる。

「うっ……く……!?」

叩きつけられはしなかったが、一撃の重さに苦しい音が漏れて出てしまうのは仕方ない。妃竜砲【姫撃】を離さないだけでもよかったが、ラギアクルスは十兵衛に対して鬱憤がたまっていたらしい。

「グルアアアアアアア!!」

「今こそ殺つてやる！」とでも言うかのような咆哮を上げて、ラギアクルスが十兵衛に向かつて急速落下。それに十兵衛は舌打ちし、妃童砲【姫撃】を腰に戻して両腕を交差させて防御体勢を取る。同時に己の気を高めて守りを固めたところで、ラギアクルスの頭突きが十兵衛へと襲い掛かった。

その衝撃に十兵衛は一気に海底まで叩きつけられ、乾いた声が口から洩れて出る。それだけでは飽き足らず、叩きつけた十兵衛へと口を開き、ラギアクルスは噛みつきにかかった。

「あ、ぐ……ッ!?!」

ディアブロUガードによって守られているが、ラギアクルスの牙はそれでも食い込んでくる。上位のディアブロス亜種の硬い甲殻を使用している防具だが、ギリギリと若干軋む音を立て始めていた。

すぐに食い破られるということはないだろうが、このままではいずれ本当に牙によって破壊されてしまう。

「十兵衛さんっ! く、瑠璃はそのまま。私が救出に向かいます!」

「あ、待つて……っ、くう……!」

呼び止めようとする瑠璃ではあったが、腹と背中から来る鈍痛に顔をしかめてしまう。それに呻いている間に茉莉は一気に海底に向かつて潜水していった。

茉莉の手には麻痺投げナイフがある。麻痺毒は結構蓄積されているはず。あと数度撃ち込めばラギアクルスは麻痺状態になるはずだ。一気に攻撃する、という流れに持ち込めないだろうが、致し方ない。それよりも命を優先するべきだ。

「グルルルッ！」

「ぐ、の……！」

唸り声を上げながら左腕を食い破ろうとするだけでは飽き足らず、ラギアクルスの背電殻が鮮やかに光を放ち出す。まさか、と思うまでもなく、その電気が解放されて周囲一帯が雷撃に包まれた。

「ぐっ、おとおお、ああああ——ッ!?」

瞬時に十兵衛が気と魔力を練り上げて備えたが、彼の体を襲い掛かる雷撃は止められない。それだけでなく雷耐性がない茉莉の接近すら許さず、彼はただ海底に押さえつけられたままそれを受けざるを得なかった。

「十兵衛さあああああんッ!」

ただ、茉莉の声が海底に響き渡り、ラギアクルスは目障りな敵を倒した勝利に歓喜に表情を歪め、声を上げるのみ。

## 54話

ラギアクルスから放出される雷撃は奴を中心として周囲に放出され、救出にやって来た茉莉をこれ以上近づかせない。海底に押し付けられながら噛みつかれるだけでなく雷撃も仕掛ける。

これに十兵衛は逃れる術はない。

ただ受け続けるだけかと思われた。

茉莉も麻痺投げナイフを振るって気刃を放ち、麻痺毒を撃ち込もうとしたが、しかし毒が蓄積されてもそれが効力を発揮する事はなかった。

「く、の……んぬ、おおおお……ッ！」

体に纏わせた気と魔力がうねりをあげ、十兵衛に直撃してくる雷撃が構えられている右腕に収束する。強い雷撃が十兵衛を感電させ、意識を飛ばしにかかってくるのだが、しかし十兵衛は歯を食いしばって堪えていた。

ぎゅつと握りしめられた拳には直撃してきた雷撃の一部が集まっており、十兵衛の魔力と同調して彼の力と化す。そのままラギアクルスの頬を殴り飛ばせば、弾けた電撃が

ラギアクルスの鱗を吹き飛ばした。

「グルオツ……!?!」

ただの殴りでは怯みもしないが、纏われている魔力と電撃の力がラギアクルスにダメージを与えている。そのままもう一撃、もう一撃と打ち込んでいくと、噛みつく力が少し弱まった。

その隙を逃さず左腕を抜き、殴った頬を蹴り飛ばして距離を取る。

逃げる際、食い破られたディアブロUガードの破片が零れ落ちていくのが見える。それを横目で見ながらラギアクルスから距離を取っていくが、すぐさまラギアクルスは顔を上げ、逃げる十兵衛を追って突進を仕掛けていく。

水中の動きはラギアクルスに大きく分がある。海竜という異名は伊達ではない。水中で人が彼らに泳ぎで勝てる道理はない。

だが緊急的な小回りの利く回避ならば若干ながらも分がある。十兵衛は足元から気を放出して瞬間的な爆発を起こし、その衝撃を利用して急速転進。前転しながらもラギアクルスの突進から逃げる事が出来た。

捉えられなかったことでラギアクルスがブレーキをかけながら反転し、十兵衛を睨みながら向き直って立ち泳ぎへと切り替え、ぐんつと距離を詰めてくる。その勢いのまま尻尾を振り上げてくるが、妃竜砲【姫撃】を構えながら背後に逃げ、装填した通常弾し

V3を射出して反撃する。

噛みつかれ、雷撃を受けたダメージがあるだろうに、十兵衛はそれを感じさせずに戦い続けている。その様子に茉莉はより頑張らなければ、という気持ちを高め、それが強い意志を持つ気と化して麻痺投げナイフに含まれる毒の力を高めた。

投げナイフの許容量を超えかねない気であるが故にみしみしとナイフが軋んだが、碎ける前に気刃としてラギアクルスへと放つ。何度も何度も毒を撃ち込んだ成果が実ったのか、あるいは彼女の戦う意志を含んだせいか、ついにラギアクルスが麻痺毒に侵されて体を痙攣させたまま動けなくなってしまう。

この好機を逃さず、十兵衛はラギアクルスの側面に回り込み、チップから火炎弾のベルトリックを伸ばして妃竜砲〔姫撃〕へと繋ぐ。照準はラギアクルスの背中。弱点部位であるそこへと高速で火炎弾を撃ち込んでいく。

茉莉も麻痺投げナイフをポーチへとしまい、トキシックジャベリンを抜いてラギアクルスの顔へと突き入れていく。

「はあっ！」

己の気はまだ昂っている。それがトキシックジャベリンへと注がれ、傷ついている部分を狙って連続して突き入れる。そんな二人に合流すべく、瑠璃もまたマスクを装着し直して潜水してくる。



背中に戻っていた火竜剣【火燐】を握りしめ、まだ体にかかる鈍痛を堪え、意識を集中させて精神統一していく事で痛みを感じないようにする。そうして高められた純粹な闘気を火竜剣【火燐】に纏わせ、離れた所から初撃の剣閃を放っていく。

背中から腹にかけて切り裂かれたその一撃。火炎弾の嵐によって少しずつ脆くなっていた背電殻に至っては瑠璃の一撃によって頂点部分は若干削り取られていた。通用しているという事実を見て瑠璃は更に一撃、もう一撃と放ってラギアクルスへと肉薄する。

「……………ふうっ！」

精神を集中させている状態に入れば、瑠璃は掛け声も放たず静かに剣を振るう。気合を込める一撃ではなく、気を纏わせて精度を上げた一撃として斬りかかるのだ。長剣形態からダブルセイバー形態へと切り替えると、火竜剣【火燐】を回転させて連続して脇腹を斬っていく、両手で操りながら目にもとまらぬ連撃を加えていく。

すると積み重ねたダメージが通用したのか、少しずつ鱗が軋み、傷つき、噴き出る炎によつて破壊され、肉を露出し始めた。そこを狙って更に斬り続けければ、ついに周囲の鱗を吹き飛ばす事に成功し、一気に肉へとダメージを与えられるようになる。

背電殻の方も火炎弾によって少しずつひびが入り始めているところだった。いくらG級に値するモンスターといえども、ここまで攻撃を加えられては傷も出来るといふも

の。

だがその好機もラギアクルスの体内に作られた抗体によって終わりを迎える。麻痺毒の影響がなくなり、体の痙攣が収まって束縛から解放されたラギアクルスが唸り声を上げて体勢を立て直す。

しかしすぐさま茉莉がトキシックジャベリンを引き、盾を嵌めている左手で腰に提げているシビレ罫を手にとってラギアクルスの首に沿って降下し、胸の辺りに設置する。水に浮きながらそれは雷光虫の電気の力を解放させれば、再びラギアクルスの体が動きを止めてしまう。

当然この好機もまた逃さない。今度はその胸の部分を狙ってトキシックジャベリンを突き出していく。これだけ攻撃を仕掛けているのだ。昨日に続き、ラギアクルスへとまた毒状態へと貶める事がそろそろ可能だろう。

「……………、火炎弾が……………」

チップへと視線を落とせば、火炎弾の残量がもうほとんどなくなっている、という事を示していた。更に続けて引き金を引いていけば、全弾撃ち尽くした事を知らせてくれる。

だがそれで攻撃の手を止めるわけにはいかない。火炎弾のベルトリンクを妃竜砲【姫撃】から抜いてチップへと戻し、別のチップを叩いて通常弾Lv3を取り出して次々と

装填。

背中……から少し下を狙って引き金を引いていく。跳弾によって連続してダメージを与えられる場所を狙って撃ち放つ。

(それにしても弱点部位である背電殻に火炎弾を全部撃ち尽くし、跳弾もいくつかしていたというのに、完全破壊には至らない、か。流星はG級……耐久力はとんでもない……！)

背電殻は破壊可能だ。

破壊する事で少しは帯電する量も減るし、力も低下する……はずだ。それに弱点部位という事もあるし、ラギアクルスにかかる負荷も大きい。だからそこを撃ち続けた。それも……百発近く。

火炎弾六十発、通常弾Lv3の跳弾が五十以上。これだけ撃ち尽くしたというのに、三分の一くらいしか削られていない。

上位のヘビィボウガン……それも上位のリオレイアの素材で作り上げられるものの中で一番の強化武器である妃童砲〔姫撃〕から撃ち出される弾丸だというのに、まだまだダメージは甘いらしい。

上位のラギアクルスならば、もうそろそろ背電殻が大きく欠けてしまうだろうに。その差異に十兵衛は心の中で舌打ちしたくなる。

だが今はシビレ罨によつて動けなくなっている。まだまだ攻撃は続行だ。  
「グ、グオ、オオオオオオ……ッ!？」

苦しげな声を漏らすラギアクルスの口から涎が垂れ落ちていく。それにトキシックジャベリンが突き刺された部分から毒が染み込んで広がっていき、ラギアクルスの口から声に毒に侵された苦しさが混じりだした。

それに手ごたえを感じ、茉莉はトキシックジャベリンに更に気を上乗せさせて一気に突き入れてやる。何度も突いている事で胸の鱗も破壊されつつある。毒が回る事で守りも弱くなったのだろうか。あるいは気を上乗せさせたことで破壊力が増したか。

だが何度も突いたという事はそれに伴つてトキシックジャベリンの切れ味も落ちてきているという事実もある。高い切れ味を誇っていたトキシックジャベリンではあるが、それによつてがきんつ、と小さく弾かれてしまった。

ランスが弾かれれば大きく隙が出来てしまう。本来ならばその隙に付け入れられて一撃貫つてしまうだろうが、今ならば立て直すだけの時間がある。次々と刃を突き入れて追加の毒をお見舞いしていく。

「……………」

一方火竜剣【火燐】を振るう瑠璃はというと、どんどん肉を斬つていこうと回転させ続けているのだが、こちらも高速の連撃を叩き込んだことで切れ味が落ちているのだ。

そろそろ砥石を使って切れ味を戻したいところだ。

しかしこの好機にそんな事をしているよりも、今は少しでもダメージを積み重ねておきたいという心境が勝る。

やがて海に赤が多く混ざりだす頃、シビレ罨の効力が消え、ラギアクルスは再び自由を手に入れる。それを見越して三人は一齐にラギアクルスから距離をとった。

そんな三人を見回し、ラギアクルスは大きく息を吸いこんで怒号を発する。

またしても怒り状態へと移行したようだ。当然か、動きを止められていいように攻撃され続けていたのだ。奴からすれば小さな存在にここまでいいようにされては怒りも高まるというものか。

三人はラギアクルスから離れると、それぞれのルートで陸を目指す。

水中で怒り状態のラギアクルスを相手にするなど危険だ。だから陸に上がって怒りが収まるのを待つ。そういう作戦だ。

だがラギアクルスは逃さないといわんばかりに水を蹴って十兵衛に向かって突進を仕掛けていく。素早く急降下し、突進をかわしたがラギアクルスは反転し、尻尾を叩きつけてくる。

今度はそれを貫わずに避け、一発通常弾Lv3を射出して反撃しながら横へと逃げる。

それを見逃さずに雷弾を撃ってくるがそれも躲し、もう一撃は気弾を蹴って相殺させる。ちらりと横を見れば瑠璃と茉莉はもう陸近くまで離れていた。

十兵衛もそれに続こうとするが、ラギアクルスが水を蹴って泳ぎだし、側面から回り込むように十兵衛に接近していく。まるで彼の行く手を封じるかのような泳ぎだ。そうして進路を塞ぎ、ぐつと体を丸めながら背電殻から電気を放出すると、体の側面を使つてぶつかってくる。

「くっ……！」

何とか足の先から気を放出して瞬間的な移動をして躲したが、ラギアクルスは更に力を入れ、もう片方の側面からぶつかってくる。咄嗟に逃げの手を考えたがそれでは間に合わない。両腕で防御体勢を取って身構えるも、その巨体による衝撃と放出される雷撃が十兵衛の体を侵してくる。

だが十兵衛は己の体に気と魔力を巡らせて疑似的な障壁とし、骸の中で苦しいな表情を浮かべながら体を侵してくる雷撃の一部を、両足へと収束させてラギアクルスの胸を蹴り飛ばしてやった。そうしつともう一撃片方の足で蹴りながらラギアクルスから離れ、それを追うように首を伸ばして噛みついてきたが、その鼻先へと踵落としをして小さく怯ませる。

「いん、のっ！」

その鼻先に両足を乗せ、圧縮した気をまるで爆発させるように解放させて一気に海上へとあがる。更にそれでは終わらず、気を放出して海から離れ、宙を翔けるように回転しながら陸上へと戻り、膝をつけて着地した。

実に鮮やかな気と体術だ。やはり、とんでもない。

それに見とれている暇はない。ラギアクルスはまた海面から首を持ち上げ、低く唸りながら口元に雷エネルギーを収束させて撃ち出してくる。

しかしあそこまで距離があれば弾道も読める。三人は散開して回避する。その動きにラギアクルスはまた唸り、陸へと近づいてくる。

再び陸上戦となるのか。

しかし今回は退却を選ぶ。

三人はラギアクルスから背を向け、エリア9へと逃げていく。背後からラギアクルスの声が聞こえたが、それに気も留めず撤退していった。

エリア9を通過し、エリア5という広い場所へと戻ってきた三人は昼食の用意をする事にする。とはいっても肉焼き器を取り出してこんがり肉を焼き、ちよつとした山菜を添えるだけという簡単なもの。

それを食べ終わると瑠璃と茉莉は己の武器に砥石を当てて切れ味を戻していき、十兵衛は消費した弾丸を補填するために調査していく。全弾撃ち尽くした火炎弾と滅気弾

Lv1、かなり消費された通常弾Lv3に、拡散弾Lv2。

手際よく調合を進めて弾を作り、チップへとそれぞれ収めていく。数分もすれば使用された弾丸が全て補填される。

腹も満たしたし武器の調子も取り戻した。再選の準備は整ったと言える。

だが果たしてどうやって奴を詰めていこうか。

怒り状態を避け、さらに海での戦闘を避け、陸上のみで決戦する。十兵衛は使った落とし穴も調合し直し、腰に提げる。茉莉もシビレ罫も調合し終えて準備完了。

さあ、戻ろうか……と思った刹那、海の方からラギアクルスが姿を見せた。

「っ!? 追ってきた、ですって!？」

「おーおー……殺る気まんまんってやつですね。まあ、移動の間も省けましたし、海から離れたので歓迎ですが」

「でも気を付けるツスよ。攻撃を貰わないように……!」

話しの途中でラギアクルスが四足で駆け出し、接近してくる。それぞれ散開して一塊にならない、という基本の位置取り。正面には茉莉が盾を構えて相対し、そんな彼女へと途中で地面を蹴って滑っていく。

その突進を気を込めて防御したが、そんな彼女を更に後ろへと押しやるだけの衝撃。だがそれでも何とか堪えて防御し、反撃の一撃を与えながら横へと逃げる。それを逃さ



ないように首を曲げて噛みつきにかかり、背後から斬りかかってきた瑠璃を尻尾を振るって薙ぎ払う。

噛みつきは盾で防ぎ、頬をトキシックジャベリンで突き上げて反撃。瑠璃も尻尾を飛び越して火竜剣〔火燐〕で尻や背中へと斬りかかっていく。また十兵衛が落とし穴を仕掛け終え、通常弾Lv2を装填して背中へと狙撃していく。

火炎弾によって傷ついた背中に対しての通常弾。それを着実に中ててダメージを狙っていくその時、何かに気づいて十兵衛は顔を上げた。骸の奥で視線を動かし、その何かを探してみる。

(……魔力反応? これは……監視系のもの。まさか、あの子が探しに来た?)

そんな事をする人物に心当たりがあるため気になってしまったが、それにしては少し違う気がする。

(この反応はあの子のものじゃない。また別の誰かだ。しかし……誰が?)

○

瑠璃達が戦っている孤島から離れた所にある孤島にて、プルートの使い魔を飛ばした先で見られる光景を魔力で繋ぎ、宙に映し出していた。彼の傍には刹那がおり、離れた

所には死体となっているシーサーペントに向かって何かをしている天和がいる。

彼女の手にはあの刀があり、死体だというのにシーサーペントへと斬りつけて血を流させ、それを刀身に滑らせている。そうして十分に滑らせると刀に溶け込んだ血が紋様を描き、天和はそれを太陽の光を通してじっと見つめていた。

「……悪くない反応、か。また一つ、いい血が染み込んだ」

何度か角度を変え、刀の調子を確かめてみる。シーサーペントの血により、また少しこの刀に眠りし力が解放されつつある事が感じられる。それだけでなく刀身の煌めきも僅かに良くなってきている。

「えっと、これでどれだけ吸わせただけ？ リオ夫婦に亜種、ナルガ、ティガ、ラギア、ナーガ、ベリオにこいつ……ああ、ディアにガノスもいたっけ。んー……まだまだ足りなさそうか。いつになったら目を覚ますんだろうね、このお寝坊さんは」

呟きながらその刀の刀身をゆっくりと撫でていく。血が染み込んだことで紋様は薄く光を放っているが、微細な龍の力がそこに存在する事だけはわかる。

流星は竜殺し……いや、龍殺しの名刀にして妖刀。

伝説種にして七禍龍が一、冥蛇龍、デイス・ハドラーを討った過去がある妖刀ではあるが、長い時の間眠り続けた事でその力が失われ、国宝として捧げられた刀。それがこれだ。

この眠りを解くためには、竜の血を再び吸わせていき、龍殺しとしての力を取り戻す事にある。この力がなければただの刀でしかない。

また人の血を吸っても微細ではあるが力を目覚めさせることが分かり、天和は人の血……それも強者の血を吸わせる事を目的として各地を放浪し、辻斬りをしていた。最初こそ上手くは行かず、そして秘匿され続けていたが、気づけば戦いを楽しむことも求めてしまう。おいたをしてしまつて辻斬りの存在が知られ始めてしまつたが、それでも天和はこの刀に血を吸わせ続ける事をやめなかつた。

それにただ辻斬りをするだけではない。プルートのゴミ掃除、領主殺しにも参加して斬り続けたが、そちらに関してはあまり興が乗らなかつたのもあつたようだ。

人斬りもそれなりにいいが、やはり彼女にとつては竜斬りの方が性に合っているらしい。というより彼女の心を躍らせるだけの強者がいないという事が、彼女の気分を下げてしまつているようだった。なにせ彼女は昔も今も身近に化物クラスの実力者がいるのだから仕方あるまい。

さて、その化物クラスの一角であるプルートの使い魔が映し出している光景はというと、瑠璃達が戦っている孤島の様子だった。

数分でケリをつける、とプルートが昨夜叫んだが、実際には先ほどまで戦い続けている。いや、その言い方は正しくない。数分間戦つた後、シーサーペントが逃走してし

まったのだ。

毒液とガスによって煙幕を作り上げ、その隙をついて深海へと逃げていったのだ。水中戦をする事は可能でも、人の身で深海まで潜るにはそれ相応の備えが必要となる。やむを得ず三人は退却し、数十分前にシーサーペントを呼び寄せるための撒き餌を用意して誘い込んだ。

奴の好むルドロスを数匹捕獲し、その臭いを増幅させて海面に投げ入れ、呼び寄せた。後はごらんのありさま。傷を癒すためにも食料が必要だった事もあり、シーサーペントは誘い出され、三人にいいように斬られ続け、息絶えてしまった。

必要な素材を剥ぎ取り終わると、天和は血を採取しはじめ、プルートの何となく同船していた瑠璃達の様子を見るために使い魔を放ってみたというわけだ。

そうして見えたものは、G級ラギアクルスと戦う彼女らの姿だった。

「向こうもG級のようなだな。ふむ、あの者らにとっては厳しい相手か」

「助けなくてよろしいんです？」

「ふむ、そうするべきか、あるいは——竜魔族としての力を見極めてみる、か」

「……くす、興味が湧いたんです？ ああ、竜魔族のパーティに」

何の事もなく、二人は竜魔族、と口にした。船上で話した際にお互い自己紹介をしている。竜魔族とは瑠璃らは口にしていないはずだが、どういうわけか二人は竜魔族であ

る事を見抜いてしまっていた。

「しかもあの男の方……気のせいやなかったら、あの家の血の気配を感じた気がするなあ。天、あんたもどない？ 氣いついとった？」

「……んー？ ……ああ、萩原十兵衛って奴？ 確かに、あの家の気配はしたけどさ、有り得くない？」

「せやなあ。それにヤマト国じゃ見かけへんかったし……いや、ちゃうな。おられへんかった、とゆうべきやな。でもそうなると、萩原とゆう名字からして母親がそれに連なるって事なんやろうけど……」

「……んく、んく……二葉」

刀を鞘に収めた天和がロープから酒瓶を取り出してラツパ飲みをしつつそう呟く。そして刹那はというと天和が呟いた名前に「ああ……」と頷いて映し出されている光景へと向き直る。といつても、彼女にはそれが見えない訳だが。

「二葉……か。ウチらが……いや、あの武神が生まれる前にヤマト国から離れた女性にして、あの人の母親、四葉の姉、か。なるほどなあ、それやったら可能性はあるわ」

「……ふーん、確かに特徴はある」

合流した天和が十兵衛の戦う姿を見てそう呟いた。それを肴に酒を進めている。

そうしつっ左手で鞘に収めた刀の鐔に親指を当て、カチ、カチ、と上げ下げしていた。

どうやら斬り合ってみた、と感じているらしいな、と刹那はその音を聞きながら思った。

「ふむ？ 天と刹には心当たりがあるようだな？ 聞かせてみよう」

そして刹が自分が感じた気配とそれを持つ家系の事について説明すると、なるほどと納得したようにプルートの頷いた。もう一度戦場の光景に視線を戻し「……興味深いな」と呟く。

「稀有な竜魔族のハンターのパーティというだけでも興味深いが……ふむ、少し足を運んでみるか？」

「よろしいんです？」

「良い。信号弾も打ち上げておらぬから船はまだ二日は来ぬわ。こうして稀有なケースに遭遇した上に、その希少さが消え果てようというのも惜しい。……それに、天と刹に微細なれど縁のある者の戦い、こうして使い魔を通すよりも実際に目にした方がよかるう？ なあ、天よ？」

「……んく、ぷはあ……。ん、実際に見た方がわかりやすい。私を……満足させてくれるだけの実力を持っているのか、ね」

そう言いつつまだ刀を弄る指の動きは止まっていない。気だるげでやる気のなさげなあの真紅の瞳は、小さくはあるが強い意志を感じさせる。……戦意だろうか？ 表情

こそ気の抜けたままではあるが、目だけは力がある。

それはまさに戦闘態勢に近いものだった。

「ではこうしている暇はないな。……死体は、少し保護しておくか」

シーサーペントの死体に目を向けたブルートはぶつぶつと何事かを呟き、それによって死体は何らかの力によって囲まれた。三人がここから離れた事で他のモンスターたちによって食い散らかされ、分解されないようにするための処置。

これが自分達がクエストを達成した証となるのだ。ギルドが来るまでの間、守っておかねばなるまい。

準備を整えると三人に風の力を与えて体を浮かせ、それぞれ飛行して瑠璃達がいる孤島へと向かっていった。

○

(……消えた？ 一体、何だったんだ？)

自分達を見張っていた監視系……使い魔を使った力が消えてしまった。途中で居なくなるとは、本当にあれは誰だったのだろうか。

いや、そんな事に気をとられている暇はない。今はただ目の前のラギアクルスを討伐

する事だけを考えなければならぬ。それだけでなく、瑠璃と茉莉のサポートの事も考えなければ。

斬りかかつていく瑠璃へと尻尾を振り、盾を構えてトキシックジャベリンを突き出す茉莉へと噛みつきにかかるが、軽いステップで躲して頬や首へとカウンターを放つ。

もう一度噛みつきに來ても、横にステップしつつ盾で受け流し、顎をかちあげてやりながらトキシックジャベリンを一撃。が、また反撃が飛んでくる。

今度は噛みつきではなく、背電殻の発電。それによつてラギアクルスの周囲に電氣の一部が放出される。それも一度バックステップして距離を取るが、遠距離から攻撃する十兵衛にはその行動など隙だらけでしかない。

滅氣彈L.V.Iを装填すると、背電殻へと照準を合わせて引き金を引いていく。放たれた弾丸は狙い通りに着弾し、疲労効果を与えていく。ラギアクルスは十分暴れ続けている。あれだけ暴れば疲労も蓄積するというもの。

それにダメ押しするように滅氣彈。その効果は、すぐに目に見える形で出てきた。

「グルオ……グ、グ……」

口元から涎を垂らし、息切れしたように呼吸が乱れてきている。

訪れた好機を逃さず、十兵衛は腰に提げていた落とし穴を一度地面に放り、茉莉へと向けてインサイドキックで蹴り飛ばす。滑るように飛んできた落とし穴に気づいて茉



莉がそちらへと向かつて回収し、ラギアクルスの懐に潜り込んで設置する。ピンを抜いてネットが広がり、十分に広がったところでラギアクルスが一気に地面に落下した。

疲労状態ならばこの落とし穴の効果も長く続く。もがくラギアクルスの頭を狙って茉莉はぐつと体勢を低くしながら盾を構え、己の気を注ぎ込んでいけば盾の前に彼女の気が展開される。

そうして一歩強く踏み出しながらラギアクルスの頭へとぶち当てていく。鈍器によつて頭を揺さぶられるという衝撃にラギアクルスが呻き声を上げるが、まだまだ盾をぶち当てて頭を揺さぶっていき、そうして積み重なった結果はラギアクルスの眩暈。力が抜けてぐたり、と首が地面に倒れて動かなくなっていく。

「——ッー」

これだけの好機が揃ったならば、殺らずにはいられない。動かず、無抵抗な状態ならば、首を取る事も可能だろう。長剣形態にした火竜剣【火燐】を構え、無心になって気を纏わせ、一息にラギアクルスの首へと振り下ろす。

斬れる。

斬れはした、が、血が噴き出るだけで切断には至らない。首を守る鱗らが斬られ、肉も斬れはしたようだが完全ではない。ならばもう一度と火竜剣【火燐】を振り上げ、一気に振り下ろす。しかし、落とせない。

やはり自分の腕が甘いのか？

クロムなら……桐音ならば、斬れるのだろうか。

クロムはその技術と有り余る力を以ってして、桐音ならばあのオーラの力と自らの技術を融合させて。

自分は未熟だから、その境地には至れない。何度も何度もやる事でようやく斬れる。

それではだめだ。ここで終わらせるためにも、一気に斬り落とす。そうする事でこの戦いを終わらせられるのだから。

『斬れる斬れない、なんてことは一切考えない。あるいは、斬れるという事だけを考える』

クロムの言葉が思い起こされる。

それだけではない。

『んん？ 竜の首を斬るってことかい？ んなこと、別にむずかしく考えなくてもいいさ。最初は鱗や甲殻自体を斬るっていうんじゃなく、関節や繋ぎ目を狙う。加えて無心になり、一息で斬る。それだけのことさ』

桐音の言葉も思い出される。彼女の剣術もまた目を見張るものがあり、その気になれば一息で竜を殺せるだけの實力があるのにそうしない。戦いを楽しむためだと彼女は言っていたが、あれを出せば確実だ。

そうでなくとも、剣術を振るうだけで容易に斬る事も可能だった。そのコツを鍛錬の際に訊いてみたところ、ああいう答えが返ってきた。あまりクロムと変わっていないのは、突き詰めればそういう事に達する事になるのだろうか。

十兵衛も背後から背電殻へと火炎弾を連続して撃ち込んで体力を削っていくし、茉莉も盾とトキシックジャベリンを使って動かないラギアクルスの頭部へと攻撃を仕掛けていく。

どちらもラギアクルスの体力を削る攻めだが、瑠璃の一撃が決まればそうする間でもなくラギアクルスを仕留められる。

そのプレッシャーを無心になって感じなくする。

「……………ッー」

そのまま火竜剣【火燐】を振り下ろして刃ね飛ばそうとしたが、やはり血が噴き出すだけでそこまで至らない。骨を守る鱗と肉が斬撃を受け止めてしまっている。

（——無理、なの？）

無心になっている頭に弱気な言葉がよぎってしまう。

しかも眩暈状態から解放されたラギアクルスの方もがきだす。そうして落とし穴から這い出て体に入力しようとした。が、疲労状態がまだ続いており、背電殻に雷エネルギーを充電しようとしてもそれは成功しない。

淡く光るだけでむなしく力が霧散している。

好機は続いているが、首が持ち上がっていることよって斬りにくくなってしまうている。刎ね飛ばそうとするならば、気刃を放って攻撃するしかない。

が、こうして気刃を放ったところで勢いよく首が飛ぶ、なんて現実を訪れない。奴が動けるようになった事で対象がずれていく。荒い息をつきながらもラギアクルスは嘯みつきにかかってくるが、茉莉も瑠璃もステップして躲し、反撃していくがそれはただダメージを与える程度のもの。

瑠璃へと頭突きを仕掛け、押し潰しにかかるようにしているが悉くそれらを躲して斬りかかる。その背後に回り込んで十兵衛が装填した火炎弾を背電殻へと撃ち込みつつ、そつとラギアクルスの首の傷の具合や瑠璃と茉莉の様子を窺ってみる。

(確かにこの隙に首を落とせれば一瞬で片が付く。……落とせれば、の話だけど。瑠璃さんにそれが出来るだけの腕が……まだないようだけど)

がちやつ、と次の弾を装填するとラギアクルスの後頭部を狙って撃ち出してみる。背後から頭を撃たれ、ラギアクルスの視線が十兵衛へと向けられる。雷弾を撃って反撃しようとしたようだが、その口にエネルギーは集まらない。

その隙だらけのラギアクルスへと閃光弾を投げつけ、視界を奪って動けなくさせてやる。とことん動きを封じ込め、自分達のペースへと持ち込む。その攻撃が危険ならば、

攻撃させないまでのこと。

力が足りないならば搦め手を。

自分達の方が圧倒的に不利なのだからこういう手段をとっていくしかない。瑠璃達を見失ってしまったラギアクルスは首を動かし、噛みつき、尻尾を震わせて斬りかかってくる二人を振り払おうとしている。

しかし二人はまだしも、十兵衛からすれば意味のない事だ。銃撃をしていくだけなのだから近寄る必要はない。火炎弾で狙撃をしていたその時、何かの気配を感じ取って顔を上げる。

いや、気配というより魔力だろうか？

この孤島に……しかも近くに何か舞い降りてきたかのような、そんな雰囲気を感じ取った。

(……誰が来た？ ……さつき監視してきた誰か？)

骸の奥から視線を巡らせるも、居所を見つけ出す事などできない。

気になるところだが攻めの手を止めるわけにはいかない。火炎弾のベルトリンクを繋いだまま狙撃を続けていく。

(さつきと片をつけた方がいい、か。でもどうすれば……)

生物の急所を狙って攻撃する。それが一番早く相手を仕留める方法だ。しかし相手

はG級に認定されるラギアクルス。上位の個体以上に急所を守る硬い鱗が存在している。首を刎ねるにも技量が足らず、心臓部分も鱗に守られている。

妃竜砲【姫撃】では貫通弾はL V 1しか撃てない。貫いていく力は足りない。斬裂弾も撃てるが、しかしこれでも威力不足。となれば選択肢としては――

（瑠璃さん、茉莉さんの補助をして仕留める……それも一つの手。……ん、仕方ない……これをささずに終わらせる予定だったけど、もうだめだ。……少し本気を出すか）

ポーチの中に手を入れて強走薬グレートと怪力の丸薬を取り出し、両方飲んで更なるドーピングを。妃竜砲【姫撃】を手にしたままラギアクルスの側面から回り込むと、心臓を狙って斬裂弾を撃ち込む。

茉莉が突き入れた部分を狙って斬裂弾が食い込み、穴を開けようとするが、推測通り火力不足。しかしそれに反応してラギアクルスが見えない目で顔を上げて噛みついてくるが、その頬へと一発撃ち、素早く左胸へと接近。

チツプから撃ち出した火炎弾を握りしめると「発現・牙炎」と呟いてやれば、右手に火炎が纏われた。強く大地を踏みしめて握られた拳を左胸へと打ち放つ。

その構えから繰り出された炎の打突。それは茉莉が作った胸の傷に大きく軋みを作り、焼け焦げた鱗が弾け飛んで肉を一気に露出させる。それだけでなくその肉すらも焼き、脆くさせた。

「ガ、ハアツ……!? グ、グゴ……ッ」

それだけではない。十兵衛の拳から伝わった衝撃が内部へと一気にダメージを与えたらしい。だがそれだけで十兵衛の攻撃が終わったわけではなかった。

「――投影、鋼銃槍」

右手に十兵衛の気と魔力が集まり、一つの槍を形成した。先端がドライバーのように尖った太い槍……というより杭のようなものであり、その上には何かを取り付けるための金属が伸びている。それを妃竜砲〔姫撃〕の銃口へとセットし、杭はその下にくるようになっていた。

「瑠璃さん、茉莉さん！」

「え、あ、なに……?」

「おいらが道を作るツス。お二人はとどめの一撃をお願いするツス！」

「道、とどめ……わかりました。ありがとうございます」

十兵衛の言葉に茉莉は彼があれを使ってやる事を理解した。茉莉でも瑠璃でも切り開けなかった道を、彼は強引に突破するらしい。あれがどういう代物かはよくわからないが、あの形状などを見る限り突破するには十分な代物だとわかる。

それをどうやって突破というアクションを引き起こすのか、と思いきや、固定されたそれが銃口に金属が入り込む。

続けて懐から一つの弾を取り出し、装填。

杭をさつきぶち抜いた部分に合わせると、引き金を引く。

刹那、妃竜砲【姫撃】から爆発音が響き、その爆風によって勢いよく杭が撃ち出される。凄まじい反動が妃竜砲【姫撃】から十兵衛の両腕へとかかるが、彼は平気な顔で大地と一体になったかのように不動。

ガシャン、と撃ち出された杭が引き戻されると、その先端にはべつとりと血が付着していた。そしてその穿った杭はというと、ラギアクルスの胸に大穴を開けている。

とめどなく血が流れ落ちているが、しかし奴は動けていた。

荒い息をついているが左胸の奥に存在している心臓はまだ鼓動を刻んでいる。そして今の一撃によって妃竜砲【姫撃】は少し厳しい反動によってもう一撃は撃てない。この技術はまだまだ発展途上であり、あの家の秘匿技術だ。

よもやこれ誰かの前で撃つ日が来るとは思いもしなかったが、仕方あるまい。

「では、よろしく頼むッス！」

二人へと叫びながら十兵衛は後ろへと下がる。

空いた部分を埋めるように、茉莉が高めた気をトキシックジャベリンに纏わせて構っていた。同様に火竜剣【火燐】にも気を纏わせた瑠璃が彼女の隣に並ぶ。

そんな二人にラギアクルスは胸から伝わる激痛に歯噛みして背電殻へと力を溜め始



めた。命の危険が迫ったせいとか、疲労状態を上塗りするように奴は怒り状態へと移行していた。

そうして溜めた力を解放する。ラギアクルスの周囲に響き渡る連続して弾ける音と展開される雷撃の檻。こうすれば瑠璃達の行動を制限できるとラギアクルスはわかっていたのだろう。

だが、瑠璃と茉莉は……退く事はしなかった。

いや、一度は退いた。

しかしこれを決めれば終わる、と二人は覚悟を決めてそれを解き放つべく動く。

十兵衛が作り上げた道を無駄にするわけにはいかない。不規則に大きく弾ける雷の塊や踊るように檻を形成する雷を避け、二人は構えた武器に纏われた気をラギアクルスの胸へと撃ち出す。

それは気刃ではなく気槍。対象を貫くために撃ち出された矢の如くラギアクルスへと吸い込まれるように向かっていく。その一撃を以ってして心臓を貫こうという意図が込められた一撃は、十兵衛が空けた穴を問題なく貫通し、届いた。

あれだけ彼女らの一撃を受け止め続けていたラギアクルスの強固な鱗と肉が破壊されては、彼女らの攻撃を防ぎきる事は出来なかった。生き物にとつての最大の急所、心臓を破壊された事により、ラギアクルスは目を見開いて動きを止めてしまう。

だがそれでもラギアクルスは動こうとした。

認めるわけにはいかなかったのだ。

よもやこの自分が、このような未熟者たちに討たれる事があつてなるものか、とラギアクルスは胸と口から血を漏らしながら抵抗する。

背電殻から力を抽出し、撃ち出そうとしたのだが、もうその気力も失われつつある。一步、また一步と踏み出したのだが、やがて力が抜けてうつぶせになり首を横たわってしまった。

討伐、した。

荒い息をつきながら瑠璃と茉莉は倒れ伏せるラギアクルスを見つめる。

まだ実感がわかない。自分達は本当にあのラギアクルスを討伐できたのだろうか？危険は多かった。一歩間違えればいつ殺されてもおかしくない状態だった。

ラギアクルスの行動を封じ込め、そこを叩くという手段を多用しなければ戦えない程に。

しかし、こうしてラギアクルスは命の火を消してしまっている。

勝利、出来たのだ。

一つ上の領域であるG級に属するモンスターを、自分達は討伐できたのだ。

その実感がようやく心に広がっていき、二人は大きく息を吐いて膝をつく。そんな二

人を見つめ、妃童砲〔姫撃〕を腰へと戻す。銃口についていたあの杭は最初から存在していなかったかのように消えてなくなっている。彼が「投影」と呟いていたことから、あれは投影魔法によって作られた物体。

投影魔法はそのほぼ全てが魔力によって作られた存在であり、複製の魔法と同じく世界に長く現界し続ける事はない。複製は速射機能によって日の目を浴びるが、投影は今も変わらず役立たずの魔法とされている。数秒、数分程度存在するとあとは粒子となって消えていく、偽物。しかし存在し続けている間は確かな物体としてその力を発揮する。

まさか十兵衛が投影魔法を行使できるとは、と驚く。色々謎が多い人物だ。

そんな彼は骸の奥から辺りを見回している。先ほど感じた妙なものを持つ誰かを探しているのだがそれには出さない。

（気のせい？ ……あの子じゃないのは確かだけど……となればあの子の部下？ あるいはまた別の家の誰かか、それとも……第三の何者か？ ……気をつけた方がいいか）

警戒心を消さないまま二人の下へと近づき、三人はラギアクルスの素材を剥ぎ取っていく事にする。G級に分類される個体だ。それから得られる素材によって作られる武器は素晴らしい力を持つ事だろう。

それに防具を一式揃えれば、発現するスキルが魅力的だったはず。

確か……覚醒、集中、弱点特攻、状態異常攻撃弱化だったか。その中でも覚醒は魅力的なスキルだろう。茉莉が所有しているブルークレーターも覚醒によつて氷属性が発現するはずだ、と十兵衛は思い返す。

危険なクエストだったが、それによつて得られるプラスは大きい。それにG級相手によく戦つた。この経験もまた彼女達にとつてプラスとなる。十兵衛はそれを小さく喜んだ。それと同時に、監視の目が「あの子」の手によるものか、そうでない誰かなのかも知れないという小さな可能性を危惧したが。

○

「……どう見る？」

「……んく、ふう……間違いなくあの家に連なる男、だね。あの格闘術も若干その気配が滲み出たし、なによりあの杭を使った。決定打だよ、あれは」

「ああ、あの音に金属杭の雰囲気……やつぱりあれは、パイルバンカー……つてゆう技術やったん？　せやったら間違いあらへんわ。萩原十兵衛ゆうんはあの家に連なつとる」

「そうか。それにしてもなんとという出会いよ。天と刹の故郷の者と遭遇しようとはな、これだから何が起こるかわからぬ。楽しきことよ」

パイルバンカー。

火薬の爆発力によって撃ち出された杭や槍によって対象を貫き穿つ武器。しかしこれはまだまだ技術を発展させつつある武器であり、この技術を保有しているのはヤマト国のある一家のみ。

言い換えればパイルバンカーを持っているのはその家に連なる者。他に持っている人物がいたならば、極秘に同じような技術を保有しているのか、あるいはその家から盗み出したのか。

十兵衛は——その気配からあの家に連なる者と断定。

しかしわからない。

パイルバンカーを持っているのはわかったが、この技術が確立されたのは確か、十数年前という近い年だ。その頃はまだ二人はヤマト国にいたが、彼を見かけた事はない。

一体彼はいつ、どこであれを入手したのだろうか？

二人がヤマト国を出た後なのだろうか？

だとしてもあの家が彼に技術を渡すとは考えにくい。そうするだけの理由を彼は持っているのだから。

「……斬り合いたいなあ……」

「やめておけ、天」

「なぜ？」

「斬り合うのは構わんが、それで殺られてはたまらん。萩原十兵衛、あれは我が戦力に加えるに十分な実力であろう」

「……五人目に迎え入れるん？ 彼を？」

少し驚いたように刹那が言う。ここに来てまた一人増やすとは、一体どういうつもりなのか。疑問に思うのも無理はない。それは天和も同じだった。せつかくおもしろそうな相手と出会ったというのに仲間に加えるというならば殺し合えないではないか、というような表情をしている。

「あの者が本当にその家に連なるならば、貴様らと同じヤマト国の出身にして、ヤマト国に対して敵対する理由があろう。いや、正しくはあの家に敵対する理由、か。そこを突けば、もしかすると我らに降るであろうよ」

「……そううまくいく？」

「降らないならそれでも構わぬ。だが、それを持ちかけるまでに萩原十兵衛に関して色々調べてみる価値はあろう。刹、貴様が少しあの者に張り付いておけ。天は過去を洗っておけ」

「……本気やな。まあ、ええやろ。風がおらへんし、四人目のパーティとしては、あの実力なら申し分ないやろな。他に何か隠しとる気いするし、な」

刹那もまた十兵衛が何を隠しているのか気になっていた。この機会に十兵衛がどういふ人物なのか知る事が出来るだろう。……異を唱える事はない。

天和も酒を呑みながら何かを考え続けているようだったが、やがて「……わかった」と返事をした。

「これから、面白くなりそうだな。モンスターの事に加えて新たな戦力。……くく、心が躍るわ」

どこか楽しそうな笑みを浮かべてプルートの宙へと静かに浮かび上がっていく。それに続くように天和と刹那も浮かび上がり、元いた孤島へと帰っていった。

こうして、孤島の戦いは終わりを迎える。

波乱はあったが、死者が出なかつただけでも良しとしよう。だが十兵衛が本当にどんなハンターだったのか、瑠璃達にとつてもプルート達にとつても興味を抱かせるクエストだったこともある。

帰つたらそれとなく聞いてみようか、と考える二人だった。

## 55話

信号弾を撃ちあげ、クエスト達成の旨を伝えると、近くの島のギルド支部から連絡が言った港から船がやってくる。といっても一、二時間は待たされたが、それも仕方のない事だろう。

やってきたギルドの者にラギアクルスがG級個体であったことを伝え、上位個体の死体の件についても報告すると、ギルドの者らは驚きに目を見開いた。当然の反応だと思われたが、一人の人物が「またか……」と声を漏らしていた。

それに首を傾げ、茉莉が「よくあるんですか？」と訊いてみる。

「……ええ。最近、こういうケースが報告されているのですよ。大抵はリタイアして逃げるのですが、孤島のクエストの場合逃げられずに船を沈められたことがあります」  
やはり逃げられなければ船ごと襲われてしまったという事か。もしかすると自分達もリタイアすればそのケースの一つに名を連ねてしまったのかもしれない。

何はともあれ素材も回収し、死体も他のギルドの船が持つていくことになる。続けて別の孤島へと向かってプルート達も船に乗せ、一行は一路タンジアの港へと戻ってい



く。

到着した時にはもう日も暮れてしまい、しかし夜が訪れれば酒場は活気に満ちてくる。そんな中へと二組のハンターは訪れ、報告する。それぞれ相手にしたのがG級個体である事を報告すると、ギルドは彼らの無事を祝い、不手際があつたことを謝罪し、報酬を上乗せしてくれた。

その報告を耳にした十兵衛は「向こうもG級個体だつたようツスね」と呟いた。するとどういふわけか刹那が何も映さぬ閉じた瞳で十兵衛へと視線を向けてくる。

それに続くようにプルートも視線を向けて来たかと思うと、小さく笑みを浮かべて「そちらも色々あつたようだな？ どうだ？ 我らと夕餉を共にしないか？」と誘ってくる。

夕餉……つまりは夕食という事か。断る理由はない、だろうしとりあえず受けてみる事にする。

大きな机を囲み、それぞれ三人ずつで着席してウエイトレスに注文を。

そうして待っている間何か話をしようか、と窺ってみるが、こうして対面するだけでもプルート達の気迫というものが段違いだという事がわかる。プルート然り天和然り……刹那も穏やかではあるが、内面には強い気を感じられる。

すぐに食前酒として運ばれてきた酒だが、天和の前にはやはりというべきか三本の瓶

が並べられ、つまみが五皿も運ばれてきている。それをぱくつく天和だが、その消費量がとんでもない。

「……こんな時まで貴様は変わらんな」

「んくんく……なぜ変えなきやならないの？　これが私。変えるつもりないし……ぷはあ、うまうま」

少しだけ楽しそうな雰囲気の変化。食事こそ彼女にとっての一番の楽しみなのだろうか、と思わせるような姿だった。それに慣れてしまっているのか、プルートの注意こそしたものの、やれやれと首を振って「すまぬな。これが天というもの、引いてやらんでくれ」と小さく頭を下げる。

「あ、や……驚きはしたけど、そんなことしないわよ」

「ええ。私達は気にしませんよ、天王寺さん」

「感謝する」

もう一度頭を下げると、軽く瑠璃達を見回し、最後に十兵衛へと視線を合わせる。骸の奥にある瞳と視線が交差し、しかし数秒でそれは外される。なんだ、あの視線は、と十兵衛が首を傾げたところで、別の席に着いているハンター達の話が聞こえてきた。

「G級クラスの個体が増えてきているようじゃないか」

「一体何が起きているんだろうな？　しかもモガ方面じゃイビルジョーが移動してきて

いるって話だ」

「ああ、イビルも移動してきてたな。南下しているんだって？」

「厳戒態勢をとれって通達がされているそうさ。本当に、モンスター達が活性化しているんだらうな……どうなっているのやら」

そんな話が聞こえてくると否応なく表情が引き締まってしまふ。

イビルジョーが南下している。そのイビルジョーというのは先日遭遇したあのイビルジョーだろうか。それが南下してきている。それもモガ方面に。そこから西へと移動してくれば、このタンジアに到着してしまう。

港周辺のクエストを受けた際に遭遇してしまう可能性があるだろう。そうならば自分達には太刀打ちできない。いやG級ラギアクルスを討伐したのだから、とか、そういう背景があったとしても奴だけは今は無理。

生物的な本能が奴を拒否し、臆してしまう。

だから遭遇しない事を祈るしかない。

「お待たせしました」

そこで注文した料理が運ばれてくる。その中でもやはりというべきか天和の前にどんどん、と皿が置かれていくのだが……どう見ても二、三人前のラインナップ。食前酒やつまみはいいとしてメインの料理がそこまで並べられては、見ているだけで腹が膨れ

てきそうな量が目の前にある。

だが気にせず天和が食べ進めて酒を傾けるのを見て、プルトらと瑠璃らも手を合わせて夕食を食べ進めていく。その上で少し話をしてみる事になった。

ハンターとして色々各地を回り、どのような戦いをしてきたのか。

その経験からくる今回をはじめとする各地の異変がなんなのか。

「陸だけでなく海も奇妙な空気となつていているようだな。我らからすればどうという事はないが、他のハンター達からすれば厳しい状況であろうな。……貴様らは切り抜けたようだが、どのような戦いをしたのだ？」

「……あたし達は、何も……。ほとんど十兵衛が好機を作ってくれたわ」

「へえ、萩原はんが？ んん、確かに出来るように見えますなあ」

「いえ……おいらなんてまだまだツスよ」

謙遜するように首を振る十兵衛だが、彼でまだまだと言われたら瑠璃と茉莉はそれ以上はまだまだ、という事になる。謙遜も過ぎればとんでもない棘となるというもの。瑠璃が何か言おうとする前に茉莉がそつと手で止め、

「十兵衛さん。謙遜する事はないですよ。あなたは実力のあるハンターです。それは私達がしかと見ていますし、実感しました。だからそう自分を卑下しないでください」

「……茉莉さん」

「あなたが控えめな人だ、というのとはわかってはいますが、控えめ過ぎるのは美德ではないですよ？」 時には胸を張り、褒められたままに受け入れるのも大事です」

「……はい」

肩を落としてぺこりとすまなそうに頭を下げる十兵衛。さて注意が入ったところで刹那がもう一度「萩原はんは実力者ってことでよろしいん？」と首を傾げながら問いかける。

「そうツスね……G級に片足つつこんでいるツスから、実力者っていえるんじゃないツスか？」

「……へえ、G級？」

その言葉に天和が料理を咀嚼しながら反応した。興味深そうな視線が十兵衛へと向けられている。彼女としては十兵衛が実力者だという事は歓迎できること。強者ならば戦ってみたという戦士ならではの感情がうずいている。

ある意味恋い焦がれる感情に近いが、その表情はただ食事を楽しんでいるという色によつて誤魔化されている。

「おいらから見た限りでは……あなた方もG級じゃないかって見えるんすが」

「ほう？ わかるか。確かに我らはG級だ。G級相手でも戦えるだけの実力はある。だが、そのG級クラスのモンスターが少ないが故に、このとおり上位ハンター主としてい

る。……が、最近はどうやらG級クラスが現れ出しているからな、G級ハンターとして活動する時が来たようだ。……くく、G級を相手にするのは久々よ」

どこか楽しげな雰囲気伝わってくる。どうやら彼もまた強者との戦いを好む性質なのだろう、と十兵衛は分析した。……というよりああして黙々と大量の料理を消費している天和もまたその気質を感じる。

まともなのは見た目通り穏やかさを感じさせる刹那ぐらいなものだろうか。しかし気のせいかな、彼女の気がずっと隠されてはいるものの十兵衛へと向けられている、というのが何となくわかる。

「それにしても……この先、どう転ぶかわからぬな。いつどこでG級が現れるのか、そこを留意しておかねばそこのハンターでは命が幾つあっても足らぬだろうよ」

「……でしょうね。私達も次もうまくいく保証はないでしょうね」

「だが、生き残るためには力が必要。結局は己を磨き上げるしかあるまい。そのための狩り、経験、そして己を守るための装備。才能があつたとしても修練して高めた力が必要ならば最終的には無意味。それにどれだけ高めた力があるうとも、強大な敵に太刀打ちできなければ、ただ喰われ、死ぬだけなのだからな。それは真に無念極まりない最期を迎えることになろうて」

どこか影がかかったかのような表情でプルートの言う。その瞳はどこか遠くを見て

いるようで、今語った言葉もなにか思うところがあるような、そんな雰囲気だった。

少し気になったが、プルートの小さく首を振り、「いや、すまぬ。暗い話は夕餉を不味くさせる。この話は終わらせるとしようか」と話を打ち切った。

それからは他愛もない話題で話をしつつ、夕食を進めていった。

食事を終わればそれぞれ分かれて宿へと向かっていくことになった。

その途中、商店街へと向かい、鍛冶屋を訪れて今回のクエストで入手したG級ラギアクルスの素材を使って作られる武器を確認する。だがやはり浮かぶのは防具を作り、身を守るという事。

しかし得られた素材では一人分の一式を揃えることだった。そしてスキルの面から考えるに、茉莉の分を作り上げるという事になった。寸法を測り、入手した素材を預けて制作を依頼。こうして茉莉はまだ正式なG級ハンターではないが、G級防具を入手する事となった。

これも最近出現が確認されたG級クラスのモンスターの影響により、上位とG級の垣根がモンスター達によって無理やり破壊された事が関係している。公式狩猟試験云々の問題をパスし、もし遭遇して討伐するようなことがあれば、その素材を使って武器を作る事を認める、とギルドから通達された。

これによって防具を作り、身を守るならばそれも良し。そうして戦力が急増し、この

事態を解決に向かわせるならば、試験をパスしてG級クエストを受注しても良しとの旨が宣告されたのである。

ギルド側もこの異常事態を前に悠長に調査をするだけでは遅いと判断したようだ。

彼らも六年前の事件の事を思い出したのだ。六年前もまた不規則に現れる狂化竜に對して手をこまねいて事態を悪化させ、犠牲者を多く出してしまったという現実がある。対応できる戦力をギルドは求めている。

もちろんハンターも命が惜しいならばそれも良し。勝てないと判断したならば逃亡してもいい。だがその中で奇跡的にもG級モンスターを討伐できたならば、それによつて壁を越えて成長するならばそれも一つの成長の証。G級ハンター入りを認める特例を出す。

しかしただのまぐれならば、まだ上位ハンターのまま、という曖昧なもの。

瑠璃と茉莉もそのケースにあてはめ、彼女らの場合はまだ正式なG級ハンター入りは認められない。G級ハンターである十兵衛の支援があつてこそその勝利だと彼女らもわかっているため、それを受けなかつたのだ。

自分達はまだまだ足りない。

もつと経験を、もつと修練を。

そう考えていると、十兵衛は何か気づいたように顔を上げ、そして少し考えるよう



なぞぶりを見せる。

「……あの」

「ん？ どうかしましたか？」

「おいら、少し寄るところがあつたツス。先に戻っててくださいツス」

「そう？ じゃあ、お疲れ様」

「はい、お疲れ様ツス」

ペこり、と頭を下げると十兵衛は道を外れて階段を上り、別の道へと向かつていった。それを見送ると二人は宿へと続く道を歩いていく。その途中、露天の一角にあるトレード屋が目についた。

「ここはときどき掘り出し物が混ざっている時がある。

「らっしやい。何をお求めで？」

店へと近づき、並べられている物品を眺めていく。秘葉や落とし穴などの道具や滅龍弾などの普通の店には並ばない弾、モンスターの素材や鉱石などの素材といった様々なものが並んでいる。

その中で茉莉が目を引いたのは、

「……………これは」

一見すれば何の変哲もない板……というより破片だろうか。古さを感じさせるよう

な破片である。普通の人が見ればがらくたにしか見えないそれは、茉莉が前に読んだ本に載っている素材の一つだった。

「これをください」

「……ほう、嬢ちゃん、これが何なのか知ってるのかい？」

「ええ。長い太古の破片、ですね？　そしてこちらはさびた破片。立派な素材です」

「へへ……いいね。大抵の奴らはこれらがなんなのか知らずに去っていくが、これがないのか気づいたハンターは久しぶりだ。で、トレードするのかい？」

「ええ。これらの破片、トレードしましょう」

そうして茉莉はさびた破片、大きな太古の破片、細い太古の破片、長い太古の破片をそれぞれ複数を所有している素材とトレードした。これらから作られる防具はアーティアXシリーズ。

G級の防具だ。

しかしこれらだけで作られるわけではなく、希少な功績も合わせて使用する事で作れる。しかも頭からの一式ではなく、胴、腕、脚という三点セットなのも特徴。なのでスキルの組み合わせが少し調整しなければならぬ面もある。

三つ付けて発現するスキルはガード強化と覚醒。茉莉向けではあるが、しかし先ほどラギアXシリーズを注文したばかり。瑠璃に譲つてもいいが、瑠璃は瑠璃でスキル調整

しなければならぬだろう。なにせリオソウルシリーズとはスキルが被っていないのだから。

防御力を優先するならば合わなくともつけるべきだろうが、しかし素材が足りないという面もある。挙げるならばピュアクリスタルという素材だ。

少し先へと見送るしかない。しかしいい買い物をしたというのは確か。

二人はそれから話をしながら宿へと戻っていった。そして先に風呂を頂き、十兵衛が帰ってくるのを待つのだった。

○

(さて、さつきこつちに来とつたはずやけど……)

夜の港町を歩きながら刹那は静かに歩いている。空には星空が広がり、街は建物の灯りと点々とあるランプの灯りによって照らされるだけだが、目の見えない彼女からすればその灯は関係ない。

周りの人の動きを感じとりながら迷わない足取りで一つの気配を辿って歩いていた。

彼女はプルートと天和と離れ、十兵衛の尾行をしている。しかし彼はあの二人と離れてからどういうわけか気配を消して一息で街を駆け抜けていった。

その動きは素人のものじゃない。そう言う事に慣れているかのような動きだった。しかし刹那の気配感知は常人のそれを越えている。意識を集中させて心眼を広げ、そうして僅かにとらえた彼の気配を再び辿って歩き出す。

そうすると、街から少し離れた所にある公園へとやってくるようになった。夜という事もあつて人気はなく、柵の向こうには海と灯台が見える。

十兵衛はというと、公園にある林の陰に立っていた。そつと近づけば誰かと話をしてるかのようだった。

「……はい、はい。わかり……。……を、…………ます」

(……妙な。彼以外の人の気配があらへん。しかもこの反応……使い魔やな)

魔力の気配を探るとそう判断できた。つまり十兵衛は誰かが放った使い魔を通じて話をしてる。

……誰と？

しかも途切れ途切れに聞こえてくる言葉は敬語。いや、十兵衛はいつも敬語に近い口調だが、あれはまるで目上の相手に対するものだった。

「……ぶですよ。少し……たですが、死には……。……はい、すみません。余計な事でしたね。……はい、承知しました。では、これで……。はい。……無理は、しないようにするツスよ？ ……っ」

最後に何か怒鳴られたかのような反応を見せたとき、使い魔は粒子となって消えた。その事に小さく溜息をついた十兵衛は振り返り、歩きだす。だが数歩、歩いたところで彼は何かに気づいたかのように立ち止まり、軽く辺りを見回した。

「……誰かいるツスね？」

「……………よう気いついたなあ。びつくりや」

十兵衛がそうであるように刹那もまた十分に気配を消して佇んでいたはずだ。しかし彼はそれに気づいてしまった。やはりただものではない。プルートや天和が気になるのも頷ける。

そして、刹那もまた十兵衛に対して興味を抱き始めていた。

「どうかしたツスカ、壬生さん？ ……こんなところで」

「ちよつとした散歩。ここは公園、散歩コースとしてはええ場所やろう？ 萩原はんこ

そどないしたん？」

「おいらも……………ちよつとした散歩ツスよ」

「ふうん……………なんか、誰かと話とるような気いしたけど、ウチの気のせい？」

「はは、おかしなことを言うツスね。……………ここにはおいらしかいないツスよ」

嘘は言っていない。この公園にいる人物は、ここで相對しているこの二人だけだ。

首を傾げながらじつと十兵衛の様子を探ってみる刹那ではあるが、十兵衛はそんな霧

困気を察して戸惑うような雰囲気を見せ始める。後ろめたいことがある……という戸惑いじゃない。あれは、人見知りの戸惑いだ。

彼女の探るような雰囲気を察して彼は、人見知りの部分を見せ始めているのだ。

「な、なんスか？ おいら、なんか……したツスか？」

「……いや、なんも。ただの散歩やつたら……うん、ウチと一緒に歩かへん？」

「え？ 壬生さんと、ツスか……？」

「いや？ 別になんもせえへんよ？ それに、よくよく考えたらこんな時間に女性一人歩くってゆうんは危険やん？ ウチを守ってくれへん？」

「……いや、壬生さんほどの実力者ならその必要——」

「なんかゆうた？」

「——なんもないツス。不肖、この萩原十兵衛、お供するツス」

ペこり、と頭を下げると十兵衛は刹那の後ろにつく。宿がどこにあるか知らないの  
で、刹那が先導する形で移動していくことになる。

その際、無言にならぬよう刹那が話題をふって話しかけてきたので、十兵衛も途切れ途切れそれに応えつつ会話を進めていく。その中で刹那は不意に十兵衛の過去について触れてきた。

「結構長くハンターやってるんやね」

「そう……ツスね。もうかれこれ五十年になるツス」

海沿いの道を歩けば、穏やかな波の音が耳をくすぐり、穏やかな潮風が頬を撫でていく。だが現実はこの穏やかな海のどこかで危険なモンスターが存在しているのだ。東の間の休息。しかしその休息の中で、この二人は東の間の共をする。

悪くない雰囲気だった。……十兵衛がまだ刹那に慣れず、どこかおどおどするような様子ではあるが。

「その傷もハンター業で負ったん？」

「……いえ、これはちよつとした事故ツス。……火事に見舞われて……負つたものツス」  
見えていない彼女がなぜそれを知っているのかといえば、夕食の際にもそのスカルSヘッドを取らなかつたことを訊かれて答えたものだ。十兵衛は火傷があるから取らな  
いと答え、それから深く訊かれなかつたが、刹那は話題の一つとして訊いてみたらしい。

十兵衛の答えに「ああ、そら災難やつたな……」と何度か頷いて言う。

「でも火事、か。リオレウスにでも襲われたん？」

「………いえ、わからないツス」

「わからん？」

「放火なのか、……火の元不注意なのか……今でも不明なままツスね」

「…………ふうん。放火やったらほんまに災難以外のなにものやあらへんな」  
「そう、ツスね…………」

不意に刹那が立ち止り、何も映さぬ瞳を開いた。閉じられた瞼の奥には、深淵のような暗い闇のような瞳があった。光がなく、虚空を見つめるようなその瞳はじつと十兵衛を見据えている。

そつと指を伸ばせば、まるで慈しむような手つきで十兵衛の骸に触れる。その行動に十兵衛は驚きと戸惑いを隠せず、びくつきながら刹那とその雪のような白い指を見つめる。

しかし刹那は気に留めずただ無言で骸に指を滑らせ、「…………怨嗟」と一言呟く。

「えっ？」

「…………ウチの目は何も映さへん。ウチが世界を見るのはこの瞳やない。ただ自然と高まった気を探るこの心の目。人が美しい、醜いと呼ぶものはウチには何の意味ももたらさへん。ウチにはそれが見えへんからなあ。せやから、萩原はん。あんさんが隠したいこの“醜い”傷もウチには意味はあらへん」

「……………」

「そしてウチが感じ取るこの傷には…………怨嗟が感じられる。…………あんさんを焼いた炎に含まれた感情やろうなあ。あんさん、昔、なにやとつたん？」



「……何も、ないツスよ？ おいらはただのハンターツス。そんな、誰かに恨まれるようなこと、やった覚えなんて……何も無いツス」

戸惑いながら十兵衛は途切れ途切れに答える。そんな十兵衛を至近距離で見つめながら刹那は小首を傾げる。刹那は十兵衛よりも少し身長が高いため、少しだけ見下ろしながら首を傾げていることになる。

東方美人と呼べるだけの整った顔付きをした女性にこうして近くまで寄られてしまえば戸惑いも大きくなる。元々彼は初対面の女性に慣れていない。それもこの骸の仮面をつけているとか、色々な原因があるが、刹那にはそれが通用していないのは明らか。しかも彼女が語る言葉は……十兵衛の心をさらに揺さぶっていた。

「……となれば、あんさんの行動やなくて、あんさんの存在が怨嗟の原因やろうな？」

「……………どういう、意味ツスか？」

「んん？ それ、ウチがゆうてもええん？」

「……………」

その口ぶりからして刹那は気づいているのだらうか、と十兵衛は感じ取る。彼女の心眼の高さ、感知能力の高さからして桁外れ。となれば自分の種族も気づかれているのだらうか、と思ってしまう。

だがそれを口には出さない。

「世の中、そういう種族の存在を許さへんのは多いしなあ。ウチの故郷、ヤマト国にもそういう輩、多いし」

「……っ、ヤマト国ツスカ?」

「ん、ヤマト国。ウチ、ヤマト国出身なんよ」

一瞬ではあつたが彼はヤマト国に反応したようだ。それを隠すようにしたようだが、刹那はそれを見逃さなかつた。

「特に現在の申子の代表はやばいらしいわ。魔族の存在を許さず、出会えば笑顔で殺すって話を聞くくらいやばいつてなあ」

「……そう、ツスカ」

「せや。そんな過激派がいる世の中。ウチはそういう人の負の感情には結構敏感でなあ、萩原はんのこの傷に残る僅かな色も何となくは感じ取れるんよ。……もし、これがそういう輩に刻まれたんなら、ほんまに……災難やったな」

「……………いえ。もう、昔のことツスカから。壬生さんが気にする事は……なにもないツス」

そつと刹那から距離を取るように後ろに下がる。離れていく柔らかく白い指と相変わらず何も映さない漆黒の瞳が少しずれて十兵衛を見つめている刹那。一体彼女はどいういうつもりなのだろうか、と僅かな警戒を持つが、刹那はくすり、と笑つて「少し、踏

みこみすぎたな。ほんま、すんませんなあ」とたおやかに頭を下げてきた。

それに「いえ、おいらは……気にしてないツスから。頭を上げてくださいツス」と慌てて止めていく。

「……じゃあ、行きましょか」

と、刹那が歩き出す。それに十兵衛が続き、そつと刹那の背中を見つめながら十兵衛は先ほどの会話を思い返していた。

(壬生、刹那……いや、これは……偽名。そしてヤマト国出身は真実。なるほど、彼女は……)

頭の中によぎる一人の人物。

同じ盲目にして名が知られている一人の魔法使い。彼女もまた衛宮家に指導されて剣術を習っていたはずだ。『あの子』から聞かされた情報を自分なりに集めて、ヤマト国で名が挙がる戦士の事は把握している。

見た目が異なっているがこれくらい変化でどうにでもなる。

(桐生、雪菜……どういうつもり、なんだ？ おいらの事を探っているのか？ まさか、この血統について気づいた？ だとすると……彼の刺客？ またおいらを殺しに来たか？)

思い起こされる過去の記憶。

燃え盛る炎に包まれ、体を焼かれていく記憶。

明らかな悪意を持って自分を殺しに来た彼の影が思い出されていく。

『死ぬがいい！ 魔族の血は滅びる定めにあるのです！ 道を外れた血統など……穢れた混ざりものなど、存在してはならないのです！ この私が直々に黄泉路へと送つてあげましょう！ はあああつはつはつはハハハハアアアッ!!』

穢れた混ざりもの。彼はそう言った。

なるほど、混ざりもの、か。

確かに自分は混ざりものだ。かの家に連なる者に混ざりものの子孫が存在する事など、彼にとつては許しがたいのだろう。別の家の人間の癖にわざわざ辺境までしゃしゃり出て殺しに来た。どこから嗅ぎつけたのか自分の居所をつきとめて、関係のない人達を巻き込んで。

——噂に違わぬ、クズ野郎だ。

(いや、刺客なら公園の時点でおいらを殺しているか。それに彼ならまた自分から殺しに来るだろう。……じゃあ、この桐生さんはどういうつもりでおいらに近づいてきた？ やっぱり、さっきの話を聞かれていたんだらうか……)

だとすると少しマズイ、かもしれないか。

隠し通せるならば隠し通すしかない。自分の事は知られてはならない。あの技術も

秘匿情報だが戦いを切り抜けるために使用してしまった。しかし秘匿情報故に知っている者は限られている。瑠璃達から訊かれてしまったが適当にはぐらかしてきたし、何とかなる……と信じたい。

知られるわけにはいかない。自分の事も、彼女達の事も。

知らればまた消される。そうなれば繋がっている彼女達にも迷惑がかかる。いや、それだけじゃない。彼女達も彼の悪意によつて消される。彼ならば迷いなく行使するだろう。

(……厳しい状況だな、これは……。でも切り抜けないと。ここまで世話になつてしまったんだ。せめて最悪だけは避けないと)

様々な事が頭をよぎりながらも、十兵衛は刹那を宿まで送り届けていった。

○

森の中に星々が空へと舞い上がっていく。いや、星に見えるそれは無数の雷光虫が飛び去っていく光景だ。彼らは今の今まで自分達を守ってくれる存在の背中に集つていたのだが、それが死に絶えた事で我先にと逃げていつている。

そしてそれを殺した相手は軽く槍を回転させ、纏っているローブの中へと納めていっ

た。続けて短刀を取り出し、死体となったジンオウガへと近づいていく。しばらくして素材を剥ぎ取り、そうして現れた一つの碧い玉。これが雷狼竜の碧玉。彼の力の結晶であり、貴重な素材の一つだ。

「……これはいい一品だねえ。ん、アタリだ。嬉しいねえ……」

少し表情をほころばせながらぐつとそれを握りしめれば、碧玉に籠められている雷の力が武へと注がれていく。ジンオウガの力の結晶だけあり、これに籠められているのはまさにジンオウガの魂と言い換えてもいい程のもの。

武は力を得るだけでなく、この魂までも自分の中へと注いでいくのだ。そうする事によつて草薙の一族はあのオーラを行使する種を得る。しばらくして十分に力を得た武は一息つき、ローブから一振りの剣を取り出す。

鞘に収められているそれは一見すると古い剣のように見えるが、これこそが草薙の里に収められていた宝剣。

碧玉をその柄へと近づけると、淡く碧玉が光つて柄へと吸い込まれていき、消えていった。そうしてぎゅつと両手で握りしめ、先ほど得たジンオウガの力を一気に注いでいく。すると鞘の中にある刀身がバチバチと音を立てて雷の力を放ち始める。

だが足りない。

これではまだ足りない。

永い眠りについていては目を覚ます気配はなかった。

「上位じゃやっぱり足りない、か。となればG級を得るしかないか。……悲しいねえ、実に悲しい。色々かき集めてきたけど、足りないって言うのかい？ どれだけ貪欲なのかなこいつは、小憎たらしいねえ……」

今まで狩ってきた竜の力の源を得ては注いできたが、この宝剣は力を食っては眠り続けるのみ。向こうの天和の方も眠りから覚めてくれないらしいが、さすがといったところか。

天和がそうであるように、武もまた各地を回って多くの竜を狩る理由はこの剣の眠りを覚ますため。天和が血を求めるに對して、武は竜の力を求めた。紅玉などの玉や力の象徴である爪や角。これらをかき集めて己の力とし、それを練り上げて剣へと注ぐ。

そうする事でこの剣は眠りから覚めるはず……だった。  
だが目覚めない。

上位の素材では足りないようだ。ならば、最近現れ出したG級を狩るしかあるまい。しかしG級ともなれば自分一人では難しい。これは天王寺冥夜と合流するかな、と考えたところで、背後に人の気配を感じ取った。

「……なにか用ですかい？」

「いやなに、ちよつとしたお知らせ、つてところさ」

わざわざ武に気づかれるように気配を曝け出し、現れたのは上から下まで漆黒に染め上げ、顔の左半分を骸の仮面で隠した女性、ヘルだった。彼女はそつと武へと近づくと腕を組みながら「合流するっていうなら、やめておいた方がいいよ」と彼を止める。

「どうやら彼らの近くに、あの双子たちがいるようですね。顔、割れてるだろ？ 合流したら、知られるよ？ そうなると……色々めんどろじやないか。だから、やめておけ」

「……………悲しいねえ。となると港には行けない、か」

「ついでに言えば、モガにお前の姉もいる。リターンマッチをするってんなら、あたしは止めないけど、今はまだ、その時、じやないだろう？」

相変わらず独特の言葉の区切りで彼女はそう語りかける。無意識に腰に差している漆黒の短刀を取り出して弄っている。それを見つめながら武は小さく頷き、「確かに、まだその時じやないなあ……」と溜息をついた。

「じゃあ、大砂漠の方に行くか……悲しいねえ」

「そうするといい。お前達にはまだまだ動いて、もらわなくちゃあ困るんでね」

「そうですか。……でも、そろそろ教えてくれませんかねえ？ あんた、一体なにが目的なんですか？」

「さあ？ 別にお前がそれを気にする必要はないよ。あたしはただ陰に隠れ、ひっそりと、お前達が着々と目的を達成できるように、支援するのみ」



「……………」

そんな風にはぐらかされて気にするな、と言われて大人しくしている武ではなかった。素早く剣を抜いて気刃を放つが、ヘルは最小限の動きだけでそれを躲し、一瞬で武の懐まで潜り込みつつ低姿勢となり、回し蹴りとサマーソルトを組み合わせた片足の蹴り上げを放つ。

鮮やかで軽やか。瞬きにも等しい一瞬の時の中で、彼女は距離を詰めた上に蹴り上げていた。それを武は把握できなかった。気づけば胸を蹴り上げられ、宙に浮いていた。そして縦回転をし終えたヘルが落下してくる武の腹を蹴り飛ばし、何メートルも吹き飛ばした後に地面を転がっていく武を見つめ「血気盛んなのは結構。でも、喧嘩を売る相手は、選びましょうか？ あたし、その気になるとき、一瞬で殺してしまうんですよねえ……………」と手にしているのに使わなかった短刀に指をなぞらせて冷たい声での丁寧語で言った。

「ま、今回はちよつとした連絡だけなんでね。あたしはこれで消えるよ。…………せいぜい生き延びるんだね。途中退場ともなれば、お前も、お前の姉も…………未練たらたらだろう？」

「……………」

「…………ああ、その眠りを少しでも覚ましたっていうんなら、蛇竜でも斬つてくるとい

いさ。それも、いい個体のものを、ね。なにせその素材は、蛇竜のトップだしさ。大砂漠のあれもいいし、火山のあれでもいい。選ぶのは、お前さ。草薙の坊や」

冷笑を浮かべて彼女は闇の中へと消えていく。

それから少し後に地面に横たわっていた武は少し体を震わせながら起き上り、胸や腹をさすりながらヘルが立っていた場所を見つめる。

「……本当に、何が目的なのやら。それにしても……はあ、悲しいねえ……。あれじゃあ斬れないな。どうやったらあの境地へと辿り着けるのやら……」

ぶつぶつと呟きながら手にしている剣を鞘に戻し、ローブへとしまう。

そして南の空を見つめ、その先にあるモガ方面へと思いを馳せる。そこに姉、桐音がいるとの事だが、残念ながら今は会う気はない。大方自分の足取りを辿って追ってきたのだろうか、まだその時ではない。

もちろん本心ではまた殺し合いたいだが、再戦するにはまだ早い。

今はこの剣に関する事が一番の目的だ。力を取り戻すという明確な目的があるが、そのための素材は曖昧。雲をつかむかのように手当たり次第にいい個体を探しては狩り、力を注いでいくだけ。

……雲をつかむ、か。

(はは、この銘に違わない言葉だねえ)

雲をつかむというより、これは多くの雲がかかっている、という名前がかかっているのだが。まあ、それは置いておくとしよう。

剣をロープの中へとしまつて武は一路、西へと向かつて歩き出す。

向かう先はロツクラツク方面。大砂漠に向かうか、あるいは途中にある火山に向かうか。どちらに行こうか、と考えながら武は一人で旅をしていくのだった。

## 56話

次の日の朝、朝食を食べ終えた瑠璃の様子が少しおかしい事に茉莉は気づいていた。何かを考えているかのような、そんな様子だった。一度宿へと戻った後も瑠璃は椅子に座ったまま天井を見上げて顔をしかめ続けている。

十兵衛もそんな瑠璃を気にし、茉莉へと「どうかしたんスカ？」と瑠璃を示して訊いている。しかし茉莉もどうしたのだろうかと、疑問に思っているところだ。昨日の今日で何かあったとするならば、思い浮かぶのはプルートの事。

しかしそれに対して悩んでいる……というわけではないかもしれない。何となくではあるが双子である茉莉はそれが理由じゃない、という気がしていた。

こうして悩んでいるのを見ているだけでは何も進まない。

「瑠璃？ なにを悩んでいるんです？」

「ん……………よし！ 行かか！」

「おおっ……………!？」

少し驚いたような顔を見せる茉莉をよそに、瑠璃は勢いよく椅子から立ち上がり、部

屋へと向かっていく。がさごそと何か漁るような音をしたかと思うと、ロープを纏って部屋から出てくる。そしてその手には小さなラベルが貼られたモドリ玉が握られていた。

「……どこ行くんです？」

「ちよつとポツケに飛んでいくわ」

「……それはまた突然ですね。理由を聞いてみて？」

「姉さんに頼んで火竜剣を強化してもらうわ。このままじゃちよつと火力不足だろうし、海のモンスターは火属性に弱いやつが多いしね」

火属性だけでなく雷属性に弱いものも多いが、先日入手したジンオウガの素材は茉莉が使用し、ラギアクルスもまた茉莉が使用した。雷属性の武器……王刀ライキリや雷刀ジンライの制作も考えたが、見送ったのだ。

自分には火竜剣【火燐】があるし、雷属性の武器は茉莉が以前から考えていた一品だった。瑠璃は彼女へと譲ったと言ってもいい。しかし火竜剣【火燐】ではそろそろ限界が来てしまった事を瑠璃は考えたのだ。

G級ラギアクルス。

奴に対してなかなか決定打というか、ダメージを与えられなかった事が瑠璃は口惜しくてならなかった。自分の未熟さも相まって心を重くさせたのだ。

武器のせいになっているわけではない。いや、それは言い訳だろう。でも……それでも、自分に今出来る事があるならば、それは撫子へと火竜剣【火燐】の強化を依頼する事ではないか、と結論付けたのだ。

この部屋にあるランプへと別のモドリ玉のインプットをすると、瑠璃は茉莉と十兵衛へと振り返り、「じゃ、ちよつくら飛んでくるわね」と敬礼する。

「まあ、色々気になる事はありますが……撫子姉さんたちによりしく伝えてください」「ん。じゃ」

小さく頷きながら微笑を浮かべ、瑠璃はモドリ玉を叩きつける。緑色の煙に包まれた彼女の姿は消え去り、彼女は遠く離れたポツケ村へと転送されていった。それを見送った十兵衛は少し無言となり、しかし首を傾げて「撫子姉さん？」と呟く。

「ああ、撫子姉さんはうちの家の長女でして、鍛冶職人をしています」

「鍛冶職人、ツスカか。……っていうか魔族で三人姉妹ツスカ？ 珍しいツスね」

「そうですねー。……両親曰く、愛ゆえに、だそうです」

「……それはそれは、仲のよろしいご両親で……」

はは、と苦笑を浮かべる十兵衛。

瑠璃がいなくなってしまうので今日のところは休日とする事となる。茉莉は読書をし、十兵衛も軽くボウガンのメンテナンスをし、持っている弾のチェックをして時間

を潰す事になった。

一方、モドリ玉の転送によってポツケ村の酒場に飛んできた瑠璃。ランプの傍に現れた彼女の姿を見た受付嬢、シエリーは少し驚いた顔で「あら？　瑠璃じゃない。突然どうしたの？」と声を掛ける。

シエリー。彼女はこのポツケ村にあるギルド支部の中で一番の受付嬢であり、六年前……いや、それ以前からずっとここで働いている女性だ。瑠璃にとっては幼い頃からの知り合いであり、親しい人物である。

「ああ、ただいまシエリー。ちよつと姉さんに用があつてね。急いであるからごめんね」  
「そう。撫子さんなら今頃家にいると思うわ」

「ありがとう！」

挨拶もそこそこに瑠璃は酒場を飛び出して実家へと向かつて走っていく。今日も変わらず冷たい風が吹いており、ところどころ雪が積もっている。その中を駆け抜けければ彼女の姿に気づいた村人達が彼女へと声を掛けてくる。

「おお？　瑠璃ちゃんじゃないか。帰ったのかい？」

「ちよつとの間だけね！」

「相変わらず元気そうだねえ、瑠璃ちゃん！　安心したよ」

「どうもー！　それがあたしの取り柄の一つだし」

年配の人々が少し多いポツケ村。幼い頃からの顔見知りという事もあって、気さくに声を掛けてくれる。それに応えつつ家へと向かい、勢いよく扉を開けて中に入ると、

「ただいまー！ 撫子姉さんいる？」

と叫びながら奥へと進んでいく。すると少し物音を立てて奥から「ん？」と気の抜けた声が聞こえてきた。扉を開けて出てきたのは少し高い身長をし、ぼつぐんのプローションをシャツとジャージだけの服装をした女性。肩口を巻くようにタオルが掛けられており、軽くそれで汗を拭うと、瑠璃に気づくと「あれ？ 瑠璃ちゃんじゃない。どうしたの？」と小首を傾げる。

「ただいま、姉さん。ちよつと頼みたいことがあつて飛んできたんだけど」

「頼みたいこと？ なにかなく？」

「これなんだけど」

ローブから火竜剣〔火燐〕を取り出し、撫子へと手渡す。鞘から抜いて調子を確かめる撫子だったが、目的はこれの修理というわけではない。

「姉さん、これを強化する設計図はある？」

「あるよ？ ……ああ、もしかして強化？」

それに頷く瑠璃。続けて今東方で起きている出来事と、先日話を話すと撫子の目つきが少し変わってきた。まさか妹がG級のモンスターと遭遇し、戦ってきたとは思ひも



しなかったらしい。

やがて話を聞き終わると小さく頷き、

「素材は亜種のもものと鉱石、獄炎石とかを使用する事になるけど、あるのかな？」

「うん、あるわよ」

亜種の素材も、獄炎石をはじめとする鉱石も入手している。鉱石も火山で採掘しているし問題は無い。ざっと素材を並べると撫子はそれらを見回し、必要なものを回収していき、しかし少し足りないらしく目を伏せる。

「……紅玉、ないのかな？」

「……あたしのリオソウルシリーズと、茉莉のリオハートシリーズに使っちゃったわよ」  
「あちゃー。火の力を高める一番の要因として、紅玉が必要なんだけどね。んん、しょうがない。わたしが持っているのを使おうか」

「いいの？」

「うん、いいよ。G級を相手にするかもしれないというなら、紅玉取りに行っている暇はないだろうしね。これくらい、お安い御用だよ」

「……ありがと、姉さん」

頭を下げる瑠璃に微笑みかけ、軽く頭を撫でてやる。そうして必要なものを持って奥の部屋へと移動していく。それに瑠璃もついていくと、むわつとした熱気が肌をなぶつ

てきた。相変わらずここは暑い。火竜の因子のおかげでちよつと暖かいくらいか、としか感じられないが、作業中はこれ以上に暑い。

そんな中、「あ、そうだ」と撫子が顔を上げ、

「他にいい素材入手したりしてない？ 素材さえあればまた別の武器、作ってあげるよ〜？」

「え、いいの？」

「うん、いいよ。武器のレパトリーは多くあつた方がいいしね〜」

「そうね……じゃあ——ん？」

そこで瑠璃が部屋の一角にあるものを見つめる。机の上にあつたのはライトボウガンだった。それくらいならばまだいい。誰かの依頼を受けたのか、あるいは撫子がまた新しい武器の研究をしているのか、と思える。

だがあれには覚えがあつた。

「……姉さん、あれって……」

「ん？ ああ、あれ？ 彼女が来てたからね、ちようど強化しているところなんだよ。」

あ、ここに来る途中、彼女達に会つた？」

「……彼女達って、まさか——」

その時、入口の扉が開かれ、誰かがやって来た気配がした。続けて控えめに、「……呼

ばれて来たけど」と声が聞こえてくる。少し低めの女性の声。クールで冷静さを感じさせるあの声には覚えがある。

まさか、と部屋から出てみれば、そこに立っていたのは瑠璃の想像していた通りの女性立っていた。

「あ、ああ……」

「……………ん？」

彼女、優羅も瑠璃の姿に気づいたようで、きつめの赤い瞳が瑠璃を捉え、首を傾げてみせる。だが少しして思い出したらしい。「……………ああ、双子の……………姉の方か？」と口にしたところで、

「な、なんでここにいるわけえー……!?」

鍛冶屋に瑠璃の叫びが響き渡った。

○

朝のモガの村。広場にて刃を振るい、打ち合わせる女性が二人。

振るうはどちらも小太刀。刃は潰されているため斬られる事はないが、それでも彼女らがその気になれば潰れた刃だったとしても浅くは斬られるだろう。

そしてその鍛錬はある意味本気が混ざっている。素早く振るわれる小太刀は相手の小太刀と打ち合わせられ、二の太刀、三の太刀と続けられ、それが目にもとまらぬ速さで作られる剣戟となる。

「やるねえ、蓮華。このあたについてこれるとは、かなり強くなったようじゃないか」「ありがとうございます。あなたこそ、キレのある動きじゃないですか。これではいつ斬れるかわからないですね」

「ああ、そうだねー。じゃあもつと楽しもうかー」

「……なにかツツコミを入れてくださいいな」

そんなやり取りをするだけの余裕が二人、桐音と蓮華にはあるらしい。傍から見れば凄まじい剣戟だが、当人たちにとってはあくまでもこれは鍛錬の一環。

しかしあの桐音についていけるだけの実力が蓮華にあるとは。彼女も優れたハンターである事は見てとれる。見学しているのは赤城将輝と桜咲檸檬、そしてなぜかここにいるチャチャとカヤンバの二人。

将輝と檸檬は剣士でもあるためあの二人の鍛錬を見て技術を見学し、目で盗み取るのだ。一見荒々しくもあるが、洗練された技術の下に成り立っている。あの領域に達したい。特に分家とはいえ剣士家系に生まれた檸檬からすれば、桐音達の領域を目指したいという気持ちが生まれるのは当然の事。

さて、どうして桐音がここにいるのか。彼女らが鍛錬している間に触れる事にしよう。

桐音がモガの村にやって来たのは数日前の事。ユクモ村を離れてから真つ直ぐ南下したのは武らしき人物が南を目指していたという話を聞いたためだ。またモガ村は蓮華の拠点という事もあり、彼女からも情報が得られるのではないかと思つたのだが、残念ながらそれは叶わなかつた。

それだけではなく、モガの村に帰つてくる際に劉飛燕が辻斬りによつて殺された事を聞き、彼の死を悼む事となつた。そしてその辻斬りについて訊いてみたが、女性だつたと聞かされ武ではないことが分かつた。

しかし武もまたあの剣を目覚めさせようとするならば裏で行動するのは確かだ。その影を追おうとしたが、情報がない。でもこつち側に来ていることは間違いなく、実際にそれらしき人物が以前見かけられたという話もある。

今はここでクエストを消費しつつ、機を見て行動していくこととなつた。それに蓮華という昔の仲間もいる。彼女もハンターとしての顔だけではなく、もう一つの裏の顔がある。先日まではその裏の顔を使って東方の北、華国付近まで出ていったらしいが。

そしてこの先の目的は変わらず、武の居所をつきとめ、殺す事にある。蓮華にその片棒を担いでもらう事になるが、蓮華は武との関係がある程度聞かされているので問題な

かった。

知らないのはそこで見学しているメンバーだけ。だが探し人がいる、という事だけは伝えてある。

「……よし。朝練はこれくらいにしておくかね」

「お疲れ様です」

ぺこりと頭を下げ合って鍛錬は終了。

揃って村へと戻り、料理屋で朝食を取る事になった。

昼近くになってギルドの受付嬢を行っているアイシャの下へと向かい、今日届いているクエストを確認してみる事になる。

「あ、おはよーございまーす！ 今日もいい天気ですねー」

「ああ、そうだね。いい狩り日和だよ」

「ですねー。これだけ気持ちのいい空の下、こんがり焼けた肉のお弁当を持って出かけていきたいですね」

「それじゃ狩りじゃなく遠足日和じゃないですかーやだー」

「では、クエストを選んでください」

棒読み気味な蓮華のツツコミを総スルーし、アイシャは依頼書をカウンターに並べる。その様子にくいつと眼鏡を上げながらも視線を逸らし、どこか寂しそうな表情を見

せるが、誰も気にしない。もう慣れてしまっている。

スルーし放置するのもまた愛ゆえに、友情ゆえに。

さて、並んでいる依頼書を見回してみるが、相変わらずというべきか量は少ない。

あるのはガノトトス一頭の狩猟か、ロアルドロスとロアルドロス亜種の二頭狩猟だった。

ガノトトスは別の拠点でも手を出せる場所だが、ロアルドロスはモガの森付近の海だった。ならばこちらに手を出すか、と相談し、こちらを行う事となる。

挟撃の水獣。

対象：ロアルドロス、ロアルドロス亜種。

場所：モガの森。

不安定。

不安定なのはモガの森だからか。あそこはいつだって不安定。何がやってくるのかわからないし、来るのかどうかも分からない。安定期のように何事もなければ、突然思いつかない存在がやってくる事もある。

相手は海をも行動範囲としているので水中装備も用意し、それぞれ装備を整えてモガの森へと足を踏み入れる事となった。

メンバーは以下の四人。

草薙桐音。

装備はガンキンSシリーズにブルーウイング。以前ユクモ村でナルガクルガと戦った装備と変わらない出で立ちをしている。

楊蓮華。

装備はペッコSシリーズにブラッドコフィンという武器を手にしている。電怪竜ギネブラ亜種の素材を使用して作られた狩猟笛だ。彼女はどうかやら支援するように立ち回るようである。

赤城将輝。

装備はラングロスシリーズにハイランドグリーンズ。装備に変化はなく、桐音と同じく前線に出て火力となるだけでなく毒を撃ち込んでいく作戦のようだ。

桜咲檸檬。

装備はネブラSシリーズにセクトウノベルデ。ブラッドコフィンと同じく麻痺毒を撃ち込める武器であり、二人揃って補助へと回る予定だ。

それに加えて、アイルーフエイクを被ったチャチャとランプのお面を被ったカヤンバが同行している。

全員が剣士であり、ガンナーがいないパーティとなったが問題はない。それぞれ前衛と遊撃が二人ずつなのでそれぞれ二手に分かれても問題ないくらいだ。なにせ相手は



上位のロアルドロス。四人とも相手にし慣れたモンスターであり、油断さえしなければ一日……いや、数時間で討伐できる。

……何事もなければ、の話ではあるが。

こんな噂が届いてきている。

イビルジョーが南下してきているという噂だ。しかもご丁寧はこのモガの森に近い所まで南下し、進路はそのまま南西を取っているとかいけないか。下手をすれば本当にモガの森にやってくる勢いらしい。

ご丁寧にモガの村はいつだって不安定。もしイビルジョーが乱入してくるような事があれば、もちろん自分達の取る行動は一つしかない。

退却。

相手にしようなんて考えていない。即刻クエストは中止し、逃げるのみ。桐音と蓮華で少し厳しいだろう、という相手であり、将輝と檸檬にとっては絶対に勝てない相手。上位ハンターとはいえ、中堅的な相手をそれなりに相手にしているだけではイビルジョーには勝てない。

実力や装備が整っていたとしても、イビルジョーが放つ生物的な暴虐性と捕食者としての気迫に飲み込まれればそれで終了だ。奴と戦いたければまずあの本能から来る恐怖に飲み込まれないだけの精神的な強さを必要とする。

桐音のあの技術を使えばまだ戦えるんじゃないか？

いや、それでもあの暴虐性を前にすれば桐音とて厳しい。オーラの技術は通用するだろうが、桐音といえども精神的な負荷は免れないのだ。

だから、出会わない事を祈るしかない。

四人は森を歩き、水場を探して進んでいく。ロアルドロスの通称は水獣。海竜種に属し、海や水辺の付近でロドロスの群れを率いて滞在しているモンスターだ。奴らの影を探そうと思ったら、まず水のある場所へと向かうのが一番。

程なくして川へと辿り着く。北の山から流れてきた川は南にある海へと辿り着く。さて、ロアルドロスらはどっちにいるのだろうか。

北へ川をさかのぼっていけば湖から流れてくる川とぶつかり合う地点がある。湖で群れを固めて滞在しているのか、あるいは今は海に出て魚を追いまわしているのか。

そこでペッコSシリーズを身に付けている蓮華が目を閉じて意識を集中させる。

これについているスキルは、広域化+2、探知、笛吹き名人、氷耐性弱化。この探知を護石の効果で千里眼へと強化させてあり、これによってロアルドロスとロアルドロス亜種の居所を探ろうというわけだ。

「……………見つけました。どうやら海の方にいるようです」

「じつじつと……」

「ええ、どちらも」

となれば進路は海に向けるとしよう。川に沿って南下していくとぼつぼつとルドロスの姿が見かけられるようになる。四人と二匹という大所帯でやってきた侵入者に気づくと、それぞれ威嚇の声を上げてきた。

しかし相手は小型モンスター。ぶつけられる殺気はほどのものしかないため四人は臆すことなく武器へと手を回す。ルドロスの数は八匹程度。水中ならばまだしも陸上ならばそう恐れる事はない。

「戦いのスタートンバアツ！ さあ、メラメラとヒートするンバ！」

ランプのお面を被っているせいか、暑苦しい声を張り上げてカヤンバが走り出す。それに続くように「燃えてんなあ。俺も負けてらんねえぜ、おらあつ！」とハイランドグリーズを抜いて将輝が走り出す。

それを桐音と蓮華が見送り、少し遅れて檸檬とチャチャもルドロス達へと向かっていった。その中で蓮華はブラッドコフィンを取り出し、構えると何度か振り回している。すると振られるたびに先端から色のついた粒子が放出され、柄へと蓄積され始める。

技術の進歩により、狩猟笛の旋律ルールが変化したのだ。以前ならば狩猟笛の向きを決めて吹き鳴らす事で粒子が集まり、それらが決まった順番の下で効果が発揮される。

しかし現在の狩猟笛は攻撃や空振りをした際に粒子が放出され、蓄積される。振った際の方向によって粒子が決まり、蓄積され、後に音を奏することによって効果が発揮されるのだ。

このルールが確立された事によって狩猟笛の旋律がやりやすくなったことにより、狩猟笛を使うハンターが増えているとかいないとか。

「さて、ちよつとした支援をしましょうか」

ブラッドコフィンを振り、白、緑、青と粒子が柄へと蓄積されると口に含んで旋律を奏でる。少し不気味な叫びにも似た音が響けば、ルドロス達へと向かつていった将輝らの体に力が宿りだした。

スタミナ減少無効。強走薬を飲んだ時と同じように、走り続けたとしてもあまり疲れにくくなる効果が発揮されたのだ。続けて白、青、青と振って音を奏でると、今度は全身の筋肉と装備が硬くなったような感覚に包まれる。

防御力強化。守りの力を高める効果だ。

音は不気味だし、狩猟笛自体の見た目も棺桶のようでこれまた不気味さを醸し出しているが、その効果は確かに仲間を支援する効果である。

「おらあつー」

抜き放ったハイランドグリーズを振り下ろしてルドロスの頭を両断し、続けて薙ぎ払

えば飛びかかってきたルドロス達を纏めて切り払う。カヤンバも手にしている武器を振り回してルドロスを攻撃し、するとルドロスの体に緑色の粘菌が付着してじくじくと繁殖しだす。

続けざまにチャチャヤが「ニヤムニヤム……」と呟き、手に小タル爆弾を作り上げて投擲する。ルドロスに着弾すればそれは爆発を起こし、とどめとしてカヤンバが怯んだルドロスへと勢いよく跳躍して叩き落した。

その勢いが強すぎたのか、あるいは小タル爆弾に触発されたか、一気に粘菌が爆発し、それが決め手となってルドロスが息絶える。

この鮮やかな手並みに数匹のルドロスが竦み、それを見逃さずに檸檬がセクトウノベルデを抜いて側面から斬りかかる。威力の低い片手剣の狙い目は相手の急所か弱い部分。一息でルドロスの首へとセクトウノベルデを突き出し、切り払えば頸動脈を斬られた事で勢いよく首から出血する。

悲鳴を上げるルドロスへともう一度セクトウノベルデで斬りかかり、尻尾を振って抵抗するのを盾で受け止め、とどめのもう一撃。堅実で基本に忠実な片手剣の攻めで仕留める。

ものの数分でルドロスらを仕留めた将輝達を見守る桐音だったが、森から飛び出してきたルドロスに気づき、横目でそちらへと見やってブルーウイングを抜く。桐音を押し

倒すべく飛びかかってくるルドルスの懐へと潜り込みながら抜刀。

蒼い刀身はまさしくこれぞ両断というかのようにルドロスを真つ二つに斬り、分かれた体が地面に転がる事となった。

「女に押し倒される趣味はないってね。さて、次行こうか。位置は？」

「……近いですね。気配の大きさからして……原種かと思われます」

「亜種は？」

「そこから更に南、海に入っているとされますね。なんかいい餌でも探しているんじゃないですか？」

「そこできいっと眼鏡を上げながらどこかすまし顔をして見せる蓮華。話を聞いていた桐音がちらりとそのすまし顔を見つめ……、

「……………上手くできた、とか思ってたないよな？」

「いえ、そんな事は」

しれつと言いつつ、そのすまし顔が何よりも物語っている。これ以上ツツコミをいれるのもあれなのでこのままスルーする事にし、戻ってきた将輝達に位置を伝え、移動する事になった。

その際、檸檬が蓮華が背負っているブラッドコフィンに目を向ける。

見た目が赤い皮を使った棺桶にしか見えないため、少し怖々としたような表情を見せ

ている。

「如何しましたか、檸檬？」

「いや……やつぱこれ、怖いなあって。よくこれ振るつていられるよね、蓮華さん。ボクには少し無理ですよ、これ」

「怖いですか？ 私としましては、これは結構お気に入りですが」

「……お気に入り、ですか」

「ええ。この見た目、奏でられる音……イイじゃないですか。まさにこの紡がれる旋律は——戦慄を与える、という感じがしましてね」

表情に影がかかるように俯きながらドヤ顔を見せる蓮華だが、話を聞いていた檸檬の表情は少し強張つてしまう。しかし何とか持ち直し、

「いや、与えるのは戦慄じゃなくてボクらの気分が盛り上がるもので頼むよ……。敵に聴かせるならまだしも、狩猟笛によつて奏でられる音を聴いて効果を受けるのは、ほとんど味方であるボクらなんだからさ」

ともつともな事を言う。そんな少し緊張感がほぐれるようなやり取りをしながら海を目指して川を下つていけば、その先に黄色いもこもこのたてがみをした存在が見えてきた。

桐音達は揃つて木々に身を潜ませ、そのモンスターを睨み付ける。

桐音にとっては以前に瑠璃達と共に戦った相手、水獣ロアルドロス。それがロドロスを数匹侍らせて川のほとりに佇んでいるのだ。実に平穏な空気に包まれている。

しかしそれを今から壊しに行かせてもらおう。二頭討伐は早急に片方を仕留めた方が楽になる。ロアルドロス程度の相手ならば、さつさとケリをつけられる。

「では、先陣は俺がつけさせてもらおうかのお。ええか、蓮華さん？」

「……いいですよ。檸檬、カヤンバがそれに続き、桐音さんとチャチャが周りのロドロスを払っていきましようか」

「そして一度蓮華が旋律を奏で、ロドロス掃除に混ざると、それで行くか」

「ニヤ、オレニヤマの爆弾でチャツチャと仕留めていくニヤ」

「ンバンバ！ セキネツの炎の一撃を味あわせてやるンバ、ファイアーツ！」

暑苦しい叫びを挙げるカヤンバの声を皮切りに、背後に回り込むように将輝達が動いていき、背後から奇襲を仕掛けていく。突然の攻撃にロアルドロス達は驚き、その好機をついて先手を打つようにハイランドグリーズを振り回してロドロス達を蹴散らし、将輝が切り込んでいく。

続くようにセクトウノベルデで初撃で散らなかつたロドロスを仕留める檸檬と、ランプのお面に火をつけ、腰に提げているポーチから短い松明を取り出して先端に火を移して投擲していくカヤンバ。



彼らを支援するべく檸檬はブラッドコフィンを奏で、チャチャはその旋律に乗って踊りを踊る。溜まった粒子が解放され、音に乗って将輝達へと力を与えていく。その効果は防御力上昇だ。

それに続くように踊ったチャチャの力により、将輝達の筋力が上昇する。これは攻撃力上昇の効果。攻守ともに上昇するという支援を受け、群れを荒らす不屈き者へと振り返るロアルドロス。

唸り声を上げ、接近してくる将輝へと上半身を逸らすと一気に将輝を押し潰しにかかった。だが一步退いて直撃を避け、反撃として一撃ハイランドグリーズを振り上げてやる。それはもこもこのたてがみを切り裂き、毒を注入する。ロアルドロスの部位の中でもやわらかさがあるそのたてがみは、ハイランドグリーズの一撃によって繊維が千切れ、ばらばらと地面に落ちていく。

しかしこの程度の傷ではロアルドロスは怯まない。軽く首を引き、勢いをつけて側面から将輝へと噛みついていく。それに続くようにやってきたルドロスが圧縮された水の玉を吐きだし、将輝へと攻撃を仕掛ける。

ただの水の玉と侮るなかれ。ルドロスが撃ち出してきたそれは質量があり、当たり所が悪ければ打ち身となるだけの痛みを与えてくる。四方から放たれたそれに将輝は一度退くが、わき腹に着弾したそれに小さくうめき声を上げてしまう。

ラングロスシリーズは水耐性が低い。これは守るといふより回避に優れた防具だ。スキルもそれに倣って回避性能が発現されている。防御するより躲す事を念頭に置いた防具といえよう。

囲まれている将輝を助けるべく檸檬とカヤンバが動く。それに続くように桐音もブルーウイングを抜き、周りを囲んできているルドロス達を切り払っていく。燃え盛る炎を纏った気刃によつて数匹のルドロスが纏めて吹き飛び、切り裂かれる。

援護射撃をするようにチャチャが合流すると次々と小タル爆弾を取り出しては放り投げ、ルドロスやロアルドロスへと攻撃を仕掛けていく。

小タル爆弾ではあるが、アイルーフエイクには爆弾強化の印が施されているため、その爆弾の威力が上がっている。仲間のルドロスや桐音の一撃、小タル爆弾の連撃によつてロアルドロスが首を振って唸り声を上げる。

ぎろりと将輝達を見回し、斬りかかってくるハイランドグリーズから避けるように背後へと下がっていく、ルドロス達へと指示するように吼えたと、次々と川へと飛び込んでいく。撤退を選んだようだ。

しかも向かう先が海。広い水中へと逃げる事で体勢を立て直し、有利へと運ぶ算段か。

しかし逃がすわけにはいかない。

「待たんかい、ワレエー！」

将輝がハイランドグリーンズを背中に戻し、檸檬を引き連れて後を追っていく。続くようにカヤンバが駆け出し、桐音は一度周りを見回して蓮華とチャチャと共に走り出す。

「他に気配は？」

「ありませんよ。奴以外の侵入者の気配もなし。今のところは安全です」

「よし」

ターゲット以外のモンスターはまだなし。まだ大丈夫だ。実質的にはこちらは六人のパーティーを組んでいる。それだけでも十分なアドバンテージがあるといつてもいい。

やがて海へと出てくると、ロアルドロス達はその海へと入っていき、深い所まで潜っていく。完全に逃げの一手だ。このまま逃がすわけにはいかないので、桐音達は水中メガネをおろし、マスクを取り出し、水竜の守りをチェックしていざ海へ。

「グルル……？」

ロアルドロスは水音に気づいて振り返る。あの敵たちがよもや海まで追いかけてくるとは思いもしなかったらしい。しかし水中なら水中でこちらに分がある事はロアルドロスにもわかつている。

ロアルドロス達も振り返って威嚇するように唸り声を上げ、それぞれ分散して桐音達を取り囲みだした。

将輝が先陣切って仕掛けていくが、ロアルドロスが粘着性のある白い玉を吐き出して牽制してくる。それは途中で弾け、その周囲に粘液を定着させる。素早く身を捻ってそれを回避したが、側面からロアルドロスが突進を仕掛けてきた。

体をくねらせて水中で素早く接近してくるそれに今度は下へと逃げる。そこを狙って今度はロアルドロスが突進。舌打ちしてハイランドグリーズを剣モードへと切り替え、体を捻りながらそれに合わせて振り回し、横を通過していくその体を薙ぎ払っていく。

しかしそれに堪える様子はない。

素早く転進して背後からもう一撃、といこうとしたところで桐音が尻尾から一気に横つ腹へとブルーウイングを斬り上げていく。刃がロアルドロスを切り裂くたびに内包されている火属性の力が内部で燃え上がり、ロアルドロスへとダメージを与えていく。

「グギヤアウツ!？」

「檸檬と蓮華はルドロス達を止めろ！ チャチャとカヤンバはそれぞれのチャンスで動きな！」

桐音の指示に従って各人が動き出す。小型モンスターという体格を生かし、素早く縦横無尽に水中を泳ぐルドロス達の突然の奇襲をなくすため、小回りの利く檸檬と蓮華が

それぞれルドロス達を潰しに行く。

片手剣というリーチの短さから水中ではこの武器は不利になりがちだが、檸檬は己の気をセクトウノベルデに纏わせる事で気の刃を作り、リーチを伸ばしていた。それだけでなく気刃を放つ事で遠距離からルドロスを斬りに行く。

蓮華も白、白と粒子を溜めると旋律を奏で、自己強化を施すと素早く水を蹴って迫ってきたルドロスへと自分から接近し、すれ違いざまにその頭を殴り飛ばす。自己強化によつて素早さが上がり、その速さを乗せた一撃だ。頭を強く揺さぶられた事でルドロスが体勢を崩して落下していき、檸檬がとどめとして気刃を放つて首を斬られて絶命する。

「チャチャ、ここで花火をあげるンバ！」

「花火い？ 桐音がいるニヤ！ 影響があるニヤ！」

「桐音なら問題ないンバ！ オマエは投げつければいいンバ。ワガハイがファイアさせてるンバ！」

「ブブ、そう言うならしつかりタイミングを合わせるニヤ。……ニヤムニヤム、ツチャツバアアツ！」

打ち合わせた手のひらから一気に大タル爆弾が生れ落ち、それを両手で抱えてロアルドロスへと接近していく。すでに導火線には火がついており、時間が来れば起爆され

る。それに気づいた桐音がロアルドロスの気を引くために奴の前まで上がっていき、顔を斬る。

それによつてロアルドロスは桐音へと意識が向き、彼女へと噛みつきにかかるがそれは届かない。チャチャが下からロアルドロスへと接近し、抱えた大タル爆弾を投擲する。

水を切つて一気に浮上していくそれはロアルドロスの尻尾へと届き、更に腹へ。そこでカヤンバが水中でも消えない特殊な火がついているランプへと松明を当て、浮上していく大タル爆弾へと投擲。その刺激を受けて大タル爆弾が大爆発を起こし、ロアルドロスの腹を爆風に包んだ。

そのダメージにたまらずロアルドロスが怯んでしまう。その好機に桐音がもう一撃顔へとブルーウイングを叩き込み、将輝も合流して剣モードのハイランドグリーズを爆撃を受けた反対側の腹を切り裂き、作り上げた傷へと一気に刃を突き出し、ダメージと共に毒を注ぎ込む。

が、ロアルドロスはそれでは折れない。一度距離を取るように下がると尻尾を叩きつけて反撃するが、それぞれ横に逸れて躲し、離された距離を詰める。しかしロアルドロスはまた素早く転進して将輝の側面へと回り込み、勢いよく前転して尻尾を叩き落した。

「ちつ、抵抗しおるのお！ やっぱり水中じゃあ奴に分があるつて事かよ」

「落ち着きな、将輝。取り乱せば深みにはまる」

ハイランドグリーズで尻尾を受け止めながら愚痴を言えば、桐音がロアルドロスへと接近しながら将輝に忠告する。そのままもう一太刀入れようとしたところで、蓮華がルドロスを殴り飛ばしながら何かに気づいたように辺りを見回した。

千里眼の効果により、モンスターの気配をより一層感知しやすくなっている。

それによつて感じつとつたのは、複数の気配が急速に接近してくるものだった。

「ルドロスの群れが来襲！ 同時に亜種の気配もあり！」

「ええっ!？」

蓮華の報告に檸檬が驚きの声を漏らす。桐音と将輝も報告を聞き、気配を探つてみたところ、海の向こう、深海方面から急速に昇ってくる動きがある事を感じ取った。

その先頭を往くのは、大きな気を持つ気配。これは間違いなく奴だった。

視線を落としたその瞬間、奥から紫色の弾丸が飛来してくる。檸檬が慌てて盾を構えた時、そこへと着弾して弾ける。それに触れないように慌てて下がったところで、暗い世界から紫色のたてがみを持つ大きな影が檸檬を追つて昇ってくる。

「くっ……い！」

盾を構えたままその突進を受け止め、弾き飛ばされる。それを追撃するようにルドロ

ス達が次々と檸檬を撥ね飛ばしていき、檸檬は水中で無残に回転しながら体勢を崩されて落ちていく。

「檸檬ッ!?!」

「将輝は檸檬のフォロー! チャチャ、カヤンバは牽制弾幕!」

舌打ちした桐音が素早く指示を出しながら一度ロアルドロスから距離を取り、蓮華と合流する。将輝は落ちていく檸檬を救出するために急速に落下し、チャチャは小タル爆弾を、カヤンバは火をつけた松明をルドロス達へと一気に投擲していった。

次々と小タル爆弾が爆発し、それを突き抜けて松明がルドロス達へと無差別に着弾する中、低く唸り声を上げたロアルドロス亜種がそれを突き抜けて突撃する。

それをブルーウイングで受け止め、至近距離で桐音はロアルドロス亜種へと睨みを利かせた。殺気の籠った視線がぶつかり合い、ブルーウイングを振り上げて牽制し、内包されている火炎を発現させて切り払う。

一太刀貫つてロアルドロス亜種が呻き、一度距離を取った。

立ち泳ぎをするそのロアルドロス亜種を見つめ、桐音と蓮華が感じた事はこの一つ。大きい。

残ったルドロス達を集めて侍らせるロアルドロスと比べてみればよくわかる体格の差。



明らかに亜種の方が年季を重ね、成長しているという事がよくわかる。しかも纏っている気配もロアルドロスよりも上。

これは、噂通りなのかもしれない。

「ちつ、一筋縄じゃいかなそうだねえ。ただでさえ集団戦は嫌いだったというのにさ」「しかしやらねばなりません。切り抜けなければ待ち受けるのは……Death、ですね」

手にしているブラッドコフィンを軽く振りながら蓮華が神妙に言う。前門はルアルドロス亜種が率いる群れ、後門はロアルドロスが率いる小さくなった群れ。ルドロスの数はざっと見て合わせて三十近くか。総力戦になれば不利は明らか。

更に言えば、ロアルドロス亜種も妙に格が上の気配あり。

(こいつあ、戦いを楽しむ余裕はねえな。一気に片あ、つけてやるか)

自分の流儀に反するし、将輝や檸檬を育てる余裕すらない。最初の内からあまり桐音が戦わなかったのはあの二人に経験を積ませる算段だったが、これは見送るしかあるまい。

ブルーウイングに籠められている気を高め、自らの内に潜む一つの気を捻り出し、同調させていく。

「火気、収束」

構えたブルーウイングに更なる力が宿り、赤い気の刃がブルーウイングを纏って第二の刃と化する。続くように蓮華がさりげなくブラッドコフィンを振る事で粒子を柄へと集めており、音を奏でる事で旋律の効果が桐音達へと届いていく。

檸檬を救出した将輝もそれに気づき、体に染み込む癒しの力によって少しずつ活力が戻りだした。体を押さえる檸檬もその癒しの力によって痛みが和らぎだし、取り囲んでくるルドロスを見回す目にも力が入る。

「ギョオオオオオオオオオオオンッ!!」

ロアルドロス亜種の咆哮が響き渡り、それを受けて一斉にルドロス達が突進を開始する。

開幕の笛が鳴らされ、指揮官が吼え、チーム小隊と軍が今ここにぶつかり合う。

## 57話

ロアルドロス亜種が率いるルドロス達が、奴の指示に従って一気に突進。数で勝る彼らによる総力戦だが、檸檬がポーチに手を伸ばして取り出した閃光玉を投擲する。弾ける強い光を受けてルドロス達が悲鳴を上げた。

まともに見てしまったルドロス達は動きを止め、しかしその影響を受けないルドロスの一部がルドロスの間をすり抜けて一気に距離を詰めてくる。

前から、後ろから、横からだけでなく、下からも。これが水中の戦いだ。陸上ならば下からというのは地面に潜ってから奇襲攻撃を持つモンスターによるが、水中は自分を支える土台がない。

上にも逃げられるし下にも逃げられるが、それはモンスターからの攻撃も含まれる。そして水中で生きる事が可能なモンスターからすれば、縦横無尽に泳ぎ回って攻撃を仕掛けられる。更に言えば、小型モンスターという体軀を生かし、素早く動き回るルドロスが集団戦を仕掛ければ、それは立派に脅威なものとしか感じられない。陸上ならば有利だが、水中ならば不利となる。この落差が恐ろしいのだ。

「くっ、檸檬、いけるか？」

「大丈夫、なんとか、なるよ……！　　っく」

向かってくるルドロス達を迎撃するべく、剣モードから斧モードへと切り替えたハイランドグリーズを振り回して牽制しつつ攻撃する。リーチが長く、威力のある武器のため向かってくるルドロスが振り回されるハイランドグリーズによって自然と斬られ、倒れていく。

例え耐えたとしても、その一撃の重さと注入される毒によって瀕死になりつつある。背中合わせになって檸檬がセクトウノベルデを構え、纏われた気の刃を放ってルドロスを迎撃。黄色いそれはセクトウノベルデに含まれている麻痺毒も若干存在し、斬られたルドロスが少しバランスを崩してしまう。

体に侵入した麻痺毒の影響だろう。それによって隙を晒したところでもう一撃加える事で狩る。が、水中のルドロスの動きが速く、それなりの量の気刃が躲されている。

「グルル……！」

「……蓮華は原種、いけるか？」

「ええ、引き受けましょう。チャチャ、共を」

「ブ、オレニヤマ？」

「はい。行きますよ」

「ブツブー！ 気が早いニヤ！ 待つニヤ、オレニヤマを置いていくニヤ！」

蓮華がブラッドコフィンを手にしたままロアルドロスへと向かっていくと、慌ててチャチャがそれに続いていく。それを気配で感じ取ると、ブルーウイングを強く握りしめてロアルドロス亜種へと少し接近しながら「カヤンバ、来な。補佐よろしく」と背後にいるカヤンバに告げる。

「ンバ、ワガハイがアツく補佐してやるンバ！」

「ん、よろしく……つと、来るぜカヤンバ！」

「ギョルオオオオオンツ！」

吼えながらロアルドロス亜種がもう一度突進を仕掛けてくる。今度はそれを躲し、下からブルーウイングを斬り上げて反撃。火気を纏ったその一撃はロアルドロス亜種の腹を斬り、傷口を焼く。

追撃するようにカヤンバが下から松明を投擲して援護。だがロアルドロス亜種は転進し、飛んでくる松明に気づいて尻尾を振って撃ち落とした。低く唸り、側面へと回り込んでくるが、ロアルドロス亜種が攻めてこない場合、ルドロス達が桐音とカヤンバへと襲ってくる。

慌ててカヤンバが逃げるが、数匹躲しても一匹のルドロスの突進を受けて撥ね飛ばされ、ぐるぐると回転しながら落ちていく。しかし何とか体勢を立て直し、追撃を仕掛け

てくるルドロスを躲しながら手にしている武器で殴りかかった。

そうしつちらりと将輝と檸檬の方へと視線を向けると、閃光玉の影響を受けずにいたルドロス達を処理し、今度は無防備になっているルドロス達の処理を行っている様子が見えた。

「ンバ、二人は問題ないようダバ。ワガハイもアツクやつて……ンバツ!」

「ギユオオオン!」

桐音の援護をするために浮上しようとしたカヤンバではあったが、またしても別のルドロスが襲ってくる。小人である彼らにとって、ルドロスは体格の差によって防御して耐えきる事は出来ない。

慌てて体を捻って突進を躲すが、別のルドロスが噛み付きにかかってくる。噛まれてもすればただではすまない。

「ンバツ、ファイアアアアアツ!」

ランプの火の勢いを高め、威嚇するように吼えればその気迫と炎に怯むルドロス。周りのルドロス達も竦み、その隙にカヤンバが目の前まで迫ってきたルドロスの頭へと一撃叩き込み、フルスイングで頬を切り払って粘菌を爆発させる。

続けて松明に火をつけて周りへと投擲して牽制しつつ攻撃し、「まずはオマエ達から殺つてやるンバ! 来るなら来いンバ! ワガハイの炎はそう簡単には消えはしない

ンバア！」と熱く吼えてみせる。

その熱い闘志に将輝も思わず笑みを浮かべざるを得ない。ランプのお面による影響ではあるが、あそこまで熱くならねばこちらとしても負けてはいられない。ルドロス達を斬り払い、また数匹沈んでいく死体を見回し、また接近してくるルドロスを剣モードにして受け流して尻尾を斬り落とす。それにもがけば背後から突き刺してとどめとする。

「おう、大丈夫か、檸檬？」

「……問題ないよ。でも、やつぱり数が多いね。蓮華さんの旋律でスタミナは問題ないけど、水中はやつぱり慣れないよ」

蓮華はロアルドロスと戦いながらも一定のループでブラッドコフィンを振るっている。狩猟笛の粒子は四つまで蓄積され、更に振るえば古いものから消えて上書きされていく。そのため戦いの最中で狙った旋律で音を奏でようとするならば、大抵の使い手はある一定の決まった振り方をしていつでも奏でて支援できるようにする事が多い。

蓮華はロアルドロスの頭を殴りながら、機を見て音を奏でて桐音達へと力を与えて支援も行っている。攻撃と支援を両立できる狩猟笛使いがいれば、それだけでもパーティーは楽になれる。

使い手が若干少ない狩猟笛ではあるが、蓮華ほどの使い手がいれば味方として心強い

ことこの上ない。しかも狩猟笛はハンマーと同じく鈍器。頭へと攻撃していけば眩暈状態へと陥らせる事が出来るし、そうでなくとも疲労を蓄積させる事も可能だ。

しかもブラッドコフィンには麻痺毒を内包している。となれば、

「ギユ、ググ……ゴゴ、ゴ……!?!」

蓄積された麻痺毒によつてロアルドロスが動きを止めてしまう。この好機を見逃すわけにはいかず、小タル爆弾を投擲して支援しているチャチャへと蓮華が指示を出す。

「チャチャ、ちゃちゃつとぶつ放してください」

「ニヤ、了解ニヤ。……ブブ、人の名前すらもネタにするとは、とんでもない奴ニヤ」

ぶつぶつと愚痴を言いながらもチャチャは小タル爆弾を作りだし、ロアルドロスへと投げつける。頭はまだ蓮華が何度も殴りつけて攻撃しているため、狙いどころは横つ腹だ。先ほど打ち上げた小タル爆弾によつて吹き飛んだ部分をまたしても小タル爆弾が炸裂し、今度は鱗と共に肉も吹き飛び、大量に血が噴き出て海を赤く染めていく。

悲鳴も麻痺毒による痙攣に掻き消され、ロアルドロスはただ攻撃を受け続けるしか出来ない。そんなロアルドロスへと容赦なく、チャチャはもう一発小タル爆弾を作り出す。しかしロアルドロスを救うべく、奴が率いていたロドロスの生き残りがチャチャへと突っ込んでいく。

「ブッ!?!」



背後から突撃されてチャチャが前へと回転しながら吹き飛び、その手から大タル爆弾が離れていく。そのまま下へと落下していくと、そこにはルドロスと戦っているカヤンバの姿があった。

導火線には既に火がついており、もうすぐ爆発しそうになっているそれが大タル爆弾の重さによってどんどん沈んでいく。ルドロスを手にしている武器で振り払い、時に松明を投げつけているカヤンバはそれに気づき、「ンバッ!?」なにやってるンバ、チャチャ!?! ワガハイをキルする気かンバ!?!」と怒りつつも、それが丁度ルドロスが数匹集まっているところの頭上だったため、火のついた松明を投げつけ、大タル爆弾を起爆させる。

その爆風によってルドロスらが吹き飛び、周りのルドロスもその爆音に怯んでしまった。チャチャの小さなミスではあったが、それを利用してカヤンバは有利となる。バタバタと小さな足を素早く動かして竦み上がっているルドロスへと接近すると、粘菌の力が宿る武器を振り回して切り払っていく。

「ブツブー……やってくれたっチャ! これでも喰らうっチャ! ……あ、喰らうニヤ!

口調が素に戻りかけているのに気付き、こっそりとネコの語尾へと切り替えながら小タル爆弾を作り上げて自分を撥ね飛ばしたルドロスへと投げつける。しかしそれは躲かれ、ルドロスの反撃として水の玉が吐き出された。

それをやり過ぎ、もう二発両手に作り上げて時間差で投げつけてやる。

そうやって戦っている間も、蓮華がブラッドコフィンで殴り続け、十分に揺さぶられた事で麻痺毒による束縛から解放されたロアルドロスは、今度は眩暈状態で動けなくなってしまうた。

完全に蓮華の独壇場である。

だが、そんな蓮華へと回り込んだのは桐音と戦っているはずのロアルドロス亜種だった。奴は桐音から離れたかと思うと、先ほどから気に食わない音を時折奏で続けている蓮華を標的とし、側面、下へと回り込んで急襲を仕掛ける。

「下から来るぞ、蓮華！」

「むむっ？」

桐音の声と千里眼のスキルにより蓮華はブラッドコフィンを抱えて動けなくなっているロアルドロスへと肉薄する事でその場から離れる。刹那、勢いよく海上へと飛び出す勢いでロアルドロス亜種が通過していく。

というか、本当に海上へと飛び出していき、勢いよく落下してそのままスクリューのようにきりもみ回転しながらロアルドロスを巻き込むかのように蓮華へと落下してくる。

水流をも巻き込んで迫ってくるロアルドロス亜種から逃れるように横へと避けたが、

水流の余波が蓮華を吹き飛ばしてバランスを崩してしまう。ロアルドロス亜種本体はというと、ロアルドロスのたてがみに接触し、奴を撥ね飛ばしてロアルドロスのバランスを崩してしまった。

ロアルドロス亜種にとってロアルドロスは別の群れを率いるリーダーであり、仲間でもなんでもない。自分にとっての敵を潰す際に巻き込んだとしても何も問題などありはしなかった。

「ギョオオオオオン！」

続けてロアルドロス亜種が吼えると、将輝達と戦っていたルドロス達が顔を上げ、一斉に浮上してくる。生き残っているのは十五前後か。ブルーウイングを構えた桐音がロアルドロス亜種へと接近しようとしたが、下から昇ってくるルドロス達によってそれは止められる。

下から、あるいは側面から突進をしかけ、水の玉を撃ち出して攻撃をしてくるそれに舌打ちし、ブルーウイングを勢よく薙ぎ払って気刃と炎を放出する事で打ち消した。それだけでなく、それに巻き込まれたルドロスが両断され、焼かれる事で仕留めてやる。「数で攻められるつてのは……嫌いだったよ！」

愚痴を叫びつつもう一撃気刃を撃ち出し、ロアルドロス亜種を斬りに行くが、奴は素早く転進して回り込む事で回避する。が、その背後にいたロアルドロスのたてがみを切

り裂き、ダメージを与えてしまった。

本来の標的ではないが……まあよしとしよう。

回り込んできたロアルドロス亜種が突っ込んでくるのかと思いきや、奴は毒弾を連続して撃ち出してきた。ロアルドロス亜種のたてがみが紫色に染まっているのは、奴がそこに毒を溜めこんでいるためだ。

全体的に毒々しい紫や、濁ったような薄い緑色の甲殻を持つのはその影響だろう。前方だけでなく少し斜めに逸れるように撃ち出される毒弾もあるが、その全てをブルーウイングを握っていない左手から撃ち出される気弾によって相殺。

が、弾けた影響で拡散される毒霧によりロアルドロス亜種には接近できない。

しかも霧によって視界が悪くなってしまっている。その隙をついてロアルドロス亜種が一気に突進を仕掛けてくる。それを気配で察知した桐音は逃げるようなことはせず、ブルーウイングの火の力を更に高めてロアルドロス亜種へと向かっていく。

ここは水中。

動きはロアルドロス亜種に分がある。体を横にくねらせながら水中を素早く動いて桐音を撥ね飛ばそうとするロアルドロス亜種を見据え、桐音は一瞬のタイミングを見計らって横にずれながらブルーウイングを勢いよく薙いだ。

水流をも巻き込んだ力で彼女を撥ね飛ばす筈だったその交差は、その水流にも負けず

にブルーウイングを振り抜いた桐音が勝った。たてがみから肩までかかる程の傷を刻み、その傷を焼き尽くしていく。

それに呻き、ロアルドロス亜種がバランスを崩す。そこを狙ってセクトウノベルデを振るって気刃を放つ檸檬。その一撃で少しロアルドロス亜種の意識が、海を昇ってくる将輝と檸檬へと向けられ、しかしそこでカヤンバもまた援護するように松明を投擲。

ロアルドロス亜種は小さく唸りながら桐音達を見回し、ルドロス達へと声を掛けて海上へとあがつていった。奴の後を追って昇っていくルドロス達。その先には先ほどまでいた陸、モガの森がある。

水中戦ではなく陸上戦へと切り替えるつもりか？ あるいは一旦引いて体勢を立て直すつもりか。

何にせよ陸上ならばやりやすくなる。

後を追うべく桐音が昇っていき、それに続くようにカヤンバも陸へ。

「原種はそつちに任せるよ！」

「はい、お任せを」

「手伝うぜ蓮華さん！ おらあつ！」

抵抗するように暴れるロアルドロスの側面から斧モードにしたハイランドグリーンズを突き出し、たてがみを縦に切り裂くように振り下ろす。反対側へと回り込みながらセ

クトウノベルデを振るい、蓮華に続くようにして麻痺毒を注入する檸檬。

三人が集まるならばチャチャの爆弾は危険かと自分で判断したチャチャは、「オレニヤマは桐音についてくニヤ！」と一声かけて海上へ。

次々と陸へとあがつていき、森の中へと入っていくロアルドロス亜種と奴に付き従うルドロスの生き残り。それを逃がさず、構えたブルーウイングを上段に構え、

「剣術が一、焰灼！」

勢いよく振り下ろした刹那、刀身から放たれた気刃は赤く燃え上がる炎と化し、地面を割りながら一気に焼きつくす刃となる。切れ目とその周囲へと炎を撒き散らしながらロアルドロス亜種へと向かっていくが、奴はそれに気づいて横に向き直りながら素早くバックステップをした。

林へと入り込む前に刃は消えるが、たったの一振りですべてのルドロスが切り裂かれ、焼かれて息絶えてしまっている。切り裂く刃が消えても、炎はその場に留まっている。その炎を挟んで桐音とロアルドロス亜種は睨み合い、ルドロス達はゆつくりと桐音を取り囲んでいく。

その中で、海からチャチャとカヤンバが飛び出し、二匹もそれぞれ爆弾と武器を構える。

「周りの奴らは頼むぜ、お二人さん？」

「ブブ、任せるニヤ」

「ンバー！ ワガハイが焼き尽くしてやるンバー！」

二匹に軽い指示を出すと桐音はブルーウイングを背中に戻し、ロアルドロス亜種へ向かって走り出す。ロアルドロス亜種も一鳴きすると桐音へと向かって走り出し、勢いをつけたかと思うと勢いよく跳躍して体を横回転させて体当たりを仕掛けていく。

舌打ちして桐音は力強く地面を蹴り、ロアルドロス亜種よりも高く跳んでやり過ぎし、それぞれ地面に降り立つと相手を睨み付けて振り返る。そうして連続して毒弾を撃ち出して牽制するが、やはり気弾によって相殺される。

弾ける毒霧を吸わぬように桐音は回り込んでロアルドロス亜種の背後へと回り込んでいくが、その動きに気づいて勢いよく反転しながら桐音から距離を取る。そのまま一歩退きながら側面を向けつつ身構えたロアルドロス亜種。

（転がり、か）

その動きは次の攻撃を推測できる動きだ。距離は離れているが、これくらいの距離はロアルドロス亜種の大きさや身体能力を考慮してゼロにしてくるだろう。いざ、転がろうとしたところでチャチャが投げつけた小タル爆弾がロアルドロス亜種の眼前で爆発する。

突然の攻撃にロアルドロス亜種は悲鳴を上げ、顔を振って爆風の痛みを振り払おうと

している。

「よくやった、チャチャ！」

ロードロスへと投げつける小タル爆弾をいくつかばらまき、その内の一つがロードロス亜種へと向かっていったのだが、それによつて隙を晒せたのだから良し。桐音はロードロス亜種へと踏み込みながらブルーウイングを抜刀して行く。

が、もがいたロードロス亜種の前足が刃とぶつかり合い、ぎりぎりと言を立てて刃が肉へと届かず弾かれてしまう。ロードロス亜種の前足は硬い甲殻によつて守られており、切れ味がいい武器でも当たり所が悪ければ弾かれてしまうだけの強度を持っている。

偶然とはいえ、抜刀術のかかったブルーウイングの一撃を弾いてきた。それを感じ取ったロードロス亜種が勢いよく地面に倒れ伏すと、たてがみから漏れて出た毒ガスが周囲に放出される。

「……っ、く……!?!」

弾かれた影響で無防備となった桐音へと襲い掛かった毒ガス。吸い込まないように気をつけたとしても、微量の毒ガスが鼻から入り込んでくる。それだけでなく肌からも侵入してくるそれは着実に桐音を侵してきた。

しかもこれは猛毒だった。一瞬の内に気持ち悪さがこみあげてきて吐きそうになっ



てくる。

一度距離を離す桐音ではあるが、ロアルドロス亜種はそれを逃さず毒弾を一発撃ってくる。それを横に転がって逃げるが、ロアルドロス亜種は狙ったかのように桐音へと向かって走り出し、また勢いをつけて跳躍する。今度は転がるのではなく全体重をかけて押し潰しにかかってきた。

「……チツ、はああああッ!!」

横にも後ろにも逃げられないならば、前へと突き進むしかない。猛毒が回って頭が鈍痛に襲われているが、それでも桐音はブルーウイングに手をかけてロアルドロス亜種を下から斬りかかった。

低姿勢で強引に振り抜いたが、腹から尻尾の腹にまでかけて刃が通り、しかし背中に尻尾が叩きつけられて地面に倒れ伏せられる。同時にその手からブルーウイングが離れ、転がっていく。が、ロアルドロス亜種も腹を斬られた事で顔をしかめており、反撃しようとしても動けずにいた。

周りのルドロス全て討伐し終えたチャチャとカヤンバが桐音を助けるべく動き、チャチャが大タル爆弾を作り出してロアルドロス亜種へと接近していく。カヤンバが桐音へと向かっていき、桐音が解毒薬を飲めるように守る位置に回り込む。

ロアルドロス亜種が振り返ったその瞬間、持っている大タル爆弾を顔面へと投げつけ

てやれば接触した刺激で爆発し、ロアルドロス亜種の角が吹き飛ばされてしまった。

悲鳴が響き渡り、大きく仰け反つてそのままバランスを崩し、転倒して転がっていく。「……げほ、ん、つく……よし、これで締めさせてもらうぜ。離れな、チャチャー！」

こみあげてくる吐き気を何とか押さえつけ、額に浮いた脂汗を拭った桐音はブルーウイングを握りしめてもう一度上段に構える。解毒薬が効いているおかげで何とか立ち構える事は出来ているが、万全ではない。しかしここでやらなければ戦いは終わらない。

少々荒れている視界の奥で転倒したままもがいているロアルドロス亜種の首を狙い、気を高めていく。彼女の研ぎ澄まされた気に反応してブルーウイングの炎が活性化し、「火気、収束」と呟く事でその炎は更なる高みへと昇っていく。

そうして収束した力を一気に開放し、

「剣術がー、焔灼！」

振り下ろされた一撃によって、再び大地を割りながら気刃がロアルドロス亜種へと向かっていく。たてがみを切り裂き、焼き払うその一撃によって首が刎ね飛ばされるかと思われたのだが……たてがみで留められてその先へと刃は向かわなかった。

ロアルドロス亜種の耐久力だけでなく、猛毒によって力が落ちた影響もあるだろう。仕留められるだけの一撃を撃ち出せなかったのだ。

しかしそれによって致命傷に近いところまで傷を与えたのは間違いない。切り裂かれ、焼かれた傷口は大きく、ロアルドロス亜種が呻いているのが見てとれる。それを見つめながら桐音は苦笑を浮かばせる。

「……耐えた、か。流石はG級クラスってな」

「G級ンバ!? アレが!?!」

「ああ。ただ体が大きいだけじゃないよ。抜刀術込のあたいの一撃を前足の甲殻で受け止めてきたからね。上位ならあれすらも切り裂いているはずさ。それに纏う雰囲気も上位のものじゃなかった。G級じゃないかと疑える要素はいくらでもあった、さッ!」  
もう一撃振り上げて気刃を放ちながら納刀するが、ロアルドロス亜種は起き上って右前足で受け止めにかかる。しかしそれでも桐音の一撃はその硬い甲殻を軋ませ、小さく割る程の一撃を放っていた。

苦悶の声を漏らしたロアルドロス亜種は桐音へと向き直り、ゆっくりと近づいて仕掛けるタイミングを窺っている。しかしたてがみとその奥にある首の傷が奴の動きを緩慢にさせていた。

やはり効いているのだ。それでも奴が戦うのは己のプライド故か。

流石はG級の群れのリーダーというだけはある。

「いいね。いい心がけだ。それでこそ、殺りがいがあるってもんさー!」

「ギョオオオオンッ！」

もう一度両者は走り出し、ぶつかり合う。それをチャチャとカヤンバは支援するタイミングを窺いながら動くのだが、飛びかかり、突進を仕掛け、転がるという激しい動きを見せ出したロアルドロス亜種と、それに最低限の動きだけで躲しながらブルーウィングを振るう桐音の戦いに、手を出すタイミングを失ってしまった。

そうしてぶつかり合った両者だが、終わりは突然にやってくる。

桐音を撥ね飛ばすべく勢いをつけて転がったロアルドロス亜種だったが、その転がる距離を見切った桐音が一度バックステップをして距離を離し、着地した後に気を放出して急速に距離を詰める。

転がった後に起き上って体勢を立て直したロアルドロス亜種はその急激な距離詰めに反応出来ず、驚きに目を見開くしかなかった。

「王手、だ。じゃあな、いい戦いだっただよ」

その速さをも乗せた抜刀斬り。燃え上がった蒼い刀身と気の刃による二重の一撃は、たてがみだけでなく首を斬り、頸動脈をも断ち切って致命傷を与える。しばらく呻くような乾いた声その口から洩れていたが、やがて力尽きたように倒れ伏せる。

そんなロアルドロス亜種を見つめ、一息ついてブルーウィングを納刀した桐音はその死体へと一礼する。

流石はG級といったところだろう。少々舐めて掛ければ危険だった。ルドロス達を率いるその手腕、硬い甲殻、そして体を侵してきたあの猛毒。解毒薬が間に合わなければあのまま倒れ伏したままだったかもしれない。

チャチャとカヤンバについてきてもらって正解だった。一人で戦っていればこうはならなかったかもしれない。

「二応剥ぎ取っていくか。あつちのロアルは上位クラス。あいつらでも問題ないだろうさ」

辺りを見回して他にモンスターがいないことを確認し、桐音達は使える素材を剥ぎ取っていく。いつの間にか海の中にいたはずの彼らは移動していた。何やら大きな気配が離れていくような気がしたのだが、あれはロアルドロスが逃亡を図ったのだろうかと推測したのだ。

将輝達はそれを追っていったのだろう。彼らが向こうで討伐するならば、この素材を剥ぎ取れない可能性がある。ならば自分達だけで持てるだけ剥ぎ取っておくしかあるまい。

桐音達は素材を選別し、剥ぎ取りナイフを素早く振るって剥ぎ取りを行った。

一方、海の中で戦っていた将輝達だが、不利を悟ったロアルドロスが別の陸へと逃げていくのを追っていた。浜辺へと上がり、それからまだ逃げ続けるロアルドロス。将輝

達も逃がさないようにマスクを取って走り、蓮華もさりげなくブラッドコフィンを振って粒子を出し、スタミナ減少無効の効果を奏でたあとに納刀して後を追う。

入り江が狭まり、岩肌には挟まれた長い道を駆け抜けていくロアルドロスが止まる気配はない。完全に将輝達……いや、一人で自分を追い詰めていた蓮華に臆してしまっているようだ。

そうして逃げた先は大きく広がる空間。周りは高い岩山に囲まれ、水場と地面が両立するエリアだ。入ってきた右手の奥には洞窟らしきエリアへと繋がる道が、対面の向こうには岩山を抜ける道が存在しているらしい。

どうやら自分達は真つ直ぐに北上してきたようだった。

蓮華が千里眼を使って他にモンスターがいないかを探ってみるが、周囲にモンスタアの気配はなくなっている。

「ギュルルル……い」

不意にロアルドロスが辺りを見回し、小さく唸ると反転して将輝達に向き直った。その行動に少し疑問を感じた蓮華だったが、将輝はロアルドロスのその行動を見て、「よおやつと腹あ括つたみたいだのお。さんざん走らせおつてからに、一気に仕留めさせてもらおうじゃねえか！」とハイランドグリーズを抜いて構える。どうやらロアルドロスが観念したのだと見たらしい。

確かにそうだ。

ここはもう水場から結構離れてしまっている。ロアルドロスにとつてはあまり来たくない場所だろう。追い詰められたから戦うしかない、そういう心境に見える。

だが何故だろうか。蓮華はそれだけではない何かがあるような気がしたのだが、将輝と檸檬がロアルドロスへと向かって走り出したため、意識を切り替えてブラッドコフィンを構える。

まずは体力回復の効果を奏で、続けて防御力上昇を奏でる。最後に白、白と繋いで自己強化を施すと、強く地面を蹴って肩にブラッドコフィンを乗せて走り出す。ロアルドロスは既に両側に回り込んでいる将輝と檸檬を振り払うべく体を捻って尻尾を振り回しているようだが、距離を取って二人はやり過ぎし、斬りかかっている。

檸檬は構えたセクトウノベルデで、大タル爆弾によって吹き飛んだ箇所を挟りこむように斬りかかっている。それによって怯んだロアルドロスへとすつと身構え、

「すう……山<sup>さん</sup>茶<sup>せん</sup>花<sup>か</sup>！」

呼吸を整えて素早く傷口を挟りこむように三度の突きを繰り出す。刃が抜かれるたびに血が吹き出し、押し込まれればダメージを与えるだけでなく麻痺毒も注入されている。

反対側では構えたハイランドグリーズを振りおろし、突き出して剣モードへと変形し

た将輝が毒を注入しながら首を狙ってハイランドグリーズを振るっている。将輝としても毒を注入するだけでなく決定打を与える事を狙っているようだ。

決着をつけるための一撃を狙う。それは狩りにおいて重要な事であり、急所を狙うのは定石だ。だがそれを感じ取ったロアルドロスもただでは殺されてはくれない。首を振って抵抗すると、その将輝を押し潰すべく転がっていくではないか。

それを感じ取ったが、肉薄していたが故に逃げるには遅い。咄嗟に剣モードにしてハイランドグリーズを立てて防御するが、ミシミシと音を立てて軋むハイランドグリーズの様子に顔をしかめてしまう。

蓮華の奏でてくれた旋律によって防御力が上昇しているが、それでも押し潰しに来るロアルドロスの重量が将輝にかかってくるものだからたまらない。

だがそれを助けるべく蓮華と檸檬が斬りかかってくる。いや、蓮華の場合は殴りかかると、か。ブラッドコフィンを構えて転がったロアルドロスの頭めがけて振るい、頭を揺さぶってやる。

同時にセクトウノベルデによって注入された麻痺毒とも影響を及ぼし合い、またしてもロアルドロスの足を止めてしまった。この好機を逃さず、ハイランドグリーズを構えなおしてロアルドロスの首を狙い、勢いよく突き出して抉りこんでやる。

それだけでなくギミックを始動させてやれば、勢いよく粒子が先端へと収束してい



き、その度にハイランドグリーズが勢いよく震えて傷口を抉る形となる。

「だあらっしやああああッツ!!」

そうして高まった粒子を解放させれば、傷口が勢いよく吹き飛ぶほどの一撃が叩き込まれる。強属性ビンによって高められた毒もまた一気に注がれた事でロアルドロスの肉が壊死し始め、ロアルドロスの呼吸も乱れだした。

しかしそれでもロアルドロスは抵抗する。麻痺毒に対する抗体が出来ているおかげで、属性解放突きの後にはもう麻痺毒から解放されていた。首から血を流し、たてがみを赤く染めながらも属性解放突きによる反動を堪える将輝へと噛みつきにかけ、将輝はハイランドグリーズの柄を啜えられる。

そのまま勢いよく振り回され、反対側にいる檸檬の方へと放り投げてやる。ハイランドグリーズから手を離す事で将輝まで投げられる事はなかったが、ハイランドグリーズは遠く離れた所まで吹き飛ばされる。

だが、それによってロアルドロスの向きが変わり、彼が刻んだ傷が檸檬の方へと向けられる形となった。それを好機とした檸檬がセクトウノベルデを構えつつ気を纏わせ、刃を伸ばすと構えを取る。

「奥義……百花繚乱!」

首の傷を更に広げ、致命傷を与えるための剣術。

桜花流が剣術奥義をここに。

連続突きからの斬り下ろしに斬り上げ。セクトウノベルデが動きたびに血飛沫が舞い上がる。それはまるで花びらが舞い散るかのような光景だった。だが檸檬はそれを気に留めず、伸びた気刃とセクトウノベルデの刃にて一気にロアルドロスの首へと致命傷を与えていき、締めとして勢いよく体を捻りながら切り払った。

刀身に付いた血を振り払うようにセクトウノベルデを振った時、ロアルドロスは力尽きたように倒れ伏した。どくどくと、とめどなくなてがみの奥、首から血を流し、地面に鮮血を広げていくロアルドロスが動く気配はもうない。

討伐、成功だ。

桐音が蓮華達に合流したのはそれからそう時間も経たない頃だった。ロアルドロスの素材を十分に剥ぎ取り、気配を探って合流を果たし、倒れ伏しているロアルドロスから素材を剥ぎ取っている様子を見て小さく頷く。

ルドロスの多さやロアルドロス亜種がG級ではないかという推測、と少し心配なところがあつたが問題なくクエストを達成できたようで何よりだ。

太陽はもうそろそろ沈みかけ、空を茜色に染め始める頃合い。予定通りといった時間の経過だろうか。

「亜種の素材は十分に剥ぎ取つてある。後で分配しようか」

「ありがとうございます。そちらは特に問題はなかったようですね。」

「ああ。G級だったけど、何とかなったね。こいつらの補佐があつての討伐だったさ。」

「G級!? それ、冗談じゃなく?」

「ん、冗談じゃないぜ。後で素材を確かめてみな。明らかに硬度が違うからさ。」

驚きの声を漏らす檸檬だが、桐音はにやりと笑って見せながらぼんぼん、とポーチを叩いた。モガの村にも最近G級クラスのモンスターが現れ出している、という事は伝わっている。

だが小さな村という事もあつてあまり縁のない話とばかり思っていたが、本当にモガの森は魔境だとしか言いようがない。よもやここにまでG級モンスターがやってくることになろうとは思ひもしない。

もし桐音がいなかったらどうなっていたらだろうか?

自分達ではG級モンスターを討伐するのは難しい、というのは明らかだと将輝と檸檬は自己分析している。ハンターとして活動する期間はそれなりであり、上位ハンターとなつて数年だが、まだ経験は少ない。装備も整っていないのでG級を相手にするのは難しいのは明らかだった。

しかし桐音もG級ハンターではないのによく討伐できたものだと思う。かなりの実力者だという事はわかっているが、まさかこれほどとは。明日からの鍛錬も彼女の技術

をより一層盗んでみようと思気込んでみる。

そう思いながら素材を剥ぎ取り終えたと、立ち上がって剥ぎ取りナイフをしまう。

「よし。じゃあ帰るかのお」

「ンバ。今日もいっぱい燃えたンバ」

「早く帰って肉食べたいっチャ」

「じゃあ夕食は肉多めにしようか」

そんな事を話しながら歩き出す一行だが、不意に蓮華が「待ってください」と呼び止める。一体どうしたのだろうか、とそれぞれ振り返るが、蓮華は神妙な顔で辺りを見回している。

もしかして彼女の千里眼に何か引掛かったのだろうか？

ここに来てモンスターが？

だとしたら一体どこから？

桐音達も辺りを見回して警戒するが、桐音はうっすらと変化していく空気を感じ、「……これは」と呟いてブルーウイングにゆっくりと手を回す。そうして警戒した中、はつとした顔で蓮華がある一点を示した。

それは——数十メートル離れた先の、地面。

「下から来ます！」

そう叫んだ刹那、その地面が割れて勢いよく振り上げられた顔が現れる。濁った茶色の鱗に覆われ、小さな突起に覆われた体と尻尾を持ち、口が首近くまで裂けた顔を持つ巨大なる獣竜種。

それを見た桐音が一瞬にして臨戦態勢に入り、背後にいる将輝達へと「逃げるッ！」と叫ぶ。

地面から現れたそれは体に纏わりついた土や石を振り払うように体を震わせながら鼻を動かし、ぎろりと離れた所にいる桐音達を見つめ、空を仰いで辺りに響き渡る程の咆哮を上げる。

瞬時に叩きつけられる暴虐的な殺気。飢えた獣の如き殺気によつて檸檬は竦み上がり、その場に縫い付けられたように動けなくなってしまう。そんな彼女に気づき、将輝が「くっ、おとおおっ！」と掛け声を叫んで自らの体に喝を入れて無理やり体を動かす。檸檬の手を引いて抱き寄せつつ背中を屈めて背負い込み、海に向かって走り出す。続くようにしてチャチャとカヤンバも走り、桐音と蓮華は奴——イビルジョーを見つめたまま背後に下がっていく。

すぐそこにはロアルドロスの死体がある。奴が腹を空かせているならば、こつちに喰らいついていくはずだ。だがもしもという時もあるため、奴から視線を外さずに下がっていくのだ。

そうして、イビルジョーを警戒しながら下がっていくと、奴の視線は物言わぬ肉塊と化しているロアルドロスへと向けられた。離れていく獲物より、動かぬ獲物を選んだらしい。

素材を剥ぎ取られている事で所々肉が露出しているそれへと勢いよく喰らいつき、肉を引き千切つて咀嚼し始める。それを見届けた瞬間、二人は武器から手を離して勢いよく駆け出していく。

向かう先は海。

そこへと飛び込んで別のルートから村へと帰る算段だ。

イビルジョーは確かに危険極まりない相手である。しかし奴は海までは追ってこない。泳げないからだろう。海へと飛び込んで逃げればほぼ逃げられる。マスクをつけて海へと飛び込み、西に向かつて泳いでいく。

イビルジョーが追ってくる気配はないが、どうやら噂に語られるイビルジョーがついにモガの森へと入り込んできたようだ。これに対処する方法は、ない。

出来るのは奴が村に入らないように結界を張って村を守る事だけだ。イビルジョーを討伐できるハンターがいなければ、出来る事は逃げるか討伐依頼を他の拠点へと依頼することのみ。

桐音と蓮華だけでは残念ながら奴に勝てるビジョンは見えない。

だからこうして、逃げるしかないのだ。

G級ロアルドロス亜種は何とかなるが、生物的な意味合いでイビルジョーの方が危険。これが生態系において上に立つ存在、恐暴竜イビルジョーである。

村へと戻った桐音達はすかさず村長らに報告。村を中心とした周囲に竜を遠ざける効果を持つ結界を張り、イビルジョーが森を離れるまであまり村の外、森へと入らないように注意する事となった。

奴が森から完全に離れていったのを確認したのは、それから二日後の出来事であった。

その進路は北西。

タンジアの港付近を北上していったようだった。

## 58話

実家の鍛冶屋にて優羅と再会した瑠璃。驚きを隠せない瑠璃に、相変わらずクールな面を見せる優羅。動揺し続ける瑠璃へと撫子はどうして彼女がここにいるのかをかいつまんで説明し、続けて優羅へと強化させたアサルトガルルガ「フェンリル」を手渡してやる。

G級のイヤンガルルガと希少な鉱石などを使用し、更にオルガロンの素材を使って見た目もかっこ良く仕上げてみた。耐久性の底上げと火力の上昇を狙ったライトボウガン。

名を、魔狼砲【黒鳥】。

撃てる弾には特に変化はないが、オルガロンの素材を使った事で氷結弾も撃てるようになっただけでなく、超速射可能となっているようだ。

それにしてもこの見た目。

紫色の鱗と黒い毛皮という相反する素材を合わせ、しかし強固で軽い素材を使っていため最低限の量で確かな強度を実現させている。ざっと見回して見た目だけでなく



手触りを確かめた優羅は「……じゃ、裏で撃ってくる」と言つて裏口から出ていった。

「はくい」とそれを見送り、優羅がいなくなると瑠璃へと向き直り、

「今頃優羅さん以外は広場で鍛錬していると思うよ〜」

と言つてやる。

それを聞き終えると同時に家を飛び出した瑠璃は真つ直ぐに広場へと向かつていく。はやる心を押さえ、少し寒い空気を切り裂いて走り、辿り着いた広場では確かに数人の人影が見えた。

高速でぶつかり合う二つの影。

岩山へと向けて剣を振るう男に、シャドーで格闘術を鍛錬している女性。

懐かしい人達だ。

呼吸を整えながらその光景を見てみると、六年前の事が思い起こされる。あの時はあそこでクロムとぶつかり合っている白い女性が彼らと一緒にここにいなかったが、今はそれが実現している。

「……あれ？ 瑠璃ちゃんだよね？ どうしてここにいるの？」

そこでシアンが瑠璃に気づいて声を掛けてくる。彼女へと少しふらつきながら近づき、鍛錬している顔ぶれを見回してみる。確かに彼らはそこにいた。ずっと探してきたあの一家がここにいます。

今は亡き神倉月の協力により、ついに動いてくれたのだ。

「姉さんに用があつて一時的に……。あそこにいるのつて……。見間違いないんですよね？」

「ん？ ああ、うん。そうだよ。見間違いないよ。昴さん達、来てくれているんだ。もう少ししたら東方に戻つて今起こっている事件に関わつていく予定なんだけど、その最終調整をしているところだよ」

そう説明した時、シャドーをしている女性……。紅葉が瑠璃に気づいて振り返り、「あれ？ そこにいるのつて……」と軽く視線を向けてくる。その事に向こうで剣を振つている昴だけでなく、高速移動をしてぶつかり、殴り合っているクロムとセルシウスも気づいたようで、瑠璃へと視線を向けてきた。

「おお？ 帰つてたのか瑠璃」

クロムを皮切りに他のメンバーも近づいてきて瑠璃の帰還を喜び、懐かしんでいる。最後に帰ってきたのは二年ほど前なので十分に久しぶり、といったところだろう。そして昴達にとっては六年ぶりだ。

短い間ではあつたが、ポツケ村で共に暮らしていた間柄。紅葉にとってはある意味初対面に近いが、話には聞いていたので知らないことはない。

白銀一家。

東方に隠れ住み、その居所を見つけて無事を確かめ、願わくば彼らにも師事してもらおうと考えていた相手が目の前にいる。言いたいことは色々あった。再会したら何を話そう、とか、頭の中でこの六年もの間に作り上げた言葉たちはしかし、瑠璃の小さな口からは発せられることはなかった。

ライムの手によつて茉莉が持っている宝石を通じて彼女にも連絡すると、彼女もまたポツケ村へと飛んできた。広場へとやつて来た彼女を出迎え、ここに彼らの再会が叶う。

神倉月による協力要請から始まり、裏で繋がったヤマト国の三家と乾家が従える霧夜の忍たち。東方にある家から離れてこのポツケ村へと訪れると、クロム達と鍛錬しつづいずれ来る月からのGOサインに従つて東方の事件を探りに行く予定だった。

しかし神倉月は死んだ。

下準備を整えるだけで終わつてしまい、残された昴達は彼女を殺した何者かに備えてもう一度鍛錬をして調整し、東方入りをする事にしたのだ。

そして瑠璃と茉莉からも東方での異変の一端として、G級モンスターが現れだした事を報告する。瑠璃が帰ってきたのは持っている武器の強化のためであり、茉莉はその予定がなかったのて来ることはなかったのだと言う。

「G級モンスター、か。これは増々東方入りをしなくちゃならんな」

「そうね。こうなったら瑠璃、茉莉。あんた達が戻る際にあたしたちもついていくわ。いいわよね？」

「ええ、もちろんですよ。むしろ歓迎します。あなた方がいらつしやれば心強いです」「ん、よろしく頼む。……時に茉莉、武器強化はしないとの事だが、それは素材がないからか？」

「はい。それなりにいい武器は揃えているんですが、なにぶん強力なモンスターによる武器なので、強化素材が集まらないんですよ」

「ふむ……見せてみる」

昴の言葉に、茉莉はローブから今所有している武器を取り出して並べていく。

ランスとして、

トキシックジャベリン、角槍ディアブロス、ブルークレーター。

ガンランスとして、

古代式回転銃槍、ヘルステイング改、王銃槍【ゴウライ】。

王銃槍【ゴウライ】は以前討伐したジンオウガの素材を使用して作り上げられた雷属性のガンランスだ。瑠璃ではなく茉莉があつたジンオウガの素材を使用し、ランスかガンランスかを考え、茉莉はガンランスを選択したのだ。

そして昴は並べられた武器を見直し……いや、ある一点で止まっている。

それは角槍ディアブロス。

気のせいかな、先ほどより若干目が輝いていないだろうか？

「……茉莉」

「はい、なんででしょう？」

「これは、そのまま強化か？ それとも亜種に切り替えるのか？」

「亜種の方へと強化しようかと」

「なるほど、把握した。ならば素材は俺が提供しよう。これをブラックテンペストへとするといい」

にやり、と笑みを浮かべて昂は軽い調子でそう申し出た。その笑顔を見て茉莉はああ、と思いつ出した。そういうえば彼は——ディアブロス愛<sup>ラブ</sup>な人だった、と。

ディアブロスという強力な飛竜を相手にする事を喜び、死闘を繰り広げる事で自らを鍛え上げたハンターであり、何度も何度も戦ってきた事で更なる愛に目覚めている、ちよつと危険な人物だった。

……なるほど、そうやって多くのディアブロスと戦っているのだから素材は有り余っているだろう。

「よろしいのですか？」

「構わん。このまま腐らせておくのはもったいない。俺達が使用するための素材はもう

使ってしまったているからな」

「うん。もうあたしのあれはカオスオーダーになってるしね。使っちゃっていいよ」

紅葉の主力武器であった角竜鎧カオスレンダー。あれはもうG級素材を使用して角王鎧カオスオーダーになっているらしい。彼女の怪力と合わされば、とんでもない破壊力になっているだろうというのは想像するにたやすい。

人の素材を譲り受ける、というのは違反行為だろうが、ここポケ村は元より外界からほとんどシャツアウトされている場所。黙認されれば……スルーされる。

それにせつかくの好意を無碍にするのも茉莉としては忍びなかった。「ありがとうございませう」と頭を下げてお礼を言う。

「ところでさつきから気になってたんだけど……」

と、そこで瑠璃がちらりと視線をある一点へと向ける。そこには私服姿となっているアルテミスとルーシーが立っていた。そういえばルーシーだけでなく、アルテミスも二人からすれば初対面だ。

視線に気づいたアルテミスがぺこり、と一礼する。

「こんにちは、アルテミスだよ」

「初めまして、ルーシーと申します。西方で神倉さんと知り合い、先日まで行動を共にしております」

自己紹介をし、月との関係やどうしてここにいるのかを説明し、そしてルーシーは懐から畳まれた蒼いローブを取り出す。それは月から転送された彼女のローブだ。その中から取り出されたのは、一振りの刀。

それを彼女は瑠璃へと手渡ししてやった。

「ここで会えたのは僥倖。月さんの導きによるものと推測します。彼女の遺志に従い、これをあなたに差し上げましょう」

「え？」

「月さんは自らの死を察知していました。何者かに狙われている気配がする、と語っていましたから」

実際はヘルに宣告されていたのだが、ルーシーはそれを口にはしなかった。不安材料はあまり広めたくはないという彼女の配慮なのかもしれない。

「彼女はもしもの時に備え、これを私の下へと転送し、中に収められている武器を各人へと分配する遺志を遺されました。それが、こちらです」

鞘は銀色を主体とし、金色の紋様が描かれていた。柄は紫色の布に巻かれ、ゆつくりとそれを抜けば、刀身は銀色、背は金色に染まっている刀身が姿を見せる。刹那、強い龍殺しの力が刀身から伝わって来たではないか。

たまらず瑠璃はすぐにそれを鞘へと戻してしまう。

「……どうやらまだそれを扱うだけの力は備わっていないようですね」  
「……っ、こ、これって……」

「神倉さんが秘密裏に制作した一振り、飛竜刀【陽月】<sup>ひげつ</sup>。金火竜と銀火竜の素材を龍殺しの力へと作用するように引き出し、制作された太刀です」

陽月。朝陽と月、ということか。

素材が金の月と銀の太陽と称され、さらに防具の名前もゴールドナ、シルバーソルと名付けられるという共通点もある。叶う事のなかった朝陽と月の両立を込めた太刀を自分に遺した、と？

そんなもの、恐れ多くて受け取れない。

「月さんの言葉です。『いずれ時が来ればこれを扱えるだけの実力が君に備わるだろう。その時を願い、火竜の刀を君に託そう。君ならばいずれそれに見合うだけのハンターへと成長できると見ている。君の行く空を照らす刀となる事を祈る』との事です」

「……っ」

その言葉を遺されてはもう受け取れないと言えないではないか。その刀を握りしめながら額を当て、言葉にならない声が漏れながら、瑠璃は小さく頷いて受け取る事にした。

続けてローブから取り出されたのは槍だった。こちらにもまた銀火竜の素材を使用さ



れた槍だと見てとれるが、一般的に知られるレッドテイル系列の物と違い、先端は長く伸びるだけでなく途中で短く二つに分かれる事で三つ矛のようになっていた。

そこは金火竜の素材と秘棘が使用されており、毒の力を感じる。つまり火属性の力と毒属性を両立させた槍……ランスと言うわけだ。続けて取り出された盾も金と銀の鱗と甲殻によって作られており、強固さだけでなく耐火性にも優れているだろう。

「こちら希少種の火竜によって作られています。名を、銀星槍ぎんせいそう。この通り、ハンターのランスではなく対人で考慮された作りになっているので槍として扱う事も可能ですよ。どうぞ」

「ありがとうございま……っ、これは……!？」

受け取った瞬間、強い銀火竜の気配を感じ取って取り落としてしまった。どうやらこれもG級クラスの代物のようだ。今の茉莉に扱えるような代物じゃない。しかもこれをルーシーは先ほどまで平気な顔で持ちながら説明していた。

それだけで彼女の實力が推し量れるというもの。ルーシーは特に驚くようなことはせず、落ちてしまったそれを拾い上げ、茉莉のローブを広げて中へと入れてやった。

「あなたにも月さんからの言葉がございます。『君には槍をあげよう。竜だけでなく人相手でも振るえる槍を用意したよ。瑠璃と同じく、今は扱えなくとも時が来ればきつと君に馴染む槍となってくれるはずだ。そして君には火竜の力を引き出し、増幅させる

ブースターとなる火槍を選択したよ。君の行く道を照らす槍となる事を祈る』との事で  
す」

「……ありがとうございます。大事にさせていただきます」

丁寧に一礼してお礼を言う茉莉。盾も受け取ってローブへとしまい、月が遺してくれた二つの武器を感じ取る。G級素材で作られただけでなく、これに籠められている竜の力と意思が強いが故に今の自分達では扱えないのだろう。

それだけ月が扱う武器の力が強いのだ。あるいは竜の意思すらも残して武器の力とさせたのだろうか。素材たちには死んだ竜の意思があるが大抵のものはその意思は加工の過程で消えていく。あるいは残っていたとしても微量なもので、いずれは使用されていくたびに摩耗し、消えていく。

だが月はそれを消さず、意思すらも力として残し、武器の性能を高めたのだ。

あの決戦の際でも朝陽と剣を交わしたあの蒼穹双刃。あれは蒼ラオシャンロンの素材が使われているが、月はその蒼ラオシャンロンの意思すらも力として振るっていた。また不完全ではあるものの、クロムも纏っていたリオソウルシリーズやペイルカイザーに宿るリオソウルの力で身を守っていたこともある。

そういう話を又聞きしている瑠璃と茉莉はこれもまたその例の一環だと推測する。なにせ身近にその竜の力を、オーラへと変換して振るっていた女性がいたのだからあり

得ない話ではないと思える。

いずれこれらを託してくれた月のためにも、振るうに相応しいハンターとなろう。改めてそう心に決める二人だった。

「……そういえば私達がこれを受け取ってしまいました。クロムさん達には？」

「ああ。貰っているぜ？ ……しかも俺はとんでもないものを貰っちゃったけどな」

「とんでもないもの？」

「……未完成らしいけど、封龍剣、だってよ。やれやれ……参ったね、どうも」

苦笑しながら頭を掻くクロム。彼女の最期の時に振るっていた封龍剣〔真滅一門〕。これをクロムは託されたらしい。例え未完成であったとしても十分に高い力を誇る一品を託されたのだ。彼はそれにプレッシャーを感じてしまったようである。

もちろん彼だけでなく昴達もまた月から武器を譲り受けているらしい。彼女の知り合いはほとんど彼女の遺志によって武器を分配されている。だがそれで全てのものが分配されているわけではなく、残ったものは自由にしても構わないという言葉もあるようだ。

「というこで、一部のものは分解し、再利用して他の武器の強化などに使用される事になった。そうやって準備を進めていたというわけだ」

例えば昴が持っていた鬼哭斬破刀。これが打ち止めでなく、その上に鬼哭斬破刀・真

打が存在するのだが、これへと強化するにはG級のキリンとラージャンの素材を必要としなければならぬ。だがこれらが現れる事は稀であり、現れたとしても討伐するのは至難の業だ。

そのため長く強化する事は出来なかつたのだが、月が遺したものにより、ついに鬼哭斬破刀・真打へと強化する事が叶つたのだ。

彼以外にもこのおかげで強化出来た武器を持つ人がおり、彼女へと感謝の意を忘れず出来上がった武器へと頭を下げなかつた人はいなかつた。

それからもお互いの事を話し終え、瑠璃と茉莉、そして昴は揃って鍛冶屋へと向かつていき、早速撫子へと依頼する事にする。

「あ、おかえり。うん、会えたみたいだね。……つてあれ？　茉莉ちゃんも来たの？」

「久しぶりです、姉さん。私も姉さんに依頼する事になりました、いいですか？」  
「もちろんだよ。妹の頼みとあれば、断る理由なんてないよ。」

につこり、と曇りのない笑顔を見せて撫子は頷いた。そうして昴から説明を受けた撫子は何度か頷き、「ブラックテンペストだね。りようかい。……改まで強化するのかな？」と首を傾げる。

改までいくとG級になるのだが、果たして素材はあるのかという事なのだが、昴はう

んうん、と頷いて「問題ない。それくらいまでなら出してやるさ」と快く引き受ける。

こうして昴の協力により、角槍ディアブ羅斯はブラックテンペスト改へと進化するプランが整った。一気に依頼が来たので奥から父親の岩徹も姿を見せ、「おーし、腕が鳴るってもんじゃのお。任せておけい、きっちり仕上げてるからな！」と太い腕を叩いてにかつと笑って見せた。

それからは完成すれば撫子が直々に届けてくれるという。そこで彼女にあの宿に泊まっている部屋へと飛べるモドリ玉を手渡した。それに乗れるように昴達にもそのモドリ玉を用意し、瑠璃と茉莉は宿へと戻る事となった。

それを見送ると、昴は広場へと戻っていく。見ればクロムとセルシウスはまた格闘術でぶつかり合っていた。先日ポツケ村に到着してからは、セルシウスのリハビリと銘打ってクロムと毎日こうして殴り合っているのだ。

ルーシーはそれを見守り、アルテミスは見守ったり自分も誰かと組んで鍛錬をしたりして過ごしている。六年という月日はアルテミスを更に強くさせているようで、槍を打ち合わせた桔梗が驚くほどの實力を見せてくれた。

セルシウスを監視するためのギルドナイトだが、訊いてみると彼女も東方の一件にも関わっても構わないと許可を与えられている。つまり共に戦える戦力でもあるというわけだ。

しかしその行動は必ずセルシウスを同行させる事が第一条件となる。あくまでもアルテミス、そしてルーシーはセルシウスを監視する役割を持つギルドナイトなのだから。

そして彼女ら……いや、彼女らを含めたルシフェル一家が動くのはまだ先。セルシウスが完全に実力を取り戻すまでは彼らが動く事はない。

動くのは、白銀一家のみとなった。

○

日も暮れたタンジアの港町。陰で動くものにとつては都合のいい暗さとなってきた時間帯の中、静かに連絡を取り合う何者かが潜んでいた。札を起動させ、「神倉月に関する情報、未だなし。調査を続行する」と告げて札をしまうこの男。

一般人として成りすまし、行動している彼は酉丑灯が送り込んだ風間の忍だった。町を歩き、時に路地裏をすり抜けて移動していった彼は、静かに目的地であるギルドへと向かつていこうとしている。

神倉月は一体誰に殺されたのか。これに関しては誰も知らぬ謎となっており、真偽も不明のまま。警察機関で不明ならば、ハンター登録をしているこの街のギルドならば

何かわかるかもしれない。情報を入手するならば手段も場所も選ばない。可能性があるならば飛び込むまでだ。

そうやって調査を進める忍だったが、突如路地裏の影から伸びた腕が彼の首を捕まえて引き寄せる。

「——ッ!?!」

咄嗟に抵抗しようとしたが、腕を極められて動けなくなってしまう。そのまま地面にうつぶせに倒され、頭も押さえられてしまった。

「な、何奴?!」

「……騒ぐな。質問のみに答えろ。お前、どっちの忍だ?」

低くドスの利いた声で問われ、忍は口を閉ざす。一体何者だ、と思っても、頭を押さえつけられているために相手の顔が見えない。そして聞き覚えのない声でもあり、路地裏の暗がりによって周りの様子も見えない。

黙りこくっている忍を見つめている何者かは小さく嘆息し、「言わない、か。だが何となくは想像つく。……風間だな?」と問えば、忍は小さく息を吞んでしまった。その反応こそ、問いかけに対する答えとなる。

「……送り込んだのは酉丑灯だな? 何故ここにいる?」

「……………」

「どうあつても答えない、と。しようがない。じゃあ死んでくれ」  
「……っ、が!？」

押さえつけていた頭と上半身を持ち上げ、首へと両腕を回すと一息でその骨を折り、一瞬の内に彼を絶命させてしまった。死体となったそれを見下ろし、彼を殺した人物は懐に手を入れて小さな物を取り出した。

それは火炎弾。これを握りしめると「発現・牙炎」と眩き、死体を握りしめてやる。刹那、その右腕から猛々しい炎が噴き上がり、死体を一気に焼き尽くしていき、灰塵と化してしまった。

その炎を見つめる彼……十兵衛は一息ついて路地裏を歩き去る。

忍を殺したというのにしれつとした様子で表通りへと戻り、軽く視線を動かして他に忍がないかを探ってみる。

何をしているのかといえば、この港町に彼ののような風間の忍が入り込んだ事を察知したため、彼らを抑えにかかっているのだ。

酉丑灯。ヤマト国において魔族に対して排他的な三家のリーダーであり、風間の忍を従える女性。彼女が忍をここに送り込んだ理由は恐らく神倉月の死を調べるためなのだろうが、それ以外の何かも考えられる。

例えば、彼女の勘に従って何かを探っているのだとか。あるいはここにいる魔族を探



りに来たのだとか。

後者の場合……いや、後者でなくとも、魔族の調査によりあの双子を見つけ出されては自分達の行動が阻害されてしまう。それは避けなければならぬ。というか、あの子からここに風間が来ているなんて聞いていない。

あるいは伝えてこなかった可能性もある。……となれば、自分は切り捨てられるという事か？

それはそれで別に構わないが、かといってそれで自由になれるわけでもない。どうあつても自分とあの子らとは縁が切れそうにはないのだから。そう考えていると妙な動きをしている女性を発見。

その道の心得があるかのような足運びに視線の動かし方。

気を探ってみると、魔族の気配なし。どうやら風間の忍らしい。さつと路地裏に体を入れて素早く彼女の近くまで接近して様子を窺う。隙が見当たらない立ち居振る舞いをしていようだが、しかし小さな隙を見越して仕掛けていく事にする。

数分間尾行をし、路地裏の奥に入って独り言を呟いている様子に耳を傍立てる。

「魔族の双子ハンターがここにいますか。じゃあ明日からは彼女達について調べてみる事にしようかしら」

(……やはり知られたか。まだ報告していないようだし、残念ながらここまで)

一瞬の内に背後から仕掛け、その両手を挿んで建物の壁に押し付ける。  
「なっ……!!? あ、ぐ……ッ!!?」

頭を壁に打ち付けられたことで一瞬視界がちかついたところで地面に押し倒し、腕を極めて動きを封じる。そうして先ほどの忍と同じく、「風間の忍だな? ここで何をしている?」と問いかける。

「……つく、霧夜の……忍……、つか、ぐ!?!」

「質問を返すな。こちらの問いに答えろ」

眩きに対しても容赦なく腕を極めて苦痛を与えていく。忍というものはそう簡単には口を割らないものだが、しかしこうして苦痛を与えるなどしていかなければ、訊き出せるものも訊き出せない。

そして案の定、この女忍もまた口を閉ざしてしまふ。ぎりぎりと締め上げれば歯を食いしばりながら耐え、決して喋らないようにしているようだった。

「……じゃあ、別の事を訊こうか。魔族の双子について調べたようだが、何を調べた?」  
「……どうして、それを……つく……、答える、義理はないわね……!」

「そうか。相変わらず彼女らは魔族に対して厳しいらしい」

「……まさかあなた、ヤマト国の——」

「何も喋ってくれないんじゃないやあ、死んでくれ」

「——ッ!？」

決断は一瞬だった。彼女もまた上半身を起こして首に両腕を回していく。そのまま彼女が抵抗する前に首を折り、絶命させ、火葬する。これで二人。

一体何人送り込まれたのかはわからないが、恐らく二、三人あたりではないかと推測する。しかしそれにしても風間の忍を送り込んだ理由が何か、それをはつきりさせないといけない。

あの子は知っているのか、と考え、一応訊いてみるかと札を取り出して連絡をつけてみる事にした。

「……もしもし。こちら十兵衛ッス」

『あ? 何か用かよ?』

札から聞こえてきたのは機嫌の悪そうな声だった。しかしこれはいつもの事なので用件を伝える事にした。

「こつちに風間の忍がいたんですが、何か知りませんか?」

『あ、あ? 風間ア? ……ああ、どうせ灯さんが神倉月の一件で送り込んだんじゃないのか? ……なんだ? 出会っっちゃったんか?』

「……いえ、そういうわけでは。見かけてしまったんで、どうしたものかと思ひまして」  
よくもまあ二人も殺しておいてそんな事が言えるものだ。それを相手が表面上なの

か、あるいはその奥にある真実を感じ取ったのかはわからないが少しだけ無言になり、『ま、てめえならどうせ出会っちゃったとしても問題ねエわなア?』と相手を逆なでするような言葉遣いをする。

『もしてめえが風間の手で死んだとしても、アタシは知らねえぞ。そのあたり、わかってんだらうな?』

「……ええ、わかっていますよ。おいらはただのハンター。君……あなたの飼いだとして動くハンター、ですよ」

『……それでいいんだよ。だがまあ安心しな。調べたところ、あのクズはそっち方面にや行ってねエ。しばらくはかちあうこたアないだろうさ。……よかったなア? まだしばらくは生きていられるぜエ、ケツケツケ!』

「……ありがとうございます」

相変わらずな様子で何よりだ、と十兵衛は心の中で思う。初めて会ったときとはかなり性格が変わって……いや、歪んだようだが、根本的には変わってないようだ。本人はどうせ認めないだろうが、今の言葉の裏にはたぶん十兵衛がまだ生きられる保証がある事を伝え、喜んでいいるような気がする。

それを相手を挑発するような言葉遣いと態度で覆い隠しているだけ。

彼女は本当は素直でいい子だ、と十兵衛は思い続けている。だからこそ、こうして頭

を下げて付き従い続けている。だが、ちよつとだけその意向には従わず、一部の情報を横流ししていないのだが。

『で？ 話はそれだけか？』

「ええ、すみません、時間を取らせてしまつて」

『まったくだ。アタシだつて暇じゃねえんだよ。てめえに割く時間なんて、一分一秒だつて惜しいんだよ。わかつてんのかア？』

「はい、承知しています。……大砂漠の調査、ですよね？」

『おうよ。こつちでも色々異変があるらしいからなア。それに霧夜の忍もきな臭工動きしてやがるし、これはきつと何かあると、このアタシ直々につつこんでいつているわけだ』

(……時間が惜しいんじゃないのかな？ほんと、相変わらずだ)

ペコペコ、と札を手にしたまま誰もいない空間へと頭を下げる十兵衛は、心の中で苦笑を浮かべてしまう。なんだかんだ言つてちよつと訊いてみれば、時にはこうして乗つてきて話を続けていく。

こういうところが妙に可愛く思えてくる。そしてその一面を知っているからこそ、どうやら自分はまだあの子との縁を切れずにいるらしい。

『……つて、付きあつてられねエつて言つてんだよ！ 話がねえんだつたら切るぞゴ

ルア!？」

「はい。では失礼します。……本当に荒れてるツスから、気をつけるんすよ?」

『うつせエわボケエ! てめえに心配されることはねエって言つてんだろうが! いつでもアタシを子ども扱いすんなアツ!』

「……っ、うつす」

最後に少し心配してみれば、やつぱり怒鳴られてしまった。子ども扱いされるとすぐ怒るところも変わらない。昔から背伸びびしてみせる事が多いのは、性格面もあるし、その体格面もある。

……まあ、自分も男にしては小さい方ではあるが、もうこれについてはどうやら血筋の影響らしいから諦めている。でもあの子は諦めていないらしい。そこがまた可愛く見えてしまう。……やつぱりこういう感情は父性なのだろうか、あるいは妹を見守る兄のようなものだろうか。

変わっていないのはあの子だけでなく自分もらしい、と改めて思いながら十兵衛はそろそろ宿に帰るか、と歩き出す。陰で行われた十兵衛と忍の戦いの事など、誰も気づかず知られる事もない。

ただ、時間をおいて連絡が取れなくなつたことで風間の忍が二人死んだという事が知られたのだが、一体誰が殺したのかという謎だけが残つてしまった。有力なのは神倉月

を殺した何者かが調べられている事に気づいて殺したのではないか、と真犯人である十兵衛から意識を逸らされてしまい、これにより悠々と十兵衛はまだここで活動を続けられることに成功した。

十兵衛の影の動きを知るのは……彼を飼い犬扱いする「あの子」のみ。

## 59 話

二日後、撫子は作り終えた武器を見回して小さく頷いた。壁に立てかけられているのは剣と槍。どちらも彼女の妹による依頼で作られた武器である。

剣は柄が蒼と桜の甲殻があしらわれた一品であり、刀身はどちらも高い火竜の力を宿している。以前はダブルセイバーとして存在していたこの剣は、今回は長剣、ダブルセイバーだけでなく、二つに分けて双剣としても扱えるようにギミックを追加してみたい。

銘を火竜剣【炎燐】。

状況に応じて三つの姿へと変化できる剣として仕上げた一品だ。

それだけでなく撫子はこれの上の設計図も頭にあり、それを紙に記している。原種、亜種と素材を使用したならば、この次の段階は当然希少種。

既に月が遺した希少種の素材を使用した剣……刀を手に行っているが、あれは龍属性の武器。瑠璃の火属性の武器はこれしかない。自分の手で最高の火属性の武器を仕上げるのはいつになるだろうか、と胸を躍らせられる。



隣にある黒いランスはブラックテンペスト改。昴から提供された黒角竜ディアブロス亜種の素材を使用して作られたランスであり、G級クラスの一品だ。素材としてはどうやら東方の大砂漠などにいる個体から得られたものようであり、十分に高い強度を誇っている。

それに聞いたところ、茉莉はG級のラギアXシリーズを身に着ける予定があるようだ。となれば、これに秘められている属性である、爆破が目覚めるという事でもある。つまりこれはラギアXシリーズを身に着けていければ、爆破槍として扱える。

そう考えれば、また心躍る話ではないか。

二つの武器を見回す撫子の表情は満面の笑顔。いい仕事をしたという喜びと、また妹のために武器を作る事が出来たという姉の喜びが彼女を包み込んでいた。

それらをローブへと収めると、「じゃ、おとーさん。行ってくるね」と頭にタオルを巻いている岩徹へと声を掛けて外に出ていった。彼女の背中へと「おう。気をつけてな！」と声を掛けて見送る。

そうして彼女は待ち合わせ場所である酒場へと向かっていった。

一方こちら、ルシフェル宅では昴達が着替え終え、準備を整えていた。昴の足元には彼の娘である菜乃葉と楓がじっと彼を見上げている。そんな彼女たちの頭を優しく撫でてやり、昴は屈みこんで目線を合わせた。

「じゃあ、お父さんたちは行ってくるよ。いい子で待っているんだぞ?」

「うん。気をつけてね、お父さん」

「だいじょうぶだつて。グリーンやリーフだっているし、さみしくねーよ」

「そう言う楓が一番心配なんだけどね。あんまおいたするんじゃないわよ?」

「あー言ってくれるなーおかん。オレがもんだいを起こすつて?」

「その元気が有り余つて何かしでかすんじゃないかと思つてしまうのよね。菜乃葉、しつかり見ているのよ?」

「うん、まかせて。紅葉さん」

しつかり者として育ててきている菜乃葉に楓を頼んでしまう程、楓の元気さは子供らしさだけでなく、紅葉の影響が引き継がれているといつてもいい。そしてその楓がいるからこそ、恐らく菜乃葉の落ち着きにも磨きがかかつていつていられると思われる。

まだ少し心配だが、ここにはルシフェル一家がいるし、鍛冶屋の一家もいるため大丈夫だ。今回の一件には娘達を連れていくわけにはいかない。そのため寂しがらせる事になるかもしれないが、仕方ないだろう。

紅葉と優羅も交互に娘達の頭を撫でてやり、優羅も「……寂しがらせるだろうけど、ごめんね」と言葉をかけてやる。それに菜乃葉は小さく首を振り、

「ううん。お父さんもお母さんたちもがんばらなくちゃならないんだよね? わかつて

るもん。だから、私たちががんばる。さみしくなんてないよ」

「……菜乃葉」

そのけなげな言葉に優羅は少しだけ呆けてしまったが、やがて微笑を浮かべてその顔を抱き寄せて優しく撫でてやる。それに少しくすぐったそうな顔をしながらも、菜乃葉は優羅にしがみついて頬を摺り寄せて甘える。

まるで優羅の温もりと甘い匂いを忘れないように。

そうして別れを惜しみ、しかし時間がやってきたため三人は娘達から離れ、クロム達へと視線を向ける。

「じゃあ、二人を頼む」

「おう、任せな」

「なんかあったとしても、ウチらがしっかり守つたるから」

花梨がにと笑って頼もしげに胸を叩く。クロム達が去つた後は花梨をはじめとする一家が面倒を見る事になつてゐるため、彼女も時折この家へとやってくる事になつてゐる。

またルシフェル一家が去れば、花梨がここで暮らして一日中面倒を見てくれることになつてゐる。ハンターの仕事が来れば、撫子か岩徹、あるいは村人の誰かが見守る事になつてゐる。

こうやって交代制ではあるが、娘達を誰かが見てくれることになっており、そして昴達も彼女達ならば信頼できるため、こうして預けていくことになった。

頼もしき仲間がいてこそその事。視線を交わして領きあうと、白銀一家は宝石を取り出して念じ始める。すると淡く宝石が光だし、それは昴達を包み込んでいく。そうして光に包まれた三人の姿は変化し、それぞれ東方で行動していた際の仮の姿となった。

髪、瞳、顔付き、声……それぞれを変化させ、同時に名前も偽名へと変えていく。

もちろん服装やローブの外観も変わっており、ぱつと見て彼らが白銀一家だと気づく事はない。また優羅も魔族、シユヴァルツの血統である事を隠すための術式も施されており、よほどの事がなければ彼女がそうである事に気づく事はなくなっている。全ては平穩に、隠れ住むためのもの。こうでもしなければ彼らは東方で生きていく事は出来なかった。

ルシフェルの家から離れ、酒場へと向かっていく。その背中をクロム達は見えなくなるまで見送った。

そして酒場へとやって来た昴達は先に来ていた撫子に合流し、それぞれモドリ玉を手にする。撫子は別のモドリ玉にこの酒場にあるランプの粒子を詰めてインプットし、向こうに飛ぶためのモドリ玉を手にとると、一斉に床へと叩きつけた。

「……というわけで紹介しましょう。私達の知り合いである、星野さんたちです」

「星野翔。このチームのリーダーを務めている」

「……灰原なずな」

「芙蓉桜。よろしくね」

「そして、この子達の姉の撫子だよ」

「は、萩原、十兵衛ツス。よろしくツス」

宿の一室、こうして自己紹介が行われる。部屋にあるモドリ玉の粒子が詰められているランプの傍に現れた昴達は、部屋にいた瑠璃達と目が逢い、そして突然の来訪者に驚いた十兵衛と、十兵衛がつけているスカルSフェイスに驚いた昴達と視線が交差された。

一見して怪しい人物である十兵衛を見た昴達だったが、ハンターだったことが幸いでちよつとだけ怪訝な視線を向けるだけに留まった。

自己紹介をしいあい、どうしてあれをつけているのかを説明を受けて納得すると、撫子が纏っているローブから注文の品が手渡される。

「はい、火竜剣【炎燐】とブラックテンペスト改ね」

「ん、ありがとう姉さん」

「ありがとうございます。……星野さんも」

「ああ、気にするな」

リオソウルとリオハートの素材を使って作られただけあり蒼と桜が映える火竜剣【炎燐】。

強固な素材によってそうそう折れることなく伸びる漆黒のランスであるブラックテンペスト改。

これらによって二人の火力は上昇された。あとはこれらを上手く扱えるかどうかにかかっている。武器が良くても持ち手が良くなければ宝の持ち腐れなのだから。

撫子は二人に武器を手渡すと軽くこれらの説明をし、「じゃあ私はこれで帰るね。また何かあればいつでも言つてね」とウインクすると、帰りのモドリ玉を叩きつけて消えていった。

残った昴達は、早速ギルドの登録を済ませるため酒場へと移動する事となる。

十兵衛もつれて酒場へと向かっていき、受付嬢へと登録の旨を伝え、三人はペンを走らせて登録を済ませた。

そうして今日はどんな依頼が来ているのだろうかとかクエストボードへと向かってみると、そこにはプルートの依頼書を眺めている姿があった。彼は瑠璃達に気づくと視線を動かし、「おお、貴様達か……つと、新顔か？」と昴達へと視線を動かしした。

「ええ。私達の知人のハンター達です」

「ふむ、知人か。ならば名乗ろう。我は天王寺冥夜と言う」

「星野翔だ。チームメイトの灰原なずなど、芙蓉桜。瑠璃達とは昔からの知り合いで、今日ここにやって来て再会したところさ」

「ほう。そうかそうか、こうして会ったのも何かの縁であろう。よろしく」

そう言つてプルートの手を差し出してきた。昴はその手を取り、しっかりと握手を交わす。そうしつつ、お互い何気なく相手の事を観察してしまっていた。その手の硬さ、相手が持つ気質を素早く探り、そうして出した答えは、

(……出来るな、この男。ただ者じゃない)

(ふむ。長年積み重ねた技術の結晶、といったところか?)

といったものだった。

握りしめていた手を離し、それぞれクエストボードへと視線を移すと並んでいる依頼書を眺めてみた。相変わらずターゲット指定されているモンスターは強力なものが並んでいるらしい。

その中でプルートが手にしたのは、アグナコトル討伐クエストだった。船で移動した先にある火山の採掘場付近でアグナコトルが現れたらしく、それを討伐してほしいというものらしい。

それを手にすると、「では先に失礼するぞ」と一礼してカウンターへと向かっていく。

それを見送り、今度は昴と共に依頼書を探してみる。

「リオレイア亜種とドスフロギイの討伐依頼があるわね。二頭討伐でもして肩慣らしといく？」

「……アタシとしては問題ない」

「じゃあこれにするか。近場だからさつと終われそうだな」

そんな話を話す三人に瑠璃と茉莉は少し引き気味だ。二頭討伐を軽い調子で引き受けるだけでなく肩慣らしと言ってしまふあたり、やはり三人とも凄腕のハンターになっている事がひしひしと伝わってくる。

自分達だつて負けてられない、と瑠璃が見回し、目についたのがこれだ。

ドボルベルク討伐依頼。

以前も茉莉が見まわした際に見かけられたものであり、内容としてはここから船で移動した先にある島の森にドボルベルクが現れ、住民たちが不安になっているというものだった。

ドボルベルクは草食竜ではあるが、その巨体と強靱な肉体を駆使して戦う竜であり、縄張りを荒らしに来た敵はそれを以つてして排除しかかる存在だ。その脅威さは十分にモンスターの中では上位に入るものであり、実力あるハンターでなければ討伐は難しいとされている。



「ドボル……ツスカ？ おいらとしては構わないツスカ、大丈夫なんスカ？」

「大丈夫よ。姉さんに強化してもらったあれを試すにはいい相手だし」

「そうですね。私としても試してみたいですし、異論はありません」

「そうツスカ……なら、おいらも異議なしツスカ」

こうしてそれぞれこなすクエストが決定された。準備を行うために一度宿へと戻り、昴達は瑠璃達とはまた違う部屋を取り、茉莉は鍛冶屋に依頼していたラギアXシリーズを受け取りに行く。

撫子から貰った武器をチェックし、準備完了。

昴達はアプトルに騎乗して直接森へと入るため、港前で分かれる事になる。竜小屋はここから町の出口付近にあるため、手を振ってそれぞれ移動していった。その際にブルート達も同じように港へと入っていき、また同船する事となった。

「……………」

ふと、優羅がブルート達へと振り返り、目を細めた。酒場の時から気になっていたようだ、同行している天和と刹那を見てからはその妙な感覚が優羅の中に生まれていった。

変化の影響で変色しているその漆黒の瞳はじつとブルート、続けて天和を見つめており、切れ長のその目は若干鋭さを増している気がする。

「どしたの、なずな？ なにか気になる事でも？」

「……………いや、どうもきな臭い感じがして」

「彼らか？ どんな具合に？」

「……………鋭い刃の気。見た目も変えているようだけど、あの女……………腑抜けているように見えて、中身は触れたもの全てを斬るかのような刃を感じる」

「剣士、か」

外見的には問題ないように見えるが、内面的には少々気に掛けるところがあるという女性か、と昴は纏める。確かにこうして見る限りではぼうつとしているような女性だ。その手にはどういいうわけか飲み物が入った一升瓶があり、時折口元に運んでは飲み進めている。

酒ではないようだが、道端で飲むという行為を少ししなめる女性はとうとずつと目を閉じたままだ。それは盲目であるが故だが、何も知らない優羅たちは首を傾げるのみ。

しかし彼らを止める事は出来ない。それぞれ共に港に停まっている船へと向かっていった。気がかりな点はあるが、自分達もまた狩りへと向かわねばならない。プルートの事は戻ってきてから陰で調べてみる事にしよう。

そう決めた三人は童小屋へと向かい、アプトルに騎乗して狩場へと向かっていった。



瑠璃達とプルト達を乗せた船は数時間の航海を行っていた。今回向かう先はどちらも同じ場所にある。港に着いた後は瑠璃達は直進して森の中へ、プルト達は南西へと下つて火山に入るルートへと進む予定となつている。

タンジアの港から南西へと進んできたが、まだ視界には果てしなく広がる青い海がある。到着予定は日暮れであり、太陽はまだ空高く昇つている。

しかし天和は船内にある食堂で酒盛り……いや、持参してきたジュースをかたづけしから消費し、つまみも用意してはただ無心に食べ進めている。相変わらずの大食漢だ、と思うしかない光景であり、船員たちも呆然と見守つていた。

茉莉は自室で読書をしており、そのタイトルはどういうわけか「ボケとツツコミ」というものであり、それを見た瑠璃が「どういうつもり？」と訊かざるを得ないものだった。昔から茉莉は時々訳の分からないタイトルの本を読んでいる事があるが、これに關しては瑠璃はどうしてもツツコミを入れざるを得なかった。

「え？ 何か問題でも？」

「いや……だつてそれ、なに？ 誰かと……十兵衛とでもそういうコンビ作るわけ？」

「なにをおつしやいますかー私の相棒なんて、瑠璃以外の誰がいるっていうんですかね？　なにかの冗談ですか？　やだー」

「それこそなんの冗談よっ!!　あたしは別にそういう事をするような素質があると思つてんの!!」

「……ふふふ、このやりとりそのものがボケとツツコミであると何故気づかないのかねー?」

「……はっ!!」

息を呑む瑠璃へとにやりと笑い、茉莉は本を閉じて固まってしまっている瑠璃へと近づいてぼん、と優しく肩を叩いてやった。それは彼女を憐れむようでもあり、しかし同時に親愛さも含まれ、こちら側へと少し引き込むような呼び声でもあった。

そつと耳元へと口を近づけ、

「瑠璃、あなたには素質があります。優れた“弄られた異質”という、素晴らしい素質がね」

「……そ、そそ、そんなものいらんわああああアッ!!」

ばたんっ!　と強く扉を開けて廊下へと飛び出していった瑠璃だったが、気のせいかな小さな涙が見えた気がした。しかしそれすらもどこか愛しさを感じさせるような、見事な逃げっぷり。

それを見送った茉莉はどこか満足そうな笑顔を見せ、

「ふっふっふ、本当に、我が姉ながら可愛いですねー。いやあ、実に愛で甲斐がありますよ。さて、次はどう愛でましょうか、ふふふ……」

ちよつぴり紅潮したように、赤く火照っている頬に手を当てながらどこか満足そうに頷く茉莉。どこか歪んだような、いや見方によつては本当に仲のいい姉妹愛がそこにある。……のだが、ベッドの布団に少し隠れながら置かれているその本に視線を落とせば、どこか禁断の果実の香りがする。

その本のタイトルは……「白百合の愛で方」。タイトルからすれば百合の育て方、ととれるかもしれないが、どういうわけか表紙は白百合を背景に、美少女が見つめ合つて指を絡めているものだった。

最後まで気づかなかつた瑠璃ではあるが、気づいていればどうなつていたのだろうか。

そして茉莉の読書のレパトリーが少し心配になるような、そんな日常の一端である。

一方、こちら甲板では十兵衛と刹那こと桐生雪菜が揃つて海を眺めていた。とはいえ彼女自身がそうだと云っているわけではないため十兵衛の推測でしかないのだが。

盲目である彼女にとっては海が青い事はわからない。色合いが少し違う空の青さも

わからない。わかるのは潮の香りとそれが体を撫でていく事、そして時折聞こえてくる水の音だけ。

こうして並んで眺めて数分。二人は特に言葉を交わしてはいなかった。ただ気づいたら並んで海を見ているという形になってしまっていたのだ。それに驚いているのは十兵衛。骸の下では小さな雫を頬に流しながら混乱している。

(……………なにこの状況? どうしてこうなってるんだ? ただ一人でぼうつと時間を潰そうかと考えていたのに……………桐生雪菜、一体何が目的だ? まさか、おいらの何かに気づいているのか?)

警戒心を抱き始めた頃、雪菜はぼつりと言葉を漏らした。

「穏やかやなあ……………」

「……………え?」

その一言に思わず呆けたような声を漏らしてしまった。隣にいる刹那へと振り返れば、彼女は見惚れる程に綺麗な微笑を浮かべていた。

「実に、穏やかな雰囲気やないの。この海のどこかで、強力なモンスターが出現し始めている、なんて空気を感じへん。まさに、表面上の穏やかさや。……………でも、この時そのものは、表面上であつたとしても、こうして見惚れるくらいの落ち着いた空気がある。ええもんやなあ」

そういえば桐生雪菜といえぱいいところのお嬢様だったか、と十兵衛は思い出す。東方人は昔から縁を大事にし、自然を静かに眺める事を好む。季節の移り変わりや風流を楽しみ、穏やかな時間の流れを楽しむ。……わびさび、とか言ったか、と十兵衛は思い返した。

彼女もまたそういう事を愛する人なのかもしれない。見る事は出来なくとも雰囲気は感じ取れる。それを楽しんでいるのだろう。

「萩原さんは海は好きなん？」

「……どちらともいえないツスね。あんまり海には来た覚えはないツスから」  
「火山によおつたから？」

「そうツスね。……とはいってもそれ以前は普通に東方を巡ってたツスよ？ 火山も一人で籠るなら十分な場所だったってだけツス」

「二人、か。一人が、好きなん？」

「……………こうなつてからは、そうツスね。めんどろなことになるのは嫌いツスから」

醜い傷が刻まれ、仮面で隠し、そしてその仮面もまた人を遠ざけるもの。人の視線に晒され、しかしそれによって下手に人と関わらずに済むようになった。それだけでなく人見知りとなる事で人と関わったとしても深くまでは繋がらずに済んだ。

……桐音はそれでも普通に親しくなつてくれた例外だ。しかしそれを疎ましく思う

事はなかった。それが彼女の姉御肌な人柄と言う影響だろう。人と関わらず、人を遠ざけてから深く親しくなった唯一の人物といえる。

そんな彼女の縁で出会ったあの双子もまたいい友人だと思えるようになってきている。

傷を負ってからはそれまで築いた繋がりはほぼ全て消え、友人も離れていったことで一人を好んだ彼にとつての久しぶりの友人だった。大事にしたい縁だと思っている。「あの子」にチームメイトであるあの双子が魔族……いや、竜魔族だと知られるまでは。

「めんどろなこと、か。ふふ……せやなあ、めんどろなことは避けたいわな、ん。……その実力を隠すつてゆうんも、めんどろなことを避けるためなん？」

「……んん？ なんの話ツスか？」

「ふふ、なんも。聞き流してくれてええで」

くすり、と微笑を浮かべる雪菜ではあるが、十兵衛はやはり何かを感じ取られてしまっている、と思わざるを得なかった。彼女の高い感知能力に引つ掛かってしまっているんだろうか。

あつさりと同じ下がつてきたが、これは少し警戒を高めるしかないだろうか。

そんな時、甲板へとあがつてきた瑠璃が現れる。茉莉から逃げ出した彼女は少し甲板



に出てみようと思ったのだが、先客がいた事に気づいてそちらへと視線を向けてみた。

「……………？ 十兵衛と……………壬生さん？」

並んで海を見ている二人の背中を見て首を傾げ、そして気づいたらどういいうわけか物陰に隠れてしまっていた。距離が離れているせいで話し声は聞こえてこないが、こうして見ていると妙に仲がよく見えるのは何故だろうか。

（いつの間にあんな仲に？ どういう事？ ……そういえば前回もなんか一緒にいたよ  
うな？）

前回同船した時も何故か並んでいたような気がする、と瑠璃は思い出す。そして彼女は知らないが、夜の港町でも一緒に散歩し、彼女の宿まで送り届けた事もある。十分に接点はあった。

とはいえそれは雪菜が十兵衛の事を知ろうという目的のため、彼に近づいただけなのだが、何も知らなければ仲のいい男女にしか見えなくなってしまう不思議。

本人らは腹の探り合いをしており、十兵衛は少しずつ雪菜に警戒心を抱きだしているのに、距離が離れていて声も聞こえず、あの空気を感じ取れなければ、まるで海と一緒に眺める恋人同士に見えてしまう。

瑠璃はそう感じ取ってしまっていた。

（……………あれ？ なに、この感情？）

そして不意に胸がちくりと痛くなつてしまい、息が苦しくなりだした。なんだろうか、この感情は？ 思わず胸を軽く押さえてしまふ瑠璃。

どうしてこんな痛みがするのかわからぬ、心が揺れるのか。その理由がわからない。ただちくちくとした痛みに戸惑つていたその時、

「——ほう？ なかなかおもしろいことになつておるな」

「ひゃあ——むぐつ、むーつ、んんーッ!?」

「まあまあ、落ち着け」

背後から音もなくやってきて声を掛ければ誰だつて驚き声を上げてしまふだろう。だがプルートの素早く瑠璃の口に手を回して黙らせつつ、優しく声を掛けて落ち着かせてやった。

「そう騒ぐと気づかれよう。刹の感知は凄まじいからな。こうして陰から見守るには騒がず静かに、そして気配を消してやらねばならん。……さて、落ち着いたか？」

「んーっ、んんっ」

こくこくと頷く瑠璃の口から手を離し、二人揃つて十兵衛と雪菜の様子を見守つてみる事にする。相変わらず話し声は聞こえないが、やはりああして静かに海を眺めている様子はというわけか心を小さくかき乱す。

そんな瑠璃に気づいたのか、プルートは小さく笑つて「なるほどなるほど」と何度か

頷く。

「若いのはいい事よな。本当に、おもしろいことになっておるわ」

「……………どういう事よ？　っていうか、若いって……………天王寺さんも若いんじゃないの？」

「む？　……………ああ、そうだな。我も年齢的には……………若いか。フツハツハ、これは失敬。だが、フレアウイング姉よ。貴様は今、心が揺れているのではないか？」

「え？　なんで……………」

「わかつたのか、と？　見ればわかる。わかつてしまうほど、今貴様の顔はなかなかいいものをしておる。若さゆえの青い果実に朱が差し込むように熟れ始めておるわ。……………要は、いい女の顔をしてきている、という事よ」

「な、何言っちゃつてんの!?　そんな、褒めても何も出ないわよ!?　ってか、なに？　あたし、そんな……………へんな顔してんの!？」

ぺたぺたと自分の顔に触れながら慌てふためく瑠璃を見て、プルートのはにやにやと笑ってしまふ。実に微笑ましい事だ。しかしどうやら見たところ、瑠璃はそういう経験がないんだろうな、と思ひ至れる。

まあ、魔族だから二十歳といつてもまだまだ若い部類だ。種族的な年齢でいえば人間換算で十代前半くらいのものでしかない。つまり、プルートが言っていたように青い果実だ。

赤く熟すには十年以上はかかるといふもの。……しかしその母親がこれくらいの年齢で結婚して子供を産んでしまつていふのは、置いておくとしよう。

慌てる瑠璃を横目に、プルートの雪菜へと視線を向ける。命じた通り十兵衛の事を調べるため、彼に接触したという事は聞いていたが、あそこまで接近するとは思わなかつた。

（やはり萩原十兵衛そのものに興味を抱いたか？ ああ、桐生雪菜がな……珍しい事もあるものよ）

実家の桐生家はヤマト国において上位に位置する程の名家。そのお嬢様ならば、相手は選り取り見取り。ハンデは抱えているが、それでも容姿端麗であり、才能だけでなく知識も兼ね備えた女性だ。

その落ち着きも立ち居振る舞いも洗礼されており、まさしく深奥のお姫様といつても差し支えない。実家にいた頃は、彼女に交際を申し込む男性は結構いたらしいが、雪菜はそれを丁重に断り続けていた。

こうしてプルートと共に行動しているが何も起こる事はなく、武と組んだとしても何もない。ここまでくると男に興味がないのか、と思つてきたものだが、なんだあれは？ 萩原十兵衛の何かが雪菜の琴線に触れたのだろうか？

そうなのだとすれば、実に興味深い。こうして見ているだけではわからない何かが多

兵衛にあるのだろうか？ 雪菜はそれを見つけたのか、あるいはこれから見つけ出すのか。

次の報告が楽しみでならない。そして願わくば十兵衛をこちら側へと引き込んでみたいところだ。そうすれば、雪菜はより一層十兵衛と共に行動できるだろう。それから本気の恋愛に発展すれば、実におもしろいことになるだろう。

(そうなれば、この者に悪いことをするだろうが、まあ気にする事はあるまい)

自覚症状がない、初期の段階なので略奪愛にはなるまい、とプルートは考える。青臭く、しかし若さゆえの甘い恋愛模様も良し。大人のような深みがありながらも、ドロドロの男女の感情がぶつかり合う恋愛模様も良し。

傍観者ならばそれを楽しめるのだから。

自分の事は……遠い昔に終わってしまったのだからこそ、傍観者となる。あの頃の想いはまだ胸に残っているが、それが叶う事はもうない。伴侶と決めた女性と、アーサーと共に戦場を駆け抜けた日々は遠い記憶の彼方。

彼女を巡ってアーサーとやり合った事もあるし、ただ二人で穏やかな時間を過ごした事もある。もうあの日々は取り戻せないならば、第二の生を生きる今、新たな誰かと繋がる事もあるかもしれないが、今はまだそれはない。

共に行動している雪菜も天和も、そういう相手とは思えないのだから。

雪菜はあの通り、十兵衛に興味を持っていて、今もなお食堂でぼうつとしながら食べ進めている。天和は……あたかも妹かペットを眺めているかのような気分になつてしまふ。

愛でる分にはいいかもしれないが、女として見るかどうかは別の話。実力は確かに申し分ないだろうが、しかし普段の雰囲気、それをマイナスさせる。プロポーシオンは確かに女を感じさせる色気はあるだろうが、雰囲気は完全にペットのそれだ。

そう、彼女は女と言うよりは獣。眠れる獅子といつてもいい。

獣と睦み合う気にはなれん、というのがブルートの弁。

そのため第二の生において女とそういう雰囲気になるのはほぼないだろう、とブルトは自己完結してしまつていた。そのため傍観者となる。雪菜の恋愛模様を眺めるもよし、天和がもしかすると武とそう言う雰囲気になるかもしれない、と眺めるもよし、としている。

「ちよ、ちよつと天王寺さん」

「……ん？ どうした？」

そうやって色々思い返していると、片手で頬を押さえながら瑠璃が呼びかけてきているのに気付く、そちらに視線を向けてみる。

「なんか頬が熱い気がするんだけど、これなに？ あたし、なんか体調崩しちゃつてんの

？」

「……………若いな……………」

なんてベタな勘違い。これもまた若さゆえ、か。

真実を教えてもいいかもしれないが、ここはそれに触れずにおいておこうか、と考えてみたりする。だが……………そうだな、ちよつとだけそういう事を感じさせるような事を言ってみるか、と口を開いた。

「そうだな……………ある意味体調を崩しているやもしれぬな」

「そ、そうなの？」

「ああ。人においてこれはなかなか曲者な病だ。どうやら見たところ初期症状のようだが、それが進行するか、あるいは消えるのかは貴様次第だ。フレアウイング姉よ」

「どういふこと？」

「さてな。こればかりは自分でどうにかするしかあるまいよ。これは誰かの手で治すよなものではない。自分で気づき、手当てしなければならぬ」

笑顔を見せてそう言い、話を締めくくってしまった。これくらいの助言に留め、あとは自分で気づくしかあるまい。果たして気づくのかどうかも気になるが、これは彼らが間近で見守っていくだろう。あくまで自分はただ居合わせただけなのだから。

さて、このように穏やかな空気の中、狩場へと航海を進める一行。雪菜が言っていた

ように、例えば表面上の穏やかさであっても、これを楽しみむだけのいい空気がここにはある。

このまま何事もなく穏やかな航海を進んでいける、と思われたのだが、しかし現実はその甘くはなかった。

「……なんや、これは？」

不意に雪菜がそう呟いた。

同様にプルートも何かに気づいて辺りを見回し、「……この気配は」と呟く。

今まで隠れていたが素早く海へと向かって走り出し、辺りを見回して気配の主を探してみる。

「これは、ルドロスの群れだな」

「リーダーであるロアルもおるな。しかもこれは……何かから逃げとる」

船の進行方向から左側、しかも進行方向から逆向きに逃げてくるかのような動きをしているのだ。

しかも群れの規模が異常であり、「なんやこれは……百匹以上おるやないの。ロアルも二……いや、三おるし、複数の群れが一斉に逃げとるで」と雪菜が息を呑む有様。

更に言えば、

「ラギアクルスから逃げているのかと思ったが、違うな。そのラギアクルスすらも逃げ



ている……!」

ロアルドロスが率いる群れの背後から高速で追従しているのがラギアクルスの気配。普通ならばその群れを捕食するために追いかけていると思うだろうが、どういいうわけかルドロスの中に突っ込んでも何もしていない。

むしろその群れを追い抜こうとしているかのように高速移動している。

この異常事態に、プルートの顔ははつと顔を上げ、船員へと叫んだ。

「船の進路を変えろおツ!」 「面舵いっぱい!」 「モンスターの群れだあツ!!」

「な、なんだって?!」 「おい!」 「進路変更だ!」

距離はかなり離れているが、気配探知の高さ故に感じ取れた異常事態。数百メートルの距離など、両者の進行速度ならばそう時間もかからず遭遇してしまうだろう。

舵を取る船員へと連絡がいき、船はゆっくりと右へと方向転換していく。すると進路方向の左手に、僅かにロアルドロスらしき影が見えてくるようになってきた。続けてルドロス達の影も見えだし、確かに何かから逃げているかのように慌てている様子が見てとれる。

「……あかん」

「ど、どうしたツスカ?」

「こら、あかんわ……やばいなんてもんやないで。冥!」 「結界や!」

だがその不安をさらに上乘せするように緊迫した様子で雪菜が呟き、プルートへと結界を張るように叫んでしまった。それにプルートが準備をした時、船内から勢いよく天和が飛び出し、辺りを見回して左手へと向かっていく。

続けて茉莉も出てくると、「一体何事です？」と瑠璃へと訊いてきた。

「臨戦態勢をとりい！ とんでもないもんが来るで！」

普段から落ち着いた雰囲気を持つ彼女がこれほどまで慌てる様子はそうそうない。甲板に出揃ったハンター達はただ一点を見据える。ロアルドロスらが率いる群れはもうそこまで来ている。

それだけでなく、ラギアクルスが海から上半身を出して姿を見せてきたではないか。一瞬この船へと視線を向けてきたようだが襲ってくるようなことはせず、逃げる事のみを考えて泳ぎ続けている。

そうして、さらに進行方向へと意識を向けてみれば、何かが迫ってきているのがわかった。それがとんでもないものだ、というのがわかる程に強大な気配。

プルートが船を囲むように結界を張った瞬間、それは勢いよく海上へと飛び出してきた。その勢いに無理やり乗せられ、数匹のルドロスが宙を舞う。それらを纏めて口へと取り入れ、丸呑みにするその巨大な姿。

雄々しく伸びる湾曲した一對の角。

後頭部からは鎧の如き強固なる甲殻と皮に包まれ、首回りは太く強固な金色の毛に包まれている。胸にまでかかるそれはまさしくたてがみのように見え、その巨大さと相反するように両手は魚のヒレのような両手は小さく見え、薄い青に光る神秘的な発行体が目を引く。

全体的な色合いは金色が主体であり、次いで黒が目立つその巨大なる龍……いや、龍なのかどうかすらわからないその姿。

「ギルヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

「ナバルデウス亜種……」

茉莉が呆然と呟いた。様々な本を読んでいる彼女は古龍種に関する事もまた知識にある。この広い海のどこかに存在すると言われる伝説的な存在、皇海龍ナバルデウス亜種の知識もまた存在していた。

だがこうして見る事になるとは思いもしなかった。

なにせ伝説として語られる存在だ。すなわち、発見例が少ない個体である。だから会う事はないと思っていた。

以前までならば。

迅雷が言った人と竜の戦い。シュヴァルツの血統を抹殺するために“世界”が竜を活性化させているという話。G級モンスターの登場もまた“世界”の意思によるもの

だとは思っていたが、よもやこのような存在まで姿を見せるなんて……狂っている。

だが現実。逃れる事も目を背ける事も出来ない現実だ。

数匹のルドロスを丸呑みにしながら、ナバルデウス亜種はその巨大な角の下にある目で船を見下ろしてきた。海上に出ているだけだというのに、見上げなければならぬ程にまでその上半身を出している巨龍。

それがまた海へと沈むまでの間、ゆつくりと向きを調節してナバルデウス亜種はその上半身を落としてくる。

「う、うわあああああッツ!」

船員たちが悲鳴を上げる中、プルートと雪菜は結界を更に構築する。それも一重ではなく二重、三重、四重と積み重ねての展開だ。そうして強固さを上げる中、ナバルデウス亜種の角が接触してくる。

だが、それは展開された結界に阻まれ、結界が軋みを上げて角が船へと落ちないように留めていた。しかしその重量と強固さにより、一つ、また一つと結界が破壊され、でもそれ以上突破できず、ナバルデウス亜種はまた少し向きを変えて海へと沈んでいく。

そうして次に襲い掛かってきたのは、沈む際に巻き上げられた波だ。高く舞い上がった波が結界へと襲い掛かり、しかし下で揺れる波は船の安定を崩してくる。

あくまでも結界は船上のみを防いでおり、船が浸かっている海に直接来る揺れまでは

防げない。

そしてこの船は風力で動いている。ナバルデウス亜種から逃げるためにスピードをいきなり上げるなんてことは出来ない。が、雪葉が手を翻し、進行方向へと薙いだ瞬間、それまで以上の風が吹いて帆へと力を与えた。

これにより船のスピードが上昇する事となる。

しかしナバルデウス亜種は逃がす気はなかったらしい。船に追従して背後から姿を見せて直接体当たりをしてきたではないか。

「……止める」

天和がロープから抜いた一振りの刀に気を箠め、背後から襲い掛かってくるナバルデウス亜種へと解き放つ。血のように赤い気刃がナバルデウス亜種の頭を切り裂いたが、それは小さく血を出血させるだけに留められた。

それに怯むナバルデウス亜種ではなく、背後に体当たりされた事で船が一瞬シーソーの如く船首が強制的に上げられ、そうして勢いよく海へと重力に従って叩き落とされた事で大きく揺れる事となった。

あちこちから上がる悲鳴と、船から振り落とされないようにとしがみつ়く中で、十兵衛は天和が持っているあの刀へと意識を向けてしまふ。

(つく……あの刀、まさか……天羽々斬……ッ!? なぜここに……うわっ!?)

ナバルデウス亜種がまた沈んでいく事で舞い上がった波によって船がまた大きく揺れる。それによってまた柵にしがみつゝ事になつてしまい、そして隣にいる雪菜もまた必死に振り落とされないようにしがみついていた。

不意に沈む際に振り上げられたナバルデウス亜種の尻尾が勢いよく船を叩きつけ、船尾が大きく抉り取られてしまった。それに驚く暇もなく、そこから一気に波が船へと入り込み、船が更にバランスを崩してしまふ。

「あつ……!?!」

不意に雪菜が体勢を崩し、揺れる船の傾きに従つて彼女の体が流れていく。

「危ないっ!」

咄嗟に十兵衛が彼女へと手を伸ばし、その柔らかい手を取つて引き寄せた。彼女に警戒心を抱いていた彼ではあつたが、しかし体勢を崩して落ちていくのを見逃すような事は出来なかつたらしい。

続けて船に襲い掛かる第二波。右舷側からナバルデウス亜種が飛び出して大きく波を発生させて船を揺らしにかかる。

その強い衝撃にたまらず十兵衛が柵から手を離してしまい、揺れる船に従つてごろごろと転がり、それでもなお雪菜を離さずに船尾へと落ちていく。

「なつ……十兵衛!」

「刹!?!」

気づいた時にはもう遅い。二人の姿は荒れる海の中へと消えていった。瑠璃とプルートは呆然と二人が消えた方を見つめていたが、ナバルデウス亜種は容赦なく船へと攻撃を仕掛けてくる。

結界でナバルデウス亜種による直撃は防いでも、続けてくる波の揺れまでは止められない。次第にバランスを崩され、ついに船は大きく傾きだした。

「て、転覆するぞおおおおッ!?!」

「きゃあああああッ!?!」

「瑠璃っ!」

「天、来い!」

「……………!?!」

それぞれ悲鳴を上げながらも、近くにいる誰かから離れないように手を伸ばし合う。瑠璃は茉莉と、プルートは天和と。船員たちは船員たちと繋がり、しかし傾き出した船が海へと沈む未来だけは変わらず。

全員が海へと投げ出されて沈んでいく。

続けてナバルデウス亜種がその巨体を生かして勢いよく海上へと飛び出す。一気に重量を生かして沈んだことにより発生した高波が、沈みだす船とそれに乗っていた全員

を押し流すようにしてしまい――

――彼らの行方は生死ともに完全に不明となつてしまった。



## 60話

狩場となつてゐる森へとやつて来た昴達は現地で合流したギルドのものらが持つてきたテントと連絡用の信号弾を受け取り、それらを準備して拠点を作り終える。

久しぶりの三人揃つての狩りは昴達の心を躍らせる。なにせ東方に隠れ住む間は家に幼い子供を残さないように必ず誰かが家にいなければならなかつた。それぞれ一人で行く事もあれば、誰かが二人で組んで行く事もある。

三人揃つてなんて、子供が生まれる前を最後にしていたと思う。それくらい久しぶりの……「吹雪<sup>ブリザード</sup>」の復活だつた。

そんな彼らの装備を見てみる事にしよう。

昴はエスピナUシリーズに鬼哭斬破刀・真打。彼にとつての馴染み深い得物と装備だつた。東方では珍しいエスピナUシリーズだが、彼はあれからずっとこれを愛用しており、強化も最後まで施しているくらいだつた。

こちらのG級モンスターもそれなりに討伐しているが、それをを用いて装備を作る事はあまりない。

それは優羅も紅葉も同じだった。

優羅もまたエスピナUシリーズを身に付けており、その手には撫子が強化させた魔狼砲【黒鳥】がある。どうやらこれを実戦で試し撃ちするつもりらしい。

最後に紅葉もまたラヴァUシリーズを身に纏い、武器は角王鎚力オスオーダーを選択している。

容赦の欠片もない、彼らの本気の装備が出揃っていた。

角王鎚力オスオーダーをくるくると重量など感じていないかのように軽く回転させ、鎚の部分をしっと見つめてチェックすると背中に背負い、紅葉は軽く森を見回している。

木々を吹き抜ける風はどこか心地よい感じがするが、森の奥の方では多くのモンスターの気配がしていた。それは優羅も感じ取っており、チップが嵌められているベルトを両肩から掛け、更に両腕の裏にもベルトを通して立ち上がり、じっと一点を見据えている。

「……フロギイの群れだな、あれは」

「やっぱり？ 結構な規模じゃない、あれ？」

「……軽く三十は超える。大きな群れだけど、紅葉にとつては問題ないか」

「ま、ね。それくらい、かるーく薙ぎ払ってやるわよ」

軽い調子で笑いながら両腕を交互に伸ばし、最後に背伸びをすると鬼哭斬破刀・真打の調子確かめて地図を取り出し出している昂へと並んでいく。

標的はドスフロギイとリオレイア亜種。

そのターゲットの片割れであるドスフロギイ。三十匹を超える規模を率いているよ  
うだが、ランク的にはこれは上位以上ならばなら不思議ではない。時には五十を超える  
群れを率いる上位のリーダーがいるのだから。

そしてG級ともなれば七十から百を率いるという。それだけでなくリーダーの実力  
も高く、率いられるフロギイらもまた強固な体を保有している。それが軍となつて攻め  
てくるのだからやり辛くなつてくる。

下位などでは大したことのない群れのリーダー勢だが、上位、そしてG級となり、群  
れの規模が大きくなれば驚異的な敵となる。ハンターにとつては狩りやすい相手でも  
奴らもまたモンスター。人族とは違う身体能力を持つ存在なのだ。舐めて掛ければ熟  
練ハンターであつたとしても死ぬ可能性が出てくる。

だから軽い調子になつたとしても、完全に油断はしない。地図を確認しながら三人は  
ベースキャンプを後にし、地図に記されている道に従い、フロギイらの気配を辿つて森  
の奥へと進んでいく。

そうしてやってきた一つのエリア。

そこには確かにフロギイの群れが存在していた。見渡す限りの橙色の皮と喉元に毒袋を持つ小型のモンスター。獲物に毒を吹きかけ、弱らせてから仕留めるといふ狩りを行う。

そのため奴らと戦うならば毒に備えなければならない。が、昴は毒半減、優羅は毒そのものが無意味という体質を持っている。紅葉はそういうスキルを持っていないが、当たらなければどうという事はない。

「では仕掛けていこうか」

「ん。じゃああたしがかき回してこようかな」

「ああ。その後に俺が続き、優羅が狙撃という形で処理していこう」

攻め方は昔から変わらず。

紅葉がハンマーを振り回して豪快に道を作りつつ奇襲を仕掛けて群れを混乱させ、

昴が続けて討ち漏らしたものを切り払って始末していき、

優羅が背後から狙撃して狩っていく。

少数対多数となればこうやって奇襲を仕掛けて掻き回して自分達のペースを作り上げ、混乱状態に陥らせたまま一気に数を減らす。それが三人のフォーメーション。

昔の事を思い返しながらいざ戦いを始めようとしたその時、優羅が何かに気づいて

「……待った」と声を掛けた。

魔狼砲【黒鳥】を手にしながら優羅の視線はフロギイラの方ではなく、空へと見上げられていく。小さく聞こえてくるのは木々のざわめきだけではなく、風を切るような音が少しずつ近づいてきているようだった。

「……亜種が来る」

それは一気に空から急降下すると、フロギイラの群れへと飛び込んでいった。ドスフロギイやフロギイらがギャアギャアと騒ぎだし、しかしリーダーの指示に従ってフロギイらが動き出す。

森の中に飛び込んでくる桜色の甲殻をした竜、リオレイア亜種。どうやらフロギイラを捕食しようというのだろう。強靱な足でフロギイを掴んでいこうとしたようだが、ドスフロギイがそのリオレイア亜種へと体当たりを仕掛け、続けて周りのフロギイらが飛びかかっていく。

「グルアアアアアッ！」

群がってくるフロギイらを薙ぎ払うように尻尾を振り回し、口から火炎を連続爆発させて噛み付きにかかる。だが数の暴力というものがある。三十以上というフロギイラを従えるドスフロギイの指示により、例え吹き飛ばされたとしても次々に別のフロギイが飛びかかり、離れていれば毒液を吹きかけていくという終わらない攻撃が続く。

指示するだけでなく、ドスフロギイもまた毒霧を吐き出してリオレイア亜種へと吹き

かけ、怯んだ際に体当たりを仕掛けて距離を詰め、尻尾を振るって叩きつける。見事な集団の狩りだ。

それを見つめる昴達は出ていくタイミングを失ってしまった。しかしこれは三人にとって好都合でもある。

ああやってお互い体力を削り合ってくれば、自分達は楽が出来る。

毒状態になってくれたならば体力も削れるし、リオレイア亜種がドスフロギイを仕留めてくれたならば、群れはリーダーを失って散り散りになる。

そうなってくれば後はリオレイア亜種を討伐するだけで終わる。いいことづくめだ。

なので昴達は待つ事にする。

「ヴオオオオオオン！」

ドスフロギイが咆哮し、リオレイア亜種の側面に回り込んでその首へと噛みつきにかかったが、リオレイア亜種が首を振ってそれを振り払う。尻尾を振り回しながらドスフロギイへと向き直り、一歩退いて斜めに回転するようなサマーソルトを放った。

突然のサマーソルトにドスフロギイが吹き飛び、フロギイ達に戸惑いが生まれる。低空飛行をするリオレイア亜種は周りにいるフロギイらを見回して尻尾を振るい、サマーソルトを放ち、火急を落として次々と仕留めていく。だがドスフロギイが起き上り、冷

静に指示を出してやれば、フロギイらも落ち着きを取り戻し、飛びかかって攻撃を仕掛けていく。

低空飛行ならばフロギイの脚力で跳躍すれば届いてしまう。その腹、羽ばたく翼へと爪を突き立て、噛み付いてやる事でバランスを崩そうという魂胆だ。

それは叶い、リオレイア亜種は連続して襲い来るフロギイの攻撃に耐えきれず、墜落してしまった。その好機を見逃さず、ドスフロギイが一気にリオレイア亜種の首へと噛みつきにかかり、フロギイらも続いて首や胸、腹や尻尾と次々と噛みつきにかかっていく。

小さなモンスター達でも集団で攻撃すれば大きな存在へと挑める、という野生の構図がそこにはあった。

だが仕留めるまでには至らないらしい。首を振り、溜まりに溜まった力を解放するよう怒号を上げて怒り状態へと移行した。口の端からオレンジ色の吐息を漏らし、力を溜めた後に大火星を撃ち出してきた。それは地面に着弾すれば大きく爆発して周囲を焼き尽くしにかかる。

その一撃だけでドスフロギイと近くにいたフロギイらが吹き飛び、地面を転がっていく。ドスフロギイは起き上れたようだが、周りにいたフロギイらはあの一撃で体を焼かれ、一部が吹き飛んで絶命してしまった。

リオレイア亜種の怒りの一撃。それを目の当たりにしたドスフロギイは低く唸り、何かを考えるようにした。フロギイらもリオレイア亜種の怒りの気に当てられ、戸惑う気配や怯える気配を持ち始めている。

それで決断したらしい。ドスフロギイは何度か吼えたと森に向かって走り出した。それに続くように生き残ったフロギイらが追従し、森の奥へと逃げていく。だが逃げるフロギイの一匹を捕え、体に歯を食い込ませながら勢いよく首を振り上げ、地面に叩きつけて意識を奪う。

そうして動かなくなったフロギイの肉を食い千切り、咀嚼して胃へと送り込む。だからと千切られた部分から血が流れ落ちていって地面に染み込んでいくが、リオレイア亜種は気にも留めずただフロギイの肉を喰らっていく。

さて、そんなお食事タイムではあるが、それをぶち壊しにさせてもらおうとしよう。

優羅が魔狼砲〔黒鳥〕に睡眠弾Lv2を装填すると照準を合わせてリオレイア亜種へと撃ち込んだ。距離が離れているため位置を知られる事もなく、僅かに発砲音を響かせて睡眠弾が射出されていき、装填と発砲を繰り返してリオレイア亜種がこちらに気づく事もなく眠りへと落ちていった。

見事な射撃。腕は衰えていない。

静かに草むらから出てリオレイア亜種へと近づいていった昴達はそれぞれ位置に付



き、紅葉が角王鎚カオスオーダーを握りしめて力を溜めていき、続けて鎚に渦巻く風を作り上げて圧縮。

それが一定ラインに留められた瞬間、

「——ふッ!!」

眠りから覚まさせないように叫ぶ事はせず、紅葉の一撃がリオレイア亜種へと叩き落とされた。みしみし、と甲殻が破壊されるだけでなく、中にある肉をも破壊していくほどの一撃に、たまらずリオレイア亜種が悲鳴を上げる。

だがそれすらも掻き消され、その顔は地面へと叩き潰される。

眠りに落ちている事で守りが弱くなり、そこに打ち込まれた紅葉の一撃。たったの一撃ではあるが、それはリオレイア亜種に瀕死へと貶めるだけの威力を秘めていた。が、僅かに命を繋ぎ止めたらしく、リオレイア亜種はふらつきながらも立ち上がる。

そこに鬼哭斬破刀・真打を抜いた昴が背後から斬りかかり、その自慢の尻尾へと一太刀、二太刀と斬り、最後に深呼吸をして弾ける電流に乗せて振り上げれば、尻尾の裏側から鋭く傷が走り抜けた。

尻尾を振るって抵抗し、火球を放ってくるのだがその動きを見切っていく。

「ふんっ!」

振り返ってきてても翼や腹、首へと鬼哭斬破刀・真打を振るい、着実に追い詰めていく。

顔からはだらだらと血を流し、激痛がリオレイア亜種へと襲っているだろうが、リオレイア亜種はそれでも生きるために抵抗する。

翼を羽ばたかせてもそれを側面から撃ち抜くように優羅が貫通弾Lv2を射出する。弱ったりオレイア亜種にとってその一撃は翼をもがれるに等しいものだった。飛び上がろうとしても翼を撃ち抜く弾丸は強い痛みを伴って片方から片方へと通り抜けていく。

頭にかかる激痛に翼の痛みが入ったところであまり意味はないだろうが、しかし翼にかかる負荷がリオレイア亜種に飛ぶ力を奪っていつていた。

また紅葉が嘯み付きや火球を躲しながら角王鎚カオスオーダーを振るい、頬や頭、時に首や胸へと打ち付ける事で更に負荷をかけている事も忘れてはならない。

角王鎚カオスオーダーの重量などという事はない風に、紅葉は素早く軽やかに動いてリオレイア亜種の攻撃を躲している。普段から鍛えているだけでなく、楓を肩車したままよく歩いたり階段を上り下りしたりしているため足腰は鍛えられている。

子供というものは思った以上に成長し、重くなってくるものだ。それだけでなく楓はよくはしゃいで動いてくる。それを支えて安定したまま動くというのは思った以上に難しい。

時に片手で支え、あるいは支えずに歩いているので、紅葉のバランス感覚や足腰の力

は彼女の見た目以上に高い。

そのため角王鎚カオスオーダーを構えたまま走るといふ事に關して、問題などあろうはずもない。

「どっせえいッ！」

構えた角王鎚カオスオーダーを回転させ、勢いよく振り上げてやればリオレイア亜種の顎をかち上げていく。顎から走り抜ける衝撃にリオレイア亜種の頭が揺さぶられ、力を失ったように転倒してしまった。眩暈状態である。

「仕上げッ！」

かち上げた角王鎚カオスオーダーに両手を添え、もう一度その顔を叩き潰すように振り下ろした時、桜色の果実が弾けるようにリオレイア亜種の顔が破壊され、赤い果汁と果肉を周囲にばら撒いてしまった。

べつとりと血糊が付いた角王鎚カオスオーダーを持ち上げ、それを振り回して血を払い、ポーチから布を取り出してふき取っていく。実に素早い狩りだった。

しかしそれもよく考えれば当然の事。

彼らの武具はG級。対してリオレイア亜種は上位個体。一つの壁を隔てたランクの差があるのだから一方的になったとしてもおかしくはなかった。

とはいえその素材を剥ぎ取らずに放置していく、というような真似はしない。使える

物は使つていく。それが狩りをした相手に対する、命を粗末にしないという心構えだ。尻尾を剥ぎ取り、その奥にあるかもしれないものを探ってみると、どうやらあつたらしい。雌火竜の紅玉を剥ぎ取つてその淡い光を眺めてみる。悪くないものだった。

他にも棘、甲殻、翼膜、と剥ぎ取つていき、もう少し尻尾を探ってみれば逆鱗も発見。なかなか良個体だったらしい。それらを剥ぎ取り終えて優羅が辺りを見回し、ドスフロギイらが逃げていった方へと昴達は走り出した。

奴ら……いや、ドスフロギイを討伐し終えればこの狩りは終了だ。

肩慣らしにもならなそうか、と考えながら、昴達は森の奥へと進んでいく。

○

いい匂いがする。

それは鼻を鳴らしながら森を走つていく。自分の飢えをしのいでくれそうな、芳しい血と肉の香りに誘われ、ただただ鬱蒼を茂る森を掻き分けて前へ。

数分走つた先には、涎を垂らさせてくれた肉の塊があつた。この森の中では目立つその桜色の肉塊。実を叩き潰されて中身と汗をぶちまけているようだが、それでも大きな塊が残っている。

死んでから一時間以上経過しているようだが、迷いなくそれはその肉に喰らいつく。綺麗な薔薇には棘があるというが、背中に生える棘が口を刺してくる。だがそれは気にも留めず、ただその肉を引き千切って咀嚼していく。

肉を咀嚼し、喉を潤すような赤い果汁も、尻尾に存在する毒も全て美味しくいただき、しかしそれでも飢えはしのげない。

まだ足りぬ。

この程度では腹は満たされない。

鼻を鳴らして辺りを見回し、そして遠くにはどうやら多くの命が存在する事をつきとめた。何かと戦っているようだが、その何かも纏めていただくとしよう。

一つの桜色の果実という名の前菜を食べ終えたそれは、続けてメインディッシュを食べるために森を駆け抜ける。

そのメインディッシュは——橙の肉の詰め合わせ・毒添え。どうやら毒のフルコースを所望しているようだった。

○

リオレイア亜種を討伐して一時間。

ドスフロギイを見つけ出してから仕掛けるタイミングを見計らう事、更に三十分。数が減ったフロギイらと、この森のあちこちに点在していたフロギイを集めたドスフロギイは揃って川へと向かい、水を飲み進めていた。

ついでにそこにいたアプトノスを二頭仕留め、それぞれフロギイらに分け与えて食事に入っている。

どうやらかなりの規模を率いていたらしい。フロギイを集め、揃った数はおよそ四、五十。あそこで散った数を合わせれば六十近くのフロギイを率いていたという事になる。

なかなかの個体だったのだろう、あのドスフロギイは。

しかし悲しいかな、そのドスフロギイにはここで死んでもらうとしよう。よもやまた食事タイムを邪魔する事になるうとは思わなかったが、これもまた好機である事には変わりはない。

最初に決めた手筈通り、紅葉が角王鎚カオスオーダーを握りしめて乱入するタイミングを見計らう。

ドスフロギイが辺りを警戒しているようだが、それはリオレイア亜種の事を気にしているのだろう。またどこかから襲来して、群れを掻き回してこないかと警戒していると推測できる。

だがリオレイア亜種は先ほど討伐してきた。それをドスフロギイが知り得る事はない。

リオレイア亜種の襲来はないが、その代わり自分達が群れを掻き回してやろう。ドスフロギイの意識が向こうの群れへと向いたその機を逃さず、紅葉が草むらから飛び出して角王鎚力オスオーダーを握りしめ、近くにいるフロギイらを纏めて薙ぎ倒すように振り回した。

「おらおらおらおらあああああッ!!」

雄たけびを上げながら、まさしく我が往く手を阻むフロギイの群れを撥ね飛ばす暴走ディアブロスの如く。角王鎚力オスオーダーが唸りを上げれば、フロギイは見事に宙を舞い上がる。

鎚にある二つの角によつて体を殴られ、角の先端によつて体を引き裂かれ、地面を転がっていく。彼女の走る道は強引に切り拓かれ、その初撃によつて息絶えたのは十を下らない。

続くように昴が戸惑うフロギイらを鬼哭斬破刀・真打で斬り払っていく。首を刎ね、体を薙ぎ、走り抜ける電流によつて感電させて死に至らしめる。彼の背に付き従うように優羅が魔狼砲【黒鳥】に貫通弾Lv2を装填し、頭を撃ち抜いて絶命させていく。

こういう集団を相手にする際は散弾を使う方がいいだろうが、魔狼砲【黒鳥】は散弾

Lv1しか装填できない。Lv1では牽制にしかならない。火力が高まる事で威力は上がっているだろうが、今回は別に牽制するために撃つわけではない。

優羅もまたフロギイを仕留めるために撃つため、一瞬で狙いを定めて一匹を確実に撃ち抜く。時に密集していれば二匹を同時に撃ち抜いて同時に仕留められるのでお得だ。

向こうまでかき回した紅葉は一度振り返り、混乱しているフロギイらへと落ち着くように叫ぶ。ドスフロギイを確認する。続けて乱入してきた昴達を取り囲むように指示したのを確認し、にやりと不敵に笑って囲みだすフロギイらを視線だけで見回した。

深くまで切り込んだことで紅葉は孤立している。だが別に恐れる事はない。

ぐるん、と角王鎚カオスオーダーを回転させて肩へと乗せ、向こうにいる優羅の方を見やれば、彼女もまた紅葉へと視線を向けていた。

背中合わせになっている昴を感じとりながら、優羅は足元に魔力を集めて刃を形成する。ドスフロギイの指示に従って飛びかかってくるフロギイらを見回しながら回し蹴りをすれば、そこから気刃が放たれてフロギイらを纏めて切り払った。

続けて魔狼砲【黒鳥】の引き金を引いて紅葉の方にいるフロギイの頭を撃ち抜き、素早く次の弾を装填する。そうして支援を受けながら、紅葉は囲んできているフロギイの一点を突破するために角王鎚カオスオーダーを振るう。

噛み付きや飛びかかり、毒液の吐きつけと攻撃をしてくるがどれも紅葉に決め手を



与えない。飛びかかろうが、毒液が来ようが体を捻つて躲し、時に角王鎚カオスオーダーで打ち返して迎撃。付着した毒液も角王鎚カオスオーダーを振り回すだけで離れていってしまう。

まさしく打撃の嵐がそこにいる。触れば吹き飛ぶだけの力の暴力。

だがドスフロギイらも負けてはいられない。フロギイらを切り払っていく昂へと接近したドスフロギイが、喉袋を膨らませて毒霧を吐き出してきた。向こうが見えない程に濃厚な毒霧はゆつくりと昂へと迫ってきたが、背後にいる優羅と共にその場を離れてフロギイらを斬りつつドスフロギイの側面へと回り込んでいく。

だがドスフロギイはそれに気づいて後ろに下がりながら毒霧を吐き出し、優羅の銃撃を受けながらも彼女にももう一度毒霧を吐き出した。

しかし優羅に毒は通用しない。魔狼砲「黒鳥」を腰元に当て、横から噛みつきに来るフロギイめがけて貫通弾を撃ちつつ、右拳を引いて掌打を放つ。刹那、放たれた衝撃波が優羅に接触してきた毒霧を吹き飛ばしつつその奥にいるドスフロギイへと着弾した。

突然顔にかかった衝撃波にたまらずドスフロギイは仰け反ってしまう。その隙を突くように鬼哭斬破刀・真打で横つ腹を斬り、返す刃でもう一撃。首元までかかる程の一撃を放つて斜め前へと回り込み、降りてきた首を切断する勢いで首を斬る。

「ヴォルオオオオッ！」

その一撃にドスフロギイは一吼えし、首を曲げて頭上から昂へと嘯みつきにかかる。だがそれを小さい動きで躲しつつ、鬼哭斬破刀・真打を頬へと当てて軽く引くだけで鋭い刃がドスフロギイの皮膚を裂く。

内包している雷の力が小さく弾け、追撃したところで胸を斬り上げて腹へとすり足で移動する。その動きを察知して体の側面で体当たりしてきたが、大きく後ろに下がりつつ鬼哭斬破刀・真打に気を纏わせて防御体勢へ。

そこで優羅が魔狼砲【黒鳥】を腰に戻し、ドスフロギイを守るために集まってきたフロギイらを一纏めで薙ぎ払うべく、両足に気刃を作り上げて回し蹴りを放つ。その回転を殺さずに逆立ちしながら開脚し、軽やかに回転して気刃を放ち続けてフロギイらの接近を許さない。

その間に別ルートから紅葉が角王鎚カオスオーダーを振るいながらドスフロギイへと接近し、その頭へと一撃入れてやる。

紅葉が合流したのを確認すると勢いをつけて逆立ちから直立へ移行する優羅。今の蹴りで十々十五匹近くのフロギイが散ったが、まだまだ数はいる。数が減って三十近くになったようだが、それでも小型モンスターなのだから十分に脅威だ。

一気に始末つけられるだけの火力を持つ紅葉は、頭であるドスフロギイを潰す事に回す。それを支援するべく優羅が麻痺弾Lv2を装填し、撃ち込みながら嘯みつきに来る

フロギイを躲す。軽く跳ねて首を落とす勢いで振り上げた足を落とせば、氣刃が首をすつと通つて思い通りに首を落とす。

死体となつたその横つ腹を蹴り飛ばせば、続いて近づいてきたフロギイへと当たつて吹き飛んでいく。さあ、もう一発と思つたところで、彼女の背筋に電流が走り抜けたような感覚を覚える。

「——なつ……」

それは第六感。更に言えば遠くから何か接近してきている、という氣配を感じ取つてしまつている。

続くようにドスフロギイも顔を上げ、フロギイらもそわそわとしたように落ち着きをなくしてしまつていた。野生に生きる彼らならではの感覚なのだろう。目の前にいる昴達という敵以上にやばい存在が近づいてきていると察知したのだ。

「ヴォル、ヴォオオオンツ!!」

ドスフロギイが慌てたように、しかしはつきりとした指示を下して駆けだした。攻撃してきている紅葉や昴など目に入らないとでも言うかのように川に沿つて上流へと逃げていく。それに続くフロギイ達ではあつたが、その背後から勢いよく飛び出してきた影に巻き上げられた。

それもまた暴力的なまでの嵐。しかし紅葉と違ってそれに含まれているのは己の飢

えを満たしてくれるための捕食という感情。勢いをつけてフロギイを巻き上げるように首を振り回し、宙に上がったフロギイを口に放り込み、数度咀嚼して飲み込み、また別のフロギイを横から噛みつきにかけ、咀嚼しながら駆け抜ける。

口の端から滴り落ちる血など意に介さず、逃げていくフロギイの群れを追いかける。それを視界に入らないように下がりながら昴達は驚きに目を見開いていた。

その目が語るのは、どうしてここにこいつがいるんだ？ というもの。

それだけその存在——恐暴竜イビルジョーの乱入は驚くべき事だった。依頼書に不安定とあったが、まさかこいつが現れるとは思ひもしなかった。依頼書に不

しかし昴達が知らないのも無理はない。なにせタンジアの港には来たばかりなのだから。先日、モガの森に現れたイビルジョーはそのままタンジアの港方面へと移動してきているという報せが広まっている。

そのため港付近の狩場に赴く際は注意せよ、とハンター達には伝えられているのだが、昴達はそれを耳にする前に狩場へとやってきてしまっていた。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

イビルジョーの目には逃げ惑うフロギイとそれを率いるドスフロギイしか見えていないらしい。奴の願望はあの群れを喰らい尽くすという事。中でも一番大きいドスフロギイは一番の獲物だ。

フロギイらを捕食しながらドスフロギイへと迫り、それに気づいたドスフロギイが毒霧を吐き出しながら後退したが、それを気にも留めずイビルジョーはその顔へと喰らいつく。

僅かに悲鳴が漏れて出たが、その首を持ち上げて噛み千切り、数秒だけぶらんとイビルジョーの口からその体が垂れ下がったが、顔を失った事で血を噴き出しながら体が落下する。

リーダーが喰われた。それに気づいたフロギイらが散り散りになっていき、イビルジョーはそれを見回して数匹だけ逃さずに喰らい、最後にドスフロギイの体も喰らってやる。

「ヴルルルル……」

だが、まだ足りない。

腹はまだ満たされない。散り散りになったフロギイ達から、離れた所で様子を見守っていた昴達へと向けられる視線。こうなったら何でも構わない。喰えるならば、喰らい尽くす。

ぶつけられる暴虐的な殺気を前に、昴達は退く事はなかった。手にしている武器をそれぞれ握りしめ、彼らは恐暴竜<sup>イビルジョー</sup>へと挑む。

このくらいの殺気がどうした？

自分達は、それ以上の恐怖の権化と相対し、生き延びている。以前ならば臆して逃げただろうが、今ならば奴とも戦ってみせよう。

「いけるか？」

「やってやろうじやない。いつも通り、戦えばいいんでしょ？」

「……そうだな。いつも通り、やることは変わらない。アタシはそれを支えますよ」

「ふ、そのいつも通りの様子が心強いよ。なら、やってやろうじやないか」

不敵に笑う彼女達がいれば、何も怖い事などあるはずもない。それに自分達はここで死ぬわけにはいかない。帰りを待たせている愛すべき娘がいるのだ、ここで奴に食われてやるわけにはいかなかった。

そう考えれば、戦う力が湧いてくるというもの。六年前とは違う、生きるための意欲がああ頃よりも強くなっている。

これがある限り、家族が待っていてくれる限り、なんと少しでも生き延びてやる。

その感情があれば、そして頼もしい妻が二人揃っていれば——負ける事なんてあろうはずもない。

世界を喰らう胃袋を持つイビルジョーが相手だろうが、笑ってみせよう。

奴が喰らってくるというのなら、逆に刃を振るってその自慢の口を更に裂いてやるうではないか。

「乱入歓迎！ 殺れるものなら、殺ってみろッ！ 行くぞ！」

『——応ッ！』

昴が駆け出し、それを迎え撃つようにイビルジョーの怒号が響き渡る。

宴はまだ、終わらない。

## 61話

最初にイビルジョーへと肉薄したのは紅葉だった。巨大な獣竜種であるイビルジョーの頭を殴ろうと思えば、奴の頭が少し下がらなければならぬ。かち上げれば届くだろうが、だが確実にダメージを与えるためには足を狙った方がいいだろう。

それに頭を狙うというのは危険が伴う。捕食者として最上位ともいえるイビルジョーの頭を狙うのはよほどの自信がないと出来ない行為だ。

故に紅葉の初撃はイビルジョーの足を狙った。勢いよく振り抜かれた角王鎚カオスオーダーの一撃は、イビルジョーの巨体を支えるその足に吸い込まれ、確かな手ごたえを残す。

だがそれで倒れるほどイビルジョーは軟ではない。足元にいる紅葉へと振り返りながら下から掬い上げるようにその大きな顎を開いて噛み付きにかかった。

それを紅葉は反対側の足の間からすり抜けるようにして逃げる。首を戻して直立するイビルジョーの背後に回る形となり、紅葉は再び角王鎚カオスオーダーを握りしめて力を溜めていく。



その間に優羅が貫通弾Lv1を装填すると、イビルジョーの行動範囲ギリギリの外からどつしりと構え、その巨体を突き抜けるように狙いを定めて引き金を引く。するとその銃口から複製によって高速で作り出された弾丸を、これまた高速で撃ち出し続けられる。

### 超速射。

高位のライトボウガンに施されたギミックであり、速射以上の速さと弾丸の多さで相手を蜂の巣にする技術。撫子の技術力によって疑似的、そして本格的に施された魔狼砲【黒鳥】。

貫通弾Lv1だけでなく、通常弾Lv2と氷結弾にも対応されており、火力がアサルトガルルガ【フェンリル】よりも上昇している。

超速射により火力は馬鹿にならないが、その分優羅にかかる反動もまた比例するように馬鹿にならない。エスピナUシリーズによるスキル、反動軽減＋1があるとはいえ、無数に吐き出される弾丸の反動は優羅の両腕から身体へと伝わってくる。

火力は高いが、その分だけ隙を晒すという事でもある。速射も同じだが、超速射は複製によって速射以上に弾丸を吐き出し続けるため、その分だけ無防備になる。だからこれは機を見て撃たなければ敵に反撃され、攻撃を受けてしまうという事を意味する。

しかし優羅の目に恐れはない。

「はあっ！」

イビルジョーの視界に昴が入り込む。彼は鬼哭斬破刀・真打を構えて紅葉とは反対側からイビルジョーの頬へと斬り上げた。これはただの牽制。それだけでイビルジョーの意識は昴へと移される。

それを見越しての一撃であり、釣られたイビルジョーは頭上から噛みつきにかかつていくが、それを小さな所作でやり過ぎて懐へと入り込んでいく。

ぐつと柄を握りしめて気を送り込めば、それに呼応するように鬼哭斬破刀・真打に内包されている雷属性が活性化する。そのまま両手から腹へと掛けて鬼哭斬破刀・真打を振り上げ、続けて両足を薙ぐように振り下ろしながら横へと出ていく。

それだけで鋭い刃と活性化した雷の刃がイビルジョーを切り裂いた。幸運にもイビルジョーは雷属性を弱点としている。今の一撃だけでも結構ダメージは与えられただろう。

だがイビルジョーは逃げる昴を捕えるように勢いよく尻尾を振った。無数の小さな棘が生え揃う太い尻尾が昴へと迫っていく。リオレイア亜種やドスフロギイなんて目じゃない程の太く長い尻尾。

中央にある火山に生息する鎧竜グラビモスに勝るとも劣らない太く長い尻尾は、グラビモスと同じく小さくしななって風を切りながら迫ってきている。それを昴は鬼哭斬破

刀・真打を構えなおしながら勢いよく地面を滑る事で回避した。

立っている、あるいは横や前へと逃げるのではなく、滑ることで頭上を通り過ぎていく尻尾をやり過ぎたのだ。一瞬で回避方法を導きだし、実行できるだけの経験に基づく行動。

六年前からの成長がそこに表れていた。

回転する事で前後が入れ替わり、近づいてきた顔めがけて紅葉が角王鎚カオスオーダーを振り上げ、叩き落とす。振り上げは顎を捉え、一瞬怯んだところに上から叩き潰す。しかしイビルジョーはこれで竦むようなことはなかった。紅葉の正面から顔を少し傾けながら噛みついてきた。

これを横に逃げて躲し、がちんと打ち合わされる口を角王鎚カオスオーダーで薙ぎつつ体を回転させて首、両手と打ち据えつつ、勢いをつけて腹をかち上げる。

鎚についている二つの角がイビルジョーの腹を打っただけでなく切り裂く力も入り、振り上げた角王鎚カオスオーダーを構えたまま勢いをつけて地面を踏みしめ、

「どっせええいッ!!」

最初に殴りつけた足へと横殴りに振り抜いた。完全に力の入ったフルスイング。これに耐えきれずイビルジョーが転倒する。ずずん、と鈍い音を立てて倒れ伏したイビルジョーに容赦の欠片もなく、優羅はまた貫通弾Lv1の超速射をお見舞いしていく。

今度は横からではなく正面から突き抜けるように照準を合わせての射撃。貫通弾としての効果がより一層発揮され、弾丸の嵐がイビルジョーへと襲い掛かる。

続けて紅葉の角王鎚力オスオーダーと、昴の手にする鬼哭斬破刀・真打の気刃。構えられた鬼哭斬破刀・真打から雷属性の気刃が放たれ、イビルジョーの腰や尻尾へと傷を刻んでいく。

紅葉が倒れたイビルジョーの腹へと次々と殴りつけているため、昴が狙うのはそこだった。振られるたびにバチバチと音を放ち、電気を帯びた刃がイビルジョーを切り裂いていく。

腹を何度も殴られる事でイビルジョーが更にもがき、体を震わせながら起き上つていく。そうしてイビルジョーは——背中の一部を赤く染め上げながら筋肉を膨張させ、口元から黒と真紅が混じりあうエネルギーの吐息が漏れて出る。

森に響き渡る程の怒号が響き渡り、イビルジョーは怒り状態へと移行する。

その筋肉の膨張により、体に刻まれた古傷まで浮かび上がり、その痛みによつて更にイビルジョーは怒りを高める。

足元にいる紅葉を踏み潰すべく、勢いをつけて彼女を踏み潰しにかかったが、素早く背後に飛び退いて回避した。だが強く踏みつけた影響でイビルジョーの周囲が大きく揺れる。

続けてイビルジョーは逃げた紅葉を追うべく走り出し、再び紅葉は横へと逃げてやり過ぐす。標的を失ったイビルジョーだったが、前のめりに進みながら嘔み付いた口には、森に生える木が唾えられることとなる。

振り返るイビルジョーはその唾えた木を強引に引きちぎり、そのまま首を振って木で攻撃を仕掛けてきたではないか。だがそれも数秒だけ。逃げる紅葉と斬りかかろうとする昴へと牽制するように顔を振って木を振り回し、そのまま勢いをつけて放り投げる。

太く硬い木が頭上から降ってくるという事に、昴は舌打ちして自分が逃げられるくらの隙間を作るべく鬼哭斬破刀・真打で気刃を撃ち出して斬り、すり抜ける。

その先にいるイビルジョーが木を放り投げた勢いのまま回転し、勢いよくしまった太い尻尾がまた迫ってきた。それをまた地面を滑って切り抜け、懐に入り込んで腹へと鬼哭斬破刀・真打を突き出し、薙ぐ。

が、イビルジョーはそれに堪えずに一步下がったかと思えば、昴を撥ね飛ばすべく全体でぶつかりに来た。

「……………!!」

その巨体が迫ってくるのを前に、昴は一瞬で道を探る。防御するのか、あるいは回避するのか。だとするならばどう抜けるか。そうして見出した答えは――

「……か……ッ!？」

迫ってきたイビルジョーが体を支えるべく開いたその両足の間。ここに活路を見出して昴はそこを指して走り、体を屈めて前転し——切り抜けた。すぐさま受け身を取って背後へと振り返り、少し荒くなつた息を吐く。

イビルジョーは消えた昴を探したようだが、優羅が魔狼砲【黒鳥】に装填した通常弾Lv3を撃ち出して攻撃していく。跳弾した弾はイビルジョーの体を何度も叩き、ダメージを与えていく。

それに意識を取られたイビルジョーが振り返る前に、素早く腹の下へと潜り込んだ紅葉が角王鎚カオスオーダーに纏わせた風の力をそのまま撃ち出してやる。周囲を切り裂く風の玉と化しているそれは、角王鎚カオスオーダーの打撃と共にイビルジョーの腹を何度も切り裂き、抉っていく。

何度も何度も殴られた事で腹の鱗はボロボロだ。そこに高速回転している風によって抉る事で鱗が吹き飛び、露わになつていく肉へと直に打撃。その一撃でたまたらずイビルジョーが呻き声を上げざるを得ない。

しかしそれでもイビルジョーは退かなかつた。

もう一度強く地面を踏みしめてやるが、紅葉は既に逃げている。その彼女の動きを視線で追い、大きく息を吸いこみながら向き直つていった。その動きに気づいた優羅がす

かさず、

「……ブレスが来るぞ、紅葉ー！」

と紅葉へと叫んで注意を促す。はっとして紅葉が顔を上げれば、周囲を薙ぎ払うように首を動かそうとしているイビルジョーが見えた。その口からは圧縮された黒を主体とし、真紅の光が混ざるブレスが吐き出されていく。

それは龍殺しとしての力が具現化した力の粒子の集合体。イビルジョーの力の源とも囁かれる粒子を口へと集め、それを大きく吸った息を吐き出す事で力が呼応し、増幅され、あのようなブレスと姿を変えて放出される。

それを紅葉は動きを見切り、足元に風を放出して跳び上がり、先ほどまで経っていた場所を通り過ぎていくブレスを飛び越えて回避した。そのままもう一度殴りかかろうとしたが、イビルジョーが少し身を屈めると紅葉に向かって飛びかかっていく。

「ふっ……！」

頭上から押しつぶしに来るイビルジョーを躲すように横へと飛び退いて転がり、起き上っていく間に優羅が着地したイビルジョーへと麻痺弾Lv2を撃つていく。動きを封じ、一気に叩くという作戦だ。

微妙な痛みと妙な感覚に襲われ、イビルジョーが優羅へと振り返る。狙われた、と感じ取った優羅が走り出す、それを追いかけるようにイビルジョーが左右に大きく首を

振りつつ優羅へと掬い上げるように嘯み付きにかかる。

だが逃げる優羅の足の速さは健在だ。迫ってくるイビルジョーからかなり距離を取ってきている。彼女の行く先は森。入り込んだとしてもイビルジョーは木々を薙ぎ倒しながら追いかけてくるだろう。

しかしそこには入らない。エリアを変える気はないので、木へと飛んで幹に足を乗せ、勢いよく反転してイビルジョーの側面を飛ぶ。その際に装填している麻痺弾を二発撃ち、地面を滑るように着地する。

振り返ったイビルジョーがもう一度大きく首を振りながら優羅へと迫り、しかし背後から斬りかかっていく鼻を感じ取って勢いよく足を振り上げ、強く地面を踏みしめた。

「つと……」

強く揺れる地面に足を取られそうになるが、何とかイビルジョーから離れて事なきを得る。そのまま振り返りざま鼻へと嘯み付こうとしたイビルジョーは、彼が斬り上げた鬼哭斬破刀・真打から放たれる気刃に顔を斬られて怯んでしまった。

だがイビルジョーとて負けてはいられない。のけ反ったまま口元に力を溜め、またしても龍属性のブレスを放出する。

「く……い……」

川の水を収集し、凍結させて氷の壁を作り上げてそのブレスをやり過ぎしたが、しか



しイビルジョーのプレスはそれすらも破壊して昴へと襲い掛かる。だが己の気を纏わせて防御する事で何とか耐え凌ぐことが出来た。

エスピナUシリーズは強化してあるのでG級クラスの防御力を確立している。装備にUがついているが、戦えるランク的にもこれは強化すれば十分にG級クラスの防御力を望める。

が、イビルジョーの一撃はそれを容易に打ち砕きにかかる。吹き飛ばされた昴は何とか受け身を取って着地するが、体に纏わりついた龍属性の力が彼の動きを阻害する。これは鬼哭斬破刀・真打にまでおよび、雷属性を殺していた。

（龍やられ、か。属性を無力化する力だったな。……が、問題ない！）

鬼哭斬破刀・真打に纏わせた気を高め、気刃を振り抜いてイビルジョーへと反撃しつつ、さりげなく優羅へと近づいていく。彼女もそれに気づいており、麻痺弾を撃ちながら昴へと近づき、素早くポーチへと手を伸ばしてウチケシの実を取り出し、指で撃ち出して昴へと届けた。

気刃を放ち終えた昴はそれを受け取り、すぐに口へと放り込む。噛みしめて飲み込み、少し間においてその効果が発揮されて龍の力が体から消えていく。流石はウチケシの実。その原理は不明だが確かな効果を約束してくれる。

だがそれに安心してはいけない。紅葉の攻撃を掻い潜ってイビルジョーは勢いをつ

けて体を回転させながら優羅へと迫る。噛み付きと勢いよくしなる尻尾が彼女へと襲い掛かり、しかし動きを見切つてやり過ぐす。

強い力で振り回された尻尾は風を切り、振り返るイビルジョーの動きに合わせてまたしなり、近くの木々を薙ぎ倒した。離れた彼女を追いかけると思いきや、深くまで身を屈めて地面に届く程にまで頭を下げ、大きく口を開けだした。そうして抉りこんだ口は地面を盛り上げ、勢いをつけて顔を上げれば口の動きに従つて盛り上がった土が優羅へと飛来する。

しかしそれも彼女は走り抜ける事で回避し、狙いを定めて魔狼砲〔黒鳥〕の引き金を引いた。放たれた麻痺弾は蓄積された毒と呼応し、イビルジョーの動きを止める。

麻痺毒によつて体の動きが障害され、呻き声は痙攣によつて言葉にもならない。そうして止まっているイビルジョーは格好の的だ。

「おらおらおらあああッ!!」

震えるイビルジョーの頭を揺さぶるように角王鎚カオスオーダーをひたすらに振り回す。麻痺の次は眩暈状態を狙う。打撃武器を持つハンターならば戦いの定石だろう。昂は腹の下へと潜り込み、両足や腹を狙つて鬼哭斬破刀・真打を振る。

最後に優羅は少し斜め前に移動し、背中を突き抜けるように照準を合わせて貫通弾LV1の超速射。堅実で、しかし確実にイビルジョーを弱らせる戦い。危険な相手だから

こそ確実に弱らせていかねばならない。

紅葉の攻撃によって傷ついている部分を狙い、一気に弱らせる。肉を斬られた事で頭上から血が降り注ぐが、昴は気にせず鬼哭斬破刀・真打を振るい続ける。

たったの数秒ではあるが、動けないイビルジョーを袋叩きにしてもなお奴は倒れない。眩暈状態になったとしても、奴は生きている。そこで昴が腹めがけて意識を集中させた一撃を放つ。

それこそ――

「雷閃剣！」

圧縮された気と呼応した雷属性が混じりあい、撃ち出されたそれは倒れているイビルジョーの腹から背中付近に掛けて大きく傷を作り上げ、今まで以上の出血を引き起こす。

それだけではない。紅葉ももかくイビルジョーの眼前で力を溜め、続けて槌に先ほどの風の風を作り上げる。この一撃を以ってしてイビルジョーを討伐しようという試みだ。

「どっせえええええええええい!!」

瀕死、あるいは討伐を狙って振り上げ、その脳天すら叩き潰さんとする角王鎧力オスオーダーの一撃。紅葉の狙い通りそれはイビルジョーの頭を潰す……と思われたが、大

きくもがいたイビルジョーの頭がずれ、それは顎付近に打ち落とされた。

「んな……っ!？」

生命の危機を察知しての抵抗か。それによってイビルジョーは命を繋ぎ止めた。

そして空ぶつた角王鎚カオスオーダーの一撃により、めり込んで地面を巻き上げるだけの力を発揮した。めり込んだ角王鎚カオスオーダーをすぐに振るう事は出来ない。そこに紅葉の隙が生まれる。

だが角王鎚カオスオーダーに纏われている風が強風となつてイビルジョーの頭につけられ、何度も何度もその頭が揺れるだけでなく、真空の刃が身を切り裂く。

その刺激によつてか、イビルジョーは僅かに声を漏らして焦点を紅葉に合わせた。呻き声を上げながらもその口元に龍エネルギーを集め、それを紅葉へと撃ち出した。

「っ!？」

咄嗟に身を捻つて躲したが、先ほどまでのようなブレスではなく、抵抗による撃ち出しだったため弾丸のようだった。頬を撫でていき、薄く切られて血が滲み出てきたが、イビルジョーの抵抗は終わらない。

ただただ紅葉に向けて龍エネルギーを撃ち出し、そうしながら起き上ろうとしている。舌打ちした紅葉は一旦角王鎚カオスオーダーから離れて下がり、体勢を立て直そうとしたが、腹に弾丸の一つが命中し、くの字に折れる。続けてもう一撃胸に受けて吹き

飛んでいった。

それを見届けながらイビルジョーが立ち上がるが、昴が両足を薙ぎ払う事でまたバランスを崩す。だが何とか持ちこたえ、たたらを踏みながらも大地に立つ。

怒号を上げて再び怒り状態に移行するイビルジョーは、近くにいた昴へと勢いよく跳びかかるのだが、素早く後ろに下がって回避。続けざまに追うようにして体当たりを仕掛け、しかしそれはまたしても足元をすり抜けて躲かれた。

が、そこまでだ。足元をすり抜けたことを察知してイビルジョーは素早く尻尾を振るい、昴を側面から打ち据えて吹き飛ばす。

地面を転がっていく昴だが、何とか起き上って体勢を立て直す。二人が離れた事で優羅がイビルジョーへと近づき、意識を引き付けようとしたが、イビルジョーは優羅へとブレスを撃ち出して近づかせない。

しかし近づけなくとも構わない。目の前を横切っていく黒々としたブレスを見切り、その奥にいるイビルジョーへと貫通弾Lv2を射出。着実にダメージを積み重ねていくが、奴はそれでもなお戦い続ける。

優羅へと迫って体当たりを仕掛け、尻尾を振るい、喰らいつく。

「…………ちつ、よく暴れる奴だ…………」

接近されようとも優羅は戦えるガンナーだ。それはハンターでなくとも接近戦、対人

戦での攻撃手段を習得しているからに他ならない。迫ってくるイビルジョーの顔を避け、至近距離からの貫通弾を撃ち込み、離れながら今度は徹甲榴弾を装填して頭部を狙って撃ち出す。

しかしイビルジョーの怒気が高まり、飛来する徹甲榴弾を避けると怒号を上げながら暴走したように優羅へと駆けだした。今まで以上の強い殺気をぶつけられ、一瞬優羅の体が硬直し、だが彼女の血の力が無意識に発揮されてその殺気を相殺するべく彼女から殺気が放出される。

が、捕食の権化であるイビルジョーに対して彼女のシュヴァルツの殺気は、奴の殺気と相殺するのみだった。イビルジョーの突進は止まらず、優羅は何とか立ち位置をずらして噛み付きを避けるが、下がった肩に撥ね飛ばされてしまう。

「……………く……………」

「ヴオオオオオオオオオン!!」

「ッ、のおおおおお!!」

紅葉が角王鎚カオスオーダーを回収し、優羅へと追撃しようとするイビルジョーへと迫るが、放出される殺気と振り回される尻尾によって上手くいかない。昂が気刃を放つてイビルジョーへと攻撃し、意識をこちらへと向けようとするも、暴走するイビルジョーの視界は一点だけを映していた。

地面を滑って何とか体勢を立て直す優羅へとまた迫り、体当たりを仕掛けようとしたが、紅葉が角王鎚カオスオーダーに纏わせた風の力を弾丸として撃ち出して足を止める。圧縮された風の弾はイビルジョーの足を捉え、奴のバランスを崩させる。

続けざまに昴が鬼哭斬破刀・真打で斬りかかっていたものの、イビルジョーは堪える様子がない。吼えながら体を回転させて昴を振り払おうとしたが、それを避けてもう一撃斬りかかっていく。

だが、怒髪天を突き抜ける事で痛みにも耐えるイビルジョーはまた体当たりを仕掛け、これを回避した優羅が昴へと近づき、これによってラインが出来上がる。

それを見届けたイビルジョーがまた大きく息を吸いこみ、口元に龍エネルギーを収束させてプレスとして撃ち出す。三人纏めて薙ぎ払うように撃ち出されたプレスはしかし、三人には届かない。

だがそれはイビルジョーにとってどうでもよかったらしい。

それによって三人の感覚が広がったのを見越し、イビルジョーは一気に駆け出した。

「なっ……どっ……!」

昴と紅葉の間をすり抜ける際にわざわざ体を回転させて尻尾を振るって薙ぎ払い、自分に寄せ付けないようにしてイビルジョーはその先へ。昴達に刻まれた傷口から血を流しながらも、イビルジョーは唸り声を上げながらその場から逃走した。

それを見送った昴達だが、イビルジョーを追いかける事はしない。

イビルジョーは古龍とはまた違った意味での災害。遭遇すれば大抵は即逃亡。抗えるハンターは限られ、討伐へと持ち込めるのは一握り。それはイビルジョーの強靱で巨大な肉体と、それが持ちうる高い生命力。

獣竜種でありながら古龍種に近いまでの暴虐性を保有し、人だけでなくモンスターから恐れられるまでにまで進化した竜。討伐するに越したことはないが、逃げる相手を追いかけて更なる危険に身を投じるわけにはいかなかった。

出来る事ならば討伐しておきたかったが仕方ない。

鬼哭斬破刀・真打と角王鎚カオスオーダーの血を払い、イビルジョーが去っていった西の方へと目を向ける。あの先には更に森が広がり、それを抜ければ大砂漠へと入っていくだろう。

よもや獲物を求めてわざわざ砂漠へと入るようなことはないだろうが、それはイビルジョーの気分次第。

「……切り抜けた、か」

魔狼砲〔黒鳥〕を戻しながら優羅が呟き、辺りを見回す。イビルジョーがいたせいで周囲にモンスターの気配はない。フロギイらも完全に散り散りになっているため自分達以外に生き物の気配はないはずだ。



だが優羅は一点を睨み付けたまま動かない。その先には何の変哲もない森が存在するだけなのだが、彼女はその木の枝を見つめている。

「どうかしたか？」

「……誰かいますよ」

「え？ 誰が？」

三人揃ってそこをじっと見つめていると、葉が揺れて何者かが飛び出してくる。

漆黒の衣装を纏ったその人物は三人から離れた所に着地し、膝をついて一礼する。その出で立ちはずきずきしく忍者といてもいいだろう。

「……先日ぶりです、白銀昴さん。私、霧夜の忍である、霧夜海と申します」

「その共、霧夜空」

「霧夜の忍……ああ、以前に話をしていた際に後ろに控えていた」

「はい、それは私達です。タンジアの港に向かっていている際にイビルジョーを発見し、ああして隠れていたのですが……あなた方と合流できたのは僥倖です」

「わたし達は辻斬りや神倉さんを殺害した何者かについて調査中。その結果、疑わしき存在を数人発見。現在、彼らについて過去を洗っています」

そう言つて二人は立ち上がった。すると優羅が二人を見て僅かに首を傾げる。

鋭い視線が海と空を貫き、彼女は何かを思い出そうとしているようだが、しかしそれ

は叶わない。二人も視線には気づいているようだが、特に何も言わない。

だが紅葉はそれに気づいたようで、「どうかしたの？」と声を掛けた。

「……いや、なにか頭に引つ掛かっている気が……」

「？ 辻斬りとかその事？」

「……それもあるけど、この二人がどこかで見た気が……」

「以前会ったことあるとか？」

「………会った事、あるの、か？」

自信がないように首を傾げる優羅。それに空は答えようとしたが、しかし開かれた唇は閉じた。ちらりと主である海を見るが、彼もまた何かを言おうとしている。が、それを口にはせずどうしようかと考えているようだった。

やがて考え続けた海は、小さく「……昔、一度だけですが」と呟いた。

「………いつ？」

「十六年前になりますか。華国の国境付近にて神倉獅鬼さんと出会った事が」

「………ああ、あの時の魔族か。……ん、んん………確かに思い出してみれば、そんな事もあったような気もする」

優羅のシユヴァルツの特性上、過去の記憶は摩耗し失われる傾向にある。十六年という長い年月もあれば、人であったとしても十分に記憶は失われる。人の事はあまり覚え

ない優羅ならば、会ったような気はしてもその記憶は十分に消えてしまう。

シユヴァルツの特徴は知らないが、十六年もあれば人は忘れるだろうと海と空は気にする様子はない。

「こうして再会でできた事は喜ばしいだろうが、今はここから離れるとしようか。今まで気づかれない程にまで気配を消していたようだが、イビルジョーが気まぐれに戻ってくる可能性だって捨てきれない」

「そうですね。ではこちらへ。ベースキャンプまでご案内を」

「感謝する。……それと、敬語は別に使わなくていい。俺達はお前達の上に立つ存在じゃないのだからな。いつもの調子で話してくれていい」

「……わかった。では、改めてよろしく頼むよ、白銀。俺の事は海でいい」

「ああ。よろしく」

そうして昴達は霧夜の忍二人と合流し、ベースキャンプへと戻ってクエスト達成の信号弾を上げる。しばらくしてやってきたギルドアイルーにイビルジョーの事を報告し、奴が大砂漠の方へと逃げていった事も合わせて伝える。

その日の内にイビルジョーについての警戒態勢が敷かれ、大砂漠方面にも注意が呼びかけられる事となる。

タンジアの港に戻った昴達は別ルートから合流してきた霧夜の二人を宿に招き、それ

それが持つ情報を整理する事となった。そうして挙げた気になる候補はやはりいべきか、優羅が気に掛け、瑠璃達と共に行動していたブルート達。

天王寺領主の息子である天王寺冥夜……ではなく、彼と共に行動している東風天和と、盲目の女性、壬生刹那。どちらも高い実力を持つ剣士であり、辻斬りとしての条件は満たしている。

また彼女らの過去はどういうわけか妙な雰囲気を漂わせている。ハンターとして登録されるのはいいが、それ以前の過去についてはどう探っても見つけれないのだ。

巧妙に情報が乱されているのか、あるいはハンターになる前の過去が存在していないのか。それが意味するのは彼女らが名乗っているのは偽名という可能性。本名は一体何なのか、別の忍が手分けしてそれを探っている最中らしい。

だが探るまでもなく一人はある程度目星は付く。

壬生刹那。

盲目、というこの鍵で最初に浮かぶ候補がヤマト国の桐生雪菜。彼女は以前霧夜の二人は出会っており、話をした事がある。そうして感じ取ったのは、確かに彼女は実力があるという事であり、隠れている自分達の存在を感じ取れるだけの力がある事は明らか。

またどういわけか突然仲間の忍が斬られた事もある。あれも雪菜がやったのだと

すれば、容疑者として浮かび上がれる。なにせ彼女はそれをするだけの剣の実力がある事は過去を洗えばわかる事なのだから。衛宮家に指導されて腕を磨いたのだからそれくらいの事は出来るだろう。

もし彼女らが本当に辻斬りなのだとすれば、今頃船旅をしている瑠璃達は無事なのだろうか、という不安がある。しかし信じるしかあるまい。海を往く彼女らを救出に向かう事は不可能なのだから。

だが無情にも、古龍観測所の気球が届けた報せが港に届けられる。

ナバルデウス亜種 existence を感知。

その被害によつて沈められた船、三隻。

現在乗船していたハンター達の名簿が調べられ、救助隊を組むものの、彼らの救出は困難を極めるだろう。

またハンター達の中で緊急時にナバルデウス亜種と戦える、という者は港に待機するように。

その報せが港町だけでなく周囲の町や村に駆け巡った。

沈められた船の中で、瑠璃達が乗っていた船があったと知るのは、その翌日の事だった。



森を駆け抜けるイビルジョーは逃げ惑うアプトノス達を追っていた。体中がじくじくと痛み、流れる血はまだ止まらない。筋肉でせき止めるが、バチバチと傷口から電気が弾け、それに筋肉が痙攣して完全に締まらないのだ。

昂が放った雷閃剣の一撃だ。背中付近から腹にかけて大きな裂傷が刻まれ、腹は肉を露出して傷だらけ。だがそれでもイビルジョーは生きていた。しかし痛む傷によってイビルジョーはまだ怒りが収まらなかった。

その暴虐性の殺気をぶつけられるアプトノスはただ本能的に逃げ続ける。それも、長くは続かない。飛びかかったイビルジョーに押し倒され、首元を噛み千切られて一瞬にして絶命する。

その一頭では満足せず、イビルジョーはもう一頭へと向けて尻尾を振り回して横殴りにし、木へと叩きつける。そうして怯んだアプトノスへと喰らいつき、噛み千切りながら地面に叩きつける。

容赦のない捕食行為。それだけイビルジョーは荒れ狂っていた。

口から漏れ出る龍エネルギーが鼻先へと密集する程にまで高まっている。これほどまで鬼気迫る表情をしているイビルジョーを見れば、逃げ出したくなるだろう。

アプトノスの肉を喰らい、それをエネルギーとして傷を癒しだすイビルジョー。二頭を骨の髄までしゃぶり、喰らい尽くせば、その龍エネルギーは落ち着きを取り戻し、消えていった。

だが……足りない。

逃げていったアプトノスを追ってまたイビルジョーは走り出す。あの残り数棟を喰らっても足りないだろう。それほどまでにイビルジョーは飢え、そしてこの刻まれた傷を癒すにも足りない。

そうして走り出したイビルジョーを見送る影が一つ。

木々の陰に隠れるようにしてイビルジョーを見つめていたその影は小さく笑みを浮かべる。

「生き延びた、か。まあそれくらいの実力になったとしても、驚きはしないんだけどねえ……やっぱり極限状態に追い込まないと相手に、ならないんかねえ」

森の奥へと去っていくイビルジョーを見つめながら、彼女は一息ついて短剣を弄りだす。自分の手で殺った方が話は早いんだろうが、今はそうしない。わざわざこの東方を走らせ続けているんだ。あのイビルジョーが途中から乱入して掻き回し、あわよくば殺してくれた方が面白い。

だがただのイビルジョーでは話にならない。昴達は普通に戦い、退散させてしまっ

た。

——ならば、ただのイビルジョーでなければいいんだな？

そういう解答へと至れる。

都合よく、あつちの先は大砂漠。間もなく混沌の渦に包まれる大砂漠に迫っている。

そこに放り込んでやれば、過酷な環境の中を走らせ続ければ、あのイビルジョーは大層おもしろいことになってくれるだろう。

「飢えて、もろうか。……くつくつく、んんーそうなれば、あそこにやってくる輩には地獄を見てもらう事になるだろうけど、別にいいよな」

大砂漠入りをするメンバーを頭に思い浮かべ、彼女は冷たく笑う。先日は武が入っていったし、ドンドルマ方面からもギルドナイト達などが入ってくる。

そして大砂漠には元より確認され出した竜達がはびこり、白皇が平行世界より封印を解いたかの存在まで現れている。そこにあのイビルジョーが入り込めば……と頭にその光景を思い浮かべた彼女は実に楽しそうだ。

「楽しくなりそうじゃないの。でも、その前に、ナバルにもう少し、頑張ってもらおうか。生き残った彼らにとどめを刺せるかどうか、ね」

くすり、と笑って彼女は影へと消えていく。

暗い森はただ不気味にざわめくだけ。それはまるで、この先訪れる未来を暗示してい



るかのようだった。

## 62話

大砂漠の近くまでやってきた彼女は木々に隠れながら辺りを見回していた。砂漠に近くなってきたせいか、少し乾燥した風が前方から吹き抜けてくる。そうした中で彼女はゆっくりと進んでいく。

懐に手を入れ、一塊になっている布を取り出した。それを広げると赤い外套となつて姿を見せる。絵柄もなく、無地の赤の外套。飾りつ気のないそれを羽織り、フードを被つて彼女は森を抜けて大砂漠へと入つていこうとする。

「……………ん？」

不意に彼女は視線を落とす。刹那、ぽとりと何かが地面に落ち、鈴のような音を響かせた。それを見た彼女は僅かに驚きに目を見開く。

落ちていったのは……お守りだった。小さな鈴が二つ付けられ、千切れてしまった紐が括られている一般的なお守り。その布は雪が描かれており、子猫がそれを浴びている、といった絵が描かれている。

「……………まさか」

それを見つめる彼女は僅かに震えていた。だが落ちてしまったそれを拾わねばと手を伸ばし、拾い上げてじっと見つめる。これは彼女にとつてただのお守りじゃない。送り主の想いが籠められたお守りだ。

遠い昔、自分の事が心配だからと持たせてくれた彼のお守り。それだけのお守りなのにわざわざ強い気を込めていった事で自分の身に何かあれば鈴が鳴る、という不思議な効果まで含んでいる。

そんなお守りが、落ちた。

今まで紐が切れるような事がなかったというのに、それが切れてしまっている。

それはすなわち、彼の身に何かあったという事だ。

「十兵衛……死んだのか？ 一体何で死んだ？ ……いや、死ぬ手前、か？」

ぎゅっと握りしめて空を見上げる。先日話したばかりだった。死んだとしても知らない、と言ったばかりだったというのに、この嫌な知らせだと？ 一体何が起きたというんだ？

そう考えると、胸が締め付けられるような感覚に襲われる。嫌な予感しかしない。

「……おいおい、マジかよ。ほんとに、死ぬって言うのか？ アタシを……置いて？」

思わず歯を食いしばってしまう。

「……つぎけんじゃねえぞ。アタシの許可なく死ぬんじゃねえよ……！ あんな思い

は、もうこりこりだつてんだよ……ッ！」

思い起こされる九年前の記憶。

あの野郎に居所を知られ、焼かれた十兵衛の話。結構イケていた彼の顔は誰もが引くものへと変化してしまい、命の危機も脅かされてしまった。何とか生き延びたが、それを知った彼は殺し損ねたとまたしても殺しに向かおうとした。

それを彼女が何とか止めて言い含めたが、恐らくチャンスがあれば殺しに向かうだろう。それを感じとり、十兵衛は彼女に迷惑がからないようにと東方を周り、最終的には火山に引きこもった。

その恩義があるからと現在は彼女の手駒として動いているが、現在の彼女の地位も把握し、あまり逆らわないようにと動いているように見える。そして何かを隠している事も何となく彼女は察していたが、あまり気にしないようにしていた。

踏みこめばバラしてくるかもしれないが、踏みこまなければ彼をまだ使い続けられる。一度失われた繋がりを保ち続けられる。だから彼女は彼を「飼犬」と称して使い続ける。

「一体どこに行きやがったんだあの野郎……！ どこで、死にかけて……いや、ここでアタシが動けばクソ野郎に知られるか。チツ、どうせアタシの動きを探り続けているんだろうからな……相変わらずいいけ好かねエ……」

あの日から何かと自分の事も目に付けたのだしたクソ野郎こと——申子源次。一度失敗した十兵衛暗殺を止めた事で彼女、午卯六花の事を陰で監視しだしていた。今でこそ二人とも灯と共に家の代表として王の直属の部下として動いているが、九年前はまだ一介の兵でしかなかった。

どちらも経験を積み、功を積み、先代に指名されて現在の地位へと上り詰めた。源次としては地位を獲得して殺しの権限を更に得ようとし、十兵衛を殺害しようとしたのだろうが、それを止めるかのように六花もまた上り詰め、発言力を獲得して止めてみせた。十兵衛が火山から出て六花の手駒として動いている事は源次も知っている。それでも手を出させないのは今もなお牽制が効いているからであり、十兵衛が何者かによつて陰で殺されたとなれば、第一候補は源次だと目をつけている。

そういう背景があるからこそ、より一層十兵衛を暗殺する事は出来ないだろう。しかし今、どういうわけか十兵衛は死にかけている。一体何があったのかと不安になるが、今ここで十兵衛を助けに向かえば、それに源氏が気づいて先回りし、確実に息の根を止めてくるだろう。それだけは六花は許さない。

彼女に出来るのは信じる事。それしかなかった。

「……チツ、なんだよてめえら……今、アタシはすこぶる機嫌がわりイんだよ……！」  
お守りを懐に戻しながら六花はぎろりと殺気だった視線を向ける。その先にはジャ

ギイとジャギイノスの群れがいた。その数は十を超えるか。ハンターにとつてはそうでもないが、一般人にとつては驚異的な小型モンスター。

しかし六花はジャギイ達を睨み付け、更に殺気を高めていく。

「ギャアツ、ギャ、ギャギャ……?」

「アタシの前に現れるつてんならよオ……全部ぶつ殺してやるぜおらアツ!」

外套をなびかせて六花は身構える。口元に粒子を集め、握りしめた右拳に吹きかければそこに強い火炎の力が宿りだす。「発現・牙炎!」と叫び、彼女の気に応じして一気に燃え上がる。

更に続けて左手に青い粒子を吹きかけ、「発現・氷牙!」と叫べば凄まじい冷気が発生。両手を打ち合わせれば熱気と冷気という相反する力がぶつかり合つて蒸気が立ち上る。

「死にてエ奴から前に出ろやアツ!」

「ギャルアツ!」

その挑発の叫びに反応したのか、ジャギイが二匹飛び出して六花へと襲い掛かつていく。それに六花は逃げず、素早く懐に潜り込んで顎へとアツパーを放つ。硬い鱗が打撃を受け止めるが、しかしジャギイはその一撃で大きく仰け反つて怯んでしまった。

鍛えられた拳だけでなく、纏われた火炎と彼女の気による底上げがあつてこその一撃。怯ませたジャギイとは別のジャギイが嘔み付きにかかるが半身を引いて躲し、頭か

ら左の拳で殴り飛ばす。

接触した衝撃で頭部が凍結し、体を捻りながらの手刀で首を刎ね飛ばす。そうして一匹始末してから一気に踏み込み、怯ませたジャギイの首を手刀で突き出す。指先から伸びた炎の刃によって喉から一気に焼き尽くし、首をまさに焼き切った。

「おらア！ 次はどういっただア？ 纏めて相手したってアタシはかまいやしねエんだぜ？」

仲間を殺された恨みか、六花の挑発に乗ってか、今度は三匹のジャギイノスらも動き出す。ジャギイよりも少しだけ大きい体格をしているジャギイノスだが六花にとつてはそれくらいのも事はどうでもいいようだ。

「ジャギイノス、か。ハッ！ 体が大きかろうが、アタシにやかんけえねエってなア！ おらっ、これでもくらいやがれてんだアッ！」

轟々に燃え上がる右手の炎。迫ってきたジャギイノスらの動きを見切り、一頭の首を掴むとその炎が激しく燃え上がって膨張し、「だらっしやあああああッ!!」と咆哮すれば彼女の叫びに呼応するように手のひらからその火炎が爆発する。

焼かれ、爆発したことでジャギイノスの首が吹き飛び、死体は回し蹴りによって他のジャギイノスへと飛んでいく。だがそれ以上に、鬼気迫る六花のその表情を前に、いよいよジャギイノスだけでなくジャギイ達も恐れをいなくようになってきた。

自分達が相手をしているのははたして人族なのだろうか。

アレは何だ？

まるで——鬼のようだ。

「おら、どうしたア？ こねエのか？ だつたら……失せるー！」

ぎらつく瞳に宿る純粋な殺気。彼女の怒りに反応して両手から属性の力が立ち上つて彼女の周囲で渦を巻く。それによつて生まれた風がツインテールにしているその黒髪をなびかせ、深い蒼の瞳は妙な光をたたえている。

小さい体はその殺気によつて膨張し、大きく見えてくる程に思えてしまうだけの覇気。それを前にジャギイらは一歩、また一歩と後ろへと下がっていく。

それを見てあと一押しか、と六花は外套の裾へと手を伸ばし、中から一丁の銃を取り出した。ハンター達が使うようなライトボウガンだ。それにベルトリンクを繋ぎ、セツトすると躊躇いもなく引き金を引いてジャギイ達へとぶつ放す。

「おらおらおらあああツ!! 消えるんだつたらとつと消えやがれつてんだアアツ！」

展開される弾丸の嵐にたまらずジャギイ達は逃げ出した。それでもなお六花は撃ち続け、やがて完全に気配が遠ざかったところで引き金から指を離す。

一息ついて銃をしまい、六花は続いて札を取り出す。これは十兵衛とすぐに連絡が取れる通信用の札。使い魔の鳥を使って位置を搜索しているが、それでは時間がかかる。



札を通じて呼びかければ生きているのかそうでないかはわかるかもしれない。

すぐに使うのではなく、一度周囲を探って他にモンスターがいないか、誰か人がいないかを確認して六花は札に魔力を注いで呼びかける。

「……おい、聞こえるか？」

反応はない。

いつもならばすぐに札を取って反応してくれるのに、彼は六花の呼びかけに反応してくれない。

「聞こえたら返事しろ。……おい、聞こえてんだろ？ 冗談はよせよ……マジで、死ん

じやいねエよなア……？」

じくじくと胸が痛む。

ふぎけるなと喚き散らしたくなる。

……目頭が熱くなってくる。

彼が聞き状態に陥っている事に腹を立てるだけでなく、こうして心をかき乱される自分が、少し嫌になってくる。

自分は彼が嫌いだ。

嫌いではなくちや、いけないんだ。そう自分に言い聞かせ続けなければやってられない。

だつて自分は午卯の代表。彼と仲良くしているなんてことは許されないのだから。  
「……………つく、……………う、ぎ、けんなよお……………返事、してよ……………お……………」

この自分がのし上がり、周りの一族の者らや他の者らを見返したかつた。弱い自分がこうして上に立ち、自分を馬鹿にしてきた奴らに認めさせることが一番の目標だつた。だがそれは同時に、世話になつていた彼を遠ざけなければならなかつた。

途中からはその彼を守るためにも地位を得なければならなくなつたが、それは果たされた。引き換えとして彼は俗世から消え、位置を特定されないまま時が流れてしまつた。

そんな彼を、嫌い続ける。

繋がりが断たれたまま嫌い続ける。そうして、彼を守り続ける。

なんと矛盾した事か。でもそれが六花なりの——恩返しだつた。

「……………にき、生きてよ……………死んじや、やだよお……………」

ついに感情が抑えきれず、か細い声となつて漏れて出てしまつた。

そんな彼女の声を聞いてくれる人は……………最後まで応えてくれなかつた。

○

「早いもんだな。もう上位ハンターか」

「ホントにね。でも、流石私達の息子、といった風かしら。ここまで育てた甲斐はあったというものよ」

「はっはっは、違いねえ！」

息子が上位ハンターになった。しかも十五歳という若さで。

それを喜ぶ息子の両親。誇らしいだろう、笑いながら酒を呑み進めている。それを少し照れた様子を見せる息子。

父親は筋肉質のがたいのいいおじさん、といった風貌をしており、短く刈り揃えられた白髪をしている。これは歳を重ねた影響ではなく、地毛だ。そして耳は独特の尖ったものをしている。

母親は小柄ながらも女性としての魅力を兼ね備えた黒髪の美人さんだ。小柄で若々しいため息子の姉のようにも見えてしまう程のものであり、本人の性格からして母親という感じはしない。

二人とも腕利きのハンターであり、息子を幼い頃からハンターとしての技術や実力を仕込み、磨き上げてきた。その結果、十五歳という若さで上位ハンターに上り詰めてしまったのだ。

「よく頑張ったね、十兵衛。今日はその祝いよ」

「うつつ。いただきます」

「おう、たとと食え。遠慮はいらねえ。足りなければ母さんがまた追加で作ってくれるんだからな！でも、しつかりと味わうんだぞ？これが……最後の晩餐なんだからよ」

「……うつつ。わかつてるよ」

いつもは並ばない豪勢なご馳走。息子の祝いというだけでこれが並んでいるわけではない。三人揃つての夕食は今日で終わりなのだから、これだけ揃っているのだ。

それが家の習わしとして幼い頃から話して聞かせている。

上位ハンターとなれば家を出て一人で旅をしろ。そうして世界を周り、見聞を広め、そして知れ。世界は広く、ハンターもまた数多くいるという事を。

萩原家の習わしに従い、十兵衛もまた旅を始める事となった。種族的にも珍しいだろうが、萩原家はその種族を秘匿する術もある程度持つているので問題はなかった。十兵衛もそれを会得しているが、しかしこの家に関してはあまり通用しないかもしれない。「……わかつているだろうけど、十兵衛、ヤマト国……西京に入ったら気をつけるのよ？」

「わかつてるよ。あまり近づかないようにはするけど、いずれあつちの方にも足を運ぶかもしれない。そうなったらあの家には近づかないよ」

「ごめんね」

「いいよ。母さんと父さんが気にするようなことはない。家の事は関係なく、出会ってそういう関係になって、おいらが生まれてしまった。人としての感情に従ったんなら、責めるような事なんて何も無いよ。でなけりや、おいらは生まれてないんだから」

「……へっ、なあに達観したようなこと言ってるんだこのバカ息子はよお。まだまだ十五のガキのくせして、この……っ！」

「ちよ、やめ……ごめんって、父さん……！」

気恥ずかしくなったのか、父親が十兵衛のその灰色が混ざる黒髪を撫でまわして行く。確かに両親からすれば十兵衛は小さな子供でしかない。どちらも百歳を超える年齢をしている。その上で一人息子なのだから、どちらの種族も子供が生まれにくいという事が窺える。

十分に弄った事で満足したのか、父親は「……ま、気をつけるんだぜ。あちらさんの家の事情は多少は知ってるが、距離が離れてるから風の噂でしか状況は知らねえ」と腕を組みながら言う。

「今の代表が誰かは知らん。二葉ふたばが離れた時は確か……弥七やしちだったか？」

「いや、それは先代。弥七の次である今は四葉よつばだと聞いてる」

「お？ いつの間に聞いたんだ？」

「昨日聞いてきた。……いやあ、あいつが代表になる時が来るなんて驚きよ」

からからと笑いながら母親はぐいっと酒を傾ける。その目はどこか懐かしんでいるかのような色合いが見えている気がした。ヤマト国を離れて数十年。一度も帰らないのはこうして父親と結婚し、十兵衛を産んだからだ。

家にとつてそれは許しがたい事。恐らく自分の事は除名されているんだろう、と母親は氣にした様子もなく笑っていたことがある。

一体どんな家だったんだろう、と氣になつた事はあるが、十兵衛はこの時はまだヤマト国に足を踏み入れる氣はなかつた。

一人旅を始めて十五年近く。十兵衛が三十歳になる頃、彼はヤマト国の首都である西京へと足を踏み入れた。流石は首都というだけあつて街の規模は大きく、竜対策として街を高い城壁で囲んで守りを固めている。

そして街の造りは碁盤の目のようにきちんと整えられており、上から見れば城壁は円ではなく四角形となつており、道も縦横にまっすぐ伸びるように整えられていた。

中央には城が構えられ、あそこにヤマト国王が住まい、行政を仕切っている。

……そしてここは、母親の故郷でもある。もし彼女が西京から離れなければ今頃はあの城に勤めていたんだろう。そんな事を考えながら十兵衛は街を歩いていく。

そうして歩いた先で氣になるものを見つけてしまった。

「……………」

見れば小さな子供三人程が路地裏で一人の女の子をいじめている光景だった。やんちや坊主が取り囲んでいじめる、というのはどこにでもあるような事だろうが、その相手がまさか小さな女の子というのは驚きだ。

直接的に殴ったりはしていないようだが、しかしやんちや坊主たちは口々に女の子を罵倒しているらしい。

曰く、「弱い」とか「出来損ない」とか、はては「ちいせえガキ」だとか……いや、小さいのはお前達だってそうだろう、と言いたいところだが十兵衛もまた年齢に反して小さい。この歳にもなつてまだ身長が150届かないってどうなんだろう。

母親曰く血筋の影響との事だが、種族的にも結構成長期が終わりかけているところでこれはないだろう、と血筋を恨みたい気持ちもあつたりする。

……まあ、自分の事は置いとくとしてあれを見てしまったからには見過ごせない。

気づけば十兵衛は路地裏に入り、「なにしてるんすか？」と声を掛けてしまっていた。「ああ？　なんだよてめえ？」

「通りすがりの旅人だよ。んで、よつてたかつて小さな女の子をいじめて、見てらんないよ」

「…………ち、小さくねえよ！」

「……………」

いや、やんちゃ坊主を止めに来たのに、どうして助ける相手に怒られてるんだ？ と苦笑を浮かべそうになった。しかしそれで終わるわけにはいかない。十兵衛はもう一步踏み込み、「さ、やめなよ」と女の子の所まで向かおうとしたが、「邪魔すんなよ！」とやんちゃ坊主の一人が殴りかかってきた。

まさかそんな抵抗をするとは思わず、十兵衛は咄嗟にそれを受け止めつつ体をひっくり返し、しかし衝撃を殺しながら地面に倒してしまふ。

殴ってきたその子は一体何が起きているのかわからず、しばらく呆然としていたが、ようやく自分は投げられたのだと気づいた。

「突然なにかな？」

「て、てめえ……俺達が誰かわかってんのか!？」

「いや、知らないよ。ただ男が女をいじめらるつてのは見てらんないだけさ。君達が誰かなんて関係ない、おいらはおいらが見過ごせないものを止めに来ただけ。……まだやるつて言うんなら、ちよつとしたおしおきが必要かな？」

女の子の前に立ちながら十兵衛はじつとやんちゃ坊主らを見下ろした。その黒い瞳にじつと見つめられて疎んでしまい、やんちゃ坊主は舌打ちして「覚えてろよ！」と吐き捨てて逃げていく。



なんともベタな捨て台詞だな、と思いつながら十兵衛は振り返り、女の子を見下ろした。小さい子供だ。俯いて着物を握りしめているところからみて悔しがっているのか、涙をこらえているのか。その綺麗に整えられている黒髪はツイントールにしておりどこか可愛らしく見える。

「大丈夫かい？」

と、声を掛けながら屈みこむと、「うっせえよ、ばあかつ！」と何故か怒られながら頬を殴られる。あまり痛くはないが、突然の事に十兵衛はぼかんとする。そうして顔を見れば、彼女は泣きながら十兵衛を睨み付けていた。

「……な、なに？ 泣いてる、んスか？」

「泣いてねえよ！ ……あたしは……別に、悔しくなんか……ねえよ……！」

「………なんか、訳ありツスカね？ ほら、これ使うツスよ」

「うっせえよ！ 何だよその口調、あたしを舐めてんのかあ、ぐしっ……」

「……おう……ちよつと和ませようかな、って思った口調まで否定されるとか……」

なんというか、調子がぐるってしまふ。

だがこの口調がお気に召さないなら、元に戻してみようかと思いつながら、取り出した布で涙を拭ってやる。そしてこのまま路地裏にいるのもあれなので、道に出て露店に向かう事にした。

お茶とお茶菓子を奢り、気分を落ち着かせてやり、どうしてあんなことになったのかを訊いてみる。

そうして返ってきた答えはこうだった。

曰く、自分は一族の中でもあまり実力が伸びない子供だと言われ、同じ年頃の奴らにバカにされているのだと。自分なりに努力はしたが結果はあまり出ず、時折ああしていじめられているんだと。そう言う話だった。

「……一族？　もしかして、いいところの娘さんだったり？」

「あ？　……ああ、まだ名乗ってなかったっけ。……あたしは午卯六花。不本意ながら……現在の代表の娘だよ」

「……………」

その名前に、十兵衛は息を呑んだ。そして現在の代表の娘という肩書にも呆然とする。現在の代表はあの時と変わらず、四葉だったはず。という事は彼女は……。

なんとという数奇なる巡り会わせか。

しばらく無言になって六花を見下ろしてしまう。突然黙りこくられ、「な、なんだよ……そんなに見んじゃねえよ……」と六花が戸惑いを浮かべる。

「あ、いや、ごめん」

「……………午卯という名前に退いたのか？」

「……そういうわけじゃないよ。ちよつと、驚いただけさ」

「あ、そう。……つていうかさ、あたしが名乗ったんだから、お前も名乗れよ。それが礼儀だろ？」

「ああ、そうだね。……おいらは……萩原、十兵衛」

その時はその名前が意味する事を彼女はまだ、知らなかった。

○

「……つ、く……」

呻き声を漏らしながら、ゆつくりと目を開けていく。霞がかつた視界の奥はよく見えないが、何度か目を瞬かせると何とか景色が見えてくるようになってきた。

そうして見えたのは、岩の天井。

そして自分は……葉っぱが敷かれた上に寝かされているようだった。

「……………は……」

眩きながら辺りを見回してみる。気のせいか視界が広く感じられ、それが意味する事に気づくまで数秒かかり、はつとして勢いよく起き上がる。が、途端に体にはしつた痛みに呻いてしまった。

それを押さえながらも、もう片方の手で顔に手をやる。  
ない。

あるべきものが、ない。

「ど、ど、ど……!?」

慌てて辺りを見回してみると、離れた所に自分が着ていた服とローブ、そして骸が  
あった。それに手を伸ばそうとしたところで、

「——気づきはりましたん？」

という声がかかる。

息を吞んでそちらに視線を向けると、日が差し込む方から歩いてくる人影があった。

桐生雪菜だ。

その手には木の実や果物などが集められている。足取り軽く彼、十兵衛の方へと近づ  
き、しかししたき火を挟んで向こう側へと座り込む。そうしているのを見ていた十兵衛は  
ようやく状況を把握した。

体を見下ろせば手当てしている痕があり、包帯が巻かれているようだった。痛みはあ  
るが大怪我をしている様子はない。手当ても問題ないように見受けられる。

「……助けて、くれたんスか？」

「いや、それは逆や。助けられたんはウチや。萩原はんがしっかりとウチを抱きしめ

とつたから、ウチはこうしてあまり傷を負わずに済んだ。感謝します、萩原はん」

そう言つて頭を下げる雪菜。よく見れば彼女の目には黒い布が巻かれているではないか。まるで目を隠すように巻かれているが、元より彼女は視力が無い。今まで巻いていなかったのに、どうしてわざわざ布を巻いているのだろう。

いや、よく感じ取つてみるとあの布はちよつとした術式が施されている。様々な術式を巧みに隠した……呪符みたいなものか。治癒の気配がするから、あの黒い布で治癒力を高めているのかもしれない。

「傷の具合はどない？　なんか違和感あらへん？」

そう訊ねながら雪菜は用意した皿に木の実などを盛り付けている。それを見ながら十兵衛はもう一度体の調子確かめる。問題は、ない。少し痛むし、頭も妙に痛むがそれ以外の怪我はない。

「特にないツスよ」

「それは何より。なんかあつたら遠慮なく言いや。……今やウチは運命共同体やからな」

「……そう、ツスカ。ここはどこかは？」

「わからん。どつかの島やつてことはわかつとるんやけど、どこらへんにあるのかは知らへん。結構流されてきたんやろうな。ついでにゆうたら、他の人らの事もわからへ

ん

そう言つて皿を差し出してくる。礼を言いながら十兵衛は心の中で舌打ちする。

つまり自分は目の前にいる彼女と一緒に流され、しかし他のメンバーの行方は不明。更に自分達の居所も不明。生き延びるには彼女と共に行わなければならないというわけだ。

モドリ玉？

そんな都合のいいものを使う手もあるが、インプットしているデータはないし、例えあつたとしても他のメンバーを置いてのこのこと帰るなんて出来るはずもない。

空間転移？

高等魔法を使えるような腕は持ち合わせちやいない。

飛行？

それは溜璃達の芸当だ。例え持ち合わせていたとしても、どこに向かつて飛べばいいのかすらわからない。

(なんてこつた。めんどろなこつたな……)

頭を抱えながら十兵衛は小さく溜息をついた。

そういえば寝ている間、懐かしい夢を見ていたな、と思ひ出す。まさか遠い昔の事を思い返すなんて、よほど死を覚悟したんだろうかと振り返つてみる。だがすぐにはつと

した顔でローブへと振り返る。

ついでに骸にも手を伸ばしたが、それに雪菜は気づき「……………ん？ それ、また被るん？」と訊いてくる。

「今はウチしかおらへんし、そんな気にするような事あらへんと思うけど」

「……………もう習慣になつてるツスから」

「ああ、そう……………」

今の十兵衛は顔の大火傷を晒している状態だ。伸びた灰と黒の髪が火傷の一部を隠しているが、それでも全てを隠すには至らない程の醜い傷。だが雪菜はそれが見えていないので、確かに彼女の言う通り気にするようなことはないだろうが、でも十兵衛はそれを晒すという事を忌避している。

ばんばん、と軽く土埃を払い、それを被つてまたいつもの十兵衛がそこに帰ってくる。続けてローブに手を伸ばして中身を探ってみる。そうして気づいた。一つの札が僅かに力を放つていたことを。

それに気づいた十兵衛は息を呑んで雪菜へと振り返る。

「……………？ どないしたん？」

「え、いや……………なんでも……………」

気づいている？

桐生家は魔法使いの家系。だからローブの中とはいえ、彼女ほどの感知能力者ならば僅かでも力を感じ取ればそちらへと意識を向けるだろう。これがいつ力を発揮し、その効果を伝えてきたのかはわからない。なにせその間ずっと自分は意識を失っていたのだから。

もしあの子が……いや、それはないだろうが、何かを伝えようとしてこれを使ったのだとすれば。その時、雪菜がここにいたのだとすれば、彼女は気づくだろう。

何も言わないのは知らないのか、あえて黙っているのか。

警戒しながら十兵衛はローブと服を引き寄せて元いた場所へと戻る。そしてじつと皿に盛りつけられている食べ物を見つめ、ちらりと雪菜を見る。彼女は変わらぬ調子で食べ進めている。

少し考えて十兵衛も「いただきます……」と手を合わせて食べる事にした。

そうしたところで、不意に雪菜が「……ああ、そういうば」と声を漏らした。それに反応して十兵衛が視線を上げて雪菜を見る。

「寝ている間、なんかうなされとつたよ?」

「え? あ、そう……ツスカ?」

「ん。なんか……熱い、とか、そんなことをゆうとつたなあ。まだ、引きずつとるん?」  
「熱い?」



……もしかして過去の事だけでなくあの日の事も思い返していたのだろうか？ 自分が覚えていないだけでその可能性もあるかもしれない。とりあえず今はそれに合わせておくか、と十兵衛は小さく頷く事にした。

「自分としては吹っ切れてるつもりなんすが、もしかするとどこかで引きずってるのかもしれないツスね……」

「そう簡単に心の傷は癒されへんからなあ。命の危機で呼び起されたんやろうなあ……。少し傍におつて様子を見とつたけど、結構長かったで」

「……すみません」

「ええんよ、気にせんでも。それに、ウチが手を握るだけでは止まらんかったのに、あの子の声を聞いた時、それが止まったからなあ。よほど強い絆が結ばれとるんやろうなあ」

「……………」

その言葉に十兵衛の手が止まる。

今、この人は何と言った？

「……どういう、ことツスか？」

「ん？ なにが？」

「今、なんと言ったツスか？」

「ウチが手を握るってゆうの？ ああ、ダメやった？」

「その次ッ！」

思わず叫んでしまった。それに雪菜は——小さく微笑を浮かべたような気がした。

「……あの子の声ってゆうの？ これが、なにか？」

「どういふ、事だ？ あの子の声って……まさか、やっぱり」

「……ああ、ローブの中にあつた札？ それを通じて声、届けられとつたよ。萩原はんを心配するような、そんな声や。可愛らしい妹さんやないか。……いや、ちやうな」

そうして彼女は、見えない瞳を黒い布越しに十兵衛へと向ける。息を呑み、冷や汗を流し出す十兵衛をしつかりと見据えながら、確信めいた声で言う。

「——従妹、やろ？ 午卯、十兵衛はん？」

その言葉は、十兵衛が隠し続けた繋がりを知られてしまった証となった。

ヤマト国から飛び出し、父親と結婚した母親。旧姓、午卯二葉。かの午卯家の生まれでありながらハンターとしてヤマト国を離れていった彼女。つまり十兵衛は、午卯家の血統であるという事だ。

まさかそれを知られた相手は彼女になるとは思わなかった。いや、それを警戒し続けていたが、よもや意識を失っている間に知られてしまうとは、一生の不覚。

だが、暴露されたならば、こちらとしても暴露せざるを得ないだろう。ぎりつ、と強

く歯噛みし、殺気めいた瞳を雪菜へと向けながら十兵衛は口を開く。

「……知られたなら仕方ないツスね……。じゃあ、あんたも暴露されても、問題ないんだろう？」

「……へえ？　なんか、気づいた事でも？」

「というより、以前から疑ってかかっていたんだけどね？　盲目の剣士にして術者なんて、そうそういうもんじゃない。それにヤマト国出身って言ってたじゃないか。嘘かと疑えたけど、あれは真実なのだとすれば、自然と思ひ至れるよ——桐生雪菜さん？」

「……くす」

だが本名を知られたからと言って雪菜は動じる事はない。それくらい、覚悟の上だったようだ。というより十兵衛の言う通り、少し考えればわかる偽名だ。それだけ盲目という鍵は大きい。

故に姿を変え、名を変えたとしても彼女はいつか知られる情報である事を知つての上で行動していた。

「で、ウチがその桐生雪菜だったとしてどないするん？　桐生家の娘がハンターをやつとる、なんてこと、別に問題あらへんやん？」

「そうツスね。竜と戦う力を磨く。でも桐生家の娘であるという事は大きいから、余計な混乱を産まないように偽名として登録する。別におかしくはないツスね。……おか

しいのは、共に行動しているあの人ツスよ」

「……んん？」

「なんで、彼女と行動しているんすか？ ヤマト国の大罪人でしょう？ 彼女——衛宮

天羽さんは」

「……………」

今度は雪菜が沈黙する番だった。微笑を浮かべていたのに、完全に無表情になる程にまで表情が消えている。そのまま沈黙していること数秒、ようやく雪菜は口を開く。

「どうして、それに思い至れるん？」

「おいらとて驚きツスよ。よもやあそこで、失われた妖刀である天羽々斬を見る事になるなんてね。……彼女、ナバルに振っていたでしょう？ ヤマト国の事を知るために見たことあるんすよね、天羽々斬」

「本で、やる？ 実物を見た事あらへんのに、それだけであれがそうであるかなんて、わからへんやん？」

「いやいや、絵と妖刀としての特徴を把握していたら、何となくであつたとしてもわかるもんすよ？ 龍殺しにして眠れる妖刀。ついでに言えば、力を秘めた武器つていう特徴は衛宮家に一度出入りしているし、知り合いがずっと持っていたから覚えてしまったツスよ」

「衛宮家に入った事があるやて……？ ……よう入れたな、あそこに」

「まあ、それもあの子の無鉄砲さってやつツスが、それは置いておくとして。それらの情報と、彼女の内面的な気質を探れば、思い至れるもんスよ。あれほどの気質、そうそう持てるようなもんじゃない。最後にヤマト国の大事件の事を繋げれば、もしかしたら彼女がそうではないか、と推測できるツスが……その様子だと、真実らしいツスね？」

首を傾げながら問いかければまた雪菜は沈黙する。

衛宮家の方針に逆らい、衛宮兼定から逃亡し、衛宮家に収められていた一振りの刀を持ち出した人物。かの大事件を引き起こした衛宮天羽の行方は今も不明であり、持ち出された刀、伝説の妖刀である天羽々斬もまた行方知らず。

遙かなる昔、冥蛇龍を斬り殺した事で名が知られ、しかしそれを境に高い龍殺しの力は眠りについてしまい、衛宮家で眠り続けていたその刀をどうして持ち出したのか。

それすらも不明だが衛宮天羽を見つけ出せば抹殺し、天羽々斬を回収せよとの知らせがヤマト国に広まっている。同じヤマト国の出身である桐生雪菜がそれを知らないはずはない。だというのに、どうして彼女と共に行動しているのか。

その理由は今の十兵衛にとって一つの推測を導き出す。

すなわち、彼女達が世間を騒がせる辻斬りであるという推測だ。

それが事実なのだとすれば、とんでもない事件だろう。

となれば知られた事で自分は殺される可能性が高い。そう警戒していたところで――

「――っ!」

「……ッ!?!」

――その一瞬の内に雪菜は置いてあつたローブに手を伸ばし、中から番傘を取り出す。その動きを察知した瞬間、十兵衛もまた痛む体を無理やり動かして膝立ちとなり、両手に気を纏わせて身構える。

迫ってきた雪菜へと手刀を突き出し、彼女もまた番傘に手を添えてそれを抜いた。

『……………』

交差する視線。

十兵衛の手刀は雪菜の心臓へ。

雪菜が番傘から抜いた刀は十兵衛の首へ。

それぞれあと少し動かせば相手の命を奪えるところまで迫っている。どちらかが動けばそのあと少しをゼロへと縮め、相手を殺すだろう。だがそれは恐らく同士討ちとなる。せつかく拾つた命を、お互い失う形となるだろう。

それを感じとりながらも、二人は退く事はない。退いてもまた相手に命を取られるだろうから。だから体は動かさず、口を動かさず事にした。

「……………ここは一旦、お互い命を預けあわへんか？」

「そうして、どうするんだい？」

「どちらにせよ、お互い知られたらあかん事を知ってしまったやんか。せやから、今は共闘しようやないか。お互いここから生き延びなあかん理由、あるやろう？」

頭によぎるのは瑠璃達、そして六花の事。彼女らのためにも生き延びなければならぬのは確かだ。それを視線だけで返事をする。見えていないが、彼女はその視線を感じ取る事で返事を受け取った。

「今は殺さへん。全ての話は生き延びた後にしようやないか。仮に途中でお互いの仲間が見つかったとしても口は割らへん。それは約束しようや」

「そう、だね。約束しよう」

「ん、ウチも約束しよ。…………それを違えることがあつたら、殺してくれてもかまへんで？」

「……………そうか。じゃあ、増々喋るわけにはいかないツスね」

言葉の裏には、もし喋つたら仲間もろとも殺す、と言っているようなものだ。それを感じとり、十兵衛は頷いた。そうしてお互い手を引き、十兵衛が立ち上がると雪菜は手を差し出してくる。

それを握りしめ、ここに共闘関係が成り立った。

「よろしゅうな？」

「……うっす」

よもやこんな事になろうとは。こうなるんだったら助けるんじやなかったか、と思つたが、しかしあの状況の中で見捨てるのも十兵衛の性分が許さなかっただろう。

あの時何も知らずに六花を助けたように、雪菜の事も警戒していても死に逝くのを見過ごせなかつたのも確かだつた。

この先の事、頭が痛くなりそうだと思ひながら、十兵衛は重い溜息をつかずにはいられなかつた。



## 63話

洞窟を抜けて外に出てみると林が広がっていた。木の実や果物が成る木が点々と見え、少し離れた所からはさざ波の音が聞こえてくる。とりあえず二人は海に出て辺りを見回してみる。

こうして海を眺めている限りでは何の異常も見当たらない。船の残骸が流れてきている、という事もないようだ。

「あつちに少し流れてきとつたよ」

「……あ、あつたんスカ」

そつちに行つてみれば確かに木片がいくつか流れ着いている。波に飲まれてどこまで流されてしまったのだろうか。そこから把握する事から始めようか。

同時にモンスターの気配も探る。大型モンスターが闊歩してれば行動しづらくなつてしまうためだ。特に海を行動できるモンスターがいたならば脱出もままならない。

願わくば何もいらないで欲しいと思わずにはいられない。

「……今はなにもおらへんな」

「そうツスカ。……広範囲を探るための何かはないんスカ？」

「使い魔？ ああ、あるで？ というよりも、もう既に放つとるんやけどな。もうすぐ帰ってくるはずや」

「仕事が早い事で」

そうして海を眺めながら少し待てば、雪菜が言ったように数羽の鳩が飛んでくる。それらは雪菜の指に止まると粒子となつて彼女の中へと消えていく。そうして鳩が得てきた情報を頭に移し、この島がどういふところなのかを把握していくのだ。

盲目であつたとしても、鳩が得た景色は脳裏に映像として映し出される。鳩らが辿つた軌跡と雪菜が持つ感知力。これらを組み合わせ、雪菜は顔を上げて「なるほど……」と頷いた。

「本来のクエストを行う島の近くやな、ここ。陸続きで歩いていけば人のおるところへと行けるわ」

「そうツスカ。じゃあそこまで行ければなんとかなるといふわけツスね」

「ただ、問題が一つ」

「聞こうか」

「ラギア亜種がおる」

「……………はあ」

覚悟は決めていたが、めんどろなことになるしうだともたため息をつく。

ラギアクルス亜種。通称、白海竜。

陸と海を統べる者とか双界の覇者といった異名があり、海だけでなく陸上でもハンター達を苦しめるだけの實力を持つ存在として近年知られ始めている。

「……どんな感じッスか？」

「でかいなあ。あれ、G級近いかもしれへんなあ」

「……めんどろな。どうあつても処理しないといけない感じッスかね？」

「んん……使い魔を通じた感じやとそんな風に視えた気がするけど、実際に近づかへんと、ウチにとっては確実やないなあ。……あんさんはそういう術、もつとらんの？」

「おいらはあくまでも肉弾戦と銃撃戦だけッスよ。魔法なんて、そのオプシオンでしかない」

「さてよか」

海の中でも厳しい相手だったラギアクルスは亜種となれば、陸上であつたとしても油断ならない存在となる。その巨体を生かした戦い、雷属性の攻撃の鋭さ……それは海竜種としての新たな脅威を示す存在。

それがまさかここで遭遇するかもしれない現実となろうとは。

だがもう一つ気になる事がある。

「他の人達の影は？」

「……今んとこあらへんな」

「本当ツスカ？」

「嘘は言わんよ。ウチかてあんさんと二人であれと戦おうとか、考えへんわ。……案外、いけるかもしれへんけどなあ？ あんさんが本気、出してくれたらなあ？」

「……それはお互い様だろう？ 魔法と剣、これらを組み合わせた武器を持っているんじゃないかって、おいらは睨んでいたりするんだけど？ どうツスカね？」

「……くすくす」

お互いの正体が割れてしまつてからは、こうしてお互いの事を警戒しながら探りを入れ、笑いあつてしまふ。しかし目が笑つていないし、沸き立つのは鋭い刃のような気迫。なんと緊迫した空気だろうか。

こうして笑いあつているが、実際は笑えない状況だ。

しかしいつまでもこうして睨み合っているわけにもいくまい。二人はまず他の仲間が流れ着いていないかを確認するために島を歩き出す。雪菜の手には本来の彼女が持っていたあの番傘があり、それをくるくると弄りながら十兵衛の隣を歩いている。

こうして見れば何の変哲もない番傘だが、この中には鋭い切れ味を持つ居合い刀が仕込まれている。仕込み刀、という武器の一種だ。外見的には普通の小道具や日用品にし

か見えないが、その中には刃が隠されている、という暗殺向きの武器である。

主に忍や暗殺者が持つ武器なのだが、まさか雪菜のような魔法使いが持つとは思えない。彼女は表向きには魔法使いの家系のお嬢様だからなおさらだ。番傘なんて、和装美人が持てば様になる、というくらい似合っているのだから。

……うん、似合っている。

和服に流れるような長髪、歩く姿も様になり、番傘を弄る白い指もどこか美しい。全体図として見ても、一部分を見てもどこか目を引くような美しさ。まさしく東方のお嬢様、という言葉が似合う。

悔しいが似合うし、綺麗だと思わずにはいられない。

だからこそ、警戒する。

こうして見惚れている隙にぼっさり、と殺られるという事を警戒する。なにせ十兵衛は近接武器をあまり持たないのだから。近距離で戦うのはほとんど格闘術。火山に籠って塊を発掘して武器としたあの封龍剣【怨滅一門】もあるが、やはり自分にとっては無手があっている。

もし番傘から彼方を抜いてきた場合、十兵衛は手に気を纏わせて手甲か気刃を作り上げて受け止めるか、躲すかの二択しかない。あの一瞬のやりとりで雪菜の剣術は何となくわかった。

居合い。

鞘に収められている刀を一瞬の内に抜き、相手を斬り殺す、あるいは突然の奇襲に対抗する剣術。本来は座っている場合からも刀を抜けるように、という守りに置いた剣術だったが、いくつかの流派が生まれて技術が高められ、様々な使い手が現れる。

本来の通り守りに置いた使い手。

あるいはその抜く速さを生かして攻撃を主体とした使い手。

はたまたそのどちらもある程度網羅した使い手。

さて、雪菜はどれだろうか。どれであったとしても、油断すれば命を取られるだろう。

……雪菜の言葉を信じるならば殺しには来ないらしいが。

そんな事を考えていると、雪菜は小さく微笑を浮かべて見せる。

「そんな警戒せんでもええやん。ウチ、そんなに萩原はんの首を一瞬で取りに行く、つて

思われるん？」

「警戒するなつて言うのがどうかしていると思うツスけどね。これ見よがしに番傘を弄られてたら、ね？」

「ああ、これはクセなんよ。なんてゆうか、こう、傘つて回したくならへん？」

そう言つて小首を傾げてくる雪菜。どこか可愛らしく見えたがそれを振り払う。

ああ、首を傾げた際に顔にかかるその髪が小さく揺れるとか、やめろ。心を乱すな、と

言いたくなるが堪える。小さく息をつき、冷静さを取り戻していく。

「わからなくもないツスが、それがおいらを警戒させる要因ツス。完全に信用する要素がどこにもないのに、一瞬で自分を殺せる相手を信用するって話には無理があるツスよ」

「……真面目やなあ。そう思いつめとつたら、胃が痛むで？ 疲れへんか？ そんなの？」

「誰のせいだと思ってるツスか!?!」

「そう怒鳴りなさんな。ウチ、耳がええから近くで怒鳴られたらたまらへん」

「……はあ、調子狂うツス」

「せやなあ。あんなにびくびくしとつたのに、普通にしゃべつとるやん。調子狂うつてゆうより、調子がよくなつとるんちやう？」

微笑を浮かべたままそんな事を言ってくる雪菜。

本当に、調子が狂う人だ。

人見知りという顔は傷を負ってから作り上げたもう一つの十兵衛の顔。本来の十兵衛はこうして雪菜と話しているように、普通に話が出る顔にある。俗世から身を隠すためにびくびくとしてあまり人と関わらないようにし、人の記憶に余り刻まれないようにするための振る舞い方だった。

各地を転々とし、人と関わらず、スカルを作り上げれば火山に入り込んで完全に消える。

そうして動いていけば自然とそういう振る舞い方が自然になつてくるものだ。実際桐音と関わっている間もこういう振る舞い方をし続けた事で、桐音以外の人々にはあまり覚えられていないし、覚えられたとしても人見知りという顔が生きて深く関わる事はなかった。

人見知りという顔は、十兵衛にとつての守りの構えだ。

「臆病で自身のない小柄な少年」という顔により、ああこの人はこういう人なのだ、と少しの間だけ人の頭に入り、そして忘れ去られる。ハンターにとつてこういう性格をしているのはマイナスの印象だ。

だから簡単に消えてくれる。

それ故に、十兵衛は影で行動できる。表向きの顔として定着した「弱々しい少年」から本来の「誰にでも普通に接する事が出来る少年」へ、そして「若くして上の領域へと上り詰めた強い武人」という顔へとシフトしたとしても、何かの間違いだと思われない。

桐音も何となくは気づいていたらしいが、しかし十兵衛の深淵まで覗き込むようなこととはしなかった。彼女も自分の実力を隠していたのだから、十兵衛の事も見て見ぬふり



をしていた節がある。姉御と慕って後ろをついていく弱々しい少年で居られたのも、桐音が踏みこんでこなかったためだ。だからこそ彼女には感謝する。

しかし、隠してきた一端を知り、それを知ってなお雪菜は調子を変えない。それどころかそれをネタにせずいと踏み込んでくる。

まるで十兵衛の全てを知りたいと言わんばかりの切り込みだ。見えない目で十兵衛の深淵を見つめてくるかのよう。

「安心しい。なにもせえへんよ。あんさんがなにもせえへんなら、ウチもなにもせえへん。それはもう何度もゆうたで？」

「しかしそれでも信用できないとも答えたツスけどね？」

「……はあ、しゃあないなあ。どないしたらええん？　ウチがここで脱いで潔白でも示したらええん？」

「なんでそうなるんすか!?　一体この流れのどこに脱ぐ、という選択肢が浮かぶんすか!?!」

「え？　まさか……脱ぐだけでは飽き足らず、ウチの体を……処女を……っ！」

「待てい!?!　俺はそんな要求はしないわ！　っ！　か、なにカミングアウトしとるんじやい!?!」

「ああ、処女やってこと知られてもうたわ……よよよ……この歳にもなって処女って、

やっぱおかしいん？」

「あんたが勝手に喋ったんだろが!? あと、別に気にするようなことはないかと……ってなんで俺がそんなフォローしなきゃならんのよ!？」

いつもの口調がなりを潜めて完全にツツコミ役に回ってしまう十兵衛。完全にキャラが変わってしまったている。

ちなみによよ……と言葉で泣き崩れたが、本当に泣き崩れている。巻かれている布の下から一滴流れ落ち、砂浜に足を崩しながらご丁寧に裾を口元に当てる、という見事な役者っぷり。

言い換えればそうやって隙を晒しているという事でもある。敵であるはずの十兵衛にそうまで身を晒しているのだが、ツツコミに回っている十兵衛が気づくのはそれから少し後になってからだった。

○

木々の枝葉に身を隠し、じつと前を見据える影は二つ。その身を包むのは私服ではなくハンター装備。

片やリオウルシリーズ、片や新調されたラギアXシリーズ。

完全に戦闘態勢に入りながら、瑠璃と茉莉は遠く離れた所を闊歩する白い影を見つめていた。

二人の意識は昨日の内に取り戻していた。

ここがどこなのかはわからないが、恐らくどこかの島だという事だけは把握した。砂浜に打ち上げられてからどれくらい時間が経過したのか、それ以前に船から投げ出された後にどれくらい時間が経過したのかはわからない。

何よりも、あのナバルデウス亜種と遭遇してどうして生きているのかすらわからない。九死に一生を得た、とはまさにこのことか。長く海を漂流して砂浜に打ち上げられたことで体力が削られ、所々体が痛んでいたが、ローブの中にあつた回復薬や肉と言つた食料を口に入れ、一晩眠る事で何とか動けるくらいには回復する事が出来た。

その後数分、空を飛行して島の様子を探ってみたのだが、そのたつたの数分だけで翼が痛み、地面に降りざるを得なかった。体力は回復しても、畳まれていた翼を動かすまでの力は回復していなかったらしい。

だがその数分だけである程度の様子は探れた。北東へと進んでいけば陸続きで移動できる。つまり孤島ではないという事がわかっただけでもよかつた。ならば人の集落があるかもしれない、という希望を見出せる。

二人は北東に向かって進んでいったのだが、問題が発生した。

それは前方に存在しているあの白いモンスターだ。

「どうしてあれがいるのよ……」

「近くに海があるからでしょうね。大方、この辺りが縄張りなんでしょうね。……そう考えると、よく私達ここに流れつけましたね。どういうことなのでしょうね」

この周囲の海を縄張りとしているならば流れ着く自分達を見つけ出す事は容易だろう。あるいは意識を失っている間に見つけ出し、喰らいつく事だつてできたはず。それがなかったのはよほど運が良かったのか、あるいはこちら側に居たから気づかなかったのか。

まあ最終的にはやはり「運が良かった」としか言いようがない。

だがその運の良さも、自分達がいざ逃げ出そうとしたところでがらがらと崩れ去る。流れ着いた運の良さは、こちらで回収しますと言わんばかりに道を塞いでいるのだ。

そう、敵は――

「ラギアクルス亜種、か。どうしたものかしら」

西の海岸から北東へと進んできた二人の前にゆっくりと現れた、奴は周囲を見回しながら歩き続けていた。口元に血が付着している所から見ても、どうやら獲物を捕食し、また別の獲物を探しているらしい。あるいは逃げ出したものを追っているのか、だろう。

何にせよ、道を塞ぐならば回り道をしなければならぬだろう。だがラギアクルス亜

種の背電殻が絶えず電気を放出しており、警戒態勢を崩していない。下手に動けば気づかれる可能性があつた。

こうして動かなくなつてからも既に数十分は経過している。つまり奴は逃げた獲物を追っているのではなく、僅かな気配を感じ取つて何かを探しているという事になる。

一体何を探しているのか。

隠れている自分達を探しているのではないかという推測だ。

あるいは……この島に流れ着いた他の誰かを探しているのか、だろうか。何にせよここはまだ動かずに機を待つか出来ない。

万全の状態じゃないというのに強力なモンスターであるラギアクルス亜種を相手にする事なんて出来ないのだから。

○

海から離れ、森の中へと入つていった十兵衛と雪菜の視界の奥には周囲を警戒するラギアクルス亜種がいる。途中でアプトノスの死体があつたから恐らく奴が捕食したのだと推測できた。

だがラギアクルス亜種は何かを捜しているかのよう。逃げたアプトノスを探しているのか、はたまたまた別の何かを探しているのか。

なににせよ遭遇してしまつたならば、道を通るためにやらねばなるまい。既に十兵衛はハンター装備に着替えているが、雪菜はまだ私服のままだ。どうするのかと思いきや、

「装着、狩人」

そう告げれば纏っているローブから光が放たれ、次々と彼女の体へと定着していく。着ている和服とその光が入れ替わり、数秒もすれば日向・霸シリーズが雪菜を包み込んでいた。

一瞬にして一般人から狩人への変化。見事な早着替え……いや、服の入れ替えだ。手にしている番傘は……しまわない。

「まさか、それで戦うつもりッスか？」

「あかん？」

「いや、あかんってことはないツスが、竜と戦える武器なんスかね？」

「これを舐めたらあかんので？ ウチにとつて一番の得物なんやから。それに長く使つてるからなあ、手に馴染むんよ」

「ああ、そうですかい」

「そつちこそ、得物はどないするん？ 本気出すんやったらそれ相應のものを使うんやろうな？」

「そうは言つてもね、おいらは別にあんたと違つて完全なG級ハンターじゃないツスから上位止まりツスよ」

そう言いながら取り出したのは炎戈銃ブレイズヘル。ラギアクルス亜種にとつての弱点である火属性の弾、火炎弾を連続して撃ち出せる機能を備えているヘビィボウガンだ。

「でも、午卯の技術は持つとるんやろ？」

「……………」

「ん？ 違うん？ 本気つてのは魔闘士としての技術だけなん？」

「……………まあ、ない事もないツスよ。投影、銃剣」

そう呟いた十兵衛の手に鋼の剣とそれの上に器具が取り付けられたものを作り上げる。粒子が収束して出来上がったそれを感じ取った雪菜は興味深そうにそちらへと顔を向け、一息つく。

「投影、か。実物はないんやな」

「正當な午卯家の人じゃないツスからね。でも、投影魔法の技術を父から教わつたものツスから、ある程度の物は作れるツス」

「ふうん……でも投影やからしばらくしたら消えてまうやろ？」

「……それを防ぐために、固定化」

炎戈銃ブレイズヘルの銃口の下に剣を取り付け、続けて取り出した札を剣に貼りつけながら告げることでその力が剣に注がれる。これにより剣が再び粒子となつて霧散する事を防いだ。

「投影を消させないようにするための秘術を記した札。とはいえ完全ではないツスがね。数分程度はもつようになるツス」

「そらすごいな。でもそれが全てやないんやろ？」

「……どこまで知ってるんスカね？」

またしても警戒するような視線を向けてしまうのは無理もないだろう。しかし雪菜は気にした風もなく、口元へと指を当てて思案するように虚空を見上げる。

「んー……なんか一部の鍛冶屋を集めて銃に関するすごいもんを開発しているってのは聞いているわ。対人だけやのうて、対竜に関するものとか、な。確か……撃龍槍の技術を流用して作り上げた小さなもんとか」

「はあ……それはそれは。そこまで知ってるツスカ。でも、おいらは午卯の血に連なるだけであり、その技術を全て持っているわけじゃないとは先ほども言ったツス」

「でも現在の代表……午卯六花はんがあんさんを陰で使つとるんやろ？ なら、彼女か



らある程度の技術を流してもらったんちゃうん？ その剣とか、対竜に開発された技術の一端とか。それを今つこうた投影で作り上げれば、短時間であれ午卯の技術を使える。……ちやう？」

「……末恐ろしいツスね。どこまでおいらを視通してるんスカね？」

そこで初めて十兵衛は顔をひきつらせながらも苦笑を浮かべて雪菜を見る。それに対して雪菜もまた小さく笑ってみせた。

「くす……別に全てを視通してるわけやない。ウチはあくまでもウチが持つとる情報と、こうしてあんさんを視て感じとり、推察したことを口にしとるだけや」

「そうツスカ。……でもこれ以上は口には出来ないツスね。知つての通り、午卯の技術は午卯に関係する人だけの秘術ツスカから」

「それを横流ししてもらつてるのに秘匿、ね」

「それは否定できないツスが、一応おいらも午卯に連なる存在ツスカからね」

「せやなあ。それもまた否定できへんわ。血は逆らえへん。……ま、ええよ。ウチはただ完全に信用されとらんしな。ここまで見せてくれただけでも十分譲歩されとる、と見てええやろうな。……その等価交換としてやけど、ウチもまたウチの技術を見せたる。しかと、その目に焼き付けえや？」

「どうも。じっくりばつちり、見させてもらいましようかね」

くるくると番傘を弄っていた雪菜はそう言つて肩へと乗せていたそれを、ゆつくりとまるで刀を携えるように持ち変える。開かれた傘は閉じられ、それはまさに刀を収める鞘となる。

番傘へと彼女の気が瞬時に纏われるだけでなく、彼女の魔力に呼応して番傘に淡い光の紋様が浮かび上がっていく。まさか、この番傘自体が術式を施された武器だとは思わなかつた。今までそれを感じさせないだけの秘匿を施されるとは……もしかするとあの気を纏わせる事で眠っていた術式を目覚めさせたというのだろうか。

となれば、まさしくこれが彼女にとっての一番の得物だという事も頷ける。

剣士にして魔法使い、魔法使いにして剣士。

相反する二つの力を扱う存在。

十兵衛が格闘術と魔法を合わせた魔闘士だとするならば、雪菜は剣術と魔法を合わせた魔法剣士、あるいは魔剣士というべきか。

息を呑みながら雪菜を見る。

番傘を手に佇む彼女の姿のなんと凛々しきことか。

そんな事を考えていると、

「……ついでにウチの裸身もじっくり見てくか？」

「もうそのネタはいいッス」

ぶち壊した。

少しでも凜々しい人だ、と思った数秒前の自分を返してほしい。

「興味ないん？ ……ああ、もしかして成長期なあの双子の方が好みなん？ それとも

……午卯六花のような小さいのが好みとか……それってロリ——」

「大きな誤解を招くような事を言うなあああああッ!？」

思わず大声で怒鳴ってしまった。こんなところでそういう事をしたらどうなるのか。

「……グルル?」

離れた所にいるラギアクルス亜種が声に気づき、振り返ってくるのは当然の反応だろう。首をひねって二人を視界に収めれば、勢いよく体を反転させて辺りに響き渡る程の咆哮を上げる。

それを見た雪菜はやれやれとため息をつき、

「気づかれたやんか。どないすんねん」

「誰のせいだと思ってるんすか……?」

「……まあええわ。奇襲できんでもかまへんしな。やることは——変わらへんのやからな!」

「流したツスね……?」

地を蹴って瞬時にラギアクルス亜種へと距離を詰めていき、瞬きする時間の中で番傘

から刀を抜き放つ。ラギアクルス亜種はその速さにおいつけず、先手を取られて首から鼻先まで斬られてしまった。

ラギアクルスと違い、亜種は顔の甲殻が段違いに硬くなっており、大抵の武器は弾かれてしまう。だが日向・覇シリーズによつて発現するスキル、心眼はその弾かれる事を防いでしまう。硬い相手だろうが武器を振り抜けるため、隙を晒す事が減るお得なスキルだ。

ラギアクルス亜種が雪菜へと噛みつきにかかるも、軽やかな足取りでひらりと躲し、刀を番傘へと納めながら「徒花あだばな——」と呟き、

「——風華ふうか」

空に走るいくつもの剣閃と、それに伴った真空の刃。ラギアクルス亜種の首や前足、胸から血飛沫が飛び、風に乗って散っていく。その返り血は風によつて雪菜へと届かず、しかし彼女の白い肌とラギアクルス亜種の白い甲殻に赤が差し込むその光景。

ぺろり、と赤い舌を覗かせ、赤い番傘を顔の近くまで揚げるその姿はどこか色っぽさを感じさせる。

「紅花べにばな——鳳雛ほうすう」

赤い番傘に赤く灯る紋様。それは赤く燃ゆる鳥を形作り、番傘を振るう事でラギアクルス亜種へと飛びかかっていく。それだけではない。閉じた番傘による打撃と開かれ

た番傘から放出される火炎が回転し、熱風さえ生み出してきている。

ただ鞘の役割をしているだけではない。あの番傘自体もまた彼女にとっての武器なのだ。

刀を収める鞘。

術式を施される事で彼女の魔法を援助し、時にそれ自体が魔法を発する武器。

炎を纏っているというのに燃えないというのはそれに対する備えがあるという事なのだろう。その耐久性があるならば、もしかすると彼女を守る盾にもなるんじゃないだろうか。

そう考えながら、ベルトリンクを伸ばして火炎弾を高速射撃する。そうしながら雪菜の支援が出来るようラギアクルス亜種へと近づき、そしてラギアクルス亜種は接近してくるもう一つの敵を視認する。

大きく息を吸いながら首を引くと、通常よりも大きな雷弾を放出した。首を振りながら放たれた雷弾は十兵衛へと迫り、彼は右に跳ぶ事でこれを回避する。地面に着弾した雷弾は連続して炸裂し、弧を描いてその周囲に雷を立ち上らせた。

続けて十兵衛を迫るように勢いをつけて地面を滑っていく。その際に背電殻から雷撃を放出し、例え直撃しなくとも雷撃に絡め取ろうという魂胆だ。が、十兵衛は気を放出する事で勢いよく弾丸の如くその場から離れ、岩肌を足をつけて反転。

滑っていったラギアクルス亜種の頭上から火炎弾を背電殻へと着弾させていく。

「軽業師やな」

「褒めてんスカ、それ？」

「当然やん。……それより、気いついとるか？ あのラギア亜種」

「……あんたもそう見るんスね。あれが——G級だつていうのに」

「くす……心、踊るやないの。こんなところでもG級や。とことん世界は荒れとるつてことやなあ」

「それで心躍るつて、あんた、そういう性分だつたんスカね？ 意外ツス」

そう言いながら十兵衛は一度ベルトリンクを抜き、弾を装填して尻尾を振るつてきたラギアクルス亜種の背後へと回り込み、「斬裂」と口にする。すると炎戈銃ブレイズヘルに装着されている剣が伸び、振るわれた尻尾へと振りかぶつてやる。

剣は尻尾の裏から刃を突き入れ、鱗を数枚斬り飛ばす。だがやはりG級というべきか。投影しているその剣では深くまで刃が入らない。これがわかつただけでもいい。十兵衛は「解除」と口にして札を剥がし、これによって剣は粒子となつて消える。

「ふっー」

続けて撃ち出されたのは貫通弾Lv2。背後から胸にかけて貫いていく弾丸を受け、ラギアクルス亜種は小さく呻いたが、それだけだ。しかし続けて番傘から抜かれた刀

で右肩や胸、腹と斬られる事で呻きは悲鳴となる。

鋭い斬撃だ。見ているだけでもわかる程に洗練された剣術。やはりただ者じゃない。ふざけた部分があるようだが、彼女は確かに優れたハンター……武人だと改めて認識する十兵衛だった。

「……つと、はっ！」

見惚れている暇はない。振り返りざまに背後にいるはずの十兵衛にまで届く程に首を伸ばして噛みつきにかかるラギアクルス亜種から離れ、しかしその頬へと一撃入れるように気を込めて蹴りを放つ。

硬い甲殻だが問題ない。衝撃を伝えるように調節した気を込めた回し蹴りだ。そうしつとんと、と角へと足を乗せ、気を放出して跳躍しながら弾丸を装填し、徹甲榴弾を頭部へと撃ち込んでやりながら空中でバック転をしつつ離れた所に着地する。

同時に着弾した徹甲榴弾が爆発し、それを確認しながら続けて貫通弾Lv2を再び装填。背後からまた突き抜けるように弾丸を撃つていく。

補助の弾は使わない。そもそもあの雪菜に補助なんていらなだろう、というのが十兵衛の読みだった。彼女自身の実力が他のハンター達よりも上回っているため、補助する暇もない。

攻撃の鋭さ、回避の腕、そして番傘という名の補助と盾。

これらをただ一人で兼ね備えている万能型。

どうして盾までついているか？ それはああして見ればわかる。ラギアクルス亜種が撃ち出した雷弾を開いた番傘で受け止め、回転させて雷撃を霧散させている。どうやらあれの強度まで弄っているようで、十分に盾として通用しているらしい。

「桐生雪菜、か……少し悔っていたかもしれないな……」

じつと雪菜の方を見ながら呟いていると、ラギアクルス亜種に斬りかかり、反撃を躲しながら雪菜は顔を上げる。そのまま刀を番傘に収めながら、どういうわけか少しだけ頬を紅潮させつつそと手を添えて首を傾げてきた。

「ん？　なんか熱い視線を感じるわ。これはもしかして……惚れられた？」

「誰が誰に惚れたってんだ!?　こんな時に妙な事を口走るんじやねえツス!」

「……あ、なんか知らんけど……ウチ、フラれたん？　ややわくフリ続けたウチがフラれる日が来るなんてなあ……」

「……余裕ツスね、あんた……。おいらの手、いらねえんじやねえツスか？」

「ややわく、つれない事、言わんとつてえや。か弱いウチ一人でこいつの相手なんて……辛いんやで？」

「そんな動きをしていながら辛いとか……寝言は寝て言えツス」

軽やかにラギアクルス亜種の攻撃を躲しながら雪菜は十兵衛と会話している。こう



している間も十兵衛はラギアクルス亜種へと銃撃しているというのに、本当に彼女は食えない人だと思わざるを得ない。

「というか、彼女と正体を暴露し合ってから……いや、もしかすると船で会話している間から調子が狂っている。」

「……相性最悪だな」

「いや、逆に相性抜群やないん？」

「ど」がだよ……」

くすり、と微笑まれても十兵衛としては渋い顔をせざるを得ない。

そんなやり取りをしながらも戦いは続行される。

まだまだ戦いはこれからだった。

## 64話

その様子を、瑠璃と茉莉は驚きに目を開いて見つめていた。

二人が生きているという喜びはあったが、それ以上に十兵衛の今まで見た事のないような動きと、雪菜の実力を目の当たりにした事で驚きが勝ってしまっていた。

素早く動き、銃撃し、時に回し蹴りで蹴り飛ばしながら距離を取る十兵衛。

盲目である事を感じさせないような危なげなくも素早く動き、目にもとまらぬ速さで抜かれる刀で斬る雪菜。

自分達とは一線を画す程の実力の差。

経験の差もあるのだろうが、それ以上に磨き上げられた実力の差を目の当たりにしてしまった。

だがいつまでもこうして見ているわけにもいかない。二人は木の枝から飛び降り、それぞれ武器を抜いて一気にラギアクルス亜種へと向かっていった。

瑠璃は火竜剣【炎燐】を、茉莉はブラックテンペスト改を。

それぞれ強化された武器の初陣となる。

「……ん？ あら、乱入か」

「？ あ、瑠璃さんに茉莉さん」

森の中から飛び出してきた二人の人物。それに気づいた十兵衛と雪菜は一度視線を向け、しかしすぐにラギアクルス亜種に戻して戦いを続行する。

握りしめた火竜剣【炎燐】の刀身から勢いよく炎が噴き出し、新たな敵に振り返ってくるラギアクルス亜種の胸を斬り上げる。火竜剣【炎燐】は長剣形態のままに戦い続ける。茉莉はブラックテンペスト改を後ろ足めがけて突き入れる。ラギアXシリーズの覚醒スキルにより、無属性だったブラックテンペスト改は爆破属性を兼ね備えるランスとなる。

しかも属性値はなかなかある。それだけでなく元から無属性のランスだったために通常の火力としても高めだ。

「グルオオオオ！」

怒り手前か。唸りながら足元まで届くくらい首を伸ばして振り返りざまの噛みつき。それに繋げるように周囲を吹き飛ばすように連続爆発する雷弾を放出。瑠璃はそれから逃げるように大きく下がり、茉莉は盾を構えて耐える。

「お二人さん、気いつけえや？ これ、G級個体やで」

「おー……またですかー」

「ついこの間G級ラギアと戦ったばかりだったのに、今度は亜種なの!? ふざけた現実ね……」

「でも、何とかなるツスよ。そこに実力者がいるツスからね」

ちらりと雪菜を見ながらも、十兵衛は装填した徹甲榴弾Lv2のベルトリックでラギアクルス亜種の頭部を撃ち抜き、衝撃を伝える。雪菜も反撃として撃ち出された雷弾を開いた傘で受け止め、回転させて弾ける雷を絡め取って吸収している。

「自分のことは棚上げ？ あんさんだって出来るハンターなくせによおうわ」

吸収したエネルギーを放出するように抜き放った刀から鳥を形作った雷の刃が放たれた。雷属性はあまり通用しないだろうが、切り裂く力でラギアクルス亜種へとダメージを与えている。

硬い甲殻や鱗が切り裂かれてもなお、ラギアクルス亜種は唸るだけ。背電殻が活性化し、周囲へと充電による余波が放出される。それから逃げるのは茉莉以外。リオハートシリーズは雷耐性が低かったが、ラギアXシリーズとなれば高くなる。盾を構えて放出される雷撃を耐え、カウンターを放つようにブラックテンペスト改を腹へと穿つ。

一撃、また一撃と穿っていき、粘菌がそこへと蓄積されて赤く染まっていく。そこを更に強く穿った瞬間、粘菌が爆発して鱗を吹き飛ばした。

その衝撃は後ろ足にも届き、爆風によってラギアクルス亜種の体勢が崩れる。海竜種

独特の巨体を支える一角が崩れた事で、鈍い音を立てて転倒してしまつたラギアクルス亜種。

この好機を逃す十兵衛と雪菜ではなかつた。

いや、瑠璃も火竜剣【炎燐】をダブルセイバー形態、そして中心を分離させて双剣へと切り替えて一気に攻め立てようとしたのだ。だがそれよりも速く、雪菜が番傘を構えて背電殻へと接近していた。

「さて、破壊させてもらおか……！」

数度、刀を抜けば刺激に反応して刀身が炎に包まれ、背電殻へと二太刀入れ、続けて番傘自体を叩きつけ、先端を背電殻へと突き入れる。刹那、高まつた炎が先端から放出されて爆発を引き起こした。

だが止まらない。逆手に持ち変えた番傘と刀の即席二刀流で連撃を叩き込んで斬撃と火炎の二重攻撃を放ち続ける。強固な番傘だからこそ出来る芸当。変則的な二刀流の攻撃は背電殻を少しずつ破壊していく。

一方胸に回り込んだ十兵衛はというと、他の三人がそれぞれ別の位置に散つていたため見られていない、という状況を感じ取る。そうして静かに「投影、鋼銃槍」と呟いた。投影されたそれを素早く銃口に器具を取り付け、杭をもがいているラギアクルス亜種の胸へと合わせて懐から取り出した一発の弾を装填。そうして引き金を引けば、火薬の

爆発によって銃口に付けられていた器具が動き、杭を凄まじい勢いで撃ち出す。

爆発の力によって動いたそれに従って動いた杭は、数度斬られていた胸の鱗を容易に挟り、中にある肉までをも一気に風穴を開けていく。ぶちぶち、と肉が引きちぎられ、鋭利な刃の先端によって貫かれていく穴。引き戻された杭は先端から数センチに掛けて鮮血に濡れ、ラギアクルス亜種の胸の穴から一気に血が噴き出してくる。

たった一撃でこれだ。撃龍槍を参考にして開発された、パイルバンカーの威力が如実に表れている。だが撃龍槍と同じく一発撃てば数分間は撃てないというデメリットを備える。

これはパイルバンカーを撃ち出すための弾に込められた火薬の爆発の影響でヘビィボウガンが強く加熱され、傷ついているためだ。連続して爆発させればヘビィボウガン自体が使い物にならなくなってしまう。

しかしそのデメリットを気にしない程にまでの威力を見せ付ける一撃。

ガンランスにとつての最大の攻撃である竜撃砲に負けず劣らぬ一撃がパイルバンカーというものだ。そのパイルバンカーの杭は役目を終えたように粒子となって消えていく。

向こうで腰元や尻尾へと双剣となった火竜剣「炎燐」を振るっていた瑠璃は、パイルバンカーの爆音に驚いた顔で十兵衛に振り返ったが、しかし彼女はその杭を見ることは

叶わなかった。

「また何かやったのかしら……つと、この……！」

頭上を通り過ぎていく尻尾を身を低くして躲し、剣を振るって少しづつ肉を露出させていく。強化された事で火力が上昇しただけでなく切れ味も上がり、ラギアクルス亜種の尻尾や腰元だろうと弾かれる事はなくなっている。

刃は鱗を切り裂き、焼き払う事で火竜剣「火燐」だった頃よりも敵に傷を負わせていることがわかる。

（相変わらずいい仕事をするわね、姉さんは）

そう考えているとラギアクルス亜種は起き上り、周囲に響き渡る程の怒号を放つ。怒り状態へと移行したのだ。そうした上でラギアクルス亜種は瑠璃に向かって体全体で体当たりを仕掛けてくる。それを尻尾から抜けるように避けたが、振り返りざまに雷弾を撃って追撃する。

それでは止まらず、後ろに下がりがらもう一発撃ち、最後に瑠璃が逃げた先にいる茉莉と纏めて吹き飛ばすかのように横に首を振って連続して爆発する雷弾を射出。瑠璃は更に逃げたが、茉莉は盾を構えたまま前進。

盾から己の気を展開して巨大な障壁を作り上げ、爆発する雷撃をもともせずに進軍。それはまさに堅牢な砦の如く、彼女の守りを崩すには至らない。ラギアクルス亜種

は迫ってくる茉莉に意識を取られ、もう一発雷弾を撃ったがそれも無意味。下がった頭めがけて茉莉は展開している障壁をそのままに、一気に加速してその頭を殴り飛ばすように盾を突き出す。

顔面から殴られるその鈍い衝撃にラギアクルス亜種は小さく呻く。顔を守る硬い甲殻は確かに多くの武器を弾くだけの硬さを有し、並大抵のものでは傷一つ付かないだろう。だがしかし、その硬さゆえに有効打が存在する攻撃法もある。

それが打撃。硬いものには打撃武器、その衝撃を内部へと伝えることでダメージを与える攻撃手段。

障壁が展開されたブラックテンペスト改の盾。堅牢で強固なG級ディアブロス亜種の素材で作られた重量のある盾。これに茉莉が展開した障壁という要素がプラスされた一撃は、ラギアクルス亜種の頭を揺さぶるには十分なものだった。

その隙をまさに突くように、茉莉はブラックテンペスト改の先端を十兵衛が作り上げた胸の傷へと突き入れる。ディアブロス亜種の角と甲殻でまっすぐに伸ばしたその槍は、重量も硬さも他のランスとは段違いだ。

しかし茉莉はそれを持ち前の怪力によって操る事を可能としている。本物のディアブロス亜種ほどではないにしろ、肉を穿たれた事でラギアクルス亜種に苦悶の表情が浮かぶ。



だがこれで負けていられる程にラギアクルス亜種は甘くはなかった。

茉莉を押し潰すように上半身を持ち上げ、そして沈めていく。小さな少女などこれで簡単に潰れてしまおうだろうが、しかし今の茉莉は堅牢な砦。どつしりと構えた彼女は押し潰しに来るラギアクルス亜種そのの巨体を躲し、衝撃を盾でしっかりと受け止める。左腕にかかる衝撃など意に介さず、カウンターを放つように一撃胸へと突き入れる。

ラギアクルス亜種はしかし、その一撃を受けてまだ動く。胸で活性化する粘菌などに介さず、首を動かして側面から茉莉へと噛みついていく。が、茉莉は小さな動作でそれを躲しつつ盾で受け流す。

一撃頬に突き出したがラギアクルス亜種は体の側面から茉莉を撥ね飛ばしにかかる。それも耐えている茉莉であり、雪菜と十兵衛にとつてはこれは好機でもある。

そうやって一人に意識を向けていってくれば、例え怒り状態であったとしても脅威ではない。

「首級、獲らせてもらおか」

構えた番傘を握りしめたまま雪菜は側面からラギアクルス亜種の首へと向かっていく。高めた気は既に番傘に収束している。あとはそれを振り抜いてあの長い首を斬り落とせばいい。

それだけでこの戦いは終わりを迎える。

が、現実はその上手くないかない。ラギアクルス亜種の背電殻が活性化し、またしても周囲を雷撃の檻に閉じ込める。舌打ちして雪菜は番傘を広げて盾とし、一度距離を取る。その感知力によりどこに雷撃が落ちて弾けるのかを感じとり、目隠しの布が揺れる中、雪菜は攻撃するタイミングを失った。

その代わり、十兵衛が雷撃を放って棒立ちとなっているラギアクルス亜種の背電殻を狙って火炎弾を連続して撃ち出していく。別のベルトリンクから用意した新たなる火炎弾の嵐。雷撃の檻など関係ない、距離が離れていても攻撃できる十兵衛からすれば隙だらけ。

また茉莉にとっても盾を構えたまま立ち回る事で雷撃など通用しない。受ければただでは済まないだろうが、ラギアXシリーズという耐久性と己の防御術を信じて彼女は立ち回る。その際に機があればブラックテンペスト改を突き出して攻撃する事も忘れない。

相手はG級のモンスター。

普通ならば太刀打ちできない強大な敵。

だがラギアXシリーズとブラックテンペスト改を手にする事により、以前よりも強気で攻められる。それに茉莉はただ武器が強くなっただけでは満足しない。攻守が高まった事で今まで以上の動きを行い、己の力を更に高めていく。

そう、これは成長のための戦いだ。

いつまでも成長しないままにいるわけにはいかないのだ。

桐音の実力を目の当たりにし、十兵衛も出来るんじゃないかと疑問に思っていれば、蓋を開けてみればあれほどまで動けるハンターだった。そしてそこで戦っている雪菜もまた桐音に負けず劣らない実力者。

そんな人たちが近くにいるのに、自分達はまだまだ弱い。それは、茉莉だけでなく瑠璃も……いや、瑠璃の方がよほど悔しく感じている事だろう。彼女はわかりにくい茉莉と違って、わかりやすく負けず嫌いだ。

向こうで雷撃がやむまでの間双剣の柄を合わせてダブルセイバーとし、回転させる事で気刃を放って攻撃していた。だが彼女は雷撃が今もお展開されている事に歯噛みしている。どうやら斬り込んでいきたいのにいけない事に苛立っているらしい。

「グルオオオオオオ!!」

吼えながら勢いよく下がりが、斬りかかって来ようとする雪菜を体で撥ね飛ばしにかか。番傘を広げて防御して防ぎ、逆にその番傘に火の力を収束させ、大輪の火の花を咲かせる。勢いよく番傘を回転させて花を更に大きく咲かせ、ラギアクルス亜種の横つ腹を焼きに行く。

それに顔をしかめるラギアクルス亜種へと一気に瑠璃へ疾走し、ダブルセイバーから

長剣形態へと変えた火竜剣【炎燐】を構える。苛立ちは募っていたが、そこで頭によぎるのはクロムの言葉。

そして茉莉の言葉も相まって、熱くなってきた感情を冷却させていくことにする。そうして無心となり、頭に残すのは斬るといふ一点のみ。

G級モンスターが何だというのだ。確かに恐れはあるが、仲間がいるのだからこうして未熟な自分でも戦える。武具も強化されているし、火竜剣【炎燐】は確かにラギアクルス亜種を傷つけるだけの力を持っている。

あとは一気にケリをつけるだけの一撃を放つだけ。

尻尾を通り過ぎ、腹すらも通り過ぎて狙うのは首を落とす一撃。下段に構えた火竜剣【炎燐】を首めがけて振り上げたのだが、ラギアクルス亜種は高められた火竜剣【炎燐】の炎の気配を感じ取って振り返ってきた。

その時には既に火竜剣【炎燐】は振り上げられており、赤く燃える刃がラギアクルス亜種の首を切り裂いていた。しかし勿ね飛ばすだけの一撃とはならず、首の鱗を切り裂いて血を噴き出させるだけに留められた。

それだけあれば十分だった。ラギアクルス亜種は口を開いて瑠璃へと噛みつきにかかる。それを何とか気を込めて火竜剣【炎燐】で受け止めるも、正面からぶつかってきたラギアクルス亜種の頭突きに瑠璃の体は後ろへと追いやられる。

そうした上で背後から尻尾を振るって瑠璃を吹き飛ばし、浮いた彼女を雷弾で撃ち抜く。

「がっ、ぐ……!?!」

体に走り抜ける電流に瑠璃の口から乾いた悲鳴が漏れる。そのまま地面を転がっていく瑠璃に気づいた茉莉だが、ラギアクルス亜種が今撃ち出した雷弾の分の力を補給するように背電殻に電気を収束させる。

その余波が放出されて茉莉は盾を構えながら防ぎつつ、少しずつ後ろへと下がる。それを見逃すラギアクルスではなく、彼女を追うように前進しながら噛み付きに行く。一撃は防ぎ、二撃目は受け流していくのだが、そこで茉莉は気づいた。

足腰が少し痛みだした事を。

これは長く木の上で動かなかった影響だろう。今まで何とか動き、防ぎ続けていたのだが、凝り固まった筋肉がいよいよ悲鳴を上げだしたのだ。G級モンスターが相手だけに、少しずつほぐしていくような動きではなく、最初から全力で動き、防御し続けたツケが回ってきた。

(これは……不味いですか)

茉莉の防御はどつしりと構えられるだけの足腰があつてこそ。弱ってくれば防御したとしても押しやられ、隙を晒す事になる。瑠璃に続いて自分も落ちることになるか、

と覚悟を決めかけるが、どこからか飛来した弾丸が茉莉の腰元へと突き刺さる。

それがもたらした効果によって足腰の痛みが和らいだ。それに気づいた茉莉がそちらへと視線を向けると、十兵衛が弾丸を装填してラギアクルス亜種へと向かっているところだった。

どうやら回復弾を撃ち込まれたらしい。ここにきて支援とは驚いた。

それだけではない。

雪菜が畳んだ番傘を瑠璃へと向けると、淡い緑の光が放出されて瑠璃へと吸い込まれていく。体を押さえながらも立ち上がろうとした瑠璃はそれに気づき、はつとして体を見下ろす。彼女もまた痛みが和らぎだしていたのだ。

「大志を抱くのはかまへんが、無理に突っ込むのだけはいただけんなあ」

番傘を少し回転させ、手にしている刀を収めつつそう言う雪菜。和らいだとはいえそれでも体にかかったダメージに顔をしかめる瑠璃は、ふらつきながらも雪菜へと一歩ずつ近づいていく。

「忠告はありがたいけど……それでもあたしは、やらなきゃならないのよ……。こんな所で、もたもたしている暇はないわ。……少しでも早く上に……行かなきゃ……!」

「はよお強おなりたい……それは誰もが抱く大志やな。……でも、それを望んだが故に無理をし、勇気と無謀をはき違えて散っていった輩も多いってのは知ってるやろうな

「？」

「……………」

「あんさんがそれに続くんであれば……ウチは余計な手を差し伸べたかもしれないな。散るんやったら華々しく散る、それもまた一つの終焉や」

「……んなこと、望んじやいなわよ……！ あたしは、ここで終わってたまるもんか……ッー！」

「さよか。なら、無理せず戦うことや。安心しい、ウチとあの萩原はんやったら問題なく終わらせたる。あんさんらはラギア亜種の意識をひきつけてくれるだけで——」

「——そんな風に補佐に回ってばかりだと、あたしたちはいつまで経っても成長しない……！——」

「……………」

その悔しさをかみしめるような言葉に、雪菜は見えない目で肩越しに振り返る。感じられるのは悔しさだけではなかった。自分に対する不甲斐なさも感じられる。それだけ彼女は強さを渴望しているのだ、とわかるくらいに感情の揺らぎ。

一度は落ち着いた揺らぎがまた生まれている。

自分達以外のハンター達の誰もが強い、という現実には彼女はたまらなく悔しがっている。自分達の年齢の時に、彼らは凄まじい戦いを経て名を馳せ、そして今もなお高みに

存在している。

それに対して自分達はなんと弱い事か。成長しているのだが、しかしその証を手にしてもまだ満足できない。彼らの背中を追いかけ続け、今もなお見えない遥か彼方の背中。手を伸ばしても届かない程に遠き理想。

がむしやらに頑張っても、こうして新しい武具を手にして戦っても、結果はこのぎまだ。

「だから、今ここで結果を出す！ あたしが、あたしたちが奴を仕留める……！ そうして初めて、あたし達は……また少し前に進んだと自覚できる……！」

ジンオウガとの戦いで成長した事を自覚したのは確かだ。だがこうしてG級モンスターを連続して前にし、彼女らの成長の自信は容易に打ち碎かれる。それだけでは終わらず、ああして十兵衛も戦えているという現実が追撃となった。

瑠璃の焦燥感はそのから生まれていたのだ。

「……急いては事をし損じる。焦る気持ちはよおわかるけど、それでは目的には届かへんで？ 双子姉はん？」

そう言いながら鞘に収めた刀を抜き放ってラギアクルス亜種の首を斬る。一撃、二撃と命中したそれは少しずつラギアクルス亜種に致命傷を与えていく。首を刎ねるに至らなくとも、首から出血するそれによって命を落とす可能性だってある。



だが瑠璃は失血死ではなく自分の手で討ち取る事を望んでいる。痛む体を押しして彼女はラギアクルス亜種へと走り出す。それを止めることはせず、「しやーないな」と溜息をついて雪菜は彼女の望む通りにしてやろうと援護する事にする。

(見させてもらおうやないか。どこまで力を引き出せるんかをな……)

くすりと微笑を浮かべながらも、迫りくる瑠璃へと雷弾を撃つラギアクルス亜種の前へと躍り出る雪菜。広げた番傘で雷弾を受け止め、その間に瑠璃が長剣形態にしていゝる火竜剣【炎燐】をラギアクルス亜種へと振りかぶる。

だが硬い東部の甲殻がその刃を弾き返し、それで隙を晒した瑠璃を横から吹き飛ばすように顔を振る。それによつて宙を舞う瑠璃の体。だが瑠璃は痛む翼を広げて体勢を立て直す。

しかしやはり翼もまだ本調子を取り戻せていなかった。数度羽ばたいただけで鈍痛が伝わってくるのだ。だがそれでも翼を羽ばたかせることによつて空中でも体勢を立て直す。

そのまま背電殻へと気刃を放ち、攻撃をしかけるも背電殻が雷撃を放出し始める。だがそれを止めるように十兵衛がまたしても「投影・鋼銃槍」と口にしてラギアクルス亜種の左腹めがけて照準を合わせ、弾丸を装填して引き金を引く。

刹那、またしても凄まじい爆音を響かせて杭が撃ち出され、その腹へと風穴を開けて

いく。その一撃にたまらずラギアクルス亜種は怯んでしまい、雷撃を放出する事を止める事が出来た。

その隙に茉莉が強くブラックテンペスト改を胸へと突き入れ、爆発を引き起こして更に怯ませ、瑠璃がこれで決めるかのように火竜剣【炎燐】を振りかぶる。ラギアクルス亜種の瞳が見開かれ、瑠璃を止めようとしたがもう遅い。

「——アアアアッ!!」

彼女の高まった気が纏われた火竜剣【炎燐】の一撃が首に刻まれた傷を更に傷つけ、そうして焼き切るように刃が通っていく。この一撃こそが今の瑠璃にとっての最大の一撃。体の内側から湧いてくる熱い炎のような気が火竜剣【炎燐】と呼応し合い、灼熱の炎の如き赤き刃を作り上げる。

これが傷ついていくラギアクルス亜種の首を通っていくのだ。硬い鱗ならばまだしも、傷が入り、肉を露出している部分となれば耐えられない。彼女の強き意志が籠った火竜剣【炎燐】が彼女の願いを叶えるかのようにラギアクルス亜種を刎ね飛ばす。宙を舞う白い甲殻が覆われた頭が憎らしげに瑠璃を見つめている。

こんな終わりなど認めないかのようなその視線が地面に落ちていき、鈍い音を立てて転がっていく。それを見た瑠璃の心は——ひどく荒れていた。

そうだ、こんな終わりなどあまりにもあつけない。それは自分一人……茉莉と協力し

ての勝利ではない。雷撃を防いだ十兵衛に、傷をあらかじめ作り上げ、それだけでなく瑠璃へと届く攻撃を防いでいた雪菜の協力があつての事。

それがわかつているからこそそのような終わり方になっている。

「討ち取つたなあ。よかつたやん、望み通りにとどめがさせて」

「……………」

「どうしたん？ 嬉しくないん？」

「……………こんな勝利なんて……………嬉しくもなんともないわよ……………」

「……………せやろうな。やから無理に行くなつてゆうたんや」

（それに、とどめの一撃は確かにいい炎やつたけど……………まだ完全に出しきれてへんな。まだ何か眠っているだけやろう。完全にそれを目覚めさせとらん感じ、か。今回は焦燥感によるちよつとした暴走みたいなもんやな）

そんな事を考えながら閉じていた番傘を開いて肩に乗せてくるくと弄る。死体となつたラギアクルス亜種を見つめてどこか満足していないような表情を見せる瑠璃をじつと見つめ、雪菜はこう言う。

「でもな、そう強さを求めとるあんさんは自分の実力、氣いついとるんか？」

「どういう事？」

「よお考えてみい。ウチらが傷つけとつたとはいえ、そう簡単にあれの首を刎ね飛ばせ

るわけあらへんで？ 首を刎ねる……それも硬い鱗持つとるモンスターの首をあそこまで刎ね飛ばせるには技量がある。その得物の性能も加味しなあかんけど、最終的には斬る使い手の技量が試されるわけや。……あんさんは、見事に首を刎ね飛ばした。そうするだけの技量が……下地が備わってるんや。それで満足せえへんの？」

雪菜の言葉に瑠璃は沈黙する。

確かに首を刎ね飛ばすという芸当は誰にでもできるようなものではない。これもクロムに教えられた剣の腕を高め続けた結果だろう。

「ウチから見ても双子姉……いや、妹はんもまたそこらのハンターよりも実力あるで。その歳でここまでできとるっていうのは優秀なハンターって証や。……それで満足せえへん、まだまだ追うべき人がいるってんなら、どんだけ理想が高いって話や。届かへん背中を追うのもええけどな、立ち止まって足元や周りを見てみいひんと、いつかつまずくで？ ……いや、今まさにつまずいとるんかな？」

「……………」

「……ま、ここまで喋ってもうたけど、余計なお世話やつてゆうんなら聞き流しい。あんさんがとどめを刺したって事実は変わらへんのやからな。素材も、あんさんらが持つていきい。ウチは別に必要あらへんから」

そう言つて番傘を軽く回しながら雪菜がその場を離れていく。どこに行くのか、と十

兵衛が問えば辺りを見回してモンスターがいらないかを探つてくると言った。十兵衛もそれについていく事にし、死体の解体は瑠璃と茉莉が行う事にする。

強固な鱗や皮、背電殻に尻尾、角と解体していき、尻尾を探れば蒼玉や蒼天鱗が姿を見せる。これもまた良個体だったらしい。

G級モンスターが現れるだけでなくこのような貴重な素材まで保有する良個体。どうしてこうも巡り合わせがいいのか悪いのか判断に困る結果だ。まるで何かの意思が絡んでいるかのよう。

……これが「世界」の意思なのだろうか。

自分達を潰しに来ているのか、あるいは討伐させて良質の素材を与え、強化させてきているのか。

そんな事を茉莉が考えていると、瑠璃が神妙な顔で解体をしている事に気づく。

「どうかしましたかね？ ……もしかしてあの壬生さんの言葉が気になつていたので？」

「……気にならない方がどうかしてるわよ」

「でしょうねー。ですが、わからなくもないですよ？ 私達はあの人達の背中を追う事ばかり気を取られている節があるかもしれないかもしれません。強さの道に近道なし、ただ地道に経験を積むしか道は拓けない事が多いのが現実ですねー」

「でも、それでも求めずにはいられないじゃない。……もし、撫子姉さんのような才能があれば、あたしたちだって何かが目覚めるかも……」

「それがあれば苦労はしませんが、そんな気配が今までありましたかね？」

「……ないわね。……はあ、本当に姉さんが全部持っていていっちゃったのかしらね」

「はっはっは、案外そうなのかもしれないですねー」

笑い事じゃないが、それでも茉莉は笑ってみせた。そうやって暗い気分を和ませようとしたのかも知れないが、しかし瑠璃の表情は明るくならない。

こりや尾を引きそうだな、と思いながら茉莉は剥ぎ取りナイフを操っていく。

体術のクロム、魔法のライム。

トレースのシアンに、防御術の桔梗。

才能あふれる実の母と姉に白銀一家の三人。

剣術の桐音に銃術の十兵衛。

そこに加わった盲目の剣士の雪菜……彼女の仲間の二人も出来るハンターだろう。

自分達の周りは実力者ばかり。そんな中で自分達はあまり目立たない。成長過程といえどそれまでだろうが、それでも彼らの六年前に比べれば劣るだろう。

だが雪菜が言ったように、この歳でここまで戦えるだけでも十分強いハンターだと言えるのだ。周りが凄すぎるが故に、二人は強さのボーダーラインを間違えてしまってい

る。一般的なラインでいけば、二人は優れている。二十歳の時点でG級モンスターと戦えている、というのは誇れる勲章と言える。

それでも満足していないのはやはり、瑠璃と茉莉が持つ理想が高すぎるが故か。そのボーダーラインを下げ、落ち着いて少しずつ積み重ねるべきだろうか。G級モンスターをこれからも相手にするのならば、雪菜が言ったようにいつかつまづいてしまいうらう。

改めてそれを考えながら、二人は素材を剥ぎ取っていった。

そうして数十分後、素材を集め終えた二人は十兵衛と雪菜と合流し、道を北上していく。その先で雪菜が放った使い魔に導かれ、プルートと天和——衛宮天羽と合流する事が出来た。

彼らはそのままある村へと移動し、ギルド支部でナバルデウス亜種について報告する。

ギルドの者はその報告を聞き、瑠璃達が生還できたという事実には驚き、同時にナバルデウス亜種の事をタンジアの港へと報告した。

そうした後、ナバルデウス亜種が古龍観測所の報告によって少しずつタンジアの港へと近づいている事を伝える。現在あそこの周辺ではナバルデウス亜種に備えてハンター達を募っているのだと言った。

古龍との戦いが始まろうとしているのだろう。それを予感させる話だった。

タンジアの港に送った報告書に従い、ギルドの者がモドリ玉を使って迎えに来てくれる事になり、瑠璃達はそれを待つ事にする。

その折、雪菜が十兵衛へと近づいた。

「冥が話があるそうや。来てくれる?」

「……………いいッスよ」

ただの話では終わらなそうだな、と思いながらも十兵衛はそれを断らずについていくことにした。案内された先は宿の一室だった。そこでプルートは小さな机を前に座っており、グラスで酒を呑みながら十兵衛を待っていた。十兵衛から見て右手の壁際では天羽がぼうつと佇んでおり、酒瓶を傾けている。

雪菜が十兵衛を伴って中へと入ると、プルートは笑顔でそれを出迎えてくれる。

「よくぞ来てくれた。礼を言うぞ、萩原十兵衛よ」

「……………どうも、天王寺さん。なにか……………御用で?」

「うむ、そこな刹が世話になったようだからな。こうして礼をしようと思ったのだ。本来ならばタンジアにて盛大に礼をしようと思ったがな、こういうのは早い方がよいと思つてこうして招いたのだ。さ、座るがよい」

そう言つて対面の席を示してくる。だが十兵衛は骸の下でじつとプルートを見つめ、



続けて傍らにいる雪菜と壁際にいる天羽を見やる。

自分は今もう壬生刹那が桐生雪菜、東風天和が衛宮天羽である事は知っている。これを雪菜がプルートの伝えているのならば、彼はそれを知つての上でこうして招いた可能性がある。

何のために？

口封じのために、だろう。

それ以外の理由が思いつかない。そう警戒する十兵衛は、プルートが示した席に座らない。

「どうした？ 遠慮せずに座るがよい」

「……残念ですが、お断りです。まず用件を聞こうじゃないですか」

「用件ならば伝えたぞ？ 貴様に礼をしたい、とな」

「それ以外の何かがあるツスよね？ ……彼女の事とか」

そう言つて雪菜を示す。彼女は少し十兵衛から左手に離れた所で待機している。その手に番傘はない。が、ローブは羽織つており、その気になれば中にある得物を抜けるだろう。あるいは魔法使いである事を生かして何かをしてくる可能性だつて捨てきれない。

そう警戒していたのだが、プルートはグラスの中身を飲み干し、一息つく。

「警戒心の強い事よな。……だが、悪くはない。そうやって何かを疑ってかかるのは正しい反応だ。我はそういう輩は嫌いではない。むしろ、好ましいぞ？ 萩原……いや、午卯十兵衛よ」

「……………」

やはり聞いていたのか、と十兵衛は骸の奥で小さく歯噛みする。しかしそんな十兵衛を見てプルートは小さく笑みを浮かべるのみ。そうして雪菜へと目配せすれば、そつと彼女は十兵衛へと振り返った。

「改めて私の仲間を紹介しよう。桐生雪菜、竜狩りの力を高めるためにハンターとなった女だ」

「よろしゅう」

「そして衛宮天羽。あてどもなく彷徨い、強さを求めていたところを我が誘いをかけた」

「……………」

「そして我が天王寺冥夜。天王寺家から離れ、竜狩りの力を研磨する者。……そうしつ、現在荒れている他の領土の領主と交渉する者だ」

「領土？ 領主死亡事件ツスカ？」

「然り。何やら悪しき政策を行っている領主らが相次いで死んでいるようだな、そうして領土の穴が開いたところへと赴き、交渉しているのだ。……我が天王寺家に降らない

か、とな。言い換えれば、領土の拡大よ。現在順調に我が父の領土は広がりつつある」  
 天王寺の領主は善政を布いていると噂に聞いている。それ故に領主の死亡事件とはあまり関係がないだろうと思われる。が、こうして話に聞き、メンツを見回してみると裏があるように思えてならない。

そう……例えばあの衛宮天羽がその領主を殺害しているとすれば？

そうして領主の穴を作り、プルートの交渉に赴いて領土を取り込んでいるのだとすれば？

そう考えれば意図して領土を拡大していると思ひ至れる。十兵衛の視線はじつと天羽へと注がれる。当の本人は気にした風もなく、酒瓶を手に佇んでいるだけだ。

「我らの目的は領主ではなく新たな国の誕生。タンジアの港も含め、この東方大陸の南に広がる新たな国よ。……どうやらヤマト国のネズミなどが嗅ぎまわっているようだが、どうという事はない」

「……ネズミ、ツスカ」

「特に魔族に対して厳しい酉丑をはじめとする三家が動いているようだな……つと、貴様にとっては大いに縁があるか。なあ？ 竜魔族である貴様をネズミとして扱っている午卯六花に、貴様をそのような傷を負わせた申子源次……ヤマト国に対して思うところはあるう？ どうだ？ 一矢、奴らに報いたくはないか？」

「何をするつもりツスカね？」

「なあに、少し奴らに大人しくしてもらうだけだ。我らが作りし国に入り込まれ、魔族を刺激されては堪らんからな。迎える者らの種族は問わない。我が領土の民となる魔族らに余計な真似をしてもらうのは困るといふものよ。それに我が求めるのは実力ある者らだ。そこに、種族など関係ない」

「だから、とプルートは両手を広げて続ける。まるで十兵衛を迎え入れるかのように。」「午卯十兵衛、貴様もまた我は迎え入れよう」

「……おいらは午卯じゃなく萩原ツス」

「これは失敬。萩原十兵衛よ、どうだ？ ヤマト国へと抗わないか？」

「その言い方、戦争でも吹っかけるつもりツスカ？ 正気の沙汰じゃないツスね。ヤマト国は東方でも有数の大きな国、しかも武神までいる。対してあんたはただの領主の息子。勝てる道理があるんスカね？」

「勘違いするでない。我は戦争を仕掛ける気はない。一矢報いる、と言っただけの事。要は個人戦だ。……それぞれ、ヤマト国のある人物には縁があり、そして昔よりも高まった力をぶつけたいと望んでいる」

「……………」

ちらりと天羽の方を見る。彼女の場合はもしかすると……あの武神を相手にするつ

もりなのか？ 衛宮家の代表格にしてヤマト国王の近衛隊隊長。武神、護神と謳われし彼を倒し、のし上がろうというのだろうか。

馬鹿げている。今もなお現役な彼を真剣勝負で倒せる人がいるわけがない。

いや、いたかもしれないが彼女はもう死んでしまった。となれば勝てる人物は現在世間を騒がせている謎の人物、プルート・ギルガメッシュを名乗る誰かという事になるかと十兵衛は考える。

よもや目の前にその当の本人がいるなど、彼には思いもよらなかった。

そして桐生雪菜。彼女は一体誰と戦うつもりだ？

桐生家に生まれたお嬢様が戦いたいと願う相手、ヤマト国にいただろうかと思いつく。だがそんな相手……思いつくはずもない。十兵衛は午卯家などを避けるためにヤマト国、それも西京にはあまり近づかないようにしていたのだ。

深くまであの国の事情を知っているわけではなかった。だから沈黙して彼女らを見回すぐらいしか出来ない。

そんな中でプルートが新たな酒を注ぎながらじつと十兵衛を見上げてくる。

「その傷の恨み、申子源次へと晴らす気はないのか？」

「……どこまで調べてるんだ、あんた？ とうか、調べる時間があつたんスかね？」

「クック、私の仲間はここにいる二人だけではない。別行動している者や我が妹もまた

志を同じくする者。いくらでも調べるためのルートはあるぞ？ ……萩原十兵衛よ、貴様も感じたはずだ。竜魔族であるが故に、午卯に連なる者であつたとしても容赦なく焼かれるなど、理不尽だと。混ざりものであつたが故に殺されなければならぬなど、理不尽にもほどがある、と」

グラスの中にある氷が軽く音を立てながら、プルトの手でグラスが回される。満たされている酒を通して十兵衛を見つめてくる彼の目は、どこか深い闇を思わせるかのよう暗く見える。

聞いてはならない、と思ひながらも、耳を塞ぐことは出来なかつた。そんな事をすれば隙を晒す。すぐそこにいる雪菜がその隙に斬り殺しに来る可能性だつてある。だが背を向けて退出しようとしても、背後から斬られるだろう。

十兵衛は、下手に動けなかつた。

「午卯六花もそうだ。昔の縁だからとあ奴の飼犬、間諜として動くなど……自分を許せんだろう？ なにせあの双子は竜魔族。……魔族を良しとしない午卯にとつては消すべき相手だ。いつ、自分の手で殺せと言われないかびくびくしているのではないのか？ んん？」

「……っ！」

僅かに殺気が漏れてしまった。それに反応して雪菜が動きかけたが、十兵衛が手を出

ささいのを感じ取って止まる。しかしその手は十兵衛に向けられている。その気になれば指先から術が飛ぶだろう。

舌打ちしたくなるのを堪えてプルートを見据えると、彼はそんな事があつたなど気にする様子もなくグラスを傾けていた。もし十兵衛が動き、雪菜の静止ものともせずプルートへと突っ込んでいたとしても構わない、という風な余裕さえ感じる。

「……なあ、萩原十兵衛よ。午卯六花の間諜であり続けて何になる？ 貴様はあの双子を殺す日が来るのを望んでいるわけではないのであろう？ このまま午卯六花の命に従い、双子の仲間で居続けるのか？ そんなどっちつかずを長く続けて何になるのだ？

貴様は、何がしたいのだ？」

何がしたいのか。

それは六花に対する恩を返す事。

十兵衛が何者かを知ってもなお友人であり続け、源次に殺されかけた後も気にかける……しかし午卯の代表になるために遠ざけ、源次を牽制するために立ち回った彼女。恐らく彼女の私情が大いに含まれた成り上がりだろう。それは十兵衛にも何となくわかつていた。

彼が鍛え、六花が努力した結果、午卯の代表となつたその後はあの時口にした通り、源次を牽制し続けている。だが午卯の代表であるが故に、酉丑灯の命に従って動き、陰で

魔族を数人殺害している。それが、彼女の仕事の一つなのだから。

その経歴があるが故に、十兵衛は瑠璃と茉莉の事はぼかして報告している。それは彼女に対する小さな裏切りだろう。基本的に六花の言う通りに動いていても、ハンター仲間であるあの二人を守るために嘘をついている。ユクモ村でもずっと彼女らを監視し続けた彼は、迅雷とのやりとりも目撃している。とはいえ彼に気づかれて撤退してしまつたが。

まさにどつちつかず。中途半端な間諜だ。ネズミ

「わからぬならば——我が新たな道を示してやろう。先ほども言ったように我は実力ある者は歓迎する。萩原十兵衛、我と共に来い。ここは午卯六花とも、あの双子とも離れてみるのが一つの選択肢よ。そして見るがいい、我の往く道を。それに続き、萩原十兵衛よ、貴様に傷を負わせた者に借りを返すがよい」

「申子源次がどこにいるのか知っているかのような口ぶりツスね?」

「知っている。……どうやら大砂漠へと向かっているようだぞ? 今あそこは間もなく荒れると見越している。我らは一度、我が領土へと戻り、大砂漠へと入る予定だ。あ奴と会いたいならば、案内してやろうぞ」

「ナバル亜種はどうするんすか? あれを止めないとタンジアの港がやばいんじゃないんすかね?」



「それは天が行く。天の目的の一つの達成に近づくからな」

「ん……存分に斬らせてもらうよ、んく、んく……」

何故か右手でサムズアップしながら酒瓶を傾かせている。こうして見ている限りでは無害な女性にしか見えないが、しかし過去に大事件を起こしてヤマト国から逃亡した女性なのは間違いない。

今は落ち着いていても、彼女の気質はまさに剣そのもの。

一戦交えたところで勝てるかどうかわからない相手だろう。

「さて、どうする？ 萩原十兵衛、我と共に行くか、それとも……どっちつかずの間諜を続けるのか？ 選ぶがいい」

「断つたらどうするんで？」

「ふむ……我としては穏やかに話を終わらせたいところではあるが、そこな天と刹の事を知られてしまつては仕方あるまい。この話を断るならば……」

その言葉に、雪菜と天羽がじつと十兵衛を見つめるといふ反応を示す。うつすらと戦意が浮かび上がっているように感じられる。気のせいではない、目の前にいるプルートの表情から感じられないが、その覇気が十兵衛を突き刺しにかかっている。

それだけではないだろう。十兵衛以外……あの二人にも手を出さないといい保証はないかもしれない。自分だけならいいが、あの二人の命まで握られればたまつたもので

はなかつた。

「……はつ、選択肢を与えておいてこれツスカ。おいらに選ぶ余地なんてないじゃないツスカ」

「なあに、気のせいだ。……では、我に降るといふ事でもいいな？」

「好きにすればいいツス。でも、隙があればおいらも好きにさせてもらうツスよ？」

「……完全にあんたらを信用しているわけじゃない。妙な事をしているんだつたら——寝首をかくぞ？」

プルートへと今度は明らかな殺気を向けるが、彼は笑つてグラスを十兵衛へと乾杯するように軽く揺らした。そして雪菜は十兵衛を歓迎するように握手を求める。

「くす、歓迎するで、萩原はん」

「まさかとは思ふツスが、今までおいらに近づいていたのはおいらの事を探っていたんスカね？」

「それもあるけど、大半はウチの興味本位や。ウチが、あんさんの事を知りたい思うたんや。……くす、それで思うんだけど、やっぱりウチらはやっぱり相性ええかもしれへんなあ？ 楽しくなりそうや」

「……それはあんただけでしょ」

「つれへんなあ。ウチの事、色々知ったくせに。……ウチの恥ずかしい事とか」

「あんたが勝手に喋ったんじゃないやなかつたけえ! 別においらは知りたくもなかつたんですけどお!」

「なんだ、仲がいいではないか。これならば安心だな。フーツハツハツハ!」

漫才するかのような二人のやり取りにプルートのはからからと笑いながら酒を呑み進めていく。そんな中で天羽もまた歓迎の証としてグラスを用意し、十兵衛へと手渡して彼女直々の手酌をしてやる。

「……呑め」

「……………どうも」

一応それを受ける十兵衛ではあつたが、その視線は警戒を含んでいる。気を許す事はない。どうせ断れば自分を口封じとして殺そうとしていた相手だ。先ほどプルートが語っていたことも気になるし、間諜として探つてやる。

どうせ彼も間諜である事を見抜いていた上で誘いをかけてきたのだ。自分達の事を探られることは覚悟の上だろう。集めた情報を気づかれないように六花へと流してやれば、プルートの企みを潰せる可能性もある。

獅子身中の虫となつてやる。

十兵衛はそう覚悟しながらぐいっとグラスを傾ける。その酒の味は今まで呑んだ中でも一番おいしく感じられたのがどこか癪に障つた。どうやら高い酒を呑まされたら

しい。それは同時に、天羽はいつもこんな高い酒をちびちびと呑んでいるという事なのだろう。

ちらりと視線を向けると、「……美味しい？」と小首を傾げてくる。

「……美味しい、ツスよ」

「そ。それはなにより。っていうかき、いつのまに刹と随分仲良くなってるのね」

「せやろ？ ウチの体を強く抱きしめてきた熱い面もある人や」

「間違っちゃいないツスが、深い意味なんてどこにもないツスよ!」

「ふーん……確かに、おもしろくなりそうではあるかな。……いずれ、私と戦ってもらってもいいかな、萩原？」

じつとその真紅の瞳に見つめられて言葉に詰まってしまう。ぼけーつとしているような雰囲気をしているが、内面は鋭い剣のような気室を持つ女性だ。それに本来の顔ではないのだろうが、それでも整った顔をしている美人さん。

演技でもなんでもなく、元から慣れていない女性を前にするのは苦手な十兵衛は言葉に詰まってしまう。だがそれ以上に、目の前にいる彼女に戦意を直接ぶつけられて身構えてしまったのだ。

しかしそれを雪菜が止めてくる。

「やめい。天がやったら萩原はんを手違いで殺してしまいうやないか。せつかく降つ

たばかりやのに死なれたら意味あらへん」

「……それは残念。午卯の技術を持つハンター……興味、あるんだけどな？」

「やめいとゆうてるやろ？ 強者を相手にしたらぶつかり合いたいっていうあんたの気持ち、わからんでもないけど……少しは落ち着きいや」

「はいはい。まったく、そんなにこいつがお気に入りか。はあ……お熱い事で、んくんく……」

そう言いながら酒瓶を傾けて中身を呑み干していく。そんな天羽に同意するようにプルートがそうだそうだと頷き、雪菜がそれに照れてみせる。何だかネタにされているような気がしなくてもないが、三人の歓迎を受けているのは間違いない。

これからどうなってしまうのだろうか、と不安を感じてしまう十兵衛だった。

そうして時間を潰し、送られてきたモドリ玉でタンジアの港へと戻った瑠璃達だったが、すぐに十兵衛は彼女達へと離脱の旨を伝える。緊急事態ではあったが、十兵衛へと届いた報せによりやむを得ず戻らねばならなくなったと伝えた。

申し訳なさそうに頭を下げていると仕方がない、と二人は了承してくれる。

……本当に申し訳ないのだから仕方ない。ここにきて離脱するのは少し後ろ髪を引かれる思いだが、十兵衛はそれを振り切つて港の入口へと向かう。そこには既にプルートと雪菜がいた。天羽はやはり一人でここに残るらしい。

「では参ろうか。我が領土へ」

「……………うつつ」

「くすくす……………」

そうしてプルートと雪菜、十兵衛は北西へと進路を取り、天王寺領へと向かっていったのだった。

緊迫した空気の中、実力者たちが三人抜ける。

しかも昴達がプルートらを探ろうとしたところで彼らが消えてしまった。何とタイミングのいい離脱だろうか。

それにより昴達は疑惑を高めるのだが……現在はナバルデウス亜種の接近による緊迫した状態。誰かの過去を探っている暇などなかったのだった。

そして——その時が訪れる。

厄海付近まで迫ったナバルデウス亜種をターゲットとした緊急クエストが、ギルドから発せられる。腕に覚えのあるハンター達はそのクエストを受注していく中で、昴達と瑠璃と茉莉、そして天羽。

それだけではなく、モガの村から援軍としてやってきた桐音達もまた、そのクエストを受注する事となる。

## 65話

ナバルデウス亜種。

通称、皇海龍。

大海龍ナバルデウスの亜種とされ、大海原の何処か……それも深海に存在するとされる古龍である。そこらにいる竜らとは比べ物にならない程の巨大な体軀をし、その体のつくりは人々が知りうるような竜とはかけ離れている。

目撃例は極端に少なく、伝説上の存在とまで言われる程にまで希少な存在だ。

だがその伝説が今、タンジアの港に迫りくる。そして大波を起こして港を海に沈めようとしているのか、あるいは陸を揺らして大地震を起こしてくるのか。

何にせよ、脅威が迫ってきているのは間違いない。

ギルドは緊急クエストを発令し、ナバルデウス亜種と戦う猛者を募る。港だけではなく、周囲の拠点やそれよりも向こうの拠点にまで伝令が行き渡り、奴と戦えるだけの腕を持つハンターを募った。

その結果、集ったのは二十一人。これだけ集まれば上出来だろう。

その中には――

瑠璃と茉莉。

白銀一家。

衛宮天羽。

モガの村からやって来た桐音、蓮華、将輝、檸檬。

彼らの姿もある。

特に桐音はここで瑠璃達と再会したことに驚いていた。草薙武を探しに行くに出ていったのに、まさかこんなに早く再会するなんて、と苦笑し合ったが、しかしそう和んでいる暇はない。

緊急クエストに参加すると表明してからは、奴と戦うための準備が必要だった。彼女達はそれぞれ武具の調整を行い、道具を仕入れ、出動に備えるのだった。

○

「ナバルデウス、亜種……か」

「如何しましたか、お嬢様？」

西京にて西丑灯はその報せを聞き、思案するように空を見上げる。背後に控える風間



の忍はただ座して灯の様子を窺うのみ。しばらく空を見上げていた灯は……煙管を灰皿へと軽く叩き、今までずつと座っていた灯は立ち上がる。

「むー………送った風間、どないなつとる?」

「何人か死にましたが、しかし新たに忍を派遣し、調査中です。プルート・ギルガメツシユに関する情報は未だ不明。容疑者も絞り切れていませんが……一つ気になる事が「なに?」

「はつ………天王寺冥夜をはじめとする数名がタンジアの港を後にしました」

「天王寺冥夜? ……ああ、天王寺領主の息子、か。たしかハンターやつとつたな?」

「はつ。実力もある彼が、ナバルデウス亜種のクエストを受けず、天王寺領へと向かっていききました」

「ふーん………実家の方でなんかあったんやろ。それが気になる事でも?」

「………それが、その中に萩原十兵衛を確認しています」

「———へえ?」

その名前に反応して灯が目を細めながら忍を見つめる。気のせいかな、その目から放たれる覇気が高まりつつある。それだけ彼女にとって萩原十兵衛という名前は意味がある。

「午卯二葉の子、か。六花が飼い犬として使つとるつて聞いたけど、そんなところにおる

んか……」

「如何しますか？」

「二人……いや、二人送つて調べてきい。あれがおるんやったら、その天王寺冥夜もなんかあるんやろ」

「承知しました」

「それと——支度し。タンジアに飛ぶで」

「はっ………は？ お嬢様、今なんと？」

「タンジアに飛ぶつてゆーたんや」

くすり、と微笑を浮かべて灯は隣の部屋へと続く襖を開けて進んでいく。慌てて忍はそれに付き従い、しかし開いた口から出てくる言葉は彼女を止めるためのものだった。

「なりません、お嬢様。今あそこは危険な状態にあります。御身を大事になさいませ。向かわせるのは我が風間の……」

「確かにそれが普通やろ。……でもな、だからこそ灯は行く。今、あそこには強い念が高まつとる。それが灯を呼ぶんよね」

そう言つて灯は帯を解き、着物を脱ぎ捨てて頭を下げている忍の前で裸身を晒す。差し込んでくる日光に照らされる白い肌は見る者の心を奪いかねない程に美しい。かんざしを抜き、顔を振ればそれに合わせて長い黒髪が躍るように揺れる。

そうして彼女は箆笥の中から軽めの着物を取り出し、手際よく着ていきながら言葉を続けていく。

「今、灯の目で見いひいと後悔するようなことがあそこで起ころうとしている。……そう、灯の頭の中で囁くんよね」

「……左様で、ございますか」

「ん。やから、止めても無駄。どうしてもつてゆるんなら、炬……あんたも来い。あんただけやない、数人の忍を集めて陰に控えさせてもかまへん。灯はただ、あそこに集まったメンツを見たいだけやからな」

「……承知しました。では、人を選出し控えさせます」

「ん。はよおしーや？ 準備を終えたらさっさと灯は行つちやうから」  
「はっ」

最後まで灯を見上げず、頭を下げたまま忍——炬はその場から消える。灯もそちらへと視線を向けず、帯を締めて着物を着終えると姿見の前に立つ。今まで着ていた着物とは違い、動きやすい軽めのものへと変えたそれは、高貴なる者が着るようなものではなくどこか落ち着いた色合いをしている。

いかなれば下々の者が着るような地味なもの。しかしこれならば例え民衆に紛れたとしても気づかれる事はないだろう。下げているその長髪をかんざしではなくリボン

で結い上げ、ポニーテールにしつつ術を掛けて色合いを黒から明るい青へと変える。

顔は……少しだけ化粧をして灯である事を気づかれないようにするだけでいいか、と化粧の用意をする。そうしている間に部屋の隅に数人の人の気配がした。どうやら同行する忍を集めたいらしい。仕事の早い事だ。

化粧を終えた灯は立ち上がり、別の箆筒の引き出しを開けて中からいくつかの道具を取り出し、懐へと入れていく。

「ほな、いこか」

『はっ』

「空間制御——転移」

右手に持つ札を前に出しながら告げれば、灯の前に空間の亀裂が刻まれる。一人が通れるだけの穴を作り上げると灯は灰皿に置いてある煙管を回収し、亀裂を潜つていった。それに続くように炬達、忍もまた亀裂を潜つていき、その部屋から人が消える。

城の者が灯達がいなくなっているという事に気づいたのはそれから数時間後。

タンジアの港からハンター達が準備を終えて酒場に集まっていく時だった。

そして灯がいなくなっているという話を聞き、一番驚き、そして嫌な予感を覚えたのは——彼女のライバルである乾渚。

○

「——ご心配をおかけしたツス」

『ばっ……!? 心配なんてしちゃいねエよ! うぬぼれんな、アホ!』

ぺこぺこと頭を下げながらも札を通して六花へと謝罪する十兵衛だが、返ってくる言葉はどこか素直になれない女の子のようなものだった。

天王寺領へと向かう途中、機を見て十兵衛は六花に連絡を入れて自分の無事を伝えた。札に通信が入っていたところから見ても無反応だった自分を心配しただろうか、と思つた十兵衛だったが、この様子だと本当だったかもしれない、と推測しながら苦笑する。

『な、なに笑つてんだてめえ!? アタシは別にてめえなんか心配しちやいねエんだからな!? 本当なんだからな!』

「はは、わかつてますよ。おいらの事なんか嫌いなんでしょ? 百も承知ツスよ」

『……わかつてんなら、いいんだよ……。んで? 今どこにんだよ?』

「タンジアの港から西のどこかツスね」

『そうかい。一緒にいた二人のハンターはどうしてんだ?』

「……別れたツスよ。まあ、あの事故の上にナバル亜種の出現ツスからね。合流してな

いッス」

『なんだ、ボツチかよ』

また嘘をつく。こうして平気で嘘をつくようになったのはいつからだろうか。

小さな痛みがはしるがそれを気づかないフリをして流す。

「ナバル亜種のクエストには参戦できそうにないんで、大砂漠方面にでも行ってみようかと思います」

『……あん？ てめえもこっちに來るのかア？』

「だめッスか？」

『……好きにしろ。じゃあな』

「はい、また」

そこで話を切ってくる六花。気のせいかな声が変化していたように感じられたが……これも気づかないフリをしておこう。それが優しきというものだ。札を懐にしまうと背後にいた雪菜へと振り返る。

さつきまでそこにいなかったが話が終わったところで姿を見せてきたようだ。

「盗み聞きッスかね？」

「いや、聞こえてしまっただけや。ゆうたやろ？ ウチは耳がええんや」

悪びれる様子もなく微笑を浮かべる雪菜。そうして十兵衛へと近づき、懐に手を入れ

て一つの瓶を取り出して十兵衛へと放り投げる。咄嗟にそれを受け止めてしまったが、瓶の中身を見てみると何らかの飲み物だという事だけはわかる。

レモン色に染まった液体であり、「なんスか、これ？」と訊いてしまうのも無理はない。「ハチミツレモンや。美味しいで？」

「……何故これを？」

「天王寺領の特産の一つやからな。レモンが美味しいとこなんやで」

「はあ……そうなんスか」

説明しつつも雪菜がもう一つハチミツレモンが入っている瓶を取り出し、小さな口をつけてゆっくりと飲み始める。それに倣って十兵衛も飲んでみると、すっぱさの中にほんのりとハチミツの甘さが混ざった液体が喉を潤し始める。

ハチミツのどろっとしたものもなく、すつと胃へと落ちていく優しい口当たり。なるほど、特産と言われるだけある美味しさだった。

それを飲んでいると、

「午卯六花って、ツンデレの気があるん？」

「……っ、ごほ、ごほ……きゅ、急になんスか？」

突然の話題に咳き込んでしまうのも仕方がない。あまりにも突然すぎて気管にハチミツレモンが入りかけてしまったため、長く咳き込んでしまった。「だ、大丈夫？」と雪

葉が心配そうに声を掛けてくるが、手を出して止めつつ「大丈夫ツス……げほ、ごほ……」と言うが、手で止めたとしても彼女からすれば見えないのだから意味がない。

そのまま背中をさすってくれ、しばらくしてようやく落ち着いた。

「……ふう、どうもツス。……で、話を戻すツスが、急に何を訊いてくるんスカね？」

「いや、話聞こえたってゆうたやん？ あの口ぶり、心配しているのに否定しているようにしか聞こえんかったし、そうなんかなって思うてな」

「あ……まあ、そうツスね。でも、昔からあんな感じツスよ」

「ふーん。あんさんもあんさんで、午卯六花をどこか微笑ましい雰囲気話しとったし、やっぱ萩原はんってロリコ——」

「だからなんでそうなるんスカ!? おいらはそんなんじゃねえツス!」

「——なんだ、萩原十兵衛はロリコンだったのか?」

「自然に混ざってくんじゃねえ!」

フルーツもハチミツレモンを手にながら二人に混ざってくる。しかもご丁寧にやにやと笑いながら十兵衛を見ている。二人してからかうような視線を向けてくるものだから十兵衛としては全力で否定しにかかりたいところだった。

「ふむ、確か午卯六花もあの双子も成長途中な身体的特徴をしていたな。しかし貴様もまた小さいから似合いといえれば似合いか。ならば何の問題も……」



「問題あるわあッ!? おいらがロリコンってところを訂正するッスー!」

「ああ、それと」

「なんだ!?!」

「我が妹も成長途中な見た目をしている故、手出しするでないぞ?」

「初対面の女性相手にそんなこと出来るかあッ!! とうか、知らない情報だよー!」

気づけば雪菜だけでなくプルートの相手にも全力のツツコミをしている十兵衛である。

こうして親睦を深めようという魂胆なのか、あるいは完全に流れに乗った素のボケなのか判断つかない空気だった。

(もうやだ、この人ら……おいらのキャラが、どんどん崩れていく……。あの人らの空気が、あんなにも平和だったんだね……。とうか、すみません、瑠璃さん。あなたの気持ち、何となくわかってきたよ……)

何はともあれ、こちらの旅路はどこか平和な雰囲気であった。

○

これから行うのは古龍戦。武器や道具は多くあればいい。

しかも緊急事態に付き、ギルドは制限を解いた。

すなわち、ローブの使用を許可するというもの。武器が使い物にならなくなれば別の武器を使っても構わないし、ローブに収められている道具を使えるだけ使ってもいいという事でもある。

茉莉はブラックテンペスト改だけではなく、王銃槍【ゴウライ】についても強化を施す事にした。ラギアクルス亜種を討伐した事で強化素材である白海竜の尖角も入手できた。王銃槍【ゴウライ】を強化し、王牙銃槍【火雷】へと高まる事が可能となる。

また将輝はラングロスシリーズではナバルデウス亜種に対して厳しいだろう、と先日入手した素材で作り上げる防具、ルドロスZシリーズをモガの村で制作依頼し、完成させてきた。G級個体であったロアルドロス亜種の素材で作られたそれは水耐性が高い。ラングロスシリーズの弱点である水耐性のマイナス面をプラスに変えたそれを身に纏う事で生存確率を上げようという事だ。

余った素材は檸檬がG級の片手剣、苦剣アメジストリム制作に使用した。属性が水という事もあってナバルデウス亜種を相手にするにはあまり意味はないかもしれないが、しかし高い切れ味を生かしてダメージを与えるくらいは出来るだろう。

それに彼女の主力となるのはラギアクルスの素材を使って作り上げた雷迅剣ミカズチ。上位のラギアクルスの素材を使って作られた雷属性の武器。これらを作るために入手した素材などを売り払って金を作ったし、ちよつと桐音から借金をしてしまっ

が、そうするだけの価値はある。

その桐音はというと、武器を調整している様子はない。だが宿で二振りの小太刀の手入れをしている様子が見られた。どうやらあの小太刀で戦うらしい。

昴達は元より準備をしてからこつちに飛んできていたので鍛冶屋に用はない。ただ、来たる戦いに備えて心構えをするのみ。

そんな中、民衆に紛れて行動する灯の姿がある。その視線は鍛冶屋で注文をしている瑠璃や将輝達を見据えている。……いや、人間である将輝と檸檬には興味はないようだ。視線は、瑠璃と茉莉へと注がれている。

(魔族……いや、竜魔族の双子、か。ふうん……あれが萩原十兵衛が先日まで行動していたハンター、と。……ふ、六花……飼犬の報せをどう聞いてたんやろうな？ もしかして、竜魔族だつて聞かされとらんかつたんか？ せやつたらこらおもしろいことになるやん)

くすくす、と冷たい笑みを浮かべながら灯は己の目で真実を見抜く。公にはただの翼人の魔族だと通してきたが、真実は竜魔族だと見抜くだけの目を灯は持っていた。

高い感知力と第六感にも等しい鋭い勘を以つてして、ヤマト国では千里眼とも言われるだけの高い異能を持つ灯からすれば、種族のごまかしなど無意味だった。十兵衛が六花に隠し続けていたことなど一瞬にして崩れ去る。

(でも、害意はなさそー、か。シュヴァルツの気配もないし、ナバルデウス亜種と戦う戦力でもある。なら、ひとまず置いておこ)

が、申子源次とは違い、灯は無闇に魔族や竜魔族を抹殺するようなことはしない。彼女らがどうしてあそこで真剣に武具について考えているのかについて推測し、導き出す答え。

そして忍が集めた情報にも彼女らについて存在しており、灯は彼女らも此度の大戦に参戦する戦力であるとみる。ならば、ここで殺して戦力を削ぐような真似はしない。

どうぞ戦ってください、と思いつつも、彼女らについては頭に刻むことにする。いずれ手を下す時が来るならば、存分に潰してやろうと考えつつ。

そこで彼女は自分を見ている一つの視線がある事に気づく。

驚きを隠し、視線だけ動かして何者が自分を見ているのか、と探したが、人ごみによってそれを見つけ出すことは困難を極める。ならば己の持つセンサーを広げ――そしてこれに気づいた視線の主が離れていくのを僅かに感じ取った。

(…………)の気質、覚えあるで…………？ 誰や…………誰が灯を見とつた？)

あの気質を感じたのは恐らく結構昔の事だろう、と灯は考える。しかしそれでもあれには僅かに覚えがある程に特徴が出ていたのもまた事実。あれは…………そう、例えるならば刃。近づくものを斬り捨てかねない刃であり、しかしそれを鞘に収めるかのように覆

い隠している気質だった。

つまり戦う者の気質。だがここでは珍しくもない。なにせハンターが拠点を構えるだけの大きな港町なのだからそういう人物が多くいるのは確か。だがハンターの知り合いなど数える程度しかない灯にとつて、ハンターがこの気質を持っているというのは候補が限られる。

だがハンターなのは間違いないが、灯にとつて昔を懐かしむだけのハンターの知り合いは——いない。元より西京の城で、しかも私室で多くの時間を過ごす灯にとつて交友関係は狭い。

だから人の気質を知る範囲も狭い。そんな中で過去を懐かしむだけの知り合いはいない。が、知人ならば僅かに居る。そうして候補を落としていき、最後に残ったのは——

「——く、ふふ……おもろいやないか。確かに、ここに来んかったら後悔するところやったわ」

「……如何なさいましたか、お嬢様？」

「炬、ここに潜らせとる忍で、酒場に潜らせい。そして探し。剣の腕が立つ女のハンターをな」

「はっ。……しかし何故<sup>なにゆえ</sup>ここでそのような？ 気がかりな事でもございましたか？」

「…………ふふ、姿を消しとった昔懐かしい大鷲が、来たる敵を前に翼を休ませとるよーや。それで死なれたらおもしろないけど、生き延びて闘いを終わらせたら——殺し。それが、武神の望みや」

「…………まさか、あの人がここに？」

驚きに目を見開く炬に、灯は小さく微笑を浮かばせるだけだった。

一方、路地裏に身を潜めた天羽は舌打ちしそうになるほどに機嫌が悪かった。以前から風間の忍がこの町を探るように点在している事には気が付いていたが、よもや灯まで出てくるとは思いもなかった。

「…………引きこもりがなんでここにいるんだ？」

引きこもりとはもちろん灯の事だ。ほとんど私室や城に籠ってあまり行動しない西丑家のリーダー。だが溢れる才能から見せる千里眼や隠されている覇氣と力により、今もなおリーダーとして在り続ける女性。

彼女がこうして動いてきたのはナバルデウス亜種を見に来たからなのだろうが、よもや自分の存在を感じ取るとは、力は衰えていないらしい、と天羽は考える。

これは少しまずいことになったか、と苦い表情をするが、しかしここで逃げるわけにもいかない。天羽々斬をまた一段階目覚めさせるためには、ナバルデウス亜種の血が必要だろう。奴ほどの強力な個体ならば、天羽々斬にとって大きな糧となるはずだ。

古龍の血ほど美味しいものはない。しかも奴ら……ナバルデウス亜種はめったに姿を見せない存在だ。これを逃すわけにはいかない。

「ちっ、めんどろな事になったな……。でもここで退くわけにはいかない」

天羽々斬の目覚め。

それを成し遂げるためにも、天羽は逃げるわけにはいかないのだ。

例えば、西丑灯がこの港町にどういうわけかやってきていたことを知ったとしても、プルートらがここにいなかったとしても。

己が道を進むために。

宿にいる昴達は武器の調整をしながら部屋の隅にいる霧夜の忍二人の報告を聞いていた。

緊迫した空気に包まれるタンジアの港に集まった実力あるハンター達。それらに紛れて海と空は独自に調査を進めていた。

昴達が気に留めていたプルート達が朝の内にここから離れている事を知り、彼らを追うように他の忍へと指示を出し、また調査を続行。そうして得た情報は――

「――お気をつけて。現在、西丑様がここに来ている。見つかったら、抹殺される可能性」

空が淡々と告げる。

## 西丑灯。

西丑家のリーダーにして千里眼や引きこもりと言われる彼女が、どういふわけかここに来てゐる。それに気づいた空は素早くその場を離れ、別行動している海と共にこの港町に点在している風間の忍を探った。

その結果、どうやらここに集まつてゐるハンター達を探つてゐるらしいという事が判明。当然彼らが探るのは魔族がいるかどうか。となれば目をつけられるのは優羅。しかも彼女はシユヴァルツの末裔。

そこまでつきとめられれば、彼女らの刃が優羅に向けられる可能性が否定できない。これでは終わらない。瑠璃と茉莉もまた竜魔族であるがために狙われる可能性がある。る。

「西丑灯、か……彼女は過激派なのか？」

「申子様ほど過激ではない。……でも、どこか怖いところがある。あの方の実力は魔法使いの傾向だが……戦つた様子は拝見した事がないね。そして報告している通り、あの方は風間の忍を従える人でもある。ずっと城に引きこもつていたあの方が動いたという事自体が俺には凶兆を感じさせる」

海でさえ「引きこもる」と口にしてゐる彼女が動いたという事。動かぬ彼女が動いたという自体が、彼女を知る者らの意見。源次程の過激さはなくとも、確かな実力で



リーダーの座にいる灯。

なぜここに来たのかを調査しようにも情報がない。推測だが彼女の勘が働いて飛んできた可能性を挙げたのが空だ。彼女曰く、灯はときどき勘に従って動くところがあるらしい。

第六感が告げ、何かが囁き、そしてそれに導かれるようにして動く……いや、忍を動かす。それが彼女のやり方である。

だが彼女は今回、自ら動いた。……そして、瑠璃らや天羽を見つけた。もし勘に従って行動した結果がこれだというのならば、本当に恐ろしいことこの上ない。

「だから、酒場に行く途中や港に行く途中など……気を付けて」  
「わかった。そちらも気をつけるんだぞ」

乾渚の部下である霧夜一族と、酉丑灯の部下である風間一族。

二つの一族は忍同士という事もあって対立関係にある、と話に聞いていた。二人が向こうに気づいたならば、向こうが二人に気づく事だつてあるだろう。そうなれば潰し合いとなる。昴はそれを心配していた。

海はその気遣いに一礼し、空と共に部屋を退出する。それに続くように昴達も時間がきたため酒場へと移動していった。

海と空は屋根伝いに移動して路地裏へと入ると、渚へと連絡するために札を取り出

す。少しして渚と繋がり、これまでのいきさつを説明した。すると渚は、

『そつちに行つてたのか!? ちつ、急に消えてこつちはちよつとした騒ぎになつてたんだが……灯のやつ、何考えてやがる……! ……いや、これもまたあいつの勘に従つた結果だろうけど、それで大当たりを引くなんてどうかしてるぜ』

「如何しますか?」

『……あたしが出る。二人はそれまでの間、出来る限り氣づかれないであいつを見張つてくれ』

『はっ』

話を打ち切り、渚はここへと飛ぶための準備を特急で進めるだろう。灯は自ら空間転移を行使できるが、渚はそれが出来ない。彼女には翼があるのだからそれで飛行して移動するのがほとんどなのだから。

だが今は緊急事態。飛行では間に合わない。

恐らくツテを使つて空間転移を行使してくるだろう。それまでの間、二人は灯を見張る事にした。

そうして各ハンター達が準備を整え、酒場に集まる。

その様子を隠れた忍が見守り、酒場から少し離れた所でも灯が中にいるハンター達を探っていた。あの中にナバルデウス亜種へと挑むハンター達がいる。それは間違いな

い事実である。

さあ、あの中にどれだけアタリがいるんだろう期待する灯だが、同時に自分を陰から見ている静かな存在がいることにも気づいていた。

(霧夜、か……ふふ。二人……いや、中にも二人、合計四人つてどこか)

海が援軍として二人の忍を呼び寄せ、中を張り込ませている。灯を見ているのは海と空の二人だ。しかし当然ながら気配を消しているし、息を潜めて視線にも力を入れていないのだが、それでも灯は気づいたらしい。

炬もまた何となく気づいたらしいが、灯が動かないのを見て静かに控えることにしたようだ。

そんな影の小さな緊張状態に対し、酒場の中では改めてギルドマスターが緊急クエストについて説明していた。

まず港に向かってハンター達にはそれぞれ船に乗り、厄海へと向かっていく。その間に深海にも潜れる装備を受け取り、スタンバイしておく。これは通常の水中でも戦える装備をより強化させたものであり、水中メガネとマスクを一緒にさせた代物だ。

サン草も長持ちする品種を使用しており、マスクに繋がるチューブも丈夫なものを使っており、切られたり外れたりすることがないように作られている。

厄海に到着し、ナバルデウス亜種を発見したならばそれぞれ船から飛び降り、戦闘開

始となる。大海のど真ん中であろうと、陸地に近かろうと、とにかく奴と遭遇したならばそこが戦場だ。

討伐、撃退は問わない。奴という脅威を掃ったならばそこでクエストは達成となる。これらにハンター達に異議はなく、ギルドマスターが「では頼んだぞ、ハンター達よ！」と告げ、彼らは動き出す。

それぞれ港へと向かい、二つの船に分かれて乗船していく。

昴達と一緒に乗る事になった。白銀一家三人、瑠璃茉莉、桐音達の四人だけでなく、衛宮天羽まで乗ってきた。これで十人。ハンターの半分ほどが乗船する事になる。

だがそこで二人のハンターが昴達を見て小さく鼻で笑ってきた。

「なんだあ？ 若い女ばっかりじゃねえか。よくそれでこのクエストに志願してきたもんだな」

「まったくだ。これはお遊びじゃないんだぜ？ せいぜい足引つ張んじゃねえぜ？」  
「……………」

見れば屈強さを感じさせる男二人のハンターだった。昴達よりも年上で年齢的にもベテランと感じられる。それだけではない、装備もまたガノスXシリーズとガブルXシリーズという水棲モンスターのG級装備。今回のクエストに備えた装備となっている。

そんな彼らから見れば、瑠璃達という若い女性ハンターという存在は認められないも

のなのだろう。昔から女性ハンターというのは舐められがちであり、ハンターが男の世界だと主張するハンターも少なくはない。

女性という性別の壁を越えてくる程の力量を持つハンターは少なかったため致し方ない事なのだろうが、近年は女性であったとしても実力でのし上がり、名を挙げたハンターも少なくないためその風潮は表向きには落ち着いている。

が、それでもハンターは男の世界だという者はいる。彼らもまたその中の一角なのだろう。

「時代遅れの思想ね。あたし達が足を引つ張るつて？ 言つてくれるじゃない」

「はっ、女は黙つて船で見たいればいいんだ。……それになんだ、その装備。上位のものじゃねえか。それでよくここにこれたもんだな？」

紅葉が不敵に笑うも、ハンターの一人が紅葉から瑠璃、檸檬や桐音、天羽へと移っていく。確かに彼の言う通り紅葉らがつけているのは上位の防具だ。紅葉らの場合は強化してG級に匹敵する防御力を持つが、彼女以外は違う。

正真正銘のG級装備を身に着けている彼が鼻で笑うのも無理はない。

「戦場は青臭くちっこい奴らの自殺場所じゃねえんだ。おとといきな、嬢ちゃんたち」

「くっ……」

しっしっしと手を振ってくる男に、瑠璃は悔しさに齒噛みする。だがそんな彼女をほ

ん、と優しく叩く紅葉は気にするな、と無言で伝えてきているようだ。

その上で一步前に進み、一旦目を閉じて気を落ち着かせる。

そうして開眼した刹那、彼女から凄まじい覇気が放たれる。

「それ以上、口開くんじやないわよ。この子らが戦えるかどうか、口で語るより戦場で語らせた方がいいでしょう?」

『……っ、ぬ……』

積み重ねた経験と己の高まった気迫によつて生み出された覇気は男達を黙らせ、桐音と天羽が興味を抱くだけのものだった。

男達は苦々しい表情を浮かべながらも、その覇気に屈するようなことはなかった。驚きはしたが人の覇気よりもモンスターの殺気の方が鋭い事が多い。G級ハンターである彼らにとつてこの程度のものはどうという事はない。

びしつと一人が紅葉へと指差し、

「言つてくれたな、女。ならば見せてもらおうじゃねえか、戦場で! 名を訊いておいてやる!」

「自分から名乗るのが礼儀でしょ? そんな礼儀を欠く相手に、名乗る名前なんて持ち合わせちゃいないわよ」

「……ちつ、だったら覚えておけ。俺の名は井出遼<sup>いでりょう</sup>!」

そっちは? と紅葉がもう一人を視線だけで問う。

「おれは越智修だ」

「……ん。あたしは芙蓉桜。女を舐めたあんたらにしかと叩き込んでやるわよ。女の強さをね」

不敵に笑ってみせる紅葉にまた舌打ちして二人はもう一つの船へと乗り込んでいく。向こうにもハンターが集まり、あの二人もその内の一チームだろう。

そんな彼らに舐められたため紅葉をはじめとするこちらのグループの心境は最悪だ。しかし紅葉がばんばん、と手を叩いて「ほら、行きましょう」と船へと向かっていく。鼻達がそれについていくが、瑠璃や檸檬などは暗い表情をしていた。

そんな彼女らに紅葉はにっこり笑いかけてやる。

「そう暗い顔しない。女だからって舐められて終わるようじゃハンターやっていけないわよ。悔しかったら狩りで見返してやろうじゃない」

「……そう、ですね。でも……あたしが見返すより、芙蓉さん達が十分強いんじゃない」  
船に乗った瑠璃の視線は紅葉らを巡る。

上位装備だとしても彼女らは十分に強い。というかこのメンバー自体、経験豊富で実力があるハンターばかり。しかも何らかの特殊な技術を保有している。そんな彼女達ならば先ほどの二人を見返す事なんて容易い事だろう。

そう考えるとまた気分が滅入ってしまう。

そんな彼女の頭を片手で引き寄せてわきに挟み、「そうしけた顔しない。そんなじゃあ本当に何も出来ずに終わるわよ？」と紅葉が話しかける。

「ちよ、ま……!?!」

「はいはい、しつかりする！ あんたも戦力の一人なんだから士気を上げなさい！」

ぱんぱん、と頭を叩いて解放してやる。乱れた髪を整え、ちよつぱり涙目になりながらも頼もしい紅葉の顔を見つめる。隣には茉莉が苦笑を浮かべながら瑠璃を見ており、

「桜さんの言う通りですね。瑠璃、落ち込んでいる暇はないですよ」と肩を叩いてきた。

「古龍戦は個人の武勇だけでは片が付きません。いえ、それも重要な要素ですが、それと同じように大事な事があります。……わかりますよね？」

「……チームの連携、でしょ？」

「そ。わかってんじゃない。普通の竜と違って古龍はとんでもない生命力を持っている。だから個人の力だけでなく、チームとして戦わないと勝てない存在として知られているわ。……ここにいる全員の力が必要となる。もちろん瑠璃、あんたも。だからそういう気を落とすな。しゃきつとしなさい」

力強く両肩を叩かれ、そして紅葉は昴らの下へと歩き去っていく。その背中を見つめ、瑠璃はそつと肩に手を置く。力強く叩かれた事でまだその感触や温もりが残ってい



る。それが紅葉が瑠璃に向ける信頼の証なのだとしばらくして気づいた。

こんな自分でも信頼されている。

長く離れていて、しかも一緒に戦った事なんてないというのに、彼女は自分を信じてくれている。そう思うと少しずつ気力が戻っていくのを感じた。

「無様な姿は見せられませんよ。頑張りましょう、瑠璃」

「……ん」

これからの戦いに改めて意気込む二人。そして準備が整い、船員が帆を広げて舵に従って船が出港していく。

総勢二十一名のハンターを乗せた二隻の船がタンジアの港を後にし、厄海を目指していく。

昴達が乗船している船は丈夫な木材を使用した特別製の船だ。海に存在する竜を相手に出来るよう、バリスタや大砲も搭載しており、船首や左右舷には撃龍槍も取り付けてある。が、後者はただ取り付けてみた、という代物であり、効果を発揮する機会はない。

あるとすればバリスタか大砲だろう。こちらならば遠距離から攻撃する事が可能なのだから。

今回の敵はナバルデウス亜種であり、その巨体が海上に出てきたならば昴達、または

船員がバリスタを撃ってダメージを与える事が出来る。しかし昴達ハンターが海に飛び込んだ後は、船は転進して戦闘区域から少し離れなければならない。

なにせ船を落とされれば帰りが苦しくなってしまうのだから。それに海を泳ぐのはナバルデウス亜種だけではない。ハンター達も飛びこんでいけば海にいる。潜っている彼らを見分けるのは至難の業。

そんなところにバリスタを撃ち込めば彼らに当たってしまう可能性がある。だから注意して撃たなければ支援は妨害となってしまう。そこを心得ている船員たちが残ってくれることになっているので、恐らく大丈夫だろう。

さて、一時間半と少しの航海を経て厄海へとやってきた一行。

この海はかつて一つの伝説が刻まれた海だ。

厄海を中心とした海域に一つの海底火山が動き出したのだ。……いや、それは正しくない。海底火山の如き力を兼ね備えた一頭の龍が確認されたのである。

かの龍はグラン・ミラオスと呼ばれる古龍であり、通称は煉黒龍。

ある神話では世界を滅ぼす悪魔とされ、あるおとぎ話では大地を創る巨人とされている。

その実態は、マグマと大差ない程にまで高まる体温と、翼から放出される溶岩のようなエネルギーの塊と化した火山弾。これによって海は真っ赤に茹で上がり、そこに住ま

う生物を次々と死に絶えさせた。

そしてこの力を振るって数多の島を海に沈めてしまい、通りがかる船もまた例外なく沈められていった。人々の協力の末にグラン・ミラオスは討伐されたのだが、この惨劇を生み出した海域を厄海と称したのである。

ちなみにその戦いに生き残った人々によってタンジアの港が作られ、聳える灯台は魔除けと神を祀る祭壇として建てられた。

そんな話が伝わっている。

そして確かにここは命の気配があまりない。

——否、一つの強大な命が迫り来ていた。

奴も二つの船に気づいたのかゆっくりと海上へと昇ってきている。それを感じ取った船員が舵を取り、船を転進させていく。そうしてナバルデウス亜種が海上へと姿を現した瞬間、用意していたバリスタの弾を装填し、奴に向けて一斉に射出する。

弧を描いて飛行したバリスタの弾はあの巨体へと突き刺さっていく。突然の奇襲にナバルデウス亜種は唸り声を上げて離れた所にある船を見下ろす。そうしている間も次弾が射出され、次々と体へと突き刺さっていくのだが、体を震わせながら勢いをつけて奴は海へと潜っていく。

そうして尻尾が持ち上がり、勢いをつけて海へと叩きつければその衝撃に従って強い

波が発生した。距離があるから勢いは弱まるだろう、なんて甘い考えは通用しない。波が船に叩きつけられた瞬間、船は大きく揺れて全員何かにしがみつかないと振り落とされそうな程にまで揺れてしまった。

「くっ、っ……の……!」

何とか船を安定させようと舵を取るがそう上手くいかない。しかもナバルデウス亜種が海へと潜っていきながらゆつくりと船へと接近してきているのだ。このままだと直接船に攻撃を仕掛けられてしまう。

ならば自分達が取る行動は一つ。

頭装備を被り、続けて水竜の守りとマスクを付けて海へと飛び込む事だ。

ローブからそれぞれ武器を抜き、一旦肩へと収束させて邪魔にならないようにする。先陣切つて海へと飛び込んだのは天羽々斬を手にした天羽。続けて桐音、紅葉と飛び込んでいく。

優羅も魔狼砲【黒鳥】を、昴は鬼哭斬破刀・真打を手にし、一度瑠璃達へと肩越しに振り返つた後に海へと飛び込む。向こうの船からも次々とハンターが飛び込んでおり、完全に戦闘態勢に入っている。

「腹は、括ったのかい?」

桐音がマスクをつけ、腰に小太刀を挿しこんでそう声を掛けてきた。瑠璃は火竜剣

【炎燐】を、茉莉は王牙銃槍【火雷】を手にして準備完了。桐音の背後ではルドロス乙シリーズに雷震剣斧ヴォルトを持つ将輝、ネブラSシリーズに雷迅剣ミカズチを手にする檸檬がいる。

自分達が持ちうる装備を持ち、心強い味方がいるのだ。よくよく考えれば、何を恐れる事があるろう。その中で自分に出来る事をやっていけばいいのだ。簡単な話である。

「ええ、大丈夫よ」

「そうかい、ならよかった。……じゃあ行くか。あの芙蓉つて人が言ったようにあたいら女の力を見せてやろうじゃないか」

そう言つて桐音は右手に朝凧を抜き、軽く指を切つて血を出し、刀身へと赤い雫を流していく。すると刀身に淡い紋様の光が浮かび上がり、消えていく。同じようにもう一つの小太刀、夕凧の刀身にも血を滑らせ、紋様を浮かび上がらせた。

これが桐音にとつての下準備。それを終えれば全員そろつて海へと飛び込んだ。

水龍の守りとマスクによつて問題なく海を泳げるが、それでも視界の奥に存在する巨龍を前にすれば息を呑んでしまい体が一瞬硬直してしまう。

広々とした大海原ということもあり、ほとんど障害物はない。

その中を悠々と泳ぎ、群がってくるハンター達をもたない古龍。

それはまさしく海の皇。

自分と比べればいと小さき存在であるハンター達などどうという事はない、というよ  
うな高位の存在である事を示すかのような覇気を纏う強大な敵。

皇海龍ナバルデウス亜種。

前回はただやられるだけだった敵を前に、瑠璃達は改めて武器を手にして向かつてい  
く。

今ここに、大海での戦いが始まった。

## 6 6 話

タンジアの港町にて、ハンター達を乗せた二隻の船が港を離れていったのを遠くから見守っていた灯は、離れた所からじつと自分を見つめている視線に小さく笑みを浮かべる。

懐から煙管を取り出し、草を乗せて火をつけて煙と香りを楽しむと、背後を振り返って口から微かな煙を吐き出す。それは風に乗ってゆらゆらと進んでいき——小さく粒子を放出して路地裏へと向かっていった。

それに視線の主らが気づいた刹那、「——乱風」と灯が呟く。それに従って粒子が力を放出する。荒れ狂う風が路地裏の壁を切り裂いていくが、視線の主——海と空はその影響外へと逃げていた。

「お、お嬢様。——」

「問題あらへんよ。それに、灯を追ってきた娘もおるし、ちよつと行つてくるわ」

「は？ いや、お嬢様？ お嬢様自らが出向く事は——私達が奴らを……」

「ん。霧夜はそつちに任せる。灯は、灯に会いに来てくれたあの娘とやる。話もある

よーやし、ここは乗つたらんとな」

くすりと笑みを浮かべて灯は海から離れて町の中へと入っていく。慌てて後を追おうとする炬であつたが、灯の命に従う事を選び、素早く路地裏へと身を滑らせていった。彼に続くようにどこからともなく一人の忍が付き従い、逃げていったあの二人を追う。

一方灯はと言うと悠々と町を歩いて気配を探り、自分を誘い込むように一定の距離で離れていく彼女の後を追つていた。そうして導かれたのは港町の出口であり、そこからまた少し離れた先にある丘だつた。

海を一望できる場所であり、潮風が吹き抜けてくるその場所には一人の少女が佇んでいる。いや、少女のように見えるが実際は灯と同年であり、人間で言えば年配の人物だ。

しかしその見た目と種族的にはまだまだ少女と言つて差し支えない……まあ、それは置いておくとしよう。彼女——乾渚は神妙な表情でこの場にやつて来た灯を見つめている。

それを灯は煙管を啜えたまま微笑を浮かべて受け止めていた。

「よお灯。こんなところで何してんだ？」

「それは灯も言いたいな。遠い海の方の戦場でも眺めに来たん、渚？」

「はっ、それもいいけどな、あたしの質問に答えな。お前の事だ、別にナバル亜種の事を



気にしている以上に、何らかの勘が囁いたんだろ？ でなけりや引きこもりのお前が西京から離れたこんな所に来る筈がねえ。……何を見た、灯!？」

びしっと指を灯へと突き出すようにすれば、灯はそれを見てまた小さく鼻を鳴らすように笑ってみせる。だがその目はどこか熱く濡れているように見え、その視線が含むのはこんな感じだった。

ああ、怒り叫ぶ渚の表情のなんと可愛いことか、と。

当然、渚もその視線が意味する事に気づき、一瞬引いてしまうのだが……しかしそれでも怒っている事には変わりはない。ここで退くわけにはいかないと突き出す指を引く事はない。

「なんも聞いてないんかな、あんたの部下から」

「あん?」

「んー……その様子、ほんまに聞いてないんやな。ということはその飼つてるネズミらは気づいてないんか」

「……マジで何を見た、てめえ?」

「知りたい?」

そう言つてどこからか取り出した扇子を開き、自身をおおぎながら煙管を吹かしてみせる。完全に余裕を見せている。煙が空に消えていくのを眺めながら、灯はまた微笑を

浮かべる。今度の視線の意味は——挑発。それを感じとり、渚は舌打ちする。

あの顔をしている灯の考えはあまり読み取れない。時にからかい、時に挑発し、そして時に何も考えていない。ただ気の向くままに、それが灯の在り方だった。

吐き出す煙と同じく流れに身を任せ、糸の切れた凧のようにどこへともなく飛んでいくかのような人。昔からこうだった事を知っており、彼女に近い場所に在り続けた渚をもつてしても彼女の全てを知る事は出来ない。

だから彼女の言葉に領いたとしても全てを教えるとは限らないし、逆にある程度の事を素直に教えてくれる事もある。全ては彼女の気分次第だった。

感情が先走る傾向が時にある渚からすればやり辛いことこの上ない相手である。

「一応聞いておこうじゃないか。灯、お前は何を見た？」

苦い表情を浮かべながら渚は試しに訊いてみる事にした。

そして灯はというと、煙管を口から離してこう言った。

「んん？ 双子の竜魔族とか、なんか変化しとるらしいハンターとか、都から翼を広げて飛び去っていった大鷲、つてところか」

「な、に……？ ま、まさ……か……あいつがここにいてるつてのか!？」

灯の諭えに感づいた渚は息を呑むしかない。もし本当に彼女ならばとんでもないことになる、と渚は冷や汗をかいてしまう。いや、彼女がここにいないならば何をしよう

しているのか。

それを考えれば視線は海の方へと向いてしまう。

「あいつ、参戦しているのか？」

「くす……そのよーやな。あれをまだ持っているかは掴められへんかったけど、でも持っているからこそナバル亜種に向かつていったんやろーな。目的が天羽々斬の目覚めなんやったら、ナバル亜種の血を受ける事こそ目的達成に近づく道なんやから」

「……………気づいていて、止めなかつたのか？」

「あれでも戦力の一人。殺すんやったら戻ってきたところをやればええやん？ ……さて、これを聞いて渚、灯を止める？」

扇子を広げて口元を隠し、目を細めながら微笑を浮かべつつじつと渚を見据える灯。昏い色をたたえる瞳に見詰められ、しかしその佇まいから優雅さすら感じられるその様。

そんな彼女に見詰められる渚はしばらく考え続け、そしてまた舌打ちする。

最初はここにいる昴達に気づいたのだらうかと危惧したが、それ以上か同格の獲物がいたとは思わなかつた。

衛宮天羽。  
えみやあもつ

武神と同じく衛宮家の女性であり、今ではその一族から名を消された反逆者。国宝で

もある天羽々斬を持ち出し、衛宮家の者などを斬り殺して逃亡した彼女に対して武神は見つけ次第殺せ、と告げているので灯が彼女を殺そうとしているのは問題ない。

だが現在ナバルデウス亜種に戦いを挑んでいるのは天羽だけではない。あの双子もいるし、白銀一家もいる。天羽が戻ってくるとなれば、彼らも一緒に戻ってくる。その際に気づかれたらどうなるのか？

そう考えると色々不味い展開が頭をよぎってしまう。

(くっそ……めんどくせえ事になりやがって……！ どうする？ 本当に天羽がここに  
いるんだったら確かに殺る準備くらいはするだろうが……)

渚としても武神に逆らう気はないし、天羽のやったことはヤマト国としても許されな  
い事だという事は重々承知している。その罪は命を持って贖ってもらおう、というのも異  
を唱える気はない。

が、タイミングが悪い。意図せずしてこの状況を作り上げたって言うならば、本当に  
彼女の才能と言うものが恐ろしく感じてくる。そんな事を考えている渚を見て灯はま  
すます笑みを深くした。

「どしたん？ なにか気がかりな事でもあるん？」

「……いや、なんでもねえよ。天羽を殺す、それに対しては異論はねえさ」

「さよか。じゃあ——灯と一緒に殺りに行こうやないか」

パチン、と音を立てて扇子を閉じ、左手に叩く。灯の言う事はヤマト国の役人……それも王直属の部下としては頭に入れておくべき事柄。国の重罪人を発見したならば見逃す事など出来ない。

灯の言う通り、自分達の立場ならば動かねばならない事柄だ。だから止めるわけにはいかない。しかし白銀一家らは守らねばならない。そこを何とかするしかない。

「それはいいとして、てめえは別にあの天羽がここにいてという確証を持って来たわけじゃないんだろ？」

「ん、いつもの勘。でもこうして大当たりを引いてしまうのが灯つてもんやなー。でもこれ以外にも何かあるよーな気がするんやけど……」

「一番はナバル亜種の力を感じ取ってたんだろ？ その中で天羽の存在が見える見えないを抜きにして見つけ出してんだ。それで十分じゃねえか」

「……ま、せやな。じゃあ今頃殺しあつとる炬らを呼ぶか」

何度か扇子を開閉して音を奏で、最後に一際高く音を奏でると扇子が淡く光り、それに向けて「戦闘終了や。戻ってきい」と告げてやる。そうして命じた後、最後に渚へと笑いかけて「じゃああれらが戻ってきたら一緒に殺しに行くつて事でええな？」と言えば、渚は無言で頷く事で応える。

それに目を細めてにこり、と笑うと灯はそのまま去ろうとする。その背中へと

「ちよつと待ちな、灯」と呼び止める。肩越しに振り返る彼女に、

「てめえ、他に何か隠している事、あるか？」

「灯が何を隠すん？」

「ただの勘だけで動く奴だつて事はあたしはよく知っている。けどな、それだけではない何かがないとお前は動かかねはずだ。何がお前を動かした？」

「……くす、せやなあ……大部分は勘やけど、流石は渚。灯の事をよく知つとるわ」

また微笑を浮かべてみせるが完全に振り返る事はない。

「でも渚だつてなんか隠しとるよな？ 灯だけに喋らすん？ それは少しだけへんな、不釣り合いや。やから訊くんやつたらそつちもなんか話し。そーして初めて灯は喋つたらーやないの」

「……ちつ、そう簡単にしやべらないか」

「くす……ほな、灯はこれで」

小さく会釈すると灯は静かに立ち去っていく。それを見送る渚の表情は晴れることはない。自分の持っている情報は知られる事はなかったが、それでも白銀一家らが危険だという事には変わりない。

彼らを何とかして守らなければならぬ。

灯はナバルデウス亜種へと向かったハンターが戻ってくるまでここに滞在するだろ

う。ヤマト国の者らが追い続けた大物がいるのだから離れるはずがない。

やはり自分だけではなく、忍らの力も借りるしかない、と渚は海らの下へと駆けだした。懐から札を取り出して彼らへと連絡を繋ぎ、呼びかけるのだった。

数分前、路地裏を駆け抜けていた海と空は、背後から追ってくる炬ら風間の忍を感じ取っていた。人気のない路地裏ではあるが、しかし住宅街という事もあるためここで戦えば家の人に気づかれるため交戦は出来ない。

忍を撒くために高速で駆けているが、しかしそれでも炬らは距離が離れないように疾走している。このままではキリがない、と懐に手を伸ばした空は鋼糸を用意する。だが海はそれに気づいて、

「それはやめておけ、空。絡め捕れれば僥倖だが、この住宅街の路地裏に細切れになった肉塊を放置していくのは忍びない」

「……それもそうですね」

恐らく縦横無尽に鋼糸を張り巡らせて足止めしようとしたのだろうが、その糸の強度と彼らのスピードが合わさった場合、最悪その体が切り裂かれて路地裏にばら撒かれてしまう可能性がある。

そのためこの路地裏から抜けだし、公園へと二人は足を進めていた。それも人々の憩いの場となっている方ではなく、林が乱立する方へと進んでいき、木の枝を蹴って飛び

回り身を隠す。

続けて炬らもまた木々の枝葉へと身を隠し、両者は気配を消してお互いの出方を窺っていた。だが空の手は僅かに動いていた。こうして枝葉に隠れて移動しながらも取り出した鋼糸を薄く、広く張り巡らせて蜘蛛の巣を作り上げる。

この林は完全に彼女の狩場となっていた。空が鋼糸使いだというのは炬らも知っている。目を凝らせば極細の糸が木々の間に張り巡らされているのが見えるだろう。完全に蜘蛛の巣となっているだろうが、しかし炬は手に苦無を握りしめると数か所を狙って投擲する。

張り巡らされている糸の数本を切り、巣を崩していくその間に他の忍が海らへと近づいていく。忍の接近に気づいて切られていない鋼糸を操り、空が忍の一人を絡め取って行動不能にするのだが、それを抜けてくる二人の忍。

だが今の空は一種の女郎蜘蛛。数本の糸が切られようとも、残った糸に追加するように指先から新たな鋼糸を伸ばして忍を捕まえにかかると。

「くっ……い！」

周囲から狭まってくる鋼糸と目の前から伸びてくる鋼糸という二重の攻撃を前に一人は戸惑い、一人はそれでも小太刀を手にして斬り込みながら接近。追加された鋼糸に絡め取られてしまい宙づりになってしまう忍を背に、空へと斬りかかっていく忍だが、



それを小太刀を手にした海が受け止めて弾き返す。

援護するために絡め取った忍二人を更に動かし、木々の枝へと縛り付けて逆さ吊りにして放置し、空は札を手にして魔力を注いでいく。

「木術……っ!？」

術を行使しようとした空だったが、側面から放たれた苦無を感じ取ってその場を飛び退く。だがそれでも彼女は注ぎ込んだ力を解放させるべく札を前に出しながら、迫りくる炬を見据えつつ中断した言葉を続けた。

「——舞葉」

「っ………！ 風牙の乱！」

札から発せられる風によつて枝葉が舞い上がつて螺旋を描き、炬に向かっていくのだが、炬もまた両手で印を作つて力を注いだ。それに従つて空気が渦を巻き、牙を剥いて空へと向かつていく。

これにより枝葉を含んだ風と真空の刃が混ざつた風がぶつかり合う事となり、林を強く揺さぶつて木々が悲鳴を上げる。風は林だけでなく小太刀を斬り結んでいた海と忍にも影響を与え、二人は苦い表情を浮かべて一度距離を取り合う。

風のぶつかり合いが一度おさまるが、二人は続けて次の術を放つための準備をする。その時間を作るために再びぶつかり合う海と忍。小太刀が甲高い音を立てて軋み合い、

それだけでなく打突や蹴りも織り交ぜ、目の前の敵を下してその先にいる術者を抑えようとしている。

だがお互い抑える事は出来ず、再び両者は相手を討ち倒すための術を行使する。

「木術・樹穿空！」

「風竜の顎！」

舞い上がった札から伸びるのは太い大樹の枝。竜の腕の如きそれは枝というよりも幹のように思える。先端が尖った幾重の枝はまるで蛇のようにならねりながら炬へと向かっていく。

迎え撃つのは両手で作った印を前に出すことで呼び出した風の牙。両手と彼の背後から吹き抜ける強風は木の葉だけでなく土煙までをも巻き上げ、それらを引き裂く力をもって襲い来る枝を切り裂いていく。

貫く力と、その力を削ぎ落すかの如き密集された風の刃。不可視の力であるはずの風は、まるで竜の顔のような幻影を見せながらじりじりと空へと向かっていく。

風間の忍が行使する力の大部分は風の力というのは忍らの間で伝わっている。その一族の名に「風」という名前がついているだけあり、古来より不可視の力である風……空気を操る力を磨きあげた彼らの真名は『風魔』。風を操りし魔の者が転じて風魔とされている。

だが彼らは魔族ではなくれつきとした人間だ。彼らの独特の力は魔族であると思われる程のものであったといわれていたという話だ。いつしかその真名は時を経るにつれて隠され、今ではその別の呼び方をもじり、『風間』と名乗るようになっていったという。そんな風間の力によって作り上げられた風の刃は着実に空へと近づく。それをせき止めて逆に炬へと向かい、その体を貫かんとする大木の枝だが、その自然の力を体現する硬さをもともせず切り裂く風の力が上回っていた。

このままでは空の全身が切られる、と海は歯噛みし、吹き荒れる風の中、彼女の下へと向かおうとする。が、突如炬の懐から彼の主である灯の声が聞こえてくる。

『戦闘終了や。戻ってきい』

「……承知しました」

灯が止めてきたならばこれ以上の続行はしない。主の命には忠実なのが忍というものだ。

距離を取りながら風の力を解き、何も言葉をかけずに林の向こうへと消えていく炬ら風間の忍。いつの間にか吊るされていた忍も解放されており、彼らも回収していった。

それを追う事はしない。灯が戦うな、と命じて退かせたならば両者の主らの話がついたという事だろう。……恐らく、一時的な協力体制を敷いたはずだ。灯がここまで飛んできた理由が絡んでいるだろうと推測する。

「大丈夫か、空？」

「……ええ、問題ないですよ。少々消耗しましたが、この程度ならば数分で回復可能」

霧夜に伝わる忍の術は魔力を消費して行使している。二人は魔族のため魔力はそれなりにあるが、大きな術を使用すると結構氣力を持っていかれてしまう。時間が経過すれば回復するが、先ほど使った術のぶつけ合いの影響は確かに空に負荷を与えている。

逆に言えば炬もまた同様に消耗しているだろうが、見た限りではその様子を見せまいとしているかのようだった。灯の付き人ならば下手に弱みは見せないという気概の表れだろう。

「じゃあ乾様の下へと向かおう」

「はい」

彼らが灯と合流しようというならばこちらも合流して指示を仰ぐことにしよう。港町の各地に散っている霧夜の忍を呼び、二人は林を抜けて丘にいる渚の下へと駆けていった。

霧夜と風間の戦は、両者の主の意向によって一時休戦の運びとなる。

これほどの傷痕を作り上げるだけの力を以ってしてぶつかり合った二つの忍だが、しかし主が結んだ一時的な共闘には感情を隠して従うのであった。

○

それはまさしく海の皇であると同時に、海を泳ぐ巨人のようでもあった。

数メートルも離れているというのに奴の顔はそれでも巨大なのだ。雄々しく反り返るその角は、一人が立つたとしてもまだ少しだけ大きい程の太さをしている。

口を開けば容易に丸呑みできるだけの大きさをしており、たてがみのように見えるその金色の毛に覆われた部分も合わせても人が二、三人必要なほどの大きさだ。

そんな巨人を前に二十一名のハンター達が立ち向かう。

その体の部分部分にはバリスタの弾が突き刺さっているが、その程度の物など奴にとっては大したダメージにはなっていないだろう。体を覆うのは強固な鱗と皮という鎧。その巨大さによるタフさも相まってそう簡単に倒せるような相手ではないのは明白だが、しかし奴を何とかしなければタンジアの港が脅威に晒される。

先手を取って斬り込んでいったのは天羽だ。手にしている天羽々斬で側面から刃を突き入れて切り裂きに行くが、毛を切り裂きはしたもののその皮には薄くしか刃が入らない。本来の力が失われているせいだろう、その切れ味もまた眠りについていらい。

だが秘められた龍殺しの力は微量に出ているようで、そちらのダメージが通用してい

る……のだが、溢れる生命力によつてそれはナバルデウス亜種にとつてかすり傷にしかならないようだ。

続けて港で絡んできた井出遼と越智修がナバルデウス亜種へと向かつていく。井出の手には白き大剣ネオラギアブレイドが握られている。それに対し越智は肩にかけているロープを小さく展開し、そこからベルトリンクを伸ばして手にしているギリースナイパーへと繋ぎ、ナバルデウス亜種へと引き金を引いていった。

どちらもG級に属する武器であり、前者はラギアクルス亜種、後者はナルガクルガ亜種の素材で作られた代物だ。なるほど、あの時港で紅葉達に対して大口をたたいただけはあるという事か。

「おらあああああッ!!」

力強く叫びながらネオラギアブレイドを振り回せば、それに纏われた気が刃となつて放出され、雷属性を纏つてナバルデウス亜種を切り裂く。続けてベルトリンクから高速で装填されていく通常弾Lv3をギリースナイパーから射出し、何度も何度も跳弾して体を駆け巡る攻撃を行う越智の追撃。

これを行っているのは越智だけではない。一定の距離を取りながらライト、ヘビイ問わずガンナーのハンターが通常弾Lv3や貫通弾でナバルデウス亜種の巨体を撃ち抜く姿が見られる。

その中には優羅の姿もあり、前へと回り込みながら魔狼砲【黒鳥】に装填した貫通弾Lv1による超速射を行使し、顔から背中にかけて一気に貫いていく。だが彼女の場合にはそれだけではなかった。

魔狼砲【黒鳥】に関しては展開されているローブから銃口を突き出す形で使用しており、彼女が手にしているのはカクトスゲヴェアという別のライトボウガン。それに装填するは通常弾Lv3だ。他のハンター達と同じく跳弾を狙って撃ち出し、気持ちのいい音を立てて連続して跳弾していく。

まさしくそれは一人で巻き起こす弾幕。超速射が止まればすかさず「……ファイア掃射」と口にし、弾が一度止まれば「……バレットリロード弾丸装填、リチャージ一二」と告げることで次弾を装填する。

だが飛竜らにとっては脅威の弾幕だろうと、奴にとっては小石を何度も投げつけられる程度でしかない。鬱陶しげに顔を振り、それに従って大木の如き角が振り回されて接近しようとするハンター達を遠ざける。

あれだけの太さと硬さならば振り返るだけでも人にとっては脅威だ。実際位置取りを失敗したハンターが角に腹を打ち据えられて呻き声を漏らして怯んでしまっている。続けざまに弾を撃たれる事で、もがくだけで角に打ち上げられて吹き飛ばされている。

まずはあの角を何とかするべきだろう。へし折ってしまえば振り返りざまの殴打を避ける事が出来るだろうが、しかし鋼かそれ以上の硬さを誇るあの角をへし折るとい

作業は厳しい。

しかし勇敢にもナバルデウス亜種へと接近するハンターがいる。

「だらっしやあああああッ!!」

角王鎚カオスオーダーを構えて水を蹴り、空気を放出する事で水中を弾丸のように突き進むのは紅葉だ。群がるハンター達を体を震わせ、尻尾を振るう事で振り払っているナバルデウス亜種の左角へと近づき、構えた角王鎚カオスオーダーを力強く叩きつければ凄まじい衝撃を伝え、それは軋みをあげる。

だが軋むだけであり、ひびが入る事はなかった。しかもその硬さを伝えるかのように握りしめる柄にまで痺れが伝わり、思わず紅葉は口の端をひくつかせてしまう。

しかも今の一撃が癩に障ったのか、ナバルデウス亜種が唸りながら紅葉を見上げてくる。そんな顔面を蹴りつつ空気を放出して紅葉は緊急離脱するように背後へと跳ぶ。それを逃さないように嘯み付きに来たが、その頃にはもう紅葉は数メートルも離れてしまっている。

入れ替わるように桐音や昴がそれぞれの武器を構えながら気を纏わせ、遠距離からの気刃を放ちつつナバルデウス亜種の様子を窺いながら距離を詰めていく。

そんな中、海中で響き渡るのが複数の笛の音色。狩猟笛を手に行っているハンターが旋律を完成させて奏でたのだ。その中にはマジリアアロッドを手に行っている蓮華



の姿もある。

黄、水、黄、水によって奏でられる旋律の効果、属性攻撃力強化の力がハンター達へと連続して掛けられ、続けて黄、水、紫によって水耐性強化〔大〕の効果を与えられる。しかもこれは水ブレスによって付加される水やられ状態からも守ってくれる。

ナバルデウス亜種を相手にするにはうってつけの守りの効果だ。

彼女の旋律だけでなく、他のハンターから与えられた攻撃力強化や防御力強化も追加されてハンター達を支援し、それを受けてハンター達の攻撃も増していく。

しかしそれでもナバルデウス亜種は怯まない。突如唸りながら一気に体を捻りながら力を溜めると、群がったハンターと離れているハンターを狙って螺旋状に体を捻りながら突進を仕掛けていった。

強い水流を生み出しながらもその巨体が一気に数十メートルを移動していく事で、何人かのハンターが撥ね飛ばされてきりもみ回転しながら海底へと落下していく。

たったの一撃だったが、それだけでもハンター達にとっては厳しい一撃となる。なにせ数メートルも離れていたあの巨体が気づけば近くまで迫り、逃げようとした時には既に奴の体は通過して背後に行ってしまうているのだ。力を溜めている時に回避していなければ撥ね飛ばされて終わりだ。

だがナバルデウス亜種の攻撃はまだ続く。振り返ってハンター達を見回した奴は大

大きく息を吸いこみはじめたのだ。

それが何を意味するのかは誰もがわかっていた。故にそれぞれ散らばりながらナバルデウス亜種へと接近するか、離れていく事であるの攻撃に備える。

そうしてハンター達が備えるのを嘲笑うかのように、開かれたあの大口から放たれるは人一人を容易に飲み込みかねない程に大きな水の奔流。横に回転する力が働きながらも、海中を撃ち貫く強大な水のプレスはハンター達を薙ぎ払って深海へと消えていく。

ガノトトス亜種が放つような細くも貫く力を高めた水プレスの薙ぎ払いなど目じゃない。それはまさしく強大な力を秘めたる古龍種ならではの暴力的なまでの力の奔流だ。奴はただ大きく息を吸って、体内に溜めた水を吐き出しただけ。

だがそれだけでハンター達にとっては驚異的なまでの力と化す。

「う、うわあああああアッ!？」

奴から距離を取っていたのに、運悪く水プレスに飲み込まれたハンターが無残に散って海の藻屑と化していく。防御し、旋律によって守りの力を高めてもなお耐えきれなかった結果だ。

彼の仲間だろうか、一人のハンターが名前を叫んでいるが、それに応えることなく日の当たらない深海へと消えていく死体。それを息を呑みながら見下ろしている檸檬は、

近くにいた将輝に肩を揺さぶられる事で気を取り戻す。

あれに意識を取られている暇はない。気を抜けば次にああなるのは自分かもしれないのだから。そうして構えなおす檸檬だが、そんな彼女に向かってナバルデウス亜種が急降下し、勢いをつけて撥ね飛ばしにかかった。

咄嗟に逃げようとしたが奴から発せられる気迫とその速さに気が飲み込まれ、体が硬直してしまった。

(しまっ……や、やられ……っ!?)

ただの飛竜種などならばこうはならなかつただらう。ナバルデウス亜種は古龍種だ。飛竜種らとは一線を画した存在であり、発せられる殺気や気迫もまた段違い。

それに飲み込まれてしまえば、防御する事を忘れて体が硬直してしまふ。そうして心弱きハンターは古龍に蹂躪されるのだ。彼女もまたその結末を辿るだろう——と思われたが、近くに将輝がいたのが救いだつた。

「この……、ドあほう!」

本来ならば防御するような武器ではないスラッシュユアックスのハイランドグリーズを剣モードにし、檸檬の前に出ることで彼女への直撃を避けた。だが角によって撥ね飛ばされ、それによってハイランドグリーズは大きく軋んで一部分が凹み、撥ね飛ばす衝撃で檸檬もろとも吹き飛ばされる。

ナバルデウス亜種は吹き飛ばした二人など気に留めず、そのまま猛スピードで泳ぎながら視界に移るハンターらを次々と撥ね飛ばしにかかる。

「動いてくるねえ、こいつは……！」

体を捻りながら落下する事で頭上を通過していくナバルデウス亜種を見上げる桐音。そうしつつ己の中から一つの力をひねり出す。

「雷狼気、収束」

それは無双の狩人の気。雷属性だけでなく奴の強靱な力もまた引き出していき、両手にある小太刀へと注ぎ込む。それだけではなく、全身にも纏まとわせるように「纏まと」も口にすればバチバチと軽く音を立てて青白いオーラが彼女を包み込む。

そうして高まった荒々しくも強い雷属性の力を放出した斬撃は、ナバルデウス亜種の体を斬り裂くのだが、しかし出血には至らない。が、それで攻撃の手を止めることはない。一気に距離を詰めて体の側面へと肉薄し、「哭け、朝風、夕風」と告げてやる。すると青白いオーラに包まれた二振りの小太刀が淡く光りだし、それを素早く振るつてやる。

小太刀に秘められた血の力で引き出された紋様が共鳴し、海中で光る灯りとなりて雷撃を高める要因となる。それはまさしくジンオウガの鋭い爪。小さな傷はいっしか大きな傷へと変化し、強固な皮を切り裂いて肉を露出させて少しずつそれをも切り裂く。

小さな出血を促せば、桐音はそれを吸収させるように小太刀を突き入れて刀身へとナバルデウス亜種の血を滑らせた。

その工程を離れた所で気刃を放ちながら天羽は見つめている。

(……なるほど、あれもまた草薙の妖刀という事か。風……草薙武と同じ、独特の技術を現代に伝える存在。興味深いなあ……)

またしても天羽の好奇心がうずいてしまう。こんな時でも彼女は強者や興味深い代物を見てしまう事で、己の実力をぶつけて試してみたいという気持ちが浮き出てしまうのだ。彼女の悪い癖だと雪菜が言う要因である。

(竜の力を秘めた素材と、己の血に刷り込んだ力の片鱗を共鳴させる事で高められし竜の力に……そんな己の血を素材として溶け込ませたその使い手だけの竜殺しの妖刀、か。……ふふ、さすがは太古の古龍を討伐し、その素材であるの剣を作り上げ——それだけでなくこの天羽々斬を制作した草薙一族だけあるよ)

人間の身でありながら竜殺しの力を高め、竜殺しの武器を制作し続け、それを外に漏らさずに閉じた世界で回し続けた草薙一族。その力や功績のほとんどは秘匿され、謎に包まれた一族。

国宝とされているこの天羽々斬の制作者でもある、という事実もまた一部の者しか知らされていない程にまで、彼らの存在は東方において謎とされている。

しかし知るものは知る。

彼らが人間でありながら特異な存在であり、この天羽々斬をはじめとする妖刀使いにして制作者であるという事を。

桐音が斬り込んでいる方とは反対側へと回り込んで、天羽は一気にナバルデウス亜種に肉薄して再度斬り込む。このような手間をしたのは桐音に天羽々斬を感じづかれないようにするためだ。

何せ血を吸って力を高める妖刀という代物は、草薙の者ならば気づかれる要因にしかない。こちらもいよいよ皮を切り裂き、中にある肉へと刃を突き入れて薄く漏れ出る血を刀身に滑らせていくことで、いよいよ天羽々斬の僅かな目覚めを促していく。

そんな彼女の近くには火竜剣【炎燐】を手にした瑠璃と、王牙銃槍【火雷】を手にした茉莉がおり、それぞれナバルデウス亜種へと攻撃を仕掛けている。その巨大さからダブルセイバー形態にした火竜剣【炎燐】を回転させる事で連続した斬撃をしかけているようだが、弾かれなくとも小さな傷しか与えられていない。

王牙銃槍【火雷】もまた同じであり、弾かれてはいないが小さな穴しか開けられず、銃撃を仕掛けることで小さなダメージを蓄積させる事しか出来ないでいる。一応王牙銃槍【火雷】には雷属性が存在するが、これでは通用しているかどうかも怪しい。

なにせナバルデウス亜種は彼女達だけでなく、他のハンター達の攻撃や遠距離からの

銃撃など気にした素振りもなく体を震わせ、まるで小蠅を払うかのように体、尻尾を震わせている。そうして払った後に勢いよく体を捻って向き直り、尻尾を振り上げ、叩き落として反撃している。

何とかそれらを躲し、茉莉などのランサーやガンランサーは盾を構えて防御して切り抜け、反撃するように武器を突き出していく。だがナバルデウス亜種は一度海上に向かつて昇っていったではないか。

そのまま勢いをつけて上半身を海上に曝け出すと、離れた所で様子を窺っていた二隻の船にいる船員らは驚く。だがすぐにこれは好機だとばかりに「バリスタ用意いい!!」と指示を出す船長に従って次々とバリスタの弾を用意し、ナバルデウス亜種に向けて射出する。

それらは空を切つてナバルデウス亜種に突き刺さっていくが、小さく呻きながらもナバルデウス亜種は勢いをつけて一気に海中へと沈みだし、突き上げられた尻尾が力強く海を叩いて波を発生させる。

その余波に気づいた船長の指示によりすぐさま衝撃に備える船だが、襲い来る波にたまらず船員らが悲鳴を上げる。それでも転覆しないように船をコントロールする事で何とか持ち直すが、それを作り出したナバルデウス亜種はハンター達の頭上から螺旋の如く体を捻りながら急降下。

海中を切り裂く竜巻の如き衝撃が、先ほどまでナバルデウス亜種へと肉薄していたハンター達を貫き、これによりまたしても戦線が瓦解する。だがそれでは止まらず、ナバルデウス亜種は振り返り、今度は下から海上に向けての準備を始めた。

すなわち——水ブレスの予備動作だ。

『——ッ!?!』

その時、ハンター達に戦慄が走る。

剣士タイプのハンターらは今の突進によって体勢を崩してしまっている。直撃を受けた者は少数、多数は逃げようとしても水流に巻き込まれてしまうことでバランスを崩してしまっているのだ。

そんな中であの水ブレスを受けてしまえばどうなるか。その結末を想像するのは容易い事だ。

「くっそおおっ!」

離れた所にいた越智が吼えながらギリースナイパーから貫通弾Lv3を撃ち続けることで何とかナバルデウス亜種を怯ませようとしている。そんな彼に触発されたか、撃てるガンナーはそれぞれナバルデウス亜種に向かって銃撃を続行する。

その中には優羅もあり、カクトスゲヴェーアと魔狼砲【黒鳥】による弾幕を展開している。



ハンターらを助けられる者は何とか彼らを回収しに向かい、重傷者はモドリ玉を使って船へと戻っていく。だがそれでも数人は助けられない位置にまで流されてしまっていた。

「瑠璃、離れますよ!」

「つ、うん……!」

盾を構えることで防御に成功した茉莉が瑠璃へと向かい、彼女を抱えながら二人揃って離れていく。しかし海中という事もあってバタ足だけではなかなか前に進められない。離れた所では足に気を集めて放出する事で、一気に突き進むという荒業を行使しているハンターがいる……よく見ればそれは桐音や天羽だった。

だがそんな彼らを絶望へと叩き込む叫びが下から……いや、水竜の守りを通じて聞こえてくる。

「水プレスが発射されるぞおおッ!!」

ガンナーらの銃撃を受けてもナバルデウス亜種は止まらず、完全に準備が整ってしまつた。慌てて離れていくハンター達を見回し、ナバルデウス亜種がいよいよ水プレスを発射する。

そんな中で紅葉ははつとした顔である一点を見つめた。

そこには射線上にいるハンターがいたのだ。見つけてしまつては見逃せられない。

舌打ちして高速で魔力を練り上げ、左手を手前に引く事で空気の流れを作り上げてハンターを引き寄せつつ、自分もまた足から空気を出して高速接近。

そのハンターを回収すると気づいてしまった。

「……あんた」

「……な、お前は……」

よく見ればそれは井出だった。

だがそれに驚いている暇などない。下から凄まじい力がうねりをあげて解放されたがっている。紅葉は彼の腕を抱え上げて一気に海中を貫く弾丸のようにその場から離脱する。

刹那、背後にあの極大の水ブレスが通過し、海上へと飛び出ていった。

しかしそれでは終わらない。ナバルデウス亜種が顔を振る事で水ブレスが紅葉らを追うように曲がってくる。

ターゲットは紅葉だけではない。他のハンター達をも巻き込むように水ブレスは海中を切り裂き、曲がってくるそれから逃げ遅れた数人のハンターが飲み込まれていった。

「くっ、しっかり掴まってなさいよ！」

「お、おう……ぬおっ……!？」

紅葉は飲み込まれたハンター達を振り返らず、ただ自分達も彼らのようにならないように逃げることに専念する事にする。助けられれば助けられただろうが、既にこの井出がいるために助けられる事は不可能。

そうでなくとも数人を纏めて助け出せる技量なんて自分にはないと割り切っている。目に映るもの全てを助け出せるなんて聖人などいるはずがないし、自分がそうだと思いつ上がるつもりもない。

どうあつても出来ない事は出来ないしと割り切れるくらいには紅葉は現実的だった。

そうして紅葉は更に噴き出す空気の出力を上げて、一気に水ブレスから距離を離しつつ下へと潜っていく。そうしてナバルデウス亜種の側面へと回り込むと井出を解放して近くにいた越智へと引き渡し、自分はナバルデウス亜種へと向かつて角王鎚力オスオーダーを構えていく。

逃げから一転して攻撃に出ていく彼女の後姿を、井出と越智は少し呆然としたように見つめていた。

強大な敵を前に彼女は怯むことなく戦い、自分の事だけでなく目についただけの井出も助け出してしまった。そうしてまた彼女は戦いに戻っていく……なんと勇敢な事か。そんな風に思い始める二人だった。

## 67話

被害は少しずつ増え続けている。

死人は二、三人。

重症者二人。この二人を一度モドリ玉で船へと届けて離脱したのが二人。

これにより残ったのは十五、六人と思われる。

推測となっているのは完全に全員把握できないためだ。負傷して一度離脱しているハンターもいるかもしれないので推測するしかない。

その内の二人は紅葉が助け、届けた井出と越智。ナバルデウス亜種の周囲には優羅をはじめとするガンナーがそれぞれ銃口を向けている。近接の剣士タイプは悉くナバルデウス亜種にやられてしまったようだ。

その中には檸檬や将輝も含まれているが、何とか二人は体勢を立て直してしのいでいる。

蓮華がマジアリアIIロッドを振ってもう一度水耐性強化「大」をかけるが、自分以外の首領笛使いがない事に気づいた。剣タイプがいなくなってきたという事は、向

こちらの船に乗っていた狩猟笛使いが落ちたか、船に戻ったという事を意味する。

(となれば……こつちでフォローするしかないですか)

ローブの中にマガリアアロッドを一度しまい、代わりに取り出したのはイントロペリアル。クルペッコの素材で作られた狩猟笛であり、これを振り回して緑、緑、紫、水の旋律を奏でると高い治癒の力が周囲に広がってハンター達へと染み込んでいく。

これを何度か繰り返し、最後に水、水、緑、紫と旋律を奏でて高級耳栓と同等の効果を発揮させてイントロペリアルを構えなおす。

治癒の効果を受けて井出と越智がまた動けるようになるが、戦力が落ちた事でどうするべきかと考えだす。同船していたハンター達が次々と離脱していくに対し、向こうの船に乗っていたハンター達は危ない所はあってもまだ戦えている。

彼らに負けていられない、その思いが沸々と湧き上がってくる。手にしているネオラギアブレイドを強く握りしめれば、彼の闘気に反応して内包されている雷属性が吼え始める。

ネオラギアブレイドもまた、このまま眠りにつくには戦い足りないとはかりに力がうねっているのだ。このままで終われるものか、という井出の心に呼応しているかのよう  
に思え、井出はネオラギアブレイドを握りしめたままナルデウス亜種へと向かっていく。

幸い体の疲労や痛みは蓮華が奏でた旋律によって癒されていた。戦いを続行する分には問題ない。紅葉に助けられた借りを返すためにも、ここで離脱する事など出来なかった。

越智もギリースナイパーを手に、通常弾Lv3を装填してナバルデウス亜種の側面を狙い撃ちにし、跳弾させて連続したダメージを与えていく。

離れた所から攻撃を仕掛けているからこそ、頭部にある雄牛の如き角を狙って角王鎧カオスオーダーを振り回す紅葉や、天羽々斬を振るって確実に横っ腹を切り裂いていく天羽の姿を確認できていた。

纏っているのは確かに上位装備。自分達が身に着けているG級装備よりも格下のものだが、しかし彼女らは危なげなく立ち回って攻撃を続けている。その力量は紛れもなく本物だ。

だからこそ負けていられない。それはG級ハンターとしてのプライドだろう。紅葉の場合は防具が上位ランクだけで武器がG級という変わり種だが、天羽の場合は上位ハンターとして行動し続けている。

それに彼女ら以外、双子なども上位ハンターが主なもの。そんな彼女らに……女性に負けていられないという男のプライドも存在している。だからこそ、越智もまた退けなかった。離れた所から彼女達の動きを見ているからこそ退くに退けない。

他のガンナーと共に、遠距離からの銃撃を続行する。

小さなダメージだがしかしそれは着実に実を結んでいる。

それを感じ取ったのは紅葉だ。左角へと角王鎚力オスオーダーを振りおろし、ダメージを与えていく中、優羅の魔狼砲〔黒鳥〕から超速射によつて射出された貫通弾Lv1の影響で、少しずつその硬い角にひびが入りだしているのだと。

紅葉をアシストするために優羅は魔狼砲〔黒鳥〕の銃口の向きを調節して、左角の根元へと着弾するようにしていたようだ。威力は貫通弾の中では一番低くとも、超速射によつて高速で複製されて撃ち出された弾丸は、もはや数える事も出来ない程にまでナバルデウス亜種の左角へと着弾し、消えていく。

いくら硬い角だったとしても数十から百を超える弾丸を受けて無傷でいられるわけもない。しかも射出しているのはG級にまで高まった素材で作られたライトボウガン。軽量で補助に向いているライトボウガンではあるが、ここまでくると威力にも箔がついてくる。

それだけでなくカクトスゲヴェアもまた上位の一品でありながら、かのエスピナス亜種の素材を使っているだけあって、強化を施すことのでかなりの火力を保有する事となっている。

通常弾Lv3を撃ち続けていたそれは、優羅が取り出した徹甲榴弾Lv1を装填する

と銃口から複数の弾を吐き出してナバルデウス亜種の角へと突き刺さる。カクトスゲヴェーアは徹甲榴弾Lⅴⅴと火炎弾が速射対応している。

これにより連続して角に着弾したそれが爆発し、亀裂を更に広げていくのだ。

そうして広げた亀裂へと向かって、怪力自慢の紅葉が角王鎚カオスオーダーによって一気に砕いていく……のだが、とんとん拍子に上手くいくはずもない。何せ相手は生き物だ。攻撃をただ大人しく受け続けるはずもなし。

「ヴオオオオオオオッ!!」

顔を左右に振って紅葉を振り払いに来ている。まだ折れぬ左角で紅葉を穿つか華奢な体へと衝撃を伝えるように叩きつけようとしている。しかし紅葉もそう易々と受けてやることはない。

水を蹴り、空気を発してその場を跳び離れ、ナバルデウス亜種の反撃をやり過ごす。

そうしてもう一撃叩き込もうとしたが、ナバルデウス亜種は更に大きく首を振りながら尻尾もまた振り回して群がるハンター達を纏めて薙ぎ払った。そうしながら大きく息を吸いこみだしている。

そのまま力を抜いたように背後へと倒れば、頭としつぽの位置が逆転していく。地上ならば絶対に来ないようなこと。いや、宙に飛び上がって地面から一瞬の別れを告げれば可能だろうが、それはまさに一、二秒程度しか出来ない。



しかしこの水中ならば何秒でもその一の逆転は可能。あのような巨体であったとしても可能なのだ。

「ッ!？」

頭が深海へと落ちていくに對して長く伸び、先端が二つの矛のように分かれた尻尾が迫りくる。強固な鱗と皮によつて構成されたその尻尾。紅葉が先ほどまで叩き潰そうとしていた角とはまた違った強度を誇りながらも、しなやかさも併せ持つそれはナバルデウス亜種が下でうねるように体を動かすに合わせて左右に動いてくる。

それも躲していき、ナバルデウス亜種の頭がどう動いているのかを確認してみる。

その巨大さゆえに後ろへと倒れることで上下逆転した奴の頭はかなり深い所まで下がっている。太陽による光が届きにくくなるうという深さまで下がっている事で普通ならば見えづらいが、ギルドが支給したこの水中メガネは深海でも狩りが出来るようにするための工夫が施されているためまだ奴の顔は見える。

息を吸いこみながら落ちていったナバルデウス亜種は尻尾を振り回しながら、下半身もまた深海へと落としていきながら紅葉らを見上げてくる。

またしても水ブレスが来る、と警戒して一齐に散っていき、ナバルデウス亜種はまたしても下から海上へと突き抜ける水ブレスを撃ち出した。

螺旋を描く水流を含んだ特大のブレスはまたしてもハンター達を逃げの手を打たせ

る。これでは攻撃が出来ないと思うだろうが、しかしガンナーはナバルデウス亜種と並列して位置取り、銃撃を仕掛ける。

海上へと撃ち出され続ける水ブレスが当たらない位置からの銃撃を仕掛けるのは、優羅や越智をはじめとしたガンナーの生き残り。貫通弾や通常弾Lv3を叩き込んでナバルデウス亜種を止めにかかる。

また逃げるハンターらを追うように水ブレスを曲げていくナバルデウス亜種だが、魔狼砲〔黒鳥〕から射出される貫通弾Lv1と、越智らが撃ち出した通常弾Lv3によってナバルデウス亜種が呻き声を漏らして動きを止めてしまった。

放出されていた水ブレスが途切れ、体の痛みを振り払う。ついにあのナバルデウス亜種が怯みを見せた。自分達の攻撃が目に見える形で通用していると実感できた瞬間である。

だがそれに喜んだのもまた一瞬。

ナバルデウス亜種の胸から腹にかけて浮かんでいた青い光がゆつくりと赤へと変色し始めたのだ。海中に浮かんでいたその淡い青は怪しさを感ぜさせるような赤い光を灯らせ、ナバルデウス亜種の頭はゆつくりと引きながら息を吸いこみだす。

そうして蓄えられた力を解放するように、ナバルデウス亜種の怒号が周囲一帯へと響き渡る。飛竜らとは比べ物にならない程の耳を劈くような怒号はしかし、ハンター達の

耳を刺激はしたが硬直させる事はなかった。

それは蓮華が奏でた旋律による効果、聴覚保護【大】の恩恵にあずかっていたからだろう。咄嗟に目を閉じたがそれも数秒。本能からくる恐怖による硬直がない事にハンター達は小さく安堵の息を吐く。

しかしナバルデウス亜種が怒り状態へと移行した事実は変わらない。先ほど以上に殺気が放出されているのが肌をピリピリと痺れさせるような空気でわかる。

だがそれに怯まず昂と天羽が斬り込み、桐音もジンオウガのオーラを纏って雷光の如くナバルデウス亜種へと肉薄して小太刀を突き入れた。いよいよ強固な守りにもほころびが生まれてきているようで、彼らが斬る度に薄く血が漏れている。天羽と桐音はその血を刀身で吸わせて微細ながらも力を引き出しながら斬り続けている。

そんな彼らに続くように、瑠璃は火竜剣【炎燐】を、茉莉は王牙銃槍【火雷】で攻撃を仕掛けていく。決して彼らに遅れてはならない、と自分に言い聞かせることでナバルデウス亜種が放つ殺気に負けないようにしている。

そして茉莉は王牙銃槍【火雷】のギミックを始動させ、ナバルデウス亜種の横つ腹を竜撃砲で一気に焼き飛ばす。斬られ、突かれ続けていたその鱗は竜撃砲の衝撃によつて吹き飛び、少し大きな穴を作り上げて肉を露出させてしまった。

肉が見えたならばただ攻めるのみ。刃を突き入れ、銃撃して肉を焼きながら更に奥

へ。体内へと刃と雷の力を撃ち込み、傷を広げながら爆風で追撃。それがガンランスの攻めだ。

(……)まで広げれば……切り替えてもいいでしょうかね)

だがそこで茉莉は王牙銃槍【火雷】を一旦広げたローブへとしよう。代わりに取り出したのはブラックテンペスト改。それを構えると広げた肉へと鋭い先端を突き入れて一気に穿つ。すると覚醒によって目覚めた粘菌がそこへと巢食いはじめる。

そう、威力が高く爆破属性を兼ね備えたブラックテンペスト改によって、一気に体力を削っていく算段だ。威力の高さだけでなく爆破属性による追撃も見込めるブラックテンペスト改は攻め手としては十分な代物。

しかしランスの弱点として硬い相手とは相性が悪い。心眼があれば変わってくるが、しかしランスは弾かれると大きく隙を晒してしまうという欠点がある。それはガンランスも同じだが、こちらは硬い相手だろうと銃撃する事で攻めを止めないという側面がある。

そこで茉莉はこちらで硬い部分を削って柔らかい部分を露出させ、ブラックテンペスト改で一気に攻めるといふ作戦に出た。

「ふっー」

何度も突き入れれば、いよいよ活性化した粘菌が赤く染まっていく。そうして強く突

き入れればナバルデウス亜種の体内で爆発が起こり、その衝撃で吹き飛んだ肉片が血と共に海中へと噴き出てくる。

海へと溶けず漂っていく赤い液体とそれに混ざる柔らかく小さなその破片を視界の端で見ながら、茉莉はまだ攻撃の手を止めない。

攻撃できるならば止まるわけには、いかないのだ。

その中で攻めあぐねているのは将輝と檸檬だった。得物としては十分に強い代物を持つている二人だが、しかしやはり経験が足りない。いや、それは瑠璃と茉莉も同じだがモガの村を拠点として戦ってきた二人の場合は範囲が狭いという事もあって上級クラスの飛竜らとの戦闘経験は少ない。

海のモンスターの中でも上級なラギアクルスぐらいしか戦えていないのが欠点だ。時にモガの森に迷い込んでくるものもあるが、そちらに関しては蓮華や存命の頃の飛燕が処理していたという過去もある。

対して瑠璃と茉莉は東方を周って様々なフィールドで戦い、上級モンスターも何度も相手にしている。最近では急激に強い個体と戦わされることで死地を越え、命の危機に瀕する事で強制的に実力を磨き上げられてしまったという過去があるのでまだ戦えている状態だ。

この差が、両者の立ち回りの差として表れだしている。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

大きく頭を引きながら下から掬い上げるようにして角を振り回し、それに従って体もまた大きく動いて体を斬り続けているものらを弾き飛ばしていく。タイミングを見計らっていた将輝と檸檬はこれによってまた斬り込むタイミングを逃す。

目の前を通り過ぎていく角や背中をただ見送り、舌打ちしながら二人は武器を振るつてとりあえず、と言った具合の気刃を放った。武器や防具を新調したとしてもうまく使えなければ宝の持ち腐れだ。

雷震剣斧ヴォルトや雷迅剣ミカズチの名が泣く。

だからこそ他のハンター達に負けないよう二人も何とか斬り込もうとしているのだが、その度にナバルデウス亜種は体を震わせたり水ブレスを吐き出したりしている。

これでは足手惑いではないか!

将輝は知らず雷震剣斧ヴォルトを強く握りしめてしまう。

「将輝、また来るよ!」

「……………」

体を捻りながら上へとゆつくりと昇りながらナバルです亜種が息を吸いこみ始める。振るわれる尻尾から逃れるように二人は離れていくが、ナバルデウス亜種はすぐさまそれを撃ち出した。

今まで横へと薙ぎ払うような動きをした水ブレスは、海上から深海へと撃ち落とすような縦の動きを見せる。まるで海を両断するかのような強い水流の力は先ほどまで二人がいた場所を通過していった。

直撃は避けたものの、巻き起こる水流が背後から二人を吹き飛ばし、前転しながら体勢を崩してしまった。それを見逃さなかったのか、撃ち出した反動でノックバックしながらナバルデウス亜種の視線は転がっていく二人の姿を映していた。

背筋をはい回る芋虫のような感覚が将輝と檸檬に襲い掛かり、冷や汗を流しながら二人は天を仰ぐ。そこには体勢を立て直しながらゆつくりと向き直ってくるナバルデウス亜種の姿がある。

まずい、と思うまでもなく、ナバルデウス亜種は体をゆつくりと縮めながら力を溜め始めていた。

(こんなところで終わるわけにはいかねえ……!)

そう思いながら将輝は檸檬へと手を伸ばして彼女を引っ張り、彼女を抱えて何とかその場から離れるように泳ぎだす。だがその程度のスピードでナバルデウス亜種の射程から逃げられるわけもない。

溜めた力を解放し、頭上から一気に二人を撥ね飛ばすべく突進を仕掛けようとするナバルデウス亜種は——自分を睨み付ける冷たい視線に気づいて動きを止める。

「……………？」

海の皇を黙らせ、動きを止めさせるその視線の主。

それは静かに「……弾丸装填バレットリロード、一イ」と呟きながら、ナバルデウス亜種の下からカクトスゲヴェーアに装填した火炎弾を速射していた。突進の範囲外ギリギリのところまで静かに接近しておきながら、わざわざ自分の存在を知らせるかのような冷たい殺気を放っている彼女——優羅。

暗い色合いをしたその瞳の奥には、誰もが息を呑むような鋭い刃の如き赤い光をたたえていた。それに気づいたナバルデウス亜種は低く唸りながら優羅を睨み返す。

そんな奴に対して「……掃射ファイア」と指示を出して魔狼砲「黒鳥」から通常弾Lv2の超速射によって放たれ、ナバルデウス亜種の顔や角へと高速で着弾していく。

彼女が意識を引いてくれたおかげで将輝と檸檬は命拾いできた。それに安堵するが、しかし代わりに彼女が危険な状態に陥ってしまった。優羅をフォローするように紅葉や瑠璃が素早くナバルデウス亜種へと接近し、天羽も桐音に気づかれないように一度鞘へと天羽々斬を納刀して一気に海上に向かって上昇していく。

そうしてハンター達が集まったのを見計らって、他のガンナー達が一度モドリ玉を使つて船へと戻っていく。入れ替わるようにして負傷したハンターを届けた二人のハンターが船から飛び降りて戦場へと合流していく。



その中には狩猟笛使いもおり、蓮華の持つ狩猟笛とはまた違った音色が響き渡った。これにより攻撃防御両方の面で強化が施され、ハンター達は更に攻めていく。

(……一度戻るか)

ナバルデウス亜種の嘴みつきを避けながら優羅はそう考える。魔狼砲【黒鳥】から吐き出されるのは通常弾Lv2。何故かと言えば貫通弾Lv1を全弾撃ち切ってしまったのだ。

それだけでなく通常弾Lv3もかなり消費してしまっている。ガンナー……ボウガン使いにとつて攻撃とはすなわち弾を消費する事に他ならない。剣士タイプと違って弾がなくなればただの木偶でくと成り果てる。

しかし海中で調査なんて出来るはずもないので、一度船に戻って調査しなければならなくなる。周りを見ればガンナーの姿が次々といなくなり、越智も一度船へと戻っていったらしいのが見てとれる。

優羅は近くに寄ってきた昴へと「……一度帰還します」と告げ、それに昴が頷いて返事し、モドリ玉を取り出して緑の煙に包まれて姿を消した。

いなくなってしまうた優羅を見てまたナバルデウス亜種が唸り声を上げる。辺りを見回すように頭を振り、しかしその隙を見て紅葉が左角へと角王鎚力オスオーダーを叩き落して一気に亀裂を広げた。

その痛みにまたナバルデウス亜種が呻き声を漏らす。破片が海中に浮き、亀裂は先ほどよりも広がっている。あと何度か叩き込めばへし折れるだろうという傷だ。

「そろそろ……イっちゃったらどうなんだろう……ねっ!？」

頭を振って紅葉を振り払おうとするナバルデウス亜種の顔の近くへと向かっていった桐音が、そんな事を言いながら小太刀を握りしめる。刀身は激しく明滅する雷の力が凝縮されており、それに気づいたナバルデウス亜種が振り返るに合わせて、左角の亀裂へとその小太刀を同時に突き入れる。

刹那、激しい雷撃が左角を中心としてナバルデウス亜種の頭部へと広がっていき、シミシと音を立てて刃が深くまで左角へと突き刺さっていった。

「まだまだあッ! 吼えろ、朝風、夕風イツ!」

『——ツツ!!』

桐音の咆哮に乗じるように二つの小太刀もまた纏われた雷撃が、あたかも獣の咆哮の如く激しく炸裂した。その衝撃にたまらずナバルデウス亜種が悲鳴を上げる。当然だろう頭部に直接雷が撃ち込まれるかのような衝撃が角を通じて伝わってくるのだ。

角は硬い骨のようなもの。頭蓋骨に直結しているため、それに雷が撃ち込まれれば、強い電撃は角を伝って頭蓋骨、ひいてはその下にある脳にまで刺激が伝わっていく。雷属性を弱点としているナバルデウス亜種にとってこれはかなり厳しいダメージとなり

得る。

十分にダメージを与えられたようだが、しかしその痛みから逃れるように激しく頭を揺さぶり、それに従って左右の角が無造作に振るわれて近くに居るハンター達へと牽制ないし反撃を見せる。

それを躲しながら桐音は「来い、朝風、夕風」と指示し、それに従って小太刀は桐音の手元へと自動で帰ってくる。

「ヴォルルル……！」

離れていく小太刀とそれを手にした桐音へと睨みつけるナバルデウス亜種は、彼女へと噛みつきにかかっている。前進しながら彼女を丸呑みにするかの様に口を開き、力強く口を閉じるだけで彼女の姿はナバルデウス亜種の口内へと消えていくだろうが、しかし彼女は後ろへと下がる事でやり過ごした。

そうしながら「轟気、纏」と呟く事でテイガレックスのオーラを身に纏い、脚から気を放出する事で素早く側面へと回り込んでいく。

「せあっ！」

気合一閃。

振るわれた小太刀はテイガレックスのオーラを含んでいる事もあって、頬から右角に掛けて裂傷を刻んでいった。野性的で暴力を体現したテイガレックスのオーラは、ただ

単純に攻撃能力を底上げしていく効果を含んでいるのだ。

この一撃によって右角にも亀裂が入りだしていく。それに追撃するように遠距離から鼻が連続して気刃を放ち、左右の角の亀裂を広げていく。

角から伝わるダメージにナバルデウス亜種もいよいよ我慢がなくなってきたのか、その目つきが鋭くなり始めてきた。それどころか様子もおかしくなり始めている。奴から発せられる殺気と同時に、何かが海に漏れて出ている気がするのだ。

それを感じ取ったのは桐音だ。

(なんだいこれは? ……魔力? なぜ魔力が……?)

竜殺しとしての力を振るい、竜のオーラと言う独特の技術を行使できる桐音は力の波動に敏感だ。その竜が持つ力を扱い、殺気や属性の力や指針にも反応できるということ、魔力や気の動きも察知する事が出来る。

だからこそハンター達の中で唯一気づく事が出来たのだが、しかし彼女にとっても不可解なものだった。どうしてナバルデウス亜種から魔力が漏れて出てくるのか、と。

(古龍だから、か? ……古龍は他の竜らとは一線を画す存在。だから人が知り得る情報はその全てとは限らないんだったね)

そう考えながらも暴れるナバルデウス亜種の攻撃をやり過ぎしていく。だが不意にナバルデウス亜種の視線が海上へと向けられ、ゆっくりとその体が海上へと進んでい

く。一体どうしたのか、と思うまでもなく、ナバルデウス亜種はどんどん進んでいく。

その先に何かがあるのか、と昴は考え、そして気づいた。

「いかん、止めろ！ 船に向かっている！」

今船には優羅をはじめとしたガンナー達が弾の調合を行うために集まっているはずだ。そうでなくとも船を落とされれば帰還が難しくなってしまう。

落とされるわけにはいかない、と昴達はナバルデウス亜種の体へと斬りかかっている。しかし無情にもナバルデウス亜種はその顔を海上へと突き出し、その瞳を動かして何かを探していた。

「……………」

船上で玉を素早く調査していた優羅はナバルデウス亜種の姿に気づき顔を上げる。視線を動かしていたナバルデウス亜種は優羅に気づくと低く唸り、ゆらりと体を揺らして船へと近づいてきた。

その動きに気づいた船員たちが声を上げて「ナバルが来るぞ！ 迎撃用意イ！」と指示し、バリスタと撃龍槍の用意をする。優羅もそれに合わせて動きだし、向こうの船の様子も窺ってみる。

対面の船もまた武相の準備をしているようで、バリスタが照準を合わせていく。同時にナバルデウス亜種から逃げるように舵を取って方向転換していく。

「撃てええッ!!」

指示に従ってバリスタの弾が射出されてナバルデウス亜種へと着弾していく。だがそれでも動きは止まらず、船へと肉薄しようとしてきた。だが優羅がカクトスゲヴェーアから火炎弾を射出して迎撃する。

向こうの船からもバリスタの弾やガンナーの銃撃が襲い掛かったものの動きは止まらない。ゆつくりと口を開けて優羅に向かってきている。その動きに優羅は気づいた。(……)いつ……アタシの気に気づいたのか)

気を引くために発した殺気に含まれるシュヴァルツの気に反応したのかもしれない。それによる目標の定めによってこの船へと接近してきたのかもしれない。ならば、このまま船に留まっているわけにはいかなかった。

素早くマスクを付けてナバルデウス亜種から逃げるように優羅は海へと飛び込もうとした際、視界の端に妙なものが見えた。

(……あれは?)

それは空中で停滞している獣だった。

黒いたてがみのような長い毛が体の上半身や背中を覆い、それ以外は銀色の毛皮に包まれている体躯をした狼。離れた所からじつとその紅い目で見降ろしてくるその狼に見覚えはない。

だが少し待つてほしい。

ここは大海原。陸生の狼がこんな所にいるはずがない上に、奴は何もない空中でじつと佇んでいるのだ。それ自身が異常な光景であり、しばし優羅は呆然とそれを見つめてしまった。

それでも優羅は船から海へと飛び込むまでの間、じつとあの狼を見つめ続け、そして頭の中に響いた声にまた驚いてしまう。

《生き延びてみせなさい、白銀優羅。こんな所で終わるような体たらくを見せるようでは、貴女たちを殺しに来る龍らに喰われるだけなのだから。……そう、奴はまだ本領を發揮していないのだからね?》

男とも女とも取れないような声が、耳からではなく直接意識に語りかけてくるかのようには聞こえ、しかしはつきりと確かめる間もなく優羅は海へと沈んでいく。一度顔を上げて狼が見えた方を見てみたが、ほんの一瞬の間に消えてしまっていた。

あれは幻覚、幻聴だったのだろうかと思う暇もなく、背後から迫りくるナバルデウス亜種から逃げることにする。

その動きを視線で追い、ナバルデウス亜種の進路は船から優羅へと切り替えてくる。

だがそれでも奴の体は船に近いものになっている。それを好機と見たのだろう、船長が「撃龍槍用意ッ！」と叫んだ。それに従って船員がピッケルを持ち、左舷に付けら

れている撃龍双のスイッチへと近づいていった。ナバルデウス亜種の角の先端が左舷を掠め、その巨体が通過する事によって発生した波が船を揺らすも、「やれえええッ!!」という指示に従ってピツケルを振り下ろす。

その衝撃に従ってギミックが動き、勢いよく撃龍槍が突き出されてナバルデウス亜種の側面を貫いた。

「ヴオオオオオオオオオオオツツ!!」

硬い甲殻を強引に突き破り、体内へと沈んでいった鋼の槍がナバルデウス亜種の体を穿つその光景を、優羅は肩越しに振り返って確認する。しかも向こうの船も容赦なくバリスタの弾や、大砲の弾を撃ち出して右側にもダメージを与えていき、ナバルデウス亜種の体力を奪っていく。

隙あらば攻撃を仕掛ける、というのは悪くない作戦だ。相手は古龍なのだから容赦をする暇もない。そうしなければ殺られるのは自分達なのだから。

距離を取りながら援護の砲撃の範囲外へと逃げつつ、カクトスゲヴェーアを構えようとした優羅だったが、不意にまた声が聞こえてきた。

『…………おのれ、…………まで我が体を傷つけようとは…………ヒトの抵抗も積み重なれば驚異的なものぞな?』

「……………?」



その声に気づいて優羅が顔を上げる。それだけでなく、気のせいか圧迫するような氣迫と魔力が周囲に満ちている事にも感づいたのだ。

だが周りを見れば声に気づいた風の反応をしたものはいない。船員らはまだ銃撃を仕掛けているし、ガンナー達も次々と海に飛び込み、遠距離から攻撃を仕掛けている。

それを受けながら、ナバルデウス亜種は言葉が続けていく。

『よかろう。貴様ら……否、貴様はただでは殺さんぞ。存分に海の恐怖を感じ取つてもらおうか。そうして海の藻屑と消えるがいいぞな、かの血統の末裔よ……！』

——刹那、世界が塗り替えられる。

周囲一帯に満ちていた魔力が力を発揮し、厄海の光景を変化させていった。

ゆつくりと西へと沈みゆく太陽があつた空は一変し、満月が浮かぶ夜空へと切り替える。そして冷たい風が吹き抜ける海はざわめきだし、先ほどまで自分達が戦っていた海中にはどういふわけか円形の崖が存在していた。

その下には遺跡のようなものが存在している。まるで地上にあつた島がそのまま沈んでしまったかのような光景に、優羅だけではなく周りのハンター達が一体何が起こっているのかと驚き、戸惑っている。

そんな中で、昴達はこの世界の変化を見て一つの過去を思い出した。

かつて旧シユレイド城で戦つた黒龍ミラボレアス、そして紅龍ミラバルカンへと変化

した際もこのように風景が変化したことを。

ミラボレアスが現れた際は旧シュレイド城の空は恐怖を煽るような光景へと変化し、ミラバルカンになった際は外に火山が出現した。有り得ないような光景を作り上げただけでなく、その有り得ない存在だった火山から力を得ていたミラバルカン。

古龍と言う竜から外れた存在の力をありありと見せつけられた記憶。それが今、目の前で似たような事が起こっている。

『かつて沈んだ太古の島に、満月の力が満つる海原。今こそ見せようぞ、貴様らが海の皇と畏れし我が力……！ 来い、末裔よ！』

そう言つてナバルデウス亜種が勢いよく海中へと潜つていく。撃龍槍を受けた部分から血が噴き出しているが、それに気を止める事もなく奴は力強く尻尾を叩きつけて波を起こし、船を揺さぶりながら海中へと消えていく。

その際体を勢いよく捻る事で渦を作り出し、それは周囲にいたハンター達を巻き込んで下へと引きずりこんでいく。当然優羅もそれに引き寄せられてしまう。

(……………逃げられ、ない……………！)

一瞬抵抗しようとした優羅だが、ここはそれに逆らわずに乗る事にした。そうして海中へと潜り、円形の穴の中へと強制的に引き寄せられる。それは優羅だけでなく昴達をはじめとしたハンター達も同じであり、強い力で海中へと引きずり込まれていく。

当然こんな風に強い力で海底へと引き寄せられれば、体にかかる水圧がとんでもないことになるだろうが、これは水竜の守りによつて緩和される。だがそれでも完全と言うわけではなく、衝撃を殺しきるわけではない。

その衝撃に耐えながら彼らは数十メートルの深さを潜らされ、そうして崖を抜けた先に広がっていたのはまさしく海底遺跡と言つてもいい光景だった。

だが同時に頭の中に浮かぶ言葉は、水中闘技場だろうか。

元々は山中にあつた洞窟なのだろう。上から見れば歪な円となつているその空間を覆うのは岩肌だ。所々人の住居らしき残骸があり、古代人が作つたと思われる対竜の装備が存在している。

円形の空間の中でナバルデウス亜種は、腹から発せられる赤い光に包まれながらじつとハンター達を見据えている。その瞳は妙に怪しく光り、殺気とはまた違つた何かを感じさせている。

先ほどの奴の言葉を信じるならば、これからがナバルデウス亜種の本気を見せる時なのか。

だとすると、あの狼が言つていた事は嘘ではなかったという事になる。

(……あの狼、まさかとは思うが……伝説のアレなのか？ だとするとどうしてこんな所に……こいつがいたから？ だがこいつは七禍龍じゃないはず。伝承とは違つてい

るけど……いや、今は深くは気にしないでおう。

わからないことだらけだが考え込むのは後回しだ。

船上で増やした弾をまた使い切る勢いで戦うのみ。「……バレットリロード弾丸装填リヤン、二二」と告げて魔狼

砲【黒鳥】に貫通弾L.V.Iを装填させる。

そこで合流してきた昴と紅葉がそつと優羅へと話しかけてくる。

「あいつ……喋ったか？」

「……ええ。聞こえましたか」

「これってさ、あの時……ミラボレアスと同じ？　でも、ナバルデウスってミラボレアス

くらい高位の古龍ってわけじゃないわよね？」

「……そう考えたけど、それは人側が定めたランク付けだと考えると、そうおかしい事じゃないかもしれない。龍らのレベルで考えれば、あいつもまた古龍の中でも高位に位置する存在なのだとすると……これほどの力を振るえるんだろう」

「それが……この現象を作り上げる力、か」

人と会話できる念話程度は古龍としては容易い事だと考えて除外し、己の領域に自分の世界を映し出す力はそこの古龍でも不可能なレベルなのは間違いない。

しかしこれを保有しているながら七禍龍ではないとするならば……もしかすると七禍龍はとんでもない力を持つ化物なのだろう。実際その七禍龍が一のミラボレアスと

戦った昴達は、奴が本当に化物だと身に染みて思い知っている。

左目を抉られようとも、神倉月や朝陽の力を受けても倒れず、ミラバルカンとなれば火山弾の流星を降らせてくるという龍にあるまじき力を振るってきた。

それが力をつけた古龍の高みの果てなのだとすれば、このナバルデウス亜種はそれに近いままで位置する古龍だと推測できる。そして今この場には、あの大战の際の大火力だった「彼女」はいない。

だからこそ、今の自分達だけでこの化物に勝たなければならぬ。そうしなければ全滅するだけでなく、タンジアの港も危機に晒される。それは避けなければならぬ。

ぐつと体を引いて力を溜め、ナバルデウス亜種が力を溜めていく。そうして奴は、

『さあ、始めようぞな。この私を討つというならば、恐れずしてかかって来い！』

数度体を捻って回転して高まった力を解き放つ。それは複数の渦を発生させて様々な方向から昴達へと襲い掛かっていった。

それが深海に生まれた海底遺跡を舞台とした、ナバルデウス亜種との決戦の狼煙となった。

## 68 話

先ほどまで昼だったというのに、何故空には満月が浮かぶ夜となっているのだろうか、と船員らは戸惑っていた。それだけではなく海の様子もおかしくなっており、恐怖を感じ始めている者らが増えてきている。

しかし船長は冷静に支持を出し、ナバルデウス亜種とハンター達が潜っていた地点から離れるように舵を取った。そうして彼は何気なく満月を見上げる。

海を照らすその月はどこか怪しい雰囲気を感じさせるような光に思えた。海を往く際に見上げる月と何ら変わらないように思えるのだが、しかし何かが違うような気がするのだ。

思わず、

「…………いやな月だぜ。胸騒ぎがしやがる…………」

と呟いてしまう程に。

そんな彼らを見下ろすのが、先ほど消えたはずのあの狼だった。

(封鎖結界…………か。満月に海底遺跡とは、流石はナバルデウスといったところね)

うつすらと笑みを浮かべながら狼——魔獣にして災禍獣と称されるヴァナルガンドもまた満月を見上げる。船長が感じた胸騒ぎの意味をその獣は知っている。

(月、それも満月は一種の力を持つとされる。月の光に含まれる力を受けて力を増す存在の一つが海の皇、ナバルデウス。くすくす、優羅に草薙、天羽々斬を前にいよいよ遊んでいられなくなったというわけか)

どこか楽しい眼を細めて満月を見つめ、そして戦いが行われている海中を見つめる。

魔獣は決して手を出さない。

あくまでも魔獣の役目はその戦いを伝え、見届けるだけ。しかし七禍龍に含まれないナバルデウス亜種の戦場に現れた。これは災禍獣のルールに反している。

災禍獣ヴァナルガンドのルールは七禍龍の戦いを伝え、観戦する事なのだから。

これは、魔獣の気まぐれだ。

魔獣が個人的に見届けたと思ったからこそ、こうして姿を見せただけに過ぎない。それだけこの戦いが意味ある事だという事に他ならない。

……とはいえ、こうして姿を見せたという事実は恐らく彼女らにも知られた事だろうが、今更だ。

もう、ゲームはとつくに始まっているのだから。

(さあ、見せてもらいましょうか。今の戦力でどこまで海の皇に喰らいつけるのか) そうして、魔獣はその血のように紅い瞳を細めて「——せいぜい、頑張りなさい」と小さく呟いた。

その渦は左右と前方から襲い掛かってきた。

ナバルデウス亜種が集めた水の力を操作する事で作られたそれは、明らかに魔法に近いもので生み出され、解き放たれている。昴達は何とかそれから逃げることに成功するも、通過していった渦は弧を描き、大きく迂回しながら戻ってくる。

渦から逃れたとしても、ナバルデウス亜種はゆらりと体をくねらせながら泳ぎだし、爛々と輝く瞳を優羅へと向けている。

いや、それだけではない。

桐音や天羽にも同じような視線を向けていた。

『竜殺し……いや、それは龍殺し、ぞな？ 識っているぞ、私はそれを識っている……！』  
先ほどから受け続けていたが、貴様はかの血族ぞな……!?!』

「……さて、どうだろうね？ 喋っている事に驚きだし言葉を交わせるようになったのは何よりだが、かといって答える義理なんてこつちにやないさ。……水気、纏」

今度はガノトトスの気を纏った桐音。これにより今まで以上の速さで水中を泳ぎ、一



氣にナバルデウス亜種へと接近する。そうして側面へと回り込めば轟氣を残した小太刀を振るつて頬や右角を切り払っていく。

反対側へと回り込んだのは天羽々斬を手にする天羽。刀身には既に赤と青の紋様が浮かび上がっており、最初の頃に比べるとかなり雰囲氣が変わつたように思える。

「……そろそろ目を覚ませるか？ 斬るべき相手は、目の前にいるよ」

囁くような声で天羽々斬へと語りかけ、己の氣を纏わせて更にやる氣を引き出させてやる。そうすれば、寝坊気味なこの刀は本来の力を若干漏らして刀身へと映し出す。それが、この赤い紋様であり、ナバルデウス亜種の血を受けて青も混ざりだした。

『やはりその刀は……！』

瞳が動いて天羽々斬を睨むが、そんな驚きの声など氣にも留めずに天羽は高まつた龍殺しの力を含んだ氣刃を放つ。それは撃龍槍を受けた傷を切り裂き、更なる出血を促していく。

また古龍種でもあるために、龍殺しの力はかなり有効だ。天羽々斬の力を引き出してゐるならば、これはナバルデウス亜種にとつて脅威に感じられる武器。故にナバルデウス亜種は一度二人から距離を取るように背後へと下がった。

尻尾を巧みに使つてバランスを取りながら数メートルという距離を作り上げつつ、ナバルデウス亜種は大きく息を吸いこみだす。

すると強い吸引力の力が働いてナバルデウス亜種を斬りに行っていた桐音達は、それに引つ張られるようにしてナバルデウス亜種へと近づけられてしまう。

「ちい……、ん……」

何とか逃げようとする桐音だが、しかしナバルデウス亜種の吸い込む力が強いために逃げられない。天羽も同じなようで苦い顔をしながら何とか範囲外へと逃げようとしている。

そうした中でナバルデウス亜種の溜めた力がいよいよ解放されようとした際、二人は凶らずもお互いの視線を交差させていた。

その一瞬だけ、二人は通じ合った。

桐音は足に、天羽は左手に気を集め、それを相手へと撃ち出したのだ。それらはお互いの体に着弾して強い力を以ってして吹き飛ばす。

刹那、二人がいたところを水ブレスが通過していった。今まで撃ち出されたものより細いのは恐らく完全に溜めきっていない為だろう。ナバルデウス亜種は二人を始末するために全力ではなくそれなりの力での水ブレスを撃ち出したのだ。

しかし直撃は避けられた。お互いの気弾によるダメージはあるが、水ブレスよりはマシだろう。桐音が装備しているガンキンSシリーズは水耐性が最悪だ。それを港で食べたアイルーが作った猫飯の効果でプラスに働きかけているとはいえ、あれに対しては

冷や汗をかかざるを得ない。ちなみにラヴァUシリーズをつけている紅葉もまた猫飯を食べることで水耐性をプラスにしている。

「ふう……何とかなつたか。ありがとさん！」

「……………」

向こうで体勢を立て直している天羽へと手を挙げながら礼を言うと、天羽も軽く手を挙げて応える。

そうしている間に隙を突いて、瑠璃と茉莉がナバルデウス亜種の側面へと回り込んでいった。火竜剣【炎燐】をダブルセイバー形態にし、傷ついている部分を回転させる事で連続して斬つていく瑠璃。それに対し、ブラックテンペスト改を突き入れることで純粋に傷を抉りながら粘菌を注入する茉莉。

何度も突き入れることによって粘菌が活性化していき、またしてもナバルデウス亜種の体内で爆発を起こす。それでは終わらずまだまだ突き続け、また粘菌を活性化させていく。

それを見た瑠璃は火竜剣【炎燐】ではなくディオスソード改で粘菌を注入する事に切り替える。さつきから見た限りでは火属性があまり通用していないように思えたのだ。

切れ味や火力としてはディオスソード改が劣るが、爆破属性による追加のダメージが見込める。肉を吹き飛ばされる痛みは例えナバルデウス亜種であったとしても効くだ

ろう。

彼女らに負けていられない、とばかりに将輝と檸檬も斬りかかりに行く。雷震劍斧ヴォルトを斧モードにし、力強く振り回して傷を広げていく。斧のリーチと重量による一撃は綻びがある鱗や皮を切り裂いて破壊し、そうして広げた傷を劍モードにして刺し貫く。

それに続けてギミックを始動させる事により、属性解放突きをおみまいしてやる。それに続くようにして雷迅劍ミカズチを振るって檸檬がダメージを与えていく。威力の低い片手剣だが、内包する雷属性と手数によつてダメージを積み重ねる。

だが、

『小虫が調子に乗るでないわ!』

そう叫んだナバルデウス亜種が勢いをつけて背後へと下がりつつ力を一部開放して、二つの渦を作り上げて瑠璃達へとぶつけていく。側面から回り込んでくるように迫ってきた渦は彼女らを巻き込んで吹き飛ばし、体勢を崩すだけでなく息を吸いこんで水ブレスの追い打ちをかけようとした。

しかしいつの間にか紅葉が下から急接近し、顎をかちあげて強引に口を閉じさせる。追撃として優羅らが銃撃を仕掛けてナバルデウス亜種を怯ませようとする。しかしナバルデウス亜種は少し上を向くだけに留まり、口も完全には閉じられずに水ブレスを撃

ち出した。

その結果、海底遺跡の壁に着弾して岩を抉り飛ばす。

「……………は……………!?!」

それは落石となり、ハンター達へと降り注ぐ。

水ブレスが直撃しなかったからといって安心できる場所じゃない。先ほどまでならばなんともなかったが、こうして洞窟が存在する事によってこのような状況となる。

舌打ちしてゆつくりと沈んでいく岩を躲していく瑠璃らは何とか切り抜け、もう一度ナバルデウス亜種へと近づこうとする。

紅葉の一撃で小さく閉じられた口は再び開かれ、視線を落として角王鎚カオスオーダーを握りしめる紅葉を睨み、顔全体で叩き落してやる。

「っ、は……………!」

角王鎚カオスオーダーを盾に何とか耐えようとするが、その強固な頭部全体での叩き落としては、人にとつては強固なハンマーで殴られるに等しい。深海へと落とされていく紅葉へと振り返りながら息を吸い、銃撃してくる優羅も視界に入れながらまた細い水ブレスを撃ち出す。

「……………桜ッ! ……………っ、く……………!」

予備動作を見て素早く回避行動をとる優羅は、紅葉の方も気にした。頭上を通り過ぎ

ていく水ブレスを感じながら肩越しに振り返ってみる。だがナバルデウス亜種の攻撃は終わっていない。

ぐるり、と体を捻りながら体全体で体当たりを仕掛けるだけでなく、尻尾を巧みに使つて体のバランスを取つたかと思うと、急激にスピードを上げて突進を仕掛けていった。

「うわっ!？」

突然の突進に対応できず撥ね飛ばされたガンナーが一人。ガンナーの一人、越智も咄嗟の事に驚きはしたが、何とか直撃を避ける事が出来た。しかしそのヒレのような手が足に当たり、呻き声を上げて転がっていく。

そうして数人のハンターを撥ね飛ばしたナバルデウス亜種は、そのまま洞窟の壁に向かつて昇つていき、その硬い頭をぶつけて壁を揺さぶる。すると水ブレスを受けて亀裂が入っていた壁がその衝撃を受けて崩れ、それを体を使って吹き飛ばしてハンター達へと落としていく。

またしても落とされた岩にハンター達は混乱状態に陥る。そんな中でナバルデウス亜種は動き、海上に向かつて急速上昇。そうしつっ息を吸いこんで力を溜め、そうして十分に上つた後に反転。

下界で蠢く小さき存在らを見回すと、口を開いて誰にも邪魔されずに水ブレスを撃ち

出した。

今まで以上に強く激しく、そして太い水ブレスは海中を切り裂くようにハンター達へと襲い掛かる。

それはまさしく空から降る竜の怒り。

数十メートルも離れた所から悠々と攻撃できるといふ有利な状況に、ハンター達は歯噛みするしかない。

そんな中で水ブレスを避けて昇っていくのは戦闘意欲満載な桐音と天羽だった。そんな彼女らを近づけないように、今度は横へと薙ぎ払うように水ブレスを撃ち出す。それは壁にも直撃して亀裂を与えながらも、ハンター達へと更なる追撃を与えることとなる。

「ちっ、めんどうな……い！」

迫りくる水ブレスを前へと逃げることで避ける。だがまたナバルデウス亜種はそんな二人を薙ぐように、もう一度水ブレスを撃ち出して撃ち落とそうとする。その際、顔を円のように動かして少しずつ円周を広げるように範囲を広げていく工夫もしてきた。

こうまでされれば避けようがない。舌打ちして防御体勢を取る事で何とか耐えようとした。蓮華が奏でた旋律による水耐性強化〔大〕による恩恵もあるが、それでも防御しなければ死ぬ可能性があるものだった。

「が、く……ぶ……!?」

せつかく近づいた距離も水ブレスに押しやられる事で突き放されていく。

それでは終わらない。海上に上がった事で空に浮かぶ満月の光がナバルデウス亜種の背中へと優しく降り注ぐ。その力を受けて瞳が妖しく光りだし、そうしてまた息を吸いこんで水ブレスを撃ち出す。

今度は太い水ブレスではなく少し太い程度のもの。だがその外周には螺旋状の水流が発生しており、直撃を躲したとしても水流の力が体に襲い掛かるものになっていた。一方的だ。

深海に落としておきながら、ナバルデウス亜種は上から水ブレスによって一方的に攻撃を続けている。それは狩られる側の戦いではない。奴が、ハンター達を嬲るように狩る光景だった。

「ひ、卑怯よ……!」

『卑怯? これはただの戦いではない——狩りだ。真剣勝負、などという言葉など似合わん、力と力のぶつかり合いぞな。そこにあるのはただ強いか弱いかの差のみよ。ルー無用故に、卑怯などという言葉なぞ存在せぬ! このまま、散るがよい!』

瑠璃の言葉にナバルデウス亜種が冷淡に告げる。

奴にとってハンター達など小さくも弱い存在だろうが、しかし小さくも確実な脅威を



取り除くためには情け容赦ない。あれらを抹殺するためには手段など選んでいられないのだ。

しかしハンター達はまだ抵抗する。

やられたメンツを回復させるために蓮華がイントロペリアルを振って緑、緑、紫、水と旋律を奏でた。これが狩猟笛使いの支援。特に蓮華はその支援が素早く、そして気づかれずに行つてしまう。

桐音曰く、「あいつはこういう事に向いているハンターなのさ。普通の支援もいいけど、ここぞという時には既に動いているつてのが多いんだよね」との事。

(……………ナバルを落とすにはやはり彼女が鍵を握つていそうですか。さて、どうしましようね)

ざつと視線を巡らせた蓮華は優羅を見つけ出し、少し考えた後に旋律を奏でながら彼女へと近づいていった。ローブから魔狼砲「黒鳥」の銃口を覗かせている優羅は何とか攻撃をやり過ぎしながらも、接近を試みているようだがが上手くはいっていない。

そんな彼女に近づいた蓮華に気づいたのか、優羅が肩越しに振り返つて視線だけで「何か用か？」と問う。

「あのナバル、あなたを意識しているかのように見えますが、いかに？」

「……………アタシだけではないようだが」

「確かに。この厄海の変化といい、あの暴れようといい……色々やつかないことになっていますが、あの二人も意識しているのも間違いないようで」

「……………で、何が言いたい?」

何か聴こえた気がするが、優羅はスルーする事にしたようで蓮華の目的を問う。

蓮華もいつもの調子が混ざってしまった事に気づいたらしく、真面目になるために一問置いて話を続けていく。

「あなたは接近戦は?」

「……………一応可能だけど?」

「では私に少々お付き合いをしていただけませんか? あのナバルに一矢報いようかと」

「……………策がある?」

「そのためには綱渡りをするようになりますが……大丈夫です?」

「……………ま、いいさ。アタシとしてもそろそろ下ろしたいところだったし、乗ってやるよ。何すればいい?」

カクトスゲヴェアをローブへと戻し、代わりに取り出したのは漆黒の小太刀だった。昔から持っていた夜鳥【小羽】を強化させた一品、G級ヤタガラスの素材で作上げた大鴉【宵月】と銘打たれた片手剣である。

それを手に、優羅と蓮華はナバルデウス亜種へと向かつて昇っていく。

当然ナバルデウス亜種はそうはさせまいと水ブレスを撃ち出すが、二人は左右に分かれてそれを避ける。

そんな二人の動きを昴と紅葉は見つめ、少し考えて二人もまた後を追っていく事にした。

そうしてナバルデウス亜種へと接近しようとする四人だが、ナバルデウス亜種の視線は優羅に向けられている。当然だろう、奴にとつて脅威なのは蓮華ではなく、シユヴァルツの血統である優羅だ。

『来るか、血統の女』

「……………」

その瞳に映る優羅の顔は相変わらずの無表情。

昔と何ら変わらない凜々しくも冷たい印象を持つ狩人<sup>ハンター</sup>としての顔。だがその瞳の奥には確かな戦意と殺意が含まれているのだ。

それをナバルデウス亜種は小さく感じ取っているのだろう、また息を吸いこんで彼女に向けて水ブレスを撃ち出す。

優れた視力によつて避ける道を見出し、優羅は紙一重でそれを躲すのだが水ブレスに含まれる強い水流までは躲せない。僅かに体を持つていかれそうになるのを堪え、更に

ナバルデウス亜種へと接近。

だが水ブレスはまた壁を削り取り、破壊し、落石を産む。が、ここまで昇ってくれば落石が発生する前に上へと昇っていくことになる。その接近の速さにナバルデウス亜種は小さく苦い声を漏らす。

そんなナバルデウス亜種の顔へと接近すると、構えた大鴉【宵月】に己の気を纏わせてたてがみを斬り裂きに行く。ヤタガラスの鋭い羽を用いて作られたその小太刀は強い殺傷力を持つばかりか、彼女の気を纏う事で更に高まっている。

それによって斬られた事でナバルデウス亜種は優羅へと振り返らざるを得ない。それが、蓮華の狙いだった。

いつの間にもそこまで接近していたのだろう。彼女はナバルデウス亜種の角の上へと回り込んでいた。その手にはマジアリアⅡロッドが握られており、薄く鋭い気を纏って怪しく光っている。

希少な虫素材を使用して作られたそれはメルヘンチックな見た目とは裏腹に、それは強い切れ味と龍属性を保有しているのが特徴だ。その強い龍属性に反応し、息を呑んだ時はもう遅い。

完全に気配を消していた蓮華が構えたマジアリアⅡロッドを勢いよく振り下ろした刹那、

「——龍魂、粉碎」

気の抜けるような音を奏でるマギアリアⅡロッドの一撃が、ナバルデウス亜種の左角に直撃。衝撃と共に発揮される龍属性がナバルデウス亜種の頭部へと伝え、たまらず悲鳴を上げてしまった。

続けざまに旋律を奏でて属性攻撃力強化を発揮させると、落ちていくナバルデウス亜種の頭へとまた振り下ろす。

マギアリアⅡロッドの威力に加え、高い龍属性の後押しもあつてか、左角の傷は更に広がるばかり。しかも龍属性は古龍という事もあつてかナバルデウス亜種にとつては弱点。頭から伝わるダメージは着実にナバルデウス亜種を蝕んでいる。

『おのれ……貴様、何者だ……!!? この私がこれほど近づかれても気づかない、などと……!』

「……はて、何か聴こえる気がするけど気のせいでしょうね」

『調子に……ん、ぐお……ッ!』

「はっ!」

そこで合流した紅葉が角王鎚カオスオーダーを叩き落す事で更なる亀裂を生み出す。その一撃に叫んだ隙にもう一撃。その際の角王鎚カオスオーダーには、高めた風の渦を纏わせる事で威力を底上げし、渾身の一撃として叩き落とす。

瞬間、今まで耐えてきたその強固な角は最期の悲鳴を上げて根本から砕け散る。頭部から別れを告げた左角は無情にも海中へと漂うように離れていき、そしてナバルデウス亜種の甲高い悲鳴が響き渡る事となった。

「やったな、あいつら。これで一矢報いたつてわけだ。……それをあたいが成し遂げられなかったのが口惜しいねえ」

どこか残念そうにしながらも桐音はナバルデウス亜種の左角が折れた事を喜ぶ。

水ブレスの直撃を受けたが彼女は何とか命を繋いでいるようだ。猫飯や蓮華の支援がなければ、水耐性最悪なガンキンSシリーズを身に着けている彼女の命は散っていただろう。

(さてさて、落ちてくるナバル亜種だが……今の一件で更に攻撃は激しくなりそうだ)

朝風と夕風を握りしめてゆつくりと落ちていくナバルデウス亜種を見上げていく。離れた所には天羽々斬を手に、ポーチから取り出した回復薬グレートから伸びるチューブをマスクに付けて中身を吸い取って飲む天羽の姿がある。

別の方を見れば同じようにナバルデウス亜種を見上げている瑠璃らの姿と、将輝らの姿がいる。彼らの目は死んでいない。マスクと水中メガネによって見えはしないが、恐らく死んではないだろう。

これからが反撃の時だ。

落ちてくるナバルデウス亜種に向かって桐音は改めて泳ぎだして向かっていく。ガノトトスのオーラである水気もまだ桐音の全身に纏われたままであり、泳ぐスピードは高い。程なくしてナバルデウス亜種へと肉薄する事が出来るだろう。

『おのれ……おのれ、おのれおのれおのれえ……ッ！ この私に一矢報いたつもりか人間……ッ！ ただのヒトがいい気に——』

「お生憎さま、あたしは人間のようで、ただの人間じゃなかったりするんだよね？」

不敵に笑ってみせる紅葉の内部からうっすらと滲み出てくる一つの気。

己の中でスイツチをゆっくりと切り替えていき、油断によつてこのような状態になつてしまったナバルデウス亜種を更に叩くための力を呼び起こす。

『な、なんだ……それは……!?』

それは角竜ディアブロスの因子から引き出された力。

砂漠の暴君と称されしディアブロスの凄まじき力は紅葉に表れ、昔から人間にしては尋常じゃない怪力を見せることとなつていた。岩を砕き、並みの武器を破壊し、果ては竜の鱗ですら殴り、蹴り砕く。

リミッターを外す事で繁殖期の黒いディアブロスの如く更に力を増そうものならば、ほとんど彼女を止められない程になるが、最近はそのまでの暴走は見せてはいな

かった。

しかしナバルデウス亜種相手ならば、ここで一気に流れを掴むために彼女は解放する事を躊躇わない。ぎゅつと角王鎚カオスオーダーの柄を握りしめれば、彼女の闘気に呼応するように角王鎚カオスオーダーに生える二つの角からオーラが伸びる。

いや、これは彼女が纏わせた気の具現化だ。角王鎚カオスオーダーの素材もまたディアブロスであり（一部はモノブロス）、彼女の保有する因子と相性がいい。彼女がこれを愛用する理由の一つだ。

だからこそ、彼女の闘気によってこのような現象が起こり得る。

「——呐喊ッ!!」

そうして高められた力はナバルデウス亜種の右角の根元へと振り下ろされ、奴の頭に凄まじい衝撃を伝えた。桐音によって傷つけられた傷も大きく広がるだけでなく、その意識を揺さぶって気を抜けさせる。

大型の古龍と言えども生物である事には間違いない、脳を揺さぶられる事で意識も飛ぶ。

そのままその巨体は再び深海へと沈んでいく。

そんなナバルデウス亜種の側面から優羅がロープから覗かせる銃口から貫通弾Lv1を超速射し、体を撃ち貫いていく。そうしながらまた大鴉【宵月】をしまつてカクト



スゲヴェーアを取り出し、火炎弾を装填して撃ち続けながらナバルデウス亜種に並行するように下りていく。

紅葉はというと最大クラスの一撃を放った反動で動けなかったが、そこを昂に体を引かれることで落ちていくナバルデウス亜種に撥ね飛ばされる事はなかった。長年連れ添っているからこそ、昂はあれの反動が強い事は察知していた。だからこそいつでも彼女を補佐できるように近くにいたようだ。

「相変わらずいい一撃だな」

「……ま、その分けっこう疲れるんだけどね。久々にやると腕にくるものがあるわ」

「はは、だがそのおかげで流れがきそうだ。……行けるか？」

「大丈夫。まだやれるわ」

軽く手を振って紅葉は不敵に笑ってみせる。とはいえマスクのせいで顔は見えないが、雰囲気的に彼女はいつものような笑みを見せているだろう。

そして二人はナバルデウス亜種と共に落ちていく。その際に体の側面から攻撃を仕掛けて少しでも傷を増やす事を忘れない。蓮華もマガリアⅡロッドを振るって背中  
の皮へと何度も叩きながら落ちている。

下を見れば、ガンナーの一人が海底遺跡の一角にあつたバリスタに張り付いている。どうやら再現された海底遺跡の対龍装備を見つけたらしく、ご丁寧  
にバリスタの弾も転

がっていたらしい。

照準を合わせると、落ちていくナバルデウス亜種の首や体に向けて射出。水中であろうとも突き進んだ弾は狙い通りに着弾する。といつても推進力さえあればあの体はでかいのでしかないのが狙いを外すようなことはないのだが。

バリスタの弾を皮切りに遺跡にいたハンター達が一気にナバルデウス亜種へと向かつていき、奴を仕留めるべく攻撃を仕掛ける。意識を失っている今こそが一番の好機である事は明白。これを逃すわけにはいかなかった。

桐音と天羽がまたしても先陣切つて斬りかかり、続けて瑠璃がディオスソード改を、井出がネオラギアブレイドを構えて体に肉薄していく。少し遅れて茉莉が背中へと接近して胸へと潜り込んで柔らかい部分を狙つて突きだし、続くようにして将輝と檸檬も斬りかかつていく。

他にもガンナーや狩猟笛使いが合流し、まさに全軍挙げての総攻撃だった。

技術を振るつてというよりも、今持てる力を出し切つての力押し。それぞれの火力に物を言わせてナバルデウス亜種に出血を強いている戦局だった。

「……ふうっ！」

意識を集中させてディオスソード改に纏わせた気を利用して体を斬り裂く。

そうだ、瑠璃にとってこの技術こそが一つの戦術。

意識を集中させ、己の力を研ぎ澄まさせ、一つの刃となって斬る。クロムが教え、導き、瑠璃が高めた『矛』の力だ。

まだまだ研磨されつつある刃だが、確かに彼女は鋭い剣となりつつある。

見ろ、ナバルデウス亜種の胸や首を。

彼女の振るった刃は確かにその体を斬り裂き、出血させている。強固な鱗も皮も瑠璃が振るったディオスソード改によって斬られているのだ。

「——ッ！」

錬気を高め、解放し、鋭さを増したディオスソード改の刃だけでなく、活性化した粘菌によって傷口を爆発させて更なる傷を生み出す。だがそれは付属の力でしかない。今ここで振るわれている彼女の技術は、確かに実を結んでいる。

彼女もまた戦力の一つとして機能しているのだ。

それを近くで銃撃している優羅が目撃している。

(……随分と、成長したな。あの小生意気な子供が、ここまで……ね。時間は流れるものね)

頭の中に少しぶすつとしたような瑠璃の顔が思い出される。血統の影響で僅かにノイズが走っているが、しかしそれでも思い出されるあの短い時間の中で見た瑠璃の顔。

あの時はまだまだ未熟だったのに今ではこうして共に戦えるまでに成長している。

ちらりと視線を横に移せば、ブラックテンペスト改を突き出しながらゆつくりとナバルデウス亜種に並行するように落ちていく茉莉の姿も見える。

瑠璃が研磨される『矛』ならば、彼女は堅牢なる『盾』。

桔梗から教わった守るための盾であると同時に、防御しつつ反撃できる盾でもある技術を磨きつつあるハンター。生憎と今の彼女にこのような巨体を相手にその技術を発揮する事は出来ないのです、その力を見せる事はないが。

しかし彼女もまたここで戦えるだけの力を磨きあげた事は間違いない。彼女もまた成長しているのだという事を感じさせる。

(……しかし未熟だと卑下する、と言っていたか。今の實力でも十分だというのに、欲深い。でも何となくわかるのは……アタシもそうだったから、か)

かつて自分も力を追いつ求めた事があるな、と優羅は思い返してしまふ。とはいえ彼女の場合は事情が違っていたからなのだが、と考えつつも、それを思考の端へと追いやりながらカクトスゲヴェアに弾を装填する。

撃ち抜く。

それが優羅の戦術の一つ。

ハンターとして一番の力であり、優羅の力の二極の片割れ。

外さず、高速で、弱点を撃ち抜く。それがガンナーとしての優羅の技術。通常弾Lv

3は撃てない。跳弾によって肉薄しているハンター達へと影響を与えかねない。だから選択するのは通常弾Lv2。

それを通用しやすい腹へと向けて撃ち出す。若干目に力を込めればナバルデウス亜種の弱点部位が視えている彼女にとって、弱点に向かって狙撃する事は何度も繰り返した行為だ。

そして同時に、その目は相手の生命力すらも視通す。

(……体力がかなり消耗しているようだけど、それでも全体の半分ではない。やっぱり体力バカというわけだ。……これでは消耗戦になりかねない)

戦いが始まってからもう一時間以上は経過している。

そしてここは水中だ。人にとっては全く異なる世界であり、ここで長く戦い続けることは困難だ。

何せ泳ぎ続けなければならぬため、思った以上に体力が持っていかれてしまう。つまり、これ以上戦いを長引かせる事になれば、戦闘続行不能となってじり貧になってしまうという事になる。

泳ぐ力がなくなれば武器を振るう力もなくなるといふ事に繋がりが、最早ナバルデウス亜種に翻られるだけになってしまうのだから。

(……奴が気にしていたのはシュヴァルツの末裔であるアタシだけじゃない。確か……

あいつとあいつも気にしていたな)

優羅の視線が桐音と天羽へと向けられる。

桐音の力に關しては優羅も確かに気にはなっていた。瑠璃と茉莉が以前組んでいたらしい草薙桐音といったか、と優羅は思い出してみる。

特殊な力を振るうハンターだとも言っていたな、と思い出し、確かにあれは特殊だと思わざるを得ない。それをナバルデウス亜種は危惧していたわけだ。

そしてもう一つ。

優羅の目に映し出されるのは、大きな膜に隠されているような印象を感じさせるような一振りの刀。膜の奥には何かの龍らしきものが視える気がするが、大部分は影になっ  
ていて完全には視えない。

しかしあれこそが強い龍殺しの根源となっている代物だろう。

完全に解き放たれればまさしく最高級の龍殺しの武器となり得る得物だと見てとれる。

(……あの二人の攻撃が大きく通用すれば一気に仕留められるだろうけど、そう上手くいくはずもない。まだ他に使える物は——)

そうして周りを見回してみる。使える物は全て使っていかなければ勝てないだろう相手だからこそ、小さな物でも見逃さないようにし、そしてある一点を見た。



!!

「この……世界？」

紅葉がその言葉の意味に疑問を感じた刹那、ナバルデウス亜種の瞳が妖しく光り、その体から魔力が放出されて渦を作り上げる。その数、四。左右の前後へと解き放たれた渦はナバルデウス亜種に肉薄していた者らを引きはがし、絡め取って強い回転の力で苦痛を与えんとうねりをあげて海中を往く。

そんな中で胸や腹を斬っていた茉莉達へは、数メートル後ろに下がりながら尻尾を振り上げて弾き飛ばそうとしてきた。しかしそうして動いているナバルデウス亜種の体からは所々血が流れて海へと溶けていく。

奴もまたこうして目に見える形で傷ついているのだ。

焦っているのがわかるほどに、奴は追い込まれている。ならばこの流れを傾かせるわけにはいかない。

「牙を伸ばせ、喰らいつけ」

『……………VRRrrrッ！』

それは天羽もわかっているようで、天羽々斬を構えて呼びかければ、呼応するようになさく刀身から何かの鳴き声が聞こえた気がした。それを聞いたのは天羽ただ一人であり、他のハンター達には届かない程にまで小さな声は獣のようでもあり、竜を喰らう



竜のようでもある。

天羽々斬に纏われている彼女の気が刀身に浮き出た力と呼応し、彼女の言葉の通り牙のように第二の刃となって伸びる。

「翼を広げろ」

『VRRRRraaaaッッ!!』

柄から新たにオーラが伸び、まるで翼のように具現化するのだが一見すればまた二つの刃が伸びているように見える。しかし先端からは粒子が流れて海中に消えていく。

そんな天羽々斬を振るえば、凄まじく鋭い剣閃を放ってナバルデウス亜種の体を斬り裂く。初撃を当てた後に天羽は一気に距離を詰め、その体を斬りに行く。

今まであまり通らなかつた刃は、いよいよ本領を發揮したかのように皮や鱗もろとも斬り裂き、強い龍属性も相まってナバルデウス亜種に対して高い威力を發揮した。

続けざまに斬り返し、薙ぎと繋げつつ一度距離を取ると、胸から腹、左のヒレをも巻き込むように体を捻りながらの回転斬りを放ってやる。ぱっくりと開いたその傷が今の一撃の鋭さを物語っていた。

彼女がそうして天羽々斬を振るうたびに第二の刃や翼のように広げられたオーラから粒子が吹き出し、血を吸うごとに歓喜するように明滅している。その様子を見て優羅は恐らくあれは切れ味を高めるブースターだろう、と推測した。

普通じゃない剣だ、と見てとれる光景であり、色々な意味で警戒せざるを得ない得物だろう。そしてそれを受けるナバルデウス亜種もまた呻きながら天羽を睨み付けている。

そんな彼女にUターンしてきた渦が接近するが、それに気づいていたらしく足から気を放出させて一気に背後へと下がった。

そうして躲した彼女に代わり、今度は井出が斬りかかっていく。握りしめたネオラギアブレイドは凄まじい雷の力を発揮しており、振るわれた刃はナバルデウス亜種のたてがみのような髭を斬り裂いて下にある首にまで届いている。

だがナバルデウス亜種は大きく首を振って井出をはじめとするハンター達を撥ね飛ばし、更に力を溜めて体全体でぶつかりに行く。だがそれまでの流れはラギアクルスなどのモンスターに比べれば遅い。

当然だろう、体が巨大なために動きはどうしても大ぶりになってしまふ。しかし逆に巨大であるが故に範囲が広く、威力が馬鹿にならない。予備動作が見え見えではあるが、それでも躲せない事があるのが巨大なモンスターの攻撃というものだ。

実際井出は首を振るわれた際に僅かに掠めてしまい、その隙を突かれて体当たりを受けてしまっている。だがそれをネオラギアブレイドで防御したが、衝撃がネオラギアブレイドを通じて体にかかり呻いてしまっている。

そうして邪魔者を動けなくすれば、奴にとつてのターゲットである優羅に向かつて突進を仕掛ける。尻尾でバランスを取って加速つけての突進は真つ直ぐに優羅へと迫り、しかし狙われている事に気づいた彼女が素早く逃げた事で直撃は避ける。

その際、離れた所にいた昴へと指でサインを出し、それを受けて昴は一点に向かつて泳いでいく。続くように紅葉がナバルデウス亜種へと近づき、角王鎚力オスオーダーを構えたが振り返りざまにナバルデウス亜種が水ブレスを撃ち出してくる。

細く、水流の強い水ブレスによつて紅葉は接近のタイミングを失った。優羅も何とか躲しはしたが、手にしていたカクトスゲヴェアが水流に飲み込まれて銃口が僅かに軌みあげて若干曲がってしまった。

それに舌打ちし、カクトスゲヴェアをしまつて代わりに魔狼砲〔黒鳥〕を取り出す。強固な武器だとしても銃口が数センチ……いや、数ミリも曲がれば正確な狙撃は出来ない。あるいは弾が暴発してしまう可能性だつてあり得る。そうなれば戦いどころではないので即決で切り替える判断を下した。

そして装填する弾丸も決戦スタイルである貫通弾Lv3を選択。問答無用での銃撃を以つてしてその生命力を削り取るようだ。その殺意を感じ取つたのだろう、ナバルデウス亜種の瞳が細まっていく。

二人に並ぶようにして桐音もやってくると、小太刀を握りしめて「雷狼気、収束……」

と呟いた。だがその声が気のせいとか掠れ始めている。横目で視てみれば、彼女の両腕の力が落ちはじめている上に、僅かな痙攣が見られた。

(……力の反動がきているか。当然だろうな、あれほどの力だ。リスクがないはずがない)

強い力には相応のリスクが伴うのが通例だが、彼女の場合もその例に漏れることはなかったらしい。しかしそれを耐えて桐音は紅葉と共にナバルデウス亜種へと向かっていく。続くようにして優羅も貫通弾L.V.3を撃ちながら突き進む。

貫通弾を受けながらもナバルデウス亜種は向かってきた彼女らに向かって噛み付きにかかり、続けて頭突き、後ろに下がりながらの尻尾の叩きつけと繋いでいくが彼女らはそれを躲していく。

再びナバルデウス亜種に肉薄して斬りかかるのだが、それを避けるようにナバルデウス亜種は息を吸いこみながら後ろにまた下がっていく。

——だが、それが優羅の狙い通りだった。

彼女が先ほど出したサインに従って移動していた昴は、右手に気を纏わせて勢いよく海底遺跡にあったギミックへと振り下ろす。その衝撃を受けて壁に生えていた二つの太い杭が重低音を奏でて動き出す。

その音に気づいたナバルデウス亜種が息を呑む間もなく、奴の背中に勢いよく突き出

された古代の撃龍槍が突き刺さった。

「ヴオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

船に取りつけられているものよりも重く太いそれは、ナバルデウス亜種にとつて致命傷に近い一撃となっただろう。だがあれを正面から、あるいは側面から狙つて撃つことは難しいだろうと優羅は考えていた。

だからこそ自分を囷とした。

自分に対して意識している事は百も承知していた彼女は撃龍槍を背後にしつつも、僅かに意識を逸らすように位置取りながらナバルデウス亜種を誘った。予想通り、離れた距離を詰めるように突進を仕掛け、そして紅葉らと合流する事で反転させる。

あとは三人で攻撃を仕掛けたり距離を詰めたりする事で背後にあるものを、意識の外へと追いやらせる。どうやら奴は距離を詰められれば背後に逃げる性質だということに観察する事でわかつていたので、自分から撃龍槍へと更に近づかせることに成功。

昂のタイミングで始動させれば、ご覧のありさまだ。

しかもご丁寧に撃龍槍が深々と奴に突き刺さっている事で、その巨体が数秒撃龍槍に繋がれたままになっている。

「はああああアアアアアアアツツ!!」

そんな奴に対して呐喊をしかけ、残った右角もへし折らんと角王鎚カオスオーダーを

振り下ろす。続けて下から回り込んで首を狙って小太刀を振るうだけでなく首へと突き刺すと「吼えな、夕風！」と指示しながら首から離れ、残った朝風を構えて今以上に力を注ぎ込む。

ナバルデウス亜種の首に突き刺さっている夕風から強い雷の力が解き放たれて、持続的にダメージを与えているのを見上げながら桐音は一点を見据える。朝風には既にジンオウガのオーラが纏われており、よく目を凝らせばそこに小さなジンオウガの姿を幻視してしまう程のものになっている。

「喰らいつきなッ！」

そこまで高まった朝風を勢いよく投擲すれば、首に深々と突き刺さって今まで以上に激しい音を立てて雷撃が放出される。それはまるでジンオウガがナバルデウス亜種の首へと牙を突き立てたかのよう。

いや、それは実際にジンオウガが喰らいついた光景なのだろう。放出された雷撃そのものがほとんどナバルデウス亜種へと纏わりついて離れない。既に衝きたてられている夕風の雷撃と呼応してナバルデウス亜種の首を侵していく。

首から伝わる雷撃にナバルデウス亜種の意識が揺さぶられ、乾いた悲鳴が漏れて出る。通常ならば意識を飛ばされ、強引に引き戻され、また飛ばされる、と繰り返してもおかしくない程ののだが、しかしナバルデウス亜種はそれでも何とか皮一枚繋がって

いる状態で意識を保っていた。

ある程度ダメージを与えれば小太刀を呼ぶ事で再び手元へと戻す。

そんな彼女をナバルデウス亜種は憎々しげに睨み付けた。

『こんなはずは……こんなはずでは……ッ！ このままでは私は……ッ』  
「……………」

だがその瞳に憎悪だけでなく、何か別の感情が浮かびだしているような気がして優羅は首を傾げる。

たぶんそれは——恐れ。

ナバルデウス亜種は何かを恐れている。……一体何に？

そんな疑問が浮かんだところで、

『そんな事……そんな事はあつてはならない……私は、私は——私はここで終わるわけにはああああああアアアアア!!』

響き渡るのは怒号。純粹な怒りだけではなく、どこか焦燥感も含まれたその咆哮にたまらずハンター達は耳を塞いでしまった。聴覚保護「大」の効果が切れてしまった影響だけでなく、奴が発した覇気にも飲み込まれてしまった結果だ。

奴はあの金色の淡い光だけでなく、体から発せられる赤い光にも包まれていた。奴の気が揺らめいている影響だろう、ナバルデウス亜種という月の光はあたかも赤い月のよ

うにも見え、そしてその光は震えている。

水面に映る月のように完全な形を留めておらず、不安定な光となつてナバルデウス亜種は暴れ出す。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

まず怒りのままに振り返り、昴と撃龍槍がある壁へと振り返つて力任せに壁へと頭突きを仕掛ける。昴は既にそこから離れていたため直撃はなかったが、強い振動によつて岩肌が崩れだし、またしても落石を産む。

ゆつくりと落ちていく重量のあるそれを掻い潜つて逃げた先には紅葉が待っている。だがナバルデウス亜種は逃げた昴を追つて振り返りながら、がむしやらに水ブレスを撃ち出す。

振り返りながらだったために壁や落石を巻き込んで薙ぎ払い、襲い掛かつてきたそれを体を捻つて回避。しかし水流と分断された落石の片割れが降つてきたため、苦い顔をしながら無理してまた回避行動をとる。

「ハ、ハ、ハ……」

井出が息を呑みながらも、何とかネオラギアブレイドを振るつて反撃しようとするが、ナバルデウス亜種はそんな事など意にも留めずにひたすらに体を震わせる。

ヒレが、体が、尻尾が……そして残つた直角が。



めちやくちやに振るわれて寄るハンター達を振り払い、怪しく目が光ってまたしても渦を作り上げて離れたハンター達を巻き取って閉じ込めようとす。そんな中で、奴の視線は優羅や桐音へと向けられているのだ。

くぱ……と口が開かれたかと思うと、強く息を吸いこんで二人を引き寄せようとしはじめる。桐音と天羽を引き寄せたあの吸引力だ。強い水流をも作り上げるほどの吸い込みで二人を逃がさないようにしている。

「またかい!？」

「……っ、ちい……!」

だが今回は幸運だった。

近くに紅葉たいたため風を操って更に引き寄せる。ナバルデウス亜種の吸引力も大概だが、紅葉が強引に横から引つ張る力もまた強かった。

優羅と桐音はそれによってナバルデウス亜種の吸引から逃れられたが、しかし逃げられたからといって安全ではない。完全に力を溜めたナバルデウス亜種が特大の水ブレスを撃ち出してきた。

直撃は避けたが強い水流によって体のバランスが崩れてしまう。そんな彼女らを巻き込むためにナバルデウス亜種は向きを変えていく。横から下へと逃げ、上を通過していく水ブレスだが、更に方向転換して薙ぎ払っていく。

そこで、水ブレスを止めるべく井出が斬りかかった。ネオラギアブレイドの威力ならば首を斬れば止められるだろうと思つたのだろうが、怒り狂うナバルデウス亜種は止まらない。

また怒号を上げながら鬱陶しげに井出を振り払い、離れた所にいる越智からの銃撃も気にせずただ獲物である優羅と桐音を仕留めんとする。

だが怒り狂うナバルデウス亜種は気づかない。

いつの間にか天羽がいなくなっている事に。

首へと斬りかかっていく井出は尻尾の方に天羽がいることに気づいたが、しかし今もなお水ブレスを撃ち続けているナバルデウス亜種を止めるべく斬り続けていく。

しかし止まらない。

海中を斬り裂く太い水の力は猛威を振り続ける。そのままがむしやらにまだ撃ち続けるのかと思われたが、天羽が再び天羽々斬を振るって体を斬り、続けて腹から胸にかけて一気に切り払った。

「……とんでもない剣士だな、あの女……。見かけによらない……。いや、見かけというより内面通りといったところか？」

天羽が天羽々斬を振るうたびに次々と出血する光景を見て戦慄せざるを得ない。

いや、もう十分に戦慄している。

紅葉や桐音の活躍ははつきりと目に見える形で表れているのだ。最早女だからと舐めることなど出来やしない成果を上げている。そんな彼女らに遅れてはならないとばかりに井出は斬りかかり、越智は銃撃する。

同じことを考えているのだろう。

瑠璃と茉莉、将輝と檸檬も再びナバルデウス亜種へと向かっていき、何とかしなければという思いに駆られて攻撃を仕掛ける。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

その必死さを嘲笑うかのように水ブレスを吐き終えたナバルデウス亜種は体を発光させる。金と赤が混じりあつた赤い月のような光は奴の力の源だ。それを満月の光で高めたようだが、ここまで満月の光は――

「――え?」

スポットライトが淡く差し込む。

こんな深海にまで届くような満月の光などありえない。しかし現に、どういうわけかここにまで光が差し込んでいる。

『月は……今もなお輝くか。ならば私に力を与えたまえ! うおおお おおおおオオオオ!!』

あの満月はナバルデウス亜種が作り出し……いや、再現したものだ。ならば奴の意思

に従うのかもしれない。ここまで届く程の光を発して奴を支援している。

その光を受けて、深海の月は最後の力を振り絞る。

巨体を立てて天を仰ぎ、水の力を操作して自身に引き寄せるほどの大渦を作り上げる。己を中心に据えた大渦は、当然ナバルデウス亜種に斬りかかっていたハンター達を全て巻き取った。

「ぬおおおッ!」

「これは……っ、く……瑠璃……!」

逃れることなど出来ない。

強い大渦は彼らを巻き取り、凄まじい力で海中をかき混ぜる。体が強引に揺さぶられ、気をしつかり持たねば意識が飛びそうな程だ。

これはもう耐性が云々の話ではない。

このままでは——死ぬ。

渦によって体をかき回されるだけではない。

いくら強固なマスクをつけていると言っても、縦横無尽に強い力で引つ張りまわされれば何かの拍子に取れてしまいかねない。そうなればアウト。

それだけではなく生き延びたとしても体力が一気にそぎ落とされているのは間違いない。

今、まさに自分達は絶体絶命の危機に陥っている。

「なにか、なにか手……は……っ!？」

「む、無理だ、ろ……! ……こんな……ぐ、は……っ!？」

檸檬、将輝と言葉を発し、離れた所では瑠璃と茉莉が何とかしようとしているようだが、渦によつて自由がきかない状態だ。

その中には昴らや桐音、天羽もおり、ナバルデウス亜種に引き寄せられるように大渦の中に閉じ込められていた。彼らもまた自由がきかない状態にあるが、己の武器だけは離すまいと強く握りしめている。

「……奴は、あとがない状態……っ、く……何とか、怯ませるだけの衝撃、を……!？」

「怯ませる? ……そんな、強い衝撃……今のあたいには無理だね……。そっちの、天とか言つたかい? あんたはっ……どう、なんだい……?？」

「……やつてはみるけど、つと……、期待はしないでほしいね」

優羅が対策を告げ、しかし桐音はもう力も出し切った状態にあるためこれ以上のものは不可能だと言い、天羽は手にしている天羽々斬を見てそう言う。昴も鬼哭斬破刀・真打に気を込めて雷撃を発しようとしているが、斬り込むタイミングを誤ればただでは済まないだろう。

タイミングを窺っていると、ナバルデウス亜種の視線が昴らへと向けられる。いや、

正しくは彼の後ろにいる優羅だろうか。ゆっくりと口を開いて渦に引き寄せられる彼女らへと嘯みつきにかかろうとしている。

それを迎え撃つべく鬼哭斬破刀・真打を握りしめた昴よりも早く、ネオラギアブレイドを構えた井出が出ていく。

「うおおおおおおッ!!」

渦から脱出してナバルデウス亜種の右角めがけて振り下ろされたネオラギアブレイドは、奴の頭部を斬る事に成功したが、それで止まることはなかった。お前ではない、と言わんばかりに頭を振って井出を振り払おうとするが、井出はそれでもナバルデウス亜種へと喰らいつく。

「やれええええッ!! 俺が止めている、間に……やってやれええええッ!!」

恐らく井出もわかっていたのだ。自分では止められないという事に。

でも、それでも彼は何も言わずに自分から圈を買って出た。そうする事で、自分以外の誰かがやってくれるのだと彼は想定していたのだ。

それだけ、彼は己の認識を無言で改めていた。港を出る前までの彼ならばやらず、そしてあんなことは言わなかっただろう。その変化に紅葉は小さく笑い、角王鎚力オスオーダーを握りしめて前に出る。

体をかき回すような渦から何とか飛び出すと、中心に居るナバルデウス亜種の頬を殴

り飛ばした。続くように下から天羽が飛び出して首を刎ねるかのような斬り払いで、髭ごと首を斬る。

「オオオオオオオオオオオオオオ!!」

接近してきた彼女らに気づいてナバルデウス亜種が甘い、といわんばかりに一度上へと昇ると、勢いをつけて前転して尻尾を叩き落した。それに至るまでの動きが今までよりも早い。

気づいた紅葉と天羽は何とか痛む体を押して逃げるが、井出だけは逃げられずに直撃を受ける。

「——っ!?!」

「い、井出ええええええええ——!?!」

渦の中で越智が叫ぶ。悲鳴すら上げる暇もなく、手にしていたネオラギアブレイドが彼の手から離れて、彼の体と共に海の奥へと沈みだした。そんな彼を越智は手を伸ばして何とか助け出そうと向かっていく。

しかしその上ではナバルデウス亜種が、紅葉や天羽に向けて角や尻尾を振るって暴れ続ける。渦の力が弱まりだしたのを幸いに、越智が井出へと向かって真つすぐに向かい、彼の体を抱え上げる。同じように桐音が落ちていくネオラギアブレイドを回収し、そつと井出の様子を見る。

「……………」

マスクに隠されて彼の顔を見る事は出来ないが越智の願いむなしく、井出の体を見ればナバルデウス亜種の一撃を物語る。ネオラギアブレイドを構える暇もなく一撃を受けた事で、両腕はあらぬ方へと曲がり、体もどこか歪だ。

そんな中で呻く声さえ聞こえないのだ。命の火は消えている。

「く、うう……………うううう……………」

嗚咽を漏らす越智を肩越しに振り返るが、桐音は彼に掛ける言葉を持たない。それに戦いはまだ続いている。仲間の……………いや、あまり話した事のないハンターの死を悲しんでいる暇などないのだ。

「これ、借りていくよ」と越智に告げると、ネオラギアブレイドを握りしめたままナバルデウス亜種へと向かっていく。両腕の力は弱まっているが、それでも剣を振るうだけの力はまだ残っている。

そう何度も振る事は出来ないが、その数度だけでいい。

生憎とラギアクルスのオーラである海気は持ち合わせてはいない。桐音は海竜種のオーラは扱えない体質だ。だからネオラギアブレイドに秘められている白海竜の力を、オーラとして具現化する事は出来ない。

でも、己の気を纏わせて強くさせる事ぐらいはできる。あとは、その一撃をうまいこ



と決める事だ。

『ぬおおおおおお!!』

渦が消えた事で解放されたハンター達もろとも薙ぎ払うべく、怒号を上げながら水ブレスを吐こうとするナバルデウス亜種の頬へと接近したのは瑠璃と茉莉。それぞれ己の武器を構えて勢いよく頬や首へとそれを突き立てる。

刹那、その傷口が爆発して首から血と髭が噴き出して海中に溶けていく。活性化した粘菌が呼応して今まで傷つけていた部分も連鎖反応を起こして一斉に爆発したのだ。その衝撃にたまたまナバルデウス亜種が怯み、それが——決定打へと繋ぐきっかけとなった。

「だらっしやあああああああああ!!」

先手として紅葉が右角めがけて最大の一撃を振りおろし、角を根元からへし折るだけでなく頭部にまで届く程の一撃をおみまいした。それによつて額が砕け、鱗や甲殻の破片を巻き上げる。

そうして下がった頭の下へと潜り込み、昴、将輝、檸檬が突き上げるようにしてそれぞれの武器を突き立て、勢いよく振り抜いて首を斬る。連鎖反応による爆発によつて首回りを覆っていた髭はほとんど抜けてしまっていた。

むき出しとなつているそこは爆発の影響もあつて容易に斬れてしまい、更なる出血を

強いる。

そこに桐音がネオラギアブレイドを構え、まるで一陣の矢となつてナバルデウス亜種の首へと迫る。高められた雷属性が発光し、彼女の気迫に呼応して気刃を作り上げていく。

ナバルデウス亜種も彼女の接近には気づいていたが、紅葉の一撃が効いていたせいで躲すに躲せなかった。そのままその白き刃は首へと深々と突き刺さり、瞬時に頭部へと走り抜ける強い雷撃によって意識が焼かれてしまう。

とどめとして、天羽が下へと回り込み、鞘に収めた天羽々斬を構えて一息で抜き放つた。

水中ということと疲れもあつてその速さはかなり落ちているが、その鋭さは天羽々斬の目覚め度によつてかなり増していた。

ずたぼろになつているその首に対しての一撃はもはや奴の守りなど意味を成さない。大きく斬られた事で頸動脈にまで達してしまい、今まで以上に出血して海を赤く染め上げる。

これでだめならば……もう終わりだ。

彼らも限界だった。

疲労も最高に達しており、武器を振るう力もそう残っていない。

だがその上でここまでやったのだ。ナバルデウス亜種も限界だろう。そう信じて奴を見つめる。

ふと、息も絶え絶えな様子でナバルデウス亜種はゆっくりと顔を上げていく。だがその瞳が映すのは虚空だ。そつちには何もいない。だが奴は、その虚空を見つめたまま言葉紡ぎだす。

『…………お、お許し…………ください、白…………お、う…………様…………。つ、く、おお…………私、は…………私、では…………彼奴ら、に…………申し訳、ありません、ん…………』

紡がれたのは謝罪の言葉。

一体誰に謝罪しているのかわからないが、今まで怒り狂っていたあのナバルデウス亜種があそこまで平伏して謝罪する相手となればとんでもない相手なのだろう。しかし、昂達の目にはナバルデウス亜種が見ている先にいる、かもしれない存在はみえない。

どう見てもそこには何もいない。あるいは、ナバルデウス亜種もみえていないのかも。しれないが、しかし謝罪せずにはいられないのだろう。自分は、負けたのだから。

『いい気に、なるなよ…………末裔ども。私を斃した程度で、この戦いが終わったわけでは…………ない、ぞな…………！ 私もまた、きつかけの一つでしかない。再び…………始まるのだ、ヒトと竜の戦いが…………な…………つ！ そして喰われるがいい、末裔ども…………！ 此度の戦、竜が勝利を収める時が…………いよいよ来たれり…………つ、私はその礎となろう…………！ は、

く……おう……様に、栄光、あ、れ……えッ!!』

最後に優羅たちに対して言葉を残してナバルデウス亜種は息絶える。

赤い月のような光も消え、今もなお海に己の血を溶け込ませながら、海の皇はその命を消す。

それに従って、海底遺跡の光景は消えていき、月の光に代わって太陽の光が再び海に差し込んでいった。

ここに、死闘は終わる。

犠牲は大きかったが、得たものもあつた。

ハンター達はそれぞれ大きく息を吐いて緊張状態を解き、空を見上げる。海の水によつて薄められた日の光は、勝者を暖かく包み込んでくれた。

## 69話

船へと戻った昴達だが、疲労が強すぎたために次々と船に倒れていった。長く海中で戦っていたために彼らの体はもう現界だったのだ。

甲板に倒れ伏したり、壁にもたれかかったりと様々だったが、そうしてマスクを取って呼吸を整えると、それぞれ船に用意された部屋へと戻っていく。

ナバルデウス亜種の死体は近くの島に待機していたギルドの船が到着次第、ワイヤーなどを使って回収する事になっている。奴の死体はどういうわけか海底へと沈んでいかず、あの場所に留まっている。

理屈は不明だが、何らかの力が働いているのかもしれない。

昴が息を整えながら辺りを見回すと、一人足りないような気がした。しかし既に船は動き出しており、タンジアの港に引き返していくところである。

少しして誰がいいるのか気づく。

天羽だ。

天羽が戻ってきていない。

「……天と呼ばれた人はどうした？」

「東風さんですか？ ……そういえば、戻ってくる際に別の方へと向かっていったような……恐らく、向こうの船に行ってしまったのではないですかね？」

「向こうの船に？ ……間違えたか？」

視線をもう一つの船へと向けながら昴は首を傾げる。同じようにして視線を向けているのが桐音だった。天羽は何か隠そうとしていたようだが、桐音はあの気配に気づいていたようだ。

同じ妖刀使いだからこそか、あるいはあれも草薙一族が作った妖刀だからか。

天羽が何とかして隠そうとしていた事は、残念ながら気づかれてしまったらしい。だが無理もない事だろう。ナバルデウス亜種を討伐するためとはいえ、あそこまで天羽々斬の力を引き出してしまったのだ。実際に見なくとも、力の気配さえ感じれば知られてしまうというもの。

だが桐音は解せなかった。

どうしてあのような代物がこんな所にあるのだろうか、という疑問が頭の中にあるのは当然のこと。どうやら銘まではわかっていないようだが、あれほどの妖刀ともなれば使い手が限られてくる。

だからこそそう思ってしまう。

(一体何者なんだろうね、東風天和……。あの妖刀も気になるし、戻ったら話を訊いてみるとうしようかね)

じつと船を見つめていた桐音だが、体の疲れも溜まっていたため一息ついて部屋へと戻っていく。

(あ……：そういうえばあれも返さないといけないか)

とどめとして振るつたネオラギアブレイドは桐音のローブの中にある。港に戻つたら越智に返さなければ、と忘れないように頭の中で反芻する。

昴達も先に戻っていた瑠璃らに続くようにして部屋へと向かつていき、ハンター達が休息する中、船はタンジアの港を目指した。

一方、天羽が向かつた船でも、生き残つたハンター達がそれぞれ部屋へと戻つていった。

死んでしまったハンター達の死体は全てこつちに戻つてこられたわけではない。あの海の底へと沈んでしまつたのが多数だ。

井出は越智が連れてきたからこそこうしてここにある。彼はまだ幸運だつたといえよう。

彼の死体は霊安室に安置されている。他にも重症者の中で治療の甲斐なく亡くなつた者も霊安室にある。

だが最初に死んでいった三人の死体は海底に沈んだままだ。

つまりこの船で厄海にやって来たハンターの内、五人が死んでしまったという事になる。

彼らの冥福を祈り、ハンター達は部屋へと戻り、船員らはそれぞれ動いて船を動かす。その中で天羽は新たに用意された部屋にいた。船を間違えてしまったということ、で急ぎよ部屋を用意してもらったのだ。彼女もまた先の戦いでかなり動き、活躍している事はハンター達も知っている。

例に漏れず彼女も疲れているだろうというのは簡単にわかることであり、そんな彼女をわざわざあつちの船へと向かわせるのは忍びないという事で用意してくれたのだ。

それに礼を述べ、天羽はベッドに横になって考える。

このまま港に戻ったところで自分の存在に気づいた灯の件が残されている。

(引きこもりは恐らく私を狙うだろうね。となれば、何とかして見つからないように離れないといけない。……でもそううまくはいかせてはくれないのが引きこもり。どう、するか……)

考えながら壁に掛けているロープへと視線を移す。

彼女にとって報酬などどうでもいい。だからギルドにわざわざ戻ってやる事もない。彼女のここでの目的はもう達成されているのだから。何気なくロープに手を伸ばして



中から天羽々斬を取り出す。

鞘に収められているその刀を抜けば、薄く紋様が浮かび上がっているのが見てとれる。ナバルデウス亜種の血を十分に受けたことで、戦う前に比べて更に力が目覚めているのだ。

しかしこれでも足りない。

回収した時をレベル1とし、カンストをレベル5とするならば、今は恐らくレベル3といったところだろう。ようやく中間地点にやってきた、という事だ。

言い換えれば今までやっていてまだレベル2だったともいえる。飛竜や人の血を吸い続けてこれなのだから本当に面倒くさい妖刀だと愚痴を言いたくなる。だがナバルデウス亜種という古龍の血を吸う事でようやく上の段階へとやって来たのだ。ならば、このまま突き進むのみ。

鞘へと納めてローブへとしまい、天羽は一旦目を閉じて仮眠を取る事にする。仕掛けるならば——港に着く前だと決めて。

『——ら』

何かの声が聞こえた。

耳から聞こえてきたのではなく、たぶん……頭の中に響くような声。

『——ら、……きい……らっ』

繰り返して、声が聞こえてくる。一体誰の声だろうかと彼女、優羅は臉を震わせる。

そうしてゆつくりと目を開けていくと、ぼやけた視界の奥にあつたのは木で出来た天井ではなかった。はつきりとしらない頭でんぼうつとそれを数秒見つめ、はつと急激に頭を目覚めさせて起き上がる。

「……な、なんだ……これは？」

自分は船室で寝ていたはずだ。

だが今、ここにあるのはあの部屋ではない。どこまでも広がるような夜の草原だった。空には満月と星々が浮かび、地上を優しく照らしている。

その中で自分は眠っていた。

訳が分からない。一体何が起こったというのだろうか、と混乱する頭で何とか状況を把握しようとする。

「……っ、昴、紅葉……！」

辺りを見回してみると、あの二人も近くで眠っていた事に気づく。二人の下へと駆け寄り、体を揺さぶって起こしてやると、程なくして彼らも目を覚ました。

そしてやはり優羅と同じく驚き、一体何が起こっているのかと混乱している。

そんな彼らへと、またあの声が話しかけてくる。

『目を覚ましたようで何より。……それにしても、白銀優羅だけ呼び寄せたつもりが、おまけもついてきたようで。……くす、それだけ繋がりが強いという事か』

声はやはり頭の中に響くようなものだった。一体誰が話しかけてきているのか、と辺りを見回すと、またしても驚く事になる。昴の視線の先にはあの双子までいたのだ。

頭に手を当てて軽く首を振り、状況を把握しようとしているようで、二人の下へと駆け寄って安全を確かめる。

白銀一家に暁の双子。

この五人だけここにいるという事なのだろうか。もう一度辺りを見回してみるが人影はもうないように思える。草薙桐音やモガの村のハンター達の姿や、もう一つの船に乗っていたハンター達の姿はない。

何故自分達だけがここにいるのだろうか。

そんな事を考えていた時、背後に強い気配が発生した。

息を呑んで振り返った彼らは、またしても驚きに目を開く。

そこにいたのは、大きな狼だった。

その姿を、優羅は知っている。船から飛び降りた際に一瞬だけ見えたあの狼だった。

「——ヴァナル、ガンド……」

『へえ？ 知識はあつてもそれを口にする事はないとは思っていたけど、なるほど……』

そう口にするだけのものを感じ取ったという事か』

真紅の瞳をじっと優羅へと向けながら小さく奴は笑った気がした。発せられる言葉は尊大、あるいは相手を見下すような雰囲気を感じ、声は男とも女ともとれない謎めいたものを感じる。

性別を隠すためなのか、あるいはそれ以外の何かの理由か。

何にせよ、伝説に語られる魔獣、ヴァナルガンドが目の前に現れたという事実は変わらない。その事に昴達は息を呑み、そして各々臨戦態勢を取る。

そんな様子を見て、奴はまた小さく笑う。

『よもや、武器もなしにこの私と戦おうと？ その戦意は称賛に値するけれど——無謀。貴方達の命は私が握っているという事実を認識しなさい？』

刹那、瞬時に空気が一変する。

それまで落ちて着いていた空気が冷え切り、凄まじい圧力と殺意が正面からぶつけられた。それを受けて瑠璃と茉莉は声にならない悲鳴を上げ、腰を抜かしてしまう程に。いや、彼女らだけではない。

昴達もまた息を呑んで一歩だけ後ろに下がってしまったのだ。それもほぼ無意識に。

それだけ奴の圧力が凄まじいという事をこの数秒で認識せざるをえないものだった。その中で優羅はあの殺意に何か別のものが含まれているような気がしたのだが、十分に

昴達を圧倒した事でヴァナルガンドはそれをひっこめる。

優羅が疑問に感じたものも消えてしまい、優羅は一筋の汗を流しながら僅かに首を傾げた。

「……で、なんであたし達をここに呼んだのかしら？　つていうか、ここどこよ？」

紅葉がひくついた笑みを浮かべながらヴァナルガンドに問う。その疑問はここにいる五人全員が感じている疑問だ。まずはそこから始めなければならぬ。

ヴァナルガンドは小さく頷き、ゆつくりと四肢を曲げてその場に座り込む。

『ここは貴方達の夢の中。私は白銀優羅の夢に干渉し、彼女を自分の意識の中へと引き寄せたのよ。ついどとして何となく、その糸をあの手で繋ぎ、彼女を自分の意識の中へと引き寄せたのよ。ついどとして何となく、その糸をあの手で繋ぎ、彼女を自分の意識の中へと引き寄せたのよ。ついどとして何となく、その糸をあの手で繋ぎ、彼女を自分の意識の中へと引き寄せたのよ。ついどとして何となく、その糸をあの手で繋ぎ、彼女を自分の意識の中へと引き寄せたのよ。』

「夢の中、だど？　そんな馬鹿な。それは魔法の技術だろう。それを……」

そこまで言い終えた昴は、いや、と考え直す。相手は伝説に上り詰めた魔獣だ。長き時を生き、七禍龍と同じ書物に名を残す存在。となればただの獣ではなく獣の姿をした何か、といってもいい存在となる。

それに古龍は魔力を持つ。古龍でなくとも獣の身で伝説に名を残した存在はヴァナルガンドだけでなく、東方においてほぼ知らぬ者はいない九尾狐もまたそれに値する。

九尾狐は変化を用いて人の姿に化けられる存在として語り継がれている。変化はまさしく魔法の技術。ならば、九尾狐もまた魔力持ちと考えられ、ひいてはヴァナルガンダムもまた魔力持ちだったとしてもおかしくないかもしれない。

それがまさか、夢に干渉するなどといった技術とは思ってもよらないが、もしかすると夢という形で七禍龍の襲来を伝える方法もあるかもしれない、と推測してみる事にした。

だが昴がそうして疑問を感じる事は当然の事だ、とばかりにヴァナルガンダムは小さく頷くのみ。

『そう疑問を感じるのも道理。信じようが信じまいが好きにすればいい。話を進めさせてもらう。……そう、なぜ貴方達を呼んだのか。それは、貴方達に告げる事があるから』  
「……告げる事？」

「それは一体……なんででしょうかね？」  
瑠璃、茉莉と何とか立ち上がりながらも、じつとヴァナルガンダムを見つめて問う。一度は奴の覇気に吞まれて腰を抜かしてしまった二人ではあるが、時間をおいて何とか調子を取り戻したらしい。そうするだけの心の強さを持てるようになっただけでも成長したと言えよう。

普通ならばあれだけのものを受けてしまえば立ち直るに立ち直れないのが普通だ。

流石は伝説と呼ばれるだけはあるものである。だから立ち上がれなかったとしても恥じることはない、と思っていたのだが、双子の成長に昴達は心の中で小さく喜ぶ。

そしてヴァナルガンドへと視線を戻して奴の言葉を待つ。

『ナバルデウス亜種、奴を斃した事は称賛に値する。……でも、あれは所詮始まりを告げる先鋒ではない。ヒトと竜の戦いのね』

「先鋒……人と竜の戦い？ ナバルデウス亜種もそんな事を言っていたけど、一体それは何なわけ？」

『それはね、白銀紅葉……太古より幾度か繰り返してきた戦いが再び始まろうという事。……知っている？ 昔からヒトと竜は大きな戦いを繰り返している。ヒトが技術を高め過ぎたが故に発生した戦争とか、歴史書にあると思うのだけど』

「……確かにある。竜の素材を使うためにあまりに多くの竜を乱獲したために、竜が一齐に牙を剥いて人に襲い掛かり、最終的に黒龍が出てきて終戦した、という記録が存在していた」

「それからの古龍との戦いとその予兆もまた人と竜との戦いと分類するならば、確かにそれは幾度も繰り返されたものだ、といえるんじゃないでしょうかね」

優羅と茉莉が少し考えながらもそう言った。読書家でもある二人ならではの知識から紡がれた言葉に、昴達はなるほどと頷かざるを得ない。

となれば今回の事も……いや、近年の不穏な動きも全てその予兆だというのか。

——あるいは、六年前の黒龍の時からもうそうだったというべきなのだろうか。

そんな事を考えた時、ヴァナルガンドはやれやれと言いたげに首を振る。

『言っておくけれど、六年前の事はただ見戯。神倉羅刹の私利私欲に、あの女が<sup>ひと</sup>つきあつてあげただけの見戯でしかないと知りなさい。今回の戦いの予兆は、各地の蛇竜種の活性化が予兆であり、ついでに言えばリオ系統が活発化したのは、とある龍が功を挙げようとしやばった結果でしかない。……まあ、それを含めての戦争なのだとすればあれも予兆だったのかもしれないけど』

「……見戯？　あの女つて、もしかしてそれがナバル亜種が謝罪した相手という事？」

『謝罪？　……くす、そう、謝罪した相手ね。それが龍らを束ねし存在が竜側のトップ』  
「すなわち、ミラルーツという事か？」

その単語に、ヴァナルガンドはその血のような瞳を細めた。なんだ、知っているのか、とその目が語っているかのよう。

六年前の一件に仲間にしたクシャルダオラの風花もまた「あの女」と言い、畏怖と尊敬の念を抱いていた相手。そして彼女の言葉から神倉月が推測し、存在を明らかにした存在。

祖龍ミラルーツ。



彼女は言った。

ミラールツは、全ての竜の母にして、龍神でありこの世界の神なのだ。

それが戦争を仕掛けてきたという事はすなわち、神が人を潰しに来たと言う事になるのではないかと昴達は危惧した。

その疑問を、ヴァナルガンドは答える。

『あの女の目的はただ一つ。世界の癌であるシュヴァルツの血統を潰す事。しかし自分が手を下すのではなく、竜らを使って潰す方法を取った。それが今回の戦争の理由。』

……その先鋒が、ナバルデウス亜種というだけの事』

「そんな……どうしてシュヴァルツを目の敵に……」

『危険だから』

紅葉の言葉に間髪入れずにヴァナルガンドは言う。

『別に竜側にとって危険だから、というだけではない。シュヴァルツの特性は竜殺しにして人殺し。世界の神であるあの女は、シュヴァルツの殺意はヒトにも向けられている事もまた知っている。シュヴァルツの血統はいずれヒトと竜の数を激減させると危惧している。だから、始末する。それだけの理由で、長い準備をかけてこの戦争を組み立て、実行に移した』

そしてヴァナルガンドはじつと優羅を見据えた。

『だから白銀優羅？ 生き残りたければ——戦いなさい。戦って戦って……そうして、力を示さない。あの女はとある存在と賭けをしている。いずれ貴方達にぶつけられる強大な存在と戦い、勝利を収めたならば——シユヴァルツの血統を潰すという事はもうしない、とね』

「……………まさに、狩るか狩られるか、というわけか」

『そう。実に簡単な話でしょう？ 今回は勝てた。でも、次はどうなるか？ わからないけれど、それでも貴方達は戦い続けるしか出来ない。それが生き残るための方法なのだから。喰われたくなければ、死にたくなければ、戦って勝つしかない』

ヴァナルガンドはじつと優羅を見据え、僅かに首を傾げてみせる。

続けられた言葉はないが、しかし瞳が語っている。

——出来るの？

優羅に似た真紅の瞳がそう問いかけてきているような気がした。

あれほどの力を秘めたナバルデウス亜種を斃したからといっていい気になるな、と諫めているようでもある。

先鋒だ、とヴァナルガンドは言った。

ならばこの先も同じように強大な力を秘めた竜が立ちはだかつてくるのだろう。そうして自分達を殺しに来るのだ。しかしそれらを討ち倒していった先に、最後に現れる

存在を討たなければ戦いは終わらないという。

自分達が静かに、平穩に暮らすためにはその戦いを終えなければならぬことを意味している。ポツケ村に残してきた幼い子供のためにも、負けられないという覚悟はどうに決めている。

ならば、今更このような話を聞かされたからといってその決意が揺らぐはずもない。その血のような真紅の瞳をヴァナルガンドへと向け、

「——出来るに、決まっている。アタシ達はあの子達のためにも負けられない。家族のために命を懸ける、根本が揺らがないならば、アタシ達はそれに従って戦うのみ」

「……そう、だな。実に簡単な話じゃないか」

「そうね。あたし達はあいつらのために生きて帰らないといけないのよ。あたし達の暮らしを邪魔するってんなら、全て返り討ちにしてやるだけってね」

『……………』

一家揃って不敵に笑ってみせる。

彼らの戦いは家族を守るための戦いだ。お互いを守る、残してきた子供のために生き残る、それが根本に存在するが故に揺らがない。揺らいだとしても家族を思い出す事だ意思を取り戻す。

一度家族と住処を失っているからこそ、彼らは家族を大事にしているのだ。

だから、戦う。幼い娘二人をかつての自分達のように両親を失う、なんてことをしない為にも。

なんと、眩しい事か。

そんな三人を瑠璃と茉莉は言葉を失って見つめていた。それはヴァナルガンダムも同じだったようで、じつと三人を見つめている。そうして数秒無言の時間が過ぎ、不意にヴァナルガンダムは小さく笑った。

『……そう。なら、せいぜい頑張りなさい。……その二人も』

「……え？ あたしら？」

『貴女達も、戦い続けるのでしょうか？ ならば、置いて行かれないように気をつける事ね。次なる相手は……恐らく、多くの犠牲が出るでしょうからね。……いや、もう既に、犠牲は大きかったか』

「犠牲者多数つて……次は一体どんな相手だというんですかね？」

『そつちにも情報がいつていたと思うのだけれどね。大砂漠に突如確認された——  
UNKNOW<sup>ン</sup>の話』

大砂漠。

少し前からギルドやハンター達の間で話題になつている異変が確認されている地だ。

ヴァナルガンダムがそれを持ち出してきたという事は、次なる戦場はそこということに

なる。

いや、それは間違いだろう。

そこはもう既に戦場になりつつあるのだ。ギルド側もUNKNOWNに対して対策を進めており、何とかしてこれを下そうとしているのだが上手くいっていないだけだ。

「次の相手は……UNKNOWNという事なのか？」

『あるいは、大砂漠を移動し続けているジエンかもしれないけどね？ どっちから来るのか、はその時になってみないとわからない。……しかし、確かなのは』

そこでヴァナルガンズの姿が、黒いモヤに包まれ始めた。同時に世界もまた色合いを薄めていく。

『——次なる舞台は大砂漠という事。そこで知りなさい。あの女が用意した駒の恐ろしさをね』

座していたヴァナルガンズの全身がモヤに包まれその姿を消す。同時に世界が完全に消え去り、彼らの意識は現世へと引き戻されたのだった。

タンジアの港までもう少し、という頃には空にあつた太陽は地平の奥へと消えていた。闇に閉ざされる世界の奥に、タンジアの港である事を示すあの灯台の光が道しるべとなつてくれる。

そんな中で、天羽は準備を整えるとローブの中から白い狐のお面を取り出して顔に嵌めた。そうして面に描かれた細い目が妖しく光り、そして消える。

それからの彼女の行動は素早いものだった。

扉を開けて足音も立てずに廊下を駆け抜け、船員らの動きも読み取って遭遇しないように移動した先は、船の裏口から出る甲板だった。ギルドから支給されているマスクを取り出して装着し、海へと飛び込んでいったのだ。

ここから飛びこめば水音が立つだろうが、周囲に船員がいなかった上にもう一つの船はこの船よりも前を進んでいる。それに疲れているハンターが、まさかまもなく到着するという時になって報酬を受け取らずに消えるなど思いもしなかった。

だが船員が海に落ちたという可能性を想定できるだろうが、それをあの白狐の面がそれを打ち消していた。元より気配を消して行動していたが、面から発せられている力によつて迷彩が発生している。

これにより例え見つかつたとしても彼女であると認識しづらくなっているのだ。それらによつて天羽は海の中へと消え、別ルートからの上陸を目指していった。

そんな彼女の様子に気づかず、二隻の船はタンジアの港へと到着する。クエスト達成の旨は既に伝わっているようで、港にはギルドの者だけでなくハンターや町の人々もいた。

ハンター達が船から降りてくると歓声が包み込んでいく。

まさに熱気がどつと襲い掛かって来たかのような出迎えに昴達は驚いた顔を見せ、しかしこのまま立ち止まっているわけにはいかないと酒場に向かって歩いていく。

だがその途中で彼らの前に出てきた者がいた。

「……少し、待つてもらおうか」

安物の着物を着たその女性、灯は煙管を手にしながらじつと昴達を見つめている。その背後からは軽装を着こなしている渚の姿もある。彼女の姿に気づいた昴は僅かに表情を変え、すぐに消した。彼女と繋がっている事は知られてはならないだろう、という判断をしたためだ。

さりげなく優羅が紅葉の後ろに隠れると、呼び止められたことで首を傾げた桐音が「何か用かい？」と灯に問う。

「ん、少し今回出動していったハンターらのメンツ、確かめさせてもらおうと思つてな。今出てきたメンツが生き残り？」

「メンツ？ そんな事を訊いてどうしようってんだい？ とうか、あんた誰？」

「……ああ、まずは名乗つてからやつたか。酉丑灯、とある用件からこつちに飛んできたもんや」

その名を訊いてざわつ、と人々だけでなくハンター達も驚きを見せる。

「どうやら彼女の名前は、このタンジアの港にも広がっていたらしい。となれば彼女の事も知られているのだろう。」

「そしてこつちが乾渚や」

「……どうも」

「さて、どうして灯らがここに居るのか。それはとある人物がここに居る可能性があつてな、しかも……今回のクエストに参戦しとつた可能性があるんよね。やから、ハンター諸君、ツラ見せてみ」

その言葉にハンター達は緊張状態に陥る。特に昴らは優羅がシユヴァルツの血統である事は知られたくない。しかし妙な真似をすればどうなるかわかったものではないので、ここは大人しく言うとおりにする事にした。

他のハンター達もとりあえず従う事にしたようで、ざつと並んでいく。すると灯はその顔ぶれを眺めていき、渚は昴らの近くまでやってきてゆつくりと移動していきつつ、さりげなく優羅の顔を隠した。

「そうして二人の視線がハンター達を見回したが、目的としている人物はここにはいない。」

「……おらへんな。逃げたか？」

「隠れている様子もなさそうだな。……こりやマジで逃げてるな。ちつ、どこまでもて



めえの勘が冴えわたってやがる」

「くす……灯の勘がなくとも、こーいう時に備えておくことはしておくもんよ。……やろ？」

「ま、違いねえ。邪魔したな。ゆっくり休んでくれ」

そう言つて灯を連れて立ち去ろうとする渚。だが突然呼び止められ、顔ぶれを眺められ、そのまま立ち去られてもハンター達としてはそれで納得できるものじゃない。

桐音が「ちよつと待ちな。一体誰を探していたのさ？」と二人の背中へと問いかける。それに渚は立ち止まり、少し考えた後に肩越しに振り返り、「……東風天和というハンターだよ。出てこないって事は途中で逃げてしまったようだけど」と答えた。

確かに彼女の姿がここにはいない、とそこで桐音達は気づいたらしい。行きと帰りで違う船を利用した彼女、確かに船室へと向かつていったことを船員らは確認していたのだが、いつからいなくなっていたのかはわからないようだった。

その時、灯が忍から連絡を受け渚へと「見つかったそーや。向かうで、渚」と呼びかける。

「そうかい。じゃあ、行くか」

「ん。……ほな、邪魔したな」

ぺこり、と頭を下げた灯の視線の先には、昂らの姿があつたがそれも一瞬だけ。煙管

を軽く振るえばその体が浮き上がり、空を飛行して消えていく。それを追うように渚も翼を広げて飛び去っていった。

あまりにも突然の流れすぎて誰も頭がついていないらしい。呆然と二人が消えていった方角を見つめてしまう。

ヤマト国において重役である二人がこんな所まで来て探していた人物、東風天和。

一体彼女が何をしたのであるのか、とかわざわざあの二人が出向いてくる程の人物なのだろうか、とか……色んな疑問が浮かんでは消える。

そんな中で昴達は何とか気づかれずに済んだか、と安堵する……のだが、最後に灯がじつと昴を見つめていた点が気になってしまう。よもや気づかれた、なんて事が……あるのだろうか、と僅かな警戒心を抱きながら、二人が消えていった方を見つめてしまった。

結果的に、天羽は追手として差し向けられていた忍から逃げ切る事に成功する。

港から西に数キロ離れた先に上陸した天羽だったが、それを予測していたかのように配置されていた霧夜と風間の忍に発見される。

どうやら東西の浜の近くにそれぞれ忍を配置していたらしく、見つけ出せば追えと命じられていたようだ。正面から帰ってくるはずがないだろうと予測はしていたようだが、灯は何となくある一点には注意して見ておけ、と命じたようだ。

その結果、釣れた。

しかし釣った魚はうまいこと逃げられてしまい、水槽へとぶち込む事は出来なかった。

だが東風天和としての情報は入手する事に成功しただけでも良しとした。彼女が組んでいる仲間、プルートや雪菜、そして現在新たに加えられた十兵衛の情報と並べていけば彼女を逃がしたとしてもおつりが十分返ってきている。

「天王寺冥夜、か……鍵を握るんはこいつやな」

「……調べるのか？」

「ん、こいつからきな臭い匂いがし始めとるわ。せやから天王寺冥夜の動向に探りいれとけば、天羽やそれ以外の動きもわかるやろ」

その判断により、プルートらに忍が付きまとう事となったのだった。

その二人が離れた後、ハンター達はギルドへと改めて報告し、多額の報酬と後日引き上げられたナバルデウス亜種の素材を分配される事となる。これらを受け取った昴達はこれからの予定を立てることにする。

次なる舞台は大砂漠との事だが、昴達はいいとして瑠璃と茉莉にとつてこれからは厳しい環境になる事は間違いない。だが彼女らは退くようなことはしなかった。

実力が足りないならば磨き上げてやる。厳しい環境ならば歓迎だ。その分、自分達は

必死になって戦えるのだから。彼女らの覚悟を前に、昴達は少し考えてしまう事になる。

現場の叩き上げは容赦ない現実を見せつけられる事になるが、その分りターンはプラスであろうとマイナスであろうと大きいのが特徴だ。得られる事が出来れば申し分ないが、失うものが出来た場合は二人の心が折れかねない。

それを覚悟の上でこう言うのならば——それを却下する事は出来なかった。

結局、準備を整えて昴らはそろって大砂漠を目指す事になる。そこで同行してきたのは桐音と蓮華だった。桐音は元より武を探すために各地を巡っている。そろそろモガの村を離れて次の拠点を目指そうとしていたらしいので、これを断る理由はない。では蓮華はどうしたのだろうか、と思うと、彼女は「桐音さんをサポートしようかと思いついて」との事らしい。

また桐音が借りていたネオラギアブレイドだが、越智がそのまま桐音が使っていくようにと願ったため桐音の手元に残ろうこととなる。井出の遺品となったが、このまま武器を腐らせていくのはもったいない。使い手がいるならば、そのまま使わせていくのが一番だとの事だった。

将輝と檸檬はモガの村のハンターのため帰還する事となったが、今回の一件で自分達はまだまだ未熟だと自覚するきっかけとなった。またあそこで修業し直すと意気込ん

でいる。

そうして一行は大砂漠を目指して西へと移動していった。

そこで待ち受けるものの恐ろしさなど、この時はまだ誰も知らずに。

「準備はいいな?」

「……ああ。大丈夫だ」

冷たい風が吹き抜ける昼下がり、身に包んだローブがはためく。この六年で伸びた髪は少し切られ、黒いリボンを結んでポニーテールにして結い上げられている。外に出て復帰してからの鍛錬をずっとこなしてきた事で彼女の實力はある程度取り戻されている。

あとは実際に戦場に出て戦うだけだ。

更にいえば、彼女の武器もこの村にいる優秀な鍛冶屋によって強化を施されていた。

愛刀である黒刀【參ノ型】は黒刀【終ノ型】に、ヒドウンサーベルは夜刀【月影】に、ヒドウンエツジは闇夜剣【昏冥】に。

そして独龍剣【蒼鬼】はというと、月が遺した黒龍の素材を発見し、岩徹と撫子によって長い時間をかけて試した結果、双龍剣【天地】に強化された。見たところまたもう一段階強化出来る余地があるとみたが、今の段階では強化不可となってしまうた。

あとはこれらの武器を使ってどこまで戦えるか、だろう。

「そんじや、噂に聞く大砂漠の異変とやらを調べていこうかね。どうやら昴達はタンジアの港の方を調べているようだしな」

「伝え聞いたところによるとナバルデウス亜種が現れたらしいですけど、大丈夫なのかな?」

「昴さん達なら大丈夫だと信じるよ。そう簡単に、負けるような人たちじゃないって事、僕は知っているしね」

ナバルデウス亜種の情報は届いているが、その結果まではまだ届いていないらしい。しかしこれはしょうがない。二つの拠点の距離がかなり離れているのだから。

「そんじや、グリーン、リーフ。行ってくるぜ」

「いつてらっしやい、お父さん。気を付けてね」

「おう。大丈夫さ、そう簡単に負けはしない。俺たちが返ってくるまでの間、菜乃葉たちと仲良くするんだぜ」

ぽんぽん、とグリーンの頭を撫でてやりながらにつと笑いかけるクロム。そんな彼へと、懐に手を入れたクロムは一つの宝石を取り出し、それを彼の手に握らせてやった。

「これは何だろうか、とグリーンが首を傾げ、「ちよつとしたお守りさ」とクロムは言う。「込められてるのはライムの魔力が主だろうが、俺の血も多少は混ざっているからいい

感じのお守りになってくれる。使い方はわかるよな?」

「うん、お父さんやライムさんに教えてもらってるから大丈夫さ」

「ん。なんかあれば花梨さんたちが守ってくれるだろうけど、万が一のこともあるからな。でも、何もなければそれはそれでいい。これを手に、祈っててくれや。俺たちの無事をな」

笑いかけてやりながら、手渡してやったエメラルドグリーンの宝石のペンダントを握りしめさせてやる。そうしてもう一度グリーンの頭を撫で、隣に並んでいるリーフの頭も撫でてやる。

「お前も、引つ込み思案も程ほどにして、ちゃんとお友達になって仲良くなるんだぜ?」  
「…………う、うん」

ちゃんとした別れは済んでいるが、クロムは改めて見送りに出てきた二人に優しく語りかけてやる。そうして後ろにいる昴の娘である菜乃葉と楓のことも意識させてやると、満足したように頷いた。

新しい年頃の子供たちだ。親はどちらもここからいなくなるが、これで少しでも距離を縮めてくれれば帰ってきたときの楽しみの一つになる。

「じゃ、行きますかね。お前ら」

準備を完了したならばいいよ彼らも動き出す。

クストルに騎乗すると一路、大砂漠を往く砂上船の港へと向かっていく。目的地はロツクラツク。そこを拠点として大砂漠を調査するのが今回の彼らの目的だ。

そして今、六年ぶりの仲間であるセルシウス、ギルドナイトであるアルテミスとルーシーを同行させて旅を開始する。

そんな彼らも知らなかった。

現在大砂漠は彼らの想像以上に荒れた場所である事を。

彼らは交わる。

広大な砂の海を舞台に、人と竜の戦いは第二局へと移行する事となる。

そこで待ち受けるのは——喜劇か、あるいは悲劇か。

それは、誰も知らない。



## 70話

## 大砂漠。

東方と中央を繋ぐロツクラツク地方を主とする場所に存在する乾燥地帯であり、各地に点在する砂漠とは一線を画す規模で広がる砂漠である。

数百キロではとどまらない程に広がる見渡す限りの砂の海であり、砂漠特有の寒暖の差や砂嵐といった厳しい環境も相まって、ここで狩りをするのは難易度が高いとされる領域だ。

しかし広大なオアシスの上に作られたロツクラツクという港町が出来上がる事により、ここを拠点として東方各地や西へと渡るための砂上船、飛行船とった交通手段が確立し、大砂漠は交易ルートとして人々が通過する事となった。

だがそれでも気を抜けば大砂漠に生息するモンスターによる襲撃が懸念されるため、ロツクラツクを拠点としたハンター達による護衛依頼は毎日届けられる事となっている。

また別に大砂漠にはロツクラツク以外に人の集落がないわけではない。

大砂漠といつても全てが砂漠化しているわけではなく、砂原や荒野といったフィールドもあり、そこには小さくとも旅人の休息の場として存在している村や町が存在している。

それにオアシスの近くにも集落があり、そこで暮らす人々が訪れた旅人を出迎えてくれる。

そんな大砂漠は現在不穏の空気に包まれており、旅人らはそれを承知の上で何とかここを抜けたその先へと向かおうとする。元より大砂漠はこの過酷な環境を生き抜いたモンスター達が生息していることで知られているのだが、最近は特にそれが強くなりつつある。

砂漠地帯に主に生息している角竜ディアブロス、轟竜ティガレックスは元から強固な竜であるというのは常識だが、尾斧竜ドボルベルク亜種や風牙竜ベリオロス亜種といった新たな亜種の発見に加え、恐暴竜イビルジョーの徘徊とその過酷さはうなぎのぼりになりつつある。

とどめとしてUNKNOWNの存在に、ジエン・モランらしき影まで確認され、一般人からすればここを避けたい心境だ。

だがロツクラックを中継地点として東と西、あるいは北の華国や南のタンジアの港へと交易しているのだから大砂漠を通過せざるを得ない。故にこの魔境に足を踏み入れ

なければならぬ。

そんな大砂漠に、いよいよ転機が訪れる。

この過酷なフィールドを舞台に、次なる大きな戦いが行われようとしていた。

ナバルデウス亜種の一件があつてから早くも二か月を過ぎようとしている。

青々と緑が映える森は少しずつ赤を彩り始める。気温も落ち着きを持ち、田んぼは黄金色の海が広がろうとしている。

所謂、実りの秋である。

それを過ぎればいよいよ年末となり、冬の訪れとなる。

タンジアの港を後にした昴達は大砂漠へと向かいつつ、クエストを受注して腕を磨いていた。特に双子はこうして経験を積まなければ、大砂漠の異変に対応できないだろうと自覚していたため、貪欲に力を求めて己を磨き上げる。

昴達という先輩がいるため、竜を相手にしなくとも彼らを相手にして鍛錬を積むことで否応なく力がついてくる事となった。

そうして力をつけながら大砂漠を目指し、南にある砂上船が出る小規模な港町を一時の拠点とした。

そこで得た情報はこの通り。

ロックラックへと北上する砂上船のルートに、轟竜ティガレックスが縄張りを広げて侵攻してきたらしいとの事。その影響で他の竜達の行動範囲に影響が出ているようだ。

特に縄張り意識の強いディアブ羅斯は恐暴化しており、侵入してきたティガレックス相手に大暴れをしていてとてもではないが、対処できない状態にあるとの事。

ここでギルドが優秀なハンターを募集して何とかしようとしているらしいが、大砂漠はそこ以外にも危険な区域があるためにクエストは途切れない。

そのためロックラックから派遣されるハンターは少ないようだ。

ならば腕を磨くという意味合いでも、この一件に関するクエストがあれば受けていくという話で纏まっていく。

ロックラックへと繋がる道筋を拓くだけでなく、力をつけ、なおかつこの大砂漠の異変の影響と思われる竜に触れることで、竜らの実力を把握する事が出来る。

そういう意味でもここを小さな拠点とするには十分なものだった。時が来ればその二頭は誰かによつて討伐され、道が拓けるだろう。そうでなくとも、頃合いを見て昂らがそれを行えばいい。その頃合いは双子の成長具合にかかっていた。

そうして彼らは更なる力をつけていくこととなった。

大砂漠より北東、華国付近から大砂漠へと入っていく影がある。

サラマンドラに騎乗する戦アイルーの焰と雷河だ。彼らもまた大砂漠の異変を聞い

てこちらに向かつてきたのだ。

あの日から北へと向かつて華国付近を周りながら情報を集め、月が死んだ事も聞き、風の噂で昴達がロックラックを目指していることを耳にした。ならば自分たちもそれに続こうと、ロックラックを目指しているところだった。

こちら側を周っていた二人が得た情報の大部分は、時々クエストを通さないと討伐されている竜がいるという事だった。もしかするとあの時戦った武によるものなのかもしれない、と推測して調査をし、それがほぼ事実である事までつきとめる。

そして武が大砂漠方面へと向かつて行つた事まで掴み、これらをも伝えておくためにもロックラックを目指している。

「この調子でいけば明後日には到着できそうだな」

「……ん。なにかと遭遇しなければ、ね」

手綱を握りしめている雷河がそう呟けば、彼の膝元に腰掛けている焰が淡々と答える。

アイルーの姿をしていればその小ささから雷河が抱え込むことで、サラに相乗りする事が出来る。傍から見れば仲睦まじい光景だろうが、二人……いや、二匹というべきだろうか、彼らにそんな雰囲気なんて微塵もない。

ただ旅をしている間ずっとこの調子で移動していたのだから、慣れてしまっただけに

過ぎない。サラがいればアプトルなどをレンタルしなくて済むし、焔が元々アイルーだからこそこうして身軽のまままでいられ、抱えられるという楽さと合理的な面があるからやっているだけの事だ。

「連絡によれば未寅さんは『神風』と合流し、ロッキラックに向かっているらしいぜ」

「……そう」

「逃げたりしないよな？」

「……はあ、逃げてもどうにもならないでしょ。それにこの大砂漠の一件にも焔らは介入しなくちゃならない。……もう、腹括るしかないでしょ」

焔の昔の縁がある未寅に『神風』の疾風。

かつての上司と部隊を纏めていた隊長。

どうして焔が野に降り、野良の戦アイルーとして各地を放浪する事になったのか、という過去を知るものら。

あれからかなりの時間が経過している。焔の心の整理をつけるのにも十分な時間だった。

「そうかい。ならよかった。俺としても、お前の時間がようやく動き出そうとしていくっていうのは喜ばしいことだよ。親父も、きつとそう思ってくれるだろうさ」

「……………そう」

「なにせ初めて会った時からお前はどこか歪んでたからな。……いや、爆弾狂という点で既に歪んでるか」

「うっさい。気づいたらこの嗜好が焔にあつたんだからしょうがないでしょ」

「まあ、そうだな」

「つていうか、いい加減忘れてくれない？ つーか忘れろ」

「ん？ どれのこと……ぶっ!？」

「わかつてるくせに訊き返すな猿」

抱えている焔が勢いよく頭突きをして雷河の顎をかち上げる。突然の事に雷河はたまらずそれを受けてしまい、反射的に口元を押さえるしか出来ない。

しかし仕方のないことかもしれない。

なにせ焔にとつて初対面の出来事は、忘れてしまいたいくらい気恥ずかしいものだったから。そう、あまりの無様さに恥ずか死できるくらいに、見られない醜態を晒してしまったのだと焔は思っている。

「忘れろつていわれてもなあ……記念すべき出会いを忘れるわけにはなあ……。それに、あの時の焔といたらかわい……ぐふあつ!？」

「喧嘩売つてんの？ 喧嘩売つてんだろ？ いいよ？ 買うよ？ 久々にタコ殴りにしたくなったから相手してやるよ、ああ!？」

「ちよ、ま……落ち着け、落ちる……落ちるってえええっ!!」

「落ちろ。そして走ってこいや。いい運動になるだろうしさ」

「……グルル……」

頭突きをしたり肘打ちをしたりして雷河を痛めつけながら落とそうとする焔に対し、少し慌てながらも決して手綱を離さない雷河。

忘れてはならないのは、二匹はサラの背中に乗っているという事。長年一緒に旅しているとはいえ、サラからすれば自分の背中で何いちやついてんだ、と苦言を言いたい気分だろう。

がっしりとした体躯をしているので別に痛かったとかいうわけじゃないのだが、ちよつと迷惑そうな表情をしているのは仕方あるまい。

そうして二匹は大砂漠を駆け抜けていく。彼らもまたこの未来の戦場へと足を踏み入れた。

砂上船が港へと到着し、クエストをこなしたハンターがロックラックの酒場へと戻ってくる。受付に報告を済ませたクロムの後ろには、腕を組みながらぼうつと佇んでいるセルシウスと、彼女を見守る桔梗とアルテミスがいる。

昨日からディアブロスのクエストをこなしつつ、狩場の付近を調べて回ったクロム



達。ロックラック南で噂になっているディアブロスとティガレックスによる縄張り争いの一件や、それ以外に関する情報を調べ、それが事実である事をつきとめる。

が、二頭の姿は確認された後に消え、また別の場所で睨み合い、ぶつかり合う、とはつきりしないものだったためロックラックでは依頼書は出ていないようだ。

となると、他の事について調べる事になる。

例えば——最近陰で伝わっているUNKNOWNについてや、ジエン・モーランの亜種疑惑についてだ。

その痕跡が何かないと、狩場に指定された領域付近を調べて回りつつクエストをこなしているのだが、今のところそれは見つかっていない。もちろんこれはクロム達だけではなく、別行動をとっているライムらも行っている。

数日前に昴達から届けられた連絡も受けているため、彼らが合流するまでの間に少しでも情報を得ようとしているのだが、上手くいっていない状況だった。

クロムがクエストについて報告している間、後ろで待機しているセルシウスはこの通り昔と変わらない様子でそこにいる。人を寄せ付けないような冷たい空気は落ち着いているが、その表情や佇まいからは「寄るな」という一言が発せられているかのようだ。

あまり他人と慣れ合う事はない彼女らしいものだが、この性格の根本的なところは変化しないのも彼女らしい。何か厄介事を起こしそうだ、と昔なら危惧するだろうが、娑

婆に復帰してからそういったことは喜ばしい事に起こっていない。

というのも彼女もめんどうごとは嫌いだからこそ、「寄るな」という空気を発しているだけに過ぎない。そんな彼女を見守っていたアルテミスは、何気なく酒場にいるハンター達を見回す。

彼女はギルドナイトの制服ではなく、ハンター装備を身に着けているのでギルドナイトがここにいて、と警戒される事はない。彼女が今身に着けているのは稲荷・覇シリーズ。古代の塔付近に生息するとされている氷狐竜デュラガウアの素材を用いて作られた装備だ。

ギルドナイトとして塔を調査中に遭遇し、討伐して得た素材で制作した装備であり、近年はこれを付けてハンター活動をしている。スキル調整も施し、マイナススキルである衝撃倍加は消してある。

スキル調整をして発動しているのは、見切り+2、耐震+1、回避性能+1、高級耳栓、業物となっている。

東方ではあまり確認されていないデュラガウアの装備だけあって、多少は注目されていたが今は落ち着いている。

そんなアルテミスはきよるきよると辺りを見回してハンター達の様子を探ってみていた。

ハンター達もまた大砂漠の事情は知っているため、中には不安そうな顔をしているものもいる。そんな彼らを見回すアルテミスはある一点で止まり、首を傾げる。

「気のせいかな……?」

アルテミスが見ているのは何気ない酒場の一角だ。だがアルテミスはそこを見つめて疑問を感じている。疑問というより違和感と言うべきか。

一見何の変哲もない空間のはずが、何かがおかしい気がするのだ。そこでアルテミスは目に意識を向けて力を込めてみる。するとどうだろう、見ていた場所に歪みが生まれ始めたではないか。

そしてそこには他の席と同じようにテーブルがあり、一人の女性が腰かけて食事をしていた。

彼女もまたハンターらしく、オルガロンの素材を使って作られた神楽・覇シリーズの身に着けている。艶やかで流れるような黒髪をサイドポニーにし、アルテミスの視線に気づいて漆黒の瞳を向けて視線を合わせてきた。

「……………」

じつとアルテミスを見ていた彼女は小さく微笑を浮かべ、置いてあるグラスに手をかけてぐいっと飲み干していく。そんな彼女の方へと近づいていったアルテミスは、近くでもう一度彼女を見つめた。

すると、

「私に気づいたのね。さすが、と言うべきかしら。いらっしやい、アルテミス」

「アルテの事、知ってるの?」

「ええ、一応は。こんなところまでご苦労な事ね。まったく、貴女のせいで向こうのお仲間になんて気づかれましたまったじやない」

やれやれとでも言いたげな表情を浮かべながらそう言う。

アルテミスの後ろではじつと黒髪の彼女を見つめているセルシウスがいた。先ほどまでぼうつとしていたのにアルテミスが彼女と話を始めてからは、彼女に気づいたかのように視線を移し……そして少し驚きと警戒が混ざった目を向けていた。

それに続くようにクロムと桔梗もまた、同じようにどこか警戒するような眼差しを向けていた。それらを一身に受けてなお、彼女は微笑を崩さない。

「アルテ、その人がどうかしたのですか?」

「うん……なんだかアルテの事知ってるみたい。……それに、どこかで見た事がある気がするんだ」

「……ええ。前に会ったことあるわね。かれこれ六年になるかしら?」

「六年?」

「シユレイドのヴェルドで。あの時は確か、ギルドナイトの顔ぶれもあったわね。……

ふふ、あの時から随分成長したようね」

「……………あ」

そこでアルテミスも思い出したようだ。

神倉獅鬼の知人の情報屋と名乗った小さな少女の事を。

確か名前は――

「七禍、さん?」

「ええ」

「ななか? ……………七、禍?」

アルテミスが確認するように問い、彼女――七禍は頷いた。その言葉の響きにアルテミスと、そしてもう一人、セルシウスもまた首を傾げる。

「ななか」という名前は女性としての名前に問題はない。問題があるのはそれを東方文字に変換した場合だ。しかし口頭ではその問題に気付く由もない。

だがそれだけではない。

セルシウスはじつと七禍を見つめる。

(……………なに、この違和感? こいつ、何かがおかしい)

少しだけ目に力を入れて七禍の内部まで視通そうとしてみる。普通ならばそれによつて相手の力量や魔力などの力の源が視えるはずだった。例えどんなに隠そうとも、

ある程度は視えてしまうだけの目をセルシウスは持つている。

だが七禍は何も視えない。否、底が視えない。

まるで暗い海を覗き込んでいるかのような感覚。何かを隠しているかのような気がするのだが、その何かが視えない。それを視通そうとして見るが、どんなに意識しても視えてこない。

同じようにクロムもじっと見ているのだが、同じように彼もまた視えていないらしい。

底が知れない何かを持つハンター。

二人には七禍がそう見えてしまったのだ。

だがアルテミスの場合、少しばかり違うものが視え、そして感じていた。

(やっぱり力に関してはよくわからないな。でも……なんだろう、どこかで見た事がある気が……)

妖狐としての力を持つアルテミスは相手を化かし、欺き、騙す力を持っている。最たるものは自身が姿を変えてしまうこと。それに続くのが相手に幻覚を見せ、現実と虚構の境界を曖昧にしてしまうものだろう。

この六年で妖狐の力も扱えるようになったため、力は増している。だからこそ、彼女の目もまた成長していた。

(……………あれ? なに、これ? ……これってけ——)

どこかで見た覚えのあるものを探ってみようとしたその時、普通ならば有り得ないような因子を視てしまいそうになった刹那、七禍はそつと口元に人差し指を当てながらアルテミスを見つめ返す。

(やはり視えるのね。流星はあれの血統に連なる妖狐。でも、それは黙っておきましようか?)

そんな風に漆黒の目が語ってきたかのようで。アルテミスはそれを受けて少し考え、クロムらを見回して一旦心の中にしまっておくことにした。確実性がないので混乱してしまいそうになるためだった。

「そうじろじろと見られてもいい気分じゃないわ。話があるならまず、座ったらどうかしら? 席は空いているのだし」

そうしていると、七禍は自分の対面の席を示してくる。彼女の言う通り席は十分に空いている。とはいえ少数用ではなくチーム用の席を一人で利用していたからに他ならないが。

それだというのに、彼女はどうかやら意識を逸らす魔法を行使する事によって、自分の存在を隠していたようだ。そうまでして自分を隠す理由は何なのか。

クロムは注文をした後、七禍に訊いてみる事にした。

「なんでまた存在を隠してたんだ？」

「こうしてハンター装備をしているけど、私は情報屋の側面も一応あるからね。妙な面倒事は起こしたくないのよ」

「情報屋？ ……お前が？」

セルシウスが首を傾げる。

それをしそうにないような感じがしたのだ。彼女は情報を提供するというより、戦い続ける戦士タイプのように思えるのがセルシウスの主観。それも――

（殺しに特化したタイプ。冷静に獲物を狩り続ける生粋のハンター、殺し屋か。こういう奴が情報屋？ 何の冗談）

自分がそのタイプだからこそわかる事。七禍はセルシウスの目つきからして自分を分析しただろうとそう考え、また微笑を浮かべる。だがそれを今口にする事はない。

「ええ、ある程度情報を集め、流す時に流す。それも相手を選んで、という方法でね。私、気まぐれなのよ。そういう面で少し特殊な情報屋という事になるのかしらね」

「この時期にこんな所にいるという事は、やはり大砂漠に関連する情報を所有しているのでしょうか？」

「ええ、持っているわね。貴方達を知りたいのは、UNKNOWNやジエン亜種、ディアとテイガの縄張り争いとかでしょう？」



「まあ、そうだな。でも教えてくれるのか？」

「……さて、どうしましょうか。貴方達は知ってどうするの？ 倒そうとでも言うの？」  
「当然だろう。そのための戦力になるために、俺達はここに来たんだ。奴らの事を知っているってんなら、その情報は買うぜ」

「……そう。でも果たして貴方達に倒せるかしら？ いくらかの血統の末裔や半妖だからといって、勝てるほど甘くはないわよ、あれらは」

「——ッ!？」

なんの気なしに酒を呑みながら彼女はそう言った。自分達が隠したいこの血を様々な対策を施して隠しているのに、彼女はこの会話の中でどうという事なく見抜いてしまっている。

息を呑んでいるクロムらを見て七禍は小さく頷いた。

「その反応、どうやら当たりのようね。それを見ただけでも良し。それを対価とし、一部を話してあげてもいいわ」

「……どういう？」

「かの末裔とこうして会えた、という情報を対価に話そう、と言っているのよ。言ったでしょう？ 私は気まぐれなのよ。欲しいのは金品じゃない。私が話そうか、と思うだけのものを見せてくれれば情報提供してやろうか、と思ってしまうのよね。くすくす」

こんな事を言っているが彼女は当然最初から知っている。ただ彼女はクロムらが隠したいことをついついて、彼らがどういった反応を見せてくれるのだろうか、という思いがあっただけだ。

要はからかってみたかっただけなのだ。

ふと、アルテミスは彼女が飲んでる酒の種類を見てみた。瓶に書かれているラベルはフラヒヤ酒。あれ、この酒って……と思った時、七禍はフラヒヤ酒で濡れた唇を軽く舐め、話し出す。

「さて、UNKNOWNかジエン亜種か、南の縄張り争いかはたまたそれ以外か。何について知りたいの?」

「……じゃあ、UNKNOWNについて」

「それでいいのね? ……UNKNOWN、ギルド側では謎の存在として扱われているこれは、突如大砂漠に確認された個体でね。理解しがたい外見と力を保有している飛竜  
よ」

「飛竜、か。理解しがたいってのは?」

「文字通りね。外見は漆黒を主とし、血色に染まる部分が点々とある色合いをしているわ。それも、いくつかの部位は攻撃的に変質していて、まさに敵を討ち倒すことに特化した個体ね」

「……少し待ってください。それは六年前に確認されたあれに酷似している特徴では？」

桔梗の言葉に七禍は——冷笑を浮かべる。

気づいた？ とでも言うかのようなその笑みにクロムは思わず「馬鹿な!？」と声を上げて机を殴りつけた。

「あれらは全滅したはずだ！ 生き残っているはずが……」

「——世界と言うものはね、時にヒトの理解の範疇に収まらない現実を突きつけるものよ。実際に現れたのだから、もしかするとあれの生き残りが大砂漠で生き延びていた、という可能性は否定しきれないわよ？ それも、その力を高めて己の力と変えて更なる進化を果たした——それが、UNKNOWNと呼ばれている個体だ、と否定できる要素はないわ。まさにあれは、ヒトの理解の範疇を越えているのだからね」

そう言って彼女は懐から一枚の紙を取り出し、クロムへと差し出す。そこにはUNKNOWNと思われる絵が描かれていた。それを見たクロム達は息を呑む。

「UNKNOWN。世界がヒトへと試練を与えるために生まれた存在の一つ。外見こそ貴方達がよく知る飛竜でしょうけど、あれをそれらと同格に扱わない事ね。舐めて掛かれば——死ぬわよ?。」

夜の大砂漠は昼間の高温の空気とは一変し、冷たい空気が吹き抜ける低温の世界と成り果てる。備えがなければこの冷たい世界によって動く力を奪われていき、やがては死に至るだろう。

その中で動くのは数人のハンター達だった。

彼らは岩陰に身を潜めてある一点を見つめていた。

「……………」

そこにいたのは夜の闇に溶け込むように漆黒の体躯をしていた。

ぎらつくような赤い瞳は周囲を見回し、鋭利に尖って伸びた翼爪もまた血を吸ったかのように赤い。ずしん、ずしん、と鈍い音を立てて奴は歩き、何かを探すようにして辺りを見回している。

そう、奴は探しているのだ。

先ほどまで近くにいたはずのハンター達を。

「……………くつそ……………、なんなんだあいつは!?! あれが、噂のUNKNOWNだつていうのか!?!」

「間違いないだろ。あんなもの、そこらじゅうにいてたまるか」

「どうするの? 隊長に報告するにしても、飛びだせばあれに見つかって殺されるわよ」

そう小声で話しているのはギルドナイト達だ。今でこそハンター装備をしているが、

彼らはドンドルマから派遣された大砂漠の調査隊である。

この大砂漠の異変を調査する役目を負い、いくつかの小隊に分けて調査を進めていたのだが、この四人の小隊は奴に遭遇してしまったのだ。

見つかった瞬間、彼らは悟った。

勝てない、と。

だからこそこうして隠れているのだが、離れた所にいる仲間へと知らせる事が出来ずこうして隠れ続けている。しかし隠れ続けてもいずれは見つかるとも思えない、という恐怖がある。だから何とかして仲間の下へと報せに行かなければ、という焦りも募り、動けないまま時間が過ぎていく。

そんな中で、一人が決意を固めたようにぐつと拳を握りしめる。

「……俺が行こう」

「な、何を言ってるんだ。一人でどうにか出来る相手じゃ」

「でもこうやって隠れ続けていても何も変わらねえだろ？ ……大丈夫だって。訳わかんねえ奴だが、あれもレイアじゃないか。逃げ方ぐらいはわかるぜ」

ぐつとサムズアップをして彼はそつと岩陰から顔を出す。

そう、彼の言う通り、奴の外見はリオレイアだ。漆黒に染まっているし、普通よりもかなり大きな体躯をしているが、所詮はリオレイアだろうと彼らは思っている。

六年前にドンドルマ方面を騒がせた狂化竜の生き残りだろうと高をくくっているのだ。最初こそUNKNOWNってなんなんだ、と警戒はしたが、少しずつ冷静になっていくとあれは狂化竜ではないか、と思うようになってきたのだ。

だからこそ、彼は一人で意識を引き付ける罠を買って出た。

その間に仲間を逃がし、報せに行かせようとしたのだろう。

「おら、こつちだ！」

「……………」

岩陰から飛び出した彼に気づき、UNKNOWNは視線を動かしてそれを視界に捉える。その隙に反対側へとゆっくりと移動していく三人。UNKNOWNはしばらく罠となった彼をじっと見つめていたが、小さく鼻を鳴らしたような気がした。

武器であるハンマーを構えた彼は更に距離を離すように離れていくが、UNKNOWNはそれを視線で追うだけ。きよろきよろと目だけを動かして何かを探している。

まさか、残りの三人を探しているのか、と思った彼は角笛を取り出して吹き鳴らす。飛竜らの意識を引き付ける効果のあるその音色につられ、UNKNOWNの視線がまた罠の彼へと動き、少しだけ息を吸いこんだ。

刹那、その口から放たれたのは青と白、そして紫という高温の炎の弾丸。しかもそれが高速で撃ち出され、息を呑んだ彼は横に跳ぶ事で何とか逃れる事が出来た。だが地面

に着弾したその炎弾は、炸裂してもなおその場で激しく燃え上がる火柱を作り上げる。

その熱風が横から叩きつけられ、彼は冷や汗をかく。

(な、なんだよ、この炎……!?)

炎弾一発だけで奴の力量は完全に測れないが、それでも異質なのは外見だけではないということだけはわかった。だがUNKNOWNはその場に佇んだまままた息を吸う。

そうして撃ち出されたのは三発の炎弾。リオレイアならではの連続攻撃が、高速で撃ち出されていくが、彼とて熟練のハンターだ。弾道を読み取って回避していき、UNKNOWNへと近づいていく。

「おらあああああー!」

手にしているハンマーで顔面を殴り飛ばそうとしたのだが——手ごたえが小さい。

「か、かた……っ!」

その甲殻の硬さに驚いた瞬間、UNKNOWNは体を引いて肩からぶつかりに行った。シオルダーアタックである。その一撃で怯ませた瞬間、素早く一步退いてからのサマーソルトを撃ち出す。

流れるような連続攻撃に、たまらず彼は尻尾に打ち上げられて宙を舞う。

その光景を離れた所から逃げ出す仲間達は見つめていた。囷を買って出た時からその可能性を考えてはいたが、いざその光景を見てしまつては言葉も出ない。しかし立ち

止まってはもらえない。

ここで立ち止まっては、何のために彼は囿となったのか。

足を止めずに砂漠を駆け抜け、離れた所に広がっている岩山地帯を目指す。あそこに入れば細道を駆け抜ける事が出来る。そこに逃げる事が出来たならば、あの巨体故に奴が入り込む事は出来ない。

体の内側から湧き上がる恐怖を押しえつけて三人は走る。

空気は冷えているのに彼らは汗を流している。それはこうして必死に走っているせいか、あるいは恐怖が滲み出た結果の冷や汗か、それはわからない。気にしている暇なんて、どこにもない。

「……………グルル」

サマーソルトの一撃でシオルダーアタックによって軋んだ防具を破壊しつつ、その体へと決定打を与えたことで囿の彼は息絶えた。そうでなくとも体内に侵入した毒によつてそう長くは生きていないだろう。

落下していく彼から、逃げていく三人へと振り返ったUNKNOWNは一旦地面に着地する。その際に落ちた彼を踏み潰し、そうして大きく息を吸いこんでいく。

口内へと高まっていくエネルギーを感じ取ったのは女性のギルドナイトだった。背後から感じられるその力に気づいた彼女は、震えながらもこの恐怖を高める要因が何な



のかを知らなければならぬ、という気持ちから振り返ってしまった。

そうして見たのは、ゆっくりと開かれていく口の奥から見えたあの青い炎のエネルギーだった。

「——っ、逃げて!!」

思わず声が上がってしまったが、彼女はそれだけを伝えて横へと逃げた。他の二人も何とか同じように横へと逃げようとしたのだろうが、遅かった。

一瞬の内にそれが通過していったのだ。

全てを焼き尽くす灼熱の炎の光線。グラビモスやアグナコトルが放つような熱線と同じものが、あのUNKNOWNから放たれたのだ。凄まじい熱気が女性の頬を叩きつけ、逃げられなかった二人は悲鳴を上げる間もなく灰塵と化した。

「あ、ああ……」

骨すらも残さない一撃に乾いた声しか出てこない。それだけでなく向かっていた先の岩山の一部まで届き、その外殻を瞬時に溶かされてしまっている。それがあの熱線の一撃を物語っていた。

「……っ、い、いや……っ!」

死が、そこまで迫っていた。

途切れ途切れに悲鳴を漏らしながら、彼女はただ足を動かして逃げ続ける。対抗する

気など霧散していた。ただ今は生きるために小動物のように震えながらも逃げ続けるだけ。

無様だが、それは本能から来る生存するための行動だ。責められる要素などどこにもない。そんな小さく弱い存在を見たUNKNOWNは、また小さく息をついて翼を羽ばたかせた。

そのまま宙へと舞い上がると逃げ続ける彼女に狙いを定めて一気に滑空していく。

「ひ、ひいっ……!？」

急速に迫りくるUNKNOWNの姿にまた悲鳴を上げ、彼女は足をもつれさせながらも岩山を目指す。そうして見えた細い道へと何とか体を滑り込ませると、UNKNOWNは目を細めて強く翼を羽ばたかせて急上昇した。

そのまま旋回し、岩山の亀裂のような細い道を見下ろし、炎弾を撃ち出して道を塞ごうとした。だが細道は迷路状になっているらしく、彼女はまた悲鳴を上げながらも走り続けて岩山を進んでいく。

しばらく岩山を見下ろし、時に炎弾を落としていたUNKNOWNだったが、完全に逃げられたことを悟ると、夜の闇の向こうへと飛び去っていった。

ギルドナイトを容易く三人葬り去ったUNKNOWNの存在は、何とか仲間の下へと逃げ去った女性ギルドナイトによって伝えられる。

その外見、力の一部が伝わり、仲間の死を惜しむ。

だが生きて帰ってきた仲間を保護し、得てきた情報を後々のために役立てる。

元より危険な任務だという事は彼らも承知している。その上でこの大砂漠へとやって来たのだ。

「UNKNOWN……黒きリオレイアらしきもの、か。やはり以前より想定していたあの生き残りであると判断してもいいかもしれないな。……信じたくはないがね」

そう言ったのはこのギルドナイト調査隊を纏める隊長。

ドンドルマより準備を終えて再びこの地へと戻ってきたギルドナイト、レイン・スカーレットであった。

## 71話

大砂漠より南東、タンジアの港から西へと数十キロ。東西よりも南北に大きく広がる領土。

それが天王寺領だ。

北は植物豊かな山岳地帯となり、南に行けば海に接する地域となる。この季節の田んぼは黄金色の海を作り出し、それ以外でも山の幸が色々採れることで知られている。

また特産物であるレモンは冬が近くなって来れば収穫の時期となっていくため、このころは少しずつ身が大きくなってくる季節だ。

そんな天王寺領に滞在していた十兵衛は、目の前にいる人物に小さく溜息をついていた。

あれからこつちにやってきてからというものの、時折クエストへと向かって狩りを行ったことは何度かあるが、主な行動は情報収集だった。それに加え、プルート目的の一つである領地の拡大も行い、それに伴った内政などもあって大砂漠に向かうのは後回しになっていたのだ。

どうやらこっちに戻ってきた目的の一つはこの内政だったのかもしれない、と十兵衛は思わざるを得なかった。周囲の領主が次々と死に、それに伴う各地の事情の変化も感じとり、それに備えて準備を進め、交渉に向かう。

そうして領地を取り入れていったブルートは、着実に己の仕事を進めていた。その手腕は耳にする限りではかなりのものだという事を十兵衛は感じ取っていた。伊達に領主の息子をしているわけではないらしい。

どうやら天王寺領主一家は魔族の血があるらしく、長寿らしい。現在の天王寺領主も見た目では三十代の男性にしか見えないが、実際にはもう百年近く生きているとか。それでいて経験豊かという事もあって安定した政治を行っており、天王寺領は実に平和で穏やかな暮らしが出来ているようだ。

しかし領民たちは平和でも、今ここにいる十兵衛は少し平和じゃない状況になっている。

その原因は、目の前にいる人物のせいだ。

「……はーっはっはっは！ かななものか、かなものかなじゆうべー？ もう少しで此方が詰めるぞ？」

「……そうツスね。でも、まだ終わったわけじゃあないツスよつと」

そう言つてばかり、と駒を進める。間髪入れずに相手の駒も動き、そしてまた十兵衛

が駒を動かす。

今二人は東方の遊具の一つ、将棋を指していた。

東方では昔からあるポピュラーな遊具であり、ルールさえ覚えれば老若男女、誰でも遊べるゲームとして存在している。

そして目の前にいるのは少し小柄な少女だった。東方人らしく黒く艶やかな髪が背中近くまで伸び、少し気の強そうな大きな碧眼が得意げにじつと十兵衛を見つめている。白い大袖に黒い袴という和服を着こなし、手にしている扇子がぱん、と小さな左手に叩かれる。

そうしてぱつと扇子を開けば、そこには「勝利！」と達筆で書かれていた。

そのままふーん、と胸を逸らしてみせながらぱたぱたと自身を仰いでいる。

さて、そんなこの小さな少女は誰なのか、紹介しよう。

天王寺火夜<sup>てんのうじかや</sup>。

天王寺領主である天王寺星夜<sup>てんのうじせいや</sup>の娘であり、天王寺冥夜として存在しているプルート<sup>プルート</sup>の妹である。

小柄と言うかなんというか、見たところ十代前半にしか見えないが、実年齢は確か二十歳前だったかと記憶している。だが魔族という血の影響で成長が緩やからしく、仕方がないと言えば仕方がないらしい。

彼女自身も魔族の影響で時間の感覚的にはのんびりとしていているようで、またこうして一カ月近くの付き合いからしてわかった彼女の性格、すなわち豪胆さが感じられるため、全然気にした様子はない。

「つと、ほうほう、なかなか上手かわすなー、じゅうべー。逃げる事に関しては、そなたは十分なものを持っておるではないか。じゃがじゅうべー、そう逃げてばかりじゃあ此方に玉手は指せんぞ? そら、これでとうだ!?!」

「……む、これは手厳しいッスね」

逆に言えば、初対面時に二十歳でこのような子供のようになんか延びた名前呼びと、古風な口調をしていることには、若干の戸惑いを覚えてしまった十兵衛である。人間であればアウトだろうが、そこは魔族と言うことでまだ大丈夫だろう、と彼は心の中で結論付けた。

さて、ずいっと切り込んできた駒の動きに十兵衛が目細める。現在、十兵衛の陣には火夜の駒が攻めてきている。だが十兵衛は巧みに守りに入り、その攻撃を躲し続けているのだ。

それでいて十兵衛も駒も火夜の陣に少数入り込んでいるが、攻守が入れ替わっていないため動くに動いていないようだ。

さて、どうしようかと考えながら、十兵衛は目の前にいるどこか得意げな少女との出

会いを思い返した。

プルートと雪菜と共に天王寺領、それも彼の自宅である屋敷へとお邪魔した十兵衛らを出迎えたのは、彼の家に努める女中達だった。

彼女らに案内され、与えられた部屋へと移動した十兵衛はその客間の広さに驚く。流石は領主の屋敷と言うべきか、客間であつたとしても結構な広さを誇っていた。

東方の屋敷らしく木造の建造物であり、建築方法としては寝殿造りに近いものになつている。奥の中心に正殿を設け、正面に広がる庭園や池を左右に囲むように東対や渡殿、釣殿にあたる部分が存在し、奥には北対などにあたる部分がいくつか存在している。

その中の一つである客間は庭園を眺めることが出来、何気なく縁側からその庭園を見ている事にした。東方といつてもここまでくると東方なのか、あるいは中央の欧州なのか曖昧になってくるが、それでも庭園は東方……ヤマト国やシキ国のものに近い。そうして庭園を眺めていると、廊下の向こうから静かな足音が聞こえてきた。女中がきたのだろうか、と思つてそちらを見やると、小さな少女が近づいてきていた。

「そなたが話に聞く萩原じゆうべーか？」

「……？ そうツスけど、どなたツスか？」

「おお、まずは名乗るべきだったな、すまんすまん。此方は火夜、天王寺火夜だ。そなた



を連れてきた兄様の妹である」

「妹?」

そこで十兵衛はここに来る前にプルートの言っていた妹の事を思いだした。成長期にある小さな妹がいるという事を。恐らく彼女が件の妹なのだろう。

(……それにしても似ていない気がするけど)

髪の色も瞳の色も違うし、どうも顔立ちが少し似ていない気がするのだ。とはいえこれくらいならばまだ兄妹としては問題ないかもしれない。なにせ魔族の血が入っているらしいので緩やかな成長をするのだから。

それにしても……小さいな、と思ってしまうのも無理はない。

小さいとは聞いていたが予想通りの身長だったかな、と思う。十兵衛の主である六花よりもまだ小さい。目算だが恐らく144cmほどだろうか。これで二十歳前とは……いや、魔族ならば問題ないか、うん、と十兵衛は頷く。

そんな十兵衛の視線に気づいたのだろう。火夜は小首を可愛らしく傾げ、懐から取り出した扇子を取り出すと「何かの? 小さい、とでも思っておるのか?」と問いかける。

「え、あ、いや……」

「はーっはっはっは! 別に構わぬよ!」

そう豪快に笑いながら勢いよく扇子を広げてみせる。するとそこには「良!」と達筆

で書かれていた。それをあおぎながらからからと笑いつつ、

「此方が小さいというのは事実であるからなー！　だがこう見えて成長はしておるのよ、うむ」

「いや、初対面の相手にそんなこと言われても困っているツス」

「む？　それもそうか。はっはっは！　……さて、こうして此方が足を運んできたのは他でもない。この目で兄様が連れてきた新たな仲間とやらを確認しに来たのだよ」

「ばちん、と扇子を閉じるとじつと十兵衛を見上げてくる。その瞳に宿る力は先ほどまでの子供らしさを感じさせるようなものではなくなっていた。

戦う者、というものでもない。それはまさに相手を見極めるかのような観察眼。

それを以ってして彼女は十兵衛を見つめていた。骸によつて隠されている顔や、この骸をじつと見たとしても彼女は動じることにはなかった。

「ふむ……なかなか面白い目をしておるなあ、じゅうべー」

「面白い、ツスカ？」

「うむ。そなたの目は二面性があるように見える。気弱な面と——熟練された戦士の面。この気弱な面でそれを覆い隠しておるな？　此方がなにかよからぬ事に気づかないか、と警戒しておるように見える」

「……………」

「ふっふっふ、凶星か。……であつても、此方は別に気にする事はない。そなたは兄様が連れてきた新たな人材。ならば此方はそなたを快く迎え入れよう」

からからと笑つてばんばん、と扇子を小さな左手に叩く。

だが兄であるプルートが連れてきたとはいえ、こうして初対面でそこまで見抜いてきたのだ。しかも周りには人はおらず、ここにいるのはこの二人のみ。そして火夜は曲がりなりにも領主の娘である。

「そんなんでいいんすか？ おいらが今ここで君に刃を向けたらどうするんすか？」

「む？ そんな事をするのか？ ……だったとしても問題はあるまい」

何という事もなくきよとんとした顔を見せてくる。

「何故？」

刹那、十兵衛を観察していたその目に戦意が宿った。

閉じられた扇子を口元に当てながら、じつと十兵衛を見上げてくる彼女の佇まいには隙が見られない。もし今ここで十兵衛が仕掛けたとしても、彼女はそれに対応してくるだろう。

それを予感させるほどの何かを彼女は持っている気がした。

「……と、このように此方もある程度は修練しておるのでな。兄様の妹として、そして天王寺家の者として恥じぬように、な。はーっはっはっはー！」

「……なるほど。それで、わざわざおいらに会いに来てどうするつもりだったんで？  
もしかして、ただの挨拶だけツスか？」

「それだけで会いに来てはいかんのか？ それに此方自身の興味もあつたでな。その甲斐はあつたと自負しておるよ。うむ、そなたはなかなか面白そうな男よ！ はっはっはっはっは！」

そう言つてからからと笑い、またしても扇子を開いてみせる。そこには「期待！」とどんつと書かれていた。そんな彼女の後ろからはプルートの静かに近づいてきた。

そうして、「ほう？ こんなところに居たのか、火夜よ」と声を掛けてくる。

「おお、兄様。おかえりなさいませ」

「うむ。もしや萩原十兵衛に会いに来たのか？」

「うむ、連絡に聞いていた男がどんなものか、此方の目で見てみようかと思うてな」

「そういうところは相変わらずよな。どうだ、萩原十兵衛は？」

「なかなか面白そうではあるな。兄様と一戦交えているところを見てみたい気もするし、色々観察し甲斐がありそうに思えますなーはっはっはっは！」

ぱたぱたと開いた扇子をあおぎながら笑つてみせると、「そうかそうか。それは何よりだ、フーツハツハツハツハ！」とプルートの前からからと笑つてみせる。そんな光景を見て十兵衛は、ああ確かにこの二人は兄妹だと思わざるを得なかつた。

そんな出会いから二か月。

趣味が観察という火夜は、時折十兵衛の下へとやってきては一緒に行動してきている。

一番多いのはこうして将棋を指す事だろう。何かと一緒に時間を潰している気がする。慣れない新しい土地でこうして小さい少女と一緒に過ごす事で慣らそうとしている、ような気配りを感じるので嫌と言うわけではないのだが、どうも警戒してしまうのはあのプルートの妹だからだろう。

駒を進めていきながらちらりと火夜を見てみる。

こうして見る限りでは特に怪しい点はない。裏表のない明るい少女というのは見た目通り、それにプルートのような豪胆な部分も似通い、少し変わった名家のお嬢様と違って差し支えない火夜が完成する。

「む？ どうかしたかの？ そろそろ降参でもするのか？」

「いやいや、まだいけるツスよ。……つと、それでまだあの人らは動かないンスかね？」

大砂漠の一件、介入するんじゃないかかったんス？」

「問題あるまいて。情報によればまだ大きな事件は起こってはおらんよ。今はただこの領地とそれ以外の領地を併合する。そうして他の領民らの暮らしを安定させねばならぬよ」

「……ふーん」

「私腹を肥やす愚者な領主とその一族が消えたならば、その穴埋めを行わねばならぬ。頭なき組織などともに機能せぬからな。此方が情報を集め、兄様が直に交渉する。それが、此方らのやり方よ」

そしてその愚者を影から消すのが雪菜や天羽といったところかな、と十兵衛は推測した。果たしてその影の部分はこの小さな妹は知っているのだろうか、と窺い見る。

扇子をぱたぱたとあおぎながらにやにやと笑ってみせる彼女だが、その明るい顔の裏にそんな血みどろの側面を保有しているのだろうか。二か月の付き合いではあるが、この少女の全てを知っているわけではない。

全面的に信用するわけにもいかないし、かといって完全に目を離れたらどうなるものか怖い所がある。つかず離れず、その距離で接してきたのだ。

そして今、プルートは最後の交渉を終えて戻ってくるころらしい。それを待っている間、こうして将棋を指しているわけだが、こうして指しているとどこからか視線を感じ続けているのは否定できない。

最初はこの家の誰かが十兵衛を見ているのかと思つたが、それは半分正解だった。

「……さて、それはそれとして」

十兵衛が次の手を指したのを見ながら、火夜は扇子を閉じて口元に当てる。その視線

は盤上から庭園へと移っていき、軽く様子を見て回る。その小さな視線の動きに気づいた十兵衛もまた、それに倣うように骸の下で視線を動かす。

「まだいるツスね」

「うむ。まったく、ネズミはどこにでも潜り込んでくるものよなあ。そんなに目をつけられるような事をしたのか、じゆうべー？」

「知らないツスよ」

と言いつつも、自分は午卯家に連なる者であり、あの六花の部下……間諜として動き続けていた。そしてプルートは最近妙な動きをしているし、ヤマト国にとっては重要な人物である天羽とも行動している。

その正体を知っているのかどうかは知らないが、それでも彼女らにも忍がついてまわっているのは確かだった。しかもまだあの二人は手を組んでいるらしく、霧夜と風間がどちらもついて回っている。

なんというか、ずっと監視されているかのような気がしてならない。それが忍の役割の一つなのだろうが、見られる方としてはたまったものではない。

「さて、とつとと退散してもらおうか」

口元を扇子で隠しながら何事かを細々と呟く。すると庭園の一角に生えている木に向かつていく鷹が現れる。音も立てずに背後に回り込んだかと思うと、翼を畳んで一気

に急降下して枝葉の中へと飛び込んだ。

するとその中から忍らしきものを貫いて地面に落下していく。だが途中で受け身を取った忍は一度二人の方へと振り返ると、軽く傷口を押さえながら庭園を走り去っていった。

「今日は風間の方が。飽きないなー、あの者らも。……さて、続けようかじゆうべー。まもなく王手となろうて」

忍を追い払ったというのに気にした様子もなく、将棋を進めていく火夜。もう彼女も慣れてしまっているのだ。どこからか自分達を見つめ続けている忍がいつもいるのだから、嫌でも慣れてしまう。

そしてそれに十兵衛も合わせることにした。火夜の攻め手から玉将を守り、さりげなく相手の陣へと駒を進めていく。そうして手番を進めていくと、気づけば十兵衛が火夜を攻めている状態となっていた。

「……むむ？」

「さて、これでどうツスカね？」

「ほうほう、いやこれは……うーむ」

何回か扇子を開閉させて考え込み、十兵衛の切り込みから王を守る動きを指す。流れが変化したという事は彼女も感じ取っているのだろう。その可愛らしい顔を少ししか



め、眉間にしわが寄り始めている。

その時、火夜の後ろからプルートの顔を出して盤面を眺める。そうして戦局を眺めると、

「ほう、火夜が劣勢とな。だがまだもう少し盛り返せる点はありそうだな」

「兄様、帰ってらっしゃったのですか」

「うむ、今しがたな。……そら、火夜よ、ここを指していけば道は少し開けるぞ」

「むむ？ ……おお、確かに」

プルートの助言によって火夜が駒を動かしていく。しばらくするとまたしても優勢が変化し、十兵衛が追いこまれ始めてしまっていた。やがて、

「これで、王手よ！」

「……むう、詰みツスね」

最終的には火夜が勝利を収める事が出来た。その事に火夜は大層機嫌を良くしたよ  
うで、「はーっはっはっは！ いい戦いであつたな、じゅうべー！」と笑いなよきかなが「良哉」  
と書かれた扇子を開いてからからと笑ってみせる。

だがすぐに小さく肩を竦めて、

「しかし兄様がいなければどうなつた事か。やはり兄様はお強いな」

「いや、火夜も腕を上げてきているようでは何よりだ。萩原十兵衛もそれについていける

だけの力量があるようだし、いつか我とも指そうぞ?」

「……まあいつか、ね。それで、戻ってきたという事は、交渉は成功したんスカね?」  
「当然よ。我を誰だと思つておる? きつちりと話をつけてきたわ。これで領地関連の話は全て片が付いた。あとは……準備を整えて次なる戦場へと向かうだけよ」

不敵な笑みを浮かべてどこからか取り出した扇子を開いて「勝利!」と達筆な文字を見せつけてくる。一体どこに仕込んでいた? とか、そういうところまで兄妹しているのか? とか色んなツツコミどころを考えるが、それを口に出さないようにする事にした。

最近プルートルらに対してツツコミしすぎている気がするので、自重する事にしたのである。

「火夜よ、頼んでおいた事柄は?」

「ぬかりはないですよ、兄様。集められるだけのものは集めています故。ただ、ネズミも多いのでお気をつけて」

「そつちにも多いか。我の方にも何人か動き回つてたからな、数人確保しておいた」

そう言つて廊下の影へと視線を向ける。そこには二人の忍が控えていた。風間と霧夜、両方の忍が膝をついているではないか。何だつてあんな風に臣下の礼を取つているのか、と首を傾げると、プルートルがすぐに答えを口にする。

「ひっ捕らえて軽く暗示をかけておいた。我らが移動した際に虚偽の情報を向こうに流せるようにしている。こうでもしなければどこにでも現れそうだから、多少の時間稼ぎは出来ようて」

「暗示って……あんた、そんな事まで出来るんスか？ まさかおいらの事も」

「くく、そんな事はせんよ。今回はあまりにも鬱陶しすぎた故に、忍に対して施しただけに過ぎん。戦力となる者に対して暗示をかける趣味は我にはない」

「……………」

果たしてそれは本当なのかどうかはわからないが、プルートのそう易々と嘘をつくような人物ではない事は何となくはわかった。しかし、言わない事はとことん言わない、という事もわかっている。

「暗示の事はこれくらいにしておこうか。今日までの予定は消化された。大砂漠の件へと話を進めようぞ」

「もう進めるのか？ 休まなくても？」

「ふん、これくらいという事はないわ。さ、行くぞ」

そうして彼らは廊下を歩き、会議室として使われる広い部屋へと移動した。

そこにはプルートの護衛のためについていった雪菜と天羽の姿もあり、それぞれお茶を飲みながら待機していた。プルートらも部屋に入り、お茶を淹れてもらおうと大砂漠に

向けての予定を立てていく事にする。

その情報の纏めの中でこの名が挙がった時、十兵衛はピクリと反応を示した。

武藤風である。

「大砂漠に入ってから風の風は順調に蛇竜種を狩っておるようですよ。あれの目覚めも早さが増しているとか。やはり素材が素材であるが故に、相性が良いのであろうて」

「ふむ……一足先に大砂漠入りしただけあつて仕入れた情報は多いな。……む？　UN KNOWNも目撃しておるのか」

「であるそうで。交戦はしておらんようですが、見るだけでもなかなか得るものはあつたようですよ。今もなお観察は続けておるようですが、なんでもドンドルマから派遣されしギルドナイトも奴の情報を得ようとしておるとか」

「ギルドナイト、か。そういうえば以前より大砂漠の調査隊が入っておつたな」

そんな事を話す兄妹をよそに、十兵衛はその武藤風についての話をこつそり刹那から聞いていた。槍を使う戦士にしてハンターであり、対人、対竜どちらもこなせる実力者。

天羽の天羽々斬と同じような特徴を持つ妖刀を所持しており、現在大砂漠で目覚めを促している最中だとか。その話を聞いて十兵衛は以前遭遇した桐音の弟、草薙武を思い出した。

（そういうえばこの人らも偽名を使っていたし、その武藤風とやらも草薙武の偽名なんだ

ろうな。たぶん……藤は植物繋がりで草に変え、風をくつつけて草薙。残った武はそのまま名前つてとこだろうね)

そう思い至り、話を聞き続ける。

「今もなお観察を続けているらしいです」

「ふむ……UNKNOWN、か。果たしてどのような個体なのであろうな。まだ見ぬ強力な存在……くく、心が躍るわ」

プルートは思わず、といった風になやりと笑みを浮かべてしまう。

大砂漠に潜む魔の存在。

はたしてどれほどのものなのだろうか。そしてそんな相手を観察しに行っている武藤風こと草薙武はどうしているのだろうか。プルートは火夜が集めた情報を聞きながらそう思いを馳せるのだった。

○

大砂漠の南西、中規模のオアシスを拠点として、レイン・スカーレットを隊長とするギルドナイトの隊員が集まっていた。先日、命からがら帰還した女性隊員から寄せられた情報により、UNKNOWNの正体が少し明らかになったのは記憶に新しい。

だが詳細については現在もなお調査が続いている。犠牲者が出てしまったが、元より覚悟の上でここに来ている。中断して撤退する事はない。

どのようにして奴の情報を集めていくか、ここに作戦の詰めを行う事にした。

そうして話を進めていき、UNKNOWNが飛び去っていった方へと小隊を派遣し、調査を進めることとなる。またUNKNOWNの力量が通常ではないため、レインも複数の小隊を率いて調査に乗り出す事となった。

そうして彼らは夜の砂漠を移動する。情報によればUNKNOWNは昼より夜の方が目撃数が多いという話だった。そこでレイン達は日が暮れてから行動を開始する事にした。

視界が悪い夜の砂漠。辺りを見回しても変わり映えない砂の海が広がるばかりであり、UNKNOWNどころか他の大型モンスターだけでなく小型モンスターもいない。このまま何事もなく歩き回れば平和な事だろうが、しかしUNKNOWNの事を調査するためには奴を見つけなければならぬのだが。

「レイン隊長」

そこでレインの後ろをついてきていた一人の隊員がそつと声を掛ける。「どうした、アスベル？」とレインが肩越しに振り返って無言で聞き手となる。

「黒レイアとは、やはりかの狂化竜の生き残りなのでしょうか」

「……さてな。それを確かめるためにも我々が調査しないといけない。わたしとしては狂化竜の生き残りであってほしくはないのだがね」

六年前の大事件の際にドンドルマ方面で猛威を振るっていた狂化竜。

狂化の種を植えられ、汚染の力によって主に黒く染まる事の特徴とした特異の竜達である。最初こそ飛竜種ばかりだったが、それだけでなく大型モンスターならば誰もが植えられ、発症した際に狂化体として各地を暴れ回る存在だった。

最終的にこれらは闇の力を高め、各地に被害を与えることで更なる闇を作り上げ、それを一点に収集する事で目的を達成せんとした神倉羅刹の陰謀である事が判明。実行犯である神倉朝陽ですら踊らされていたという真実が明らかとなった。

だがその頃にはもう既に狂化竜は全滅していた。あれから六年が経過しており、その間も生き残りと思われる個体は発見される事はなかった。故にギルド側は、狂化竜は全滅したものと判断した。

——しかし、六年の時を経て、どういいうわけか狂化竜の生き残りと思われる個体が現れた。

それがUNKNOWN。

漆黒に染まり、数点において攻撃的に変化し、血の如き赤に染まりし黒きリオレイア。報告に聞く限りではその攻撃能力も通常体よりも高まっており、異質なものへと変質

しているという。狂化竜のデータを見返す限りでは、攻撃能力が高まっているという情報があるので問題ない。

攻撃能力だけでなく防御能力……身体能力の上昇。それに伴う素早さの高まり。

通常の飛竜を相手にするよりも厳しい状態となって襲い掛かってくるのだ。個体によつては古龍に匹敵するものまで現れ、それだけでなく古龍までもが狂化体として襲い掛かつてきた事だつてあつた。

しかし自分達は狂化体を全滅させた。それはすなわち、その古龍すらも討ち倒してきたという事に他ならない。

人は、いつだつて強大な敵を前にし、一度は膝を折りながらも最終的には乗り越えてきた。今回もまたきつと乗り越えられる試練だろう、と思わないとやっていけない。レインの頭の中には、多くの犠牲を支払つての勝利だろう、と結末が想定されていた。

もう何人もの罪のない旅人たちが死んでいる。そして隊員も死んだ。発見されてはいいのだろうか、狩場に現れてハンター達を消し炭にした可能性だつてあるだろう。それらの犠牲の上に勝利を掴むだろう、と考えてしまうのは仕方のない事。

だがそれでも、やらねばならない。

やらなければこれからも犠牲者は増え続けるのだから。

「……むっ。」



不意に、遠くで弾けた音が響き、遅れるようにして赤い煙弾が空へと上がっていく。同時に空気が変化したような気がした。

いや違う。

前方から冷たい空気が流れ込んできているのだ。肌をちりつかせるように冷たくも鋭い刃のような空気。

殺気だ。

無造作に撒き散らされていう殺気の一部がここにまで届いているのだ。一体何が起こっているのかなど推察するまでもない。奴があそこにいるのだ。

「赤の煙弾……緊急事態か。行くぞ」

「はっー」

空に伸びる赤い煙と流れ込んでくる殺気の道しるべに従って走り出し、夜の砂漠を駆け抜ける。変わり映えのしない景色は相変わらず続くが、少しずつ岩山らしき影が見えてきた。そしてそれに重なるようにして竜の姿がうつつすらとみえてきた。

それだけでなく奴と戦っている人影らしきものが見えてきた。

「あれは、カインとアサギの小隊だ」

「遭遇したのか……！ 隊長、あいつらに」

「ああ、助太刀に入るぞ！ 遅れるな！」

「はっ！」

それぞれ得物を抜いて側面から攻撃を仕掛けていく。先手を取ったのは先ほどレイ  
ンに声を掛けたアスベルだ。緋色の刀身をした大剣だが、規定の長さよりも更に長さを  
感じさせる刀身をしている。それを大振りに振りかぶると、その長き刃の重量に任せて  
一気に振り下ろした。

プリメーロエスパード。

モノプロスの真紅の角をはじめとし、飛竜種や古龍種の特種な骨を用いて強化を施さ  
れた大剣だ。無属性ではあるが、特殊な素材を用いただけでなく、その長さを伸ばした  
事で更なる重量が加わる事で威力を底上げした一品だ。

扱えるハンターは限られるが、それ故に扱えることが出来れば心強い武器となる。

振るわれたそれは接近に気づいたUNKNOWNの左翼を斬り、少量の出血を引き起  
こした。だがそれに怯む様子はなく、乱入してきたレイン達へと振り返ってくる。

そんなUNKNOWNへとレインは構えたソニックボウVIIに番えた矢を高速で撃ち  
出す。一呼吸で四連の矢が放たれ、それをとめどなく繰り返していく事で次々とUNKN  
OWNの顔や首へと矢が突き刺さっていった。

内包された属性である氷の力が発揮され、傷口を凍結させる事で冷気の力もUNKN  
OWNへと与えられるが、やはり堪えた様子はない。

「アリカはカインらの被害状況を確かめろ。他の者らはUNKNOWNの気を引く。彼らが体勢を立て直すまで持ちこたえろ」

「了解！」

レインの指示に従って女性が離れた所にいるギルドナイトらへと向かって行く。その彼女を補助するべくもう一人が手にしているランスを構えて接近していった。

彼女が手にしているのもまた規定よりかなり長いランスだ。細長く、しかし中心部は毒々しい色に染まった意匠が施されたどこか西洋風のランス。盾もまた上部はひし形、下部は先端が少し尖った楕円型の厚くがっしりとした造りになっており、合わせてみれば対人戦でありそうなランスに見えなくもない。

ネブラコルムナ。

オオナズチの中でもかなり強固な個体から得られた素材で作られたランスである。しかも毒と龍属性が両立されており、二属性を得た希少なランスだ。それだけでなく極長のランスと様々な試みを施されており、これを得たハンターはかなり少ない。

それだけでも彼女が凄腕のハンターである事は明らかだろう。

「破ッ！」

彼女はその長いリーチを生かしてUNKNOWNの反撃が届かない所から攻撃をしかけていく。顔へと突き刺さっていくその切っ先から放出される龍属性の力と、染み出

る毒がUNKNOWNにちくちくと突き刺さり、否が応でもUNKNOWNの意識は彼女へと向けられていく。

そんなUNKNOWNの側面から「強化」と一言だけ告げ、レインが引き絞った矢を解き放ち、首や胸へと強く矢が突き刺さる。

昔は長く術を告げることで強化を施したが、今ではただ一言告げるだけで矢を強化する事を可能としていた。これが彼の成長の証として見られるだろう。

「カイン、大丈夫?」

「アリカか。……何とかな。でもアサギの小隊に二人ほどやばい状態にあるんだ。あの二人を下がらせたい。それからの手当て、頼めるかな?」

「……わかった。任せて」

そうして負傷している二人を抱えるとその場から離れていく三人。UNKNOWNも離れていく気配に気づいて視線を動かそうとしたようだが、女性ハンターのネブラコルムナが何度も突き刺してくるのでこちらに対応せざるを得なかった。

低く唸って軽く息を吸い、開かれた口からあの火球が放たれる。素早く身を引いて躲し、背後へと飛んでいったその火球は砂に着弾すると、その周囲を吹き飛ばしながら青と紫の火柱を立ち上げる。

通常のリオレイアの火球ではまず起こらない現象とその色合いに、レイン達は一瞬だ

け顔をひきつらせ、しかしすぐにUNKKNOWNへと意識を向ける。UNKKNOWNへと連続して攻撃を仕掛け、体力を削るだけでなく意識を引き付け続けることで、彼らの手当てを安全なものへとする。

だがUNKKNOWNはネブラコルムナを手にしている女性ハンターに狙いを定めると火球を撃ち出す。盾を構えてしっかりと防御するだけでなく、少しだけ距離を詰めるから勢いをつけて突き出した。

彼女が装備しているのはクシヤナFシリーズ。クシヤルダオラの素材を用いて作られており、スキルとしては麻痺無効、龍風圧無効、回避性能+2、ガード性能+2、ガード強化、寒さ無効と守りの面に高まったスキル調整をしている。

「ナターシャ、無茶はするなよ！」

「問題ないよ……。これくらいのギリギリのサジ加減、いつものことなのだから、ね……！」

控えめな声でそう言いつつ噛み付きを避け、体に力を入れてからのタツクルをすれすれで躲す。だがタツクルの回避のためにUNKKNOWNと接近した事で、奴の真紅の瞳が近づいてしまった。

「……………く」

間近で発せられる凄まじき殺気。飛竜種だというのに古龍種に近しいかそれ以上も

の殺気をぶつけられ、ナターシャと呼ばれた女性ハンターが一瞬硬直した。

その一瞬を見逃さず、UNKNOWNは背後からプリメーロエスパードで斬りかかっているアスベルも巻き込むように、体を捻って尻尾を振るった。勢いをつけてしなる尻尾はナターシャを吹き飛ばし、アスベルを巻き込んで襲い掛かるが、彼は何とか躲したようだ。

だがUNKNOWNは引き返すようにもう一度回転し、側面からアスベルを薙ぎ払う。しかし彼は体を屈めることで尻尾をやり過ぎし、構えたプリメーロエスパードを突き出してUNKNOWNの足へとダメージを与え、尻尾をはね上げるようにプリメーロエスパードを振るう。

とにかく彼らはUNKNOWNの攻撃を受けないようにとリーチの長さを生かして戦っていた。危険な相手である事は明らかなので、攻撃を受けないようにという立ち回りで戦っている。

しかしそれでも奴から発せられる殺気が体を僅かに緊張状態へと陥れる。その緊張が、体の動きを少し阻害させているのだ。僅かな差であったとしても、全力を出せないというのはハンターにとって厳しいものとなる。

「ふっー」

レインが一瞬の隙を狙い、正面からUNKNOWNの頭を狙って貫くようにして強化

された矢を放つ。それは狙い通り頭に突き刺さっていき、甲殻の隙間を裂いて内部の肉へと僅かに到達する。

その痛みに怯んだ隙を狙い、ナターシャがネブラコルムナを頭部へと連続して突き刺した。それに続くようにアスベルもプリメーロエスパードを臀部から尻尾に掛けて素早く振るっていく。

そのダメージが通じた刹那――

――覇気が高まった。

「グルルルル……ゴルアアアアアアアアアアアア!!」

大きく息を吸いこんだUNKNOWNが体を引きながら首を下げると、天を仰ぎながら咆哮する。瞬間、奴を中心として凄まじい熱気が解放され、渦を巻いて空へと伸びていった。

その光景に、レイン達は息を吞まざるを得ない。

ただの飛竜種ではないとは思ったが、このような現象を引き起こすなど誰が想像するだろう。まるでテオ・テスカトルやナナ・テスカトリが纏う龍炎の如き炎のオーラが数秒とはいえ、UNKNOWNの体から放出されたのだから。

ただの怒り状態ではないだろう。怒り状態に近い何か、だ。

一瞬、UNKNOWNの視線が周囲を見回したかと思うと、体に入力ながら翼を

持ち上げ、地面へと叩き落とした。それにより強い地響きが発生し、アスベルの動きを止める。ナターシャはその動きを見て察知したようで、ネブラコルムナを構えたままステップする事でその揺れから逃れる事が出来たようだ。

数秒程度の隙を見てまた頭へと何度か突き刺して攻撃を仕掛け、また距離を取る。だがUNKNOWNは彼女を追わず、体を震わせながら何度か足踏みをし、ぐつと体を逸らしながら白いガスを放出し始めたではないか。

まさかの行動に驚く間もなく、振動によって体の自由を奪われていたアスベルはそのガスを受けて吹き飛んでしまう。

「ぐ、は………っ!?! ……な、こ、これは………」

吹き飛ばされたが受け身を何とか取り、すぐに起き上る。だが彼はガスの影響で身に着けている装備が軟化している事に気づいた。ガスに含まれている粒子によって硬度が下げられているようだ。

「アスベル、一旦下がっておけ! わたしが前に出る!」

彼の状態を確認したレインはソニックボウVIIをローブへとしまうと、ギルドナイトらが所持する太刀の最終形態であるアトランティカを抜く。そのままUNKNOWNへと斬りかからんとするレインだったが、背筋を這い上がった嫌な気配を感じ取って急ブレーキをかけた。



UNKNOWNはレインへと振り返ると、その口を大きく開き、凄まじい熱気を持つ光線を撃ち出したのだ。火球と同じく青と紫に染まったその熱線は夜の砂漠を貫き、砂塵を巻き上げて彼方へと消えていく。

走り続けて距離を詰めていけば避けきれなかったかもしれないあの熱線。直撃すれば消し炭となり現世から別れを告げるであろう一撃を、奴は飛竜の身で容赦なく放つてくるのだ。

しかし大きな一撃は放った後に隙を晒す。それはUNKNOWNであったとしても変わりはない。レインは瞬時に距離を詰めて顔から首にかけて薙ぎ払い、すぐに距離を取るように離脱する。

それを感じ取ったらしくUNKNOWNは素早く尻尾を振るってレインを薙ぎ払おうとするが、レインはそれを躲していく。同じように体勢を立て直したナターシャが、ネブラコルムナを構えてUNKNOWNへと接近し、翼を狙って突き上げていった。

力を解放する事で周囲を圧倒する覇気が高まった事で、レインらは体がまた緊張状態に入るかと危惧したが、これくらいならばまだ耐えられるようだと小さく安堵する。

レイン隊の中でも選りすぐりのハンターであり、隊長であるレインの親衛隊のようなものでもあるメンツのため経験豊富であり、強力な竜らと戦ってきた人材だ。

ネブラコルムナの素材となった強固なオオナズチをはじめとする古龍や、未開の地へ

と赴いての新種との交戦など、厳しい任務を前線でこなしてきただけあって心身ともに鍛えられている。

だからUNKNOWNを前にしてもまだ戦えていた。

他の隊員もレインと同様に任務をこなしているが、数か月前に新たに隊に加わったメンツなどはまだまだ実力を磨き上げている段階だ。昨日の被害者はその中の数人である。未来ある人材を失ったのは心苦しいが、これもまた厳しい現実。

だからこそこれ以上の犠牲は出すまいと、レインらは戦う。

そんな彼らを見ている者がひとり。

岩陰に隠れながら、双眼鏡を覗き込んでじつと息を潜めながら彼はその戦場を見つめていた。

「興味深いねえ……あれが、噂のUNKNOWNか。ふむふむ……実に興味深いねえ」  
そう呟く草薙武は久しぶりに強敵を前にしたような興奮を感じていた。噂だけが独り歩きし、UNKNOWNに関する情報は曖昧なままだったが、あれほどまでの存在感を放っていると案外噂も馬鹿に出来ないな、と思わざるを得ない。

離れた所に浮遊していた古龍観測隊の気球を撃ち落とすとか、眉唾物だったがあの熱線を見てもええ本当なんだろうと思えるし、ディアブロスをはじめとする強力な個体を難なく打ち倒して捕食していたというのも頷けそうだ。

戦いたい、斃したい……そういう感情が沸々と湧き上がるが、それをぐっと堪えなければならぬというジレンマが感じられ、ぎゅつと拳を握りしめる。

そして岩に立て掛けている一振り of 剣へと視線を落とした。

「お前も喰らいたいだろう？ あの血を啜りたいだろうか？ ……でも、我慢して見届けようじゃないか。あのギルドナイト達がどれだけ戦えるのか、そしてUNKNOWNがどれだけ強いのかをさあ……」

『……………』

武の呟きに静かに剣が応えるように鞘に収められている刀身が鈍く光った。

以前までならばそういう反応を見せる事がなかったそれは、武の言葉に僅かに応えるまでにまで変化していたのだ。

「ああ、でも……我慢できそうにねえかなあ……。今にでも戦いたい……もどかしい、もどかしいねえ……！」

そんなことを呟きながら、武は双眼鏡越しに彼らの戦いを眺め続けた。

## 7 2 話

覇気を高めたUNKNOWNから放たれる殺気はさつきまでとは違っていた。それだけでなく、撃ち出される火球も気のせいかわ威力を高めている。

レイン目がけて撃ち出された火球を躲すと、背後でまた激しい火柱を発生させながら爆発した。次いで背中にあたってくる熱風。それを受け止めながらレインは手にしているアトランティカを構え、UNKNOWNの出方を窺う。

彼が装備しているのは褐色の荒々しきを感じさせる防具。至る所に棘が生え、全身を見ればレインの性格とは相反する暴虐性を匂わせる。

ラヴィFXシリーズ。

大竜ラヴィエンテと呼ばれる巨大な竜の素材から得られたものを使用した防具だ。レインらの任務は主に新たなフィールドの開拓や、新種のモンスターの調査にある。この大砂漠に来たのも、UNKNOWNという謎の存在の調査のためだ。

ラヴィエンテに遭遇したのはその調査の結果にある。レイン率いるレイン隊と別の隊長が率いる隊と協力してラヴィエンテを討伐し、このラヴィFXシリーズを制作し

た。

新たな竜ということもあり、新たなスキルがずらりと揃っているのが特徴だ。

超高級耳栓、見切り+3、各耐性+20、火事場力+2。そして火炎剣、水激剣、雷神剣、氷結剣、龍王剣。これらのスキルは、近年発見された剣晶というアイテムを装着していれば、それに対応した属性が武器に纏われる、というスキルである。

これは魔法を使えないハンターであっても、自分の意図した属性に切り替えて攻撃できる、という画期的なスキルとなった。しかしそれは剣晶の残数が関係し、剣晶が切れればもう意味のないスキルとなってしまう。

「グルルルル……」

「覇気はそのままに観察するような視線……高い知性を感じるな。だが狂気は感じない。そこにあるのは純粹なる意思」

狂化竜は狂化の種とそれに含まれたシュヴァルツの因子により、高い闘争本能とそれに準じた狂気を宿す。それに身を任せ、敵と認識したものをただ攻撃し続ける。

それが狂化竜の特徴。

とはいえ古龍にはシュヴァルツの因子を改造したものを植え込むことで、手駒にした個体がいたことも確かだ。これに関しては己の意思も存在していたため狂化竜とはいえない。

(UNKNOWNとはこの後者ではないだろうか。話に聞いたキリンやテオ・テスカトルのように、シュヴァルツの因子を植え付けられた個体。それを完全に制御し、これほどの力を身に着け、同時に体は闇色に染まった……ありえない推測ではない)

己の気をアトランティカへと纏わせ、内包されている水属性の力を高めていく。周りの隊員からも発せられる殺気に冷や汗をかいているが、戦いをやめるわけにはいかない。それぞれ武器を手にしてUNKNOWNの出方を窺っていた。

「——ッー」

不意にUNKNOWNの視線が動き、その場から跳躍して一人のギルドナイトの側面へと回り込む。続けざまに体全体で当たりに行きながら、口元に火のエネルギーを集めていく。

「させない、止める……！」

ネブラコルムナを手にしているナターシャが盾を構えつつ前進。側面から顔へと殴りかかり、続けるように柄の部分でUNKNOWNの頬を打ち据える。先端で突くのではなく、柄で殴ったのは盾で殴れるほどにまで接近したためだ。

通常のランスより長いため、接近しすぎれば突くこと自体ができなくなる。そのため一定の距離がなければ普通に扱えない。だがナターシャはそれをわかつたうえで接近した。UNKNOWNのブレスを止めるために。

狙い通り、呻き声を上げてUNKNOWNの動きは止まった。その隙に一度距離を取り、頬へと何度も突き入れていく。

レインもまた手にしているアトランティカを振るってUNKNOWNの背後から攻めていくのだが、UNKNOWNが堪えている様子はない。ぎろり、と肩越しに振り返って睨み付け、尻尾を振り回してレインを振り払おうとしている。

それだけではない。軽く体を震わせながら翼を広げ始めたではないか。

「っ、いかんー！」

その意味に気づいたレインが叫び、距離を取っていく。他のメンバーらも同様に離れていくと、UNKNOWNの体から白いガスが噴出される。アスベルが受け、防具の硬度を下げられたガスだ。

これは受けるわけにはいかない。そういう心理を突いたUNKNOWNの攻撃だろうか。離れていったレインらを視線だけを動かして確認し、またしても横に飛ぶようにステツプした。

そうしてレインへと近づくと、力強く翼を地面に叩きつけた。それによって生まれる振動がレインの体勢を崩す。「しま……っ！」と眩くがもう遅い。レインの体を打ち上げるように頭突きをし、彼の体を吹き飛ばした。

そうして宙に舞う彼の体を狙うように口を開き、ブレスを撃ち出そうとしたが、UN

KNOWNの視界を奪うようにナターシャが閃光玉を投擲した。夜の砂漠に射す眩いばかりの光はUNKNOWNの視力を奪い、ブレスを封じた。

「グオオオオオオオ!!」

苛立つように叫ぶUNKNOWNは、しきりに足踏みし、尻尾を振り回す。砂の大地を揺らし、近くにいるであろうナターシャたちを尻尾で吹き飛ばそうとしているようだが、彼女たちは完全に距離を取っていた。

落下していくレインも何とか受け身を取ったが、腹に受けた一撃の重さが彼を呻かせている。ラヴィFXシリーズという強固な守りであっても、その衝撃を体に伝えるだけの威力。奴の一撃の重さがただの頭突きだけでも物語らせる。

『——小賢しい、真似。抵抗、無意味。全て、死を』

ふと、どこからか女性らしき声が聞こえてきた。とぎれとぎれの言葉繋ぎ合せたかのような声だったが、確かにそれはレインらの耳に届いた。あるいは耳ではなく、脳内に聞こえたかのような感覚だった。

「隊長、今のは……」

「ああ、ナターシャも聞こえたならば幻聴ではないのだろう。まさかとは思うが……」

苦い表情を浮かべながらUNKNOWNを見つめると、もう閃光玉の効果が切れてしまったのか、じろりとレインらを見据えているかのような赤い瞳がそこにある。



『ヒト、諦めろ。逃しは、しない。地を、這う、愚かなるヒト。私から、逃げられない』  
 「言葉を解する竜。……飛竜は初めてだろうか」

レインにとって人語を話せる、と耳にしているのはどれも古龍ばかり。クシャルダオラの風花、ヴェルドを襲撃したテオ・テスカトル、旧シユレイド城に現れたミラボレアス。その他にも古龍らと遭遇し、人語を離れたケースがあつたが、飛竜においてそれは確認されなかつた。

古龍は飛竜よりも長く生き、知能も高い。だから人語を解していてもおかしくないだろう、と近年の研究でも唱えられている。何せ魔法に近しいことまでやってのけるのだから、有り得ない話ではないし、実際に確認されている。

だが、だからこそ目の前にいるUNKNOWNがこうして人語を発したことは大きな驚きとなつた。

「UNKNOWN、貴様はなんだ？ リオレイアなのか？」

『……その呼び名、私に、合わない。私には、フィーアという、言葉ある。ヒト、貴様ら、呼称する、竜の名、意味なし』

低く唸りながら、UNKNOWNはそう告げる。

そうしながらゆっくりと覇気を高め、天を仰いで咆哮した。すると、またしても赤いオーラが天へと昇り、UNKNOWNから更なる力の高まりを感じた。

「まさか、まだ力が上がるといふのか……!?」

『諦める。死を、受け入れよ。私は、他のもの、違い、貴様らを、殺す』

ぐぐつと足に力を込めたUNKNOWNは、勢いよく跳躍。その勢いのままレインらへと飛びかかり、両翼を力強く振り下ろした。レインらが横へと逃げるが、UNKNOWNは数歩後ろへと下がりながら軸を合わせ、勢いをつけて翼を振りぬいた。

すると、翼の先端に生えそろつている赤い棘が射出されたではないか。息を呑みながら、反射神経を全動員して危機を感じ取り、身を屈められたのは一種の奇跡だった。背後で一人のメンバーが棘に貫かれ、吹き飛びながら砂を転がっていく音が聞こえたが、振り返るような真似はしない。

射出された棘は数秒すれば再び生え揃うだけの再生力を持っていた。つまり、もう一度撃ち出そうと思えば撃ち出せる体勢にある。UNKNOWNから今、視線を外すようなことは愚行である。

「カイン以下隊員四名、戦線に復帰します！」

「アサギ含む三人が戦線離脱、それに付き添う形で二人が拠点へと戻りました。アリカも戦線復帰いたします」

「了解。なんとしてでも抑えねばならない。厳しい戦いだろうが、堪え——ッ、退避い——」

叫ぶと同時に、開かれた口から紫色の炎が凝縮された熱線が放たれる。夜の闇を切り裂くその昏い光は、多大なる熱気を取り巻いて一点を貫く。レインの叫びで何とか飲み込まれるものはいなかったが、砂すらも溶かすほどの高熱の一撃が、その威力を物語る。

UNKNOWNの攻撃は止まらない。

首を持ち上げたかと思うと、連続してレインらを狙った火球を撃ち出す。それは砂に着弾すると、またしても火柱を巻き上げるほどの威力。数秒だけではあるが、そこに停滞して燃え上がる火柱。それを回避先、進路上へと撃ち出していくのだ。

接近させまいというUNKNOWNの意思が感じられるが、それでもレイン、アスベル、カインをはじめとするメンバーがUNKNOWNへと接近。手にしている武器を振るおうとしたのだが、UNKNOWNは力強く翼を羽ばたかせながら火球を撃ち出した。

その衝撃と翼により奴の体が後ろに下がりながら宙に浮く。それだけでなく、爆発したことで立ち上る火柱は、風を受けてより激しく燃え上がった。

その熱風と衝撃にレインたちの進軍は止まる。

これを機としてUNKNOWNが更に上昇しながらレインたちへと接近。上空に位置取りながら地表に向けて連続して火球を落としてきた。

まさしくそれは空爆。

歩みを止めたレインたちではあるが、動けないわけではない。空爆に気づき、それぞれ散りながら避けていく。だが突如UNKNOWNは羽ばたくのをやめ、勢いよく落下してきた。自ら優位に立っているはずの空から落下。だがそれは攻撃になりえる。

翼を広げながら砂の大地に降り立つ奴の重量により、大きな振動が生まれ、それだけでなく広げた翼によって逃げ遅れた一人が潰された。

「くっそ……！　これ以上はやらせるかアッ！」

また一人仲間がやられた。そのことにアスベルもとうとう我慢の限界が来たのだろう。プリメーロエスパルダを勢いよく振り回し、広げている翼を切り裂いていく。その重量と遠心力が乗った刃の一撃は確かに翼に傷を作り上げるのだが、しかしUNKNOWNにとってはまだ大きなダメージとはなりえない。

『抵抗、無意味。貴様の、牙、私には、通用せず。私を、殺すなら、より鋭い、牙、用意せよ』

「——だったら、この牙なんてどうだい？」

それはレインたちにとって聞き覚えのない少年の声だった。ここにいるのはレインが率いてきたギルドナイトの隊員とUNKNOWNのみのはず。

だがその声は聞き覚えのないもの、つまりは隊員ではない誰かだ。

その疑問を感じたその一瞬後には、アスベルの対面にある左翼を切り裂かんとする剣閃が放たれていた。それは左翼に一閃の傷を作り上げ、血を噴き出させる。低く唸りながら、UNKNOWNは新たな敵を見据えんと振り返る。

それに合わせてレインらも距離を取りながらそちらを見た。

そこには確かに一人の少年がいた。体を包む赤いローブには竜の紋が描かれ、黒い髪をオールバックにしている少年。その手には、一振りの剣が握られている。だがレインはその剣に見覚えはない。

夜の闇でよく見えないが、それは剣であることは間違いない。しかし何かがおかしい、そう感じさせる得物を少年は手にしている。

ただの剣ではないことは確かだ。良質の鉱石を使用するだけでなく、柄はなんらかの竜の鱗らしきものが覆われ、内包する力も軍に出回るような長剣などが持つものではない。ハンターが使用するような、あるいは魔剣と呼ばれるような、そんな秘められた力を感じさせる。

『……………、その剣、なぜ、ここに？』

「ああ、これ、知ってるんだねえ……そう、嬉しいねえ。いや、悲しいかなあ？ 知っているなら話は早いんだよねえ」

呟くような声でそんなことを言いながら、少年——草薙武は手にしている剣を目の前

まで持って行き、「——目え、覚めたか？ なら、喰らいつこうぜ？ シフト・ランサー」と告げる。

すると、柄に嵌められている水晶のようなものが明滅し、低く唸り声を上げるかのような軋む音が響きだした。ガチガチ、と金属が擦れるような音。それは剣から発せられている。

刹那、刀身がずれはじめた。半分に分かれた刃は上下にずれ、柄の横に伸びている部分は中心の水晶部分を挟むように縦になり、一気に半分になった刃を包むように伸びていく。まるで覆われている鱗が剥き出しになっている肉を覆い隠すかのような変化だ。そうして変化が終えたとき、剣は槍と化した。

（剣が、槍になっただと？ 馬鹿な!? そんな武器など聞いたことがない！ なんだあれは!）

レインたちは困惑する。

UNKNOWNの事もあるし、突然現れた武の事も気になるが、それ以上に変化した武器が彼らの困惑にとどめを刺す。

先端部分の刃と、伸びた鱗の柄の二つの部分にうつすらと目らしきものが浮かび上がっているのが確認できる。そんな中、ナターシャはあの剣の変化について思考した。

（剣だった時も、峰の先端部分にあのような目らしきものがあつた気がする……。でも

その時は赤だったはず……今は青。何か、意味がある……？ それにあの鱗に目を照らし合わせると、竜というよりも……蛇？」

『……古き、時代。ヒトも、妙な武器、作ったもの。実に、興味深い。……私に、とつては、実に、最近な、話だが』

「へえ、最近？ 妙なことを言うねえ。これ、千年以上も昔の得物だけ？ そんな時代から、古龍でもないのに生きている、とでも言うのかい？ えーつと、UNKNOWN？」

『答える、必要、感じない。しかし、なぜそれが、ここにあるか。その点は、気になる。どうして、それを、持っているのか。それは、役目、終えて、封じられたはず。そのよ  
うな、魔劍……、否、妖刀、存在、してはならない。冥の、力を、宿す、武器——天叢雲劍』

それは草薙一族にとっての宝劍。

遙か昔に冥蛇龍・ディス・ハドラーを討伐した後、奴の素材を用いて制作された武器。それがこの天叢雲劍である。

草薙一族の技術を用いて作られたそれは、ただのハンターが手にするような武器とは一線を画する。古龍、それも伝説種の素材を用いた、というだけでも高い能力を保有するのに、特殊な技術で更なる力を秘めてしまった。だからこそ草薙一族は天叢雲劍を普段から使用することを禁じ、宝劍として眠らせたのだろう。

だが武はそれを持ち出し、長い眠りから覚めさせるために竜の血を吸わせていった。

そして今、力の一部が目覚めたのだ。

「竜なのにしゃべっている、という点でも興味深いのに、これを知っている……実に興味深い、興味深いねえ……！ UNKNOWN……！ なんなんだい、お前は？ ああ、殺すのが惜しい、実に惜しい！ 悲しい、悲しいなあ……！」

『……ヒトの、中にも、このような、個体、いるのか。何と、言えば、いいのか。……否、考えるだけ、無駄。全て、殺す。死を、受け入れよ、天叢雲剣の、使い手』

そう告げて、またしても天を仰いで咆哮を上げた。

これで三回目の自己強化。溢れ出る力の波動もいよいよ馬鹿にならなくなってきた。だというのに、武は上等だとばかりに笑っていた。

「残念ながら、それはオレのセリフでもあるねえ。こうして我慢できずに乱入してしまっただ。戦果を挙げさせてもらう。つーわけで、こいつのために、死んでくれや。あるいは、血を吸わせてもらおうか！ UNKNOWN！」

槍の形状となった天叢雲剣を数度回転させ、UNKNOWNへと突撃していく草薙武。もちろん、突然の乱入の上にUNKNOWNへと攻撃していく武はレインたちにとつて驚くべきことだ。

しかし天叢雲剣という名前に聞き覚えはなくとも、あれがUNKNOWNでも通用する武器ではないかということは推察できる。それを扱う武の実力が高いものならば、戦



力としては申し分ない。

「ギルドナイトらの戦いを眺め続けるってのもよかったが、見ていただけってのは性分に合わねえ！ やっぱり実際に戦うってのが一番だよなあ！ はっはあ！ 覚悟しろやあ！ 迅気、纏！」

『……この、気配。竜の、気質……なるほど、故に、天叢雲剣、手にするか。今も、存命し続ける、竜殺しにして、妖刀作りの、一族よ』

「知ってくれているようで何より。なら、その血をよこしな！」

高速突きを繰り出す武の表情は喜色に満ちている。だがUNKNOWNはそれらを首を動かして致命傷を避けていた。自分の突きを躲し続けるUNKNOWNに、そこで初めて武は僅かな驚きを見せた。

竜が自分の突きを躲していく、なんてことは今までなかった武だ。

そこに隙が生まれる。

それをUNKNOWNは見逃さない。甘い突きを左翼で受け止め、弾きながら一歩進みつつ右肩からぶつかりに行った。それでは終わらずに、武をかち上げながら口を開き、火の粉を集めつつ噛みつきに行った。

「はっ、まだまだあ！ 角気、収束」

武は宙に舞いながらも天叢雲剣を構え、そこにディアブロスの力を纏わせた。頑強な

黄土色の光に包まれた天叢雲剣を開かれた口へと突き入れ、完全に閉じる前に口内に強い痛みを感じてUNKNOWNは退いてしまった。

リーチが長い槍だからこそ出来た芸当だろう。地面へと降り立つ武に代わり、レインたちがUNKNOWNへと攻撃していく。

下がって来たUNKNOWNを迎え入れるように、ナターシャがネブラコルムナを構えていた。タイミングを合わせ、力を込めた一撃を尻尾、臀部と連続して突いていく。

レインもまたアトランティカに代わり、霞双剣オオナズチを取り出した。ナターシャが持つネブラコルムナと同じく、強力な個体のオオナズチの素材を使用して作られた双剣だ。しかしネブラコルムナと違い、毒属性しか内包していない。

だがレインはラヴィフシリーズによって剣晶スキルが発動している。

「……ぐわい」

龍王剣晶を装着し、霞双剣オオナズチを手にUNKNOWNへと迫る。

剣晶スキルは剣晶を用いることで武器にそれに呼応した属性を追加する。武器に既存の属性があつた場合、それを上書きしてしまうのだが、状態異常の属性ならばその限りではない。

アトランティカならば水属性から龍属性へと切り替わってしまうが、霞双剣オオナズチならば龍と毒の二属性となる。つまりはネブラコルムナと同じ形になるのだ。

「グッ、グルルル……い」

ネブラコルムナに加わり、霞双剣オオナズチにも連続して斬られ続け、ついにUNK NOWNは毒状態に陥ってしまった。だがそれにしても毒耐性がかなりあったように思える。

(状態異常に耐性がかなりあるのか、あるいは……)

また別の要因があるのか。それについて考えている暇などない。

アスベルとカインも対面で攻撃し続けているが、UNKNOWNはそれに堪えている様子などない。鬱陶しげに体を震わせたかと思うと、素早く翼を広げて力強く地面を叩いた。

そうしてレインらの動きを止めると、その場で勢いよく回転して尻尾で薙ぎ払ってくる。その上で勢いよく飛び上がり、空爆をしようとどめを刺そうとする。

何とか身を屈めて尻尾をやり過ぎ、空爆もその場から飛びのいて逃げる。

しかし逃げるのをわかつているUNKNOWNは素早く地面に落下し、またしても強い振動を発生させる。逃げるレインらを追いかけるように走り出し、素早くステップして回り込んでいく。

その速さが先ほどよりも明らかに上昇している。

怒り状態に自ら移行するだけでなく、己のリミッターも外しているのか、と疑

うばかりの能力上昇。

これはやはりオレイアなどではない。

UNKNOWN、という完全なる別個体、別種族。そうとしか考えられない。

それを内側から湧き上がる恐怖の中で思い至り、レインはぶるつと体が震えた。

(……く、震え、た……？ これほどの震え、いつ以来、だ？)

六年前のミラボレアス以来だろうか？

ラヴィエンテと交戦した以来だろうか？

レインですら本能からの震えが発生するのだ。アスベルたちもまた、体だけでなくガチガチ、と歯が打ち鳴らされるほどの恐怖を感じていた。

目だ。

UNKNOWNの目が、瞳が爛々と赤く輝きだしている。

『死を、全てに、死を。私、ファイアは、逃がしは、しない』

大きく息を吸い込み、熱線を撃ち出す体勢になるUNKNOWNへと、「オレを忘れるんじやねえよお！」と天叢雲剣をUNKNOWNの頭へと突き落す。だが刃は薄く入り込むだけ。しかしそれだけでも十分だ。

武を振り払うように頭を振り、距離を取りながら向き直るように振り返るUNKNOWNへと狙いを定め、「槍術奥義が一、地碎ちくたさい！」と告げながら跳躍。狙いすました一撃は、

UNKNOWNの額目がけて飛行する。

だがUNKNOWNはその一撃に反応していた。

あの高速突きに反応できていたのだから、角気を纏う天叢雲剣という流星にも反応できるのは明白。両翼で顔を庇い、突き刺さる天叢雲剣を振り払う。しかし天叢雲剣は思った以上に翼に突き刺さっていた。

刃は血を吸い、柄に更なる文様が浮かび上がって明滅する。それにより、ギリギリと翼膜から漏れる血を吸い続けながら、両翼が再び広げられるのを封じているのだ。

防御が、そのままUNKNOWNの動きを封じ込める形になった。

「さあ、仕留めさせて——」

『——これで、私を、止めた、つもりか？』

刹那、殺気が膨れ上がる。

轟ッ！ と熱風が渦を巻きながら立ち上り、激しい咆哮を上げて無理やり天叢雲剣を抜くように翼を上げ、一気に広げて遠くへとそれを放り投げた。どんっ、と砂を巻き上げる勢いで四股を踏み、息を吸い込んだかと思えば、周囲を薙ぎ払うような熱線を放出。やばい、と思うよりも早く、武は勢いよく宙へと飛び上がって熱線をやり過ごした。頭よりも、体が危機を感じ取って動いたかのような回避だ。

レインも同様で、砂の丘から飛び降りるように逃げた。地形的な幸運に恵まれた形

で、上を通り過ぎた熱線から身を守るべく、自分から砂に飛び込んでやり過ごさせた。

『私を、舐めて、いないか？　今までで、強化、終わったと、思ったか？』

「嘘……でしょ……？」

「ふざけて、やがる……こんなのが、いてたまるか……！」

アリカとアスベルが震える声で言ってしまうほど、UNKNOWNから立ち上る力は彼らの理解の範疇を超えていた。それだけではない。爛々と輝いていた瞳の赤は、ナルガクルガのように残光を描くほどにまでなっている。

しかも毒状態になっていたはずだ。それがなくなっている。

UNKNOWNの体を侵す力の動きが綺麗さっぱりなくなっているのだ。自己強化をする際に、体を侵す毒物質を完全に除去したとでもいうのだろうか。ならば今までナーシャがネブラコルムナで攻め続けてもなお、毒状態にならなかつた理由の説明がつく。

『絶望、せよ。ヒトに、私を、討つ手段は、ない』

動けないアリカとアスベルを狙い、UNKNOWNが跳躍する。そのまま二人を押しつぶさんと落下していったが、何とか二人はそこから逃れられるだけの気力があつた。

今までならば、それで難を逃れただろう。

しかしUNKNOWNは更なる一手を加えた。

その両足は砂の中へとめり込んでいます。今まで以上の力と体重を込めた結果だろう。それにより両足は地中に沈んだと考えられる。これは好機か？と思われたのも束の間。UNKNOWNは尻尾をも地中へと潜り込ませ、力強く羽ばたくことで浮上した。

結果、めり込んだ両足を中心として周囲の砂が舞い上がったのだ。

想定できなかった現実には、二人は砂とともに飲み込まれる。体は宙に舞い、視界は砂に塗りつぶされる。悲鳴すらも飲み込み、何が何だかわからないままに重力に逆らい続け、そしてそれに従って落下する。

だが、UNKNOWNは低空飛行をしながら勢いをつけるように右翼を引き、砂を両断するように薙ぎ払った。すると、砂の中に大量の赤が塗りつぶされていく。

「……………!?!」

その様子をレインはただ見ていることしかできなかった。

砂の中から転げ落ちていった物体。それは何が起きたのか理解できない、そんな感情を浮かべたアリカの上半身だった。下半身は、ない。砂の中に飲まれたままなのだろうか。

血と内臓がその切断面から尾を引くように零れ落ちながら、彼女の体は大地に戻ってくる。鉄分を含んだ匂いが呆然とする彼らの鼻を微かにくすぐる。砂に飲まれながらも、その赤は砂に交じり、一部がぼとりぼとり、と大地に落ちていき、赤と薄ピンクの

腸とともにぶちまけられた。その様子を、レインたちは息を呑みながら見ているだけ。UNKNOWNもまた大地に戻り、赤い残光を残しながら残っているメンバーを見回していく。恐怖に囚われた獲物ほど、狩りやすい存在はない。

全力を出すまでもなかったか、と考えながら、次の標的を定めて翼を引く。

「うわああああああああ!!」

その時、UNKNOWNの背後から、カインが叫び声を上げながら手にしているボウガンの引き金を引いた。それは呪王弩チャチャブー。奇面族の秘宝などを用いて制作された独特の外見をしたライトボウガンだ。

装填されている滅龍弾を速射機能で撃ち出し、UNKNOWNへと湧き上がる怒りと悲しみのままに攻撃する。

「よせつ、カイン！ 無理するなあ！」

滅龍弾を受け続け、僅かではあるがUNKNOWNは呻いた。だが、それだけだ。鬱陶しげに振り返りつつステップしてカインの側面へと回り込む。その動きは、感情のままに行動しているカインでも読めていた。

貫通弾Lv3を装填しながら走り、側面から撃ち抜いていく。それに目を細め、UNKNOWNは狙いを定めるように数歩下がりながら向き直っていき、力を込めてサマーソルトを放った。



その際、尻尾の先端が砂と石を巻き上げて前方へとばらまかれる。サマーソルトの直撃こそ避けたが、巻き上げられるそれが当たり、僅かに動きを止めてしまう。それが命運を分けた。

怯みはしたが、カインの闘志は折れていない。狙いを定めて引き金を引く。

UNKNOWNもまたサマーソルトからの低空飛行へと移行し、カインへと火球を落とした。両者ともに攻撃を放ち、それをもらうが、当然ながらUNKNOWNの火球の方が威力が高い。

もろに受け、爆発するそれはカインの左肩から先を吹き飛ばす。身を守る防具すら役に立たない。いや、顔や体を守れただけでも良かったと考えるべきか、不幸と考えるべきか。

左腕を失う痛み、火球の熱さが残存し、意識を侵し続ける苦痛を、カインは叫び声を上げながらも耐えた。

「殺す、殺してやる……!」

右腕だけでも呪王弩チャチャブーを構えて引き金を引いて見せた。脂汗を浮かばせ、ふらつきながらも彼はそれをやってのけた。それを黙って見ているレインたちではない。

すぐに彼を助けるべく動いていく。

「カイン、下がれ！ ……ごほ、ごほ、その傷でこれ以上戦うんじゃないやねえ！」  
「そうだ！ ……ここから先は私たちがやる……！」

アスベルとナターシャがそれぞれ UNKNOWN へと接近し、アスベルはカインを引き離そうと右肩を掴んだ。だがカインは涙を流しながらそれを振り払う。

「この傷だ、もう僕の命など、そう長くはない。だけど、最期の時まで、僕は戦い続ける……奴を仕留める！ 止めてくれるな、アスベル……！ 彼女のいない日常など、僕にはもう、意味はないんだ。それより、レイン隊長らこそ下がらせるんだ。僕が少しでも時間を稼いでおく。その間に、撤退を……っ、っ……撤退させてくれ……！」  
「……っ、馬鹿野郎が……！ 命を粗末にしゃがって……！」

近くで見ればわかってしまった。傷は左肩だけでなく、左胸や左頬にまで及んでいる。それでも彼は戦う意思を失っていないかった。最期の時までハンターであり続けようとしている。

その覚悟に、アスベルはそんな言葉しか出なかった。

UNKNOWN の脅威は、もはや自分たちだけでは対処しきれないほどにまでレベルが上昇している。

向こうでは天叢雲剣を回収し、背後から攻撃し続けている武の姿がある。地上へと降りた UNKNOWN は、武とナターシャ、レインらを相手にしていた。他のメンバーも、

何とかそれについていつている形だ。

カインをはじめとするガンナーも、遠距離から援護する形だが、その効果も微々たるものだろうか。

これ以上戦っても消耗戦になるだろう。やがて体力的な差により、自分たちの敗北が目に見える。そうなる前に、撤退しろ、とカインは目でも語っていた。

レインも当然ながら気づいている。自分たちの攻撃の通用しなさ、UNKNOWNの能力上昇。恐怖に囚われることによる動きの悪さ。

例え天叢雲剣がUNKNOWNに大きなダメージを与えだしたとしても、この状況がひっくり返るにはまだ足りないことが多すぎる。

「……………やむを得ん。総員、撤退！ 撤退する！ 機を見て離脱しろ！ わたしとカインが時間を稼ぐ！」

「いえ……………レイン隊長も撤退してください……………」

「何を言う。他の皆が撤退するまでわたしも戦うぞ。それが隊長の務めだ」

「……………あなたは、みんなの希望です。ここで死なせるわけにはいかないんですよ……………！」

どうか、撤退を。僕と命運を共にする可能性がある行動はおやめください……………！」

呪王弩チャチャブーを撃ちながらそう進言した。「レイン隊長……………いえ、レインさん」と言葉を続けながら振り返らずにレインへと説得する。

「みんなには、あなたが必要です。どうか、行ってください。生き延びてください！」  
「……………つ、すまん」

『逃がさない』

走り出す彼らの背後から火球を連続して撃ち出すが、そのたびに横へと走ったり跳んだりして逃げていく。ならば熱線で焼き尽くすまでだ、と大きく息を吸い込んだUNKNOWNに、回収した天叢雲剣を薙ぎ払った。

その柄から刃にはUNKNOWNが撃ち出したと思われる、火球の爆風が渦を巻いている。周りに着弾したそれを、武は火気を用いて操作し、纏わせたのだろう。

薙ぎ払われた軌跡に従って、爆風はまるで鞭のようにしなやかに動き、UNKNOWNに意趣返しとして迫っていく。もしここでUNKNOWNが熱線を撃ち出そうものならば、目の前にある爆風に接触した瞬間、爆発するだろう。

そうして作られた時間を利用し、レインたちは撤退していく。

「装填……………貫通……………」

カインはそんな彼らを背に、手にしている呪王弩チャチャブーを広げたローブに押し込み、告げればローブの中で小さな音が響く。左腕を失った今、こうでもしなければ弾丸を装填することすらままならない。そして改めて構えなおした。歪な構えではあるが、撃てればそれでいい。

痛みの感覚はもう麻痺しつつある。あれほどあつた激痛に意識を飛ばしそうになったことも何度かあるが、そのたびに歯を食いしばり、堪えてきた。全ては目の前にいる UNKNOWN に一矢報いるために。

呪王弩チャチャブーを UNKNOWN に向け、引き金を引く。しつかりと固定されていないためか、弾丸はカインが狙っていた部分から少し逸れてしまったが、それでも UNKNOWN の体を貫いていく。ただその射線がダメージを与える部分としては少々効率が悪いというだけではあつたが。

『無意味な、抵抗。なぜ、抗うか。楽に、なるといい』

「こちとら、諦めが……悪いんでね、この借りは返させて、もらう……っ！」

口頭での装填、そして射出を繰り返し、何とか砂の大地を走って UNKNOWN の側面を取っていく。そうして射撃する対面で武が天叢雲剣を振るい、また翼を狙って攻めていた。翼を傷つけることで飛行能力に支障が出るようにしようとしたようだが、やはり硬すぎて天叢雲剣であつたとしても完全に破壊することができない。

その時、カインの背後から複数の剣閃が飛来する。

それは UNKNOWN の顔や足を斬り、奴の意識がカインと武から逸らすことに成功した。

「カインさん！ 俺たちも、共に戦います！」

「なっ……君たち……何をしている!？」

「カインさんだけに殿をさせられません! 俺たちだって戦えます! レインさんらを生かすためにも、協力します!」

「命を粗末にするな……! 僕はもうすぐ消える命、君たちは違うだろう!」

だがレインらと共に撤退したはずのカイン小隊の仲間らは、カインの言葉に耳を貸さず、彼を追い抜いてUNKNOWNへと迫っていく。それぞれが大剣や太刀、双剣を手にしてUNKNOWNの足元へと潜り込み、足や腹を狙っていく。

その様子を武は天叢雲剣を振るいながら視線で追っていた。

（本隊を逃がすための時間稼ぎ。……でもって小隊長一人で死なせないために部下もそれに殉ずるってかねえ。人望のせいかな、忠義に溢れているのか……はっは、理解出来ね、そういうのってなあ……。いやいや、悲しいなあ……）

ブルートと共に行動している武ではあるが、彼に対する忠義はない。ただ彼の道に乗つかれば、ある程度自分の目的を達成できそうだし、ある意味自分と同類の仲間がやってきたからそこにいるだけだ。

陰で暗躍しつつ目的を遂行できる。それは天叢雲剣を眠りから覚まし、強力な竜を討ち、その力を取り込める。この行動をしやすくし、自分の欲求不満も満たせる。

ブルートとは武にとって都合のいい存在なのだ。だから忠義などない、利用できる相

手だから同行しているだけの存在。

だから忠義に殉じる、という行動は武には理解することが出来ないし、しようとも思わない。己の命は己のためだけに在るのであり、他人のためになげうつものではない、というのが武の考え方だ。

（ああ、あの人も国のために命を賭けたんだっけかねえ……国のため、民のため……はっは、身近にもいたんだっただか。そういう人種つて……いやいや、まったくどいつもこいつも、命を他人のためにーつてのは美德というけど、オレには出来ないこつたあ）

ため息をつきながら武は天叢雲剣を上段に構えながら引く。今もお槍の形状を取っているそれは、角気がまだ纏われたままだ。だが武がその構えを取りながら力を溜めることによって、先ほどよりもその輝きが増してきている。

「とりあえずこいつでも喰らつておきやがれ！ 槍術奥義が一、剛断！」  
身を翻し、その場で一回転。

それに合わせて天叢雲剣を一気に振りぬいて薙ぎ払う。その軌跡に従って黄土色の粒子が舞い、宵闇を淡く照らしながらUNKNOWNへと迫る。強固な守りを持つその翼や体を薙ぐその一撃は、UNKNOWNを呻かせるには十分な威力を誇っていた。

だが、それでも部位破壊に至るまでにはいかなかった。

「……はっ、どんだけ硬いんだ、こいつはよお。よもやオレが手こずる竜が出ようとは、

興味深いねえ……！　だが、流れが悪い」

武の一撃に気を引かれたUNKNOWNはカインらから視線を移す。彼を焼き尽くそうと火球を撃ち出す体勢に入ると、一気にエネルギーを集め始める。

そんなUNKNOWNを尻目に、武は逃亡の体勢に入った。

（血はある程度集められた。あとは殺すだけだったが、それは今じゃねえ。こいつもまだ満足していないようだし、いずれ決着を……この借りを返してやる！）

UNKNOWNに背を向けて武もまた逃げ出した。

この選択は武にとっても本望ではない。むしろ屈辱的な行為だ。

竜を狩る、という行動に生きがいを感じ、というよりもそれしか道を見いだせていない。彼にとって己の力は竜らを狩る、というために存在しており、自分という存在は、人生は、終わるまで竜を狩り続けると定めている。

それすなわち、常に勝利し続けるとも言い換えられる。敗北などあつてはならない、むしろ獲物に背を向けるなど、考えられない。

そんな彼がその敵前逃亡を選択した。それだけUNKNOWNという存在が脅威であり、強力な存在であることを証明していた。

例え目覚めかけている天叢雲剣であつたとしても、今の彼にUNKNOWNに勝利するということ未来はない。



『逃げる、ここままで、やって、逃げるか。それは、許さない……い!』

そう叫んでUNKNOWNは溜めこんだエネルギーを熱線として撃ち出した。

自分が狙われていることに気づいている武は何か横へと飛び、肩越しに振り返りながらUNKNOWNの様子を窺い見た。熱線は横数メートルの空間を貫き、そのまま武を逃すまいと横へとずれていく。

「はっ……遮蔽物もなし、ならば跳ぶしか——」

「はあああああッ!」

背後でカインの雄たけびが聞こえ、続くように仲間たちがUNKNOWNへと向かっていった。呪王弩チャチャプーに装填された徹甲榴弾Lv3を撃ち出し、顔面に着弾して爆発した。

徹甲榴弾の最高レベルというだけあってその威力は高い。しかも熱線を射出しているときの爆発のため、その影響で口元にも爆発が及んだ。それによって怯んだ際に他の三人が肉薄し、UNKNOWNの体力を削っていく。

「何とか助かったか……やれやれ、こいつもまだまだ食い足りなそうだが、こつちもここで死ぬわけにやあいかないんでねえ……」

『——ギ、ギギ……』

「へっ、我慢できずに乱入しておいてこのザマなのはオレにとつても屈辱だけど、お前も

そろそろ本領発揮しろってんだよ。そうしてくれば、オレもまだ戦えただろうし、お前もまだまだ血が吸えただろうによお。悲しい、悲しいねえ……」

『ギ、ジ……』

武の言葉に呼応するような天叢雲剣だが、次第に刀身に浮かんでいた紋様が消えていく。戦場から離れるためにその力を再び眠らせるのか。

こうなってしまうてはただの古い武器でしかない。そのまま沈黙してしまった。

（ちっ、まったく……めんどろなこった。だがあのギルドナイトたちが時間を稼いでいる間に離れるだけ離れて——）

そんな事を考えながら肩越しに振り返る。

武の目に映ったのは苛立ったように唸りながら、赤黒いオーラを立ち上らせるUNK NOWNの姿だった。

『鬱陶しい……雑魚、抵抗も、ここまできると、目障りにも、程、ある』

「っ、く……はあああっ！」

放たれる殺気に臆しそうになったが、それでも彼は鼓舞するように叫びながら足を斬る。しかし一瞬だけとはいえ、恐れを抱いた彼の剣は虚しく弾かれた。そんな彼の目を睨むように振り返るUNK NOWN。

赤い残光を描くその瞳に呑まれた彼は、頭から喰いつかれ、肉が裂ける音を響かせな

がら絶命した。そのままUNKNOWNは首を引き千切りながら体を捻り、薙ぎ払われる尻尾で周りの三人を弾いていく。

『私は、他の奴らほど、優しくは、ない。甘くも、ない。ヒトに、私を、殺せる道理など、ない!』

叫ぶUNKNOWNは力強く地面を叩き、カインらの動きを封じた後に火炎を吐きながら転身。燃え盛る暗い炎は動けない彼らの全身を飲み込んでいった。今までの抵抗など、何の意味もないということを証明するかのような最期。

だがそれでも、カインは焼かれようとも目だけは死んでいなかった。いや、それは他の二人も同じだった。

「いい加減……人を……舐めるな……!」

握りしめた拳も炎に包まれている。感覚が死んでいるのか、その強い精神が痛みを凌駕したのか。全身を焼かれる彼の声は次第に弱くなっていく。発せられる言葉はUNKNOWNの耳には届かず、途切れ途切れにしか言葉になっていなかった。

その拳を今持てる全力を込めてUNKNOWNの右頬を殴り飛ばした。続くようにして二人もそれぞれ足、左頬を殴り、それが最後の力だった。

「へっ……恨みをこめた、一撃だ……冥土の土産に、持つて行けっつてんだ……」

「効いてないって、かお、してるな……はっ、そうだろうな……」

「でも、それでも、この手で殴れた……それで、いい……僕たちの役目は、これで……」  
それぞれの言葉が途切れ、膝について倒れ伏す。肉が焼ける匂いを嗅ぎながら、UNKNOWNは一步前進した。

『時間、取られた……さて、他の奴らは……』

また一步、鈍い音を立ててその巨体が進む。

UNKNOWNはもう、背後で焼ける肉塊と化しているモノに興味を示していない。彼らの抵抗など、UNKNOWNにとってはただの時間稼ぎとしか映らないのだから。

『……天叢雲劍、捨て置けない。しかし、大勢、逃がすのも、私の癪に、障る』

武が逃げたのは南西。レインたちが逃げたのは西だ。

恐らくレインらはロックラックに逃げ込み、体勢を立て直すのだろう。UNKNOWNも西に何があるのかは把握している。

今まで人目を避けるように夜に行動し続けたのも、陰で目的を遂行するためだ。ロックラックまで逃げ込まれば、完全に自分の存在は明るみになる。今までただの噂しかなかった存在が公になるのはいただけない。

『——よし。獲物、お前たちだ。今はただ、逃げ惑え。元よりこの地は、弱者には、不利な環境』

絶望が、足音を立てて進軍する。

死が、翼を広げて飛翔する。

遮蔽物がない砂の海は、隠れる場所などありはしない。岩山やオアシスがあれば話は別だろうが、例えあったとしても今の彼らでは隠れきれぬかどうかも怪しい。

UNKNOWNもそれが理解できている。だから、余裕をもち、月光を浴びながら飛行する。

『ヒト、どれだけ力、つけようと——私の、前では、無意味。逃げ切ろう、などという思考は、浅はか。それを、思い知らせてやる』

引き離された距離をゼロにすべく、黒き竜は大砂漠を往く。

今まで負わされた傷をもつともしない、その悠然たる飛行にどこにも支障などありはしなかった。ただ点在する小さな傷の数々だけが、UNKNOWNが今まで戦闘していたという証。

だがそれも武によって刻まれたものの方が目立つのは無理なきこと。よもやカインらの最後の一撃によってつけられた傷など、UNKNOWNが気にする余地などどこにもなかった。

## 73話

ロックラックを指すレインたちは、時折背後を確認しながら移動していた。カインたちが稼いでくれた時間も、あの戦場から数キロは移動できただろう。

だが人の足でこの十数分で移動できた距離など、飛行できるUNKNOWNにとつてはたったの数分でゼロに出来る。アプトルや砂上船があればまだ何とかなただろうが、残念ながらそれらはない。

しつかりと調練したアプトルらならば、この異様な空気を匂わせる大砂漠でもレインの足となつてくれただろうが、残念ながらそのアプトルらを連れてくる事が出来なかった。

ロックラックから連れてきたアプトルらはUNKNOWNの報告が出たその日に、奴の気配を感じ取って怯えてしまった。数匹はオアシスから逃げ出し、残ったアプトルらも使い物にならなくなってしまう。仕方なく残ったアプトルを置いていき、あの現場に向かったという訳だ。

オアシスに待機させているメンバーには既に連絡を入れ、別ルートからロックラック

を指すように指示してある。

「UNKNOWN……か、想像以上の個体だったな」

「レイン隊長、あれは本当に飛竜、なんでしょうか？　狂化竜、という枠にも収まりきらない実力だったと思うんですが」

応急手当てをし、何とか普通に喋って歩けるくらいには調子を戻したアスベルがそう言う。彼の疑問は他のメンバーたちも同様だった。

明らかに普通ではない。

古龍に匹敵するか、それ以上の力を保有する飛竜。

それは樹海の主とされているエスピナスもそう言われているが、あれはエスピナスをも超える。

しかも人の言語を解し、思念で発することが出来るのだ。それは今までの調査でも見られなかった現象。

だがこの疑問はレインでも答えることが出来ない。というのもレインとてギルドナイトとして様々な地に赴き、フィールドやモンスターを調査してきたが、その道の研究者ほど詳しい知識を持っているわけではない。

だから専門的なことを言えるわけではないが、それでもあれはただの飛竜ではなく、かといって古龍と違っていいかどうかとも怪しい存在だ、ということだけは言える。

「骨格は間違いなく飛竜。そして古龍ならば可能であろう言語理解。飛竜以上古龍以下、そんな存在、ということだけを認識しておこう。呼称は今まで通りUNKNOWNでいいだろう。奴は自分の事をフイーア、と言っていたがな」

「フイーア……名前でしょうか。人としてもあり得ない名前じゃない、でしょうが」  
「そう、だな」

頷くレインだが、それだけではない何かが頭に引つかかっていた。どうもこの「フイーア」という言葉の響きに聞き覚えがある。だがそれが何なのかは思い出せない。さっきまで極限状態に陥っていたから、記憶の海から引つ張り出すことが困難になっているかもしれない。

しかし何とか引つ張り出そうと試みるが、うまくいかなかった。それでも思い出そうとするレインだったが、「カイン……くそ……」というアスベルの苦い声に肩越しに振り返る。

「なんで……殿なんて……」

「……ガンナーにとつて腕を一つ失うことは致命的……。それにあいつは、アリカのこと昔から……」

ナターシャが目を細めながら少しうつぶいた。

レインをはじめとする小隊長らはギルドナイトの学校において同期。レイン、アスベ



ル、アリカ、カイン、ナターシャ、アサギ……そしてゲイル。他にも多くの同期がいるが、それぞれ別々の隊に所属し、各地を飛び回っている。だがその任務によつては死亡する例も存在し、同期の何人かはその例に含まれてしまった。

そして死体はほとんどの場合拠点に帰ってこない。戦場においていかれ、奴らの糧となるか、時を経て自然に還るのみ。死体を持ち帰れるのは稀なので、例え墓があつたとしてもそこに本人がいることはない。

(アリカ……カイン……。くつ、やはりわたしが残つて皆を逃がすべきだったか？ 例えわたしだけでも奴を相手にして時間を稼げれば……)

己の手を見下ろしながらそんなことを考える。

仲間を守るためならば己の武を振るうことは厭わない。それほどレインにとつて仲間、部下とは大切な存在であり、失いたくない戦友である。全てを救おうなどとは考えないが、出来るならば周りにいる仲間くらいは救えるだけのリーダーでありたい。それがレインの考えだ。

だが今回はそれは叶わなかった。

同期のアリカがやられ、カインもまた彼を慕う部下と共にUNKNOWNを食い止めている。本来ならば自分がやるべきことを彼は望んでそれを行っている。

色恋に疎いレインは、カインがアリカに対して恋慕の感情があつたことには気づいて

いない。だからアリカを失い、腕を失った彼が、あのように自ら殿を願い出た強い意志を全て汲み取ることとは出来ない。たが彼の雄姿と勇氣に敬意を表さずにはいられない。彼は命を投げ出したが、レインたちを逃がすための時間を稼ぐという目的がある。決して無駄なことではないはずだ。

苦虫を噛み潰したように整ったレインの顔が歪む。彼の脳裏にはアリカとカインの姿が思い起こされていた。彼らと運命を共にした仲間たちの姿もある。ドンドルマで過ごした日々だけではなく、そのまた昔、ギルドナイト学院の学生時代にまで遡っていく。

あの頃は妹のサン、そしてゲイルしか近い年頃の子供と付き合いはなかった。学院に入学したのは6歳。当時はまだゲイルもただの少年であり、彼の両親も存命していた。しかし彼が8歳の時に暗殺事件が発生し、数か月後には彼は狂気を宿し、それを表に出さずに過ごすことになる。

表面上であつたとしても、彼はよく学生として過ごせたものだろう。

そしてその頃にはもう今のレイン隊に所属しているメンバーは友人関係となり、グループが結成されていた。実家の格が中から下か、東方人などのハーフといった、名家や血統主義者からすれば目障りな顔ぶれが集まったのだ。

その中でアリカは少女でありながら、少年たちの中に混ざっても違和感ないように振

る舞っていた。要は幼いころから人づきあいがよく、そこに男女の性別の差はなかった。だからこそ同期に好かれていたが、その振る舞いも相まって血統主義者には嫌われていた。

カインは昔から大人しく控えめであったが、誰かを支える事には長けていた。自然とボウガンを手にする事になったが、それだけでなく家に伝わる特殊な術、「刻蝕」しくしよく系統を修練していた。元々は人相手に使用し、相手を確殺するために開発されたとされている。そのためギルドナイトの処刑方法の一つに数えられたという。とはいえ特殊すぎるが故にあまり使うことはなかった術だった。

家の流儀に従って歳を重ねるにつれて伝えられた技術は習得済みだが、それを狩りに使うことはあまりない。本人がそれを好まず、ハンター武器で狩りをするを選んだからだからだ。

そんな彼も小隊長を務めるほどにまで成長し、部下に慕われたというのに……あの死地に残してきてしまった。

もつと大きな隊を纏める者ならば、そんな仲間の犠牲も割り切り、次の事を考えるだろうが、レインは今もなお割り切れずにいる。若いせいだ、甘い男だ、と言われるだろうが、それでもレインは苦虫を噛みしめ続ける。

「隊長……引きずっているんですか？」

「……甘い、と笑うかね、ナターシャ?」

「……いえ、それがあなたらしい。あなたがそうだからこそ、私たちはあなたについていつている。確かにあなたのような立場になれば、いずれは部下の死に対して割り切り、冷静になって指示しなければならぬ。極限状態において揺るぎない精神がなければ、多くの部下を失うことになるでしょう……。実際、あなたの父君はそんな方ですね」

レインの父であるソルは今や大長老の懐刀であり、大部隊を束ねるギルドナイトの長である。厳格にして高い実力とカリスマを持ち合わせた彼は、その地位に就くまでに多くの仲間を失っている。

特に親友であるシンク夫妻を暗殺によって失った過去もある。シンクらを失った当時は激しい怒りと悲しみを抱いたが、普段の任務においてはその感情を表に出さなかった。

己の立場を見失わず、例え別の任務で仲間を失ったとしても、彼は動じず顔にも出さず着実に命令を出して任務を遂行していった。

だが同時に彼は仲間を大切にされた。訓練こそ厳しかったが、それは部下が死なないようにするためにそうしたのだ。それを部下は理解しており、普段の付き合いも強い絆を感じさせるほどに親しくしていた。

その背中は頼もしさを感じさせ、人を引き付けるほどに大きく頼りがいのある男の背

中。

そんな彼の背中を見て育ったレインは、父として、一人の人としてソルを慕っていた。「いずれはソル様のような隊長になられるのかもかもしれませんが、それはいずれの話……今はただ、部下の死を悲しむ心をお持ちの隊長のままでもいいと私は思います」

「……そうか」

ナターシャの柔らかな声色での進言が、少しだけレインの心を癒した。ソルの背中を追うということは、いずれは彼のように部下の死に揺らがない精神を持つということだが、レインは今もなおこの通りだ。

それが彼らしい、とナターシャたちは思っているが、レイン自身は父と自分を比較してしまう。

そんな彼の耳に「た、隊長！ 奴が、奴が……！」という声が入ってくる。それに顔を上げ、背後を振り返る。

そこには、月光を浴びながら飛行してくる一つの影が見えていた。

「まさか、追いついてきた……もう!？」

「く……、カインたちも、やられたのか……! くそ……くそ……!」

アスベルにとってカインは同期であると同時に親友だ。アリカも性別を超えた大切な戦友。そんな同期を二人も失った。

それだけではない。カインの部下たちも、UNKNOWNへと挑んだ何人かも。先ほどの戦いによって失った。

もちろんこのような任務だ。過去にも過酷な任務の中で仲間を失ったことは何度かある。こんな世界でこんな世の中だ。ハンターやギルドナイトであろうと、強大なモンスターに立ち向かうのならば、このようなことはどこかで起こりうる。覚悟しなかつたわけではない。

でも、それでも昔から親しい間柄にある仲間を、友人を失うという衝撃は大きい。

しかも死体を持って帰って埋葬できない、という現実も押し掛かってくる。遺品すら残らない悲しみも合わさり、アスベルは唇をかみしめて拳を震わせる。

レインは隊長であるという立場の重みも押し掛かるが、アスベルたちもまた強い悲しみと怒りが渦巻いているのだ。

「グルアアアアアアアア!!」

空よりUNKNOWNが吼えながら一気に急降下してくる。足の爪を立て、その巨体をもつてして轢き飛ばそうとしているのだ。「回避い！」と叫びながらレインは砂の大地へと身を投じる。

背後を通り過ぎていく黒い巨体と、それによって生まれる突風。それらをやり過ぐすと、地面を何度か走りながらブレーキをかけ、UNKNOWNが肩越しに振り返ってく

る。少しばかり落ち着いたとはいえ、まだその赤い瞳には残光が走り、吹き出す殺気はレインら突き刺してきていた。

『逃げられると、思ったのか？ もし、そうならば、非常に、甘い考え。私は、お前たちを、逃がさない』

黒い巨体が再び走り出す。死が、明確な意思をもって迫りくる。

標的はレインだ。だが今彼は砂に転がっている状態。例えすぐに起き上ったとしても、UNKNOWNのスピードならば完全に逃げ切ることは出来ない状態だった。

まずい、と思つて転がりながら逃げる体勢に入ろうとしたが、ずんずんと鈍い音を立てながら軌道を修正していくだけ。

しかし助けの手はあつた。

ナターシャがネブラコルムナの盾とエンデ・デアヴェルトの盾を手にUNKNOWNの前へと躍り出たのだ。自身を強化し、その疾走を止めるべく二つの盾を構えての大防御。

よもや自分の走りが人間の女に止められるとは夢にも思わず、UNKNOWNに動揺が生まれる。その隙に「……隊長、今のうちに！」とナターシャが叫び、「すまない」と謝りながらレインが体勢を立て直していったん距離を取った。

（このまま戦い続けたとしても部隊は壊滅……いや、もはや殲滅。それだけは避けたい。

……やむを得ない。今こそ決断の時だ……！」

ぎりつと唇をかみしめ、各々武器を抜いて再びUNKNOWNへと挑もうとしているメンバーを見回す。もう既に何人かはUNKNOWNへと攻撃を仕掛け、ナターシャもいったん距離を取ってエンデ・デアヴェルトの盾をしまつてネブラコルムナの槍を抜いていた。

その中の一人、アスベルを見つけ、彼のもとへと駆け寄る。彼もまた武器を抜こうとしていたが、その肩に手を置いて後ろへとやった。

「隊長、何を——」

「——アスベル。今までよくやってくれた。わたしと共に戦い、成長し、支えてくれた。感謝する。そんなお前だからこそ、後を任せられる」

「……レインさん、やめてくださいよ。何を言っているんです？　まるで今生の別れのような口ぶりは……」

「そうだ。わたしも覚悟を決めた。その上で命ずる。アスベル小隊以下、全員を連れ、ここから離脱しろ。そしてロックラックを目指すのだ。そしてアスベル、お前が次の隊長だ。生き残ったメンバーを纏め、わたしの後を継いで隊を率いていくのだ」

それは一方的な命令だったが、彼らの身を案じての命令だ。それを聞いていたアスベルの体は次第に震えだし、「……待って、待ってくださいよ……俺、俺が隊長？　隊長は



あんただ、レインさん」と前に出ていくレインの肩を掴む。

「いいや、アスベル。お前が、次”の隊長だ」

「俺にとつて、次”なんてものはない！ 今も昔も、そしてこれからも！ 俺はあんたの下につき、あんたを支えると決めてるんですよ！ カインも、アリカも、そしてナターシャも！ あの頃からの同期はみんな、あんたについていくって決めてるんですよ！ あんたが死んだら、俺たちはどうすればいいんだよ！」

「……………そのカインとアリカはもういない」

「……………！」

「巢立ちの時だ、アスベル。わたしという柱はお前たちを守るために盾となろう。恐れぬな、お前ならば隊長としてもやっていける。さあ、行くんだ。これは命令だ。ナターシャも聞こえていたな?! お前もここから離脱したまえ！」

「……………つ、本気？ 本気でそんな命令を……………」

「本気だ。わたしがこういう時に冗談を口にする性質だと思ってるのかね？」

そうして抜いたのはアトランティカ。握りしめた部分から彼の気が流し込まれ、内包されている水属性の力が渦を巻く。

呼吸を整えて一閃。

UNKNOWNはそれを避けることもせず受け止め、なんてことがないような表情

を浮かべている。

「だから待つてくれ、レインさん！ あんたが死んだら、ソル様になんてお詫びすればいいんだよ！ それに、サンはどうするんだよ！ シスコンのあんたが目に入れても痛くない程に可愛がつてきたサンは、今もドンドルマであんたを待つているはずだ！」

「……そうだな。サンのごときは大きな未練だ。しかし、この状況だ。その未練を引きずるわけにはいかん。わたしはギルドナイトであると同時に、君たちの隊長だ。最早、背を向けて退くわけにはいかん」

「……ッ！」

「それに父上ならばこの状況、どうするのかを想像してみたまえ。父上ならば——部下全てを逃がすために一人であったとしても戦うであろうよ」

そうしてナターシャよりも更に前へ。アトランティカを振るって遠距離からUNK NOWNへと斬りつける。「改めて命ずる！ 総員、撤退せよ！ ここはわたしが食い止める！」と叫んだ。

その叫び声に隊員たちは戸惑うような顔を見せるが、命令ならば従うしかない、と苦い表情で離脱していく。

『……ヒトよ、一人で、やるつもりか？』

「ああ。これ以上、わたしの仲間をやらせるわけにはいかん」

『……………ふん、粹がるな』

「レインさん！ 考え直してください——」

「アスベルッ！ 命令だと言ったぞ！ さっさと他の者らを連れて去れ！ わたしの最

後の命令が聞けぬと言うのか!？」

「——っ、了解しました！ 総員、撤退する！ 俺に続け！」

背を向けながらの怒号に近い命令に、アスベルは苦い表情をしながらも彼の命令に従った。他の者たちもそれに従い、ロックラック方面へと走り去っていく。その中でナターシャが「隊長……っ！ お考え直しを！ どうしても言うならば、私も一緒に……！」と叫ぶが、レインは聞き入れる様子はない。

「君も去れ、ナターシャ。わたしと共に殉じることはない」

「しかし隊長……あなたは、ソル様のような隊長となるのではなかったのですか……?」

「ここで死んだら、その目的は消える。夢を捨てるのですか!？」

「いいや、それは違うぞナターシャ」

その背中は頼もしくもあり、どこか遠くにいるかのような錯覚を覚えさせる。

あれは、そう——覚悟を決めた男の背中だ。

最早何を言っても無駄だと悟らずにはいられないが、ナターシャは問わずにはいられなかったのだ。そしてレインは振り返らないままアトランティカを構えながら言葉を

続ける。

「先ほども言ったはずだ。父上ならばこの時どうするのか。わたしはそれに倣うことで、また一步父上の背中へと近づくのだ。それに、最後に君たちを少しでも守りながら父に追えるならば本望だ。だから行くがいい。わたしの時間を無駄にするな」

「……………」

唇をかみしめ、一滴の涙を流しながらナターシャも去って行った。

その気配を背中に感じながら、レインは一息つく。

決して振り返らなかった彼の顔は——ひどく歪んでいた。背中の頼もしさなど微塵もない、実にアンバランスなその表情に宿るのは、恐怖と未練が入り混じっている。

（未練などない？ ……よくもそんなことが言えたものだな。未練など、あるに決まっているだろう……！ どうしてあいつらを置いて逝く事が、サンを残して逝く事が出来るのか！ ああ、だが死ぬことは避けられないだろう。いずれ死ぬ覚悟はとうに出来ているが、いざそうなれば本当に無様に未練が湧き上がってくる）

汗が流れ、がたがたと少しずつ震えが出てくる。

それでもレインはこの戦場に命を賭けることを決めた。「……自己強化、限界突破。アトランティカ、わたしと共に戦え」と震えが混じる声で告げる。

刹那、レインの内側から急激に力が吹き上がり、その力の本流に従って髪が舞い上

がった。続くようにアトランティカもまたレインの言葉に応えるように水の力が目覚めていく。

その様子をUNKNOWNはじつと見つめ、小さく鼻を鳴らした。

『無様な、顔を、しているな。その上で、負けると、わかっている、その命、この砂海に、捨てるか。本当に、ヒトは、理解できぬ』

「しかし、それまでの時間を利用して、お前をここに止めることは出来よう。わたしとて、時間稼ぎ以上の事をしようなどとは考えていない。ましてや、たった一人でお前を倒そう、などと思えばいいじゃないか」

『ふん、時間稼ぎ？ ヒトよ、お前一人で、時間稼ぎと、言ったか？ 翼もない、お前に、出来るだけでも？ こうして、飛ばば、無意味』

そう、UNKNOWNには翼がある。レインたち人間には出来ない長距離飛行を可能とするのだ。砂埃を巻き上げながら漆黒の巨体は砂海から別れを告げていく。

見逃せば悠然と飛行し、逃げていくアスベルたちを追うだろう。それをレインは黙って見ているはずもなし。

高められた己の気と、アトランティカの水の力を同調させていく。母である天音からソルへ、そしてレインへと伝えられた技術。己の力と、武器に宿る力を同調させ、更なる力へと発展させる。

そうすることで通常の武器が持ち得る力を飛躍させるのだ。スキルである覚醒とはまた違う人力で目覚めさせた力。

「逃がしはしない——水竜刃っ!」

舞い上がっていくUNKNOWNを追うように、アトランティカから放たれた水は圧縮された刃と化して空を翔ける。ソルから教えられたアトランティカの技の一つ。自己強化によって高められた気を同調させたそれは、振り上げられたアトランティカの軌跡に従い、高速でUNKNOWNへと迫った。

『——ッ!』

よもや空中にいる自分を斬る手段があるとは思わず、UNKNOWNは左翼を水の刃に斬られてしまう。その隙を狙って閃光玉を投擲したレインは、素早く走ってUNKNOWNの下を指す。

左翼を斬られたことで少し体勢を崩したUNKNOWNは視界に入った強力な光に目を潰される。小さく呻きながら落下したUNKNOWN。そんなUNKNOWNへと接近しながら、アトランティカを構え、UNKNOWNの首めがけて振りぬいた。

しかしUNKNOWNの目はかっと思開かれる。閃光玉によって奪われた視界は、たった数秒で回復してしまったのだ。そのままUNKNOWNは接近してくるレインを迎え撃つように口を開き、彼へとうつぶせになったまま喰らいついていく。

レインは振りぬいたまま何とかその牙から逃げるように体をずらしていく。その結果、歪な振り抜きになってしまったが、アトランティカの刃は開かれる口を斬り、そのまま水の力が頬へと伝わっていく。

だが閉ざされた口によってアトランティカの刃が止められ、無理やり体が引き戻されてしまった。そうしてアトランティカを唾えたままレインの体ごと後ろへと放り投げる。

(くっ、閃光玉の効果も短い……そもそも知性があるせいでもう閃光玉も意味はないだろう。不意を衝くくらいしかないか)

受け身を取りながらそう考え、ちらりとアトランティカを見下ろす。直に喰らいつかれたことで、所々牙の跡が刻まれている。だが曲がったようには見えないので、まだ使う分には問題なさそうだ。

「まだまだ時間は稼がせてもらう。でなければカインたちに申し訳が立たんからな……！」

『……いいだろう、遊んでやろう。短い命、無残に、散らそうという、お前の、愚行に、付き合うのも、一つの、余興。恐れを、抱きながらも、私に、刃向おうという、お前の、意思を、砕いてやる！』



UNKNOWNの元から逃げ出した武はただひたすら砂漠を走り抜けていた。気を巡らせて周りに敵がないか、UNKNOWNが追ってきていないかを警戒しながらの疾走だが、あの戦場から離れていくにつれて頭が冷えてきたのか、苦々しい表情を浮かべだしていた。

(ちっ、無様だな……ほんとによお……。こんな醜態を晒しちまうとはな)

天叢雲剣はあれからうんともすんともいわないまま、槍の形体のまま武に背負われている。武の心境もどこ吹く風の沈黙具合だ。

不意に小さな気配が静かに武へと迫っていることに気づいた。

視線を巡らせると、ジャギイが静かに接近してきていたのだ。点々とジャギイノスも混じっており、武を狙って取り囲んでいるようだった。

「やれやれ……今のオレは虫の居所が悪いんだよ……！　来るってんなら、来いよお……お前らじゃこいつの糧には全然ならねえけどなあ！」

天叢雲剣を抜き、ぐるぐると回転させながら睨みを利かせて威嚇する。その殺気に数匹が怯んだようだが、それでも向かってくるジャギイらがあり、それらへと槍の形状を取っている天叢雲剣を振り回す。



飛びかかってきた二匹のジャギイはその薙ぎ払いで体を真つ二つにされる。紋様が消え、高められた力がなくなつたとしても、武器としての素の力はそこらのハンターの武器に匹敵するくらいはあるのだ。

それも普段から武が整備し、研磨していることも関係し、切れ味に關してもまた問題なし。視線を動かして背後から飛びかかってくるジャギイを感じ取り、体を捻つて躲した。そのまま背後から天叢雲劍を振り下ろして砂へと叩き潰す。

「ギャルルル……い」

数秒の間に仕留められた仲間。ジャギイらは自分たちが相手にしている敵のレベルが違うことを察した。唸りながら威嚇したところで、武には通じるはずもない。

刃に付着した地を払うように数度回転させ、その勢いを殺さないままに天叢雲劍を振るうことで空気の刃を放つ。これによって離れたところにいたジャギイを切り裂いた。

最早それは一方的な虐殺。付着する血は回転する天叢雲劍によって飛び散り、その軌跡が目に留まらぬ早さにまで昇格したとき、砂を吹き飛ばすほどの風を生み出す。

締めとして一際強く薙ぎ払ったとき、周りにいたジャギイらは風の刃を含んだ強風によつて吹き飛んだ。

「……やれやれ、不完全燃焼にもほどがあるつてもんだ。……ん？」

ふと、二つ……いや三つの気配が近づいてきたことを感じ取った。それらはまつすぐ

に武の方へと近づいてくる。天叢雲劍を握りしめたが、その気配の正体に気づくと緊迫した空気を解きほぐした。

「おやおや、こんなところまでやってくるとは、どうしたんだあ？ 迎えにでも来てくれたんかねえ？ 天？」

「……ま、一応そう言われたから」

「それにしてもよくオレの居場所がわかったなあ？」

「お前の気は覚えている。……それに、そんなわかりやすいモノをまき散らしただろ？ なに？ 大きな獲物でもいたわけ？」

そう言いながら天羽は乗っていたアプトルから降りていく。彼女は二匹のアプトルを連れて武を迎えにわざわざ天王寺領から数日かけて走ってきたようだ。

その視線は天叢雲劍に向けられており、どこか興味深そうな色が瞳に宿っている。

「UNKNOWNのことか？ その目、狩りに行きたいってうるさいくらい語っているようだが、今はやめておいた方が無難だぜ？」

「……へえ？ それはまたどうして？ 負けたの？ お前が？ それをしておきながら？」

少し武を煽るように苦笑を浮かべながら天叢雲劍に首をしゃくった。ぴくり、と武の眉が動いたが、彼は「ああ、大きな傷を負わせることは出来なかったなあ……悲しいほ

どに。……シフト、ブレイバー」と否定しなかった。

そして槍の形状をしているそれを剣へと戻す。長かった柄を作る鱗は一気に引き、中から現れた刃はスライドするように下へと下がる。そして半分に分かれていた刃が一つとなり、鱗は劍の柄と化する。

「ほんと、古代のお前の一族は一体どういう技術を持つていたのやら。素材となったデイス・ハドラーと同じく三つの形状を持つそれは、まさに妖刀というよりも、生きた武器。文字通り『目覚め』てきているな」

「しかしその気にはまだまだなつてくれないのよ。悲しいねえ……」

「……で、その気になつてくれなかつたから負け、尻尾を巻いて逃げてきたと。……ふん、なにその目。よほど屈辱的だったと見える」

鼻で笑いながら連れてきたもう一匹のアプトルを引いて来ようとしたとき、背後から鋭い殺気が突き刺さってきた。アプトルらはそれにびくりとおびえたように体を震わせ、数歩下がっていくが、天羽は涼しい顔をしている。

「おうおう、喧嘩売つてるのかねえ？ 買うぜ？ 今のオレは不完全燃烧だ……相手してくれるってんなら、嬉しいことこの上ないねえ？」

「それも悪くない。が、噂のUNKNOWNがいるっていうなら、私はそつちに行きたい。……こいつにもUNKNOWNの血を吸わせたいし」

ヤマト国の宝剣にして草薙一族が作り上げた妖刀の一つ、天羽々斬。天叢雲剣と天羽々斬も冥蛇龍デイス・ハドラーに縁がある刀であり、天叢雲剣がデイス・ハドラーの素材を用いて作られたに対し、天羽々斬はそのデイス・ハドラーを討伐した武器である。元より妖刀として高い性能を持っていたが、デイス・ハドラーの血を吸ったことで更なる力を秘めるようになった刀。しかしその力を發揮することはあまりなく、そのままヤマト国へと献上された得物。

その力は、眠っているがため天羽も全てを把握しているわけではない。

確かなのは、元から持ち得ていた竜殺しの力がデイス・ハドラーを討ったことで、更に昇華されたということ。

「UNKNOWN……どれほどの実力なのか興味がある。お前がそれを槍へと変えてまで戦ったほどの相手……死合するには十分な相手」

「ふん、そこまで言うなら止めないが、今あれはギルドナイトと戦ってるぜ?」

「……へえ? ギルドナイトが? ふうん……どんな感じ?」

「悲しいことに、部隊壊滅だな。ありやあそう時間をかけずに隊員全員殺されるだろうよ。いやはや、悲しい、悲しいねえ。見たところG級に達していたメンツが揃っていたようだがあ、それでもあのザマだ。加えてこれがあったとしても、翼一つ破壊できずじまー」

そして武は屈辱の撤退。そんな彼をUNKNOWNは追わず、レインたちを追っていった。ある意味レインたちがいたからこそ、武は命拾いしたようなものだ。

「あいつらの命運は決まったようなもんさあ。悲しいことにねえ。今オレたちがUNKNOWNのところに行けば、あわよくばあのギルドナイトたちを助けることになりかねないが、どうするよ?」

「……ふん、そう。ま、別に私はそのギルドナイトたちを助ける義理などないし、そんな気もさらさらないけど」

「だよなあ。でも一戦交えたいし、血も欲しい。そんな感情が渦を巻いてるってかあ?」  
小さく笑みを浮かべることでそれに応える。左手は先ほどから天羽々斬を抜き差ししており、一定のリズムで鏢と鞘が打ち合う音が響いていた。

天羽にとって戦うことは生き甲斐だ。むしろ戦っている時の彼女ほど、生き生きとしており、彼女自身もまた生きていくことを実感できるひと時である。うわばみの如く飲み食いしている彼女もらしいといえづらいが、それは戦いに多大なエネルギーを用い、消費していることの裏返しでもある。

だからこそ戦わなければ、溜まりに溜まったフラストレーションとエネルギーが消化できないのだ。故に彼女は戦いを求めている。

そんな彼女が出す答えなど、一つしかなかった。

「……見るだけ見る。それだけでもいいだろう？」

「ま、それくらいならいいんじゃないか？」

「そ。じゃあ善は急げ。とつととUNKNOWNのところに行こう」

もう我慢がならない、とばかりにアプトルに飛び乗ると、UNKNOWNの気配を探って彼女はアプトルを走らせた。そんな彼女の背中を見つめながらやれやれとため息をつき、「まあたあそこに戻るのか。つーか、オレを迎えに来たんじゃねえのかつての……」と愚痴りながら武もまたアプトルに騎乗した。

## 74話

時は少し遡り、レインたちがUNKNOWNと交戦する数時間の事。月が浮かぶロックラックの街。夜になれば、食事処や酒場は大いに賑わいを見せる。一般の旅人らが利用する店よりも、ハンターが利用する店の方が騒がしいのは仕方のない事だろう。

彼らは命がけの戦いの後にこうして集まり、生きていることを喜ぶかのようにテンションを上げる。

そんな中、ふらりふらりと視線を巡らせながら通りを歩いている一人の男がいた。

「ん、なかなかの活気じゃないの。噂に聞いてた通りって感じかねえ」

煙草を唾えつつ、両側に並んでいる露店を眺めている。歩きながら緩やかに外套をなびかせ、ロックラックのハンターズギルド支部へと向かっていく。

彼はロックラック周辺、すなわち大砂漠の異変も噂に聞いている。この活気も不安の裏返しが含まれているのではないだろうか、という推察もしていた。

なにせ大砂漠に潜んでいるという竜らは一般人からすれば畏怖の象徴だ。並みのハンターであろうとも、容易に討伐できる相手ではない。

顎に生える無精髭を撫でながら、どうしようか、と彼は考える。

ここに来たのは一応それなりの目的があるが、竜らのことも気にはなっている。とはいえ自分の中では優先順位は二番以下でしかない。一番の目的はとうに定めてある。

「んー……ダグラスらがいれば、多少は話が聞けるんだろうけど、さてさてまだロックラックにいたつけないあ。ま、その辺りの事もギルドに行けば話を聞けるでしょうけど。……わあつてるよ、そうグチグチ言うもんじゃないつての。本当にお前さんはおかんかつての。おじさんの耳にやあいたいことこの上ないねえ」

小指で耳をほじくりながらギルド支部へと入っていき、受付に向かって自分のギルドカードを提示して登録した。その際に受付の少女に自分のことに関して多少驚かれたが、気にしないことにする。

「えつと……アルタイル・イーガーさん、ですね。はい、これで登録完了いたしました。クエスト受注は明日から行えますが、宿などに関してはハンター割引が有効になりますので、その際はカードを提示してくださいね」

「はいよ。んーそれにしてもお嬢ちゃん、可愛いね。おじさんの好みかも」

「あ、どうも……」

「こんな時間まで、ご苦労様なことね。これほど賑わってるのつて、やっぱり大砂漠に關することが関係していたり？」



ナンパする、と見せかけてからの大砂漠のことに関する質問だ。受付嬢も少し警戒したが、大砂漠の話になると神妙な表情を少し浮かばせて小さく頷く。

「はい……UNKNOWNの存在が調査によってほぼ確証に近いものになっています。またティガレックスとディアブロスの縄張り争いも深刻化しています、南方面のルートはほとんど封鎖されています」

「封鎖、ね。奴らの討伐依頼って出てるんでしょう？ 誰か受けた人、いないの？」

「ロッキラックからは数組のハンターが受注いたしましたけど、達成の報告は届けられていません。奴らに敗北したのか、あるいは討伐した帰りに何かあったのか。それらは不明です」

「なるほど。こりやあ思った以上に難儀なことになってるようね。情報ありがと」

礼を述べて彼、アルタイル・イエーガーはギルド支部から酒場へと移動していった。そこには多くのハンターたちで溢れかえり、各々夕食や酒を楽しんでいる。

軽く顔ぶれを確認しつつ、自分のよく知っている顔がないかを探してみたが、どうやらここにはいないようだった。

（さてさて、どうするかねつと……。あのお嬢ちゃんの話によれば、ここに来れば懐かしい顔があるはずだけど……つて、おお？ あらあこりやあなかなかのいい女、はっけ（くん）

指で銃を作つて見せながら、ばん……と撃ち抜く様な仕草をしながら、アルマイルはその女性を眺めてみた。

肩に届くほどの金髪をした女性だ。顔つきからして西方人と見られる。

このロックラックに西方人の女性がやってくるとは思わず、多数のハンターたちがその女性の顔へと振り返っていく。

中には彼女を食事に誘おうとしているハンターもいるようで、立ち上がつて「よう、少しいいかい？」と声をかけていく男がいた。

「ほう、近くで見ると本当にいい女じゃないか。このロックラックに西方の女が来るとは珍しい。どうだい？ 向こうで一杯やらないか？」

「ソーリー、ナンパはお断りしている」

「ナンパじゃないさ。これはちよつとした歓迎の挨拶みたいなものよ。あんたみたいないい女が来たのであれば、歓迎せずにはいられねえってね」

「リアリー？ そうだとしても、ソーリー、あたしはそういうの、受け付けません。他のレディーにアタックすることね」

肩に手を乗せてきた男の手を払い、そのまま彼女はカウンターへと向かおうとした。しかしここまでアタックしておいてフラれる、というのも男の癪に障るのか、「待てよ」と呼び止めていく。

その様子を見ていたアルタイルは、やれやれと苦笑を浮かべながら男を止めようと前に出ていく。

だがそれよりも早く、彼女は動いていた。

伸ばされる手を側面から掴み、引つ張りつつ男の足を払っていったのだ。突然のことに男は反応できず、腕を引つ張られ、自身の体重に任せるように宙を回転し、床にたたきつけられてしまった。

「しつこい男、嫌われますよ？ ナンパも、戦いも、引き際が肝心ね」

「……………おいっ！ お前ら！」

『応！』

しばらく床で呆然としていた男だったが、今のことで頭に血が上ったらしい。仲間の男たちへと声をかければ、一斉に周りにいた男たちが立ち上がる。ハンターが多いが、それに加えてごろつきもそれなりにみられる。

もしかすると、ごろつき上りのハンターなのかもしれない。

数は十人を下らないか。

明らかに一人の女性相手にするような数ではない。

「ふう……………ロックラックというのはバッドボーイ、多いのでしょうか」

「おらあ、親分と同じ目に合わせてやるぜ、この西方人が！」

「オウ、なかなか血気盛んなこと。だからこそ、読みやすい」

女性を掴もうとする手を素早くかわしつつ、またしても足を刈ることで床を舐めさせる。続けて頬を肘打ちして意識を揺らし、背後から蹴り飛ばして別の男へと押しやつてやる。

そうして動きを止めたところで鋭い回し蹴りによつて意識を奪っていく。

酒場内、ということもあり、引いた足で近くにあつた木製の椅子を引き寄せる。続けてもう一つの足で蹴り飛ばせば、接近してきた男の足にぶち当たり、その男は体勢を崩してしまった。

前のめりに倒れていく男の後頭部を踵落としてダウンさせ、その足で下から椅子を持ち上げる。そうして宙に浮かんだ椅子を見つめながら、後ろから殴つて来た男の手を頭をずらしてかわし、受け止めながら椅子を別の男へと蹴り飛ばす。

更にもう一つの腕で男の腹を肘打ちして背負い投げ。

見事な立ち回りだ。

全く危なげない動きで、数の不利をないものとしている。

だが、アルタイルは動いた。ハンターとしての違反行為をしても、彼女を抑えようとしている男がいるのが見えたのだ。

「はいはい、そこまでよ」

「っ!？」

「ここでライトボウガンとか、どういう神経してんのよ。そういうのやったら、ギルドナイトが出てきちゃうじゃないの。おじさんとしては、彼らに会うのは勘弁なんだけどね」

「は、はなせっ! ここまでやられて、黙っていられ……んがっ!」

「はいはい、元はといえば、お前がナンパなんてしちゃうからこうなっちゃったの、わかってる? 実際に撃ってないとはいえ、未遂までやられちゃあおしまいよ。ここで大人しくしていろっつね」

腕を捻りあげてライトボウガンから指を離させ、後ろ手に回しながら床に叩き伏せてやる。素早く紐を取り出して動きを封じつつ、女性のほうを見やると、もう彼女も残っている男たちを返り討ちに行っているところだった。

もしかすると助力など必要なかったかもしれない。

そう思わせるだけの見事な実力だ。

だが彼女は一息つくと、アルタイルへと振り返りながら「センキュー、助かりました」と声をかけてきた。

「いやいや、俺が出しやばらなくても、あなたならどうにかなったでしょう。レディー?」

「いえ、そうでもありません。あたしとて、後ろからスナイプされれば、負けますよ。だから、センキュー。あなたのおかげで、助かりました。感謝いたします」

そうして彼女はアルマイルへと手を差し出してきた。

「エリーゼ、いいいます。シュレイドから参りました」

「あら、レディーもシュレイドから？ おじさんもそうなのよ。あ、おじさんはアルマイル。よろしく」

「オウ、あなたもですか」

「イエースイエース、そうなのよ。……ふむ、これも東方の言葉で言えば、奇妙な縁の巡り会わせっていうのかねえ。どうだい？ おじさんでよければ、向こうで旅の話でも。エスコートしますよ、レディー？」

少しエリーゼの言葉を真似ることですこしおちやらけると、きりつとした表情でカウンターの隅の席を示してみせる。

そんなアルマイルの様子に、悪しきものがないことを感じ取った彼女、エリーゼは小さく頷き、「オーケー。付き合いますよう、ジェントルマン」と誰もが見惚れるような微笑を浮かべて見せた。

「ふーん、それじゃあエリーゼちゃんも神倉月のニュースを見てこっちに来た口なのね」

「イエス。あのニユースは世界中に広まったと聞いています。神倉月のネームは良くも悪くも有名です。かのレディを殺害できた人物、あたしはとても気になりますね」

「そうねえ……プルート・ギルガメツシュだったかね。シュレイドにいるなら、それなりに伝承を耳にすることはあるだろうけど、西方人のエリーゼちゃんも知ってるのね」

「シュレイドには数年、滞在していました。……ユーのことも、多少は耳に入っていますよ。アルマイル、そのネームには聞き覚えがあります。かのダグラスと肩を並べるガンナー……ノー、アーチャーであると」

「あんらあ、俺ってそんなに有名になっちゃってんの？ 俺としては、結構影を薄くしてみせたつもりなんだけどね」

「碧空」のダグラスといえば、中央で名を轟かせるヘビィボウガン使い。それだけでなく、碧空自体が有翼種の魔族で構成されたメンツであり、それだけでも名が知られる要因に成り得る。

そんな彼らと親しいハンターとなれば、気になってしまうのも仕方がない。

それは有名どころでいえば、「刀刃」の武蔵たちだろう。東方出身の彼らとは六年前の一件でも共に戦っており、その後も交流があることで知られている。

東方で有名になっていく刀刃と、碧空の交流という大きな要素に隠れがち。それはアルマイルにとって狙ってとった立ち位置である。

あまり目立つことを好まない彼は、ダグラスの友人でありながらも刀刃の陰に隠れるようにして己の存在を隠した。同時に普段からだらけたような雰囲気醸し出し、言動もそれに倣つてとぼけたような空気を作り上げていく。

というより、これが彼の素なのではないだろうか、と思えるほどに彼のそれは自然体だ。

「有名になること、嫌うのですか？」

「だつてさ、名が知られるのは良くも悪くも多くの人に俺のことを知られるつてことでしょ？ 街を歩けば俺の事を知つている奴らが色々言うわけだ。……かわいい娘ちゃんや、美人に知られるつていうのはいいけど、野郎に知られるのはめんどいじゃん。俺がハンターになつたのはただ生きるための力を高めるためであつて、名前を売るわけじゃあないからねえ。それに長く生きる身としては、長く人に記憶されるつていうのはどうもねえ……」

「……ああ、妙なソウルを感じると思つたら、なるほど。人間ではなかつたということですか。となれば、ハンターとしての経験も豊富。人間ではないなら、かのダグラスさんと親しくあれるのもまた、納得です。あなたのソウル、磨き上げられた経験が光るクリスタルのようです。惜しむらくは、それを覆い隠すその外向きの空気、ということですか」



じつとアルタイルを見つめながらのその言葉に、苦笑が浮かぶ。

どうやらエリーゼはその人物が纏う空気や、気を感じ取れるだけの感性を持っているようだ。別に隠しているわけではなかったのだが、人間ではないことを見破られるとは、と参った参った、という風に頭をかく。

「あつちやあ、わかっちやうの?」

「魔族、ですか?」

「んー……ま、そうじゃない? 別におじさんとしては、種族なんてどうでもいいからねー。とりあえずその日その日を気楽に生きていければいいって感じだからねえ。そうしたら、気づけば百年は生きちゃった人よ」

「なるほど。それだけ生きれば、鈍色のストーンもクリスタルになるでしょう。それだけのモノ、この大砂漠に生かすという気は?」

「ダグラスらがいるなら、あいつらに任せて、おじさんの目的でも遂行しようか、と元から考えてたからね。別に自分からやろうって考えちゃあいないさ。エリーゼちゃんもそういう口でしょ? ハンターという肩書は持っけていても、それを引つ提げるところに来たって感じじゃない。そう、おじさんには見えるんだけどね」

小首を傾げながら問いかけ、運ばれてきた酒を軽く煽る。そうして唇を濡らし、「エリーゼちゃんも普通じゃない目的をもって、はるばるとシユレイドからここへとやって

きた。違う？」と再度問う。

「……イエス。あたしは、人には言えぬ目的があります」

「そう。おじさんもなのよ。そういうところも似たようなものなのね。というところは、ここでこうして出会ったのもある意味、運命じゃないかねえ。ありや、こりやあ困ったねえ。運命の出会い、なんておじさんにやあ似合わないこと、言っちゃったよ」

「……デステイニー。なるほど、これもまた一つのデステイニー、ですか。でも、それでもあたしの口からはキャンノットスピーク、ですよ」

「それでいいのよ。そう易々と話していいことと悪いことがあらあね。今日のところは、こうして酒を飲みあうだけにしようじゃない」

にやり、と笑いながらジョッキを軽く掲げて見せる。それにエリーゼも乗り、二人は軽くそれらを打ち合わせた。

そんな二人の耳に「失礼、通報があつて参上した」というよく通る声が酒場に響いた。なんだなんだ、と周りのハンターたちやアルマイルとエリーゼは入口へと視線を向ける。

そこには黒を基準とした着物を身に包む男女が数人入ってくるところだった。羽織は白を基準とし、袖付近や裾に黒が塗られている。これだけならばただの和装であるが、その背にはギルドの紋章が描かれていた。

「ギルドナイトだ……」

そんな声が聞こえてきた。

アルタイルは少しだけ目を見開き、そしてゆっくりと細めていく。「ああ、東方のギルドナイトね」とぼそりと独り言を漏らした。

中央のドンドルマを拠点とした、レインらをはじめとするギルドナイトの制服は基本的に赤を基準とした礼服を用いるが、東方のロックラックや華国などは彼らのような物の上にギルドの紋章が描かれた羽織を纏う。

ハンターズギルドの本拠地はドンドルマであり、ここから東方と西方へと組織は広まっていった。基本的に制服は統一されているが、国や地方を越えるとその土地に合った服装へと変化していったのだ。

また服装が異なればそれぞれの本拠地がわかりやすくなったということも相まって、地方の組織ごとに制服が確立されていく事となる。

「ロックラック支部の一隊長、日向ひゅうがだ。罪人はどこにいる？」

名乗りを上げたのは右目をその青い前髪で隠した青年だ。鋭く細められた左目で酒場にいる客らを見回していく。その眼力はさすがはギルドナイトというべきか鋭く、凄みを感じさせている。

「さ、こちらです」とウエイトレスが案内するように先導した。すると日向と名乗った

ギルドナイトは首をしやくり、ウエイトレスについていくように二人のギルドナイトの男女がついていった。

そう時間をかけず、騒ぎを起こしたハンターたちを連れて戻ってくる。その顔ぶれを見回した日向は苛立った表情を隠しもせず、彼らに近づいていった。そのままリーダーの男の前に立つと、「まったく……この時期に余計な騒ぎを起こしてくれやがってよ」と睨みを利かせる。

すると、男の顔を右手で掴み、ギリギリと指に力を入れて締め、持ち上げていくではないか。男の呻き声など気にも留めず、アイアンクローをしたまま床へと叩き落とす。

「大砂漠の状況、耳にしていけないわけないだろう？ デイアブロスにデイガレックス、U N K N O W N といった面倒なやつらのせいで俺たちギルドナイトは忙しいんだ。この街に駐屯している俺らの身にもなってほしいもんだな、おい？」

何度か床へと叩き付けながら男を見下ろし、更に近くにいる連行しているハンターや周りで様子を見守っているハンターたちを見回す。

「てめえらが騒ぎを起こせば、俺たちは出動しなけりやならない。それが仕事の一つだからな。しかし、こっちは大砂漠の事件……今はU N K N O W N の情報収集や整理があるだよ。緊急事態となれば出動もある。てめえらの騒ぎに付き合う気なんてねえんだ。わかったら、余計な騒ぎを起こしてくるな。もし、騒ぎや犯罪を起こしてくれたら――

「容赦しねえぞおらあ！」

最後にもう一度床へと叩き付けた後、入口へと放り投げる。男一人を片手で放り投げる程の力と、声の凄味を見せつけられては周りのハンターたちは無言で頷くしかない。

「連行しろ」

「はっ」

周りのハンターらは若干引いているが、部下たちは少しは慣れているのかちよつと渋い表情で連行していく。うつすらと汗をかいているギルドナイトもいるようだった。

そんな中、「はあ、たいちよー。もうちよつと抑えてくれませんか？ 激しすぎて引かれてるんですけど」と女性のギルドナイトが近づいていった。

「うるさいぞ北上。むしろ都合じゃないか。こうして見せつけることで、ハンターどもが馬鹿な真似をしないならば重畳」

「そうですけど、たいちよーの場合は鬱憤をぶつけている節もあるように見えますんでね。やり過ぎれば上がまたうるさいんですよ」

「……ふん。とつとと連行しろ。おい秋月。お前はひとつ走り本部まで行って加賀んここに報告だ。取調室の用意くらいはさせておけ」

「承知」

一礼して酒場を後にしようとした女性隊員だったが、「その必要はないわ」と外から女

性の声がかかった。今度は誰だと酒場の面々が入口へと視線を向けると、鉄扇をとんとん、と左肩に叩きながらギルドナイトが入ってきた。

毛先が黒く、それ以外は茶色いセミロングをし、日向らと同じ東方のギルドナイトの制服を纏った女性だ。整った顔つきに、着物の上からでもわかる膨らみ。すらつとした足と外見的な体つきはおよそ東方人らしくないが、その身なりや名前は東方人らしい。

「何の用だ、望月<sup>もちづき</sup>。今、加賀へと使いを出そうとしていたところだが」

「ふつ、こちらにも主に用があつたのよ、日向よ。伝令だ。大砂漠にて強大な反応を確認。その波長から、噂のUNKNOWNではないかとされている」

「——なんだと?」

「付近にいる出雲隊が現場に向かっているともある。だが彼らだけでどうにかなるような相手ではないだろう。故にロククラックに待機している隊らにも、出撃準備をせよとのこと。以上よ」

「……そうか、UNKNOWNが。ならば出撃準備をしないはずはない。北上、数人連れて本部で準備してこい。秋月らはそいつらの連行だ」

『はっ』

それぞれ日向の命令に従って外へと出ていった。そんな彼らを見送った望月は左肩を叩いていた鉄扇を開き、自分をあおぎながら薄く目を細める。唇は微笑を描き、「しか

し日向よ。相変わらず過激なことを」とどこか楽しそうな声色で言う。

「罪人に対して容赦がないという点では、世に語られるギルドナイトとしては異なことではないだろうが、それにしてもやり過ぎという点も否めないぞ？　ああ、抵抗したからだとか、こここのハンターらとやりあったから出来た傷と否定しても意味はないぞ？　私があるのままを上を報告すれば崩れ去る嘘ゆえにな」

「……いたのか、貴様？　相変わらず気配を消すことに關しては馬鹿げた力だな」

「ふつ、それが私の取り柄ゆえな。気配を消し、相手に悟られずに近づき、一撃をもつてして始末する。処刑人としては十分な力であろう？　そう、主であろうとも、処刑するぞ？　上はお前の過激さに関しては意見がわかれていることは承知の上であろう？

加賀に命令が下り、私に出動命令が出れば、私がお前を処刑することだってあり得るのだからな」

あおいでいる鉄扇を閉じ、日向の胸を軽く叩いて小首を傾げる。それは冷たさを感じさせる微笑みであり、事実その赤い目は笑っていないかった。

それだけでひしひしと感ぜられる、罪人を処刑する者としてのギルドナイトである望月の一面。周りの空気が冷え切ってしまい、ごくりと生唾を飲み込むハンターたち。

だが、ふつとそんな空気を消し去って笑顔を見せた。

「さ、行くとしようではないか。騒がせてすまなかったな。私たちはこれにて去るゆえ、

あとにはゆっくり食事をするがいい。ただし、節度を持って楽しめよ？ 私たちは暇ではないのでな、もしもまたなにか事件を起こそうものならば——ただでは済まさんぞ？」

最後に目が笑っていない笑顔で脅しにしか取れない警告を置き土産に、望月は日向を連れて去って行った。まさしくそれは冷たい風が吹き抜けた後。騒いだハンターたちから始まったそれは、残されたハンターたちに後味の悪さを残していった。

ゆっくり食事を楽しめ、なんてそんな皮肉を残して去るなんて、とハンターたちはすっかり食欲を失ってしまっていた。

そして今まで様子を窺っていたアルマイルとエリーゼもまた緊迫した空気を解く。ギルドナイトが来たことで無意識に警戒していたのだ。ただじつと、起こりうるままを眺め、自分たちに意識が向かないようにしていた。

だがそれは周りのハンターたちも同じ事。街に駐屯しているギルドナイトは、ハンターたちの無法を取り締まる役割を担う。時には暗殺すら行う影の警察機関であり、現行犯または抵抗するならばその場で処刑することも稀にある。

だからこそハンターたちはギルドナイトを警戒し、自分たちに火の粉が降りかからないようにしているのだ。

そんな中、アルマイルの目は酒場の一角へと向けられた。

アーチャーであるアルマイルだから見えた。人一倍以上鋭い視力は、陰になっている



席に座っている男女を捉えていた。黒髪に旅人のような出で立ちをした若者だ。そして彼らの耳は人のものではなく、黒い毛をした猫のような耳。

（魔族のカップルってか？ しかしそれにしては出来る奴らじゃない。あそこまで自らの存在感を隠してしまふなんてねえ）

気配を消し、息を潜めて一般の客に成りすましているようだが、あれだけの技術を持つているのだ。ただものではないだろう、とアルタイルは睨んでいる。

実際、それは正しい。

彼らは普通の一般人ではない。

それは察することが出来ても、どういう人物なのかまではアルタイルにはわからなかった。少なくともハンターという感じではないだろう、ということぐらいしか把握できない。

「しかしUNKNOWN、ねえ……。本当に出てきちやったか。どうする、エリーゼちゃん？」

「どうもこうもありません。あたしはただのハンター。参加したところで、どうすることも出来ないでしょう。ユーなら、どうですか？」

「おじさんもただのハンターだからねえ。わざわざあのUNKNOWNの下に、たった二人で行こうなんて考えないさ。……情報はあつけどね」

「リアリー？　どんな情報です？」

首を傾げるエリーゼにアルタイルは懐から取り出した一枚のスケッチを見せてやる。そこには見事なタツチで描かれたUNKNOWNの絵がある。まるで実際に見てきたかのような出来栄えに、エリーゼは驚きと疑惑を含んだ眼差しを向けた。

「どこからそれを？」

「とある情報屋のお嬢ちゃんからね。見ての通り、見た目はリオレイアにそっくりだが、その能力はリオレイアとは比べ物にならない。そして何よりの特徴は、お嬢ちゃん曰く——自然に生まれたものではないということだつてよ」

「ワッツ？　自然に、生まれたものではない？　どういうことでしょう？」

「さてね、あのお嬢ちゃんは全てを語らなかつた。どうやってこんな情報や絵を入手したのかもね、自然に生まれなかつたがために、あれほどの異質な存在と能力に成り果てたつてさ。そしてこうも言つてたぜ」

そこで彼は初めて気の抜けたような表情を消し、真面目な顔で「——ただのヒトに、あれに勝てる道理はない、つてね」と。

逮捕したハンターたちをギルドへと連行した日向は、望月と共にロックラック支部の廊下を歩いていった。ハンターが立ち入ることが出来ないその建物の奥こそ、ギルドの関係者が利用する区域であり、奥にある階段を上った先がギルドナイトらが集う場所。

ロックラック支部は東方の中でも規模が大きいギルドナイトの拠点であり、中央のドンドルマに次いで多くのギルドナイトたちが所属している。

それは北に華国、南にタンジアの港という地域が存在しているためだ。

タンジアの港は過去に厄災が発生した伝説が存在し、華国もまたデイス・ハドラーや九尾狐という強大な敵が存在する。

またロックラックは多くの人々が集まる交易街であり、同時に強力なモンスターたちが生息している。近年は新たな亜種が確認されるなど、危険は増幅しつつある。

そのため多くのギルドナイトを待機させ、日々治安と調査を進めている。

最近ではドンドルマからの調査隊が合流し、情報をやり取りしながら網を広げている最中だが、ついにUNKNOWNの姿を捉えてしまった。

そして今、駐屯していたギルドナイトらは騒々しく廊下を走り回っている。

出動する隊員らが走り回っているのだろうが、当然ロックラックにいるギルドナイト全てを出動させるわけではない。そうなればロックラックのハンターたちによる事件を対処する者がいなくなってしまう。

「さてさて、待ち望んだUNKNOWNであるが、こんな報告も耳にしているのだが」  
「……なんだ？」

「どうやらUNKNOWNと交戦している輩がいるようだ。UNKNOWNの攻撃反応に隠れて捉えづらかったようだが、人らしきものがいたとのこと。……救出は絶望的ではあるがな」

「そうか。ならばせいづらは運がなかった、と言うしかあるまい」

「相変わらずであるな、日向は。そこは助けられるならば助けなければ、と言うのがギルドナイトではないのか？」

くつく、と笑いながら望月が言うが、日向は表情を変えることなく自分の隊の扉に手をかける。「UNKNOWNに遭遇して生き延びられるのは指で数える程度だろうか？」

一般人なら絶望、一介のハンターであつても絶望。……ならば、それに意識を向ける暇があれば、討伐する意識に気を配ったほうがまだマシというもの」と淡々と言い残して去って行った。

「ふん、割り切っておることで。甘さを捨てたギルドナイトと言うのはなんともつまらんものよな。しかし、それだけ研磨された輩、ということでもある」

とんとん、とまた左肩を叩きながら望月は歩き出し、近くにあつた扉を開けて中へと入っていく。すると奥の席に座っている女性がちらつと視線を上げて望月を捉えた。

「……連絡はすませた？」

「ええ。淡々としておったが、なかなか乗り気であつたようだぞ、日向は」

「……そう。ならいいわ。日向も久々の大物を相手にするのだから、鬱憤晴らしもしばらくはなくなるでしょう」

そう言いながら彼女、加賀は手にしているライトボウガンのチェックを終え、立ち上がる。それは一般的に知られるライトボウガンとは作りが異なっており、見た目もおよそモンスター素材で出来上がったものとは考えられないものだった。

それもそのはず。それは太古の塊から研磨されたライトボウガン。

銘を大神ヶ島〔神在月〕。

それを肩にかけながら彼女は前へと進み出てきた。

その際、ゆらりとその藍に近い黒髪の小さなポニーテールが小さく揺れる。

「悪いわね。伝達に走らせて」

「いや、構わぬよ。私もまたUNKNOWNには少しばかり心が躍っておるでな。加賀とてそれは同じであろう？ 謎めいた強大な敵、いったいどのような力を秘めているのか。それを楽しみに、これから赴くのだからな。クールな主とて、心の中では沸々と力が湧き上がっているだろう？ だからそれを念入りに調整していた。違うか？」

「さて、どうかしら。そういうあなたは見たまんま、気分が高揚しているようね？」

たまも  
玉藻

「ふふ、高揚せずにはいられんよ。よもやあのようなものがいようとはな。全く、世界と  
言うものは何が起こるかわからんものよな」

実に楽しそうな声色で笑いながら、加賀の後に続いて部屋を後にしていく。

隊長である加賀を相手にしてもなお、その口調は変わらない。

口調や立ち居振る舞いからして名家の出身であることは察せるが、実際に彼女はヤマ  
ト国において国に仕える両親を持つお嬢様である。だが彼女はヤマト国を後にし、ハン  
ターとして軽く東方を巡った後、ギルドナイトに転身した身だ。

それを把握している加賀は特に注意することもなく、さくさくと部下の隊員が集合す  
る場所へと歩いていく。

「そういえば、加賀」

ふと、その背中に思い出したように望月は声をかけた。

「UNKNOWNと交戦していると思われる人らしきものがおるようだが、どうする？」  
「……そう。なら、可能ならば救出する方向で。絶望的ならば、切り捨てる。それでいい  
でしょう」

「なるほど、承知した。しかし、日行程ではないにしろ、主も甘さは捨てておるな」

「全てを助けようなどと言うことは、人間には出来ないこと。どうしても取りこぼしは

存在する。それを認識していなければ、いずれ身を亡ぼす。そうなれば、この未来<sup>さき</sup>出来る任務もできなくなる。それでは多くの敵を倒すことも、誰かを助けることも出来なくなる。……度を越えた自己犠牲は無意味なことよ」

非情かもしれないが、しかしこれは普通の考えだ。

一部のギルドナイトはその職務に誇りを持ち、誰かを助けるように動くことがあるが、多くは加賀のような考えを持っている。

命を賭ける、なんてことはあまりしない。

任務で死地に赴くことが多いが故に、手に入れた情報は何としてでも持ち帰らなければならぬ。伝えるものがないとなれば、情報は無に帰す。だから生き残り、情報を持ち帰り、次なる任務をこなすために無理はしない。

だがそれも通用しない敵が現れることもあるだろう。

その際は小数を切り捨て、多くを生かす道をとる。

自分たちはハンターではなく、ギルドナイト。ハンターを取り締まり、未開の地を調査し、新たなモンスターを探る者。

故に滅びてはいけない組織。

優秀な隊員は生き残っていかなければならない。そういう輩が自己犠牲をするような局面があるかもしれないが、それでも生き残らなければ未来がない。

それが加賀の考えだった。

「……おしゃべりはここまで。整列は、しているようね」

「そのようだの。さすがは加賀の隊員ら。迅速なことよ」

中庭に出れば十数人の隊員が整列していた。加賀を認めると揃って敬礼をする。

その隣にはまた別の隊員らが集まっており、見たところ加賀の隊を含めて三隊はいるようだった。一つは日向として、もう一つの隊があることになる。

そう時間もかけず残りの隊員らが集まっていき、建物の中から日向ともう一人の隊長らしき姿が出てくると、全員そろって敬礼した。

この場にいる四十前後のギルドナイト。

UNKNOWNという強大な敵へと赴くことを命じられた彼らは、その佇まいや目力、渦巻く空気、どれを見ても精鋭であることがわかるほどに洗練されている。

このロックラック支部に待機している隊員ら、というだけでなく、所属している全部隊の中でも精鋭だ。それを惜しみなく投入する、それだけでもギルドがUNKNOWNに対してどれだけ危険視しているかがわかるというもの。

「日向隊、揃っているな？」

『はっ！』

「伊吹隊、揃った？」



『はっー！』

「……ではこれより、大砂漠に出現したとされるUNKNOWNを討ちに向かう。既に近くを進行していた出雲隊が現場に向かっているらしいけど、彼らだけでは戦力が足りない。私たちという戦力を加えてもどうなるかはわからない。しかし、UNKNOWNの情報は入手しなければならぬ。そして可能ならば、奴を討つ。それが今回の任務。皆の衆、厳しい相手と想像されるけど、しかし死に急ぐ必要はない。敵が何であろうと、やることは常に変わらない。全力で戦い、生きて戻れ」

『了解！』

「総員、出撃する！」

加賀の号令に従い、一斉に彼らは中庭を駆け抜け、集められていたアプトルらに騎乗。ロックラック支部から一本道となっている街道を駆け抜け、開かれた大門から大砂漠へと繰り出していく。

その様子を、支部の一角にある窓からじっと見守っている影が一つ。腕を組みながらじつと出撃していくギルドナイトらを眺め、そっと目を閉じる。まるでそれは彼らの無事を祈っているかのようであり、俯いた際にはらりとその艶やかな黒髪が顔にかかった。

彼らが向かう先は大砂漠の一角、レインたちがUNKNOWNと戦っている戦場。

訓練されたアプトルの高速の走り、  
彼らは夜の砂漠を移動していった。

## 7 5 話

空を切る昏い炎。

夜の闇に薄く灯る炎は一瞬の光源となり、火の粉の尾を引いてレインに迫る。襲い来る炎弾を掻い潜り、再びUNKNOWNへと接近していく。手にしているアトランティカを握りしめ、袈裟斬りからの薙ぎへと繋いで十文字の青い剣閃がUNKNOWNへと迫る。

やはりUNKNOWNはそれを躲すようなことはせず、平気な顔で受け止めながら突進してきた。レインが迫っていくに対してUNKNOWNもまた迫りくる。

一步の差が大きいために急激にその黒い巨体が迫ってきているように感じられる。

だがレインは臆しそうになる心をぐっと唇を噛みしめることで堪え、火花を散らしながら口を開いて噛みついてくるUNKNOWNの側面へと回り込みつつ、アトランティカを薙いでいく。

刃は小さく甲殻の内部へと入ったが、それ以上には入らない。それでもやらなければ話にならない。

『無駄な、ことを……お前の、牙、私に、通用しない』

「それでも、少しずつ蓄積はしているはずだ。今までは弾かれるものだった刃は、今では入り込み始めている。どんなことでも綻びは生まれるもの、そこから好機を見出すのみ！」

『それは、ヒトの、幻想。現実は、そう甘くない。それでも、幻想見るならば——』  
いったん距離を取っていくレインの姿を見据え、ぐつと足に力を込めていく。その巨体を回転させ、陸上を早く駆け抜けるだけの力を発揮できるその足で砂を蹴る。

同時に力強く翼を羽ばたかせ、その体は宙へと飛び上がった。

それは飛行するための跳躍ではない。攻めるための跳躍である。

『——それを、打ち砕く！』

背後、頭上からの押しつぶし。それも両翼を力強く地面へと叩き付けながらの攻撃。

舌打ちしながらレインは前へと跳び、受け身を取りながら砂を転がって逃げ延びた。だが背後に強い振動と、その攻撃によって砂が舞い上がり、一時的な視界不良に陥る。  
『死ぬ』

弓のように引き絞られた右翼から、赤き死を呼ぶ棘が放たれる。

ハンターが使う弓の拡散矢の如く、広がるように飛ぶ棘は舞い上がった砂を貫き、その先にいるであろうレインへと迫った。

UNKNOWN自身も舞い上がった砂によってレインの姿が見えないがゆえに、拡散する棘という攻撃手段を取ったのだろう。だがそんな甘い推察も意味はない。

UNKNOWNには高い嗅覚がある、感性がある。離れていったレインの位置は匂いとアトランティカが放つ力で捉えている。一本は確実にレインへ、逃げ道をふさぐようにしてそれ以外の棘が向かっていったのだ。

「——っ!？」

事実、咄嗟にアトランティカを盾にしたレインへと棘が突き刺さった。それも、アトランティカを貫いて。僅かな軋みがここで仇となったのか、貫かれた部分から亀裂が広がり、その刀身はもはや振り回し、UNKNOWNへと斬りかかれば折れてしまいかねない程になっている。

勢いはそれでも完全に消えずアトランティカを貫き、レインの脇腹を抉っていった棘は彼の背後の砂に着弾し、音を立てて砂を吹き飛ばす。

「くっ……アトランティカが……!」

硬直している暇はない。苦い表情のまま素早くアトランティカを広げたローブの中へとしまい、ソニックボウVIIを取り出して瞬時に複数の矢をUNKNOWNめがけて射出する。

落ちていく砂がまだUNKNOWNを隠しているが、それでもUNKNOWNの棘と

同じく砂に穴をあけてその先にいるUNKNOWNへと迫る。

だがUNKNOWNは横へとステップするだけでなく、更に前へと跳びながら距離を詰めて右翼を叩き落してきた。横に逃げながら矢を番え、腹を狙って射出。近くで見ればわかる、カインたちが与えたダメージの名残が。

(そういえば、さっきから左の翼で攻撃をしていない。ずっと右の翼のみで……まさか、ダメージが蓄積して使いづらくなっているのか?)

左翼といえば主に武が天叢雲剣によって何度も何度も斬られていた。効いていない風を装っていたようだが、体と言うものは正直なものだ。無意識なのか、あるいは本当に庇っているのか。

蓄積したダメージによって使おうとしないのかはわからない。

しかしさっきから右翼だけで攻撃しているのは確かだ。これが小さな綻びになる。レインはそう信じた。

「強化、続けて属性強化……ふんっ!」

距離を取りながら左足へと連射し、続けて一際強い射出を打ち込む。すると、振り返りかけていたUNKNOWNが僅かに体勢を崩す。驚いたような声が聞こえた気がするが、レインはそんな余裕はない。

更に下がりながら足、左翼と続けて矢を打ち込みながら離れていく。

威力と氷属性が強化された矢は甲殻の隙間や傷ついた翼へと突き刺さり、弾かれることはない。

「どうした？ 体勢を崩したようだが？」

わかりやすい挑発に乗ったのか、UNKNOWNは低く唸りながらレインを見据える。そんな奴の頭へと連射矢を打ち込む。最早その矢の速さに慣れたのか、左翼で身を守った。

それだけでなく何本かは左翼で弾き返し、反撃として炎弾を撃ちだしてきた。

「……………む？」

ふとUNKNOWNの顔に気になるものが見えた気がした。小さな傷、それはカインらがつけた傷だろうが、それにしても何かがおかしい気がする。

何らかの力が燻っているかのような、そんな違和感だ。

(奴の力が蓄積しているわけでもなさそうだ。あれには少し覚えがあるが……っ、く!?)  
それに気を取られてばかりでは危険である。

撃ち出されてくる炎弾をやり過ぎ、再び弓を引き絞って射出。空を切る矢はUNKNOWNの顔へと突き刺さっていくが、もはやUNKNOWNは防御を捨て去つていた。

『いい加減、死ぬがいい!』

またしても足に力を込めての跳躍。そのまま両翼を叩きつけるのかと思いきや、一気にレインを押しつぶさんとするほどの急速落下。アリカを殺したあのボディプレスだ。何とかそれから逃れるように横へと跳んだが、足がめり込むほどの着地からの砂を巻き上げながらの二度目の跳躍。

その砂に飲みこまれてしまい、レインの体は宙を舞う。

「っ、しま……い！」

『終わりだ』

刹那、レインに走馬灯が走る。

世界がゆっくり動いているかのような錯覚の中、脳裏に浮かぶのは過去の戦いの記憶。カインやアリカから生きていた時の光景が、頭の中に駆け抜けていった。

彼らが自分を呼んでいるのだろうか。そんなことを考えてしまいそうな光景だった。

（あ）

そうして見えた光景の一つ。それはカインが行使している技だった。

高台の上から飛び回るリオレウスの翼を狙い、ぶつぶつと何かを呟いたカインがブーメランを投擲する一面。それは狙い通りリオレウスの右翼へと当たり、戻ってくる。ただのブーメラン程度では対したダメージにはならないだろう。実際リオレウスはそれがどうしたとばかりに地上にいるレインらを見下ろしながら飛行し続け、攻撃の隙を



窺っている。

だが着弾した右翼には確かにカインが仕掛けたものが存在している。

「……刻蝕・風刃」

その言葉を告げた瞬間、右翼に薄らと存在していた緑色の粒子が活性化し、風が渦巻いて何度も何度も翼を切り刻んでいく。突然のことにリオレウスのバランスが崩れ、地表に向かって落下していく。

そんな光景。

世界が戻ってくる。

舞い上がった砂の奥、UNKNOWNがレインへと狙いを定めてまた翼を振りぬこうとしている。アリカが受けたその攻撃、レインもまた体を両断されてしまうであろう。未だの死が迫りくる。

そんなことはごめんだと、レインは咄嗟にそれを告げた。

「——刻蝕・爆煉ぼくれんっ！」

無意識に叫んだ言葉。先ほど見えた違和感の正体がこれであってくれたら、なんてことは考えていなかった。

ただ、走馬灯で見えたことが、もしかしたら本当にあの世からのカインの道しるべだったのかもしれない。

見えたものと、口から出たことは別の言葉。

しかしそれは、確かにレインの命運を分けた。

ちりっ……と小さな音が聞こえたかと思うと、UNKNOWNの顔の右から強い爆発が発生したのだ。次いで発せられるUNKNOWNの悲鳴。それを背に、レインは砂を何度も転がっていく。舞い上がった体に、爆風に煽られたことによるものだ。

「は、はは……まさか、あんな置き土産を残していつてくれるとは……助かったぞ、カイン……」

カインが最期にUNKNOWNの顔を殴ったこと。それはただの最後の抵抗ではなかったのだ。殴る前に鍵となる言葉を口にしてから、彼は殴った。それにより、拳を通じてUNKNOWNの顔へと文字通り術が「刻」まれた。

それはUNKNOWNの顔を「蝕」み、静かに根付いていくのだ。少しずつ周囲の粒子を取り込んでいき、対象が力を行使したならばそれをも取り込み、少しずつ後の効果を発揮した際のエネルギーと化する。

例えるならばそれは時限爆弾、あるいは癌。

時が来たらそれは力を発揮して対象を傷つけ、吹き飛ばす。

時を重ねるにつれてそれは大きくなり、気づいたときには小さな種だったものは大きな華を咲かせて猛威を振るう。

前者はまさしく時限爆弾、後者は発動するための言葉を告げて効果を發揮させる。

口頭で術を告げて発動させる魔法と違い、これはその魔法を対象へと刻み込ませるもの。刻み込んだ当初は存在が希薄であるが故に、時間をおいて効果を發揮させることに向いている。そのため離れたところから気づかれまいように対象へと攻撃する――暗殺することに向いていた。

それこそがカインの家に伝わっていた術、「刻蝕」である。

起源は東方の術の一つらしく、それがどういう経路でカインの家へと伝わったのかはレインは知らない。ただ確かなのは、その刻蝕の発動トリガーである言葉を、レインが知っていたという点。そして普通ならばカインしか発動させられないのに、レインの言葉で発動したという点。それこそがカインがレインを助けてくれたのではないか、という希望を感じさせてくれた。

『なんだ……、なにをした……!?!』

突然のことにUNKNOWNも戸惑いを隠せないでいる。無理もない。いきなり右側の顔が爆発したのだから。そんな予兆なんて感じなかった。一体何をしたのかUNKNOWNにはわからないまま、レインを睨み付ける。

そんなUNKNOWNを不敵な笑みで睨み、「なに、お前と戦っていたカインたちの置き土産だ」と返した。

「何らかの形でカインはお前の顔へと攻撃をしたのだろうか？　それが、今になって生き  
たということだ」

『……っ！』

UNKNOWNの脳裏にカインの最期の抵抗が蘇った。カインだけではない、彼の部下たちもまた、最期にUNKNOWNへと拳で殴りつけた。でもそれらはただの最後っ屁。カインが殴ることで行使した刻蝕に気づかせないために、そして何より彼らもまたUNKNOWNへと一矢報いたい気持ちがあつてこそその行動だったろう。

だからUNKNOWNは気にも留めなかった。小さき存在であるヒトの拳など、UNKNOWNにとつては何の意味ももたらさない。

それが今になって牙をむいてきた。

当然この好機を逃さない。「超強化——射抜き貫け……っ！」という言葉に乗せて放たれた矢は、狙い通りUNKNOWNの額を貫いていった。

『——ッ!?!』

決まった。

今のは致命傷だろう。

そう思ってしまうほどに鋭い一撃。

同時に、「……っ、ぐ、ふ……！」とレインもえずいてしまい、砂の上に吐瀉物をぶち

まける。

「はあ……はあ……ここで、反動が……！」

自己強化の限界突破、それは数分間は己の力を引き上げてくれる。まさにリミッターを外した人の身体能力を発揮できるのだが、やがて効果が切れた時、リミッターを外した代償として体に多大なる負荷がかかる。

腕が、足が、そして体が、ぎしぎしと軋むような音を立てているような感覚。今、UNKNOWNに動かれれば間違いなく殺られるだろうが、レインは反動によって動けない。

だから今の一撃がUNKNOWNにとって致命傷であればいいと願わずにはいられない。

しかし、現実は無情だった。

『——っ、今のは、ヒトにしては、いい抵抗だった』

仰け反ったままだったUNKNOWNが、珍しくレインを褒めるようなことを言いながら一步踏み出してくる。瞬間、覇気が噴き出すと同時に、UNKNOWNから黒いオーラが発生した。

それはUNKNOWNを取り巻くように動き、赤くぎらつく瞳はより輝きを増している。

『しかし、届かない。私を、殺せるという、幻想、捨てろ。だが、本当に、ヒトにしては、よき抵抗だった。それは、私とつても、驚きである』

だが、とUNKNOWNは口を開いてエネルギーを集め始めた。『それでも、結局、無意味。最終的に、お前は、死ぬ』と宣告しての熱線。無慈悲なる高温の裁きの鉄槌。

それを振り下ろすべく、最大にまで溜まったそれを撃ち出す光景まで、レインはゆっくりに見える。夜の闇を照らす昏き炎は漆黒の体を持つUNKNOWNをも照らす。

(……届かないか。わたしは、ここで終わるのか……)

もう走馬灯もない。

痛みで体は動かず、抵抗する気力もない。

まさに絶体絶命だった。

(しかしこれだけUNKNOWNを引き付けたのだ。十分時間は稼いだだろう……いや、まだ足りないのかもしれないが、それでも無駄にはならないはず。……みんな、どうか生き延びてくれ。そしてサン……すまない、兄は先に逝く)

そして目を閉じる。

あの熱線で貫かれるのだ。熱さを感じる間もなくあの世へと旅立つのだろう。

甘んじて受け入れよう、とその時を待つレインにいよいよ熱線が放たれようとする。

だがその熱線のために溜めたエネルギーの光は、奴の位置を知らしめるものであつ

た。

夜の闇に溶け込むはずの漆黒の体は、それによって離れた所にいたとしても奴の存在を知らしめ、狙いを定めるには十分なもの。

そう、通りかかった彼らが不意打ちをかけるには格好の的でしかない。

「——ガッ!?!」

UNKNOWNにとって二度目の不意をつかれた形での爆発。

それはまたレインが刻蝕を発動させたものではない。左から飛来してきた大タル爆弾がUNKNOWNに着弾したことによる爆発だ。しかも爆風に煽られることで、溜まっていた熱線のエネルギーにも連鎖し、それも大爆発を起こす。

「な、なにが……?」

死を覚悟したレインの耳に届いた大爆発。反射的に目を開き、現状を把握しようとする。

そんな彼に聞こえてきたのは、何か走ってくる音だった。次いでまた飛来してくる大タル爆弾。それらは信じがたいことに、本当に空を切って飛行しているのだ。

『なんだ、これは……! つ、く……どこの、誰だ……このような、真似をする、輩は!?!』

「——こんな輩だぜえ!」

響く男の声。次いで聞こえる爆発音と砂を駆け抜ける足音。

何事だ、とUNKNOWNがそちらに視線を向けても、まだまだやってくる大タル爆弾。それらによってUNKNOWNを怯ませ、その場に縫い付けた彼らは、呆然としているレインの下へと駆け付けた。

そのまま男はレインの体を抱え上げ、肩に乗せる。

「おう、誰かと思えば雨の兄ちゃんか？」

「……？ わたしをそう呼ぶのは……まさか、六年前の……」

何とか後ろを見ようとするが、体も首も思うように動かないため抱えている男の姿は見えない。だが自分はモンスターに騎乗している誰かによって助け出されたということとはわかる。

そう、ロックラックへと向かっていた彼ら、獅子童雷河と焔、サラマンドラのサラがレインの窮地を救ったのだ。

「しかし、どうしてここに……」

「なあに、俺たちも東方の異変のことを調べてたのよ。で、大砂漠の話聞いてロックラックに向かっている途中だったんだが、どういうわけか奇妙な気配が感じられるわ、戦いの気配を感じるわでこっちに來てみたのよ。そしたら懐かしい気と匂いがあるじゃねえか。駆け付けてみたらこういう状況ってわけよ。で？ あれが噂のUNKNOWNか？」



ちらりと後ろを振り返りながら雷河はそう締めくくった。お供である焰はどこにいるのかといえば、雷河の肩に乗ったままロープを広げ、大タル爆弾を射出している。人の姿に変化し、がっしりとした雷河の肩とはいえ揺れる状況の中でも何とかその場に留まっているようだ。

片手で足を支えてもらっていることも相まって、高度を得た上で大タル爆弾を撃ち出し、UNKNOWNへと奇襲をかけることに成功する。

そうして攻撃はするが、そのまま戦い続けることはせず、サラは一気に戦場を駆け抜けて撤退し始める。大タル爆弾は浴びせ続けてUNKNOWNを動けなくさせることで、より確実に撤退できるようにすると同時に、奴へとダメージを残していく算段だ。

だが現実はどううまくいかない。

数十発もの大タル爆弾を受け続けたことで、怒りが蓄積したのだろう。天を仰いで怒号を上げ、漆黒と赤のオーラが一気に吹き上がった。同時に凄まじい勢いで殺気が振りまかれ、血走った眼差しをレインたちへと向ける。

『なかなかの、抵抗。これが、ヒトの、最後のあがき、というものか。なるほど、悪くない。この私も、ここまで、傷つくのも、久方ぶり。そして——ここまで、感情、高ぶるのも、久方ぶりだ……ッ!』

ぐつと足と翼に力を籠め、UNKNOWNは跳躍した。怒号を上げながらレインたち

を叩き潰さんと背後上空から迫っていく。「サラ！ 左へ！」と声をかけながら焔は反撃のためにまた大タル爆弾射出。

しかしUNKNOWNはそれによって怯むようなことはしなかった。爆風と刺激で僅かに勢いを失い、進路が微小ながらもずれただけ。それでもレインらを叩き潰さんと右翼を振り下ろすが、サラは指示に従ってそれを避けた。

それでも砂が舞い上がるほどの衝撃が背後から襲い掛かる。殺気がひしひしと突き刺さる。熱気もまた襲い掛かるが、その殺気の冷たさも同時だ。

「わたしを……置いていけ……！ 逃げ切れるものではないぞ……」

「馬鹿言っちゃいけねえ！ せつかく拾った命だ、そのまま捨てるような真似はしねえよ！ つか、お前さん妙に体が痛んでんじやねえか？ 戦いで傷ついたって感じじゃねえな。何をした？」

「……リミッターを外した」

「はあ、なるほど。道理で今もまだろくに体を動かせていないわけだ。俺らがいなかったら、あのまま死ぬつもりだったと。死に場所を求めたってわけでもないのにそんな無茶をするってことは……そういやお前さん隊長だったな？ 部下はどうした？ 逃がしたのか？」

それに対する返事は帰ってこなかった。しかし雰囲気で雷河は察したらしい。爆弾

を撃ち続け、懐から札を出している焰もまた渋い表情を浮かべて舌打ちしている。

「そうかい、相変わらず情に厚いギルドナイトなことだ。だからつて死に急ぐこたあねえと思うがな。お前はまだまだやること、あるんじゃないかねえのか？」

そう論す雷河の背後で、UNKNOWNは口を開いて火球を撃ち出そうとする。だが取り出した札を投擲した焰が「反射陣！」と告げると、札を中心として力場が形成された。

それは迫りくる火球を受け止め、そのままUNKNOWNへと返す。

着弾の衝撃も意に介さず、昂った感情のまま一步、また一步と前進して喰らいついてくる。口からは常に火が漏れ出、気迫も相まって凄まじいプレッシャーとなつて雷河らを襲っていた。

訓練され、数々の戦場を雷河と焰と共に過ごしたサラであつたとしても、小さく臆したような声を漏らしてしまう程の重圧。それがたつた数メートル背後に存在しているのだ。

「……おい、ギルドナイト。これを飲め」

そう言つて焰がローブの中に手を入れ、一つの丸薬を取り出した。無理やり口を開かせて口内へとそれを放り込み、すかさず竹筒を取り出してレインに水を流し込む。突然のことだったが、レインは何とか言われるままにそれを飲み込んだ。

少しして体内から少しずつ活力が戻ると同時に、痛みがさつき以上に強く感じ始める。

「なにを、飲ませ……？」

「焔が調合した薬。痛みは出るだろうけど、それはお前の体が受けたダメージを鈍った体が認識し始めた証。同時に、体に活力が巡り、多少は体が動くようになっていくはず。ほら、そこに座りなおせるくらいには動くだろう？」

「となると、俺の前に座りな。ほら、手綱も握ってみ」

さっと雷河が座ったまま後ろに下がりつつレインを引つ張り上げて前に座らせる。彼はずつと手綱を握らずに足の力だけで更に騎乗していたようで、垂れ下がっている手綱をレインの手に握らせた。

レインも苦い表情は消えないが、力も少しずつ戻りつつあるようで、手綱を握るくらいならば大丈夫なようだ。とはいえ指が震え、しっかりと握れるものではなかったようだ。レインを座らせると、雷河は後ろを振り返る。焔もそれに合わせて足の位置を調節し、二人そろって迫ってくるUNKNOWNを見据える。

景色は変わらず、周りは砂ばかりが広がっている。

それでも彼らは移動している。

砂ばかりといえども、所々なだらかな丘状に坂がある。上り下りし、点在する小岩や

遙か遠くに見える岩山もゆっくりと動き、そして背後から流れてくる熱気のうっすらとした風の道。

それらが前から後ろへと流れて行く事で、確かに自分たちはこの大砂漠を移動しているのだとわかる。いずれは次なるエリアへと移動できるだろう。

しかしいくらサラの足が速くとも、スタミナと足幅の差が関係し、やがて追いつかれるだろう。

「やれやれ、足止めできるかどうかわかんねえが、やるしかねえな！」

両手を握りしめて強く打ち合わせる。拳から弾ける電気の力は、力を込めるたびに少しずつ強く明滅し、UNKNOWNが次なる攻撃をしようとした瞬間に拳を突き出す。それに従って溜まった電気が弾丸となつて撃ち出された。

先行した弾丸に次いで左手を開きながら掌打すると、衝撃に乗って雷が放出され、UNKNOWNに着弾した雷弾を増幅させるように雷がUNKNOWNに広がっていく。だがそれでUNKNOWNを止めるには至らなかつた。

全身を走り抜ける雷と頭に着弾した雷弾。これらが敵の体を麻痺させ、動きを封じるのが雷河の技の一つなのだが、UNKNOWNに通じている様子は無い。

「ちっ、足りないか、あるいはそもそもこういうものに耐性があるのか……!?!」

「だったら弾ければいいだろ? 続けて飛べ!」

ローブを広げて次の大タル爆弾を射出しながら提案する焔。二人の間に通じる合言葉に、雷河は頷いてまた拳を打ち合わせる。何度かそれを繰り返して、指を開いて指同士に電気の道を作り上げる。

そうしてエネルギーをためると合掌する。すると手の中で弾けた雷が強い光を生み出し、瞬間的に閃光が発生した。所謂、閃光玉を自発的に発生させたものである。

これでUNKNOWNの目をつぶし、振り切ることが出来るだろう。

「グルルル……グルアアアア!!」

人語ではなく、竜としての怒りの声が響きわたる。「よっしや！ そのまま走れ、サラ！」と走り続けているサラに告げ、目を閉じながら頭を振り回し、暴れまわるUNKNOWNを睨む。

目を潰したことは潰したが、それでも奴は暴れ続ける。燃える炎を口の端から漏らし続けていたかと思えば、口を開いて一気にエネルギーを充填し、熱線を撃つ態勢に入った。

「ちっ……耐炎障壁！ サラ、気を付けろ！」

焔の言葉に肩越しにサラは振り返り、UNKNOWNの熱線の軌跡を見極めようとしている。焔もまた札を扇状に投げ、効果を発揮させると赤い光がぱつと広がっていく。それが薙ぎ払われる熱線を受け止め、威力を軽減させる。だが、数枚の札は耐えきれず

に燃え尽き、レインらの近くへと熱線が届いた。

じわり、と砂が溶けるような音が聞こえたが、それに意識を向けることなくサラは走り続ける。一刻も早く奴から距離を取るために。

しかし閃光によって目をつぶしたとしても、その効果はたった数秒。

『逃がさん……!』

「ちつ、足止めが足止めになりやしねえ! こいつあ……腹あ括るしかねえか?」

そのたつた一つの手段が雷河の頭によぎる。

ハンターとしての手段で時間稼ぎも出来ないならば、それ以外の手段……そう、自分には出来ない手段を用いても奴を止める。

「猿……お前、まさか……」と焰が何かを察したような表情を浮かべるが、「なあに、最終手段さ。別に命かけようなんて思っちゃいねえよ」と微笑を浮かべるが、それもどこかぎこちない。

背後からはまたUNKNOWNが迫ってきている。奴を止める手段はもうほとんどない。麻痺も、目つぶしもやった。奴もそれに対して警戒心を抱いているだろう。

爆弾は今も放ち続けているが、最早奴を止めるには至らない。強き意思でそれを切り抜けてきている。

死が、足音を立てて迫りくる。

それに抗うには――

「――やはり、戦うしかねえか」

覚悟を決め、サラから飛び降りようとした刹那、雷河は何かに気づいたように砂の向こうを見つめた。

何かが迫ってきているのだ。

多くの人がこちらに向かってきている気配がする。

「――標的を発見！ 第一射、撃てえ！」

よく通る女性の声。その号令に従い、夜の闇を切り裂く無数の矢がUNKNOWNへと迫る。

迫ってきていた彼女らの事など、UNKNOWNにとっては意に介する必要のない小さな群れ。それらから放たれた矢がUNKNOWNの意識を少しだけでも引くことに成功した。

「第二射、撃てえ！ その後、標的へと直接攻撃する！ 抜刀準備！」

彼らはアプトルに騎乗して接近してきている。小さなダメージとはいえ、突然の乱入者に何度も何度も矢を撃たれてはUNKNOWNも完全に怒りの方向が逸れてしまう。

『また、小さき、存在か……どこまでも、邪魔をする……！ この私に、挑もうという、愚か者め』



ぎろり、とその二つの赤い流星が乱入者たちを捉えた。漏れ出る息吹はじりじりと熱を高め、昏い光がその漆黒の体を照らしていく。開かれた顎あぎとの奥に光るそれは既に狙いを定めている。

「おい、その奴ら！ 熱線が飛ぶぞ！」

雷河が叫んで知らせた時、『失せろ』という一言と共にそれは放たれた。

絶望の青き炎。空を切つて放たれたそれは乱入者たちを薙ぎ払つていく。無情にもそれらに飲み込まれ、消し炭にされてしまっただろう。

と、思われたが、易々とそれを受け入れるほど甘い存在ではなかった。

前方に展開した耐炎の壁を作り出してやり過ぎ、「抜刀！ かかれえ!!」という掛け声に従つて、部下の者たちが一斉にUNKNOWNへと斬りかかつていった。

更に数人は逃げていく雷河たちに気づき、「隊長、あそこに誰かが」と一人が報告した。

「ハンターか。球磨川、数人連れて保護しなさい。残りは私と共にあれを叩く！」  
「ういっす。そんじやおまえとおまえ、ついてこい！」

球磨川と呼ばれた少女が二人のギルドナイトを連れて雷河へと接近。その合間に他の者たちがUNKNOWNを引き付け、攻撃する。UNKNOWNも突然の乱入者に意識が向いていたため、火の粉を吐きながら振り返ってくる。

「目覚めなさい、影縫」

女性隊長が取り出した黒い弓、闇夜弓【影縫】へと告げれば淡く光を灯した。それはレインや彼の父であるソルが行使したような、武器に使われた竜の力を引き出す手段に似ていた。

「疾く走り抜けなさい。目標を縫い止めよー」

他の者たちがUNKNOWNへと攻撃を仕掛けていている間に、彼女は闇夜弓【影縫】から矢を山なりに射出する。放たれた二つの矢はそれぞれ翼を貫き、その下にあるUNKNOWNの影に突き刺さった。

「……っ!？」

反撃をしようとしたUNKNOWNだったが、思ったように体が動いていないことに気づく。何としてでも動くこうとするも、どういいうわけか体が動いてくれない。

これぞ東方の忍の秘術の一つ、影縫である。

相手の影に主に苦無を打ち込むことによつて相手の動きを封じ込める術だ。とはいえ術自体は伝えられるものは限られているし、忍自体も各地で隠れ里を築いているために情報も漏れていない。

彼女が行使したのは間違ひなく影縫に準じる術。それを闇夜弓【影縫】に宿るナルガクルガの力を引き出し、高速で撃ち出した矢で成し遂げてしまった。人為的に生み出された大きな隙。それを逃さずに彼らは一気にUNKNOWNへと攻め立てる。

その間に球磨川は「その人たち、止まりなさい！」と呼び止め、雷河は「一応止まれ、サラ」と声をかけた。

「ハンター? ……いや、そこにいるのは見覚えあるような? それにこのサラマンドラはギルドの許可付……何者? 名乗りなさいね」

視線は雷河たちからレインへと移り、サラの首元にあるギルドの許可を示すスカーフが巻かれている。こういう許可はそうそうおりのものではないので、球磨川が雷河たちへと怪訝な眼差しを向けるのも当然だった。

「俺は流れ者の獅子童雷河、こっちは相棒の焰。そして、こっちはギルドナイトのレイン・スカーレットさ」

「レイン・スカーレット? ……ああ、そういや中央からそんな隊が大砂漠の調査に来ているって耳にしていたね。もしかして、あれに隊を壊滅させられたって口だったりするんね?」

「……そうだ。わたしの部下たちは先に逃がしている。その間にわたしがその時間を稼いでいたのだが……」

「やばい状況にあったのを俺たちが助け出し、こうして逃げていたわけだ。……で、あんたたちはどこの誰だい?」

「あたしは球磨川。あそこにいる出雲さん率いる出雲隊の副官ね。東方のギルドナイ

ト、つて言えばわかるね？」

その言葉で雷河たちも察した。

ロツクラックにいる東方のギルドナイトもまたこの大砂漠の調査をし、その内の一つがあそこにいる出雲隊なのだろうと。UNKNOWNの動きを止め、一方的に攻撃している光景は、一種の希望の光を見ているような気にさせる。

(ここにきて東方のギルドナイトかよ。でもたった一隊ではひっくり返るか?)

影縫によつてUNKNOWNは体の自由を奪われた。だがそれだけであれを止められるのかと問われれば疑問を感じる。何せ閃光玉でも数秒しか止まらず、マヒ状態を振り切っているほどの強靱な精神を持つ。

「とにかくおまえたちはあたしたちが護衛しながらロツクラックへと送るね」

「いや、送るのはこいつだけにしてくれ。俺たちも戦おう」

「な……わたしは……」

「その体で戦おうというのか？　ばかじゃないの？　死に急ぐ？」

雷河の肩から飛び降りながら焔がそう毒づく。

雷河もまた拳を鳴らしながらサラから降りてUNKNOWNを睨み付けた。「お前さんはとつとどこから離れとけ。戦えない奴が戦場に残る意味はねえ。サラ、走れ」と尻を叩いて走らせた。

「おまえ、一緒について行ってやりなさいね」

「はっ」

一礼して指笛を鳴らすと、一匹のアプトルが走り寄り、飛び乗ってサラを追っていた。「そんじや、うちらも合流しますかね。換装、ハンター」と球磨川が告げると、もう一人も同様の言葉を告げ、纏っている外套をなびかせた。すると中から光が帯のように複数伸び、二人の体にまわりついて消える。

するとギルドナイトの制服はハンター装備へと切り替わる。

球磨川の手には鉈のような剣が二振り、黒と白の大小の双剣だ。その剣には小さいながらも何らかの力が発せられているような気がする。

甲刃インセクトロードと呼ばれる東方の虫の素材を使用した双剣だ。微弱ながらも龍属性を帯び、切れ味も悪くないという性能を秘めている。

もう一人もスラスヴェルデンと呼ばれる、ガノトトスの鋭いヒレを使用した双剣を手に、UNKNOWNへと突撃した。それに続くように雷河と焰も走り出し、それぞれ武器を手にする。

雷河は愛用している大鬼薙刀【羅刹】、焰はくろねこハンマーだ。それぞれ戦場へと舞い戻り、あわよくば奴を倒そうと気合いを入れた表情で砂漠を走り抜ける。

『——小賢しい』

瞬間、UNKNOWNから渦巻く黒の奔流が発生する。それはUNKNOWNを中心として発生し、奴の影に突き刺さっている矢を吹き飛ばしていく。そう、吹き飛ばしてしまつた。

これによつて奴に打ち込まれた楔は意味を成さなくなる。

「出雲さんっ！」

球磨川が思わず叫んでしまうほどの危機感。

かっと思ひきらつく瞳が瞬時に周りに群がるギルドナイトたちを見回し、力強く尻尾を薙ぎ払つて砂もろとも吹き飛ばし、口を開いて青い炎を吐き出して薙いでいく。

逃げ遅れた数人が炎に飲まれ、尻尾に吹き飛ばされてしまう。

『たとえ、一人であろうと、複数集まろうと、小さき者、所詮、小さき者。ぬるいわ』

かっと思ひきらつく口から激しい炎が撃ち出される。纏わりついてくるギルドナイト全てを焼き尽くくさんとする凄まじい熱気を放つそれは、何度も爆発音を響かせながら離れていこうとする者らを追撃していった。

「な、なに………いっ………!?!」

隊長の出雲は突然の事に驚きを隠せない。

無理もないだろう、いきなり喋りだし、自分の術を理解できない力によつて破つてきたのだ。謎に満ちている竜だという前知識はあつたとしても、これほどまでのことを

やつてのければ頭に混乱が埋め尽くされる。

その隙を逃すはずがない。

「ちい……間に合わねえ！」

大鬼薙刀【羅刹】を構えながら剣閃を撃ち出そうとする雷河が苦い言葉を漏らす。甲刃インセクトロードを手に行っている球磨川も「出雲さん！」とまた名を呼びかけるも、無情にもUNKNOWNの口が開かれて――

――そこにどこからか高速で矢が飛来し、貫いていった。

「――破砕せよ」

微かに聞こえた、息が切れるような音と共に響く言葉。それに従い、UNKNOWNの中で爆発が起こる。

何事だ、とあたりを見回すが、矢を放ったと思われるギルドナイトはどこにもいない。もつと後ろなのか？

そう思つて球磨川と雷河が見回すと、遠くの砂丘にそれはいた。

離れていったはずのサラと、何とか騎乗しながらの体勢で弓を持っているレインの姿だ。

「な……なにしてたんだ、あの野郎!?! 逃げろ、サラ！」

そんな怒号をあげてしまう雷河。

離れていてもよく通る声で僅かに聞こえたそれに、レインは荒い息をつきながらも苦笑を浮かべる。

「……すまないな、サラ。それに護衛のギルドナイト……無理を言つて……しかし、見捨てるわけにはいくまい……せめてこれくらいは、しておかねば……!」

「グルル……」

「そんな体で、まさか届かせるなんて……」

どこか心配そうな声を漏らすサラと、驚きを隠せないギルドナイトをよそに、レインは新たな矢を番えて狙いを定めた。例え砂丘と言えども、その高低差はUNKNOWNにとつては意味を成さない高さだ。人からすれば少し高い位置でも、奴にとつてはただ立っているだけで背中と同じくらいの高さなのだから。

しかしそれでも十分だ。

一つ放ち、また一つ山なりに撃つ。

一本の矢は横からUNKNOWNの体を貫き、もう一本は背中から砂へと真つ直ぐに貫く。それらの軌跡はUNKNOWNの体で十字を描いた。

『まだ、いたか。目障りな……!』

振り返ってくるUNKNOWNを睨みつけながら、「サラ、走ってくれ」と告げつつ、視線は奴から離さない。「其は、十字架——」と詠唱を開始するも、UNKNOWNは振



り返りながらレインを狙いましたかのように、レインの視線と交差するようにそれは追尾していた。

「——彼の者を断罪……、せし力よ——」

『小賢しい……………!』

「——顕現……………ツ!?!」

「あぶな……………ツ!」

開かれた口から、弾け飛ぶような甲高い音が響いた。何かが高速で闇を突き抜けた気がするが、あまりにも速いことと耳をつんぎくような音によって見えなかった。

だが、そう時間をかけずに聞こえてきた爆発音が意識をそちらに引き付けた。

見れば、レインがいた砂丘に恐らくUNKNOWNが撃ち出した炎が着弾したのだろう。激しい炎が渦を巻きながら立ち上っている。

「な……………あ、雨の兄ちゃん!」

「サラッ!?!」

夜の影にうつすらと見える二つの影。一つはレイン、もう一つはサラ。それらが宙を舞って吹き飛んでいる。だがレインもただやられるだけではなかった。追撃を撃とうとしているUNKNOWNの体に、光の十字架が顕現した。

それはUNKNOWNの体に打ち込まれた新たな楔だ。

出雲が放った影縫と違い、直接UNKNOWNの体を縫い止めるかのように顕現しているため、UNKNOWNはその場からまたもや動けなくなつた。

それだけではない。

十字架がUNKNOWNの体を貫き、直接UNKNOWNへとダメージを与えているのだ。

しかし、それと引き換えにレインは――

「――グ、グル……！」

砂に落ちたサラが何とか顔を上げてレインを探した。直撃ではなく爆風に煽られただけだが、それでも十分に殺傷能力がある攻撃だ。火に対して耐性があるサラは死を免れることが出来たが、人間であるレインはそうはいかない。

それにレインは既に負傷をしている。そんな彼が、我が身を顧みずにあのような真似をすると言い出した。その結果がこれだ。止めはしたが、それでもレインは譲らなかつた。どこまで自己犠牲をすれば気が済むというのか、と愚痴りたくなるが、生憎とそんな言葉はレインには届かない。

代わりにそれを護衛としてついでにきたギルドナイトが言ったのだが、それでも彼は退くことはしなかつた。部下だけでなく、あそこにいる者たちを守るために行動した。

「……っ！」

サラは見つけてしまった。

離れた所に横たわっているレインだったものの姿を。

それは熱風と昏き炎によつて焼かれたのか、身を守るはずの装備も髪も何もかもが黒く染まつている。絶え絶えと呼吸音が聞こえてくるが、どんどん弱くなつていく。

近くには消し炭になつている物体が二つある。もしかすると爆風の近くにいたのだろうか。護衛として来たギルドナイトと騎乗していたアプトルと思われるものが転がっていた。

「グル、グルル……！」

レインを呼ぶようにサラが声をだし、這い這いと近づいていくがレインはその声に応える気力はなかった。

（何も見えない……聞こえない……。身体の熱さすら感じない……はは、これまで、か）  
自分が立っているのか倒れているのかすらレインにはわからなかった。死に体に近い体はもはや感覚など存在せず、さつきまでであった痛みや苦しみをすら感じていない。ただゆつくりと深い闇の海へと沈んでいくような錯覚と、記憶の海から引き出されていく朧げな光景だけがレインの見えているものだった。

（サン、ゲイル……すまない、先に逝く……。そしてアスベル、お前がどこまで伸びるか、見守ろう。……だが、やはりこんなところで脱落することは……未練が、大きい……な）

妹のサン、親友のゲイル。この二人の成長する姿やこれからのこと、気にならないはずがない。それにゲイルはもうすぐ釈放されるはずだ。帰ってきたら、色々やりたいことがあつたのに、それはもう叶わない。

また次の隊長へと指名したアスベルの事もある。突然の指名だが、それも彼の實力やこれからの伸びも含めて指名したことだ。彼の成長をこれからも見守りたかった。

色々未練はあるが、時間はもう待つてはくれない。彼らの事を想い、レインは静かに眠りに落ちていった。

## 76話

夜空に怒号が響き渡る。

光の十字架によって縫い止められたUNKNOWNは、何としてでもそこから抜け出そうともがきだす。だが体を貫通し、砂に突き刺さる楔と化した十字架はそう簡単に抜け出させてくれなかった。

だからUNKNOWNは人語ではなく、竜としての声を上げながら暴れる。それは痛みではなく、怒りによる咆哮であった。

「……っ、この好機は逃さない。とっておきをくれてやる！ ギルドナイトたち、離れていろ！」

レインが吹き飛んだ光景に苦い表情を浮かべた焰ではあったが、彼の死を振り切つてUNKNOWNへと疾走する。接近してくる焰に何をするつもりだ？ といった表情を浮かべるのも無理はないだろうが、「離れていた方がいいぜ！ 大タル爆弾Gが大量に飛ぶからよ！」という雷河の言葉に、慌てて離れていった。

そうして彼らが離れた上で、「飛べ！ 魚鱗陣でベーターから10！」という命令を下

し、外套から大タル爆弾Gが飛行する。それらは真つ直ぐUNKNOWNへと向かっていき、息を呑む奴へと次々と命中していった。

爆弾としては最高の威力を誇る大タル爆弾Gが、十も飛んでくる。いくらUNKNOWNといえども、無事では済まないだろうと誰もが思つたろう。

だが爆風の奥、強い意思と生命力が沸々と湧き上がっていた。

『やってくれる……猫が……しかし、今のもので、これが、解けた。狩る、貴様ら、狩りつくす……!』

大きく息を吸い込んだUNKNOWNに呼応するように、またしても黒いオーラが渦を巻いて空へと昇っていく。その中の一部が口元へと集まり、プレスとして撃ち出された。

周りの者たちが慌てて回避するが、大タル爆弾Gの爆風によって十字架の力を弱らせてしまったため、群がる人がいなくなった隙にUNKNOWNは自由を手にする。

何度か翼を飛ばたかせて調子を確かめ、そして奴は——弾けた。

怒号を上げて身構えたかと思えば、瞬時に焰の下へと接近して頭突きを仕掛けた。奴が立っていた場所は、踏み出した影響で多くの砂が舞い上がり、焰を打ち上げながらの転身によって翼としつぽが周囲を薙ぐ。

それらは相変わらずの威力であり、砂と共にギルドナイトたちをも吹き飛ばす。例え

数メートル離れていようと、発生した風圧によるものだけで十分に人を吹き飛ばすのだ。

強靱な肉体とそれから生み出される衝撃。

リオレイア以上のスペックが、この現実を否が応にも教えてくれる。

「いったん離れるね！ 負傷者は無理せず離脱しろ！ 撃てる奴は出雲さんの援護！

遠距離から撃ちつくせ！」

球磨川の指示に従い、UNKNOWNから離れているガンナーたちが一斉に攻撃する。弓と弾が漆黒の体に着弾していくが、そんなものではUNKNOWNは止まらない。

例えその身を貫く貫通弾であろうと、その身を爆破させる徹甲榴弾であろうとも、怒りに任せて暴れる奴には苦痛など意味はなかった。

そこにいるのは鬼。竜の姿を取った修羅である。

『この、砂海に……沈むがいい……！』

「くっそ……てめえが、沈みやがれええええええ！！」

雷河が溜まった怒りを込めての一撃は、振り返りざまに火球を撃ち出そうとしたUNKNOWNの頭を捉えた。ある意味カウンター気味に入った大鬼薙刀〔羅刹〕の刃は、雷河の怒りを受けてなのか、奴の甲殻を切り裂き、肉へと届く。

(届いた!?)

通り過ぎざまに与えた一撃だったが、UNKNOWNが火球を撃ち出せずに怯んだところを球磨川が斬りかかっていった。その刃もまた、UNKNOWNの甲殻を切り裂く。

さつきまで通じていなかった雷河たちの攻撃が、ここにきて通じ始めたのだ。

「大タル爆弾Gの影響か? だとすると積み重ねた焰の爆弾らのダメージがここにきて生きたってことだ! 奴に俺たちの攻撃は通用している!」

雷河の言葉にギルドナイトたちに希望の一筋の光が見えたような気がした。

何をして、突き破ってきた奴の意思ではあるが、体はそれでも悲鳴を上げだしているのだ。奴として生物、どんな攻撃も通用しないわけではない。

だが奴は今、鬼と化している。

今斬りかかれば喰らいつき、その強靱な体で吹き飛ばし、生え揃った鋭利な棘によって貫いてくるだろう。

「グオオオオオオオオッ!!」

更に奴にはあの昏い炎がある。

数歩下がって息を吸い込み、撃ち出されたその火球が連続して地表を爆破させながら突き進む。火球の直撃はなくとも、まき散らされる火の粉から生み出された爆発で数人



が吹き飛んだ。

だがブレスを吐いた後の硬直を狙って雷河やギルドナイトが攻めに転じる。球磨川もまた手にしている甲刃インセクトロードでUNKNOWNへと斬りかかった。その刃もまた甲殻を破り、中にある肉を裂く。

するとどうしたことだろうか。

血と共に、黒い粒子が噴き出してきたではないか。

「なんね、これは……」

それは空気中に溶けていった上に、今は夜ということもあつて見間違いのように思えたかのような小さなもの。だが球磨川は確かに見えた、と感じ取った。

UNKNOWNが時折纏っていた黒いオーラ。

それを形作っているのかもしれない、と推察できるかのように酷似している黒い粒子。

球磨川だけではない。

雷河もまた肉を斬った際に血と共に黒い粒子が出てくるのを目視していた。

「てめえ……やっぱり狂化竜の生き残りか!？」

『……否。ファイアは、そんな、小さき、ものではない』

「だったらなんだってんだ!？」

『答える、必要を、感じない。知って、どうにか、なるものでもない。沈め』

素早く両翼に力を込めると、その場で砂に叩きつけた。それだけで強い振動が発生し、砂を巻き上げ、人を押しつぶす。斬りかかっている雷河たちにとってこれは痛い。振動に関しては雷河は鍛え上げた感性と身体能力によって防御は出来るが、巻き上げられる砂によって足元をすくわれては意味がない。

体勢が崩れたのを見計らってシヨルダーアタックにより雷河は宙を舞い、周りを薙ぎ払う尻尾で巨漢は吹き飛ばされた。

『私に、傷をつけられて、舞い上がったか？ 愚かな。ヒトに、フィードを、殺せる、道理なし……！』

カッと見開いた赤眼。UNKNOWNの殺意を表すように闇の中で一際赤く輝きを増す。天を仰ぎ、開かれた口から凄まじい熱エネルギーが収束し始めた。

渦を巻きながらエネルギーは一点へと収束し、大きな火球を生み出していく。

「止めるのです！ 撃てエツ！」

離れた所から出雲が命じ、幾多の矢と弾丸がUNKNOWNを襲った。矢は主に連射矢と貫通矢、弾丸は貫通弾と徹甲榴弾が。それらが全てUNKNOWNに着弾し、ダメージを与えた。

今までならば弾かれるか、少ししかめり込まなかったそれらはUNKNOWNの内部

へと到達している。それはすなわち、これらの攻撃もまた本来の威力を十分に發揮して UNKNOWN にダメージを与えているということだ。

だが UNKNOWN はそれを認めない。

強靱な肉体を持つ自分が、押されることなどあつてはならない。痛みなどない、あつたとしても意思が握りつぶす。

そのまま溜めこんだそれをギルドナイトたちにぶつけてやる。

その刹那、声が聞こえた。

《やれやれ、愚かなのはどちら、なんだろうね?》

(——ッ!?)

思いもしなかった声に UNKNOWN に僅かな動揺が走った。

その隙を狙ったわけではない。ただタイミングがうまく噛み合ってしまっただけのこと。

「——標的、確認。撃ち方、始め!」

静かな命令がなぜか耳に届いた。

UNKNOWN の右翼方面から先ほど以上の矢が多く降り注いできた。溜めこんだ炎が UNKNOWN の位置を知らしめる、それは出雲達が現れた時と同じ現象だ。

だが出雲達の時とは違い、今回は数が違いすぎる。

数十、いや、百を超えるほどの矢が一気にUNKNOWNへと突き刺さっていくのだ。「あれは……まさか!？」

「標的、UNKNOWN。各自展開しなさい。負傷者は望月らが保護。速やかに離脱させなさい」

「久しぶりの大物だ。遅れるなよ日向隊!」

「伊吹隊は後方に回る。続けえ!」

「加賀さんね。心強い援軍だわ! 戦えるものは奮い立て! 一気に攻め落とす!」

「戦えないものは去るね! 命を粗末にするな!」

出雲の言葉に出雲隊が咆哮を上げて立ち上がった。加賀の命令を受けて近づいてきた望月らが「負傷者はこっちに來い。私たちが護衛し、向こうへと連れて行こうぞ」と声をかける。

それに従って戦えない程にまで負傷したギルドナイトたちが移動し、アプトルが引いていた荷車に乗っていった。残りの出雲隊はそれぞれ応急薬や回復薬を飲み、再びUNKNOWNと対峙する。

だがUNKNOWNはせっかく溜め込んでいた炎弾を撃たず、どこか困惑したような表情に見えるほどに顔を歪ませながら戦っていた。翼、尻尾、体と群がってくる新たな援軍らを攻撃しつつ、先ほど聞こえた声と対話していた。

(私が、愚か? 何を、言うのか……!?)

《だってそう、でしょ? お前の戦いは短期、決着。その強すぎる力はなんの、ためになると? お前を見た奴らを速攻で始末する、違う?》

声はUNKNOWNにしか届かず、UNKNOWNの声もまたその声にだけ届いている。

だから雷河たちには聞こえない。しかしUNKNOWNの様子がおかしい、ということだけは雷河や一部のギルドナイトたちが察していた。

《サーチ・アンド・デストロイ。お前は存在、だけは匂わせていても正体不明であれ。故にUNKNOWNの通称がついたわけ。それを成し得るのは、その力を以ってしてハンターたちを短時間で、始末する。ふふ、だからこそお前の存在はヒトに対して、怖れを抱かせるには十分なもの。そこまでは、よかった》

(……っ)

《なぜお前が愚かなのか。それはこの戦いが、長引きすぎたのさ。だから奴らはお前の攻撃に、慣れた。今もなおこいつらが生きていたのは慣れたからさ。そしてお前も、攻撃手段を見せすぎた。これもまた頂けない。ヒトを甘く見たね、ファイア? 戦いは終わりさ。帰還しろ》

(帰還? ……で? 馬鹿な……そんな、ここまで、やっておいて、今更、引けるものか

!

《命令よ、ファイア。二度は、言わない。でないと——あたしがお前を、処刑するぞ?》  
ざわりと背筋に悪寒が走り抜けた。

今までヒトを小さき者、と呼び、侮り続けたUNKNOWNでさえ恐怖を覚えるモノが刹那の時だけではあるが、感じられたのだ。

それに逆らうようなことがあれば、まず間違はなく声の主は本当にUNKNOWNを処刑するだろう。あれはやると言ったらやる存在だ。

（——御意……っ）

故にUNKNOWNは従うしかない。

黒い奔流を発生させ、自信を覆い隠すように渦を任せるとUNKNOWNへと斬りかかっていたギルドナイトたちが弾き飛ばされる。

「うろたえないで。撃ち方、始め」

加賀が彼らを落ち着かせるように呼びかけつつ、手にしている大神ヶ島【神在月】で黒い渦に穴を開けんと撃ち始める。放たれた弾丸は連続して渦の中へと飛び込んでいくが、UNKNOWNへと着弾する気配はない。穴を開けたとしても渦を巻いているためにすぐさまそれは防がれてしまっていく。

これでは意味がない、と加賀が目を細めて渦の奥を見つめていると、強く羽ばたく音

が聞こえてきた。それはどンドン空へと舞い上がり、渦が突然晴れたかと思うと夜闇の向こうにUNKNOWNの姿を見る。

「に、逃げるのか？　こいつで？」

困惑する雷河たちをよそに、UNKNOWNはそのまま月の向こうへと消えていった。

しばらくは混乱による短い静けさが続いた。だが自分たちは生き延びたのだ、という実感がわいてくると、静けさは歓声へと変わる。

「助かったんだ……！」「ありがとうございます！」「などといった声があちこちから聞こえてくる。中には「加賀さんたちが来たから、びびって逃げていったんだな！」というものまである。

確かにそう捉えてもおかしくはない突然の撤退だった。

東方ギルドナイトの情報は雷河もある程度は知っている。

加賀といえはその中でも凄腕のガンナーだという話だ。構成されているメンバーもガンナーが多く、彼女が鍛え上げたことで皆高い水準で纏まっているという。

そんな彼女が率いるギルドナイトたちが援軍にやってきた。となれば不利を悟って逃げていく。考えられない事ではないのだが。

（だからといって、あれだけ俺たちを見下し、しかもキレ気味だったあいつが逃げるのか

？ んなわけないだろ。何か別の理由があるはずだ)

しかしその理由を推察することは出来ない。

UNKNOWNそのものが謎に包まれているということもあるし、推理する材料が少ないということもある。今はただわからないままではあるが、何とか生き延びたことを喜ぶしかできない。

のだが、手放して喜べない事情もある。

数分後、戦いが終わったことで体を休め、各自が治療にあたっていく中。レインの死体が運ばれてきたのを見てしまつては、そんなことできるはずがない。サラは何か持ち前の炎の耐性によって生き延びることは出来たが、人間であるレインはそうじゃない。

「……結局、死んじまつたら意味ねえだろうがよお……!」

その体は火球によつて黒ずみ、元の顔はうまく判別できない。身を守るはずの装備も所々溶解していた。しかしそのラヴィFXシリーズと近くにサラがいたという事実が、この死体がレイン・スカーレットであることを示していた。

「なんで戻つてきやがったんだ馬鹿野郎……!」

「でも、あれがあつたからこそ一矢報いることが出来た」

「だからって死んじまつたら意味ねえだろうが。最期まで甘つちよろい兄ちゃんのみ



まっつてのはこいつらしいがよ、本当に死んでしまったら残された雨の兄ちゃんの下下たちはどうなるつてんだよ」

「そうね。こいつは馬鹿をしたね」

レインの死に嘆いている雷河の耳に、そんな球磨川の言葉が聞こえてきた。彼女は至つて冷静な表情と口調でレインの亡骸を見下ろしながら言葉をつづける。

「ギルドナイトが自己犠牲をすることほど馬鹿なことはない。おかげであたしの仲間も一人道連れになつた。そもそも隊長が一人で敵を引き付けていたということ自体が馬鹿馬鹿しい。レイン・スカーレットは、実に愚かなギルドナイトだったということね」「なんだと……?」 確かにこいつは甘つちよろいけどな、そこまで言われるほどじゃねえだろ!」

左目に涙を浮かべながらも怒る雷河が球磨川の胸ぐらをつかむが、しかし球磨川は淡々と「ギルドナイトとは——」と言葉を続けていく。

「——自己犠牲によつて死を選んでではならない。ハンターと違い、ギルドナイトはハンターの犯罪を取り締まり、未知の領域を探索し、未知のモンスターを調査する役割を担う。そのため実力あるギルドナイトが減るようなことがあつてはならない。実力あるギルドナイトになるのにどれだけの時間がかかると思つてるね?」それが強力な敵と戦い命を落とすとなればどれだけの損失になる?」……聞けばレイン・スカーレットは

まだまだ伸びしろがある有力なギルドナイトだったという話じゃないね？ 父親は中央でも大長老の懐刀と言われているくらいだし」

「……………」

「そんな未来あるギルドナイトが、愚かにも自らの命を捨てながら仲間を守る？ それは確かに仲間やあしたたちを守ることになっただろうね。それは否定しない。でも、将来的にまたあのUNKNOWNのような強力なモンスターが現れた時、もつと多くの命を守れたはずじゃあないのかな？ それに隊長として後に続く部下たちを育てることも繋がる。ねえ、それが今日の事でどれだけ損失になる？ レイン・スカーレットが今の実力になるのにどれだけ時間をかけたね？ それが一瞬にして消え去る。実にもつたいないことね」

じつと雷河の目を見つめながら球磨川はそう告げた。雷河は震える手で球磨川の胸ぐらをつかみ続けていたが、反論する言葉が浮かんでこない。そんな雷河の手を振りほどきながら、球磨川は小さくため息をつく。

「これが東方のギルドナイトの、加賀さんたちの教えね。実力あるギルドナイトは、自ら命を捨ててまで戦うような愚を犯すな。それは将来芽吹くはずの芽を摘むことになり、ひいては多くの命を守ることが出来なくなる。大事ある任務を遂行できなくなる。故に、死に急ぐな。……………そうでしょう、加賀さん？」

「ええ、よく覚えていようで何よりよ。球磨川」

部隊の調子を見回っていた加賀が少し離れたところで小さく頷いていた。彼女もレインを見下ろし、数秒瞑目したあと雷河へと向き直り「彼の死を悲しむあなたには厳しい意見かもしれないけれど、これが私たちの認識。隊長たるものが、己の命を捨ててまで仲間を守ることは、私たちは認められない」と彼女もきっぱりと言い切った。

「しかし、報告は耳にしている。彼のその行動があなたたちの反撃の一手であったと。その点に関しては彼には感謝するわ。おかげで出雲達に更なる犠牲が出なかったとね」

「あ、ああ……」

「ご愁傷様。遺体は必ずロックトラックへと送り届ける。彼の部下たちは道中で発見しているから安心して。別の隊が送り届けているはず。彼が守った命は消えてはいないでしょう。それだけでも彼の死は無駄ではなかったと言えるでしょう」

球磨川と違い小さくフォローはしてくれる。でも球磨川と同じく表情だけは変わらない。雰囲気や噂に違わずクールな女性のようなのだ。フォローしてくれているのに声色も淡々としており、柔らかさを感じないためただ事務的にそう言っているように感じられた。

「準備が整ったらあなたたちも共に来てもらいたい。詳しい話を聞くことになるでしょうから」

「わかった」

「では、またあとで」

結局最後まで加賀は雰囲気や声を変えることなく離れていった。しかしその安定した雰囲気が仲間たちに落ち着きを与えるのだろう。他の部隊に向かって調子を聞く彼女は、雰囲気こそ変わらないが仲間を心配しているのだという気持ちは伝わっているらしい。

彼らはそんな加賀を前にし、落ち着きと安らぎを感じているようだ。とても信頼されている人物だということが見て取れる。

「さ、もういいね？　いつまでも死体をさらしておくわけにもいかない」

「ああ」

球磨川が雷河に断りを入れ、レインの死体を袋に包ませる。それに名札をつけ、他の袋と共に荷車へと載せられていった。その様子を隣に並んでずっと無言になっている焰と共に見送った。

焰はずっと不機嫌そうな表情で雷河の隣でサラの治療をしていた。いや彼女はいつもしかめっ面をしているが、雷河はそれはいつものことではないだろう、と感じ取っていた。

そんな彼女の頭をぽんぽん、と撫でてやると「撫でるな」と弾かれてしまう。

「うん、その言葉が出るなら大丈夫そうだな、ほむほむ」

「ほむほむ言うな。それに別に調子悪いわけじゃない」

「雨の兄ちゃんのを悲しんでたんじゃいいのか？ それとも球磨川や加賀の言葉に反感を持っていたとか？」

「そんなんじゃない。ただ、どいつもこいつも簡単に命捨ててまで他人を守れるのが気に食わないだけ」

「……ああ、そうだな。残される側としちやたまんねえよな」

一度それを経験しているだけに雷河はあの時のことを思い起こしてしまう。父親のようで師匠のようでもあった彼もまた、雷河たちを守るために自ら命を捨てていった。

焰もまたそれを思い出してしまったのかもしれない。

「人間つてのは、どうしてこうも簡単に命を捨てれるんだ？ 理解できない」

「さてな。それだけ守りたいものがあって、そのために己の意思を貫き通す奴が何人かいるっただけかもよ。もしかしたらお前も、誰か大事な奴がいるなら……その気持ちかわかるかもしれないぜ？」

「はっ、んなもんいないな。たぶん焰には、そういう奴は一生出来ないさ」

「それはそれで悲しいねえ。ずっと一緒に旅している俺からすればさ」

「あ？ 何が言いたいんだ、猿？」

「さてね。それよりもう一人の旅のお仲間さんを診てやんな」  
「……………ふん」

見上げていた雷河への視線は相変わらずの様子だった。とはいえ雷河を心底嫌っているわけでも、うざがっているわけでもない。ただ彼女は昔から変わらず自分の感情を示すことがぶつきらぼうなだけだ。

素直じゃない猫。

それを体現しているのが焰というアイルー。

実際サラを治療している彼女は表情こそ不機嫌そうだが、処置はてきぱきとしている。サラもまた焰の事がよくわかっていいるから、安心して体を預けている。

そんな彼女の様子を見つめながら雷河は小さくため息をついて（自分の命を捨ててまで誰かを守れること……それが人間の、人の強さの一つなのかもしれないな）と腕を組む。

人じゃない自分たちには理解できない事かもしれないが、人として長年生き、人の暮らしに溶け込んでいるから、少しずつは人というものを理解し始めている。

純粋な力だけでは説明がつかない何か。

それを生み出すのは心、感情。獣やモンスターとしての本能や単純な感情だけでは生み出せない人の心の力。

それを理解できたとき、もしかするとあの時の神倉四季という行動やレインの行動も理解できるのかもしれない。

あれだけの力を持っていて彼が後に託したこと。

レイン・スカーレットという甘っちょろいギルドナイトの行動。

今はまだ完全には理解できないかもしれないけど、いつかはそうなるかもしれない。

思いを馳せながらUNKNOWNとの戦いで疲れた体を癒していくことにした。

だが少し休んだ後、戦い継続を望んでいるものがいた。

日向である。

彼にとつては久々の大物の獲物だ。彼はUNKNOWNを狩る気満々でロツクラツクを出撃していった。だというのにせっかくの獲物は加賀達が乱入すると逃げて行つてしまった。

これには日向は出足をくじかれたかのようなものである。この昂った感情をどこにぶつけられたいのか。日向は加賀へと戦闘続行を告げる。だが当然のように加賀はそれを却下した。

「これじゃあ不完全燃焼だ。奴がどこに逃げていったのか、追うくらいならいいだろう

？」

「一隊だけでどうにかなると？」

「奴は今疲弊している。追撃できれば儲けものだろう？ うまくいけば奴のねぐらも見つけられる。一隊くらいは追いかけてもいいと俺は考えるが？」

「あなたが戦いたいただけじゃあないのかしら？」

加賀の問いかけに日向は腕を組んで無言を貫いた。しかし彼の部下である北上は「いや、凶星つかれたからってだんまりになるのはよくないですよ」と頭の後ろで手を組みながらつつこんだ。

「はあ……でも、日向の言にも一理ある。いいでしょう、日向隊は逃げたUNKNOWNを追いなさい。しかし引き際を誤らないように。命捨てるような真似はしないように」「わかつている。では十分後出立する。北上、秋月。そのように各自伝えろ」

「はいはい」

「承知」

○

「さて、どうだった？ UNKNOWNはよお」

「……………ふふ、いい獲物じゃない」

ずっと離れた所で戦いを見守っていた観客。



草薙武と衛宮天羽は一息ついて砂の坂に背を預けた。瞼を閉じれば思い出される。

闇に浮かぶ赤い流星が動き、昏い炎が地表を走り抜け、爆発する。刃を弾き返し、獲物を貫く赤い棘が生え揃う黒き鎧……どれもこれも天羽にとつては魅力的だった。

そう、それら全ては彼女にとつて怖れを抱かせるものではない。

「実に——死合が楽しくなりそうな獲物。ああ、悪くない。こいつも、喰らいたいと鳴いている」

そう言つて天羽々斬を鞘から抜いた。眠っているはずの天羽々斬はどういうわけかカタカタと震えている。どうやらUNKNOWNの気配につられて少し目が覚めてしまったようだ。

それは武が持っている天叢雲剣も同じであり、先ほど戦ったばかりなのに天羽々斬と同じく小さく震えていた。

「その割には乱入をよく我慢したなあ、お前」

「ふん、邪魔者が多くては死合を楽しめない。死合は少数精鋭でやるもの。今はまだあいつの力を見るだけで十分。そう、十分すぎる程に見せてもらった。奴の攻撃手段を」  
遠くからの双眼鏡越しの戦場ではあったが、それでも夜目が効いていた二人。途中からではあるが、そこから最後まで見ることが出来た。

それでも十分すぎる程に戦いを、UNKNOWNの動きを見ることが出来たのが大き

い。

見ていることと、見てないのでは次の戦いで大きな差が生まれる。

奴の攻撃をどのようにかわすか、などの対策を考え、講じる時間があるという備えあれば憂いなどない。

「ふふ、楽しみだ。次に奴を見つけたら、何としてでも斬りあいたい。お前、先走るなよ？ あたしを置いて一人で楽しもうってんなら、斬るからな」

「おお、こわいこわい。わかってるさ。のけ者にやあしねえよ。安心してくれ」

「それならいい。……しばらくは、退屈せずすみそうだ」

「そうだなあ。嬉しいことだ。姉貴との戦いとはまた別の楽しみが出来るのはいい。うん」

こうして将来的な楽しみが増えることを喜びながら、二人は来た道を引き返して天王寺領へと戻っていった。

帰路の途中に会話はほとんどなく、ただただ脳裏にUNKNOWNの姿と戦いを思い返して。

○

大砂漠の一角。

岩山の頂上で彼女は一点を見据えていた。人の目では見えない距離ではあったが、しかし彼女にとっては問題のないこと。腕を組み、静かに吹き抜ける乾いた風に身を任せながら、全てを見届けていた。

その上でそのような指示を出した。

そう、彼女こそがUNKNOWNに対して声をかけた存在。

「さてさて、フィーアが少し遊び過ぎた、というのはいただけじゃない。でもそれによってあのギルドナイトが死んだ、というののもうけものか」

レイン・スカーレットの死。それは彼女にとっては十分な収穫である。

六年前のシュレイド城での戦闘に参加したギルドナイト。それはつまりミラボレアスとの交戦経験があるという事だ。それがあってもハンター界限では大きな称号になりえる。それに加え、この六年で更なる成長をし、これからも伸びていくはずだった逸材。

「ふふ、レイン・スカーレット。残念だったねえ……ここでリタイアというのはお前にとつては不本意、だったのかもしれない。しかしその甘さがなければ生き延びたかも、しれないねえ。でもこれがお前の運命。残念無念、お疲れ様でしたってねえ」

彼女らしい独特の区切りで語りつつ、くつくつ、と笑いながら彼女は別の方角へと流

し目をした。その方角には今、とあるハンターたちが移動しているはずだ。それが彼女には見えている。

「次は、お前たちか。うんうん、お前たちには『いいもの』をプレゼントしてあげよう。それにこれを試したい気分だし、ちょうどいい。ということ——」

何気なくすつと後ろへと軽く飛ぶと、そのまま闇に溶けて消えた。

それだけで彼女はその場からいなくなる。どこに行つたのかといえば、さつきまで見ていた方角に広がる砂漠だった。そこには誰もいないのだが、遠くの方からずんずんと鈍い足音が聞こえてきた。

振り返らずに彼女は何気なく両手を広げると、ぐつと腹の前で手のひらの間にエネルギーを溜め始める。

それは凄まじい勢いで渦を巻き、握りこぶし大の大きさにまで肥大し、しかしそれ以上大きくならないようにエネルギーが圧縮されていく。

その球体からは強い龍エネルギーが感じられる。十分にそれを圧縮されると、彼女はそれを指先で回転させて弄んだ。そうしている間にも背後からは何かが音を立てて近づいてくる。

「さあ、食うがいい。そして——喰らって来い。お前の役割を果たす時さ」

そして彼女はそれを頭上に投げた。すると背後から来た奴は大きく口を開けてそれ

を喰らってしまった。圧縮された大きな龍エネルギーを、この場に現れたイビルジョーが喰らったのだ。

となればどうなるのか。

飲み込んだイビルジョーの体内で、凄まじい勢いでその龍の力が暴れ出す。それは体内から全身へと広がり、イビルジョーへと多大な力を与える。

「グル、グルオ……オオオオオオオオ!!」

抑えきれない力は、口から噴き出し始める。黒煙のような龍エネルギーが口、顔へと広がってイビルジョーの顔を包み込んだが、イビルジョーはそれを何とか抑えつけないと成功した。

だが体の奥でうずく力はイビルジョーに困惑をもたらした。

足元にいる彼女はそんなイビルジョーを見上げることなく、「行くがいい、ノイン。言ったはずだ、お前の役割、を果たす時だつてね。十分に飢えた、だろう? 獲物は向こうにいる。存分に、喰らえ」と独特な区切りをするいつもの調子で命じた。

それに従い、イビルジョーは体内にうずく力を感じながら進んでいった。

奴を見送りながら彼女は「さあて……さようなら、次なる犠牲者。あたしが直接殺せないのは残念だけど、まあいいさ」と薄く笑いながら、いつもの癖で短刀を抜き、くるくると回転させてペロりと刀身を艶やかに舐める。

「もう十分に休んだらう？　時間は与えられた。その中で前以上に力をつけたのか、あるいは全然成長してないの、か。確かめさせてもらおうか。くく、再び始めようじゃないか。ヒトと竜との戦争つてやつは、ベアトリクスから売られたモノだが、しかしヒトは、お前たちは十分に抗つてみせた」

思い起こされるのは六年前。

テオ・テスカトルとミラボレアスを前に彼らは戦い、勝利を収めた。人側にも犠牲者は出たがしかし、滅つたのは神倉の者ぐらいしかない。それ以外の狙われた者たちは生き延びた。

だから今回は準備期間を設けた。

人側にも、竜側にも。

そして今、新たな犠牲者が生まれ、次の標的を定められている。

「世界というものは残酷なものね。こうして次々と、容赦なく、芽を摘み取っていくのだから。くつくつく……ああ、とても残酷。ヒトの意味なんて、『世界』の前にはもろく、儚いものなのだから、ね」

でも、と彼女は小さく首を振った。「それ以上に、そろそろあたしが限界だ」と何気なく短刀を横に振った。するとそれだけで刃の軌跡に従って砂が切り裂かれ、激しい風が生まれて舞い上がる。

（裏方は性に合わないんだよねえ……ほんとにさ！　ベアトリクス命令だからってこうしてちまちまと竜を動かしてきたけど、そろそろ限界だ！　だからこそこうしてイレギュラーを生み出したが、もういいだろう？　あたし自身を戦わせろ。そうするに足るだけの力を見せてみる！　戦いを、あたしを楽しませる、戦いを！）

「さあ、抗ってみせろ次なる、犠牲者。喰われるようならそれまでさ。しかし抗ったならばそのまま、成長してみせなよ。そうすればいずれ、あたしが相手してやるからさあ！　くつくつく……ふふふふ……！」

彼女の冷たい微笑はしばらく夜の闇に響き渡る。

その金色の瞳はただ彼女の言う「次なる犠牲者」の姿を捉え続けていた。

## 77話

大砂漠を移動し、岩陰に隠れながらクロムたちはじつと前方を見つめていた。

彼らはロツクラツクで七禍から仕入れた情報をもとに、UNKNOWNを探していたのだが、前方には別の存在がいた。

月の光に照らされたその姿はティガレックスであることには間違いないが、それにしてもは大きすぎる。俗にいう金冠サイズなのだろうが、実際に目にするのは初めてだ。だからクロム……特にアルテミスには「大きすぎる!？」という印象が強く刷り込まれた。そしてあのティガレックス、どうやら負傷しているらしく体のあちこちに生傷が多く見られた。何かと戦い、休息をとっているところなのだろう。

ここにいるのはクロム、桔梗、アルテミス、サンの四人。

今のティガレックスは隙をさらしている状態だ。狩りに行くならば好機であることには間違いないが、しかしこのメンバーで勝てるのか？ という疑問がついてくる。

クロムの実力は四人の中では最高だろう。アルテミスも元々鍛えられたことと、秘めた才能を目覚めさせたこと。それに加えてギルドナイトに所属して、更なる経験を積ん



だことで近年は伸びしろがある。

桔梗もクロムについてまわって実力を衰えさせていないし、サンもまた同様だ。ギルドナイトとしての業務で実力は嫌でもつく。

だがそれであるティガレックスに勝てるか？　とうとうそうでもない。

元よりティガレックスは飛竜種の中でも上位に位置する実力を持ち、同様に危険度も高い。特殊なブレスを持たない代わりに、高い身体能力と機動力を生かした立ち回りから生まれる殺傷力で戦う存在だ。

通常の飛竜種と違い、四肢で走り抜けることによつて追尾性の高い突進が可能になり、方向転換も二足で走る竜らと違って素早く行える。

迅竜ナルガクルガよりは遅いが、しかし威力はティガレックスの方が段違いに高い。

それだけでなく鋭い爪や牙、高い筋力から生まれた腕で放たれる土の塊。そして何より轟竜と呼ばれるほどにまで高まった咆哮の衝撃。

これらを駆使して戦うのがティガレックスだ。

通常のティガレックス程度ならばこの四人でも問題なく戦い、討伐してしまえるだろう。しかしあれは通常よりもかなり巨大なティガレックスだ。

となれば実力も通常以上と見積もっていいだろう。

(リンクをつけるとするならばG級か。しかもあの巨体だ。四人では少し厳しい。せめ

てライムや昴たちがいればなんとかなっただろうが……ん？)

見守っていたクロムたちの視界に映るティガレックスは、低く唸りながら辺りを見回す。視線や気配に気づいたか？ とクロムたちは息を呑んだ。

しばらくティガレックスは辺りを警戒するようにあちこち見回っていたが、やがて四肢に力を入れると空へと飛び上がる。十分に高度を得ると南の方角へと飛び去って行った。

「行つたのか……本当にただ休憩してただけか。交戦にならないだけマシと喜ぼう。じゃああそこの岩山で夕食にしようぜ。氣い張りすぎてつかれたろ？」

「はい。アルテミス、大丈夫かしら？」

「うん、アルテは大丈夫だよ」

「アルテミスは成長しましたから。色々と」

静かにサンがそう言った。どこか誇らしげに感じるのは気のせいじゃないかもしれない。アルテミスは釈放される前からずっとサンの部下として働いてきた。だから彼女の成長を一番に見ているのはサンといつても過言ではない。

肩越しに振り返ってアルテミスの方を見たクロムもうんうんと頷いて「確かに成長したなあ。六年も経てばそりゃあ成長するだろうけど、しかし変わらない部分もあるもん

だ」とどこか妹や娘を見つめる男の目をしている。

「クロムさん?」

「なんだい?」

「視線が一部に向かっている気がするのには気のせいでしょうか?」

「気のせいだな。俺はただアルテミスの成長に感動しているだけさ。深い意味はねえよ。はっはっは」

「?!」

話題となつていているアルテミス自身は何について話しているのかは察していないようだが、サンや桔梗はどうやら察しているらしい。

確かにアルテミスは成長した。

六年前の最後の日の前に、子供であることを捨てて本来の成長をした場合の自分を取り戻し、それからは順調に成長していった。ということは当然実力だけでなく、体つきもより女性的になつていくのは自然の事。

気づけばサン以上に女性らしく成長している。色んな意味で。

だがその内面はまだ昔の名残……というよりもあまり変わつてないように感じる。

でもそれがアルテミスらしい、と思えばなんてことはない。外見はこの六年で変わつても、内面は成長を残しつつも変わらない。それがアルテミスだった。

さて、数分かけて岩山へと移動したクロムたちは、携帯食を中心とした夕食をとる。この岩山はディアブロスなどの巨大なモンスターが通れる道と、人や小型モンスターといった小さいものしか通れない細く入り組んだ道がある。

言うなればこの岩山は一種の峡谷のようなものだ。北へと進めば華国の国境付近にまで届く広さを誇る場所であり、東方のフィールドに指定されている砂原に近い雰囲気をした地域も存在している。

上を見上げてもまだ先がある高さ誇る岩山は月の光すら地上に届かせない。

そのため辺りは闇に包まれている。松明やたき火をたかねば視界は確保できないが、しかし細道に入れば大型モンスターから身を隠すことは可能だ。

気配さえ探れば何か近づいてくることはわかるが、それは最低限にして今は休息をとる。

しばらく食事をとりながら雑談していたが、話題は気づけば大砂漠の異変に移っていた。

「さっきのティガつてやつぱり南でディアブロスと縄張り争いしていた個体なのでしょうか？」

「だろうな。傷の中に角で突かれたものがいくつかあった。情報通りつてやつだな」

なぜクロムたちがここにきているのかといえば、サンがギルドナイトとして大砂漠の

現状を把握するためだ。それにクロムと桔梗がついてきた形となっている。

少しでもこの広大な砂漠に巣食っている脅威を把握し、ロックラックへと持ち帰るためにも人手はほしい。だが本来それは東方のギルドナイトの役割だ。中央のギルドナイトであるサンがやることではない。

ではなぜ彼女が調査に出てきたのかといえば、クロム側も実際に情報を把握しておきたいと考えたのだ。七禍からUNKNOWNの情報入手したが、しかしそれ以外の情報は入手できなかった。

大砂漠の南を騒がせるディアブロスとティガレックスの縄張り争い。

夜の砂漠を巨大な影が移動していたという話。

前者に関しては片割れが視認できたので間違いない。発せられる空気を感じられたのも大きいだろう。一番は奴のねぐらを見つけられれば良かったが、もしかするとねぐらを決めず休める時に休む性質かもしれない。

「休んだら南に行ってみるか。ディアも確認し、奴の縄張りの状況を把握すれば、いい情報になる。こつちの方は……」

たき火の光によって照らされたメモ。それは後者の内容、すなわちジエン・モーラン亜種の可能性があるとされる巨大な影についてだ。

これに関しては広大な砂漠を泳ぐように移動しているため位置は特定できない。古

龍観測隊が気球を使い、上空から探してみているがどういわけか見つからない。

そのため噂でしかないと思われているのだが、実際にそれらしきものを見たという話が入り込んでくるのだ。噂は噂なのか、それとも本当なのか。それを確かめる意味でも目撃しなければならぬ。

食後の茶もいただき、「さて、そろそろ行く——」と声をかけたその時。

強い殺気が岩山の向こうから流れ込んできたではないか。細い道をすり抜けてくるかのような冷たい風。それは自然なものではなく、間違いなく大型モンスターが持つ狩猟本能の殺気であった。

次いで遠くからは鈍い足音が近づいてくる。それも真つ直ぐにクロムたちの方へと。

「なに、何かが……この気迫、普通じゃないよ」

「これほどの殺気、まさかUNKNOWNが……!?」

アルテミスとサンが辺りを見回し、少し恐怖を感じながら言った。

一番に頭に浮かぶのがサンの言う通りUNKNOWNだろう。この殺気は純粋な狩猟欲求から生まれる殺気だ。対象を食う、それしか考えていない。

また聞こえてくるのは二つの足で生まれる足音。つまり四足で走るティガレックスではないということは明らかだ。これらに当てはまるのは大砂漠を騒がせる敵の中ではUNKNOWNしかない。

だからそう想像するのも無理はない。

「——オオオオオオオオオ!!」

聞こえてきたのは何らかの声。それは岩山の壁に反射し、何度か増幅してクロムたちの耳に届いた。それは殺気と共に更に通路の向こうへと消えていく。

竜の声であるのは間違いないが、聞き覚えのない声だ。

だが殺気と声でわかる。

あれは普通に相手してはならない敵なのだ。

「逃げるぜ、みんな。これはやばい」

「はいー」

素早く荷物を片付け、クロムたちは松明を手に細い通路を走り抜ける。何度か角を曲がり、奥へ奥へと進んでいくが、背後から感じられる殺気は消えはしない。むしろ足音を伴ってずんずんと近づいてくるのではないか。

「……クロムさん、少しよろしいでしょうか?」

「どうした、桔梗?」

「今私たちを追っている存在、もしかするとUNKNOWNではないのかもしれませんが」  
逃げながらの会話のため、クロムの視線は僅かに隣を走る桔梗に向けられるだけだった。しかし続ける、という無言の言葉に桔梗は緊張したような表情を浮かべながら唇

を動かす。

「UNKNOWNは七禍さんとやらが見せてくれた絵によれば、リオレイアに近い姿をしていました。となればリオレイアのように飛行しながら追いかけてくるでしょう。特にこの岩山地帯ならば、その方が私たちの姿を空から目視し、追撃が出来ます」

大きな道はあるが、しかし道の両側には高く聳える岩肌が存在する。翼なきモンスターならば匂いを辿って走れる道をひたすら走り抜けるだけだろう。

しかし翼があればわざわざ道を選ぶ地上よりも、空から追いかけた方が早い。リオレイアならば翼で飛行し、火球を落として空から一方的に攻撃できる。

桔梗はそこに違和感を持ったようだ。

「走り続けているからといってUNKNOWNではないとはいいたいです。あえて飛ばないと考えられます。……ッ!？」

背後で強い振動が聞こえてきた。岩肌に体をぶつけたかのような音だ。

次いでがらがらと崩れたような音も聞こえてくる。

「——オオオオオオ!!」

声は明らかに近くなってきた。

恐怖が足音を立てて着実にそこまで来ているのだ。

殺気も合わさって重苦しいプレッシャーがクロムたちへのしかかってくる。それ



が逃げる足を重くしているかのような感覚。

足場の悪さも相まって肉体的にも精神的にも、直接相対していないのにクロムたちは圧されている。

しかし足を止めるわけにはいかない。

細道を駆け抜け、何とかして岩壁を利用して奴から離れていかねばならない。

が、現実はどうだ。

次第に足音と声、壁が崩れる音が着実に近づいてくるではないか。

そんな中で焦る頭の中でクロムは接近してくる敵の正体を考えた。もし追いつかれた際にも慌てずに対処できるようにするためだ。

（相変わらず二足で走る音だ。桔梗の言う通りUNKNOWNの確率はある。だが何度も壁にぶつかって崩れていることから気性の荒さはあるだろうな。翼がある場合、何度も体をぶつけても走り続けられるか、と考えれば否だろう。翼を傷つけちゃあ飛べなくなっちゃう。となれば飛竜のような姿じゃない。……が、ディアブロスならそうでもない。奴の体や翼の硬さならば数度のタックルでおじやんにはならねえ。縄張りに入り込んだならここまで追いかけてくる理由にはなるだろうよ）

だが、とクロムはそれも否定した。

（さっきのティガはディアブロスを敵と見定めている。近くに奴がさつきまでいたんだ

から、ディアブロスがいればそっちに向かうはずだ。だがそうしなかつたならばディアブロスも除外される。となれば考えられるのは獣竜種。ボルボロスは違うだろう。奴がここまで気性を荒くする理由がない。水辺もないから縄張りとは考えづらいしな。となれば残された可能性は——)

そこまで考えた時、いつの間にか四人が走っている道は壁の向こうが見えていた。

どういう風に出来上がったのか、壁が抉られて所々向こうの太い道が見えているのだ。こちら側は細い道がまだまだ続いているのだが、壁に出来た穴の向こうが見える形になっているため、後ろから追いかけてきている存在が、いよいよ見えようとしている。

「グオオオオオオオオン!!」

また壁を崩すようにタツクルをし、ぶち抜いた壁の向こうから涎を垂らしながら奴は姿を現した。赤くぎらつく目がぐるぐると標的を探し、捉えた。

遠く離れた場所で逃げていくクロムたちを。

獲物がそこにいる。ならば逃がさないとばかりに奴、イビルジョーは怒号を上げて地を蹴った。力強く駆け出したせいで土煙と共に小さな欠片が舞い上がり、太い道と細い道を隔てる穴の開いた壁に何度かタツクルをしかけながら追いかけてくる。

「ちい……い……マジでイビルジョーかよッ?! みんな、とにかく逃げるぞ! 細道へと入れば奴の巨体じゃ追いつけないからな!」

「はい！ アルテミス、大丈夫ですか？」

「う、うん……アルテはだいじょうぶだよ。心配しないで」

桔梗がアルテミスに声をかけ、アルテミスは頷いて応える。「サンさんも大丈夫ですか？」と声をかけると、「問題ありません」と気丈な声が返ってきた。

前に行くクロムが肩越しに背後を見て追っつけてきているイビルジョーを視認する。距離は離れているし、所々穴が開いているが岩の壁が道を分けている。ある程度は大丈夫だろうと思いたいが、奴がその気になればこの穴の開いた壁など崩してしまおうだろう。

その勢いのまま喰らいついてくるに違いない。

希望としてはこの細道から岩山の中へと入りこめる脇道があればいいのだが、どういうわけかカーブはあっても脇道も分かれ道もない。太い道と並走するかのような一本道になっている。

つまりこのまま走り抜けなければならないという訳だ。

「グルオオオオオオオオ!!」

何度か道を隔てる壁にぶち当たり、崩しながら追ってくるのは相変わらず。奴の鈍い足音と崩れる音、そして声が相変わらずクロムたちへとプレッシャーをかける。

カーブに差し掛かり、そこから数十メートルは穴のない普通の岩壁が続いていた。奴の姿はしばらくは見えなくなる。

それは逆に言えば奴からもクロムたちが見えなくなるという事になる。

見えなくなった獲物を求め、イビルジョーは先ほど以上にスピードを上げ、しかしカーブで勢いを殺しきれずに体全体で壁をぶち抜いていく。それによって退路は崩れたがれきによって塞がってしまった。

がれきに足を取られそうになってイビルジョーは体勢を崩したようだが、しかしすぐに立て直して大きく口を開け、背後からクロムたちへと喰らいつかんと首を伸ばしながら、無理やりに壁を破壊しつつ前進。

「む、むちやくちやじゃねえかよ!!」

細い道と太い道を隔てる壁は周りの壁に比べて薄い。しかしそれでも五十センチから一メートル未満の厚さがある。それをどんどんぶち抜き、カーブを曲がり切って太い道へと戻る。

離された距離を詰めるようにまたスピードを上げ、頃合いを見てまた壁へとぶち当たる。

「きやあつー!」

それはサンの数メートル後ろ手の出来事だった。壁を壊しながら跳躍し、頭上から喰らいつくような挙動を見せたイビルジョー。降り注ぐ瓦礫と共に、ぱっくりと開かれた罅によってサンに影がかかるほどの大きさが迫ってきている。

「サンツ！」

クロムがそれに気づき、何とか手を伸ばすと、サンもまた体勢を低くしながらも必死に手を伸ばしていた。二つの手がつながり、勢いよくクロムが引いてやることで、閉じられた口は空を食む。

そのまま引つ張りながら背に乗せ、何とか少しだけスピードを落とすだけにとどまっ  
てまだ走り続けられた。イビルジョーも捉えられなかったからと言つて止まるような  
ことはせず、怒号を上げながら地を蹴つていく。

このまま逃走劇が続くかと思われたが、「見てください！ 脇道です！」という桔梗の  
言葉に希望が見えた。すぐさま細道に次々と飛び込み、先に進んでいく。

「グルオオオオオオン!!」

イビルジョーもそれに続こうとしたが、当然ながら通れるはずもない。ドンツ！ と  
巨体が壁にぶつかり、しかし一部が崩れるだけに終わる。それでも何度もイビルジョー  
は壁へとタツクルを仕掛けるが、通れないものは通れない。

せつかく見つけた獲物にみすみす逃げられ、悔しさを含んだ咆哮が岩山へと響き渡つ  
た。

脇道の奥へと進み、イビルジョーが追つてこられない場所に來ただろうというところ

で彼らは休息をとることにした。元氣ドリニコと呼ばれるスタミナ回復効果が期待される飲み物を飲み、からからになった喉を潤す。

荒くなっている呼吸を落ち着かせ、先ほどのことについて思い返した。

イビルジョー。

恐暴竜と呼ばれる巨大な獣竜種であり、飢えをしのぐために各地を放浪しながら獲物を求める存在。

討伐対象としては古龍に並ぶほどにまで危険な相手とされており、奴を討伐した者は畏敬の念を抱かれる。事実、奴の素材で作られた装備を纏うあの男は、そんな思いを抱かれている。といっても彼のテンションや雰囲気も含まれているかもしれないが。

それはさておいて、この四人で戦うことは無謀かもしれない。クロムは頭の中でどう切り抜けるかを思案した。

(イビルジョー、桔梗の援護があつてもまだやばいかもしれない。サンとアルテミスでは少々心もとないかもしれないが……いや、戦うという選択肢だけでなく逃げも考えなければ……)

だがどう逃げる？

この岩山地帯を抜ければ、広大な大砂漠。遮るものなどほとんどなく、昼夜の温度差も激しいこの場所で逃げ切れるものなのだろうか。

（足止め……そうだな、足止めとして戦い、二人を逃がす。こうすることで奴の存在をロククラックに伝えるしかねえ）

伝えるメンバーは、と視線をサンとアルテミスへと向ける。

クロムの中ではもうこの二人を逃がし、桔梗と共に足止めを務めると考えが纏まりかけていた。

それを伝えようと口を開こうとしたとき、「——足止め、必要かな？」と落ち着いたような声が聞こえてきた。

え？ とクロムがその方へと目を向けると、じつとクロムを見つめてきているアルテミスがそこにいた。

さっきまで静かに元気ドリンクと携帯食料をもそもそと食べていたはずの彼女は、ただじつとクロムへと視線を合わせていた。

「イビルジョーの事、考えてたよね？」

「ああ、そうだが」

「足止めと連絡、二つに分けるつもりでいるんだよね？」

「……………まあ、そうだな。で、それがどうした？」

「アルテ、戦おうか？」

「アルテミス？」

桔梗が少し驚いたような声でアルテミスを見る。サンもまた多少驚きを見せていたが、しかし彼女は長い付き合いをしているせいか予想はしていたらしい。

「アルテなら、あれを止められるかもしれないよ?」

「どういうことだ?」

「アルテの力は妖狐が関わってるんだ。それはクロムさんも知ってるよね?」

それにクロムが頷いた。

アルテミスは銀狐と呼ばれる母親を持つ半妖の存在。六年前の一件で知らなかった事実が明らかになると同時に、少しずつ妖狐の力を制御し、己の物としてきた。

今となつてはその力を存分に振るうことが出来るようになっていた。

それを生かして戦う、と彼女は言っているようだ。

「足止めには十分に役立つ力だと、アルテは思うんだけどどうかな?」

「……だが、サンはどうする? 俺は二人を揃えて逃がすつもりだったが。ギルドナイトとしても、奴の存在は伝えるべき仕事でもあるだろ?」

「……大丈夫です。アルテミスのことは信用していますから。それに彼女はあの頃よりもさらに強くなりました。それにござんじでしょう? アルテミスはあの頃から既に私たちよりも強かったと」

「そりゃあまあ、そうだな」



神倉朝陽らによつて鍛えられたからか、あるいは元から戦いに関する才能があつたのか。

アルテミスは六年前から少女とは思えない実力を持つていた。それがこの六年でさらに成長している。それはクロムにも引けを取らぬものとなつていようだろう。

「……いけるのか、アルテミス？」

「問題ないよ。アルテを、信じて」

揺らぎのない真つ直ぐな眼差し。子供のようだったアルテミスしか知らないクロムにとつては、おそらく初めて見る彼女の目だ。

あの頃の純粋な子供のようだった少女はもういない。

ここに居るのは立派なハンターであり、ギルドナイトであつた。ならば彼女の意思をくじくようなことはすまい。

「——わかつた。アルテミス、一緒に戦おう」

「うん！」

「ということで、桔梗。お前はサンと一緒にロツクラツクへ連絡を頼む。お前らが離れる間の時間を稼いでやる」

「……わかりました。……無事で」

桔梗にも思うところがあるようで、少し言葉に詰まつたようだったが、それでも共に

戦うとまでは言わなかった。

ベースキャンプに戻ればここまで来た時に利用したアプトルがいる。騎乗すれば一気にロッククラックへと移動することが出来るだろう。

だがただアプトルに乗りに行くだけでは、あのイビルジョーの気迫に臆してしまうだろう。訓練されているとはいえ、食物連鎖の關係上イビルジョーは最上位であり、本能に訴えかけるほどにまでの恐怖を振りまく存在だ。

だからこそ足止めは必要なのだ。

「無理はしないように」

「わかっているよ。……大丈夫ですよ、サンさん。アルテは十分に戦えますから。あなたのご心配なく。ご自分の身を案じ、どうぞロッククラックへと報告を。ね？」

どこか不安げなサンに対し、アルテミスはギルドナイトらしい言葉と一礼で返した。ギルドナイトの立場としてはアルテミスはサン部下だ。年下であるはずのアルテミスがどこか頼もしく見えるほどにまで成長した姿と、一種の覚悟を決めたその目にサンはもう何も言わない。ただ彼女の覚悟を信じるのみ。

「——オオオオオオオオ!!」

遠くからイビルジョーの咆哮が聞こえてくる。

次いで何かにぶつかるような衝突音が岩肌に反響して聞こえてきた。

クロムたちの匂いを辿りながら、岩肌に体をぶつけて破壊し、道を作ろうとしているのがうかがえる。

奴の声が聞こえた方とは反対の方へと道を進み、桔梗とサンは松明を手に去っていった。

入り組んだ細道ではあるが、外へと出るための道はあるだろう。二人が安全に逃げられるように、クロムとアルテミスの役割を果たすのみ。

顔を見合わせ、頷き合って移動を開始する。

そうしながら「アルテミス、どう戦う？」と問いかけた。

「とにかくイビルジョーの行動を縛ってみるよ。動きを止められれば、クロムさんが攻められるチャンスを得られるよね」

「そうだな。止めてくれるならありがたい。そうしてくれれば、こっちは神倉さんから受け継いだあれが活かせる」

神倉月の遺言によって譲り受けた大剣、封龍剣【真滅一門】。祖龍の素材を使用していないために、完全に力を得ているわけではない。それでも紅龍の素材を使用しただけあつて高い力を秘めた剣。

それは龍殺しの剣としては十分な一品とされた伝説上の大剣。

これさえあれば、強力な竜と対峙したとしても心強いどころではないだろうとされた

物が、クロムの手にあるのだ。今振るわずしていつ振るうのか。

「オオオオオオオオオオ!!!」

イビルジョーは何度も何度も壁にぶつかり、道を切り開かんとしている。

この先に獲物があるはずだ。その道を阻む自然の要塞をぶち壊し、今にでも喰らいつきたい衝動に侵されている。

それに突き動かされながらイビルジョーはただひたすらにぶつかり、壁を破壊していく。するとひび割れた壁が少しずつ崩れ、歪な穴が露見し始める。そこまで行けばぶち抜ける。イビルジョーは大きく息を吸い込んで口内に強い龍エネルギーを集め始めた。

十分に溜まったそれを壁に向かって撃ち出せば、抉るようにして一気に岩壁に穴を開けていった。激しい音が壁に反響していき、周囲に瓦礫がばらばらと舞い散る。

黒と赤の禍々しいブレスは数メートルにわたって歪な穴の道を作り上げ、その先に隠れている道を露出させた。

ぎろりと辺りを見回し、鼻を鳴らしながら一歩、また一歩と進んでいく。

当の標的であるクロムとアルテミスはと言えば、確かにもうすぐ近くまで来ていた。息を殺し、イビルジョーに攻撃する機会を窺っていた。

奴はまだクロムたちの位置には気づいていない。ただひたすら気配と匂いを探り、岩

肌へと当り散らしている。

「さて、どうしたもんかね。動きを止めると言ったが、どうするんだ？」

「うん、アルテの術中におさめてみる」

そう言ったアルテミスの髪がざわりとはためいた。

大部分の金色、毛先の白。それらが静かに光をたたえてざわめき始めている。だがそれも数秒。光は消えていき、髪も落ち着きを取り戻す。

そしてクロムは気づく。

アルテミスの瞳が艶やかな赤に染まっていることに。

「今はあまりアルテの目を見ない方がいいですよ。取り込まれますから」

「……妖狐の幻術か。なるほど、それで止めるのか。だが、あれに効くのかね」

「こればかりはやってみないとわからないかも。心の隙が生まれれば、一気に取り込めるだけだね」

「ま、そのための俺だな。なんとかやってみよう」

とはいえ倒す必要はない。あの二人が逃げ切れるくらいの時間を稼ぎ、自分たちも離脱する。

それが二人の戦いだ。

もちろん倒せれば御の字だ。イビルジョーという危険生物はのさばらせておくとは

んな被害が起きるかわかったものではない。

特に今の大砂漠の状況において、イビルジョーという不確定要素が存在するだけでも後々どんな事件が起きるのか。

だから倒しておきたいのは間違いないのだが、今の二人では無理だ。

例え今、クロムが手にしている未完成の封龍剣「真滅一門」であったとしても。

「グルルル……！」

数百メートル先の道で視線を巡らせているイビルジョー。

息を潜めながらクロムは攻撃のチャンスを探う。例え息を殺していても、匂いを嗅ぎ付けられれば位置が知られる。作戦は迅速に決めなければ後手に回る。

(……この地形を利用するか。となるとまずは……)

ちらりと視線をイビルジョーの上にする。

狭い道、高い壁、出張った岩。

長い年月で削られた山によって出来た道であるが故に、綺麗なところがあれば歪なところもある。特に今はイビルジョーが暴れているせいで、小さな瓦礫がぼろぼろと落ちていく。特に奴は壁を何度もタツクルしているせいで振動は壁を伝っていく。

それによって新たな軋みも生まれるだろう。

小さな軋みに手を加えれば、何とかなるはずだ。あとはもう、ぶつつけ本番。大まか

な道筋を見出し、流れに乗っていくしかない。

「アルテミス、何とか止めてみるからあととはよろしく」

「はい、お気をつけて」

ぐつと封龍剣【真滅一門】を握りしめてクロムは飛び出していく。当然ながらイビルジョーはそれに気づき、向かってくるクロムを視界に収めた。

ようやく獲物が現れ、しかも自分の方へと近づいてくる。

歓喜か、あるいは自らを鼓舞するためか。イビルジョーはクロムへと咆哮した。

だがクロムはそれに臆しない。握りしめている封龍剣【真滅一門】へと気を流し込み、ぐるんと勢いよく体を回転させながら振り上げた。するとそれに従って剣閃が空を走る。

刃はイビルジョーではなく、頭上にある岩壁へと向かっていった。がりがりと壁を削り、それによって少しずつ瓦礫がばらばらと落ちていく。小さな破片が降り注ごうとも、イビルジョーは気にするそぶりなど微塵もない。

そのままクロムへと迫り、その大きすぎる口を開いて喰らいついていく。斜め上から掬い上げるかのように喰らいつく動き。それを見切り、刀身の腹で一発逸れていく首へと討ちつける。続けて刃を引き、薙ぐようにして振りぬけば両足めがけて黒い龍の力を秘めた剣閃が走り抜けた。

その一撃でふらり、と奴の体勢が崩れる。龍の力はイビルジョーにとっては弱点属性というわけではない。が、それでも武器自体の力が高いために、その一撃は通用している。

ぎろりと自分を傷つけたクロムを睨むが、それに臆さず壁へと跳躍し、反転。自らイビルジョーの頭上へと跳ぶ。

軽業師の如き素早い動きにイビルジョーの視線はクロムを探す。そうして思い通りに釣られているとも知らずに。

完全に奴の意識はクロムに引き付けられている。アルテミスはこれを好機として気配を消しながらイビルジョーへと接近していった。

ちらりとクロムが後ろへと目配せし、アルテミスの姿を捉え、続けて上にある壁の傷を確かめる。

イビルジョーの背中へと着地し、暴れるイビルジョーに振り落とされないようにしながら封龍剣【真滅一門】を背中にかつき、一発、もう一発と背中を殴りつける。

ただの人の拳などイビルジョーだけでなく、竜らにとっては何の痛みもないだろう。強固な鱗や甲殻が、逆に拳を傷つける。しかしクロムの場合、シユヴァルツの血族と己の肉体ポテンシャル、そして闘気の技術により、竜相手でも格闘術が通用する。

殴りつけた際に衝撃が鱗を貫通して内部へと通り抜ける一撃。それによってイビル



ジョーが呻き、動きが一瞬止まる。

今だ！ とアルテミスが己の力を解放しながら一気にイビルジョーへと接近。

「幻想領域へと誘え」

その目が血のように赤く光り、金色の髪がざわりと怪しくなびく。イビルジョーは迫ってくる新たな獲物へとつい視線を向けてしまい、怪しくも妖艶なその女の目を見てしまった。

クロムはそれを見ない。見てはいけない。

アルテミスの使う幻術のからくりは単純だ。

行っている際に彼女を、特にその目を見てはいけない。

準備する時間、そして魅入らせられるかという耐性に関わる条件が必要ではあるが、一度魅入らせれば幻の世界へと閉じ込められる。

特に心の隙をさらせば気づかないままに幻術に嵌めることも可能だ。あの古龍、テオ・テスカトルとて逃れられなかったアルテミスの術。

イビルジョーとて逃げられない。

「……………」

動きが止まった。あれだけ暴れていたというのに、イビルジョーは驚くほどに大人しくなってしまった。

穏やかな呼吸、動かぬ四肢。その暴虐と飢餓の権化は完全に攻撃意思をなくしていた。

「よし、それじゃダメ押しとして……」

背中にいたクロムは上を見上げ、その下の壁へと跳躍。闘気を込めた一撃を壁へと叩き込む。激しい音を立てて衝撃が壁に伝わり、それは全域へと広がって大きく揺さぶりをかける。

先ほどつけた傷へと衝撃が伝わると、嫌な音を立てて亀裂が広がり、それは岩の重みが重なって一気にずれを生み出した。

そうして発生した落石……いや、雪崩のごとき岩の群れは動かぬイビルジョーへと降り注ぎ、その巨体を覆い隠していった。強固な鱗に守られていても、もしかしたら圧死してしまいかねない程に降り注ぐ岩。

悲鳴すらも聞こえず、ただそこにいた恐怖の権化は姿を消した。

「……………ふう。うまくいったな」

しばらくじつとイビルジョーがいた場所を睨んでいたクロムだったが、動き出す気配がないことを察して緊張を解く。

圧死してくれば御の字。そうでなくとも逃げる時間は稼げた。

この岩山という地理を利用した策は通用した。

「ありがとな。お前がいなかったらうまくいかなかったかもしれない」

「いえ。通じるかどうか不安だったけど、なんとかいつてよかったです」

「さ、俺たちも逃げるぜ」

ぼん、と労うように軽く頭を撫でてやり、クロムとアルテミスもその場から離れるために走り出す。最後にクロムがもう一度肩越しにイビルジョーの方を見やるが、やはり動く気配はない。

だがその生命力は依然として健在だったのだ。

奴はまだ死んではない。押しつぶされはしたが、まだ生きているのだ。

その点が気がかりだったが、今はただ逃げるのみ。生き延びることの方が先決なのだ。

そうしてその姿が見えなくなって数分、現場はただ静寂に包まれていた。

岩肌を吹き抜ける風の音だけが寂しげに響く中、ぴくりと何かが動き始める。

「グルルルル……!」

まるで地獄から響いてくるかのような唸り声が岩の中から聞こえたかと思うと、勢いよくそれらが吹き飛ぶ。

そうして姿を現したイビルジョーの姿は先ほどまでとは雰囲気ガラリと違っていた。

口から漏れ出る黒い息吹が顔を覆い隠し、ぎらつく目は赤い残光を描く。岩に打ち付けられた身体は所々ひび割れ、血が流れているようだが、それ以上に筋肉が膨張して古傷が開いてしまっている。

「ヴオオオオオオオオオオオオン!!!」

怒り故か、あるいは空腹故か。

岩山の壁を反響してもなお響き渡る怒号。

それは逃げていているクロムたちにも聞こえる程に響き渡った。

敵を食らう。

獲物を食らう。

その衝動に突き動かされるように、イビルジョーは逃げた二人の匂いを辿って疾走する。

もはや、止まることなどありえない。

かけられたはずの幻術など、もう意味はない。あの衝撃でそんなものなど解けてしまっていた。もうかからない。こうなったイビルジョーにそれは通用しない。

そう思わせるだけの気迫が奴には存在していた。

絶望の足音が、再び踏み鳴らされていく。